
開店休業。

透尻真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

開店休業。

【Nコード】

N1453N

【作者名】

透凧真白

【あらすじ】

和なまきは願なまきっていた。この地味で平穏な日常生活がなるべく長く続きますように！

人の輪から少し外れてマイペースに生きていと願う和と、学園アイドルである遥はるかの必死な攻防。強烈な想いを寄せられる彼から、果たして和は逃げ切れるのか。

現代高校生のラブコメです。お気軽にのぞいてください。 本編完結済み。 現在番外編更新中です

第一話「ああ素晴らしきこの日常。」

たとえば、人間はある程度努力するものなのだろう。

人は独りで生きていくことは耐え難く、ほぼ不可能と言ってもいい。譲り合い、どこか諦め、都合をつけて生きていく。肝要なのはどう己とうまく折り合いをつけるかなのである。それがわからないほど子どもであるとは思わないし、またそれを怠るうとも思わないけれどももう少しだけ、自由でいてはだめだろうか。いずれ社会にはたくその時まで。

通行人Aとして生きるのは、とてつもなくラクで、とてつもなくたのしい。存在をふっと消して、のらりくらりと色々なものをかわして日々過ごしていく。地味で在ることに不満など一切ない。それを卑下するつもりもない。なによりも好きでやっているのだから。

なあに、あと数年もすれば、化粧もするさ。もう少し最低限の気を遣うさ。だってそのほうが社会には適合しやすいとわかっているし。

万が一それができないと思ったら…はらをくくってひとりできる仕事でもさがそうかな。でもその覚悟とか才能とか、今の所見当たらないから、とりあえずモラトリアムだと思っている。

私は願っている。この執行猶予が、一日でも長く続くことを。

それなのに。ああ、それなのにそれなのに。

無神論者でありながら、こんなことを思うのは図々しいと重々わかってはいるが、それほどまでに私の心は追い詰められていたと、どうか理解していただきたい。

神様、私が何をしたというのでしょうか。平凡な日々よ、どうかかえってきておくれ！

いくら地味で目立たない生活を、と自分に掲げていても、たとえばスカートは長く髪はおさげとどめに黒縁眼鏡……なんていうのはさすがにない。というか、そんな漫画からとびでてきたような容姿をしたら逆に目立ってしまう。地味、というのはあくまでも現実的なところで、なのだ。

スカートは短くはないが長いというほど長くもない。靴下は紺のハイソックスというまあごく普通の女子高中生スタイルである。

黒髪は肩より少し下までの長さをひとつにまとめている。真後ろで結んでいるのではなく気持ち斜め右側である。

そうして先ほど否定した眼鏡は実はかけている。黒縁ではなく透けた茶だ。フレームは細すぎず太すぎず。

特徴があまりない、どこにでもいそうな女子。目指すのはあくまでもそこである。そうすれば通行人Aがあつというまに出来るのだ。

教室の隅で本を読めば、話しかけにくい一匹狼として皆が扱ってくれる。そこらへんは高校生になると余計顕著で、クラスメイトって優しいよなーなんて思ってしまう。

団体行動がどうにも駄目で、女子が集まれば花咲くようなお喋りは、嫌悪とまではいかずとも苦手だ。かといって誰かひとりと親友とよべるほど親しくなつて、その子とべつたり、というのもなかなか気持ちが悪い。あくまでも個人的な、自分を客観視した感想として、であるが。

それらをするくらいなら親しい人間はなるべく作りたくはない。ひとりでいることが大好き、とは言わない。たまに話しかけられれば話をするし基本的に一対一で話すのはそこまで苦でもない。だけれども、やはり特定のどこぞのグループに入るのはためらわれたグループ内の悪口大会、恋人の有無を確認しけん制、日常内での

順位争い。そのくせ少しでもフェアでなければ吊るし上げられる。

お手でつないでみんなでゴール。

女子社会というものは、なんと恐ろしいものであるうか。ならばなるべくお付き合いは避けさせていたただこうではないか。

徐々に距離を置いたのは、まあそんなところが理由だ。

加えて言うならば私はけっこうな自由人間。気に入らなければそれまで、なひと。そんなヤツに団体行動は無理ってなもんなのですよ。

たまーにさみしくなったら適当に話してくれるひとみつckerくらいがちょうどいい。

幸い読書好きの人間というのはどこにでもいるもので、共通の趣味があれば一対一の対話は苦ではないどころか楽しいというレベルまで押し上げてくれる。

休日の自分の時間も、親しい人間を作らなければ潰れることはなく、苦手な人混みにわざわざ足を運ばなければならない状況も生まれない。

毎回どうやって断ったものか、と昔はよく悩んだものである。

なんとも自分勝手なご都合主義であることはわかっている。だからこそ、私はこの、高校生活も二年目に入ったこの16歳の今を、モラトリアム、と名付けたのだ。

どこぞの某有名バンドの歌のタイトルに、開店休業というものがあつたが気分はまさにそれである。人間としては開店中であるが社会に溶け込む表向きの自分は休業中なのだ。

だからこそその、モラトリアム。だからこそその、開店休業。

もう少しすれば、プライベートは今以上に自由になるかもしれない。いが仕事としての人間関係はそうはいかないだろう。大人になり、大人としてある程度行動しなくてはならないのだから。

相手に合わせる、一歩引いて譲る。愛想笑いはりつける。当た

り前の日本人スキルを使えない人間が、社会で生きてゆけるわけもない。だからこそ、今この瞬間だけは自由を満喫しようではないか。学生生活万歳！父よ母よ、私を産み育ててくれてありがとう！私は今小さいながらも毎日続くこの幸せを、かみしめております。

しかし、私は知らなかった。この愛すべき穏やかな日常生活はもはや薄氷のようにもろく儂いものであり、その氷を粉々に砕く存在は、もうすぐそこまで迫っていたということ。

第一話「ああ素晴らしきこの日常。」（後書き）

初めてこういった場に自分の文章を発表しました。

お見苦しい箇所、至らない点も多々あるとは思いますが

もしよろしければお気軽にのぞいていただけると幸いです。

第二話「日常崩壊・現在」

人間には、ぶん、というものがある。ぶん……平仮名にするとなんとも間抜けだ。分相応、不相応、のぶん、である。

特にこの日本において身分社会というものはないものの、皆それぞれに暗黙のルールをおき、その中で分をわきまえ生活している。おそらくこれは学校でも会社でも変わらないものだとは思いますが、学生時代のほうがよりいっそうわかりやすいことだろう。それぞれにグループがあり、それぞれに種類がある。まあ、前回と似たような話になってしまつのが難なのであるが、わかりやすく言つと見た目ぶつちやけ顔だ。

所謂、イケメンなどと言われる男子。可愛いなどとささやかれる女子。それらにはある一定のレベルをもつた人間しか近付かない……というより近付けない。その垣根を越えてしまえばまわりから何を言われるかわかったもんじゃないからである。

おとなしいグループはおとなしいグループ同士で恋をし。

きらきらしいグループはきらきらしいグループ同士で愛を語る。

そう、それは暗黙のルール。その掟を破れば、男子社会はあまりピンとこないものの女子社会では手痛い……というのはあまりにも生易しい表現だろう。

とても残忍かつ残酷なおしおきが待っているのは、女子であれば誰にでもわかることだ。どの環境においても必ずしもこれが適応されるわけではないが、学校という箱の中でこの禁を犯すのはなかなかに勇気がいる行為だろう。

自分よりも上のグループに身をおいてしまったが最後、奴隷のようにこきつかわれるのがオチである。さもありません。

まあ、そうならないように、それぞれがそれぞれの所属する場を考え見極め生活をしているわけだが、

私はいつも、大変だなあ、と思いつつ、その光景を無責任にさも外

側にいるかのようにながめていた。少し離れた場所で、好きなだけ観察を許される傍観者のように。ひとりひとりの肩をたたいて、「ご苦労様」などと言っているかのように。

しかしそれは大きな勘違いだ。

たしかに彼らよりは私は離れた場所に位置しているのだろう。しかし、だからなんだというのだ。そこに在る、ということにかわりはないではないか。

自分は特別ではない。立場はなんらかわりない。この学園に身を置いていくかぎり。高校生という肩書きをもつかぎり。一言で済ますならばあれだ。

『油断していた』

なぜ私はあの日あの時、アレを回避できなかったのか。今でも頭を抱えるばかりだ。

もう少し危機管理能力があったならば。もう少し第六感というものに長けていたならば。あるいは、あの日の出来事を、なかったことにできたかもしれないのに。

しかしそれは、まあ、すべてがすべて、もう遅い。だってそれは、もう起こってしまったことなのだから。そうして今も続いてしまっていることなのだから。

昔、といってもほんの一週間前ではあるが、愛おしい思い出をふりかえるように、ずいぶんと長いこと物思いに耽っていた。毎朝少し早めに登校していた彼女は、今日は遅刻ギリギリに登校をするという賭けに出た。始業開始5分前。校門をくぐる時間をそう決めた。なんなら遅刻扱いになってもいい。毎朝それをやるわけにはいかないがとにかく実験をくりかえしつつ、いちばんいい策を採用させる

べく彼女は模索していた。腕時計をちらりとみやる。

『よし、計算通り5分前に着くな』

そのとき、はた、と考えた。アレは、今どこにいるのだろうか。

予想範囲内であるならば、校舎中をさんざん探し回ったあと、教室で待ち構えているはずだが。そうなればチャイムが鳴りさえすれば、仕方なく自分の教室に戻っていくのではないか、と考えた。考えていた。

しかし、待てよ。

もしかしたら。

自分の至った結論に、顔がさつと蒼褪めていくのを感じた。

いやいや、あくまでもひとつの可能性だ。そう、当たってしまったら最悪の、可能性。

校門がみえたとき、こんなことをする原因になった元は、どこにもみあたらなかった。それに安心し、ほっと息をついたとき、彼女はまたしても油断していた。あれほどまでに自分の浅はかさを呪ったというのに、またしてもやってしまったのだ。

校門をくぐった次の瞬間、猛スピードでやってくるなにかに気付いた。気のせいか、それは大声でなにかを叫んでいる。しかも、自分に向かってきているような気さえする。

「！ げっ……」

誰がきいても嫌悪感丸出しなその声を吐き出すも、しかしそれは前方の人間の声によってかき消された。気付いた時には逃れる術は見当たらず、逃げようにもあの足の速さでは追いつかれてしまうだろう。

というようなことを考えるよりも先に、さつきからアレ呼ばわりされ続けていた不憫な若者は、もうその目の前にその身を投げ出し

ていた。

「なーーーーぎーーーー!!!!!!」

猪よろしく自分というターゲットにむかって一直線にやってきたその男は、当たり前のようにその腕に彼女を閉じ込め、抱きしめるというよりも抱き潰す勢いで突進してきたのだった。

「おはようーーーー!!!!!!」

満面の笑みをたたえ、なんとも綺麗な顔をしたその男はなつっこい犬のような、猫のような、どっちでもいいが、仕草で和の頭頂部に自身の顔をすりすり押し付けた。抱きしめる腕はまるでゆるむことはなく、どころか先程よりも力がこめられている気がする。

いくら遅刻ぎりぎりとはいえ。人はまばらとはいえ。

全校生徒がひしめくこの校門前で（というか、校舎からものぞけばなんとなくみえるんじゃないだろうか）。衆人環視のただ中で。

ああ、最悪な予感的中してしまった。

「ぎゃあああああああああ!!!!!!」

すっかり捕捉されてしまった彼女は、最後の抵抗なのか単に混乱したからなのか、あらんかぎりの大声で悲鳴をあげたのだった。：

…さらに注目を浴びてしまう愚行とも気付かずに。

第三話「日常崩壊・過去」

一週間前。彼女、笹森和はいつものように帰り支度をしていた。そういえば読みたい本があったのだ、と一旦は下駄箱に向かおうとしていた足を図書室へと変更する。もしかしたら、ここからすでに彼女の受難は始まっていたのかもしれない。

「やっぱり来た」

図書室の扉を開こうとした瞬間、何者かに左腕をつかまれた。続いてきこえた声に、何かとつかまれた左腕に目をやり、そのまま視線を動かせば、和の斜め後ろに恐ろしいほど整った顔をした男がにっこりと微笑んでいた。

漆黒の髪は艶やかで、いかにもさわり心地が良さそうなの髪は男が動けばサラサラと流れた。少しだけのびた前髪は目にかかるかからないかで少々うっとおしそうである。

『ちよつとだけ切ればいいのに……視力悪くなりそう。それとも流る行なのか？』

ぼんやりとそんなことを考えかけたとき、改めてその容姿を確認し、驚愕する。純日本人だとわかる黒髪黒目であるにもかかわらず、高くとおった鼻、はつきりとした二重の瞳、俗っぽい言い方ではあるがどこぞの物語の王子様がそのまま具現化したかのような輝きっぷりである。

人種が違う。というか。

どこぞのキラキラ女子にこんな所を目撃されてはまずい！

思い至り、焦っておもいつきり掴まれた左腕を引き抜くと、男はあからさまに不機嫌な表情を作った。漫画ならば「むっ」という擬

音が横にくつついていそうである。

それにしても解せない。間違いでないのなら、先程の言葉はこの男が発したのである。というか他に人もいないのだから、この男しかありえない。更に自分の左腕まで掴んで引き止めたくらいなのだから、なにか用があることは間違いないだろう。

『異文化コミュニケーション、とか？』

頭に浮かんだのは阿呆の子か、とつつこみたくなる発想で、つまりは見当がまるでつかないのである。ゆえに、怖い。

一体なんだ？この地味な自分にこの派手な男はなんの用件があるというのだ。警戒心を強くしつつも、ここで逃げるのは得策ではないことを思う。

こっちは分をわきまえているものの、向こうからしたら下々のことなど知ったこっちゃないはずだ。万が一ここで逃走し、次の日でも堂々とクラスに押しかけられた日にはどうなってしまうか。この幸せな日常が地獄絵図へと変わる瞬間だ。それだけはなんとしても阻止せねば。ためらいつつも、ゆっくりと口を開いた。

「あの、なにか」

ひどく短い言葉ではあったが、相手に伝わればそれでいい。とにかく終わらせられるならば早いにこしたことはないのだから。

和の言葉に、男は眉間に寄せていたしわをほどき、先程対峙したときのようにもう一度にっこりと微笑むと、言った。

「話したいことがあるんだ、出来ればふたりつきりで」

今度は和のほうの言葉に眉間にしわを寄せる形となった。失礼だとわかっていつつも胡乱な目で相手を見やる。

この男は言外に、ここでは話せないから移動したい、と言っている。廊下で、しかも図書室のまん前に並んで立っているわけだ。人が通るかもわからない。つまりは他の人間にきかれてはまずい話ということになるのだが。

和とて、こんな風に立っただけで光をはなっているかのような男と並んでいたくはないし、目撃されるなんてもつてのほかだ。もしも話がそれなりに長引くというのであれば、移動するのめやぶさかではない。それは確かにその通りなのだが、と彼女は胸中で問答を繰り返す。

わからないのが、この男の目的である。しかし現状、特攻するか道はないのだろう。ごくりと生唾をのみこむ。

「……どこに？」

またもあまりにも短い、言葉というよりは単語に近い疑問を投げかけてしまったが相手には伝わったらしく微笑みを崩すことのないまま、男は右手ひとさし指を上へ立てると

「屋上でいいかな？」

と階段を上り始めた。

いいかな？と締めくくっているわりにこちらのイエスの返答を聞く前にさっさと足を運んでいる。さすが、きらきら人種は横柄である。

心の中でもすれば差別ともとれる毒をほんの少しだけ吐き出すと、まあこっちに否やもあるうはずがない、と一応は納得して男の後ろにつづいて歩き出した。

当たり前のように屋上を指定し、今日の前でその扉を開いたわけであるが、そもそも屋上は開放厳禁であったはずである。それなのになぜ、彼は今この扉を開けられたのであろう。

首を傾げたものの、質問すれば面倒事になりそうだな、とその疑問は捨て置いた。彼の後姿をながめつつ、抵抗するでもなくつついて屋上に足を踏み入れる。ばたん、という扉の閉まる音がいやに大きく響いた。

しかし同時に、先程までの恐怖は幾分か和らいだ。誰もみている人間がいらないというのならば、ここでは遠慮した態度も、物言いも、必要ないだろうと思ったからである。元来言いたいことは言わせていただきたい性格である和は、さっさととつとこの件を済ませ、今日のことを夢にしまいかけた。

「さあ、お望みどおりふたりきりですよ。用件はなんですか？」

少し態度が変わった和に目を丸くしたものの、男はさほど驚いた様子でもない。2mほどはなれた距離に立ち、まっすぐに和の目をみた男は、言った。

「笹森和さん」

その真剣な表情、声色に、思わず姿勢を正した。

「はい」

返事をすれば、ますます強い視線で男はこちらを捉える。その視線の強さに、少々あとずさりそうになったが、なんとかこらえた。

「君のすべてを、俺にくれませんか？」

「……はい？」

あまりにもな予想外の言葉に、思わず間抜けな声をあげてしまった。だってそりゃあ、そうだろう。

正直、意味がわからない。もっと言えば理解もしたくない。さらに言えば嫌な予感しかしない。

が、しかし。

ここでまわれみぎ！というわけにはいかないだろう。はあ、とため息をひとつつき、不快を隠すことも無く和は口を開いた。

「意味はわかりませんが、結論を言わせていただきます。嫌です」

即答の嫌、という言葉は彼にとってあまりにも意外だったのだろう。今度は彼のほうが間抜けな、さらには信じられない、とでも言いたげな声をあげた。

「えっ!？」

「えってなんですか、えって。当たり前でしょう。ていうか無理でしょう。私は私のものにしか成り得ないんですから。だって私が私として生きる限り、そうでしょう？それともアナタ、私に成り代わりたいんですか？だったら合わせてお断りさせていただきますが。たとえばアナタとつかえこっていうのであっても嫌です。私、地味なこの見た目が気に入ってるんですから。まあどっちにしろ今のこの世界でそんなことできるわけないでしょうけど」

「あの、ちょ、ちょっと」

「他ににも用事はないんですか？」

「え……ああ、ないよ。ないけど……」

「なら私、帰らせてもらっていいですかね？」

「は？ちよつと待って！」

「もうお答えしたはずですが？嫌だと」

「確かに君の言う意味でなら、拒否されるのは仕方ないだろう。けれど、そういう事じゃない」

男の言葉に、ため息をつく。

『ああ、面倒くさいな、早く帰りたい』

胸中で放った言葉は、今彼女が思う素直な気持ちだ。目の前の彼がどういった意味でここに彼女を呼びつけたのか、いまだに和は理解できそうもない。ただ言えるのは頭が痛いという事のみだった。

「では、私のような人間にも理解できるように、もう少しわかりやすく噛み砕いてお願いします」

ありったけの嫌味をこめてにつこりと笑いつつ言い放ってやったが、相手には通じなかつたらしい。

「精神的にも肉体的にも君がほしって意味だよ」

「はあ？だからそれは」

「もっと具体的に言えば、いつも俺のこと考えてほしいし、いつも俺のそばにいてほしいってこと」

「はあ！！？」

あまりにもな無茶ぶりもいいところな言葉に、大声を上げたうえ和は目をむく。

「いつもってそれ、24時間365日ってことですか？」

そう和に質問されて、男はまた少し焦りつつも一拍おいて答えた。

「え…まあ、そうかな？」

「物理的に無理でしょう。だって学校もあればそれぞれ家もあるん

だし。授業中にアナタのこと考えて問題解けるはずも板書うつせるはずもないでしょう。あと本読む時なんて文章追ってそれ以外は頭真っ白になりますし」

「いやだから！そういう時間以外のことだよ！休みの日はいっしょに出かけたりとか授業の合間の休み時間とかそういう所を俺と過ごす時間にしてほしいっていうお願いで」

「えーやだ。だってひとりの時間好きだもん。そんな四六時中だれかとべったりするのうっとおしい」

「ぶっ！」

ついには敬語も忘れ、素でそんな返答をしていると、どこかから押し殺したような笑い声がかきこえてきた。くつくつと苦しそうに聴こえるその声の主を探してみれば、出入り口である扉がそなえつけられている壁の陰に隠れるように茶髪の男が立っていた。かなり必死でこらえていたらしく、苦しそうに涙をためてこちらにふらりと歩いてくる。

『げっ、この男も無駄に顔が整っている……ということとは』

その和の予想はやはり当たっていたらしく、向かい合っていた自分から視線を外し茶髪の男に顔を向けると、不機嫌に顔を顰め怒鳴った。

「浩平こうへい！！」

「はーおっかし。すげえバツサリ切られたな、遥はるか」

どうやら黒髪の男は遙、茶髪の男は浩平というらしい。

ああそういえば、名前も知らないのだった。と和は今更ながらに気がついた。

「盗み聞きつて悪趣味じゃないの？」

遙が不機嫌な声を出して抗議をしたが、浩平は悪気もなく答えた。

「いや、なんか寝てたらお前らが入ってきたからさー。タイミング？逃して」

まだ少し笑いが残っていたのか、最後に息を吐き出してやっとまともに話し出した浩平は、遙の隣に立ち彼の肩をぽんぽんとなぐさめるかのようにたたく。そうしていたかと思うと、今度は和のほうに視線を向けるが、その光景をぼんやりと見ていた頭を切り替えるのに少々時間がかかった。

はっとして、あわててその視線に応える。

「えー……と、和ちゃん、だっけ？」

ちゃん、ではなくチャン、という雰囲気でもって名前をよばれた和は、彼の空気からはちゃらちゃらという音がきこえてきそうだと瞬間的に浩平を見て思った。

「笹森ですが、なんででしょうか？」

「ああ、笹森サンね……」

苗字を強調してこたえた和に対して、そうかえした浩平という男はどうかやら見た目通りでもないらしい。

『チャラ男撤回？』

値踏みするかのようにこちらを見るその視線は、不快とまでは言わないが落ち着かない。まあこちらにも似たような視線をきつと向け

ているに違いないのだが。

「笹森チャンサー」

「（どうしてもチャンはつきたいんだ…）はい？」

「俺と遥のこと、知らない？全然？」

「えーと……私、二年生なんですけど」

「俺らも二年。同い年だよ。ついでに言うと廊下でよく大勢に囲ま
れる」

そこまでの言葉を聞いて、和は思案するようにはて、と視線をさ
まよわせた。

『廊下でよく囲まれる……とな』

そうして反芻すれば、彼女はようやく思い至る。

「ああー！よくハーレムを作ってたっしやるあのー！」

おまけに右手こぶしで左てのひらをぽんとたたけば、またもや浩
平から笑いがおこる。

「そうそう！なんだ知ってるんじゃない」

「広義ではそうなりますかねえ。きらきら人種に興味もないんでカ
テゴライズはされてるんですがひとくくりにしていて個人の顔はさ
っぱり思い出せませんで、申し訳ないですが顔を知っているという
意味であるのならば知らないに属します」

「……カテゴライズ」

「ええ。」

「きらきらじんしゅって、俺と遥？」

「まわりのハーレムの方々もですよ。綺麗な女性ばかりですから」

「君はなんなの？」

「通行人Aです」

即答に、またもや浩平が笑い出した。遙はといえば、呆れてものがいえない、とでもいいいたげな目をしてこちらをみている。

「んで、たとえばなんだけど」

ひとしきり笑って浩平がまた和に質問をする。

「はい」

「こいつが君を恋人にしたいって申し出たら、どうする？」

「お断りします」

またしてもな即答に、衝撃を受けたような顔を遙はしている。ああ、まあ、そうだろうなあ、と和は思う。きっと彼はそういう面において断られるという経験がないにちがいない。だからこそ信じられないものを見るような目でこちらをみるのだろう。

浩平はそんな彼女に興味津々のようで、またも質問をなげかける。

「またすっぱりいくね。どうして？」

「うーん、私と彼では釣り合わないからです。通行人Aと王子様がくつつくなんてありえないでしょう？」

「さっき言った種類の話？でもそんなのどうでもいいって遙が言ったら？」

「私が嫌なんです。通行人Aにふさわしい相手が私はいいんです。妥協とかではなく。だってそのほうが自分もまわりも落ち着きますから」

「落ち着く……」

「私は、基本的にひとりが好きです。そのためには目立ちたくない。」

その点においてこの見た目は実に都合がいい。別に完全なる一匹狼
気取りたいわけではないですけど、べつたりされるのも自分の時間
を侵害されるのも心底嫌いなんです。だから申し訳ないんですがあ
なた達のような自立つひといいっしょにいるのはたとえ友人でも遠
慮したいというのが本音です」

「じゃあ、俺らとは関わりたくない……てわけだ？」

「そうですね。できることならば」

その言葉に、強く反応したように遙は大声をあげた。

「そんな！」

その様子に少々びっくりはしたものの、和の考えは変わらない。

「あなたも、どういっつもりでこんなことを言い出したのか甚だ疑
問ですがたとえばこちらの彼がおっしゃったような意味で先程の言
葉を発していたとしても本気じゃないでしょう？」

「……どうしてそう思う？」

「あなただっつたらもつと綺麗なひとがいくらでも手に入るから」

「さつきからそんな話ばかりしてるけど、中身を知ろうとはして
くれないの？和は、俺の見た目だけで俺とは関わりたくないって言
うの？」

「そうですね」

「……」

「申し訳ありませんが、平穩な日常をなによりも私は愛しています。
それを侵害する要素はなんにしる敵以外のなにもでもありません。
人間性以前にあなたは対象外です」

「和……」

ひどいことを言っているのは彼女にもわかってる。しかしここ

で少しでも手を抜けばまた近寄ってくるかもしれない。それならば完膚無きまでにたたくのみ。申し訳ないが多少の傷は人生経験ということにしてほしい。まあ、傷になるのかは疑問ではあるけれども、とそこまで考えた所で目の前の見目麗しい男に和は視線をなげかける。

「大体、どうしてこんなことを言うのか私にはわかりませんね」

「だからそれは」

「接点はない。あなたほどならばわかりますけれど、私のこの容姿で一目惚れはありえませんが。となると、なんらかの目的があるのかと考えるのが普通です。」

「和！」

「笹森です。そうですねー……その隣の彼とたとえば賭けをしたとか、どうですか？付き合って何日以内にキスないしセツ……失礼、性交ができれば1万円とか」

「……そっちの言い回しのがやらしくないか？」

今の言葉にくすり、と和は笑む。

『どうでもいいつつこみをありがとう、浩平くん。意外にいいキャラだ。』

酷薄ともいえる笑みを湛えて後、彼女の舌は、勢いを増すばかりで止まらない。

「そうでなければ、同じような綺麗な可愛い人たちに飽きた、とか？たまには嗜好をかえて真面目な地味系と付き合ってみようかー、とか。どっちにしる暇つぶしで私の日常を壊すのはご遠慮いただきたいですね」

「俺が……そんなことするって、思っの？」

「さあ？私は否定も肯定もできるほどあなたを知りません。というか何一つ知りません」

「だったら」

「ですから万が一そうではないにしろ、何度も言っていますがあなたがそういう見た目である以上、私はあなたといかなる関係性も築くつもりは毛頭ありません。申し訳ありませんがきらめてください。すぐに忘れて他を探せばいいだけの話じゃありませんか」

「……俺は和じゃなきゃだ」

「そんなの知りません、無理です」

「！和……」

「笹森です」

きっぱりとした口調でそう言い放てば、もう止めは刺したとばかりに和はちらりと腕時計へ目をやった。

「では、これ以上話がないのであれば帰ります。読みたい本があるので」

「和……！」

「……これ以上は、無駄ですよ。平行線です。やめましょう、生産性のない行為は」

静かなそれでいて淡々とした声でそう言えば、遥は悔しそうな顔をしてうつむいた。どうやら本当にあきらめてくれたようだ。ほっとして、今度こそ屋上出入り口の扉に手をかけた。

「和……」

せつなそうなの声に、彼女の胸はほんの少し痛んだ。

「…笹森です。」

そう一言だけ残して、和は屋上をあとにした。

第三話「日常崩壊・過去」（後書き）

お気に入り登録をしていただいたみたいでびっくりしました。

もうこれでもかっていうくらい嬉しいです、ありがとうございます

！！

更新はなるべく毎日を心がけておりますので、

よければちよくちよくのぞいてやってください。

第四話「始まりのはじまり」

「……………ふう。」

ひとつ重いたため息については、先程から開いている本はい一ページも進んでいないことに気が付いた。家に帰って彼女がお気に入りへの読書タイムも、今日はなんだか心が晴れない。

とうとう和は、目の前の本を閉じ、自室のベッドをのろのろと起き上がればすぐ横にある本棚の定位置にその本を戻した。

あそこまで、言う必要が果たしてあっただろうか。

ふりかえって冷静になつてみれば、ずいぶんと鋭利な言葉の数々を相手にぶつけていた。あんなキラキラしい人種の心に一瞬でも自分のようなものがひっかかるはずもなかるうとありつた刃の刃でもって彼女は彼を追い詰めた。今なら、と自身の感情を思い起こせば和はかなり怒っていたのだらうと自覚する。行きたかった図書館が閉館するまで彼の話に一方的に付き合わされて、話の内容はといえはわけのわからないもので。相手の思惑は結局わからなかったものの、彼女の不利益にしかならないことは目にも見えていた。だからこそ、もう二度と近づく気など起きぬようにと態度で示したのだ。

けれど、あともう少しだけ、温情を持つて接しても良かったのではないかと和は思う。少なくとも、あの黒髪の男はそこまで横柄でもなかったし、言葉はすつとんきょうとはいえ真剣だった。もしも内容が内容だったとしても、きつと本気で暇つぶしの遊びをしたかったのだらう。……………まあ、内容を考えれば非道以外のなにものでもないのだけれど。

ある意味ちやらちやらとした態度よりも真摯な気持ちでそれを申し込むほうがタチが悪いといえはそうなのかもしれないが。

けれどそれでも、悪いことをしてしまったな、という罪悪感は今も和の中をぐるぐるとしていた。謝つたりなんかしてしまつたら水の泡だし、つまりはもうなす術はないということ。せいぜい自分に

できることはこのなんともいえない罪悪感をここ数日間ないし数週間抱え続けるということぐらいなのだろう。それくらいしか謝罪の術はないけれど、甘んじて受けようではないか。

「名前……なんて言っただけ。とりあえず今謝っておこう、ごめんなさい！」

ベッドに座っていた和は、空にむかって手を合わせ頭をぺこりと下げた。まあむこうも三日もすれば忘れてくれるだろう。あれだけ好き勝手言っただけなのに逆ギレだけれど、そうだったタイプではないのはみてわかったし、どちらかというと連れの彼のほうがそっちのタイプにみえたが、自分の言葉にかなり笑いをもっていかれていた様子だったしあれならば大丈夫だろう。

そこまで考えて彼女は晴れやかな結論を出した。

とにかくまた、明日からは平穏な毎日のはじまり。そう考えれば先程まで抱いていた罪悪感はいささか薄れ、現金なことに和はにやりと黒く微笑んだ。どうせこんな破壊された人間性の地味女、相手にするはずもない。すっかり安心した和は、今日は早めに寝てしまおうと予定をくりあげお風呂へとむかったのだ。

2・3という表札がぶらさがった教室の扉に手をかけると、がらり、という音が響くばかりでそこには今まさに扉を開けた人物以外誰ひとりとして存在しなかった。

『おおー今日も一番乗り。』

いつものことではあるがすっかり上機嫌になった一番乗りである女生徒は、鼻歌交じりに廊下側いちばん端の前から三番目にある自身の席に着いた。

朝、誰もいない教室が和は好きだった。

この一見して孤独であるかのようなけれども清潔で静謐な空間は、しかしてもうすぐたくさんの人間であふれかえることを和は知っている。わがままな自分のちよっとした寂しさは、その真実を知ることにより充分に満たされる。他人とある一定の距離を置く和にとって、一種の確認作業であるのかもしれなかった。

なんの音もしないこの空間で、ひとり本を開いてその世界に没頭する。これこそ学生時代にしか味合うことのできない究極の贅沢であろう。

「うーん…幸せ。」

しみじみとそう呟けば、にんまりと昨日頭に入らなかった本の続きを開いた。

それから30分程経過すれば、ぽつぽつとクラスメイト達がやってくる。近寄りがたいと思われつつ、かといってそこまでの距離感を置いているわけでもない和は教室に入ってくる人間達にきれいに無視されてしまうほどの人間ではない。何人かのクラスメイトが和をみとめると、それぞれがいつものあいさつをかわしていく。

「笹森さんおはよう。」

「田中さん、おはよう。」

「相変わらず一番乗りー？好きだねえ、それ新しいヤツでしょ。」

「うん、そう。よくわかったね。」

「なんか本が変わっていくのが面白くて密かに日課なんだよね。」

そういっておかしそうに田中が笑うので、同じような笑みを和もかえした。

「あ、タカコ来た！じゃね、笹森さん！」

「うん」

「我ながら絶妙な距離感を築けたものだなあ、としみじみ思ってしまった。」

中学では少々間違えてしまって、ガツチガチの物静かな優等生を演じた。自分でツツコンで書いて難だが、まさに黒縁眼鏡におさげを地でいくような感じだ。しかしそうなってみてわかったことは、クラスのいらぬ存在になるのはやはり辛いということだった。

学校行事において、どうしたって団体行動をしなければならぬ場面は必ずしも出てくるものである。大きいイベントでいえば修学旅行のグループ分けなどがそれにあたるだろう。そういったときのクラスの渋りよう。どこにも入れたくない、という態度がみえみえで。別に仲良くしたいわけでもないし、話しかけもしないからどこかに入れてくれよ、と悪態つきつつ思ったもんだが、今にしてみればそれはけっこうなわがままで。

自分からあえて壁を作っておいて、それをとっばらうこともなくけれど仲間には入れろという。そんな理屈がまかりとおるはずもなく中学時代はまあ多少悲惨に終わったものだ。いじめのようなものに発展しなかったとはいえ、本格的にそうなるまであと一歩というぎりぎりな綱渡りをしていたように思う。

学習した和は、高校ではほどほどでいこう、と決めた。

話しかけられればそれなりに話はするが、もう一歩踏み込まれそうになれば壁を作る。

中学時代ほどクラスメイトも子どもではなく、皆その真意を理解してくれるというのも大きい。雰囲気も愛想は良くないものの柔らかい空気を心がけ、見た目は普通で物静かな女子を目指した。するとどうだろう。

中学時代は空気にはなれずにその空間から弾かれてしまった彼女は、高校になりついにその一番望んでいた地位を手に入れたのだ。成功を確信したその瞬間は、体がぶるぶると震えた。

ああここは、こんなにも心地良い。決して手離してなるものか。これは長年（というほどではないけれど）の経験と研究の結果やつと私が手に入れた宝なのだから。

そう固く決意し、心の中で握りこぶしをしたそのときだ。それは、嵐のようにやってきた。

耳に響いたのは、はっきりと言ってしまえば騒音だった。勢いよく扉を開け放ったせいなのだろう。大きな音をたてて教室の扉は二、三はねかえりつつ、開かれた。

もうほとんどの人間が登校している時間ではあるものの、遅刻ぎりぎりといった時間ではない。なにをそんなに慌てているのかと、和は訝しんで出入り口の方向をみる。それはクラスメイトも同じだったようで、教室の扉にその視線は注目した。が、次の瞬間、その扉を開いた人物を確認したとき彼女は叫びだしそうになった。

そこに立っていたのは、昨日の夜すでに夢にしてしまった人物で、最も会いたくない男だった。

『昨日の……キラキラ人種！！！』

しかもよりにもよって完膚無きまでにたたきのめした黒髪男のほうではないか。

その光り輝くオーラに騒がしかった教室はしんと静まりかえった。注目を一心に受けるその男は、別段それを気にする様子でもなくまるでなにかを探るかのようにきよきよとあたりをみまわしている。首を動かすたびに流れるその黒髪と獲物を捕捉しようとしているかのような鋭いその双眸に、教室の女子はおるか男子でさえ言葉を失いその姿に見惚れていた。ただひとりを除いては。

『まずい！このままだとみつかる……！！』

自惚れだ、というのならばそれでいい。自分が目的ではないのな

ら。しかし様子からして、その可能性は低く思えた。というかそこまで彼女のお頭はおめでたくはない。絶対に昨日の報復をしにきたに違いない。なんということだろう。最大の計算違いをしてしまっていたなんて。

どうしようかと一瞬の逡巡ののち、いちかばちかの賭けにでた。どうせ、今教室を出て行こうとすればみつかつてしまう。皆固まっているかのように動かないのだから。それならば、今出来るかぎりの防護策を講じるしかない。どうせ彼にインプットされている人物は、茶色い透けたフレームの眼鏡をかけ、右横に一本結びという髪型をした女子だろう。

『顔なんざきつとまともに覚えちゃいない。』

瞬時にそう判断した和は、こちらに視線を向かれる前に矢の如くといわんばかりの速さで眼鏡を外し、髪をほどいた。その間にも彼女の頭は回転し、本で顔を隠すべきかどうか考える。

しかし昨日の出来事を反芻してみる。

彼は図書館前で待ち伏せをして、やっぱり来た、と記憶違いでなければ言っていた。と、いうことは自分が本好きであることを知っている可能性が高い。しめくくりにも読みたい本があるので、という話をしていたし、もしもその印象が強烈に残っていれば、本を持っている女子＝笹森和という図式が完成してしまうかもしれない。顔を隠せないのはかなりリスクではあるが：大多数の人間がというよりも誰ひとりとして彼のほうをみていない人物がいないにも関わらず本で顔を隠しひたすら彼の顔をみないというほうが逆に不自然だ。そんなことをしたら余計目立つに違いない。

自分の考えにある程度の自信を持った和は、本も素早く机に押し込み、周りの人間となんら変わることもなく彼のほうをさもびっくりしていますよという顔でみつめた。

背中だけじゃなく、掌にも嫌な汗を感じる。ああ、この心臓の音

がどうかきこえませんが、と和は心の中で祈るように唱えた。
最初は黒髪を振り乱さん勢いで教室を隅からすみまで睨みつけていた男も、少し落ち着いていたのか、今度は改めてゆっくりとその教室内をみまわした。

「大丈夫、私は通行人A、私は通行人A……」

自分に言い聞かせてじつと終わりの時を待つ。その次の瞬間。
彼はふうつとため息を吐き、なにかをあきらめたかのような顔を
した。壁に押し当てていた左手を、ゆっくりと下ろす。

「！こ、これは……やった、通行人Aの完全勝利だ！！」

心の中で歓喜したその瞬間。

「……びつくりしちゃったな。」

男の静かな声が、教室内に響いた。

「？ え……」

その次には教室内に足を踏み入れ、迷うことなく自分の目の前に
男は立っていた。すっかり安心しきっていた和は、その思考を完全
に停止させていた。

「もしかして俺が会いにくるってわかって可愛いくしてきてくれ
たの？……和。」

その言葉に、もう一度教室が痛いほどの静けさに包まれた。それ
はいったいどれほどの時間だったのか。

一秒だったのかもしれないし、一分だったのかもしれない。

しかしその男から発せられた言葉と、厭らしいほどにやついたその顔に完全に思考を回復させた和はその真意を理解して怒りに顔を赤らめた。

「てつめえ、よくも……!!」

ついに自身の性別も忘れ、立ち上がりあらん限りの罵詈雑言を浴びせてやるうと口汚い言葉を吐き出しかけたそのとき。

「和が俺をあまりにも馬鹿にするからいけないんだよ。」

昨日のへたれっぷりには考えられないほどの低い声で、彼は言った。

「はあ!? 馬鹿にっつてどういう事さ!!」

「だって眼鏡を外して髪をほどけば俺が和のことみつけれないとも思っただんでしょ? どうせ。」

「ぐっ……!!」

凶星をつかれて、和は言葉につまった。

「それはあんまりじゃない?」

次にはうってかわってなんとも可愛らしい顔をして目の前の男が頬を膨らました。その顔に和は心の中でまたも悪態をついた。実際には眉間におもいきり皺を寄せるにとどまる。

『何歳だ、こいつ。狙ってんのか、可愛いと思ってんのかコノヤロ
ー、腹の立つー!』

心中の罵詈雑言は聞こえるはずもないものの、不機嫌な彼女のその顔に男はため息をつき、ゆっくりとしかし慣れた動作で和の頬を両手で包み込んだ。そうして和の顔をのぞきこみ、まるで子どもに言い聞かせるかのよう囁く。

「本当はね、こんな強硬手段に出る気はなかったんだ。嫌われたくはなかったし。でも和は好き嫌い以前に対象外だなんて言葉を俺に投げつけたから。」

「……………」

「だから決めたんだよ、遠慮はしないって。嫌われるどころか無関心レベルにしかねないのなら、遠慮なんかしたってしょうがないだろう？こそこそ隠れるみたいに待ち伏せするよりもいっそオーブンにしてしまったほうが和に悪い虫もつかなくなるだろうしね。」

「？ 言ってる意味がわかんない」

和のそのなげかけに、男は愛しくてたまらないとでも言うような顔で微笑んだ。

「和が俺のものになってくれるまで、全力で君を追いかけるから、覚悟をしておいて。」

「……………は？」

「言っておくけど、火をつけたのは、和自身だよ？」

ますますもって意味がわからない、という顔を和がすれば、あるうことが男はゆっくりとその頬に唇を落とした。

ちいさなリップ音が教室に響く。その瞬間、教室内は時間を取り戻した。

「きゃあああああああ！……！」

クラス中の女子が悲鳴をあげ、

「あいつは本当に日本男児か!?」「外人か!?」「なんとという恥ずかしいせりふを!」

男子は真っ赤になりながらももしも自分があのでせりふを発したらと
考えては悶え死にそうになっていた。

当の本人はなにも恥ずかしいことはないらしく、いかにも涼しげな顔で和をみつめていた。

男がやつとその頬から両手をはなすと、放心したかのように棒立ちになっていた和は、たったいま唇が触れた左頬を自身の手で確かめるようにそつと触った。そうしてその仕打ちを理解すれば、みるみるうちに顔は赤くなっていく。まるで燃えているかのように首まで真っ赤になった和をみて、男はのたまった。

「うわ、可愛いなー和……もういつかいしてもいい?」

「……………笹森。」

恥ずかしいやら怒っているやらで思考がうまく具合に働かないらしく、けれどもなにか言ってやりたいと思ったのか、見当違いともとれるような返事をかえした。

目は少し涙目で、あらん限りの力で男を睨んでいる。今視線で人を殺せるとしたら、目の前の男は間違いなく死んでいるだろう。

「やだ、和は和だもん。ていうかその目、逆効果だよ。煽ってるよ
うにしかみえない。」

「!あつ……あんななあ、なにしたかわかってんの!?最低!!!」

怒りに我慢できなくて全身をわなわなと震えさせる和をみて、男

はにっこりと微笑んだ。

「あんたじゃなくて遥はるかだよ、和。」

「！和ってよぶなああああああ！！！！！！！！」

今日一番の怒号は、教室どころか二年の廊下全体に響き渡ったのであった。

第五話「無関心からの発展」

当たり前のことだが、和の愛した日常はいとも簡単に崩れ去った。一週間経った現在でも、周囲はうるさく騒いでる状態だ。あの事件の直後は本当に大変で、事を起こした当の本人は颯爽と自分の教室に戻って行った。

『そう、戻りやがるから…！私がひとりで質問攻めに遭ったんじゃない！』

「ねえ、笹森さんって和泉君と知り合いだったの！？」

クラスの女子にそう興奮して問われれば、彼女は、はて、と首を傾げる。

「いずみってだれ？」

「え、誰って、遥様のことだよ！決まってるじゃん！」

「遥……さまああ！？」

名前に様をつけますかい、と思わず胸中でつつこんでいた和であったがしかしクラスの女子はそれ以上に混乱しているらしく、質問はさらに続く。

「名前も知らないの？和泉君って学校中で有名なのに！」

「ああー、なんか廊下でハーレム作ってた中心人物らしいっていうのは知ってるよ？」

「そうそう、あれすごいよねー。まわりみんな綺麗な人ばかりで

さー」

うんうん、と頷く女子一同を視界にいれつつ、しかし和はまったく別のことを考えていた。

もうちよつと離れてくれないだろうか、とか、こんなに大勢に囲まれるのはあまりよろしくない、とか、とにかく彼女が気に掛かるのはこれからの生活なのである。

「でもあの遥様に公衆の面前で告白されたってすごくない!？」

「もうすごいよねー!なんかドラマみてるみたいだった!！」

「でも……あの口ぶりだとすでに断ったみたいだったけど」

そこでクラスの女子達の会話が途切れ、皆がいつせいに和に目をやる。

「いや、告白かはわかんないけど、無理ですとは言ったよ?」

その答えにまたも爆発のような悲鳴が起こった。

男子達は野次馬根性を発揮してひそひそと囁いている人間もいるものの、そこまでの関心はやはりないらしく、うんざりしたような目でこちらをみているのが大半だった。

「なんで!?!なんで断ったの!?!」

「え、だって……あんな目立つ人といっしょにいたら疲れるじゃん。何かと比べられるし」

半ばやけくそになっていた和は、今まで築き上げてきたものすべての崩壊を悟ったからなのか、もう壁もなにもあるかと言ったようにあけすけな会話をしている。というか、もう本音を隠してなんてやっていられないし、逆にそうしてしまったほうが周囲の反感を買

いそうだと判断したのである。

こういった時でさえ計算してしまう自身に、和は本当いい性格しているな、と心の中で苦笑いをした。

「私はさ、このとおり地味でしょ？でも別にそれを卑下してるわけでもないし気に入ってるの。だからあんなどこにいても目立つような人間にくつつかれるのは落ち着かないし、いちいちなにかと気を遣いそうで嫌なんだよね。あの人が嫌いというよりああいう人種とお付き合いする気概がないというか」

肩をすくめてそう話せば、珍しいものをみるかのようにまじまじと女子一同の視線を受けた。

『ああ、注目されるのって心底疲れる……』

そう心でつぶやけば、余計に疲労がたまるかのような錯覚に陥った。

「笹森さんって……面白いねえ」

ひとりがぼそっと囁けば、それに続いてまわりの女子も深く頷く。

「ねえねえじゃあさ、これから先遥様とつき合うことってないの？」

「ないねえ。無理だよ」

「即答つてのがまたすごい。じゃあ参考までに笹森さんの理想のタイプ教えて！」

きらきらとした新しい玩具をみつけた子どものような目で質問されればなんとなくノーコメントを通すのが辛かった。しかたなしに、ここは素直に答えようとはらをくくった。

「……私と釣り合いがとれるひとかな。良い意味でも悪い意味でも」
その言葉に周囲からなるほどおーという声もれる。

最初は警戒してぴりぴりしていたムードも、私のこの容赦ない物言いで天地がひっくりかえってもふたりが付き合うことはありえないと思ってくれたようだった。

「確かに遙様じゃとれないよねー……」

誰かがぼそりと呟いたその言葉に、苦笑しながらも心底納得して頷いた。

「さっさもっさりチャン！おっはよー」

呼ばれて、和は一瞬辺りをきよるきよると見回した。すると階段の手摺りから上半身だけをひょっこりと出した浩平（こうへい）がいた。

今は朝のHRが始まる前で、ちょうど和は登校してきて教室にむかうところだった。上から降りてきたということは、どうやら浩平はお気に入りの屋上に行っていたようである。

「あ、おはよう、（みやた）宮田君」

遙の苗字が判明したとき、やはりこちらも女子の注目度は高いろしく追加情報のように女子があわせて彼の名前を教えてくれた。屋上で遙といっしょに和の前に立っていた茶髪の男は、宮田浩平といっらしい。

「一週間ずっと浩平でいいって言うてるのに」

「いやあ、落ち着かないんで…敬語がなくなっただけでも良しとしてよ」

「ああー、遥と追いかけてっこしてる合間ちよくちよく話してたのになっかなか抜けなかつたもんね」

そう、ここ一週間彼女はとにかく和泉遥いずみはるかという男から逃げまくっているのだ。捕まったらなにをされるかわかったものではないし、遥は人目をまるで気にしないので和にとって毎日が恐怖と隣り合わせの日常なのである。

「あるとき、無難に断つてれば良かったなあ……」

遠い目をしてそう呟けば、浩平はふきだした。

「あつれは強烈だったからなー。俺でもちよつと興味持つちゃったもん」

「そつちをまるで考えていなかったんだよね。まいったなあ……和泉君たちみたいなのは自分を拒否する女子自体珍しいんだろっし、それで新しい玩具みつけたみたいになつちゃってるんだよね、ヤツは」

「またえらい言われようだなあ……あいつが君を本気で好きだとは思わないの?」

苦笑いしながらそう問う浩平に、和はにっこりと微笑んで即答した。

「ありえない」

その微笑を受けた浩平は苦笑いから顔を引き攣らせる。

「前途多難すぎるな……遥」

ここまで遥と過ごしてきた中で、和には少々考えていたことがある。目の前に話し相手がいるのも忘れ、彼女はしばし自身の思考回路深くに落ちていった。

たとえばの話だが一定期間の交際を認めないし、付き合いと言ってしまうえばその瞬間彼の熱はあつという間に冷めるのではないか。そうなってしまうえば前のようにはいかずとも、この慌しい毎日からは解放される。しかしそれは自身が彼の生贄になるに近い行為で、決断には慎重にならざるを得ない。どう考えてもあれは経験豊富であり、突っ立っていても女が寄ってくるタイプである。ともすれば自分のような女に手を出すとも思えないが万が一ということもある。付き合いということに固執するのならば、その先があつて然るべきと考えるのが普通だろう。そもそも自分の玩具なのだという認識なのだとすれば、和を好き勝手に扱う可能性だつて高いのだ。珍味という言葉もあることだし、ハズレでもなんでも一回くらいこういうのを食つとくのもいいかなー、なあんて思つて手を出されようものならば、たとえ無理矢理というような形になつたとしても事を実行するかもしれない。恋愛事に興味が無かつた和は、当たり前だがそういう行爲はおるかキスだつてしたことがない。初めてに特段夢をみているわけでもないが、さすがに愛も素っ気もなく襲われて終わつたんでは後々のトラウマになりかねない。というかなる可能性が高い。そこは私も普通の女子なんだな、と妙なところで感心しつつ、しかしやはり自分を襲うなんてありえないのでは、単に遊びただけなのでは、という考えも捨てきれない。

いつもそこまで彼女の思考は停止する。その先の答えは和には出ることが出来ないのだ。堂々巡りするのはなんとも気持ちが悪く、また彼女にとってではじれつたくて仕方がなかった。

「笹森ちゃん？またなんかろくでもないこと考えてる？」

黙りこんでしまった和の顔の前で、浩平が右手をふって現実呼び起こした。我に返って一言ごめん、と謝ると、和は浩平をしばしみつめた。

「？ 今度はなにかな？」

ニヤニヤしながら浩平が質問するのを耳にすれば、率直に意見を仰ぎたくなる。躊躇したのは一瞬で、目の前の男をじっとみつめれば特別言い辛そうにすることもなく、和は淡々とした様子で口を開いた。

「宮田君さ、たとえばなんだけど」

「うん？」

「私が誘ったとかそういうのではなくあくまで自発的にね？」

「……うん？」

またなにを言い出すのだろうかこの子は、と探るような目で浩平は先を促す。

「きつかけはまあなんでもいいんだけどそうだったと想定して」

「そうだった？」

「うん、まあ、誰も来ない状態で密室にふたりきりにでもなったとするじゃない」

「ふたりきり？密室で？なんで？」

「だからなんでもいいの。とにかくそういう状況下に陥ったと仮定して、よ」

「……はいはい」

「私に自発的に手を出そうとか思う?」

最初質問の意図がわからず、浩平は瞬間的に固まった。

先程とは真逆に、それを目の当たりにした和はおーい、宮田くん、と言いながら浩平の顔の前で覗き込みつつ右手をふった。そうすると先程の和のように浩平が覚醒した。

「……………あのだ」

「うん」

「それはどういう意味?」

「いやだからそのままの意味だけ?」

「そのまま」

「うん、もっと簡単に言ってしまうえば私みたいな相手のその気が起きるかって事かなあ」

「……………」

それをきいた次の瞬間、浩平は不気味に口角をあげてみせる。何故かその表情を目にした瞬間、和の全身にざつと鳥肌が走った。

頭のどこかで危険信号が点滅しているような気がして一歩あとずさるも、それ以上の警戒はする必要もないと判断したのか和はそれだけで停止する。その姿にますます笑みを深めた浩平は、あろうことか和の腰をその右腕でぐつと引き寄せたかと思うと半ば抱きしめているかのような距離で耳元に唇を寄せ囁いた。

「和ちゃん?」

わざと下の名前で呼んだとわかったので、和はいつものように訂正はしなかった。というか頭の中がパニックになっておりできなかったというほうが正しいかもしれない。

ぞわぞわするようななんと艶のある声音で耳元でそう囁くと、

ふっと笑って次の言葉を発した。

「誘ってるの？」

凍りついた効果音が彼女から発せられそうな勢いで、和が固まった瞬間。

後ろからあらん限りの力で浩平から引きはがされ、今や完全に後ろから抱きしめられてる形となった和は、やっとその状況を理解した。そしてその抱きしめた腕の主が誰か瞬時にわかってしまう自身に、彼女は心底うんざりした。

「浩平！なにやってんだよ！！！」

「えー？質問に答えようとしてただけだよ」

「あんなに近寄らなくても話はできるだろう！！！」

本気で怒っているのか、顔を真っ赤にして怒鳴った遙はそれと同じ時に和を抱きしめる腕に力をこめた。

「だってあんな色っぽい質問されたら……ねえ？和」

「！！！」

わざと呼び捨てにして意味深なことをいう浩平に、和がきくんじやなかった、と後悔してももう遅い。

「和、浩平になんて言ったの？なにを訊いたの！？」

「ちょ、耳元で怒鳴らないでよ、頭がキーンてなるじゃん……」

うるさくてクラクラする…と弱弱しく和が訴えれば、遙はすぐさまごめん、と謝った。

「ま、結論から言えば俺はぜんっぜんアリだよ。というか笹森ちゃん
は自分を下に見すぎ」

「宮田くん？」

「他の男の前であんなこときくんじゃないよ？変な気起こされても
文句言えないからね」

「ええー？そんなことあるわけ」

「笹森ちゃん？」

いまだ遙から解放されない和を、腰に手をあてて浩平が覗き込む。

「……はい。」

「よろしい。」

なんかお兄ちゃんのように……そう思って浩平をみると、浩平は
くすりと笑って和の頭をなでた。

「ま、警戒心をもうちよつと持たないとね。そのうち遙に襲われち
やうよ？」

そう言っただけじゃあねーと言いながらひらひらと手を振って、浩平
はどこぞへ消えてしまう。進言をしておいて、この状況をほっぽっ
ていくとはどういうことなのだろうか、と和は憤慨するよりもどこ
か呆れて彼を見送った。

「和」

「笹森。なんですか、和泉くん。というか、離れてください」

「和って呼ぶの許してくれて、さっきの質問の内容を教えてください
ら離す」

「却下」

また即答！と顔はみえないがおそらくぶすくれた顔をしているの
だろう。頭の上で遙がそう叫んだ。

「……わかった質問の内容はあきらめる」

「いい心がけだね。では離してください」

「和って呼ぶの許してくれる？」

「……あんた許さなくても勝手にそう呼ぶじゃん」

「でも和が許してくれててそう呼ぶのと俺が勝手に呼ぶんじゃ意味
が違う」

「…………男心は複雑なのだね」

「複雑なのだよ」

そんなやりとりをしていれば、段々と腕がゆるんできた。チャン
スだと思つた和は脱出を試みる。が、ほどけた！と思つた次の瞬間
にまた遙の腕の中に後戻りさせられていた。

「勝手に抜け出そうとして、和は悪い子だね」

「ちよつと、なんでそうなる！本当に怒るよ？いいかげんにしろ。

離しなさい！！」

「和」

また遙の腕に力がこもり、ますますきゅっと抱きしめられる。

「……っあーもうわあかったよ！いいよ、そう呼んで！だから離し
て！……！！」

そう言つた次の瞬間には、もう遙は和の体を離していた。はあつ
と大きなため息をつき、そのまま遙の前を去ろうとする。

「和！」

遙がそう叫ぶので、仕方なく和はふりむいた。

「なに？」

訂正をしない和の言葉に気を良くしたのか、嬉しそうな顔をした遙がそこに立っていた。

『男心は単純だなあ』

心の中でそう呟けば、遙に用はないらしいのでまたも踵をかえして歩き出した。まるで犬のように、にこにこしながら遙はその隣を歩く。

「ちょ、和泉君！並ばないでよ、目立つじゃない！」

ひそひそと隣の遙に耳打ちすれば、遙は先程までの笑顔とは打って変わって不機嫌に眉を寄せた。

「遙だよ。それにそんなに目立たない」

「お前はあほか！存在自体が目立つのに横に立つんじゃないぞ！！」

今度は普通のトーンで話したため、少々予想していたより大声が出てしまい慌てて和は口元を押さえた。

「和、俺を無視しなくなったね」

「あんたがそれを言うのか。」

「四日間はけっこう辛かったな」

「その間怒ることもせず耐えた私を褒めてほしいもんだわ」

和は出来ることならこのまま無視を決め込んでしまいたかった。無反応がおそらくいちばん早く玩具に飽きる状態であるうから。だがしかし、事態はそう甘くはなかったのである。

なんとクラスの女子生徒たちの目の前で、遥がはらはらと涙を流したのだ。

「和に無関心に扱われるのが辛くて仕方が無いんだ。俺……もう耐えられない。違う高校に転入するよ！」

その言葉に和が内心で狂喜乱舞したのは言うまでもないが、クラスの女子が過剰なまでに反応してしまったのだ。もともと、彼はもちろんそれを狙ってやったわけであるのだが。

この和泉遥という男はやかいなことに半ばアイドルのような扱いを受けており、一部の選りすぐりの女子を除いては遥様をこっそり見守ろう、こっそり愛でようというのが学校中の女子の総意であるらしく、彼を楽しみに学校生活を送る女子も少なくない。

そんな学園のアイドルが、失恋のために転校してしまう。そんな事態は絶対に回避せねばならない！一致団結したクラスの女子はあろうことか笹森和と和泉遥をくっつけようとしたのである。

元々学園アイドルを雲の上の存在くらいにしか思っていなかった2年3組女子一同は、この騒動のおかげで頻繁にクラスをおとずれることになった事態を歓迎していた。すっかり嫉妬や嫌がらせをされるものだと身構えていたのに思いのほか優しい女子の反応に和は半ば拍子抜けしていたほどだ。それどころか感謝の言葉すら贈られる始末で、和はなんとも複雑であった。

しかしクラスの女子が全員遥の味方になってからというものは逃げるのが難しくなり姿を確認されると人身御供のように遥に差し出されてしまいなでられるわ抱きしめられるわそれ以上をされそうになるわで散々だったのだ。それならばリアクションを返すほうがまだ危険は少ないと判断し、現在のような関係性にいたる。と

んだ策士もいたものだ、と目の前の男を確認する。馬鹿なのかと思えば案外そうでもないし、どころか割と腹黒い。和が和泉遙に抱く印象は、今のところそんなようなもので結論付けられていた。

「……まあ、いいかげん私も溜め込んでたしね。胃に穴が開く前で良かったわ」

嫌味たっぷりにもう言っちゃったが、どうせこいつには通用しない。わかっていても和は言わずにはいられない。

「そうしたら俺が看病するね」

その言葉に思わずため息を吐きなくなったのは、決して和ひとりではあるまいと痛切に感じる。今この会話の流れを聞いていれば、憐憫の情をもよおしてくれる人間は必ずいるはずだ、と馬鹿馬鹿しいとわかっていつつも彼女は自身に同情した。

『病気の元が看病してどうすんだよ。あいたもんもふさがんねーっつうの。』

心の中ではつちり悪態をつくのも忘れないのは、ある意味彼女の癖のようなものだ。そんな心の内を果たして知っているのか、遙は相変わらずにこにこと相好を崩しながらも和に話しかける。

「ねえ、和？」

「んー？」

「今、俺のことどう思ってる？俺にどんな感情を持ってる？」

「和泉君に？」

これはチャンスだろうか？和は必死でどうすればこいつに大打撃

をあたえてやれるのかと頭をめぐらせる。思いつく限りの言葉を頭の中で走らせ、ゆっくりと口を開いた。

「顔もみたくなくらいに大嫌いつて思ってる」

その言葉に遥はぴたり、と歩いていた体を停止した。もう教室は目の前だ。

『おお、そんなにショックだったのかな』

そう思えば嬉しいようなちよつと申し訳ないような複雑な気持ち
が和の心を走った。しかしやられている仕打ちを思えばかんべんし
ていただきたい、と開き直る。

固まった遥を覚醒させてやるうかとも思ったが、それよりもほつ
といたほうがいいだろうと判断し和は教室へ入ろうと扉へと進もう
とした。が、それは遥の腕によって阻まれ、和は正面から遥に抱き
しめられていた。

「！ ちよ、和泉君……！？」

「嬉しい……」

「はっ！！？」

『だ、大嫌いが嬉しい！？え、もしかしてそっち？マゾ的なあれで
すか……？』

混乱していると、和を抱きしめてその肩に顔を埋めたまま遥が話
し出した。

「知ってる？和」

「へい？」

動揺してなんともおかしな返事をしてしまった和だったが、遥は特段気にしている様子もない。

「好きの反対は、なんだか、知ってる？」

「え？ああ、えっと無関心、でしょ？なんで……………」

その瞬間、なぜ遥があんな、ともすれば危うすぎる、発言をしたのか彼女は正確に理解した。

「今、和は言ったね、大嫌いだって」

「いや、あの、それは、ですね」

肩に埋もれていた顔をあげて、和の頬に遥は唇を寄せる。

「大嫌いの先に待ってるのは、大好きだけだよ、和」

嬉しくてたまらないとでもいうように、遥が微笑んだ。

「んなわけ…………あるかあああああああ！！」

最近恒例ともなった朝の怒号が、二年の廊下に響きわたった。

第六話「ある憩いの場での出来事。」

図書室の窓際一番後ろの席は、公認というわけではないが解放日には必ずおとずれる彼女がいつも座る指定席である。借りて家で読むことも多いが、この空間で本を読むことが和は好きだった。

最近は学校生活を賭した鬼ごっこのおかげで日課にできるほどここをおとずれることが出来ずかなりのストレスを感じていた。たまに彼を撒いたと思えば、しかし彼女が何よりもこの空間を愛していることを知っている遙は決まってここにやってくる。

最初は悩んだ和も、開き直って最近ではあきらめることにしてしまっている。

どうせみつかるといふならば、堂々とここを利用すればいい。

それに最近気付いたことだが、図書室では遙も和の意志を尊重してくれるらしく、ここでは抱きついたりむらみやたらにスキンシップをほどこそうとはしない。ただじつと向かいの席を陣取っては、和のことをみつめるにとどまる。慣れないうちは少々気になった視線も、今では特に気にならなくなった。なによりも本に集中してしまえばそんなことは忘れてしまう。自身の集中力に感謝をしつつ、ともすれば駆け込み寺のような存在になりつつある図書室で和は今日も一冊の本に全神経を集中させていた。

図書室の扉が開いたのは、和がおとずれてから10分程あとのことだった。

校内をひとしきり探した遙は、最後にこの場所にやってくる。最近では日常化しているものの、遙が図書室を頻繁に利用していた過去はなく、図書室を利用している人々はその美しさに頬を赤らめる。最近利用者数が増加したのは気のせいではないだろう。

熱い視線を一身に浴びている当の本人はといえば、その視線を気にすることもなく、ただいるはずの彼女を視界にうつした。それを確認すると天使のように微笑み、いつものように和の向かいに腰を

下ろす。

一連の動作を、彼女以外の皆が盗み見しているのはこれまたいつもの光景である。和は和で遙が向かいに座っていることなどまったくもって気付くことはなく、遙は遙で目の前の愛しい彼女しか目にはうつっていない。

真剣な眼差しで文字を追い、ゆっくりとした動作でページをめくる。その姿を遙はただただみつめている。

「本になりたい……」

そうぼそりと遙が呟けば、周囲の人間は耳を最大限すませ、その発言の意味を理解すると女子はうらめしげに和をみつめ、男子は鳥肌を立てた。

そんな光景にひとり、眉を寄せて思索している人物がいることを、誰ひとりとして気付かなかった。

「あー…もう、帰りさえなきやいいんだけどなあ…。」

がつくりと肩を落として笹森和はひとりぐちぐちとこぼしていた。毎度の事であるが図書室をあとにするとき、和が本から顔をあげたとき、遙はスイッチが切り替わるかのようにスキンシップを再開しようとするのだ。もう閉まる時間帯であるから周囲にそれほどまでに迷惑がかかっているとも思えないが基本的に静かな空間を愛するひとがあそこには多いため、どうにも申し訳なく感じていた。断固拒否したい和は、やはりぎゃーぎゃーと騒いでは遙の接触を阻止しようとするものだから余計に利用する人々に申し訳なさを感じてしまう。当然ながら帰りもどうやったって一緒に帰ろうとするし、家まで送るとゆずらない。自分のテリトリーに進入されるのはたまったものではない。家だけはなんとか阻止しようといつもいつも必

死の攻防を繰り返して、なんとか送られるのだけは回避することに成功していた。しかしそれも一体いつまでもつかかわからない。背中に悪寒を感じつつ、大好きな場所であるのに少々重い足取りで、いつものように図書室をおとずれた。

「笹森さん、ちょっといい？」

扉を開いた瞬間に名前を呼ばれ、少し驚きつつ声の方をむけばそれは受付の図書委員からだった。

「たかはし高橋君？」

高橋は2年の男子図書委員で、常連になっている和とはたまに会話を交わす仲だ。彼も相当な本の虫であり、お互いの情報交換をすることは和にとって楽しいひとときである。いつもならにこやかに声をかけてくれるその人物だが、今日はなにやら雰囲気が違う。なんだらう、と首を傾げつつも、和は受付の前に立った。

「どうしたの？」

「うーん、あの、すごく言いにくいんだけど」

一旦言葉を切って、ひとつため息をつく、決心したかのように高橋は口を開いた。

「実はね、ちょっと図書室来るのひかえてほしいんだよね。」

「え、どうして!？」

あまりにも衝撃的なその発言に、つい場所もわきまえず大きな声をあげてしまった。和はあわてて口を閉じる。

「和泉君、よく笹森さんに会いにここに来るじゃん？それで利用者数がここ最近増えたんだけど」

「ああ、そういえば、前より人が多いような」

「それでね、ちょっと苦情がきてるんだよ」

「苦情？」

「本来ここは本を読んだり借りたりするためにおとずれる場所なんだけど、どうも和泉君を鑑賞するのが目的で来るひとが増えたみたいだね。それで本来の常連の人たちから本を読んでもないのに席があかないって苦情きちゃってさ」

「ああ……」

「それだけならまだ、おとなしい層の子たちが多かったから注意喚起でどうにかなったんだけど最近また別の問題が起きちゃって。」

「別の問題？なに？」

続きをきこうとした瞬間、図書室にそぐわない高らかな笑い声が出入り口から響いた。それに続いてここが静謐な空間であることをまったく気付いていないような素振りで見景良く扉を開閉した女子の集団がなだれこんでくる。そのとき、早くも和は『別の問題』の答えを理解した。

それはあまりにも予想したとおりで、わざわざ耳をそばだてずとも、というか聞きたくもないのに聞こえるような音量で、その集団は話し始めた。見た目もずいぶんと派手だ。ギャルという言葉で思い浮かべるのは、彼女達のような人だろう。

「ちょっといないじゃん！誰よ遙こっちにいるっつたの！」

「アケミじゃなかったー？」

「はあ、私言ってないし！つうか待ってればそのうち来るんじゃない？」

「最近ほんつと付き合い悪いよねー遥。」

「あのなんかすごい地味な子追っかけまわしてるんでしょー？」

「ああーどんな女なんだっけ？地味すぎて顔思い出せないー」

四人の女子は激しく耳に障る声でけらけらと笑いだした。

どうやらまだ彼女達は自分のプロフィールを詳しく知らないようだ。

面倒事にかかわるのはごめんだと感じた和は、いつかのようにありえないような速さで髪をほどき眼鏡を外した。彼女達に気付かないようにするためである。それを少し驚いたように高橋はみつめたが、特に声をあげるようなことはしない。

もしかしたら遠目からはみられていたかもしれないが、地味な自分のトレードマークのようになっていたこのアイテムをなくせば笹森和だとは悟られないだろう。そう結論付けた和の読みは当たっていたらしく幸いにも彼女を視界にうつしても図書室を利用してるひとりとしか認識しなかったようで、和が四人のギャル達からからまれるようなことはなかった。

一度ここを離れようかとも思ったが、まだ高橋の話を最後まで聞いていない。自分の考えは99%間違っていないと考えるが、1%の可能性は捨て切れないしまだ他にも話していないことがあるかもしれない。それにまた戻ってくるにしても動向がつかげえない分タイミングが難しい。変なところで鉢合わせてしまえば最悪な事態を招きかねないだろう。

それに、と和は考える。

彼女達はずいぶん大きい声で会話をするのが特徴のようだし、この空間にいれば容易に会話を聞くことが可能だ。和にとって有益な情報が望めるかもしれない。そう結論付けると同時に、お騒がせな四人組は周囲を気にすることもなく図書室の奥をうろつろつろと始めた。

『お、チャンス』

こちらに背を向けたタイミングで、和は受付カウンター内に体をすべりこませた。

「笹森さん？」

「ごめん、しばらくここにいさせてくれる？あの人達が出てつたら話聞くから」

そうして受け付け内にしゃがみこんだ和をみて、高橋は得心したようにため息をついた。完全に周囲から姿がみえなくなった和は安心し、さてどうしたものかと思案する。

恐れていた事態がついに起きてしまった、というところだろうか。多少は予想の範囲内ではあるもののあのキラキラ人種がこうも常識外れだとは。ずいぶん下品な声で笑うものだなあ、と心中で絶好調に和は毒づく。

『あれ？でも廊下の集団ってあんなに派手な人達だったかなあ』

少し考えてみると、ああいうタイプは遥のいちばん近くにいる人々とまた微妙に層が違つように思えた。遥も所謂ギャルの隣にいるような雰囲気の間人ではないし、確か廊下で話している人々はもう少し清楚な感じの女子ではなかったろうか。学校中の女生徒が彼のファンだといつてもまあ過言ではないし、おそらく気付かなかっただけで彼女達のような人種とも付き合いはあるのだろう。

『まあざつくばらんにカテゴライズすれば彼女達もキラキラ人種だしねえ。あ、でもひょっとしたら宮田君のほうのとりまきと混ぜてるのかもなー。どっちかというと彼のがああいうひとたちの隣にいても違和感ないよね』

普段交えることのない世界をほんのちよつと覗き見たかのよう

な気分になって、大変不本意な状況になっているにも関わらず和は少し笑ってしまった。新発見はいつだって面白いものだ。あくまでも傍観者として、であるが。その渦中に自分を巻き込まないでほしい、というのは切実な願いだ。

「にしてもさあ、遙に言っただうにかなるもんなのお？」

「わかんないけどお、だってうちらじゃどうにもなんないじゃん」

「なんで浩平まで最近付き合い悪くなっちゃったんだろうねー」

「遙から説得してもらったところでほんとに前みたいに遊んでくれるのかな」

ぐるぐると思考の迷宮にはまりこみそうなところでとんでもなく核心をついた会話が彼女達の口からとびだした。

『やっぱり宮田君のほうか』

理由はわからないがいつも彼女達と遊んでくれていた(どんな遊びなのやら)浩平が、最近あまり付き合ってくれないらしく、彼女達もがんばって誘ってはいるがどうにも乗り気になってくれないようだ。そこで遙に進言をお願いすべく、この図書室をおとずれた、ということか。

『ってことは和泉君のことはわりとどうでもいいのかない』

そうなってくるとかなり簡単にケリはつくはずだ。一気に浮上しかけたその心を、沈めたのは彼女達の続きの言葉だった。

「でも遙だつてさあ、誘えばまえは遊んでくれてたのにね」

「しばらくほつとけばまた戻ると思ってたけど全然だし」

「どうするー？こころでなんかしたほうがいいんじゃない」

「様とか言って王子化してるような地味なタイプにとられんのもムカつくしねー！」

和は一瞬目を剥いたが、どきりとした心臓を落ち着かせようと小さく息を吐く。

『肉食女子ってすげーなあ……』

あっちもそっちもかい！と頭の中で切れ味よくつつこんではみたものの、現時点で有効な対策を思いつかない。彼女自身でどうにかできる範囲をかなり超えてしまっているようだ。

『となると』

ふとよぎるその結論に戦慄した。おそらくこの事態を収束してもらうのはそれほど難しくはないだろう。和に対する報復めいたものはちょっとどうにかできるかははっきりしないが、この場所に来させないようにする事はおそらく簡単だと思われる。それを自発的に彼がやってくれるのであればいいのだが、もしも、もしも。自分からお願いしなければならなかったらどうしよう。見返りになにかを求められることがあまりにも容易に想像できてしまって和は頭を抱え込む。

『図書室に来るなって注意されたっていう事実を伝えなければお願いとよりも自分で蒔いた種をどうにかしろ！とか逆に言えるだろうけどな……』

そこまで考えたところで、また図書室の扉が開く音がした。登場したのは話題にのぼっていた人物そのひとであった。

「お前ら、なにやってんの？」

いつも和にむけるやわらかい響きとは全く違う、低く尖った声が響いた。確かに遙の声なので、発している人物は同一なのだろう。

『おお、ダークサイド登場か。いつも猫かぶってんのかな』

のんきにそんな感想を思うも、それに反して図書室の空気はピンと張り詰めた。

「遙！さがしてたんだよお」

「静かにしろよ、どこだと思ってんだよここ。馬鹿かお前ら」

あまりな言い草に、さすがの和も少々驚いた。確かにそのとおりではあるのだが、遙は女子には優しいのだろうと思っていたから。彼女達も不本意なのだろう。その棘のある言葉群に不満気な声をあげた。

「えーだってえ、遙来るまで待つてようと思つてえ……」

「だったらせめて静かにしろよ。とにかく出る。周りの迷惑考えろよ」

チツという舌打ちと共に、バタバタと騒々しい足音が複数移動する音がする。どうやら遙が女子たちを無理矢理に出入り口までひっぱっているらしい。そこで不機嫌そうにしていた彼女達は、まずいと思ったのか、今度はおそろおそろ、といったような声でおうかがいをたてていた。

「あ、あの……ごめんね？遙、怒ってる？」

「俺に謝ってどうすんの。もういいから、さっさと出て」

扉から慌しく出る音がする。どうやらこれ以上逆らってはまずいと判断したようだ。遥はなかなか彼女達の前では横柄であるらしい。

『つつか舌打ちしたな、あいつ？そういうことするキャラだったんだ』

和が変なところに関心を抱いていると、今度はいつもと同じような声質が耳に入ってくる。

「悪かったね、お騒がせして。委員の人も、ごめんね？もう来させないようにするから。」

「ああ……いや、そんな。和泉君に謝ってもらうことじゃないから。」

打って変わったの優しい声音に、少々戸惑いつつも高橋が応じた。きつとあの人当たりのいい笑顔もくっつけているのだろう。その言葉を最後に、女子も遥も図書室をあとにした。

「……行ったよ、笹森さん。」

「あー、地べたに座ったらお尻痛い。ありがとう」

スカートを軽く払いながら、高橋にお礼を言った。

「それでまあ、説明の手間は省けたかな？」

高橋が苦笑いしながら言うので、和も同じ表情でそれにならずいた。

「あのテは注意喚起したって意味ないもんね。それに怖がる女子も

いそう。いや、男子もか」

「まあ、実際問題ああいう層の人たちは男子でもちよつと怖いからねえ」

「だよ。でもとりあえず和泉君の言葉が本当ならばしばらく様子見ればまた前みたいにご利用しても大丈夫、かな？」

横目でちろりと高橋に視線をむければ、それに応えるように高橋が笑んだ。

「そうだね、それで問題ないと思うよ」

「！ そっか、良かった」。人生の楽しみを失うかと思った！！」

「んなおおげさな」

「えー、高橋君だって人のこと言えないじゃん、本の虫が」

「笹森さんほどじゃないと思う」

そんな会話を笑い交じりにしていれば、再び図書室に遥がおとずれた。高橋とふたり、出入り口に顔を向ける。

「おお、暗黒王子な和泉君。彼女達のお相手はもう済んだの？」

にやりと笑いつつそう遥に問えば、多少は焦るだろうかと反応を待つも固まって動かない。その様子に和が首を傾げると、今度は鋭い目つきで高橋と和を睨んだ。

「……なにしてるの？そこで」

「い、和泉君？顔が怖いよ？」

質問に答えなかった和に苛立つたらしく、更に眼光を鋭くさせて大股にこちらまで歩いてくると、次にはカウンターから和をひっぱりだし、その腕をとって入ったばかりだというのに図書室を出よう

とする。

和は慌てて高橋をふりかえり、ごめん！ありがとね、と声をかけた。するとそれが気に入らなかつたのか、ますます掴む手に力を入れられそれに和は小さく悲鳴をあげた。

「ちょ、腕痛い！どこ行くの？和泉君！！」

無言で廊下を歩き出す遥の背に問いかけても、返答はかえってこない。しかたなく無言になってついていけば、階段をのぼりはじめたので屋上に行くのかと予想がついた。

程なくして目的地にたどりつくと、遥は和の腕をやっと離れた。衣替えを終えて半袖になったその腕には、真っ赤な跡がくつきりとみてとれる。赤くなつた左腕をさすりつつ、和は遥のほうをみて、抗議の声をあげようとした。

しかし次の瞬間には、もう彼女は彼の腕の中にすっぽりと閉じ込められていた。痛いくらいに抱きしめられ、その胸におもいきり顔が密着し、息ができない。両腕ごと抱きしめられてしまったため背中を叩いて抗議することもままならない。不可解なこの状況に、和は混乱していた。

「どうして、眼鏡してないの？髪は？」

四人のギャルたちに話していたときと同じような冷たい声で、遥が和に質問した。少し腕をゆるめられ、息をふはっと吐き出しつつ、和は素直に答える。

「私だつてバレたら彼女達にからまれるんじゃないかと思ってね。とっさにはずした。案の定私のこと全然気付かなかつたからラッキ―だったよ」

「受付の中に隠れてたの？」

「うん、そう。出て行くよりも彼女達の会話からなにかいい情報も
らえるかもなーと思って。でも和泉君と鉢合わせて話しかけられた
ら変装した意味ないじゃん？だから中に隠れさせてもらった」

その和の答えに、遥はある程度納得したらしく、拘束をほどいた。

「……………そうだったんだ。ごめんね？」

「ん？別に。けっこう面白かったよ、彼女達と和泉君の会話」

「ああ……………ちよつとそれはあまりきかれなくなかったな」

「舌打ちとかちよつとびっくりしたけどね。高橋君も驚いてたっぽ
かったし」

軽く笑いながらそう答えると、今度はなにがいけなかったのかま
たも遥の顔が鋭くなっていく。

「……………高橋君？」

「ん、ああ、図書委員。私の隣にいた男の子のことだよ」

「仲良いの？」

「いや、知ってるでしょそういう人間居ないって。でもそうだね、
人間関係希薄な私からしたらけっこう喋るほうかな、彼も本好きで
趣味合うし」

「……………そう」

呟いて黙ってしまった遥に、さすがに様子がおかしいと感じた和
はおそろおそろ彼の顔をのぞきこんだ。

「和泉君？ど、どうしたの？」

「いずみくん、たかはしくん」

「へ？あの……………？」

「和？」

下を向いていた遙が、和のほうをみてその名前を読んだ。

「な、なあに？」

「遙って呼んで」

「だからそれは嫌だと」

「じゃあ高橋のこと呼ばないで」

「いや、無理でしょ、あそこに行けば呼ぶ機会もあるし」

「だったら図書室なんて行かないで」

「もっと無理だよ！私の生きがい！！」

「じゃあ遙って呼んで」

堂々巡りな会話に多少苛立つも、どうにも遙の様子がおかしいのでどう対処したらいいのかわからない。なぜ捨てられた子犬のような瞳で自分のことをみつめるのか。和にはなにもかも理解できずにいた。

「だから、呼べないってば」

その静かな拒否に、遙はなにかがぶつりと切れたように、一秒前とは全く違う、獰猛な獣のような瞳で和をとらえた。その豹変した様子にまずい、と思うも遅く、次の瞬間には和の唇になにかが触れていた。

触れた、というには生々しすぎるその感触に、和は完全に思考を停止した。遙の唇と和のそれは、今完全につながっていた。

触れるよりも長く感じられる時間、遙は和の唇を自身のそれによつて塞いだ。しばらくのち、目を見開いて固まっている和からそつと顔を離しその瞳を開けば、ゆっくりとその和に触れたその唇で遙がささやいた。

「……俺以外を和の中に入れるなんてゆるさない」

声は小さかったものの、とてもきつぱりとした口調だった。そうして和の頬に少しだけ右手をすべらせれば、満足したのか小さく微笑むと、用は済んだとばかりに遙は屋上をあとにした。ひとり固まる和を置き去りにして。

第六話「ある憩いの場での出来事。」（後書き）

なんかどんどん一話が長くなっていくような…。

すみません、長さ統一できなくて；

キリのいいところで終わるつもりとどろどろしてもまちまちになってしまっ…！

第七話「好きです、付き合ってください。」

和が心身共に機能を回復させたのは、遙が去ってから5分程たったときだった。

彼女は今、ひどく混乱していた。

『えー…と、状況を整理しよう、冷静になろう、うん、ちょっと頭冷やしてみようか。』

誰に言い聞かせるでもなく、自分にそう問いかけるのは少し虚しいでもないが、
そうでもしない限りやってられないという気分だった。

なんせこんな経験は初めてなのだ。こういった方面には全くもって自分は明るくない。

どうしたものか、と悩む。

そもそも、遙がなぜあのような暴挙に出たのかがまずわからない。
そこで和は過去を振り返るべく、先程の会話を反芻してみた。

元来独り言が多いわけでもないのだが、頭の中で再現するよりは声にだしたほうが
正確に思い出せるだろうと和は考えた。

「えー…と、そもそも図書室からひっぱってこられたのってなんで
だっけ？」

暗黒王子とか言ったからだっけ…そうだよね、そんでなんか睨まれて…」

そこになぜか身振り手振りも加えられ、はたから見ると怪しい人間
のようである。

「名前にもこだわってたような…高橋君のこと呼んだら睨んでたし…あ、自分と高橋君が両方とも苗字呼びなのが同列にみられて嫌だったとか？」

「なんだ、人種とか気にしないって言ってたわりに自分よりレベル低い認定して」

「高橋君のこと見下してんじゃん…？性格悪いなー…でもそうか。」

ある程度の結論が和の中で出たらしく、納得顔でひとりうなずく。そうして自身をふりかえり、ポケットに入れっぱなしだった眼鏡をつけ

髪をひとつにくくった。笹森和という通行人Aの完成である。

鞆を図書室に置きっぱなしにしていたことを思い出す。

時計をみれば、閉館の時間ぎりぎりだ。

和はあわてて屋上をあとにした。

このとき彼女はすっかり忘れていたのである。

結論をだすにあたり、最重要であったはずの判断材料を。

『…俺以外を和の中に入れるなんてゆるさない。』

時間に追われ、彼女は最も大事な言葉を逃してしまった。

切なげに吐き出された彼の心からの言葉を。

ボタン、と屋上の扉が閉められたとき、

彼のもれてしまったひとすくいの想いは、完全に置き去りにされてしまった。

これが拾われる日が来るのかは、今は誰にもわからない。

図書室で心配顔をした高橋になんら問題はないと告げ帰路についた。まあ、なくはないが、実のところ彼女にとってそれほどまでに重要視する事柄ではなかったのだ。

良くも悪くも、和は一般的な女子からはどこか規格がずれていた。

家で風呂に浸かりながら、明日はどうしようかとふと考えた。

『シヨックという感情もなんかあるっちゃあるけどないっちゃないんだよねー…』

生理的に嫌悪感のある人間に口くつつけられたわけでもないし。

あーこんなもんか、みたいな感覚というか…。

悔しいけどそのへんは顔が整つてると得だわねー』

ケツと短く吐き出しつつそんなことを思う。

それより誰かにみられるような場所ではなくて良かった、と心底安心している自分がいた。

もしもあれをどこぞの女子にみられようものならば、たまったものではない。

過去数回、頬に唇で触れたことはあったものの、

いつもそれは冗談めかした軽い空気の中のもので、だからこそ周りもさほど抵抗無く

まるで見世物であるかのようにその光景をながめられたのだろう。

しかし思い返してもあれはなんとというか、雰囲気は本気と書いてマジ、というようなものであった。

たとえばあれを図書室におとずれたような種類の女子に目撃されようものならば…

考えただけで背筋が凍る。本当に連れて行かれたのが屋上で不幸中の幸いだった。それともそうすること込みで、彼はあそこに自分を連れ出したのだろうか？

『とすると、彼の思惑はなんだ？』

玩具の反応をみたかったから…というものならば明日の態度が恥らったものであれば彼を喜ばせるだけだろう。

それとも、本気であると信じ込ませるために勝負に出たのであろうか。

はたまた、なにかしらの賭けの期限が今日までであった、とか。

この場合、どんな態度で接すれば彼を落胆させることができるだろう。

せつかくなれば嫌味たっぷり微笑みつつ

「勝ったんでしょう？おめでとつ。」

とでも言っつてやりたい気分だが。

しかし当てが外れれば、特段彼にダメージは及ばない。

となればここはやはり。

思い至ったところで、のぼせてしまわないようにと和は風呂からあがることにした。

最近は、色々な時間に登校を繰り返しては最善策を模索する、という行為に

いささか疲れていた。

昨日も余計な心配事が増えたため、和の思考はあっちへこっちへと忙しい。

そんな中で無意識のうちに選んだものは、遥に関わる以前の生活だった。

疲労した脳は、あの平穏な世界を望んでいた。

幻でもかまわないから、まだ誰もおとずれることのない教室で静かな時を過ごしたかったのだ。

昨日の事で和が怒っているにしろ悲しんでいるにしろ、

朝一番で接触しようとする可能性は低いだろうとも考えていた和は、一縷の望みに賭けた自分をほめたい気分だった。

よみはまさしく的中していたのである。

登校して教室の前に立っても、あの生活を乱すやっかいな疫病神はあらわれない。

おそろおそろ扉を開けば、いつかの日常が続いているかのような空間がそこに在った。

『ああ、やっぱりここが好きだな』

かみしめるように微笑めば、彼女は自身の席に着いた。

鞆からひとつの文庫本を取り出すと、ぱらぱらとページをめくりはじめる。

そんな光景を、教室うしろの扉からそつとうかがっている人物がいた。

それは先程彼女の心の中で疫病神と認定されたその男であった。

小さくため息を落とせば、遙は和のうしろすがたをみつめる。

はたからみると若干危ないストーカーのようだ。

『顔がみたいなあ…そろそろ本格的に集中しはじめたときかな？』

うしろからみているのが物足りなくなったらしく、

彼は彼女のそのすさまじい集中力に期待した。

そろりそろりと後ろの扉から、前の扉へと移動する。

そうして前の扉をそつと少しだけ開けば、最愛の彼女の顔がみえた。やはりすっかり本に集中していたらしく、和は遙の視線にちつとも気付かない。

気付かない。

彼にとってはそれほど長い時間とは感じてなく、

むしろあつという間という表現のほうがしっくりくるくらい、

経過する時間の流れを感じなかった。

しかしかなりの時間、遙は廊下から和のことをみつめていたらしくその驚いたような声で我に返った。

「あれー？和泉君なにやってるの!？」

それは2年3組の女子だった。廊下から教室をうかがうその光景はどこからどうみても

異常にうつつたらしく、何人かの女の子から声をかけられたのだ。

そうしてあたりをみまわせば、ぱらぱらと人が登校し始める時間になっっていたようで

遥は和を思わせる自身の集中力に間抜けだと思いつつもある種の感動を覚えた。

「えーと…いや、中で和が本を読んでいたら、近くでみたかったんだけど」

クラスメイトの誰かが登校してくるまでは邪魔せずにいようかと思つて。」

その和をおもいやつてなのかはわからないが、いつもでは考えられない殊勝な行動に

和のクラスメイト達は目を丸くした。

納得いかないような気がしなくてもなかったが、

学園のアイドルに詰問のような事はできるはずもなく、とどめに微笑まれてしまえば

そんな野次馬根性はどうでもいいと思つてしまう。

見事に女生徒を陥落し、事無きを得た遥は彼女達といっしょに教室の扉を開いた。

「笹森さんおっはよー」

「中村さん、おはよう。」

女生徒のひとりが声をかければ、本から顔をあげ和は微笑みつつあいさつをかえす。

「いいなあ、中村さん…。」

自分には向けられることのないその愛らしい笑顔をみて、

心の中で唱えたはずが気が付けば遥の口から音が発せられていた。

その言葉は当の中村さんにはきこえなかったようだが、

遥のうしろにいた女子達にはしっかりとどいていたらしく、

何人かの生徒がふきだしていた。

そのとき初めて、和と遥の視線が交わった。

昨日の自身の仕打ちを思い出しては、遥はどきりとする。

無視をされるのも覚悟して、ゆっくりと遥は和の席へと歩を進めた。

「おはよう、和。」

本を開いた状態で、そうあいさつする人物の顔を和はながめた。

にっこりと微笑んだその顔は、感情を読み取るのがとても困難だ。

『うーん、こういうのがポーカークォーフェイスっていうのかしら』

どんな気持ちで、この男は今自分と対峙しているのだろうか。

しかしいくら考えても現時点で断定できる要素はなにひとつなく、それについて考えることを和はとりあえずやめることにした。

「おはよう。」

あいさつをかえすと、微笑んでいた遥の顔が微妙に引き曇った。

小さな変化ではあったが、和はそれを見逃さない。

今ならばその考えも読めるだろうか？

たったいま放棄した思考をすぐさま和はひっぱり起こす。

しかしいくら待っても次のリアクションを起こさない相手に、ついに痺れを切らした和は、みずから声をかけることにする。

「…どうかした？無駄に整ってる顔が今日は変だけど。」
「！……………いや、あの」

ずいぶんと戸惑っている様子だ。

どうやらこれは、昨日出した結論に間違いはなかったらしい。

そう、和が出した結論は無反応。

とにかく昨日の出来事についてそうしようと思った。

きつと彼にとつていちばんつまらない、屈辱的なりアクションはそれだろうと考えて。

もちろん、変になかったことにしようもしない。

こちらからその話題に触れることはしないが、むこうが昨日の話を
する機会があれば

ためらわずなんでも答えようと思っていた。

変に避ければ、それはイコール意識しているということになる。

それは自分にとって本意ではなく、現時点でベストな反応はこれで
間違いないはずなのだ。

「変な病気にでもかかったの？うつると嫌だから半径3m以内に近
付かないでくれる？」

いつものように辛辣な言葉を浴びせれば彼はますますわからないと
いうような顔をした。

和はいええそんな彼の反応をみて内心にやにやにしている。

彼に出会って初めて、報復めいたことができたと感じる瞬間だ。

「あのさ、和…昨日のことなんだけど」

「ああ、それで思い出したんだけど屋上の鍵！」

「えっ!？」

これは本当に昨日から気になっていたことだったので、
和は躊躇うことなく核心をつくかのような単語を発していた。

「あそこつて立ち入り禁止なんだよね?なんで鍵持ってるかは知らないけど…」

昨日は和泉君、私を置いて先に帰っちゃったでしょ?

私は鍵なんてもってなかったからそのまま開けっ放しで帰っちゃったんだけど…」

大丈夫だったのになって気になって。」

「え、ああ、そんなこと?全然大丈夫だよ。ごめんね、俺こそ…」
「そう、それなら良いや。よかった。」

ほっと息をついて微笑むと、遙はどんどん困惑顔になるので
もういつそ大笑いしてしまいたかったのだが、それは我慢しようと
心に湯を入れた。

「あのさ、和…ちょっと、ふたりで話したいことがあるんだけど…」
「ん?別にいいけど今から?手短に済むならいいけどちょっと時間
厳しいよ。」

腕時計をみると始業までもうそれ程余裕はない。

視線を遥に戻すと、どこかが臨界点を突破してしまったのかなん
のか

最終的には仏頂面になっていた。

さっきのポーカーフェイスが嘘みたいだ。なんて素直な表情なのだ
ろう。

「昼休み!誰にもみつからないように屋上に来て。いい?」

その顔のまま横柄な態度でそう告げてくるので、和は少々腹が立った。

「……なにその偉そうな命令口調…貴重な私の時間を割こうとしてるわけでしょ？」

他にもっと言い様ないわけ？私が最も嫌うことがなんなのかって初対面からずっと

アナタにお話ししつづけてるよねえ？忘れちゃった？

そんなにお馬鹿だと思っていなかったんだけど私の見込み違いだったかな？」

和が最も忌み嫌うこと。

それは自分の為に使える時間をわざわざ大切でもない他人に割いてやることだ。

休業中の自分は、いつだって遠目からのほほんとしていたい。

面倒ごとにみずからとびこむなど本来ならばあつていい事態ではないのだ。

昼休みはあくまでも憩いの時間。漫画ならば一冊どころか何冊も読めてしまうのではないか。

それを毎日のように目の前のこの男に言って聞かせてやっているにも関わらず、

今この男はなんと言った？

和のまわりの温度が低くなったことを感じた遙は、

自身の対応がまずかったことに今更ながら気が付いた。

「じゅめん…和、あの、本当に申し訳ないんだけど、

和のためにもなる話だから、つきあってくれないかな？」

いかにも落ち込んでいるといった風情の
その声も、表情も、なにかも計算し尽くされたものだ。和は知っ
ている。

この男はわかっているのだ。いかに自分の容姿が神に愛されている
かを。

気に入らない、なにかもが気に入らない。

「……その顔になびく輩の気が知れないなあ。

作られたハリボテみたいな完璧なその顔のどこがいいんだろうね？」

「和……」

今度はいまにも泣き出しそうな顔。子犬か、てめえは。
相も変わらず彼女の毒舌は今日も絶好調だ。

「……わかった。用件が済んだら出てってくれる？
せめて残りの時間は自分の為に使いたいんでね。」

ため息交じりにそう答えれば、ぱあっと遙の顔がほころぶ。

「ありがとう、和!!」

元気良く教室を出て行く遙をみて思う。あの男はマゾではなからう
かと。

いいかげんこの暖簾に腕押し糠に釘状態にも嫌気がさしてきた。

この事態を好転してくれるなにかがおとずれてはくれないだろうか？

盛大なため息と共に、始業を告げる鐘が鳴り響いた。

昼休みまでの時間はあつという間に過ぎて行った。

休み時間になると、何人かの女子が和を囲んでは遙の身を憂えた。

方々でいいかげんつきあつてあげてはどうかとの声がとぶ。

暇つぶしの道具にされるのはごめんだと私が告げれば、

皆なぜか絶句するのだ。私はなにかまずいことでも言っているのだらうか？

昼休み、教室をあとにしようと立ち上がったときに誰かの声がきこえた。

「あんな顔していつもみつまられてるのに気付かないなんてねえ…」

心底同情するかのようなその声は、果たして誰にむけられたものなのだろう。

まあ自分とは関係ないだらうと結論し、和は屋上へと歩を進めた。

来るのが早かったとも思ったが、屋上の扉に手をかければがちやり、とドアノブが回転した。もう遙は来ているようだ。

一瞬緊張が走つたが、すぐにいつも通りを心がけその態勢を立て直す。

扉を後ろ手で閉めれば、予想通りすでにいた遙がその音に気がついてこちらを振り向いた。

改めて陽の光を浴びて立つこの男をみれば、やはり自分とは世界が違うと感じる。

それなのに地味な自分と並んで立っているこの空間が、ひどく歪なものに思えた。

「来てくれてありがとう。」

「…話つてなに？」

微笑む遙に間髪いれることなく先をうながす。

話す時間は短いにこしたことはないのだ。

「まず、昨日のことを謝りたかったんだ。急にあんなことをしてしまつて。」

「予想はつくけど一応きいておこうか。あんなことつて？」

「同意もなくするものじゃないつてわかつていたけれど、止まらなかつた。」

「ただ後悔はしていないから、キスのことを謝るつもりはないよ。」

話題については予想していた通りだったのに、

その内容は意外なもので、少々の時間、和は言葉を失つた。

「じゃあ、なんに対して謝ってるの？」

なんとなく遥の目をみれなくて、足元に視線を落としたまま質問した。

「置き去りにしてしまったこと。…そんなことすべきじゃなかつた。もしも和が精神不安定になっている状態で帰り道を歩いたらと思いついてぞつとしたんだ。」

事故や事件にまきこまれたらどうしようつて。本当にごめんね。

いくら俺も冷静じゃなかつたとはいえ、あんな態度とるべきじゃなかつた。」

またも予想外の回答に、和は間抜けにも遥をみつめてぼかんと口を開いた。

この男は、なんというか色々とおかしいのではないだろうか。

「うん、まあ…私もキスについては謝られても困るからいいんだけどさあ…」

「済んじやつたことだし特にこだわりもないし。」

でもまさかそんなこと謝罪されると思ってたから驚いた。」
苦笑してそう言えば、遙は申し訳なさそうな顔をしていた先程とは違ってた
眉間に皺を寄せていた。

「それって…和にとってあのキスはなんでもないことだったってこと？」

「んー？まあ、うん、そうだね。」

「じゃあ…和は誰とでもああいいうことできるの？」

「…なんでそういう結論になるの？そんなわけないじゃん。」

「だってこだわらないんだろ？」

「そうだけど自発的に誰とでもしたいと思うわけじゃないでしょうが、自分からそういうことしたいなんて思ったことないよ。」

あくまでも冷静に話せば、遙は不機嫌な顔を解除したものの、またなにか考える仕草をみせた。
右手を自身の顎にそえ、続く言葉を思索する。

「俺とのキスは…嫌だった？」

その質問に、和も一拍考える。

「少なくとも愉快ではなかったね。」

「それは…嫌だったってこと？」

「そこまで強い感情も起こらなかったかなー。」

あえて言うならまあしょうがないか、終わっちゃったしどうでもいいや。

「ってというのが感想？」

和の口から出た言葉に、ひどく傷ついた顔を遙はした。やはり無関心は彼の心をいちばん抉るらしい。

「……それが、高橋君だったとしても、同じように思った？」

低い声音で問われたそれは、またも予想外の言葉だった。

「はあ？なんでそこで高橋君？」

「いいから。」

有無を言わせぬその雰囲気は圧倒されて、しぶしぶ和は口を開く。

「高橋君はそういうこと絶対にしないし……」

「当たり前だよ、そんなことさせるわけがない。あくまでも仮定の話だよ。それで、どうなの？」

さらにしつこく遙が先をうながすので、真剣に考えてから和は答えた。

「うーん、多分……同じではないと思う。」

その和の結論に、遙は和の両手首を顔の高さに固定してつかんだ。ぎり、と音がする。

とても強い力でそうされて、昨日の遙を思い出した。

今日の前にいる彼は、ともすれば昨日以上に鋭いオーラを発している気さえした。

「い……痛いよ……」

「俺とはどう違うの？キスされて嬉しいって思うの？」

「ちが……き、昨日からなんで怒ってるの？高橋君と和泉君ってな、

仲悪いの？」

心底わからないというその表情に、遙は苛立ちを覚えた。今日の前にいるこの少女は、なにもわかつてはいないのだ。

この禍々しい感情の正体を、ひとかけらさえ察することもなく。

「和…わからないの？」

「わからないよ。」

「まったくこういうところは本当に憎たらしいくらいに鈍いな和は…普段は多少余計なくらい察しがいいのにね。もうちょっとバランスが取れるとありがたいなあ。」

言わせないでほしいんだけど、言わないとわからないんだろうね。」

永遠に、と嫌味たつぷりに遙がつくわえた。

つかまれた手首は痛かったが、その言葉に恐怖はふつとび、いま和の中にあるのは怒りという感情だけだった。

「申し訳ございませんねえ、察しが悪くて！」

この私にわかるように懇切丁寧に教えてくださる！？」

睨みながら半ば叫ぶようにそう話せば、盛大なため息をついて遙は両手首を解放した。

みればくつきりと赤い跡ができている。昨日といいとんだ災難だ。

手首を解放したかわりに和の頬をそのてのひらで包み込めば、165cmある和の身長に合わせて遙は顔の高さをもつていく。

女子としてはむしろ高いほうとも言えるその和の視線に

自身のそれを重ねる遙の仕草はかみこむ形をとっており、

遙もまた男子としてかなり身長が高いことがうかがえた。

『180以上とかあるのかな…』

ぼんやりとあさってなことを考えれば、咎めるようにありったけの色気をのせて

遥が和の名前を呼んだ。

「和、一回しか言わないからきいて？」

「……………う、うん。」

「俺はね、嫉妬してるだけ、高橋君に。」

「し……………つと？」

その意味を理解しようとして遥の口から告げられた言葉を和は繰り返す。しかしいまいちピンとこず、わからないという顔をした。それにまた遥があきれたようにため息をつく。

「だって、和って高橋君と話すとき楽しそうじゃない。

俺にはあんな風に笑ってくれたこと一度も無いのに。」

「え、それがどうして嫉妬…………？」

「…………あのね、好きな子が自分以外の異性と楽しそうにしてたら誰だって嫉妬するでしょ？」

「…………それだとなんか和泉君が私の事を好きみたいに聞こえるけど。」

「いまさらそんなこと言うの？何回もそう言ってるじゃないか…………。」

うんざりしたようなその声に、ん？と和が考える。

「…………たぶん、好きだって言われては…………いない、んじゃない、かなあ？ごめん、自信あんまないけど、多分。」

その和の言葉に、遥は衝撃を受けたように目を見開いた。

「え、そうだった…け？」

「うん、ほらなんか、全部くれたの俺のにするだの言われてるけど好きだとも付き合ってくれとも確か言われてない。

言われたところで信じないからどっちでもいいけど。」

最後の一言は余計だ、と心の中では思ったが、遙は口にはしなかった。

「思い返せば、本当だね…うわ、俺最低…。」

よほどショックだったらしく、和の頬から手を離して遙は自身の頭を抱え込んだ。

和はいええそれを、え、どうでも良くね？と心の中でつつこみつつながめている。

しかし数秒後には決意したかのように勢い良く顔をあげ、遙は和を真剣にみつめる。

「和！」

「今度はなに！」

「決めたよ！今日から毎日最低一回は和に好きだって言う！」

その言葉に恥ずかしそうに顔を赤らめるでもなく、心底うんざりというような顔で和は言った。

「…あんたさあ、本当に日本人？恥ずかしくないわけ？」

私そんなことなにひとつ望んでないんだけど。」

「日本人だろうと俺はこういう人間なの…言霊つてあるでしょ？毎日好きだ付き合ってくれって言えば本当にそうなるかもしれないじゃないか。」

「馬鹿？」

「和限定でね。」

ああ、言うんじゃなかった…

がっくりと肩を落とし、即答されたその言葉に和は心底後悔した。

「それでさ、さっきの質問答えてくれない？」

「え、なんだっけ？」

「忘れないでよ…高橋君にキスされたらどう思うの？」

ぎろりと睨まれたが、特にそれを怖いと思うこともなくけろりと和は答えた。

「申し訳ないなっと思う。」

「え…な、なぜ？されたのに？」

嬉しいとか好きだからとか言われたらどうしようと考えていた遙は、思っていた以外の言葉に安堵したものの、その真意は理解できずに混乱した。

その遙の胸中など察することもなく、さらにあまりにも普通な口調で和は言葉を紡いだ。

「高橋君、彼女いるから。その彼女に申し訳ないなっつまり感じると思う。」

「はい？今なんて？」

「付き合ってる子がいるんだよ、高橋君。あれ、知らなかった？」

「はあ！…！！？？」

いともあっさり今日一番の爆弾発言を落とした目の前の彼女をみて、愛憎入り混じるこの感情をどうしてくれようかと強く思う遙であっ

た。

『ああもう、いつそ今日は俺が叫んじゃおうかな……』

そんな遥を不思議そうにみている和は、やはりその複雑な男心を察することなどできないらしい。

果たして、真にふりまわされているのは一体どちらなのだろう。

目の前の彼女をしっかりとみつめ微笑むと、彼ははっきりと言った。

「和、大好きだよ。俺のこと早く好きになって。」

愛しい彼女からかえってきた返事は、嫌、という短い一言だけだった。

…無表情で即答というありがたくもないオプションつきで。

第八話「予想範囲内です。」

図書室の一件はあっけないほどに簡単に解決した。

当初いちばん恐れていたお願いすることになったらどうしよう、という懸念も

遥が事態を早急に収束してくれたためなんら問題はなかった。

和は、またいつものように図書室をおとずれる権利を取り返したのだ。

ある意味では予想通りの結末である。

しかし笹森和は感じていた。危機は、もうすぐそこまで迫っている。

その考えを後押しするように、まもなくして教室でとある会話が交わされた。

「笹森さん、気をつけたほうがいいよ。」

最近では日常になってしまった、クラスの何人かの女子に囲まれるこの光景に

それ程までに嫌でもないがどうしたものか、と内心複雑になっていた和は

しかしそれを顔に出すでもなく、にっこりと微笑んだ。

「そうだね、予想ではもうまもなくなんらかのリアクションが起こされると思うよ。」

その言葉にクラスメイト達は目を丸くする。

「えっ…知ってたの！？和泉君のまわりの人たちが怒ってること！」
「そりゃあもちろん、最近は前以上に切れ味鋭い視線も感じてたし…
ヤツの行動も目に余るものになってきたからねえ。」

ふっと疲れた目をした和に、うらやましいような、心底同情するかの
のような、

複雑な視線が複数注がれた。

「あれはね…私達は面白がってるところもあるからいいんだけど…」
「そうだねー、それに和泉君が笹森さんにこだわるのなんとなくわ
かるもんね。」

「近くでみてない女子はそりゃあ納得しないだろうしねえ…。」

クラスメイトの会話に若干聞き捨てならない言葉が混じっていた気
はするが

今はそれ以上に考えなくてはならない事があるためとりあえず和は
聞き流した。

「なんかかならないものかとここ最近考えてはいるんだけどねえ…
こればっかは。あいつが出てきたところで火に油だろうし。ったく
面倒臭い…」

そう言つて頭を抱える和を見て、今度こそ女子だけではなく男子ま
でもクラス中が
心底、和に同情した。

前々から当然といえば当然だが、どんなに逆恨みだとうつたえよう
とも

はたからみれば和泉遥という学園中のアイドルを一人占めしている
女子、

つまり笹森和という女生徒はほぼ学園中の女子から睨まれていた。

それでも、和が逃げ回っていたり、辛辣な言葉を浴びせる光景を幾度となく目撃されていたり

二人が付き合っているという事実もなかったため、

その嫉妬が表面化するという最悪の事態はなんとか免れていた。

一週間前までは。

屋上での一件以来、どこかに一番大事な頭のねじでも落としてきたんですか？と

言いたくなる程（実際和は言ったが）、遙は前以上に恥ずかしい言葉を連発するようになった。

「和！」

和の姿を確認すると、とにかくどこでもタックルせんばかりの勢いで彼女に抱きつくアイドルと呼ばれたその男。とにかく目立ってしょうがない。

「ちよっ…お願いだから周囲に目を配ってよ！腐ってないならまわりをよくみる！！」

「俺の目は和専用だから和しかみえないよ？」

砂糖にメープルシロップをかけてとどめにあんこまでのせました？
という

胸焼けしそうなあまつたるい言葉にたいがいの女子なら歓喜しそう

なものを

しかして彼女、笹森和はなにもかも普通の女子とは違っていた。

苦虫を噛み潰したような顔をすれば、心底迷惑そうに遥の体をひきはがした。

「あらあらそれじゃあテストの時に問題用紙がみえなくて大変ね。留年したらあとから入ってくる後輩が学園のアイドルに会えて喜ぶわ。」

「和がいるときは和しかみえないって意味じゃないか。もう、言わせたいの？」

もう言ってるじゃねーか！

心の中でそうつつこめば、出てくるのは盛大なため息しかなかった。

「和、大好きだよ。俺と付き合っ「ゴメンナサイ。」

言い終わらない内に和が即答すれば遥は頬を膨らました。

「告白は最後まで聞くのがマナーだよ。」

「和泉君のはね、告白じゃなくて呪いっていうんだよ。毎日私に呪いかけないでくれる？」

「かかってくれないくせにー。」

昼休みの中庭は目立ってしょうがない。とにかく校舎に入ろうと足早に歩を進める和の横を、なにが楽しいのかにこにこしながら遥が並んで歩き出した。

早足になっている和とは違い、いとも優雅に歩く遥をみれば、コンパスの差を憎く思った。

むきになって歩けば若干息があがってしまふ。

自分で自分が馬鹿馬鹿しくなり、和は速度を通常に戻した。

そんな和を遥はみつめる。

「息があがってるけど大丈夫？」

「……………」

今は返事をするより呼吸を整えたかったため黙っていると素早く和の前にまわって遥が和の顔を覗き込んだ。ぶつかってしまわないように足をぴたりと止める。

「……………呼吸、落ち着いた？」

その遥の言葉にたったいまの彼の行動の意味を理解した。少々意外ではあったが、素直にお礼を言う。

その和の礼が遥には意外であったのか、一瞬目を丸くし、次に絶対に裏があるような笑顔を和にむけた。

「じゃあ、ごほうびちょうだい。」

「言葉だけでは不満だと？」

「お礼のほうじゃなくて、さっきまで頑張って我慢したからそれについてのごほうびがほしいなつて。」

我慢って何を？と聞きたかったが、きつとろくなものではなからう。これ以上はやぶへびだ、と感じ和は無視して歩き出そうとした。しかしアツサリと遥によってそれを阻まれ、その腕の中にとじこめらる。

中庭を抜けて校舎内に入ったとはいえ、ここは廊下だ。

多くはないとはいえみている人間はいる。

和は焦ってその手から逃れようとするも、力が強くて全く対抗できない。

「ほんとに、余計なところばかり察しがいんだからなあ。

そこは我慢つてなに？つて質問する場面じゃない。」

「やぶへびだつてわかつて質問する阿呆はいない。離せ。落ち着け。クールになるんだ。」

和の早口の言葉に、ひよつとしてけつこう動揺しているのか？と思えば

遥は和には気付かれないように軽くふきだした。

「…和の前ではいつだつて冷静になんかなれない。」

「つてことはいつもまとまな精神じゃないつてことだね。よしわかった。」

和泉君は新種のウイルスに侵されているんだよ。だから私なんかにかまうんだよ。

保健室に行こう、そしてワクチンをもらおう。」

「和、わかりやすく話をそらそうとしてるけど無駄だよ？」

遥がいつもよりも低い声でそう発すれば、和は固まった。

そうなることを、遥は知っているのだ。

「さっき息があがってる和みて、ああ色っぽい可愛いなあって思つて

キスしたくて仕方なかったんだけど和が嫌がると思つて我慢したんだよ？

いつも和の前では理性がなかなか保てなくて大変なんだ。

だからごぼつびちようだいつて言ったの。」

そこで一旦言葉を切って、遥はその腕に抱きしめた和の耳元で囁いた。

「屋上でならいほづびくれる？」

次の瞬間、遥の腕から和は解放されていた。遥はといえばしゃがんでうずくまっている。

先程の言葉にこれ以上ないほど身の危険を感じた和は、自身の全体重をかけて男の足を踏んづけたのだ。

「色情魔かアンタは。」

心底呆れかえった和は、ついてきたら明日はないと思え、というなんとも物騒なせりふを残しその場をあとにした。

「……ちよつとやりすぎたかなあ。」

しゃがんだまま和が去ったあとをみつめる和泉のその言葉に、

『ちよつとどころじやないだろうっ…』

周囲の人間が一致団結し心の中で学園のアイドルにつっこんでいたことは、

その場にいる誰ひとりとして知ることはなかった。

学校に昼休みを告げる鐘が鳴り響いた次の瞬間、事件は始まること
していた。

「笹森和つて女いる？」

『キターーーーー！！！！』

2年3組一同は、教室出入口口で固まる複数女子のひとりから発せ
られた言葉に
過剰なまでに反応した。
出入口口に固まっていたその視線は、次には一斉にその呼び出され
た本人に注がれる。

「はい、私が笹森ですが。ご用件は……ってきくまでもないですかね。」

ため息混じりにそう話す少女は、この状況を目の当たりにして
怯えるでもなくたいそう面倒そうにのろのろと席を立ち上がった。

『スゲエ！』

クラス一同が心の中で叫ぶ。

そのふてぶてしいとも思える態度をみれば、
本来なら心配ではらはらしてしまう場面であるはずなのに
この少女にかかればなにもかも大丈夫なのではないのかという錯覚
を抱いてしまう。

「ふうん、なんで呼び出されるかはわかってるんだ？」

出入り口にいる女子は全部で5人。まあ予想範囲内の人数だ。種類はといえば系統はわりとバラけていて、ギャルのように派手な見た目の女子が2人、派手ではないがまるでモデルのような垢抜けた雰囲気の子が3人いた。

派手な雰囲気の子も、落ち着いた雰囲気の子も、皆一様に可愛かったり綺麗であったりすることに変わりはない。美人が勢ぞろいするところも迫力があるのか、と変なところで感心してしまう。

先程から口を開いている女子は、その中で一番気が強そうでありなおかつ一番顔が整っていた。

肩下までのびたまつすぐの長い髪はサラサラで、茶色がかって少し色素が薄かった。

染めているのかもしれないがとても自然な髪色は一見すると天然ではないかと思われた。

化粧もいかにも手馴れていて、彼女の元々の美しさを損なうものではない。

「もちろん、私はそこまで馬鹿ではないし、しらばつくれる程ふてぶてしくもありません。

本来ならば私からおうかがいしたかったくらいなのですが、なにしろ和泉遥氏の周りにはいつもみなさんのように綺麗な方々が複数人いらっしやるので

どなたに声をかけたらいいのかわかりませんでした。お手数をおかけしてしまいましたね。」

その和の言葉に、先程綺麗だなあと観察していた女子の目が見開か

れた。

どうやら予想外の言葉だったようだ。

「ご相談したい事があったので。どうしましょう？私はここで話してもかまわないのですが

皆さんが人目をばはかるとおっしゃるのであれば移動させていただきます。」

にっこりと微笑んでそう答えれば、うしろにいる4人の女子は少々うろたえているようだ。

代表者である彼女だけ、こちらを警戒心むきだしの視線で睨んでいる。

その視線を読み取り、和は素早く言葉を続けた。

「まず誤解しないでいただきたいのは、私はこれ以上和泉氏に関わる気は一切ありません。

そもそも最初からこうなってしまったこと自体、本意ではないのです。

そちらのお怒りも重々理解はしているつもりですが、まず私の話をきいてはいただけませんか？」

まっすぐに代表の彼女を見て淡々と話せば、彼女は驚きながらもその言葉に嘘はなさそうだと判断したらしい。

「……そうね、遥にみつかるとちょっと面倒だから、移動してもかまわないかしら？」

あなたさえ良ければ。」

「ええ、もちろんです。行きましょうか？」

彼女達のうしろに続いて教室を出ようとしたとき、そうそう、と呟

いて和は振り向いた。

「この件は他言無用だから。絶対に和泉遙に告げ口はしないで。和泉遙と親しい人物にも。

もししたら……どうなるかはご想像にお任せするけれど、私はそのひとを許さないから。」

いいかな？とにっこりと和が微笑めば、クラスメイト全員が無言でうなずいた。

そのクラスの反応に満足し、和は教室の扉を閉めた。

「お待たせしました……ってどうかしました？」

ぼかんとした顔で美人衆がこちらをみつめるので、和は少々うろたえた。

「いや…単なるおとなしい女だとばかり思ってたから…面白いね、笹森さん。」

普通、口止めは私たちの役目なはずなんだけどね。」

くすりと笑った彼女の顔を見て、話が少しでも通じそうな相手に良かった、と和は思う。

でなければこれから相談しようと思っていたことも、なんら意味を成さなくなってしまう。

目の前の聡い人間でありそうな彼女をみて、和は微笑んだ。

移動した先は、あまり使われていない校舎隅の空き教室だった。鍵が壊れているらしく、一部の生徒はよくたまり場になっているらしい。

「本当は校舎裏にでもひっばろうかと思ってたんだけどさあ、実際話したら

その気が失せちゃった。私一人で来ても良かったね。

あ、私2-7の高原梓たかはらあまきっていうの。よろしくね？」

代表で話していた女子は、教室に入ると机に腰掛けてそう自己紹介をした。

まわりの女子一同も、不思議なものでもみるかのように和をみている。

「ごていねいありがとうございます。…それにしても、みなさんお綺麗ですね。

高原さんはモデルさんかなにかやってらっしゃるんですか？」

特段それ程に興味があるではなかったがこういった人々と話す機会は稀だろうと

くだらなくも浅はかな質問をした。

会話にとっかかりにもちょうどいいだろうと思われたのだ。

高原以外の女子はその言葉にまんざらでもない様子である。

「スカウトはされたことあるけど興味なくてそういうことはやってないよ。

なに急に褒め殺し？それで許してもらおうかと思ってないよね？」

「まさか。本音しか言いませんから。ますますもってなんで私なんかにかまうのかか

理解できないんですよ。」

「それは、遙のことよね。」

「ええ、そうです。ええと…まず、私の話をきいていただいても？」
「私たちの話はまあ…あなたなら予想がついているだろうしね。皆
もいいよね？」

その後ろをふりむいて梓が問えば、皆一様にうなずいた。

どうやら梓はリーダーとして絶対であるらしい。

それでは彼女を納得させることができれば、とりあえず自分の危機
は脱出するのだ。

思いのほか道がひらけて、和は内心微笑んだ。

「まずこんなことをお話するのは心苦しいんですが…私自身理解で
きないんです。」

私は和泉遥さんとどうこうなるうと思ったことは一度もないですし、
正直関わり合いになりたくないというのが本音です。ですがきつ
けを作ったのは彼からでした。」

「それは…あなたからではなく、遙から、笹森さんに近づいたって
ことだよね。」

「そうです。告白まがいのことを和泉遥さんからされて…まあ
ここは信じていただけなくとも

しょうがないんですけど、事実です。私はなにかしら裏があると思
ってるんですが。」

遙から告白をされた、という言葉に梓以外の4人は驚きそして和を
睨んだ。

しかし梓はそれに小さくうなずくと、和に先をうながした。

「裏つて？」

「うーん…例えば私みたいな地味でそこらへんにぼっといそうなタ
イプを」

たまには相手にしてみたくなった…とか。まあ、暇つぶしですかね。ああいう方々は女性に不自由していかないでしょうから、

私みたいな人間を本気でどうこうしたいと思うはずありません。また私と彼にはこれまでなんら接点がないんですよ。本当に急でしたから。」

「なるほど…でも、それだとあなたに執着する理由がないんじゃない？

もしもあなたみたいなタイプを相手にしたいのであれば簡単に手に入る同じようなタイプを

見繕えばいいだけの話なんだから。」

梓のその言葉に、それは自分自身も考えていたことだったと思い出す。

しかしそんな戸惑いも、最初にふとよぎったくらいに過ぎない。

「思うに…私が断ってしまったからじゃないかと。」

「…どういうこと？」

「最初に言いましたが、彼は人生に退屈しているのだとしたら、本気で暇をつぶせるものが

ほしいわけですね。それでその相手に私はうってつけだったのではないかと。

簡単に手に入る玩具よりも、なかなか手に入らない玩具のほうに執着してしまったのでは

ないでしょうか？」

そうやって、和は告白騒動の際の顛末を簡単に話せば、

梓のみならず全ての女子がその和の言葉の数々にふきだした。

「それ…遥みみたいなタイプには逆効果だよ！なるほど…よくわかった。」

なんであなたに遙が執着するのか。」

腹を抱えて笑いをこらえる梓のうしろで、初めてひとりの女子が発言した。

「でも要約すると…笹森さんは遙が迷惑ってことでいいんだよね？」
「そう！まさしくです！！そしてまさに、ご相談したいことはそれなんですよ！！！」

女子にむかって指をさし、和が反応を示せば、梓含めすべての女子が首を傾げた。

「相談って…つまりは遙にあきらめてほしいってこと？」

「そう、そうなんですよ。毎日のように断り続けても馬の耳に念仏、馬耳東風…」

で、どうしたものか…ここ最近悩み続けてたんです。

さっきの会話でおわりの通り、私は目立つことが極端に嫌いなんです。

だからなるべく早く平穩だった日常に戻りたいと思ってるんですけど…」

「遙がまとわりついてるあいだはそれはかなわない…と。」

「その通りです。」

その言葉に、その場にいる一同がうーん、とうなり始める。

「私たちもね…こんな馬鹿なことをするくらいだからわかってもらえるとと思うんだけど
やっぱり遙が好きなのよ。だからこそ、あなたの存在がゆるせなかった…」

でもあなたは、遙にまったく興味がないのね。」

「とうるかそれ以前に対象外です。」

きっぱりと言い切れば、5人の女子はいつせいにふきだす。

「あ、あの遙にそんなこと言う女子がいると思わなかったっ…」

「笹森さん、本当面白い。」

「ちょっといい気味だよねー、あの俺様遙が！」

「だめ私、腹筋痛い…」

女子達の会話に不穏な情報がまぎれていたが、そこをつっこむのはやめておいた。

あまりききたくはないからである。

俺様：実際、自分や彼のことをアイドル化している連中の前ではずいぶん猫をかぶっているのだろうなとは思っていたが、ひよつとすると二重人格レベルなのかもしれない。

とりあえず心のメモくらいにはとどめておこう。

「でも、反応を示さなきゃ一番それがいい気がするんだけど…やってみた？」

「ああ、それ一番最初にやっただんですけどあるうことがヤツクラス的女子味方につけて

それを阻止しやがったんですよ。」

「え？どういうこと？」

転校騒動の一件を話せば、梓は目を丸くした。

「遙がそんなことまでするなんてね、ほんとう気に入られてるんだね和って…」

いつのまにか下の名前で呼ばれていたが、あえてつっこもつとも思

わなかった。

彼女がこちら側についてくれるのはなによりもありがたいことだ。

「うーん…私たちが説得したところで聞く遙じゃないからねえ…協力できることといったら…遙の動向を報告することくらいかしらね?」

「それって、和泉遙が今どこでなにしているかとか逐一わかるってことですか?」

「まあ、校舎内であればそれも不可能ではないかな。

ファンのネットワークはすさまじいものがあるから。」

「そうすれば彼を完全に避けることはできるかもしれないか…」

でもそれ、私たちと梓さんの関係を勘付かれるとまずいですね。」

「そうねえ…でもとりあえず番号とアドレスを交換しておく?」

「あ、私携帯電話もってないんです。」

その言葉に、またもいっせいに驚いた顔をされた。

まあこれは、クラスの人々にも、遙にもされたりアクションなので別段こちらも驚きはしない。

無理も無い話だ。今の時代、携帯電話の普及率はめざましく、ひとり一台があたりまえ。

私は親しい友人も作らなかったし、家族とのやりとりもそんなに多くは無いため

必要性を感じなかったのだ。

自分を縛るものは少ないほうがよかったし。

「……………携帯電話か。」

ぽつり、和は呟いた。

その言葉に一同が注目する。

「もしかしたら…つかえるかもしれません。」

高原さん、番号とアドレス、教えていただいてもかまいませんか？
追って私も連絡させていただきます。」

「かまわないけど…和はケータイもってないんでしょう？」

梓の言葉に、大丈夫、と言って和は梓に番号とアドレスのメモを頼んだ。

懐からとりだしたペンとメモ帳をみて、梓は用意がいいのねえ、と呟いて書き出した。

「それから今日のことは厳戒態勢で他言無用願います。
外では今日の会話を一切もらさないように。」

仲間内の方々にも、接触したという事実の一切をとにかく隠してください。

高原さん、皆さんも、これは強制ではなくお願いですが…いいですか？」

その言葉に、少し楽しそうに梓がうなずくと、

まわりの女子もなにがはじまるのかとわくわくしながらうなずいた。

その様子を確認し、和は暗黒のごとくにやりと微笑んだ。

だいぶして教室に戻った和をみて、

なにがあったのか確認したくしょうがないクラスメイト達であったが

禍々しいオーラを発する和に話しかけられる勇者は誰ひとりとしていなかった。

これからなにが始まるのか。

それは渦中の人物だけが知っている。

第九話「賽は投げられた」

ノック音に気付き、和は自室のドアにむかってどろどろ、と声をかけた。

ドアを開けた主は慣れた仕草で和の部屋へと体をすべりこませる。

「忘れてった本。」

少し不機嫌そうに本をもった主が短く言えば、和はごめんと微笑んだ。

「わざわざ悪かったね…なにかもってく？この前貸してはまったって言ってたシリーズ、」

三日前に新作出たんだよ。まだ読んでなかったでしょ？」

「ああ…だったらここで読んでいこうかな。いい？」

「いいよー。アレ、けっこう薄いから広未ひろみなら30分くらいで読み終わるだろうし。」

そう言っで一冊の文庫本をほい、と和は手渡した。

広未と親しげに呼ばれた人物は、にっこりと笑って本を開きながらベッドに座り込むと壁に背中をよりかけた。

部屋の主である和は、床にあるクッションの上に腰を下ろし、背中をベッドにあずけている。

「和さ、いいかげんケータイ持たない？」

これまた親しげに和と呼び捨てにした客人は、本から視線を離さないまま問うた。

「そうだねー、持とうかな。」

「今日みたいに忘れ物届けるのとかもそのほうが便利…ってええ！？」

持てと言っておきながら、イエスという答えをまったく期待していなかったのだろう。

あまりにも驚いて思わずすっとんきょうな声をあげてしまった広未に、

苦笑いしつつも和はつづけた。

「そんなにびつくりしなくても…まあほら、広未にもこういう事があるとき

ちよくちよく悪いなあーとは思ってたし…ちよっと事情があつてね。

「事情？…ああ、例の男がらみ？」

今度は本を自身の脇に置き、和のほうをみながら広未は会話を続ける。

和も、広未に体を向けながらそう、と肯定する。

「それでね…さしあたって広未に頼みたいことがあるんだけど。」

「言うまでも無く面倒なことに巻き込まれるんだろうね？」

「それを言われるとまあ心苦しいんだけどさ…私もいいかげん困つてんのよ。」

「和をそこまで困らせるなんて、一度その和泉遙氏に会ってみたいもんだなあ。」

その広未の言葉に、待つてましたといわんばかりに、和はにんまりと笑んだ。

ついでに目も少々細められている。

こういう顔をするときの和はとんでもないことを考えていることを、
広未はよく知っていた。

そして必ず考えている事を実行するということも。

家族以外でそれを理解する人間は、現時点で広未以外には存在しない。

「いいよー、好きなだけ会わせてあげる！」

「ああ、なんかもうある程度予想ついちゃったかも。」

和の言葉に広未は自分がこれからどういった役割を担うのかを
やんわりと理解した。

その言葉に和はますます微笑む。

「広未のその察しの良すぎるのところ、大好きだよ。」

「はいはい、光栄ですよ…ったく、こういうときはっかり。」

あきれるかのように広未がため息をつけば、和はベッドに上半身を
投げ出し

半ば広未に迫っているかのような格好になった。

「だって広未以外に親しい異性の知り合いなんていないんだもん！」

しょうがないじゃん！と叫ぶ和に、なにがしょうがないんだと思っ
つつ、

目前にせまっている額を弾いた。

広未によって力いっぱいデコピンされた和は、痛い！とうめく。

「親しい他人…の間違いだろ、友人皆無人間が。」

おじさんとおばさんに見られて変な誤解受けたらどうすんだよ。」

広未がベッドからおりるようにながせば、和は額をさすりつつ素直に従った。

今更そんなことを気にする間柄でもなくせに、と心中で毒づくも、今ここで逆らうのは得策ではないと感じるからだ。

「…で？」

あまりにも短い問いではあったが、

それはすべてを承諾したという返答だということを知っていた。進むべき道が確実にみえてきたことを実感しつつ、心のままに微笑めば、

今日二回目となる言葉を、和は発した。

「大好きだよ、広未。」

その和の表情に、広未は顔を引き攣らせた。

梓の元にメールが届いたのは、あの日から三日後の事だった。

『笹森です。例の頼み事、よろしくお願いします。』

そう短く添えられたメッセージをみて、

これからなにが起こるのかわくわくしつつ、了承のメールを返信した。

届けられるメッセージをみて、和は感嘆のため息をもらしていた。梓からの返信である程度の動向くらいはわかればいいな、とのんきにかまえていたが、

まさかここまで逐一、遥の所在地がわかるとは思ってもみなかった。ファンのネットワークというものは恐ろしい。

というか、これはもう集団ストーカーに遭っているといっても過言ではないのではないだろうか。

遥に少々の同情を覚えたものの、彼がこの所業を知らぬはずもない。きつと面倒がって害はないと捨て置いているのだろう。

そもそもこれほど校内での目撃情報があちこちに漏れているなら、遥が屋上に頻繁に出入りしていることはとくに知られているはずでありながら

彼女達がその事実を知っている様子がない。

そもそも自分がここまで女子達に迫害されることなくほっておかれたのも、

きつとその都度、遥が彼女達を煙に巻いていたということなのだろう。

度が過ぎれば咎められることもファンの子達はわかっているに違いない。

なんとも奇妙なともすれば信頼関係のようなもので結ばれているのだなと

和は思った。

『ていうか私の追尾とかも彼女達使ってたということはないよね…』

？』

でもそんなことをしたら彼女達から嫌がらせを受けるんじゃないだろうか。

いやいやでも、純粹にファンという奇特な少女達ならば従順に遥の言うことだけをきくのもかもしれない。

現に校内では遥の恋人であるともまことしやかに囁かれてる梓は、このネットワーク、もとい彼女達をけっこう好き勝手利用しているようだし

遥の彼女でその扱いなんだから、遥自身の言であるならばなにがなんでも聞きそうなものだ。

敵に回したらどうなってしまうのか、と薄ら寒さを覚えつつ、たったいま報告されたメールで遥が今こちらに向かっているらしいことを知った。

今は昼休み。和は人気のない校舎隅の階段途中に腰かけて、お昼ごはんを食べていた。

送られた報告メールを削除し、先程は後回ししておいた別方の受信メールを開く。そのメールをながめつつ、和はにっこりと微笑んだ。

「和、いつの間にケータイ持ったの？」

真後ろから遥に声をかけられて、報告は受けていたものの和は驚いた。

てつきり下から来るのだとばかり思っていたので油断していた。遠慮もなく画面をのぞきこまれ、あわててそれを閉じる。

「ちょっと、最近、必要かなと思って持つようになったの！」

言っておくけど絶対に番号もアドレスも教えませんからね!」
「えーなんで?どうして教えてくれないの?」

階段に座っていた和は、一段上に腰を下ろした遙に真後ろから抱きしめられている。

先程から耳元で話されるのでくすぐったくてしょうがない。

「ちょっと…離れて。」

「いやだ。」

低い声で和が拒否をすれば、更にそれを拒否でもって遙が答える。

「離れてって言うてるでしょ!!!」

今までにないほどの大声が校舎中に響いた。

あまりにも激しい拒否に、遙は驚いて思わず手をゆるめる。

その機会を逃さなかった和は、素早く遙の手を逃れ踊り場まで駆け下りた。

その様子を呆然とみつめていた遙は、慌てて立ち上がり和を呼び止めた。

「携帯電話、どうして必要になったの?」

「……あなたには関係ない。」

遙と目を合わせることなく、和は答える。

「さっきの相手って…友達?」

「……………」

「津田^{った}って誰?」

遙のその言葉に、真っ赤な顔をして和は遙を睨んだ。

「広未は別に関係ない!!!!」

「……………ひろみ？」

画面を勝手にのぞかれたこと、遙に名前を出されたことに力つとなりらしくもなく短慮にもその名前を自身から叫んでしまった。気付いた和は赤い顔からみるみるうちに蒼くなる。

その和の動揺に、遙はその人物が和にとって特別な存在なのだということを悟った。

考えたくも無いが、電話を持つようになった理由も、きっとその人物なのだろう。

「津田広未つだひろみっていうんだね、その男。」

「人のメールのぞくなんて最低。」

「……………付き合ってるの？」

「だから違う！広未はなにも関係ないって言ってるでしょ!!!
付き合ってたらとつくにあなたにそう言ってる！」

…断るのに一番有効な言葉だもの。」

最後に静かな口調でそう言えば、今度こそ和は階段を駆け下りて行った。

ひとり残された遙は、ふっと笑う。

「…やっぱり男、なんだ。」

その名前から性別はどちらなのだろうと逡巡したが
きつと馬鹿正直にきいても彼女は答えてくれなかっただろう。
なんともわかりやすい鎌かけにひっかかったものだ。

今までその影すらもつかがい知れなかった人物の登場に、遙は眉を寄せる。

今更こんなタイミングで、一体どういうことなのか。
しかし、と思い起こす。

和はどんなに頼んでも強引に事に及ぼうとしても、

頑として自身の家まで送らせるという行為を拒否しつづけた。

遙はてつきり、和の性格からそのテリトリーに入れるのを単に拒んでいるのだろうと

感じていたのだが、…もしかしたら違ったのかもしれない。

もしもその思い当たった理由が真実なのだとすれば、

遙にとって最悪ともとれる未来が待っているかもしれない。

「広未…か。」

自分には許されないその親しげな呼び名に、みもせぬ相手に激しい嫉妬心を覚えた。

果たしてあれで良かったのかどうか、と、和は廊下を歩きつつ考えていた。

今の所遙はあの階段から動いていないらしく、
きつと先程繰り広げられた光景を反芻しては思案にふけっているに
違いない。

勝手に彼が勘違いをしてくれれば事はいちばんいい方向に進むのだ

が。

『にしても、感情的になるってやっぱり難しいもんだな…。』

普段怒りを覚えてもどちらかというところ辛辣な物言いがかえす和にとつて、

怒鳴り散らすという行為はあまり慣れたものではないのだ。

さすがに抱きつかれたりすれば自分も一介の女性であるし叫びこそすれ、

それ以外の場面であそこまで感情をあらわにすることはまずない。

どこか違和感はなかったかと心配になる。

自分は女優というわけでもなければ、演劇部に所属していた経験すらない。

激している自分を心中ではまるで他人の如くながめていたことに、今更ながらとてつもない羞恥心を覚えた。同時に、多少の罪悪感も。

『でも…こうするくらいしかもう思いつかないんだよね…。』

どうしたら穏便に終わらせることができるのか。

和はそればかりを考えた。

彼の言葉が嘘なのか本気なのか、それは彼にしかわからない。

けれどもやはりそれを本気だととれるほど、和は純粹ではないのだ。せめて自分がもう少し心清らかな女性であれば、その中身に惚れたというのも

信じられたかもしれない。けれども実際は。

『こんなことを画策する女子で悪いね、和泉君。でもね…。』

廊下の真ん中、和は歩をぴたりと止め、ぼつりと呟いた。

「限界なんだよ…。」

開店休業。

私の心はそうありたいと願って止まない。

今の所、電話帳に入っているのは家族全員と梓と広未だけ。
こんな極薄な人間関係で、なぜ携帯電話など持たなくてはいけないのか。

うんざりしつつも事のほか順調である計画に、和はそれだけが救いだ
だと
手にしていた電話を開いた。

先程の返信をし忘れていたことに気が付いて、
休み時間の教室にて広未へとメールを送っているところだ。
画面に広がる、放課後の予定うかがいの問いに、和はとりあえず
と送る。

遙が信じきってくれたのならばそれで良いが
なにもかにもがタイミングが良すぎるのではないのかと勘繰られて
は困る。
広未の登場は、あともう少し待ったほうがいいのではないかと考
えた。

まあ、二人が対峙する姿をみたくなくてもないが。

小さくため息をついて、和はおもちゃのようなそれをしまった。

携帯電話を片手に、せつなそうなため息をもらす和をクラス中が好奇心旺盛、野次馬根性丸出しの瞳でみつめていた。どうみても意中の誰かが出来たとしか考えられない頻繁なメールのやりとりに

あの面倒臭がりな彼女がそれを許す人物とは果たしてどんな男なのかと

問い詰めたくて仕方ないのに理性がそれを全力で止めた。

数日前の和のあの剣幕をみれば、誰しも残酷なお仕置きを想像してしまう。

悶々とした心持ちの中、いつかそのきっかけはおとずれないものかとクラス中が事の経過を見守り続けていた。

渦中の彼女はといえば、その雰囲気を感じに読み取ってはいるものの質問責めにあうのはごめんだとばかりに沈黙を守り続けていた。面倒ごとにはなるべくなら少ないほうがいいし、どこでボロがでるとも限らない。

とにかくこれは、勝負なのだ。

笹森和と、和泉遙の心理戦。

勝者はどちらか。また勝利とはなんなのか。

それは神のみぞ知る、といったところであろう。

同時刻、2年7組に所属する和泉遙は窓際いちばん後ろという

完璧な良席に腰を下ろしたたずんでいた。
物憂げな表情でため息をつき窓をながめるその様は、
まるで一枚の絵画のように美しい。

その光景を夢みごちで、クラスメイトはみつめていた。
一人の女子からほう、というため息さえ漏れる始末。
それほどに、彼の容姿は人目をひくものだった。

昔から、この容姿に感謝しこそすれ、捨てたいと思ったことなどな
かった。
見た目で寄ってくる女は確かに多いものの、それをすべて敵だと恨
むほど

自分は子どもではなかったしまた女性達もそれほど劣悪なものでは
なかった。

もちろんどうしようもないタイプもいないではなかったし、
ストーカー化するような粘着質なタイプもいた。

けれども大半は自分が蒔いた種だと納得できるものだったから
別段それを相手方のせいだとも感じなかった。

鏡をみれば自身の容姿がどれほど整っているかなどわかりきったこ
とだし、

特別ナルシストだとも思わないが謙遜は逆に嫌味にしかならないだ
ろうと思う。

冷静に、かつ客観的に自己分析をしているだけなのだ。

けれど、今、彼は思う。心底地味になりたい、と。

彼女の隣に立てるのならば、整形手術をしたってかまわない。
とにかく和が満足する目立たない存在になりさえすれば、
あの子はイエスと言ってくれるのだろうか？

馬鹿なことを考えては、またため息をつく。

先程までは、焦らずともいいと思っていた。

なんだかんだ、完璧に拒否をされることはなかったので長期戦になるうともいつかは彼女があきらめてくれるだろうと信じていたから。

校内で自分を敵に回す猛者はいないし、この高校時代いっぱいを使っても良いからとにかく彼女を最終的に手中におさめることができれば、と。

しかし和のその人間関係の希薄さから、うっかり見落としていた。学校外に脅威になり得る存在がいるのかということをもまず調べておくべきだったのに。

もしもそんな存在がいたとして、彼女の隣を違和感なく歩ける男であるならば。

果たしてそんな男に、自分は勝てるのだろうか？

『勝てる気がしない…』

あまりにも弱気なその胸中に、まさかこんなことを思う日がこようとは、と

隠すこともなく苦笑していた。

「遙？」

呼ばれて振り向けば、当たり前のように隣席に腰を下ろす女生徒がいた。

なぜかは知らないが、こんなことを許されるのは彼女だけらしい。

…いや、遙はその理由を知っている。

「なにか用事？」

冷めた目で口元だけ笑んだ形を作れば、彼女、高原梓は困ったように微笑んだ。

「なあに、今日はぜひぶん忙しいじゃないの。普段そんなに表情出さないくせに。」

高原梓の容姿は、完璧ともいえるほどに美しかった。

サラサラのストレートな長い髪は少し色素が薄く、天然であることを遥は知っている。

化粧をほどこされたその顔は、しかしそれほどまでに濃くはなく、なにをせずとも十二分に美しいことも遥は知っていた。

それは言外に彼と彼女がそういう関係であるということであり、周囲もはつきりとは言わないでもなんとなくそれを知っている。

校内で遥の本命は梓なのではないのか、という噂も流れているくらいだ。

またそれに信憑性を持たせるかのように振舞う遥の行動にクラスメイトの大半はそれが真実であると信じて疑わない。

「梓だったら…俺の隣にいて違和感ないんだろうね。」

「な、なに急に。」

急に発せられた言葉に梓は焦る。

彼の隣にいいと言ってもらえたようで、梓は内心喜んでいた。しかし次につづく言葉に、早くも地獄に突き落とされる。

「和が梓だったらなあ…」

残酷な呟きに、梓の胸はズキリと痛む。

「…それって例の最近よくかまってる女の子？」

それでも自分の役割を忘れてはならないと、自身を叱咤する。
声が震えないよう、違和感がないように。

「…………でもよく考えたら梓みたいに目立つ容姿になっちゃったら和にちよっかいかける男があとから群がってたまったもんじゃないね。」

「やっぱり今のまんまでいいや。」

「ちよっと、勝手に自己の世界に入らないでくれる？
和ちゃん？って、あんまり可愛くない子なの？」

その質問に、首を振って遥はふにやりと微笑んだ。

「ううん、めちゃくちゃ可愛いよ。…………だからいじめないでね？」

「…どういう意味？」

「あれ？言外の言葉を察してくれない程、梓は頭が悪かったっけ？」
冷え切った目でみつめられれば、どんどん心が冷えてくるのを感じる。

要は自分は利用されているのだ。

彼に群がる女性達を納得させられるほどの容姿を持った私をそばに控えさせ、

面倒事を避けている。

それがわかっていてなお彼の隣にいるのは、もうどうしようもないこの気持ちのせいだ。

どんな形でもいいから、彼のそばにいたい。

自分でどう決着をつければいいのかわからないこの恋心に

最近では疲れすら感じていた。

和と出会ってから、その日は近いのではないかと思っている。この持て余している心と、決別ができる日。

きつとそう遠くない未来なのだと思えば、笑ったらいいのか泣いたらいいのか、梓にはわからなかった。

きつと、その日を迎えた自分だけがそれを知っているのだろう。

「…わかってる。」

ため息混じりにそう呟けば、遥は満足して微笑んだ。

放課後を告げる鐘が鳴り響けば、教室をあとにする生徒にまぎれ和も帰り道を急ぐことにした。

メールによる報告では遥はこちらへとむかっているらしく、今日はもう接触をするのは避けたかった。

昇降口へ急ぎ、靴をはきかえる。

あたりをみまわせば遥はいない。よし、とうなずいて校門まで走る。

「あれ、今日はずいぶん急ぐんだね、笹森チャン。」

声にふりむけば、それは浩平だった。

なんだか久しぶりに話しかけられた気がする。

「ちよつと、待ち合わせしてて。」

「へえ、なに、彼氏？」

「…なんで待ち合わせイコール彼氏になるの？」

「えーだってケータイ持ち始めたんでしょ？彼氏できたからじゃないの？」

「違つてば。前々から家族にも持ったらとは言われてたし、そろそろ不便だなと思うことも増えてきたから…。」

家族にも、という言葉に浩平はぴくりと反応を示した。

遙よりもやっかいなのは、目の前の人物なのかもしれない。

「まあいいや。とりあえずアドレス教えて？」

にっこりとそう微笑むので、和は少しあどさつた。

「は？やだよ。絶対に宮田君、和泉君に流すじゃん。」

「失礼だなーしないよそんなこと。」

「だめ。そうじゃなくても和泉君が勝手にのぞくかもしれないですよ。」

「それは…うん、まあ、否定できないけど。」

「でしょ？だからだめ。」

「どうせそのうち遙にも知られちゃうつてー、ねえいいじゃん」「お断りです！」

浩平がじりじりと迫ってくるのを感じて、和は校門まで走った。

どうしてこつも面倒事が増えるのだろうとつんざりしながら校門前まで近付くと、見知った存在を和はその目につつした。

「…なんで全力疾走？」

他校の制服を身にまとい和をみつめる男は、
必死な様子で走ってきた彼女をみて首を傾げつつ落ち着いた口調で
質問した。

「逃亡中だったから……って来るなって返事したじゃん！なんでいるの！」

「そのあと俺はやっぱり行くとメールしたけど？」

その言葉に携帯電話をとりだせば、目を見開いて和は怒鳴る。

「送信時間、一分前じゃん！着いてからメールしただろコノヤロウ
！！」

「お前なあ……その興奮すると口汚く罵るくせを直せって昔から言っ
てるだろう。」

「あんたは私の親か、兄か！身内でもないのにそういう事を気にし
ないの。」

「似たようなもんだろ？」

「たく、そんなに嫌がられると思ってなかったから多少傷ついた。」

「多少ならいいじゃん、どうせ一秒後には立ち直るくらいの傷のく
せに。」

「わざわざここまで来てやった人間に対してのせりふか、それは。
頼んでないと言ったらわかってるな？」

「……ゴメンナサイ、アリガトウゴザイマス。」
「棒読み。」

そう言って男は和の両頬をひっぱった。よくのびるなっはっは、
などと言いつつ

乾いた笑いをこぼしている。

「ちょ、広末、痛い、いいかげん痛い！」

あまりにも親しげなそのやりとり、和を追ってきた浩平は呆然と立ち尽くしている。

ここに遙がいたら、さぞかしショックを受けていたに違いない。

その視線に気が付いたのか、広末と呼ばれた男は和の頬から手をはなし

浩平をみつめた。

「…こつちが宮田浩平君で、そつちが和泉遙君かな？」

指差し確認をされて、そつちとはなんのことだと振り向けばななめうしろに遙が棒立ちしているのに気が付いた。

「遙！…い、いたんだ…。」

心の中であーあ…と唱えたところでもうどうにもならない。

彼は目撃してしまったのだ。目の前で。

和も存在に気付かなかったようで、広末の言葉に驚いて目を見開いた。

「和泉君、いつの間に…」

「なるほど、アイドル。確かにそこらの芸能人よりもオーラあるな。」

得心してうなづく広末という男をみて、遙は殴りつけたい衝動にかられた。

目の前の男は地味というほど地味ではなく、むしろ男前と言ってもいい部類だ。

遙や浩平ほどの人目をひく派手さはないが、上の中といったところか。

それでもそれなりに女子にちやほやされる見た目であるはずなのに、落ち着いた雰囲気のせいかそれをあまり感じさせない。

自分と同じはずの黒髪も、彼の地味ともとれる雰囲気をかもしだす役を担っていた。

目にかからないほどの長さしかない前髪は自分とはまったく違う。真面目に生きてきたと感じさせるに充分なものを、彼は持っていた。

「でしょうー。私と並ぶと本当、違和感がありまくりなんだよ。すごいでしょ?」

「お前な…とりあえずその物言いは微妙に失礼じゃないのか?」

そう?と首を傾げる和に、遙は引き攣らないように慎重に微笑んだ。

「和。…良ければ紹介してくれない?」

その言葉に和はあわててうなずいて、遙と浩平に向き合えば左手を広末のほうへとむけた。

「こちら、津田広末。私達と同じ高校二年生です。えーと…

まあ平たくいえば幼馴染に分類されるのかな?親同士が昔から仲良くて。

家も近所だからちよくちよくお互い行き来したりする仲間んだけど。

「…どうも、津田です。」

紹介されてかたわらの津田が微笑めば、遙は一步前に出て右手を差し出した。

「どうも、和泉遥です。和が津田君にどんな風に俺の話をしていたか興味深いな。」

「そんなに詳しくは…。ただこういう人と知り合ったと和からきいていたので。」

広未も右手を差し出す。

その言葉に、瞬時に遥は彼の立場を理解した。

言外に、お前の話題はそんなにあがっていない、和はお前なんか気にしていない、と

ふっかけられたのだ。あの和と長年渡り合っている以上、こいつの腹も真っ黒に違いない。

そしてそれは、和に対して特別な感情は持っていないかもしれないという

遥にとつて最後のすがりたかった希望が打ち砕かれた瞬間でもあった。

二人の手が握られた時、微かに広未のこめかみが反応した。

しかしそれはとても小さな反応で、遥はますますもって面白くない。しばらく睨みあうように微笑みあっていた二人は、どちらかともなくその手をはなした。

「…にしても、和。学校でコスプレしてたの本当だったんだ。」

「コスプレって…他に言い様ないわけ？」

広未の言葉に和が眉を寄せれば、ふっと広未が微笑んだ。

流れるような仕草で広未は和の眼鏡を外し、一本に結ばれていた髪をスルリとほどく。

そうして眼鏡と髪ゴムをその手に持った広未を呆れ顔でみつめつつ、和は鞆から眼鏡ケースを取り出し眼鏡を収納し、そのケースにゴムをくくりつけた。

「セットにしてんの？」

「コスプレするとき便利でしょ？」

そう返しながら鞆にそのセットをしまった和を、広未はまた笑った。

その一連の流れを、遙も浩平も無言でただただみつめていた。というか、あまりにも二人の世界すぎてなにも口出しできなかったのだ。

「それじゃあ、二人とも、また明日。」

和がそう声をかけて、かたわらの広未がぺこりと頭を下げる。どこからどうみてもお似合いのふたりだ。

「あ、ああ…またね、笹森チャン。津田君も、どうも。」

遙は依然として固まったままだ。一言も発することなく二人をみつめている。

そんな遙に止めを刺すかのように、広未が和の左手をとった。今間違はなく、二人の手はつながれた。

「え、なんでつなぐかな。」

「いつもうちよろしてどっか行くだらう。俺の前だと特に油断して自由になるから、予防。」

「ケータイあるんだしいいじゃん、はぐれても。」

「面倒くさい。あとはくれるの前提にするなっつ。少しは努力しろ。」

「へいへい…うっさいなあ。」

ため息混じりにそう言うも、和はどこか嬉しそうにみえる。遙には許すことがなかった数々の行動を、その男からはいとも簡単に受け入れる。

遠ざかる二人のうしろすがたを睨みつつ、遙は力加減もかまわず自身の右手を握り締めた。

浩平は、そんな遙に声をかけることもできなかった。

「……おもいつきり握りやがって。」

「え？なんか言った？」

「いや、腹黒王子は思った以上に齒応えがあるみたいだね。」

楽しそうに微笑めば、この右手の痛み分は楽しませてもらうと広未はにっこりと微笑んだ。

第九話「賽は投げられた」(後書き)

お気に入り登録数が10件を超えました！本当にありがとうございます。

第十話「勝負の行方は」

二人手をつなぎ歩きながら、ふと思い出したことを広未は口にした。

「和、…約束忘れてないな？」

「…わかってるよ。でも、あの反応…広未が言うような展開にはならないんじゃないの？」

「さあ、どうかな？」

笑いつつ、先程まであまりにも強い力によって握られ痛めつけられた右手が、今は幼馴染の女の子の手を包んでいるという事実には不思議な気持ちになった。

広未は、今回の件に協力するにあたってあるひとつの約束をしたのだ。

とある賭けをし、それに広未が勝てば提示した条件を和が実行するという約束。

和はそれを承諾し、二人の密約は交わされた。

その内容は、まだそれぞれの心の内にしか明かされていない。

それが露呈したとき、果たしてその賭けはどちらが勝って負けているのか。

『面白くなってきた。』

和に勝るとも劣らないその企み顔で、広未は一人ほくそ笑んでいた。

次の日にはもう学校中の噂になっていたらしく、しびれを切らしたクラスメイト達はついに和に詰め寄った。

「ちょっと、笹森さん！彼氏いたの！？」

「遥様のことが好きなんじゃなかったのー！！？」

悲鳴にも似たその言葉に、何度目かわからないうんざり顔で和は応えた。

「まあ、落ち着いて。広未は別に彼氏でもなんでもないから。

幼馴染っていうか…小さい頃からずっと縁が切れることないってだけ。」

「幼馴染ってことは…親しく付き合いがあるってことでしょうか！？」

あの笹森さんに！とクラスメイトが叫ぶので、まあそこは驚かれても仕方ないかと

和は素直に苦笑した。しかし、その通りではあるもののその反応、失礼ではないか？

「まあ、確かに…説明するまでもないけど私が親しくしてる他人っていうと

あいつ以外にはいないね。一緒にいて苦痛にならないからっていうのが一番の理由かも。」

「それってなんか…長年連れ添った夫婦の域じゃない？」

「ああ…彼氏よりもそっちのがまだしっくりくるのかもしれないなあ。」

和のその言葉に、クラスメイト達は遙に同情を禁じ得なかった。確かにあれだけ粘着質につきまとわれては、和のような性格ならば嫌気もさすであろう。

しかしあそこまで愛されていて、彼の心をはなから疑い本気ともとらない和にだって

多少責任はあるのではないか、と思う。

しかし幾ら自分達がそれを言ったとて、彼女が真から和泉遥という存在を認めない事には
なにも始まらない。

そう、学園のアイドルは、

この地味な少女と同じ舞台にすら立たせてもらえていないのが現状なのだ。

今や完全に遥の味方になっている2年3組は、一心同体とも言える盛大なため息を吐く。

クラス中の空気が、一気に重くなった瞬間であった。

そんなことには一切の興味がないように、和は携帯電話をみつめていた。

『こちらに接触する素振りは一切無し…うん、まあ想像通りだね。』

今回の企みのきっかけは、梓の言葉だった。

携帯電話。

もはやこの日本に住んでいて持っていない者のほうが少ない中で、

和は当然のように自身には必要なものと捨て置いていた。

しかしここにきて、あるひとつの方向性がみえた。

和泉遥の動向を知る上で必要不可欠なもの。

また、

自分に男の影を匂わせる上で重要なもの……。

前々から、広末は当たり前のように自分に寄り添う存在で、正直な所いさら愛だ恋だの感情が芽生えるとはとうてい思えない。しかし今回の勝負において、彼以上にその役がこなせる人間はいなかったし

そもそも頼める人間自体、彼をおいて他には存在しなかった。

正直、追い詰められていると言っても良かった。

すぐに飽きるだろうと思っていた遥のつきまといは、もう二ヶ月は経過しようとしている。

ひよっとしたら夏休みをはさんでぱったりと飽きるかもしれないと一時思ったが、

万が一休み中に家をつきとめられあらゆる手段でつきまとわれたらと考えたとき

あまりにもありえる範囲内すぎて自身の結論にため息をついたものだ。

それだけは、なんとしても避けたかった。

長期休暇は学生時代の特権であり、それを許される間は自分の為にこそ使うべきであろう。

それを他人が侵害するなど、たえがたい苦痛だ。

それならば、決着をつけてしまえばいい。

目前に迫る夏休みを前に、これ以上にも講じず手をこまねいているのは嫌だった。

これは真剣勝負なのだ。かつての自分を取り戻すための、大勝負。それならばどんな汚い手でも使おうではないか。

広末の存在を最大限利用して、彼が傷つくタイミングを計算し尽く

して、

まるで広未に恋しているかのようにふるまって、

……彼がただ自分から去るのを待つように仕向けたって。

もう、罪悪感に心を痛めるのはやめよう。

だってここまでのことをさせたのは彼自身。他でもない、あの男自身。

和は自身の心に何度も何度も言い聞かせるように繰り返した。

『でもまだ……まだわからない。』

これでもう自分に近付かなくなるのならば、それでいい。

けれどももしそうではないとすれば……あともう一押し、必要だ。

もはや冷え切っているともいえるような瞳で、和は携帯電話をにぎりしめていた。

「……どうやって、私のアドレス調べたの？」

広未が学校をおとずれて、二日後のことだった。

和の携帯電話に、見知らぬ人物からメールが送られてきたのだ。

『昼休み、屋上にて待つ。』

その短い一文を読んだとき、和はすぐにそれが目の前の男だと把握した。

今真つ向から、その男を和は睨みつけている。

「つまんないなあ、全然驚いてない顔。」

「…和泉君だったらこんな文面で呼び出さないでしょう。」

ため息をついてそうこたえれば、浩平が、それもそうか、と肩をすくめた。

しかし、このアドレスが知られてしまったのはどういった経緯からなのだろう。

梓には今回の計画の全容は、実はなにも話してはいない。

ただ、しばらく自分のやることを傍観してほしい、とだけ告げていた。

梓はなにも言わずにそれを了承し、遥の動向を知らせてくれるようにさえなったのだ。

もしも、目の前にいるこの男が、梓絡みでこの連絡先を入手したとするならば。

なにも勘付いてないほうがおかしい。

ひょっとしたら広未との茶番も、すべてわかっているのかもしれない。

まあ、少ない可能性にすぎっても仕方が無いのだろう。

正直ばれていないというほうが奇跡に近い。この男の性格を考えるのならば。

「親しくしてる女の子がね、どっかからアドレス流してくれたの。」

「まあ、入手ルートは極秘だと言って教えてくんなかったけどね。」

「なんとも微妙な答えに、これはどちらなのだろうと考える。」

「ずいぶん物騒だね、宮田君のまわりにいる女の子は。」

「遥のとりまきよりはマシじゃないかなあ？…ま、そんなことはいいじゃない。」

人のアドレスを勝手に調べることはそんなことどころではなく大問題だが

確かに今ここでそれを押し問答する気はない。時間はあくまでも有限なのだ。

「和ちゃんは、広末クンを選ぶの？」

「…言ってる意味がわからないよ。」

「またまた。遥のことがあって、どうせなら他に地味な彼氏作ったほうがマシとでも

思ったんじゃない？それであきらめてくれるならってさ。」

完璧とまではいかないが、ほぼ正解だ。わざとなのか知らずに話しているのか。

浩平もやはりその表情から真意を読み解くには難しい男だ。

「それで好きでもないのに広未と恋人になるって？」

「…いくらなんでもそんなことしないよ。」

「好きじゃないの？昨日の様子じゃずいぶん親しくみえたけど。」

「それはだから、ずっといっしょだから…兄妹みたいなもので」

「血がつながってなきゃただの男と女でしょう？」

「そっという雰囲気になったこと一回もないの？」

「……………」

その問いにたいして無言になった和をみて、浩平のこめかみがぴくりと動いた。

「…だったら可能性はあるじゃん。しかもどつちかというの高い。」「私、肯定なんてしてないよ。」「

「こつというときの無言はね、肯定してるのと同じなんだよ、笹森チヤン。」「

その言葉にあからさまに眉間に皺を寄せた和は、次にははあ、とため息をついた。

一体全体、一日に何回自分はため息をつくという行為をしているのだろう。

もしも本当にこれで幸せが逃げるといのであれば、この先の人生はお先真っ暗だ。

「16年一緒にいて…ちょっと、おかしいな、って思うようになったのは

ごく最近のことなの。それでちょっと私も戸惑ってはいるけど…だからってそれでどうこうなるとも思えない。私の気のせいかもしれないし。」「

「最近？え、ずっとそんな雰囲気になることもなかったのになってこと?」「

「そう…でも、やっぱり気のせいだと思う。」「

「そう思いたいだけなんじゃない?」「

浩平に鋭くつつこまれて、和はどきりとする。

射竦められるような視線を向けられれば、なんでも話してしまいたい気分させられてしまう。

「…和泉君のね、話題を出すとなんか不機嫌になるんだよ。広未って口は悪いけど滅多に怒らないからどうしたのかと意外でもあくまでもそれだけだよ。なんかそういうときは居心地の悪さを感じるというか。」

和のその言葉に、浩平はひとつ考える仕草をみせれば、得心したようにうなずいた。

「今まで笹森チャンで男の影とかまつたくなかったタイプ？」

「ああ、まあ…小学校時代は普通に友人もいたけど、中学入ってからは

男どころか女の影もなかったくらいだから。」

「ってことは…え、なに、あいつ…墓穴で自滅…？うっわー……。」

浩平のその言葉には気付かなかったようで、和はそのまま先を続ける。

「最初はまあ、別に気にならなかったんだけど、ああも和泉君のことではっかり広未が反応するもんだからちょっと気になって。」

電話を持つようにしつこく言うようになったのもそれがきっかけだったように思うし。」

「え！じゃあ広未クンに言われてケータイ持つようになったの？」

「うーん、まあ家族にも言われてたし…広未とはしょっちゅう一緒にいるから

約束するのとか、お互いの家に忘れ物したときとか連絡すぐとれる手段は前々から

あったほうがいいかなあ、とは思ってたから…まあいいかなって。」

和のその数々の爆弾発言に、浩平が右手で顔を覆った。それからその手を外して和のほうに向き直れば、真剣な瞳をして和を見据えた。

「笹森チャン。…もしも、広末クンと付き合うことになったら、早いうちに遙に止め刺してやって。」

「だからそれはないって…」

「だからもしもの話。遙の親友として、お願いしてる。」

その真剣な表情に、和の心はずきりと痛む。

「……わかった。」

そう一言告げて、話も終わったようなので、和は静かにその場をあとにした。

閉まる扉をみつめれば、浩平は盛大にため息をついた。

「こりゃあ、失恋決定かなあ…あいつにとつたら初恋かもしれないなかつたのにねえ。」

初恋は実らないって本当かもなあ、と誰にきかせるでもなく浩平は呟いた。

屋上からの階段を下りながら、和は沈痛な面持ちで教室へと向かっていた。

ぼんやりとメール画面を開けば、遙がこちらに向かっているという報告はない。

このまま、思い通りに進んでくれれば良い。

浩平の純粋な遙を思う友情さえも駒のひとつにしてしまったという
事実、

いつか罪悪感でどうにかなってしまいそうだと自身のごぶしを強く
握った。

どうか、計画通りにいきますように。

祈りにも似たその言葉は、果たして誰かの心へ届くのだろうか。

夕方もとうに過ぎた頃、自分の家とは違う一軒家の前に和は立って
いた。

呼び鈴を鳴らすこともなく、

和は勝って知ったる他人の家よろしく、玄関のドアを開けた。

ちょうど廊下を歩いていたらその家の住人が、和に気付いて歩み寄っ
た。

それに笑顔で和がこたえる。

「おばさん、こんばんは。」

「あら、和ちゃん！あの子部屋にいるから勝手にあがっていいわよ
」。

夕飯食べていくでしょう？」

「いいの？だったら手伝うよー。」

「いいのよ、あの子に用事なんでしょう？じゃあ、後片付けをお願い
いしちゃおっかなあ。」

いたずらっ子のように広未の母が微笑むので、和は笑ってうなずいた。

昔からお互いの家を当たり前のように行き来しているので、

和の家でも広未の扱いはこのようなものだ。

これだけ長く他人との信頼関係が続けていられるのも、ひとえに広未が自分に酷似している性格ゆえだろう。

もしも広未のような他人が他に存在するのならば、その人間と親しくなるのはなんら苦ではない。

むしろそれを望んでしまいかもしれないと、和は思った。

二階に広がるドアのひとつをノックすれば、中からどうぞ、という声がかかる。

和はためらうことなく部屋の中へと入り込んだ。

「広未。」

ベッドで本を開いていた部屋の主は、

上半身だけ起こして和に視線を合わせた。

「今日はちよつと遅かったな。…夕飯食ってくのか？」

「うん、おばさんがそう言ってくれたから。」

「帰り送るの面倒臭いな。」

「別にどうってことない距離なんだけどねえー…おばさんもおじさんもつるさいもんな。」

泊まっていいのうか？」

「なんも用意してないだろ？早めに起きるのそれこそ面倒だろうが。いいよ、送るから。」

「いやーもうちょっと早くに来ようと思ったんだけどさー…本屋でつかまって。」

あつはつはと笑う和の頭を広未はぽかん、と叩いた。

「予想範囲内だから別にいい。…どう？順調？」

その言葉に和は少々の苦笑いをしつつもうなずいた。

「怖いくらいね…まあ、このまま何事もなく決着がついてくれればいいんだけど。」

ベッドから下半身だけおろして座った広未の隣に、和は腰を下ろした。

ぴたりと寄り添いあう二人は、どこからどうみても恋人同士にしかみえない。

遙がこれを見れば卒倒してしまいそうなほど、良い雰囲気にもみえた。

「その割りにずいぶん浮かない顔だな。今更、罪悪感でいっぱいになった？」

「…わかってるなら疑問系で話すのやめてくんない？」

のぞきこんで広未がそう言えば、その顔にむかって和は睨みつけた。

「まあ、向こうが本気だとするならば、こんな非道なやりようはないだろうね。」

その言葉に、和がびくりと体を固くする。

和の反応をみて、広未が少し意外そうに瞳を動かした。

「……………本気、のはずがないと、思うんだけどなあ。」
「その様子だと、前ほどそう言い切れなくなったか？」
「うーん…なんか、うん、そうなのかも。だってあれだけ傷ついたら顔されたら。」
でもそれも演技なのかな？とは今も考えちゃうんだけど。」
「…俺が言うせりふじゃないが、同情を禁じ得ないな。」
「本当に広未が言えることじゃないと思う。巻き込んだの私だけだよ…。」

ふう、とひとつ息をもらす和の横顔を、広未はみつめつつ考える。

出会った瞬間に彼は真剣なのだろうと充分に感じとった。

和泉遥がどういった経緯で和を好きになったのかはわからないが、本気なのはまず間違いないのだろう。

しかし恋慕する当の本人にその気持ちを感じてもらえないというのはどれほどの痛みだろうか。

同じ男として、和泉遥に同情したくもあつたが、

この目の前の女の子が自分にとって大切な存在であることは変わらない。

だからこそ今回の計画にも協力したし、結果それで遥が引くならばそれもかまわないと思つた。

和のような女性を相手にするのならば、ちょっとやそつでは響かない

強靱な精神力がどうしたって必要なのだ。

同情はする。するからこそ、もしも無理ならば傷は浅いほうがいいだろう。

けれどももひよっとすると。

広未が一番に望んでいる結末に、ともすれば転んでくれるのかもしれない。
目の前の迷いを感じ始めた少女の頭を撫でながら、広未は慈しむように微笑んだ。

あの日から、何事も接触がないままとうとう終業式の日を迎えた。
明日から夏休みということもあり、学校中が浮き足立っている。
和はいええそんな空気に反比例するかのように、重たい表情で自身の机をみつめていた。

結局、勝ったか負けたかわからないなんと宙ぶらりんな状態のままこの日を迎えてしまった。

梓には顛末を報告したほうがいいだろうかと思悩む。

けれども決着がついてから、と考えていた和は、それをためらっていた。

しかし待っていてくれと言ったからには話しておかなくてはならぬだろう。

いくら結論が出ていないと言ってもほぼ自分の勝ちは決定したようなものだし

梓に話せば秘密が一角崩れはするものの、おそらくは大丈夫だろうと思えた。

梓が愚鈍な人間ではないからである。

そう結論付ければ、よし、と和は携帯電話を開いた。
とそのとき。

メールの着信を知らせる振動が掌に伝わって、驚いた和は思わず電
話を落としてしまった。

ごん、という鈍い音を立てて、電話は手から机へと落下した。

メールは、浩平からだった。

本文はいつかを彷彿とさせるような内容だった。

『放課後、屋上で待つてる。』

しかしこの呼び出し人がおそらく浩平ではないことを
和はどこかで予感する。

了承のメールを送ると、和は先程までまどっていた空気を一掃した。

さあ、決着といこうじゃないか。

歪な形で口角をあげれば、それを目撃したクラスメイトの何人かが
真っ青な顔をしていた。

……失礼な。

もう何度目だろう、ここをおとずれるのは。

もしかしたらここに足を運んだことがある女子は、自分ひとりなのかもしれない。

そんなことを考えた自分を、次の瞬間には自嘲する。

『くだらない』

そう思い至って、和はまっすぐに前を向いて屋上への扉を開いた。

いつかのように太陽を背にして立つ男は、やはり美しく光り輝いていた。

どうしたってこのきらきらとした世界に自分の居場所を見出すことはできない。

早く終わらせた。それが今心からの望みであった。

「……和、久しぶりだね。」

にっこりと微笑んだその顔は、複雑そうな色をしていた。

それは自分にむけてなのか、それとも遥自身にむけてなのかはわからない。

けれども彼は色々な思いを背負って、今ここに立っているのだということを理解した。

「ここ数週間は、本当に楽しかったですよ。」

あなたがいない日常がこうも穏やかだったとはね。忘れてしまおうところでした。」

皮肉ってそう言ってやれば、眉間に皺を寄せながら遥が一步步近づいてくる。

「やめてくれないか、その言葉遣い。知り合う前に戻ったつもりはないよ。」

「あれ？もう飽きたから全部終わらせてくれるんじゃないんですか？」

「……そんなこと一言も言ってないけど。」

「どっちにしろ、無駄なことです。あなたとは付き合えない。いかなる関係も築けない。」

その和の言葉に、遙は近づくその歩をぴたりと止めた。

「そんなに…広未って男が好きなの？二人が進展するきっかけを作っちゃったなんて

本当、皮肉以外のなにでもないよね。」

吐き捨てるかのように遙が言えば、和はそれに首を振る。

「広未がいてもいなくても、あなたとどうこうなる未来はないんです。

いいかげん、あなただってわかってるはずでしょう？」

それにそう…たとえばどちらか選べと言われたら間違いなく私は広未を選びます。」

その和の言葉に、今までにないような傷付いた表情を遙がみせる。それにはさすがの和も心臓が止まってしまいそうになるくらい痛んだ。

直視したくない。あまりにもまっすぐにそんな表情をされては。

けれどもこれは己の罰だと、和は真っ向からその顔を受け止める。

「そんなに…俺が嫌い？俺が疎ましい？もう、全部くれなんて言わ

ない…

和のその時間の中に、俺をほんの少し入れてくれるだけでいいんだ。俺は、和がくれなくなったら、俺の全部を和にもらってほしい。」

止めていた歩みを再開させ、ついに遙は和のすぐ目の前に立った。両手をのばし、和の顔を包みこめば、苦しそうなせつなそうな瞳で和をみつめる。

「和…好きなんだ。今すぐじゃなくてもいい。」

まだ付き合ってくれとは言わないから…俺と友達になってほしい。」

すぐるような瞳をむけられれば、イエスと答えてしまいそうになる自分を叱咤する。

ここでそんなことを言えば、自分だけではなく遥まで傷付けることになる。

いちばん残酷なのは、期待をもたせておいてそれを裏切ることだ。

「……………」ごめんなさい。」

静かにまっすぐに遙をみつめて、和がはっきりとした口調で断りの言葉を告げた。

遙の瞳が揺れる。

これで、おしまい。

もう、全部終わるんだ。

それを確信した次の瞬間、予想外の衝撃が和の体を襲った。

今、和の体は、

遥のその腕によってすっぽりと隙間無く抱きしめられていた。まるで離さないといわれているかのようだった。

なにが起きたか理解するのに、数秒の時間を要した。

それを理解したところで、和はどうしたらいいのかわからなかった。

先程まで和の勝利によって幕切れしようとしていた勝負の行方は、今まったく違う形を成して、そこにあらわれようとしていた。

いつそう強い力で遥が和を抱きしめれば、もうその行方は和にも他の誰にもわからなかった。

第十一話「本当の策士」

どれ程の時間、抱きしめられていたのだろう。

それは数秒なのかもしれないし、数分なのかもしれない。

けれども和には永遠とも感じられるほどの時間であり

いいかげんお互いに無言でいるこの状況にむずがゆいものを覚えていた。

「あ、の…ちょっと、離してくれない？」

「…やだ。」

駄々っ子のような口調で言われてしまい、和は半ば途方に暮れた。

いつかのように全体重をかけて足をふんでみても、

体全体を使って暴れてみても、遥は一向に和を離してはくれなかった。

「ねえ！和泉君！！いつまでこんなことしてんの！！いいかげんにしてよ！！」

「……さっきのお願いを和がきいてくれたら離す。」

「だからそれは無理だって言ったでしょう！！」

「じゃあ離さない。ずうっと一生離さない。」

オイオイ、餓死でもする気がよ。

うんざりしながらもこれはもう根気比べだと感じた和は

ここでイエスとうなずくわけにはいかないと自分に強く言い聞かせた。

「こんなことされたって、私は絶対に承諾しないよ。」

「…現時点で俺が彼に勝つ要素なんていっこともないだろうってわか

ってる。」

「? なんかの話」黙ってきいて。」

間髪いれずにそうつつこまれたので、和はおとなしく口をつぐんだ。

「でも、でもさ、和はずるいよ。だって俺のこと対象外ってそればかり。」

せめて俺も広末と同じ土俵で勝負させてくれたっていいじゃないか。」

「…もうちょっとわかりやすく。」

その和のまったくさっぱりわかりませんという言葉に、遥は和の肩に顔を埋めて盛大なため息をついた。

「どうしてこういうときだけ…本当に察知能力のバランスが悪すぎる!」

「いや、それ広末にも時々言われるんだけどそんなに? ごめんて。」

「また…本当に和は彼のが好きなんだ。」

「そりゃまあ…好きじゃなきゃ16年もいつしよにいないし。」

「…いい。とりあえずその話は今はしないで。さっきの言葉ね…」

「?... ああ土俵がどうって。どういう意味?」

肩から顔をあげて、遥は和をみつめる。

久しぶりの至近距离に、自分でしておきながら心臓が早鐘を打つ。

「和…可愛い…世界一可愛い………」

「……その眩きはさっきの言葉と全くもって関係がないよね?」

ぼうつとしつつ潤んだ熱っぽい表情でそう言われても、

和はときめくどころか眉間にただただ皺を寄せるばかりだ。

「だから、そういう察しだけはね…まあいいや、今は俺が悪かったね。」

そう、和はさ、なにかっていうとすぐ人種がどうのって言うじゃない？」

「だってしょうがないじゃん、本当のことだし。住む世界が違うんだから。」

「ほらそれ。そうやって、俺のこと蚊帳の外みたいに追い払っちゃう。」

確かに和にとつたらそうなのかもしれないけど、裏を返せば俺だってそうだよ？

和のいる世界に足を踏み入れるのはいつだって勇気がいる行為だ。」

その言葉に、和は初めて気が付いたように目を見開いた。

「君の静謐な空間を愛するその心が好きだから、出来るならばそれを壊すことなく

みつめていたいって思う。でもそうしたら君は俺なんか無視していつだってどこかに行ってしまうから。」

だからこそ、俺は和と同じ場所に立って同じものをみつめたいと思つた。

そして和にもほんの少しでいいからこちらに歩み寄ってほしいとも感じてる。

お互いに、そういうものをとっぱらって、一個人の人間として付き合っていけるように。」

「…告白の時にも、似たようなことをそういえば言ってたね。」

「そうだね、俺自身をみてほしいって言ったよね。でもそれは中身に限った話じゃない。」

見た目もそうだし、今まで身を置いてきた環境そのものの話だ。

俺は和が好きだから、和の傍に寄るのは苦痛じゃない。でも和は

そうじゃないってわかってる。

だから、ほんの少しでいいんだ。理解しなくてもいいから、違うものだけでも、

いっしょにここにいる存在だっていうのを、認めてほしい。」

同じだけど、違う。

違うけれど、同じ。

その一見すると矛盾しているかのような言葉は、
和の心深くに突き刺さる。

「俺を無視しないで。せめて、その目線に俺を置いて、対象外なんて意地悪言わないで。

そうやって過ごしたとき、それでも和が俺を好きになれないっていうのならあきらめるから。

でもそうしてくれない内は、どんなに嫌われたってつきまとうのをやめたりなんかしてあげない。

俺はそこまで紳士でもなければお人よしでもないんだよ。」

遙のその宣言を最後に、屋上には深い沈黙がおとずれた。

それを疑問に思った遙は、先程からずっと閉じ込めていたその体を解放し、

かがんで和の顔をおそるおそるのぞきこんだ。

「和………?」

うつむいてしまったその顔は、表情を読み取ることができない。

注意してみればその体は小刻みに震えていた。

これは一体どういうことなのか。首を傾げてその体にゆっくりと触れようとしたそのとき。

「広未い!!!?なにしてんの、他校生のくせに!!!」

遙が浩平の名を叫んだとき、和がそれに反応して振り向けば見知った顔がみてとれて、思わず指差し先程の怒りを忘れて叫んでいた。

「人に指をさすな行儀が悪い。」

「あんたは私の兄ちゃんか!ってんなこと今はどうでもいい。」

眉間に皺を寄せ広未がそうつつこむので、和は思わず切りかえた。

「…なにやってんの?」

「賭けの行方を当事者が見物しないわけにもゆくまい?」

そうにやりと広未が笑めば、和は心底呆れた顔で広未をみつめた。遙だけが展開についていくことができずに呆然としている。

「私が結果を改ざんするでも思ったの?」

「可能性は充分にあるだろうと感じたから、ここまで来たに過ぎない。」

まあ、ほとんど野次馬根性だけだな。」

「終業式、まさかサボったんじゃないでしょうね。」

「そんなことするわけないだろう。謎の頭痛に見舞われたので皆より早く下校させていただいたんだ。」

「仮病つかってまで出歯亀ってどういうことだよ…!!」

ありえない、と呟きつつ和が広未を見やる。その視線を心底楽しそうに広未が受け止めている。

「…あのさ、さすがに全然わかんないんだけど。どういふこと?」

一人置き去りにされたのが気に食わないのだろう。
不快指数100%といった風情で遙が話を中断させた。

「…和。」

遙の言葉に広末がうながせば、和は観念したかのようにため息をついた。

「まあ…もしかしたらなんとなく察しはついたかもしれないけど、今までのこと、ぜんぶ、嘘なの。でっちあげ。お芝居。」

「…それはつまり？」

「広末は…確かに幼馴染ではあるんだけど……。」

どう説明したもののか、と困り顔で和が広末をみれば仕方がないというように

息を吐いて広末は和の隣に立った。

その阿吽ともとれる呼吸の良さに、自然と遙の眉間に皺が寄る。

「和も口にはしているとは思うが、彼女と俺は本当に兄妹みたいな存在なんだ。」

正直、大切な存在であることは認めるけれどこれを異性としてみるのは無理がある。

未だにお互いひとつのベッドで寝れる仲だしね。」

その広末の言葉に遙のみならず浩平までもが驚愕する。

「和の隣で！？それでなんの気も起きないっていうのー!?!？」

「まあ、そうだね。和泉君にしたら考えられないかもしれないが…こればかりは理解できずとも飲み込んでもらうしかないんだろう」

な。」

肩をすくめて広未が言えば、和がそれにならずく。

「そうだねえ…あのね、和泉君。私と広未ってそれこそ双子みたいに行動パターンが
そっくりなの。お互いの考えてることほぼわかつちやうっていうか。そんなのと恋愛関係になるの、気持ち悪いと思わない？」

しかも兄妹同然に育ってるんだもの、どうあつたつて間違いなんて起こるわけないよ。

広未は私の半身みたいなもの。自分の半身に恋愛はできないでしょう？」

ナルシストでもあるまいし。」

和のその言葉に、確かに理解するには難しいがある種の安心感は覚えた。

どうやら彼らのあいだには、自分には理解できない種類の絆が結ばれているようだ。

「でも、少しくらい嫉妬しちゃうのは許してもらってもいいよね？」

につこりと遙が微笑むと、

和の腕をひっぱって自身の腕の中にすっぽりと収めてしまう。

それをみて複雑そうに広未が微笑んだ。

「なんとというかさつきから…家族のラブシーンを目撃してしまったような気分だ。」

「ああ、それ最高に嫌だね…。」

同情するかのように広未の肩を浩平がぼんぼんと軽く叩いた。

「まあ、つまりは…お互いにそういう関係には成り得ないけれども友達以上恋人未満であるかのようにふるまってたってことなんだよね？」

俺を和からひかせるために。」

「まあ、平たく言えばそういうこと。悪かったね、和泉君。」

和が本当に困っていたから、つい力を貸してしまったけど。」

「じゃあ、浩平が言ってたエピソードも全部和の嘘だったんだ？俺の話したら広未が怒って、とかいうやつ。」

後ろから抱きかかえている和の顔を、遥は上から見下ろしつつ問いかける。

「えへへー、そうです。」

てへつと笑いながらそう答える和に、どうしてくれようかこの娘は！という

愛憎混じる複雑な思いを遥は感じていた。

しかしおどけて笑う和も可愛い。なんだかその表情だけで許してしまいそうな自分がいて

いいかげん恋に狂う自分が馬鹿すぎると自嘲した。

「しかしすっかりだまされた。笹森ちゃん、女優の才能あるんじゃない？」

「ごめんね、宮田君…とにかく信じさせるためには外堀からじわじわと埋めていこうと

必死だったから…。」

申し訳なさそうなその顔とは裏腹に、とんでもないことを言っている和を見て、

絶対に敵にまわすことはやめようと心の中で誓った浩平だった。

「しかしその為に電話まで新調するなんて…そんなに俺は邪魔だった？」

「あーもう、傷付くなあ……。」

「そう落ち込むこともない。和にとって君の存在はそれ程大きなものになっていったって事だよ。」

「ひ、広未!!」

広未の言葉に腕の中にいた和が暴れだして騒ぐので、遙はにっこりと微笑んだ。

「和？チューしちゃうよ？それもすっごい濃厚なやつ。もちろん唇に。」

その言葉に、こいつは必ずやる！と感じた和は、うってかわってぴたりと固まった。

そのやりとりをみて広未はぶつとふきだした。

「そんな黙らせ方があったとは。…さすがに俺にはできないな。

遙君、君ももう充分わかかってると思うけれど、こいつは人一倍他人に興味を持たない。

クラスメイトなんてそこらへんの道端に転がってる石ころと同じようなものだ。

でも最近、君の存在によってそういう態度でいることが難しくなってきた。」

「俺の存在…？」

「そう、君によって和の人間関係はほんの少し開かれました。」

それは和にとって本意ではないのかもしれないが、きっとそう悪いものとも感じていないだろう。

そんな心境に戸惑い、その原因となった君をなんとか排除しようと和は躍起になった。

こんな労力を要する行為、余程和の中で存在が大きくない限りやるはずがない。」

「それって…」

「和、賭けは俺の勝ちだな？」

遥の言葉をさえぎって広未が和にそう告げれば、和は渋々ながらうなずいた。

「…でも、どうしてここにいるの？まあ察しはつくけどさあ…

いつから宮田君と広未は協力関係にあったわけ？」

和がぎろりと二人を睨みつければ、そういえばその件について問い詰めるのを忘れていた、と

遥は思い出した。

「あの日からだ。ほら、和が夕飯を食べて帰った日があっただろう？そのときの様子が気になって悪いと思いつつも電話を盗み見したんだ。」

「それで俺のところにも広未から連絡が行って、事情を全部知った俺が今日のことを広未に流したってわけ。」

悪いと思いつつ…って、つまりはメールを勝手にのぞいたということではないか。

「…アンタはどこぞの嫉妬深い女子か。浮気を疑い彼氏のケータイ盗み見する女子か！」

「これだけの茶番に協力したんだ、そう怒るな。二度とやらない、主義に反する。」

そのとき、和を拘束していた腕がますます締め付けられたのを感じて、

和は遙の顔を振り仰いだ。

「…本当にふたりは仲が良いんだね。ふたりっきりのときって何してるの？」

遙の低い声音を気にすることもなく、和はあっけらかんとこたえた。

「読書。会話らしい会話ってあんましない。」

「…え、同じ空間にいるの？」

「同じ空間にいたら寄り添ってなきゃだめなの？会話しなきゃだめ？…面倒臭くない？」

そのとき、やっと遙は目の前の男が長年和の隣にいることを許されたその意味を理解した。

しかし次の瞬間、自分にはとうてい出来そうも無いことを痛感する。同じ空間にふたりきり、それでなにもせずただひたすら本を読むだなんて。

ある種の拷問だ。

「まあ、そこは君の努力次第だ。頑張ってくれ。」

「現時点でも尻に敷かれ気味なのに、どうにかなるのかねえ…？」

にやにやと嫌な笑いをする二人を軽く睨みつければ、そういえば、と気になっていたことを遙は質問した。

「さっき言ってた広未君と和の間で行われた賭けってどんな内容なの？」

「ああ、それ。和がこれから話してくれるよ。じゃあ、俺は帰るか
ら。」

「あ、俺も。校門まで案内するよ、広未。」

「ああ、ありがとう。」

ぽかんとした顔をして和はそれをながめていたが、あわててふたりを呼び止める。

「ちょ、ちょっと！この状況下で置いていかないでよ！！！」

「和、落とし前は自分でつけろ、わかってるだろう？」

「ぐっ……！！！」

有無を言わさぬその広未の言葉に、和は黙り込む。

とうとう引き止めることも、この腕から脱出することもかなわぬままに、

誰にも邪魔されることのない空間に獣のような男と二人きりにされてしまった。

「……で、賭けの内容って？」

「うっー……言わなきゃだめえ？」

心底困り果てたという顔をして、間延びしたその声で和が遙を見上げれば、

心臓の真ん中を撃ち抜かれたかのような衝撃を遙は感じた。

『 かつ可愛い……！！！！ 』

阿呆か、とつつこみたくなるような心境を誰にも知られることなく、遙は冷静になるようにと心にある種のスイッチを入れた。

「教えてくれるなら、今回のことはなかったことにする。」

「え、本当に!？」

「教えてくれないなら、そうだなあ…夏休み中、俺の部屋に和を軟禁しちゃおうかな。」

「なななななな軟禁!？」

「監禁のが良かった？」

監禁、それは強制的にある一定期間、一定の場所に閉じ込められること。

軟禁、それはある程度の自由はあるものの一定の空間に一定の期間閉じ込められること。

…とりあえずどっちも嫌だ。

「話します。」

ずばっとびしっと即答すれば、満足気によろしい、という声が上がらふってくる。

遙は腕の拘束を解くと、和の肩をつかみ向き合う形にして遙の前に和を立たせた。

ふたりの視線がぶつかり合えば、緊張した面持ちで和の喉がごくりと鳴った。

「あのー、なんというか。協力するにあたって広未が条件があるって言うって。」

「うん。それが例の賭けなんだね。」

深呼吸をし、意を決した和は、閉じていた目を開いて、もう一度遙をみた。

「その条件が…和泉君が、私と広末が恋人になってもそういう関係になりそうであつてもあきらめない
つて食い下がったら、…」

「和？続き言つて？」

「たら…今回の全容を全部きちんと話して、和泉君を一個人としてみるように、つて…。」

「……それつて、さっき俺が言ったことそのまんま？」

「…あと、もういつこ。」

「まだまるの？」

「……和泉君の私に対する気持ちを、今後一切疑うな。
その上でこの先、好きか嫌いか判断しろつて……。」

戸惑うように和がおずおずと口にしたそれに、遙は心底驚いた。

そうしてずっと敵対心を覚えるように心の中で罵倒していた相手にしてやられた気分であり、

次には心底感謝の気持ちでいっぱいになった。

「和……。」

「はい？」

「賭けは、広末君が勝つたんだよね？」

「…うん。」

「守つてね？」

「う……。」

「和？」

「わかつてるけど…でも…だつてー……。」

言いたいけど口にしてしまつていいものが、

そんな表情を和がするので、遙はふつと笑つて和の顔を両手で包み込んだ。

和の顔をのぞきこみ、溶けるような優しい声で話しかける。

「和。言って？なんでもきくから。」

「……………和泉君はさあ。」

「うん？」

「私なんかのどこが好きなの？」

「……………。」

その言葉に、遙がびしっと固まるので、和は心底驚いた。

なにかマズイことを訊いてしまったのだろうか。

「あ、の、話したくないならいい……………」

「和……………」

「う、うん？」

「ひょっとして、俺の気持ち疑ってたのってどうして和のことを俺が好きだかわからないからだったの？」

「へっ！？うん、そうだよ？」

「ええええええー…：だったらなんでもっと早くきいてくれないかなあ……………」

俺はまたてつきり……………」

「てつきり？」

「……………理由がわかれば、信じてくれるんだね。」

『おおっと、急カーブもいいとこな逸らしよう。なるほど、他に理由があると思ってたんだね！』

遙のその態度に、和は一瞬、思索する。

まあ、ある程度の予想はつくが。

追求されたくない、ということは、彼にとって良くない。

ひいては私にきかれたくない類の内容ということだろう。遥が自分につきまともってからは、色々な情報が自分の元に集まってくるようになった。

おそらく遥が隠したいのは、自身の女性関係のことなのだろう。まあ確かに、具体的に知らずにモテるから入れ食い状態なんだろうな」と

漠然と感じると、
事実で持ってそれを知ったあとにああやっぱりね」と感じるのでは
なんというか色々と感覚が違ってくるものだ。

もしも自分のを本気で彼女にしたいと思ってくれているのならば、
そんな付き合ったそばから浮気の心配をせねばならないような事実
関係は
隠蔽したくてしようがないことだろう。

「……和。」

呼びかけられはっと思考を呼び起こせば、
心底うるたえた顔をして遥が和をみつめていた。

「まあまあ、高校生男子なんてそういうことがやりたくなるお年頃
でしょうよ。」

「…やっぱり、知ってるんだね…。」

特大のため息をついた遥をみて、和は小さくふきだした。

「まあ現時点で和泉君とどうこうなる気はないんだからさ、
それを知ってる所で別にマイナス要素にもならないよ？
浮気とかそういうのも、揉め事に巻き込まれるのは面倒な事この上
ないけどさ。」

和の言葉にはじかれたようにあわてて遙はまくしたてた。

「確かにちよっと前まではそういうことにだらしがなかったかもしれないけど！

二股とかはしたことはないんだよ！？その期間が短かったり、遊びだっただけで

それは向こうも納得付くだったし…それに和と付き合えたら浮気なんてしないよ！

今だって和しか目に入らないのに、できるはずがないじゃないか！
！」

焦って言われれば、余計疑わしいだけなのだが、しかしこのままでは話が先に進まない。

この取り乱した様子の遙をどうしたものかと考えて、ふむ、と小さくうなずいた。

次の瞬間には、なだめるように和は遙の頭をなでた。

「…な、ぎ………？」

その行為が信じられなかったらしく、遙は身を強張らせた。

「落ち着いた？じゃあ続き話してくれる？」

そうして頭からその手を外そうと和が動けば、

遙はがしつとその手を制止した。

「……和がずつとなでてくれたら話す。」

「いやでも、腕がちよっと疲れる……」

「じゃあ座る。座って？」

ぐいつと強引に和を座らせて、自身も向かい合って和の前に腰を下ろす。

その行動がなんだかひとなつこい大型犬のようで、和はふっとふきだした。

言われた通り、手は遥の頭をなでたままだ。

「気持ちいい…。」

「そんなになの？…ちょっと大丈夫？寝ないでよ？」

「寝たりなんかしないよ、もったいない。…えーとなんだっけ？」

「『どうして私なんかがいいの？』」

「ああ、そうだったね…うーん、そんな大げさな話でもないし、和が納得してくれるかはわからないけど。」

そうまっすぐに和をみつめながら、遥はゆっくりと続きを話し出した。

校門前まで二人並んで歩いていた広未と浩平は、結局駅までの道を共にすることになった。

「ねー、本当のところさ、広未って和のことどう思ってるの？」

「…いや本当もなにも、本当にあれが包み隠す事のない事実なんだって。」

浩平に詰め寄られても、広未は真実、和のことをそういった対象に置いた事がないので

そうとしか答えられない。

苦笑混じりのその言葉に、浩平ははまだ納得していないようだ。

「男女間での友情なんて成立するとも思えないけど…。」

「友情じゃない。言ったる？あれは俺の半身だ。」

「わかるような、わからないような…じゃあ過剰なまでのおせっかいはなんで？」

「…他人をずっと避けて生きているのは、見ていて危ないなと思ってたから。」

今回の事が和にとっていいきっかけになればと思ったんだ。

恋愛だつてひとつの人間関係だからな。どうなつても良い経験になるだろう。」

「じゃあ今回つて広末のひとり勝ちみたいなもん？やるなあ…」

にしてもなんか本当…お互いがお互いのこと大切にしてるんだねえ。ふたりつてけっこうしょちゆう会ってんの？」

「いや？会わないときは三ヶ月とか間隔あくときがある。」

「三ヶ月!!!？」

浩平がすつとんきょうな声をあげれば、それに広末が苦笑した。

「そんなに変かな、俺達の関係つて。」

まあお互いに会いたければ会うし嫌なら会わない。ふらつと寄つてふらつと帰る、

そんな感じだな。第二の家…みたいなものか。」

「はあー…なるほど。なんとなく、わかった気がする。…いややつぱわかんないかも。」

どっちだ、というその広末のつつこみに、浩平は盛大に笑った。

ひとしきり笑えば、

ふたりはどうなったのだろうか、と、心の中で広未と浩平は考えていた。

ここにひとつの奇妙な友情関係が築かれたことを、まだ和と遙は知らない。

第十一話「本当の策士」（後書き）

次回、全編が遙視点の過去話になります。

ある意味番外編のようなものになるのでしょうか…？

それとも話自体はつながってるから番外ともいわないのか？まあいいか（いいのか）

一話で完結するので、お付き合いいただけましたら幸いです。

第十二話「始まりの始まりのはじまり」(前書き)

全編通して遙視点の過去回想の話になります。

一話で終わるので、お付き合いいただけましたら幸いです。

第十二話「始まりの始まりのはじまり」

きっかけになつた出来事は、一体いつだったのかな。

あれは確か、桜の花がまだ咲いていた頃で。

入学早々、まわりから騒がれてちよつと辟易しているときだった。

容姿が整っていて、勉強も運動もある程度こなせるとなれば
それなりにまわりの注目度が集まるのはわかつていたけれど

高校という広いこの場所で、まさか学園のアイドルなんてもてはや
されるとは

思つてもいなかった。

目立つのは慣れているし、やっかむ男をかわすことだってへたでは
ない。

中学時代からの友人である浩平がいれば、そこらへんはほとんど心
配ではないし。

あいつは俺なんかより余程したたかだから。

でもそれでも、少し疲れてしまっていた。

どこか静かな場所はないものかとふらりと立ち寄った図書室。

窓際のはしつこの席。そこにいつだって君はいた。

がらりと扉を開けば、そこには清々しいほどに静かな空間が待つて
いた。

本を読むのはそれほど好きでもないし、

特別用事がある時以外はおとずれることがない場所だった。さすがにこの空間にいる人間は無遠慮に黄色い声をあげる人種はいないらしく、密かに遙は安堵の息を吐いていた。

『……やっぱり視線まではどうにもならないか。』

入学して一ヶ月余り。

もはや学校中に注目されているといっても過言ではない学園のアイドルともてはやされる彼は、どこにいても周りの注目を集めてしまう。

図書室内でちらちらとこちらをうかがう視線。

それくらいは黙って受けるのはしかたないだろうと思いつつも、少々うんざりする。

どうしたものか、と軽くあたりを見回せば、ひとり、遙のほうをまったくみていない人間がいた。信じられないことにそれは、男ではなく女であった。

こんな発言をしてしまえば、なんと自惚れ屋な男であろうかと思われるのはわかっているが

遙は物心ついているからここまで、女性に一度もこちらを注目されないという経験がなかった。

もちろん、女が全部自分に惚れるとかそんなことは思っていない。やんわりとでも断られたことだってあるし、

自分のような種類の男を苦手とする女性だってたくさんいるだろう。けれどもそれとは別に、遙は男であろうが女であろうが

良くも悪くも注目を集めてしまう自身をよく自覚していた。

そっという心構えがなければ、おそらく自分は危うい目に幾度と遭っ

てきただろう。

だから、なのだろうか。

こちらをちらともみない少女の存在が、ひどく気になった。

ゆっくりと窓際つしろに座る彼女のそばへと近付いて、

その向かいの席に腰を落とした。

はじめは遠慮がちにむけていた視線も、それは要らぬ心配であったと気が付く。

『すごい集中力だな…』

真つ向からみつめる遥の視線にまったく気付くこともなく、

目の前の女生徒はひたすら本を読んでいた。

何年生だろうか。

そんなことを考えて少し椅子をひき上履きを確認すればその色は青色だった。

『青…同じ一年生か。』

また視線を女生徒に戻す。

よくよく観察すれば、彼女はとても地味な人間だった。

廊下ですれ違っても、誰も記憶に残すことはないだろう。

茶色くて少し透けたフレームの眼鏡。

斜め右で一本に結ばれた髪。

なんの変哲もない黒髪黒目の容姿。

その瞳は眼鏡で隠れているせいかはつきりとはわからない。

ずっと本を読んでいて伏せ目がちなせいもあり、正面からみなければ顔の印象があまり記憶できない。

『…こっち向かないかな。』

好奇心だったのかもしれない。読み終わったとき、彼女はどんな反応をするのだろうか。

それが気になって、なんとなく席を立つのがためられた。

そのとき。

本が読み終わったらしく、目の前の女生徒が正面を向いた。つまり、遙のほうを。

驚いたからなのか、理由はよくわからない。

一瞬絡み合ったその視線に、心臓が痛いほどに脈打った。

どくん、という大きな鼓動が体から伝わってくる。

しかしその視線が交わったのも一瞬の出来事で、

なんと、女は遙を振り返ることもなく本を棚に戻し、

何事もなかったかのように図書室を出て行ってしまったのだ。

まさかこれほどまでに、自分の存在が無として扱われると思っただけじゃなかった。

経験のない気持ちに、遙はすぐ気付くことができなかった。いつだって与えるよりも与えられるばかりで

自分のほうから好意を示すことは皆無だったといっている。

まず最初にはじまるのは向こうからで、

いつだって好きだという言葉は相手に応える形でしか伝えてこなかった。
本気にならない自分に痺れを切らして愛想を尽かされる。
いつだってそんな形の恋愛ばかりしてきたものだ。

だからこそ、この気持ちは小さな好奇心なのだろうと信じて疑わなかった。

それから遙は、不定期に図書室をおとずれては例の彼女の存在を確認する。

行けば相変わらず注目を受けるものの、彼女にみられることは一回もない。
それがひどく気になって、一週間に一回でも、二週間に一回でも、図書室に赴くという行為を遙はやめられなかった。

そんなことをしているうちに、季節は春から夏へとうつりかわる。長期休暇に入る直前だというのに、どうしてか心は晴れなかった。

「遙、なにさつきから落ち込んでんの？」

へらへらと笑いながら、教室でたたずんでいた遙の隣の席に友人である宮田浩平が座った。

「……別に。」

「おまえ、最近ずいぶん入れ替え激しくない？ちょっと自重しないとそのうち刺されるぞ。」

「そんなことされるような別れ方はしてないよ。」

そうにつこりと微笑む友人を見て、浩平はどうしたものかと眉を寄せる。

ここ最近、ずっと遥の様子がおかしいことはわかってきたものの、原因がわからずにどうしたものかと考えていた。

「はる……笹森さん！」

放課後のこの時間。

人もまばらだというのに自分をさえぎるかのようにあがった廊下からの呼び声に、

浩平は心の中で舌打ちをした。

ついでにはたと小走りのような足音がする。

男はちょうどこの教室の廊下の前で止まったようだ。

「高橋君！どうしたの？」

続いてきこえてきた女生徒の声に、隣にいた遥が弾かれるように振り向いた。

廊下が気になっているようだ。

その遥の行動が気になりつつ、浩平も廊下に視線を向ければ、なんの変哲も無い女生徒が、これまた特徴のない男子生徒となにやら話をしていた。

なにかを貸し借りする話のようで、少々のやり取りを終えてふたりは別れていた。

「……………ささもり、って言うんだ。」

ぼんやりと、焦点の合わない瞳で遙がそう呟いたので、その声につられ視線を遙に戻せば、その顔がなにを意味しているのかを瞬時に理解した。

「…え、なに、おまえ…最近元気がないのってそういうことだったの？」

『あんな地味な女の子にねえ、意外だなあ…』

そんなことを頭の中で思いつつ、浩平はへーとかふーんとか声をあげて遙をみる。

当の遙はといえば、浩平の言葉がまったく理解できないようでも不機嫌をあらわに眉間におもいきり皺を刻んだ。

「どういうことだよ。…大体、元気ないって自覚もないんだけど。」

「は!?!」

その言葉に、浩平は二度びっくりした。

先程、遙が想いを寄せる相手があんな地味な女の子とは…と驚いたというのに、

その恋心を彼自身がまったく自覚していないのだ。

「おま…そんなに? そんなにか!？」

「だから、なにが？」

ますます眉間に皺を寄せて遙がきいてくる。

こいつ…もしか初恋なのでは？

そんなことを思えば、浩平はあきれ返って額にてをあてた。

「…とにかく、だ。」

「ん？」

「お前、自覚ないのかもしれないけど今けっこう荒んでるだよ。なんでか全然わかんないの？」

「荒んでる…？…まあ、多少、イライラするような気も、するけど。」

「それ、なんでかきちんと考える。夏休み入ってから理由もわからず苦しむことになるぞ。」

「夏休み？なんで…」

「忠告はしたからな。…さっきの女の子、知り合い？」

「え？ああ、ささもりって呼ばれていた子？ううん、図書室でみかけた事があるだけ。」

『…しかも一目惚れかよ。』

はあ、とため息をついて、浩平は教室を出て行った。

残された遙はといえばわけがわからず、結局浩平が忠告してくれたにも関わらず

夏休みに入っても気落ちの理由はわからなかった。

休みに入ってからというものの、なにもする気が起きなかった。

毎日部屋にひきこもっては悶々と時が過ぎるのを待つ日々。

目を閉じれば、なぜだか思い浮かぶのは彼女の顔ばかり。

「……なんでなんだ。」

日を追うごとに苛々は増すばかりで、

中途半端にしか教えてくれない浩平に半ば八つ当たり気味に怒りをぶつけた。

そういえば、とふと思う。

「今日：図書室の開放日か。」

携帯電話の日付を確認して、そんなことを思い出す。

でもそんなことはどうだっていい。

休みの日にわざわざ学校をおとずれる理由もない。

そうだ、ないはずなのに。

ひよっとしたら、彼女が居るかもしれない。

そう思えば、体は自然と制服に着替え、学校への道を進んでいた。

多少早足になりながら、図書室の扉を開け放つ。

誰もいないかに思われたが、案外人がいるもので、

本を読むというよりは皆、夏休みの課題をこなしに来ているようだった。

友人同士で固まり、小さな声で答えの相談をしている。

その存在を思わず目で追えば、奥の本棚から歩いてくる女生徒をみつけた。

それは、休み中ずっと遙の頭について離れなかった女の子。

いくつかの本を手に取り、受付のところまでにここにこしながら持つてくる。

出入り口に立っている遙のことは、相変わらず見向きもしない。

「うわ、笹森さんそんなに借りる？」

「当たり前でしょう、せつかくの長期休暇。」

学生時代の特権は余すことなく有効利用しなきゃもつたない。」

そう言つて上機嫌で図書カードに記入する。

遙はなるべく不審にならないように、あくまでさりげなくを装つて彼女のうしろについた。

図書係りの女生徒がカードをのぞきこみ、意外そうな声をあげる。

「えー、なぎつてそうやって書くんだ！てつきり尻かと思つてた。」

「ああこれね。変わつてるでしょ。なんかけっこうこだわりの理由があつたらしいんだけど

興味ないから忘れたわ。」

「笹森さん、興味ないって自分の名前じゃん…。」

女生徒のつつこみに、まさしく全く同じことを遙は思った。

『でも…笹森和つて言つんだ、へー…』

名前を知つたことは、いちばんの収穫だ。

しかしそこでまた、自分はなにをしているのだろう？と思ひ至る。

彼女は、自分にとってなんなのだろう？

すぐそこに答えがありそうなのに、霧がかかったようにそれがわからない。

考えるひまもなく、彼女は早々に図書室をあとにする。

遙は少し間をおいて、彼女を追うように図書室を出た。

少々ストーリーカーじみている気がする、と自身の行動を振り返るも理性を総動員しようとも体が勝手に動いてしまう。

苦笑いをしつつも、少し前にいる少女の動向をうかがった。

そのときだ。開け放たれていた窓から、強風に押されて砂埃が廊下をおそった。

ちょうどその付近を歩いていた少女は、目におもいきり砂埃が入ったらしく

手にしていた荷物をどさりと落として立ち止まった。

それをみた遙は、あわてて廊下の窓を閉め、彼女の落とした荷物を拾う。

彼女はといえば、いまだに目が開けられないようで、涙目でぎゅっと目を瞑っている。

『…触れたい』

そんな彼女を目の前にして、あるうことが遙はその唇に口付けを落としてしまいたいと考えた。

女性にたいしてそういう情熱がなかったわけではないが

これほどまでに自らそれこそ切羽詰ったような状態になったことは今までの経験上ありえない。

自分の胸中に驚愕し、なんとか気を持ち直して先程名前をしまった和のほうをみる。

目が痛くてどうしたら良いのかわからないようだ。

「大丈夫？眼鏡を外して…そのまま目を開いて出来るだけ涙で流してしまっただほうがいい。」

そううながせば和はこくりとうなずいた。

「…どうもすみません、ご親切に…ちょっとびっくりしてしまいました。」

そうして自身のハンカチを和がとりだしたので、その手をつかんで制止する。

「なるべくこすらないほうがいいよ、あくまでも目のまわりの涙をぬぐうだけにして…」

「あ、はい。重ね重ねすみません。」

そのとき、目を開いた和と確かに視線が合わさった。心臓が、一瞬停止してしまったのではないかと思った。

まっすぐに自分をみつめるフィルター越しではないその瞳は、なににもかえがたいほどに魅力的だった。

どこにでもいる地味な女子だなんて、何故思ったのだろうか。目の前にいる彼女は、どの女の子よりも素晴らしい。

『可愛い……。』

図書室をよく利用している少女は、自身の空気にもその静謐さをまとうているような

おかしがたい雰囲気を持っていた。

あまりにも自分とは違う、その事実には遙は愕然とする。

そして同時に、彼はすべてを理解する。

「ありがとうございます、荷物も拾っていただいて。それでは。」

「あ、ああ…気をつけてね。」

にっこりと微笑むその他の女性なら顔を赤らめる表情も、しかし彼女はまったく視界に入れることも無くその場を去る。

わかっていたことだ。

和は遥のような者をきつと好きではない。
静けさの中で生きるその女の子は、きつと騒がしい世が大嫌いな
だ。

だからこそ、遥のような人間に興味がない。
残酷なまでに彼女の世界から排除されている自分を
認めてしまふのが怖かった。

好きなのだと、自覚をすれば、次の瞬間にはあきらめなければなら
ない事実には呆然とする。
だからこそ心に蓋をしていたのだろう。
それほどまでに自分は、彼女のことが好きなのだ。

自覚してからは、持て余すばかりのその恋心をどうしたらいいのか
わからなかった。
相変わらず女性関係は荒れるばかりで、
彼女とは正反対の自分の隣にいて違和感ない相手ばかりを選んで
その胸に抱く彼女達を確認しては、和ではないのだ、と絶望するの
だった。

ひどいことをしているとわかっている。
けれどもこの心を、どこに持っていつていいのかわからないのだ。

自分のことをみてほしい。

ほんの少しでもいいから、視界の隅に入れてほしい。

彼女の世界に入りたい。

彼女のすべてを手に入れたい。

ほしい。彼女がほしい。

笹森和が、ほしくてほしくてたまらない。

夏休みが明けても、季節が夏から秋になり、冬になっても、その欲求は日々増すばかりで、衰えることがなかった。

学年が上がれば心機一転、少しは忘れられる兆候がみえてくるだろうかとも思ったが

そんな願いもむなしく空振りするだけで。

どんなに派手に振舞っても、彼女の前を歩いてても、

自身を認めることのない和をみて苛立つては落ち込んでしまう。そんな日々だった。

そんな遥の様子をみて痺れを切らしたのは浩平だった。

「おい、いいかげん言えって。」

「……なんのこと？」

「ここまでできるとぼける？このへタレまっしぐら野郎。」

「うっさいな。」

浩平の言葉は凶星以外のなにものでもない。

そう、自分は怖いのだ。これ以上彼女に拒絶されることが。

「なにかしなきゃ始まるものもはじまらないでしょーが。なにがそんなに怖いわけ？」

「今のあの子はお前の存在すら知らないんだろ？失うもんなんてないじゃん。」

「振られるってわかって告白する馬鹿はいない。」

「だってお前、このままじゃ全然あきらめられないじゃん。」

「だったら宙ぶらりんの状態から解放される。バツサリとやられてしまえ！」

「……………あきらめる、か。」

「別に振られてもあきらめられなきゃ追いかければいいだけの話だろ？」

「…嫌われるじゃん、そんなことしたら確実に。」

「上等。お前、好きの反対ってなんだか知ってる？」

「…嫌いじゃないの？」

「無関心、だよ。今の和ちゃんの状態がまさにそれ。」

「嫌われるようになったら万々歳じゃん、和ちゃんの心にお前がひっかかったって事なんだから。」

「無関心……………」

遥の言葉に、浩平はにやりと笑う。

「嫌いになつてもらえたら思惑通り。」

「嫌いの延長線上には、必ず好きがあるもんなんだよ、ヘタレ遥くん？」

浩平の頭を思いきり叩いてやれば、浩平はつづくまって痛みをこらえていた。

その様子を見て少々強くしすぎたか、と思う。

「浩平、ありがとう。」

「……お前がここまで臆病だとは思ってなかった。」

「まあ、和に関してだけね。」

「和チャンですげーな。」

「名前を呼ぶな、減る。」

独占欲丸出しのその遥の言葉に、浩平が一瞬驚いた後、呆れた顔をした。

本当に、言われるまでこんな簡単なことに気付かないなんて俺は本当に臆病だね。

君の世界の外にいるこの状況よりも悪くなることなんてあるはずがなかったのに。

そうだ、好きになってくれと願うからいけないんだ。開き直ってしまえ。

君に嫌われにいらおう。

そう思えば、遥の足取りは驚くくらいに軽かった。

いつもの図書室。いつもの図書室前の廊下。

それなのに今日はなにかが形を変えているかのようで。

あるうことが遙は緊張に震えているのを自覚した。

そんな自身に苦笑する。

『ほんと情けない…。』

彼女のこととなると、途端になくなる自信は一体なんなのだろう。それほどまでに、失いたくない存在なんて、きっと今までいなかった。

同時に、罪悪感が心をよぎる。

ごめんね、和。

君を捕まえにいくよ。

俺の存在は、君にとって災厄にしかないんだろってわかっていくけれど。

それでも、わがままなんだ。

どうしても、君の瞳の中に、自分をうつしてほしいと願ってやまない。

浅ましい欲望に、どうしたって自分をおさえられない。

和、好きだよ。

今日君がここにあらわれたなら。

俺はもう、我慢することも迷うこともやめよう。

なにがなんでも君のことを手に入れる。

ぐっと右手を握り締めれば、愛しい彼女の足音がきこえる。
始まりを告げる音。

さあ、一世一代の勝負といこうか。

…負ける気なんて、さらさらないけどね。

第十三話「いじめなさい。」（前書き）

若干のR15表現を含みます。あくまでも本当に若干なのですが、
応、明記させていたいただきました。

そういった表現が苦手な方はお気をつけください。

第十三話「ごめんなさい。」

遙の話がすべて終わると、和は驚愕に口をぱっかりと開いていた。なにか食べ物を放り込めそうだなあ、と呑気にも遙が考えていると向かい合わせで座っていた和は、その体を遙から気持ち後ろへやるとバツ！と勢い良く頭を下げた。それは俗に言う、土下座というやつだった。

大好きな女の子からそんな事をされてしまった遙は、固まった。というか和がどうしてこんなことをするのかわからない。話しかけていいのか、頭を上げてくれとでも言ったほうがいいのか。しかしその前に一層頭を地面に擦り付けるようにして、和は叫んだ。

「ごめんなさい！！！！」

突然の力いっぱいな謝罪に、遙はますます困惑すればさすがに黙ってみていられなかったのか慌てて和の体を起こした。

「なに？どうしたの！？とにかく顔上げて！ああー！額擦りむいてるじゃないか！！！」

もっと早くに止めていれば良かったと遙は心底後悔した。軽くそこを払えば、擦りむいたといっても血は出ていないようですれにはほっと息をついた。

次の瞬間には、その額に唇を寄せる。

不穏な気配を敏感に察知したのか、和が思い切り遙を押し、いつものように怒っているのかとその表情をみれば、

予想外にも魂が抜けたような、茫然自失といった風情になっていた。

「和…？」

「まさか、そんな風に思ってくれていたの知らなかった。

……広末との賭けだからってわけでもないけど、和泉君のその話、信じようと思う。」

和のその言葉に、遥はぱつと笑った。

「嬉しいな。…でもさっきのなに？」

「思い返してみればあの数々の言葉は…どんだけダメージだったのかと。」

ちよつと我を忘れて土下座までしちゃったわ……。

あ、でもそれについての謝罪じゃないよ？だってあれは私の本心なんだもん。

今更それを謝ったって自己満足でしかないし、私は今もあれを悪いと思っではないから。」

そうきつぱりと言い切られれば、いつそ和らしいなと笑えた。

彼女は本当に、残酷なくせに潔くて優しいのだ。

「ん？でもなんのごめんなさい？」

「……………」

押し黙った和をみて、なんだか悪い予感がすると思いつつも、先をきかないわけにもいかずに仕方なく聞く態勢をとった。

「さつき、和泉君をそういう対象でみてくれて話したよね。」

「うん。男として、恋愛対象としてってことだよな？」

「それで、今は、友人関係のようなものを築きたいとも言ったよね。」

「うん、言った。それは了承してくれるんだよね？」
「……………出来ない。」

和のその言葉に、遙は、はい？と間抜けな声をあげた。

「まさか、そこまで真剣に自分みたいな珍獣を気にかけてくれる男の人が

この世に存在するなんて思ってもいなくて。」

「いや、和は内も外もとっても可愛くて素敵な女の子だけど？」

「……………っ恋は盲目ってよく言ったもんだわね。」

がくつと和が力を抜けば、遙は面白そうにそれをみた。

「もしもそうならそれでもいいよ。他の男が和の魅力に気付かないなら

ライバルはいないままなんだし。」

「あんたさあ、本当に日本で生まれ育つたの？それとも脳が一年中春なの？」

ちよつと病院行って来い！まず眼科に行つてそれから精密検査を受けて来い！

CTなんて生温い！MRIだ！！」

「草津の湯でも治せないからなにしたつて無理だよー。」

あははーと言つて遙が笑えば、和は意図的に話題を逸らされている
事実は今さらながらに気付けば
小さく舌打ちをした。

「くそ、思わずノってしまったじゃないの！いい！？話終わるまでは帰らせないし

絶対に了承とるよ、私は！！」

「だーから、どうしてそういうとこだけ…はあ、そのまま話を逸らされてるのも気付かない

鈍感な子だったら良かったのに。」

「…そこからまた、だったらそういう子を相手にすれば、和じゃなきゃだ、的な会話には

流させないよ？」

「……本当に察しのよろしいことで。」

大きくため息をついた遙を見て、やっと観念したようなので和は話を本題に戻す事にした。

「私はね？いちばん残酷なことは期待を持たせておいて最終的にそれを裏切る行為だと思っの。」

「あ、いい、その先言わなくて。わかったから。言いたい事もものすごく理解したから。」

無視して和は続きを話す。

「あなたがそこまで真摯に好意を示してくれたのならば、私もそれを相応のもので返す。

それが礼儀つてもんでしよう。」

「だったら、お友達から始めましょう、でいいじゃん。」

「そんな期待を持たせるようなことは出来ない。正直、今の段階では和泉君を好きになる確率はものっすごく低いの。」

それなのにいつか好きになるかもしれない、なんて言えない。」

「俺はそんなの気にしない。和を必ず手に入れてみせる！」

「出来なかつたら？そのかけた時間だけ無駄になるんだよ。後悔してからじゃ遅い。」

なにより私の気が済まない。だからって義務みたいに和泉君を好き

になんかなれない！」

「和……」

「だからごめんなさい。そんな曖昧な関係にはなれません。」

「好きになってくれなくてもいいんだ。そばにいれさえすればそれでいい。」

「和泉君。」

その和のダメ押しのような声に、遙はたまらず和を抱き寄せた。

「お願いだから、考えないで。もしも俺の事を少しでも慮ってくれらるなら、

俺をそばにおいて。未来なんてわかんないじゃないか。

だから確約なんなくなつていいんだ。和のそばにいるだけですごく嬉しいから。」

「和泉君……あの、どうしても私じゃなきゃ駄目なの？高原さんとかすぐくお似合いだと思っただけど。」

和は、相当焦っていたのだろう。

普段の彼女ならありえない失言を、あろうことが最悪のタイミングでしてしまった。

次の瞬間にその事に気付いても、もう言った事は取り消せない。

「高原……？」

『あ、ひょっとして苗字知らない！？』

遙が思案気になっているのを見て、助かるかもしれないと密かに心の中で願う。

しかし次の瞬間には、拘束していた腕を外し、両手で和の顔をつかめば

半ば乱暴に遙は和を上向かせた。

「…どうして梓の事を、和が知ってるの？」

絶対零度の微笑みに、和は頭の中でパトカーのサイレンのような音がけたたましく鳴り響くのを感じた。

これはもう危険信号を出している場合でもないくらいにまずい。緊急配備をしてほしいくらいだ。

「あ、のですねー…なんていうかその、と、友達？みたいな…」

「なにがどうしてそうだったのかな？」

相変わらずブリザードな笑みを浮かべては、和の顔をみつめる。なんならちよつと泣きそうである。

「なーぎ。そんな可愛い顔したって駄目だよ。ちゃんと話してくれなくちゃ。」

可愛い顔ってなんだ。今絶対に今世紀最大の不細工な顔をしているに違いない。

そんなことを考えていると、遙は和の頬にひとつキスを落とした。

「ひえええっ！！」

「ほらほら。考えてる暇なんて与えないよ？次はどこにしてあげようかな。」

心底楽しそうに遙が和の顔を見る。

先程とは違ってなにやら艶めいたものを帯びている遙は、女性の自分から見ても色っぽいなどと感じてしまう。

などと下らないことを考えていれば、今度は額に唇が落ちる。

「……さつきちょっと擦りむいちゃったね。可愛いそうに駄目じゃない、女の子が顔に傷作っちゃ。」

そう言っつて口付けていたかと思えば、今度はあるつことが擦りむいた箇所を遙の舌が這いはじめた。ゆっくりと丹念に、その傷を舐められていく。

「や、やめっ……」

制止する声に遙がとまるはずもなく、どころかますますその舌は大胆になっていく。

みるみる赤くなつた和の顔を見れば、遙は今日何度目かわからない可愛い、という言葉を小さく口にする。音をたてて額を吸われれば、羞恥心と共に自身の体に変な熱が点つていくのを感じた。

「……ふあっ！」

鼻にかかったような甘つたるい変な声が出て、思わず和は自身の手で口元を押さえる。

「和……そんな顔でそんな声出されたら止まらなくなっちゃっよ。それとも……誘つてるの？」

「そ、そんなわけ……ほ、ほんとにやめて……やだ……」

もう半べそ状態になりながら、和が遙に繰り返し懇願する。それに遙は耳元に唇を寄せて、囁いた。

「それじゃあ、全部話してくれる？」

「そ、それは…」

和の言葉に遥が耳朵を軽く食んだ。和の羞恥心が一気にいっぱいになる。

さすがにもう、容量オーバーだ。

「は、話す！話すから！！」

負けたようだと思いきや、自分の貞操のが大事だと思いきや直した。

話すという言葉に反応した遥が、やっと和をその愛撫から解放した。途端、和は立っていられずにくりと膝を折る。

それを遥が余裕顔で支えれば、和はぎろりと遥を睨んだ。

「だーから、その顔も逆効果だってば。他の男の前でそんな顔しちゃうだめだよ？」

「私を襲うような奇特な人間はそうそういない！！」

「またそんなことを言う…。」

ふっとため息をついて、遥は和をみる。

眼鏡越しでも潤んでいるのがわかる瞳。元々白いその肌は、今は赤く染まっている。

少し上がっている息はなんとも色っぽく、なにからなにまで男の情欲をそそるものだった。

そんな彼女を、襲う人間なんていないだっけ？

今この状態の和を男の集団の中に放り込めば、手を出さない人間の数が少ないだろう。

もともと、そんなことを遥がするはずもないが。

「まあ、その話はまたおいおいね…で？」

「え、で？つて…」

「和？続きをご所望なのかな？」

それは気付かなかつたな、とまた遙が頬に両手をのぼそうとするので、

慌てて和はその手を振り払った。

「ちょ、ちが、ちょっとあの、今！ちゃんと話すから！違うの今ちよつと

頭が混乱してて…待って、一分待って。」

どうしたものか。すべて洗いざらい吐いてしまったら梓に迷惑がからないだろうか？

この遙の態度をみれば、とにかく信じられないが自分に相当な執着心を抱いているのは間違いない。

そうになると、彼女が和を迫害しようとして少しでも考えた事実を

この男が見過ごすとは思えないのだ。

彼と梓の間にあるものがどれほどの関係性であるのかはわからない。けれども自分をきっかけに、梓の恋が終わりを告げる結果になってしまったら…

そうだ、そもそも、自分は梓を裏切ってしまったのではないか。それを失念していた事に愕然とする。

「和。一分もあれば君の頭はうまい言い訳を考えられるだろうね？」
「ちょ…違つつてば！あんな事されたの初めてだから頭が回らないんだって！！」

遙の剣呑な雰囲気にもまたもまずいと感じた和は、慌てて時間稼ぎを繰り返す。

まさしくもって彼の言い分は凶星であるのだが、それを悟られるわけにはいかない。
だから深く考える事もなく、和はその言葉を口にしたのだが、なぜだかそれに遥が頬を赤らめた。

「……じゃあ、和ってキスも初めてだったの？」

「え、あ、ああ、そうだけど……？」

「じゃあ俺ってもしかしなくても、和の初めてをもらった男……！？」

「いや、あんた、その言い方なんかいがわしいからやめてくんない。

語弊ありまくりだからやめてくんない。」

「えー何考えてるの和、やらしいな。」

「そついう責め苦は私には通用しないってまだ学習しないの？」

うんざりとした顔をすれば遥は唇を尖らせた。

「そつなんだよねー…態度は初心なのにー。言葉責めができないなんてつままないなあ。」

「おい、それ以上の発言は警察を呼ばれても文句言えないと思いたまえ。」

「あ、でもそついう状況になったら関係ないか。けつこつ些細な言葉にも赤くなるもんね。」

「………出来ることならもう二度とそついった行為はごめんだけどね。」

今度やったらあんたの半径3m以内に絶対に近付かん。」

「え、やだ、ごめん和！もう調子にのらないから許して……！」

また抱きつこうとするので、無言で遥から一歩ひいた。
それにまた遥が不満気な顔をする。

「で、結局。梓とどういう関係なの？」

やはりこいつも馬鹿ではない。どうやったってごまかせないのだ。内心で舌打ちをすれば、観念してかいつまんで話そうと口を開いた。

「実はね、影で高原さんにも協力してもらってたんだよ今回の件。」

「は！！？梓が！？」

思いもよらなかったのだろう。遙はひっくりかえったような妙な声をあげた。

「そもそも私は、夏休み前にどうにかこうにか和泉君を排除してしまいたかったの。」

長期休暇にまとわりつかれたらたまったもんじゃないと思って。」

「和：その言い草はあんまりじゃない？」

「まあ、事実なので。」

「はあ：わかった、そこはいい。それで？」

「でも自分ではどうしたらいいのかわからなかった。」

そこで考えたの。協力者が必要だって。和泉君と親しくて、なおかつ私の存在が邪魔だと思う人。」

「それはつまり、俺の周りにいる女の子達？」

「そう。そして話がわかる人。…ってなれば、和泉君の彼女だと実しやかに囁かれています」

高原梓さん。彼女しかいないでしょう？」

「それで接触を試みたわけだ？」

「案の定、彼女はとても頭の良いひとで、協力を了承してくれた。それで和泉君の学校での動向がわかるようになったわけ。」

あー、ほんとはこれバラしたくなかったんだけどな…

彼を避ける必須アイテム。

使いすぎればバレたかもしれないけど、時々利用させてもらうぶんには

さりげなく彼を回避することができたというのに。

でも仕方ない。なにを協力してたんだと問われてへたな嘘をつくのは得策ではないだろうから。

とにかく一番大事な場所だけ隠せれば今はそれでいいのだ。

「まさか…あのネットワークを和が使ってたのか！」

「…てことはアンタ、あれ使って私のことも追っかけまわしてたね？」

ぎろりと遙を見やれば、しまったという顔をして目を逸らす。

「メールで報告を受けてただんだけど感動したよ。本当にどこに居かわかって。」

おかげですごく動きやすかった。ケータイをのぞかれるタイミングとか

広末の情報を流すタイミングとか、うそみたいに順調だったんだけどなあー。」

「なるほどね…女同士でそんなことをやってましたか。」

「高原さんのこと、咎めたりしないですよ？接触したのも協力要請したのも」

全部私からなんだから。それにもう、彼女は私の友人なの。

和泉君の彼女かもしれないけど、それでも私に黙ってあの子を傷付けるのは許さない。」

その言葉は、遙にとって心底意外だったのだろう。自分でも自身の言葉が意外だった。

けれどもその言葉に嘘はない。彼女は間違いなく、自分にとって大

切な存在になっていた。

「梓は俺の恋人じゃないし、咎める権利もないからそんなことしないよ。」

「ずいぶん和に気に入られちゃってるみたいだしね。そんなに好き？」

恨めしげに自分をみるめる遙をみて、和はふきだした。

「そりゃ、高校生活始まって以来はじめての友人だもの。好きに決まってるじゃない。」

私の初めての女の子の人、だからね。」

少々艶をのせてそう言えば、遙は慌てて和の肩をその両手でつかんだ。

「和！まさか女の子が好きだとか言わないよね！ね！？」

「えー？女の子は好きだけど……」

「ええええ！？ちよ、ちよっと待って、梓がライバル！？」

「ちなみに性的に興奮するという意味合いは全くもってこめられてはないけども。」

「ちよ……和、もうちよっと言葉選ぼうよ……。」

「くだらないこと言うからだよ。ねえ本当病院行く？付き添ってもいいよ？」

和のその言葉の数々に、がくりと遙がうなだれる。

そうだ、やはり梓の手前、ここで遙にイエスとは言えない。

梓の為に身をひく、というのも図々しいが、

かといってここで友達以上恋人未満のような関係を了承してしまうのはもつといけない。

そもそもここで返事をしてはいけなかったのだ。
イエスもノーも、その是非を問うのはまず梓と話をしてからでなければ。

「あの、さ、さっきのごめんなさいのことなんだけど。」

「ん？だめだよ、絶対に了承しないから。」

「そうじゃなくて、ちょっと保留にしてくんない？仁義通さなきゃいけないの忘れてた。」

「…和の言葉チヨイスって本当面白いよね。」

「ありがとう。」

そのあと、しばしの沈黙がおとずれれば、それを破ったのは遥のため息だった。

「わかった、いいよ。その仁義とやらのあとに必ず一番最初に俺の元に来てくれるなら。」

「……うん、約束する。」

「うん。じゃあ、アドレスと電話番号教えて？」

「え、なんで？」

「不便でしょ？色々。ていうかなんで俺が知らなくて浩平が知ってるのかなあ？」

広末君はともかくね？とにこにこしながら詰め寄る遥の後ろに、

ついさつき感じたブリザードの幻がみえる。

否、幻ではあるまい。

本当はそれだけは避けたかった。のだが、これはもう観念するしかないのだろう。

「わかった…でも連絡事項以外のメールには返信しない人間だから

ね、私。」

「わかってるよ。勝手に送るだけだから返事なんていらぬもん。」
楽しそうに喋る遙をみて、山のように届くうっとおしいメールを予想したが
もしかしたらそこらへんは淡白かもしれないし、と思い直した。

「和、好きだからね？」

「……なに、その確認は。」

「絶対に終わったらすぐ俺に連絡ちょうだいね。」

「そんなに念押ししなくてもわかってます。」

疲れた顔で和がそうこたえれば、遙は嬉しそうに微笑んだ。

「和！」

本を開いていた和がその声に顔をあげれば、喫茶店の出入り口に梓が立っていた。

にっこりと微笑んで手をあげる。

「梓さん、わざわざ呼び出してごめん。」

「あら、名前呼びに昇格？どうせならさんもとってよ。」

向かいの席に座っていたはずらっぽく梓が微笑めば、

本当に綺麗なひとだな、と和は見惚れる。
どうしてあの男は、こんな魅力的な女性が近くにいな
自分のようなのが良いなどと言うのだろう。正直なんといわれよう
と理解に苦しむ。

終業式の日、あのあとすぐに和は梓にメールを打った。

今まで遥とある賭けのようなものをしていたこと。またその結果
について

梓にその全容を話したい、と。

それにうなずいた梓は、次の日にでも会おうと返信をくれたのだ。

「だめ。梓さんは姐さんって感じだからさんなの。」

「なにその理屈。まあ良いわ。やっと和は私のこと友人と認めてく
れたわけね？」

「あれ、そう思って良いの？私調子のるけども。」

「それはまた、みてみたいわね。」

ウエイトレスにブレンド、と一言告げた彼女がふつと笑う。

なにをしても絵になる人ってこういうひとのことをいうのだなあー
…。

学校近くのこの喫茶店は、生徒の利用者数はそれほどでもない。

近くにファーストフードやファミレスがあるから、たいがいの学生
はそちらへいくのだ。

梓が和に呼び出されたときにこの店を指定してきたことで、梓はま
すます和が気に入った。

おとなしいだけの静かな女の子というタイプでもないのに、
その存在をふつと殺す瞬間がある、と感じる。

そうしたときの彼女はとても静かで、澄んだ空気の中にいるようなのだ。

梓はそんな和のそばにいるのが心地良いと感じ始めていた。

テーブルに置かれたコーヒーを一口飲む梓をみて、

ブラック派なのか、とどうでもいいことを和がぼんやり考えていれば、

正面を向く梓と視線が合った。

「…それで？全部、話してくれるんでしょ？」

「うん…ちよつと長くなるかもしれないけど。」

「かまわないわよ、時間はあるから。」

「……ありがとう。」

そうして覚悟したかのような顔を和がすれば、計画の内容はともかくとして

どんな結果をもたらしたのかなんとなくわかる。

きつと彼女は、負けたのだ。和泉遙という男に。

梓が想いを寄せて止まないその相手に。

すべてを話し終えた和は、ありがとう、と頭を下げていた。

「本当に、協力してもらってこういう結果にはなったけど感謝して

る。

梓さんには、すごく色々と助けてもらったから。」

そう締めくくって顔をあげる和を、梓はみつめる。

「…お礼だけ？謝らないの？」

その言葉に、和はきよんとする。

「謝る？何故？誰も悪い事はしていないのに。」

「私にとつて最悪な事態になったのに？」

「それはそうだけど、人の心のことだからどうにもならないし…
何より今私が梓さんに謝るのは失礼だよ。」

それは、彼女の中の罪悪感を減らす行為にしかないから。
だってどんなに謝罪を繰り返したところで、遥の対応は変わらない
だろう。

和がどんなに拒否をしたって何度だって起き上がってくる彼なのだから。

梓は、和のその潔さにふっと息を吐いて、そのあとにはせつなそうに笑った。

「まったく、敵うはずもないわね。…これでやっと遥から卒業でき
そうだね。」

「え？梓さん？」

梓の言葉が信じられなかったのか、和は驚いて目を見開いた。

「いやー、実のところね、もう無理だろうなと思ってたわけよ、遥

の事は。

あの男、こつちが好きだつて言えば俺もだよとか応えはするくせに、自分発信で好きだなんて言ったこと一回もないんだから。まったく馬鹿にしてると思わない!？」

憤慨して前のめりになりながら話す梓に、和はまたも目を丸くした。なんとなく想像出来てしまいそんな気もするが、やはり遥は和の前と他とでは態度が違うようだ。

それでも、いつかのギャルを相手にするよりはずいぶん違った態度で梓には接していたはずである。

なんせはたからみても恋人同士にしかみえないくらいにお似合いなのだから。

「私は絶対に和泉君と恋人になりたくない。…苦勞する先しか想像できないもん。」

「あらー、遥は失恋決定?…ってもう何回もしてるんだっけ?粘着質ねー。」

「ていうか、なんで私なんだかやっぱり理解できない。…ってごめん、さすがに無神経だよな。」

自分の失言に気が付いて慌てて和は口をつぐむ。それに梓はふきだした。

自分でも驚くくらい心が軽い。悲しくないわけではないけれど気付かなかっただけで、梓の中の恋心はとっくに形を変えていたのかもしれない。

「いいのよ、そんなの。…でも和ってなぜそんなに自己評価が低い?」

「いや、低くないと思うよ。だって私自分のこと不細工だとは思ってないもん。」

所謂真ん中、十人並みの中で底辺のほうくらいにはちゃんと思ってるから。」

「あんだね、…充分低いわよ。眼鏡も、それ伊達でしよう？学校の外でもつけっぱなしなの？」

「いや？外では外すよ。広末にはコスプレかって言われたし。

学校内ではかなり意識して地味で普通を装ってるから。気が向けばそれなりの格好もするから

人並みに女の子らしい格好にまったく興味ないってわけでもないし。今日は梓さんと会うから学校仕様にはしたけど。」

「ああそうなのね。…広末さんって校門の君でしょ？」

「え、なに、そんな素敵な二つ名がついてんの？へえ…。」

にやりと黒く笑んだ和をみて、本当に色々な顔を持つ女の子だと半ば感心して梓は和をまじまじとみつめた。

「和の男バージョンってちょっと興味あるなあ。私、和が男だったら惚れそうなもの。」

「え、梓さんに！それは光栄。今度機会があったら会ってみる？まったくもって同じってわけではないけど、雰囲気似てるよはよく言われるよ。」

「そうねえ、失恋には次の恋ってよく言うしね。」

あははとふたりそろって笑えば、すっかり場がなごんだ。

まさかこんなにあっさり、梓が自分を受け入れてくれるとは思ってもみなかった。

ふっと目の前の梓を見やる。

「…梓さん、ありがとうね。」

「それはもうきいたわ。」

「うん、そうだったね。」

それから帰りは、なぜか買い物に付き合わされ、着せ替え人形のよ
うに扱われた。

眼鏡を外した和をみれば、絶対に学校でも外すべきだと強くすす
められたが

和は丁重に拒否をした。

隠す事もなくうんざりとした和をみて、梓はまたおかしそうに笑え
ば、

失恋の痛手が…と呟くので、卑怯な、と和は心で舌打ちをした。

梓に解放されたのは、夕方のことだった。

和はすっかり疲れた様子で帰宅をすれば、そのままぼったりとベッ
ドにダイブした。

こんなに長い時間、他人といっしょにいたのは久しぶりだ。
疲れたのは疲れたけれど、そう悪い気もしない。

今日のことを反芻してふつと微笑めば、和は重くなる瞼に逆らうこ
となく目を閉じた。

遙からの着信に気が付いたのは、すっかり眠りこけて目覚めた翌日、
早朝のことであった。

第十四話「よろしく願います。」

朝起きて頭をすっきりさせるためにシャワーを浴び、髪を乾かして朝食までしつかり食べた頃、時刻は朝の9時をまわっていた。

ほぼ10時に近いな、と時計をながめてぼんやりしていればなにかを忘れているような気がした。

「…はて？」

なんだっけ？と首を傾げつつも、一向に思い出せない。

まあいいかと思えば、和は今日はどうしようかと考えた。

新しい本を購入しに行くのもいいけれど、遠くまで出かける気にはならない。

どうせならば大型の本屋さんに行きたいものだが、準備ができていない。

性格があらわしているように、和は積極的に外へ出かけるタイプではない。

どちらかなどと言わずとも、超インドア派なのだ。

人混みが嫌いで、夏の風物詩であるお祭りなどは行きたいと思ったためしかない。

花火をみるのは好きだから、いつも家からみえる範囲で打ちあがる花火をみても

それだけで満足する。

遠出するのも、なにか目的でもあれば行かないでもないのだが、そういうときには前日から心の準備をしなければ実行に移せないのだ。

『広未の家の本棚でも物色しようかなあ』

そんな事を考えれば、広未はこの時間起きているだろうか、と考える。

たまに夜更かししては昼まで寝ることがあるから、寝ている時もあるのだ。

別にいいのだが寝起きの彼は不機嫌で相手にするのが面倒臭い。

どうしたものか、と考えて、そういえば自分は携帯電話を持っているのだと

ここにきてやっとその存在を思い出した。

鞆の一番下に入れっぱなしだった携帯電話を取り出せば、電源が落とされているのがわかる。

充電をしていなかったため電源が切れてしまったのだろう。机の引き出しから充電器を取り出して携帯電話にさしこみ、電源を入れた。

起動した電話の画面が明るくなれば、着信とメールの表示がある。誰からだろう、と思いつつまずは着信のほうを調べれば、そのすべてが遥からであった。

それは昨日の19時から、最初は5分間隔で次にはだんだん間隔をあけて着信履歴が残っていた。

「気持ち悪い……。」

思わず口にしたその感想に、学園のアイドルに気持ち悪いとは、と自分の言葉に自分で笑ってしまう。

おっとしかし、いけない。

「こういう風に線引きをするのはやめてくれと言われていたのだった。でもこれくらい思う事は許してくれてもいいよね？」
そう結論付ければ、和はうなずいた。

こうなればメールも予想がつくが、やはりすべて遥のものだった。20件にも及ぶその内容は、

『梓から話をきいた』『今なにをしている』『会いたい』

というもので、

最後のメールは22時に届いたものだった。
そこには

『寝ちゃったの？それとも返事をくれないだけ？』

というなんともヘタレ全開の言葉が書かれていた。
それをみて和は

「きもい……」

と先程よりもグレードアップした言葉を誰にかせるでもなく呟いた。

しかしどうしたものだろうか。

とにかくすぐに連絡したほうがいいのはわかっているのだが
思い出せば、広末に報告も済んでいない。

今回一番の功労者である彼を無視して先に約束を取り付けるのは
なんとなくためらわれた。

というか、単純にこの勢いが怖いと感じてしまった和は
自分に言い訳をして一時彼と会う時間をのばしたいなどと思ってし

まったのだ。

『ちよつとなら、いいよね?』

そう思い至つて、和は広末の携帯に電話をかけることにした。しばらくコール音が鳴つて、広末が出る。どうやらもう起床していたようだ。

『和?』

電話口で名前を呼ばれ、和は、広末?と呼び返した。

「起きてた?家いる?」

『ああ、いる。』

「今から行くから。」

『わかった。』

それだけを告げて、和はぶつと電話を切った。

これから行つていいかというおうかがいではなく、行くという断定的な言葉。

しかしふたりにはそれが普通なのだろう。

電話口の広末も別段抵抗することなくあっさりとそれを受け入れていた。

さて、と和は準備にとりかかる。

しかし、会う時間を延ばしたいなどと思つたものの、

遙から今日一日、着信がないということとはありえるのだろうか。

どんなに頑張つたところで、今日のうちには会わなければいけない気がしないでもない。

「……………」

自分の勘がはずれてくれるならばそれでいいのだが、ふっと短い息を吐き出して、和は服を着替えた。

いつものように広未の部屋をおとずれると、少し眠そうな顔をして広未が本を開いていた。

「あれ、もしや徹夜？」

「いや、途中仮眠はしてる。シリーズ物読み直してたら止まらなくてね。」

「ああ……」

よくやるよくやる、と納得してうなずけば、和はすぐさま広未の本棚に目をやる。
なにかめぼしい新作はあるだろうか。

「…和、今日どっか出かけるのか？」

「んー？さあ？可能性があるから一応。」

「ふん？」

広未がそんなことをきいたのは、和の格好がよそ行きであると気付いたからだ。

たいがい彼女はここに来るときTシャツに下はパンツスタイルだ。それが今日は珍しいことにスカートを履いている。

レトロな薔薇模様の白い生地のスカートは、太腿より少し上でふんわりと揺れていた。

上はシンプルに真っ白なＴシャツを着ており、合わせてある灰色のベストは

丈が少し長く腰よりも下までのび、ゆるく垂れていた。

ふわりと揺れる柔らかそうな生地をぼんやりとながめれば、

そっぴいばどうなったのだろうかとかふたりの結末が広未は気になりだす。

「…今日は、和泉君と会うからそんな格好なのか？」

「ん？いや、まだわかんないんだけどね。一応いつそうなってもいいように。」

会うとしたら学校付近になるだろうから私だってわかんないような格好しとこうと思ってさ。

誰かに目撃されたら冗談じゃないし。」

「……相変わらずまったく可愛気のない理由だな。」

「化粧もしといたほうがいいかなあ。多分大丈夫だと思うんだけど。」

「

途端に不安になったのが、自分の格好を角度を変えて和は振り返る。それを見た広未は、遙にまた同情しなくなった。

せめて嘘でも自分と会う為にお洒落をしたとでも言える可愛気があったなら。

しかし目の前の彼女にそれを求めるのは無理と言う話だ。

あるいは、本格的に遙を好きになれば、そういった感情も芽生えるのだろうか。

「…俺は普段のお前みてるからすぐわかるけど。どうだろうな。」

ごまかしたい相手が女子なら念には念を入れてもいいとは思っけど。

「うーん、そうか。そうだね。あとでまた考えよう。」
「で、結果報告に来たんじゃないのか？本棚の前陣取って話をする気配がないけど。」

その広末の言葉に、和もそれを思い出したようだった。
あ、という間が抜けた声をあげれば、慌ててベッドに座る広末の隣に腰掛ける。

「それなんだけどさー…まあ報告は報告なんだけど。」
「…ん？」

歯切れの悪い和の言葉に若干の悪い予感化したものの、
今日会う予定があるというのならそれほど変な方向に向かってはいないはずだと
広末は和に詳しく話すよう先を促した。

うなずいた和から全ての話を聞き終えると、
広末は目の前の和の頭を多少強く叩いた。

「いった！」
「阿呆。早く連絡をしろ。とつととさつさと早急に会う約束を取り付けろ。」

「で、でも」
「でももくそもない。お前は…遙君の気持ちを少しは考えてやれ！
ずっと拒絶されてた相手がやっとすこしでも自分を受け入れてくれると思ったのに
直前で焦らされてあげくの果てに放置プレイってどういことだ、
この悪女が…！」

なんとも簡潔にわかりやすく今の状況を解説されれば
確かにその言葉はまったくもってその通りだった。
しかしいざこちらから連絡となると、走る妙な緊張感は何んだらう。

「……む、むこうから来るの待ってるってのは「却下。」

即答でかえされて、和は小さくうめき声をあげる。

確かに、昨日のおびただしい着信を考えれば、遥が拒否されたと考
えてもおかしくない。

あれだけ携帯を鳴らしたにも関わらず応答することはなく、
故意ではないにしろ電源が落ちてしまったのだ。

ひよっとしたら相当落ち込んでいるのかもしれないと考えれば、
なんとか連絡をする決心がついた。

和はおそるおそる電話帳から遥の名前を呼び出し、発信ボタンを押
した。

コールがしたかもわからないうちに、遥の声が電話口から響いた。

『和!!!?』

『はやつ…』

思わず言ってしまったその言葉は、遥にもきこえていたらしく
盛大なため息をつく音が和の耳に届いた。

『どうして昨日出てくれなかったの?』

「あ、ごめんね、梓さんに買い物付き合わされて疲れて帰ってすぐ
爆睡しちゃった。」

『……………それだけ?俺の着信を無視してたとかじゃないんだね!?!』

「違うちがう。ほんとごめん。昨日のは全然故意にじゃないから。
何度も鳴らされて電源が切れちゃったみたいで。」

『なんだそっか、良かった…』

心底安堵したかのような声を遙があげるの、和も少し安心した。落ち込んではいるようであるが、怒ってはいないようだ。彼は切れると恐ろしい。ここ最近の和がなによりも学んだことはそれである。

『今家にいるの?』

「うん、そう。今起きたばかりなの、ごめんね。」

「遙君、おはよう。和なら俺の家にいる。」

堂々と自己保身に走るこんな女のどこがいいんだ?」

和のとつさの機転むなく、広未はさつと和の電話をその手から奪えば、

遙に真相をばらしてしまった。最悪な形で。

『え、広未君?…もしかして部屋にふたりでいるの?』

「そう、いつものことだよ。ところでさっきの質問。本当に良いのか?」

かなり色んな覚悟が必要だと思っけど。」

固まってしまった和は、ふたりの会話きいている余裕がなかった。いま彼女の頭の中にあるのは、どうしよう、という単語だけである。

『…その審査にならとつくに通ったと思ってたけどね?』

和の兄というかお父さんみたいだなあ広未君。』

「いやあ、なかなかどうして君がそういう性質で助かったよ。

俺はこれから全力で君を支持しよう。」

そう高らかに宣言すれば、電話口の遙が笑った。

ブリザードが！電話のむこうにブリザードがみえるっつっつっ！…！

『…和、詳細は会ったときに訊こう。とにかく今すぐ学校の最寄り駅まで出てきて』

「え、あの」

『本当なら家に迎えに行ってもいいんだけど？』

「最寄駅まで全速で向かわせていただきます。」

『…即答しなくても。じゃあ、俺もすぐ向かうから。』

俺のが早く着いたら、ごほうびちようだいね。』

言いたいことだけ伝えれば、じゃあ、と言って遙は電話を切った。ごほうび…っっていうのはどういった種類のアレなんだろうか…。少し考えれば、和はざっと蒼褪める。

「広未！じゃあ私行くから、またね！！」

慌しく自室の扉が閉まれば、広未はひとつため息をついた。

広未は思う。彼女だけが一足飛びで先に進んでしまったな、と。

愛しい相手。大切なただひとり。

自分はいまだそれをみつけてはいないのに、どうやら彼女はそれを手に入れそうだ。

自分の半身だと思っていた彼女が自分より先に唯一をみつけてしまったという事実が

なんだか心底うらやましかった。らしくもなく頬にキスマでしてしまった。

「まあしばらくは…協力半分、冷やかし半分というところか。」

新しい玩具をみつけたかのように、広未がひとり微笑んだ。

自分にも、いつか唯一がみつかるといいな、と願いつつ。

駅の改札を抜けたとき、集団の目をひく人間がひとり立っているのがわかった。

周囲の女性が指をさしてはざわざわと囁いている。

それを確認したとき、和はがくつと膝をつきそうになった。

たったいま自分が危機的状況に置かれた事実には愕然とする。

なんならこのまま逃げ出したくもなかったが、後が怖くなるだけだとなんとか思い留まる。

そのざわめきを気にすることもなく、視線の中心には和泉遥が立っていた。

『本当に、慣れてるんだなあ……』

生まれながらにしてずっと注目を浴びてくれば、

いやでもそれに慣れるしかないのだろうということを和は感じた。

いつもなんら気にすることもなく視線を受け流してはいるが、

それをスキルとして身につけるまでは大変だったに違いない。

遥は自分が目立つ人間であることを自覚してはいるものの、

自惚れ屋ではないことに和は気が付いていた。

自分のように地味でありたいと思ったことは一度もないのかもしれないが

それでも取り巻く環境を、一度もうつとおしいと思つた事がないのは嘘だろう。

そんなことをぼんやりと考えれば、遥に対する見方もおのずと変え

られるかもしれない。
そう結論付けたとき、見知らぬ声が隣から発せられた。

「ねえ、待ち合わせ？」

声のほうを振り返れば、完全に知らない男であった。

和は頭にめいっぱいの疑問符をつけて男をみる。

ひよっとして人違いだろうか。

そう思つて黙つていれば、再度声をかけられて和は自分に話しかけられているとわかった。

「あの。なにか御用でしょうか？」

「…面白い子だね。うん、あるよ、御用。」

「？あの、お知り合いの方ではないですよね？」

「うーん、あえて言うならこれからお知り合いになりたいかな。」

「…はあ……？」

男の言葉がまったくもつて理解できなくて首を傾げていると後ろから誰かに肩をそつとつかまれる。

振り返れば、そこには見知った男が立っていた。

「和、なにをしてるのかな？」

「あ、和泉君。ごめんよー、待ったかい？」

にへらつと笑つて和が下から見上げるので遙は愛しむように微笑をかえす。

「全然。それにどれだけ待っても和のことを考えながら待ってる時間は幸せだよ。」

「あっはっはー、またそういうことを！もうその口縫い付けてやる

うかなあー。」

「そうしたら今度は態度で示さなきゃいけないね?。」

「……うん、いくらでも喋ってくださってけっこうですよ?。」

自分を無視して展開するそのやり取りにいいかげん苛立ったのか先程まで和をナンパしていた男が声をあげる。

「おい!無視してんじゃねえよ!。」

「ああ、なに、まだいたの?悪いね和は俺と待ち合わせだから消えてくれる?。」

肩においていた手をそのまま和の腰の高さにおろして前にきゅっと交差させながら、
遙は男を見やる。

「てめ……」

「ああ?。」

まだ食い下がろうとする男に、先程までとは打って変わって低いドスのきいた声で睨みつければ、男は小さく悲鳴をあげ、あっけなくどこかに走って行った。

「おお…すごい。…ていうか彼はなにがしたかったんだろうね?。」

「和…あのさ、本当なんでそういう方面だけに鈍いの?いや違うなもつと狭いな…」

そういう方面も鈍くないくせに自分が絡むと途端に鈍くなるのはなんでなの!?。」

「ん?どういこと?。」

心底わからないという顔を和がすれば、遙は、はああっと大きなた

め息をついて
和の肩に自身の顔を埋める。

「…ナンパされてるのにまともに受け答えをしないように。」

「え…？あ、あれナンパだったの！？」

「……………やっぱり気付いてなかったんだね。」

「そうだった経験がなかったもんで…へえーあれが！勉強になるなあー。」

「学習してくれたの？」

「うん、次同じことがあってもさすがに今日みたいなやり取りはしない。」

「ないだろうけど。」

「最後の一言は余計だけど…そう、良かった。そうじゃないと俺の気が休まらないよ。」

「あっはっは、ごめんて。」

なだめるように遙の頭をぽんぽんと叩いたところで、和は気が付いた。

おもいつきり自分達が注目されているという事実である。

急いで力の限り遙の拘束から抜け出せば、一步分の距離をとった。

「和？急にどう…ああ。」

周りの視線に遙も気が付いたのか、和が急に離れた理由に納得したらしい。

しかしこの男…本当に気にしないやつだ。少しは気を配ってはくれないだろうか。

自分もついつい彼の頭をぽんぽんしてしまっただが、

そもそも公衆の面前でああも堂々と抱きつかれたりするのはいかなものか。

幾ら生まれながらにして目立っていたとしても、道徳心は大切ではないのか？

「移動しようか。お店にでも入る？」

「そうだねえ、暑いし…あの、あそこの店はだめ？」

和は昨日もおとずれた喫茶店を指差した。遥はそれに二つ返事でうなづく。

ふたり並んで店に入れば、昼時であるからかいつもより少し混んでいた。

この前は窓際の席だったが、今度は店の奥側の席へと向かい合って座った。

「メールは読んでくれた？」

その遥の問いに、和は視線を右上にさまよわせる。

「あの…メールって、どのメール？」

「あ、ああ…そういえばすごい数送っちゃったんだっけ？」

「うんまあ。…あ、あれ？梓さんから訊いたとか書いてたやつかな。」

「…そうそう！そのこと。…梓にね。昨日の18時頃呼び出されたんだ。」

俺にはもう愛想が尽きたんだって。振ったんだか振られたんだかよくわからなかった。」

肩をすくめて遥が発したその言葉に、和は驚いた。

確かに彼女はあきらめるようなことを口にはしていたが…

まさか本当に遥のことを終わりにしてしまうなんて思いもよらなかった。

自分が出せなかった結果のせいで、梓を不幸にしてしまったのだからか？と

ふとそんなことが頭をよぎるが、次の瞬間にはそれに異議を唱える。

人の心は、多分そんなに単純なものではないだろう。

たとえば和と遥がこういう形に至っていなかったとしても、

遥が梓を受け入れていたかはわからない。

ともすれば自分と遥が今こうしていたって、未来にはひょっとしたら梓と遥が隣り合って笑っているのかもしれない。

可能性はいつだって未知数だ。

そして人はみんな自由意志で恋をする。

それならば、誰が誰を咎めることができようか。

遥と梓がこうなってしまったことは、正直自分のせいだと思うところはやはりある。

けれどもそれをずるずるとひきずっていたって梓にも遥にも失礼だろうと思う。

今自分にできる事は、とにかく目の前の男に向き合うことだ。

そうした上で出した結論を、きつと遥は責めない。

そう思えるくらいには、目の前の男を信用できる自分がいて、そこは少し複雑であったが。

「…それで、一応、俺も和も仁義は通したんじゃないかと思うんだけど？」

どう？とちらちとこちらを問う遥の顔をみれば、少し不安気な顔をしている。

その顔をみてふっと笑って、和はひとつうなずいた。

「そうだね。……………和泉君。」

「はい。」

「私はこれから、あなたと向き合う努力をする。」

正直、和泉君の思う結末には…なるかわかんないけど。万が一くらいに思っておいて。」

「え、そんなに低いのか？」

少々焦って遥が言うので、和は苦笑して応えた。

「期待はしないで。私にもわかんない。今の所はありえないって思ってるのが事実。」

「…はー。わかった。精進するよ。」

「…では、友達としてよろしくお願いします。」

深々と和が頭を下げれば、遥もそれにならった。

お互いに顔を上げたタイミングが合って、目と目があえばおかしそうに笑う。

「普通こんな宣言しないよね。」

「和泉君が重要課題みたいに言うからなんか仰々しくなっちゃったんじゃない。」

「まあいいや、これから俺は全力で和を口説けばいいんだもんね？」

にこにこしながら遥がそう言えば、和は呆れた顔をする。

「あのねえ、前から思ってたけどいくら目立つのに慣れてるって言うたって」

和泉君は気にしなすぎなの。ちょっとはマナーとか考えてよ。公衆の面前で抱きつくとかそういう行った行為は一切しないように。」

その言葉に遥は口を尖らせる。

だからそういつかわいごぶりっ子も如何なもんだろっか。

「和に会ったら最低でも三回は抱きしめないと俺死んじゃうもん。だったらすみやかにふたりきりになってくれるの？」

「…ふたりきりになったところでそれをやられたら私は身の危険を感じるんだけど。」

「ああ、そこらへんの察しはいいかげんつくようになっただね？」「基本的に今でも信じらんないんだけどね。いいかげん色々やられてるから…」

前にさあ、宮田君にも質問しちゃったくらいだもん。」

「質問？」

「つきまとわれてる時にね、

一回、付き合うの承諾しちゃうはずすぐに飽きてくれるかもなあと思つたことがあつたんだよね。

あのときはホラ、拒否してるのが面白くてしつこくされてるんだと勘違いしてたから。」

「えっ…そんな嬉しい事を考えてくれたときがあつたの!？」

「まあねえ…え、こんな考えで付き合い始めても和泉君は良いの？」

「そりゃあ好きになつてくれれば一番だけどね。」

でも惜しいなあ。もしそれを実行してくれればずっとそばに置いておけたのに。」

少し遠い目をしてほうつと遙が息を吐いた。和の背中を冷や汗が伝う。

「…それって、別れる気はないってこと、だよな？」

「もちろん。泣いて叫んだって離してなんかあげないよ。」

につこりと微笑んで爆弾を落とされた和は、心底実行しなくて良かったと思つた。

「それで質問て？どんなことを訊いたの？」

「ああ、そうそう…えーとね、

例えば私と密室にふたりきりになったとして手を出す気になるかってきた。」

「……………なにがどうしてそんな質問したのかな？」

「いやほら、付き合っただけに襲われたら嫌だけど

果たしていつも美人ばっか食ってるモテ男くんは自分みたいな地味な女に食指が動くものなのかと

参考までにきいてみたてさ。宮田君もすごい俗に言うイケメンじゃない？

だからちようどいいかなと思って。」

きいたんだけど…という最後の言葉が尻すぼみになったのは

遥が無言で和を睨みつけているからだだった。

笑顔を通り越してのその表情は、和がなによりも恐れる遥の怒っている表情だ。

「浩平以外の男にもまさかそんなときいてないだろうね？」

「それは、宮田君にやめなさいって言われたからやめた。」

「…ああ、あのとこのことか！そうか質問の内容ってそれだったんだね。」

本当に、浩平が止めてくれて良かったよ。そんな事きいたら誘ってると思われても仕方ないよ？」

「宮田君にもそうやって注意された。…でもさー、なんで誘ってるとイコールになんの？」

「…チョコ食べたくない？ってきかれたら少なからず、

え、持つてるの？くれるの？って期待しない？」

「んー…うん、なるかも。」

「同じ事だよ。」

襲う気になるか？つてきかれたら、え？襲ってほしいの？つて少なからず思っじゃないか。」

「えーなんか例えが極端なような…だつてきく相手つてそんないかにも飢えた人とかじゃなくて

宮田君とか和泉君とか立つてただけで女が寄つてくるような人たちだよ？」

「それつてつまり遊び人てことでしょ？」

慣れてる相手にそんなこときいたらますます危ないじゃないか。」

「うーん、でもさ、私だよ？」

「……あのね、和。世間一般にみたつて君は充分可愛いに部類する容姿をしてるんだよ？」

「じゃなきゃナンパなんかされるはずないじゃないか。」

「今日なんてそんな特別可愛い格好して、俺がどれだけときどきしてるかわかつてる？」

さらつと口説き文句を入れてくるあたり、本当にこの男は、と思う。

「学校付近だからねえ。私だつてわかつたら嫌だと思つて。」

「…そうかこつという格好をしなければいいのか。」

「どつちにしる俺はいつだつて和が和つてだけで襲いたくて仕方ないけどね？」

「……もう本当そついうのいいから。」

あきれ返つて和がうんざりした顔をすれば、遥は面白くなさそうに口を尖らせた。

「本当に和は難しいなあ…ねえ、ごぼつび覚えてる？」

「え……」

急な話題転換に、一瞬うまく誤魔化すことを和は忘れた。

「あと、広末君から頬にキスされてたでしょ？それも込みでおしおきとごほうびを兼ねたお願いをきいてもらわないとね？」

にこにこ遥がたたみかければ、和はもうなにも言えなくなってしまう。

そうか、それも忘れていなかったのか、と、絶望して顔を自身の右手でおおった。

「……………なにが望みななの？」

「叶えてくれるの？」

大きく息を吐けば、和は観念して遥と向き合った。

「できない事はできないって言うからね。あくまでできる範囲でなら、だよ。」

「大丈夫。充分、許容範囲内だと思うよ？」

「……………で？なんなの？」

「あのね。」

続く遥の言葉を、

まるでなにかの刑が執行されるのを待つ罪人のような心持ちで和は待っていた。

第十五話「束の間の恋人」(前書き)

若干のR15表現を含みます。苦手な方はご注意ください。

第十五話「束の間の恋人」

シフォンブラウスに黒のワンピースという出で立ちは、一見して派手さはないが清楚で大人っぽい雰囲気を出しており、少々みられたくらいでは笹森和だとは気付かれないだろう。

今日一日絶対に、クラスメイトにひいては学校中の女子に自分自分だと気付かれてはならない。

第二に、彼の隣で変に悪目立ちする服装もしてはならない。ばつちりと化粧をほどこした自身の顔と外行きの服装を鏡にうつせば、

和は深く長いため息をひとつ落としながらも、自宅の玄関をあとにした。

待ち合わせ時間の20分前だというのに、彼はもうすでにそこに立っていた。

一体いつからその場にいたのだろう。ちょっとした人垣ができてい

る。芸能人なのではないか、モデルなのでは、という女性達からの囁き声がそこかしこから聞こえる。

『…………おっと？』

駅前にある時計台の真下で、腕時計をちらちらとながめつつ、和泉遥は立っていた。

和はすぐにも歩いていこうとしたが、思い留まる。

ひとりの女子が、遥に話しかけてきたからだ。

『あれは俗に言う、逆ナンというやつかな？いやそれとも知り合いか？』

柱の影から興味津々にその様子をつかがう。

一見すればどちらかはわからなかったが、女性のほうが積極的に遙に話しかけているのがわかる。

このまま連れ去ってはくれないだろうか、ともすればそんなことを思う。

なぜならば今日、和は遙の隣を恋人として歩かねばならないからだ。

あの日、遙から出されたごほうびとおしおきを兼ねたお願いというのは

一日自分とデートをしてほしい、というものだった。

思いのほか軽い願い事だな、と安心したものの、遙が提示したのは真実の意味でのデートだったのだ。

その日一日限定で、和と遙は恋人同士になる、というもの。

それはつまり、その一日で恋人同士がするようなことを遙は和にできるということであり。

和はおおいに悩んだ。

しかし遙はそんな和に、許容できる範囲内でしか振舞わないと誓った。

遙にとっての自分の価値をいまだ軽んじる所がある和は、まあ警戒しすぎるのも自意識過剰か、と

渋々ではあったが最終的にはうなずいたのだ。

しかしいざ現場に来て、さあ行かねばと思えば躊躇する気持ちもあ

る。

そもそもこの関係性もなんだかなあ、とそこからしてつつこんでしまっ自分が出て。

それならばやはり承諾すべきではなかったらうかと色々と考え込んでしまっ。

『…っと、今何時だ？』

どれほど考えていたのだろうかと腕時計を見やれば、先程から5分ほどしか経過していなかった。

さすがに遅刻は主義に反する、と和はひとつ安堵の息を吐く。

そうして展開が気になり時計台下に目を向ければ、なんと女性が自身の腕を遥のそれに絡めこんでいた。

『おおすげえ、肉食女子ビバ！！』

心の中でいけ、そこだ！やっつけてしまえ！などと女性を応援してはやしたてる。

遥はいえ、最初のうちはやんわりと断っていたのだろうか

さすがに女性に苛立ったらしく、怖いくらい冷たい瞳をしてあさつてのほうを向いていた。

女性が何事か話しかけても一切無視を決め込んだらしく、遥は微動だにしない。

しかし意地になっているのか、腕を絡めた女性はそこから立ち去ろうとはしない。

かなり綺麗な女性である。全身から自信というオーラがにじみ出てきそっだ。

自分とはなにもかも違っタイプ。しかし遥の隣にはずいぶんお似合っだ。

『うーん、形勢は不利か？頑張れ肉食女子！』

しかしこのまま帰ったら言い訳できないだろうか？

そうだ、たとえば、女性といっしょにいるところをみて悪いと思っただので

そのまま引き返した、とかなんとか言っってしまう。

延期になってしまえばそう変わらないけど、うまくすればデート計画自体がなくなるかもしれない。

和はふとそんなことを思いつき、にやりとひとつ微笑めば、
回れ右して今出たばかりの改札へ戻ろうとする。

が、いつかの日のようにそれを阻む男が和の前に立つ。

その日を彷彿とするように、そこに立つのはまったく見知らぬ男だった。

無言でその男の横をすり抜けようとするが男はそれを許さない。

和が右にずれば男も右にずれる。和は眉間に皺を寄せた。

「…なにか？」

「彼氏かなにかと待ち合わせ？」

へらへらと軽そうな笑いをたたえて男がたずねる。まさかとも思ったがこれは決定ばいな。

にしても人生二回目がこうも短いスパンでやってくるとは、どういうことだろう。

ひょっとして遥のフェロモンでもお裾分けされてしまったのだろうか。

そんなもんまったくもっていらないのであるが。

「…降りる駅を間違えたので急いでるんです。」

「えー、そのわりにずっとこの柱の前にいたじゃん。すっぱかされたの？」

ずっとつていっても10分弱くらいじゃないだろうか。

しかしあれか、ナンパ男からすれば刹那主義なのだろうか。けつこ
う長い時間なのだろうか。

なんてつたつてその一瞬一瞬が一期一会なのであるうから。

「…あのね、嘘でも本当でもあなたの相手をする気はないの。あつ
ちいけ。」

すわった目をして和がそう言い放てば、一瞬男が躊躇する。

今日の和の見た目でおとなしそうだと判断したのだろう。予想外だ
つたようだ。

しかしなおも食い下がろうと、あるうことか和の右腕を男がつかん
だ。

「けつこつ強いんだ？」

「…るっせえな、帰るんだからどけっ！！！」

完全に切れた和はもはや音量も気にせず怒鳴り上げた。そのときだ。
目の前の男が吹っ飛んだ。

何が起こったのかまつたくもって理解ができず、和は目を丸くして
固まった。

次には後ろからなにか冷気のようなものを感じて、和は思わず身震
いする。

「俺のもんに触んじゃねーよ。」

いつかの、いや、いつかよりもずっと低いドスのきいた声でナンパ男を吹っ飛ばした男が静かにそう言った。あまりの出来事に固まっていたが、和はすぐさま後ろを振り返れば、予想したとおりそこには遥が立っていた。

「ちょっと！あんたのもんになんかなってない！」

睨んで和が遥に抗議すれば、遥は和の右腕をひっぱり自身の懐まで閉じ込めれば

間髪いれずにその顎をつかみ和の唇にキスを落とす。

それは触れるだけのものではあったものの、和を固まらせるには充分である。

そんな和を遥は腕の中に閉じ込め抱きしめる。

「今日一日、和は俺のものでしょうか？」

「…一方的に奪われるのなんて絶対に御免だけど？」

停止しそうな思考をなんとか止まらせ、震える声で和がなおも抗議をすれば、

遥はふっと息を吐いて笑った。

「もちろん、俺の全部も和のものだよ。」

「…っ要らない！！」

遥の腕の中で思いつきり暴れ、なんとか和は距離を取ることに成功した。

それを少しつまらなそうな顔をして遥はみている。

「あれだけ人目を気にしてくれと言ったのに！公衆の面前でななななんてことをっっ！」

「…和、可愛いー…。」

自覚をすれば、みるみるうちに和の顔が赤くなる。

その和の怒りの言葉がまったく耳に入っていないのか、和の顔をみて遙がとろんとした顔をした。

周りからすればどこからどうみてもバカカップルの言い合いにしかみえないだろう。

「…お願いだからさあ、人の話きいてよ…やめてほんとに、こっぴうことすんの！」

「今回は和が悪いんじゃないか。」

「…は？」

なにが悪いというのか、とまた抗議をしようと考えたが、和はそこでハットとなる。

自身の行動を振り返れば、その遙の言葉は果たしてどこから和をみていたのだろうか。

「和、ナンパはもう学習したって言ったよね？それなのにあんな知らない男にあらうことが触られて」

「いや、腕をちよっとつかまれただけで」

「触られたのは事実でしょう。」

きっぱりとした口調で遙が言うので、和は馬鹿馬鹿しくなり口答えする気も起きなくなる。

やっぱり彼は病院に行ったほうがいいのではないだろうか。

そういえばと思ひ吹っ飛ばされた位置をちらりと視線だけで確認すると、

ナンパ男はどこかに消えていた。

その和の視線が気に入らなかつたのか、遙はすつと目を細める。

「それに…なんで帰ろうとしてたの？」

「……………！！！」

やはり、というべきか。

予想してはいたが彼は一部始終をみていたらしい。

遙のうしろからあふれんばかりの冷気が顔をだしている。

「お待ちなさい。それにはきちんと理由わけがあるのです。」

その冷気を制すように、腕をめいっばいのばし右手の平を顔の前に突き出した。

「わけ？」

「そう。待ち合わせ場所についたら、あなたの隣に女性が立っていたから。」

ひよつとしたら、知り合いとの約束あつたの忘れちゃってバツテイングしたのかもしれないな

と思つて。だからメールでもして私はその場を去ろうかなと考えたのですよ。」

「女性が隣に居たから？」

「そう。」

「俺が和とのデートの日に他に用事を作らなかつた？」

「さあ、わからない。」

「……………和。本当は俺が言い寄られてるところから見ていたんじゃないの？」

それでそのまま彼女が俺を連れ去ってくれないかなーなんて考えたけど、

全然俺が動く気配がないから都合良いとこだけ目撃したことにして

帰ろうとしてたんでしょ？」

あんまりにもズバズバ言い当てられたので心臓が止まるのではないかとというくらい衝撃を受けたが、なんとかそれを顔に出さない事に成功した和は、しれっとその言葉に続いた。

「そんなの和泉君の想像でしょう？ 実際私は目撃してすぐに帰ろうとしただけ。」

あくまでも善意の心でそれを実行しようとしたまで。純粹に彼女に場を譲ろうと思ったの。」

「……とにかく、俺は今日一日和と絶対にいっしょに過ごすから。なにがあっても。」

他に約束なんてないし、たとえあったとしても今日のデートは中止にしない。いい？」

「……はいはい、わかりました。」

観念して肩をすくめれば、遙はそれにながずいた。そうしてすつと和の右手をとる。

「なに？」

「なにっつて、なに？ 手をつなぐんだよ。」

「え、いや「広末君とはつないでた。」」

即答で切り返されて、うんざりといったような顔を和がすれば、その顔をのぞきこんで遙が囁いた。

「なあぎ？ 今日の俺達の関係は？」

「……恋人同士かつこ飯、かつことじ。」

「（飯）は余計だけど。ね？」

にっこりと遙が微笑むので、盛大なため息をついて和はそれを受け入れた。

遙が和の指と指のあいだにその指をさしいれば、所謂、恋人つなぎというものの出来上がりである。

広末ともそんな風につないだことがなかったのでまじまじとその手をみつめてしまう。

「……こんな暑いからぜったい汗でべったべたんなるよ、んな密着させて。」

「和…普通はね、そういうことは言わないだよ、心の中で汗大丈夫かなとか可愛く思うものだよ。」

「私はべたべたするのが不快なだけで和泉君がどう思おうがどうでもいいんだけど。」

「というかそれで恋心が冷めてくれるっていうんならいくらでもつなぎますが。」

「え、そんなのありえないけど。むしろ舐めると言われたらそうするけど。」

むしろ積極的にそれをしたいと感じている自分が「警察を呼ばれなければ黙りたまえ。」

その言葉に遙は楽しそうにくすくすと笑った。

しかし、いつまでつないでいるんだろうかこの手。

まさか今日一日ずっと、とか言わないだろうか。

悶々とそんなことを考えていれば、遙が和に話しかける。

「和、観たいのってどの映画なんだっけ？」

「え？ああ、あれ。…あのさ、本当にいいの？和泉君が楽しめるかどうかかわかんないよ？」

おとずれたのは、いくつかの号館にわかれてる小さな映画館で和は飾られているひとつのポスターを指差した。

全国ロードショーのものもやっているのだが、

和が目当てなのは全国区で大々的に公開していない種類のものなのだ。

人の好みはそれぞれで、まして映画なんて個人の嗜好で左右されるものであるし

誰かに強制されて観るものでもない。娯楽なのだから。

和は自分の趣味を悪いとは思っていないけれど、絶対だとも当たり前だが思っていない。

大衆的な映画にはその良さがあがり、アンダーグラウンドなものにもその良さがある。

どちらを好むかは、また両方を好むかは人それぞれの問題で、だからこそ和は遥が自分と同じものを観るのに抵抗があつた。

こういった類のものには和は特に敏感なのだ。

自分がされて最高に嫌なことといえば、

観たくもない恋愛映画を強制的に観せられたり、

行きたくもない場所に休日返上して行かされたりすることだ。

なによりもこの空気を侵害されることを嫌う和にとって、

遥がやるうとしてることが信じられなかった。

「これね、人間の悪意を題材にしたような映画だから

観終わった後、面白かったねとか笑いながら言い合うような映画じゃないの。

それに絶対に毒気にあてられて暗くなったりとかすると思うの。

だからね和泉君はあつちの映画とかのほうか

「和。」

遥のたしなめるような声音に、和の肩がびくりと揺れる。

「あのね、気遣ってくれるのは嬉しいけど俺はなにより和といっしょにいたいよ。」

「でも」

「それに何度も言ったけど和の空気や世界に触れてみたいんだよ。どういふものを好きなのかとか、知りたい。それとも俺にみせるのは嫌？」

顔をのぞきこまれてそう問われれば、和は無言で首を横に振る。

それに笑顔でうなずけば、遥は行こう、と和をひっぱった。

チケットを買う際にも、ひと悶着あった。

遥はかたくなにチケット代を二人分払おうとするのだが、和が頑としてそれを譲らない。

恋人同士なのだから良いのだと遥が言えば、

付き合ったとしたりして自分はなにもかも割り勘にするのだと和が言い返す。

結局、今日一日自分のぶんまで支払いをしようものなら即座に帰ると言い出した和に

遥が折れる形となり事態は収束したのであった。

「和、アイスティーで良かった？あとハイ、これ。」

「へ？これって……」

「朝、食べてこなかったって言ってたから観る前にお腹に入れられればと思って。」

手渡されたのはどこで買ってきたのか、ペットボトルに入ったアイスティーと

少し小さめのパンだった。すぐ目の前にコンビニがあったが、まさ

かそこまで行ったのだろうか？
劇場内に入っただけに、ちょっと、と言って席を立ったのでつきりトイレかと思っていた。

映画館といえば定番はポップコーンであるが、

和は上映中にそれを食すのがあまり好きではなかった。

手がべたべたするのも、食べるために手元をゴソゴソと探る行為も、集中力が切れて現実世界に引き戻されるかのように気乗りしないのである。

隣の人がそれをやろうが気にならないのだが、

自身でそれをやってしまうとどうにも映画にのめりこめないような気がしてしまう。

要は自分は不器用なのだろう、と和は思っていた。

しかし、目の前の男がそれすら読んで今日の前にこのパンを差し出していたのだとすれば恐ろしい。

事前に調べてました、というほうがまだ納得できそうだ。

上映まではまだ15分程時間がある。食べ終わるには充分だ。小腹も減っている。

色々と考えが巡ってしまい、素直に遙からそれを受け取ってしまった和は、

その数秒後には八つとする。

「これ、いくらだった!？」

「いいよ、それくらい。」

すごい剣幕で詰め寄りだした和に、遙は呆れてため息を吐いた。

「そういうわけにはいかないよ、主義に反する!」

「奇遇だね、俺もデートで女の子にこんなものの代金まで徴収する

のは主義に反するよ。」

「むぐ…！」

そういう、主義的な事を持ち出されると弱い。

あくまでも和のモットーは、自分は自分、他人は他人。

そして自分がされて最も忌み嫌う行為を相手にしないことである。

しかしどちらかが折れなければ、他人とは付き合っていけないのだ。

「…せ、世界に歩み寄ってくれるって、言ったじゃん。」

「それはそれ、これはこれ。ね、和。笑ってありがとうと言っても
らいたくて俺はこうしたんだ。」

お願いだから黙って受け取って？それなりに下心を含んでるって考
えてくれればいいんだ。

無償でそうするわけじゃない。ギブアンドテイクは好きだろう？」

「……それは、でも、私にはなにを返していいやら」

「和と今いる時間。それを俺はもらったの。だから和はこれを受け
取る。」

さっきはこっちが折れたんだから、今度は和が折れてくれるよね？」
「……………わかった、ありがとう。」

渋々ながら、今度は和が折れることとなった。

なにもこんなことで、思う人間もいるだろう。しかし和にとっては
一大事だ。

中学時代の失敗をひきずっているからなのか、

傲慢になってしまうこと、与えてもらおうとばかりすることを今の
和は嫌う。

自分がこうありたい、こうしていたい、と願うならば

それに見合った事はするべきだ。そうしなければ攻撃されても仕方
がないし

そこに理不尽さを感じるのは間違っている。

だからこそ、努力して勝ち得たものをなんの権利があつて遥は奪つのか、と

少し前の和は目の前の男を恨んでいた。

しかし、不思議だ、と思う。

自分には、与えてあげられるものが一切無い。

遥の隣にいて釣り合いが取れる人間でもないし、同じ趣味を持っているわけでもない。

しかし遥はそんなことをまるで気にしていないようだ。

今でも半信半疑とはいえ、和は遥の気持ちを信じようと決めた。

だからこそ、わからない、と思う。

なにがそこまで彼を動かすのだろう。自分の中のなにを彼は求めるのだろう。

彼ならばもっともっと上等な女が手に入るのに。

なによりも、彼の隣を心底望む女性といっしょにいるじょうが、余程幸せであるのに。

そうやって隣の彼をちらとみれば、視線に気付き微笑む。

『…今まで、こんな顔でみられてたのか。』

愛しむような顔で笑われては、和とて本当にこの男は自分の事が好きなのかもしれないと

思わずにはいられない。

今までこんな視線を一身にむけられていたのかと思うと、どうにもむずがゆい。

というか所構わずこんな風にみられていたのだろうか？

それはものすごく目立つし、ものすごく迷惑だ。遥のファンが自分を睨むのもわかる。

そこまで思っ、て、しかしまあ、なんとも自意識過剰なことを考えるものだな、と
心の中で自嘲した。

まだまだ完全に素直にはなれないが、ひとつ譲歩することができた
だろうか。

とにかく、信じてみなければ変わらない。そうしなければ終わら
ないのだ。

きちんとした結論を、彼が納得のいく結論を、なるべく早く出さな
ければいけない。

時間がかかればかかるだけ、彼の失っていくものは大きいだから。

そう決心したとき、上映開始のブザーが鳴った。

映画館の中で、もうそこに座っているのは和と遙だけだった。

ぼうつとした状態で画面をみつめる和を、遙は黙ってみていた。

時間にしたらおそらく数分のことだったが、和がやっと覚醒したと
き、ひどく慌てていた。

「し、ごめん！いつも良い映画だったなあと思うところなっち

やって！」

焦って立ち上がりながら出ようとすする和の手を、遥はつかむ。

「そんなに慌てなくても大丈夫だから、ゆっくりいこう？」

にっこり笑ってそう言われ、和は無言でうなずいた。

てっきり怒っているのではないかと思っていたら、遥はただにこにこしているだけだ。

話しかけることもなく、和の隣で黙って待っていてくれた。

映画館を出て、和が遥にたずねた。

「あのさあ、なんで終わっても声かけなかったの？」

「え、と…かけられたくないと思って。」

少し視線を泳がせる遥をみて、それが気まずさからなのだろうと感じた和は

ひとつため息を落とした。

「それって気を遣ったってことだよね。」

もしそうなら、和泉君ともう一度映画館は来ないほうがいいね。

これっきりにしよう？」

和は少し感動していた。映画館において終わったあとにハイテンションで

感動や涙を分かち合うことが、和は少々苦手だった。

自分の中で今観たものを反芻しながら、咀嚼し、その余韻を味わう。しかし小学校時代や中学のはじめにはまだあった友人付き合いの中で、

そういつた行為は自身のわがままなのだと気が付いた。誰かと共にすれば、それを分かち合わなければいけない、自分の趣味と合う人間は広末をおいて他にいなかったのだ。

もしも遙が、自分と同じではないにしろなんらかの気持ちで映画館を去らなかつたのだとすれば、

和はもう一度遙とこういつた場を設けても苦痛にはならないと思っていた。

しかし遙がなにかしら自分に合わせて無理をしたとするのならば、それはやはり良くないことだ。

映画はやはり、ひとりで観るものなのだ、という結論をだした。

しかしその答えは気に入らなかつたのか、遙は握っていた和のてをより一層強く自身の手で包んだ。

その力が和の手に伝わって、思索していた和は慌てて遙のほうをみる。

「……本当のこと言ったら、和は絶対に怒るもん。」

少し拗ねたような口調で遙がそう言うので、和はどうしたのかと訝しむ。

「ん？あ、なに、さっきのって他に理由があつたの？私が怒るってどんな理由？」

眉間に皺を寄せて和が続きをうながした。

「……………気付かなかつたんだよ。」

ぼそりと遙がうつむいて言うので、和はえ？と訊きなおす。

「上映中、和の顔ばっかみて…見惚れてたから。映画ほとんど観てなくて…」

その、終わったって、気付かなかった。」

「……えっ!？」

「横顔が真剣で、静かで、きれいだなあ、可愛いなあ、ってそんなことばっか考えてたら

和が焦って立ち上がったから。

周りみたら人がいないから、ああとつくに終わったのかって。」

正直、予想外の答えである。和の視界がぐらりと一瞬歪んだのがわかった。

この男は、どれだけ馬鹿なのだろう。

「あ、あんな名作を…お金を払ってるのに…観なかった…？」

信じられない。

「な、和、怒ったの?」

「いや、怒ってない、びっくりしたの。別に映画観てなかったっていうのはいいの。」

あのさ、また来るのやめようって言ったときなんで拗ねたの?」

「だってまた来たいから。」

きっぱりとそう言われて、和はまたしても驚愕した。

「だって、観てないんでしょ!?!意味がないよ!?!」

「映画観てる和の顔観てるのが至福なんだもん。それに集中してるから」

次に来たときも上映中は手つなぎほっただろうし。」

「えええええ…」

「嫌だった？俺とまた来るの嫌！？」

「ん？いや…基本的に私、相手に同調を求めたいわけではないから感想言い合えたりしなくても問題ないんだけどさ…だって映画観るためにお金払うのに…」

ほっとかれたのも嬉しかったし私はなんら不快はなかったから、その、

もう一度来るのにぶっちゃけ抵抗はないんだけど…だってでも「ならまた来よう！ね！？」

満面の笑みで遙がそう言うので、迫力にも負けたからか和はうなずいてしまった。

しかし本当にそれでいいのか、と胸中つつこまずにはいられない。

…こういう場合、趣味はけして合ってるわけではないが、どうなんだろうか。

和は首を傾げつつも、お昼ご飯を食べようとひっぱる遙に抵抗はしなかった。

夕方までは、あっというまだった。

次に行きたいところがあるのかと問われれば和は本が読みたいと答え、

二人は図書館をおとずれた。なんとも健全なデートである。

こんなに自分にはかり合わせたようなデートコースでいいのかと和が遙を問えば

遙は和といっしょにいるだけで嬉しいと言う。

本当になんというか、変わったたひとだなあ、と思う。

本を読んでいれば、遙はずっと和をみつめる。

「飽きない？」

「和の顔に？ちつとも。本になりたいなどは時々思う。」

「…あそう。」

かえってきたまたも馬鹿馬鹿しい答えに、和は呆れつつもほっておいた。

他人というのに、今日と言う日は苦痛ではない。

それこそ遙が和にばかり合わせてくれているからだろう。

しかし遙から言わせると、自分は趣味らしい趣味もないので特別行きたいところはないのだという。

それこそ、どこかで和とふたりきりになれるのならばそれが一番良いらしい。

それを訊いて、和は内心、ありがたいと思っただけなのか呆ればいいのかわからなかった。

とにかくこの状況が苦痛でないというのなら、まあいいか、と和は思い至った。

そうしてふたりは、夕方まで図書館で過ごしたのだ。

「じゅめんね、さすがに暇だったでしょ？…言ってくれば良かったのに。」

シリーズものの長編にはまって、和が読み始めてしまったが最後までまったくそこから動けなくなってしまったのだ。夕方の駅前に二人並んで立っている。申し訳なさそうにする和に、遥はふっと微笑んだ。

「和、俺がそうしたいからしたんだって何度も言ってるでしょう？ なにも無理なんかしてないよ。」

「いやでも、さすがに…」

多分、4時間弱はあそこにいたはずで、それを思えば和は謝罪したい気持ちでいっぱいだった。

こうも自分に合わせてもらえるなど思ってもおらず、今日一日、恐縮してばかりだ。

そんな和に遥はひとつため息をつけば、人通りが多い駅前から和を連れ出した。

そこは、駅から少しの公園で、住宅街の一角にぼつんとある小さなものだった。

引っ張られるままについてきた和は、なぜ遥がこんな所に連れてきたのかわからない。

「…うーん、まだまだ警戒心が足りないね。」

「え？」

「あのね、言っておくけれど、自分に好意を持ってる相手と安易にふたりきりになるものじゃないよ。」

「…なにをされても文句言えない。」

「い、和泉君？」

「もつとも、今日は恋人同士だから、良いんだけどね。」

明日からは、たとえ俺相手でも少しは危機感を持ってほしいな。…じゃないと自制するのが辛い。」

「なにを言ってる…」

その言葉の続きは、言えなかった。
気が付けば縮められていたふたりの距離感に、
警戒するより先に遙が和の顎を自身の右手でつかんでいた。

右手親指でツ、と和の唇をなぞれば、それをながめつつ遙がその目を細める。

その一連の動作に、和は体を動かす所か声をだすこともかなわない。まるでその双眸に捕らえられてしまったかのように。

その様子に満足したのか少し微笑めば、遙は次の瞬間に和の頬に唇を落とす。

いつかのように触れるだけだったそれから、遙は舌を這わせて和の頬を移動する。

その遙の行動にさすがに抵抗しようと和が体を擦ろうとすれば、それを封印するかのように遙の唇は和の唇に重なった。

ちゅ、という音が和の羞恥心を煽り、みるみる赤くなっていく。

それに気を良くしたのか、何度も啄ばむようなキスを遙が繰り返せば和は抗議の声をあげようと口を開く。

遙の瞳が、なぜそのとき獣のように光ったのかわからなかったが、次の瞬間その意味を理解した。

先程の優しい行為とは裏腹に、多少乱暴に遙が和に唇を合わせ、あるうことがその舌を和の口腔内に進入してきた。

怒って和が口を開くその瞬間を、遙は待っていたのだと理解すればあまりにも慣れたその行為にも、浅はかにも意図を解さず許してしまった自分にも腹が立つ。

しかしそんな事を考えている余裕はどんどんなくなっていった。

和はなんとか逃げようと舌をひっこませるも、遙はそれを許さない。追い回され逃げ場を失った自身のそれは、遙の舌によってすべてを奪い尽くされる。

絡め取られ、舐められ、吸われる。

いやらしい水音が耳に入り、和は首まで赤くなる。

上顎をその舌でねっとり弄られれば、たまらず和は恥ずかしい声をあげた。

「ふっ…ん、やあ…だあっ…!」

飲み込みきれない唾液が、口のはしから漏れれば、遙はやっとその深い口付けを止め
それを舌で舐め取った。

その行為にまたも和は恥ずかしくなる。

「やっ…!」

「…和、だめだよそんな顔しちゃ…止まらなくなっちゃう。」

「え…なに…!？」

涙目で訴える和を遙がちらりと見ると、せつなそうに顔を顰める。
なぜそんな顔をするのか理解できずにいれば、あるうことか遙は和の首に舌を這わせだした。

「やめてやめてって!なに…んっ!」

だんだんと舌が下がり、遙が無言で和のシャツのボタンをひとつ外

せば、

鎖骨があらわになる。

そこにまた舌を這わせ軽く口付けしたあと、遙は強い力でそこに吸い付いた。

ちくり、と痛みが走り、和が顔を顰める。

「いたつ…ちょ、なにしたの!？」

「んー? 今日一日、和が俺のものだったっていう証。」

ツー、と指で和の鎖骨をなぞりながら、遙が微笑んだ。

その刺激にびくりと和が体を震わせる。

もはや自身の力で立つこともかなわず、気付けば和は遙にすがっているような格好だった。

遙はといえば、左腕で和の腰をしっかり支えつつ、

器用にも先ほど自分で外したボタンを右手のみでまたかけていった。

和は真っ赤な顔をしながら肩で息をしつつ、遙を睨んでいる。

「なんでこういうことするの…!？」

「んー? 和があまりにも気にするから今日の対価をもらおうかと。」

そうじゃなくても最後にキスくらいはさせてもらおうと思っただけだね?

なんか止まらなくなっちゃった。」

悪びれず遙がそう言うので、たまりかねた和は

ありつたけの怒りという思いを込めて、遙のみぞおちにその右拳を沈めた。

定番の平手ではなく、なによりも女性にしてはあまりにも重いその一撃に

予想外ということも手伝って遙はあまりの衝撃にふらりと一歩後ず

さった。

「お釣りをどうぞ。」

そう言っつて和がにつこりと微笑んだ。

遥が力なくそれに返す。

「これ、込みで対価なら安いものだね…。」

げほ、と咳き込みながらそう言うので、和は声をあげて笑った。

「学園のアイドルが地味女子に手出してカウンターくらっつて！な
さけなー！！」

「あのね、もういいかげんそういう付加価値つけるのやめてくれな
い！？」

赤い顔になりながら遥がそう叫ぶので、いっそう和は笑い声をあげ
た。

「ごめんっつて！だっつてさー…くく…あーおかし。女に一切不自由し
てないくせにさー。」

こんな面倒臭いヤツを相手にしようとは。はー笑った笑った。「

和！それ以上言ったら本気で怒るよ。どうであろうと関係ない。

もう俺は和にしか反応しないんだからね！」

「さらっつとんでもないことを言わないように。ホラ、帰るよ。

あ、家まで送るとかやめてね、ひとりで帰れるので。」

「だめだよ！」

「どうしてもっつていうんなら広末に来てもらっつから。それでいいで
しょ。」

「もっつだめ！」

「じゃあこのままひとりで帰る！」

「あ、こら、和ー!!」

ダッシュをかけた和の後ろを遙が慌てて追いかける。

最後の最後でもひと悶着あったものの、

総合的には今日のお出かけは楽しかったかもな、と和は思っていたが、

公園での一件を思い起こせば最悪な一日だったと言っているいいのではないかなどと

心の中で家に帰ってからつつこんだのだった。

お風呂場で遥がつけた証とやらに気付いて和が絶叫したのは、21
時頃のことだった。

第十六話「新学期」(前書き)

すいません、今回いつもに比べてかなり短いです。
なんとなく、区切りのお話のようになりました。
ここからまた、二人の新しい関係性が始まるという感じですよ。

第十六話「新学期」

「和、おはよう！」

「おはよう、和泉君。」

「え、なんでそんなうんざり顔なの、和。」

いやべつに、と適当にはぐらかしつつ、学校前の道を歩いていた。

うんざりの理由は、この顔を見飽きた…と知っている和がいたからだ。

あれから一度もどこかに出かけようと誘われることはなかった。

正直それにはほっとしていたのだ。いたのだが。

外へ出ると、謀ったように遙と鉢合わせになるのである。

和が出かける用事といったら図書室や本屋、映画などであるのだが大概、出先で彼に会う。

偶然にしては出来すぎている為、どう考えても広未が噛んでいるに違いないと思い問いたせば

家の場所を教えないかわりに和の情報を流すということを決着がついたのだと言う。

どうも広未に毎日のように和の家を教えてくれと遙が訴えていたらしく

それにうんざりした広未が上気の家を提示したらしい。

しかし、やろうと思えば家突き止めるくらいいくらでもやりようはある。

元々、この関係性を面白がっていた広未が

遙に情報を提示していたのではないかと和はふんでいるのだが広未はそれを否定している。まったく忌々しい。

そうこうしているうちに新学期も始まってしまい、結局、強制的に毎日顔を合わせる立場にまた追いやられてしまったのだ。

「もう、学校でくらい寄らないでくれない？」

しっし、と犬猫にでもやるように追い払おうとすれば、遙はシヨックを受けたように目を見開く。

「な、和ひどい！それが親しい人間にする対応！？」

「私は親しくなればなるほど対応がおざなりになる人間なの。知らなかった？」

「じゃあ今のこの状況って喜んでいいの？」

「うん、喜んでいいからどっか行って、可及的速やかに。さあさあ。」

「いや和、さすがにそれでどっか行くほど俺は盲目じゃないよ？」

「チッ！」

「し、舌打ち！」

ふたりのやり取りに、後ろから笑い声があがる。振り返れば、そこにいたのは浩平と梓だった。

「浩平、笑うな。」

「梓には注意しないわけ？」

「お前の笑い方が下品かつ不愉快だからだ。」

「ひど！新学期一日目のあいさつもなしにいきなりそれか！」

これにはしまった、と和は顔を顰める。

開店休業の日常を、捨てたいと思っているわけではない。なるべくならば目立ちたくはないのだ。

遙が目立つ存在だというのが最近では阿呆っぷりに忘れそうになる。対等だと感じるのはいい兆候だと和自身感じてはいるものの、未練がましいと思いつつ捨てきれない日常にすがりたい自分は、朝から目立つ生徒トップ3に囲まれる勇氣はなかった。

「おはよう、和。」

「おはよう高原さん。」

ほぼ無意識に、苗字で呼んでしまった和であったが、それに梓は目を細める。

「なにかしら、その他人行儀な感じは？」

「え？いえいえ、別に。私は用事があるのでお先に！」

では、と言って走り去る和を、三人は呼び止めたがそれをきかずに和は学校までの道を走った。

新学期、和は通常よりもだいぶ遅く登校する。

それでも普通の生徒と同じか若干早いくらいなのだが、その理由は夏休みの課題だった。

和は、多くの生徒がそうであるように夏休みの課題を最終日一日で終わらせる派なのだ。

学生生活の醍醐味というか、単に面倒で後回しにしてしまうというか、

基本、自分の中で博打をうつことが嫌いではなく、勝負事のように毎年そうしてしまう。

今のところは全勝なので、良しとしているがおかげで早くは起きられない。

場合によっては徹夜のまま学校へ来ることになるのだが、

今年はなんとか3時間程の睡眠をとることに成功したのであった。
…眠い事にかわりはないが。

教室に入れば、久しぶりにクラスメイト達に声をかけられる。

前と同じで、特別親しい人間はいないものの、

ずっと気安く話しかけられるこの状況が、ぎりぎりの所だな、と和は感じた。

どこまで踏み込んで大丈夫なのか、踏み込まれると嫌なのか。

ミーハーな集団で来られればゲンナリとしてしまうものの、

個人はそういう部分を慎重に考え扱ってくれていると、遥の一件以後も和は感じていた。

影響力は強いとやはり思うが、

もしもこれくらに留まってくれたとするのならば、まあ良かったのかもしれないと和は思った。

「朝から遥様につかまってたねー！」

「校門の君はどうなの？」

肘でつつつかれ、和はその二つ名にふきだした。

「それ、広末の事らしいねえ…今度それで弄くり倒してくれるわ！」

「校門の君はひろみくんって言うんだー。付き合ってたの？」

「いや、だから腐れ縁だって。付き合ってたないよ。」

「じゃあやっぱり和泉君？」

「いや、それもなあって…。」

ああ、やっぱり女子集団はちょっとつつとおしい…

そろそろ質問に答えるのも面倒になってきたな、と置いていけば、教室の扉が勢いよく開いた。

びっくりして出入り口をみれば、そこには女生徒が仁王立ちしている。

「た、高原さん!？」

固まった2・3一同は、あの一件以来、接触がなさそうだった和と梓をみて安心していただけ、新学期早々に教室に押しかけたという事実には蒼褪めた。

もしや、良くない展開が待っているのだろうか、とおそろおそろ二人を交互にみていた。

次の瞬間には、和の目の前までツカツカと歩いてくれば、その机を力いっぱいバン!と叩く。

その音に、皆いつせいにびくりと震えた。

が、その張り詰めた空気をやぶったのは、渦中の人であった。

「そんな、両手で机思いつきり叩いたら痛くなりませんか? ちよ、手の平みせてみ?」

ぐにぐにと梓の手の平を和が触ってたしかめる。

その様子にクラスメイトは口をぽかんと開いてみていた。

「…和、言葉遣いまで戻すの? どういうつもりよ。」

「いや、学校来るとどーもスイッチがねー、ごめんて。梓さんも目立つからさー。」

癖だつて。まあでも梓さんと一緒にいて誰かに迫害されることはないよね?」

うん、大丈夫そう、と和が梓のてをはなす。

ひょうひょうと和が言うので、梓はため息をついてまだ来ていないらしい

和の前の席である人間のいすを借りて腰掛けた。

「ほんと、和は自己保身にすぐ走るいい性格よねえ…。」

「あのね、私は一般人だよ、普通の人間だよ？黙ってても人がくつついてくるような

梓さん達みたいなカリスマ性のある人種じゃないの。自己保身おおいにけっこう。」

ていうか当たり前ですー。自分がいちばんかわいいの。」

「なによそれ！学校で今度冷たくしたらこれでもかかってくらい自立つ所で

ものすごいかまいたおしてあげるから覚悟しなさい！」

「わーかったって。ごめんて。メールでも一応言っておいたじゃん。学校ではちよつとよそよそしくなるかもーって。」

「あそこまでと思わないわよ、極端な子ね。とにかく最低限普通に接してよ混乱するじゃない。」

「へいへい、女王様のおっしゃるとおりに。」

まったく！と言って梓が席を立つ。

教室を振り返ってお騒がせしたわ、とにっこり微笑んで帰っていった。

途端、教室はまた色めき立つ。

「ど、どういうこと！？高原さんといつかからあんな親しく…！」

「高原さんがあんな風に親しげにするひとはじめてみたー！」

「う、うらやましい…！」

どうやら梓は女子も憧れる存在らしく、その上男子からもうらめしそうな目でみられれば、和はまたため息をついた。

『周りのこの騒ぎさえなきやまあ平和なんだけどねえ…』

「普通に友人になっただけ。それ以上は答えるのが面倒なのでノーコメントで。」

シャツトダウンして和は本を開いた。

まわりからあがる抗議の声も、本に集中してしまえば気にならない。和の纏う空気が変わって、周りのクラスメイトも話しかけるのをあきらめた。

「なんていうかさあ、笹森さんみたいなひとつでなんていうんだろうね。」

ひとりの女子がぼつりと呟けば、まわりの女子がそれに反応を示した。

「え？どういう意味？」

「笹森さん自体は普通の女の子にみえるし、さっき本人も言っていたけど」

特にオーラとかカリスマ性とかないじゃん？」

「うんうん。」

「でもさ、ひょっとしてああいう目立つ人たちをひきつけるものを笹森さんは持つてるんじゃない？もしそうだとしたらどうという人間なのかなって。」

それにはクラス一同も、答えは出ずともなんとなくうなずいた。

確かに、和自体はなんとも普通に思えるのだが、物怖じしない性格ゆえか、所謂きらきらしい人種に好かれる傾向にあるようだ。

へりくだった態度をみせない彼女が、彼らには新鮮なのかもしれない、ともすれば目立ちたくないと気配を消す彼女の最大の難関は、彼女自身であるのかもしれない。

なにせよ、彼女自身はそんなこと気付いてもいないのだろう。

「本当に不思議だよね…：すごく健気で性格の良い子ってわけでもないし。」

「イイ性格ではあるけどね。」

それにはまた、クラス一同が強くうなずいたのであった。

所変わって2・7の教室では、大変にぎやかだった。

「なんで和と朝いつしよにいる時間を梓に譲らなきゃならないんだよ！」

「うっさいわね、ケツの小さい男は嫌われるわよ。遥が間に入ったらろくに話ができないし」

ふたりいつしよに教室なんかたずねたら注目の的じゃない。和が嫌がるもの。」

「梓ほんとう和を気に入ったんだね。」

意外そうに遥が言うので、梓は笑った。

「だって面白いし可愛いんだもの。遙じゃないけど好きになるのわかる。」

あの子のそばは居心地が良いわよね。」

「…和のこと、とらないですよ?」

「あらそれはどうかしら?」

「梓!」

「私にまで嫉妬?本当、あの子のこととなると余裕無いわねえ。」

ふたりのやりとりを、まあまあと言って浩平がなだめる。

クラスメイト達は話題の中心になっている笹森和に興味津々のようでとにかく一言も聞き漏らすまいと必死のようだ。

「笹森ちゃんは本当不思議な雰囲気あるけどね。」

俺も最初なんで遙があそこまで執着するのわかんなかったけど今ならなんとなくわかるな。

にしたってあんな面白い中身だとは思わなかったけどなあ、遙?」

「……また蒸し返す気?やめてよ。」

うんざりした顔で遙が言えば、梓はなに?と浩平に先をうながす。

「告白して振られた経緯は笹森ちゃんからきいてたでしょ?」

あのと遙、大変だったんだよ。固まってしばらく動かなかったんだから。」

シヨックだったのもあったんだろうけど、立ち直ったこいつ、開口一番なんて言ったと思う?」

「浩平!」

「遙、往生際が悪いわよ。浩平、なんて言ったの?」

わくわくしながら梓がきけば、浩平はにやりと笑んだ。

「『やっぱり全部ほしい。』」

「は？」

「俺事前に、ばっさり振られればあきらめつくだろうし、つかなきや追いかければ？って話はしてただけだよ。」

あまりにも完膚無きまでにやられたんでもういいだろうって思ったんだ。

なぐさめてやろうと思って肩をたたこうとしたら開口一番そう言ったの。

彼女が立ち去ったあとをとろんとした顔でみつめながら。危ないよな！。

執着心がもう異常の域だよ！」

浩平の言葉にはつが悪いのかふいっと遥がそっぽを向いた。それに梓はあきれかえった顔をする。

「とにかくあの子を壊すようなことはしないでよ。」

梓にそう釘を刺されて、遥は苦笑混じりにうなずいた。

放課後、寝不足気味な和は早々に帰ろうと身支度をしていた。

「なーぎ、帰る。」

当然のようにみつかりたくない相手にみつかった事実には、

和はげんなりとする。

「駅前までだからね。」

「家まで送るのに。」

「寝不足で言い争いするのも疲れてるの。嫌なら一人で帰るから。」

「なんでそう、頑なに家を教えるのを拒むかなあ。」

「自分のテリトリーに侵入されるのは嫌なの。色々と身の危険も感じるし。」

色々の内わけは思う存分察知してくださってけっこうですよ？」

和に黒く微笑まれて遙はそろりと目を逸らす。

ここのところ、いくらなんでも暴走しすぎたかもしれないと自分を振り返った。

しかし、いつになったら自分は和の家へ堂々と赴ける存在になるのだろう。

一生こないのかもしれないし、きたとしても10年先かもしれないと思えば

自然と憂鬱な気分になった。

そんなとき隣の彼女をちらりと見やれば、当たり前のように自分の隣にいてくれるのを嬉しく思う。

今はまだ、こんなささやかな幸せに酔おう。

あまり多くを望んではいけない。なにしろ先は長いのだ。

自分以外が彼女を手に入れさえしなければ、今はそれでいいのだ。

「和、大好きだよ。俺と恋人になってくれる気になった？」

「…そのわけわからんタイミングで言うのやめてほしい。」

「えー、じゃあふたりきりになるようにどこかに引きずり込んでから言っしてほしいの？」

「やめてくんない、その表現、やめてくんない。」

遙は、本当に毎日和に愛の告白をしてくるからいいかげん和はうんざりしていた。

休み中の会えない日は、必ず電話かメールでそれを伝えてくるので一回やめてくれと和が訴えた。

しかしあるうことが遙は、それならば家まで押しかけて直接言うなどとのたまったものだから

和は渋々了承せざるをえなかったのだ。

「…なんで毎日言うかなあ。」

「だって和がいつその気になってくれるかわからないじゃないか。俺はね、一日でも早くその日を迎えたいの。」

毎日確認すれば和がたとえ告白する勇気がなくてももうなすくだけで成立するじゃない。」

「そ、そんな理由だったんだ。」

「そんなとは失礼な。」

「和泉君、最近拍車をかけてキモチワルイよね。」

真顔で和が言えば、遙はぴしりと固まった。

「…そんなことを女性から言われる日がくると思ってなかった。」

「あー、無駄に綺麗な顔してるもんね。」

「無駄って…でもまあ、和が好きになつてくれないんならこんな顔確かに価値なんてないね。」

「またそういうことを…そういうのがキモいんだよ。顔の問題じゃない。」

「うわーさらに入こむからやめて?」

その遙の言葉に和が笑う。

ああ、幸せだな、と、遙は思う。

まさか、自分の言葉に隣で彼女が笑ってくれるなんて。本当に、盲目的すぎる自身を笑ってしまっけれど、それこそ好きで仕方がないのだ。

和以上に好きなる相手なんてきつとこの先、現れない。そう感じれば、遙の胸はせつなくなった。

いつしか彼女が、自分を好きになってくれますように。なるべく長く、彼女の隣にいられますように。

祈りにも似たその願いは、果たして叶うのだろうか。それは、目の前にいる少女の心しだいであった。

並んで帰路につくふたりの後姿を、

不穏な影がみつめていることにまだ誰も気付くことはなかった。

第十七話「笹森和は普通の女子です。」

「梓さん、最近妙に私のことかまうよね。なんでかなあ？」

「あら？お友達のことをかまいたおすのは普通じゃないかしら。」

「…私が、べったりされるのが嫌だと知っているの？」

「ていうかどう考えてもべったりタイプじゃないじゃん、梓さん。」

昼休み。

二人はならんでお昼ご飯を食べていた。場所は2・7の教室。

遙はといえば、梓が強引にどこかへ追いやつたらしい。

そうでもないかぎり和がうなずかないことを、梓は良く知っているからである。

「ここ数日、朝も休み時間も放課後も私にべったりしているよね。」

「そうねえ…」

「この教室にもよくひっぱってこようとするし。」

「私がこのクラスだから普通でしょう？」

「宮田君も和泉君もそれに了承して協力しているようにもみえる。」

「私と和が交流を深めるのを止めるほど野暮じゃないのよ。」

食べ終わったパンの袋を、和は教室後ろにあるゴミ箱に投げた。

袋はきれいにそこにおさまる。わずか、ポスン、という音がきこえた。

ふりあげた腕を静かにおろし、和は頬杖をつく。

その緩慢な動作に、梓は背中に冷や汗を覚えた。

なぜだろう。この目の前の少女が、ベテランの刑事にでもみえてきってしまうの。

ひょっとしてここは取調室なのではないかという錯覚さえ覚えてし

まっ。

右腕で自身の頬を支えたままに、左手の人差し指は机をトントン、と叩いた。

「…この机。和泉君の使ってるものだよな？」

静かな言葉にわずか梓の肩が揺れる。

「もつと言えばこれは和泉君の席。そこで私は今、衆人環視の中お昼ご飯を食べている。」

和泉遥の彼女と噂される高原梓と仲むつまじそうに。」

「…それが？別に特に意味はないわよ。遥が席を貸すっていうから

…」

「だったら梓さんがこっちに座ったほうが色々とすわりは良いんじゃないの？」

梓さんが和泉君の恋人だって周りには信じて疑わないわけだし。

最近周りをうるちよろしてる地味女子を呼び出して牽制する図にみえるよ、そのほうが。」

「だってそうじゃないもの。」

「そうだね。…梓さん。」

ここですつとあさつての方向をむいていた和の瞳がきらりと光る。まっすぐに、正面にいる梓を見据えた。

「私に隠していることがあるよねえ？」

暗黒の微笑みは、もはやどこその玉座にでもつく王様のようで、

ともすれば自分よりよっぽど王女様然しているではないか！と内心梓はうなった。

「その無駄にある迫力をひっこめてよ、怖いじゃない！」

「不穏な動きでもあったのかな？ちよつと過激そうだよ、今回は。」

和のその言葉に、梓は観念するしかない、とため息をついた。というか目の前の彼女は、とうにすべて知っているのだろう。

「でも和泉君の席に私が座ったくらいじゃ意味ないと思うよ？」

周りのひとはやっぱり牽制かと思ってるんじゃないかなあ？この構図。

バックに梓さんがついてるとしらしめたいのなら、いっそこに和泉君を連れてきたほうが

良かったかもしれないね。」

「ここで私が否定したって、まあ彼女達にはみえてないんでしょうね。」

「そうだねえ、余計に煽る結果になったかも？」

梓さんも怒ってるから自分達が手を出してもお咎めはないだろうってね？」

「…いつから気が付いてたの？私るときも、そういえば全然焦ってなかったわね。」

「そりゃ、殺気立った視線をあれだけ向けられればね。」

それに梓さんとか宮田君とか和泉君とか、最近やたらまわりを警戒してるし私にべつたりだし？」

「…本当に、和には隠し事ってできないわね。」

その梓の言葉に、和は苦笑いをした。

「ね、梓さん。私のことしばらくほっておいてくれない？」

「！そんなことしたら」

「いやまあ、そーなんだけどさ。ずっと卒業するまでこんなこと続けるわけにもいかないでしょ？」

「なにより私が嫌だから、この状況。他人がべったりはやっぱりうっとおしい。」

「まあたそういう…：ちょっとは齒に衣着せなさいよ。」

「ごめんごめん。でも私もさ、これでもちよっと苛ついてるんだよ。大好きな憩いの時間を、こつも奪われるとね？」

「にっこりと微笑む和に、かつてないほどの冷気がみてとれて、梓は身震いした。」

「でも、話が通じる相手でもないわよ？今回は。…本当に大丈夫なの？」

「まあ、なるようになるよ。だからそう過保護にしないで、ね？」

「今度は親しみをこめた笑顔に、梓は心配顔をしつつも最後にはうなずいた。」

「彼女を壊すことはしないでと、遙に釘を刺した。」

「けれどもなにも、彼女を壊す要因は、遙だけではないのだ。」

「彼をとりまく理不尽な環境。」

「なによりもそれが原因で和が傷つくことは、遙が一番ゆるせないことだろう。」

「目の前の少女は確かに強い。けれどもやはり普通の女の子なのだ。」

「梓はそつと息を吐き出しては、大切な友人の行く末を慮った。」

「和！どうして梓のこと断っちゃうの！？」

放課後の図書室で和が本を読んでいると、遙が焦った様子で入ってきた。

それに和はさも不快だといわんばかりに眉根を寄せる。

「ここがどういう場所だかわかってて大声をだしてるの？」

「…！な、和、怒らないで、ごめんって。でも、梓からもきいてるでしょ？危ないよ。」

「もう遅いんだって。ちよいちよい私の周りでは起こり始めてるから。」

「は？起こり始めてるってなに？」

「いいかげんうっとおしかったし、そろそろ良い感じに苛々してると思うのよ、相手方も。」

「あんだけはりつかれたらなっかなか手出しできなかつたでしょうし？」

にんまりと笑む和をみて、遙はその様子に得心した。

「…わざとここ一週間、気付かないフリしてたの？ずいぶん人が悪いな和は。」

「まあまあ。ひとつお願いもしようと思ってたんだよ、和泉君。」

「お願い？」

「彼女達、監視要員としてずいぶん優秀みただし今回の件に絡んでるとも思ってないから。」

またちよつと協力してほしいんだよ。まずいかな？」

「ん？それはまあ、かまわないけど…和、ひとつ約束してくれない？」

「約束？」

「危ない事はしないって。約束して。」

「うーん…うん、わかった。万事が整えばきつと危なくは無いだろ
うから。」

にっこりと和が微笑めば、遙は少し呆れながらもそれに納得してう
なずいた。

「うーん、…うん、もう充分かな。」

目の前に広がるそれらをながめつつ、和はうなずいた。
もういつこられてもかまわないだろう。

そんな風に考えれば、ありがたいことに彼女達の行動は早かった。

梓たちの申し出を断ってから三日後のこと。

ひとりでいる頻度が前と同じくらいになったことに安心したのか、
昼休み、教室にいる和に突然ふたりの女子が詰め寄った。

「ちよつと来いよ!」

驚いた和はびくりとその身を竦ませる。

「な、なんですか…きゃっ!」

すっかり怯えきった様子の和をあざ笑いながら、
二人組みの女子は和の腕をひっぱる。

そうして無理矢理に教室から出させ、ついてこい、と命令しながら
どこかへ消えた。

それを目撃したクラスメイト達は、和のまるで普通の女の子のよう
な振る舞いに

心底驚いていた。

しかしひよつとして笹森さんもああいうタイプはやっぱり怖いのだ
ろうかと思えば

慌てて遥のいるクラスに彼を呼び出しに行ったのであった。

人気の無い校舎裏までひっぱられると、和はそのまま壁に叩きつけられた。

「きゃあっ!」

どん!という鈍い音と共に、和の悲鳴があがる。

呼び出したのは二人組みだったが、どうやらその規模はもっと大きいものだったらしく、

いまでは8名ほどの女子が和を囲んでいた。

その誰しもがあまり素行のよろしくなさそうな風貌をしている。

化粧もさることながら、香水の匂いもきつく、あたりにたちこめていた。

「あんたさあ、どういつつもりで遙に近付いてんの?」

その女子の言葉に、和がびくつと肩を震わせた。

「びびちゃって、声出ないんじゃないのー?

もう少し優しく言ってあげなよおー。」

その女子の言葉にまわりがいつせいに笑い出した。

なんともいえない甲高い笑い声があたりに響き渡る。

「あんたみたいな地味な女子、遙が相手にするわけないんだよ！
今後一切、遙に近づくんじゃないよ、いいね！！」

その言葉に、ふるえながらも和は答えた。

「わ、私別に、近付いてなんていませんっ…。」

それは、彼女達の逆鱗に触れるものだったらしい。

「ああ！？」

ものすごい形相で睨まれて、壁にすがりつくように和は縮こまる。

「じゃあなに？遙のほうがあんたにつきまとってるとか言うわけ！？
ふざけてんじゃないやねえよ！」

「あんたみたいなのは遠くから遙様とかいってながめてりゃいいんだよ

本当気持ち悪い！」

「こんなのに勘違いされて遙もいい迷惑だよねえ。」

彼女達が一樣にまくしたてて、和はとうとう涙を浮かべた。

「泣いて許してもらおうって？マジっつとおしい！」

「そ、そんなつもり…わ、私はなにもしてませ…。」

その言葉に、困っている女子達がどんどん苛々としはじめる。

「あれだけ嫌がらせてやったのに、まだこりないの？」

「！？あ、あれ…あなた、たちが…？」

驚く和の様子をみて、いつせいに女子達が笑った。

「ここに呼び出されてまだ気付いてなかった？頭弱いんじゃない？」
「ほんと、こんな地味でどこにでもいそうな女、遙もなんでかまうのかわかんない。」

「どうせ暇つぶしでしょ、すぐ飽きるって。」

その言葉に、和が真っ赤になった。

まずいと思っていても、反論を口にしてしまう。

「い、和泉君は、そんなひとじゃないです！」

それは、完全に彼女達を怒らせる言葉だったらしく、ひとりの女子が和のもとへ近寄れば、おもいきりその頬をはたいた。ぱん！という叩きつける痛々しい音が校舎裏に鳴り響く。反動で和の眼鏡が吹き飛んだ。

「和泉君とか呼んでんじゃねーよ！地味女の方で！！」

その女の言葉が言い終わったとき、和はすつと右腕をあげた。

「はい、おっけー。ご苦労様。もういいよー、こっから先はカットね。」

「!?!」

和のその言動を理解することができず、彼女達は固まっていた。

「まったく、こっちがわかりやすく挑発して誘導してあげてるのにどうしてこんなに時間かけるかなー。そろそろ突き止められるから焦っちゃったじゃん。」

「ちょっと、なに言ってるの、あんた？」

「んー？ああ、普段から割りと高スペックな相手とお話することが多いから」

あなた達レベルに合わせるはずいぶんと大変だったわ、という話さ。」

肩をすくめて和がそう言えば、戸惑うように8名の女子が後ずさる。

「あ、そうか、わからんか。要約すれば君たちはずいぶんと頭が悪いなということ。」

「どう？理解できた？」

「なっ！あんた、そんな態度とって自分の立場わかってんの！？」

「よおつくわかってるよ？じゃなきゃこんな茶番やるはずもないね。」

くつくつと笑いながらとんでいった眼鏡を拾い、それを和はかけなおした。

「もつと痛い目に遭いたいわけ？」

据わった目でそう言われて、和は口角を上げる。

「遠慮したいところだね。」

その言葉に、女子達がまたなにかをしようとする。

そのとき、背後から声がきこえてきた。

「和！！！！」

全力疾走してきたのだろう。息を切らした遙がうしろに立っていた。

「おー、ナイスなタイミング。」

「は、遙！？なんでここ」

「なんでわかったかって？こういうのってたいがい呼び出しの場所って

こういうところじゃん。君たちたいがい、単純だからね。予想通りで助かった。」

和の言葉に、また女子達が苛立つ。

しかし今は遙がいるせいで、和に手出しすることはできない。

「和泉君、ちょっとそこ居てくれる？困まれて殴られるのは避けたいからさ。」

これから話すこと話しちゃいたいからね。」

「はあ？なによそれ。」

和の言葉がいまだ理解できない彼女達に、和はあきれてため息を吐きだした。

「さつき、わざと殴られるようにしむけたのもわかんない？

怯えた様子から今こうして一転した理由も？ちょっとは考えてよ。」

やれやれ、という様子で、和は懐から録音機材をとり出す。

「さつきの会話、全部ここにはっちり録音済み。

ついでにいうとね、こここのまわり、色々と隠れられる木とかあるでしょう？

そこからカメラでも撮影してもらってたんだよ、さつきまでのやりとり。」

その和の言葉に、8名の女子はぎよっとする。

「あとあなた達がやった嫌がらせね。しっかりばっちりブツは残ってますから」

この声、カメラと合わせて学校側に訴えればどうなるかなー？
なんかしらのお咎めは免れないよねえ？」

「そ、そんなの！さっきの嫌がらせって言葉だけじゃ証拠としては弱いんじゃないの？」

強がりですう訴えれば、和はますますにんまりとした。

「写真撮ってありますよー、じゃーん！」

ポケットからとりだして広げてみせたそれらは、
今和を困っている女子達が和の教科書をびりびりに破いたり、
本に汚れをつけたり、体操服をどこかに捨てたりしている様子がば
つちりとうつつっていた。

あまりの用意周到さに女子達は無言で固まった。

「ここまでするつもりもなかったけどいいかげんうっとおしかったし、
なにより、本。傷つけたよねえ？昼休み、放課後、私の時間を奪った。」

これはね？私の中でもっとも許せない行為なわけよ。しかもこんな
くだらない理由で。」

「くだらないってなによ！！？」

「くだらないじゃん。」

そもそも和泉君にとって私の存在が大きくないんならアナタたち私
に絡む必要ないでしょ。

それをこつもぞろぞろとひきつれてやってきて。
自分達が相手にされないからって私みたいな地味女子に嫉妬するなんてヤキがまわったもんだね。」

反論もできずに、女子達はぎり、と唇を噛む。

「ねえ、今後一切手出ししないでくれるなら

この証拠たちは私の胸にしまってあげようと思うんだけどどうかなあ？

私もね、鬼じゃないから。…でもね。」

ひとつ言葉を切って、和はにっこりと微笑んだ。

「お昼の放送でこの醜聞を流すとか、学校掲示板にこれを貼り出すとか

その他もろもろ、えぐいやり方はいくらでもあるの。

私の逆鱗に触れないよう、せいぜい今後は気をつけて？」

和のその言葉に、女子達は小さく悲鳴をあげる。

うしろを振り向けば、遥がこれまた冷気を放って立っていた。

「俺からも。…次はないからな、お前ら。」

とどめの遥のその言葉に、あわれ8名の女子達は一目散に逃げた。

「中村さん！安田さん！どう！？」

遥が和に近付こうとするよりも早く、草むらのほうへと和が走り寄

った。

そこからカメラを持った女子が顔を出す。
勝手に作られた遙のファンクラブ会員ナンバー1と2というつわもの二人である。
遙はその姿に思わず脱力した。

「ばつちりです！顔もすべて綺麗にうつってますー！」

「おおさすが！ふたりともほんとにありがとう！」

和が労いの言葉をかければ、嬉しそうに二人は顔を綻ばせた。

「私達は、いついかなるときも遙様の大切なものをお守りすることが第一ですから。」

「笹森さん、いつまでも遙様のそばにいてくださいね…。」

そっと和の手にカメラを渡し、涙目になりながらもふたりはその場を立ち去った。

歩きながら、せつないね、とか、遙様の幸せが私達の幸せだよ、とか呟きがきこえ、

和にはなんとも理解しがたい愛情表現だな、と内心複雑であった。

彼女達になにか頼むのは今後よほどのことがない限りやめたほうがいいだろう。

ミィハ―心かもしれないが、やたら健気なああの姿をみると罪悪感でいっぱいになる。

くだらないと一蹴してしまえないのは、自分が渦中の人物だからなのだろう。

この時点では、少なからず友人として彼の隣にすることを和は自ら選んだのだから。

その業は追ってしかるべきなのだろう。

ひとつふう、と息をはき、和は肩を落とした。

「和。」

「え？」

振り向くと、遙がそこに立っていた。しかし表情が恐い。一体なぜ、彼は怒っているのだろうか。

首を傾げれば次の瞬間、遙はひよい、と和を抱き上げた。所謂、お姫さまだっこのいうものである。

「ちょ、おい！なに！？」

混乱して和がジタバタと暴れば、遙は和の耳元で囁いた。

「危ない事、しないって約束だったね？」

その言葉にぎくりとすれば、和の動きはぴたりと止まった。

「し、してないよ？」

「じゃあその腫れた頬はなんなのかな？ 一歩間違えればもっとけがしてたかもしれないよ？」

「それは……」

「和。このままおとなしく保健室に運ばれてくれるよね？」

「いやあの自分の足で」

「くれるよね？」

「……ハイ。」

有無をいわせぬ迫力でずい、と遙が和の鼻先3cmまで近付けば和はおとなしく従う他なかった。

しかし羞恥心がなくなるわけではない。

いつそ気絶してしまいたい、と絶望のままに和は思っていた。

がらりと保健室の扉が開くと、保険医が目をまるくした。

「あらあら、学園のアイドル自ら。」

「ちよっと…先生まで。その呼び方やめてくださいよ。」

この学校の保険医である彼女、おかもと岡元ゆかり嬢は、教師と生徒共に人があった。

さばさばとしたその性格で女生徒からもよく相談事を受ける彼女だが、

とにかく若くて美人なその容姿から学校中の男性から熱烈な感情をむけられている。

しかしどんなに好意を寄せられても動じることなく、やんわりとかわすその姿は

真に大人の女性であると和はいつも思っていた。

まあ、自分にそのスキルを身につける必要性は一切感じないのであるが。

「先生、ね。」

遙が和を丸椅子にすとん、と下ろし、ふけっていた思考を現実世界に回復させたとき、

ぽつりとせつなそうな顔をしてそうもらす先生が目の前にみえた。

その言葉の意味するところを理解した和は、無言で遙を見やる。

すると遙は、なんでもないとばかりに和にむかって極上の笑顔をむ

けた。

それがまたなんとも気に食わない。

『学校の先生って…保険医だけどさあ、ちよっとルール違反なんじやないのー？』

年齢や立場を考えれば、自重しなければならなかったのは岡元のほうであろう。

それはもちろん常識であるが、遥の百戦錬磨ぶりは嫌と言うほどわかつている。

ならば少しばかり大人の女性に言い寄られたところでぐらつく男ではないはずだし

翻弄されたという事実もきつとないはずだ。

ともすれば、岡元が心身共に囚われてしまった形になっていたとしてもなんら疑問ではなく

一般生徒よりもよほど苦しい想いを強いられているのだと思えば、和は遥のその行動にふつつつと怒りを覚えた。

こんなところに首をつっこみたくはない。けれど誤魔化そうとした遥に苛立ちを覚える。

そもそも女性にあんな顔をさせるなんて。

梓もそうだが、応えられないのならばせめてきっちり決着をつけさせてやるべきだ。

最低限を果たす事も無く自分を口説こうというのだからそれが一番我慢ならない。

「先生、氷もらって私すぐ退散します。もうすぐ授業始まりますし。」

「あら、少し休まなくて大丈夫？」

「はい。あ、でも付き添いの彼はなにか先生に用事があるみたいで

すけど?」

和のその言葉に、岡元と遥が同時にえ、と声をあげた。

「和?なに言ってるの?」

「さつきゆかりさんに話があるって言ってたじゃん。」

「『ゆかりさん…』」

呼び名は正解だったらしい。

岡元は少し複雑な顔をしながらもぼつりと呟いて一瞬頬を赤らめ、遥の周りの温度はいくらか低くなったようだ。

和は遥をぐいっと近付け、ひそひそとささやく。

「あのせつなそうな顔、みたでしょ?最後まで責任もて、男なら!十代のコムスメなんかよりよっぽど貴重な二十代半ばの女盛りをあんたのせいで枯らせていいわけ?」

「…もう、関係な」

その言葉に、言い終わるより早く無言で和は遥の足をふんづけた。遥は痛そうに顔を歪める。

「いい?これは友としての忠告。誠意をみせて好きでもないのに付き合えとは言わない。

でもね、あんな風に未練を残させる形で別れるっていうのは最低な人間のすることだよ。

きちんと最後までつきあってあげな。それで和泉君が傷付いたとしても自業自得。」

「……それで盛り上がっちゃったらどうすんの?」

「それこそきちんとお付き合いしなよ。将来も念頭に入れて。」

「…和はそれでいいんだ。」

「良いも悪いもないでしょう。和泉君の思ったとおりによければいいじゃん。」

「じゃあこのまま「私、そういうのだからしない人とは絶対に付き合わないし友達にもなりたくない。」

「……卑怯だよ。」

遙のその言葉ににっこりと微笑んで、和は振り返った。

「では、岡元先生、私は退散しますのでごゆっくり！」

「え、あ、あの笹森さん」

「口外はいたしませんよ、ご安心を。では！」

そう言つて和は氷を片手に、保健室をあとにした。

ふたりがどんな会話をするか少々に興味もあつたが、さすがに人としてどうかと思つた和は

早々に教室へと戻ることにしたのだった。

教室へ戻つたとき、また一騒動起こつた。

和の頬をみたクラスメイト達がなにがあつたのかと詰め寄つたのである。

少々疲れはしたものの、皆に心配をかけてしまったなと苦笑した。

「これはね、安い代償みたいなもの。お仕置きに必要不可欠だったからね。」

まあでも、あの子達がよつぽど馬鹿じゃない限りもう手出しはしないと思つよ。」

にここにことしながら和がそう発言すれば、心配していたクラスメイ
ト達が

一瞬にしてざざざーっとひいていった。

失礼な…

そんなことを思っていれば、梓が血相変えて和のクラスにとびこん
だ。

「和！大丈夫だったの！？」

「梓さん。うんこれだけで済んだよー。」

「これだけって！やだ、腫れてるじゃないの！遙ってば間に合わな
かったのね！？」

「あー、違うちがう。これは私がそう仕向けたの。」

そのほうがいい画が撮れると思ってさ。バッチリだったよ？」

「……和、あんたね…まあいいわ。私からも念押ししておきましょ
う。」

梓の目がきらりと光れば、とてつもない迫力が生まれる。

美人は表情をなくすと怖いというがそれは真実だ。

「助かるよ。そうなれば梓さんがバツクについてるってあのお馬鹿
さん達もわかってくれるでしょ。」

「まったく、頭の悪い連中を相手にすると疲れるわね。」

「まあまあ。いいじゃないの、終わったことだし。」

にへら、と笑う和をみて、梓はなんともいえない脱力感におそわれ
る。

「あら、そういえば、遙はどうしたの？」

「課外授業中。」

「…は？」

「ん？いや、ちょっと野暮用みたい。」
「つくづく頼りにならない男ね。今度おもいつきり嫌がらせしてやるわ。」

梓の憤慨っぷりに、和は静かに苦笑した。

放課後になり、すっかり氷は溶けたものの、中身を入れた袋は使い捨てのようなものではなく氷嚢のようなものだったので、返しに行くべきだろうと和は考えていた。
好奇心と気まずさがないまぜになったような複雑な心境で、和は保健室の扉を叩いた。

中から返事の声がきこえなかったのに首を傾げながらも、和はがりとその扉を開く。

「失礼します。」

そう声をあげて完全に扉が開いたとき、目にうつったのはまごうことなきラブシーンであった。

とっさの判断で、和は勢い良く扉を閉め、鍵までかけた。

それに眉を寄せたのは、岡元先生だ。

「あら野暮ね、どうせなら出て行ってくれればいいのに。」

「誰に目撃されるかわからないじゃないですか。そんな危険冒して、立場的に危ないのはその馬鹿じゃなくて岡元先生ですよ、まったく。」

呆れて息を吐き出しながら和はそうそう、と岡元にむかって氷嚢をさしだした。

「これ、ありがとうございます。お陰で腫れがすっかりひきましたよ、助かりました。」

「あら、わざわざありがとうございます。」

「いえいえ、それではお邪魔虫は退散します。」

「…どうしてああいう状況になったのかきかないの？」

ああいう状況、とはいわずもがな、先程のラブシーンだろう。

椅子に座ったままの岡元が遙の首元に両腕ををまわし、遙が少し屈んでいた。

角度的にみえなかったが、ひよっとしたらキスの最中だったのかもしれない。

「…えーと、惚気たいのであればかまいませんが？」

どうぞ？と和が先を促せば、遙はなぜか泣き出しそうな顔になった。その遙の顔と、和の顔を交互にみていた岡元がもう我慢できないといわんばかりに吹き出した。

「ちょ、本当にここまでとは思わなかった！まったくもって脈なしじゃないー！」

「だからそう言ったでしょう、ゆかりさん！言っても信じないんだから！」

…いくらなんでもここまでとは思わなかったけど。ああもう最悪…」

けらけらと笑いながら机を叩く先生と、頭を抱えてへこむ遙を交互に見やる。

「…えーと？」

いまいち状況がわからず和が首を傾げていると、岡元が笑いすぎて浮かべた涙を拭いつつ話し出す。

「ごめんなさいね、笹森さん。さっきのね、遙と賭けをしたのよ。結果はなんというか…遙は試合に勝って勝負に負けたって感じかしら。ね？」

くつくつと笑いながら、遙の肩を岡元がぼんぼん、とたたいた。

「純情な男心を弄ばないでくれる？あーほんとにもう…。」

「いい気味。本気の相手に振られ続けてせいぜいへこむといいわ。」

「性格がばれると男が逃げてくよ。」

「おあいにくさま。こんなところが可愛いつて言ってくれる物好きもけっこういるもんなのよ。」

楽しそうにやり取りするふたりをみれば、どうやら決着はついたようだ。

しかし勝負ってなんなのだろう。

「あのー、差し支えなければ内容をおききしても?」

「ああ、あのね、笹森さん…」

「ちょーゆかりさん!」

「先生と呼びなさい、図々しいわね。」

先程とは180度違うその言葉に、遙のみならず和も少々驚き目をまるくした。

「あのね、遙君に言ったのよ。笹森さんが私と彼のああいうシーンをみて

少しでも動揺するんならこのまますんなりあきらめてなんかあげない、

ふたりをとことん邪魔してやるってね。…でも結果はさっきのおりで…ふふっ…」

「だから!和は俺に特別な感情なんて抱いてないって言ったじゃん!」

「自分で言っただけ世話ないわねえ!」

あはははとまた岡元が笑えば、面白くなさそうに遙は眉根を寄せた。

「特別な感情…」

「もう、和まで何度も言わせないですよ。わかってるから。」

「いいんだ、これからいくらでも努力するから。」

「そんなの、もうとっくに持つてると思うけど?」

けろっと和がとんでもない爆弾発言をするので、遙は目を見開いた。

「和、それはどういう…」

「いやだって。私中学から今のいままで友達一切作らなかつたんだよ?」

今は普通に和泉君の隣に居ようと思ってるもん。充分、特別だよ？」
首をかたむけ和が心底そうでしょう？という顔をして遙をみれば、
遙はおもわず、力いっぱい和を抱き寄せた。

「ああもう…超可愛い…！」

「え？あれ？なんか変な事言いました…？」

遙のその様子に焦った和は、岡元のほうをみれば、岡元は苦笑していた。

「笹森さんて…けっこう天然の悪女ねえ。」

その言葉の意味するところが、和はまったくわからなかった。

遙は決して逃がすまいと、閉じ込める腕にただただ力を込めるばかりで

和にはますます自分の発言がもたらすことの意味を理解することはできなかったのだった。

第十八話「初恋の君」

「ねえ和。もうそのスタイル、必要ないんじゃない？」

最近すっかり日課になった昼休みをいつしよに過ごすという行為は遙、浩平、梓の三人に和が加わるというもので、なんとも不恰好だった。

なにより周りから好奇の視線を向けられることがこの上なく嫌だった和が

彼らを拒否しようとするれば、慌てて遙は屋上での昼休みを提案した。

しかし毎日姿をみせないのではここを勘付かれるとも限らないのであるべくひっそりとした場所を探し当ててはそこで昼食をとっていた。

和ひとりならばいくらでも気配を消せるものを…とため息もつきたくはなっただが

なんとなく梓を拒否するのは心が痛む和であった。

ちなみに今は、屋上でのお昼休みで、鍵をかけてしまえば闖入者の心配もない。

和は先程の梓の問いに、ああ、と返事をする。

「眼鏡と髪？まあねえ…こんなのもなくても元々、目立たないけど教室で気配消すためにやってたことだったから…確かにもう今更ではあるかなあ。」

「でしよう？もったいないし、もうやめてしまえば…」

「絶対にだめ!!!」

和の正面に座っていた様を睨みつつ、遙は隣に座る和に腕を絡めて抱きしめた。

「ちょっとはなしてよ、うざい。」

「その、日に日におざなりになる態度やめてよ…」

「親愛表現なんだけど？」

「ああ、和の小悪魔……」

脱力して遙は和の肩に顔を埋める。

「…にしても、遙のこの姿、女子がみたら卒倒しそうだよな。」

「ファンクラブの子達はけっこう楽しんでるみたいよ？新鮮だって。」

「あの子達はなんだっていいんじゃないの？遙だったら。」

けらけら笑いながら浩平が言うので、遙は顔をあげて睨んだ。

それに浩平がそろりと視線をそらす。

「それより、和。眼鏡と髪。そのままでいて、お願いだから。」

「んー？強制じゃなく、和泉君の希望ってことだよな？」

「うん、そう。」

遙に視線を合わせてのぞきこめば、なにやら子犬のような瞳をしている。

この男は、一体いくつの顔を持っているのだろう。

最近は無害になってきているので、どうにも油断してしまっている自分がいるのだ。

至近距離になっても、なんだか動物がじゃれついているような感覚にすらなってくる。

しかしそうすると、梓にも浩平にも釘を刺されるのだ。

『あいつは羊の皮をかぶったライオンだ。』

ときっぱり声をそろえて言われれば、狼ではないのか？と和が首を傾げる。

それに間髪いれずに狼なんてかわいいものじゃないとつっこまれれば、

とりあえず最低限の警戒心だけは心がけるとふたりには誓った。

のだが。

やっぱり自分のことを好いてくれているというのも恋心としてなのかという疑問は

いつになっても和の頭をぐるぐるとしていた。

向き合おうと決めて、信じようと決めて、

けれども他のかつて遥の恋人であった人々に触れたとき、

その自分とのあまりの違いにやはり嘘なのではないか、という気はどうしたって起る。

好きだと言ってくれるのも、自分に執着しているのも、そうだろうとは思う。

けれどもその心の中身が恋心なのかは、和にもわからなかった。

どうやったたらそれが真の意味でわかるのだろうか？といつも頭を悩ませるのだが

その先に進まずにとまってしまふ。

自分のときの恋心でも思い出せば、少しは遥の気持ちがわかるだろうか？

『初恋か。そういえばいつだったかな。』

ぼんやりとしてきた意識を覚醒させたのは、遥の声だった。

「和！」

気が付けば遥の両手に顔を包まれてみつめられている状態だ。

こんなのもしょっちゅうなので、

単に女性に触ってないと死んでしまふとかいう夕子なのではないのか？

などと最近では思ってしまう。

誰かと比べても仕方がないのだが、自分に自信がないとかあるとかではなく、

遥の隣に立つ自分に違和感がどうしたってあるのだ。

和が遥に釣り合わないのだとすれば、遥だって和に釣り合っていないと和は感じていた。

きっとその空気が馴染んだと感じないことには、真の意味で彼を友人とは迎えられないのだろう。

「えーと、ごめんごめん。眼鏡の件だよね…ってあの、和泉君？」

ぼんやりとした顔でのぞきこまれていたと思えば、

その顔がどんどん近付いてくる。

逃れようとして後頭部をがっしりとつかまれていたことに今更ながら気が付き、

果ては顎にてを付けてきた遥に和はどうしようかと半ばパニックになりかけた。

「所かまわず盛ってんじゃねえ！」

「私達がいること忘れてるんじゃないわよ！」

梓と浩平が同時に声をあげ、同時に遙の頭と背中を叩いた。

かなりの音がして、痛かったろうなとよぎったが、やはりそうらしく遙は和と反対方向に倒れこんでうめいていた。

「…あー、びっくりした。なにがどうしてそうだったの？今。」

胸に手をあてて深呼吸している和に、梓があきれて声をあげる。

「あんな至近距離許したらだめじゃない。

じつと遙がみつめても和ったら黙ってそのまま動かないんだもの。」

「そうだよ、笹森チャン。特に今の遙は恋に狂って頭がおかしいんだから。」

3秒間みつめたらキスしたくなっちゃうくらいに。

今の笹森チャンのなんにでも欲情しちゃうんだからさー、気をつけなきゃ。」

その言葉に、和はちらりと遙を見やる。

恋に狂った…かつて、彼は恋に落ちるたびにこんなだったのだろうか？

それはなんとも、相手の女性が大変そうだ。

「い、和泉君て恋人にいつもこんななの？梓さん、大変だったんじゃない？」

半ば同情したかのような目で梓をみつめれば、梓は驚愕の顔をして固まっていた。

隣にいる浩平もそれは同様であるらしく、ぽかんと和をみつめている。

「ねえ和。喫茶店で私が言ったこと、忘れちゃった？」

やれやれ、といった風情で、梓が和をみる。

「ん？なんか言ってた？」

「…ちよつと、二度もあんなこと言わせる気？」

遙にも少し同情しちゃうわねえ、これじゃあ。」

「え？そんなに私、変な事言った！？」

「私、先に戻るわ。」

「あ、俺も。」

唐突に、梓と浩平が立ち上がって屋上を去っていく。

「え？あの、ちよ、ふたりとも！？」

和の止める間もなく、ふたりは屋上の扉を閉めてさっさと行ってしまった。

残されたのは、先程から撃沈したまま動かない遙と固まった和である。

そろり、と和は自身も腰をあげた。

「えーと、私もそろそろ」

しかし声をあげた瞬間、隣にいた遙が和の手首をつかみそれを阻む。そのとき、びくりと和の体が震えた。

「…和はさ。」

のろのろと手首をつかんだ状態のまま、遙が体を起こした。

隣合っていた状態から、正面を向いて和に相對する。

遙の顔は真剣で、なにを思っているのかは和には判断がつかなかっ

た。
射抜くような獰猛な雰囲気も、時折みせる情けない子犬のような表情も、今はなりを潜めていた。

「和は、俺がこうして和にしてるようなことを、他の女の子にもし
てると思っただ。」

「え？」

「24時間いつしよにいたくて追い掛け回して、会ったら3回は抱
きしめたくて、

毎日好きだつて伝えたくて、本当はもつとすごいこともしたいのを
ずっと我慢してる。」

「ちょ、落ち着いてくれないかな？」

「和しか可愛いって感じられない。和しか女の子にみえない。」

……時々、この気持ちが凶器みたいだつて思うときがあるんだ。」

つかまれていた腕をぐっと引かれ、和はその体を遥の中に閉じ込め
られる。

いつも彼は、こうしては彼女を抱きしめる。

「いつそ、どこかに閉じ込めちゃえたらいいのに。」

抱き潰されてしまうのではないかと、

静かな声とは裏腹にこもるその熱が、遥の腕にこめられる強い力が、
和の感情をみるみるうちに混乱させた。

気が付けば、思い切り力をこめて彼を突き飛ばしていた。

「……………ちょっと、頭を冷やしたほうがいいと思う。」

遥のほうを見ることなく、ぽつりと呟いて和は屋上を走り去った。

ボタン！と勢い良く扉が閉まる音が響く。

その音を聞いた途端、遙はぱたり、と汚れるのもかまわず
地面に大の字になって寝転んだ。

おもいきりため息をついては、右手で顔をおおってうなる。

「あー…ほんつと頭冷やしたほうがいいかも。」

くすり、と自嘲しつつ呟いたその声は、誰に届くこともなく真つ青
な空に吸い込まれていった。

廊下をただただ無言で歩いていく。

前をみることもなく、ただ。

『私だけって、なに？』

うつとおしくらいにつきまとうのも、

無駄にスキンシップをとろうとするのも、

毎日のように好きだと云うのも、

『全部私だけ？』

遙の言葉に、和はいやいや、と首をふる。

そんなはずはないのだ。

自分が、彼に好意を持ってもらっているのはわかった。
わかってた、はずだ。

…今までの彼女たちのように。

そう、そうだ。

そんな風にしか思ってなかった。

だからこそ、彼がなぜ自分を好きだと言うのかわからなかった。
しかし、和泉遥はその口でそれは違うのだという。

今までの恋人たちと、自分では、まったく違うのだというではない
か。

ある意味では、それはおおいに納得できたし、
ある意味では、ますます自分を混乱させる結果になっている。

どういうことなのだろうか？

彼が、梓やその他綺麗な女性達と自分とは抱いている感情が違う
というのならば

それはおおいに納得できるものだった。

だって、和は違うから。

彼女達とはなにもかもが違っていて、

彼女達のような世界を理解することもできなくて。

だからこそ、違う、という答えは納得できる。

しかしである。

先程の言い方だと、彼女達以上に、というか、比べ物になどならな
いほど、

自分のことを好きだと告白されたように思ってしまう。
というか変に穿った見方をしないかぎり、どう考えてもそうとって
しまいそうになる。

そこでまた新たな疑問。

歴代の輝かしい彼女達。

遥の隣で、なんら見劣りすることのない彼女達。

対して、なにかもフツツな自分。

平々凡々で、ともすれば性格はけっこう極悪な自分。

遥が好きだと言い張るのが自分じゃなければ、あるいは。

趣味悪いねー、などとへらへら笑って言えたのかもしれない。
だが、だがしかし。

趣味悪いねーなんていう揶揄もできないほどに信じられない。
ああ、結局のところそうなのだ。

まだ全然自分は。和は、遥の気持ちを信用してはいないのだ。

最後だ。この最後の部分で止まってしまうのだ。

彼が自分を何故好きなのか。

わからない。全然まったくわからない。

どうしてこんなになにかも違う自分を選ぶのかが。

ともすれば地球人と宇宙人くらいの違いがあるんじゃないのか。

遙が自分に歩み寄るといふことは、結局彼が無理してこちら側に来るといふことだ。

そういったものでしか成り立たない関係は、とても歪だと、和は感じる。

別に、自分と同じ相手をさがせばそれでいいんじゃないのか？

どうしてこちら側に来ようとばかりするんだらう。

今となつては、彼を嫌いだと思えないし、友人になろうと思えるくらいには

彼に好感をもっていると思うのだ。

だからこそ思う。

『無理をするなよ』

と。

自然じゃなければいつかズレが生じて辛くなる。

なによりも相手のペースに合わせることができない自分であるから、わがままな自覚はあるけれど、それを相手に強いるほど自分は強くなれない。

中途半端かもしれないけど、そんな風にふるまえないのだ。

だから相手に合わせてもらい続けることは自分自身も苦しくて、けれどもじゃあ彼に合わせるかといったらそんなこともしたくないと思ってしまう。

だからこそ悩む。どうすればいいのかわからない。

もういつそ、今の気持ちをすべてぶつけてまた彼にごめんなさいと言うべきなのか。

これで彼がなっとくしてくれらしたらそれもいいな、と思う。

…今度、梓と広未にでも意見をうかがってみようか。

そんなことを思っては、しかしこれは自分で出すべき類の答えだと首をふった。

教室に戻ると、どこか浮き足立った空気がこの空間を包んでいた。

こういうものに触るのが、和はどこか苦手だ。

静かな場所を好む彼女にとって、なんとも居心地が悪い。

こういうときは、ひたすら我関せずを貫くのが一番良い。

そう思った和は、自身の席に着くと鞆の中から本を出した。

さわり、さわり。

教室全体に響き渡る話し声が、なぜだか今日は耳を擦る感触がする。いつもならば本を読みふけてシャットダウンすることなど簡単なのに、

先程のせいなのか、心乱れている状態ではどうやらそれが難しいようだった。

それでも形ばかり本を開いて抵抗していれば、
和の耳にクラスメイトが「転入生」と噂しているのがききとれた。

転入生？この時期にだろうか。

高校二年生のこの時に編入してくるなんて、さぞかし大変な事だろう。

しかしこれだけこのクラスの生徒が浮き足立ってるということはここに新しいクラスメイトがおそらくやってくるといふことなのだろう。

まあ、自分には関係ないか。

小さく息を吐いて、今度こそ集中しようと目の前に開かれた文字の羅列を睨んだ。

それから数日後のことだ。

思った通りと言うべきなのか、噂の転入生は本当にクラスにやって

きた。

ひよっとして事前に教師からなんらかの説明があったのをきいていなかったのかもしれない。

ぼんやりとそんなことを思っ、

クラス中の注目を集めている男を和も見やった。

担任教師が隣に立ち、自己紹介を求めている。

それにひとつうなずけば、彼は口を開いた。

少し短く切りそろえられた髪は、一見して黒髪のようにみえるが陽の光を浴びると少し茶色がかってみえた。

一重の瞳はどこか目つきが悪くもみえるが涼しげでそれほど悪印象ではない。

むしろどちらかといえば整った顔立ちといえるのだろう。

けれどもなんとなく、男の纏った空気が近寄りがたい。

気だるげな、そこに立っているのも面倒くさいとでも言いたげな、その雰囲気だ。

普段他人にそれほど興味を持たない和は、なんとなくその彼の空気が気になった。

他人と出来ることならばあまり関わりたくないんです、と

口でいうよりも実に雄弁に語られているようで、関心をそそったのだ。

「…鈴木です。」

ぼそり、と呟いたその一言はとても低い声で

予想通りというか、なんとも面倒そうな色をのせた話し方であった。

担任はその様子に少し面を食らったが、下の名前も一応、と促され、彼はとうとうため息をひとつついた。

「鈴木託斗すずきたくとです。……よろしく。」

その末尾につけられた、よろしく、という四文字にクラスメイトは目を見開いた。

どうやら先の自己紹介でかなりの一匹狼認定をされた鈴木氏はその口からよろしくなんて言葉が出てくるのが意外だとまでこの短時間で

クラス全体に思わせたらしい。

『はー…なかなかどうしてやりおるな。』

女子ならば少ワリスキーともいえなくはないその行為。

しかし男子社会ならあの振る舞いもおそらくは許されるものなのだろう。

…多少、強面の方々から絡まれる機会が発生するのかもしれないが。

『にしても…鈴木託斗とな。…はて?』

どうも一瞬、心にその名前がひっかかった。

昔どこかで、まったく同じ名前をきいたことがあるような。

しかし彼をまじまじとみても、その顔に覚えは無い。

気のせいか、と和はもう興味がなくなったといわんばかりに彼から視線を外し、ぼんやりとした顔で一限目はなんだったろうかと考えていた。

そのときは気付かなかった。

彼もまた、不思議そうに和のことをしばしながめていたことを。

「和！」

一時間目が終了したあとの休み時間、遙が教室にやってきた。最近では休みはほぼ彼と一緒に時を過ごしているため、教室に押しかけるのは幾分減ってきた。たとえば放課後なんかには待ち伏せされることは珍しくもないが一時間目のすぐあとに教室に来るのはここ数週間の傾向としては珍しい。

「和泉君？どうしたの、まだ一時間目終わったばかりだよ。」
「別にいつ会いにきたっていいじゃないか。理由がほしければここで話すけど？」
「いや、けっこう。」

今にもその腕に引き寄せんばかりの遙の前に、思い切り右腕をぴんとはり

その手を突き出して拒否の意を示す。
和のその行動が気に入らなかつたのか多少むっとしたものの、遙は教室を一通り見回し、ある一方向でその動きをびたりと止めた。どうやら目的はそれだったらしく、遙のその視線に合点がいった和はああ、と声をもらした。

「鈴木君をみにきたの？たったいま転校してきてあの席についたっ

てのに

情報がずいぶん早いね。」

「……まあ、ちょっと気になってね。」

遙のその呟きに和は首を傾げる。

たとえば綺麗な女子が転入してきたというのならば見に来るのもわからなくはないが

相手は男である。

一体全体、なにを思って彼はここにやってきたのだろうか。

「和、またなんか余計な事考えてない？」

「いたっ、ちよ、いきなりやめてよ、首がグキって言ったじゃん！」

ぼんやりと机をながめて考え事をしていた和は

突然遙の両手によって上向かされたことに抗議した。

自身の両頬に触れている遙の手を慌てて払う。

「…意味とか考えなくていいからね？」

「…？なにか都合が悪いの？」

「そういうわけじゃないんだけど…なんというか男のプライド？」

「え、そんなのあったの？」

「ちよ、和！！！」

ひどい！と嘆いた遙の声は、けっこうな音量であったらしい。

その声にびっくりと反応したのは、先程話題にのぼっていた彼だった。

2 - 3 転入生である鈴木春斗が、窓際一番つしろのその席から

廊下側一番端、前から三番目という和の席にむかってゆっくりと歩いてくる。

それに和は首を傾げ、遙はといえば思い切り眉間に皺を寄せている。

なにがそんなに気に入らないのだろうか、と遥の様子を不思議に思っ
ていれば

鈴木は和と遥の目の前に立っていた。

「…あの、和って。」

「はい？ああ、私の名前ですが？」

話しかけられて、それがなにか？と和が訊き返す。

「…笹森和？」

ゆっくりとした口調で自身の苗字を言い当てられ、和が目を見開く。
遥はそれに、先程よりも更に眉間に皺を刻ませた。

「……どうして？」

「…俺、そんなに変わったか？それとも単に忘れてるだけなのか？」

淡々としたその口調に、和は自身の記憶をひっぱり起こす。

そうして先程のひっかかりの答えを探し当てれば、
驚愕で目を見開き立ち上がった。

「託！？え、マジで！！？」

「…その反応は忘れてたなお前。薄情な。」

「いや、記憶としてはあるって。ただ目の前のあなたと一致しな
っただけで！」

そうか、託斗だったよね正式名称。」

「またずいぶん言い草だな。…会わない間に口の悪さに磨きがか
かったか。」

「あなたもそこまで面倒臭いってオーラ撒き散らしてなかったでし
ょうよ。」

久しぶり！と言い合ってお互いに手を取り合う。
その姿を遥のみならずクラスメイトが呆然とみつめていた。
どうやら彼らは昔の知り合いらしい。

「…和？」

にっこりと微笑んだ隣の遥に、和は握っていた託斗の手を離し
遥に向き直った。

「ああ、ごめん、びつくりして。鈴木託斗君。」

小学校が一緒だったんだけど中学からは別々だったの。まさか託だ
とは。」

「小学校っていうと…和がまだ人付き合いをそれなりにしてた頃の
友人ってこと？」

「その言い方はちょっとひっかかるけど、まあそう。
高学年入った頃はそれでもあんまり積極的に輪に入ろうとも思っ
てなかったけどね。」

苦笑して和がうなずきくと、正面に居た託斗が和を小突いた。

「なんだお前、ずっとそんなか。らしいっちゃらしいけど。」

「託に言われたくないなあ。そんなの同類みたいなもんでしょ。」

「…まあ否定はしない。」

笑い合っているふたりをみて、遥はこれでもかといわんばかりの笑
みを浮かべる。

そこになぜか怒気とも殺気ともとれる雰囲気加わっていることに
和は気付いたが

その原因がわからず混乱してしまった。

少し困って遙をながめていたが、スッと遙が自身の右手をさしだした。

「和泉遥です。よろしく、鈴木君。」

「ああ、よろしく。…お前ずいぶん面食いになったな。」

その言葉に一瞬和は意味がわからなかった。

ぼんやりとふたりが握手している様子をながめていればその言葉に慌てて否定をした。

「なにがどうしてそうなるの！和泉君は友達です。」

「和、出来れば末尾にそのうち恋人ってつけてほしいんだけど？」

「ちょ、このヤロウ！」

悪戯っぽく笑いながら話す遙の言葉に、和は少し赤くなる。

その二人の様子に少々驚いたように託斗が目を丸くした。

「へえー…。」

託斗がなにかを心得たようにそう呟くので、和はむっと眉を寄せた。しかしそれをまったく意に介さないかのように

託斗は笑って和に言った。

「今日って図書室開いてんの？」

「ん？昼休みも放課後も今日は開いてるよ。」

「じゃあ案内してくれよ、放課後。」

「いいけど。」

目の前でされているやり取りを、その真意を探ろうと遙が託斗の顔

をじっとみつめる。

その視線に気付いたのか、託斗が一瞬話していた和から視線を外しこちらを見た。

瞬間、託斗の口角が笑みを結ぶように上がった。

ともすればそれは、挑戦的といえなくもない表情で。

内心はらわたが煮えくりかえっていた遥だが、そんなことはおくびにも出さずに

対抗するかのようにつこりと微笑めば、

次の瞬間、男ふたりはその笑みをひっこめにらみあっていた。

その意味を、渦中であるはずの彼女は知る由もない。

『託斗かー……そういえば、思い返せば』

ひとつ、和は息をはきだす。

『初恋って、託斗だったんだよなあ……。』

とんでもない爆弾を、その心のうちだけに落とした和は

声に出していれば果たして遥はどんな反応を示すのだろうかと一瞬考え、

面倒そうだな、と内心苦笑した。

遥にとって本当の意味でのライバルといえる男が

初めてあらわれたかもしれない瞬間であった。

第十九話「小さくて大きな自覚」（前書き）

ちよつと、最近R15表現が増えてきました。本分量も程度も若干なんですけど。

毎回こうして注意喚起をするのも難なので、明記することは今回で最後にします。

今後、そういった表現が増えることをご了承ください。

もしもそうだった表現が苦手な方がいらっしやいましたら、

申し訳ありませんが今後はちよつと読み進めるのは難しいと思います。

ご了承くださいけると幸いです。

第十九話「小さくて大きな自覚」

「…けっこう利用者いるんだな。」

「あー、そうかもねえ。ここけっこう広いし。」

ぽつりと呟かれたその言葉に、和はうなずいた。

託斗の言葉通り、今和は放課後の図書室を共におとずれていた。

その言葉を最後にふらりと託斗がさまよいだしたので、和はその背中をみてくすりと笑った。

ともすれば自分以上に面倒くさがりなこの男を見て、昔以上になつたなあと思った。

小学校のときもどちらかといえば物静かだったが、まさかここまでになっているとは。

マイペースで、気に入らないことはやらなくて、自分と同じで静謐な空間を好む男だった。

しかし堂々とそう振舞うことができないのは、自分が女だからだと言いつつ、

多少はその理由があてはまっていると思いつつも、

彼ほどの強さがないからであろうということと和はよく知っていた。

性格が狡賢い自分は、うまく世を渡る術をあれこれと考えた。

集団の嘲笑や悪意に耐えられるほど、自分が強くないと知っていたからである。

しかし彼は違う。

それらをなんでもないことのようにつつばね、

自分はこうでありたいというわがままを通すことができる強さを彼

は持っている。

それに難色を示す人間は少ないだろう。

確かに、それは傲慢だ、ただ大人になれないだけだ、と言われればそうだと思う。

だからこそ、彼はそれらの言葉もきちんとその身に受け止める。

受け止めてなお、傷付いた顔などひとつもみせることなくその日常を貫くのだ。

開店休業どころの話ではない。無期休暇中のようなものだ。

自身のそのたどりついた結論に、言い得て妙だ、とほくそ笑む。

それは憧れにも似た感情かもしれないが、昔の気持ちを思い起こせば

あの淡い恋心は、決してそれだけではなかったらうと思う。

休み時間、放課後。

たくさん子ども達が校庭を走るその光景を、ぼんやりとながめるとは彼と私。

あの空間にいることをゆるされた心地よさは今でも忘れることができない。

広末といっしょにいることは当然であった。

しかし彼は他人だ。

その彼との時間の共有は、とても不思議で、とても魅力的であった。探るようにその箱に漂う空気を読み取って、どちらからともなくそれを混ぜ合わせる。

ほぼ無言で過ごした一日一日が、しかしなによりもお互いを分かり合う術であったかのようで。

ふと、淡い思い出を抜け出して目の前の彼を見やる。

不変を信じるのは、愚かだ。こと人間に関しては。ひとは変わる生き物だから。

刻一刻と流れる時間は止められないし、それと比例して成長してゆく。

実際問題、目の前の彼が誰か和はわからなかったのだから。

けれど。

好意を寄せた彼の、和にとって一番大切なその真ん中は、全く変わっていないようだ。

それにひどく安心して自分の戸惑いつつも顔を綻ばせた。

和の視線に気付いたのだろう。ずっとふらふらとさまよっていた託斗が

同じように和をまっすぐにその瞳にうつした。

昔となんら変わることはない、強い意志を宿した瞳。

託斗は笑う。和も同じように笑った。

そうしてどちらかが誘うでもなく、まるで当たり前だともいっように

それぞれが席につき本を読み始めた。

そろそろ図書室が閉まる時間だと気が付いたのは和だった。
一瞬途切れた集中力で左腕を視界にうつせば、
もうすっかりそんな時間になっていた。

「託。時間。」

「…ん。」

向かい合って座る託斗にむかってそう言えば、
短い彼らしい返事がかえってきた。

目の前に座る彼をみて、和は首を傾げる。

『今なにか…とてつもない違和感を覚えたような』

しかしそれがなんなのかが和にはわからず、しばらくの逡巡の後、
結局答えをあきらめた。

きっとそれほど重要なことではないだろう。そう結論付けて。

「そういえばあの男前、来なかったな。」

「え？…ああ、和泉君のこと？」

図書室をあとにして校舎を出たふたりは、今並んで歩いている。
暦はもう秋だというのに、夕方になったこの時間でもまだまだ暑い。
それでもどこからともなくきこえる虫の声に、和は夏の終わりを感
じていた。

和泉君、ぼつりと託斗が呟いた。

「ずいぶん親しいみたいだな。」

「広未以外であんなに楽しそうに会話しているお前をあまりみたことがない。」

「親しい…か。まあ、友達だからね、楽しくなきゃいっしょにはいないよ。」

肩を竦めてそう和が返せば、また意外そうな顔をして託斗が和をみた。

「…和泉は、和が好きなのか？」

「は？」

託斗の口からそういった類の事柄がもれるのがあまりにも意外だったからか、

和はなんともいえない間抜けな声をあげた。

「彼氏じゃないとは言ってたけど、向こうはそれが不満みたいだった。」

「どうしたの、そのテの話題にする奴だったっけ？」

「……………」

訝しんで和がその顔をのぞきこめば、それ以上追求する気はないのになにかが気に障ったのか、ふたりの間を沈黙が包んだ。

急におとずれた気まずいその空気に、なんともいえない居た堪れなさを覚える。

どうしたものか、と思案して視線をさまよわせていると校門に誰かが立っているのがみえた。

真っ赤な陽の光に染まりながら、こちらにむかってにっこりと微笑

むその姿が綺麗で

しかしその美しさは完璧すぎてどこか怖いと思ってしまう。
ぴりりと漂うその空気も、そう思わせた要因なのかもしれない。

「…和泉君。」

和の言葉に、遙は笑顔を崩すことなくゆっくりとふたりに近付いた。

「図書室にいたの？」

「うん。案内ついでに読書。和泉君は？」

「しばらくひとりになるうと思ったら寝てたみたい。」

「いつから？」

「えーと…昼休みくらいから。」

「え！ちよつと大丈夫？熱中症とか！」

「なつたら和、看病してくれる？」

「またそういう！本気で心配してる人間をそうやって茶化さない。

静かなところでぼーっとしてたいなら図書室来ればいいじゃん。」

「…今日も行って良かった？」

「？なにを今更。別に来たらいいじゃない。」

その言葉に、遙は顔を綻ばせる。

先程までとは遙がまとう空気が変わったと感じた和は、無意識に小さく息をはいた。

どうしてかはわからないけれど、怒っている時の彼は心底怖いと感じてしまうのだ。

なるべくならそうあってほしくない。

「そういえば、託は電車通学なの？」

ふたりのやり取りをぼおつとみていた託斗は、和のその問いに答え

るのが一拍遅れた。
気が付いてゆつくりと首を振る。

「……いや、俺はバス。」

「あ、そうなんだ。じゃあ託は反対方向だね。」

「……ああ。」

その託斗の言葉を聞き終えた遙は、ふわり、と和の左手をとった。ゆつくりとその手を包み込み、きゅ、と握る。

「ん？和泉君？」

「……嫌？」

いつもならば即答できるはずなのに、なぜだかその一言がいえなかった。

小さく不安気に揺れるその瞳に、なにかを感じてしまったからだろ
うか。

しかし遙の問いにはっきりと嫌ではないと言うには多少恥ずかしくて
和は無言でふるふると首を横に振った。

それはある種の同情だったのかもしれない。

捨てられた子犬のような瞳に、拒否の意を示せなかっただけなの
かもしれない。

けれども真実、和はこのときその行為が嫌だとは感じていなかった。

和が了承したとわかったからか、遙はただつかんでいたその手を
和の指先に自身の指先を絡めて握りなおした。

「……ええーと、じゃあ、託、また明日ね？」

「鈴木君、じゃあ。」

にっこりと微笑む遙を、託斗は眉を寄せて一瞥すれば短くああ、と声を出し

反対方向に歩いて行った。

「…んんというか寡黙な彼だね。」

「ああー、そうだねえ、けっこう昔からそうだよ。」

遙の空気がいつも通りだと感じれば、先程は了承したのにつないだ手の感触がなにやらむずがゆくなる。

しかし今更はずしてはだめか、ときくのもためらわれるので、必死で意識を外に向けようと和は会話に集中した。

「図書室でなにしてた？」

「んー？本読んでたよ。託も昔から本好きでねー。

読むジャンルはそんなにかぶらないんだけど。」

「会話もなく、お互いに黙々と？」

「うん、そう。」

「……彼なら、隣にいて、違和感ない？」

その言葉に和は目を見開いて遙のほうを向く。

「…和泉君、気付いてたの？」

「和は…ずっと、そればかりこだわっているから。」

「…ごめんね。なんでなんだろう。信じなければと何度も思ったんだけど。」

でもやっぱりわからない。どうして和泉君が私を好きだって言うのが。

なんか、今までの彼女さんみて、どんどんわかんなくなっちゃった。

「

和のぼつりぼつりとこぼされる言葉に、遙は真剣に耳を傾ける。自然、その指先にも力が入った。

「理由って、そんなに大事なのかな。」

「…理屈ではないって言うけどね。でもなんていうか…

自分にその価値が見出せないから混乱するんだと思うよ。

だって和泉君のせいじゃないってわかってるよ？わかってるんだけどさ…

客観視したらやっぱり和泉君はすごく綺麗な容姿だから。」

だからこそ、理由がわからない。

どうして？なぜ？

見た目はすべてではない、なんて言うけれどそんなの所詮きれいごとだ。

誰だって可愛いひと、きれいなひと、かっこいいひとには

その容姿が劣っている人間よりも簡単に好意を抱くはずだ。

暇つぶしとか、たまには、とか。

そんなような理由であるのなら、和とて納得もできたのに。

本気だと言われて、何度考えたって疑問の言葉は消えることがない。

「和は…不思議だよね。俺の見た目に、和自身はこだわっていないように思うのに。」

周りからみたときはひどくそれを気にする。」

その言葉に、和はそのとおりかもしれないと思った。

確かに周りからみてふたりは釣り合いが取れないと強く感じるものの、

実際に話していてやっぱりイケメンは会話が違う、とか、

世界が違う、とか、知り合う前のように区別することはなくなった。逆に、特段気を遣うこともない、なんてことないちよつと阿呆な男だくらいにしか思わない。

しかし周りの目を視界に入れてしまつとどうしたつて違和感が顔を出してしまふ。

思い知らされるというのも変だが、

ああ、やっぱりこのひとは自分とは違うんだなあ、としみじみ感じてしまふのだ。

「でも、これ以上俺はどうしたらいいのかわからないよ。」

「和泉君…?」

なにかの痛みを堪えるかのように、遙が和をみつめるので、和はその顔から視線をそらすことができなかつた。

「好きだと、毎日伝えてる。その理由もあれ以上は語れない。

もうその言葉を信じてもらうことしかできない。

それに和は、自分のこと普通だ普通だつて繰り返すけど、ちつとも普通じゃない。」

苦笑いした遙に、和は少々むつとする。

「普通の女の子は、怖い女子に囲まれてあんな風に笑わないし、普通の女の子は、俺みたいな人間に言い寄られてあんな辛辣な言葉を浴びせない。

なによりも和はわかつてない。その静謐な空気にどれほどの人間が惹かれるか。」

「空気…?」

「そつだよ。本を読んでも時とか、静かな場所にいる時、自分がど

んな顔をして

どんなオーラを発しているかなんて全然わかってないでしょう？

今はそれ以上に和の中身に惹かれてる所があるけれどきっかけはそれだったんだから。」

「…？そんなこと言われてもわかんないよ。」

「とにかく和は、その自己評価が低すぎるところをどうにかしてほしい。」

「じゃなきゃ普段の凶太さで開き直ってよ、俺が和にメロメロだって堂々と宣言できるくらい。」

気が付けばもうとつくに駅前についていたのに、

ふたりは改札をくぐることもせず話し込んでいた。

男女のその会話に行き交う人々が何人か好奇の目をよせている。

しかし普段それを気にする和も、今は会話に集中しすぎて気付いていなかった。

「いや、それはさすがに無理だと思っただけど…」

「…ていうかやっぱり、違和感しか覚えないうことはそっち方面にいくことが無理なんじゃ」

「和。」

その言葉に遙が和をぎろりと睨めば、条件反射のように和が身を竦ませた。

まさしくその図は肉食獣に追い詰められた草食動物のようだ。

いつかの浩平と梓の言葉が頭を反芻する。

「いや、だって、あのね？」

「ねえ、和はさ、俺とふたりでいるとき違和感しかないの？」

「え？」

「デートの日とか。図書室にいるときとか。」

「それは…でも、和泉君がいつも合わせてくれるから」

「合わせてないよ。言ったじゃん。和といっしょに過ごす静かな時間が好きなんだって。」

「……………私が本を読んでもつまらなくないの？」

「ちつとも。」

「……………。」

違和感。

違和感。

どうして？

あのととき、どうしてよぎったの？

和は先程過ぎた図書室を思い出していた。

そう、つい数十分前の事だ。

託斗とふたりでいたあの空間に、ひどく違和感を覚えた瞬間があった。

正面に座る彼をみたとき、だ。

あのととき思っただの。

目の前につつまる顔が、遙ではない。

いつも正面に座るのは、本から顔をあげて一番に視界につつまる顔は、いつも彼であるはずだったのに。

和は、それに違和感を覚えたのだと、今更ながらに気付けば、それ程に遙との図書室での時間が自身の中で当たり前になっていた事実には愕然とした。

そうしてそれはつまり。

和にとってあの時間は決して居心地の悪いものではなかったのだ。

それらを次々に自覚してしまえば、とたん、和の顔がみるみるうちに赤くなった。

遙と過ごす時間や、遠慮のないやり取りは楽しいととつくに感じていたし自覚していたはずだった。

それなのに、まったく自覚がなかったあの時間はそれだけ和にとって改めて意識することではないほどに日常化されていたわけであり。自身の時間の一部を、彼と共有することをゆるしてしまったのだとわかれば

止めたくてもとまらないほどに顔は燃え上がってゆく。

うばわれてしまった。遙によって、絡めとられてしまった。

侵食された事実は何にとつて最重要ともいえる一番大切な部分をゆるした証拠なのだ。

そんなことを今更ながら自覚させられて、これが羞恥せずに行われようか。

ともすれば、それは。

なにかが始まらないともかぎらない第一歩。

しかし、自身を好きだという彼への疑惑は拭いきれぬまま。

なんとなく今の心境は、叫びだしたい気持ちでいっぱいだった。

なんならこのまま一直線にどこかに走っていききたい。

「うっうっうっうっ…！」

なんとか奇妙なうめき声を小さくあげるだけに留めた和は、しかしいたたまれない気持ちになりながら顔を両の手の平でおおっ

た。

その和の反応に、遙はどうすればいいのかわからない。

「え、和？なに、ど、どうしたの！？」

「いや、ごめん、なんでもない。本当、なんでもない。」

目の前の彼に、一足飛びで恋心を抱いたとかそういう気持ちではない。

けれども自分が思っている以上に、彼の存在はもう大きいのかもしれない。

そう結論付けたとて、果たしてどうすればいいのだろうか。

和の意味不明な行動に首を傾げつつ、遙はひとつ息をはく。

「…やっぱりどこかに閉じ込めちゃえばいいのかなあ。」

「は？」

「だって周りの目さえなきゃ好きになってくれる確率が上がりそうだし。」

ああもう、学校のギャラリィほんっと邪魔。」

「真顔で物騒なこと言わないでほしいんだけど。」

「じゃあいいかげん信じてよ。俺が和のこと好きでたまらないってこと。」

「…善処する。」

「うわあ、どっかの政治家みたい。」

にっこりと黒く遙が微笑んだ。

そう、つまりはまったくその言葉が信用できません、と言っているわけだ。

しかし和も、これ以上はどうしたらいいのかわからない。

自分が抱いた遠い昔の恋心は、果たしてどんなものであったろうか。
…もつと穏やかなものだった気がする。

「とりあえず、もうそろそろ帰っていい?」

「全然会話の決着ついてないんだけど。」

「でも朝まで話したって決着つかないと思うよ?」

「朝まで和と一緒に過ごすんならもつと他のやり方で信じさせるけど。」

にやりと笑いながら遙が言うので、和はスッと目を細めた。

「遠まわしな言い方って変態っていうか親父くさい。」

「身も蓋もないね。…まあ、意図は否定しないけども、あえて言うんなら和限定でしか変態にならないよ。」

「その宣言はどうかと思う。」

今の今までつながれていた手を、和が外そうと手をひいた。

その外れた手を間髪入れずに遙は和の唇へとつつす。

親指が、和の下唇をなぞりだした。

「…眼鏡。」

ぼつりと遙が呟く。

なんのスイッチが入ったのかわからないが、急に切り替えるのはやめてほしいといつも思う。

先程まで和気藹々と話していたはずなのに、

なぜ今はそんなに色気を漂わせて和をみつめているのだろうか。

唇を這うその指に、ひどく敏感になる。

少し動くだけでも、びくりと和の身がふるえた。

「お願い、結局きいてくれる？くれない？
眼鏡と髪の毛、学校ではこのままにしてほしい。」

どうして？と問おうとして、

口を少し開いたが、和は遥の親指の存在を思い出し慌てて口を噤んだ。

が、声を出そうとして中途半端に開いたその唇に、あるうことか遥がその指を差し入れた。

下唇を這っていたはずの遥の親指は、今は和の口内をさまよっている。

ゆっくりと差し入れられ、段々と深く押し入れられれば無意識に噛んでしまわないようにと和は口を開いていった。

後から思えばおもいきり噛んでしまえばよかったはずなのに、そのときは正常な判断もできないほどに思考回路が麻痺していた。

とうとうその舌までたどりついた親指は、ゆっくりと和のそれをなであげた。

あまりの出来事に和は真っ赤になりながらとうとう叫びそうになる。遥はそれを予見して、少し弄るに留めてその親指を和の口から解放した。

それに和がほつとしたのも束の間、

遥がその指をぱくり、と自身の口に含んだ。

「なっ……！」

親指を差し入れられたそのときよりも、羞恥で和の顔が燃え上がる。

遥はそれを獲物を捕らえた獣のようにながめながら、みせつけるようにゆっくりと、舐め上げた。

最後に軽く音を立てて吸い上げ、につこりと微笑えんだ。終わりをしつかりと確認した和は遥におもいきり抗議の声をあげた。

「どうしてそんなことするの！汚い！！」

「は？なんで。おいしいのに。」

「…な、……変態！！！」

もはや涙目になりながら、和は遥を睨みつけていた。

声はなんとも情けなく、それが逆に遥の加虐心を煽る行為だということにも気付かない。

心の中で可愛いを連発しながらも、遥は和を抱きしめたくて仕方ない衝動にかられたが、

さすがにそれは思い留まった。

おそらくこれが人気のない場所であったなら自重することはなかっただろう。

「で、さ。眼鏡と髪。どうなの？」

「え？あ、ああ…別にどつちでもいいんだけど…」

ていつかああいうことをだからしないでって何度も言ってるのに！！

「和が俺の気持ちを感じてくれたらやめるよ？」

しれっとそんなことを言われてしまい、和は先程まで爆発させていた怒りを

なんとなくひっこめそうになってしまう。

それに関してはたしかに自分が悪いと思ってしまうってしているからだ。

「そ、そ、そんなことされたって信じられません！！！」

きつぱりと和が言い終えれば、遙が長いため息を吐いた。

「…和、信じてほしいっていうのもそうなんだけど、何度も恋心を否定されると触りたい衝動にかられる複雑な男心もわかってほしいんだ？」

「……っそ、そんなことを言われても…ぬ、ぐう」

こういった経験が極端に低い和にとって、こんな風に言われたときどう対処したらいいのかがさっぱりわからず普通の自身を考えれば情けないことこの上ない。なんだかまた泣きそうになって、どンドン眉尻が下がる。

「あああ和、やめて、その顔。可愛すぎて抱きしめたい。さすがにそれは和が恥ずかしいだろうからってせつかく我慢してたのに。」

「え、ちょ、ま！わかった、わかったからやめて!？」

遙のその言葉に焦った和は慌てて涙をひっこめる。そうしていいかげん数日前から答えを出していないその話題に話をもどした。

「ねえ、どうして眼鏡と髪をそのままにしてくれなんて言い出したの?」

言われたときから疑問に思っていたその言葉をやっと口にすれば、遙はきよとんとした顔をした。

「え?なんでって…ライバルを増やしたくないからに決まってるでしょ?」

そんな当たり前なことどうして今更訊くの?」

「は？言ってる意味がまったくわからないんだけど…？」

当たり前という遥の言葉に、和は心底首を傾げる。

「…ほんつとつに自覚ないの？ねえ和さ、自分の顔、毎日のように鏡みてるよね？」

「そりゃ、齒磨くときとか顔洗うときとかお風呂のときとか嫌でもみるよ。」

「で、その眼鏡は伊達なんだよね？視力いくつだっけ？」

「両目とも1.0だけど…」

眉を寄せながらなぜそんなときくの？とでも言いたげな和に、遥は心底呆れた顔をして和の顔を両手で包んだ。

多少強引に、くん、と上向かせる。

少々高い位置にある遥の顔と、強制的に和の顔が距離を近づけた。

「だって、和の素顔って可愛いじゃん。」

「…は？」

「だから、あえて余計な虫つける要因増やしたくないの。」

「いやいやあの、和泉遥君？」

「もちろん、大抵の人間は相手にならないってわかってるよ？」

でもさ、和が好きになんなくなってるって手は出されるかもしれないですよ。

俺の知らないところでどこの馬の骨とも知れない男に和の大切な体触られたらどうするの？

それこそ、冗談じゃないね。絶対に許さない。」

目の前のこの男は、なにを言っているのだろう。

あまりの言葉に理解に苦しむ。

本気で今の主張を自分に受け入れると言っているのだろうか。

恋は盲目、とは確かにいうけれども。いくらなんでもこれはひどすぎる。

「あの、さー…梓さんとかならそういう心配もわかるけどさ」

「和、俺の目がおかしいと思ってるでしょう。」

この男は客観的な判断もつかないほど盲目的になっているとか。」

その言葉にずばり今の心境を言い当てられてぎくりとする。

「いやだって、「和。」」

包まれた手の平に、若干の力がこめられた。

和はそれに少々の緊張を覚える。

「あのね、確かに梓は誰がみたって文句なしに美人だって言うだろう。」

でもね、あそこまで規格外ともいえる美形は逆に声をかけられにくいんだよ。

言い寄ってくる自信たっぷりな男は確かに多いけどね。」

「…はあ…？」

「だから、たとえば、街中で声をかけられたりはそんなにしないってこと。」

梓の場合、どちらかといえばスカウトのが多いと思うよ。」

「ああ、なるほどー。…それはなんか納得かも。」

「客観的にみれば、確かに和は、梓よりも人目をひく容姿とはいえないかもしれない。」

でもね、過去二回、街中でナンパされたことがあつたらうっ？」

その遥の言葉に、和はこくりとうなずいた。

とりあえず自分の言葉を訊く態勢になっいてくれることに遥は安

堵する。

「それはつまり、和が話しかけやすい雰囲気があるってことなんだ。確かに特別抜きん出て綺麗とか可愛いとか、そういう種類の容姿ではない。」

けれどもね、和の可愛さのレベルってちょうど声をかけられやすい、ちょうどどちよつかいを出されやすい可愛さなんだよ。わかる？」

「？んー…？ごめん、ちよつとわかんない。」

「街を歩いていたら、男共にあの子ちよつと良いんじゃない？とか囁かれるレベルって言ったら少しはわかりやすい？」

「……………え、と。あれかな。」

普通な感じのほづが、かえって親しみを覚えて声をかけやすいってこと？」

「簡単に言えばそう。でもね、だからここが重要なんだけど。」

和の自覚よりもっと和は可愛いんだよ。

とりあえず、街を歩いていたら普通な子よりも目につきやすいレベルではあるってこと。」

言わんとしていることも、

遙が割りと自分のことを客観的に見れているという事実には納得しかけていたが、

最後の言葉がどうしても承服できない。

「それって十人並みより可愛いんだって言ってるんだよね？」

「そうだよ。」

「それはナイ。」

きっぱりと和が言い切れば、遙は脱力してその両頬からずるりと手をはなし、

和の肩へと両手をうつした。

「…そんなだからナンパされやすいんじゃないか。自覚して少しでも話しかけられにくい雰囲気を作りなさい。

でなければ可愛い格好で外出するのは俺や広末君が同伴してないかぎり禁止。」

「…なにそれ。ぜったいやだ。」

その言葉には駄々っ子のようにふいつとそっぽをむく。

遥にもわかっていた。和はお願いされることには割りと言容であるのだが、

強制されることは心底我慢ならないのだ。

「なあぎ。」

「ナンパなんてされたこと今までなかったもん！あの一回だけだよ！！」

偶然だつてば。和泉君の考えすぎだよ。」

「…普段からああいう可愛い格好は頻繁にしてるの？」

「ん？うーん…そんなには？たまーに気が向いたときくらいかなあ。誰かとおかけるときとか。」

「ひとりのときは？」

「あんまり…もうちょっと地味目な格好が多いかも。」

「ほら。だからだよ、だから今まで声かけられなかったの！」

「……………違つとおもつ。」

「和。ほんとうに。別に意地悪で言ってるわけじゃないんだよ。

俺だつてなにかを和に強制するのなんて嫌なんだ。

でもね、心配なんだよ。

自分のいないところで和になにかあつたらと思つと気が狂いそうになる。」

遥のその言葉に、和は少々ほだされかける。

やっこのことで紡いだ言葉は、了承とはいえないものつつぱねる類のものでもなかった。

「…他の人にも意見を訊いて同じようなこと言われたら真剣に考える。」

「……本当に？」

「うん、本当。」

こくりとうなずいた和に、遙はほつと息を吐いた。

やっこの話に決着がついたと感じたふたりは、改札をくぐって電車の到着を待った。

「…学校での眼鏡は、けっこう便利だから元々そのままにしようかと思つてたから。」

「…そっか、ありがとう。」

「いや、お礼を言われるようなことじゃないよ！なんか…ごめんねさっきも。」

ああいう言われ方をしちゃうと、なんだかどうしても反抗したくなっちゃう。」

子どもっぽいつてわかってるんだけど、と和は息を吐く。それに遙はくすりと笑った。

「俺はね、和のそういうところも可愛くて大好きだよ。」

「…まあ、ちょっとは困るかもしれないけど。」

「和泉君で、ほんとうなんでも甘い言葉にすりかえようとするよね。もう一種の芸だよ。私はそれを君の特技として認定するよ。」

うんざりしてそう言えば、またも遙から和限定のね、という言葉が返ってくる。

ある種こういうのも打てば響くというのだろうか。

…ちよつと意味は違つかもしれないが、響きだけならば間違っていない気がする。

ぐるぐると悩んでいても、目の前の彼はいつもまた新たな問題を抱えてやってくる。

しかしそれを、持ってきては笑顔で一蹴するのだ。

彼の周りはいつも騒がしいし、彼もまた決して静かな人間ではない。それなのに、和の好む場所や空気をいつしよに味わってくれる趣さえ持っている。

彼は不思議だ。本来ならば自分の隣にはいないはずの人間なのに。もはや和は、この位置を心地良いと感じ始めていた。

認めてしまえば、それは体にすつと馴染んで、当たり前前の事のように認識される。

自分のことを好きだと、彼は言う。

その横顔をちらりとみて、和は思った。

果たしてこの先、彼の求めるものを自分は与えることができるのだろうか。

もしもそれが無理だった場合、きつと彼は自分の隣を去ってしまうのだらう。

恋とは理不尽だとも思うが、そうなったところで彼を責めるのはあまりにも酷だらう。

しかしもしものその時を考えて、和の胸は微かちくりと痛んだのだった。

第二十話「衝動のその先は」

友達であると彼女は言った。
恋人にしたいと彼は言った。

どちらの言葉も本当なのだとしたら、その意味するところはひとつしかない。

しかしふたりは、とても親密そうにその手をつないでいたではないか。

その光景が浮かんでは消え、目を閉じればまた浮かび、を繰り返す。

ぱたん、と本を閉じて、彼はベッドの脇に本を置いた。
座っていた状態からぱたりと寝転ぶ。

「…それを知ってどうしたいんだ俺は。」

真夜中の自室に、静かな声が響いては消えた。

笹森和は、朝から悶々としていた。

誰もいない教室でひとり、いつもの日課の読書をするでもなく、

据わった目をしたまま思考の海にその身を沈めていた。

昨夜、遙とわかれた帰りの道すがら自宅と広末に電話をかけその足で広末の家へと向かった。

そこで遙に指摘された顛末を話せば、意外なことに広末がだした答えは

おおよそ遙と似たようなものだった。

「お前は確かに自覚がない。過剰に自信がある者は日本人の美德に反するが

お前のその客観視してるつもりで全く出来ていない自己評価も問題だ。」

広末も、確かに和は特別優れてるとはいわないが

十人並みよりもっと上の容姿を持っていると彼女を評し、下手な美人よりもともすれば異性に好意を持たれ易いと話した。

そこに自覚がないのは危険だと広末は言う。

それに対して、では広末は自身の容姿が普通より優れているという自覚があるのかと問えば

それには当然だ、という答えが当たり前のように返ってきた。

「自惚れと客観的判断はまったく違うものだ。お前はそこをもっと見定めるんだな。」

だいたい日常生活に支障を来すだろう、そうまでなると。」

しかし和とて、今までそれにより困ったことはなかったし

街中で声をかけられるなどという経験もなかった。

ましてや異性に告白の類をされたことだってありはしない。

しかしそれには今までの努力が一役買っていたのだと広末が言う。

「中学時代は言わずもがな、高校でも一線を引いて気配を消していただろう。

それが今は遥君との付き合いでお前もずいぶん存在を主張するようになったじゃないか。

この上素顔で校内闊歩されてみる。そういう話もちらほらもらうようになるぞ。

遥君が学校でのお前の格好をそうあってほしいと願うのもわかる。」

とにかく危機感を持って、俺だって心配がないわけじゃないんだから。

そう最後に締めくくられれば、和は頭を抱えるしかなかった。

今まで、毎日のように鏡をみてきて、

自分が不細工であると思つた事がなければ可愛いと思つたこともなかった。

なんの感慨もなく、どこにでもいる平凡な顔立ち、つつか地味だね。

という自己評価のもと毎日つきあってきたのである。

それをいきなり自覚しろ危機感を持ってといわれても困る。

というか可愛いを自覚しろってどういうことだ、ナルシストじゃあるまいし。

それとこれとは意味合いが違うのだ、と遥も広末も言いはするが

自己評価を今より低く設定することに抵抗は全くなくても

高く設定しろといわれればそれは全力で抵抗せざるをえない。

和にとって、冷静な今日までの自己評価能力は全幅の信頼を寄せるものであった。

自分は口汚く、狡賢く、悪知恵を働かせたら天下一品。

しかしそういった腹黒さは少々隠して地味目女子として生きている。

別段それに不満も無く、またやめる気もなかった。
静かな場所を好み、目立つことを嫌う。

性格が悪い地味な女子。

しかして猫かぶりはそれほど不得意でもない。

それが自身の揺るぎない評価であるはずだったのに。

もっともっと客観的なデータがほしかったが

私って可愛い？などと誰に訊けようか。

それならば私って不細工だよね？と訊けばいいと思うが

女子にそんなことをたずねたところで『そんなことないよ』の嵐である。

そんなわかりきったまったく曖昧かつ不確かであるデータを集めるほど

自分は暇人ではないし、そもそもが冷静になってしまえばなんとも馬鹿馬鹿しい。

一週間、着替えて多少の化粧をして出かけたおしてみようか。

もしも客観的データを集めたいのであれば結局それが一番だ。

しかしそんな体力も時間も要る行為、正直にいつてしまえば御免だ。けれどもこのままではきつと一生、自覚とやらは生まれられないことだろう。

ろう。

ため息をつきつつ、一応それも実行することは候補として入れてお

こう、と

心の中でうなずいた。

その思考を和が浮上させたとき、目の前にのぞきこんでいる顔があった。

「うわっ!？」

驚いて椅子をひくと、目の前の人物は目を瞬く。

まったく気付かれていなかった事実には驚いたらしい。

「…考え事してるとお前は本当に周りがみえないな。」

「託…なんで当たり前のように前の席に座ってるの?」

「なんとなく?」

自分でもその答えを把握しかねているらしく、語尾を疑問系にして託斗がこたえた。

それに半ば呆れ気味で和はため息をついた。

その和の顔をまじまじと託斗がながめると、何を思ったのか眼鏡に手をかけた。

すいっと和の顔からそれが外される。

「…本の読みすぎか?」

短い問いに、和はああ、と呟いて質問に答える。

「それ伊達。視力入ってないよ。」

ほれ、と和が外された眼鏡を託斗の手から自身の手に戻したものを今度は託斗にかけてやる。

それに一瞬驚いたのか、小さく託斗の体が揺れた。

しかし和はそれに気付かなかっただらしく、ね?と短く同意を求めていた。

「ならどうして。」

先程から、彼の質問はどうにも言葉足らずだ。

しかし考えてみれば、昨日の彼のがどちらかといえばらしくない。

普段の託斗は、大体の言葉遣いがこのようなものなのだ。

そういえば、広末に会ったとき託斗の話をしそびれたな、と和は割とどうでもいいことを頭の隅で考えていた。

「んー…教室で気配を殺すため、かな。前はね…成功してたんだけど今はあまり意味ないかもしれない。和泉君と行動するようになってクラスで発言が増えてからは目立たないようにするのもあまり意味無くなってきたから。」

「…存在を、消す？」

「ん、まあ。人と距離を置くための道具だったのかな。」

「……そうか。」

ゆっくりと、託斗が和にかけられた眼鏡を外した。

なんの隔たりもない状態で、改めて託斗が和の顔を見つめる。

なぜそんな風に自分を見つめるのか、その理由もわからずに和は少々戸惑った。

しかしここで目を逸らすのもなんだか不自然な気がして、

和もただ託斗の顔をじっとみつめていた。

ゆっくりとした動作だった。

託斗が、段々と自身に近付いてくるがわかる。

その意味するところなど、わかっていたはずだった。

不本意ではあるにせよ、和は何度かその行為を遥によってなされていたのだから。

けれども目の前にいる男は遙とは違う。まして小学校時代からの昔なじみだ。

初恋ではあったし、それをひとたび意識すれば男として認識する頭はある。

けれどもそれはあくまでも生物学的に彼が異性であるという意識そのものであつて

たとえば彼が自分になにかをするだとか、そういう危機感はまったくもなつてはいなかった。

だからこそ、その段々と顔を近づけてくるといふ行為が、それにあたるものだとは思つてもみなかつたのだ。

ほんのわずか、それこそ一瞬わからないくらいの。

託斗によつて、和と託斗の唇と唇が触れた。

端的に言うならば、いまふたりはキスをしたのだ。

「……なぜ？」

「……………なぜだろう。」

沈黙の後、わからなかつたから和は問うた。

しかしかえつてきた声は、もっと疑問を深めるものだった。

どうしてしたの？という問いに、どうしてだろう、と返されてしまった。

ゆっくりとした動作で和に眼鏡をかけている目の前の男が先程までとは別人のように思えた。

怒りもなにもない。

この身に起こる感情は、歓喜でもなければ、嫌悪でもなかつた。

ただ、どうして、という疑問だけだ。

それなのに、それすらも答えてくれないなんて。

目の前にいる男が鈴木託斗であるかどうかすら、和は疑問に感じてしまう。

託斗の顔をいまだじっとみつめていた和の頭を、託斗は撫でた。

ぼふ、と一回頭に手を置いて、ひとりなにかに納得したかのようにうなずけば

託斗はさっさと自分の席に着いてしまった。

なんだったんだろうか、と和が呆然としていると廊下からざわざわと物音がきこえてくる。

どうやら何人かが登校してきたようだ。

まさか、それを察知して席をはなれたのだろうか。なんとなく託斗ならばありえる気がしてしまう。

しかし結局、真意はわからずに。

和はその疑問をまた本人にぶつけて良いものか悩んだが結局あれは忘れたほうがいいんだろうという結論に達した。

きつと託斗のことだ。理由なんてないに違いない。

なんとなくしたかったからしてみた。

きつとあったとしてもそんなようなものなのだろう。

隙がありすぎる。

それは確かにその通りなのかもしれない。

遙や広末、ひいては梓たちにまで言われたその言葉に、和は少し同意せざるを得ないと思った。

忘れるべきなのだと自分に言い聞かせはしたものの、
今日一日は頭の中をついてまわりそうだと和はため息をついた。
頼杖をつき、物憂げな表情をする和を託斗は自身の席からじっとみ
つめていた。
たった今自身がしでかした行いの理由を探るかのように。

昼休み、校舎隅の階段で、和と遙はお昼ご飯を食べていた。
今日は浩平も梓もいっしょではない。

浩平はもともと共にすることもそんなに多くはないのだが、
どうやら連日、和とふたりになれないことで遙が梓に不満をもらし
たようなのだ。

それに少々呆れつつも、梓は了承したらしい。
少し前に起こった和に対しての嫌がらせ事件もすっきり解決して
過剰に和にまとわりつくことも必要なくなった。

もとより梓もそうそうべったりな性格ではないにも関わらず頻繁に
同席してくれたのは
自分の為だということが和にはわかっていた。

相次ぐ遙の暴走に、まだまだどう対処したら良いのかわからない和に
いつだって梓が助け舟をだしてくれていた。しかしそれもやんわり

と和は断りを入れた。

いつまでも梓を頼ってられない。

本来なら梓だつてひとりの時間を愛するタイプの人間なのだ。

それならばやはり好きにできる時間はそうしてほしいと和が梓に告げれば、

梓は苦笑して了承した。

それでも、嫌でいっしょにいたわけではないと言われたことが、和は嬉しかった。

しかし今日は、ひよっとしたら同席をお願いしたほうが良かったかもしれない。

朝の一件のせいで、どうにも和は意識がとんでしまうのだ。

それを遥が疑問に思わないはずがない。

「ねえ和。どうしたの？」

やはり。

たずねられてなんでもないと答えることが無駄だとわかっている。

しかしだめもとでもなんでも、馬鹿正直に答えるのは憚れるので

結局うまい言い訳も思いつかずに、べつに？と気が付けば発してしまっていた。

「…和らしくないね。言い訳も用意できないようなテンパる出来事があったんだ。」

その遥の言葉に今更ながら失態の大きさに気が付いた。

『しまった、そっちか!!!』

心の中で舌打ちをしてももう遅い。これでは最終的に白状しなければ

ばいけなくなるが

さすがにそれを言うのは少々心苦しい。

なんせ彼は毎日のように和に対する好意を伝えてくる。

その相手にまさか他の男にキスをされましたなんてどの面下げて言えようか。

あまりにも無神経すぎるではないか。

「いや、言い訳考える程重要な事柄ではないんだけど言うのが面倒で今みたいな返答になるかもしれないけどならないかもしれないと願ってた。」

相も変わらず、追い詰められるとこの口はとんでもなく都合が良くなる。

こういった場合にのみポーカーフェイスになれる自分は本当に根性が汚い。

その言葉になんとなくは納得したらしく、遥が続きを促す。

「じゃあ、結局意識をとばしてた理由はなんなの？」

俺といるのに、と遥は唇を尖らせた。

ああ、そうか、それも気に入らなかつたのか、と和は苦笑する。

本当にこの男は、妙に子どもになるときがある。

「んー、昨日の事だよ。なんか妙に悩んでる。広未にも似たような事言われちゃったし。」

「ああ。広未君にも意見をきいたんだね。だから言ったじゃないか。」

「でもさあ、身内贖って言葉もあるじゃない。広未とは兄妹みたいに育ったって話したでしょ？」

なんていうか妹かわいさ、みたいなものじゃない？広末の場合。」
「まあたそういうことを…どうあっても納得してくれないの？」
「うーん…検証をしてみてもそれが事実だってわかればふたりの言うことに納得するかなあ。」

それに遥はぴくりと眉を動かす。

「検証つて…？」

「うん？…具体的にはまだ考えてないけど。だってやっぱり説得力がないんだもん。」

試しに学校でしばらく眼鏡と髪なしで生活したら駄目？

それでさ、その決めた期間なんにもなかったら和泉君の負けってことで」

「嫌。」

「いずみく」

「わかってるよ！わがままだって。だから駄目じゃなくて嫌って言ったじゃない。」

「……そう言われるほうが私が弱いってもう知ってるでしょう。」
「強制はしないよ。…和がそれで危機感持ってくれるって言うんなら。」

でも、監視はつかせてもらうから。」

「…彼女達を使うってこと？そんな馬鹿馬鹿しいことで！？」

「当たり前じゃないか。狼の群れに監視員なしで羊を放り込むと思っつうの？」

さらっと言つてのける遥に、和は盛大なため息をついた。

この男は、どこまで過保護なのか。

そもそもついこのあいだ、余程の事がないかぎり彼女達に助力を願うのはやめようとして

自身の心に誓ったばかりなのだ。

はっきり言つて今は「余程の事」ではない。

「…わかった。やめる。」

「そう?…じゃあ、和は納得できないままなわけだね。」

次には遥がため息をついた。

そうはいつても、こればかりは仕方がないではないか。

「あのさ、一応もうナンパみたいなのがどういうものなのかはわかったから、

声かけられても相手しないようには心がけてるんだよ?」

「良い心構えだとは思うけど、それじゃ足りない。」

「忘れた?連れ去られそうになったの。」

その遥の言葉に和は短くあ、と声をだした。その指摘通り、今の今まで忘れていたのだ。

そういえば、遥とのデート待ち合わせの際、そんなことがあった。

「あのととき和泉君が助けてくれたんだっただね…そういえば。」

そのときの出来事を反芻したとき、次いで遥がなにをしたのかも和は思い出した。

「そうだ、あのととき。」

公衆の面前にも関わらず、遥は和の唇にキスをしたのだ。

思い出し、さっきまで忘れかけていた朝の出来事をまた思い起こす。託斗は一体、なにがしたかったのだろう。

「どういふつもりであんなことをしたのだろうか。」

その答えがどうしても知りたくなつた。もつと言え、心のどこかがわからないという事実には少しだけ苛立っていた。

「……………」

「和？」

無言で、少し睨んでいるような形で和が遙をみつめた。

その行動がわからずに、遙は戸惑いを隠す事ない声で和を呼ぶ。

「どうして？」

「え？」

「どうして、キスしたの？」

その問いは、目の前に居る遙を飛び越えていた。

顔は遙のほうを向いているものの、瞳は遙をみていない。

託斗ではないとわかっていたのに、どうしてもその疑問を口に出さずはいられなかった。

それは遙にも伝わったのだろう。

突然に、遙は和を踊り場までひっぱった。

そうして彼女の体を自身の腕の中に引き寄せて、耳元で囁く。

「…今の、誰に訊いたの？」

ゆっくりと静かに、けれども小さく怒りをたたえて。

遙は和に噛み砕くように、質問した。

その声は遙のその発した速度と同じく、じわじわと和の頭の中に浸透していった。

「誰につて、」

そんなの目の前にはあなたしかいなだろう、と当たり前のように返

そうとした。
けれども遥はその言葉を遮る。

「俺じゃないでしょ。俺に訊いたんじゃないよね、今は。」

確信をもっているかのような遥の言葉に和はびくりと体を震わせた。
なぜわかったのだろう。

「和、全然俺の事みてなかったじゃない。

それに今更そんなこと訊くの変だよ。

あのときも、いつだって、なんでキスしたかなんて、わかってるでしょう?」

今度は真っ赤になった。

それでは頻繁に遥がキスをしているかのようにきこえる。

それとも、もうそんなに何回もふたりはその行為を繰り返していただろうか。

付き合ってもいないのに。

突きつけられた事実がとてもだらしなはいしたない行為に思えて
和は嫌悪感と羞恥心でいっぱいになる。

いつもされてしまう側だけれど、それでもそうなる隙を与えなければいい話なのに

友として隣にいることを和は許してしまっているのだ。

今更ながらふたりの立場云々以前に、この関係自体が歪なのだ気が付いた。

「和、余計な事考えないで。」

遥の言葉に、歩き出した思考が一瞬で停止する。

なにを考えていたか、遙にはお見通しのようだ。

「和が受け入れていないんだから、変な事じゃないよ。俺がいつも無理矢理しちゃうだけ。」

「和泉君、でも」

「それとも、受け入れてくれるの？…俺と同じように、好きだからって、そういうことを受け入れてくれるの…？」

甘い声でそんなことを囁かれて、普段ならばなんてことはないはずなのに

どうしていつもこういった状況に陥ると普通の女の子のようにしか反応しなくなってしまうのか。

恥ずかしい。

泣きたい。

どうしたらいいのかわからない。

頭の中をぐるぐると単語ばかりがまわって、
まともに思考を呼び戻すことができない。

「私は…す、好きには、なれない。」

なんとか震える声でそう返すと、抱きしめる腕に力が込められた。

「…うん。今はそれでいい。それでいいから、はなれていかないで。」

その遙の言葉に、和はゆっくりと首を縦に動かした。
遙が安堵の息を小さく吐く。

もう終わると思われた行為は、しかしまだ重要な事柄を残したままで和はとづくにこういう事態に陥った原因を忘れていたが、遥はそうではなかった。

少しだけ腕をゆるめてふたりの間に多少の距離を作ると、遥は和の顎に手をかけた。

ゆっくりと、その顔を遥のほうへと上向かせる。

「それで？誰にキスをされたの？」

遥にはもうわかっていた。

なぜ和がそんな質問をしたのか。

訊くまでもない。誰かが彼女にそれをおこなったのだ。

突然忘れていた記憶を呼び起こされて、和は慌てた。

しかも遥は確信をもってそれをきいているのだ。

もはや誤魔化すこともゆるされない。

「あの、なんか、事故ってどうか」

「事故？なに、足引つ掛けて転んだ拍子とか？

でもそれならあんなこと訊かないよね？」

「え」

「どうしてしたの？って訊くってことは、向こうが自発的にしたんでしょ？」

ああ、言われてみれば確かにその通りだ。

遥はこんなときいつも鋭すぎていやになる。

「だって、なんであんなったのかわからないんだもん。

なんで？って訊いても、なんでだろう、って言うし。わけわからな

い。」

もはや開き直ったのか、不機嫌な声で和がそのときのやり取りを口にする。

遙の瞳がどんどん怪しくも激しいものになっていくのに、和は気付かない。

「和。それで？」

「朝、託になんてか知らないけど。なんか眼鏡がどうとか話してたら急に」

「眼鏡？」

「うん、本読みすぎて視力落ちたのかってきかれたから、伊達なんだよ、って

眼鏡を外したらなんか人の顔じつとみてくるから不思議だったんだけど」

「彼の前でも外したんだね。」

「え？い、和泉君？」

今更ながらに、和は遙の纏った空気が危険なものになっているのが付いた。

「あの、したって言うっても触れたか触れないかくらいで！

忘れようと思ってたんだけど、理由が思い当たらないから考えちゃっただけで！

きつとあれだよ、ただなんとなく!？」

叫ぶようにまくし立てる和をみて、遙は無言で眼鏡を外した。

その行動にびくりと和は震える。

制服のYシャツに和の眼鏡を遙がひっかけるのを見送ったところで和は我にかえり今更ながらの抵抗を示した。

ジタバタと遥の腕の中で暴れる。

「…鈴木君は良くて、俺は嫌なんだ？」

その低い声に大きく肩をびくつかせ、和は固まった。

そう言われてしまうと、なんだかまるで別の意味のように聞こえる。

「ちが、別に、託のことはなんとも思っていないよ！

そりゃあ、最初に託だってわかったときは昔の気持ちをほんのり思い出したりもしたけど

それはあくまでも小学生のときのこと。今は別に特別な感情とかなんにも

「『昔の気持ち？』」

あ。

まずい。

自身の失言の数々に今度こそ和は頭が真っ白になった。

今の言葉の意味するところがわからない遥ではない。

それをわかっているからこそ、和はもうなにを言っても無駄だと思っただ。

というかもうそんな考えを巡らすことも出来ないほどに、本当に和は思考を完全停止したのだ。

目の前の遥が、今までにない程、獰猛な瞳をしている。

その表情は完全に怒っていた

遥は和の顔を自身の両手で完全につかまえると、

荒々しくその唇に唇を押し付けた。

今までにないくらい性急に、食べられてしまうかのように和の唇を奪う。

ほどなくして酸欠になった和が空気を欲しがり唇を薄く開けば遥は自身の舌を遠慮なく滑り込ませた。

荒々しい息遣いと、舌をいじる水音があたりに響いて、

和は恥ずかしさでどうにかなくなってしまいそうだと思った。

口腔内をこれでもかと蹂躪されて、どうしたらいいのかわからない声をあげればいつかの恥ずかしい声がもれてしまいそうで、自然押し殺していた。

なんとかやめてほしいと伝えようと、弱弱しく遥の胸元をたたいた。何度かどんどんと遥の胸を拳でたたいていたが、やがて遥がその和の拳を手に取った。

和の両手首を遥が手で捕らえれば、口付けを止めることなく壁際に和を追いやった。

気付けば和は、その両手を遥によって自身の顔脇に縫いとめられてしまい、

ますます抵抗できない状態にさせられてしまっていた。

「やめ、や…！」

とうとう和は抗議の声をあげる。

とにかく抵抗しなければ、と口を大きく開けば

それをいいことに遥は先程よりも奥まで舌をねじこませた。

どうしたらいいのかわからない。

そう思えばとうとう和は泣きだし、段々としゃくり声をあげる。

和が遙の唇と自身が泣いたことによつて息がつまっているのがわかつたからか、
とうとう遙が和の唇からその唇を離した。しかし遙は、まだ和への行為をやめない。

和が流す涙を、その唇で受け止めれば、目元から頬にかけてを何回も往復する。

時には舌で舐め上げて、その雫を和の顔から取り払う。

和の涙がまだまだ止まらないとわかると、今度は耳元にその舌を這わせた。

耳朵を軽く食み、耳の裏をそろりと形に沿つて舐め上げる。

その行為に、和は驚いてしゃくり声を止めた。

「和…他のひとを見ないで。俺以外をうつさないで。
そんなことされたらおかしくなっちゃう。」

耳元でそう囁かれて、和はずっと赤かった顔をさらに赤らめた。

「だ、だから…最初からそんな風に託のことみてないって、い、言つたのに…!!」

ひどい、と言つて和がまた涙声でうめきだしたので、
遙は慌てて手首の拘束を外してその体を抱きしめた。
先程のような怒りも、艶っぽい雰囲気もなりをひそめ、
子どもをあやすように遙は和を抱きしめる。

和の背中を、落ち着かせるように何度もさすった。

「そつだよね、ごめんね。和の言葉を信じたかつたのに…」

自分に自信がないばかりにみつともなくあんなことしちゃったね。

「自信がない？」

「そうだよ。俺はいつだって余裕がないから。」

少しでも不安な事があると刺激されちゃう。わかってもらえないと尚更辛い。」

つきん、と和の胸が痛む。

なぜ信じきれないのだろう。

彼と自分の間に、一体どんな隔たりがあるというのか。

こんなに激しい感情をみせられてなお、彼の気持ちを疑うのはとても残酷だ。

きちんと受け止めなければならぬのに。

彼は、かつこつけるばかりではなくて、情けないところだってさらけ出してくれているのだから

それを嘘だなんてつっぱねるのはいけない。

このとき初めて、和は遙の気持ちを理解できずとも受け止められるかもしれないと感じた。

得体が知れないからきつと怖いのだと思う。

けれどもこれだけのものをみせられれば、もう信じないなどと言い切れない。

「あの…もう大丈夫だから。教室戻ろう？」

「…うん。」

体をゆっくりとはなすと、目の前の遙はにっこりと微笑んでいた。

そっと先程うばったものを、和の目元にかける。

眼鏡姿の和をみて、遙は和の頭をそっとひとなでした。

それがなんだか恥ずかしくて、少々足早になりながらも和は階段を下りる。

その後姿を追いかけけるように、遙も階段を下りた。

そうして無言で廊下を歩いて、2・3の前に来ると教室の前に託斗が立っていた。

遙はなぜかそれに嫌な予感がした。

そうして思う。こついつときの勘はよく当たるのだ。

「…和。」

ゆっくりとこちらに近付いてくる託斗に、和は首を傾げた。

「託斗？どうしたの。」

「今日一日、答えを考えてた。」

「答え？」

「どうして？と訊いただろう。」

「ああ。」

先程の原因になった朝の一件。

思い出して、遙とつい先程までしていた行為を思い出して少々顔を赤らめた。

託斗はそれをどうとったのか、和の顔を見て少し目を細めた。しばらくじっとその顔を見つめていると、とうとう託斗が切り出した。

「好きだから。」

淡々とした声から発せられた言葉は、しかしとんでもない爆弾だった。

「和の事が好きだから。したかったから、した。」

その言葉に、声をあげることなく和は呆然と立ち尽くしていた。

目の前の完全にライバル認定した男を睨みつけながら、自分の勘のばかやろう、と、遙はそのとき強く思っていた。

第二十一話「未来の気持ち」

「和のこと好きだから。したかったから、した。」

先程の言葉に、笹森和の思考は完全に停止していた。

まるで置物のように動かなくなった和をみて、動いたのは遥だった。和の耳元にふ、と息を吹きかけてやる。

「うわああああ！ちよ、なにをするのさ！！」

びっくりして和が勢い良く蹴りを繰り出した。

余程驚いたのだろう。まさか足が出てくるとは思わなかったが、遥はそれをなんとか避ければ、こら！と和の頭を軽く小突いた。なぜこちらが怒られるのか。

わけがわからず和は憤慨しかけたが、遥が眉根を寄せて口を開いた。

「そんな短いスカートで足をあげたらだめでしょう！」

「お父さん第三号！？」

ちなみにおわかりかもしれないが二号は広未である。

「なるつもりないから。あのね、他の男にみられたら嫌なの。絶対に。わかる？」

「スパッツはいてるよ。」

「あのね、そういう問題じゃないよ。ヒラッと舞い上がったスカートって神秘的なの。」

その先を妄想するのが男の子なの。その対象に和がなるのが我慢ならないの。」

「わかったわかった。しかしだったら蹴りを繰り出すような原因を

作らないでもらいたいね。」

そう言っ過ぎてぎろり、と和が睨みつけてやれば、遙はそろりと視線をさまよわせた。

「有耶無耶にするつもりか？」

騒いでいたふたたりを一喝するような声が背後から聞こえた。

普段より一層低い声に、和はそろりと後ろを振り返る。

はつきりと意志を持って、託斗が遙を睨みつけたのがわかって和はぎよつとした。

ここまでの感情を彼があらわにするのはとても珍しい。

それに呆けていれば、今度はチツという舌打ちがきこえてくる。

今、和は遙と託斗に挟まれる格好になっており、

今しがた託斗と相對するように向き直した和だが、

好奇心に負けたようにまたも背後にいる遙を振り返ってしまった。

『あ、横向きになればいいのか。』

今更ながらにそう気付いて、体勢をそのように整え、ふたりが視界に入るようにした。

そうして観察してみると遙もまた、普段和と向き合っている時では想像出来ないほどに

嫌悪感を前面に押し出したなんともいえない顔をしていた。

この表情もまた珍しい。

宮田君に相對するときも似たような顔はしているが、

なんといおうか、この毛虫でも見ているかのような表情と纏う雰囲気。

『テイロリン。』

なんとも間が抜けたメロディーが鳴り響き、
気が付けば廊下に溢れていたギャラリー達はその音の原因にずっこ
けた。

和が、携帯電話のカメラ機能で遥の写真を撮ったのである。

遥はいえ、目の前の愛しい彼女がなにを思ってそんなことをし
ているのかが

まったくわからずにいた。

自分の写真を欲しがるような彼女ではない。

固まってその様子をながめていれば、いまだカチカチと電話を操作
しているようだ。

「…なにやってんの。」

事態を把握しかねた遥は、たまりかねて和に直接質問してみる。

「んー？いやなんでもないですよ？」

無表情に先程まで操作していた携帯電話を閉じてポケットへとしま
った和をみて

本能的にもものすごく嫌な予感が遥にはしていた。

「ねえ、なんで写真撮ったの？」

「イズミクンノシャシニングホシクテ。」

ものすごい棒読みでカクカクしながら言われても、信じられるはず
もない。

しかも言葉にしたあとあからさまに和の顔は顰められ、
なんて気持ち悪いことを言ってしまったらうとその表情が如実に語っていた。

「信じるわけないでしょう？」

「信じとけよそこは、めんどくせえ。」

「ちょ、コラ、和！正直に話さない！！」

「こればかりはトップシークレットなので」

和の肩をつかみがくぐくとその身を揺らしながら詰問する遙だが、
まったくもって和に話す気がないようだ。

どうしてくれようかと考えていれば、人垣の一部から声がきこえた。

「まさか…あの一部のレア商品は…」

「きつとそうだよ、笹森さん、さすがすぎる…」

「いやいやもう、ゴチですとしか言えないね…」

周りがざわついているのできこえないと油断していたのだから。
遙の耳にも和の耳にもその会話はばつちりときこえてきていた。

「ちょっと、今の会話」

「えーと託斗！！ごめんね話を中断させてしまっ…！！」

遮るように大音量で和が託斗のほうをみれば、
急に話題転換されて託斗が目を丸くしていた。

というかそうだった。

忘れそうになっていたが、勘違いでなければさっき自分は。

「…お前。忘れてただろう。」

「あれ？あはははははははははは」

そう、話題転換にする材料にしてはあまりにも重過ぎる内容だった。今更ながらにその重要事項に気がついた和はもう笑うしかなかった。そもそもそんなときに写真を撮るとかどれだけ緊張感がないのだろうか。

「先に言っておくが、冗談じゃないから。」

「た、託？」

「お前と和泉は付き合っていない。そうだな？」

「…そうだよ。」

和は戸惑いつつも、はっきりと同意する。

託斗のその質問に、遙は先程よりも険しい顔をして託斗を睨みつけた。

それをふっと目を細め託斗が笑う。

「…ということは和泉の片想いなんだな？」

「…こ、言葉にするとそうなっちゃう…んですかね？」

無意識に2・3クラスメイトズを見やれば、皆が大きくうなずいていた。

ある意味誰よりも早く、誰よりも間近にふたりの攻防をみてきた人々である。

みな思い思いにそのやり取りを振り返りつつ力強く同意しているのだろう。

ともすれば遙に同情しているような表情が並んでいて、遙は内心複雑であった。

「…なら、俺と和泉は立場的に対等なわけだ。」

「！」

その今度こそ堂々と受けた宣戦布告に、遙は黒く微笑んだ。

「成程。…遠慮する気はさらさらないと？」

「彼氏でもなんでもないんだろう？お前にその権限はないはずだ。」

「ああ、不愉快な事にその通りだね。…けれども俺は黙ってそれを見てるほど

お人よしでもなければ、愚かでもないんだよ。」

「…だろうな、残念な事に。」

「そう思うならさっさと諦めて見切りをつけてくれないかなあ？

生憎だけど俺は相当固いよ？」

「それを受けて立つ覚悟くらい、俺にだって出来ている。」

間違いなく、今ふたりの間に激しい火花が散っている。

しばしふたりが睨み合っていると、そういえば和はどう返答するだろうと気になった。

遙と同じく託斗もそう思ったのか、和のほうへと視線をうつす。

その時、ふたりして目を見開いた。

和が先程と同じく、目の前で携帯電話をいじっていたからである。

どこぞにメールでも打っていたのだろうか？ふたりの会話中ずっと？

しかしどこか不自然であるような。

そもそも和は滅多に自発的にメールを打たない。

携帯電話中毒のようにどこでも電話を開いたりもしない。

和がふたりの視線に気付きさささと電話をまたしまったが、ひっかかりは消えない。

「…和、お前なにしてた？」

託斗も疑問だったようで、和を睨みつつたずねた。
考えればふたりの争いの原因が彼女であるはずなのに、なんとも失礼な態度である。

「え、別に？お話が長引きそうだなあと思っていたので暇つぶしを
と。」

「……………」

その言葉をまったく信用していなかったのだろう。

廊下にいるギャラリィの中からひとりの男子に焦点をあて、ぎろりと睨んだ。

視線の先の男子がヒツと悲鳴をあげる。

「おい、こいつなにしてた？」

その低い声に男子は即答した。

「さっきみたいに写真撮ってるみたいでした！」

「君、顔は覚えたからね？」

今度は和に、にっこりと微笑まれそうわれれば

わからないが何かとんでもない目にこの先自分が遭う気がしてしま
い、

またもその男子が悲鳴をあげた。

あわれな…と2・3一同が生温かい目で彼のほうをみる。

しかし男子の答えに託斗がますます顔を顰めた。

「写真？シャッター音がしなかったが」

「改造して音出さないように出来るんだよ。…和？」

「ちが！してないしてない！！そんな知識ないし！！」

遙の問いに何とか逃れようと和がぶんぶん首を振る。

「さっきから…写真撮ってどこかに送ってみたいけど？
どうしてかな？」

「してません！してないですそんなこと！！」

「和。鈴木君も撮ったんじゃないの？」

「…は？和、本当か？」

「え、あ、う、いや…」

ふたりにじりじりと間を詰められつつ問いただされれば
和はどんと冷や汗が浮かんできた。

どうしたものかと悩み、とにかくこの場をどうにかせねばと頭を巡
らす。

「和泉君！！」

大きい声で名を呼ばれ、びくりと遙が止まった。

「託！！」

同じように、託斗も止まる。

「ふたりとはお付き合いする気はありません、ごめんなさい！！」

ぱつと勢い良く頭を下げてそう叫ぶと、和は一目散にどこかへ走っ
て行った。

呆然とするふたりを、今や廊下のギャラリイすべてが同情の眼差し
で見ている。

「ちょ、この空気の中置いてくとか。」

彼女は魔女か、はたまた悪魔か。

「…いらないうつなら俺がもらうか？」

「は？和は物じゃないよ。ていうか冗談じゃない。」

「本気で言っている。」

「なお悪いよ。」

またもふたりが攻防を繰り返すというなか、和はいえれば全速力である場所に走っていた。

言えるか、言えるものか！

『付き纏われてムシャクシャしてた腹いせに大分前から』

和泉君の写真で小遣い稼ぎをしたとか言えるものかあああああ』

しかも最近ではけっこうな額が稼げるからと

調子に乗ってバンバン写真を撮っている。

とにかく良いショットはないかと狙ったりさえしていたのだ。

目的地にたどりつけば、ぜえはあと肩で息をしつつバシン！と扉を開けた。

「姐さん、匿っておくんなせえ！！」

素早く扉を閉めると、和は叫んだ。

その和の様子に、保険医である岡元ゆかりは冷静につっこんだ。

「誰が姐さんよ。」

「姐さんもとい岡元先生、匿ってください。」

その言葉に岡元が呆れたような声をあげた。

「ずいぶんと慌しいじゃない。なにがあつたの？」

「明日には学校中に噂が広まると思うのできかないでください。」

…ああ、そつだよ自分で言つててなんだよそれええええ」

目立つのが大嫌いだと、何度も何度も言っているというのに。

また野次馬共に楽しいネタを提供してしまった自分が腹立たしい。

頭を抱え込んでうめく和に岡元がくすりと笑つた。

「まあまあ、コーヒーでも飲む？一応きくけど授業はいいの？」

「…六限は出ます。そしてコーヒーもいただきます。」

ありがとつございます、と言つて和は目の前にある丸椅子に腰掛けた。

岡元はインスタントだけど、と言つていまだ眉間に皺を寄せる女生徒にカップを渡した。

「どうも…」

「いいえ。…にしても明日にはわかるんなら今教えてくれない？」

目の前でそんなに悩まれちゃ気になつて仕方ないわよ。」

「うえー？マジすか。先生もそういうの興味持っちゃう人でしたか。」

「そりゃそれなりに噂話は嫌いじゃないわよ。女ですもの。」

「……………」

「じゃあ笹森さん、頭痛も治つたみたいだし授業出なさい？まだ予

鈴鳴ってないわよ。」

にっこりと微笑んで今にも追い出しそうな岡元に、和は観念してため息をついた。

「教室前の廊下で衆人環視の中好きだと言われました。」

息継ぎすることなく早口で和が話せば、岡元は目を丸くした。

「え？遙君に？それならいつつも公衆の面前で言われてるでしょ？」

「まったくもってそのとおりです。」

眉をしかめていかにも嫌そうな顔をする和をみて、岡元はにんまりと笑んだ。

「誰に告白されたのよー？」

「そこまで言わなきゃだめスかあ？」

「授業」

「クラスメイトの鈴木託斗君です。」

即答しなければいけないのが悔しい。

伝家の宝刀のように授業と言われて逆らえない自分に奥歯を噛み締めめた。

しかしここは学校で自分は生徒だ。多くの場合自分は立場が弱い。

「鈴木託斗って…あら？転入生の男の子よね？しかも昨日。それで告白？」

「…小学校時代の同級生なんですよ。再会は四年ぶりでしたけど。」

「へえ！…でもそれにしたってずいぶん早いわね。」

笹森さん昔、好意でも持たれてたんじゃないの？」

「ええー？それはないと思いますけど…。」
「でもそうじゃなきゃ再会してすぐ告白なんてあんまりないんじゃない？」

「うーん…良くわからないですけどねそのへんは。」

託の場合、本能で思ったら即そうするみたいな所ありますから友情と愛情の区別もつかない状態でそんなこと言ったのかもしれないですよ。」

「ずいぶん親しい感じ？」

「まあ…趣味が同じですし、昔から一緒にいてラクだったので仲は良かったですかね。」

「鈴木君て物静かなタイプなの？」

「無口ですかね。あとマイペース。」

「なるほど、確かに笹森さんと気が合いそうね。」

納得したように岡元がうなずく。和はずいぶん喋ったと思えば喉が渴いて

目の前にあるブラックコーヒーを飲んだ。

「で、告白されてどうしたの？」

「断りましたけど？」

「…なんであんな息切らしてたわけ？」

「諸事情で危険だったので断って即、逃げてきたんです。」

「鈴木君から？」

「いえ、託と和泉君のふたりから。」

「え！？遥君の目の前で告白！？」

「はあ…」

「そりゃあ…明日には学校中に広まるでしょうねえ…。」

「だからそう言ったじゃないですか。」

脱力して和がため息をつく。もう一口コーヒーを飲んだ。

「ふうん……にしても、断ったんだ。」
「……………」

質問形式でもなかったのかまわないだろうと和はそのまま
コーヒーを飲み続けていた。

ちらりと岡元を見れば、にやにやと嫌な笑いをしている。
美人が台無しだ。

「どつちも選ばないなんてやるわねえ。二股？」

油断していた和は口に含んでいたコーヒーをぶはつと噴き出してし
まった。

それには岡元が小さく悲鳴をあげ、汚い！と抗議する。

和は無言でポケットからハンカチを取り出して口元を拭う。

「…失礼しました。しかしどうしてそうなる。」

「だってどつちも選ばないんでしょ？」

「そうですよ。」

「だったらどつちも選べるってことじゃない。」

「いやいやいやいや。」

だから、と更に否定をすれば、岡元はそれを制した。

「訊くけど、あなた他に誰か意中の人でも？」

「いいえ。」

「だったら誰ともそういう関係にならないわけでしょう？」

「まあ、そうですけど。」

「そうなるもふたりとも諦められないと思うわよ？」

恐らくあなたが誰かしらと付き合わないかぎり。」

「それはつまり…私がふたりを縛ることになる、と？」

「まあ、そうね。悪い言い方をしてしまえばそうなるのかな。」

「……………チツ、めんどくせえ。」

「あらあら。」

しかし他に恋人出来たつて言うのももう出来ないしなあ。

そのテ使つて失敗したんだし。

てことはあれですか、私はあのふたりに罪悪感を抱きつつ生きてくわけですか。

「…転校したい。」

「あははは、まあそんなに思いつめないで。」

「はあ…。」

「笹森さんは、自分の中にどちらかを好きになる可能性を感じられないの？」

その岡元の問いに、和はしばし逡巡する。

なかなか言葉にするのは難しいように思う。

今はそれはないと言えるけれど、これから先はときかれれば。

「…わからないです。今はないと言い切れますけど、先々は。

人を好きになったことがないのならば、言い切れるかもしれませんが人並みに初恋もありましたから。」

「あら、だったらなおのこと、先々なんて言わないで考えてみたら？」

「……………」

「良いきつかけかもしれないわよ？」

ね？と言われて、なんと云ったらいいのかわからずに和はただこくりとうなずいた。

戻りたくないと思底思ったものの、このまま下校するのはあまりにも気がひけて、
重い足取りながらもなんとか五時間目が終わって和は教室へとたどり着いた。

てっきり質問責めにでもされるかと思っただが、誰もなにもきいてはこない。

不思議に思って周囲を観察してみれば、みなちらちらと託斗のほうを見ていた。

どこかびくびくもしている姿を確認して、和は納得した。
きっと託斗が手をまわしてくれたのだろう。

昔から、彼は自分が大事だと認識した人間にはとても優しい。
…どうでもいい人間には容赦がないのだが。

和は一瞬迷ったが、席を立ち託斗の前まで歩いた。

教室中がこちらに注目しているのがわかって、なんとも気分が悪い。

「託斗、ありがとうね。」

「…なにが」

「色々。あとさつきも。いや、ありがとうっていつかごめんか。」

「……別にいい。」

「そっか。…ごめんね。」

「和泉にもそう言うんだよな？」

「え？」

「ごめん。」

「う、うん。」

「……なら、俺は退かない。」

「託。」

「あきらめる、あきらめないは本人の自由意志だろう。」

「…あ、そう。」

これ以上話しても無駄だと判断し、和はため息をついて席に戻った。なんだか窮屈だなあ。

やっと少し落ち着いていた日常を取り戻せたと思ったのに。しかし岡元の言ったことがふと頭によぎった。

優先順位を変えなければいけない。

きつと、第一に恋とやらを持ってこねばならないのだ。

『ああ、めんどくせえ』

身も蓋もなくそんなことを思ったが、不誠実ではありたくない。歪曲した性格ではあるけれども、通すところは通したいのだ。それが和の自論だった。

放課後になり、和が席を立つと教室の前で遙が待ち構えていた。いつも思うがこの男はどうしてこんなに早く待ち伏せできるのだろうか。

授業を少しさぼっているのではないかと疑ってしまつう。

「和、今日は図書室寄って行くの？」

「んー？うーん…いいや、今日は帰る。」

「じゃあいつしよに帰ろつう。」

「…駅までね。」

「はいはい。」

そう言つて和は遙を連れ立って出て行くこととする。

そのとき、後ろから声がかげられた。

「和。」

「ん？」

託斗の呼び声に振り返れば、呼んだにも関わらず

彼は和を見ていなかった。遙に視線をうつして睨んでいる。

視線はそのままに、託斗は口を開いた。

「また明日な。」

「……………」

その言葉に、なんとなく返事をしたくなくて、

失礼だと思いつつも無言で出入り口へと体を向き直した。

視界にはいった遙を見れば、彼もまた託斗を思い切り睨んでいた。

『…馬鹿馬鹿しい。』

ため息をついて和が教室を出れば、遥も和の後ろをついてきた。そのままずっとにらめっこしてればいいのに、と心で呟いたが、和の隣にいる遥はすっかり表情を変えていた。にこにこしている。

『なんとという恐ろしい切り替えの早さ。』

それにしても、明日からが憂鬱だ。

これからの日常は、どうなってしまうのだろうか。

いつもならばなにかしら会話をするのに、今日の遥はなにも話さない。

遥が口を閉ざせば和がまくしたてたりすることもないので、沈黙のまま駅までの道を歩いた。

ぼんやりとしたまま着く帰路が、なんだか心地良かった。

本来なら気まずくなったりするのだろうか、

疲れた心にこの静けさはなんともいえない清涼剤のようだった。

ただ、静かに日々を過ごしたい。

願うのはそれだけだったのに。

日々はどんどん騒がしくなっただけ。

わかっている。わがままだと、わかっていたのに。

それでも、遥のことがやっとな落ち着いて。

最低限、前のように過ごせると思っていたのに。

駅前に着いて、どちらかともなく足を止めた。

和が、ぼつりと呟いた。

「どうして…?」

その問いに、遙はなにもこたえない。

和はゆつくりと、遙のほうへと首を動かした。

「私…ただ放っておいてほしただけなのに……
それ以外、なんにも望んでないのに…。」

図書室も、しばらく行けないかもしれない。

なによりも、考えても考えても難しいことを考えなくてはいけない。

勝手に好きだと伝えてきて。

勝手に自分の世界に土足で踏み込んできて。

なにもしていないのに。

自分はなにもしていないのに!

付き合えないと言ったのに。

誰とも付き合う気はないと言ったのに。

それでもその先をどうして考えなくてはいけないのだろう。

考えることを放棄すれば悪戯にふたりの時間は奪われていくばかり。

あきらめることもしてくれない。

「私さ、一応意思表示したよ。

それなのに、託も退かないとか言ってた。…なんでだろ?」

「和…」

『罪悪感で疲弊してるのは私だけ。』

『理不尽だ!私は悪くないのに!』

『勝手に好きになったのはそっちなのに!!!』

心の中で叫んだ言葉は、なんとか思い留められた。

口にしていたら、きつとひどく傷つけてしまったに違いない。

「…帰るね。」

遙の瞳が、不安気に揺れているのがわかる。

けれどもそれを気にする余裕も無く、和は改札へと姿を消した。

心に余裕が無くなっていく。

選べと言われたらとても焦る。

何様？誰かを選ぶ権利なんて自分にあるのか？

けれどそれよりも

奪われ続ける私の時間を返してほしい。

浅ましくもそう思ってしまう自分の心に嫌悪と共に吐き気を覚えた。

愛想を尽かしてくれればいいのに。

ふたりはとても魅力的な人間なのだから。

明日は、笑わなければ。

平気な顔をして、いつものように、凶たく黒く笑わなければ。

『…これから先も、誰かを深く傷付ける事はありませんように。』

自制しなければならぬのは自分自身のはずなのに、

それをやりきる自信もなくて、気が付けば和は祈るようになっていく。

すがっていた。

…祈る対象など、ひとつもない自分であるのに。

苦笑して拳を握れば、停車した電車の自動ドアが開いていた。

中に体を滑り込ませ、立ったまま目を閉じる。

眠って起きれば明日になってしまっし、そうしなくとも時間は等しく過ぎていく。

そのあまりの残酷さに、今更ながら和は愕然としたのだった。

『…明日は、笑わなければ。』

無慈悲な時を、睨みつけるかのように眉間には皺が寄っていた。

第二十二話「頭よりも心で」

「あら、和って音楽聴くのね？」

静まり返った校舎の隅。

まさか誰もいないだろうと思っていたのに、声をかけられびくりと肩を揺らした。

声に反応してゆっくりと前を向けば、そこには梓が微笑んで立っていた。

女性の声と、目の前に現れたのが梓であったことに和は心底安堵した。

思わず口から吐息がもれる。

「梓さん、珍しいねこんな朝早く。」

「まあたまにはね。和こそ、朝はいつも教室にいるじゃない。」

ここはよく和がお昼を食べるときに利用する校舎端の階段だ。

移動教室のときにはたまにこちらに来たりもするが

ほとんどが会議室やら資料室やらが集中した隔離階のようなもので、日常的に階段と廊下には人影がとても少なかった。

梓の問いかけに、和は苦笑する。

わかっているくせに、とでも言いたげな表情だ。

「…鈴木君も、朝は早いみたいね？」

「今日もかはわかんないけど。…ちょっとね、会ったら酷くあたりそうだから。」

「……。」

心配そうな顔をする梓に、大丈夫だと笑って見せた。

そうして手元にある音楽プレイヤーを少しいじる。

今まさに耳に蓋をして現実逃避をしまおうと思っていたところだ。

笑顔もきつとうまくは作れていないだろう。少々気まずい。

梓がそんな和をどう思ったのか、隣に無言で腰掛けた。

じっと和の手元をみる。

「…クラシックとか聴くの？」

質問の意味がしばらくわからずに、和は数秒置いて笑った。

梓の問いかけが心からおかしくて、身構えずとも自然にそれは出た。そんな面白いことを訊いてくれた彼女に感謝して、和はすっといやホンの片耳を渡した。

本当ならば和はヘッドホン派で、

遮音性の高い値段も見た目も可愛くないタイプのものをいつもは使っている。

しかしあれは持ち運びには不便なので、

こうして外で聴くときには小さくてかわいい耳かけ式のものを使う。それに対して若干の不満はあるものの、今回のような機会があった初めて

これも悪くはないかもしれない、と思った。

誰かと音を共有することなど滅多ないから、貴重だ。

「……全然知らないひとだわ。」

「梓さんは普段、音楽聴くの？」

「ええ、まあ人並みに。流行してるのは一通り知ってるって感じがしらっ。」

「そつか。じゃあこの中に入ってるアーティストはほぼ知らない人たちかも…」

「ごめんね、聴いててもつまらないでしょ。」

そつと耳からイヤホンを外そうとして、梓がそれを制した。

「…ね、今度このひとのCD借りていい？」

「え、気に入った？」

「なんとというか、聴いた事ない感じが気になるわ。もっと色々聴いてみたい。」

「あー、このバンドを一言でいうと変態だからね。ファンとして光栄だわ。」

「へ、変態？」

「ファンにとつては褒め言葉なんだよ、最上級の。」

「…面白いのね。」

それに和はくすりと笑って、一曲演奏が終わった所で再生を停止した。

また少しふたりの間に沈黙がおとずれる。

「ね、和。焦っている？」

「え？」

「いいのよ、勝手してるのはあの無神経な男共なんだから。」

「梓さん……ねえ、梓さんはさ、こういう経験いっぱいしてるよね？」

「なによそれ、人を魔性の女みたいに。」

笑いながら言う梓に、そのとおりじゃないのかと発言しそうになつて止まる。

「複数から告白されて、諦めないって言われて、特定な人もいなくて、どうした？」

「別にどうもしゃしないわよ。向こうだってそれほど本気で言い寄ってきてないしね。」

私のことなんかアクセサリー程度にしか考えてないわ。」

肩を竦めてそう言う梓をみて、ああ、綺麗な人間で本当に

それに伴う色々なもの背負わされるんだなあ、と和はしみじみ思っていた。

「まあ、全員が全員そんなじゃないけれど…もちろんその気がなければ断るだけよ。」

だから和もね、本当にあまり気にしなくていいの。」

あなたは答えをもう出したんだもの。それでまだ退かないのは向こうのわがままなのよ。」

「向こうのわがまま…」

「そうよ、だってこれ以上どうやって止め刺せっていうのよ。」

「でもやっぱり、付き合えない理由とか色々納得できないんじゃないのかなあ。」

他に好きなひとがいるわけでもないし。

あのふたりに無駄な時間を過ごしてほしくないんだけどね。」

「でもそれは仕方のないことでしょう？和は自分以上に大切にしたいものが」

まだみつからないんだもの。それは責められることではないわよ。」

「自分以上に大切…ああ、そうか。なるほど。」

梓の言葉に、どこか心がしっくりきた。

確かに、恋も友情も、そうなのかもしれない。

梓とこうして友人になろうと思ったのも、どこかの部分で

自分よりも彼女を優先したい、と考えたところがあつたからだと、和は改めて思う。

しかし今の自分がいちばん大切にしているものは、日常の保守だ。それはいうまでもなく、自身のことがいちばん大切なのだということ。

好きになったら、それが少しは変わるのだろうか。

…ファンタジーだ。

和にとってはそれほどまでに、遠いなにかに思えてならなかった。

梓の言う事は一理あるし、実際問題かれらは勝手だと昨日何度も思った。

それでも、ふたりの気持ちが無実であるとするのなら、和のやっていることはとても残酷なことだと思う。

それこそ、止めを刺してやれ、と言いたくなる。

周りだってそうだろう。

自分はどんどん悪者になって、どんどん追い詰められるはずだ。考えたくもない未来を思って、ぞつとする。

「…とにかく、どうやったら納得してもらえるのか考える。」

「一生恋愛は無理だという根拠をあげつらねてみるとか。」

「言葉でなにをこり押ししても無駄そうだけど。」

「…ああもう、いつそのこと生まれながらに婚約者でもいればよかった。」

「時代錯誤な面白い設定ね。」

「自由恋愛禁止なので、とか言ってるねー。」

ふたりしてあっはっはっはと渴いた笑いをひとしきりしたあと、長くて深いため息をついた。

「…もしも愚痴が溜まったら、自分から吐きにきなさい。

私に言い辛いことがあったら幼馴染君にでも。」

「ありがとう、梓さん。」

「なにも具体的な解決策が出てこないのが心苦しいけど。」

苦笑いを浮かべる梓に、とんでもないといわんばかりに和が大きくかぶりを振った。

ゆっくりと、どちらからともなくその場から立ち上がった。

『先々なんて言わないで考えてみたら？』

『退かないのは向こうのわがままなのよ。』

どっちが正しいかなんてきつとない。

どっちも正しくて、でもどこか間違っている気がする。

でもそもそも正否の問題じゃないのだろうな。

…ひとのきもちなんて。

放課後の図書室、学校中で騒がれている渦中の三人が並んでそこに座っていた。

周りの人間もちろちらと好奇心な目を寄せてみている。

もういいかげん、慣れてきた自分にもどうにかしたいと思ってしま
う。

…にしても。

「本を読まないなら帰れ、利用者に迷惑だ。」

「席が空いてるんらかまわないじゃないか。」

「非常識な男だな。」

「今現在全く読書をする気配がない君もそれに当てはまるんじゃないの?」

今日一日、ずっとふたりはこんな感じだ。

とにかく射程範囲内に入ればふっかける、みたいな感じで。

昨日まで落ち込んでた自分が馬鹿だったのかもしれない、と思った。
なぜならこの男達は自分を無視して相手との戦いに夢中になってい
るからである。

周りの目に耐えさえすれば前よりもなんなら自由かもしれない。
誰かの束縛がないぶん、自分の心はずいぶん穏やかだ。

『しかし仲良いなあ。もうあれじゃないのか。』

私を言い訳にしてじゃれあいたいのではなからうか?』

心の底ではなにかしら傷付いているのかもしれない。
けれども今目の前にいる彼らをもあまりそうは思えない。
……しかしそろそろ静かにしていたただかないと周りが迷惑なので
はなかるうか。

「図書室で騒ぐとかがありえない……」

ぼつりと呟いたその言葉の威力は相当だったようで、
ずつと言い合いをしていたふたりがぴたりと止まった。

和はそんなふたりに目もくれず、マイペースに本を読んでいた。

ああーしかしこの図。やっぱり嫌だ。

複数の人間たらしこんで女王様気取りかよ地味女子が何様だケツ
なんて思われるに十分な状況ではないか。

つたく、なんだってふたりしてついてくるのやら。

一応は文章を目で追いつつ、しばらくはなかなか集中できずにいた。
けれども数分もしてしまえば、和はするりと本の中に入ってしまう。

その光景をみて、周りの人間が赤面していた。

和がすっかり集中しきつたのを良いことに、

遙のみならず託斗までもが和をみつめていた。

ふたりの視線を一人占めしている彼女は、しかしそれに全く気付く
事はなく。

見ているだけで赤面物であるその姿に、動じることなく本を読む彼
女を

今図書室にいる全員が関心したようにみつめていた。

「笹森さんて、ほんと、大物だね…。」

閉館時刻になり、ぞろぞろとみなが図書室を出て行く中、高橋に肩をたたかれ咳かれた。心なしかとても疲れた顔をしていたので、和は二重にわからなくて首を傾げた。

校門前、駅方面とバス停方面に向かう為別れの挨拶をしようとしたとき、

託斗が和を呼び止めた。

今日一日、恐らく彼はなにか話があったのだろう。

しかしそれをわかっていたのかいないのか、遥が阻むように託斗と言い争いを始めていたのでチャンスがなかったようだ。

和はきつと遥はわかっていたんだろうと思った。そうして自分も、煩わしさから解放されるのなら、とそれを捨て置いた。

しかし今、射抜くようにその託斗の双眸でみられれば、誤魔化しはできないと考える。

「…和泉君、今日は先に帰ってもらえる？」

びくり、と遥は眉を動かした。

和の顔を確認したあと、視線を託斗へとうつす。託斗もまた、遥をみた。

今は睨みあうというのでもなく、お互いがお互いの心中を探っているようだった。

一呼吸置いて、ついに負けたように遙がため息をついた。

「……それじゃあ和。先に行ってるよ。」

「…うん。」

少し困ったような顔をして、しかし振り返る事無く遙は駅へと歩き出した。

それを和と託斗がしばらく見送る。

そうして遙の姿が小さくなると、ふたりは向かい合って視線を交わした。

「信じてないだろう?」

「うん、信じてない。」

いつもの如く短い託斗の問い。

なにを?と訊くほど鈍くはない。

そう、和は信じていない。

託斗が和を好きだと言う告白を。

岡元が言っていたとおり、いくら昔の知り合いだとして

再会してあんなにすぐ自分を好きだと思う人間がいるとは思えない。

そもそも長く関わったって、自分を好きだという人間を胡散臭いと思う和だ。

遙のこともようやく信じられるかも、という矢先に

好きです、そうですか、などと簡単に承服できようか。

「……わかってるよ、人一倍他人に興味がなくて、人一倍自分を評価できないお前が、こんなこと簡単に受け入れるわけない。」

「託にしてはわかりやすい説明をありがとう。」

にっこりと微笑んで言ってやれば、相手の空気が変わった。ぴり、と痛いほど張り詰められたそれに和は自然、背筋をのばした。

「気付いたのは、もう引越しが決まった時だった。」

幼かったし、自分でどう処理すべきかもわからなかった。」

今度は、まったくもってなにを話しているのか把握できずにいた和は眉を寄せて相手をみつめた。それに託斗がふつと笑う。

「俺はな、ずっと好きなんだ、お前の事が。」

お前と再会して、それが過去形になってないことに驚いた。」

「…託、なに言ってるの？」

「俺の勘違いじゃなければ、お前もそういう感情を抱いてくれてたんじゃないか？」

その言葉に、和は目を見開いて固まった。

遠いような、そうでもないような、昔。

気付いたのは、5年生にあがったときだった。同じクラスになって、喜んだのを覚えている。

6年もクラス替えはないし、2年間はいっしょだと。

仲良くなったきっかけは、本当に些細だった。

まだクラスも同じではなくて、廊下の隅、座り込んで本を読んでいる男の子をみて

それが自然であるかのように話しかけた。

『…それ、何度も読んだ。』

『ああ、…好きなのか？』

『うん。』

『そうか。』

それ以上会話しなくとも、お互いに苦ではなかった。

気が付けばフラリとどちらかともなくやってきて、また消えた。

同じクラスになって交流が増えれば、ふたりでいることは多くなっ
た。

あの年齢の子であるならば当然かもしれないが
クラス内でそれをからかう人間が出て来て、

そういったことを苦手とするふたりは自然距離を置くようになった。

けれども、完全にはそれができない。

放課後、誰もいない教室。

久しぶりに交わったその空間に、心がふるえた。

どちらからともなく、のばされた、手。

椅子に座るでもなく教室の隅で地べたに座り込んで縮こまりながら
誰にもみつきりませんように、と祈るようにその手を握った。

相手もそれは同じだったのか、きゅ、と力をこめられる。

ただただ、互いの温もりを感じあったあの瞬間。

ずっとこのままでいられたらいいと、確かに思った。

そのとき、気が付いたのだ。

『ああ、私はこのひとが好きなんだ』

と…。

「あのとき、どうして手をのばした？どうして振り払うことをしなかった？」

託斗の問いかけに、どう答えたものかと悩んだ。

誤魔化してはいけないと思うが、それを素直に告げるのがなんだか気恥ずかしい。

躊躇していると、和、と優しい声でうながされる。

観念するしかあるまい、と和は息を吐いた。

「それは…確かに託の勘違いじゃない。でも、あくまでも、昔の話だよ。」

「お前にはもう、過去だということか？」

「少なくとも、今は託を目の前にしてもあのときみたいにずっと一緒にいたいとか

ときどきしたりとか、そういう気持ちは抱いてない。」

「…なかなか手厳しい。」

「…じゅめんね、でも本当のことだから。」

苦笑いしてそれにこたえれば、託斗はため息をついた。

「俺も忘れようと思った。けど…ひょっこりお前がまた現れるからにもなく運命なんて言葉すら俺の頭をかすめた。」

「…えーと」

「言つなよ、思ってもかまわないが言つな。」

その言葉に和はそろりと視線を泳がせた。

本当に、そんなことを託斗が思ったというのだろうか。恋はなんとやら。

「とにかく、俺の見た目は多少変わったかもしれないが

お前に対する時間はあのときのままだ。そう理解してくれればいい。」

なぜだろう。

彼のその言葉は、きっと昔ならば嬉しかったに違いない。

それなのに今の自分はぼんやりとした気分であるで他人のようにその言葉を受け取っていた。

まさしく、ふうん、という感じだ。

中学時代、色々あった。多少成長したし、したたかさは増した。それでも本質的に、決定的になにかが変わったとは思っていない。だからこそ目の前の託斗も、自分をあの頃と変わらず好きだと言ってくれているのだろう。

思う。

ほんの少しでも、ときめいて良いんじゃないのかと。

あまりにも簡単にそうなんだーと考えている自分の冷静さに

初恋は彼だという事実までも疑いそうだった。

隣に立つのが彼ならば。

条件的には申し分ないのではないか？

趣味は合うし、物静かだし、休日もせつせと会う時間を作る事もしないだろう。

同じ空間を無理することなく共有できる。

これだけならば、彼は広末とよく似ている。

和もそれを感じたからこそ、自身の気持ちを認識するのに時間がかったのだと思う。

けれど広末と最大限違っていることが、託斗にはあった。

彼がどんな人間であるかをよく知っているのに

彼が今なにを考えているのかをまったく読めないこと。

口数が少なくとも、言いたいことは理解できた。

けれどもその心のうちはどうしたってわからなかった。

それなのに優しいその空間に心底溺れた。

彼を自分の家族のように思えなかったのは、そこなのだ。

広末に感じなかった、彼にだけ感じた恋心。

それなのに、いま、目の前に対峙する彼をみてそういった感情はなにも働かない。

ときめきも、せつなさも、傍にいたいと希う気持ちも。

伝える事もできなかった恋心は、いつの間に過去になっていたのだろう。

それを過去に出来たのは、なぜだったのだろう。

考えても、わからなかった。

「…託、ありがとう。でもごめんね。」

「あんまり言うな、傷付く。…じゃあまた明日な。」

「…うん、ばいばい。」

手を振って、ぼんやりと託斗の後姿をながめていた。

託斗の姿がなくなっても、同じ方向をしばらくみつめていたがいつまでもそうしていたとて仕方がない。

和はゆっくりとした歩調で、駅までの道を歩いた。

下を向いたままなにを考えるでもなくただ歩く事に集中していた和は目の前にいた人物にまったく気付かなかった。

呼んでも返事をしない事に焦ったからか、誰かが和の手をつかんだ。和！と半ば叫ぶように呼ばれて、やっと名前を誰かから呼ばれた事実に気が付けば、
覚醒して顔をあげた。

遙が、ぶすつとした表情でこちらをみていた。

「俺に気付かない程考え込むような話だったの？」

「……和泉君。」

小さく呟くようにそう言っただけで、和は口を噤んでしまった。
遙はその様子をみてますます訝しむ。

「まさか、なにか手を出されたとか」

「あんだじゃあるまいし。」

条件反射のようにかえしたその言葉に、なにが嬉しいのか
遙が満面の笑みを作った。

「なにか不愉快なお話だったの？大丈夫？」

「まあ愉快ではないけれど、不愉快でもないよ。」

苦笑して和がこたえれば、遙はほっとしたように掴んでいた手を離
し、

和の頭を愛しそうに撫で始めた。

その動作が、単純に気持ちがいいな、と思う。
いつからだろう。

ある程度、触られることをゆるしてしまったのは。

「…待っていてくれたの？」

「待ってたというか…ちょっとこのまま帰るのは耐えられなくて。

ごめんね、うっとおしかった？」

そう訊きつつも和の頭を撫でることをやめない遙に和は自然と顔が
綻んだ。

この男は、相変わらず馬鹿だ。

『…もう少しいっしょにいたいな』

そう頭に言葉浮かんだ瞬間、和の体は固くなった。

それに気付いた遙は、小さく首を傾げる。

そのとき。

突然和が勢い良く遙の手を自身の頭から払った。驚いて目を見開いた遙をわずか視界にうつしたと思うと、次の瞬間には和は改札まで全速力で走っていた。

「和!？」

追いかけてようと遙が走ったが、ちょうどタイミング悪く電車が発車するところで

遙がホームに立ったときには和が乗り込んだ車両の扉が閉まっていた。

まだなにか叫んでいるのが、窓からみてとれた。

遙の必死の形相をみながら、なぜそんな顔をしているのか不思議だった。

そして、ああ、自分が逃げてしまったからかと気が付けばなぜ逃げたのかを考える。

「いつしよに、いたい？」

さっきの言葉を、今度は声にだし呟いた。

彼との時間を共有したいと、望んだのか。

その意味を頭で理解しようとするより早く、顔がぼつと燃え上がった。

窓越しにそれを確認した遙が、目を見開いてそれに驚いていた。

まったくもってわけがわからない。

しかしそれを問い詰めることもかなわず、無常にも電車はホームから遠ざかっていく。

「和……？」

立ち尽くして去っていった電車の先をみつめながら、先程の彼女がなにを意味しているのかを考える。

しかし考えても考えても、その答えはまったくわからなかった。

第二十三話「呪文効果」

ぐるぐると、頭の中を駆け巡る言葉。

いっしょにいたい
いっしょにいたい
いっしょにいたい

まさか。まさかまさかまさか。

否定する頭とは裏腹に、心はじわじわと綻んでいく。
友情ではないのだろうか。ラブではなく、ライク。
そうじゃないと、色々と面倒になるではないか。

こんなときは、鈍くありたいと心底思う。

けれども自分にも他人の機微にも敏感な彼女は、いとも簡単にそれを察してしまった。

それでも、みつともなくあがいている自分が情けない。

『だって！嫌だあんな面倒なヤツ。やっと慣れたのに！』

それに本当は生活が派手とかだったらどうしよう。

図書室だって実は嫌いとかだったらどうしよう。

静かなところなんて本当は息が詰まるとか。

スポーツ趣味とかで休日強制的に連れて行かれたりとか。

聴きたくもない最近流行のラブソングを聴かされたりとか。

観たくもない最近流行の恋愛映画観せられたりとか。

そんなことをされたらどうしよう。

『……すぐに別れればいいんです？』

『いやでも執着だけはし続けるかもよ？』

そうになったら面倒だ。別れを渋って変なことになったら、いやいやいやいや。

そもそも、別れる前提に考えてどうするのだ。

彼が今の彼でいてくれたら、きっとそうはならないのだから。

いや、でも。

逆に早々に愛想を尽かされるのでは？

釣った魚に餌はやらないよろしく、追った相手が振り向いた途端冷めるタイプよろしく。

そうになったら恐らく自分は傷付くだろうし、しばらく噂もひどそうだ。

「だーかーらー！」

私室でベッドに突っ伏していた状態からガバッと起き上がると、枕を思い切り壁に叩き付けた。

悪い癖だ。すぐに他人を疑う。自分には価値がないからと臆病になる。

それもあんなハイスペックが相手だから余計に。

彼は優しい。

自分に見せるあれが真実であるならば、彼はとても優しい。

…真実であるならば。

また少し暗くなった自分に、はっとなる。

「もー！！疑心暗鬼！猜疑心の塊！」

先程叩き付けた枕を手に取ると、今度はボスボスと叩き出した。ぜいぜいと息が上がる。

「……………コレやっぱり言わないと駄目なの？」

広未や梓や浩平にそう問えば、いちにもなくだめ！と言われることだろう。

しかし和は、生まれてこのかた告白というものをしたことがない。なにより恥ずかしいとか、そういった感情がとにもかくにも強かった。

恥ずかしくてそんなこと言えない！とか、所謂可愛らしい照れというよりも

ありえねえ、かゆい。というような心理のがより近い。

はらをくくらねばならないというのならそれはやるしかない。

なによりもわかりきっていてそれをしないのはらしくない。

変化が怖いのは、もうそれだけ相手が大事だからなのだろう。

今の心地良い関係を壊すくらいならこのままのが、などと思ってしまっ自分があるのだ。

しかしそんな気持ちで彼に相對するのは、あまりにも失礼だ。

それに託斗のことだつてある。

これだけ早く気付いたのは託斗の存在が大きく、それはなんとも皮肉な話だが

とにかく出来るだけ早く彼に彼の時間を返したかった。

ならばやはり早いほうがいい。そう、そんなこと、わかりきっているのだが。

柄にも無く勇気がでない。

「いつ言うの？どのタイミングで言うの？」

改まって、というのものはものすごく苦行だ。

そんな雰囲気の中でそんななど真ん中なことをやれと言われたら全速力で逃げ出しかねない。

しかもそういうことが世界一似合いそうな得意そうな彼にそんなことをやれと言われるのは拷問だ。

プロの前で素人が技を見せる感覚に近いというか。

せめてもうさらっと終わらせられないだろうか、と思う。

もうこんなこと葛藤してる時点でなんならかなりの羞恥心だ。

「…ああ、本当、こういうこと向いてない。」

人を陥れるのはうまいのになー、なんて。

なんとも物騒なことを考えつつ、ベッドに半泣きで大の字になった。

その内うとうととまどろみだして、次に起きたらもう朝だったとい
う悲劇に

和は今日ほど時間の無情さを感じた日はなかるうと思った。

緊張して、手が震えていた。

なんとなく、もうここに居る気がしたから。

がらり、と教室の扉を開けば、いつもならば誰もいないその光景の
なか、

ひとりぽつんと窓をながめる人物がいた。

『…やっぱりな。』

託斗が扉の音に気付いてこちらをみる。

その瞳に一瞬たじろぎそうになりながらも、真っ向から受け止めようと心を強くした。

「……和。」

「おはよう。」

「……ああ、おはよう。」

ゆっくりと和が託斗に近付く。その正面に立つと、小さく息を吐いた。

託斗の前の席を失敬して、座って彼と視線を合わせた。

「……その表情、嫌な予感しかしないんだが。」

「勘が良すぎると損だよー。」

にこやかに微笑めば、託斗はふう、とため息をつく。

彼は、もうすべてを察しているらしかった。

「託、ごめんね。あのときなら……いや、多分彼がいなければ、私は今でもそのうち託斗と付き合っていたかもしれない。」

残酷な事を言っているだろうと、わかっている。けれども断ち切ってほしいと思った。

ここで、とにかく止めを刺ききってやる、と強く思っていた。

「……それなら、たとえ昔に良い返事をもらえても結局あいつにさらわれてたかもな。」

「んー……それは……どうなんだろうね?」

お互いに苦笑しつつ、言っても詮無いことを口にする。

「私、どうやら和泉君が好きだよ。だから、託斗とは付き合えないです。」

ごめんなさい、と和が頭を下げる。

託斗がなにかを発するまで、和はそのまま動かなかった。止まったかのように思えた時間は、恐らくほんの数秒のことだったのだろう。

空気が揺れて、託斗が笑ったのが気配でわかった。

「お前はここできれいさっぱり諦めてほしいんだろうな。…でも悪い、しばらくは無理そうだ。」

せいぜい目の前で不愉快なほど仲良くしてみせつけてくれ。」

「……最高に最悪なことを言っただけのけるね、託は。」
ゆるゆると頭をあげて和が返事をすれば、声をあげて託斗が笑った。

「モテるんだろう？とつとつ浮気されて泣きついて来い。」

にやにやと嫌な笑いを浮かべながら託斗がそう言うので、和はやなこつた、とそれを一蹴した。

そこで、しばし沈黙が流れた。

どちらもなにかを言おうとしても適当な言葉が思い浮かばずに、和は席を立ってもいいかと考え実行しようとした、そのとき。

「もう言ったのか？」

「ううん。」

託斗の質問に反射で正直にこたえると、和が机に置いていた右手を

託斗が自身の左手ですくいあげた。

握りこまれ、その唇付近まで持っていていかれる。

「託斗。」

「……じゃあこれは、浮気にはならないんだよね？」

「いやあの」

眉を寄せて睨めば、託斗はそれをまるで気にしないように和の指先にひとつキスを落とした。

それに、和がびくりと震える。

次いで、右手を握られたままに託斗の顔が和に近付く。

「ちゅ。」

リップ音は、和と託斗の間に挟まれた手の平によって発生した。

咄嗟に察知した和は、左手を自身と託斗の顔の間に遮るようすべりこませたのだ。

「……無粋なことを」

「……一回目はないよ。」

『好きでもない男にゆるす唇も、ない。』

心の中でそう思っただけ、次の瞬間にうわああああかつゅーと悶絶していた。

顔にはまったく出さなかったが。

そのとき、カタン、と出入り口から物音がする。

ふたりして気が付き振り向けば、そこには遙が立っていた。

「あれ、おはよー和泉君も早いねー。朝弱いって言ったのに、だ
いじょぶ？」

和の大物たる所以のひとつは、この開き直りの凄さだろう。

昨日あれほどまでに悩み苦しみ悶絶し続けたというのに、

彼を前にしてあっけらかんと話すのは和にとってそう難しいことではない。

ましてや見られた状況を省みることもなく、

へらりと笑って朝のあいさつを軽い口調で声に出すなど普通ならば考えられない。

それは目の前で託斗がまさに思っている事であり、

いつもそんなに表情を大きく変化させることのない彼の目が
こぼれんばかりに見開かれていた。

遙はといえば、やはり数秒ほど固まった後、つかつかと足早にふたりに近付けば

ばり、と問答無用でふたりを引き離れた。

和の両腕をつかみ、半ば無理矢理立ち上がらせると、

無言でつかんだままの手のうち、

先程まで託斗の唇が触れていた和の左手の平に遙は口付けた。

ひゃ！？と小さく和が悲鳴をあげるも、かまわずに和の手の平に唇を這わせる。

最終的には舌で全体を嘗め尽くすと、満足したのかその両腕を離れた。

背後から両腕をつかまれていた和は、すっかり足に力を失くして床に倒れかける。

しかしそこはさすがといおうか、ぬかりなく遙が後ろから和を支えた。

両腕を和の腹部に回し、きゅ、と抱きしめる。

そのまま射殺さんばかりの視線の強さで、託斗の瞳を睨みつけた。それに託斗が応えるように、薄い笑いをその顔に浮かべる。

「…学園のアイドル様は余程、余裕がないらしいな。」

「そついう君は朝から元気だね。」

「そつくりそのまま今のそのせりふをあんたに返す。」

『ゴッ』

ふたりの間でまたも火花が散るかと思われたその瞬間。

痛々しい音がそれを遮るように教室に響き渡った。

腕の中にいた和が、遥めがけて真下からその顎に思い切り頭突きをかましたのである。

予想外だったのだらう。

防御もかなわずクリーンヒットした遥が、耐えかねてうずくまり悶絶している。

それに多少は満足したのか遥を一瞥しにやりと黒く笑えば、

「手洗ってくる。」

とあまりにも淡々とした口調で教室を出て行った。

「…予想外な事をするヤツだな。」

「昔からあんなじゃないのか？」

「そもそもこういった事をする状況がなかった。」

小学生があんな性格だったら怖いだろう。」

口は多少は達者だったけどな、と小さく微笑んで託斗が付け足した。その遠い瞳は、昔のことを思い出しているのだろう。

「……それでも、好きなんだ？」

遥の言葉に、ぴく、と託斗が反応を示す。

窓の外に向いていた顔を、ゆっくりと遥にうつした。

遥は座り込んでいた体勢から起き上がり、制服の埃を払っている。

「変わらない。」

言葉足らずにもほどがあったが、その一言が遥にはずしりとのしかかった。

きつと、本質的な部分、ひいては彼が惹かれた一番大事な部分はなんら失われてはいないのだと託斗は言いたいのだろう。

なんと厄介な相手だろう、と遥は苦笑した。

それでも退く事などできはしない。

彼女を失えばそれこそ、自分は狂ってしまうだろう。

予想でもなんでもなく、それは確信だった。

それ程まで強烈に彼女を好きになってしまった事実には遥は改めて苦笑した。

相手からすれば、迷惑極まりないだろうとわかっているから。

その表情になにを思ったのか、託斗が目を細めて遥を見る。

「…こんな奴に囚つかまるとは、和に心底同情するな。」
「？は、なに？」

ぼそりと呟いたその言葉は、遙にはきこえなかった。
元より、きかせてやる気もなかったので託斗はまた窓に視線をうつす。

「和遅いな。」

教室の外を気にしていた遙が、ついに待てなかったのか
これ以上、託斗と空間を共にするのが嫌だったのか、教室を出た。

後姿を座りながら見送った託斗は、どこかこうなることをわかって
いた自分に気付く。

それでもあがきたかったのはきっと、あのときの後悔を繰り返した
くはなかったからだ。

今教室を去って行った彼ならば、きっと自分と同じ結末には至らな
かった。

和泉遥ならば、きっとその想いを彼女に告げていたのだろう。
引越しをして遠距離になるという事実がたとえあったとしても。
そう考えて、もうとっくに負けを認めている自分に自嘲した。

「…あなた、もういいの？」

思考を中断した静かな声に、眉をびくりと動かしつつ、声の方向を
見やる。

教室後ろの出入り口に、梓が立っていた。

「……………関係ないだろう。」

「ごあいさつね、…あなたに悩まされて落ち込んだ彼女を慰めたのは私よ。」

託斗は一瞬の逡巡の後、今発した梓のその言葉を理解した。

「ああ、よく和と一緒にいる女生徒、あんたか。」

託斗のあまりにも失礼な言い草に目を丸くして、梓は思わずふきだした。

こらえきれずにくすくすと笑う。

「……すごい、オマケみたいに扱われたのは初めてだわ。」

「ああ…まあ、だろうな。」

改めてその容姿を確認すれば、ずいぶんと整っていることに託斗は気付く。

本当に自分は、興味がないものにはとことん目がいかない人間なのだと改めて思う。

普通の人間ならば、まず彼女に目がいくものだろう。

ひとしきり笑って満足したのか、はあー、と息を吐き出した後、切り替えて梓は真剣な顔を託斗にむける。

「で、和のことはもういいのね。」

「なぜそう思う？」

「だって私とおんなじ顔してるもの。」

「『おんなじ顔』？」

「遥に見切りつけたときの顔よ。」

「…お前、和の友達じゃないのか？」

「そうよ？」

「なぜ。」

彼女は、和泉遥が好きだったと言った。

それなのに今、和と友人関係を築けているその事実には驚いた。こと女性に関しては、そういった行動が難しいのではないかと半ば偏見ではあるかもしれないが託斗は思ったのだ。

「あらだつて。遥よりも和のが好きになっちゃったんだもの。」

あつげらんかと梓が言つてのければ、それに託斗が目を見開いた。目の前にいる綺麗な彼女は、人生で今まで思い通りにいかなかった事など

なかったのではないかとさえ思わせる容姿をしている。

遥のことだつて、きっと自信が皆無だったわけがない。

どこかで、隣にふさわしいのは自分だと、思ったりはしなかったのだろうか。

和のが好きになつてしまった？

そんな愉快的理由で、彼女は和泉遥に終わりを告げたのか。

「…理解に苦しむ。」

「あなたは？どうして？」

「あいつが決めてしまったことを覆すのは難しい。」

「…それって。」

今度は梓が驚愕の表情をする。どうやら知らなかったらしい。

言つてはまずかつただろうか、と託斗は一瞬、顔を険しくした。

それに気付いた梓が、なにもしないわ、と少し慌てて声をあげた。

「さすがにそんな野暮じゃないわよ、いやね。」

「…実に面白そうな顔をしているのは気のせいかな？」

「あらだつて、こんなことってそんなにないわよ。」

「どうなるのか見守るのって無責任で楽しいわ。」

「なかなかいい根性してるな。」

「あなたは、あのふたりがどうなるのを望む？」

いたずらっぽく笑いながら話す梓は、気がつけば自分の隣に座っていて

いつのまにこんな近くで会話をしていたのだらうと、彼女の一連の動作に驚いていた。

自分も物静かなほうだが、彼女の動きには無駄が無くしなやかだ。そんなことをぼんやりと考えて、先程の質問を咀嚼する。

なんとも意地の悪い質問だ。

普通、失恋直後の人間にそんなことをきくだろうか。

傷口に塩、泣きっ面に蜂、これでもかというくらいサディスティックな所業である。

「わからないな。」

「…わからない？」

導いた結論を口にして、しかしそれでは言葉が足りなかったのだらう。

先を促すように梓がそれを繰り返した。

「あいつの幸せを祈る程、俺は心がきれいでもなければ、あのふたりが引き裂かれればいいと呪う程、情熱もない。

そもそもそこまで狭量な人間ではないという自負もある。」

「でも、うまくいってもらいたいという気持ちもないのね？」

「ふたりのことをどうこう思う余裕がない。」

俺は今、自分をどう立て直すかで頭がいつぱいなんだ。もう言ってしまうえば好きにしてくれということころだな。」

肩をすくめて託斗がそういえば、梓は微笑んでうなずいた。彼女にとって、今の答えは満足のいくものだったのだろうか。

「あなたの言葉は気持ちが良いわね。潔くて綺麗だね。気が向いたら、また声をかけてもかまわないかしら？」

それに託斗はうなずいた。託斗もまた、彼女と言葉を交わすのは嫌ではないと感じている。

「名前は何？」

「高原梓よ、梓でいいわ。鈴木託斗君。」

「梓、…俺も、好きに呼んでくれていい。」

託斗のその言葉に、梓が嬉しそうに笑った。

「それじゃあ、またね、託斗。」

教室からするりと去っていく梓を見て、やはり洗練された動作をしていると

託斗がまたも感心してみつめていた。

梓と託斗がふたりきりで教室にいたという光景を、

人一倍野次馬根性の強い2・3生徒の一部が覗き見していたことをふたりは知らない。

またしばらくは、学校中がミーハーな空気に包まれる事となる。

ついでにトイレで用を足そう、と考えていた和はその用事を終えて女子トイレの鏡前で手を洗っていた。先程も洗った左手はもうなんともないはずなのに、思い出せば生々しく、思わずアライグマの如く延々と手を洗い続けていた。

そうしてやっと少しは気が済んだのか、うむ、と誰ともなくうなずけば、和はやっとトイレをあとにする。

しかしこのまま馬鹿正直に教室に戻るのもどうしたものか、と階の隅にあるトイレから中間程歩いた位置でぴたりとその足を止める。

固まってどうしたものかと逡巡すれば、床をみつめていた視界の中に自分ではないふたつの上履きが見てとれた。

音も無く近づいてきたその人物を確認するべく顔をあげれば、予想はついていたがそこには遙が立っていた。

「…こんなところではーっと立って、どうしたの？」

にっこりと微笑んで声をかけられる。

どう答えたものか、と一瞬考えかけるが、

今は心のままに言葉を発してもかまわないだろうと思ひ直す。

「なんか教室に戻りにくいなって思ってた。」

「どうして？」

「ふたりがいるから、色々面倒くさい。」

「はつきり言うなあ。」

苦笑して遙が自然な動作で和の頭に手を置いた。

それに思わず昨日の事を反芻してしまい顔が赤くなりそうになるのがわかる。

なんとかコントロールしようとして心の中で平静の二文字を唱えた。

にしてもこの男、頭を撫でるのが好きなのだろうか。

なんなら自分のことを可愛い妹とでも思っていていやしないか。

それにこんな廊下の真ん中で堂々と行為に及ぶとは、

やはりこういった面ではあまりにも自分の分が悪い。

彼に思いの丈を告げられてから四ヶ月。

百戦錬磨とはいえ開店休業中な自分に、もうちょっと期待したかった。

『せめて一年くらいは抵抗したかったなあ。』

早い。あまりにも陥落が早い。

別に勝ち負けの問題ではないにせよ、和の心になにやら悔しいという感情がふつふつとわいてくる。

目の前でにこにこしながら自分の頭を撫でる彼をじりとみれば、目が合ったことに気付いた遙が溶けるような笑みを向けてきた。

「…………お兄ちゃん。」

ぼつりと呟いた和の言葉に、遙がぴくりと反応する。
先程までの表情はなりをひそめ、今はいかにも不満といった風情で顔を顰めている。

「なんでお兄ちゃん？」

「だってスカート姿で足をあげるなって注意するし、ナンパに気をつけるって説教するし、
今みたいによく人の頭を撫でるから、ひよっとして私は妹認定か？
みたいな。」

私もなんかお兄ちゃんみたいだなあーとぼんやり思ってみたり。」

和のその言葉に、遙の纏う空気が妖艶なものに姿を変えた。

目を細め、口角を歪に上げる。

本能がまずいと告げるも時すでに遅し。

がっちりと掴まれた自身の腕を絶望の表情でみつめた。

「お兄ちゃんが妹に、あんなことすると思う？」

あんなことってなんのこと？と訊いたら最後。

恐らくは予想した今までされた所謂、遙の得意分野の応酬をくらうことだろう。

『ああ、やっぱり考えて喋れば良かった…』

後悔するもこうなってしまうては仕方がない。

どうしたものかと考えていれば、遙の舌が予告もなく和の首筋を這った。

どうやら、この危機をどう脱するかと遙を放置して考え込んでいたことも不満だったらしい。

「和つてば、余裕だね。」

怪しく呟いて、遙の舌は和の首筋から鎖骨にかけてのラインを歩き来しだした。

まだ登校する生徒は少ない時間帯であるものの、いつ廊下に人影が現れるともかぎらない。

さすがにこの状況に焦った和は、先程の言葉をすぐさま前言撤回した。

「和泉君はお兄ちゃんじゃありませんんんん！！！！」

泣きそうになりながら半ば叫ぶように言えば、遙は顔を上げて和をのぞきこんだ。

「…和にとつて、俺はなに？」

「え？え」と、と、友達。」

「……それだけ？」

その遙の問いかけに、どう答えたらいいのかわからず和が無言になれば

遙は和の耳朵を食み出した。

『ぎゃあああああああ！！！！』

心の中で絶叫しても、遙の行動は止まることなく、ついにはその舌を耳の中へと進入させる。

聴覚が遙の舌にすべて奪われ、くちゅり、という音があまりにも卑猥に響く。

遙の舌がどんどん大胆になり蹂躪される音が止むことなく次々に響いて、和は真っ赤になった。

「それやめてえ…！」

半泣き状態で訴えても、遙は止める気配がない。どころか楽しそうにくすりと笑う声がきこえた。

「可愛い。」

耳元でそんな風に囁かれて、もう腰がくだけそうだ。

なんて言えばいい？

なんて言えば満足する？

恥ずかしくてどうにかなってしまいそうな頭をどうにかたたき起す。

「い、和泉君は…！」

消え入りそうな声で和がなんとか声を発すれば、それに気付いた遙が耳への悪戯を中断し、和の顔をのぞきこんだ。

「和泉君は、私にとって、危険人物です…！」

予想外な言葉に遙は固まりかけるが、和の顔をその両手で包みこんだ。

少しかがんで、和の顔をしっかりとみつめる。

「どうして？」

「こ、こんな、変なことを、私にするの、和泉君だけだし。なんていうか、和泉君は、異性として危険というか！」

「異性として？お兄ちゃんじゃなかったの？」

楽しそうに弾んだ声で遙が問えば、和はギツと鋭い瞳で遙を睨む。頬にあてられた遙の両手をべりっとはがせば、一步遙と距離を置いた。

「兄キがこんなことをするかこの色情魔！！！」

ビシィ！という効果音がつきそうなほど勢いよく、

和は遙に右腕をまっすぐとのばしてその人差し指を彼に突き立てた。

『…なんかこのポーズ、異議あり！とか言いたくなるわ。』

余談であるが和の趣味の中にはゲームプレイが何気に入っている。

なんともくだらないことを考えつつ、

目の前の遙を睨んでいれば、遙は肩を揺らして声を殺し笑っていた。

「…男冥利に尽きる言葉をありがとう。」

なんとも嬉しそうな顔でそう言うので、和はわからずはあ？と声をあげた。

その声に応えるように、遙はにっこりと微笑んだ。

「だって、和に手を出して意識される男って、俺だけってことだよ
ね？」

鈴木君は、入ってないってことでしょうか？さっきあんな事されたのに。」

『異性として危険』

確かにそう思ったのは、今までの人生で彼だけだ。
こんな風に迫られること自体、彼が初体験なわけであるし。

…しかし託斗になにをされても、確かに同じような反応をしないのは事実で。

それが和はなんともいえず悔しかった。

「託は最終的に紳士だってわかってるもん。」

でも和泉君は変態だから泣いてもゆるしてくれなそうだし。」

「だって和の泣き顔って可愛いんだもん。」

「さらっとそういうこと言わないでほしいんだけど…。」

はあ、とため息をついて遥をながめれば、

遥はいまだにここにこと嬉しそうに顔の筋肉をゆるめていた。

『ああ、唯一の長所が阿呆面に…』

なんともひどいことを思っていると、遥が唐突に口をひらいた。

「和、大好きだよ。俺と付き合って、俺の事好きになっただけ？」

「ヤダ。」

『…てオイ。』

不満気にする遥をよそに、和は今、即答して否定してしまった事実
にめまいを覚えた。

言ってしまうはよかったのに。

自分で自分にツッコミを入れてどうするのだ。

彼がいつも唱える呪文。

それにすら、私は素直に応えられなかった。

『私…この先、和泉君に気持ちを伝えることなんて出来るの…？』

途方に暮れそうになる和を、不思議そうに遥がながめていた。

第二十三話「呪文効果」(後書き)

鈴木託斗と書いてかませ犬と読む。

登場させてからずっとこうなるとわかっていたので、自分で書いておいてずっと心が痛かったのですが…今回のこれで一応は託斗も救済されたでしょうか？

この先二人がどうなるかはわからないのであれなのですが。というか、託斗を好きだという方がいらっしやったらごめんなさい。もう最初っから彼のことを心の中でかませ犬と呼んでいた私を許してください。

このお話、実は元々くつついて終わりではなくくつついてからも色々書くつもりで始めた物語なんですけど思いのほか主人公が頑固でなかなか時間が、かかっております。予想だともうとっくにくつつくと思ってたんですが…計画性皆無で申し訳ない。

もう少しお待ちいただけますと幸いです…！

第二十四話「いたずらっ子と書いて悪魔と読む。」（前書き）

今回、とても短いですが、申し訳ありません。

第二十四話「いたずらっ子と書いて悪魔と読む。」

改札を通ってそれぞれ反対側の駅のホームへ向かう。線路を隔てた向こう側で、遙がにっこりと微笑んで手を振っているのがわかる。

なんとも複雑な心で、和はそれに応えた。

電車に乗って、地元駅に着いてからも、足取りは重い。

普段であるならば自分のテリトリーに入ったことに心底安堵し、落ち込んでいても、いるからこそ、急ぎ足で自宅へと向かうというのに

どうにも今日は体が重かった。

結局、和は昨日の夜決意したことを、実行できなかったのだ。

その事実には愕然とし、自分自身に失望さえしていた。

託斗とのことはけじめがつけられたとはいえ、遙との事を先延ばしにしていいわけではない。

それでも多少の安心が出来てしまったのは確かで、行動に一層のブレーキをかけた。

自分らしいとからしくないとか、そんなことを考えるのは馬鹿だ。いつだって思うままに行動すれば、それがイコール自分になる。なによりも和が重要視しているのは心に鍵をかけずに自由で在ることだ。

であるならば、やることはひとつだとわかっていたはずなのに。実行が遅くなればなるほど、その決意は鈍くなるし、やりにくくなる。

変化が怖い。

ふたりの関係性がどう変わってしまうのが怖い。

友達で在れば永遠ともいえる時間を一緒に過ごせる。

恋人になったら、一度駄目になってしまえばおしまいなのだ。

ああほら、時間が経つほどそんなことを考える。

自身の性質がいやというほどわかっていたから、とにかく早くいつてしまえ、と

勢いをつけていたというのに。

言えなかった。

なにも、できなかった。

その事実にも、和は底なし沼のようにずぶずぶと沈んでいく。

ぶっちゃけた話、結局は恥ずかしいのだ。それに尽きている。

どうしようもないこの照れを、どうすればとつばらえるのだろうか。

「和、帰りか？」

「！広末……」

俯いてのろのろと歩いていけば、後ろから声をかけられた。

一本遅い電車で着いたのだろう。

少し離れたところから広末が小走りで和の隣についた。

「あからさまに落ち込んでるな、珍しい。」

「あー…表にあまり出さないからねえ、外では。」

「鈴木が転校して来たって？」

「三日前にね…てなに、宮田君にでも訊いた？」

多少は驚いたものの、情報源は予想がついたのでそんなに大きな反

応を示すでもなく
和は広未をみた。

「転入二日目に告白されたらしいな。」

「みんな好きだねえ……。」

「どうなんだ、その後？」

「断ったよ。」

「諦めないと言われたんだらう？」

「……どこまで知ってるの？」

うんざりした顔で和が問えば、おかしそうに広未が答えた。

「浩平はそういった話題がずいぶん好きみたいだし、余程遥君が心配なんだろう。」

「あ、そう……。」

「まあ、俺が知ってるのはそこまだけど。」

ふたりに言い寄られてかなりストレスなんじゃないのか？」

少し心配顔になって広未が和をのぞきこむので、自然と和は笑みを浮かべた。

「それはね、もう解決したの。今は違う事で悩み中。」

「……まだ四日目だろう？もう愛想尽かされたのか。」

「今の私みてショックだったんじゃないー？」

からからと笑って和がそう言う。

しかし広未はどこか納得いかないらしく目を細めて和をみつめた。

「……遥君が好きだからとでも告げたのか？」

ど真ん中に剛速球を当てられた和は、言い訳も思いつかずに固まってしまった。

それを確認すれば、広未は満足そうに笑う。

さも面白いものをみつけたとでもいうように、にやにやと嫌な笑みを貼り付けている。

「うーわぁ、最悪うー」

はっはっはと渴いた笑いをもらしながら和がいえば、
広未はばかり、と和の頭を小突いた。

「馬鹿、からかったりしない。今のはちょっとあまりの愉快さが顔に滲み出ただけだ。」

「……ありがとうと言いつい辛いよ。」

「とりあえず寄つたらいい。」

「うん、そうだね、そうする。」

短いやり取りで気軽に家をおとずれることができる気安さに
今更ながら心底安心した。

こんな風に、離れても縁が切れないことを確信する相手がいるのは
貴重だ。

しかし遙にそれを求めて、どうなる？

この位置は広未でしかありえないし、また遙にそれを望んでなんて
いない。

そう考えれば、変化を恐れるなんて馬鹿だ、と思う。

…まあ、だから。結論は出ているのだ。

「恥ずかしいってお前、どこの乙女だよ。」

「いや恥ずかしいというか、なんかさあ、かゆい？」

「その言い方もどうよ。」

「じゃあなんて言えばいいのさ。」

唇を尖らせた和をみて、広未は盛大なため息をつく。

遙のことを思えば、こんな理由でいまだ彼女を手に入れられない彼が心底不憫だ。

いつもの如く広未の私室で、広未はベッドに足をのばし壁によりかかり、

和はベッドサイドに背中をあずけ広未と同じポーズをとっていた。

「言おうと思ってるんだろ？」

「うん。」

「でも言わないのは、恥ずかしいからだけか？」

「え。」

「お前、負けたとか思ってないか？」

「う。」

またも凶星を突かれ、和が変なうめき声をあげる。

「やっぱな…その勝負師魂、どうにかならんか。」

「つつかおさまるべくしてそうだった感が悔しい。」

「…それは、彼のせいではないだろう。」

「そうなんだけどさあ…だってあんだけ見た目高スペックな男が全力でかかればやっぱり落ちない女はいないわけね、みたいなそういう目でみられるという事実が！悔しいんだよおおお！！」

ぼすぼすと拳でベッドをたたきつつ悶絶する和をみて、
広未はまたため息をついた。

「あんだけ惚れこまれててなに言ってるんだ。それこそつくに彼は負けてるだろう？」

「えー、でも彼氏になったとたん豹変するかもよ？」

「お前な…」

「いや、疑ってるわけじゃないし、そうなくても別にいいかと思ってる自分もいるんだけど！」

結局さー、理不尽な悔しさはあるわけよ。

あの手慣れた感じもなあ…こう、心底動揺させてすっきりしてから事にあたりたい。」

「つくづくサドだな。」

「いや、痛めつけたいわけじゃないんだけど。」

「似たようなもんだろう。」

しかし、真に彼を思えば、早々にくつつきたいというのが第一にあるだろう。

それならば多少の傷はつけども、まあいいかとさえ思えてくる。

「具体的になにをどうしたいとか決まってるのか？」

「いやまったく。」

「…まさかお前の口からそんな言葉をきくことになるとは。」

「しょうがないでしょう！こっち方面の経験皆無なんだから！

あくまでも基づくデータがあつて私は今まで行動してきたんだからね。」

ふんぞりかえつて言う事か？と内心広未がつっこみつつも、
ふむ、と考える。

「しかし、これは和の人生において一番重要な悪だくみになるんじゃないのか？」

「そうなんだよねー。だから他人に助言されるつてのもなー……」
「だから普通に伝えればいいじゃないか。」

「うん、まあ、そうなるよね。重々わかつてはいるんだけどさ。」

うーん、と頭を抱える和に、広未がぼんぼん、と頭を撫でてやる。
その仕草に、和が顔をあげた。じつと広未をみつめる。

「？どうした？」

「……伝えるか。」

「和？」

「私なりの愛情表現だからね。」

にんまりと笑みをたたえる和をみて、広未は寒気を覚えた。
どうやら彼女は、愛情表現とやらの中身を思いついたようだ。

「和泉君がね、なんかしらんけどよく頭を撫でるのよ。」

「……そうなのか。」

「広未にされるのと、動作は同じでも感覚は違うもんなんだね。」

「まあ、その施してる人物が気持ちには重要ってことなんだろう。」

「私が出たら、特別になるかなあ。」

「……そりゃあ、お前に与えられれば遥君なら拳でも喜ぶんじゃないのか？」

「え、それなんて変態？」

「ある種そうじゃないのか？」

和限定で。

そんな声が、和の頭の中から無意識に響いた。

「和って、本当に小悪魔ね。」

「いや、普通に悪魔じゃない？」

話を持ちかけた梓と浩平に開口一番言われた感想だ。協力要請に楽しそうにうなずいたくせになにを言う。

今、三人は高校駅前のカラオケで話をしている。

広末の家に寄って相談を終えたあと、道すがら和はふたりに電話をかけたのだ。

用件をかいつまんで話せば、

いつでもいいから学校外で集まれないかという和の頼みに

今日いますぐ会おう！と鼻息荒く提案してきたのだ。

和がカラオケを指定したときにはふたりが驚いたが、密談を交わすときにこれ以上最適な場所はないと和がこたえればふたりはおおいに納得した。

「まあ、とにかくこの料金は私もつから。」

宮田君、屋上の鍵の件は大丈夫なんだよね？」

「ああ、遙しか持ってないけど、言えばいつでも貸してくれるから。」

「じゃあ、そういうことでよろしく。」

おっけい、と浩平が了承し、そろそろ解散するかと思われた矢先、梓がふと思った疑問を口にした。

「…ねえ、最後の仕掛けに、遙が気付かなかったらどうするの？」

「あ、それ確かに気になるな。ていうか、笹森チャン、それ作るの？」

「私はね、こういうことにかけての情熱は馬鹿馬鹿しいと思ってても好きだからやっちゃうタイプなの。だからもちろん、手作りしますよ。」

ふっふっふ、と笑う和をみて、梓と浩平が半ば呆れた顔をする。

「で、私の質問にはこたえていただけなのかしら？」

「ああ、ごめんごめん…んー、そうだね、どうしようね？」

「ちよつと、まさか考えてなかったんじゃないでしょうね。」

「まあ、和泉君でそれはありえないような気がして…でももし気付かなかつたら…。」

「気付かなかつたら!？」

「冷めちゃうかも。」

えへらつと笑って言う和に、詰め寄っていた梓と浩平の顔が蒼褪めた。

「いや、冗談だって。」

「和!あなたね、怒るわよ!？」

「俺も、心臓止まった…」

ふたりのリアクションがあまりにも面白くて思わず言ってしまったが、さすがに反省して和は謝罪した。

「うーん…それならそれで、私はたぶんそのときは満足してるだろうから、

いつもの呪文を言われればきちんと応えられると思う。」
「なにそれ？」

わからん、という顔で浩平が問えば、梓も似たような顔をした。遥が毎日の告白を公約のように掲げている事実は、そういえばふたりとも知らないのだ。

「要約すれば、きちんと告白しますよってこと。」

「ほんとね？」

「さすがにこんな嘘はつきませんよ、梓さん。」

「笹森ちゃんだからなあ…」

「宮田君、梓さん、これはちゃんと約束するから。」

…私が素直になる為の、前段階だと思って、協力してもらえればありがたい。」

その和の言葉に、梓と浩平は微笑んでうなずいた。

明日はきつと、人生で最良の日になるだろう。

和はそう思いながらふたりの笑みに負けない微笑みで返していた。

第二十四話「いたずらっ子と書いて悪魔と読む。」（後書き）

いつもの半分くらい？でしょうか。

すみません、どうしてもここで切りたかったのでこんな長さです。

そのかわり、と言うのもなんなのですが、

今日中にまたもう一話更新予定ですので、お待ちいただけると幸いです。

第二十五話「最上級の愛情表現」

「…うん、これなら鞆に入る。」

確認して作り終えたものをおさめる。
満足してうなずいた。

「…気付いてくれればいいなあ。」

ふふふ、と笑って和はベッドに入った。

朝、眠そうな顔をして駅改札をくぐれば、
自分と同じ制服に身を包んだ集団が眼前に広がっていた。
この時間に彼女がこのあたりを歩いているわけがないと思いつつ、
それでも無意識にその存在を探してしまう。

「遥君。」

そのときだった。

背後から、ひとりの女の子の音がきこえて、遙は振り向いた。違和感を覚えながらも、それが待ち焦がれていた人物の声だと思っ

て。すると予想とおり、そこにいたのは彼が恋する相手そのひとだった。

「和！おはよう。どうしたの？今日はずいぶんゆっくりだね。」

「ちょっと寝坊しちゃった。遙君は、いつもこの時間なの？」

和が小走りでかけよって遙の隣に立つ。

その事実があまりにも嬉しくて、遙は違和感の正体に気付くのに時間がかかった。

「本当、どうにも朝は弱くてね。」

何日かは頑張つて和に合わせて登校してみただけだめだった。」

「遙君て低血圧なの？」

「いや、単に寝起きが悪いだけ……………」

和の言葉に、遙は声を詰まらせた。

それを不思議に思ったのか、和が首を傾げる。

「どうかした？」

「和、さっき、なんて言った？」

「低血圧なのかって。」

「その前！！」

「寝坊しちゃった？」

それは戻りすぎだ。

心の中でもどかしくもつつこめば、遙は和の両肩をがしつとつかんだ。

「和、俺のこと呼んで？」

「遥君。」

「……もういつかい。」

「遥君？自分の名前忘れた？」

気のせいではなかった。違和感の正体。

間違いなく、彼女は自分を遥君と呼んだのだ。

その事実には堪えきれなくなった遥は、心のままに和をその腕に抱きこんだ。

背中におもいきり腕をまわして、ぎゅうっと抱きしめる。

「……………」

おかしい。

いつもならば間髪いれずに悲鳴がきこえてくるはずである。

そつでなければ口汚く罵られたり、思い切り足を踏まれたりするのだが。

不思議に思っただけで、和を解放して、その顔をのぞきこめば、和はきよとんとしていた。

てつきり真っ赤になったり憤怒の表情をしていると思っただけで、遥は信じられない事態に驚愕する。

「和！？え、えーと、和だよ？よく似た他人とかじゃないよね？」

「当たり前でしょう、朝はいつも増して発言がおかしくなるね。保健室寄ってく？」

「ああ良かった、和だね。」

辛辣なその言葉に安心するのもおかしい話ではあるが、

名前のことといい、さっきの態度といい、どうにもわからない。確かめようと、遙はもう一度和をむぎゅ、と抱きしめてみた。

「遙君、遅刻しちゃわない？」

「……………」

それはとても冷静な声で、抱きしめた事よりもここで足を止めているという事に

抗議をしているようだった。

しかしそれも、責めるというよりもうかがう、という感じでまったく怒りというものが感じられない。

「和。」

「うん？」

おそろおそろ、といった感じでその名を呼ぶ。

「なんで怒らないの？」

「なにを怒ればいいの？」

まさか訊き返されると思っていなかった遙は、

「またも驚いて和の両肩にその手をつき、和の顔を少しがんでのぞきこんだ。」

「朝から二回も、公衆の面前で抱きしめたんだよ？」

「うん。」

「怒らないの？」

「どうして？」

「だって…嫌でしょっ？」

「嫌じゃないよ。」

あっけらかんと言われれば、またも遙は仰天する。
もしかして彼女の体に新種のウイルスでも侵入したのではないだろうか。

それともどこかにひどく頭を打ったとか。

遙は和の後頭部に手をやり、こぶなどがないか点検する。

それがないとわかれば次にはその額に手をやって熱がないか確認すれば

現時点の少ない情報量だけで分析すれば、和は健康体そのものだった。

しかもこれだけ体を触り倒しても、怒りの鉄拳が一度も飛んでこない。

ただ胡乱気な瞳で遙を見ているだけである。

その事実にもたも遙は混乱する。

……ありえない。

それともこれは、自分の盛大な夢なのだろうか。

なんとなくそれが一番しっくりきた遙は、馬鹿馬鹿しいと思いつつも自分の頬をおもいきりつねってみる。

それにわずか、和がふっと頬をゆるめる。

『……っといけない、思わずふきだしそうになっちゃった。』

「まったく、本当に変になったの？」

とつとと学校行くよ、遅刻しちゃう。」

ほら、と和が自ら遙の左手をとってひっぱる。

その事実にもまた遙が驚いた。

今日、自分は一体何回驚けばいいのだろうか。

心臓が持つかどうか心配になってきた遙であったが、その左手はちゃっかり和の右手を握りなおしていた。

あまりにも自然に握り返されて、果たして今日の目論見は墓穴だったかと

一抹の不安がよぎった和であった。

校門を通ったとき、あまりにも集中する視線に和は後ずさりそうになった。

それも無理はない。

手を繋いだ状態でふたり仲良く登校しているという事実には驚愕した生徒たちは

それを信じられないとばかりに凝視していたのだから。自然、向けられる視線は強くなる。

思わずといった感じで、和は素早くその手はずした。

それに半ば安心したかのように遙が和をふりかえる。

しかしそこにいた和は、またも予想外の言葉を口にした。

「さすがに、これだけ大勢に見られるといたたまれないから……。」
「!?!?!」

恥ずかしそうにそう言うてはにかむ和をみて、
情けないことに鼻血でもふくんじやないだろうかと遥は無意識に自身の鼻をおさえた。

学園のアイドルが校門で鼻血を噴出すれば、
それこそ前代未聞の事件としてこの学校の語り草になったことだろう。

なぜなにが頭の中をぐるぐるとまわる。

教室に着いてその傍らに遥がべったりとくっついていても、
和はやはりなにも言わない。
膝立ちをして和の机に頬杖をつきながら、和の顔を見上げる。

「ん？なんか顔についてる？」

遥の視線に気づいてぺたぺたと自身の顔を右手で点検する和は、
やはりいつもと変わった様子はない。

「可愛いなと思ってみてただけ。」

「保健室で視力はかりにいく？あ、コンタクトとかしてるんだっけ？」

「純然たる事実なのに。」
「遥君しかそんなこと思う奴いないよ。」

呆れたようにため息をつく。

発する言葉の厳しさも、集団に注目されることを嫌がるのも、いつ

も通り。
ただひとつ、決定的に違うのは、遙を拒絶しないということ。
名前で呼んでほしいとどんなに遙がねだっても、和はそれを拒否し続けた。

まるで純情な小学生にでもなったかのように、
先程から下の名前で呼ばれるたびに心臓が変な鼓動を奏でてしまう。
あまりにも大きい刺激に痛むくらいだ。

「…ねえ、和？」

「……あ、遙君、予鈴が鳴るよ？」

はるかくん。

呼ばれて、また遙の心臓が大きく跳ねた。
ああ、彼女は自分を弄ぶ天才だ。

「…じゃあ、また来るね。」

「うん。」

にっこりと微笑んで立ち上がれば、それに応えて和も笑顔を返してくれる。

ああ、なんて可愛いんだろう。

なんなら今日死んだら幸せかもしれない。

半分以上本気で遙はそんなことを思いながら、教室をあとにした。
瞬間。

はあっ、と大きく息を吐いて、和が机に突っ伏した。
ずっと事態を傍観していた2・3人は、その和の態度に今ならば

大丈夫かと

したくてたまらなかつた質問を浴びせた。

「ね、いつから遙様のこと名前で呼んでるの!?!」

「とつとつ付き合ったの!?!」

「なんか笹森さんすつごく柔らかい対応だったけど恋人の前だとそうなるタイプ!?!?」

きやあきやあと周辺の席に座るクラスメイトから質問されれば、

和はゆつくりと机から上半身を起こし、にやりと笑んだ。

「付き合っていないし、たとえ恋人になっても私は態度豹変したりしないよ?」

あと遙君と呼ぶのは今日限定。」

その数々の信じられない言葉に、クラス一同が固まった。

和の前に座る女生徒が、ごくりと生唾をのみこんでおそろおそろ質問をする。

「あの…なんでそんなことする、の?」

その質問に対し、満面の笑みでなおかつきっぱりとした口調で和は答えた。

「日頃の復讐。」

恐怖に固まる同級生の中に、呆れた顔でこちらを見る託斗が目に入り、

和は苦笑いを小さく浮かべた。

一限を終えてからの休み時間、10分しかないとためすぐさま和の元へと向かおうと思ったが
ふと思い立ち遙は梓と浩平を見やった。
ちよつどといつかなんとというか、教室の隅でふたりは会話をしている。

近づいて遙がふたりを睨めば、梓と浩平は一瞬面白そうな顔をした。

「…おまえら、なんか知ってるんじゃないのか。」

「なんかって?」

浩平が答えれば、遙は苛立たし気に言葉を発した。

「今日の和の態度についてに決まってるだろ!」

それに今度はふたりが驚愕の顔をする。

その表情は予想外のもので、遙が一瞬固まった。

「遙、和と付き合いだしたんじゃないの?」

「俺もてつきりそうだと思ってた。」

「は!?!なんでそうなるんだよ!?!」

浩平と梓は顔を見合わせて、呆れたようにため息をついた。

「だって今日の和の態度見れば、そう思うじゃないの。」

別にきつい口調はいつも通りなのに、遙に触られるのは嬉しそうだったから…

今浩平とどうやってからかうか算段してるところだったのよ？」

「遙のその態度みると、もしや違ったの？」

あからさまにがっかりした様子のふたりをみて、遙の頭は混乱した。

「え、じゃああれ…なんなの？」

情けない顔を遙が始めたので、ふたりが思わずふきだした。

貴重なものをみた、とふたりが笑いながら答える。

「知らないわよ！でも…和なりの意思表示かもよ？」

ふと思いついたかのように梓が言葉にすれば、遙は意思表示？と繰り返す。

「だから、遙と付き合いたいっていう。今までが今までだし、

和もあの性格だもの。素直に言えないだけなんじゃないかしら。」

「あー、確かに。今までのひどい態度とか気にしてるかもしれないよね。」

あとほら、未だにお前のこと疑ってるかもよ？なんせ生まれながらのモテ男だし。」

気になるなら、広末にメールとかしてみたら？と浩平が言えば、それがいちばんいいのかもしれない、と遙も思った。

しかし、和が自分と付き合いたいが為の意思表示であんな態度を取るものだろうか。

そもそも恋人というものを知らないし、そんなもの想像し

たくもない。

和自身、男女交際の経験はないと言っていたから、彼女自身も自分がどう変化するかなど知らないだろう。

そもそも、付き合い始めたら彼女の態度は多少変わるものなのか？その前提がそもそも疑問だ。なんとなくだが、なんら軟化することはない気がするのだが。

そんなくだらなくも遙にとっては最重要事項を考えつつ、広未にむけてメールを打ち始めた。

『休み時間終わっちゃうなあ。』

彼女に会えない寂しさを少し胸に感じつつ、遙は広未にメールを送信した。

一限を終えての休み時間、予想通り遙は現れなかった。それに和は満足気に微笑む。

今頃は、ふたたりを問い詰め、なんの成果も得られなかった事に焦り出し

広未にでもメールをしたためているに違いない。

考える、考えるがいい。

あまりにも思い通り掌で転がる遙を想像し、和は笑みがおさまらない。
そのうち大笑いでも起こしてしまいそうだ。

その様子に、クラスメイトたちはただただ遙に同情するのだった。

『答えは単純なものなのに。』

くすりと笑って、遙の胸中を和は思った。

次の休み時間。遙は勢いよく2・3へ飛び込めば、無言で和をひっぱった。

ぐいぐいと腕を強くつかまれば、けっこう痛い。

それ程焦っているのだらう。それとも怒っているのだらうか？

『…広末にどんな返信をもらったのやら。』

コンパスの差は考えてほしいものだ。転んでしまうではないか。

そろそろ抗議の声をあげようかと和が口を開けば、

もう目的地に着いていたらしく、人気のない階段踊り場にて、遙が和の腕を解放した。

和がさすさすと自身のうでを労わっていると、遙がため息をついて

和をみた。

「…和。」

「はい、なんでしょう?」

内心わくわくしながらも、顔は平静を装って返事をする。

「広末君からのこのメールの内容、本当?」

無然とした面持ちで、遥が携帯電話の画面を開いてこちらに向けた。んん?と和は近づいて表示されている文字列を見る。

そのメール内容は、

広末があくまで憶測であるが、と一応明記した上でだが、ほぼ確定なのではないかという様子で和の今回の企みを分析していた。

いわく、和は遥を利用し、託斗を排除しようとしている。

メールの内容は決して短いものではなかったが、要約するとこんな感じだ。

つまりは、かつて和が遥に対して広末を使い行ったことを、今度は遥を使って実行しているということだ。

『うわあ…広末め、やってくれるわ。』

今度あいつに会ったら、なんといおうと校門の君と呼び続けてくれる。

ゆっくりと携帯電話を遥の手から自身の手に取り、折りたたみ式のそれをぱちんと閉じた。

遙がその様子を見守っているのを確認し、和はにこりと微笑めば、携帯電話を思い切り地面に叩き付けた。

ガツンツと嫌な音が廊下全体を包み込む。

跳ね返った電話を目で追ったあと、遙は和に視線を戻した。

はつきりと憤怒の表情がみとれて、遙は失言だったと今更ながらに後悔する。

「あのね、言っておくけど同じ手をそう何度も使わないし、なによりもそれ最低じゃない。広未はもちろんなにもかも知った上で協力してくれたけど

私はなにも知らない遙君を巻き込む程、性格捻じ曲がってないよ。

遙君の私に対する誠実な気持ちや踏みにして利用するなんて冗談じゃない。」

和のその言葉に、遙はせつなく胸が締め付けられた。

先程までの自分は冷静さを失っていたとはいえ、なんてことを信じてしまったのだろうか。

第一、と和が一度言葉を切って続きを話した。

「そうまでする理由がないでしょう。」

そもそもそこまで困ってないし、心底ふたりの間に板ばさみになるのに嫌気が差したら

私はまず間違いなく姿をくらます。転校してしまえばそれが一番早いでしょう?」

転校という単語に、遙は声をあげて狼狽する。

「和、まさか実行しようなんて思ってないよね!？」

「いや、あのね」

「駄目だよ、そんなことしたら!そもそも無駄だからね、俺追いかけるもん。」

「どんなに隠れたって見つけ出すから。そしたら逃げないように鎖に繋いであげる。」

「うわあ、物騒だねえ……」

抱きしめられてそんなことを呟かれれば、恐怖以外のなにものでもない。

しかしあれだろうか。この男が発しているというだけで世の女子はときめいたりするのだろうか。

なんという理不尽な世の中であろう。

「だって逃げた事を後悔させてあげなきゃいけないじゃない。」

「とりあえず、やらないから。どうどう。」

ぼんぼんと背中を和の手でたたかれて、遙は心がじんわりと暖かくなった。

ゆっくりと少し名残惜しそうに、遙がその腕から和を解放する。

「…じゃあ、どうして?」

「どうしてって?」

「どうして俺を名前で呼ぶの?」

「呼びたいからに決まってるじゃない。」

「じゃあ、俺の手をとって、繋いでくれたのは?」

「だってひっぱらないと遅刻しちゃうと思ったから。」

「でも普段なら、あんなこと自分からしないじゃないか。」

「そう?」

「そうだよ。いつも嫌がるのに。」

「だって嫌じゃないもん。」

いいかげん、この押し問答にも焦れてくる。遙は核心をつくべきか否かを迷っていた。

意識してかそうではないのか、わからないがのらりくらりと和はそれを言おうとはしない。

もしもそれを質問すれば、彼女は答えてくれるのだろうか？

ひとつ深呼吸して、遙は決心したかのように和の頬に自身の右手を寄せた。

真剣な眼差しをむければ、和もそれを返してくれる。

心なしか潤んだ瞳でみつめられれば、どうしたって遙は期待せずにはいられない。

「和…」

『キーンコーンカーンコーン…』

反響するその音に、遙は脱力した。

瞬間、するりと腕から和が抜け出してしまふ。

「遅刻する！遙君も急ぎなよ！！」

叫んで、和が廊下を走った。

「ちよ、和！」

後ろ姿に叫んでももう遅い。みるみるうちに見えなくなってしまう。和を

遙はせつなく心の中で想っていた。

廊下を走りながら、どうしたって赤くなる頬をぺちぺちと和は叩いた。

「さすが百戦錬磨。油断するとやっば危ないなあ…」

一瞬、襲われるんじゃないかと思った。

というか、微妙に流されそうになった気がする。

どう言おうと、今の和は遙のことを好きだと自覚している。

それは事実として心の中にあるのであって、触れられれば嫌でも心臓は高鳴る。

あの距離は、言ってしまうえば凶器だ。

あまりにも場慣れしている様子の遙に、和の抵抗は果たしてどこまで通用するのだろうか。

気持ちが悪ってしまった以上は、拒むことだって難しい。

それでも。

せつなそうに必死に自分をみつめたあの瞳は、和の望むものだった。

「うーん…今更だけど私って悪魔？」

ひとりごちたその言葉は、おそらく今回の計画を知る全員がつかずくものだっただろう。

短い休み時間ではどうしたって足りないと感じた遙は、

昼休みまで待とうと今すぐ駆け出そうとする自分を抑えた。

一番重要になる場面で及び腰になるのは自分の悪い癖だ。
だからこそ、彼女に告白するまで一年以上かかってしまったのだから。

「一年と四ヶ月かあ…。」

思えばこんなに長いこと、誰かひとりのことを想い続けたことなどない。

頭の中で愛しい女性の顔を思い浮かべれば、遥はせつなくため息をもらした。

昼休み。

遥が和を誘えば、和はふたつ返事でそれを了承した。

そのとき、2・3一同がむける視線に気付き、一瞬遥は首を傾げた
が、

あまり気にする事もなく和を連れ立って教室をあとにした。

どうしたものかと考えた結果、

いつぞやの使われていない空き教室へとふたりは赴いた。

梓と知り合つきっかけをつくった思い出の場所だ。

四人でよく昼を過ごすようになってからは、ここもよく使っている場所のひとつである。

今日はふたりきりで、黒板前の教壇にそのまま並んで腰掛けた。机と椅子は端に寄せられ、足が取れかかっていたりと動かすのが危ない。

ご飯を食べるときは、いつもこうしてここに座っていた。

もくもくとふたりが口に食物をいれ咀嚼する。

いつもは大好きなはずの沈黙が、今日はやけに重かった。

無言で食べたためか思いのほか早く食べ終わってしまい、

和は小さくごちそうさまでした、と手を合わせた。

遙も隣で、ほぼ同じく口上をのべ手を合わせ終えると、

それが合図であったかのようにこちらをふりむいた。

その真剣な眼差しに、和はどきりとしつつも視線をそらすことなくその瞳に応える。

遙が、ゆっくりと口を開いた。

「和……」

ゆっくりと、遙がその手をのばして近付いてきた。

それに逃げることなく和が受け入れれば、遙はきゅ、と和を腕に閉じ込める。

応えるように、おずおずと和が遙の背中に手を回せば、遙の心がかしいくらいに震えた。

もう一度、確かめるように遙が抱きしめる腕に力をこめたあと、和の耳元に唇を寄せた。

「…キスしても良い？」

遥が静かな声で囁いた。

「いいよ？」

一瞬の沈黙の後、そう和が答えたとき、遥は夢ならば覚めないでくれと強く祈った。

できれば、これが現実であることを願いつつ。

遥がゆっくりとした動作で肩に寄せていたその顔を少しずつ離せば、視線の先にほんのりと顔を赤らめ、瞳を潤ませている和がうつった。愛しくてたまらないとでも言いたげに、遥が自身の右手でそっと和の頬を撫でる。

その仕草に、少しくすぐったそうに和が目を瞑った。

ゆっくりと、和のその唇に遥が自身の唇を合わせた。

情けないことに少し震えてしまい、それにつられたように和もぴくりと体を振った。

このまま、彼女にすべての情熱を与え尽くしてしまいたいと一瞬考えるも、

遥は肝心なことをなにひとつ訊いていないのだからと自身を叱咤してそれを思い止まった。

「…和。どうして、ゆるしてくれたの？」

「…してもいいと思ったから。」

まただ、またそうやって和は一番訊きたい言葉を与えてはくれない。右手は頬を撫でたまま、遥ははっきりと決定打を口にした。

「和は、俺のことが好きなの？」

問いかけに、遙はごくりと生唾を飲み込んだ。ついに、ついに言ってしまった。待っているのは地獄かそれとも天国か。

穴があくほどに和をじっとみつめていれば、和は遙の手をぐいっと離した。

小さくため息をつき、和は遙をみつめかえす。

「……………まさか今日ずっとそんなこと考えてたの？」

予想外の呆れたような、ともすれば少し怒っているかのような表情で和が遙を見ている。

慣れ親しんだその顔が、しかし今日はなんとも不安をあおる。

遙は背中にいたらだと冷や汗が流れるのを感じた。ひよっとすると最大の選択ミスをしただろうか。

「なんで遙君て呼んだかわからなかったんだ。」

「え、あの、和」

「なんで抱きしめられて嫌がらなかったのかわからなかったんだ。」

「それはだって、」

「どうしてたった今の行為を受け入れたかも、わからない？」

「……………。」

遙が沈黙すれば、和は勢いよく立ち上がった。

あわてて遙が腕をつかもうとするも、和がそれを思い切り払った。

「託斗にされそうになったとき、はっきり拒否したの見てたじゃん。」

「

その言葉に、昨日の嫌な場面を思い出して、遥が自然眉根を寄せた。それに和が憤慨する。

「それで遥君が同じこととしてどうしてゆるしたのか、わかんないっての!？」

百戦錬磨のくせに鈍すぎるんじゃないの。」

「和…。」

「なんとも想ってない相手と合意でこんなことする程、私は軽くないんだけど。」

その和の言葉に遥が目を見開けば、和は遥のみぞおちを蹴り上げた。クリーンヒットしたその衝撃に思わずのけぞれば、和がはっと吐き捨てるように声を上げた。

「自分は告白のときでさえ肝心なこと言わなかった癖に、このどへタレ男!！」

言わすんじゃないやねえ、稀代の馬鹿男が!と叫んで、和は教室を出て行く。

足音でそれがわかるも、思いのほか重たかった和の攻撃に遥は動けずにいる。

「和、うまくいったの？」

廊下を走っていた和を静止したのは、梓と浩平だった。それに和が気がついて足を止める。

「ああ、おふたりさん。…いやあ、ちょっと思い通りいきすぎてびっくりしてる。」

和泉君で、あんな単純だったっけ？」

「それはさ、惚れた弱みってやつだよ、笹森ちゃん。」

苦笑して遙に同情するかのように浩平がいえば、そっか、と和は少し気まづげに肩を竦めた。

「これ。」

そうやって梓が手渡してくれたのは、和の通学鞆だった。ありがとう、と和がそれを受け取る。

「じゃ、俺からはこれね。」

和の手に浩平がなにかをのせる。見ればそれはどこかの鍵のようだった。

大事そうに、それを和が自身の手に握り締めた。

「いやー、ふたりともほんと、ありがとう。」

じゃあ、あとは手筈通りよろしくお願いします。」

そうして去っていくこうとする和を、浩平がにんまりといやらしい顔

でみつめた。

「ふたりつきりで、なにしてきたのー？」

「浩平」

その言葉に、梓は咎めるような声を出す。和はそれに浩平以上のいやらしい顔をした。

「今想像した度合いで宮田くんがどれだけ性欲豊かが計測できたのにねえ。」

「いやはや、映像化できないのがもったいない。」

そのあまりにもな言葉の数々に、浩平が声を失った。

梓も隣で固まっている。

「私で遊ぼうなんて、宮田君てば。」

うつうつと、と黒く微笑んで、軽快な足取りで和が今度こそ別れを告げて目的地へと向かった。それを見送りつつ、浩平がため息をついた。

「…遥が苦勞するわけだよ。」

「和って…本当、面白いわよねえ。あれでどの口が地味だとか言うのかしら。」

「あんな女の子、ふたりもさんにんもいたらたまったもんじゃないよ。」

「まっただわ。」

人知れずふたりが完全に一致したその結論にうなずいた。

第二十六話「こんな私で良かったら」

しばらくして回復した遙は、人気のない場所をしらみつぶしに探したが、

保健室も、解放されていた図書室も入れて、心当たりはすべて空振りに終わった。

そうこうすれば無情にもチャイムが鳴り響き、遙は最後の望みをかけて2・3をおとずれる。

やはりと言ったところか、その席に和の姿はなかった。

ひよっとすると早退してしまったのかもしれない。そんなことを考えれば、遙は自然焦りを覚える。

その様子を見ていたクラスメイトは、あまりにもその姿を憐れに思ったのか、

おずおずと何人かの女子が遙に話しかけた。

「あの…和泉君？」

和泉君、という響きになんかの感情も波立たない。

まったく同じ言葉なのに、呼ぶ声によって自身の心の揺らめきはこんなに違う。

おおよそ和にたいしてとても友好的なクラスメイト一同が、遙は好きだった。

男子も女子も、このクラスの人々はどこかお人よしが多いのではないかと思う。

そんなことが頭を過れば、遙の顔が自然と柔らかく微笑んだ。

それに女生徒が少し顔を赤くしたが、遥は優しく先を促した。

「あの…はつきりとはわからないんだけど、笹森さん、なにか企んでるみたいだった。」

その言葉に、遥は驚愕する。

「…和が、なにか言ってたの？」

遥のその問いに、一瞬彼女たちが目を見合わせた。

真実を伝えようと奮起したものの、いざ和からの報復を考えれば恐ろしいのだろう。

…なんだか恐怖政治のようだ。

「復讐。」

沈黙していた教室に、ひとつの重厚な声が響き渡った。

その声の主は確かめるまでもない。こんな発言ができるのはこの教室において彼だけであろう。

託斗がまっすぐと遥をみつめたまま、淡々とした声でそう言った。

「復讐？」

眉を寄せて遥が訊き返せば、託斗がうなずいた。

「日頃の復讐だと、周りの質問にそう和は答えていた。

あと、遥君と呼ぶのは今日限定だとも言っていたな。」

その託斗の言葉に、遥が周りのクラスメイト達を見やれば、

おずおずと皆がみなうなずいた。どうやら本当であるらしい。

「……鈴木君は、なんでそんな貴重な情報を俺に与えてくれたわけ？」

「さあ？お前の顔があまりにも面白かったからかもな。」

くつくつと笑うその男を、思い切り殴り倒したい衝動にかられるも、予鈴が鳴ったので本鈴まであまり時間は無い。

それにそんなことをしたところでなんら無意味だと思えば、遙は無言で教室を出て行った。

「……まったく、感謝されこそすれ、何故あんな顔をされねばならん。」
不満そうに託斗が呟けば、クラスメイトたちが一斉に託斗をみつめる。

気のせいでないのなら、心なしか、彼らの瞳が涙で潤んでいる。

それに少しじろいだ託斗だが、気にするでもなく託斗の前に座っていた男子生徒が

がっしりと託斗の両肩をつかんだ。

「敵に塩を送るなんて……鈴木、お前ほんつといい男だな！」

「笹森は、こない男を振ってしまっなんて馬鹿だ！」

「でも、鈴木君ならすぐに新しい相手みつかるよ！落ち込まないで

！！」

「そうそう！高原さんとかね！」

皆の迫力に押されていた託斗が、最後の言葉にぴくりと反応した。

「……待て。高原さん、梓のことだよな？」

「え、あ」

馬鹿！とどこからか小さい叱責がきこえたが、もう遅い。失言に気がついた生徒が口を噤んでも、託斗はその圧迫した空気を収めることはなかった。

「…なぜ知っている。」

地を這うようなその声に、クラス全員がひいっ！と悲鳴をあげた。

「お前らはどこそどの芸能リポーターにでもなったつもりか！！」

「いっ、ごめんなさいいよいよいよいよ！！！」

その怒号に、それ以上のおびえた声で2・3一同の謝罪が響き渡った。

とつくに鳴り終わっていた本鈴に教室の生徒達は気付くことができなく、異常なその様子に廊下にいた教師が入るのを躊躇していた。

「くしゅんっ」

時同じくして、2・7のクラスではとつくに授業が開始しており、梓が小さいくしゃみ声をあげたところである。

『いやね、風邪でも引いたかしら？』

すん、と鼻を鳴らしつつ、梓が首を傾げていた。

遙は、全く授業に集中することができずに
先程の託斗が告げた言葉の意味を考えていた。

『日頃の復讐』

『遙君と呼ぶのは今日限定』

このふたつの言葉が意味する所に、遙は色々な考えを巡らせていた。
もしも2・3で発した和の言葉が真実であるのだとしたら、
今日の言動すべてが作り物だったと考えるのが妥当だろう。
ある意味で夢オチよりもタチが悪い。

しかし、なんでそんなことをするのか、遙にはわからなかった。

なぜ自分の気持ちを弄ぶようなことをしてまで、和がこんな行動に
出るのかわからない。

その真意がわからなければ、全貌がどうしたって見えてこないのだ。
しかし希望を持ちたいと思っても、遙自身、今日の和がおかしかつ
たとわかつている。

おそらく、今日の言葉や態度すべてがまがいものだったのだろう。
そう自分に言い聞かせれば、あまりにも残酷な事実には遙の胸はひど
く痛んだ。

けれど、広未からのメールの一件で、和はあんなに憤慨したではな
いか。

それならば、もしも今回のこれが某かの企みであったとして、そこ
には事情があるはずだ。

いたずらに自分を傷付ける彼女ではない。
そう思い直せば、遙の胸は少しだけ癒された。

五時間目が終わり、遙がゆっくりと梓に近付いた。

教室をながめても、浩平がいない。

それにもなにかあるのだろうかと思っただが、彼がいないのは割りと
日常茶飯事なので

なんにでも疑いの目をむけるのはかえって混乱するだけだろうと考
えを改めた。

「梓。」

「……遙？ど、どうしたの、その顔。」

なんとも憔悴しきつたような顔をして目の前に立つ遙をみて、
梓がぎよっと目を剥いて驚いた。

そんなに自分はひどい顔をしているのだろうか。

しかしそれならば、同情も誘いやすいしちょうどいい。

その考えに、自分も大概真っ黒だなと自嘲した。

和には散々言われていることだったが、和よりは可愛いものだと開
き直っていた。

しかしこんなに落ち込んだときにそんなことを思えるとは、
なかなか自分も負けてはいなかったか、と思いついた。

「なあ、なにか、知ってるんじゃないのか？」

「ええと……なんのことかしら？」

「梓、頼む。」

目を泳がせる梓にむかって、再度遙が懇願すれば、

はっとして梓が遙に視線を合わせた。
観念したかのように、小さくため息をつく。

「……放課後、屋上に向かって。」

梓のその言葉に、遙は眉を寄せた。

「今じゃ駄目なわけ？」

「うーん…今行っても、閉まってるんじゃないかしら。」

「…放課後になれば、開いてるんだ？」

「………多分。」

はつきりと言い切られなかった事がかえって真実を告げているように思えて、
満足した遙はありがとう、と梓に一言礼をいって自身の席に着いた。
その様子に梓はちいさく息を吐けば、心の中で和に拍手を贈っていた。

『多分、色々と探し回ったあと2・3に寄ると思うんだ。』

今回は特に口止めとかしなかったから和泉君に優しい2・3一同が私の言葉を伝えてくれるんじゃないかな。』

『伝えてくれなかったら？』

『ないと思うよー。落ち込みきった学園のアイドルを女子がほつとけないだろうから。』

それでなくとも朝の私の咳きで彼らは同情的になるだろうしね。』

からからと笑う和に、梓と浩平が恐ろしいものをみるような目をむけていた。

多少いたたまれなかったのか、和がちいさく咳払いをする。

『で、追い詰められた和泉君は、梓さんか宮田君を問い詰めるだろうから』

不自然じゃないタイミングで屋上に行けばわかるって伝えてあげて和泉君の問い詰めに負けました、みたいな感じで。』

『…そんなうまくいくものかしら。』

『どうだろうねー？でも、うまくいかなかった経験はないかな。』

いたずらっぽく微笑む昨日の和を反芻して、

梓は改めてあんな怖い子を一度は敵として扱おうとした事実亲身震いした。

今、自分が無事でいられるのも、彼女にたまたま好感を抱いた自身の心のおかげだ。

『…それにしても、浩平はどこに行ったのかしら。』

教室を見渡しても、戻ってくる気配がしない。

彼がこんな面白いことを置いて先に帰るとも思えないのだが。

疑問を抱きつつも、ふたりの行く末を胸中で心配する梓だった。

放課後を告げる鐘が鳴り響けば、遙は待ちきれずがたと席を立った。

その遙を、梓が呼び止める。

多少、苛立たし気に梓の方向をみれば、彼女は微笑んでいた。

「ここ一番よ、遙、男見せなさい。」

「梓…？」

その言葉の意味は理解できなかったが、にっこりと微笑み自分を激励した彼女に
遥もまた微笑んでありがとう、と告げる。

そうして教室を出て行った遥の後姿を、梓はぼんやりと見送った。

「……やっと、終わるのね。」
「やっぱり、そういうことか。」

梓がぼつりと呟いたその言葉に予想外に声がかぶさったので驚いて教室の出入り口を見れば、そこには託斗が立っていた。

「……やっぱり、て？」
「なんとなく。本当に敵に塩を送ったみたいだな俺は。」
「………もしかし、遥に和の言葉を伝えたのって、託斗なの？」
「なんだ、あいつから訊いたのか。」
「……どうして、ここに来たの？」

託斗の問いに答えることなく、梓が続けて質問をすればそれに託斗が後頭部をがしがしとかいた。

「なんとなく、ひとりになりたくなくなてな。」
「ああ、それなら、私の所以上にうってつけな場所はないわね？」
「……迷惑か？」
「いいえ、……来てくれて良かったわ。」
「そうか。」

梓が窓際一番前の席に座ったので、その後ろに託斗が腰掛けた。教室からはぞろぞろと生徒が出て行って、ついにはふたりきりとな

った。

この空間がひどく心地よくて、言葉は必要ないと、どちらかともなく思う。

優しい静寂が、教室全体を包み込んだ。

『…クラスの連中にネタ提供した感が否めなくて多少、癢に障るな。

』

そんな考えが託斗に過ぎつていたことなど、梓は知る由もなかった。

もっといえは、

懲りない2 - 3クラスメイト達がこの状況までも出歯亀しているという事実

にふたりはまったく気付かなかった。

緊張に手が震えているのがわかる。

まるで告白を決意したあのとときのようだと、遥がふつと苦笑した。

目の前の扉をみつめて、ひとつ深呼吸をすれば、遥はゆっくりとその扉に手をかけた。

屋上には、和が立っていた。

手にはなにかを持っていて、物音に気がついてこちらを振り向いた。逆光で、文字がよく読めない。

目を細めてその文字を解読しようとする和の立っている屋上中ほどに進入する。

「全部わかつちやった？これいらなかなあ。」

A4サイズ程のプレートのようなものを両手で持って、和が残念そうな声をあげる。

「どうやら板のようだ。」

「ご丁寧に綺麗にレタリングされペンキで塗ったのであろう。板いっぱい書かれたその文字をみて、遥はがくりと脱力して座り込んだ。」

その遥の反応が嬉しかったのか、和は走りよってしゃがみ、遥の顔をのぞきこむ。

「和泉君、大丈夫？」

「いずみくん。」

「散々呼ばれ慣れたはずのその言葉に、ひどく寂しさを覚えた。」

「……和、なに、これ。」

「え？いやだから。読めない？」

「ほれ、と改めて目の前に掲げられれば、そこには大きく

『ドッキリ』

という文字が書かれていた。

「これねえ、夜なべは大げさだけどそれに近い時間をかけて作ったんだよー。」

わざわざこの日のこの瞬間の為だけにー。」

うつうつふー、馬鹿みたいでしょー？となんと嬉しそうな声で和が話すので、

遙の中にふつふつと怒りがこみあげてきた。

「どづしてこんなことした？」

「…どうしてだと思っ？」

質問に質問で返されたこととどうとう怒りが頂点に達した遙は、目の前の少女の両腕を力いっぱいつかんだ。

「楽しかった？俺の気持ちで今日一日めいっぱい遊んだんだろう！？」

怒鳴るようにそう言う遙にむかって、和がうん、と短く返事をした。

「楽しかったよ。あまりにも思い通りにいきすぎてちょっと拍子抜けだったけど。」

「和！！」

「…和泉君、痛いんだけど。」

「…俺は怒ってるんだよ。離すと思っの？」

遙のその言葉に、今度は和がきつと遙を睨んだ。

「いっつもそう！ねえ、和泉君。」

私が、散々色んな事されて、なんにも傷付いてないと思った？」

和のその言葉に、遙はどきりとした。

「抱きつかれたり、頭撫でられたり、…キスされたり。」

それ以上に凄いことされたりして、それでも。あっけらかんとして
いられると思ってた？」

「和……。」

「女の子は、なんだかんだで非力だよね。最後は、従っしかない。」

ふっと和が自嘲した顔をして、遙は慌てて掴んでいたその両手首を
解放する。

見れば、うつすらと赤くなっていた。

「……そんなことされてまで傍にいるなんて、おかしいよなあって
何度も思った。」

それでも、和泉君の存在が大きくなっているのに気付いて、平気な
ふりしてたの。」

でもね、全然平気なんかじゃなかったよ？」

「……………」

「なんかされてもいつしよにいるたび、自分はなんて軽い女なんだ
ろうつて思ってた。」

和泉君に軽んじられてるっていう事実にも落ち込んだ。」

「そんなこと、思ったことない!!」

「じゃあなんで簡単にこんな事するの!!!!」

「そんな、簡単だなんて」

「だってそうじゃん。私が真っ赤になっただって顔色ひとつ変えない
し。」

さすが百戦錬磨は違うよね。それとも私だから？」

こんな地味な女の子相手じゃ勃つもんも勃ちませんってか。」

ケツと吐き捨てて和が放った言葉に、遥は目を見開いた。

「和！女の子がそんなことを言うもんじゃない！！」

「うるさいなあ。凶星だからって動揺してんの？」

「な、ちが…俺は和にしか欲情しない！！！」

自分こそとんでもないことを言っているのに、遥はそれに気付いてない程動揺している。

その事実には和が心がほっこりしてくる。

最後の枷も、外せそうだ。彼は、真実、自分を軽んじてなどいないのだろう。

ひっかかっていたひとつひとつが、するすると流れ落ちていくのがわかった。

「…だからね。とにかく和泉君をそういった面でオロオロさせたかったの。」

ねえ、少しはどきどきしてくれた？」

「……心臓が今日一日もつてくれないんじゃないかと思ったよ。」

また遥の口八丁かと一瞬考えつつも、

顔をのぞきこめば遥の頬には朱がさしていて、それに和の心は満たされていく。

「ま、そーいうこと！女の純情を先に弄んだのはそっちなんだからねー。」

はい、これ返す。」

ちやり、と遥の手に渡されたのは、屋上の鍵だった。

そういえば浩平が鍵を貸してくれと朝に言っていたことを思い出し

て、
やはりあいつもグルだったのかと苦笑する。

「…気は済んでくれた？」

「ん？うんまあ。」

「じゃあまた友達に戻ってくれるんだよね。」

「……それは、無理。」

最後の言葉に、遙の瞳が揺れた。

それにも今の和は喜んでしまう。

ああ、広未の言っていた通り、私ってけっこうサドかもしれない。

くすり、と小さく笑って、遙にそっとドッキリと書かれた板を手渡した。

「せっかくだから、これあげる。今日の記念。

それじゃあ、また明日ね。」

立ち上がって屋上を去っていく和を、追いかけていと思うのに情けなくも足に力が入らなかった。

彼女の数々の言葉を反芻しては、どうやって名誉を挽回すればいいのかと途方に暮れる。

思えば、笑って彼女が傍にいてくれたのは、奇跡のようなものだ。

確かに、軽んじていたと思われても仕方がない数々の所業を、自分にしてきたのだから。

「…キス以上に凄いいことって、お前なにやったの？」

もう何度目だろうか。

いつも事が終わると、彼は物陰から姿をあらわす。

まさか今回も見ていたとは思わずに、ぼんやりとその姿をながめる。

「…おい、遥？遥君？」

その呼び名に反応し、むすつとして遥が立ち上がった。

「呼ぶな、穢れる。」

「ひでえ。」

「つたく、今回もみてたのかよ、最悪だなお前。」

「ま、お前が万が一暴走して襲ったときのための救済措置。」

これは心配だったから俺が言い出したの。今回は合意の上での出歯亀だからな。」

その言葉に、どこかばつが悪そうに遥が目を泳がせた。

それに浩平が馬鹿が、と遥の胸を拳で叩いた。

「おつまえな、百戦錬磨が笑わせるよ。ちったあ余裕みせろつつうの。」

相手、経験ゼロの純情可憐な女の子だぞ。多少悪魔でも。」

「最後の一言が余計だ。……いやというほどわかったよ、今は。」

その遥の言葉に、はあ、と浩平がため息をつけば、

遥が右手に持っていたドッキリ板をつかんで、したたか遥のその顔面に叩き付けた。

ばん！となんと痛々しい音が響く。

あまりの痛みに遥が悶絶していると、浩平がその手にもう一度、板をつかませた。

「せつかくの記念じゃん、もらっとけもらっとけ。」

遥の肩をぼんぼん、と叩いて、浩平が屋上をあとにした。まだ痛い顔をさすりつつ、あいつ今度会ったらどうしてくれよう、などと遥は考えていた。

「……ずいぶんと嫌な記念だな。」

苦笑して、先程自分を地獄に突き落としたそれを見つめる。

どんな顔をしながら作ったのだろうと思えば、微笑ましくて少し笑ってしまう。

そのとき。

なにか右端に小さく書いてあることに遥は気が付いた。ドッキリの文字と違って、こちらは多少濃くあるものの、鉛筆かなにかで書かれたようだった。顔を寄せて、その文字を確認する。

『じゃ、ありません。』

それ単体だけでは、意味不明なただの文字の羅列である。

しかし、この板にはこれ以外にでかでかと大きく存在する文字があるではないか。

『ドッキリ』

『じゃ、ありません。』

前半は大きくペンキで、後半は小さく鉛筆で。

しかしそれは間違いなく、繋がって文章になる仕様だった。

「ドッキリじゃ、ありません……?」

しばらく意味を理解できずに、その言葉を口にしてみた遙は、気が付けば屋上を飛び出していた。

「さっさもーりちゃん。」

後ろから呼び止められて、廊下を歩いていた和が振り向いた。

「宮田君。ありがとうね、最終的に必要なかつたけど、安心できた。」

「いや…しかし本当、どこまでされたの?」

苦笑してたずねる浩平をみて、いやらしさを微塵も感じなかった和が真実、心配して訊いてくれたのだと思えばどう答えたものかと逡巡する。

「えーと、でも、その、なんていうか。大事な所はみられてないよ?」

「…なんか逆にいやらしくないかなあ。その表現。」

「く、首筋とか、這われた、くらい?」

うわー、なんとという恥ずかしい告白であろうか。

ここまで馬鹿正直に答えることもないと思いつつも、今回の協力への自分なりの感謝を示そうと和は懸命に言葉を発した。

「はー…キスマークとか、つけられちゃった？」

「いや、その、」

口ごもる和の様子に、浩平は是ととったようだ。呆れ帰った様子で盛大にため息をつく。

「……最悪だな。彼女でもないのに所有印残したがるなんて。ただ独占欲強いんだよ。」

「え、独占欲が強いと痕を残したがるものなの？」

「そらそうだよ、それ以外にないって。笹森チャン、付き合っの考えたほうがいいかもよ？」

冗談じゃなくマジで体もたないほど毎日とんでもないことされるかも。」

「え、いやいやまさか…」

「あいつ他にも危ないこと言ったりやったりしてたんじゃないの？」

その浩平の言葉に和は今までの遙を反芻してみる。

「…ああ、そういえば監禁と軟禁どっちがいい？とか訊かれたことがある。」

「…はあ？」

「あと、逃げたら鎖で繋いであげるとも言われた。」

「え、俺の親友はいつの間にも危ないやつになってたの？」

ドン引きして固まる浩平に、和はやだなー、と笑った。

「冗談でしょー！それこそ本気だったら危険人物だよ。」

「…うん、そつだといいけどね。」

遥のあの執着ぶりならば、恐らく半分以上本気なのではないかと思
ったが

それは言わないでおこう、と浩平は苦笑いをするに止めた。

その時だ。

二階廊下を歩いていたらふたりの耳に、騒々しい足音が聞こえてきた。

「え…ちょ、うそ。」

見ると、廊下の反対側端の階段から遥が降りてきていた。

どうやらワンフロアずつ探しながら下がってきていたようで、

こちらの廊下の様子も見に来た遥は、和と浩平を確認すれば一瞬固ま
って、

次には早足にこちらへ近付くのがわかった。

「異様に早い！ちょっと宮田君、なんかしたんじゃないの!？」

「いやー？顔面めがけて板を叩き付けたくらいかなあ。」

「なっ…!」

和の計算では、すっかり校舎を出て安全圏になったところからで
遥は追いつくだろうと思っていた。

万が一その存在をみつけても、逃げ切れる距離であろうと安心しき
っていたのだ。

それなのに、浩平が最後にかましたおせっかいで、遥が気付くのが
ずいぶん早まってしまったらしい。

明日にでも遥に呪文を唱えられれば、それに返事をしようと思って
いた。

もしも今日、電話で呼び出されても行くのはやぶさかではない、と

も考えていた。

間違っても学校で、大告白大会を開こうなどとはもちろん考えてもいなかった。

「ねーそれよりさ、あいつの目、なんか血走ってない？あれ絶対文字に気付いてるよ。」

「だ、誰のせいだと」

「完全ロツクオンされてんねー。いいの？逃げなくて。」

浩平の楽しそうなその口調にはっとして、

そうだ、ここからならば逃げ切れるかもしれないと思直して和は階段を慌てて駆け降りた。

転ばないようにねー、という浩平の言葉に返事をする余裕もなく、和は必死で走った。

どうしよう。

ちよつと待て。

もうちよつとだけ待ってよ！

心の中で必死にそうお願いするが、なんとなく行く末は嫌な予感でいっぱいだ。

それでもなんとか昇降口にたどりつけば、自分の靴をつかんで走り出した。

今は履き替える時間も惜しい。

そう思って放課後の校舎から弾丸の如く飛び出した。

和のその様子に、まだ残っていた生徒たちがちらちらと視線を向ける。

「げえーけっこうまだ人数いるし！」

顔を齧めつつここで捕まれば最悪だ、と内心で思ったとき。右腕を強い力でなにかに掴まれた。右手に持っていた靴を、ぱたぱたと落とす。

先程まで想定した中で一番最悪な事態に陥ったという事実を受け入れたくなくてしばらく振り向くこともせず固まった。

「和。」

しかし無情にもその名前を呼ぶ声は、予想通りというかいちばんそうであってほしくない人物だった。観念して、おそろおそろ振り向く。

息を切らして肩で呼吸をしている遙をみれば、その右手にはしっかりと

和お手製のドッキリ板がおさまっていた。

ああ、こんな衆人環視のただなかで。頼むから訊いてくれるな、と祈る。

「…これ、そういう意味なんだよね？」

「えーと、なにがでしょうか。」

「『ドッキリじゃありません。』」

「…とりあえず、逃げないから離していただけませんか。」

「…ほんつとうに、逃げない？」

「逃げない！」

念を押されて、和が半ば叫ぶように繰り返した。それに遙はゆっくりと手を離す。

それに安心した和は、掴まれた手をさすさすと自身の左手でなぐさめていた。

それを視界にうつした遙は、一瞬泣きそうな顔をする。和は大丈夫だよ、というように、苦笑いをしてみせた。

「今日一日の、和の言動。」

遙のその言葉に、和はびくり、と体を揺らした。

「嘘じゃなかった、てことでいいんだよね？」

「…まだそんな確認作業するわけ？」

「あのね、いくらなんでもそれは酷だよ。今日一日どれだけ疑心暗鬼になったと思うの。」

苦笑して遙がそう言う。

まあ、確かにそれはその通りだが、この念押し加減はなんともへたしだ、と和は思う。

「だってあんなことなんも思っていないのに合意したらそれこそ軽い女子じゃん…。」

唇を尖らせてそう和が呟けば、遙は顔に浮かぶ笑みを止めることができなかった。

それでもまだまだもらうべき言葉をもらっていないと思った遙は、真剣な表情を無理にでも作るうと必死になった。

あれを発するのは今しかない。

そう思つて、遙はゆっくりと口を開いた。

「笹森和さん。好きです、付き合ってください。」

背筋を伸ばし、真剣な表情でそれを告げる遙をみて、うわあ、やっぱりこいつ言いやがった。

と心の中で好きなひとに告白されているとは到底思えない悪態を吐いた。

しかし今ここでこの言葉を拒否するのは、いくらなんでもありえない。

ともすれば鬼か悪魔か、と言われても仕方ない。

観念して短く息を吐けば、和もゆっくりと口を開いた。

「こんな地味女子でよろしければ。」

苦笑して、和が了承の言葉を口にする。

自分の発した言葉を反芻しつつ彼を見つめれば、遙が目の前で固まっている。

『…今逃げちゃえば少なくともここで派手なことされたりしないよなー…』

過ぎった考えに、和が逃げの体勢をとったが遅かった。

一瞬早く、遙が和をぐいっとひっぱり自身の腕に閉じ込めれば、次には和の唇に遙が自身の唇を重ねた。

理解をするのに時間がかかった和は、固まって目を見開いていた。

それをいいことに、遙は数秒、和の唇を味わうと、ゆっくりとした動作で和の顔から離れた。

「これでやっと和は俺のものだね。」

俺のことでもぜんぶ和にあげるからね。などと満面笑顔で遙が口にする。

衆人環視のただなかで。
あるうことが告白を披露して。
譲歩してそれを受け入れたのに、目の前の男は、あるうことがキスをした。
しかも恥ずかしい言葉をオマケでほざいた。

告白しあって。抱きしめられて。キスして。

目の前で繰り広げられたあまりの所業に顔を真っ赤に染め上げた和は怒りに震えるその心と体に逆らうことなく、
持っていた通学鞆を満身の力をこめて遙の顔めがけ叩き付けた。

「こんの万年発情期が！猛省しやがれええええ！！！！」
最後、ドブプラー効果のように声が遠ざかっていくのを、
和の一撃を食らって地面に尻餅をついた遙がぼんやりとみつめていた。
先程おもいつきり攻撃された左頬を、ゆっくりとさする。

「…痛い。」
思いつきり嫌がられた。
しかも口汚く罵られた。

その事実には、遙は頬がゆるむのを止められない。
それどころか笑い声まで口から発せられる。

事情を知らない人間がみれば、ただの変人だ。

思いつきり叩かれて、嬉しそうに笑っているのだから。

事実、成り行きを見ていた野次馬たちは、遥のその行動にドン引きしていた。

それでも彼は、先程の言葉をかみしめてはじわじわと幸せで満たされていく。

『好きです、付き合ってください。』

『こんな地味女子でよろしければ。』

和らしいその返しに、遥はふ、と笑った。

ああ、やっと。

この気持ちが君に伝わった。

第二十六話「こんな私で良かったら」（後書き）

ふたりの関係が友人だったお話はこの回で終了となります。

ひとまず、ここまでお付き合いくださってありがとうございます！

次話から、恋人同士になったふたりの物語が始まります。

第二十七話「ほしいのは言葉じゃなく」

「…で、また放置プレイか。」

「それを言われると…」

津田家の玄関前で、広未と和が向かい合って立っていた。報告に寄った和に、広未があがらないのかと問えば、和が首を振ったのだ。

まだまだ混乱しているので、家に帰って悶絶したいらしい。

「とりあえず、梓さんと宮田君にもメール入れておいた。」

「…なんかみられてたんじゃないかなあと思うんだけど。」

「しかし、いくら生まれながらに目立つ存在だと言っても、あまりにも気にしなすぎなんじゃないのか？」

「うん、それはね、何回も思ったし本人に言ってきた。」

無駄だったけど、と和がため息をつく。

それに苦笑した広未は、ぽんぽんとその頭を軽くたたいた。

「まあ、今日のところはゆっくり休め。」

「うん。それじゃあね、広未。」

手を振って、去っていく和をみつめる。

なんだか少々さみしいような、でも嬉しいような、複雑な気分だ。

「…俺も頑張るか。」

にやりと微笑んで、誰にきかせるでもなく広未が呟いた。

家に帰り、枕に顔を埋めた和は、次の登校のことを考えていた。幸いなことに、今日は週末で、明日と明後日は学校が休みだ。

『二日で風化：なんてことはないよねえ？』

うわああと枕を抱えつつ、ごろごろとベッドに悶絶すれば、恥ずかしさでどうにかなくなってしまいそうな心をどう立て直そうかと考えていた。

現在時刻は19時。

晩御飯を食べ終えた和は、お風呂に入ろうかどうしようかどうだろうだ悩んでいる。

部屋の静寂をやぶったのは、着信音だった。

無機質な電話を告げるぴりりり、という電子音が部屋全体に響き渡り、

和は思い切りびくついてしまった。

『…誰だろう。』

電話だとわかっていつつものろのろと鞆から携帯電話を取り出せば、

ディスプレイに表示される名前をみて顔を顰めた。
いまいちばん話したくない相手からの着信で、しばし無視を決め込もうかと悩む。

考えていたら、着信音が止んだ。

すると次には、ぴろり、と短く通知音が響いた。

今度はメールが届いたのだ。

受信画面を開き、その相手を確認する。遙だ。

はあ、とため息をついてメールを読む。そこには短くこう記されていた。

『出てくれないと家まで押しかけます。』

読み終わるタイミングをはかっていたかのように、

またも電話の着信音が鳴り響き、和は思わず悲鳴をあげて電話を落とした。

先程のメール内容は本気なのだろうという結論に至れば、和は慌てて携帯電話を拾い上げた。

おそるおそる、受話ボタンを押す。

「も、もしもし…?」

『…さっきなんで出なかったの?』

低い声でそう告げられて、和は思わず叫びたくなった。

「き、今日ぐらいほっといてくれたっていいじゃん!」

『なんで両想いを確認した相手に俺はそんなにおびえられてるの…』

『?』

「いや、おびえてるっていうか、いっばいっばい、というか…。」

遥の言葉にむずがゆさを覚えたものの、事実なのでつつこみ所がなかった。

電話の向こうで、盛大なため息が聞こえる。

『土日、どつちかでもいいから会えない？』

「無理。」

即答でかえした和に、しばし遥は沈黙した。

『……なんでか、訊いてもいい？』

「土日はとりあえず心の準備をしたいので。」

『心の準備？』

「あんたが仕出かした事をどう受け止めたもんかと必死で悩む時間がほしいんですよ。」

和泉君さー、わかってる？全校生徒の前で私たちは大告白大会を繰り広げたんだよ？」

嫌味つたらしく、あ・な・た・の・せ・い・で！と一言一句を切つて伝えてやる。

しかし予想に反して、遥は不満そうな声を電話口からもらした。

『まだ和泉君なの？』

「よりもよつてそこ？食いついたのそこ！？」

『だって…名前を拒む理由がわからないんだけど。』

「からかわれる格好のネタじゃん、いいかげんネタ提供すんのヤダよ。」

『……予想はしてたけど、和、ほんつと態度とか変わらないね。』

「え、なにを期待してたの？」

『もうちょつと態度が柔らかくなるかなあ、とか。』

「和泉君がもうちょつと常識的になってくれたらやぶさかでもない

よ？」

『常識的って？』

「人前で抱きついたりだとかその他諸々をやらなくなれば」

『無理。』

それには遙が即答し、和はがっくりと脱力した。

「とにかくさ、私ちょっと土日はマジで休みたいんだよねー。勘弁して？」

『氷の女王？』

「じゃあ切るよー」

遙の言葉に苛立った和は、無情にも電源ボタンに手をかける。それには慌てて遙が待ったをかけた。

『月曜日になったら、やっぱり嘘でしたっていうのはナシだよ？』

遙の言葉に、和はぶ、とふきだした。

この男は、どれだけ今日のことを信じていないのだろうか。そんなに不安がられると、なんだか愛されているような気がじわじわとしてくる。

「あんなに証人がいる中で了承したのに、今更取り消す勇氣はないなあ。」

『……俺のこと、好き？』

「オイ。」

『俺は好きだよ。』

耳元で遙の艶っぽい声が聞こえてきて、

和は思わずぱっと腕をのばしてめいっぱい電話を耳から遠ざけた。

『耳が犯される!』

とっさにそんな間抜けなことを考えた。

遠ざけた電話口から、和、と自分の名前を呼ぶ声がきこえて、和はまた耳に電話をあてなおした。

「はいはい。」

『言葉をくれたら、土日は諦める。』

「土日に会うだとか押しかけるだとか電話とかメールとか一切しないで

放置してくれるってこと?」

『そこまで徹底的に放置してほしいの!? でも和、元々メールは返信あまりしないじゃない。』

「うんまあね。で、そういうことなんだよね? 約束してくれるんだよね?」

和の念押しに、遙がはあ、とため息をついた。

『和が好きだって言うてくれなきゃだめだよ。』

言外に、どうせ言えないだろう、という響きが含まれているのがわかる。

和は、見えないとわかっていつつも口角を歪に上げた。

「好きです。」

即答してピッと電話を切った。

こういうのはあれだ、勢いだ。ためればためるほど恥ずかしくなる

のだから

さらつと言つてしまえばいいのだ。

ものすごく色気もへったくれもない一本調子な声で告げられて
遙は果たして満足したのだろうか。

しかも勢い余つて電話を切ってしまった。

「……………ま、いいか。」

一応、彼の要望には応えたのだから、これで家に押しかけることは
ゆるされない。

いくらなんでもそんな強行にはでないだろうと、そのまま電話本体
の電源を落とした。

この所業を誰かがのぞいていれば、おそらく和に鬼か！と叫んでい
たことだろう。

しかし可愛らしく恥らうとか、そういったことが彼女にはできそ
うになかった。

『うーん、どうやら私はツンデレ属性だとかはないようだ。』

どんどん男らしく、ひいては俺様体質になっていくようだが

これからの遙を思うと自分自身でそう仕向けることになるにも関わ
らず、

他人事のようになにやら同情してしまった。

こんなマイペースな女を好きになつてしまつとは、なんとも憐れだ。

無責任にそう感じれば、それでもあつち方面はきつと好きに操縦さ
れてしまつに違いない、と

顔を赤らめて多少品の無いことを考えてしまった。

どうして、眠っているとにかく時間の流れて早く感じるのでしょうか。

ついさっきまで金曜だった気がするんだけど。
なぜ、なぜもう、月曜日の早朝なのであるのか。

5時。いつもならばそろそろ起きる時間だ。

落としてしまった電話の電源を入れれば、メールの件数は意外にも三通だけだった。

やはりというのもなんとのだが、それらすべてが遙によるものであり、

ひとつひとつ読んでいけば、

今日はなにをしたか、今なにを思っているのかなど、他愛ない彼の日常話であった。

そうして最後には会いたいという四文字が必ず書かれており、和は少し罪悪感を覚えた。

『にしても…文章にすると当社比1.5倍でうっとおしいなあ。』

ひどい言い草であるが、

和からすれば遥のこのメールの真意は理解できないものなのだろう。休日にごうごうしたかなど、逐一報告されたとどう返せばいいのやらと途方に暮れる。

そもそも知りたくもない、というクール通り越してドライですか、とつつこみたくなるような結論付けであった。

こうして恋人同士になっても、彼女の感性は特段変わることはないらしい。

あくまでも自分の時間を大切にしたい。

それでも、こうなった以上は時間の共有部分は増えるだろうと思っ
てはいる。

思っではいるが。

その面において譲歩することがなかなか出来ない和は、
もしも遥に無理を続けさせるくらいなら潔く別れようとすら思っ
ていた。

自分は他人とべつたりとくつつくことを厭う人間だ。

どうしたってそれは変えられないと痛感していた。

けれども、それを押し付けてまでいっしょにいてくれとは言えない。
もし無理だと言うのなら、最悪の結論も受け入れる覚悟をしなけ
れば、と決意したのだ。

『…もうちょっと自分が変わればいちばん良いんだろうけどね。』

苦笑して、まあ先はわからないし？などと、未来の自分にほのか、期待をしてみる。

しかし、和が今最重要視しているのはそのことではなかった。思考を寝起きのぼんやりとしたものから回復させ、どうしたものかと考える。

遥との金曜日的一件。

正直、いつも通りの時間にいつも通り登校するのが無難だ。たとえば遥とどこかでかち合ったりするのが一番まずい。

ハイエナに餌を与えてやるようなものだ。

なんだってあの学校は、ああもゴシツプ好きなのであろう。

…いやまあ。

あんなに格好のネタが転がっていたら無駄に噓し立てたくもなるのが集団心理かもしれないが。

考えれば考える程憂鬱になるも、先延ばしにしたところで変わらないと思えば

重い腰をあげて和は身支度を始めた。

一階に下り、洗面所へと足を運べば、見飽きた顔が目の前につつま。

「……………」

ふと自身の顔をみつめて、思いついた考えに和はしばし逡巡する。効果は、今までの出来事である程度保証されている。どこに行ってもアイドルの片割れだと思われる煩わしさを思えば、どうだろう。

じっと鏡をみつめて、和はにっこりと微笑んだ。

朝のこの時間。やはり人はまばらである。

朝練をする部員以外は、おそらく自分ひとりだろう。

いつもはたくさん生徒でにぎわうはずの空間に、

自分しかいないと錯覚するほどの静けさに包まれば、

少しの寂しさと胸いっぱいに起こる清々しさとで満たされる。

ああ、今日もいい朝だ。

そう思つて教室の扉を開ければ、そこには誰もいない。

その事実を改めて満足すれば、和は人知れず微笑んでいた。

廊下側いちばん端の前から三番目。

特に目立つこともなければ授業をさぼれる絶好のポジションでもないこの席。

思えばなんとも自分らしいではないか。と、

改めてその席に着きこれからの日常に思いをはせた。

きつと、変わらない。

こうして本を開けばあつという間に自分しかいなくなる感覚も、この誰かがおとずれるまでの空気をかみしめる毎日も、

少しだけ、それ以外が少しだけ騒がしくなるだけだ。

和自身がなにか別の生き物になるわけではないのだ。

不安だったことひとつひとつを解消していけばいい。

自分は、強くない。

でも決して弱くもない。

頭も鈍いほうではないのだし、それらを跳ね返す能力だってなくはない。

根性の悪さにかけてはそこらへんの人間には負けない自負がある。

…誇りにすべき点ではないが。

「おはよー」

教室の扉ががらりと開く。どうやらクラスメイトのひとりが登校してきたようだ。

その声に、和があいさつをかえす。佐々木君だ。

和の声に反応して、佐々木が彼女のほうへと顔を向けたが、佐々木は首を傾げる。

そうしておそろおそろ、といった風情で和に近付いてきた。

「え…さ、笹森さん？」

「そうですか。」

ええ！？とすつとんきょうな声をあげて、佐々木は和に指差した。

「マジで！？なんで、どうして！！？」

「おおー佐々木君、ナイスなりアクション。一瞬わかんなかった？」

佐々木にむかって和が親指を突き立てる。

「いや、だって。…へー、けっこう雰囲気変わるものなんだね。」

まじまじと和の顔をのぞきこむ。けっこうな至近距離である。

そこに、何人かの団体で女子生徒が入ってきた。
華やかな話し声がきこえたかと思えば、次いで悲鳴があがる。
女子の集団は、朝から元気なものだ。

「浮気！浮気現場だあああ！」

「佐々木、夜の一人歩き気をつけたほうがいいよ！」

「笹森さんたら、ぜいたくものー！」

「二股！？ありえなーいいい！！！」

『テンションたっけえ…』

呆れ顔で和がそんなことを思っていれば、佐々木が和から思い切り距離をとる。

四名の女子にたいして、真っ青な顔をして馬鹿！と叫んだ。

「お前らマジで冗談でもそういうことを言うなって！殺されるだろ！？」

「え、誰に？」

和が間髪いれずにたずねれば、佐々木と女子一同が固まった。

「笹森さんて…変なところ鈍いね。」

「え、佐々木君までやだなあ。皆なんかそう言うんだよ、なぜに？」

腕を組みつつ首を傾げれば、心底わからないといった顔をする。

いつもあんなえげつない悪だくみを思いついたり、観察力優れる人間にはとてもみえない。

これなら普通の女子となんら変わらないように思える。

しかしそんな彼女を全力で愛する学園アイドルは、さすがである。

自分ではとてもじゃないが器が足りない。

『…素顔はけっこう可愛いのかな。いや、けっこうどころか』

ぼんやりとそんなことを考えた佐々木は、次の瞬間かぶりを振った。こんなことを一瞬でも過ぎたなどと遙に知られれば、それこそ命が危ない。

「ていうか、笹森さん!？」

「どうしたの、可愛いー!!」

きゃああああ、とまた叫び声が聞こえて、いいかげん和はうんざりする。

「ちよ、うつせえ。」

「ねえ、コンタクトしてるの?」

「髪もおろしたほうが可愛いー!」

和の言葉など意に介さず、女子はどんどん質問責めをしてくる。まこと、メーターが振り切れた女というものは恐ろしい。

「あ、遙様と付き合いだしたからオシャレに目覚めたんだね!？」

「けっこう乙女なんだー笹森さん。」

「でもわかるー、あんなかつこいいひとが彼氏だもん、不安になるよねえ」

「隣歩いてて少しでも釣り合いたいって思うもんね!」

「……………」

説明するのも放棄した和は、無言で本を開いた。

シャットダウンは和の最終兵器で、これをやると不思議とクラスメ

イト達は

無視をされても不快ではないらしく、ひんしゆくを買わないのだ。
最近気が付いた。

「あ、入っちゃった。」

「ちよつとうるさくしすぎちゃったね。」

「でも笹森さん意外とまつげながーい…」

「すっぴんだよね？肌きれい。」

本を黙々と読み続ける和は彼女達の無遠慮な視線にもまつたく気付かない。

その様子を見て佐々木は少々呆れながら、自身の席へと着いた。

「和。」

ひよい、と本と顔の隙間に手をはさまれて、呼ばれている事実
に気付けば和は顔をあげた。

見上げた先にいるのは遙だ。

「あれ、和泉君、おはよう。」

「…あのね、何度呼んでも気付かないってどうなの？」

「いやー、ちよつと朝の質問責めに耐えかねて完全に遮断してた。」

あつはつは「、と言いつつ、和はおもむろに

先程までは外していた眼鏡をかけ、ほどいていた髪を結んだ。

その様子に、遥のみならずクラスメイト達が目を丸くする。

「……………あのさ、和。」

「ん？」

「その一連の行動の意味はなんなの？」

「ああ、これ？」

和は、眼鏡に右の人差し指と親指をかけてこたえた。それに遥がうなづく。

「防衛策。」

「……………は？」

「ド派手なことをそこかしこでやられたからさあ。」

しばらくは私も単体で歩いてたつてひそひそやられたり、女子にからまれたりしそうじゃん？」

「…はあ。で？」

「だからー。和泉君のお相手は茶色い眼鏡で一本縛りの女子って多分集団はインプットしてるじゃない？」

だから、和泉君といるときは徹底してその格好でいようと思って。そんでひとりのときは解除するの。そしたら表を歩きやすいでしよう？」

にこにここと微笑んでそんなことを宣言されれば、遥は声が出なかった。

少し前、彼女に学校では眼鏡を外さないでほしいと頼んだ。

髪もそのままできてほしいと。

それはつまるところ、素顔をみられたくないからだ。

彼女の可愛さなんて、本当の意味では自分しか知らない。

それならば余計な男が近付かない為にもなるべく彼女の魅力を隠し

たかった。

にも関わらず、あるうことか和は、
集団にその可愛い素顔を振りまいて、遥にはみせないというのだ。

あまりの仕打ちに呆然とする遥に、同情を禁じえない2・3一同。
まさか校門前の大告白からわずか三日目にこんな感情を彼に抱くとは誰が予想しただろう。

やはり恋人同士になったところで、笹森和は、笹森和なのだ。

先程質問責めにした四人の女子は、その行動の真の意味を理解してさらに驚いていた。

佐々木も同様だ。

「そんなの、すぐわかつちやうかもしれないよ？」

遥が不機嫌そうに話せば、和がにんまりと笑う。

「それは、今までの実績がありますよ！女子もけつこつ誤魔化せるし男子なんて特に！ね、佐々木君！」

「……ささきくん？」

ふたりに呼ばれて、佐々木はヒィッと悲鳴をあげた。

今このとき、数秒でもいいから透明人間になりたかった、と彼は思う。

「さつき、私の事ぜんっぜん気付かなかったもんねー？」

近付いてしばらくのぞきこんでやっとだもん！効果は抜群だよ！」

とても嬉しそうに、ともすれば今の彼女は無邪気そのもので微笑ん

でいるのに

どうしてか、佐々木の目には今まででいちばん残酷にうつった。

それはクラスメイトも同じだったのだらう。数人の男子は合掌のポーズをとっていた。

「『近付いてしばらくのぞきこんで』？至近距離で和の素顔を見たの？」

地を這うような声でささきくん？と呼ばれれば、

今すぐどこかの婿養子に入りたい、と佐々木は強く思った。

「なにをそんなに怒ってんの？」

心底わからない、というような顔で和が遙の顔をのぞきこむ。

それに遙がにっこりと微笑んだ。

「なにを？なにをって訊くんだ？」

「訊いちゃいけなかった？」

「……ちよつとおいで。」

「え、和泉君！」

ため息をついて遙が和の腕をつかみ、教室をあとにした。

息を止めるほど緊張していたクラス全体が、瞬間は「っ」と呼吸を取り戻す。

佐々木が腰を抜かしたかのようにがたんっ、と椅子から転げ落ちる。

「た、助かった…。」

情けないその声を、しかしからかう人間はひとりとしていなかった。

遙に無言でひっぱられているこの状況が、和はまったくもって理解できずにいた。

表情をよみとろうとしても、こんな風に前からぐいぐいひっぱられては

顔をのぞきこむこともできない。

そもそもコンパスの差があつて、ついていくのがせいっぱいなのだ。

「ねえ、どこ行くの？」

和の言葉に反応した遙が、突如ぐるん、と体を180度回転させた。さつきまで和の腕をつかみ前進していたその足をとめ、腕を解放し和に対峙している。

そのときようやく目的地に着いたのだと気が付いた。

最近定番になりつつある校舎隅の階段踊り場だ。

ぼんやりと遙の顔をながめていると、突然遙が和の肩を掴めば和の体を壁際まで追いやる。

そうして両腕を壁について和のことを閉じ込めた。

一連の流れるような動作に呆気にとられている暇もなく、強引に遙が唇を押し付けてきた。

口付けという優しい雰囲気のものではなく、まさしく荒々しく唇を押し付けてきた、が正しい。

抗議の意思表示として和が遙の肩をどんと叩くと、遙が唇を少

し離す。

「…和？」

「な」

なに？と訊こうとした。しかしそれを狙っていたのだろう、和の開いた唇に遙がその舌を割り入れてきた。

「ふあ！？」

混乱しきつた悲鳴にも似た声を和があげても、遙は行為を止めない。どんどんと舌が侵入を果たし、逃げ回る和の舌を遙が絡め取る。思い切り吸われれば、いやらしい水音が響き和は羞恥心でいっぱいになる。

真っ赤になつて涙目になるその様子を、遙は満足気に目を細めて見やる。

ゆっくりと齒列をなぞり上顎を舐め上げれば、和の体がびくりと震える。

「ふ…もう、やあらあ…っ」

舌つたらずな甘えるようなその声に、遙の背筋がぞくりとした。

これ以上続けていれば、こんな所でも自制する自信が無い。

危険だと判断した遙は名残惜しそうにゆっくりと舌を後退させる。

その行為にも和の体はびくびくと反応してしまい、

小刻みに震える体から甘くたちこめる色香に遙は眩暈がしそうになる。

口端からこぼれる唾液をきれいに舐め上げ、

最後に軽い触れるだけのキスをして遙の唇が和から離れた。

わけもわからず行為に翻弄され続けた和は、情けなくも悔しい思いで役に立たない足腰を遥によって支えられ、傍目からは和が遥にすがっているようにみえる。

それがまた和は気に入らないようで、呼吸を整えながらざろりと遥を睨んだ。

その顔を直視した遥が殊更の無表情と淡々とした口調で話し出す。

「何度も言うけど、その顔、意味ない。」

「な、にが？」

「呼吸が乱れてて顔真っ赤で、潤んだ瞳で睨まれたってただ男の劣情煽るだけだつてば。」

それとももつとしていいの？」

「ば…なんでそうなのよ!!!!」

「だつてすごいエロい」警察を呼んで。」

最後まで言わすのが嫌で和が割り込んでつつこめば、遥が苦笑いする。

「合意の上でしょ？」

「合意じゃない！朝からなんでこんなことするの…!!」

「よ」夜ならいいの？とか訊かないでよね。」

言いたかった台詞を取られてしまい、遥が口を尖らせた。

やはり彼女はこういう面が他の女子と違う。

いっばいいいっばいになっても相手に一矢報いようとするその根性がすごい。

遥からすれば、そんな面を持ちつつも

キスひとつでこんなに真っ赤になってしまう彼女がより一層可愛くみえるだけなのであるが。

「ね、嫌だった？」

「嫌だった。」

「うわ、即答ってひどいなあ。」

「気持ち悪くはなかったけど、そういう面では嫌じゃないけど。でも色々とか味したら総合的に嫌なの。」

「…うんまあ、言わんとすることは伝わったけど。」

「なんで行動がエスカレートするのー!？」

「私たち世間一般でいう恋人同士になったわけでしょう。」

「こんな強引に朝からあんなことしなくたっていいじゃない!」

和のその絶叫せんばかりの訴えに、遙がきょとんと目を丸くする。

「和ってば、どうしてそんなこと疑問に思うの?」

「どうしてって、だって」

「付き合ってもいないうちから我慢できなくて触っちゃってたんだよ?」

「付き合い始めたら俺がどんなになるかなんてわかりきったことじゃないか。」

「……………それさあ、偉そうに言うせりふじゃないよね?」

金曜日の一件をこいつはもう忘れたのではあるまいか、と如実に和の顔が語れば

遙は思わず目を泳がせた。

「ごめん、あの、反省はしてます。」

「…で、怒ってたのはもういいの?」

「和が理由を察してくれれば嬉しかったんだけどね。」

「ああ…佐々木君にもそういや鈍いって言われたなあ…。」

その言葉に遙は苦笑する。

ささきくんとやらはけっこういい人なようだ。
嫉妬に狂ってこんなところまでひっぱってきてしまつ自身を振り返れば、

こと彼女が関わると自分は本当に余裕がないと自嘲してしまつ。

「うん、いいや。和がそんなに怒らずに受け入れてくれたし。

大好きだよ、和。」

「…え、ちょ、もう毎日言わなくてもいいよ?」

付き合う前ならいざ知らず、まだ毎日のようにこの男はそんなことを告げるというのか。

あまりにの甘つたるさに胸焼けしそうだ、と和が心の中で思えばそんなことを察しているのかいないのか、遥が拗ねたような顔をする。

「言っちゃだめ?和と違って俺は心がこもってるんだからね。

言わないと溢れすぎちゃうから言うの!」

「ちよつと、私と違ってつてなにさ。」

「……金曜日の電話。確かに言葉がほしいとはいつたけどさ。」

その遥の言葉に、ああ、と電話で告げた言葉を思い出す。

やはりあれでは不満であるらしい。

「別にこめてないわけではないんだけどなあ!」

大体こんな面倒臭がりな私が恋愛する気になつたんだからそのへんは察してよ。」

「それは…それは、もちろん嬉しいけど。でもなんていうか、実感がないんだよ。」

俺はなんていうか、和と心がつながつた、恋人同士になつたっていう実感がほしいの!」

「どこの乙女なの？」

いかにもうっとおしいという顔をして和が遙を見れば、遙は唇を尖らせる。

なんだかこの男、どんどん幼児化してやいないだろうか。

可愛いなどと絶対に思っただけでやるものか。このでかい子供が、ひとつため息をついて、和は顎に手をやる。

「…とにかく、付き合ってるって思えばいいわけね？」

和のその言葉に、遙が無言でうなずいた。

それに和が小さくふむ、と返事をすれば、遙と一步距離をとる。

和の行動の意味がわからずに遙が首を傾げると、おもむろに和が遙の肩に両手をかけた。

『ちゅ。』

小さくリップ音がして、遙の唇に柔らかいながながが一瞬触れた。

「さて、授業遅れるから私もう行くよ。和泉君は？」

次の瞬間にはもうすでに廊下を歩き出す和を、遙が呆然とながめていた。

そんな固まる遙に呆れた顔をして、つきあっていられない、とばかりに

和がさっさと先を歩き出した。

ほどなくして覚醒した遙は、慌てて愛しの彼女を追いかける。

「和、もう一回！」

「だめ。」

「けち！」

あまりやれば遥を簡単に丸め込む手段として有効性が薄れてしまうではないか。

第一、外でこんなことをすること事態がなんともいえずに恥ずかしい。

そんなことを心の中でぶつぶつと思えば、ほんのりと顔が赤くなっていたらしく

遥がみるみるうちに満面の笑みになりとびついてきた。

「可愛いー！離れるのやだ！」

ぎゅむ、と抱きしめられるも次の瞬間にはべりつと遥の体をひきはがす。

「ああん？馬鹿言うんじゃない。学生の本分はなんですか。」

「えー、青春真っ盛りには恋が人生みたいなものじゃない。」

「義務教育じゃなく、望んで私達は教育を受けてるのよ。」

真面目といわれようが、固いといわれようが、そういうけじめがつかない人間は嫌い。」

「えー、和だつて金曜日授業さぼつてたじゃん…。」

「あれは緊急避難というの。いいからとつと授業を受けて来い！」

和のその言葉に、いかにも渋々、という風情で遥が教室へと向かっていった。

手間のかかる、と呆れて盛大なため息をもらしながら、和は教室へ歩を進めた。

それにしてもしばらくはこんな感じなのだろうか？

「朝からずいぶん長いため息だな。」

「！託、おはよう、けっこつぎりぎりなんだね、今日。」

「ああ。……別れる予定は？」

「今のところは。」

「そうか。」

ふつと、お互いに顔を見合わせ小さく微笑んだ。

並んで2・3へと入る。

その様子を、少し離れた場所から遥はながめていた。

付き合って、手に入れたと思っても、なかなか心の焦りは消えないようだ。

好きだと言われ、やっと通じ合えたと思えても、するりとそこからいなくなってしまうようで。

心底、その心がほしいと思う。

言葉だけでは足りない。

形だけのなにかなんていらぬ。

ほしいのは、君の一部とでも溶け合えたと感じるその瞬間。

和に負けないくらいのため息を、遥が廊下でひとつ吐く。

こぼれた空気は誰に見られることもなくただ空間に消えていくだけだった。

第二十八話「十人並みですから」

「ちょっと遙、いいかげんにしなさいよ。」

「そうだよー。お前、付き合って一週間で振られるとかしゃれになんないよ?」

「和泉君、なんでそこまで怒るかなあ…。」

三者三様の呆れたり困ったりな顔をして、ぶすつとした遙をなだめている。

始まりは、一週間前の和の宣言だった。

眼鏡と髪。

一度はまあいいかと思った遙だったが、やはり納得が出来ないよう都在这里一週間、遙と和は揉めにもめていた。

今は屋上でお昼ご飯だ。

四人しかいないこの空間は、いま学校でいちばん静かなのである。

「和の素顔を見れるのは俺だけの特権だと思ってたのに。」

「だってしょうがないでしょう、周りからの視線が痛いんだから。」

「こればかりはしょうがないと思うわよ、遙。」

「そうだよ、そもそもお前が目立ちまくるから悪いんじゃない。」

和を擁護するふたりの言葉に、遙は詰まった。

確かに、原因を作ったのはなんといいっても自分の言動なわけでそこをつっこまれば遙はなんにも言えなくなってしまう。

「大体、なにをそんなに心配してるんだかわからない。

少女漫画でもあるまいし、眼鏡外した途端に美少女になんてなんないつづの。」

呆れを通り越して少々苛立ってきた和の発言に、遙は拗ねて下を向いていた顔をあげた。

「何言ってるの！和の馬鹿！！」

「…馬鹿だと、このヤロウ。」

おめーにだけは言われたくねーよ、と低い声で和が言うも、遙はかまわず続きを話す。

「…図書室で、和のこと見てる奴が数人いる。」

「は？」

「廊下とか教室でだって、男子に話しかけられること、増えた。」

「…それは、朝のあいさつとか、雑用してて困ったときにそこらへんのひとが助けてくれたりとか

ぶつかったときに謝られたりとかそんなんでしょ？前と変わらないじゃん。」

「そんなだから！そんなだから言ってるんだってば！！」

どうしていいかげん自覚をしてくれないの！と遙が叫ぶ。

しかし、どうしてと言われましても、と和は途方に暮れた。

実際問題、遙がなにを勘違いしているかは知らないが

和は前となんら変わらない生活を送っているはずなのだ。

遙といるとき、つまり眼鏡とあの髪型をしているときは

周りからひそひそと囁かれたり、なんであんなのがなんてすれ違いざまに嫌味を言われたりする。

しかしそれはなんら気にならないし、

自分自身こんな珍味っぷりあふれる女をよくもまあ好きだなんて言

うものだよなあと思うのだから。

もちろん、おおっぴらに嫌がらせをされたりヤキいれをしようもんなら

それなりのお仕置きはさせていただくけれど。

今のところ、そういうことは起こってないし、

梓が表立って友達だと主張してくれているのもだいぶ助かっている。梓には女子生徒のファンが多く、彼女が認めた和泉遥の恋人、などと評する人々もいるくらいだ。

けれどもあの格好を解除してしまえば途端に和はそこらの人間と同じ扱いを受けるのだ。

まったくもって、目立たないようにとっていた措置が逆の結果を招き、

ひいては自分を助けることになるとは思ってもみなかった。

「仕方ないわよ、遥。今までそういう経験がない分、自覚がないのも当然だわ。」

「梓みたいにならずとモテ続けてきたとかじゃないもんねえ、笹森チヤン。」

「でも今の和ってさ、地味にモテるって感じなんだよなー、本当、変なタイプに好かれなきゃいいんだけど…はあ。」

三人がそんな会話をかわしているのを聞いても、やっぱり和はまったくピンとこない。

自分のどこをどうとって気をつけるなどというのだろう。

絶対にその危惧は必要ない。

「過保護っつーか心配性だね。そのうち円形脱毛症にでもなっちゃうよっ?。」

おかずを咀嚼しつつ和がのんきな嫌味をとばす。
それには三人一斉にため息をついた。

「ま、ちゃんとお前が気をつけてあげれば大丈夫だって。」

「そうね。…まあ、調子に乗ってはしゃいだ罰よ。」

「……ふたりともなんか俺で遊んでない？」

同情半分、面白半分といった風情でふたりが両隣でぼん、と遙の肩をたたけば

遙はぎろり、とふたりを順番に睨みつける。

『…おおげさ通り越して妄想入ってる気がします。』

面倒なので声には出さずに、和はひとり胸中でつつこんだ。

放課後、和が図書室に向かうべく廊下を歩いていたときだ。

前方で荷物を抱え足元がおぼつかない男子生徒を後姿をみかける。

進行方向は同じようだし手を貸そうかと少し逡巡し、次には駆け寄って近付いた。

「あの、手伝いましょうか？」

「え…」

目をこれでもかと思開き、驚いてその人物は固まった。

ダンボールを二箱抱えてよろけていた男子は、みれば図書委員のひとりだった。

名前は知らないが、受付はしてもらったことがある。上履きをちらりとみれば、一年生で和の後輩であった。

「一箱持ちますって。図書室でしょう?」

「あ、そうですけど…あの、いいんですか?」

「私も行きますから、かまわないですよ。貸してかして。」

ひょい、と和が重なった箱のひとつを引き受ける。

手にはずっしりとおもさが伝わって、男子といえど確かに厳しいかもと感じた。

運動部ならばまだしも、図書委員を務める人間はたいがい文系である。ろつ。

力だつてそうそうあるものではない。

「ありがとうございます。…先輩なんですから敬語いいですよ。」

男子生徒がちらりと足元をみて言う。和の上履きの色で二年生だとわかったようだ。

「ああ、そう?じゃあ遠慮なく。しっかし重いな。これ全部本なの?」

「はい。顧問の先生から押し付けられて。男なんだからひとりで行けるだろうって。」

「あらら、災難だったね。」

「……いえ、そうでもないです。」

「え、なんで?本フエチかなんかなの?もしくはマゾ?」

疑問を思ったまま口にした和に、後輩の男子はふきだした。

思っても見ない回答だったようである。
そのまましばらく肩を揺らしてくつくつと笑い、ふう、と息を吐き出した。

「先輩って面白いですねー。」

「そう？まあ口が悪い自覚はあるけどね。…と、失礼。」

図書室の扉の前に、両手とも塞がっていた和は迷うことなく足で扉を開いた。

その様子にも衝撃を受けた一年生が目を丸くする。

カウンターをみれば、高橋が受付に立っていた。

「あれ、時任ときとうはわかるけどなんでさ…。」

笹森さん、と呼びそうになる高橋を和が鋭い視線で一喝する。

「…山田さんまでどうしていつしよになって運んでるの？」

山田さん、とは所謂、偽名である。

これはこの格好で周りを偽ると決めた時、クラスメイトや高橋など自分と笹森和が同一人物だと知っている人間に言ったことなのだ。

笹森、という苗字はあまり多くは無い。

いなくはないがクラスにひいては学年に何人もいる苗字ではなく、和泉遥の恋人の名前が果たしてどこまで知られているか測りかねた和は、

ならば、と偽名を名乗ることにしたのだ。

この格好と笹森和がずっとイコールにならないとは和とて考えていなかった。

恐らく、いつかはばれてしまうような措置だろうと自身で思っているけれどもそれまではなんとか悪あがきしたい、とあれこれ急場しの

ぎをしているのだ。

「いやあ、その廊下で時任君があまりにも覚束ない足取りで歩いていたらもんだから」

みかねて声をかけたんだけど。」

「また顧問にいいように使われたか。お前もうちよつと逃げることに覚えたら？」

「高橋先輩が手伝ってくればいいじゃないですかあ…。」

「受付誰もいなくなったら駄目だろう。」

「それはそうですね…いえ、いいです。」

がつくりとうなだれて時任が諦めた。

その様子をみて、どうやら時任君はいじられキャラのようだ、と本人がきけばなんと不名誉である命名をされてしまった。

「まあいいや、ありがとうね山田さん。係りでもないのに悪いね。」

「いえいえ。」

そう言つて高橋がダンボール箱をひよい、と持ち上げた。

軽々といった風情でふたつを持ち上げるので、和と時任は同時に目を丸くする。

「ええええ、何故にそんな軽く？」

「ああ、引越し屋でバイトしてるからかな？」

「え、なんか意外。」

「そう？好きなときに働けるからラクなんだよ、あれ。」

じゃ、これ奥に持つてつて整理するから時任、受付頼むな。」

「あ、は、はい。」

呆然としていた時任が高橋の言葉に一拍遅れて反応すれば

慌てて返事をする。その様子に、和が小さく笑えば、時任は顔を真っ赤にした。

とそこで、しまった、と思う。

今の笑いは良くなかった。彼を傷付けたかもしれない。内心は焦りつつ、しかしいつもの調子で和は続ける。

「男子でもきつついあのダンボールをあんな軽がる持つなんて、高橋君て実はサイボーグなのかね？」

「え…い、いえ、僕が非力なだけで」

「最初っからテメーで行けつつう話だよ。出来る人間がその仕事やるのが基本でしょう。」

君はしかし余程、高橋君の変態的なサド心をくすぐるのかね？」

にやり、と女子らしくない嫌な笑いを和がすれば、時任はたじろいだ。

胸中で安堵の息をもらした。こんな変な女の嘲笑など、気にしないで忘れればいい。

なんなら記憶から自分をまるっと排除してくれてかまわないわけだが。

「いつも受付、お疲れ。…高橋君の相手という意味合いも含めね。」

ぼん、と軽く肩をたたき、じゃあ、と言って和は受付カウンターから離れた。

読みかけの本をみつけようと、本棚へ目当ての本を探しに行き、目的のものを手にして

いつもの指定席へと腰をおろした。

本を開けば彼女の世界はあっという間に自分と文字だけになる。感情のままに、本を読み進めていた。

そうして和の意識が奥深くへと沈み切ったころ、整理を終えた高橋が図書室の奥から受付へと戻ってきた。

高橋がカウンター内に目をやれば、なにやらとろんとした表情で時任が佇んでいる。

それを目の当たりにして、高橋は少々の嫌な予感が過ぎるも、まさか…と思い直す。

しかしそれをあざ笑うかのように、時任は熱に浮かされたような顔をして

高橋に小さく質問をした。

「先輩。山田さんの下の名前って、なんていうんですか？」

「……そんな、親しくないから知らないけど。なんで？」

「……いえ、別に深い意味はないです。」

ぽつと顔を赤らめあさつての方向を見た時任を確認して、高橋はおもいきり顔を顰めた。

「ねー、和。放課後だけでも屋上で本読むとかじゃだめ？」

「屋上で？」

図書室が閉館したあと、眼鏡と髪の毛のセットを装備した和は

校舎のどこかで時間を潰しつつ帰りをまつ遙と合流していた。
最近はいつものことで、

しばらく周りが落ち着くまでは笹森和の状態で図書室へ通うのは控えようと考えた和は

放課後の図書室解放日は先に帰宅してほしいと遙に頼んだのだ。

図書室の人間ならば、おそらく和がひとりで本を読みきたところでそんなに騒がれないとは思うが、またいつ心無い女子生徒から絡まれるかわからないし

遙が自分の向かいの席に座ってしまえば変装も意味はなくなってしまふ。

そういった過程があつて、それでもなるべく一緒にいたいと渋った遙が

自分も時間を潰すから帰りは合流しようと申し出て今の状態に落ち着いた。

…のであるが、

どうやら遙はそれに不満があるらしい。

「別に待ってるのが暇だから嫌とかそういうんじゃないだよ。

前にも言ったけど俺さ、和が本読むところみてるのが好きなの。」

「…でも、毎日なんかしら本は読んでると思うんだけど。」

「至近距離で向かい合ってみてるのって図書室での時間しかないもん。

だから昼休みと放課後って楽しみにしてる時間なのに最近は奪われてるし。」

「それは…なんか、ご、ごめんね?」

どう反応していいかわからず、とりあえず和は謝ってみる。

しかしつくづく遙は不思議な男だ。

趣味が特に合うわけでもないのに、無理することなく和と空間を共にできる心がある。

ひとえに彼が、自分を好いてくれているからだろうかと思えば、なんだか変な罪悪感めいたものを覚えた。

「だからさ、放課後、だめ？」

「うううーん…私も、図書室で読むのが好きだから…あの、昼休みじゃだめ？」

「昼は付き合いたしてからは四人でお昼とることが多いじゃない。」

「別にふたりでお昼食べるって言えばいいんじゃない？」

「和はそれでもいいの？」

「いいよ？図書室通いはまあ、ある種私のわがままなんだし…そんなんでよければ。」

そのとき、遙が思い切り和に抱きついた。嬉しそうに犬がしっぽを振っているような風情である。

別に抱きつかれるのくらいなら本来抵抗もないのであるが、

今現在、駅までの道を並んで歩いていたふたりは、道の真ん中の人から痛い視線を受ける状態だ。

耐えかねて和はちからいっぱい遥を押しつけた。

「だから、常識を養ってよ！そのどこでもする喜びの表現やめて

！！」

「けち。」

「そついう問題じゃねえし。」

ああもう…と和がため息をつけば、遙がふつと微笑む。

次の瞬間、遙はそつと和の左手をとった。

「これくらいは許してくれる？」

「…初めからこれくらいにしておいてほしかった。」

呆れ顔で、和は握られた自身の手で遙の手を握り返した。遙はまた嬉しそうな顔をしている。

本来ならば、あまり外で手を繋ぐのも和は好きではない。

しかし先程のようなことをされるくらいなら、手を握ってそれを抑制できるというならば、

こちらのほうが断然いいに決まっている。

遙の作戦にまんまとはまってしまったような気がして若干しゃくにさわるものの、

行為自体は嫌いではない、と和は感じる。

遙の手は、和にとって驚くくらい心地が良かった。触れられると気持ちがいい。

これこそが広末の言うところの中身の違いなのだろうとしみじみと思う。

遙には和は変わらない、とよく言われてしまっけれど、

自分にとつたらこういった部分での自身と向き合ったときの衝撃は今も強く、

結局はただの恋をしている女なのだと痛感せざるをえない。

そんなことを思っている心を、果たして遙はのぞいていたのか。口にされた言葉にぎよっとした。

「…和、俺にこうやって触られるの嫌じゃない？」

「えー？う、うん、嫌じゃないよ。場所を選んでくれるなら。」

「じゃあ、好き？」

「……………えーと、あの。」

この問いは、なんとなく答えづらかった。

確かに好きなのだが、好きと答えて遙がどんな反応をするのかがとても気になる。

また抱きつかれても嫌だ。

それに、なんとなく変な響きを含んだりしないだろうか、と馬鹿なことを一瞬思う。

好きだからってじゃあホイホイあちこち触っていいとかそういう事でもないのだ。

「和？」

「……………嫌いじゃないよ。」

のぞきこまれて、和は結局それしか答えずに、遙は寂しそうに笑った。

もう一度、和の手をぎゅ、と握るので、せめてもと和もそれに応えれば

遙は少し元気を取り戻したようだった。

駅に着いたとき、またこれから繰り広げられる攻防にやや疲れを覚える。

まだ始まってもないというのに。

「和、今日こそ送るってば。」

「だから、方向真逆でしょうが！」

そうなのだ。

こうして図書室へと寄った帰り道、暗くなるからと遙はいつも和を家まで送るといつてきかない。

しかし、それには和が待ったをかける。

付き合い始めたこともあって、家を教えることに今の和はさほど抵

抗はない。

しかし問題はそこではなく、わざわざ自分の家まで遙が足を運ぶことなのだ。

和の家の最寄り駅はここから下り、遙はといえば上り方面にある。つまりふたりの帰り道はまったく真逆に位置しているのだ。

とすると定期だって使えない。交通費がかかる。

それを一週間に3回もやられるのは気がひけるし、時間だって余計にかかる。

だからこそ和は頑なにその申し出を拒否していた。

「そんなことって、まだ俺に家を知られるのが嫌なんじゃないの？」

「だーかーらー、それはないってば！」

そうじゃなくて時間もお金も余分にかかるでしょ！」

「余分じゃない、必要なものだよ。」

「和泉君がそう思ったって私は嫌なの。暗いってたいしたことないし」

今まで変な目に遭ったことだってないんだから。駅からは歩いて10分くらいだし。」

「今までなかったからって今日遭わないとは限らないじゃないか。

もしもそうなら俺は自分で自分が許せないんだよ！」

「大袈裟な。大丈夫だったら大丈夫なの！！」

「なにを根拠にそんなこと言うの？可能性ゼロじゃないだろう？」

「可愛い子ならともかくも私だよ、ありえないでしょうが！！」

「またそんなことを！その無防備で無自覚なところが危ないって言うてる！」

油断しているのがいちばん駄目なんだよ！！」

和とて、最寄り駅が同じであれば家まで送られるのはそれほど抵抗

はなかった。

けれども図書室に寄るたびに電車を使って送られたのでは一回の交通費はたいしたことがなくても積もり積もれば大変な事になるではないか。

和はそれを黙って受け入れられるほど厚かましくはなれなかった。

「ねえ、交通費が大変なことになっちゃうでしょ。お願いだから。」

「……。」

「相手の負担になるのは嫌なんだよ。一番やなの。知ってるでしょ？」

「……負担なんかじゃない。」

「気持ちはそうでも実際そうじゃないでしょう。」

和のゆずらないその言葉に、ついに遙はため息をついた。

「……わかった。もう無理に送ろうとしないよ。」

「和泉君。」

ずっと呑んでももらえなかった要求が通ったことに、和は心底ほっとする。

しかし遙は、すべてをのみこむつもりはないようだ。

「そのかわり。」

「は、はい？」

「駅を離れる時間が18時を過ぎたら俺に黙って送らせること。」

「え、早くない？せめて19時「和？」

「……うー、わ、わかった。」

ぎろりと睨みつけられて、和はなにとも言えなくなってしまった。それに遙がにっこりと微笑む。

「じゃあ、今日は送っていくね。行こう。」
「え」

慌てて腕時計を確認すれば、時刻は18時を5分程度過ぎている。やられた、と和は心の中で舌打ちをした。

手を繋ぎなおされ、ぐいぐいとひっぱられる。ため息をついて、ああこれはもう無理だなと観念した。

「ここから駅みつつ先なんだ。へえ、近いね。」

「まあね、受験のとき、近さも考慮に入れたから。」

「朝の時間のために？」

「そう。」

「……和ってなんていうか本当すごいね、色々。」

その遥の言葉に、和は少々の苦笑いで返事をした。

今にして思えば、中学時代のことにはけっこう堪えたのだろうと思う。近場で、なおかつレベル的にもそう低くは無いこの高校は和にとつてとても都合が良かった。

『うーん、しかし…家族に遭遇するとやつかいだなあ』

遥を家に連れてきたくないのは、実はもうひとつ理由があった。それがいま心の中を過ぎったことだったのだが、

とりあえず家の少し前で別れば大丈夫だろう、と和は考えた。

駅に着いて、遥があたりをきよるきよると見回した。

和が使う最寄り駅は、コンビニや小さな商店街があるくらいで

あとはひたすら住宅街が広がるような特徴がほぼない駅である。不便さもそれほど感じないものの、若者が遊ぶにはどこか足りない。

「へえー、この駅ってこういう感じなんだ。」

「そう。家はさっきも言ったけどすぐだから。ここで大丈夫だよ？」
「だめ。」

「…ですよね。」

一応言ってみただけです、と心の中で呟いて、和は歩き出す。地元駅で手を繋ぐのは抵抗があり、遥もそれを察してくれたのが今、ふたりの右手と左手は離されたままになっていた。

「広末君の家はどのくらいなの？」

「私の家よりもうちよっとだけ奥だけど、そうそう変わらないよ。私ん家から歩いて3分くらい。」

「ほんとに近いなだね。」

「今度いつしよに突撃してみる？」

「いや、それ俺がしたらだめじゃないの？」

「でも何気に広末、和泉君のこと気にいつてるから大丈夫だと思うよ。」

「初耳だなそれ。」

小さく笑いながら遥がそう言うので、和もつられて笑った。

「和？」

その次の瞬間、後ろから誰かに呼び止められたのに気が付いた。それに足を止めるも、心の中で「最悪」の二文字が浮かんだ。よりにもよって、なぜ今日。

普段家にいない人間が、なぜ、帰ってくるのか。

おそろおそろ振り返れば、そこには微笑む女性が立っていた。

「……お姉ちゃん。」

「久しぶりー。」

ひらひらと手を振ってこちらに駆け寄ってくる人物は、どこことなく和と顔立ちが似ているも、雰囲気は少々違っていた。

「なに、今日帰ってくるとか言っただけじゃない。」

「冷たいなあ、和はもう！嫌なの？お姉ちゃんが嫌いなもの！？」

「いや、そういう意味ではなくて」

「今日、地元の友達と会ってたのよー。帰るの面倒だから泊まってくことにしちゃった。」

「どうせ大学は明日午後しかないしー。」

「ちょ、ねえちゃん、暑いあつい。」

すりすり顔を摺り寄せながら抱きつく姉を、口では言いながらも追い払うわけでもなく和はじっと耐えていた。

その様子を、遥は隣でぼかんとながめている。

「……あら？そっういえばこちらどなた？」

「……私とは違う意味でマイペースな姉でごめんよ、和泉君。」

「いや、かまわないよ。和、お姉さんがいたんだね。」

まだ半分抱きついた状態で、お姉ちゃんと呼ばれる女性が遥を見つづ首を傾げる。

それを見て、

くす、と遥が先程の面喰らった状態から回復し目の前の温かい光景に思わず笑みを浮かべた。

「えーと、これ、私の姉。名前は彩。^{あや} 大学二年生で今は一人暮らししてる。」

彩ちゃん、こちらは和泉遥君。

高校が同じで、今日は帰り危ないから送ってもらってるとこだったの。」

それぞれに紹介すれば、遥はにっこりと微笑んで会釈した。

「はじめまして、和泉遥です。」

一連の動作を確認した後、彩はきらきらと目を輝かせた。

「ひょっとしてお付き合いしてるの？和の彼氏!？」

「ちょ、彩ちゃん!！」

「違うの?」

彩が興奮した様子で遥の顔を見つめれば、次の瞬間には、ぱっ!と和のほうを向く。

その視線を受けて和はどうしたものかと逡巡しつつ、ちらりと遥の顔を見れば、不安気に揺れているのがわかった。それを確認した和は、心の中で決心をかためた。

「……最近、付き合いだしたの。」

その言葉に、遥の瞳が少し驚いたように見開かれた。

おそらく、和が自分のことを家族に恋人だとは紹介しないのではないかと思っただろう。

小さく遥に笑みを向ければ、遥は嬉しそうに笑い返した。

「きゃー、やっぱり!！」

「ちよ、彩ちゃん落ち着いてよ。」

興奮して腕をぶんぶん振り回す姉をみて、どうどうと和がたしなめる。

遥はなんとなく、和の今の人格形成の一端は彼女が担っていたのではないかと感じた。

「すごいかっこいいのね!和ってば面食いなんだから。」

「無駄に整いすぎて色々と弊害があるんだけどね。」

「ちよ、和、ひどくない。」

うんざりしたような和の物言いに、遥が反応した。

それをみて彩はますます笑みを深める。

「仲良しさんね!。ね、遥君だったわよね。今日、時間は大丈夫?」

「え?はい、特に用事はないですけど。」

「彩ちゃん?」

嫌な予感がした和は、反射的に姉の名を呼ぶも、彼女は興奮しっぱなしで

耳に入っていないようだった。

「お父さんとお母さんにも紹介しなよ!ね、遥君、お家に寄って行って!」

その言葉に、ああやっぱり!と和はうんざりとした顔をした。

遥はといえば、その申し出をどうしたものかと一瞬考えて、声をあげた。

「いえ、こんな時間に突然訪問したらご迷惑でしょうから。」

「大丈夫よお！家はしょっちゅう広末君が遊びに来るからそういうの慣れてるもの。」

それに和の彼氏をなんのおもてなしもしないで帰したんじゃ気がすまないわ！

私先に行つて伝えてくるから！和、遥君帰しちゃだめよ！」

弾丸のように家へ向かった姉を止める暇もなく、取り残されたふたりは呆ける。

は、と覚醒し、和が慌てて遥に声をかけた。

「ごめんね、和泉君、帰つていいよ！私うまいこと言つとくし！」

「え、でもせつかくああ言つてくれてるんだし、ご迷惑じゃなければお伺いしちゃだめ？」

「……………嫌じゃない？」

「とんでもない、むしろ嬉しいよ。」

その遥の言葉に、和が小さくうなり声をあげた。

「和泉君がそう言うなら、いいんだけど…その、精神的苦痛が耐えかねるレベルになったら

私に合図送つてくれる？すぐに連れ出してあげるから。」

「…え、ご家族、すごく気難しいとかなんかなの？」

「そんな普通な理由じゃないよ。大体厳肅な家だったらお姉ちゃんああならないでしょう。」

「和と真逆みたいなお姉さんだね。」

「よく言われる。」

「顔はけっこうそっくりだけど。」

「えー？彩ちゃんは昔から可愛いけど、私は普通だつてよく周りに言われるよ。」

「……あなるほどね、うん、よくわかった。」

小さい頃からそんな環境におかれたのだとすれば
どんなに言い聞かせても耳を貸さないのは納得だと遥は思った。

「ご両親に言われたの？それ。」

「え？ううん、父と母はなんつーか……ずっとそんなことないって言
つてくれてたよ。」

でも成長した今は特にお母さんが素材を殺してなぜそんな地味な方
向に！って怒る。」

遥がそれにくすりと笑った。

「良いご両親なんだね。」

「うんまあ、嫌いじゃないし、家族は好きなんだけどもさ……
とにかく、心の準備はしておいてね。防御の心得も忘れずに。」

「……わ、わかった。」

和の数々の言葉に、果たしてどんな家族なのだろう、と
前を歩く和の後ろを首を傾げつつも遥はつついて歩きはじめた。

第二十九話「笹森家の人々」

先程の場所からたいした距離もなく、笹森家に着いた。

行きたいと言ったのは自分であるが、彼女の家族に会うというのはそつえば経験したことがなかったのではないかと遥は心で逡巡すれば、

途端に緊張が体をかけめぐった。

隣で若干表情をかたくした遥を確認すれば、和はぼんぼんとなだめるように肩を叩いた。

それに遥は苦笑いで応える。

「緊張するような家じゃないから大丈夫だよ。」

「…うん、ありがとう。」

そう言う遥に小さくうなずき、和は我が家の扉をかつてない面持ちでゆっくりと開いた。

遥にああは言ったものの、その実、緊張しているのは自分だって同じだ。

ともすれば彼女のお宅を訪問するという彼氏よりも、和は心が重いつつかりと自身の思考は正常に作用している事を確認し、声をあげた。

「ただいまー。」

その声に騒々しい音がどたどたとリビングから響き渡れば、我先にと人が飛び出してくる。

「お帰りー！！和ちゃん、ちゃんと連れてきた！？帰しちゃってな

い！！？」

「お母さんてば、ちゃんと隣にいるじゃない、ね、ほらイケメンよ！！」

「若い頃の俺に似てね？」

母、姉、父という順番でそれぞれ好き勝手にやいやいと喚き立てる。和はそれに心底うんざりした。

「ちょっと、そんな捲くし立てるようにならしたらお客様に失礼でしょうが。」

広未と違って和泉君はあんたらに耐性ないんだからね。」

その和の言葉に、いずみくん！と母が声をあげる。

「和泉君て、名前？」

「苗字よ、お母さん。和泉遥君だったわよね？」

「え、じゃあ我が娘は彼氏を苗字で呼んでるの？ツンデレ？」

「てめーら、和泉君だけ拾うんじゃねーよ、人の話を聞きやがれ。」

先程、冷静という言葉を繰り返し心の中で言い聞かせたというのに、早くも和は苛立っていた。それを遥が慌ててなだめる。

「和、俺気にしてないから大丈夫だよ、落ち着いて。ね？」

その言葉に、またも三人がはしやぎだす。

「和だつてー！キヤー、名前呼び捨て！青春！！」

「ね、優しそつでしよう！？さつきもすごい礼儀正しくてねえ！」

「彼氏は甘々なのに…おまえもうちよつと好きですオーラ出してあげたらどうよ。」

最早、先程の誓いはどこかへ消えてしまったらしい。

和はしたたか床に通学鞆をうちつけければ、玄関にどすん！という鈍い音が響き渡った。

それに三人がびく！と反応してかたまった。

遥はといえば、彼女はしばしば苛立ちがどこかに達すると物を投げる癖がある、と感じる。

どこか冷静に、その様子を見つめた。

「リビングにお通しするのでいいんだよね？」

につこりと和が微笑めば、三人は無言でこくこくと何度もうなずいた。

それに和がどけ、と低い声で一喝しつつ道をあけさせる。

「ごめんね、玄関先で長々と。どうぞ？」

「えーと…お邪魔します。」

あがって良いものかどうか一瞬ためらうも、この場を取り仕切っているのは和だと判断し

遥は靴を脱いで家の中へと進んだ。

一般的な特になんの変哲も無い家。しかし漂う空気に心地良い温かさを感じて、遥は微笑んだ。

この空間のそこかしこに彼女の存在を感じる。どこにいてもその気配がある。

当たり前のことなのにそれがひどく胸に染みて、遥はなぜだか苦しくなった。

リビングには、家族がそろって食事をする大きいダイニングテーブルの他に

テレビの傍に大きめのソファと低いもうひとつのテーブルがあった。キッチンがカウンター式で、遙はなんとなく笑っている笹森家を想像してみる。

和がダイニングテーブルのほうへ座ってくれと促したので、従った。そこに家族が次々と座ってくるので、慌てて和は遙の隣へと座る。恐らく家族の誰かに隣を譲ってしまったえば、遙は質問責めその他もろもろで

大変な精神的苦痛を味わうことになる。和はなんとしてもそれだけは避けたかった。

しかし家族にはその行動を別の意味でとらえられたようで、気付けば三人がにやにやしながらその光景をみている。

和は照れからくるとかそういうった種類のものではなく、本気で苛立ちを覚えれば

額にびき、と青筋をたてた。遙はなんとなくでも真意を理解しているらしく苦笑している。

広未が変則的に遊びに来たり、姉が帰ってくることもあるので笹森家ではダイニングテーブルにそなえつけの椅子が人数よりも一脚多い。

今は家族が全員集合プラス遙の存在で五つの椅子がすべて埋まった状態になった。

和と遙が並んで座り、遙の斜め隣に和の父、向かい側に母、和の向かいに姉が座っている。

一番最初に口を開いたのは、和の母だ。

「ね、遙君。せっかくだし夕飯いっしょにどうかしら？」

「そうね、和を送ってもらったのにただ帰すなんて申し訳ないし」

「え？なに、送ってもらってきたの？わざわざ？遙君、ここから家近いの？」

和の父にそう問われて、遙は口を開く。

「遠いことはないですけど、特別近いというわけでもないです。

最寄り駅は学校から5駅先なので。」

「下り方面で？」

「いえ、上りです。」

「え！？反対方向じゃないか。和い、そんなんじゃないや振られちゃうよ？」

和の父は、彼女が送ってくれとせがんで遙をここまで連れてきたというように

話し出したので、これまた和の神経をじょうずに逆撫でする。

「私がどこの電車で当然のようにひとつしか席が空いていなければ彼氏押しつけ自分が座り、

荷物はすべて当然のように男に持たせるような種類の人間に見えると言っんですかクソ親父。」

「えー？だつて男相手だと豹変するかもしれないじゃん。」

「いい歳のオッサンがじゃんとか言っんじゃねえ。」

「もう、和ちゃんったら。相変わらず口が悪いわね、女の子でしょうー！」

「お母さん、和は怒るところなるの昔からの癖じゃない、もう治らないわよ。」

またも不穏な空気になりかけたので、遙は慌てて待ったをかける。

「違っんです！毎回のように図書室に寄る放課後は僕が送ると言い続けて

今日やっと駅前で一時間半ねばって説得したんです！

本当は和さんずっとそんな僕に負担がかかるような事できないって
渋っていたので」

「当たり前。時間も金も有限なんだよ、無駄遣いもいいとこだよ。
今日限りにしてね、和泉君。」

「和、それじゃあ約束が違う。駅出るの18時まわった日は必ず送
るって約束したでしょう？」

さつきわかったって言ったのは和だよ。」

「だーかーらー、過保護だってば！こんな女に変な気起こす奴なん
かないって

何度も言ってるでしょう！」

「それが驕りだって言ってる！それに痴漢やナンパだけじゃなく通
り魔みたいな事件だって

この先起きないなんて言い切れないだろう？」

「そんなこと言ったら街中歩けなくなるじゃん！！」

「そんな極端な事は言っていないよ、暗くなった帰り道をじゃあね、
なんて

平気で別れる彼氏がどこにいるんだよって話！俺がいるときは極力
安全でいてほしいの！！」

「だから危ないことなんて早々ないつてば！！！！」

ふたりのやり取りにしばらく呆気にとられた笹森家の三人は、いつ
せいに微笑んだ。

「ずいぶんと愛されてるのね、和ちゃんは。」

「なんとなく、歩いてる雰囲気もそんな感じではあつたけどねえ。」

「こんなイケメンここまで骨抜きにするなんてどんだけ技持ちなん
だ俺の娘は。」

三人のそれぞれの眩きをきいて、和は一気に羞恥心でいっぱいにな
る。

隠しようもなく顔がみるみるうちに赤くなれば、勢いよく立ち上がった。

「……着替えてくる！」

そう一言だけ告げて、和はどたとたと二階へとあがっていった。その様子に遥はくすりと笑い、家族は少々驚いている。

「…彼女の家に初めて来て、初対面の家族相手にひとりにさせるとは相当テンパってるな。」

「和ちゃんはそういう気遣いは人一倍する子ですからねえ。大丈夫かしら？」

「しばらく部屋で悶々としそうだねえ…。」

和がないないなか、原因たちがなにを言う、と胸中で遥がかわりにつつこんだ。

そういえば気が付いたが、和の母は和のことをちゃん付けで呼ぶが、父と姉は呼び捨てのようである。

ひよつとしたらお母さんだけお姉さんもちゃん付けで呼んでるのかな、などと

どうでもいいことを頭の中で遥は思っていた。

「ねえ、告白は和からしたの？それとも遥君？」

質問に少し反応が遅れるも、遥はにっこりと微笑んでそれに応じた。

「僕からです。」

「最近付き合いだしたって彩ちゃんが言っていたけど、そうなの？」

『あ、やっぱりちゃん付けだ』

自分のよみがあたり、くだらなくも内心嬉しく感じる。

「ええ、付き合いだしたの自体は最近です。」

「なんか含みのある言い方だなあ。もしかしてずっと遙君が片思いでもしてたんか？」

「そうですね？」

「え！？遙君みたいないかにもモテますって男の子が片思い！！？」

びつくりした様子で和の姉が叫ぶので、遙はふ、と少しふきだしてしまった。

そんなに意外なのだろうか。

「彼女以外は異性に見えませんか、そういうのはあまり関係ないです。」

「本当に和ちゃんのこと好いてくれるのねえ……。」

「告白してすぐにオッケーもらえたの？」

モテるということは肯定したようなもののだが、三人はそこは気にならないらしかった。

ほう、と息をもらしてしみじみ呟く母を一瞬目でめたあと、

まだまだ興奮気味に姉は質問を繰り返す。

「いいえ。告白したのは五月のことですそのときは振られました。でも、諦め切れなくて……一週間ほど前にやっと良い返事をもらえました。」

「え……てことは、四ヶ月がかりでうちの娘落としたの！？」

遙君、マニアックな趣味してるねー。気になってすぐ告白？」

「……ええと、それは、いえ。勇気がなかなか出なくて。」

初めて言い淀んだ遙に、三人が小さく反応した。

「けっこう長かったのね？片想い期間。」

「……情けないことに。ご家族の前でこんなことをべらべら話すのも難ですけど、」

ここまで好きになった相手は初めてだったもので嫌われるのが怖かったんです。」

苦笑してそう話す遙をみて、三人は目を丸くする。

初めは好奇心と、多少の猜疑心もあった。

なんせこないかにも目立つ存在の男を、あの和が連れてきたのだから。

しかし目の前にいる青年の、なんと誠実なことであろうか。

「…どうして振られると思った？」

突如父親の顔になった男をみて、遙は少しの緊張を覚える。まっすぐに和の父をみつめた。

「和さんは、静謐な空間に身を置くことに喜びを覚える女性です。僕はその空気に惹かれて彼女が好きになりました。」

けれど、僕の存在は彼女の愛する場所を壊してしまうことになる。そう思ったら、振られるのは必然だろうと結論付けました。事実、そうになりました。」

「愛する場所を壊す。」

ぼつりと呟く彩に、遙は小さくうなずいた。

「僕の周りは望む望まないに関わらず騒がしいのが普通です。特段それに不満はありませんでしたが、彼女はそうではありません。」

踏み込んで、彼女の傍にいたいと願うのは、彼女の静かな日常を壊す結果になる。

だからこそ僕は長い間、躊躇ってしまいました。

彼女の纏う空気は変わらずとも、環境は僕によって変わってしまったわけですから、

恨まれこそすれ、好かれることなどまずないだろうと諦めていたんです。

けれど結局は…わがままを通してしまいました。気持ちを抑えることは出来なかった。」

遥が自嘲しているかのように微笑むと、向かいに座る和の母が

遥の手にそっと自身の手を重ねた。

「…ありがとう。そこまであの子を好きになってくれて。和ちゃんはこのように愛されて幸せね。

なによりも、その価値があると気付いてくれた男の子が居た事が嬉しいわ。」

「…幸せ……。」

「遥君てば、自信ないのね？大丈夫よ。あの面倒を避けて通る和がこんな面倒なことの上ないあなたを選んだんだから。よっぽど好きじゃないとないわよ。

付き合ったら周りの女性関係で絶対に大変になるってわかってるはずだもの。」

和の母と姉からそう言われて、遥は心のつかえが少しずつ取れる思いがした。

ずっと気になっていた。彼女は、諦めて自分と付き合ってくれたのではないかと。

その心の中で、別れを望んでいるのではないかと。

「遙君、もうちょっと自信もつときな？俺も16年父親してきたから言えるけど」

和は本当に目立つのとか嫌いだから。

それに誠実には誠実を返す子だからさ、いいかげんな気持ちで付き合ったりしないよ。」

「……ありがとうございます。」

極めつけに好いた彼女の父親にまでもこんな風に言ってもらえれば遙は胸がいつぱいになった。なんならちよつと泣きそうである。

遙の様子をみて、なにを納得したのかはわからないが、うん、と両親はうなずいた。

「いつでも遊びにいらっしやいね。」

「和がいなくてきたら、あいつの色々な恥ずかしい話もきかせてあげよう。」

にこにこにやにやに困まれて、遙は一瞬驚いたあと満面の笑みを浮かべる。

「はい、また必ずうかがいます。」

下でどんなやり取りがなされているのかもわからず、

和は自室でとにかく精神統一を、と深呼吸をしていた。あの家族は、本当に普段から和を悩ませることをする。

というのも、行動がなかなか読めないのだ。

長年付き合ってきているというのに、その特徴はつかんでいるものの年の功なのか、あっさりといなされてしまうこと複数で、和はいつも悔しい思いをする。

今回のことだって、こんな楽しいネタを前になにをしでかそうというのかわからずに怖い。

しかし言葉にいちいち反応していたらそれこそ冷静な判断はできなくなってしまう。

和はなんとか気を落ち着かせようとして、よし、とひとつうなずいた。

『…ってそういえば和泉君を緊張の中ひとりにしてしまったあああ
あ』

自分を立て直すことにいっぱいになっていた和は、あまりにも重要なことを失念していたと気がつけば、慌てて下におりた。

それでも焦ってどたと足音を響かせればまたなにを言われるかわかったものではない。

努めて冷静にうつるように、と和は内心急ぎつつも悟られない動きでリビングへと赴いた。

明るい笑い声は、遥のものも混じっていて、和は内心ほっとする。

「いじめんね、ひとりにして。」

そう謝罪を口にしつつ和がリビングへと入れば、遥が和に目を向ける。

すると微笑んでいた表情が、みるみるうちに驚きに変わっていった。その遥の変化の意味がわからずに、和が首を傾げると、遥が驚きのまま声をあげる。

「…普段、そういう格好なんだね。」

「ああ、そうそう、ほんとはね、こっちで出かけることが多いよ。イメージ通りでしょ？」

今の和が着ている服は、

半袖白のカットソーに深緑色の細かくボタンが並ぶ七分袖のカーデイガン、

下はシンプルなジーパンと全体的に落ち着いた雰囲気であとまっぴり

よく本屋などへ赴くときにはこういった服装が大半なのだ。

和自身、こういった格好が自分の精神にいちばんちかいかではないかと感じている。

遥は、なぜか目を細めて和の姿をまじまじとみつめたあと、よく感じるオーラを纏い出した。

まさか、と和は嫌な予感がかすめるも、まさかと思い直し遥の次の言葉を待てば、

遥が勢いよくたちあがるので、ぎょっと思わず反射的に和は遥の両腕をつかんだ。

「い、いいい和泉君！」

「…は、ご、ごめん！」

自身の行動を振り返り、遥が我に返ったような顔をすれば、ほっとして和はその腕を解放した。

今までの行動パターンで、遥はどこか感極まると抱きつく癖がある、

と和は学習している。

なぜ今そういう感情になったのかはわからないが、遥の纏った雰囲気がつもものそれをやる前触れを思わせたので和はそれを阻止しようとする。

自身の両手で遥の両腕をおもいきり掴んだのだが、半信半疑であったその判断は正しかったようである。

遥の反応は肯定を示していた。

家族の前でそんなことをされたのではたまったもんじゃない。

そうして視線を動かせば、目の前で繰り広げられた奇妙な光景に、家族三人がそろって頭に疑問符を浮かべているのがわかった。

しかしきかれたところで、和は馬鹿正直に答えるのはなんとも苦痛であると思う。

「…なに、今の。なんの儀式？」

「いや、高明たかあきさん、儀式じゃないです。」

「え！？ちよ、いつの間に父を名前呼び！？きもいよ、お父さん。」

「娘にキモいって世のお父さんはいちばん堪える所業なんだぞ。」

「お母さんも名前前で呼んでってお願いしちゃった！」

だってお義母さんと呼ぶのはまだ早いって遥君が言うんだもの。」

「まだってなにさ、まだって。」

母の言にそれは聞き捨てならん、と和が反応すれば、遥は眉間にしわを寄せる。

「俺のこと、使い捨てにするつもり？だめだよ、離さないって言うたじゃないか。」

「あんたは落とした羞恥心を拾って来い！」

「和ってば溺愛されてるわねえ、さすが我が妹！」

あまりにも恥ずかしいことを家族の前でさらつと言われてしまい、
そういえば彼はこういう性格だったと今更ながらに後悔する。
しかしまさか親や姉の前でまでここまで明け透けにするとは思って
もいなかった。

ひよっとして、精神的苦痛を味わうことになるのは自分だけではな
いだろうか。

「まあ、出来婚はナシがいいよなどうせなら。ご利用は計画的に？」

「高明さんたら、気が早いわよ。」

「じゃあ依子、何歳でふたりが結婚するか賭ける？」

「あら、私絶対に負けないわよ？」

うふふあはは、と両親が笑い合うが、その内容はなんともよろしく
ない。

もういつそ好きにしてくれ、と和は頭を抱え込み席に着いた。

「…和のツツコミカってここで養われたんだね。」

「百聞は一見に如かずというかね…：なにより説得力のある光景だっ
たでしょう？」

遠い目をして力なく笑う彼女を、どこか同情めいた気持ちでながめ
た。

学校で誰も彼女をからかえないのは、昔から鍛えられた精神力の賜
なのであろう。

「でさ、さっきのってなんだったの？」

「チツ」

「和ちゃん、舌打ちは良くないわよ。」

忘れていればいいものを。

しつこくたずねる父に、和はうまく言い繕う気力もない。
すると遙がにっこりと微笑んだ。

「俺、所構わず気持ち振り切れると抱きしめる癖があるんですよ。
さつき和はそれを察知して先回りして止めたんです。」

おおおい！！

和は心の中で絶叫するも、もう叫ぶ力さえない。
なんであるう、なんの罰なのであるうか、今日のこの散々な出来事は。

「え、それは和の私服に萌えたとかそういうこと？」

「オッサン、言葉チョイスがおかしいにもほどがある。」

んなわけあるか、とついでにつっこめば、いや、そうだけど？と遙はさらりと高明の言葉を肯定した。

「すごく直接的な表現ではあるけど…和のその格好があまりにも可愛かったから。」

デートのときに着ていたのも魅力的だったけど、今のが和の空気が綺麗に出て

近くに座ってくっつきたいってすごく思う。」

その言葉に家族三人がにやにやと和をみる。

ここで赤くなつてはやつらの思う壺だ、とわかっていつつも、のぼる朱はとまらない。

たまりかねて和はテーブルに撃沈した。

「もうやだー…お願いだから眼科を受診して…。」

「またそんなことを言う。」

テーブルにつつぷした和の後頭部を、遥は苦笑しながらも優しく撫でる。

家族が目の前でみているはずで、本来ならばその手をとめなければならぬと思いつつも

遥のこの行為がすごく好きであると最近気付いた和は
疲れきった心を癒したいとどうしてもその手を拒否できなかった。

『うつ…気持ちいい……。』

遥に与えられるもので、これだけは永遠にやってほしいなどと乙女のように思ってしまう。

心境の変化に自身で驚きつつも、最近の和は半ば開き直っているところがある。

しばらくして、遥がその手をとめてひっこめようとするのがわかり、和は思わず遥の手をつかんだ。

右隣に座る遥の顔がみえるように、少し顔をずらして遥の様子をうかがえば、

驚きに目を丸くしていた。

それはそうだろう、こんなことをするのは柄ではない。

けれどもここは自分の家で、ここには学校の誰も近付かない。

そんなことを思ってしまうえばいつもよりも心は自由になってしまう。

「……………もうちょっと。」

遥の左手を自身の右手でつかんで固定したまま、和は頭をもっと撫でてくれと懇願する。

上目遣いで遥をみつつか目元でお願いすれば、

遥は目を見開いたままみるみるうちに顔を真っ赤に染め上げ、口元

を自身の手で覆った。

左手は、撫でるのを再開したので和は満足気に目を細める。

その光景に、依子があらまあ、と小さく呟き、

彩がかつてない妹の可愛さに遥のように顔を赤くしぶるぶると震えていた。

高明は、信じられないものをみたと一瞬目を丸くすれば、苦笑して遥をみつめる。

「…ほんとに技持ちだったんだな、我が娘は。破壊力強すぎるけど本人無意識だろうから

これから苦勞するね、遥君。…こんな子だけどよろしくな？」

「……………はい、もちろん。」

小さくうめき声をあげながら、一心不乱に和の頭を撫でつつ遥が短い返事をした。

複雑な胸中でありつつも誠実に返事をしてくれるその姿に高明は同情の二文字を覚える。

おそらく先程の自分の発言は、娘の耳に入っていないだろう。

『ああもう、抱きしめたいキスしたい押し倒したい！！！！』

先程から遥の心を埋め尽くすのは可愛いという叫びと邪念のみ。

拷問だ、と心の中で最大級嘆きつつ、

今日いちばんの精神的苦痛を与えられたのは自分を守ると約束してくれた

最愛の彼女であることに、遥は内心で深いため息をついた。

「あの、なんかごめんね？こんなことになって。」

「ううん、楽しかったから。また来てもいい？」

「…和泉君は強いなあ。私がだめって言ってもお母さんたちはまた来いつてうるさいよきつと。」

「和は俺が来るのは嫌？」

「和泉君が嫌なわけではないけど、もうちょっと齒に衣着せてほしい。」

「でもああいう態度のほうが逆に疲れなくない？」

「そーかもしれんけどさ…性質的に無理だって。どうしろと？いちやつけと？」

「俺は願ったり叶ったりだけど。」

「無理だつてば。」

和のうんざりした顔に、遙が微笑んだ。

あれから和の私室でしばらく過ごし、晩御飯を食べているときもとにかく家族がかまいたおおしてきて大変だったのだ。

遙はすっかり気に入られたようで、玄関を出るときも何度も引き止められた。

必ずまた遊びに来るといふ約束を取り付けて、やっと家の前まで出てこれたのである。

「駅までの道わかる？いっしょに行こうか？」

「こら。そんなことさせるわけないでしょう。大丈夫だよ、覚えてるから。」

「ほんと過保護だよねえ…、わかった。迷ったら電話して。」

「うん、ありがとう。それじゃあ、また明日。」

「うん。ばいばい。」

小さく手を振って、遥がみえなくなるまで見送れば、小さく息を吐いて和は玄関に向かった。

と、そのときだ。

家族が玄関のドアを小さく開き、かぶりつきでこちらをみているのがわかる。

「帰り際はけっこうあっさりしてたわねえ。」

「ちよつと意外だったねー。」

「なんだよ、別れのちゅーくらいしろよ!。」

「親父、語彙がいいかげんやばいから。見てるのバレバレだったの。」

「

呆れてため息をつきながら、和は家族をどかしつつ家の中へと入り込む。

「のぞいてなければしてたのか?。」

父親のその言葉に、和は満身の力をもってしてみぞおちに蹴りを入れた。

のけぞる父を一瞥し、お風呂に入る、と和は私室へ戻って行く。

騒がしい一日が終わりを告げようとしていた。

第三十話「赦すのは君だけ」

『あー、もう最悪だ……。』

げんなりとした顔をしつつ、和は満員電車で揺られていた。

いつもの時間ならばこれほどまでにすし詰め状態にはならないのであるが、

昨夜のことが祟ったのか、和は珍しく寝過ごしてしまったのだ。

おかげでそこまで疲れを引きずらずに済んだものの、朝からこれでは辟易してしまう。

せつかく残らなかつた昨日の疲れも、この瞬間に新しく蓄積されてしまいそうだと和は思った。

そういえば、この時間であるならばどこかで遥と鉢合わせになるかもしれない。

確か彼の登校時間はもう少し早かつたと記憶していたが、

考えたらこの時間帯なのにいつもの装備をしなかつたのはいささかうかつであつた。

『まあ、さすがに見かけてもこの格好の私に話しかけるような所業はしないだろうし。』

ひとつ心の中でうなずきつつ、和は大丈夫だろうという結論に至つた。

安心して息を吐きかけたそのとき、和はなんとなく違和感を覚えた。人口密度が高い車内。そこかしこの人間とびつたりとくつついている状態ではあるのだが、
なにかがおかしい。

背後に立つ人物の手が、なにやら不穏な動きをしているような。

先程から、スカート近くをもぞもぞと手が這っている気がしてならないのである。

それでも控えめなその動きに和は気のせいだろうと思ひ直し、意識を別へやるうと努めた。

しかし、抗議することのない和の態度に相手が増長したのか、手の動きは先程までが嘘のように

大胆に和のスカートの上から下半身を撫でさすってきた。

その仕草に、和の全身にぎ、と鳥肌が走る。

『え、え、これって…もしや、』

頭が混乱して判断がどんどん遅くなる。

それでなくともこういった経験が今までなかった和は戸惑いを隠せない。

手はスカートから尻を撫でるに止まらず、和の太腿までもを触りはじめるので

思わず和は足をきつく閉じた。

この瞬間、間違いなく痴漢だと確信した。

そこで、どうしたらいいかと逡巡する。

こんな満員電車では、体をろくに動かすことができない。よって、痴漢の顔が見れないのだ。

なんとか手を動かすことはできそうだが、果たして掴んだりして止めてくれるのだろうか。

小さくやめてください、と声をあげてみるか？

しかし和の頭の中に、いつか観た映画の内容が流れ込んでくる。

痴漢冤罪を描いたその名作は、今でも和の中に強烈に残っていて、こんな不確定要素が高い中で声をあげたり手を掴んだりしたら、誰かに濡れ衣を着せやしないかと、とてつもない不安を感じ始めていた。

もしもそうだったら、冤罪でもなんでも痴漢はほぼ100%有罪になると映画で言っていた。

そのひとの一生を台無しにするかもしれないと思えば、和は固まった。

その間にも痴漢の行為はどんどん過激になっていく。

ついにはスカートの中身にまで手を入れられそうになり、涙目になった瞬間。

車内アナウンスが流れ、学校の最寄り駅に到着した。

すんでのところで慌てて駅へと降り立った和は、

しばらくフラフラと歩き出し、駅のホームで腰を抜かしそうになる。なんとか自分を叱咤し足に力を入れるも、壁に手をつけてなんとか立てる状態だ。

情けないことに免疫がまるでなかった和は、普段の自分では想像もできないほどに

なんの策を講じることもできなかった。

せめて、声くらいあげればよかったと、いまさらながらに後悔する。とりあえずやめてくれ、と叫び、その行為が終われば相手を捕まえずともそれで良かった。

そんな簡単なことにすら気付かないほど、和は嫌悪感と恐怖心で完全に思考を停止していたのだ。

悔しさに唇を噛みつつも、いまだ力が入らない。吐き気までする。泣きそうになりながら俯いて自身の回復を懸命に待った。

「ねえ、あなた大丈夫？」

後ろから声をかけられて少し顔をあげれば、そこには親しい顔が立っていた。

梓だ。

和の尋常ならざる様子に目を見開いた梓が、慌てて背中をさすった。

「和！？ちょっとどうしたの、気分が悪いの？」

「……名前。」

「……そんなこと言ってる場合なの、山田さん。」

こんな状態でもそんな言葉を吐く彼女に、梓は呆れてため息をつく。和自身も驚いていた。どれだけ自分は図太いのだろう。

「あの、具合が悪いんじゃないの、ちょっと……」

小刻みに震えて、涙目になっている和をみて、梓がなにかを察したようだ。

こっそりと耳打ちをする。

「ひよっとして…痴漢に遭ったの？」

梓の問いに和が無言でうなずけば、梓はみるみる憤怒の形相に変わっていく。

背中をさすっていた梓は、和をちからいっぱい抱きしめると、大丈夫。と優しく囁いた。

「ごめんね、遥じゃなくて。…まったくこういうとき現れなくせにアイドルとか言われちゃって。」

「いや、梓さん…むしろそれはヒーローの域では…」
「似たようなものよ。」

全然違うとおもう、と心の中でつつこみつつ、和はぶ、とふきだした。

その様子に梓は心底ほっとして、安堵の息を吐き出した。

もう平気だと告げれば、梓はいっしょに学校へ行くと申し出てくれたので

和は少し待ってもらい駅構内のトイレでいつもの装備を身につけてきた。

梓と並んで歩くには、あの姿はリスクだと感じてのことだったがそれだけ頭がまわれれば大丈夫かしら？と梓が苦笑するので、和も苦笑をかえした。

駅から学校までの道すがら、梓はずっと怒っていた。

「まったく、こういう類の犯罪は一番卑劣だわ。ほんと許せない！」

「ありがとうね、本当に助かった。ちよっと自分でもここまでシヨツクなのが衝撃的だったよ。」

「無理ないわよ。特に、大切なひとがもういるなら余計だわ。」

好きな人以外にそういう意思でもって触られるのって本当、不快以外のなにものでもないもの。」

「…そ、か。そうだね、そうなんだね。」

うなずきつつ、隣でぷりぷりと憤慨する梓をちらりと見て、

そつえばとある映画の主人公が父に習字で「痴漢は死ぬ」と書かされたという

昔話をしているシーンを思い出した。

あれは特別名作ともいえなかったが、けっこう面白かった。

和にしては珍しくいまだ原作に目を通していない作品だ。

今日の帰りにでも本屋に寄ろうかとぼんやりとそんなことを考えた。

そして、湧き上がるこの感情をどう制御したものかと持て余す。

信じられないことに、和は心底遙に会いたかった。

ざわざわといまだ波立つ心は、彼でなければどうにもできないと感じる。

『うーん、ほんとに私は和泉君が好きなんだな……。』

自身の変化に面食らいつつ、受け入れて遙のことを考えれば今すぐあの手で頭を撫でてほしい、などと思ってしまう。

「…和、遙にこのこと伝えるの？」

「ん…うーん……」

梓の問いかけに、和は悩んだ。

別に伝えたくないわけではないが、わざわざ報告するのもどうなのだろうか。

さすがに連日あんなめに遭うことはないだろうし、

いつもの登校時間ならばそもそも可能性はなくなるだろう。

とするならば今回に限ったことなのだし、特別なにかをする必要はない。

今回のことで自身も自覚し、痴漢対策は色々と考えようという警戒心も芽生えたことだし

それで充分なように思うのだ。

「なんか、伝えても和泉君が不快になるだけな気がするんだよね。

思い出したい話でもないし…私はもう同じことはされないと強く誓ったし、

なにかをしてほしいわけでもないから話す必要はないって思ってる。

「そう？和がいいんなら私もなにも言わないけれど…でも隠されたのがわかったら

遙はシヨックを受けると思うわよ？」

「そういうものなのかなあ？…でも過保護に拍車がかかりそうで面倒くさい。」

「まあ…騒ぎになったわけではないから誰も知ることはないんでしようけど、

言わないでおくのなら、いつもと態度が変わらないように気をつけなさいよ？」

情緒不安定になるくらいなら早めに話しておきなさい。」

「…うん、そうだね、そうする。ありがとう、梓さん。」

心遣いに感謝して和がお礼を述べれば、微笑んで梓はそれにながずいた。

教室へ足を運ぶと、もはや遅刻ぎりぎりだった。

和より奥に教室がある梓は走って向かったくらいだ。

クラスメイトたちから目を丸くされ、それい寝坊だと和は苦笑する。

遙の顔がみられなかったことで若干心細くは思ったものの、逆に落ち着くまではよかったかもしれない、と和は考えた。

朝に会えなかったことから、てっきり間の休み時間にやってくると思っていたが

以外なことに遙は現れなかった。

それに平常心がすっかり保てるようになって安心していたが、少しの違和感を覚える。

しかし特段気にすることもないか、と思い直し、いつしか疑問はどこかへ消えていった。

「和、お昼行こう！」

「和泉君、おはよう。」

教室にひよこつとやってきた遙に、まずはと和はあいさつをする。それに遙は苦笑した。

「もう昼だよ。」

「いや、いつもの日課が抜けるとなんか据わりが悪くて。」

教室を出て屋上へと向かいつつ、ふたりは雑談をする。

「梓にね、釘刺されちゃって。」

「たまたま朝、和に会ったけどずっとごく疲れてるのは俺のせいだろうか。」

「だから今日は昼まで我慢しろ！って怒られた。」

「だから来なかったんだ。梓さんに感謝。」

「和、ひどい。…って昨日のこと？やっぱり。」

「うん、寝坊しちゃったくらいだからね。ま、半分以上は家族のせいだけ。」

「お疲れ様。」

「ぼんぼん、と苦笑いしつつ頭に軽く触れられれば、

和はこれ以上ないほどの喜びを感じる。

施す人間が違えば、からだはこんなにも反応を変えるのかと驚いた。

今まで、嫌悪感を抱くことはなかった。
異性に、異性として触れられる経験などなかったし
託斗になにかをされたときも彼を知っている自分はなにも感じない
くらいで
嫌悪感まではいかなかったのだ。

屋上へ到着して足を踏み入れれば、遙が鍵をかける。
放課後はあまり施錠することはないが昼はこうすることが多い。
誰かが間違っ入ってくることを想定した措置だ。

お昼を並んで座りつつ食べる。
そういえば、梓と浩平に昼はふたりでとると話して実行するのは今日からだが
考えたら改めて梓にお礼が言いたかったな、と和は少し思っていた。

「今日は火曜日だから放課後はそのまま帰るんだよね？」
「うん：あ、ほしい本があるから本屋に寄るけど。和泉君は先帰ってる？」

「いつしよに行きたいけどいい？」
「かまわないけど、いいの？つまんないと思うよ。」
「和といつしよにいてつまんないときなんてないよ？」

顔をのぞきこまれて、いつもの調子でそんなことを言われれば
和はこれまたいつものようにうんざりした顔をする。
この男は、いつになったらこうならなくなるのだろうか。
釣った魚には、別に餌をやる必要なんてないのに。

おもいつきりしかめっ面になる和に、遙はため息をつく。

「こういうときは顔を赤くしてくれればいいのに……。」

「なんでよ。和泉君で本当、歩く口説き魔だね。」
「それだと見境なく誰でも口説くみたいで嫌だよ。」
「それだったらいつそ性癖だとも諦めついたらただけだな。」
「和だからだよ?」
「わかっているからうんざりするんじゃない?。」
「ひどい...。」

うなだれる遙をほおって、和はごちそうさま、と食べ終わったご飯を片付ける。

そういえば、本を読む自分をみたいから、などと彼はほざいていたなど

和は思い出したが、

今日はなんだか気分になれない、となにをすることもなく真つ青な秋空をみつめる。

もうすぐ10月になる。

そろそろ文化祭の準備などが始まる頃だ。

ああいった行事は、はりきっている人間をみるのは眩しくて嫌いではないが

自分が入るとなると少し辛い。

なにかの気にあてられるからだろうか、疲労がずいぶんあとを引くのだ。

壁に寄りかかって、ぼつとどうでもいいことを考えつつ、
和は目を瞑った。

「...ん...?」

隣から動く気配がして、和が目を開こうかと思う前になにかが唇に触れた。

唇が重なる音が静かな屋上に響く。

「い、和泉く」

和が抗議の声をあげようとすれば、遥はどんどんキスを繰り返す。最初は軽く触れていたその動きは今や情熱的で大胆なものになっていた。

「ふ、」

鼻で呼吸しようとしても、苦しくて息が詰まる。追いつかないほどに、彼の施すそれは刺激が強い。

舌で下唇を舐め上げられて反射的に薄く唇をひらけば、中に舌が割り込んでくる。

そこからはいつかのように口腔内をひたすら貪られた。

どん！と和が遥の肩を叩けば、遥は名残惜しそうに和の唇を軽く食み、触れるだけのキスをして離れば、和をぎゅ、と抱きしめる。体がねじれて少しバランスを崩した事で、遥はより一層和をその手に抱き込んだ。

肩で息をしながら、和は遥を睨みつける。

「な……んで、そう、見境が……」

「今はふたりきりなんだからいいでしょう？」

「……もちよっと軽く済ませられないの。」

「和、顔めちやくちや可愛い……。」

くい、と顎をつかまれ遥と顔を合わせるように上向かせられて、

火照っていた顔がより一層赤く染め上げられた。
その反応にも遥はたまらず可愛いを繰り返す。

「話をきいてよ…。」

「え、ああ、ごめん。……だって理性がとぶんだもん。」

ここで事に及んだわけではないからそんなに怒らずとも。」

「いや、許容しすぎだろ、それじゃあ。和泉君は散々してきたことでもさあ…」

私は初心者なんだからもうちょっと段階踏んでよ。

なんかいつかそのまま押し倒されそうで怖いんだけど。」

「そりゃいつかは押し倒すけど。さすがに外ではしないってば。」

「……外でつてことはやっぱりいつかはするんだね、そういうことを。」

「そりゃあ。和以外とはそうする気もないしいくらだって待つつもりでいるけど…」

なるべく早くはお願いしたいなあ。理性がいつまでもつか正直自信ないんだよね。」

さらつと衝撃発言をされ、和は一瞬固まるも、

まあ、男の子なんだしそらそうだよなー、と他人事のように考える。

「他で性欲処理するってわけには」

「和、怒るよ。」

ぎろり、と遥に睨まれて、失言だったと和は肩を竦める。

「い、ごめん。…でも待たせるの申し訳ないなーと思って。」

だって今まで入れ食い状態だったわけでしょ？辛いんじゃないの。

かといって私、卒業までにすら決心つくかわかんないからさあ。

それで浮気するなつても酷かなと。」

「そつ…お願い、なるべく早く。いっぱい触れてたら慣れない?」

「わかんないけど…そういうものなの?」

「少なくとも羞恥心はだんだん薄れると思うけど。」

なるほど、そういうものなのか。そういえば、抱きしめられるのは慣れた気がする、と

ふと今の状況を思い出してそう結論付けた。

少なくともふたりきりのときにこうして抱きしめられるのは嫌ではない。

あまりやられるとうっとおしいと感じるけれど。

からだを起こして遥から離れば、遥は少しせつなそうな顔をする。和はそれには気付かずに、先程のように壁に背中をあずけ足をのばした。

遥が和の頬に手を添えて、ゆっくりと顔だけ遥に向かせる。

「あと和。ぼんぼんと物を言いすぎ。女の子なんだから。

事情を察してくれるのは嬉しいけど、二度と浮気を容認するようなこと言わないで。」

いっておくけど、俺は和が浮気を一度でもしたら赦さないから。」

「…別れるってこと?」

「まさか。絶対離さないって言ったでしょう?」

じゃあ、赦さない、とはどういう意味なのだろうか。

わからないと首を傾げれば、遥はにっこりと微笑んだ。

「二度と外に出してあげない。」

その言葉に、和はまじですか、と凍りついた。

別段、自分が浮気するなどとは思っていない。

それは遙を好きだからというよりも（もちろんそれもあるが）、和がそこまで他人との関係にたいして情熱を持ってないと思うからだった。

そんな労力がある面倒な事、なぜすすんでやらねばならないのだろう。

「まあ、しないけどさあ…発言が怖いよ。私だって別に浮気してほしいわけじゃないし。」

「だったらそれでいいでしょう。俺だって浮気なんてするはずないんだから。」

にっこりと笑うその顔が怖い、と思いつつ、和はこくりとうなずいた。

それを確認すれば、遙は和の頬から手をはずし、そのまま和の頭を撫ではじめる。

和がそれにたまらずうつとりと目を細めだしたので、遙はふ、と笑った。

「和…なんか、猫みたいだよ。拾ってきて飼いだめた猫が慣れてくれた感覚というか。」

「ああ…犬か猫かっていったら猫っぽいと言われたことあるけど…」

しかしその例えは、言い得て妙な気がしてしまうのが複雑だ。

気持ちが良くて抗議する気になれない。

「撫でられるの好きなの？」

「ん？んーん…」

少しはつきりしない口調で和が遙の言葉を否定する。

頭が若干、ぼんやりとしているようだ。

遥はその様子にしょうこりもなく可愛いな、と考える。

しかし目の前の彼女は、それこそうつとりした様子で目を瞑っているのに

好きではないとはどういうことだろう、と頭に疑問符が浮かぶ。

「違うの?」

「撫でられるの自体が好きなのじゃない……」

「え?」

「なんか、和泉君のこの行為が気持ち良くて好き……」。

他のひとに撫でられるのは別になんとも思わない。」

その言葉に、遥はぴた、と動きを止めた。

和が手は置かれた状態で停止していると気が付いて、ゆっくりと目を開けた。

「…終わり?」

「…っあああもう!!!」

遥が和を思い切り引き寄せて、たまらないとでもいうように和をかき抱いた。

その行為に驚くもどこかぼんやりしていた思考を回復させるのに時間がかかった和は

ほぼ無抵抗で受け入れる。

次の瞬間には、またも遥が口付けをしていた。

はじめから手加減することなく、ゆっくりと刺激を与えられた先程よりも

だいぶ乱暴に口腔内を弄られた。

水音が響き渡り、和の喉から鼻にかかった声上がる。

舌を思い切り吸われれば、体の芯が震えるのがわかった。

「ん……うっ……っふ」

なんとか抗議しようとしても、

おもいきり抱き潰されて口腔内を蹂躪されているのではどうしようもない。

途方に暮れてしばらくそれを受け入れていれば、やっと遥の唇が離れた。

まるで全力疾走したときのように、和が呼吸を荒くする。

「……………っ」

なにも言うことさえできずに、和が遥をぎろりと睨みつければ、なぜか遥も和のことを少し険しい顔でみつめていた。

「あのね、言うておくけど今のは和が悪いんだよ！可愛すぎだっば……」

ああもう！と遥がまた和を抱きしめるので、和はわけがわからなかった。

自分は何か変なことを言ってしまっただろうか。

「和、好き。大好き。」

「？ありがとう……？」

わけもわからず、とりあえず遥にお礼を言ってみる。

いまだ落ち着かない様子なので、和は遥の背中に手をまわしてさすってみた。

「これからも、いっぱい撫でてあげるね。」
「いや、そんなしなくていいよ。」

そこまで中毒なわけではない、と和は軽くふきだした。
遥はそれに不満気な声をあげる。

「そこは嬉しいって笑うところでしょう？」
「わーうれしい。」
「棒読み……。」

今度はがっくりとうなだれるので、男心は複雑だねえ……と心の中で
呟いた。

先程の自分の発言を反芻してみても、いまいち遥がこうなった原因
がわからない。
頭を撫でられるのが好き、という発言のくだりだろうとは思っただ
が。

そこまえ考えたところで、気になった目の前の問題に和の頭の中は
切り替わってしまっ。

「……………和泉君、そろそろ離してくれないだろうか。」
「ええー、もうちょっとだけ。」
「でもそろそろ予鈴が鳴りますよ。」
「ん……………」

いかにも渋々、といった風情で遥がのろのろと和を解放した。

「行くっか。」
「……和って、切り替えが早いよね。」
「そう？逆に和泉君は変わらなすぎて困るけど。」

つれないなあ、とこぼしつつも、遙は屋上の扉を開いた。

「…別にふたりきりのときは許容してるんだし全然つれなくないと思うんだけど。」

「さらっとやられると本当は慣れてるんじゃない、と錯覚しそうになるよ。」

苦笑して遙がそう発言すれば、和はふむ、と顎に手をやる。屋上に続く階段を下りつつ、そういうものかと和は考える。

「……元彼がいたとしたら、どうする？」

「は!?!」

足早に階段を下りていくと、猛スピードで遙が追いかけてきた。その様子に和はふきだしそうになる。

廊下で隣に追いついた遙の足を、おもいきり和は踏んづけた。それに遙はうめき声をあげる。

「なんもかんもあんたが初めてだっつーの。ひとを経験豊富みたいに言うな。」

この歩く女性ホイホイが。」

ケツと吐き捨ててやれば、遙が顔色悪く和の後を追う。

「な、和!ごめん、ちょっと不安で言っちゃっただけで!」

「だから情緒不安定な恋する乙女かてめーは。どうしろっちゅーんじゃアア?」

「ごめんごめん本当ごめん!怒らないでー!」

和いいい、と情けない声をつしるからあげられれば、和は内心大笑いしていた。

相変わらず、彼は打てば響く。

「授業遅れるよーばいばい。」

「和」

「放課後、さつさと教室来ないと置いてくからね。」

私はじっくりゆっくり本をみるのが好きなんだから。」

「…ついてっついていいの？」

「行きたくなかつたら来なくていいよ？」

「授業終わつたらすぐ行く!!」

満面の笑みを最後に、遙は自身の教室にむかっていった。

気のせいだろうか、彼の後姿にしっぽがみえるのは。

『どこの犬だ、あれ。』

くつくつと笑いつつ、和が席に着く。

クラスメイト達は相変わらず翻弄してるなあ、とふたりを観察しながら思う。

「しかし、学園のアイドルを手の平で転がすとは…底知れないよね。」

教室内の誰かの呟きに、クラス全体が心の中でうなずいた。

それには託斗すらも混じっていたことは、クラスの誰も知ることはなかった。

第三十一話「無自覚は時として罪」

心穏やかに過ごせることが増えた、と最近思う。

遥の言動に困ることも多々あれどそれでも平和だ、と和は感じていた。

10月に入り、付き合ってからもうすぐ三週間が経過しようとしているが

特に危機があるわけでもない。順調かはわからないが。

何回か休日に映画を観に行ったりしたし、家に遊びに来たりもした。遥の家はそういえばどんな家庭なのだろうと過ぎったりもしたが、彼のほうから話したりしない限り、訊く事はするまい、と和は考える。

踏み込むことは、和にとってあまり好むべき行為ではなかった。

もちろん恋愛において相手のことを知りたいという心理は当然働くだろうし、

世のカップルのそういった考えを否定する気はない。

けれども自分は、あまり自身のことを根掘り葉掘り訊かれるのは好きではなく、

いっしょにいればそれこそそういった面は特に気にならない。

訊かれれば答えるのはかまわない。嫌な事柄でなければ。

和には、遥がなにを訊けば嫌がり、なにを訊けば赦すのかの判断がつかない。

それらを吟味してまで彼に質問する価値を、和は感じなかった。

よって、和はいまだ和泉遥のことをあまり知らないのである。

「和ってなんていうか…男前よね。」

梓のその問いに、和はそう？と首を傾げる。

今は放課後で今日は図書室の解放日なのであるが、
なにか本を読みたいからおすすめて欲しいと言われた和は
二つ返事でもちろん、と答えたので、今ふたりは図書室へと向かっ
ている。

「普通、相手のそういうところって気になるものじゃない？」

「そうかなあ……？別に気にならないけど。」

「和って、記念日とかも気にしなさそうよね。」

「記念日？なんの？」

「なんのって……よくあるじゃない、付き合ってから毎月記念とか。」

「は？なにそれ。……ていうか、付き合った日っていつだったけ？」

梓が面食らってしばらく和の顔をみつめていたが、和は結局思い出
せなかつたらしく

まあいいか、と言って再び廊下を歩き出した。

「……ねえ、クリスマスとかどうするの？」

「どうするの？って……毎年家族と過ごすけど……？」

「え、まさか今年もそうするつもり！？」

「当たり前でしょ、16年間、それが習慣なんだから。」

「でも恋人ができた今年は違うでしょう。」

梓のその問いかけに、和はぱちぱちと目を瞬いた。

「そのときまで付き合ってるかなんてわかんないじゃん。」

「……和………付き合ってたと仮定してよ。」

言いたいことはたくさんあったが、とりあえず一番質問したいこと
を梓は最優先させた。

さらりと二ヶ月先には別れているかもしれないなどと口に出す彼女は果たして本当に遙のことを好きなのかと少々疑いたくもなる。

「んー？家族と過ごすけど。」

「どうして？恋人と過ごすのが普通じゃない？」

「だって私は家族と過ごすって決めてるし、相手にそれを押し付けられても困るよ。」

その日いっしょに過ごさなきゃいけない法律があるわけでもないんだし。

「うちは姉が一人暮らしだし、父も出張が多いから家族行事はけっこう大切にしてるの。」

「ああ、そうなの……でも、それ、遙に言っておいたほうがいいと思うわよ。」

「なぜに？むこうになんか言われたら話すよ。」

目の前にいる少女に、普通とか常識とかいう尺度でなにかを言うのは無駄らしい。

梓はひとつため息をつけば、なんだか馬鹿馬鹿しい気がしてくる。

これ以上、ふたりに首をつっこむ義理もないのだしまあいいか、と開き直った。

「ねーところでさあ、なんで本読みたいなんて言い出したの？」

和の言葉に、梓が内心どきりとする。

勘の鋭い彼女に、何事も悟られないようになんとか平常心を保とうとなんでもないような声音で言葉を紡いだ。

「和がよく本を読んでいるのが気になったのよ。」

前に借りたCDもすごく素敵だったから、和の趣味をもっと知ってみたいと思って。」

「あ、本当に気に入ってくれたんだ。なんか嬉しいな。」

にこにここと笑う和をみれば、梓は多少の罪悪感を覚えた。それでも、先程の言葉は決して嘘ではない。

しかし次の瞬間には、罪悪感を抱いたお人よしの自分を後悔することとなる。

「……まあ、それだけじゃないはずですけど？」

にや、となんとも嫌な笑みでこちらを流し目で見られれば、梓は反射的に顔が赤くなった。

「な、」

「あらあらわかりやすく可愛いですこと。あいつが好きなジャンルの見繕う？」

それとも梓さんが好きそうなヤツのがいいかな。」

あいつ、とは誰をさしているのかなんて、わかりきっている。それなのにあえて名前を出さないその意地の悪さに梓は苛立った。

「和！もうほんつとにあなたはいい性格してるわね！」

「誉め言葉だね。」

にっこりと微笑まれて、で、どうするの？と促されれば梓はぼそりと呟いた。

「私は普段、本を読まないわけでもないから…彼の好きなジャンルのが読んでみたいわ。」

「おっけい。じゃあ図書室内ではお静かに。」

目的地に着き、和が扉に手をかけて悪戯っぽく微笑んだ。
なにか文句を言っただけでやりたかったのに、と内心で悔しがるも、
きつと彼女以上にうまい皮肉など思いつくはずもない、と次にはた
め息をついていた。

「あ、今日は笹森さん。」

「高橋君。ははははは、一言余計です。」

扉を開き受付をみれば、定番の高橋がいた。

和は今日、梓と行動を共にしているため、眼鏡着用の一本縛りだ。

「…あの男子、仲が良いの？」

「ん？うん、まあまあかな？」

「山田さんの正体を知ってるみたいだけど。」

「ああ、まあね、一回みられてるから彼には。」

「……遥は知ってるの？」

「知ってるよ。って梓さん、なんか変なこと思ってるね、彼女いるよ高橋君。」

「なんだ、そうなの、つまんないわね。」

途端に拍子抜けしてあからさまにがっかりした梓に和は苦笑しつつ奥の本棚へと案内した。

「あれはねー、私と違ってそんなに雑食じゃないんだよね。」

「らしいっちゃらしいんだけど、ミステリーが好きなんだよ。」

「あら、確かにそのままね。」

「でしょう？だから無難なところていくとやっぱり有名なこのへんなんだけど…」

「私はね、古いのそんな読まないから、オススメはこっちな。」

「あ、これドラマになったやつね？」

「そうそう、そのひとは私も好きかなー。託もけっこつ読んでるよ。」

はじめて具体的に名前をだされ、梓はびく、と反応を示す。

「どうしたの？」

「…なんでもないわよっ」

和は少し意外でまじまじと梓の顔をながめてしまう。

実に彼女はわかりやすく可愛らしい反応を示すものだ。

本当は特別なにか言おうなどは思っていないかったのだが

先ほどからあまりにも素直に反応がかえってくるため、どうにも加虐心をそそられてしまう。

思わずにま、と微笑んだそのとき、戸棚の奥でこちらをみている生徒がいた。

「あれ…山田先輩？」

「！」

その言葉に反応して振り向けば、本の整理をしている時任だとわかった。

和は思わず眉を寄せる。

「その格好……どうしたんですか？まるで、」

続きを話そうとして、なにかに気付いた時任は、はっとして目を見開いた。

その様子に、和はため息をつく。

「…和泉遥さんの彼女、って、山田先輩なんですか？」

「うーん、何度も会っているとやっぱり見破られ率が高いみたいね。」
不満気な声をあげつつも、和は貴重なデータがとれた、と内心思っていた。

「梓さん、とりあえずこの本がいいと思うから、借りておいでよ。」
「……え、ええ、そうするわ。」

言外の意を察してくれる相手は、こういうときラクで助かる。
梓が行ったことを確認し、和は小さくため息をつく。

「ごめんね、お察しの通り。山田って偽名で本当は笹森って言うんだけど。」

「どうして?」
「んー、和泉君が目立つでしょう?で、オプションで私のこの姿も最近どこに居てもひそひそ言われたり騒がしいのがうっとおしくて、だからいっしょじゃないときはこうして別人を装ってるんだよね。」

そう言いつつ、和は髪と眼鏡を解除すれば、
時任の目は驚きでますます見開かれていった。

「だから、申し訳ないんだけど、時任君も合わせてくれると嬉しい。こつちのときは今まで通り山田と呼んでもらえると助かるんだけど……。」

だめ?と手を合わせつつ、和は時任に困った顔をむけた。
その様子をずっと呆然とみつめていた時任は、ようやく覚醒し口を開いた。

「かまわないですけど……」

「本当？よかったー、ありがとう。」

笑いながら、和はまた眼鏡をかけて髪の毛を一本に束ねる。

「そんな、どうしてやま…笹森先輩だけが苦勞を強いられてるんですか？」

「え？いやだな、これは私がしたくてしてる措置なんだよ。」

「でも、陰で色々と言われてるじゃないですか！中傷めいたこと」

「まあねえ。でも私は別にそれ気にしてるわけじゃないから。」

つつか言われて当然でしょ？あんな顔が異様にいいひとの隣に私見たいな平凡な女がくつついてるんだから。」

まあ、実際にくつつかれてるのはどっちかという自分ですが、と心の中で自己つつこみを入れる。

「でも、傷付いてるからそんな事をしているんじゃないんですか？」

「違うよ。私はね、目立つのが嫌いなだけ。騒がれるのが純粹にうつとおしいだけなの。」

そんなことでいちいち傷付くような細かい神経してないよ。」

「だけど「時任君。」

言い募ろうとする時任に、和は声でそれを阻む。

にっこりと微笑めば、和はその表情で目の前に立ち入り禁止の看板を置く。

「不快ならば別にバラしてくれてもかまわない。これは強制じゃないからね。」

よって、君にこれ以上私達の事情に首をつっこまれる謂れはないよ。」

「笹森先輩……」

時任が、瞳を揺らし傷付いた表情をしたのがわかれば、和はおもわず苦笑した。

こんな風に、踏み込まれるのはどうしたって苦手で、つい厳しい口調になってしまったことに和は少々、反省した。

「ごめんね。…心配してくれてありがとう。気持ちだけでもらっとくよ。」

ふりかえって、ひらひらと手だけで時任に別れの合図をおくれば、和は梓をつかまえて図書室をあとにした。

これ以上ここにいると面倒になりそうだと判断したからだ。

扉を静かに閉めた後、梓にむかって和は謝罪した。

それに梓は首をふりつつ、疑問を口にした。

「和…なんかこみいつていたみたいだけど、良かったの？」

「ああ、大丈夫。まあ、万が一バラされちゃってもいずればそうなると思ってたしね。」

「あの子…下級生なのね、先輩って呼ばれていたから。」

「うん、とあるきっかけで少し親しくなっただけど…」

やっぱりあまり誰とでも話すものじゃないね。悪い子ではないと思うんだけど

ちよつとキャラ的に面倒そうだなあ。苦手というか。」

「…キャラクターの問題かしら。」

「え？なに？」

ぼそりと呟いた梓の声は、和には届いていたなかつたらしい。

苦笑しつつ梓がふるふると首を振れば、和は少し不思議そうにそう？とうなずいた。

ふたたりを観察していたわけではないのでわからないが、あの下級生の目はどうも、なにか含んだものがある気がしてならないと梓は思った。

和に対して、なにか特別な感情を抱いているのではないかと。けれど現時点でそれに確証を持てるほど自信がない。

本人に釘を刺そうにも、不確定要素が多いこの状況ではそれはためらわれた。

せめてもう少し、自分の事になると途端に鈍くなる彼女に自覚を持つてもらえれば

こんなに心配にはならないのであるが、と梓は心中で密かに苦笑いを浮かべていた。

遙にメールを打ち、昇降口で待っている旨を伝えれば落ち合った遙は驚きに目を丸くしていた。

いつもなら閉館時間までそこに居座るはずなのに、そうしなかった和の行動に遙は驚いていたのだ。

梓がいつしよにいるとはいえ、それならば梓だけ途中で帰ればいいだけの話で

和がこんなにも早く図書室を出てくる理由にはならない。

「どうしたの？こんなに早くに。」

当然の疑問を口にすれば、和はどう答えたものかと考える。面倒臭かったから出てきたわけなのだが、どうしたものか。

「ちょっとね、図書室で和泉君のこと根掘り葉掘り訊かれそうになったから」

面倒で逃げてきちゃった。」

嘘ではないからこの説明でかまわないだろう。

そう思っていたら隣にいる梓がちらりとこちらをみた。なんであるうか。

「え、そうだったの！？ごめん、和。俺のせいだね…」

「いや、別にいいよ。梓さんの本は借りれたし。これから自重してくれれば」

「あははは…」

にっこりと微笑まれてたじろぐ遙。

ふたりの仲睦まじい様子を見て、梓は自然と笑みを浮かべる。

きつと、そんなに心配しなくても大丈夫だろう。

もしも告白なんてことになっても、彼女はきつと断るはずし、いつも困難を困難とは思わせないほど軽やかに解決する彼女だ。

自分が不安になる必要なんてきつとどこにもありはしない。

そう思い直せば、梓の心はどこか軽くなっていた。

次の図書室解放日、和はひとりでおとずれた。

しばらくはあまり来ないほうがいいだろうかとも思ったが、

時任がこの先自分をどうするつもりなのかは若干気になった和は、とりあえず様子見もかねていつも通り図書室へと向かうことにしたのだ。

彼の当番の日ではなくとも、

自分をみてひそひそと囁かれたりすれば時任が話したとわかる。

どちらでもかまわないとは言ったものの、

やはり黙ってくれていたらありがたい、と思っていた。

ひとりで向かう今日は山田さん仕様になっている。

がら、と扉を開ければ特に今までと変わった様子なく、和は素通りの存在だった。

一瞬ほっとするも、一週間程は様子をみないことにはわからない、と和は思う。

『とりあえず、このまえ読めなかった本もってくるか』

油断できない状況といえども、

とりあえずの安心感を得られたことで和の心は少し弾んだ。

足取り軽く奥へと足を進めようとしたそのとき。

何者かに腕をつかまれ、進むことがかなわず和の体が、がくんと揺れた。

驚きに目を丸くしてうしろを振り向けば、そこには時任が立っていた。

「……山田先輩。」

ぼつ、と呟かれたその言葉に、彼は黙っていると決めたのだろうか
と訝しむ。

しかし彼の追い詰められたかのようなその表情が今はとても気になった。

「時任君？どうかした？」

慎重にゆっくりと言葉を紡ぐ。

なぜだか彼の精神がどこかぎりぎりの所に立っている気がしてならない。

どうして苦渋に満ちたかのような顔をしているのだろうか。

つかまれた腕を時任は一度ゆるめるも、和の声に反応したのかももう一度強く握りなおした。

痛みに一瞬和の顔が歪めば、今度こそ時任はその腕を解放する。

「すみません…あの、お話したいことがあるんです。」

「かまわないけど…ひよっとしてここだとまずい話？」

その和の問いに時任は無言でこくりとうなずいた。

和がそう、と返事をし、一瞬の逡巡をすれば時任を連れだって図書室を出る。

「で、どこに連れてくつもりだったの？」

「え、ああ…すみません、あまり考えてなくて。どっちかの教室行きませんか？」

「かまわないけど。じゃあ、時任君のクラスに行こうか。」

時任が了承したので、ふたりは一年の教室がある三階へと足を運ぶ。

なんとなく自分のクラスを知られると面倒そうだと思ったが

ひよっとする時任はもう自分がどこに所属しているのかを知っているのかもしれない。

ちら、と時任をみれば先程とは多少、違う表情に思えた。

緊張しているようだがどこか決意を秘めているような顔。

それにしてもこの後輩はなんとも心が読みやすい。

顔に出やすいとよく言われていそうだが、和は内心想っていた。

「早く席替えしたいです。」

教室について自分の席にむかう時任が示したのは、

教卓まん前のある意味おあたり席で

苦笑しつつそこに座る彼をみて和はおなじ笑みでかえした。

とりあえず時任の隣の席を拝借して和も腰をおろす。

「…それで、話っているのは？」

本題にさっさと入ってしまったかった和は座って間もなくそれを口にした。

「あの、…和泉遥さんのことなんですけど。」

「まあ予想はしてたけどそれはこの前終わった話じゃなかった？」

一音低くなった和の声に、時任はびくり、と一瞬震える。

図書室でなにか騒がれれば具合が悪いと思いつつここについてきたが的中してほしくなかった事がもろに当たってしまった和は頭痛を覚えた。

これ以上、彼はなにを話したいというのだろう。

正直いって、ここまで土足で踏み込まれるのは不愉快だ。

「確かに、俺には関係ないのかもしれませんが。」

余計なおせっかいだっていうのも承知してます！」

「そこまでわかってて言うの？…まあいいや、一応聞いてあげるからどうぞっ。」

呆れ顔になった和に少しむっとした表情で時任が幾分、声を高くする。

「和先輩、遊ばれてるんじゃないんですか!？」

「……ちよっと、なんで下の名前で呼ぶわけよ？」

後半の言葉はとりあえず捨て置いた。

考えてみればこのテの指摘を今まで誰からも受けなかったほうが不思議だ。

いくら親しい知り合いがいずとも、すれ違い様に囁かれたりとかもそういえばない。

たいていが自分が彼の隣にふさわしくない、とかそういう言葉だ。

そのたびに遥がいちいちキレそうになるのでむしろそちらのが大変なのである。

まあ、ふさわしいふさわしくないってなにをもってそう言うのかは人それぞれなわけで

自分だって前はそう思っていたわけなのだからそういう言葉を責められない。

ぶっちゃけ、自分だって

いまだになんであんなに好きだと言われるか理解できないのだからかといって、私もわかんないですー、なんで私なんか好きだって言うんだろー？なんて

言葉にしようもんなら喧嘩売ってんのかこのアマ、状態だ。

『でも執着のが近い気がするんだよねー、彼の場合。』

過ぎた言葉に和がくすりと微笑めば、時任は不思議そうな顔をす

そうして、そういえば会話の途中であった、と思い直す。

「時任君？私は君の下の名前も知らないし、君にそんな風に呼ばれるのも違和感ありありなんだけど？」

「学まなぶです。俺は呼びたいから呼ぶんです。」

…なんとなく、昔の誰かを彷彿とさせるのは気のせいだろうか。こちらのが色々と未熟さが漂うが。

「…とりあえず話が前に進まないからそれは置いておこう。それで遊ばれてるだっけ？」

「告白したのって、和先輩からですか？」

この尋問めいたやり取りはなんなのだろうか。隠していた不快感をあらわにしようと、和は思い切り眉間に皺を寄せた。

「関係ないでしょう。それを訊いてどうするつもりなわけ。」

「和泉遥みたいな男を、先輩が好むと思えません。」

『ついにはフルネーム呼び捨てかよ。』

心の中でつつこんで、とりあえず関係ないだろうと何度も一蹴しても彼は満足しないし話を切り上げないということも悟った。

しかしたからといってなぜ自分がこうも部外者に話をせねばならないのか。

「あのさあ、さつきから。なんの権利があつてそんなこと訊くの。あんた部外者でしょう。私は他人に自分のことを探られるのが大嫌いな。」

はつきり言ってさつきからの質問は全部、不愉快。」

その言葉に時任の瞳が揺れる。けれども卑怯なのは彼だ。

「もしも私から情報を引き出したってんなら相応の理由を話さない。」

なんでそんなことを訊きたがるのかがまずわからないのに話せつて理不尽でしょう。

納得する事情なりなんなりがあるんなら

私だって鬼じゃないんだから答えないことはない。」

「え……！」

和のその言葉に、今までになく時任がうるたえた。

やっぱりな、と和は心の中でうなづく。

彼には特別な理由なんてありはしない。単なる野次馬根性でこんなことをしたのだろう。

もしくは親切にしてもらった恩返しといったところか？

「和先輩は……ずいぶん人が悪いんですね。俺の気持ち知っててそんなこと言うんでしょ？」

「は？なんの話よ。」

まったくわからない、といった風情で和が時任をぎろり、と睨みつけてやれば

目の前にいる時任は今や顔を真っ赤に染め上げ瞳を潤ませていた。

その表情は、何回もみたことがある。

和は、自身のことになると鈍い。

けれどもそれは経験がなかったからに過ぎなくて、彼女は学習し吸収も早い人間だ。

だからなのだろう。

いつからか何度となく遙によって与えられたその表情の意味を、
彼女は半信半疑でも察することができた。
うそでしょ、と心の中で唱えれば、時任がまっすぐにこちらを射抜
くようにみつめた。

「俺は、和先輩が好きなんです。」

モテ期でもきてるのか。

だったら高校生活中にぜんぶ終わらせてください、と和は誰にかわ
からないが祈っていた。

「えーと、ごめん、ぜんっぜんわかんなかった…。」

先程の勢いをなくし、狼狽する和をみて、時任が目を丸くする。

「先輩、鈍すぎ。」

「一部だけだよ、察しが悪いのは。」

大前提として自分に好意をむけられるってのがまずありえない。」

「なんでそんなこと思っんですか？」

「はははは…えーと、まあ知ってると思うけど私、和泉君と付き合
ってるから。」

なんとなく託斗のときはまた違う感情が和の中で渦巻いた。

よく知りもしない相手に告白とか、よくできるようなあ、と思う。

なによりも自分みたいな女、そんな簡単に好きとか言っっては駄目だ
と思う。

かなりの珍味だと自分自身で自覚している。

ひよっとすると猛毒入りで、解毒剤が必須なんじゃないかと思うく
らいだ。

「ですから、和泉遙に遊ばれているんじゃないかって言ってるんです！」

「んー、なんでそう思うの？」

「なんでって…あのひと、すごく派手じゃないですか。」

和先輩とはあきらかに住む世界が違います。

それなのにいっしょにいるのは不自然ですよ。」

あまりにもテンプレートなその物言いに、渴いた笑いしか起こらない。

ああ、なにか新しい指摘でもされれば少しは面白かったのに。

「外側からみればそうだろうねえ。でもさ、

内からみた私たちの世界なんて君は知らないでしょ？」

「それは…でも、浮気とか！心配じゃないんですか！？」

「浮気ねえ…別にしたらしたでいいけど？別れるだけだし。」

そもそも和泉君そこまで血気盛んでもないけどね。

まあ知らない所でやってんのかもしれないけど。」

「ほら、和先輩だって和泉遙を全然信用してないじゃないですか？」

「んー…だって100%浮気しないっていうのはちよっと驕りじゃないかなあ。」

私は彼が誠実であるかぎり私も誠実でかえしたいと思っているしもしそうじゃなくなったら私も相応の態度に出ると考えているだけ。今は別に、ごちゃごちゃ心配する心がないくらいには彼を信用していると思うよ？

もしくは気にならないくらい好きとか？柄じゃないけどねえ。」

ふ、と苦笑する目の前の女性に、時任は少したじろいでいた。

面白いひとだな、と思ったし、本を読む姿がきれいだ、とも思った。けれども目の前に対峙する彼女は、それだけではないなにかを感じさせる。

「あの、告白って先輩から？」
「さつきも訊いたね、それ。いいえ？向こうから。」
「じゃあ、何ヶ月も付きまとわれた末に付き合い始めたって本当な
んですね…。」
「よく知ってるね。最終的に逃げ場がなくなっちゃったのは、まあ、
事実かもしれないね。」

その言葉に、時任の双眸がざらりと不穏な光をばなした。

「無理やり付き合わされているというわけではないんですか？」
「誤解するような言い方だった？違つよ、あくまでも私の意志で。」
「…でも強引にせまられたりしたんでしょう。」
「ん？うーん、まあ…。」
「あんな派手なひとが…先輩の傍にいるのはよくない。」
「え？」
「先輩の世界がいつか壊される！」

まずい。

そう思ったときには遅すぎたことを、和は次の瞬間に痛感する。
けたたましい音が教室中に響きわたる。いくつかの椅子と机が乱さ
れた音だった。

気付けば、和は心の中に入れたこともない先程までは苗字しか知ら
なかつた後輩に、
教室の床に押し倒されていた。

「ちよつと、なにをするの、離しなさい！―！」
「あの男は先輩にふさわしくない…。」

「時任君！えと……ま、学くん！！」

下の名前で呼んでみても、彼は無反応である。

『まずい、完全に目がいつっちゃってる。』

たらりと背中に冷や汗をかいて、あの騒音にも誰もかけつけてこない事実には蒼褪める。

先程から、押し倒されて彼によって床に押し付けられた手首から鳥肌がとまらない。

触れられた先からぞわぞわという感覚がどんどん広がっていく。気持ち悪くて、吐き気がしてくる。

時任の舌が、和の首筋に触れて、最大級の嫌悪感が襲った。

気持ち悪い！

気持ち悪い！

気持ち悪い！

情けないことに声が出ない。せめて力を入れて抵抗したいのに震えがとまらない。

痴漢に遭ったときの感情がフラッシュバックする。

『和泉君……！！』

愛しいひとの名前を呼んでも意味がないとわかっただけでも繰り返して彼の名を心の中で叫び続けた。

第三十一話「無自覚は時として罪」(後書き)

ブログにて、和と遥の短編を一本あげました。
よろしければご覧くださいませ。

第三十二話「恋人記念日」

「先輩…好きです、俺のが、もっと……」

熱に浮かされたような声をあげながら、時任は首筋に口付けをする。何度も何度も聞こえるリップ音にも、どんどん荒くなる彼の息遣いも、

耳を塞ぎたくなるのに両手を押さえられそれができない。

声も音も、すべてがなにもかもが気持ちが悪い。

手足をばたつかせて抵抗したいのに、それが無理でも大声をあげて騒ぎたいのに、

金縛りに遭ってしまったかのようになにもできなくて、あまりの悔しさに和の目に涙が浮かぶ。

ずっと軽く唇を這わせる程度だった行為から、時任は段々と大胆になる。

今度はその舌で和の首から鎖骨にかけてを味わいはじめた。

時折思い切り吸い付かれて、いつかの遥がした行為を思い出せば、痕をつけられてしまったらどうしようとかからだかどどん震えを増して行く。

このまま甘んじて受け入れるのはどうしても嫌だと

なんとか出来ることをぐるぐると考えても、思考は正常に機能してはくれない。

それでも次第に、ひゅう、と喉が鳴り出した。

「い…ずみく、」

なんとか声をあげ、か細く発せられたその音に、時任の動きが止ま

った。

首を這っていた顔をあげ、和の顔を視線にうつし見下ろす。いまや涙はその瞳からこぼれおち、絶えることなく和の頬を流れていく。

虚ろな顔で、どこか遠くをみつめては、口をついたのはたったひとりの名前だった。

「和泉君……」

「先輩……そんなに、そんなに好きなの……？」

無理矢理押し倒されたのは和のほうなのに、

なぜか時任は痛みを耐えているような苦しげな表情で和をみつめていた。

その顔が視界にうつったとき、和は思考が回復する。

こんな風に感情をぶつけられたのは初めてで、あまりにも戸惑いが強い。

けれども彼にこんなに傷付いた顔をされてしまえば、形はどうあれ少なからず真剣に想ってくれていたのだということが伝わってきた。

「……うん、ごめんね。私ね、好きなの、ほんとうに。」

「……あんなに派手なの？趣味とか全然合わなそう。」

「んー、あつちが無趣味だからそれは問題ない。」

「何度も訊くけど、浮気の心配してハラハラしたりとか。」

「今の所、自分に愛情を傾けてくれるのはわかるから。」

「でも、そうじゃなくなっちゃったら……？」

「それはそのとき考えるよ。」

「遊ばれてるだけだったとしても、いいの……？」

先程の勢いもすっかりと消え、今や和の手首は解放されていた。

形としては押し倒されている格好ではあるが、もう彼が自分になにかすることはないと確信すればこんな状態なのに会話を続けてしまう自分は、やっぱり自覚が足りないのかもしれない。

しかし起き上がろうにも力が入らないし、ことに及ばない限りはさっきの嫌悪感にも吐き気にも襲われない。本当に、今の自分のからだは不思議だ。

思考を回復させればどんどん自身の迷宮へと落ちていってしまおうは、

重要な質問に答えていなかったと気が付けば、不敵な顔で微笑んだ。

「それも長い人生のなかで、いい経験になるかもね。」

悪戯っぽい和の表情に、時任は完全に脱力してへなへなと倒れこんだ。

和の上に覆いかぶさってきたので、少々重い。

しかも触れられると条件反射のようにぼつぼつと鳥肌が立つ。

「ちょっと、重いんだけど……」

「もう、ずるいよー先輩……俺もうなんも言えないし……。」

「なにがずるいって。犯罪者なりかけなんだけどわかってる?」

その言葉に、時任が慌ててどここうとすれば、廊下からばたばたと足音が聞こえてくる。

それは確信に近い予感だったが、

その叫び声に和は血相を変えて飛び込んできた相手の心情とは裏腹に、

頭の中でビンゴ!とお気楽にも叫んでいた。

「和!!!」

声の方向にふたり同時に視線をやれば、そこには遥が立っていてヒーローの登場としてはなんとも中途半端なタイミングがしかし彼らしいと和は思う。

なぜか怒りで焼き切れそうな程のみたこともないような形相に疑問符が浮かべば

そういえば、と和と時任がどういった態勢にあるかを思い出す。

手首の拘束は解かれたものの、

時任は和の顔横に両手をつけて和の体を組み敷いており、完全に襲われる寸前です、といった風情である。

おまけに周りの机や椅子の乱れを確認すれば、明らかに合意ではないのがまるわかりだ。

もはや、和以外に大切なものなどないとまで日々感じる彼にとって目の前の光景は赦されるものではなかった。

比較するまでもなくなによりも愛しい彼女が、他の男に蹂躪されようとしているのである。

押し倒されて、そのからだに触れて。

和の顔を見れば、その瞳は涙で濡れ、頬にもその流れた跡がみとれた。

端的に言ってしまうえば、その瞬間、彼は切れた。

ぐい、と男を和の上から引き剥がせば、力のまま乱れた机の方角に叩きつける。

ガシャガシャン、とけたたましい机や椅子が倒れる音がすれば、次にはガツ、となんとも痛そうな音が聞こえて、内心いい気味とは

思ったものの

このままでは誰かがこの騒ぎに気付いてしまつかもしれないし、ともすれば遥のほうがなんらかの処分をくだされるかもしれない。なによりも。

『やばいな、あれ。殺しかねない。』

動かない体をなんとか叱咤して止めようと思ったが、どうやらまだ動かない。

それを待ってれば、時任がサンドバッグになるのを黙認してしまうことになる。

既に二発目を受けた時任の顔は、いかにも痛そうに腫れ上がっている。

瞬間的にあんな風になるなんて、どれだけ強い力で殴りつけたのだろう。

声は出る。ならばそれだけで彼を正気に戻さねばならないがいちばん有効な手段はなんだろうかと考える。

すう、と腹いっぱい息を吸い込んだ。

「遥!!!」

叫んだ和のその声に、呼ばれた彼はぴたり、と動きを止めた。

緩慢な動作で遥が和のほうへと顔をむける。視線が合えば和はにっこりと微笑んだ。

「あのね、力が入らないの。起こして？」

両腕をおもいきり上げて遥の方向へとむければ、慌てて遥がこちら

に近寄ってきた。

なんとも情けない、瀕死のような顔をしているので和は終始微笑みを崩さない。

こんなことで、遙に傷付いてほしくはなかった。

助けが遅れて和が傷付いている、などと思われては、

人一倍好きだと言ってくれ、人一倍自分を心配する彼は、

きっと自分が傷付くよりもずっとずっと痛い思いをしてしまうから。

和とて、普段の態度がどうであろうと、遙のことが大切なのである。

「和…大丈夫？」

「全然平気。力が入らないのは多分、びっくりしちゃったから。」

えへへへー、と言いつつ、遙がゆっくりと壊れ物を扱うのように起こしてくれる。

触れたところから、じわじわと温かいものが流れてくるのがわかった。

ああ、やっぱり彼でなければ駄目なのだと痛感する。

触れてもいいと思うのも、ましてや触れてほしいなどと思うのも、

この男だけなのだ。

その感覚はなんとも不思議で、ひとを好きになるというのは不思議なものだな、と感じる。

「馬鹿。」

そんなことを考えていたら遙にわけのわからない罵倒を浴びせられ、和はおもいきりむっとした表情を作った。

「震えてるじゃないか！それなのに、笑わなくていい。」

「え、」

言われて、いまだに自分が震えていることに初めて気が付く。先程止まったと思っていたのに、遥が来た安心感でまた一気に感情が昂ぶってしまったようだ。

「怖かったんだよね？和は…こういうことに免疫ないから余計だろう？」

「和泉く…」

「遥って呼んでくれないの？」

くす、と笑う遥をみて、和はほつと息を吐いた。

もう、時任を傷付ける気は彼にはないようだ。

次の瞬間、遥がぐん、と和を持ち上げた。この感覚にはおぼえがある。

いつかの保健室へと運ばれる自分を反芻すれば、

他人の目の前でお姫様抱っこをされてしまった事実に着恥する。

「し、しばらくしたら歩けるよ？」

「駄目、一刻も早く俺はここから連れ出したいの。」

ちゅ、という音とともに遥が頬に口付けたのがわかって、

和はますますこの恥ずかしさをどうすればいいのだろう、と心中でおろおろしてしまふ。

「…俺の存在忘れてませんか？」

いてて、と殴られた箇所を指先で確認しながら、時任が声をあげた。それに警戒したのか、遥は和を抱きしめる腕に力をこめる。

遥が思い切り時任を睨みつければ、時任は苦笑した。

「なんか、想像してたのと全然違うんですね。」

…骨抜きにもほどがあるじゃないですか、愛されすぎです、和先輩。

「え、そうみえる？」

「いや、この状況で否定するのどうかと思いますよ、和泉遙が不憫です。」

「…『和先輩』だ？」

予想外に和と時任が気安く話している様子に、低音の呟きと合わせて遙が先程とは違う種類のあからさまな不機嫌顔を浮かべる。

「なんで襲われた相手とそんな親しそうにしてるの。」

「ん？えーと、和泉君が止めにくてくれた数分前に、一応、正気に戻ってくれてたんだよ、時任君。ね？」

その言葉に、すみませんでした、とぼつが悪そうに時任が謝罪を述べた。

「ときとうくん。」

「はいはいはい、不機嫌にならないの、遙君。」

和の言葉に、幾分か遙は機嫌を直すも、まだ納得はいかない様子である。

「でも襲われかけたの本当でしょ？怒らないの？」

「はあ？怒ってるよ。当たり前じゃない。」

「だったら…」

「すぐに止められたけど殴られてる時任君みて悦に入ってたし。

もっと言えば、足音がきこえたときすぐに和泉君だってわかったんだけど

時任君のこととかさなかったのは和泉君にお仕置きされてしまえ、

「思ったからだし。」

うふふふ、痛そうな顔」と心底楽しそうに笑う和をみて、この場にいる男子二名は若干の寒気を覚えた。

「…しかしこんな、抱えられてせりふ言っても締まらないね。」

「駄目だよ、おろさないよ。」

即答で拒否されて、和はため息をついた。

「……和先輩のこと、好きなんですよね？」

「好きだよ？それが？」

「…いいえ、なんでも。」

時任の質問に即答した遙に、時任は小さく首をふった。遙が先程と同じような鋭い双眸で、時任を射抜く。

「二度目はねえからな。今度やったら殺されるって覚えとけ。」

「…肝に銘じておきます。」

時任の言葉に、遙は表情をゆるませ、ふ、と黒く微笑めば、先程の乱暴な言葉遣いを戻す。

「…机と椅子、きちんと戻しておくんだね。」

そう言い捨てて、和の鞆を拾い、遙は教室をあとにする。残された時任の深いため息は、孤独な空間いっぱい広がっていった。

すたすたと迷うことなくどこかへ向かう遙に、和は質問をしなかった。

どの場所にむかっているかなど、階段をあがった時点でわかりきっている。

しかし、人間をひとり抱えて階段をのぼるなど、和には信じられない。

華奢に見えて、ずいぶんと力があるのだな、と考える。

そうして浮かび上がった疑問に、和はなんとなく答えがほしくなった。

「さっき、ちょっとびっくりした。言葉遣い。」

「ん？ああ…忘れていいのに。」

苦笑する遙の顔が至近距離で、和は内心焦りを覚える。

「…あつちがひょっとして地なの？」

「ううん？和といっしょだよ。キレるとああなるの。」

「ああ…そうなんだ、よくわかった。」

自分もどこかが振り切れるとずいぶんと乱暴な言葉遣いになる。

女子としては感心しないようなものだ。

しかし遙も普段の雰囲気柔らかいため、男なのにひどく違和感があつた。

休むことなく働いていた思考のおかげか、それ程に恥ずかしさを感じることもなく

あっさりと屋上に着けば、遙は扉の鍵をしっかりと施錠した。

「ん？どうして閉めるの？」

今は放課後で、誰かが来る可能性はほぼ皆無のはずである。首を傾げる和に、遙はにっこりと微笑んだ。

「誰にも邪魔されたくないからだよ。」

なにをだろっ、と訊かずとも内容はわかる。

わかるが、どこまでで止めてくれるのだろう、と一抹の不安を覚えた。

それでも今の和は、遙の行為を拒否する気にはなれない。和自身、今は遙の手の中にいたいと強く望んでいた。

遙は和をお姫様抱っこした状態で、腰をおろし壁に背をあずけた。今は和を横抱きにした状態ですっぽりと遙の腕の中におさまっている。

少し迷って、和は遙の肩に自身の顔をくっつけた。

左側が遙と触れている状態で抱かれているので、和は左手は自身の膝の上に、

右手で遙のシャツをきゅ、とつかんでいる。

遙は和のその様子に背中から肩にまわしていた右腕で和のからだをゆっくりとさする。

左手は、しばらく涙の跡をたどって頬に触れていたが、数秒で切り上げ和が好きだと教えてくれた頭への愛撫へと切り替えた。

遙の与えてくれる優しい愛撫に、和は揺りかごにいるかのような心地よさを覚える。

恐怖と嫌悪でいっぱいだった心は、みるみるうちにほどけていった。

「本当にね、すごくびっくりしたの。」

「ん？」

目を細めて話し出した和に、遙が溶けるような優しい声で相槌をうつてば

その声に和はなぜだか泣きそうになった。

「和泉君に、こうやって触られるのは好きなのに、

他のひとにされると気持ち悪いだけだから、すごいびっくりした。」

「……………」

「今までなんとも思ってたのに…なんか立て続けに起こったのもあって

すごく実感しちゃったよ…。」

「立て続け…？」

ぽつぽつと呟く和の言葉に、遙は反応するも、

和はどこか思考がぼんやりとしているらしく、遙の疑問は聞こえなかったようだ。

「……………和泉君。」

「うん？」

「誰かがいるときは、これからも嫌だって言っちゃうけど。」

「うん。」

「触られるのが気持ちいいって思うのは、和泉君だけだよ。」

「…！」

「好き……。」

ぼんやりとした顔で、ぼつりと呟かれた言葉は遥の心を揺さぶるには充分過ぎるものだった。

本当ならば、今日は和が落ち着くまでこうしているだけにしようと思はさつき誓った、はずだった。

突然のことだった。

遥が和の顎に手をかけ、くん、と和の顔を上向かせれば、その唇を重ねてくる。

「いず…っ」

突然の口付けに驚いて名前を呼ぼうとすれば、こればかりは学習しない和は何度目になるかわからないその手法で、またも舌の侵入をゆるしてしまった。

逃げる暇も与えられずに、和の舌は遥のそれによって絡め取られ、遥は欲しいままに愛しいひとの一部を貪った。

ゆっくりと舐められたと思えば思い切り吸われ、

和は与えられるままに翻弄され、

羞恥でそのからだを燃え上がったように赤く染める。

激しくなる一方である遥の口付けに、

横抱きにされていた和の体はどんどのけぞっていき、

気が付けば先程のように地面に押し倒されている格好になった。

時任にされているときの嫌悪や吐き気は当たり前のようにまったくなく、

羞恥心と少しの恐怖、それ以上に収まらない動悸をどうすればいいのかわからない。

心臓の音が聞こえてしまうのではないかというくらいうるさくてこのまま自分はなにをされてしまうのだろうという焦りも覚える。

遥の唇が離れたことで、声は自由になったものの、

鼻では追いつかなかった呼吸に、なんとか酸素を取り戻そうとせわしなく息継ぎをしている今は声などあげられそうもなかった。

その間に遥の唇は和の涙の跡をたどり、その舌でつつ、と頬を舐め上げる。

その行為にからだがびくびくと揺れ、過剰な自身の反応に恥ずかしさから

和はきつく瞳を閉じた。

しばらくして涙の跡をすべて拭い終われば、次には耳へと遥の愛撫が移る。

尖った舌先で形をなぞられ、耳裏をねつとりと遥が舐め上げれば、和の口からは甘い吐息がもれた。

「和：どこを触られたの？」

艶めいた声で遥が囁いて、耳朵を甘噛みする。

それに和が声をあげるも答えなければ、もう一度遥が質問を繰り返し今度は耳の中へとその舌を侵入させた。

くちゆくちゆと頭に直接響くかのようにいやらしい音が間近で聴こえれば、

和は羞恥でどうにかなってしまいそうになる。

どうすればやめてもらえるのか必死で考えれば、先程の質問を思い出す。

「く…び、やあふっ！」

答える、と催促しておきながら、遙の唇は愛撫を止める気配がない。こんな状態ではまともに話せないと抗議したいのに、あげる声は言葉にならず、ひたすら甘ったるいいやらしい音になって消えてしまっ。

「首？首に触られたの？」

「ふ…あん…そ、そう…きゃっ！」

「このへん？ここは？どんな風に触られたの？」

「ど…んなふ、て…ひゃ、あ、やっ…！」

遙は和の答えを特に待っていたわけではないらしく、苛立ったような声でどんだん首に舌を這わせていく。

途中、急に肌に吸い付かれれば、和は体を反らし悲鳴をあげた。

「和が、触れていいと思うのは、俺だけ？」

「……そ、う、だよ。」

「和が、触れてほしいと思うのも、俺だけ？」

「…っそうだってば！」

真っ赤にも程がある顔をして、和がしっこい！と叫べば、遙はふ、と小さく笑っ。

そうしていつかしたように和の鎖骨付近に舌を這わせて、一際強く吸い上げた。

その行為の意味がわかって、和は押しのけようと遙の肩に手をおくも、

力がまったく入れられず結局それを受け入れるしかなかった。

「和は、俺のだからね。」

「誰のものにも、なりませんってば……。」

やっと収まった遙の行為にすっかり撃沈して息も絶え絶えな和に嬉しそうな顔をして遙はいつものように、可愛い、という言葉を口にした。

「……今回の事で少しは懲りた？」

「んー……………」

またも体に力が入らなくなってしまった和を、

これ以上床に寝そべっていたんでは制服が汚れてしまうと思い遙がゆっくりと支えて起こした。

膝立ちにさせた和の背中やらスカートやらが汚れていないか確認すれば、

遙は自身の膝の上に和を抱き上げ後ろから抱きしめた。

「……なんでまたこんな態勢なの？もう嫌だよ、変な事されるの。」

「変な事って…失礼な。精いっぱい愛情表現じゃないか。」

「綺麗な言葉にしてみたってばかしたってやることいっしょだし。」

「だからー、女の子がそういうことを言わないの。」

怒らないおこらない、と遙が和の頭を撫ではじめれば、

和はこの行為が好きだと教えなければよかっただろうか少し思うともすれば、自分を懐柔する手段のようにつかわれてしまっているではないか。

「あんまり撫でられるとそのうち飽きるかも……」

悔しさのあまりぼそり、と和が呟けば、遙は手の動きをぴた、と止める。

和が言葉を発することなくいれば、遙はなにを思っているのか彼まで無言になった。

ひよっとして思考回路が面白いことになっているのかもしれないと、和は軽くふきだせば、満足してまた会話を続ける。

「うそうそ、好きだからもっとして。」

「和…その小悪魔発言に俺は翻弄されっぱなしなんだけど。心臓持たないよ。」

拗ねたような困ったような声でそんなことを言うのに、

和の言葉がやはり嬉しいのか遙は頭への愛撫を再開させていた。やっぱり彼は優しい、と和は内心で微笑む。

「そうじゃなきゃ割りに合わないじゃん。和泉君は経験に基づく余裕があるんだしー。」

私はね、おろおろする和泉君が好物なんだよ！」

「ええええ、なにそのサディスティックな衝撃発言…。」

「別にいじめたいわけじゃないよ？」

「いや、同義だって。完全に一致してるよ、意味合いが。」

「別にいつでもどこでもそうしたいってわけじゃないんだよ？」

「こう、悔しいなあ、と思ったときとかね？」

「充分、いつでも和におろおろさせられてるけどなあ…。」

はああ、と盛大なため息をつきつつ、遙が和の肩に自身の顔を埋める。

それに和はくつくつと笑った。

「またまたー。所構わずうつとおしくらいくつついてきたり砂糖にメープルシロップかけたような本当に日本男児ですか、とかつつこみ入れたくなるような言葉平気でぼんぼん放るくせに。そういうとき、どれだけ私がおるおるしてるかわかってる？」

「和…俺への物言いが本当、容赦ないよね。」

まあ…じゃあ、おあいこってこと？」

「そうそう。」

「……………うん、わかった。」

そう言っつて、遙はもう一度ため息を吐いた。

先程とはなにやら種類が違う様子で、和は右肩に乗っている遙の顔をちらりと視線にうつす。

すると気配に気付いたのか、のろのろと遙が顔を起こせば、苦笑してだめ、と呟いた。

「ちよつとこつちみないで訊いて。…上を向かないの。」

真上に移ったその顔の表情がどうしても気になった和が見上げてみれば、

すぐにくい、と顔の向きを戻されてしまう。

そんなに見られたくないならば仕方がない、と和は諦めて耳だけ遙に傾けることにする。

「俺ね、情けないけどずっと不安だった。」

始まりのきっかけを作ったのは全部自分だし、
とととと和の逃げ道を塞いだのも本当だから。」

なんとなく、言いたいことは察しがついたが、
和は最後まで口をはさむことはせずに黙って遙の言葉を訊くことにした。

「和は面倒くさがりだし、ひよっとしたら諦めて付き合ってくれたのかなって。

どうも俺の気持ちは正確に伝わっていないようだったし、しばらく付き合えばそれこそ俺が和を飽きて手放すくらいに思っているんじゃないかとか。

和は…了承はしてくれだし、好きだとも言ってくれたけれど俺が和を好きなようには和は俺を好きだと思ってくれてないんだろうって感じてた。

だからきつと、付き合いながらずっと別れたいと思ってるのかなってずつとずつと絶対に手放したりしないって、ともすれば付き合う以前より

和への執着心でいっぱいになって、繋ぎ止めようと必死になってたんだ。」

きゅ、と少し腕に力をこめて、遥が和を抱きしめる。

遥のその言動に、和は胸がせつなくなつた。

「……気持ちの大きさを考えたら、確かに同じとはいかないかもしれないね。

和泉君の気持ちを理解せずとも自覚できたとき、本当に大きいと感じたから、私はまだそこまで返せないと思う。」

でも、と和が続きを口にしようとしたとき、遥の手がゆっくりと和の頭を撫でた。

わかっているよ、というような優しい手つきで。

「自分以外の男から与えられたっていうのが心底不快でならないんだけど…

できれば和に手出しなんてさせたくなかったし、今日のことは本当

に嫌だったけど。」

思い出したら苛立ったらしく、遥の腕にこめられる力がどんどん強くなる。

それに和が思わずうめき声をあげれば、遥はごめん、と慌てて力をゆるめた。

「あの、私もう大丈夫だよ？」

「うん…本当に変に傷にならなかったんなら良かった。」

それこそあれ以上されてたら、止められてもあいつのこと殺したけどね。」

「…本気でやるよね、和泉君の場合。」

「俺のこと、怖い？」

「あのね…怖かったら今ここでこうしていると思う？」

苦笑いして和が真上を向けば、遥が嬉しそうに微笑んでいた。

そつだよね、と遥が小さく呟けばまた頭に手を置くので、和はゆるゆると顔を正面に戻す。

その素直さがおかしかったのか、遥は小さくふきだして撫でる行為を再開した。

「和が、俺にしか触られたくないって言うてくれたとき。」

「…うん。」

「嬉しかったんだ。おおげさじゃなく、今までの人生のなかで、いちばん。」

もう、嬉しすぎてそれこそ死ぬんじゃないかと思った。」

「なにそれ、そんな簡単に死なないですよ。」

「うん。やっと和が俺のこと好きなんだって実感できたのに、死ぬなんてやだ。」

「…そっか、これを伝えれば良かったんだね……。」

本当に自分は、恋愛方面にあかるくない、と思う。
鈍いを連呼されてしまってもそれこそ仕方がなかるうと納得してしまおうくらい。

「和、好きだよ。」

「……うん、ありがとう。」

「そこは私も、って言うてくれるところじゃないの？」

「あんまり言い過ぎると減る。」

「……………つれないなあ。」

そう発する遥の言葉とは裏腹に、なんとも嬉しそうなの響きが和の心を温かくする。

今日という日こそが、ふたりが本当の意味で恋人になった瞬間なのかもしれない。

言葉を交わしただけでは真にそうはなれないものなのだと、和は実感する。

『でも記念日とかやつぱかんべんだな……』

それとこれとは感覚が別なんだな、とクールな面は相変わらずである和だったが、

それでも自分は恋に酔っていると今このときは素直に受け入れられる彼女であった。

第三十三話「嵐は突然やってくる」

「そういえば、和泉君が駆けつけられたのって
ファンの子使ってたからでしょ？」

「だって本当に、最近和の周りちよつとうつとおしかったから。
和がとつた措置のおかげで余計に心配になって。」

「措置？」

「眼鏡と髪。…俺の彼女だっていう最大級の牽制ができないのが一番辛い。」

笹森和と山田さんが同一人物だって俺としては知ってほしい。
今回みたいなのが二度と起こらないようにね？
じゃなかったら今の格好を封印するか。」

今の和は、時任に呼び出される前は放課後の図書室にいたため
眼鏡と髪を解除している状態である。

「そうだねー、うん、やめようかな、これ。」

「え、そんなアツサリ!？」

素直にきいてくれるとは思っていなかったのか
あまりにも意外そうに遙が驚くので、和は苦笑してうなずいた。

「時任君のことでちよつと懲りた。」

見た目がおとなしくて地味なら、大抵のひとはちよつかい出さな
ってよくわかつたし。

相対的にこの格好でいるほうが面倒みただってわかつたから。」

「ああ、そうそう…そのことでひとつ疑問があるんだけど？」

「え?」

いまだ遙にうしろから抱きしめられている状態の和は、遙の顔をみようとする真上を見上げれば、遙も和を見下ろしていた。予想外に近い顔に一瞬焦るも、瞳が笑っていないことに気付いた和は距離よりもそちらに心臓がはねた。

「『立って続け』ってというのは、どういう意味かな？」

「なんのこと？」

内心、数分前にそういえばそんなこと口走ったな、とばつちり記憶の呼び起こしは出来ているものの、そんなことはおくびにも出さず和はさも、わかりませんが？という態度を示す。遙はそれが面白くないようで、す、とその目を細めた。

「学校外で、なにがあつた？」

「はあ？だから、言ってる意味がわかんないってば！」

「まだそんなこと言うの？今吐けば、ある程度の和の自由は保証してあげる。」

でもね、あくまでも誤魔化す気なら…俺の言う通りにしてもらおうよ？」

「そんな風に脅されたって、本当になんのことかわからないんだもん。」

もうちょっときちんと教えてよ、わかるように。」

内心は冷や汗をたらだらかいている状態なのに、よくもまあこんな声音で話ができるものだ、と和は自分で自分に感心してしまふ。

ひよつとしたら諜報員に近い仕事とか向いてるんじゃないだろうかと一瞬間で将来の自分を想像しかけたが、

…いや、面倒くさがりだから無理だな、と次の瞬間には結論付けた。

とにかく、遥がどこまで知っているのかわからない限り、素直に話すのは得策ではないと感じた。

万が一、痴漢のことがばれたとしても、いくつかの逃げ道は作っておきたい。

「フアンのネットワークは、あくまでも校内限定なんだよ。」

それ以上は彼女達に探らせるのは危ないし。女の子だからね。」

「ていうか、そんな風に利用するのよくないよ…。」

「一応、ギブアンドテイクは成立してるんだよ。彼女達の間で、

俺の写真とか随分出回ってるみたいだし。それは黙認してるからね。」

「

その言葉に、和の心臓がこれでもかというくらい跳ね上がる。

彼女達に一部の写真提供をしているのは他でもない自分なのだ。

恋人になってからも、続けていいものか悩みつつも

なんとなく罪滅ぼしも兼ねてやめられないでいる。

最近はお金をもらわずに無償で提供することが多いけれど

ベストショットになるとあちらのほうが悪く縮して報酬を払おうとするくらいなのだ。

るくらいなのだ。

『どつちにしろ私もたいがいだよね…』

少し遠い目をして自分という人間の在り方を考えれば、

しかし今はそんな壮大なことを思索している時ではないと思ひ直す。

「まあ、これはフアンと和泉君の問題だから私が口出すことじゃないけど。」

それで？」

「…だから、彼女達が情報を拾えなかったんだ。」

ていうことは校外でなにかが起こったことでしょうか？」
「どつしてそう思うの？」

眉根を寄せて和がそう反論すれば、遙はふ、と笑う。

「梓といっしょに登校してた日あったよね。」

その日、和、様子がおかしかったでしょ。」

「え…、そ、そうだった？」

まずい。

まさかピンポイントで日付を当てられるとは思ってなかった。
さすがにこれには和に動揺が走る。

「そうだよ。なんだか元気がなくて、俺にくつつかれても嬉しそう
だった。」

むしろ甘えてくれるというか…今みたいな感じ。」

まずい、これは、ここでシフトチェンジしてしまうべきだろうか。
しかし彼は、どこまで予想をつけている？

「梓に釘を刺されたっていうのも引つかかってたんだけど…
今考えたら梓なりに気を使っただんじやないかなあ。」

俺に隠しておくために、和が平常の心に戻る時間を与えた。

そしてそれは校外で起こって…なおかつ俺に隠したかった。」

「……………」

「ナンパだったら、そんなに隠す必要もないかなって思うんだ。
休日とか気をつけるって釘を刺すくらいで終わるだろうし。」

それよりももっと、俺が和に四六時中つきまとうって言いかねない
なにかが

起きたんじゃないのかなあ、って思った。

梓が釘を刺したのは朝のことだから……そう、通学途中に起こった
てことだね。」

ああ、だめだ。これはもう、隠しても意味がない。

「痴漢に遭ったなんて言ったら、毎日送り迎えするって言いかねないじゃない。」

和のその一言に、遥は深いため息を吐いた。

自分の考えが当たっている確信はあったものの、やはり彼女の口から直接音となって発せられれば彼の内心は複雑であるらしい。

うしろから抱きしめていた遥の腕は、和を一瞬解放したかと思うと和の腰を持ち上げ、向き合う形に和を方向転換させれば和の両頬を遥の手が包み込む。

「どうして言ってくれなかったのかは、わからなくはないよ。でも、俺がどれだけ心配したか、ちっともわかってない。」

なにかの痛みにも必死で耐えているような顔をされれば、和の心はとたんに罪悪感でいっぱいになった。

今にも泣き出しそうな遥の顔を、直視するのは辛い。

「……言ったら、嫌な思いをするだけだと思ったの。」

私がそういうことで嫌な目に遭ったってわかったら、和泉君は私以上にすごく気にするだろうなって思ったから。

今日のこと、ひょっとしたら告白されたくらいしか言わなかったかもしれない。」

和のその言葉に、遥はひとつ口付けをその唇に落とせば、

ゆっくりとしかし力強く彼女を抱きしめる。

「…確かに、和の傍にいれなかったことは後悔すると思う。でも、言われないほうがずっと傷付くよ。俺に出来ない事がなにもないなら

思い出させるだけだし仕方ないけど、そうじゃないでしょう?」

頭を優しく撫でられれば、和の心は安心する。

事情をすべてわかっていて壊れ物のように扱われれば、

自分を心底大切にしてくれているというのがじんわりと伝わってくる。

「…うん、そうだね。こんなに嫌な気持ちひきずらなくて済んだのは和泉君のおかげだもんね。……ごめん。」

「俺も、あまりしつこく言い過ぎたかもしれないね。

自由がなくなっちゃうんじゃないかって思ったんでしょ?」

苦笑して遙が和の顔をのぞきこめば、ばつが悪いという風情で和がうなずく。

遙はやつぱり、と言ってため息をついた。

「……和、せめてしばらくは、俺の申し出を受け入れてほしいんだけど。」

「う…!」

優しくった先程までとは打って変わって、

冷気を後ろに背負った遙の迫力に、ただでさえ分が悪い和はかなうわけもなかった。

「あら？遙君、また来てくれたのね！」
「こんばんは。」

笹森家の玄関で、遙はにっこりと微笑んだ。
あがっていくかという依子の提案を、遙はやりわりと断る。
隣に居る娘の顔は、なぜだか不機嫌そうにむくれていた。

「和。一ヶ月は必ず、家まで送っていくから。いいね？」

「一週間「和？」

「……はい。」

「朝は、いつもより時間が遅くなったら必ず連絡入れること。」
「うん。」

「週末だけ土日はさんで約束忘れたっていう言い訳はナシだよ？」

「わかってるってば！」

「……それじゃあ、依子さん。またお邪魔します。」

「ええ、送ってくれてありがとうね、遙君。」

遙の笑みに依子もにっこりと微笑みをかえせば、

遙は玄関をあとにした。

なにやら事情があるらしかったが、娘の顔をみてても、
おそらくは素直に事情を話してくれないだろうと思われた。

「じゃあ、着替えてらっしゃい。すぐご飯にするわね。」
「うん。」

疲れたようにため息をつく娘の後姿を見送ったあと、
母の依子はひとしれずにんまりと笑んだ。

「あら、おはよう。今日はちょっとお寝坊さんねえ。」
「おはよう和」。土日はよく眠れた？

朝の食卓風景。

なんらいつもと変わらない光景…の、はずだ。

「……お母さん。」
「和ちゃん、トースト焼きたてなのに冷めちゃうわよ？」
「うん、ありがとう。…じゃなくて、あの」
「お弁当、ふたりぶん作ったから持って行ってね。」
「え、いいんですか？なんかすいません。朝ごはんもいただきますのに。」

「あらいいのよー。今日もせっかくなら夕飯食べに来て？」

しばらくは高明さんも出張だから和ちゃんとふたりきりで淋しくて。

「あ、そうなんですか。高明さんて出張多いんですか？」

「そうなのよー。転勤なわけではないからまだ気が楽なんだけど…
彩ちゃんが一人暮らし始めてからはなにかと家が広く感じちゃって。

ふう、と依子がため息をつけば、そうなんですかー、と相槌をうつ
もうひとり。

「和泉君！！連絡もしてないのになんであんたがここにいる！！！」

だんっ！とおもいきり食卓を叩いた和を、依子がこら、と叱る。

一応は謝罪をするも、和はすぐに遙をにらみつけた。

「和泉君。…なんでここにいろの？」

「和こそ。なんで連絡しないわけ？」

その遙の返しに、和は詰まった。

「ま、どうせこんなことだろうとは思っただけだね。

きつと和はいつもより時間が遅くなっても連絡なんかしてくれない
だろうって

最初からわかってたよ。」

「……だって、和泉君は朝弱いって言うてたじゃん。」

「前にも言ったけど単に寝起きがすごい悪いだけ。

それだっていつもの和の登校時間でなければ負担にならないよ。」

「だけど交通費が」

「和。そんなの気にしなくていいって何度も言ったでしょ。

一般の高校生とは比べ物にならないくらい、俺はお金を持ってるか

ら大丈夫。」

「……………なんで？」

「働いてるから。」

「バイトだったらそんなにお金稼げないはずでしょ？」

「割の良いバイトなんだよ。」

どうやら話したからない遥のその様子を見て、

和は観念すればしかたなく遥の隣に腰をおろした。

遥とて自分を無理に詮索することはないのだから、

自分とてそれをやるうとは思わない。

「…で、結局なんでここにいるの？」

「お母さんが遥君にメールしたからよ。」

質問相手は遥のはずが、まったく違う方向から回答がとんできたので和は一瞬固まった。

「は！？ちよ、どういう」

「俺と依子さん、お互いにメルアド知ってるから。」

金曜日に依子さんから連絡もらって事情をかいつまんで話しておいたの。」

「えっ……………」

「和ちゃん、痴漢に遭ったんでしょ？」

私だって娘が心配なもの。遥君の申し出に即お願いしますって言うっちゃった。」

「……………。」

頭痛がしてきた気がするのなぜなのだろう。

和はひくひくとうごめくごめくごめかみを押さえ、一口牛乳を飲み込んだ。

「でも、考えなしに誘っちゃったけれど良かったかしら？」

遥君もしよつちゆう外食じゃあ親御さんになにか言われぬい？」

「ああ、それは大丈夫です。俺、一人暮らしなので。」

「えー！？そうなの！！？」

「うん。なんていうか親がね、ちょっと変わってるというか…」

いわく、可愛い子には旅をさせよ、生活能力を身につけさせたいとか言ってる。

何度も金の無駄だからって止めたんだけどきかなくて。

なら一部を負担させてくれと申し出たんだけどね。勉強に支障が出たらまずいって。」

「甘いんだかなんなんだかわかんないね、和泉君のご両親…。」

「うーん、甘いところは甘いけど厳しい所はとことん、て感じかなあ。とにかく思い込みが激しいんだよ、特に母親？」

「はー…あ、じゃあ、うちの家族みてもあんま驚かなかったのって免疫あったからか。」

「まあ、うちの両親がおかしいのは自覚してるけどね。」

でも和のご家族は素敵だと思っけど？」

「あら、遥君たら！」

「本当のことですよ？」

『もう好きにして…』

あはは、うふふと笑い合う自分の恋人と母親をみれば、

和は朝からどつと疲れるのを感じた。

「にしても、一人暮らしだったんだねえ。」

駅からの電車を待つ間、和と遙は隣り合ってホームに立っている。

先程の少ない時間で遙の新情報を意図せずたくさん入手した和はそれらを頭の中で反芻していた。

高校生男子が一人暮らしとは。まず第一に考える事が下世話な方面であることに

自分で思っておきながら自身に下品な、とつつこんでしまう。

「和、また変なこと考えてたでしょう?」

「え? いやいや、朝帰りし放題じゃんさすが百戦錬磨なんて考えていませんとも。」

「やっぱりそつちか...。」

「否定できないっしょ? でも。」

「.....。」

無言は肯定。和はにやにやと嫌な笑いを浮かべる。

「ザ・遊び人だねえ。テンプレすぎて一周して面白いわ。」

それで私に浮気すんとか説得力ないわー。」

「...したいの? 浮気。」

「え? なんでそんな労力のいることしなくちゃいけないの?

百歩譲って可能性を考えたら浮気じゃなくて本気じゃないと思うけど。」

そのときは和泉君にまず別れを告げるだろうし。
ていうかそっじゃなくて私が言いたいの」

和のその先の言葉は音になる前に封じられた。

なぜならば遙の唇が和のその口を塞いでしまったからである。
触れるような優しいキスではない。

吸い付くような、荒々しいキスを数秒施され、
あらゆる意味で和はそれが終わった瞬間めまいを覚えた。

ふら、と立ちくらみのようなものに襲われ、崩れそうになる和を
抜け目なく遙はその腕に抱えこんだ。

我に返り、さすがにこの仕打ちはあんまりだと思えば
和は目に涙をためて遙を睨んだ。

本当は平手打ちのひとつもお見舞いしてやろうと思っていたのに、
遙はそれを予見してか力強く和の腕ごとその体に閉じ込めてしまっ
ている。

「…ひどいよ、自重してってあんなに言ったのに！

こんなところで「ひどい？」

「い、和泉く」

完全に怒気を全開にした遙が、和を思い切り睨んでいる。
それに驚いて、和は口を噤んだ。

「ひどいのは和でしょう？どうしてそんなこと言うの。」

「あくまでも可能性の話だってば。」

「そんな可能性ない。」

「…ないって思うのはよくないとおもうな、私は。」

「和！！」

「あー、もう、だからね？」

そんなのないって思い込んでたらそのうち、お互いに色々な努力をしないようになってっちゃうんじゃないかって思うの。

だってさ、100%他の誰かを相手が好きにならないって考えるのは驕り以外のなにものでもないでしょう？

そもそも私はちゃんと、和泉君以外と付き合うなんてありえないって思ってるってば！ひとの話をちゃんときけつつうの！」

言いたいことを言い終えて、和は遙の腕から抜け出せば改めて視界にうつした遙の表情にぎよっとする。

顔を真っ赤に染め上げて、熱にうかされたようにこちらをみている。

「和、ごめん！！」

「わー！もう、もう勘弁して、待って！！」

またも抱きつかん勢いの遙を、和は必死になって止めた。

和のあまりにも狼狽したその姿をみて、遙はさすがに反省したのか今度はしゅん、と落ち込んでいる。

「俺いつも暴走ばっかでごめんね…？」

「うん…私も言い方悪かったけどさ…もうほんととやめて？それこそ距離置きたくなるから、あんまりにもあれだと。」

「そ、そんな意地悪言わないでよ！！」

「いや、意地悪ではないでしょうよ…」。

「……なんでかなあ、普通逆だと思っただけど。」

和の呟かれた言葉が気になり、首を傾げて遙は先を促した。

「いや、さっき言いかけた事。そんだけ派手な過去をもつ彼氏がいたら

普通、束縛激しくなるのは彼女のほうだって相場は決まってるじゃ

ん？

なんで和泉君がそうなるのかわからない。ただでさえ私モテるわけでもないし。」

「え、告白されたひとが何を言ってるの？」

「そーれはあ……。」

「和、ひよつとして少しも懲りてないの？」

本当にまったく学習してくれないなら俺、実行しちゃうから早く自覚して？」

「実行？」

「あれ、わかんなかった？」

あんまり無自覚だと、軟禁しちゃうよ？」

なんとも美しいその顔で、可愛らしく小首を傾げて。

しかして遙はとんでもない言葉をその口から吐き出した。

絶句して無言になれば、さすがに本気じゃないだろうと和は言い聞かせる。

「私が数々の発言に怖くなって逃げ出したらどうするの？」

「怖くなったの？」

「前から若干の恐ろしさは感じてるけど。」

「逃がさないよ。」

につこりと微笑む遙に、和はさつき以上の恐ろしさを覚えた。

それでも、まだ和は遙の執着ぶりをぼんやりとしかわからない。

なぜ、ここまで自分にこだわるのか和はいまだに疑問なのだ。

「まあ……とりあえず、そんなことにはならないように頑張るよ。」

「うん、そうして。」

「……和泉君さ、釣った魚にそれほど餌はやらなくていいんだよ？」

「どうして？釣ったあとこそ重要なのに。」

「…そういうもん？」

「さつき和が言った努力ってそういうことでしょ？」

「んー、まあ、そうなんだけど。何事もやりすぎは良くないという
か」

「俺にとってはこれでも抑えてるほうなんだけどね。」

それに、いいかげん公衆の面前だというのも忘れて

和は驚愕の叫び声をホーム中に響かせていた。

何事もなく電車を降りた和と遥は、並んで学校に向かう。
そのあいだちらちらと感じる視線に、和は先に行きたい衝動にから
れるも

わざわざ家まで迎えに来てくれた事実を思えばそれはためらわれた。
それでも遥は察してくれているようで、少しの距離を保ちつつ
無言でふたりは校門までの道を歩いていく。

校門がみえたとき、隣でどすっ、という鈍い音がきこえ、
誰かの名前を叫ぶ声がそこから同時に発せられた。
和が何事かと遥のほうを振り向けば、
げげほと咽る遥の腰に、おもいきり抱きついていて人間が確認で
きた。

とりあえず、遥が苦しそうにしているのがわかれば、
和は原因をどうにかしたほうがよからうと考える。

「あの…滅多に人里に現れない動物とかでもないので、そんなきつく抱きしめなくても逃げないと思いますよ？とりあえず、苦しそうなので一回離れて、そのあと改めて抱擁を交わしては。」

淡々と和がそうアドライブすれば、抱きついた少女は和のほうを向き目を丸くする。しかしその言葉に納得したのだろう。そっか、と小さく呟けば少女はゆるゆるとその手を離れた。

「和…行為自体を止めてよ。」

「でも、和泉君の知り合いでしょう？さっき遥って名前呼んでたし。そうですよね？」

和が今は向き合う形で遥と対峙するその人間を見れば少女は嬉しそうに、にっこりと微笑んでうなずいた。注視すれば、美少女と呼ぶにふさわしい整った顔がそこにはあった。少し癖のある髪は色素が薄く、キラキラと輝いている。ふわふわのロングヘアは触ったらいかにも柔らかそうだ。

「だったら私が止める権利はないと思うけども。」

感動の抱擁を果たしたいがために彼女はタックルしたんだろうし。」

「あるでしょう！自分の彼氏が見ず知らずの女性に抱きつかれてるんだよ！？」

ちよつとは妬いてくれたっていいじゃないかあ！」

「ああ、そっか、そういうもんか。」

和の今気付きました、という様子に遥はがつくりとうなだれる。件の少女は、二重の大きな瞳を驚愕に見開けば、ただでさえ大きな瞳が今にもこぼれんばかりになっていた。

「彼女！？遙、いつの間にそんなもの作ったのよ！！」

「あのなー、そんなものとか言うなよ。」

「だって！今までだって遊んでるひとはいたけど

私の前で彼女なんて言ったことなかったわ！」

「だって和は初めて好きになったひとだから。」

さらりと遙がそう言えば、少女は和を振り向き

その可憐な顔を今は、はつきりとした敵意を持って和を睨みつけていた。

その顔に和はぽかん、としている。

「この泥棒猫！」

飛び出した言葉に、和はいけないと思いつつもときめけば我慢できずに遙に弾んだ声で話しかけてしまった。

「ど、どうしよう、和泉君！昼ドラとかじゃなく

ガチでしかも自分に向けられて稀有なワードが発せられたよ！！」

「和、ちよつと落ち着いて。…でもはしゃぐ所って貴重だなあ、可

愛い。」

「いや、今そんなこと言わなくていいよ、うっとおしい。」

「あれ、声にだしてた？」

「ちよ、もうまじで病院行こう？和泉君色々やばいつて。」

当人同士はそんなつもりもなかったが、

少女からすればふたりの世界をみせつけられて相当悔しかったようだ。

並んで立つふたりの間に割り込めば、遙にひし、と抱きついた。

「どっとうつもりか知らないけど、いずれは遙を返してもらおうわ。」

遥は私の婚約者なんだから！」

校門中に響いたその叫び声に、周りは驚愕していたが
渦中の和はなんと冷静に「んなベタな」と胸中でつつこんでいた。

第三十四話「婚約者という名の嵐」

問題です。

彼氏に婚約者がいたと知ったときに取るリアクションはどういったものでしょう。

100文字以内で答えなさい。

和の頭の中に、答案用紙がぐるぐる回る。

案外動揺しているのかもしれないと思えば、なんだ自分も乙女じゃん、などと心の中で感心してみる。

「実花^{みか}！離れるよ！！」

「どうして？最近ちつとも会えなくて淋しかったんだから！」

うーん、しかし。

動揺して引き剥がそうとするほうがこの場合怪しい気がしないでもない。

周りは野次馬でいっぱい。ここで余計な発言をすればネタ提供するだけか。

和はちらりと腕時計を見やれば、そろそろここから動かなければ始業まであまり余裕がないと気が付いた。

ここにいる人々も、遅刻の心配はいいのだろうか。

まあ、わざわざ指摘してやる親切心など和にはしないのであるが。

「ええーと、みかさん。」

「勝手に馴れ馴れしく呼ばないでよー！」

「では和泉君の婚約者さん。私はそろそろ失礼しますね、

学生の本分を全うしたいので。おふたりはごゆっくり。」

淡々と話せば和はすたすたと校舎へと歩いていく。

一瞬ほかん、としてそのまま見送ろうとした実花は、慌てて和を呼び止めた。

「ちょっと！待ちなさい！！逃げるの！？」

その声に、和はまたもふきだした。

実花の口から飛び出す数々の言葉は、和の好奇心をおおいにくすぐるし、

なんともからかいがいがありそうなキャラクターだなどと和の加虐心をかきたてる。

「いいえ？私は逃げも隠れもしませんよ。

お話があるならば今度は常識的な時間に是非いらしてください。」

につこりと微笑んで、和が今度こそ校舎へと消えていけばあまりの物言いに実花は憤慨する。

「ちょっと、なによ、あの女！遙つてば趣味が悪いわね！！」

「お前が悪いんだろう、こんな時間になにも言わずにくるから。」

「だって、遙、全然家に帰ってこないじゃない。

一人暮らしの家の方に遊びに行ってもすれ違っちゃうし。

おじさまもおばさまも、もっと帰ってきて欲しいっておっしゃってたわよ？」

「それはまあ、最近色々忙しいから。」

「あの女のせいなんでしょう！？」

「実花。」

あの女、と言われて遙は腕をつかむ少女を振り払えば、
ぎろりと睨みつけた。

「…とにかく、私は認めないから！」

今すぐは無理だつて、いつかは絶対に別れてもらうんだから！」

「お前な、いいかげんにしろよ。大体学校はどうしたんだ！」

「あら、この制服がみえないの？」

少し離れてぴら、とスカートの裾をつまんでみせる実花を
遙は驚愕してその瞳にうつしていた。

「朝から超疲れた…。」

ぐったりといった風情で和が机につつぶせば、
クラスメイトが興味津々で寄ろうとする。

しかしそれよりも先に声をかけたのは託斗だった。

「和。校門前の女、クラスの奴らが和泉の婚約者だつて言ってたが。」

「ん？ああ、女の子はそう言ってたけど。どうだろうね？」

「…お前、放置してきたのか？」

「だって遅刻しちゃっじゃん。」
「それはそうかもしれないが…」
「まー、なるようにしかなりませんよ。」
「お前な…まったく。…別れるなら早めに言えよ。」
「やだ。」
「なんだその即答。」
「うっさいよ、ほら、席着きなよ。鐘鳴るし。」

納得いかないような顔をしつつも、託斗はおとなしく自身の席へと戻って行った。
周りも、聞いたかったことは今の会話ですべて埋まったのだろう。浮きかけていた腰を戻して、和に話しかけることはしなかった。

おそらく、託斗と梓はけっこう良いところまでいっているのではないかと、和は思っていたが、
託斗はどうも自分の感情が動いたことに気付くのが遅い節がある。本能のままに動いていると自覚はしているだろうから
そのうち考えが追いつくよりも早く梓になにかしらをしそうだな
と
和は少し梓のことを心配した。

『梓さん、案外乙女だからなあ。』

いつかの真っ赤になる梓を反芻して、和は内心にやついていた。

授業を挟んでの10分休憩、

遙が来るか来ないかは五分五分だ、と和は思っていた。彼女の制服はうちのものであったから、おそらく転入してきたのだろう。

同じ学年ならば十中八九遙のもとを訪問するだろうし、年下だとすれば（年上という可能性はなんとなく除外）時間的に厳しいので

遙はこちらにやってくるのではないかと思われる。

「和！！！」

扉に体当たりせん勢いで遙が入ってきた。

「おお、実花ちゃんは今下なんだね。」

「は？なんでそれ…。」

「説明するのは面倒です。遅刻せずに済んだ？」

「あー、職員室に無理矢理引き渡してきたから…
ってそうじゃなくてさあ！」

「事情説明するのはいいけどどこで？あと10分休憩で済む話なの？」

「大丈夫、済ますから、来て。お願い。」

半ば強引に遙は和を連れ出せば、

いつものように階段途中の踊り場までひっぱっていく。着いたと思えば休むことなく、遙は和に話をした。

「婚約者っていうのは、昔面白がって親が言ったことだから。それ以上も以下もない。」

「ああ、やっぱり幼馴染なんだね、ふたりとも。」

「すっごい妹みたいに懐かれてるっていう感じでしょ？」

「そう、昔っからね。…両親も実花のことは可愛がって…」

実花のご両親も、あいつには昔から甘いんだよね。だからわがままというか。」

「なんか、お嬢様っぽいな、とちよつと感じただけど……」

「あー、ま、ね。実花の両親はけっこう大きい会社の社長。」

「へえー……じゃあそれこそ本当にいないの？婚約者。あ、もしかして」

「いや、うちは一般家庭だから政略結婚とかそういうんじゃないよ。実花の家だってそうまでするような家柄ではないから。」

本当に、両親が面白がってした口約束なだけだから。」

「……和泉君の家ってどんななの？なんかちよつと謎なんだけど。」

「ええと……いずれは話すよ。」

「知られたくないことなんだね？」

「うん、出来れば、もうちよつとしてから。」

「自分は毎回家に送りたがったのに勝手な……まあ、いいけど。」

そのうち教えてくれるんだね？」

「うん、それは。約束する。ちなみに一人暮らしの家にはいつでもどうぞ。」

「遠慮しておきます。」

「即答だね。さすがにそんなすぐ取って食いやしないよ？」

「まあ、そのうち気が向いたらね。」

「……つれないなあ。」

楽しそうに笑う遙の横顔をみて、和の心に小さな不安が過ぎる。

家のことを教えたがらない理由はなんなのだろうか。

純粹な心ならば、彼の言葉を丸呑みして信じられることもできようが、

ただでさえ敏感な和の頭はぐるぐると考えをめぐらせてしまう。

家絡みのことを隠したいとなると婚約者云々の話は

もっと重いものなのではないかと疑いたくなる。

もしそうであるならば、自分はどうしたいのだろう。

たとえば、遥の家に逆らってふたりの気持ちを貫く？

…なんだろうかそのどこぞの安いドラマのような展開は。

実花のことがうっとおしくて恋人が欲しかった？

いや、さすがにないだろう、こんな面倒な自分を選ぶなんて。

『でも、すぐに別れられそうな相手を選んだからだったりして？』

彼の容姿や優しさに惹かれることなく、もしそうだったとしても
潔く身を引くような女性。

そんな人間はひょっとするとこの学校内でみても和以外はいないか
もしれない。

そうでなくとも、彼は過剰に女性を惹きつけては執着される経験多
数だったようだし。

だとするとこの条件は確かに難しいのかもしれない。

…しかし実花のことを遥が好きだという可能性もないのだろうか。
さすがに現時点だとそこらへんの理由は頭が回らない。

もしかしたらそれこそなにか安いドラマのような事情があるかもし
れない。

まあ、先程から考えても仕方ないことばかりであるのだが。

とりあえず、彼を信じられなくなったらふたりに未来はない。

お互いに気持ちがあるなら、それこそなるようになるのだろう。

悲観的なのか楽観的なのかよくわからない結論を出せば、和は小さ
くため息を吐いた。

「ちょっと！遥の恋人って女はどここのクラスなの！！」

怒鳴り込みのような声が、二年生の教室が並ぶ廊下全体に響き渡った。

その騒々しい声に、和はめまいを覚える。

その言葉と迫力に教室内外にいる生徒達が固まっていた。和が所属する2 - 3 一同もそれは同じらしい。

「笹森さん、あれって例の？」

クラスメイトのひとりが恐る恐る和に話しかければうんざり顔で和がうなずく。

「以外、ないでしょうね。まったく…なんつー非常識な。」

正直、このまま素直に出て行ってやる義理はない。ないが、遥が駆けつけて彼女と言い争いになるのは時間の問題だ。

そうなれば廊下にはどんどん野次馬が増えるだろうし、少数派であっても静寂を好む人々は迷惑極まりないであろう。

自分とどこかしら共通項のある人間を苦しめるその一因を自身が握るのは

なんともいえず気分が悪いと和は感じた。

幸い、2 - 3 側から殴り込みをかけてきた彼女が2 - 7 まで行くに

は少々時間を要する。

まだ2・7側には声はきこえてもなにを叫んでいるかははっきりと
きこえないだろう。

結論付けて、和は教室前の扉にべったりと張り付いた。

その様子を不思議そうに見守るクラスメイトたちに、和は小さく微
笑む。

このクラスの住人は、お人よしが多くて本当に助かる。

いいかげんにしろ、と愚痴のひとつでもこぼされないのが奇跡だ。

耳を澄ませば、目当ての人物がやってきた。

和は力任せにぐい、と扉前の廊下を通る女生徒を教室へと引っ張れ
ば、

バランスを崩した女生徒、実花のつかんだ腕はそのままに肩にも手
を添えて

だん、と教室側の扉にしたたか叩き付けた。

何が起こったか一瞬わからなかったのか、小さく悲鳴をあげて痛そ
うに顔を歪める少女は

本当に可憐で、虫の一匹も殺せないような物語のお姫様のような容
姿をしている。

美少女だ、という情報は流れていたものの、そこまでとは思ってい
なかったのだろう。

クラス全員がそのあまりの美しさにしばし見惚れれば、

今しがた行った和の所業に少しの非道さを感じた。

目の前にある図はどうみても、和が悪役の様相を呈している。

「どうもこんにちは、非常識なお嬢さん？」

「あ、あなた…！」

「常識的な時間ではあるけど行動がそれから逸脱しては意味が
ない。

廊下であれだけわめいたら、周りの迷惑になるとは微塵も考えないのかな？

それとも君の頭の中には常識という辞書がないのかな？」

捲くし立てられて反論しようにも、和のその迫力に気圧されて実花は押し黙った。

2・3一同も、和のその言葉に彼女が今どれほど苛立っているかを嫌という程察したし

乱暴ではあつたけれど正論であると感じる。

「まったく、我儘が通じるのはせいぜい年齢一ケタまでだったの。話があるんなら事前にクラスくらい調べてきなさい。和泉君は？連れて来るの？」

和の低い声音に、実花は無言で首を振る。

「そう、じゃあお昼いっしょに食べようか。持ってきてる？」

その言葉に今度は縦にぶんぶんと首を動かしたので、和はふきだしそうになった。

まだ怒っていると思われたほうが素直に従うので都合が良いだろう。

「じゃあついておいで。ふたりきりになれる所がいいでしょ？」

ああ、とって喰いやしないから安心しなさい。

基本的に私は礼儀には礼儀で返す主義なの。さっきでわかったでしょ？」

乱暴には乱暴をつてね？と和がにっこりと微笑めば、
やっとなら論する突破口が開けたと思ったのか実花は怒鳴った。

「私、乱暴なんてしてないわよ！あなたが勝手に」

「乱暴でしょうが。なにもからだを痛めつけるだけが乱暴じゃないんだよ。」

私があんな風に見世物みたいに叫ばれて傷付かないかとか思わなかった？

おとなしい女の子だったら泣いて逃げ出してるよとこだよ。」

「…っでも、だったら口で止めたら良かったじゃない！」

「あなたちよつと暴走気味なところがあるからねえ。簡単に黙らせるには

あれが一番いいかなと思って。痛かったらろっけど対価だと思いな。自分の言動に責任が持てないならあんな派手なことするもんじゃない。ほら、おいで。」

顎でしゃくって和がついてこいと促せば、実花はとたんに不機嫌になれば

「命令しないで！」

と叫んだ。

それでも後ろからぱたぱたとついていくる音を確認すれば

声を出す事はかなわず、和は肩が揺れるのもなんとか抑えてそれでも笑いは止められなかった。

『命令しないでって…人生でそんなこと言われる日がこようとは…』

くつくつと声を押し殺しつつ必死に悟られぬように笑うのはなかなかどうして大変である。

息苦しく感じながらも、和はなんとか笑いを収めようと必死になり

つつ

廊下を歩いていた。

ほどなくして、いつかの梓に呼び出された部屋にたどり着く。

そういえば、遙にドッキリを仕掛けた日にもここで昼をとったのだ
と思えば

一瞬、落ち着かない気持ちになってしまう。

それでも表には出すことなく、涼しい顔をして教卓前の段差に和は
腰掛けた。

「婚約者さん。どうぞ。ここ椅子ないから。」

たすたと和が隣を叩けば、しばらく棒立ちになっていた実花は
決心したかのような顔をして、どすん、と腰掛けた。

「……………」

どう切り出そうか悩んでいるのだろう。

押し黙った実花に小さくため息を吐けば、和はいそいそと

お弁当を開け始める。確か今日はサンドイッチだと言っていた。

「ちよっと！勝手になにやってるのよ!？」

「お腹すいたから。だってお昼休みだし。婚約者さんも食べたらず？」

「私には松永実花まつながみかっていう名前があるのよ!」

「だって気安く呼ぶなって言ったじゃん。」

その言葉に実花がふるふると震えだしたので、

さすがにからかいすぎたか、と思えば和は頬をかいた。

「松永さんね、笹森和です、よろしく。」

「……あなた、本当に遙の恋人なの？」

「ん？まあ、そうだけど。」

「……告白はあなたから？」

「いいえ。向こうから。」

「いつ!？」

「え……5月頃だったと思うけど。」

すごい剣幕で詰め寄ってきた実花に仰け反りながら和が回答すれば、
実花は目を見開いた。

「……遙が、家に帰らなくなっただ頃だわ。」

「え……」

「あなたのせいだったのね。」

「いやなにが」

「あなたが遙の周りでちょっかいかけるから！」

遙が私をないがしろにするようになったんじゃない！」

「え、どうしたらそうなの？」

さすがに面食らった和はあまりにもとんでもない言い分に
思っていたことがそのまんま口について出てしまった。

「だって、遙が私にかまってくれなくなったの、そのくらいの時期
だもの。」

「でもそれって和泉君のしたことだよな？なんで私のせいになっ
ちやうの？」

もしそれ認めたとしたら、和泉君にとってあなたより私の
重きをおいた存在っていうのを認めちゃうことにならない？」

和の言葉に、実花がはっと気がついたように口を噤んだ。

「あのさ、具体的に私になんの話がしたいの？」

「決まってるわ。遙と別れて。」

「どうして？」

「私と遙は将来結婚するのよ！」

サンドイッチを口に運びつつ、ペットボトルのお茶を飲み込む。

実花はいまだにお昼を口にしていない様子で、

和はぼんやりとお腹すかないのかな、などと考えていた。

「んー…それもなあ、いまいちわからないんだけど。」

松永さんと和泉君の家同士で昔から決められたものとかなの？」

「そんなことはないわよ。元々は私と遙の家同士が昔から仲が良く生まれ育つ前から、将来男と女が生まれたら結婚させようなんて確かに言っただけだよ。」

「それって、拘束力はそれほどないってこと？」

「両家は乗り気だし、このままお互いになにも言わなければ

そうやっていくとは思わぬ。おばさまなんて、遙が18になったら形だけでも籍を入れたらいいとおっしゃってたもの。」

「え、マジで？」

「すげーな、と呟きつつ和はお昼ご飯を咀嚼した。」

「なんとも異次元的な話だなあ、と思わず遠い目になる。」

「遙の言っていた思い込みの激しい両親というのは案外手強いのかも知れない。」

「でも…別に無理矢理ってわけじゃなかった。」

「遙だって、一年前まで了承していたもの。それで良いって言うてくられてた。」

「え…」

「それなのに…二年に上がって急に実家に寄り付かなくなって一人暮らしの家へ遊びに行っても上の空だし…」

私は今日！遙に恋人が居るって知ったのよ！！」

「それって…一方的に婚約破棄されたってこと？」

「されてもいないわよ！だからあなたに別れてって言っているんじゃない！」

「なあるほど…。んー、でもそれって、私よりも和泉君と話すべきじゃない？」

「え？」

「だって私あなたの存在自体知らなかったから、いうなれば被害者じゃない？」

「……知らなかった？遙はあなたに私の事をなにひとつ話していなかったのね。」

「そうだよ。だから私に文句を言われても仕方ない。」

それを聞いて、す、と目を細めた実花は、次には妖艶な表情で微笑んだ。

「そう、それじゃあ、遙にとってあなたは通過点でしかないって事ね。」

きつと恋人っていつてもそこまで深い意味なんてない。

それならいいわ、私は遙をそこまで束縛する気はないもの。

ただ、あなたも了承しておいて。いずれ彼は私の所へ戻るの。

今すぐには言わないけど、せいぜい高校を卒業するまでの仲だって割り切っておくことね。言いたいことはそれだけよ。」

ここに来たときの、からかいがいのある少女とは同一人物と思えないほどに

ひとりの女性として松永実花は静かにその場を去っていった。

おそらく、今までの態度は得体のしれない相手を前に半ばパニック

状態だったのだろう。

しかし和の言葉から、どうやら完全に実花は和の存在は遥にとつて取るに足らないものだと判断したようだ。堂々たるお嬢様然とした態度で消えた彼女の消えた出入り口を少々呆然と和は眺める。

「卒業まで、ねえ……」

まさか、と一笑するのはなかなか難しい。

彼女の態度も言葉も、根拠の無い自信とは考え辛かった。

もしもそうならば相当な馬鹿ということになってしまつが最後の態度からしてなかなか女としての汚い面も兼ね備えているようだし。

しかし、こちらから行動に出るとしたつて、なにをすればいい？
彼女の言葉をまるまる鵜呑みにするほど遥を信じられないわけではないし

遥の言葉をまるまる飲み込むほど心清らかでもない。

もしも家同士が良かれと思つて強引に事を進めようとしているのならそれを楽観的に放置していいものなのだろうか？

それとも遥が渋つても無駄な部分まで話は及んでいるのか？

だからこそ家の事を隠しているのかもしれない。
けれどこれらは、すべて憶測にすぎないのだ。

隠されている部分があるのならば、結局それを打ち明けられるのを待つしかない。

それまで待てないのであるならば暴くしかない。

そう、今和にできることはこのどちらかしかないのだ。

全てがみえない状態で結論を出すのは、あまりにも危険だ。
誤解というものは些細な所からとんでもないものにまで発展すると
どこかで和は感じている。

頭の中で、どちらにしようかなー、と反芻してみる。

「……………とりあえず、様子見かな。」

先程からうるさく鳴り響く携帯電話のバイブレーションがうっとお
しくて

和は電源を落とした。

着信履歴など見ずとも誰からなのかはすぐわかる。

ふ、と冷やかに笑いながらただの塊になった物体をポケットにし
まいなおせば

和は今の自分は思った以上に彼を信頼しているのだと驚いた。

馬鹿になって信じてみるのもいいかもしれない。

それならばへたに介入するよりも、ふたりにとことん向き合っても
らえばいい。

なんとなく、あのふたりはどこかですれ違っている気がしてならな
いのだ。

実花のことを話す遥はどこか優しい顔をしていて、

和は遥が彼女のことをどういふ種類かはわからないが

大切に思っていることは幼馴染だと言われる前からわかっていて、

それでも、ふたりをしばらくは放っておこうと決めるのだから、

和は遥のことを深く信じているということになる。

…面倒だから半ば投げ出したというのもまあ、否定できない理由の
ひとつではある。

けれども痛い目をみたら、それは自分の男を見る目がなかったということだ。

「ま、しばらくは自分の時間にも使っかなあ。」

こういう方面はそもそも苦手なのだと言き直れば、和は残ったサンドイッチを一気にほおばった。

第三十五話「嵐が巻き起こした弊害」

「和先輩！…珍しいね、それ。」

名前のあとは声を潜めて、ちよいちよい、と時任は自分の目元を指し示した。

それに和はああ、と答える。

「まあね。…時任君も、イイ顔になったねえ。」

つつか手当てとか受けてるって何様？自然治癒にしなさいよ、もうちょっと長い事苦しみなさいよ、なに早く治ろうとしてんの？」

放課後の図書室をおとずれた和に声をかけた時任の顔にはきちんとガーゼが当てられており、昨日の腫れほったい顔よりは随分とましになっていた。

おそらく保健室に行つてすぐに岡元に治療をもらったのだろう。その凶々しさに少し意地悪心を擽られほとんど冗談でそう話したが、

和のその言葉に時任はなにを思ったのかみるみる顔を歪めてはべり、と施された治療の元を自らの手でとってしまった。そうしてカウンターから出れば、勢い良く和に頭を下げる。

「ごめんなさい、楽しようとするなんて俺、最低ですね。」

それは予想していなかった行動で、和は驚きのあまり目を剥く。図書室内の人間は基本的にそれほど野次馬根性があるわけでもないがそれだつて何事かがあれば好奇心はもちろん働く。

それは確実に殴られた跡であり、和泉遥の恋人として広く知られる自分となにか揉め事があつた事と

その殴られた顔をみて出す結論はそれほど多くはないだろう。
男女間で喧嘩が成立しないわけではないが
女子の手でつくられたものではないと見ればすぐにわかる。
彼の負った傷が誰によって施されたものか
察しの悪い人間以外はすぐにひとりの顔が頭を過ぎるはずである。

まだこちらを注視する目が数人しかいないことを確認すれば
和は無理矢理、時任を図書室の外へ引つ張った。
そして無言で時任が剥がしたガーゼをその手から奪い取れば
傷の痛みもかまわずにしたたかそれを顔にべし、と貼り付けた。

う、と痛そうなためき声を時任があげたが、知ったことではない。
憎しみをこめてやったのだから当然である。

「馬鹿ですか。冗談だつーの。」

「え、」

「ちょっといじめてやろうと思っただけだよ。」

そもそもこれみよがしに傷見せ付けられる方が気分悪いじゃん。
慰謝料よこせとか言われてるみたいで。」

「せんぱあい……」

「泣きそうな声を出すんじゃない！」

大体、あんなところで目立つ行動しないでよ。私は今、笹森和なん
だからね。

あんたのその傷、和泉君がやったのかって周りに思われたらどーし
てくれんのよ！」

睨みと共に和がそう言い放てば時任はそこまで考えが及んでいなか
つたらしく

今気付いたように狼狽した。

それに和はため息をつく。これだから勘の働かない人間は始末に悪

い。

…まあ、真っ直ぐで純な彼をからかった自分が一番悪いのであるが。そう思えば、ほのかな罪悪感が和の心をかすめる。

チツ、と小さく舌打ちする和を、時任は隣でながめていた。

やがて和に名前を呼ばれ、時任は慌てて返事をする。

「保健室に行くよ、まだ先生いるかもしれないから。」

「え、でも」

「なるべく早く治してほしいの。面倒事は避けたいから。」

係りの人、もうひとりいるんでしょ？ガーゼが取れちゃったから保健室行つて来るって話してきな。」

「え、そんな、いいですよ！行くならひとりで」

「私だけ戻ったら不自然でしょうが！いいから、早くして。待つてるから。」

和の言葉に、観念したのか時任は少しのしかめっ面でうなずけば図書室にいったん入って行った。

本当なら、別についていかずともまた図書室へ入るくらいの神経はあった。

別にそこまで周りも気にしている風ではなかったし、

先程のふたりをみてそこまで勘繰る人間もそういないだろう。

ついていこうと思ったのはちょっととした罪悪感と

遙に迷惑をなるべくかけたくないという思いからだっただけ。

彼が時任を殴りつけたという事実はなんとか表に出ないようにしたい。

ならば自分と時任がなにがしか揉めているという印象は持たれたくないのだ。

自身の振る舞いがこれからはなにがしかの形で遙に影響を及ぼすかもしれない。

そしてそれは和にも言える。今までもその被りは相当受けてきてはいたが…。

そう考えればあの目立ちすぎる男の一部を背負ってしまったのだと和は痛感せざるを得なかった。

それでも今の所、別れようとは思わないのだから好きになるとはやはりフファンタジーなのだ、とどこか自嘲した。

保健室へと赴けば、岡元はまだ残っていてほっとした。

もうそろそろ帰るかどうか、という時間だったようである。

残業だわ、とぶつぶつ言う岡元に和は小さく笑った。

まったくこういう大人が居るといのはひどく安心する。

保健室から図書室への道すがら、時任はおずおずと話し出した。

「和先輩、俺の事、やっぱり軽蔑しますよね。」

「軽蔑う？しないよんなもん。」

「え!？」

「あんなモン犬に噛まれたようなもんでしょ。」

軽蔑つっつーのは人間にするものだし。」

その言葉に、時任の瞳が大きく揺れる。和はそれにおおいにため息を吐いた。

「だーから。いちいち真に受けるなっつもの。」

そもそもあんたそんなに冗談通じないキャラなんだっけ?」

「だっ…自分でしたのにあれですけど!」

あんな事したあとにその相手からの言葉なんて過敏に反応して当たり前じゃないですかあ！」

その時任の嘆きように、やっとその胸中が理解できて

和は本気で彼は反省しているのだ、と初めて感じる事ができた。

「なんだ、そんなに落ち込んでたんだ。

まー、私の言葉に勝手に傷付くのは勝手だけど表に出さないでよ同情しちゃうから。」

「ほんつとイイ性格してるね、先輩。」

「そうだよ？だからこんな奴いつまでも気にしてるのは単なる馬鹿。通り越して滑稽。」

その言葉は、言外に時任を赦すといっているに等しいものでいわれた本人は目を見開いて驚いていた。和はそれに苦笑する。

「和先輩。それはちょっとお人好しじゃあないかなー。

俺、けっこう本気で先輩のこと好きなんだよ？」

「はあ？あんださつきその口でイイ性格だってほざいたじゃん！」

「そこも含め。」

「え？マゾなの…？」

「あー、案外あるかもよ、それ？」

けらけらと笑う時任は、先程のがちがちな状態から抜け出しているほっとした。

和は確かにあの行為を簡単に赦すお人好しではないが、

かといって心から反省する人間をねちねちと甚振るのは趣味ではない。

結局彼は自身で正気を取り戻し思いとどまってくれたのだし、告げられたとき和がその心にきちんと返事をしなかったのも悪いの

だ。

どこか彼を軽んじていた。だからこそ心無い言葉で傷つけた。その代償があれならば、そう悪いものでもない。

「でも俺、マジで狙ってますから。」

「は？なにを。」

「婚約者、まあ、時代錯誤もいいとこだし信じきってるわけではないけどさ。」

「すごい綺麗な子じゃないですか。雰囲気も合ってるし。」

「あー、まあねえ、私よりは全然釣り合いとれてるよねー。」

「だからさ、別れたら考えて欲しいなー。可能性、なくはないですよっ？」

「あんだね…馬鹿言うんじゃない。とりあえずそうなくてもあんたは嫌だよ私は。」

軽口をたたく時任がどこまで本気なのかはわからないが、

とにかくその気はないという意味表示だけはしておこうと思った。

「はいはいはい、いいですよ、今は可愛い後輩ポジションー。」

「いじめがいのある後輩ポジションから君は永久に抜け出せないって。」

「ひびっ…」

笑いながら和と時任は並んで図書室へと入る。

受付カウンターには、高橋が座っていた。ふたりを視界にうつせばおかえりーと声をかける。

「なんで笹森さんが付き添ってんの？」

「ああ、さっきさー、時任君の顔みて、本当に怪我してんの？って

しばらくかくからかってたんだけどキレた時任君が自分からガーゼ剥がしちゃって。

責任感じたから保健室へ連行させていただいた。」

「そんなことしたの？笹森さんも悪いけど時任も大概だな。」

「でしょうー？大体なんでそんな怪我こさえたのよ。」

殴り合いの喧嘩とかするようにな全然みえない。まあ経緯とか興味ないけど。」

「だったらきかないでよ！」

自分がその原因だというのに涼しい顔をしてそれを訊く和に改めてとんでもないひとだと時任は冷や汗をかく。

「打てば響くなー、図書室内ではお静かに。」

「和先輩…！」

がつくりとうなだれる時任をにやり笑いで一瞥し

ひらひらと手を振って本棚へと消えていく彼女の後姿は

時任にはひどく遠いと思えた。

彼女と対等に話すには、なかなかまだ精神力が足りないらしい。

まだまだ心に踏ん切りがつかない彼はせつない視線を和に送っていた。

「あれ？和泉君。」

「久しぶりに堪能させてもらっちゃった。」

本を閉じて顔をあげたとき、

向かいの席に座る馴染んだ顔をみつけて目を丸くする。

遙は、とても嬉しそうに微笑んでいた。

最近ではみなかったいつもの光景が、どうやら今日は久々に広がっていたようだ。

「相変わらずすごい集中力だね。」

「そお？…ああ、ちょうど時間だね。出るか。」

「うん、帰ろう。」

腕時計を確認して顔をあげた和は、遙のその言葉に眉を上げた。

その不可解な和の反応に、遙は首を傾げる。

「松永さんはいいの？」

「ああ、週末には実家に帰るって言ったから。」

……今日も部屋で好きなだけ待てばとも言ったし。」

「そう。」

後半は声を潜めて言ったので遙も一応周りを気にしているんだと和は変なところに関心がいつてしまった。

しかしふと、一人暮らしの家に実花をあげる意味を考える。

逡巡し、ここで言うことでもなければ自身で思うところもあり和は特に言及する気にはならなかった。

ひとつつなずいただけでなにを言うでもなく和は席を立つ。

それにならって遙も和のあとを追うように立ち上がった。

ふたり並んで図書室を出ようとしたとき、受付カウンターから時任が和を呼び止めた。

その声に和が返事をすれば、時任は微笑んだ。

「手当て、ありがとございました。またね、和先輩。」

「どういたしまして。ばいばい、時任君。高橋君も。」

高橋とも別れの挨拶をして、和は図書室をあとにした。

気のせいでなければ、後ろからかなりの冷気の気配がある。

和は少しうんざりしたように息を吐けば

とりあえず無視を決め込み昇降口へと歩き出した。

「和、ちょっと。さっきのってどういう意味？」

「えー？さっきのって？」

「手当てって。まさかあいつの怪我の手当てしたの？」

「していないよ。」

「和！」

「嘘じゃないって。したのは岡元先生だもん。」

「…わかってて言うてるくせに。」

「無意識に屁理屈こねるよりマシでしょう。天然て時に一番罪だからね。」

しらつとして靴を履き替える目の前の女生徒に、

遥は大声で和！と叫ぶ。

うるさそうに呼ばれた張本人は耳の穴をほじくっていた。

なんとも女子らしからぬ振る舞いである。

「こんな至近距離で叫ばなくても聴こえてますって。」

すたすたと歩き出す和を遥は慌てて追いかければ、その手首をつか

んだ。

「話は全然終わってない！俺がない図書館で何があったの？」

「私のせいで傷が開きそうだったから時任君を無理やり保健室に引っ張ったの。」

「なにがどうしてそうなったわけ？」

「えー？一から十まで説明しなきゃいけないの？」

いかにもうんざりといった風情がしかし遙の苛立ちをよりいっそうあおる。

半分しかこちらを向いていない和の両肩をつかみぐい、と遙に向かせれば

そのまま遙の手が和の肩をぎり、としめあげた。

僅か和が痛み在眉を顰めるも、遙はそれを気にするでもなく和を鋭く睨む。

「やましいことがなければ言えるだろう？」

「はあ！？やましいことなんかあるか！ちよつといい加減にしてよね！！」

「いい加減にしてだつて！？自分と好意のある男と自らふたりきりになっておいて

よくそんな事が言えるもんだね！」

「別に時任君にはちゃんと断りました。大体、それはそつちだつて同じでしょう。」

実花ちゃんは今泉君のこと好きなんだから。」

これは痛い所を突いてやったはずだ！と内心で和がふんぞりかえるも遙は開き直ったような態度で次の発言をする。

「ふたりきりになった所であいつになにができるって言うんだ？」

力にもの言わせて押し倒せるわけでもあるまいし。

それとも和はもう一度襲われたいの？」

「……」

「携帯電話の電源もずっと切ってるみたいだったし。

時任君とふたりきりで何してたの？」

冷やかな目線と共に遥が言い放つ。

和は今発せられた言葉が本当に目の前にいる人物が音にしたのかと疑いたい衝動にかられた。

彼はめちやくちなことをたくさんやっても、和を傷つけるような事を

一切言うことはなかったからだ。

あとから冷静になれば、このとき遥が懸念していたことはよくわかる。

理性で考えれば、かつて襲われた相手と進んでいっしょにいるなど誤解を招いても仕方がない行動だ。

詳しく話したくなかったのは詮索されたくないのと面倒くさがりという

元々の性格によるもので、携帯電話だってその延長上でしかなかったことだが

遥の不安をあおるには十分な材料だったろう。

それでもどこかしたらわかってもらえると甘んじたのは和の怠慢に他ならない。

しかし今和の心を占めるのは遥から投げつけられた理不尽な言葉の数々で、

普段なら到底行き着くはずの思考は、絶望に支配され目の前が真っ暗になっていた。

「屋上で言った言葉は、なにひとつ信じてくれなかったの…？」
ぼつ、と呟いたその声が、震えていると自身でもわかった。
こんなところでこんな風にするのは、卑怯だとわかっている。
どこか冷静な自分がそう訴えている。
けれども感情がすべてを押して、
和はとめどなく熱いものが瞳から零れるのを止められなかった。

遙の顔が、驚きとも恐怖ともとれるなんともいえない表情になっていくのがわかる。
しかしそれもぼやけた視界からはどんどん遠ざかっていった。
からだ全体を揺らして遙につかまれた肩を自ら解放すれば、
和は俯いて遙から距離をとった。

遙は、一連の動作を力なくながめていたが、やがて正気を取り戻しどちらが正しい正しくない関係なく、自身が吐き出してしまった言葉の残酷さに
みるみるうちに顔色を失くしていった。
あとずさったその一步分の距離をどうにかしたくて、遙はゆっくりと和に近付こうとする。

「和…」

そう言っつて、ゆるゆると手を近づければ、
和は確かな意思を持って遙のそれを払いのけた。

わずか、遙の瞳が揺れる。
それでも今ここで引いてはならないと思えば今度は両腕を伸ばす。
しかし和はそれより早くもっと大きく距離を取り、勢いよく顔をあげた。

「今は、和泉君に触ってほしくない！」

そう言い放ち、和は猛然と駆け出してしまった。

みるみるうちに和の後姿が小さくなって、追いかねければと遙は思う。

それなのに、彼の足は地面に縫い付けられたかのように動かなかった。

「最低つすね。」

その言葉にゆるゆると遙が後ろを振り返れば、今しがた火種になっていた人物を確認できた。

遙は遠慮することなく獰猛な双眸を時任に投げつければその視線を受けた本人は呆れたようにため息をついた。

「和先輩、俺にどうして傷の治療なんかしたんだって言ったんですよ。」

早く治そうとすんなって。まあ、冗談なんですけど。」

「……………」

「俺、それ本気にしちゃって。図書室で和先輩の前でおもいきりガーゼ剥がしちゃったんです。」

和先輩、慌てて廊下に引っ張ってって、なんて言ったと思います？」

無表情だった時任が、言葉を発する前に間をおけば、

明らかに怒気が含んだ顔になっていくのを遙は確認した。

「和泉君が殴ったと勘繰られたらどうするんだ、って。」

発せられた言葉の意味をすぐには理解できなかったが、

一瞬の後、その真意を読み取り遙は目を見開いた。

「まあ誰かがそう思ってもおかしくないですよ。和先輩があんたの恋人なのは

周知の事実だし、そのひとと俺が揉めててなおかつ女には作れない殴り傷こさえてたら

そういうネタが好きな人間なら誰だってあんたが殴ったのかって勘繰るはずだ。

まあ、俺はテンパっててそのときそんなこと考えもしなかったんだけどさ。」

「…本気で後悔してるんだ、和にやったこと。」

遙の言葉に、今度は時任が目を見開いた。

「どっして?」

「和の冗談全部真に受けちゃうほどいっぱいだったんだろっ?」

「……なんでさっきも、そのくらい冷静に彼女のこと考えてやれなかったんだよ。」

時任の指摘は尤もで、遙は沈黙する。

それに時任はため息を吐いた。

「俺が言えることじゃないけど…和先輩のあんな顔はもうみたくないですよ。」

させた俺が言うのは本当凶々しいけどさ…

大体、付き合ってる彼女にあんな顔させるのは最低ですよ。

俺、ふたりがうまくいってるあいだはおとなしくしてるつもりですけど

そうじゃないなら遠慮なくつけこみますから。」

その言葉に、遙が無言で時任を睨みつければ、時任もお返しといわんばかりにその双眸に応える。

しばしそうしてお互いに牽制し合い、時任は無言でその場を去っていった。

残された遙は、先程の時任に告げられた言葉を反芻していた。

『和泉君が殴られたと勘繰られたら』

遙にとって、和が素直に好意を示してくれるのは少々意外であった。けれどもそれは元々の和の性にあっていると今ならば思う。

誠実には誠実でかえす、が彼女の心意気であり、時任の反省を和は受け入れ赦した。

遙の気持ちを信じてくれたからこそ、彼女もそれを伝えてくれた。やっと手に入れた、なににも変えがたい信頼であったはずなのに。

「どっつして俺は…」

彼女を信じることができなかったのだろう。

後半は音として発することができずに、まるでそれが毒となったかのように

遙のからだの中に一気に苦いものが広がっていったのだった。

第三十六話「嵐の停滞」

「遙！お帰りなさい。ご飯は？なにか作る？」

「は？お前作れたっけ！？」

一人暮らしの家に帰ってきて、

明かりがついていたことに少しうんざりしたものの

信じられない言葉に遙は思わず普通に会話を交わしてしまった。

靴を脱ぎながら、出迎えられたその相手にすっとんきょうな声をあげる。

まるで新妻よろしく、自然な動作で遙の鞆を受け取れば、失礼ね、と実花は頬を膨らませた。

「これでもお料理は得意なのよ。

男のひとはまず胃袋をつかめってよく言うじゃない。」

「ああそう、それじゃあいいひとみつける気になったわけだな。」

「遙！私はあなたしか好きじゃないわ！！私は遙と結婚するんだから！！！！」

「それは無理だって言っただろう。」

「もう遅いわよ。両家はもう決めてるんだから。」

「そんなのどうとでもなるだろう？」

「さあ、どうかしら？」

「実花！」

「ご飯、作るわ。」

ぱたぱたとキッチンに走っていく実花を、ため息まじりに見送れば仕方なく着替えようと遙は自室へと入っていった。

遙の一人暮らししている部屋は2LDKで、高校生の一人暮らしに

はあまりにも広がった。

親に何度も1Rか1Kでいいと言ったのだが、両親は何を思ったのか同棲するにもプライバシーは必要だろうなどのたまったのだ。改めてその強引さにため息がもれる。

今まで、強く反発しなかったのもいけなかったのだろう。

築年数はそれなりに、都心でもないため家賃はそこまで馬鹿高いわけではないが

それにしただって安いわけではない。

新卒で就職したての若者にはとても払える家賃ではないことを思えばまだ高校生の身分でこんなところに住まわせる親の神経を疑いたくなつた。

意地で毎月送られる諸々の生活費には遥は手をつけていない。

貯金はどんどん増えていく一方だが、卒業したときにそれらをすべて綺麗な状態で親に戻そうと遥は考えていた。

色々な事に思考を巡らせていけば、肝心なことを忘れるところだったと

慌てて遥は電話をかける。

『遥君？どうしたのー？』

「依子さん、すみません、今日は伺えなくて。」

その上、和をひとりで帰してしまっただけ……」

電話相手は恋人の母親であったが、それを感じさせない気安さが和の母親の依子にはどこかあった。

それは父親の高明にもいえることである。

電話口で依子はからからと笑っていた。

『いいのよっ、そんなことー。それよりも…喧嘩でもしちゃった？』
「はあ、そんなところですよ。」

顔が見えるわけではないのに思わず苦笑いを浮かべてしまう。
そんな遥をよそに電話口で依子はあらあらあ、と間延びした声をあげた。

『どちらがどうというわけではないけれど…
なるべく早くどうにかしたほうがいいわねえ。』

「え？どうしてですか？」

『和ちゃんてね、よく怒ってるイメージあるとは思っただけど
実は本当に怒ることって滅多にないのよ、瞬間的に爆発することは
あるけれど。』

「ああ…」

瞬間的に爆発、という言葉に遥は数々の和が頭を過ぎる。

親しくなって日が浅い自分でもこれだけ浮かぶのだからけっこう沸
点は低いのだろう。

まあ、遥故、というのも考えられなくはないが。

『でもね、喧嘩に発展するほど怒るってほとんどないの。彩ちゃん
とも』

喧嘩らしい喧嘩って数えるくらいしかしたことないんじゃないかし
ら。』

「そっついわれたら…そうですね、継続して怒ってるところってみた
ことがないかも。」

『でしょっ？だからねえ、そうなっちゃつと長いのよあの子。』

「長い？」

『持続性が強いっていつのかしら。納得いかないとことん戦う子
だから…』

相手が本当の意味で謝ってると思えない限り許さないって所があるのよ。

多分、形だけで頭を下げてても意味ないと思うわねえ。

彩ちゃんと一ヶ月冷戦状態だったことが確か一回、あったわ。』

「一ヶ月!？」

あまりにも長い期間に遥は驚いて声を上げてしまう。

それに電話口で依子がぐすぐすと笑った。

『あれはねえ、彩ちゃんがほっぽっちゃったのが原因なのよ。

喧嘩の内容は覚えてないけれど、初期段階で誠意を見せないと長期化しちゃうのよね。』

「そうなんですか…なんとか頑張ります。」

『大丈夫よ、遥君なら。』

「…ありがとうございます。」

依子の優しい声に、遥はじんわりと胸が温かくなった。

しかし今は感傷にひたっている場合ではないと思えば、

いちばん訊かなくてはならないことをいまだきいていないことに少々焦る。

「あの、それで、和は無事に帰宅してますか？」

『ああ、それを気にして電話をくれたのね？和ちゃんは本当に幸せねえ。』

うふふ、と笑うその声が電話越しなのにどこかくすぐったくて、

遥はなんともいえず複雑な表情になっていた。

『和ちゃんね、広末君のところに行ってるのよお。さっき連絡がきたわ。』

「あ、そうなんですか。」

『ええ、もし心配なら連絡先教えておきましょうか？』

「ああ大丈夫です。知ってますから。」

『そう？それじゃあ遥君からよろしく伝えておいてね。』

「はい、あの、ありがとうございます。」

『いいえ、仲直りしてもいなくてもいつでも遊びにいらっしやい。』

依子のその言葉に、和の片鱗を垣間見て一瞬、背中が寒くなったが遥はすぐに声をあげて短く笑った。

「……ふたりでそろってまたうかがいますね。」

『うふふ、待ってるわ。それじゃあ。』

「はい。」

ぷつ、と電話を切れば、ため息をひとつ吐いただけでひとつの連絡先を表示させればすぐにまた発信ボタンに手をかけた。

「…電話だな。」

「珍しいね、広未に電話がかかってくんの。部屋出てようか？」

「ああ…や、待った。遥君だ。」

和と広末がいる部屋に、着信音が鳴り響いている。
元々広末の私室であるため、和は退席しようかと思っただが
発信者の名前を見れば、それは和にも馴染みのある人物であった。

遙、との答えに和がクッションを握り締め、身を固くする。
それにひとつため息を吐いて、広末は電話に出た。

「もしもし？ああ、おばさんから？そうなんだ。

…うん、居るよ、大丈夫。なにか伝えようか？…わかった、それじ
ゃあ。」

短いやり取りをして、広末はびつ、と電話を切った。

それに少し驚きつつも疑問で、和は目を丸くする。

「もういいの？」

「ああ。お前の安否の確認だったから。今日、送れなかったからっ
てさ。」

最初はおばさんに連絡してここだって聞いてわざわざ俺に電話かけ
たんだと。」

「……律儀な」

「なにか伝えようかって言ったら、なにを話すにしても直接自分で
言いたいからだったさ。」

本当、お前にメモメモもいいとこだなあ。」

「そのさー、なんなのめろめろって…なんか響きが嫌だよ。」

「いいじゃないか可愛くて。」

「真顔でそういうことを言うなっつての。」

和は広末の言葉にしばらくはくすくすと笑ったが、
すぐにそれをため息に変えていた。

和のいつまでも沈んだ様子にわずか広末は眉を顰める。

「経緯は聞いたが…冷静になって自分も駄目な部分があったってわかってるんだろ？」

「それはもちろんね。でもなあ…なんというか、考えちゃってね。」
「なにを。」

広末の問いかけに、和はしばしうん、とうなりつつ考える。
うまく伝えられるかと逡巡しているようだ。

「和泉君のあの言葉は、弾みだったとしても心のどこかで過ぎった本音だと思う。」

だからこそ、あれを流してしまっていていいのかなあ、って悩んじゃう。私ね、思ってたの。どちらかでも相手を信じられなくなってしまったら終わりだろうって。」

「遥君は和の事を、信じていない、と？」

広末の言葉に、和はうなずいた。

「和泉君はさ、けっこう嫉妬深いって感じてたよ。でもね無差別じゃない。」

広末の事、完全には納得してくれないとしても理解しようとしてくれるのわかる。」

じゃなきゃこつやって家をたずねるのを許してくれるはずがないから。」

今さ、多分、婚約者だっという女の子が一人暮らしの和泉君の家に居ると思うの。」

「は!？」

喧嘩の原因は訊いていたが、実花についてはなにひとつきいていな

かった広未は
驚いてひっくりかえった妙な声を上げてしまう。
何事かを言おうとするが、和が手でそれを制する。

「和泉君はそういう関係じゃないって言ってたから。
それにね、憶測でしかないけど私と広未と似た空気をどこか感じん
のよ。」

ほぼ感覚というか勘なんだけどさ。

「少なくとも、和泉君にとって彼女は大切な存在なわけ。
でも私がそれを理解しないのってすごい苦しいじゃん？」

私だって、和泉君にもしももう広未と会うなって言われたらすごい
辛いつて思うよ。」

なんで男同士じゃなかったんだらうとか、同性だったら良かったの
にって

ともすれば和泉君も広未のことも憎らしく感じたかもしれない。」

「和……。」

「こういうの理解して呑み込んでくれるのってすごく稀だと思う。
広未っていう存在が私の中で成立するんだから、和泉君と松永さん
だって

異性同士ではあるけれど関係として成り立たないなんてつっぱねら
んない。」

「でも事情が違うんじゃないのか。その松永って人は遙君を好きな
んだらう？」

「でも、妹としか和泉君は見れないんじゃないかなあ…だからこそ
辛いのかなって。」

松永さんも、どうも視野が狭い所があるからねー…なんとも。」

「まあ、言わんとしていることはわかったが、それで？」

「うん、だからね…私は和泉君を信じようと思うし、彼もそうだと
思ってたけど

それは私の独りよがりな部分がすごくあったんだらうって。」

怠慢だったんだよね。彼の好意に甘えてた。

繰り返さないって今は思っても、またこんな風に揉めていずれ疲れちゃうのかなあって。

そんなこと考えたら、先は果たしてあるんだろうかって思っちゃった。」

「その先をよみすぎるのどうかと思うんだが。俺たちまだ高校生だしもうちょっと刹那主義でもいいんじゃないのか？」

「なかなかねえ…和泉君の気持ちが重いつて感じたことはないんだけど」

どうにも安心して過ぎる所があると思うんだよね。そのへんのバランスが取れないと

厳しいって思わない？」

和の言葉に、広未は首を傾げつつもしばらくして

否定的な物言いをする。

「そんなことはないんじゃないか？」

むしろ、お互いの心が完璧に釣り合ってるカップルのが珍しいだろう。

大なり小なり、どちらかに傾いてるのが普通だと思う。」

「でもそこが大きすぎるとやっぱ崩れちゃうんじゃないかなあ。」

「それは、お前…惚気か？」

「違うっつーの！真面目に！！」

「でもお前だつてかなりもう好きなんじゃないのか？」

態度が冷たくみえるかもしれないが、それは性格的なことであって気持ちの大小ではないだろ。」

「…逆に私のほうが大きくなってるかもしれないね。」

「それ遥君の前で言えるか？」

その言葉に和は勢い良く首を振る。もうそれが答えのようなものだ。

結局、遙の気持ち之余りにも巨大であることに和はとっくに気が付いているのだ。

「いいじゃないか、たくさん与えてもらえるんだから。」

「返せるかがわからないし、和泉君が一方的に疲れちゃうよ。」

「お前なあ」

「今回のことだって、私すごいショックだったけど裏を返せばそれだけ和泉君は

私に優しい言葉しかかけてこなかったってことじゃない？

いつの間にそんなに甘えてたんだろ。あんなに泣くなんて信じられない。最低。」

「気を遣いすぎる所があるんだよなあ、和は。」

勉強机に備え付けの回転椅子に腰掛けていた広未は、ベッドに背を預けて床に座っている和の隣に移動した。ふ、と苦笑いをして、和の前髪をかきわける。

「どうでもいい人間は本当におざなりなくせに、親しい人間を大切にすぎる。」

「そんなことないよ。」

「そうじゃなきゃこんなことで悩まないだろう。」

……まあ、別れるなどは言わないけど。

結論を出すのは早すぎると思うぞ。まずはきちんと遙君が納得しないことには。」

「うん、それはわかってる。一方的に言うてはいサヨナラってわけにはいかないよ。」

「まあ…応援していいかもわかんないが、頑張れ。」

「…ん、ありがとう。」

本当は、はっきりと別れるのは反対だと言いたいのだろう。

それなのに広未は和の胸中を思っ言葉を飲み込んでくれる。それがとてもありがたいと感じた。

「ところでさあ。」

「ん？」

隣に座る広未にちらりと視線をやれば、どことなく雰囲気が変わったのがわかったのか

広未はいかにも嫌な予感がする、という身構えをしていた。

やにさがった顔を作る前からこういう態度に出られては少々つまらない。

言おうと思っていたことを、和は途端に切り替えようと決意した。

「広未、校門の君っていう二つ名がついてるよ。」

あ、和泉君か宮田君に聞いた？」

「ああ…聞いた。ずいぶんと愉快的な名前がついたもんだよな。」

「皆、けっこう良いネーミングセンスしてるよねー。」

「うるさい。」

軽く小突かれて、広未の顔を軽く笑いながら盗み見ればすっかり警戒を解いた顔をしている。

「口説いてる子とはどうなったの？」

和の言葉に、広未がびき、と固まる。

次いで、ぎろり、と和の顔を睨んだ。

「あれ…ふ、振られた？」

「違う！お前…いつから」

「そんなの。あんただってわかるでしょうよー。私の変化とか。」

「ちつ…そつち方面全般鈍いわけじゃないの忘れてたな。」
「自分の事に関してだけってか。」
「よくわかってるじゃないか。」
「さんざん周りに言われましたので。」

話が逸れそうになったので、和はすかさず軌道修正をはかる。

「でー？どうなの？」

和はどうしてもにやつきを止められず、広未が舌打ちをした。

「まだどうともなってる。そろそろ捕捉するかな、とは思ってたけどな。」

「あんだね…女の子は獲物と違うわ。」

「ちよつとした比喻表現だ。」

「ま、俺がうまくいってお前が失恋なんてことにならないよう祈ってるよ。」

「えらい自信だなあ。今回のひと…なんか今までと違うみたいだね？」

「俺たちは、こういうことまで気が合うんだかな。時同じくして、か？」

「私は今までがないからわかんないけど…」

「いいじゃないか、最初で最後にしても。」

広未の言葉に、和はしばし逡巡すれば、ひとつうなずく。

「まあこればかりは。なるようにしかならないね。」

「…まったくもって。」

和がうなずいたのちに導き出した答えはしごく単純であり

ともすれば投げやりになっているような物言いではあったが、
広未はこれにたいして全面的に納得したようで同じく深くうなずい
たのだった。

翌朝、和はいつもの時間、いつもの通り教室に着いた。

果たして遙は、何時に来るだろうかと考えて。

携帯の電源はずっと落とすままだ。

考えてみれば遙とのがなくなるのならば、もう必要もないかも
しれない。

そう思えば、自分がひどく遙に依存しているように思えてしまい、
和は自嘲して考えを改める。

携帯電話は結局いつかは持つ事になるのだし、
家族とのやり取りや遙がきっかけでも今は大切な友人も出来た。
わざわざ解約する必要もないだろう。

『万が一は着信拒否にでも設定すればいいんだよね

…まあ、別れを惜しんでくれるかどうかもわかんないけど。』

広未は相手次第だと言っていたが、和の心はかなりの決意を持って別れを思っていた。確かに広未が言うように、早すぎる結論なのかもしれない。けれどそれでも、

また同じ事が起こって、また同じ事を言っ、言われて、を繰り返していつか疲れてしまったら。

そうやって相手にうんざりして別れるのが、和は辛かった。

これからも同じ学校に通うのだし、

廊下ですれ違ってくるにはするだろう。

そうなったとき哀しくとも、

楽しい思い出が過ぎるほうが嬉しいと和は思った。

自分の驕りを、浅ましさを、

これから先改善する自信はない。

きっと何回も自分は慢心するのだろう。

遥が自分を信じていないというよりも、

その心を作ってしまう位置に自分が甘んじている事実が

和には空恐ろしかった。

いつか失望され、うんざりされたら、きっと和は耐えられない。

そうだ、遥の優しさを永遠に失うのが、きっと怖いのだ。

身勝手だと思われてもかまわない。

今別れてしまうほうが、ずっといい。

瞳を閉じて彼の事を考えれば、和はせつなさに胸が震えた。

そっとその目を開き、ひとつ長い息を吐けば、

和はただの塊になっていた機械に命を与えた。

電源を入れた携帯電話はその役割を存分に果たしたいかのように遥の着信とメールでいっぱいになっていた。

着信履歴は昨日の夕方以降ひとつもなかった。

おそらく、広末と会話して和の無事を確認したからだろう。

それでもメールはかなりの頻度で打たれており、相変わらず筆マメだな、と苦笑する。

内容はやはり日常的なことだったり合間にご機嫌伺いのような恥ずかしくなる愛の囁きめいたものがある。

その中には、実花が家でご飯を作ったというものがあり、和はああ、やっぱりなあ、と納得した。

『和泉君、松永さんの存在があったから私と広末の事理解してくれただんだな。』

そうでなければまあ、ただの浮気かもしくはあっちが本気でこっちが浮気になるわけだが。

どちらにしても、もしそうならこの堂々ぶりは素晴らしい。

別れの理由は、いつそこちらのほうが納得してくれるかもしれない。女の醜い嫉妬心というやつだ。

しかし、最後の言葉に嘘をつくのはどうしたってためらわれる。しばらく悩んだが、やはり本音をきちんと話そうと思いついた。

ひとつのメールを短い文章を打ち、送信する。

便利な時代になったものだな、と和はまじまじと電話をみつめれば

とある歌の歌詞を思い起こす。
例の変態が褒め言葉という和お気に入りバンドだ。

なんとなく、誰もいないのを良いことにそれを口ずさめば
和はふ、と息を吐き笑った。

「…まったくもって。」

そのヴォーカリストの作った言葉に、和は全面的に納得すれば、
ふとそのものが聴きたくなって、音楽プレイヤーを取り出した。
耳にあてれば、作った本人の歌唱で
その言葉によりいつそう説得力をもたらした。
絡まった気持ちは、世代を超えて、いつの時代でも同じである。
淡々としたその声に、和は苦笑する。

「まったくもって、そのとおり。」

和は呟いてもう一度笑った。

「和、遥と喧嘩でもしたの？」

「ん？んー…そんなものかなあ？」

昼休み、中庭にて梓と和はお昼ご飯を食べていた。

中庭はひとで賑わっているが、逆に内密な話をするにも
うるさくてちょうどいいのだ。

「今日、遙がどこか変だったのよ。まあ、喧嘩の理由はわかりきってるけどね。」

「ああ、もし松永実花嬢の事を言っているんだとしたら違うよ?」

「え!? だって、あの子、遙の婚約者って周りに触れ回ってるのよ!?!?」

「みたいねえ。派手好きなのかね? 注目されるのが全然嫌じゃないなんて」

異次元みたいなひとだよ。」

「和も相当だと思っわ。」

「失礼な。」

笑う和の横顔をみて、梓はかぶりを振った。

どうにも和はのらりくらりと話をはぐらかす天才らしい。

浩平とどこか似ている、と梓は一瞬だけ過ぎったがさすがに彼ほどのいやらしさはないな、と思い直す。

「和…気にならないの?」

「ならないわけでもないけどねえ…」

家同士で無理矢理くつつけられそうになってるんなら和泉君に同情しなくもないし。」

「なによその他人行儀な感じは。」

梓の指摘に和は苦笑する。

心が決まっている今の状態ではどうにも意識しないと過去形で話してしまうようだ。

「ただ、嫉妬っていう意味では全然ないよ。」

どこか私と広未を思わせるからあのふたり。ちょっと違うけど似てる。」

「それって…その、半身っていう？」

「までいかないだろうけどね、なんていうか、和泉君は妹みたいに
見えて

完全に対象外として扱ってるからね。あれに嫉妬はしないよ。」

「じゃあ、なにが原因なの？」

「…大丈夫、すぐに解決するからさ。」

「…本当に？」

「うん。」

和の軽い物言いに、梓は安心したように笑った。
もちろん、和は嘘などついていない。

『すぐに解決するよ、別れるんだからね。』

頭で大体の暦を反芻してみれば、およそ一ヶ月だ。
ずいぶん短かったな、と和は自身に呆れかえった。
まさか、自分から別れを切り出そうとは。

終わりの想像は、いつも相手からであったのに。

目の前にいる梓に少しの罪悪感を覚えつつ、和はご飯を咀嚼した。

「遙、なんでずっと電話ばかりみてるの？」

「んー？別に、なんでも。」

遙の教室でふたり並んで昼食をとるさまは、
周りの注目の的であった。

遙の隣にいるのは梓でもなければ最近出来た溺愛する彼女でもない。

そこにいるのは、婚約者だと言って憚らないひとつ下の少女である松永実花だった。

和からの短いメールの意味を、遙は色々と考えていた。

特段、暗号めいたものが使われているわけでもなく、ただ指定通りに行動すればいいだけだ。

それでも、様々な予感が頭を巡ってはぬけていく。

とにかく彼女の言葉をきちんと受け止めたいと思うし、自分の気持ちもきちんと伝えたいと感じる。

「ねえ、土日帰ってくるのよね？」

「ああ、もちろん。きちんと実花と結婚しないって親に言うよ。」

「遙！」

「あお、何度も言うけど。」

お前の事は大切だけど、それは女としてじゃない。

今まで特別なひとと出逢わなかったから

ぼんやりとそうしてもいいかと宙ぶらりんにしてしまったのは事実だ。

それは何度でも謝る。でも、今の俺にはできないんだよ。」

「……訊きたくないわ。だって遙はいいよって言ったもの。」

「ごめんな。お前がそれ程本気だと思っていなかったから」

「訊きたくないって言うてるでしょう！……私、教室戻るわー！」

「実花……」

席を立った婚約者を名乗る可憐な少女を遙は呼び止めなかった。

公衆の面前でする話ではなかったとわかっている。

けれども彼女の暴走のおかげで、すっかり学校中に噂が広まってし

まった。

和が今後どんな立場にたち、なにをされるかがわからない。

今の遥は、和を守る事を最優先に考えていたし

なによりもこんな男だったと失望してくれることを相手に願っていた。

ひとつため息を吐いて、何度も開閉を繰り返していた携帯電話に目をやる。

一通のメールを開いた画面のままで、遥はそれをもう一度みつめる。

『今日の放課後、屋上で話がしたいです。』

簡素なその文章が果たして怒っているのか悲しんでいるのか
遥にはまったく想像ができなかった。

それでも、絵文字や顔文字を一切使うことをしないのは
なんとも和らしくて愛しさがこみあげてしまう。

放課後までの時間が、ひどく長く思えて、

遥は電話を握り締めた。

「…和。」

呟いたその声は、せつない響きを含んで教室の空気に溶けていった。

第三十六話「嵐の停滞」（後書き）

ただ今、短編のネタを広く募集しております。

よろしければご協力いただけると幸いです！

詳しくは9/13の更新頻度について。というブログ記事にて。

下記の文字をクリックしていただくとブログにとびます。

第三十七話「二つ目の嵐」

「和？」

「！和泉君……」

屋上へと続く階段の途中、

後方から声をかけられ振り向けばそこにいたのは遥であった。

これは今までになかった展開だ、と和が小さく笑えば、

遥もまたくすり、と笑った。

「良かった、和のが早く来ちゃったらドアの前で待たせることになつてたね。」

「ううん、この場所指定したの私だから、そんなの全然大丈夫。」

そんな会話を交わしつつ、遥が屋上出入口の扉を開きにかかる。

鍵が開錠される音がひどく大きくきこえて、和はわずか肩を揺らした。

遥にどうぞ、と扉を開いてうながされ、お礼を言いつつ扉をくぐる。

つづいて遥が屋上へと歩を進めれば、がちやり、と唯一の逃げ口を

封鎖する。

なるべく動揺しないように、和はその様子をながめていた。

言い逃げはできないということだが、果たしてどうなるか。

とにかく、遥にわかってもらうしかない。

和は改めて気合いを入れれば、ふうふう、と息を吐いた。

「和、まず謝らせてほしいんだ。」

あんな風に、ひどいことを言って泣かせたかったわけじゃない。

嫉妬心でいっぱいになって、あんな傷付けるようなことを言った。

本当にごめん。本心なんかじゃないってわかってほしい。」

「それは…私も悪かったから。」

面倒がつて、和泉君に訊かれたことをきちんと答えなかった。それなのに泣いたりして、ごめんね。」

先に遥から謝罪を述べられてしまい、和は一瞬虚を突かれたように焦ったが

なんとか表には出さず和も同じように謝った。

「それじゃあ、もう、俺の事許してくれるの？」

「許すとか許さないとかじゃないよ…」

和泉君に、苦しい思いをずっとさせてたって痛感したし。」

「和…？」

「あのね…私、和泉君の気持ちに甘えてたと思う。」

毎日のように感じる気持ちの大きさにすごく傲慢になってたんだって思った。

だから、当たり前前みたいに和泉君が私の事信じてくれるって決め付けてたの。」

「そんなことないよ！俺がいけなかったんだから。」

俺が和を信じられなかったのがいけないんだ！」

「そうやって…和泉君はいつも私を責めずに自分を責める。」

どっちかに比重がいけば、どっちかばかり苦しむよね。

今は好きだからそう振舞えるかもしれないけど…

いつかきつと疲れちゃうんじゃないかって思う。

ううん、きつとそうなる。

私は何回だって間違えてしまう。驕ってしまう。」

「いいんだよそんなことは。そんなこと小さい事じゃないか…！」

遥は、和が言いたいことを察してしまったようだ。

必死に和の言葉を否定しようと声を張り上げ、

ついには和を引き寄せ強く抱きしめた。
遥のぬくもりに、和の心は震える。

「俺の気持ちはずいぶん甘くみてるね？」

和が俺の気持ちに驕ってくれるって？ 光栄だね。

やっとそれだけ俺の気持ちが大きいつて自覚してくれたんだから。」

「和泉君。」

「いつか疲れる？ 俺の気持ちが枯渇するとても？ ありえない！」

「先のことなんて言い切れないじゃない。」

「そうだよ、だから和の言葉だつて言い切れない。」

「私はね、安心してしまつて

そういう心遣いをたびたび忘れるのは言い切れるんだよ。

だつて好きは好きだけど性格的なものなんだもの。

どうしたつて追求されれば土足で踏み込まれたようで

気分が悪くなつちやつて、反発したくなつちやうんだもの。」

「そんなのわかつてるよ！ 和はそういう性質なんだからいいじゃないか。

い。

それでも好きだつて言ったのは俺なんだよ？」

「だから、それじゃ絶対についてか無理が重なつて、

私の事…きつとあのときみたいに冷たい目でずっとみるようになる

の。」

その言葉に、遥の胸が強く痛み、無意識に彼女を抱く腕に力をこめた。

あるとき自分は、どんな表情で和をみつめたのだろう。

そんなに冷めた目をして彼女を視界にうつしてしまつたのか。

そのせいで、今、なによりも大切であるはずの恋人が傷付いている。

そう痛感すれば、遥は昨日に戻つて

そのときの自身を殴り飛ばしてやりたいと強く思う。

本当ならば、どろどろに甘やかしてしまいたいと思っているのに。毎日そうやって呪文を唱えて、やがて自分なしでは呼吸もできなくなってしまえばいい。そうすれば、彼女は永遠に自分の傍を離れられなくなるのに。

「和泉君、あのね、お願いがあるの。」

「……………駄目。」

「ええー、いつもなら嬉々として訊いてくれるのに。」

「頭ならいくらでも撫でるよ。」

「そうじゃないってわかってるんだよね。」

「もう人前で抱きつくなくなって言うんならそうする。」

「人前じゃなくても出来なくなるね。」

「和。」

「あのね、和泉君。」

「和!！」

なんとかしてでも、その先を言わせたくなかった。

訊きたくもなかった。

どうしたって、自分にはそれを受け入れられないのだから。

「私と、別れてください。」

どうして?

なぜ?

和は…彼女は

「俺の事…もう好きじゃなくなっちゃった?」

その問いに、和はどう答えたものかと考える。

好きなのかと問われたら、間違いないイエスだ。
今も変わらずに彼を好きなのだから。

けれども、それを言ってしまうえば、遥は決して離してはくれないの
だろう。

ならば、ここは嘘をつかなければいけない。

それをしたほうがむしろ相手も傷付かない場面なのだといい聞かせ
る。

「うん、好きじゃなくなった。ごめん。」

震えないように、かといって不自然な一本調子にもならないように。
気を遣ってつかって、なんとかその言葉を吐き出した。

解放してくれるだろうかと過ぎった次の瞬間、

遥は和の唇にその唇を押し付けた。

あまりの性急さとその激しさに、和は目を見開く。

「んんっ……」

苦しさに声をもらして、和は身を振らせる。

しかし遥の腕はそれを赦さず、後頭部にもいつの間にか手を添えられ
深くなる口付けから逃げるができない。

何度も唇で唇を吸われ、甘い痛みが走る。

思わずもれそうになる声を必死で抑えようとしても
心地良いと感じてしまう刺激に唇は半開きになる。

それを良いことに遥の舌が無遠慮に和の口腔へ侵入を果たせば
ついには和の口から甘い吐息がもれた。

「ふ、ん、…っ」

和の吐息に興奮したのか、遙の息遣いもいつになく荒いものになっていた。

夢中で和の口腔内を遙の舌が這いまわり、逃げ惑う和の舌をとらえれば、隅々まで舐めとり時に強く吸い上げる。

同時に唇までも貪るように吸われれば、あまりの刺激に和は悲鳴を上げそうになった。

どれほど長い間そうしていたのか。

やがて、和の口端からもれた唾液もすべて舐め終えれば

遙は和の唇をそつと解放した。

いつものように、和の膝はがくん、と折れそうになるのですかさず遙は腰に手をまわす。

「……嘘つき。」

耳元で囁かれた言葉に、和はびくりと体を震わせた。

「好きじゃないなんて、嘘つき。」

「!?!」

遙に言われた言葉が脳に伝達されて和はみるみるうちに顔が赤くなった。

好きでもない男にあんな激しいキスをされて黙っている彼女ではない。

「…そうだね、やっぱり嘘は良くないよね。」

「……………」

「私はまだ和泉君のことが好き。それでも、別れたい気持ちは嘘じゃない。」

もう、気持ちは固まってるから。」

まだ少し息を荒げながらも、和は懸命に言葉を紡ぐ。

「なんで？どうして別れないと駄目なの？」

俺は疲れたりなんかしない！和が傍にいてくれる事だけが俺の幸せなのに。和がいないと死んじゃうのに！」

「……それは勘弁して。重すぎるし死なれても困るよ。」

「そう言われても本心だから。」

「…あのね、本音を言えば私、もう傷付きたくないんだよ。私はね思ってる以上にあなたが好きなの。」

だから本心じゃなかったとしても、もうあと一回でも

冷たい目で見られるのがきつと嫌なの。耐えられないの。」

「もう、そんな目で絶対に見ない。」

「私のこと、一瞬でも軽蔑したでしょう？」

「してない！あんなの、あんなこと…言いたかったんじゃない！！お願いだよ和。たった一度の間違いで別れるなんて酷すぎる。もういつかいチャンスくらいくれたっていいじゃないか。」

「…ごめん。」

強く抱きしめられて、いまだに鼓動は高鳴る。好きだと感じる。

それでも、心のどこかが冷えているのがわかるのだ。

どうしたらいいんだろう、自分でもわからない。

ひよつとしたら、無意識下でまだ気になる事があるのかもしれないが

ひどく疲れたと感じてる和には思考を働かす力が湧かなかった。

「……赦さない。」

「！」

「絶対に、別れない。了承したりなんかしないよ。」

俺は、和の傍を一生離れたりしない！絶対にその願いだけは叶えられない！！」

「和泉く……」

「別れないって言って。そうじゃなきゃここから出してあげない。」

ああ、やはりそうきたか。

和は心のどこかで予想していた事態に、面倒なことになったな、と冷静に考えていた。

「……帰ろう。別に、今すぐについてわけじゃないよ。」

和泉君がわかってくれるまで、私は何度でも話し合いに応じるつもりだから。」

「……和。」

「本当だよ、逃げたりしない。どこにも行かないから。」

「……あのね、本当は、こんなこと言いたくないけど。」

遙が腕の拘束を解き、少し屈んで和の頬を包み込めば、じ、と和の顔をのぞきこんだ。

視線が絡み合い、和は僅かどきりとする。

「……なあに？」

「もしも、和が逃げたら。」

「うん？」

「今度こそ、俺はなにをしようかわからない。」

捕まえて、閉じ込めて、一生誰にも見られない場所に和を拘束してしまうかもしれない。」

「い、和泉君。」

「あのね、冗談じゃないから。こんな奴に好かれちゃったのは本当に可哀想だと思うよ。でもね、和じゃなきゃ駄目なのはもうどうしようもないんだ。」

「ええと…私はどう答えればいいのか。」

そんな事を言われたら、別れ話なんて絶望的なのではないだろうか。心底困った顔を和がすれば、遥は苦笑した。

「たとえば…和の心がもう俺をうつつさなくなったら、和をどうにかしようとは思わないかもしれない。でも…こんな残酷なことを言われて、俺は正気でいられないよ。」

あまりにも苦しそうに、痛みに耐えかねたかのように、遥が和をみつめる。
もれる声音はひどくせつなくて、言われた言葉に和は泣きそうになった。

「…ん、わかった。そこまで好きだって言われるのは…ええと、どう反応したらいいのかわかんないけど。」

とにかく、本当に逃げる事はしないから。無理に別れようとは思っていない。「

「本当だね？だったら俺はうなずかないよ、絶対に。」

「とにかく、しばらくはひとりでいたいから。話し合いには応じるけど

周りをまとわりつくのは控えて。送り迎えもナシ。」

「そんな…」

「危ない時間には行動しないから。」

「でもやっぱ…」

「和泉君、お願いだから。これくらいはきいてくれてもいいでしょ

う。」

「……ずるいな、和は。」

渋々といった風情で遙がそれを了承する。

和はそれに苦笑するも、うなずいてくれた事実にはっと息を吐いた。

「それじゃあ、帰ろう?」

和のその一言に、ほどく敏感に遙が反応する。

ぴくり、と震えたかのようにみえた遙を、和は哀しげに見つめた。

その視線に遙はふ、と息を吐けば、ゆっくりと屋上出入り口へと向かう。

『がちゃん』

塞がれていた唯一の扉が開かれ、和の全身から力が抜ける。

遙が扉の前で和を待っていたので少し小走りで向かえば、急がなくていいよ、と

遙が泣きそうな顔で微笑んだ。

「…今日は送らせてくれる?」

「前みたいに、駅までだよ。そこからは別々なんだから。」

「けち。」

「けちじゃありません、交通費だってかかるんだからね!」

「まあたその話?」

「当たり前です。いいから行こう、それこそ遅くなったのを口実にされたら

私だって困るからね。」

「…はいはい。」

まるで付き合う前のような状態だと思いつつも、一ヶ月口をきいてもらえないのと果たしてどちらが辛いのかと考え、別れないと言ってくれるならば、それでもかまわないのにと結論付ける。

気持ち的にはそれはとても辛いことであろうが、それでもその先には和とのまた変わりない恋人生活が待っているのだから

今の絶望に比べたらそんな所業も微々たるものだ。

それに一ヶ月を短くする努力はいくらだって出来る。けれど…

今の和の態度に、付け入る隙がまるでないと感じれば遥の心は氷のように冷えていくのがわかった。

どうして、あんなことを言ってしまったのか。

あんな態度をとってしまったのか。もっと、彼女を信じられたら。

彼女の言葉を訊いていたのなら。

後悔ばかりが襲って、それでも現状はこうなってしまったのだから、気持ちを切り替えるしかない。

決意すれば、遥は屋上を出た和を抱き寄せ、囁いた。

「和、大好きだよ。俺は一生大好きだからね。」

遥の言葉に、和の頬がほんのりと赤くなるのを確認すれば、少しだけ温かいものが遥の心に注がれるのがわかった。

約束通り別々のホームへと向かった遙と和は、それぞれの方向の電車へ乗って帰路に着いた。

地元駅へと戻りほ、と息を吐き出した和の背後から声がきこえる。ぼうつとしていて一瞬聞き取れなかったが、どうやら名前を呼ばれたようだ。

振り返れば、予想通りの人物がそこに立っていた。

「……広未。」

「同じ電車だったみたいだな。」

「…みたいね。」

呟くように返事をして、ふたりは並んで歩き出す。

「和。」

「んー？」

「昨日、俺に嘘ついたらだろ。」

唐突な質問に、和は一瞬眉を動かし、しかしそれ以上の動揺はみせない。

それでも広未はすべて察しているかのように笑っている。

「お前ああいう方面の話今までつつこんでくることなかったらう。それが昨日に限ってはやけにからかい混じりにひとをいじるから不思議だった。」

「…それは、私もお付き合いというものを経験したから興味が沸い

ただですよ。」

「まあ、ひとをからかうのはお前もよくやるけどあの場面でのあの方向転換は不自然すぎる。」

あれ以上話すとボロが出ると思った？嘘を隠したくてこっちを動揺させたんだろっ？」

広末の言葉に、和は舌打ちをする。

結局、この男にはかなわない。

彼の隠し事を暴くのは容易いが、それは裏を返せば向こつも同じなのだ。

思考回路が近いとこついつとき困る。

「でもねー、半分はずれ。」

「ということは、昨日の話は半分本気、か。」

「……まあね。」

「ということは、別れ話はした、ということか？」

「うん。」

即答に、広末はため息を吐く。

冗談で言うような、いや、言っていないことではないのだから当然だ。もしもこれがドッキリでしたー、なんて、それこそ洒落にならない。

「わかってるのか、その意味。…一度開いた溝を埋めるのは難しい。」

「埋まらなかつたら、それはそれでいいよ。諦めるから。」

「…今度はなにを企んでるんだ？しかも誰にも言わないつもりだったなんて相当だな。」

「んー？だからー、別れたいのは嘘ではないってば。」

「でも昨日の理由、あれ、全体の半分くらいなんじゃないのか。」

「……黙ってみてくればいいのにさあ。」

「これ以上はつつこむつもりはない。」

ただ、100%復縁するつもりはないのかっていうのを探りたかっただけだ。」

「あ、そう。」

「で？勝算はあるのか。」

その広末の問いに和は逡巡すれば、首を傾げた。

「これは、私の勝ち負けではないかもね。」

正直、私にはその感覚はないかなあ。賭けではある気もするけど、なんとなくちよっとおっせかいな傍観者っていう気分。」

「じゃあ、誰と誰の勝負なんだ？」

その問いかけに、和はにっこりと微笑んだ。

「彼の言葉をすべて鵜呑みにするんなら……」

和泉遥の人生をかけた大勝負になるんじゃないのかな？」

先程垂れ流された甘いあまい言葉の数々。

そしてそれらには狂気じみたものまであった。

一生軟禁されるってなに？

離すことなんてできないってなに？

そんな怖いこと言わないでほしい。逃げる気なんてなくともそうしたくなる。

「……まさか、ああもすごい反応されるとはねー。」

別れを切り出したときの遥を反芻しながら和が遠い目をすれば、

それに広未は苦笑をこぼした。

「お前、予想範囲内じゃなかったのか。多分、遥君の愛は一生枯渴なんかしないぞ。」

「それはどうかなー。一年経ってもあの状態なら信じてもいいけどね。」

「ということは一年続ける気があると。」

「だからー、わからないって！和泉君次第だから。」

「それ以上は言わない気が、まあいい。」

「それよりさ、今日寄って行ってよ。お母さんが淋しいを連発してるのよ。」

「ああ、おじさんまた出張か、帰りはいつなんだ？」

「土曜日には帰ってくるよ。でもまだちょっとあるし。」

「そうか、じゃあ寄っていくかな。わざとらしく話題転換されたことだし。」

広未の言葉に、なにも答えず和は笑った。

こればかりは、誰に相談する気もない。

『自己満足以外のなにものでもないしねー…』

偽善者かもしれないし、極悪人かもしれない。

とにかく、唯一感じているのは、遥への怒りなのだ。

「さあ、踏ん張りどころだよー、和泉君？」

その呟きに隣にいる広未はやれやれとため息をもらす。

和の心中が哀しみではなく怒りでいっぱいであることは、今はまだ誰も知らない。

もつとも、隣にいる彼は察していたかもしれない。

気が付けば、昨日からの傷付いた少女はもうすっかりなりをひそめ、いつもの何事かを企む凶太い彼女が顔を出していた。

第三十八話「動き出した嵐」

「和先輩！」

「時任君！？」

朝の誰もいない時間帯。

いつものように教室で本を読む和の前になんとも意外な訪問者である。

あまりにも驚いて少し大きい声をあげてしまった和は
ひとつため息を吐いて教室に遠慮なく入ってくる時任を見つめた。
彼は、敬語が抜けてからというものなにやらキャラクターが変わったと

和は思っている。

なんというか、おとなしかった控えめな男が
積極的になったようにみえるのは気のせいだろうか？

まあ、所々発散してくれるほうが、いつかのように暴走しないようには思うが。

「ここ、座って良い？」

「さあ？まだ向井^{むかい}さん登校してないからわかんない。」

「いや、この席のひとに了承得ようとしてるんじゃないってば！」

「わかってるわんなこと。言っておくけど私、天然じゃないよ？」

「それこそわかってるよ！」

「打てば響くねえ。」

「…ここ座ってても良いですか？」

「どつぞ？」

その言葉に、和の目の前に立っていた時任は席に着いた。

それをちらりと確認しつつ、和は本に視線を落とす。
するとすぐ近くでため息が聞こえるので、和は小さくふきだした。

「全部わかってるのになんでそういうことをするかな！」

「曖昧表現ばかり使うからでしょう、日本人でねえ。」

「いちいちここに座ってあなたと話したいんですけど了承をいただきますか、

なんて訊かないだろう！外国人でもそんなこと言わないんじゃない！？」

くつくつと笑いながら、和が本を閉じれば、

時任は完全に拗ねきった顔をしつつもなんとか平静を保とうと怒鳴らずに話を切り出した。

「一昨日、ちよつと牽制じゃないけど、和泉遥にむかついてたんで挑発するようなこと言っちゃったじゃないですか。」

「んー？ああ、あれかあ。」

そういえば、すべての引き金は彼の図書室でのあの発言だ。

それを思い起こして原因を忘れそうになっていた自分に気付いて内心呆れてしまう。

「なんか、揉めちゃったみたいで、すいません。」

「いいよ別に。和泉君が思った以上に尻の穴が小さい男だったといっただけで」

「…和さん。」

「あれ、先輩じゃないの？」

「だってこつちのが親しい感じがするし。」

「あんたね…何度も言うけど時任君は100%ないよ？」

「それは燃えちゃいますねえ。」

「骨は拾ってあげよう。」
「燃え尽きる気はないですよ。」

にやにやと笑う彼の雰囲気は、なんともいえず不穏なものがある。しかしこういう手合いはどうしたものか。いまだに慣れることがないのでうまく対処法がわからない。

「見込みのない相手と不毛な会話して楽しい？」

「未来なんてわかんないじゃん。」

「たとえ和泉君と別れても、時任君は無理だよ。」

「…なんで？」

「言わせたいの？わかるでしょう。」

後輩としては許しているけど、男としてのあなたは一生赦さないよ私は。」

きつぱりとした口調に、時任の瞳が揺れる。

傷付けてしまったのはわかる。

それでも、期待を持たせることだけはしたくないのだ。

同じ轍をそう二度も三度も踏めるものか。

「きつびしいなあ。まあ、こうやって話してくれるだけお人好しだ
けどね。」

「はいはい。」

「和さん。」

呼ばれて、和はため息を吐いた。

いたずらに酷なことを言わせないでもらいたいと思うのに
なぜ目の前の男はそれを察してはくれないのだろうか。

「時任君、いい？」

私は後輩の君は特に嫌いでもないし、いじりがいがあるとも思っているよ。」

「サド。」

「うるさい。…だけど、異性としては嫌悪しかないの。」

触られると自然と鳥肌が出るぐらいにはあなたを受け付けないの。だから、少しでも男を出すなら私に近付くな、生理的に無理だから。」

すべて吐き出し時任にわかったか？と問えば彼は机に撃沈している。それでも蚊の鳴くような声ではい、と返事をした。

「なんか…今更ながら過去の俺を殺したくなってきた。」

「うわあ、本当に今更だね。」

「和先輩。」

「…なに？」

「それでも俺は！男としての名誉回復に努めるから！

寂しくなったら利用するとかでも構わないから！

…都合良いだけの存在でも男としてならむしろ大歓迎だからね。」

「高校生男子の吐くせりふか？それ。」

なんつー不健全な、としかめっ面で和がうめけば、

時任は小さく笑った。

「なんかねー、片想いなんだけどちょっと楽しいです。」

基本的に、ふたりがいつも通り過剰に仲良しでいてくれればすぐに諦めつくと思うんだけどなあ。」

「それは…なんかすまんね。今はなんとというか和泉君次第かな？」

「…松永のことですか、それは。」

「ん？まあそれもあるんだろうけどねー。」

広末からは指摘されなかった箇所をぼんやりな後輩君に突かれ不覚にも和は動揺してしまっただが、ポーカーフェイスは崩さなかった。

『むしろそれがメインつか、ね。』

頭の中で思考を動かしつつ、目の前の相手を見る。

「…松永さん、クラスには馴染んでないの？」

「さあ、隣のクラスだから詳しくは…」

でも友達が松永と同じで1・5なんですけど馴染んでるって感じではなかったな。

話しかけられる男にはうっとおしそうにしてたし、

女子からは無視されてるみたい。」

「無視。」

「あの容姿ではありませんけど…」

学園のアイドルに転入早々、婚約者だっつきまっていますからね。でも和泉遥のほうはちょっとうっとおしそうにしてるでしょ？

それが余計に女子の反感買ってるみたい。」

『なるほど…そっちはそういえば考えてなかったなあ。』

考え込む和に、時任は不思議そうに声をかける。

思考深くにはまりそうになっていた和は、慌ててそれに反応した。

「ああ、ごめん、そうなんだ。」

「和先輩、どうしてそんなこと訊くんですか？」

「んー？だつて一応恋人の婚約者だよ、気にならない方がおかしくない？」

「そういった乙女的思考回路が果たして先輩に働くものなのか疑問。」

「失礼な。まあでも、そうだねえ…それが本当ならあまり気分の良い話じゃないな。」

かといって、私に出来ることなんてせいぜい和泉君に進言するぐらいだけだね。」

「敵に塩を送るような真似をわざわざすんの？」

時任の言葉に、和は目を丸くする。

その反応がわけがわからずに、時任は眉根を寄せた。

「敵って松永さんのこと言ってる？」

「それ以外にいないでしょうよ。って、和先輩…」

ひよっとして彼女の事、敵認定すらしてないわけ？」

「そりゃそうだよ、彼女は敵じゃないもん。」

「……………」

「言うておくけど、そういう意味合いじゃないよ。」

相手にもならないとかんなこと思ってないから。」

私にとって、彼女は敵じゃないってだけだからさ。」

「どうして？」

「なにが？」

「…疑問に疑問で返さないでほしいなあ。」

「だってなにが疑問なのかわかんないから。」

時任がなにか口を開こうとしたとき、

耳に障る甲高い叫び声がかきこえて、和はたまらず耳をおさえた。

それは時任も同じだったようで、顔中で不快感をあらわにしている。

声のほうを振り向けば、遙と実花が並んで2・3出入り口に立っていた。

実花は目を剥いて和と時任を指差す。

「遙！あんな女さっさと見切りをつけるべきよ！！」

「……実花。」

「だって浮気してるじゃない。」

蔑んだような視線を実花から向けられ、和はどういう顔をするべきか迷う。

特段怒りはないが、なんとも短絡的なその思考はちょっといただけないと感じれば

自然和の眉に皺が寄る。

それを和が怒っていると取ったのだろう。

遙が慌てて実花をたしなめはじめた。

「あいつはただの後輩だ。大体ふたりつきりで話してるくらいで浮気とかお前単純すぎ。いつの時代だ馬鹿。」

「嫉妬深いあなたのせりふとは思えませんね。」

「……ああ、それとも、二股の罪悪感からそんな事言うのかな？」

先程の実花よりも強い侮蔑の表情を時任が遙に向ければ、
実花は憤慨する。

「ちよつと！遙は二股なんてしてないわ！！」

「へえ？だつたら婚約者つて松永の妄想？」

「遊びは二股に入らないわ。」

「さっきお前が浮気だつて騒いだんだろう。」

「そ、それは……遙は割り切っけていても向こうは違うからよ！だから早いうちに別れをすすめようと言っただけ！！」

「付き纏ってるのは和泉遙のほうだと思っけど？」

「なんですって！！？」

どンドンヒートアップする後輩を遠い目で和がみつめれば
いつの間にか隣に立つ遙が和に苦笑しつつ視線を向けている。
和も、同じような視線をかえした。

「お家からいつしよに来たの？それとも一緒に住んでるの？」

「…焼きもち？」

「あ、そう取られちゃうか、そうじゃないんだけども。」

手を出すなら最後まで面倒みてあげなよ。あのテは弄べるタイプ
じゃないから。」

淡々と話す和に、遙はちいさくため息を吐く。

和が首を傾げるので、遙はなんだか泣きたい気分にならなつた。
少し苦笑しつつもなんとか口を開く。

「…泊めてないよ。あいつ今、隣に住んでんの。」

「は！？」

「なんか、ちょっとストーカー染みてきた気がする。」

「そうさせたのは、和泉君なんじゃない？」

「…かもしれないね。」

ふう、と息を吐く彼女に、遙は視線を向けては考える。

なんとなく、昨日までの彼女とはどこか雰囲気が違うような気がする。
る。

その意味するところはなんなのか。

「後輩諸君は元気いいねえ。」

「和…ひとつしか変わらないでしょ。」

なんとも年季が入ったような物言いがおかしくて遙は笑う。

こうしていると本当に和に別れを告げられたのかと疑いたくなる。

「で、和泉君。了承してくれる気になったの？」

頭の中をのぞきこまれたかのようなタイミングに遙が息を呑む。気配でわかったのか、和が目を細めた。

「このまま有耶無耶にでもなると思った？私相手に？」

親しく話しかけてくる様子だから別れ話かと思ったんだけど。」

「……違うよ。それに不可抗力でしょ、近付いたのはあいつだし。」

「じゃあ、了承する気がないんならとつと出て行ってもらわないと。」

そういう約束でしょう？和泉君も、少し離れて考えてみたら

色々と見えてくるものもあるかもよー？」

「なにかなその意味深な発言は。」

「深くとるのも浅く取るのも勝手だけど。」

とにかく私もしばらく離れて考えたいんだよ。和泉君とのこと。」

「……別れないでくれるってこと？」

「それは変わらないけど。どうしたらわかってくれるのかなあとか。」

「何を言われても俺の答えは変わらないよ。」

「…それでも。とにかく彼女連行してくれる？まだ言い争ってるよ。」

「和、時任君とずいぶん、仲良くなったんだね。」

「焼きもち？」

悪戯っぽく笑いながら和が言えば、遙はさらっとそうだよ、と肯定

した。

「あのね、和。これは聞いてほしかったことなんだけど。」

和の事、信じてないわけじゃないよ少なくとも今は。」

「あのね、和。これは聞いてほしかったことなんだけど。」

和の事、信じてないわけじゃないよ少なくとも今は。」

ただもつと単純な感情だつて理解してほしいんだ。」

「単純な感情…？」

「和の周りに親しい男がいるってだけで俺は苛々する。

それは信用してない以前に気に入らないっていう簡単な感情。独占欲が人一倍強い幼稚な男なんだよ、俺は。」

その言葉に和はなんとなく、つつかかっていたものが少し取れた気がした。

なんとも格好悪い言葉ではある気がする。

けれども、はつきりとそう宣言してくれると和はとても気がラクになる。

単純な感情ということは、ほとんど反射といってしまうてもいいのだろう。

しかしそれならば、と和は首を傾げる。

「ええと…広末は？」

「それは、難しいね。でも俺は…今は理解できたと思う。

前はね…その境があまりわかっていなかったけど。」

実花を視界に入れつつ遥が言うので、和はより確信を強くした。

やはり遥は、痛感したのだろう。

実花を『そういう対象』にはできないのだと。

「もっと早くに気付けっつーんだよ…」

「え？なに？」

ぽつりと呟いた和の言葉は遥にはきこえなかったようだ。

もちろん、和はきかせてやる気など端からない。

にっこりと微笑めば、和は自身の席から教科書を取り出し

机にむかってしたたかそれを打ち付けた。

バン、という大きな音が響き、未だ言い争いを続けていた後輩ふたりは
びくりと体を震わせて固まった。

「まったく、朝の静かな教室の空気汚すんじゃないよ阿呆二人組が。」
目が据わり低い声でそう呟けば、ふたりは固まっている。
心なしか寄り添うように抱き合っただけに見えるのは気のせいだろうか。
遙はその囁を笑いをこらえてながめていた。

「あなたの頭は学習能力がないんですか馬鹿お嬢様。
朝からキーキー騒がれたら迷惑です。」

「ついでに時任、うるさい。応戦しようとするな。」
「和先輩ひどくない!？」

「この間から、本当最低ね! 遙、この女私に暴力を振るっただのよ。
やっぱりこんなひと遙の隣にいていいわけないわ。」

びし、と指差して和を実花が睨んだが、
そのとき和は心の中に冷気がもれるのを感じた。

「暴力?... ひよつとして最初の日の昼休みのこと?」

「和泉君、会いに来たのやっぱり気付いてたんだね。」

「和に連絡つかなかったからね。... やっぱりそうだったんだ。」

廊下で誰かわめてたって言ってたのって実花のことなんですよ?」

「そう。あのとき、私はつきり反省したものだと思ってただけだ。」

「まさか暴力だけ切り取って告げ口するとはね。」

底冷えするかなのような和の視線に、自分の発言の不味さに気付いた

のか
実花は蒼い顔をしていた。

「それは、わ、私も悪かったと思うわ。でも…その、暴力はやっぱり良くないと思うもの！その言葉遣いも！」

その言葉が実花から発せられた瞬間、先程の冷徹な心はどこかに吹き飛んだ。

最初の見立て通り、彼女は真っ直ぐなわがままさをもっているようである。

ひとに言われ慣れていないだけで、それを受け入れる場所はきっちり持っている。

だからこそ和は、彼女にある感情を抱くに至ったのだ。

和の顔はゆるゆると微笑みを作り、大切なものを見るように実花をみつめる。

ゆっくりと歩み寄り、気が付けば彼女の頭を撫でていた。

「うんうん、天真爛漫とはまさにこの事だね。可愛いなあ。」

「な！ちよっと、子ども扱いしないでちょうだい！！」

「それを嫌だと思っうちはね、子どもの証拠だよ？」

撫でていた頭を実花が思い切り振り払えば

和は実花の顔をのぞきこんで淡々と切り出す。

「私はね、あなたのそういう所、嫌いじゃない。というか、好感が持てるくらい。」

でもね、覚えておいたほうがいい。その発言は時に人を残虐な気持ちにさせる。

だからこそ、発する言葉にはもう少し責任を持ちなさい。

あなたは目立つ人間だから本来ならば普通の人間より気をつけなきゃいけない。

それは、あなたのせいじゃなくとも生まれながらに持ったものだから仕方ない。」

「……なに、説教する気？」

「というより、忠告……んー、助言？かな。ま、おせっかいには変わらないねえ。

身近なひとがもっと言ってあげればいいんだけど皆、可愛い君には言い辛い。

だから他人の私が言ってみようかな、って。

まず、考えてごらん。頭で思ったことをその口から発すれば相手はどう思うだろうかって。

たとえば、和泉君からそう言われたら、自分はどんな気持ちになるだろうかって。」

和の言葉に、実花は余計なお世話よ！と一言怒鳴れば教室を飛び出して行った。

それを見送りつつ、和はひとつ息を吐く。

「和泉君、追いかけてフォローをお願いね。」

「和……」

「さっさと行け世界一のお馬鹿男。」

苦笑して、無言で遙は教室を出て行った。

『まいったな、こんなつもりじゃなかったんだけど……』

ひよつとすると、彼は自分の真意に気付いたかもしれない。

それはそんなに危惧することではないのかもしれないが、

あまりにもヒントを与えすぎれば彼は焦って間違えるかもしれない。

もしそうならば…避けたかった事態になってしまつう。

あくまでも、良い結果であろうと悪い結果であろうと歪むことなく禍根なく、終わってほしいと願っていたのに。

理想論といえはそうなのかもしれないが、だからこそその願いなのだ。

「…先輩、俺も、教室戻りますね。」

そろそろ誰か来るだろうしそうになるとまた変な事になりそうなんで。

「…そうだね、とつとと戻りなさい。」

「ちよつとは惜しんでよ。」

「うっさい。」

笑いつつ、時任が教室をあとにすれば、和はゆるゆると席に着いた。彼女の頭のなかに巡る考えは、とあるひとつのことではいっぱいだつた。

そのためになにをすべきか、彼女は必死で考えている。

『やっぱり余計な横槍は入ってほしくないんだよなあ…。』

逡巡の後、和は梓にメールを送った。

昼休み、和と梓と浩平という珍しい組み合わせで屋上にて昼食をとっていた。

梓に、昼は屋上でとりたいので浩平に自分の名前は出さずに

屋上の鍵を借りて欲しいというメールをしたのだ。
直接浩平にメールしても良かったが、結局梓にも伝えねばならなくなるので

二度手間だと思いそうしたのだった。

「和、その後遥とはどうなってるの？」

「ああ、それ俺も気になってた！喧嘩してるんでしょ？」

「んー、喧嘩っていうか別れてくれってお願いした。」

和の言葉に浩平と梓は同時に驚愕の叫び声をあげた。

そこから矢継ぎ早に質問を浴びせてくる。

「どうして！婚約者のあの子が原因じゃないって言ってたけど

そうじゃなきゃ一体なんなのよ！！？」

「え、そうなの！？俺てつきり…なにが駄目なの

どうしていやになっちゃったの笹森ちゃん！！」

さすがにうるさいとは言えず、少し気まずげに和は答える。

「別に、嫌になったわけじゃないんだけど。

原因は…色々あって。でも簡単に言えば

お互いに信用出来なくなっただから？かな。気持ちを。」

「それってやっぱり松永実花の存在のせいではないの？」

信用できないって彼女との仲が気になるからなんでしょう？」

その言葉に和はかぶりをふった。

「うつん、そうじゃない。

和泉君が先に私を疑ったの。それで、蔑むような目で見られた。

私はそれがすごく悲しくてもういっかいそうなるのが嫌だっと思っ

たの。

だから別れてっってお願ひした。」

「ちょ、笹森チャン。凝縮しすぎてわけわかんないんだけど。」

「んー、だからね？和泉君が私を信じられないって言った。

それにたいして謝ってくれたけど、私はそれを信じられなかったの。だから別れてほしいって言ったの。」

話がまったく発展していないものの、

和の言葉になんとなく思う所があったのか、ふたりは数秒無言になる。

「てことは。笹森チャンがなんかしちゃったの？

あの遙が蔑む目で君をみるとか、なんか信じられないな。」

「……ひよっとして、あの後輩の男の子？」

「鋭いね、梓さん。」

梓がようやく話の欠片だけでも掴むことができたことで

少し納得したような表情になったが、浩平は未だわからないという顔をした。

「後輩の男って…言い寄られてる相手でもいたの？

で、遙が過剰な反応した、とか。」

「ま、そんなとこ。ふたりつきりでなにしてたんだ、とか言われちゃった。」

肩を竦めて和が言えば、浩平と梓はあちゃーという顔をする。

「それで、そのときの遙をもう見たくないと和は思ったのね。でも…それだけで別れるなんて。」

「うん、先を見すぎだっって広未にも言われたんだけど。」

私はね、またそれを繰り返すって思ったの。
そしたらどんどん疲れちゃって、私のこと疎ましくなるだろうって考えた。

だから別れてくれって和泉君に言った。「
」で、それ遥は了承した?」

浩平の問いに、和は無言でぶんぶんと首を横に振る。
それをみて、浩平と梓はほ、と息を吐けば、
まあ当然か、と声をあげる。

「あの遥が、そんなに簡単に了承したりしないわよね。」

「笹森ちゃん、多分あいつ一生あんなだと思っようよ?」

「どうだろうねえ…ま、とにかく今はちよつと距離を置き中。
まだすぐに別れるとかそういうんじゃないから。」

それよりも、実は別件で梓さんに頼みたいことがあったの。
宮田君にも、それとなく注意して見てもらいたくて。」

別件という和の言葉に、梓と浩平は訝しむような視線を和に注ぐ。

和の説明が終わったあと、

梓と浩平はますますもってわからない、という顔をした。

「どうしてそんなことするの?そんな事したって
和になんのメリットもないじゃない。」

「そうだよ。それに少しくらいなら良いんじゃないの？
自業自得な所もあるだろうしさあ。」

「そうかもしれないけど、ちょっとほっておけない。
多分、私みたいには出来ないだろうから。」

なんていうか：ある意味、同情なのかもしれないんだけど。
「和……」

「とにかく、あっちに気付かれたくないの。」

その為には、梓さんに動かしてもらうしかない。

私が表立って動くが目立つし：本来ならそうした方が早いんだけど
同じ連中なのかもわからないし、どっちにしろ
要請して使うしかないから。」

「……でも向こうにバレるかもしれないわよ?」

「表に出る前に潰してしまえばきつと大丈夫。」

バレたらバレたでそこまで都合悪くもないんだけど

とりあえずそうなるまで時間稼ぎはできるだろうから。お願い!

「で、俺に見張れと?」

「それとなく助言もしてもらえたら助かる。目を離さないほうが、
とか。」

「意識させるのはいいの?」

「うん、とにかく私がやったってバレなければかまわない。」

「……わかった。」

梓と浩平になんとか了承を得られて、和はほつとする。

それでも、ふたりはどこか腑に落ちないような顔をしていた。

「……なにか理由があるんじゃないの?」

「自分でも、ちょっと戸惑ってるかもね。」

和泉君に会って、梓さんともこうしているようになってから
どこか変わったのかもしれない。

以前なら、理由なくこういうことはしなかっただろうから。」

「和……そう。わかった。もうなにも言わないわ。そのかわり、今度おごりなさいよ。」

悪戯っぽく笑う梓に、和は了解、と微笑みを返した。

浩平のほうもちらりとみれば、彼も梓と似たような笑みをしていた。

「本当は、女の子からのお礼なら、別のものがいいんだけどね。遙に間違はなく殺されるから俺も梓とっしょがいいな。」

「おっけい。」

くすくすと笑いながら和がそう答えれば、

三人でしばらくそうして笑っていた。

上手くいってほしいのか、いってほしくないのか。

いや、そもそもどの形が上手くいくというものなのかすら、今の和には計りかねた。

とにかく、良い結果になってくれれば。

曖昧な表現ではあったが、和はそればかりを願っていた。

第三十九話「嵐の原因」

「笹森さん、いいの？」

これで何回目だろうか、このせりふを聞いたのは。

実花が転校して一週間。まだ一週間しか経っていないというのに
一体どれだけ同じことをこれから言われるのかと思えば
うんざりする顔を止めることはできなかった。

教室での休み時間。

本を開いているというのに、クラスメイトに話しかけられるのは
ちよつと良くない傾向かもしれない。

それでも意識がむいているうちは無視するのも憚られる。

「…あのね、良くなかったらなんかしら行動してるって。」

「でも、すごく仲良さそうじゃない！？いつもいっしょだしさあ。」

「そうだね。」

「どうして闘わないわけ？自分の彼氏が奪られそうだっていうのに
！」

「だからー。私には私の考えがあるわけ。」

それをいちいち説明する義務はないでしょう？

「…別れちゃわないよね？」

「……なんで田中さんが泣きそうな顔になるの。」

「だって…勝手なのはわかってるけど、ふたり見るの好きだったか
ら。」

それに、遥様が笹森さんにメロメロなの見るのも私の楽しみだった
のに…。」

今にも泣き出しそうなクラスメイトに、和は深くため息を吐けば

本を閉じて目の前の彼女をみつめた。

「あのね、とにかく心配しなくてもなるよつになるから。万が一別れたとしたってあっちのが画的に綺麗じゃん。見応えあるよ?」

「そんなの!出来すぎててつまんないいい!」

「駄々っ子じゃないんだから…まあ、そうならないように祈っててよ。」

私も水面下では頑張ってるんだから。ね?」

「…そうなの?」

「そうだよ?」

「…うん、わかった。」

和の言葉に安心したのか、田中はぱ、と笑って自分の席へと戻って行った。

しかし、ひとのことを構っている場合でもないのだが
気になることは少々ある。

ちらりとその原因を視界にうつせば、向こうは先にこちらを見ていたようで

ぱっちり目があった。

和が軽く手を振ってみれば、元々不機嫌そうなその表情がますます険しくなる。

彼がなにかを逡巡し、席を立とうとしたときに、
タイミング悪くチャイムが鳴ってしまった。

『託斗…なんだろう。』

内容はなんとなく想像できたが、
それ以外でもなにか言いたいことはないのだろうか、と考えれば

少し楽しみになった和であった。

「…和。今日、図書室寄るのか。」

次の休み時間になったとき、まだ教師が教室を出て行く前だったというのに

我慢できなかったのだろう。

和の席横に立ったまま、無表情で託斗が口を開いていた。

その問いかけに、和はうなずく。

「放課後？うん、解放日だしね。」

「そのとき、少し話したいことがあるんだが。」

「ん？構わないけど。」

「……そうか。」

言いたいことを言ってさっさと席に戻るのには彼らしいと

和は小さく笑みをこぼす。

こちらにも、訊いておきたいことはいくつかあったからちょうどいい。

一週間。

そう、今日でちょうど一週間なのだ。

『週末に帰るって、言ってたよね。』

今日なにもあちらからコンタクトがなければ、

それは難航しているからか、それともうまくいったからなのか。どちらにせよ、なにかしら言われるだろうかと思っていたのだが、あては外れだろうか。

なんにせよ、もう自分が自由でいられる時間もそうないだろう。もしくは、長い自由を手に入れるのかのどちらかだ。

『ひょっとしたら放課後に図書室来たりすんのかなあ。』

どっちを優先させなければいけないか和はわかっているが、それでも託斗の話に今は興味の比重が傾いていた。

少し考えつつも、珍しくなりゆきにまかせてみよう、などどこか楽しみに和は結論付ける。

少し笑って、和は放課後に思いを馳せていた。

「お前たち、どうなってるんだ？」

堂々と出来る話でもないのに、

和と託斗は図書室の奥まったあまり人が来ない本棚の間で会話をしていた。

先程の託斗の問いに、和はどう答えたものかと逡巡する。

「ちょっと、距離を置いていたというか。」

「梓から多少は訊いた。だが原因は例の婚約者じゃないんだろう?」

「ん? まあ。」

「…大丈夫なのか。」

「それは、別れるのだったことだね。」

「ああ。」

「別れるかもしれないって言ったなら、どうする?」

その和の問いに、託斗は心底困ったような顔をするので

和はにやつきそうになる自身の表情をなんとかおさえていた。

「…わからない。」

「なんだよ、はつきりしないなあー!」

期待していた言葉よりあともう一步足りない。

おもわず和はブーイングのような声をあげてしまう。

「…俺は、お前を今でも好きだと思っていた。」

「ふうん?」

「でも…、わからん。別れたとして、お前をどうしたいのかが。」

「あのさあ。」

「?なんだ。」

「思っていた、って過去形になってんじゃん。」

私のこと、もうなんともおもってないんでしょーが。」

和の言葉でやっとその事実が気が付いたのか

託斗は目を見開いた。

自分でも俄かには信じられないらしく、

しばらくその言葉の意味を噛み砕こうとしているようだ。

「……そうなのかもしれない。」

「ねー？なんで短期間であっさり私のことどうでも良くなったんだろっねー？」

「どうでも良いとは思ってない。」

「はいはい、光栄です。しかしそこ拾わなくていい。」

失恋から立ち直った理由はなんなのでしょうか。」

「…失恋相手からそれを訊かれるとは思わなかったが。」

「あーまあね、そうだよね。」

うふふふふ、となんとも不気味な表情で和が笑うので

託斗は眉を寄せてそれをしばらくながめれば、
やがて考え込んだ様子になる。

『これ以上は託斗の仕事だなー。』

本当ならもつとつっこんでやりたいが、それではおそらく意味が無い。

こういうものは、自身で自覚しないことには

どうにも実感が湧かずに、後々相手を苦しめることとなるう。

正直、大切な友人にはそんな苦勞をしてほしくはない。

少しじれったいと思いつつも、和はぽん、と託斗の肩をたたく。

「ま、いっぱい悩んで。それじゃあ私は帰るから。」

「なんだ、いつもみたいにギリギリまで残らないのか。」

「うん、今日はもう帰ろうかなって。」

「…それなら俺も帰ろう。そんな気分になれない。」

「そ？じゃあ校門までいつしよに行く？」

それに託斗が無言でうなずくので、ふたり並んで昇降口へと向かっ

た。

なんとなく話すことがないので、無言のまま校門を目指す。ちらりと託斗を盗み見れば、どうやら未だ思考の渦へと旅立っているらしい。

考えるのは良いのだが、あまり悩みすぎて変な方向へ結論を出さなければいいのだが。

そんな事を懸念しつつ和が前を向けば、そこには見知った男が立っていた。

相変わらず、遠くからでもすぐわかる程に良く目立つ。

久しぶりに、彼の存在が遠くに感じられて、和はどこかせつなくなつた。

校門前で、遥が立っている。

その事実には託斗も気が付けば、鋭いその視線を遥に向けていた。

「…和泉。あまり油断ばかりしていると足元を掬われるぞ。」

「説得力ないかもしれないけど、油断しているつもりはないよ。」

苦笑しながらそう答える遥に、託斗はひとつため息を吐けば

和に短く別れの挨拶をしてバス停へと向かって行った。

見送ったあと、遥に視線を向ければ、和のことを真っ直ぐにみつめている。

「…なにか話があるみたいだね？」

「うん。図書室での時間は邪魔しなくなかったし

でもいつ帰るのかもわかんないから、ここで張ってた。」

「連絡寄越してくれれば応じたけど。」

「そうなんだろうけど…和の期待してる種類の話じゃないから…」

「それはどつだろつねえ？」

面白そうに笑ってそう答える和に、遙は目を丸くした。
とにかくここで話していても埒が明かない。
そう考えて、遙と和はとりあえず駅前まで歩くことにした。

「喫茶店に入る？」

「んー…いや、ちょっと話してる間冷静でいられるかわからない。」

それはつまり、話してる最中に喚き散らすかもしれないという宣言
であり
あまりよろしいことではない。
ということとは。

『上手くいってないみたいねえ。』

ふう、とひとつため息をもらせば、和はいつかのカラオケ店へと足を運ぶ。

遙も真意がわかり、和を止めようとはしなかった。

「さ、ここなら泣いて叫んでも大丈夫だよ。」

「…さすがにそこまでは。」

苦笑しながら遙が言えば、そう？と和は肩を竦めた。

カラオケの個室に入っておきながら、今日も一曲も歌いそうもない。そう思えばなんとなく、ひとつ部屋を借り切ってるのが悪い気がした。

「…実花の、ことなんだけど。」

「松永さん？」

先程の考えを一蹴し、とりあえず今は遙の言葉に耳を傾けようと隣に座る彼へと和は体ごとその方向へと動かした。

「隣に住んだり、高校に転入してきたり、

行動がエスカレートして、さすがにまずいとは思ってたんだ。

最低なことに、俺、きちんとアイツを拒否したことがなかったから。」

どこか遠い目をしながら、遙はぽつぽつと話し出す。

「昔っからいつしよで、それこそ、和と広未君みたいなもんだと思う。」

それよりも、兄妹により近いとは思っけど。

俺は一人っ子だし、妹みたいな存在としてあいつのことは大切だった。

だから、どっかでわかってたはずなのに。

どうしたって、あいつは恋愛対象にはならないって。」

「向こうは、そうじゃなかった。」

和の指摘に、遥は相槌をうつ。

「それでも、俺はそこまで実花が本気だとも感じてなかった。

お嬢様の気まぐれで、そんなこと言ってるんだろって。

大きくなればそのうち彼氏をみつけるだろう、その間の代わりみたいなもんだって。

俺が今まで女性と長続きしないながらも付き合ってきたのは実花も知ってたし、

それでも何も言わなかったから余計にそんなに真剣だとは思ってなかったんだ。」

そこで遥はふ、と自嘲めいた笑みをもらした。

どこか傷付いているような、痛々しい表情をしている。

「それどころか、いつそ実花と結婚するのもいいかなあなんて

どっか考えてた。だから高校生になるちよつと前、

一人暮らしする部屋に引っ越した日に実花が自分と結婚してくれって言ったときも、軽い気持ちでそうだな、いいかもな、なんて答えて。

和に出逢う前まで…本気の恋なんて知らなかった。

こんな気持ちになると思ってなかった。

だから…俺は、あいつに何も言うことなく和と付き合って…

あの時せめて、本気なんだって気付いていたら良かった。

もつと真剣に、向き合ってやればよかった!」

「実家に帰るって言ってたよね、なにかあったの?」

唇を噛み締めて、遙が苦しそうに声をあげる。

「……妊娠したかもしれない、って、両家の親に言った。実花が。」

「え、いつの間に」

「実花に手は出してない!!」

思わず素の反応をしてしまった和に、

遙が泣きそうな表情でそれを否定した。

ぼんやりと、カラオケにして確かに正解だったな、と考える。

「キスすらしてないのに! あいつ、堂々と嘔吐いたんだ。」

両親の前で、そういう行為をしたって。しかも避妊してなかったからとまで。

実花の親御さんは、

どちらにせよそういうことをしたんだから責任は取れ、って言った。

俺は実花に怒りをぶつけるよりも、恐くなったんだ。

いつから、あんなになったんだろって。

しばらく部屋でふたりになったときに、後ろから抱きつかれて言われた。

『遙、大好きよ。二度とあなたを逃がさないわ……。』

「俺、和にも同じような感情を何度も向けたから、わかるよ。」

実花がどんな想いなのか。

そしてどれほどアイツを追い詰めてしまったのかも!」

「……それで、和泉君はどうするの? 責任取って、結婚するの?」

和の言葉に、遙はかぶりを振った。

「出来ない。しちゃいけない。」

だって俺は、実花を妹としか見れないんだ。

そんな残酷なこと絶対にしない！」

「だったらどうすんの？」

「わかってもらえないとしても、とにかく思っている事全部話す。結婚も、出来ないって改めて言う。」

このまま正式に実花の親が婚約発表なんてなったらそれこそ大変なことになる。

そうなる前とにかくくなんとしてでも止めたいんだ。」

「で、それを私に話したのはなんで？」

遙はしばらく俯いた状態で両手を組んで、下を向いていた。

しかしやがて決意したかのように、和を真っ直ぐとみつめる。

「あのとき、俺がしてないって否定すればその場で話はストップしたと思う。」

けどそうしなかったのは、これ以上実花に傷を付けたくなかったから。

だからこそ、どうなるかわからない。

俺は最後まで拒否し続けるし、説得し続けるつもりだけど、

もしかしたらあいつの狂気が和に向かってしまうかもしれない。

…和が、別れたいっていうんなら今はそれでもいい。

だけど、俺が和を好きだって言い続けること、

迷惑かけるとわかっていてもそう実花に言い続けること、

すべて解決したらまた改めて全力で口説きに行くこと。

それを、赦してもらえないかな、って。」

「……………」

「危険からは、出来る限り守るから。…だめ？」

言いたいことをすべて言い終えて、遙は和の様子を窺う。

今は俯いてしまっている和の顔を、そろそろと確かめようとする。

しばらくして、和が勢い良く立ち上がった。

「…和泉君。」

「は、はい。」

「…あんたも立ちな。」

和の低い声に、遥はそろそろと立ち上がる。

まだ下を向いている和をじっとみつめれば、

和は顔をあげ、遥の方向へとからだを転換させれば、にっこりと微笑む。

遥がそれに希望を見出そうとしたその瞬間。

『ガッツ！』

華麗な和の右ストレートが遥の左頬にクリーンヒットする。

個室には、なんとも痛々しい音が響き渡り、遥が驚きで固まれば、

和は怒りをあらわに遥を睨みつけていた。

第四十話「嵐が台風になる前に」(前書き)

四十話突破しました。

ここまでご覧いただいております！

第四十話「嵐が台風になる前に」

「遅いんだよ！今頃気付くんじゃねーっつの馬鹿バーカ！！」

「な、和…？」

一発殴りつけただけではどうにも気がおさまらず、

何を思ったのか和はマイクを手に取れば、すう、と息を吸い込んだ。

「実花ちゃんが本気なのかなんて見ればすぐわかんたろうがああ！！
なんもかんも自業自得なんじゃばけええええええ！！！！」

あまりの大声に、ハウリングによってスピーカーから
なんとも不快なキーン、という音が鳴り響く。

「そこまで馬鹿だったとは思わなかったわ！

どんだけあの子の事傷つけたら気が済むの！！

本当なら責任取って結婚してあげるべきだろ！！ああ！？」

マイクを離すことなく和が遙の胸倉を掴めば、

遙はたじたじになりつつも、はい、と応える。

「でもそれは、また実花の心を壊す結果にしかない。」

「わーってるわ！でもなあ、実花ちゃん差し置いてお前ひとり

幸せになるつもりなんかい！！どうなんじゃい、ワレ！！！！！！」

もう興奮しすぎてなにを言っているか判断が難しいが

逆に遙は冷静になったのか、普通の声音でそれに返事をする。

「実花のことがあるまで、もちろん和とどうにかなる気はないよ。」

…ていうか、和だって別れたいって言ってたじゃない。
俺は、本当の意味で実花が赦してくれるまで
和に触れるつもりなんかもととなかったよ？」

遥の言葉に、和はマイクをことり、と置いた。

ゆっくりと遥に視線をやれば、何を思ったのか和はどんどん遥に顔を近づけていく。

とても緩やかなその動きに、キスをしようとしているのだと理解すれば

遥は慌てて和と自分の間に手の平を差し込んだ。

はっきりと、遥は和からの口付けを拒絶したのだ。

「……………」

「……………」

ふ。

遥の手に、和の空気がもれた感触が伝わってきた。

今更ながらに怒涛のような後悔が押し寄せるが、言った傍から誓いを破るわけにもいかず、遥は泣きそうな気分になる。

「ま、ぎりぎりかなあ。つたく勝負強いな和泉君。」

「……………え、和？」

突っ立ったままの遥に一瞥をくれながら、

和はどか、と勢いよくソファへ座りなおした。

「ばっかだねえ。あんな理由で別れたいなんて言うわけないじゃん。
どこの純情乙女だよ私。」

「…和さん？」

「別れたいって言った言葉は本当だからね。」

まあ、ひよっとしてどっかで予想してたかもしれないけどー？

…ってあれ、その顔は100%で驚いた顔だねあれれ。」

ぶふふ、と和がふきだしてなんとも楽しそうに遥の顔を指差した。やっとな遥は覚醒を果たし、和の隣に腰掛ければ慌てて真相を迫る。

「どういうこと！？別れたい理由ってあれじゃなかったの！！？」

「んなわけないじゃん。潔癖症か。それとも小心者か。」

「ちよ、和い…さすがに…！！」

「だって、実花ちゃんのことと別れたいって言ったたら

私が嫉妬したからとか思うかもしれないでしょー？

かといって申し訳ないから身を引きたいつつつても、

和泉君こつちばつか気にして悪戯に実花ちゃんを傷つけてでも

あの子のこと遠ざけそうだったからさあ。

もっともらしい理由がほしかったんだよ。距離置くための。」

「……………それは…」

「そもそもぜーんぶアンタが悪い。」

妹みたいに大切なんでしょう？わかるよ、すつごく可愛がつてるもん。

それなのに、なにをした？その可愛い妹に、あんたはなにをした？

しかも私と普通に付き合い継続してるなんてもう最悪。

ぜんっぜん気付かない和泉君に助言してやる気にもなれないくらい胸糞悪くて仕方なかったんだよねー！。

別れることになってるかまわなかった。なんかもう嫌いかもくらいに思ってたし。」

和の口から飛び出す容赦ない物言いに、

遥はなぜか胸の奥底から喜びが沸きあがっているのを感じれば

本気で自分はマゾかもしれない、と少し心配になった。

「でも、ぎりぎりって？及第点ってこと？」

「にやつくんじゃない。」

…全部ケリ着いたらだからね！それまで待っててあげる。」

「和、愛してる。」

「はいはいはいはい、うっとおしいなまったくもう。」

「ちょ、ひどい！」

遥の嬉しそうな顔に、

ここで真相を話すのは良くなかったろうかとも考えたが
遥にまで病んでほしくはない、という

なんとも情けない本音が和の奥底にはあった。

実花をああまでしてしまったのは遥だと思っし、

とんでもなく傷付けてしまったとも思う。

けれども、踏み止まれなかった心の弱さは実花の責任でもあるのだ。
だからこそ、遥と一緒に堕ちてほしくないという思いは強まった。

…と、言い訳を試してみても、

結局、自分にも惚れた弱みというやつがあったのだと感じれば
なんともかゆい気持ちでいっぱいになったのは和の心の秘密である。

一日目の昼休み、和はずっと実花の言葉が気になっていた。

彼女を全面的に信じたわけではなかったが、

どうにも遥の煮え切らない態度が気に入らなかったのだ。

何よりも感じたのは、かつての自分と同じ顔をしているということ。
全然信じていないのだ。実花の好きだという言葉を。

和からすれば、思い込みが激しいかもしれないけれど

ふたりきりで話した時は冷静さもあつたしそこまで愚かではないというの

あの日のあの会話だけですぐにわかった。

彼女がいかに遙を想っているかも。

どうにも暴走が先行してしまう実花だが、

そうでなければ話が通じない相手ではないと感じる。

だからこそ、冷静でいられなくなってしまった原因を作った目の前の男が憎たらしいと思った。

自分の好きな男であるけれど、だからこそ、

そんな馬鹿な間違いをしてほしくないと強く願った。

それなのにここまで事態を悪化させていたらくを思えば

もうなにがなんでも別れる、と言ってやりたい気分にはなつたのだ。

だが、それでも、最後に敷いた許せない境界線を遙はあっさりと踏み止まった。

そう、越えては来なかったのだ。

いつもいつも、彼は最後を絶対に外さない。

なんなのだろう、アイドルひいては王子キャラというものはみんなこういうものなのだろうか。

否、こんなヘタレたアイドルはいらない。

今までの事を反芻しつつ、

和は実花の顔を思い浮かべる。

どうしたって、和のやっていることは単なる同情だ。

その枠を出ない。

ともすれば、かつて遙を信じられずにどんどん暴走させた事へのなにがしかの罪滅ぼしでもしたいのか。

単純に、遙にそういう人間になってほしくないからなのか。

それはすべて違うような気も、すべて当てはまっている気もした。

どっちにしる、今は傍観者でいることしか出来はしないが、と和は改めて考える。

「実花ちゃんてさあ。」

「さつきからずっと実花ちゃんなんだね、なんで？」

「えーだってなんか今更、松永さんて呼べないよなんか。」

ずっと和泉君を最低さいていと心の中で呪いつつ、彼女を応援してたから。」

「…和、俺の事好きでいてくれるんだよね？」

「実花ちゃんて猪突猛進じゃん？だからさ余計に。」

羨ましいのかもしれないね、私にはない無邪気さだから。」

「無視か……和だって真っ直ぐな所はすぐ真っ直ぐじゃないか。」

「んー？そう？でもそれは意識してやっている所が多分にあるからねえ。」

あの子、視野が狭いのもあるけどまぶしいなって思う。」

「まあお嬢様だからかな、一応。」

苦笑する遥の様子にどこか疲れが見える。

これからやるうとしていることを考えたら今からそうでは果たして身が持つのだろうか。

「……………じゃあ、帰ろうか。」

「ん、そうだね。」

心配顔をみせては、遥の負担になってしまっただろうと

和は含みを感じさせない笑顔で微笑んだ。

それに、遥も応えるように笑顔になる。

本当ならば、助けてあげたいと心のどこかで思う。

けれどもそれはしてはならない。

あくまでも遙がどうにかしなければならぬ事で

今の時点で自分は彼女にとって闖入者ではあっても

ふたりに深く関われる程の権利はないと感じるからだ。

たとえば広未との間になにか揉め事が起きたなら、

和は遙に関わってほしくはないと感じるだろう。

なによりも、遙の罪は自身で償わなければ意味はないのだから。

それでも、と、和は思う。

和が首を突っ込める事態になれば、容赦はしない。

不穏な空気を漂わせはじめたのは、

駅改札で遙とわかれてからのことであつた。

次の日、和は結局、浩平と梓に真相を話す流れになつた。

元々は遙にもれることを懸念してふたりに伏せていた別れの理由は遙にすべて話してしまつた今は必要ないものになつてしまつた。

ともすれば中途半端に首を突っ込んでいるふたりなのだし知っておいたほうがいいだろうというのも話すに至った理由のひとつである。

驚きとも呆れともつかないふたりの顔を思い出し、和は小さくふきだした。

『ちよつと和。…聞いてるの?』

「あ、ごめんごめん。」

今日一日は特になにも変わったことはなく、相変わらず遥と実花は婚約者のように寄り添っていた。学校中でも、結局遥の本命は彼女のほうだったのだからと噂は結論付けていた。

「それで、どうだった?」

『とりあえず遥のファンから訊いた話では嫌がらせまではまだいってないそうよ。』

クラスの女子生徒が無視してるのも、松永さんはあまり気にしてないみたいね。

友達を作るという概念もあまりないようだね。』

「取り巻きの人たち、私の一件以来ずいぶん静かみたいだもんね。」

『そうね。遥がまったく相手にしなくなったから、取り合いみたいな抗争も起きていないようだし…』

ただ、そうじゃないファンクラブにも属していなければ遥とそういう関係になるような近しい人間でもない人達。今回は動こうとしているみたい。』

「それって無責任に騒ぐのだけ楽しんでる人達だよな?」

「なんで?そこまで和泉君に執着してなかったはずじゃあ。」

『松永さんの態度…でしょうね。』

和はほら、好きにしてくださいみたいな所があったしそういう面では

反感を買っような人間性ではなかったんだけど。

松永さんはちよつと高慢な所があるのよね。

遥をみて騒がれるのも嫌みたいよ。

卑しい声をあげるな、とかこの前女子連中を怒鳴ってたらしいわ。』

「ええええ…もう、実花ちゃん語録とか作りたい勢いだな。」

『ちよつと、変な所に関心を持たないでちよつだい。』

呆れた梓の言葉に、和はごめんと小さく謝った。

和はこの間ふたりに頼んだのは、

簡単に言ってしまえば松永実花を秘密裏に守ることだった。

嫌がらせを受けようとしている。

時任から聞かされたその事実には和は少々捨て置けない懸念事項だと心配になったのだ。

言ってしまえばそれは集団いじめのようなもので

発展すれば大分えげつないものになる。

松永実花は誰にでも噛み付くタイプで敵を作りやすくはあるが決して強い人間ではない。

だからこそ、彼女の精神を崩壊させてしまわぬように

早い段階で手を打ちたかった。

これがきっかけで、彼女がなにか感じてくれれば良い方向にもむかうが

それにはやり方とタイミングというものがある。

一歩間違えてしまえば彼女はますます遥への執着を強めてしまふと思えば

様子を見るという意味でも彼女の周りを調べる必要があったのだ。

だからこそ和は彼女の護衛をふたりをお願いした。

最初はそれに、なんの得にもならないことをどうしてやるのか、と首を傾げるふたりだったが、

真相を知ってやっと合点がいったらしく

今はすつきりとした顔で和に協力をしてくれている。

本来ならこれも手出ししていることになりはするのだが

和にとつてふたりの間での出来事はもちろん遥が解決すべきだと思
うが

それ以外の要素に横槍されることは非常に面白くない事態だった。

周りにはわからなくとも、

今は実花の今後を左右する重要な時間だ。

ひとつでも間違えてはならない。

とにかく、彼女が遙に抱く恋心については遙に任せる。

それ以外のことならば出来るだけどうにかしてやりたい。

中途半端でも、和はそういう立場で見守っていたいのだ。

「でも弱ったねえ。そういう人たちって罪の意識も低いし

ノリが軽いからたち悪いんだよなあ。」

『そうなのよね。言ってしまうえばいちばん厄介な相手だわ。』

あれこれと頭の中で思考を巡らせれば、

和はいくつかの軌道修正を試みる。

和の中ではうまくいっても、実際はどうなるかはわからない。

「…ここは思った以上に素直だった実花ちゃん、の再起を信じてみるかなあ。」

『あら、なにか思いついたの?』

「うーん、隠密活動はちよつと難しそうだし、

ひよつとしたらわざとらしいくらい堂々のほうが都合がいいかもしれないなって。」

『それはまた、大胆ね。』

「とりあえず私の時と基本的にやり方は変えずにお願いできるかな。まず嫌がらせから始まるだろうから証拠固めとか。」

『わかったわ。』

「ただ、ちよつと難しいんだけど…工夫してほしいことがある。」

和がその工夫の話をすれば、梓は大変ね、と呟いた。

「費用はとりあえず私が持つ。ただ、領収書はもらっておいて、全部、逐一。」

『なんなのそれ、経費とかないわよ?』

「わかってるよ。とにかくそうしないと、

あの子の場合すぐに怒鳴り込んでいそうじゃん。したら泥沼ですよ?」

証拠も集められないし悪化するのはまず間違いないよ。」

『そうならなかったら…連中はおかしいと思うでしょうね。』

「だろっつねえ。そしたら第二段階になるだろうから、私の時とおんなじ。」

『……楽しそうね。』

「たのしくないよ、自分の時は楽しかったけどさ、ゲーム感覚もあつたし。」

でも実花ちゃんの場合はそうじゃない。」

後半の声のトーンはかなり低いものだった。

それに梓は先程の自分の失言を思えば気まずくなる。

「間違えられないのは確かだから。…ごめんね、梓さん面倒な事頼んじやって。」

『なに言ってるのよ水くさいわね。』

それにその言葉はフアンの子達に言いなさいよ。』

「…そらそうだね。」

『まったくもう。それじゃあ、切るわ。くれぐれも電話の充電は怠らないで』

必ず電源は入れておくこと。』

「了解。また明日ね。」

び、と通話終了のボタンを押せば和はひとつため息を吐いた。さてうまくいくのだろうか。

もしも今回の件をきっかけに、彼女が変わってくれるならば。

にしても、この辺の処理というか面倒は

本来ならば彼女の親がするべきことであるうが。

さすがにいい大人に説教くれてやるうと思うほど度胸はない。

というかそれをやるのは完全にフライングというか、

ともすれば空気読め、という勢いだ。

「甘やかされて、ねえ。」

自分も、そう厳しく育てられた覚えはない。

それでも叱るときは叱り、誉めるときは誉め、諭すときは諭してくれた。

そんな両親を態度にこそ出せないが和は尊敬している。

彼女の両親は、どんなひとたちなのだろうか。

興味が沸いたものの、会うことになったらそれはそれで嫌だな、と和は心の中で考えていた。

「やっぱ、始まったかー。」

「そのようね。」

「うーん、女の子ってコワイね。」

最近では定番になりつつある昼休み風景。

和、梓、浩平は屋上で頻繁に会うようになっていた。

目の前に広がった写真は、いつかを思い起こすような風景が広がる。和が今も大切に保管している彼女を囲った女子達の弱み…

もとい証拠の写真も、こんな風に劣悪さがにじみ出ていたものだ。

なにがそんなに面白いのか、大口をあけて楽しそうに皆笑っている。女性としてはちょっとアウトな雰囲気漂う顔がたくさんそこには写っていて

好きな男に送りつけると脅すだけでも効果がありそうである。

「で、全員の身元は割れてるの？」

「ええ、学年、クラス、名前、その他子細なデータがここにあるわ。」

「…ファンクラブの子達って刑事か探偵なの、それとも興信所の人間なの。」

若干引き攣りながら、ふたりのやり取りを浩平が聞いていたがそれを特に気に留めることなく梓から受け取ったSDカードを受け取りつつ

和はその中にあるデータを自身の携帯電話へ差し込み確認していく。

「あら、浩平すごい脂汗。別にそんなに怯えなくても大丈夫よ？」

「やましい所が多々ある人間は大変だねえ宮田君。」

でも最近は女遊び自重してるんでしょ？他にもなんかあんの？」

ちょうどペットボトルから水分を摂取している時だった浩平は和の言葉に盛大に咽る。

「なんかみんな春だなあ、うらやましいねはっはっは。」

「和！」

「勘弁してよ、笹森ちゃん。」

「心配しなくても、校内以外では活動してないよ彼女達。」

学校内限定での調べ物なら人海戦術でそれ程難しくないでしょう？」

「あ、そうなんだ。」

幾分かほっとしたような顔つきに浩平がなるので

和の目は鋭く光る。

「この前さあ、ぼそぼそ電話してるの聞いたよ。」

「なんのこと？」

「さん付けで呼んでたよねー、名前。」

とぼけようとした浩平が和の言葉にびしり、と固まる。

和がなんともいやらしい笑みを顔中にたたえていた。

「校外で年上かあ…ひよつとして社会人のお姉さんとか？」

「……うっわ、わかりやすいテにひっかかったな俺。」

「浩平、やっと特定の相手みつけたのねー！良かったじゃない！」

「まだ付き合ってない。ていうか付き合えるかわかんない。」

少し拗ねたようにぶつぶつとぼやく浩平がなんだか可愛くて、
梓とふたりでふきだしてしまふ。

「ごめんね、ちょっとからかいすぎた。」

大人の女についてなら今度相談してみたら、岡元先生。」

「あー、いいかもしれないわね。」

「いや…ゆかりちゃんみたいなタイプじゃないんだけどね、彼女。」

「いかにもモテるみたいない感じじゃないってこと？」

「うん。なんつうか堅物？ガッチガチにガードしてて

男を目の敵にしているというか…キャリアウーマンみたいだし

仕事で色々嫌なめにあってるのかもね、女だからっていう理由で。」

「へええ…なんか、なんも言えないけど、頑張ってるね。真剣みたい

だし…。」

「浩平もやつと本気になれる相手に出会えたんだものね。」

「ここでやらなきゃ男じゃないわよ。」

「好き勝手言ってくれるなー。でも、ありがと。」

苦笑しつつもお礼を言う浩平は、どこか嬉しそうでこちらも温かくなる。

「梓はどうなんだよ。なんか進展ないの？鈴木君。」

「当たり前みたいに名前を言うのが気に入らないわね。」

少し頬を染めている梓を浩平が弄っている。

ちよちよこと助け舟を出しつつ、いい加減真剣にみなければ、と目の前にあるデータを確認してゆく。

「……なるほど。不幸中の幸い、ともいえるのかな。」

梓さん。クラスでの様子はどうなってる？」

「和の話の通り、やっぱり孤立していることは確かみたいだわ。」

ただ組織立って無視というよりも、近寄りがたいと思われる所が大きいみたい。」

「意図して彼女をはじめてしまおう、っていうのではないわけね。」

「そうね。彼女、男子にも遠巻きに見られてるみたいで、」

多分そこが大きいんじゃないかしら？」

男子がちやほやしてたらそれこそクラス中の反発を買っていたんでしようけど

松永さんは遥一筋だっというのが一貫しているから

その上で近付こうとする男子は今のところはいないみたいね。」

「ほうほう、そうなんだ。…なんとも微妙な位置で今揺れ動いているわけだ。」

「微妙な立場。」

反芻するかのように浩平が地面をながめながらぼつりと呟くので和はそれにならず。

「今はまだ、彼女がつかめない状態でみんな戸惑っているわけだよ

ね。

どう扱ったものか、と悩んでる。

でも女子の不興はいつ買うかなんてそれこそわからない。

男子がひとりでも彼女に優しくしてしまえば、

それこそすぐに彼女への陰湿な嫌がらせを実行してしまうかもしれない。

お客さん状態の今はまだ充分に上手く向かせることは出来る。」

そう言って、和は携帯電話をカチカチと操作する。

「さつきからひとりひとり見てただけど…

幸いな事に嫌がらせの実行犯の中にクラスメイトはいない。

それなら今後の実花ちゃんを気にして慎重になる必要もないから
どんなお仕置きをしちゃっても大丈夫。」

その言葉に、浩平と梓の顔がわずかに引き攣るが、
特に和は反応をかえすこともなく話を続けた。

「種類が多岐にわたるのがちょっと面倒だけど…

どうやら繰り返しやっているのは同じ人達みたいだから。

これはきちんとグループになっているみたいだし。

リピーター以外は気にしなくていいと思うよ。

多分、あまりにも悔しくてやっちゃった、ていうのがほとんどだろ
うから。」

「まあ、あの目立つ言動はやっぱりまずいもんなあ。」

「そうね…それで和、もうある程度どうするかは決まってるの？」

「うん、まあね。思ったより簡単そうで助かった。

とにかくこれではらく放置してれば、向こうからリアクションが
あるはず。

そこをとにかく見逃さないようにしてほしい。

万が一取りこぼしがあれば、多分彼女はひどくわかりやすいから態度に出ると思う。宮田君、引き続き観察よろしく。」

「了解。」

「…さて、それじゃあ、もうちょっとお付き合いよろしくお願いします。」

真顔で頭を下げる和に、浩平と梓は苦笑する。

顔をあげれば和もふたりのように苦笑いを浮かべていた。

第四十一話「嵐を吹く風」

「どうしてそんなこと言うの!？」

結婚してくれるって言ったわ。嘘だったの!？」

「そのときは、本当にしてもいいかもしれないと思った気持ちもある。

でも、それだって本気だったわけじゃない。」

「遙、ひどいわ。責任を取って!」

漏れ聞こえてきた言葉だけでも、この会話は不味いとわかる。

第三者が聞いて良い話ではない。

そう思えば、いったん躊躇しつつも誰かがここを通る可能性を考えれば

どうしても声をかけずにはいらなかった。

「廊下まで響いてるよ、おふたりさん。」

コンコン、と出入り口をたたきつつ、和がため息混じりに声をかければ

弾かれたようにふたり同時に和に視線を向けた。

ここは放課後の教室で、決して誰も立ち入らないような場所ではない。

ほとんどの人間はもう帰宅しているだろうが

和のようにたまたま通りかかる人間だっているのだ。

図書室へと寄っていた和は、教室に忘れた本を思い出し階段を上がってきた。

行くときには自分の教室に近いほうの階段を利用するが

図書室から上がってくるときは遙の教室の前を通るルートになるのだ。

だから、和がここを通ったのは本当に偶然だったのだが、実花は般若のような顔で和を睨みつけていた。

「あなた…！厭らしいひとね、盗み聞きするなんて…！
遙に付き纏うつもりなの！？」

「実花！」

「…ちよつと落ち着いたら。通りかかったときに聞こえてきた会話が人に聞かれたらまずいのかなって思っただけだよ。」

「やっぱり聞いてたんじゃない！！いい加減にしてよ
いつまで遙に付き纏うつもり！？別れるって言っただけですよ！？」

実花の剣幕に、和は眉を顰めた。

思ったよりも良くない方向にすすんでいるのは明白で
ともすれば彼女の精神状態がまともであるかすらわからない。
プロの手にゆだねる所までいくのは時間の問題にも思われて
和は無言で遙を一瞥した。

鋭い視線で睨まれたのは遙に伝わったようで、
その視線を受けた彼は歯を食いしばり俯いてしまった。

逡巡し、和はひとつ息を吐く。

「なにを勘違いしてるんだか知らないけど、
私は和泉君に別れてくれと伝えてるよ。」

…それは、あなたに言われたからじゃなくあくまでも自分の判断だ
けどね。」

「…本当なの、遙？」

遥はちらりと和を見、それから大きなため息を吐いた。

「…本当だ。別れてほしいって少し前に言われた。」

「だったら良いじゃない、結婚してくれたって！」

今すぐじゃなくたっていいわ、まず私を恋人にして！！」

しかし必死の申し出に、遥は首を縦には振らない。

無言で拒否の意を示せば縋る実花の両手をゆっくりと引き離し

そのままきゅ、と両手を一纏めにしつつ遥の大きな掌で実花の手を包む。

「出来ないんだ。どうしたって、実花を女としてみる事はできない。実の妹を、そういう対象にみることは出来ないだろう？」

「私は実の妹なんかじゃないわ！！」

「それはわかってる。ただ、俺にとって、お前はそういう存在なんだ。」

だからこそお前は他の今までの女とは違う特別な存在だった。

大切であることに変わりはないから。

その気持ちがあるならば、このまま結婚してもいいか、と心のどこかで思っていた事は否定しない。」

その言葉に期待するかのように実花の瞳が揺れる。

しかし遥はそれに応えることは出来ない、続きの言葉を紡ぐ。

「でもそれは、実花にとっても残酷な事をしているって

今まで気付かなかったんだ。俺は馬鹿だったよ。

本当にひとを好きになるっていう気持ちがわからなかったんだ。…でも今ならわかる。

そして初めて、お前の気持ちの真剣さを知った。

ずっと子どもの我侷のように思っていた。憧れのようなものだ。

ただ兄のように慕ってくれている延長だと感じていたんだ。

年頃になればそういう相手をみつけるだろうと高をくくっていた。「
酷いわ…！私の気持ちを、なにひとつ信じてくれなかったのね…」

実花の目から、大粒の涙がこぼれる。

遥はその顔を痛みに耐えるような顔で見つめていた。

「…愛の無い結婚は、とても辛いものになる。
ましてや、一生自分を女として見てくれない男と寄り添うのは辛い
だろう？」

ダメ押しのような遥の言葉に、泣きながら実花は首を振る。
子どもが駄々をこねているように
嫌、と時折呟きながら嗚咽をもらす。

「信じていたのに…遥の、結婚しても良いという言葉信じてたの
よ！

だから私は…」

「そうだよな、本当にごめん、でも、できないんだ。できないよ…
！」

「どうして気付いてしまったの、そんな事に。」

私は、私は遥がずっと傍にいてくれればそれで良かったのに！
妹でもかまわないわ、大切だって言うのならいっしょに居てよ！
私の今までの時間をかえしてよ…！」

「実花…」

心底困った顔をしながら、遥は縋る実花を振りほどけずに固まる。
その様子に、和は退出の機を失くしずっと眺め続けていたが
このまま口を出さずに去っていいものかと途方に暮れていた。

正直、ここまでの説得をしてこれ以上なにをすればいいのかと言われれば

それこそ責任を取るしかない。

しかしもしそうしてしまえば、彼女は壊れてしまっだろう。

実花が遙に望むのは、女性として愛されることだ。

けれども彼女は今、目の前の問題に躍起になってそれを忘れている。妹でも傍にいたいというのであれば、結婚はすべきではないし恋人にもなれるはずがないのだ。

『順番が変われば…結末も変わるかもしれない。』

もしそれでも無理ならば、彼女の親にも打ち明けるべきだろう。

それこそ精神が完全に崩壊してしまうまえにそういう所へゆだねるしかない。

和が頭の中で考えを巡らしていると、気がつけば実花がこちらを見ていた。

遙の制止を振り切って、和に詰め寄ってくる。

「そもそもあなたさえいなければ、遙は私と結婚してくれたんじゃない！

あなたのせいよ！あなたが存在する限り、遙は私を見てくれない！」

「…またずいぶんと飛躍するねえ。」

でもそれって私が和泉君にとって特別だって言ってるようなもんだけど。」

「なによ…いつつもそうやって馬鹿にしたように見下して！」

掴みかかってきそうになるのを、和はさ、と振り払い

そのまま実花の腕を逆に掴めば後ろにひねる。

その痛みに実花は悲鳴をあげた。

「あのね、ちょっと落ち着いてくれない？叫ばなくても聞こえんだよ。」

「……っ本当に下品なひとね、暴力的で、最低だわ！」

「言ったよね、言動に責任を持ってっ。」

あんたがここで喚き散らしたら大切な遥が衆目にさらされてなに言われるかわかんないよ？

それこそ教師が介入する騒ぎになったらどうなるかわかったもんじやない。」

「……………！」

「痴話げんかじゃちょっと説明つかないレベルなんだよ。」

まだ騒ぐんならバケツに水汲んで持ってこようか。」

沸騰した頭もちよつとは冷えるんじゃない？」

「……………わかつたわよ！」

苛立たしげなその声に和は手を離す。

実花は信じられない、という表情で和を見ながら腕をさすっていた。

「……私が死んでも、」

和泉君はあなたのほしいものを与えてはくれないんじゃないかな。」

「そんなの、わからないわ!!！」

「そう。……相手が不幸になっても、あなたはかまわないんだね。」

「……………どういう意味？」

その言葉を最後に、和は邪魔をしてすまなかったという言葉を残し教室を去っていった。

残されたふたりは、なんともいえない空気の中無言で昇降口へと歩き出したのだった。

教室で自身の席に座る和は、その時をとにかく待っていた。どういふ方向になるかはわからない。

けれどもそれでも、現状を打破する変化がほしいと思っていた。

そのとき。

スカートのポケットにしまっていた携帯電話が震える。

和は慌ててそこに手を入れれば、一通のメールを読む。

「きた。」

誰もいない放課後の教室で、和はひとり笑っていた。

それは放課後だった。

和の携帯電話に、着信が入る。

「もしもし。」

『今、女子六人に連れて行かれたわ。』

嫌がらせをしていたグループと同一よ。』

梓の声でそれが伝えられれば、和は冷静の二文字を頭に浮かべ焦る心を抑える。

「場所は？」

『外に出て行くみたい。』

「…体育倉庫に先回りして待機できるかって伝えてくれる？」

『わかったわ。』

一端会話が途切れ、梓が連絡を取れば大丈夫だということだった。

『本当に体育館倉庫の前に連れて行くみたい。なんでわかったの？』
「んー、なんとなく高飛車なお嬢様をとにかく怖がらせてやりたいとか

考えるのかな、って。閉じ込める気なんじゃないのかなあ。ほぼ勘
だっただけ。」

『…和の勘って怖いわね。』

「はいはい。ありがとうね、じゃあ、私も向かうから合流するまで
待機してて。」

電話を切れば、和は小走りでその場所へと向かって行った。

しかし女子のお呼び出しというものは、なんともワンパターンなも

のだと
和はひとり苦笑していた。

「梓さん！」

「あ、和。今の所倉庫前で囲まれて話をしてるみたい。」

校庭の隅にあるその場所は、用が無い限りなかなか人目につかないので

お呼び出しにはもってこいだ。

部活生もこの倉庫は頻繁におとずれることはなく、どちらかといえば古いものを保管しているような役割を担っていた。だからこそ彼女達はここを選択したのだろう。

校庭と中庭のちょうど境目のような場所にあるこの倉庫は大きな木の陰にちょうどなるのだがあまりにも接近してのぞくと

そこまで見通しが悪いわけではないので気が付かれてしまう。七人が果たしてどんな会話をしているのかはわからないが梓の携帯は倉庫に潜む女の子達と通話状態なので電話から声がもれ聞こえていた。

『そんな口聞けるのいまのうちだけよ！』

怒鳴り声が聞こえ、和は梓に目配せをすれば梓がうなずいた。ふたりは無言で倉庫へと向かえば、近付いてきた足音に驚いた女子達がこちらを振り向いた。

「！？なに…あ、た、高原先輩！！」

梓の顔をみて指差す後輩に梓はにっこりと微笑んだ。

「あら、私を知ってるの？光荣ね。」

続いて声をあげた隣の女生徒が今度は和を指差す。

「遥様の元カノ！！」

「…なんだろうなあ、この扱いの差。」

「あら、憧れのお姉さまになりたかったの？」

「いや、なりたかないけど。」

後輩になんともいえない名称で叫ばれてしまい遥の付属品ではないのにと不満をもらすも梓に悪戯っぱく囁かれれば和は苦笑する。

六人の女生徒も驚いてはいたがそれよりもぽかんと口を開けてふたりをみている実花がおかしくて和はふきだしそうになるのを堪えるのが大変だった。なんとか感情を押し殺しつつ、和は六人の顔を確認すればひとりずつ順番に指を差してゆく。

「右から、1-4組、池田佳代さん、高野恵さん、

1-6組、秋元舞さん、大森由紀さん、

木村瞳さん、井川理沙さん。」

全員違わず名前を呼ばれ、六人が目を見開いて固まった。その様子に和は目を細めつつ笑う。

「これくらいでそんな反応されたらつまらないな。もっと詳しいデータが手元にあるのに。」

君たちがどのクラスの誰を好きかとかばっちり知っちゃってるんだよ?」

和の楽しそうな声に一年生六人は声も出せずに震える。梓がそれにたしなめるような声をあげた。

「ちょっと和、あんまりやるとこっちがいじめてるみたいになるわよ?」

「ああ、ごめんごめん。手加減しないと駄目か…あのさ、どうしてこんな事したの?」

和の問いかけに、一年生は口を噤む。

しかし待っていても仕方がないとまた声をかけようとすれば静寂をやぶったのは呼び出された実花の声だった。

「この期に及んで答ええないなんてどういうつもり!? 卑怯者な上に臆病者ね! 好かれる遥がかawaiiそうだわ。」

その言葉に、和と梓のほうを向いていた六人が実花の方へと振り向く。

なんですって!と口々に声をあげはじめた。

「あんたのそういう所がむかつくんだよ!」

「遥様が嫌がってるってわかんねーのかよ!」

「馬鹿にしてお嬢様気取りで、顔が良くて性格最悪じゃ
遥様だつて相手にするわけないじゃん!!」

罵詈雑言を浴びせられて、実花も応戦しようとしたが
それに和は待ったをかける。

「はいはい！性格悪いのは君達もいっしょ。ちゅうもーく!」

そう言つて和がびら、と数々の写真を広げてみせれば
それを見た六人は悲鳴をあげる。

ひとりが不味いと思つたのかひつたくろうと突進してきて
和は制止してあっさりと写真を一年の手に渡した。

「別にデータはこつちが持つてるからあげるよ。」

元データ消されない限りいくらでも複製できるからね。」

呆然としている彼女達の様子を訝り、実花が一枚の写真を視界にうつせば

そこには醜悪な顔でなにかをしている彼女達が写っていた。

「?なによこれ。」

「それは、あなたの持ち物に嫌がらせをしている所だよ。」

教科書を破いてみたり、体操着を引き裂いたり、机に落書きしたり。

「

その言葉に、実花の瞳が驚愕で見開かれれば

次にはまさか、と声をあげる。

「そんなはずないわよ。私ずっと教科書も体操着も
そんなことされた形跡がないもの。」

それに、今度は六人の女子達が戸惑う。
それぞれの様子を確認しつつ和は嗤った。

「そりゃあそうだよ。私達が毎回新しいものに摩り替えてたんだからね。」

なるべくばれない形で用意するのはなかなか苦労したけど
まだ学校に来て間もないこともあって新品になっても
そんなに違和感なかったみたいだね？」

和の告白に衝撃を受けた一年生全員はしばらく固まっていたが
やがて最初に立ち直った実花が和に疑問を向ける。

「どうしてそんなことしたの？」

「根本的な解決をしたかったから。それには君の短絡的思考が邪魔
だった。」

「…わからないわ。」

眉を寄せて呟く実花に、梓が続きを引き受けて声をあげる。

「あなた、嫌がらせをされたとわかったらすぐに誰がやったのかと
騒いで回ったでしょう？」

そうなったら彼女達の行動はきつとエスカレートしたわよ。
証拠も集まらずになかなか解決出来ないまま、悪循環だったでしょ
うね。」

「そう。こういう写真を撮って、なおかつ破損されたもの残らず
保管しておきたかったんだよね！。」

「じゃなきゃ彼女達がやったっていう確たる証拠が揃えられないから。」

梓と和の言い分を聞いて、
確かに自分ならばそのように行動してしまつたらうと考えるも
次なる疑問が実花に降りかかる。

「なぜ？私を助けたってなんにもならないのに。」

それには苦笑しただけで、和は答えずに実花を呼び出した一年に視線をやる。

すると六人はびくり、と身を竦ませた。

「この写真と今まで傷付けられたものをつきつければ、
あなた達が彼女に嫌がらせをした証拠には充分だつてわかるね？
それを表沙汰にされればどうなるかも。」

和の問いかけに、小さく寄り添うように震えながら六人はうなづく。

「だつたら君たちが取るべき行動はわかっているね？
今後一切、彼女に手を出さない。」

それを約束するなら、永遠にこれが表に出ることはない。
「や、約束します！だから……！！」

ひとりの一年が声をあげれば、周りも慌ててそれに賛同する。
和の視線に、梓はうなづく。

「それならば今回は不問に伏すわ。でも次は無いつて覚えておいて
ね。」

わかつたら、もう行きなさい。」

その言葉に弾かれたように六人は走り出す。
後姿を見送りながら、梓と和は息を吐いた。

「ちよつと！どうするかは私が決める事だわ。どうして帰したりするのよ！」

その実花の言葉に、和は呆れた顔をする。

「何言ってるの？証拠集めたのは私達なんだから最後のお咎め決めるのも私達に決まってるでしょ。」

「嫌がらせを受けたのは私よ！」

「別に感謝されたいわけではないけど…」

お礼も言わずに怒鳴るって随分いい教育されたもんだね。」

ぼやきつつ和が体育倉庫の扉へと手をかける。

何事かを言いかけていた実花だったが、和の動きに口を閉ざした。

すると中から女生徒が二人出て来て、

驚きに固まる実花をよそに、和を含めた四人は

なにかを確かめるようにのぞきこんでいる。

「さすが、腕良いなあ。今回も本当助かったよ。ありがとうね。」

「私からも改めて今度みんなにお礼をさせてって伝えて。良くやってくれたわ。」

にっこりと和と梓が微笑めば、二人の女子はそれに応えて

すぐに校舎へと去って行った。

実花の目に、ビデオカメラのようなものが確認できて

もしやあの様子を映像におさめていたのだろうかと考えれば

目の前に立つふたりにどこか恐ろしさを感じた。

表情でそれが伝わったのだらう。梓がすぐに抗議の目を実花にむける。

「言っておくけれど、全部和の案なのよ。」

「それはそうだけど梓さん、そんな押し付けるように言わなくとも。」

改めて和が実花に向き直れば、小さく彼女の身体は揺れる。

「実花ちゃん。」

「気安く呼ばないで！」

「…あのね、もしも彼女達になんらかの罰を与えれば

学校生活がどんどん悪化するよ。それでもどうにかしたいの？」

「それは、」

「それに。今回の件、あの子達がしたことは決して誉められた事ではないけど

実花ちゃんの自業自得だつてわかつてる？」

和の問いかけに、わからないという顔を実花がすれば何度目になるかわからない盛大なため息を和が吐いた。

「言つたでしょう。言動には気をつけると、何度も。」

言われたほうがどんな気分になるのか。責任を取れないなら無闇に咬みつくものじゃない。

あの子達はね、別に熱心な和泉君のファンじゃない。

実花ちゃんの言動に腹が立ってあなたに嫌がらせを始めたんだよ？」

「そんな、私は本当の事を言っただけよ！遥の周りをうるさく纏わりつくから」

「だからなに？単に自分が気に入らないから排除しようとしただけでしょ。」

結果どうなった？悪戯に人を傷付けてその報いを受けた。」

「私は…遥の為を思つて」

「和泉君があなたにうつとおしいからどうにかしてくれって頼んだ？
そうじゃないのにやったんならそれは完全な勇み足だよ。」

「……………」
「彼はどこにいたって目立つ存在で、隣に立てば女子の嫉妬の対象になる。」

それは理不尽かもしれないね。

けれども彼の隣に立つならそれを受け入れる覚悟をしなくちゃいけない。

もしもそれが我慢できないなら他の相手をみつけるべきだよ。」

和の言葉に、実花はたまらず真っ赤になれば

激昂して彼女を怒鳴りつける。

「あなたはその覚悟で隣に居たとでも言うの！！？」

「もちろん。」

「私みたいな目に遭ってもいけないせに！口だけならなんとも言えるわ！」

「遭ったとも。しかも君みたいに周りの女子に咬みついてもない。ただ、地味な女が遙に近づくな、ってもっと怖いお姉さま方に詰め寄られたよ。」

「え……………」

「私はね、今みたいに人に協力してもらってはいたけれど
自分自身でこうしたいから助けて欲しいと頼んだ。」

自分で決着をつける力があつたからそういう人たちを黙らせた。

でも、実花ちゃんはそうじゃないって、わかるね？」

「……………」

和の言葉に、実花は悔しそうに唇を噛む。

言い返そうにも、次の言葉が出てこないらしい。

「和泉君も含め、あなたは与えられることに慣れすぎている。だから相手を思いやる気持ちが極端に少ない。」

本当に和泉君が好きなのか私には疑問すら感じる。」

「なんですって…!!?」

その言い分はさすがに実花の琴線に触れたのだろう。

全身を戦慄かせ、言葉も無いほどの怒りをあらわにしている。

「おもちゃを取られたのを悔しがってる子どもにしかみえない。

あなた、自分ばかりこうしろああしろって言うけどさ、

好いた相手の幸せを考えたことあんの？」

「それは…わ、私が幸せにしてみせるもの!」

「あなたを妹としか見れないと言っているのに？」

あんなに辛そうにあなたを見るのに？」

「うるさい!!あんたに関係ないでしょ!!?」

悲鳴のように実花が叫んだ次の瞬間。

『ガァン!!』

無表情になった和の拳が、実花の顔すぐ横をかすめ、体育倉庫の扉をおもいきり叩いた。

あまりの衝撃に、叫んだ実花も、梓も、動きを止めたかのように固まり

和の顔を凝視した。

「関係ねえと思ったよ。アンタの気持ちを無視し続けた遙を最低だとも。」

だからこそ別れを告げた。

アンタに申し訳が立たないとどこかで感じたからね。
侮辱かもしれないけど、そんな宙ぶらりんの状態で
遥の彼女を名乗れるほど図太い神経私はしてねえ。」

でもな、と元々そうだった和の声がより一層低くなる。

「好きな男が、不幸になるの黙って見ていられる程私はお人好しじゃない。

あんなに辛そうにしてるのに、そんな顔させてんのに、
まだ泣いて縋るためーに、腹が立ってしゃーねえんだよ。
矛盾してるって言われてもいい。

私は実花ちゃんが許せない。幸せにしてくれるんなら、
遥があなたを好きだと言うのなら、それに気付いたと言うのなら、
私はおとなしく身を引く。

でもそうじゃないことくらい、あなたにだってわかってるんでしょ
う?。」

「……………」

「これ以上、苦しむ彼を見るのは嫌なの。
あなたのことを助けたいと思うのも、結局は

和泉君の事しか考えていない自分のエゴなんだろうって分かってる。

」

自嘲する和を、実花はどういう感情を持って接すればいいのかわか
らなくなる。

「私は、あなたがそこから成長しない限り彼を実花ちゃんに任せる
つもりはない。

いつか和泉君が壊れてしまう前に、彼を取り戻す。でも…

変わる気があるなら私はなにも口出す気はないし、

彼を手に入れる努力をするあなたを邪魔しようとも思わないから。

それだけは、覚えておいて。」

言いたいことをすべて伝えたと感じれば、和は息を吐いてそこを立ち去ろうとする。

しかし、振り返り足を踏み出そうとした和の背中に、制止の声が聞こえる。

声の方向をむけば、齒噛みする実花がそこに立っていた。

「あなたは…なにがなんでも遙がほしいとは思わないの!?
どんな汚い手を使っても好きなひとに傍にいてほしいと願った事はないの!!!?」

震えながら睨む実花を一瞥し、ちらりと梓を見れば、梓は苦笑していた。

お互いに顔を見合わせて、同じような表情になる。

「私、元々そんな激情家じゃないからなあ。」

「あら、さっきの啖呵はなかなかだったわよ。」

「…基本的に淡泊だと思ってたんだけどね。」

自分を無視して話すふたりに苛立って、実花が声をあげれば和はゆっくりと顔を実花へとむけた。

「ないねえ。だって相手が笑ってないのに隣にいても自分だって嫌な気分にしかならないだろうし。」

「大体、女は愛された方が幸せなのよ。」

こつちばかり与えてちつともくれないんじゃないわ!」

「と、和泉遥の元カノが申しておりますが。」

「ちやかさないでちょうだい。」

その言葉に、実花は目を見開く。
現状の恋人と、その前に関係を持っていた相手が友人とは
一体どういふことなのだろうか。

「あなたは…笹森和が憎くはないの？」

「なぜ？遙が勝手に好きになったのに。」

第一、遥なんか和はもつたいないわよ。」

梓のその軽い口調に、実花は心底わからないとでもいうように
眉間に思い切り皺を寄せれば、しばらく無言で何事かを考えている
ようだった。

彼女の中で答えが出たのか、それともわからないという結論だった
のかは

和と梓には量りかねたが、やがて実花はゆっくりとふたりに歩み寄
る。

「…ありがとう。」

それはとても小さい声だったが、はっきりと聞こえる声で
和と梓に実花は礼を伝えれば、その場から逃げるように去って行っ
た。

「和、効果アリだったんじゃない？」

「えええ、まじで？あんなこと言うつもりじゃなかったんだけど。
途中からキシちゃったから想定外だったし。」

「それが逆に良かったのかもよ？」

「…だといいけど。」

苦笑しながら顔を向ける和に、

大丈夫よ、と言って梓が微笑むので、和は心が温かくなり

改めて梓に感謝の意を伝えたのだった。

第四十一話「嵐を吹く風」(後書き)

最近、ヒロインが男前すぎて困ってます。

第四十二話「嵐に差し込んだ光」

彼女の心の中を、ぐるぐるとひとつの言葉が回っていた。

『相手の幸せ』

それは、なんとも奇妙な言葉であった。

そんなこと、今まで意識してもいなかったからである。

松永実花は、一人っ子ということと、

子どもができにくいと医者に告げられた母から

苦勞の末に出来た子どもということもあり、

過分に甘やかされて育ってきた。

なによりも、両親が普通よりも裕福であったことが災いし

ほしいものはなんでも買ってもらえ、

可愛い、綺麗と言われ続けて彼女は16年の月日を迎えた。

事実、彼女は自身の容姿が優れている事は自覚していたし
優しくされるのも当たり前のように思っていた。

両親はいつもにこにここと笑って、怒られた記憶もない。

そんな中で、家同士が仲の良い和泉家の息子は実花よりひとつ年上
で、

ふたりは仲睦まじく、なによりも唯一実花を叱ってくれる遙の存在は
実花にとって大きかった。

彼女が壊滅的に嫌味つたらしいお嬢様まで至らなかったのは
遙によるものがかかなり大きい。というより、

彼がいなければそうはならなかったのではないだろうか。

そんな遙を好きになるのは彼女からすれば
呼吸するかのようになり前事で、
遙もまたそうなのだと思われて疑わなかった。

時折女性の影が見えたけど、
誰もかれも自分以上に大切にされているとは思えなかった。
だから、彼女はますます確信を持つ。

彼とすれば、自分は未来永劫幸せなのだ、と。

いつからなだつたらう。
彼を手に入れようと躍起になったのは。
努力をするようになったのは。

好きだと告げれば、かえしてくれると思っていた。
同じものをかえしてくれると信じていた。
努力をすれば、それに見合うだけのものをもらえると。

だって彼女の世界ではそれが常識だったのだから。

「…ねえ、遥。」
「ん？」

穏やかな微笑みを浮かべて向かいに座る彼をみて
実花はどこかがしめつけられるのを感じる。

自分の作った夕食をこうしていっしょにとつて、
笑いながら会話をしていれば、
形だけなら誰にでも恋人のように、ともすれば夫婦のようにみえる
だろう。

形だけなら。

自分で考えておいて、その言葉に酷く不快になった。

「遥は、どうして今ここに座ってくれてるの？」

「実花が大切だからだよ。」

「それは、どういう意味？」

「家族として、ただのご近所さんでも、幼馴染以上に妹のように大切だよ。」

即答されて、実花の心はずき、と痛む。

「笹森和は？」

「もちろん、大切。」

「どういう、大切？」

遥は実花の質問に、難しそうに眉根を寄せる。

自分の時は即答したのに、和についてはどこか言いよどむというの
はなにかを迷っている証拠なのだろうか。

…もう、好きではないのだろうか。
そんな淡い期待を未だ抱いてしまう。

「…和は、俺の全部。」

「全部…？」

「みているだけで、幸せになれるっていうのかな。」

俺の全部が、和に反応するというか、無条件で大切にしたいって感じる。

きっと明白な理由ってない気がするなあ。

大切な存在というか、そうなんだけど…なんて表現すればいいんだろう。

宝物なんだよ。誰にもみせたくなくて、時折どこかに閉じ込めたくなる。」

遙の口から紡がれるその言葉に、
ぽつりぽつり、と実花の心に黒い染みができてゆく。

なぜ、自分ではなかったのだろう。

ずっと小さい頃からいっしょにいて、

いつから好きになったのかなともうわからない。

自分の恋心を否定されて、

なおかつ彼がここにいてくれる理由も実花にはわからなかった。

彼にとって、もはや自分は憎まれるべき人間なのではないのだろうか。

それなのに笑って食卓を囲んでくれるのはなぜなのだろう。

何度考えても、彼女にはわからない。

やがて頭痛を覚えて、

実花は早々に自身の部屋へと退散することにした。

「様子がおかしい？」

「そ。ここ数日なーんかね。」

もう何回目になるのかわからない三人での食事風景。

遥発信で築かれた関係なのに、

その彼がいないのはなんともおかしな話だ。

浩平から発せられた言葉の意味が果たしてどういうものなのか
疑問をそのまま口にすれば、浩平は肩を竦める。

梓にもなにか思い当たるものがあるのか浩平に同意する。

「まあ、私に態度がよそよそしくなるのはわかるんだけど…
そういえば浩平にたいしてもどこか変よね。」

「ていうか彼女自体の様子がおかしいんじゃないかなあ。
最近、考え込んでるっぽいことが多いもん。」

「へえ…そうなんだ。」

梓と浩平の言葉に、和は頭を巡らせる。

ひよっとすると、今彼女のなかでなにかが変わろうとしているのか
もしれない。

それが果たしてどういう方面になるのかはわからないが
和にとつては少し嬉しい知らせだった。

「にしても、笹森チャンてさあ、ずいぶんお人好しだね。
もしくは遥のことかなり愛しちゃってるか。」

突然の浩平の言葉に、和は内心動揺する。

それでも表に出ないのは彼女の精神力の賜である。

「それはどういうことですか。」

「俺だつたらこんな面倒なことしないもん。」

あの子がどうなるうが知つたこつちゃないなあ。

無視して付き合い続けるね。

仲良いところ見せびらかせば勝手に発狂して病院送りにでもなるん
じゃないの?。」

浩平の鬼畜な物言いに梓は眉を顰める。

和も似たような感情は抱いたものの、まあ言いたいことはわかる。
たしかになんともくだらない茶番を繰り広げていると
自身でも思ってしまうからだ。

「そりゃあ私だつてただのキチガイなストーカー相手ならこんなことしないよ。」

「……え、あの子の事そんな風に思ってるの？」

「思ってたらかんな事やりますかい。」

対人間として説得できると思ってるから実行したんだから。どこかほっておけない感情があるのも本当だし。」

でも。一番の理由は。

「遙にとつて大切な存在だから、自分も大切にしたい？」

悪戯っぽい浩平の笑みに、和は素直に苦笑する。

浩平はそれを是とつたのだろう。大きいため息を落とした。

「あーああ、いいなー遙。愛されてて。俺も愛されたーい。」

「まあ彼女にとつたらありがた迷惑だろうけどね。」

「それこそそんなの気にしなくていいんじゃないの？」

自分の事しか考えてないじゃん、あの子。」

浩平の言葉になんとも言えない毒が含まれているのがわかり和は不思議そうに浩平の顔をながめた。

今初めて気が付いたが、彼は松永実花を嫌いどころではなく嫌悪や侮蔑の対象として扱っているのがわかる。

梓も同じ事を思ったのだろう。

似たような表情をふたりの女性にむけられ、浩平は苦笑する。

「俺ね、基本的に責任取れない子嫌いなんだよね。」

だつてキツイ物言いするくせにちゃっかり傷付いてるし。

性格の悪い子は嫌いじゃないんだけど、

かまってちゃんの困ったちゃんは生理的にムリー。」

語尾にハートがつきそうな、なんとも軽く明るい声音ではあるが
言っていることは辛辣極まりなく、梓はなんともいえないような顔
をする。

和はひとつ息を吐けば、なんとなく浮かんだ思いを口にしてみた。

「だから私も嫌わなideくれたの？」

ぼつりと呟いた言葉に浩平が「？」と首を傾げれば、和は苦笑する。

「いや、自分の大切な友達がさ、こんな女に捕まったわけじゃん？
普通だったら私は嫌われてもおおかしくないかなあと思ってたね。

でも宮田君でけっこう色々とアドバイスもしてくれたりして
少なくともマイナスの感情を向けられたことってなかったなって思
ってた。」

「俺に止める権利なんてないでしょー？」

それに嫌いどころか個人的に俺は好きだもん、笹森ちゃんのこと。
遥が君に執着する理由だって、よくわかるよ。」

その言葉に驚いたように和が目丸くすれば

浩平はふ、と笑った。

気が付けば梓も微笑んでいるようで、

和はふたりがどうしてそんな表情をしているのかわからない。

「……メリットを求めずに、ただ隣に居てくれるひとは
果たしてどれくらいいるのかな。」

呟かれたその言葉に、和はどきりとする。

「……………そんなに、それって大事？」

「うーん、似たような奴ばっか集まるしねそれこそそれでも遥に下心まるで無しな奴はいなかったかもね。」

「そうよねえ、私達の中にいたって遥は目立つもの。損得勘定なしとしても、好かれないとは思ってしまっわよねっばり。」

「大体が勝手にコンプレックス抱いて去るか好きになってももらえないのが辛くて去るか。」

「そうじゃなきゃおこぼれに与ろうとするか、だよな。」

梓と浩平の会話は、その意味は理解できてもその境遇は理解できないものだった。

自分はそれこそ普通にしか生きてこなかったしそれを求めてもいた。

だからこそ他人に利用されないように気を遣って生きるなんて今までどんな人生だったのだろうか。

「はー、目立つひとつって本当大変だねえ。面倒くさそ。」

呟いた和の言葉に、梓と浩平は笑った。

「そうそう、だからそういうところ。」

俺はね、笹森チャンが遥の傍にいてくれるのは友としてすごく嬉しい。」

「私もそう。…だから、手を引こうなんて考えないでよね。」

ふたりから少し鋭い視線をなげかけられるも、和はそれになにかを答えることはしなかった。

これから先、自分と遥はどうなるのか。

それは、ともすれば和自身がいちばん疑問に思つことなのかもしれなく、

はい、ともいいえ、とも口には出来なかった。

ただそこにある確かな事實は

遙を好きであるという気持ち、ただそれだけだった。

『なるようにしか…なりませんよ、うん。』

そろり、と上をむけば青い空が広がっていて

和の心に落とされた眩きは

この空の青さのように確かな説得力をもたらして

和の中に浸透していったのだった。

「笹森さん。」

聞き覚えはあるのに、慣れないそのトーンに
一瞬誰に呼ばれたのかわからなかった。

声のほうを向けば2・3教室出入り口には
松永実花が立っついていて

彼女は確かに穏やかな声で和の名前を呼んだのであった。

放課後になり半分の人間は教室をあとにしていたが
まだ身支度をしていた生徒達は無遠慮な視線を実花にむけており
しかし彼女がそれを気にしている様子はない。
ただ真っ直ぐに、和の顔をみつめていた。

「……………どうしたの？」

疑問符だらけであり、僅かながら警戒心もある。

それでも和は特にそれをあらわにするわけでもなく
少し目を丸くして多少驚きました、というポーズでもって実花に
応えた。

「ちよつと、お話があるの。できればふたりで話したいのだけれど。
かまわないかしら？」

「……………」

穏やかなその表情はひよつとすると
ふらふらと揺れているのかもしれない、と和は思った。

なにかが吹っ切れたとして、

果たしてそれは良い方向にむかっているのだろうか？

彼女の激情がなりをひそめているのは、

どこかが死滅してしまったからなのかもしれない。

もしもそうならば、なにがきっかけでそれが噴きあがるのかわから
ない。

実花にとって、和は憎むべき対象のはずだ。そうであるならば、目の前の彼女の穏やかな表情はなにかの前触れなのかもしれない。

所謂、キレる直前の人間、というわけである。

ナイフで刺されたりはさすがに嫌だ。

そうではありませんように、という妙な祈りをしつつそれでも和はふたりきりになるのも拒否はせずにならずいた。

実花が来た初日の昼休みに和が引き連れた空き教室。そこにふたりはおとずれていた。

校舎の端っこで人気がない。

危険信号は黄色ランプが点灯中で和は警戒心を強めつついつかのように腰掛ける彼女を無表情でみつめていた。

さすがに隣に座する気にはなれなかった和は多少の距離を取って実花の正面に立つ。

「…それで、お話っていうのは？」

和の言葉に、ぼんやりと教室の外をながめていた実花がゆっくりと和へと視線をうつした。

ひとつ小さく息を吐けば、和から顔をそらし床をみつめる。

「あなたの言葉が、ここ一週間はなれなかったわ。」

特に相槌を打つことなく、和は次の言葉を待つ。

「最近、文化祭の準備で学校全体が慌しいじゃない？」

「…そうだね。」

思いも寄らない方向に話が進んだことに面食らい、少し驚きをはらんだような声音が和から発せられた。

文化祭。

和のクラスは定番の喫茶店をやるらしく

とにかくウエイトレスだけは御免だと思ふ和は

のらりくらりと適当にクラスの手伝いをしている。

まだ準備が本格化しているわけではなく、

細かい段取りがやっと決まった、という感じだ。

もうそろそろ、授業が免除されたりする期間に突入するだろう。

「私の高校って、こんな風にわいわいやるような事がなかったのよね。」

なんていうか、皆どこか牽制しあって生きていて

…友達も出来るような環境じゃなかったわ。

まあ、私自身にもたくさん問題はあったんでしょうけど。」

くすくすと楽しそうな声をあげて笑う実花を、

今度こそ本当に驚きの目で和がみつめれば

実花はその視線を真っ直ぐ和にうつした。

「あれから、一回だけ私の教科書が破かれていたことがあって、

あなた達の言葉をどこか現実感なく受け止めていたんだけど
目の当たりにしたとたん、すごく怖くなったの。」
「…そう。」

和は、それを知っていた。

知っていて、その事実を捨て置いたのだ。

『順番が変われば』

いつか考えたこと。

実花と遥のやりとりをみて、

あまりにも自分本位な実花に遥の言葉をきちんと聞いてもらうには
彼女がどう変化したらいいのか、と考えた。

痛みは、感じなければわからない。

それを施されたことのない人間は、とても不幸であると思ふ。

痛みがわからない場所で生きるのは、本来幸せなのかもしれない。

けれどまったくわからない場所で生きていけば、

幸せは普通の日常になってしまう。

優しさも、優しさではなく普通のことになってしまう。

そういう神経が麻痺して、どんどん些細な幸せを感じ取れなくなり、
痛みがわからなくなる人間は本当は不幸なのではないか？と

和は感じるのだ。

そんなひとの傍にいたいと思ふのはよっぽどのお人好しか
身内くらいしかいなくなる。

他人に受け入れられないという事は、
思うよりもきつい。

和は、他人に深く干渉されるのを厭う人間であるが
だからといって他人をすべて排除したいと思わないのは

それがひどく辛いことだと知っているからだ。
だからこそ、自分は我侬であるのだという自覚がある。
その自覚のありなしは、けっこう大きいものだ。

意識して距離を保ち、相手を慮らなければ
なかなか良好な人間関係は築けない。

実花は、他人との距離感をはかることがひどくへただ。
もしも彼女がそこから抜け出せれば、と考えた。

視野を広く持つということとは色々な感情をわからなければ難しい。
遥が傷付くというのがどういう意味か。

他人に傷を付けるというのはどういう意味か。

小学校の頃にはもう学んでいるような事柄を、
高校生にどう教えたものかと悩んだ和は、
今回の計画を思いついたのだ。

実花に嫌がらせの事実を伝えなかったのは
証拠集めと共に先程考えていたような理由があったからだ。

激化するまえに止めて彼女はまず他人を傷付けた事実を知り、
自身が傷つけられる恐怖を味わった。

ここまでできて初めて、和の計画は遂行されたといえるだろう。
やっとここまでできたのか。

梓と浩平にはどんなお礼をすればいいだろうか。
安いものをおごるだけでは少々気が済まないほどの借りができてし
まった。

と頭の中でそこまで考えたところで

思考の迷宮に陥りつつある自分をなんとか呼び起こす。

目の前にいる人物を確認すれば、

そうだ今自分は松永実花と対話しているのだ、と思い直す。

「呆然として、私が立ち尽くしていたとき、

隣の席に座るクラスメイトが遠慮がちに声をかけてくれたわ。

今日一日大変だから、教科書をいっしょにみないかって。」

「……………」

「私がいいの？つてたずねたら、もちろん、つて笑ってくれた。

ありがとうと笑い返せば、

そこからクラスの人たちが私に話しかけてくれるようになったの。」

「そうだったんだ。教科書は、ひどかった？」

「全部がぜんぶではなかったからそれほどではなかったんだけど、

周りの人たちが酷いことするね、つて声をかけてくれて

多少、疑心暗鬼になりそうではあったけど

クラスの人たちがやったのではないと思いたがつてる自分に気が付

いたの。」

ああ、私は今嬉しいのね、つて。」

はにかむように微笑む彼女に、和は同じように笑う。

どうやら最高の結果につながってくれたようだ。

「文化祭準備、すごく楽しいわ。

親しくなった女の子達と、今度、休日に会う約束をしたの。」

「そう、充実した学校生活になりつつあるわけだね？」

子どものようなその反応が可愛くて、和はくすり、と笑う。

お嬢様育ちの彼女は、きつとこれから何をするにも冒険だろう。

ふいに、立ち上がった彼女は、何事かを言いかけて止まる。もう一度決意したように口を開けば、やっぱり出来ずに俯いてしまふ。

和はその様子に首を傾げ、そつと実花に近付いた。

「実花ちゃん？どうしたの？」

優しい声音に、実花は決意を固める。

そろ、と顔をあげれば、目の前で微笑む和の表情もとても優しいものであり

実花はなぜだか泣きたい気分になる。

「…あ、の。ごめんなさい。」

「ん？なにが？」

「遥…のことなの。」

「和泉君？うん、どうした？」

目をそろそろと宙にむけ、泳がせるように右往左往させる。

実花の大きい瞳だと、なんだかぼろつと取れてしまいそうだな、とあさつてのことを思いつつ半ば本気でそれを心配する和に

ぼそぼそと実花が話し始めた。

「あの、ね。他人に、今まで、受け入れられたことがなくって。

だから、なんというか、遥がいないと、世界全部から見捨てられるとか。

そんなことを思ってしまった。いた、みたい、なの、今まで。

ある種の…強迫観念？て、いうの、かしら。」

「ああ、うん、なるほど。今まで異常なまでに執着してしまった理由が

自分でやっと分析できたわけだね。飛躍的な進歩だ、えらいえらい。

「
右手で実花の頭を撫でながら、和がにこにここと誉めてやれば
実花は顔を真っ赤に染め上げる。」

「どうして、優しくするの？」

「ん？うーん…和泉君の大切な子だから。」

「それ、だけ？」

「個人的にも好きだから。君の単純明快な幼さが。」

「無垢なものを羨ましがる人間になってしまったっていうのかねー。
嫌だねえ。」

苦笑いしながらぽんぽん、と頭を軽く撫で上げられて、
実花は今度こそ涙が浮かんだ。

じわ、と感じる熱さは、やがて頬を伝い落ちれば
止められずにあふれ出してしまふ。

「あーあー。大丈夫？」

「ごめんなさい。私…遙に付きまとして。」

あなたと遙を引き離してしまつて。」

「そんなことまで気にしてくれるの？実花ちゃん本当素直だな。
これからモテちゃつて大変だろうねえ…。」

純粹培養なお嬢様はこれから世間の荒波にもまれ始めるわけである
が…。

内心ちよつと心配。と姉でもないのにそんなことを思えば
遙のことを引き算してもけつこつ彼女が好きなのだと
和は改めて感じる。

「わ…わた、も、いら、な。」

「いいから。大丈夫だから。いくらでも待つから、とりあえず気が済むまで泣いちゃいな。落ち着いてから話さないと息できなくて苦しいでしょう。」

今や和は実花を抱きしめていた。

背中に腕を回しぼんぼん、とあやすようにたたけば、実花は途端に声をあげて泣いた。

張り詰めていたものが一気に解放され、

自分ではなかなか制御できずに辛かったのだろう。

しかし話というのはまだ終わらないらしい。

謝罪をされて。

あとはなんだろうか。

やはり、これからの遙とのことだろうか。

『改めてのライバル宣言とか。わー勝てる気がしない。』

こうやって泣きじゃくる彼女は本当に可愛くて、なんとも庇護欲をそそられる。

純粹なものを汚してみたい。

俺色に染めてしまいたい。

男だったらなんともグっとくる女の子ではなからうか。

少し我侷なところも、

自分だけに甘えてくれると思えば嬉しいものであるう。

『妙に男目線になってるのはなぜかなあ。』

自分にその気はないはず。そんな馬鹿なことを思いつつ、

やっと落ち着いたらしい実花をそつと腕から解放する。

少し恥ずかしそうに和の顔をみれば、
実花はば、と和から離れる。

「ちよつと！そんなじろじろ見ないでちよつだい。」

もう、いやなひとね！と真つ赤になりながら
ハンカチで顔を整える実花の姿に、和は内心悶えていた。

『かわいい！超かわいい！』

これがツンデレというやつか！なんとという威力だろうか。
いまいちなにが良いのかわからなかったが実際やられるとすごいものだな。

先程からどうにも思考回路がおかしな方向へむかう和だったが
それを表に出す事のない彼女は外から見れば
ただ立っているだけの女子高生である。

外見と中身が著しく乖離する彼女であるが
そんなことはわかるはずもなく、背を向けていた実花は
くるりと和に向き直った。

「それで、…遥のことなのだけけれど。」

「うん。」

次にくる言葉をあれこれ想定しつつ、和は身構える。

「いらなくなっちゃったの。」

「はあ！！？」

あてがすべて外れた和はらしくもなく
大声ですっとんきょうな声をあげてしまった。

第四十二話「嵐に差し込んだ光」（後書き）

これにて嵐シリーズ終了です！な、長かった。

ここまでお付き合いいただきありがとうございます。

次回は遥の独壇場であると思われますので

ここ最近の汚名返上をできればいいな、と願っております。

第四十三話「本日は快晴なり。」

思ったよりも大きな声が出てしまった。
慌てて和が口をおさえれば、実花は目を丸くしつつも笑う。

「ごめんなさい、物じゃないってわかってるんだけど、
他に言葉が思いつかなくて。ええと、そうね…
私ね、わかってしまったの。」

「……なにを？」

「遥の事、好きよ。でも、あなたのような深い愛情は抱けない。
それこそ私は子どもすぎてもとでも敵わないわ。
じゃあ将来的にどうなんだろう、って思ったら…
過ぎた言葉は別にどうでもいい、だったの。」

それはつまり、もう遥に恋愛感情を抱いていないということだろうか。

予想外の言葉に、平静を装うのもばからしいと感じれば
和は素直に戸惑いをあらわにした。

「私、他人に受け入れられたことがなかったのよ。

だからこそ、遥の傍にいたかったんだけど…

今は、始まったばかりだけど、

どうやっていけばいいのか少しだけ知ることができたわ。

間違ってしまったら、心から謝罪しようとも、今ならば思えるの。

そうしたら、遥の存在がひどく安心できるものなんだなって感じた。

私が傷付いても、遥は半永久的に傍にいてくれて

私をなぐさめたり、叱ったりしてくれるんだらうなって。

そう思ったら、もっと外へ目をむけたくなくなっちゃったの。」

それは…つまり。

「えーと、要約してしまうと…」

実花ちゃんの中で、和泉君は兄的存在に落ち着いた、と？」

「あなたがいなかったら、もうちょつと恋心を引き摺ったのかもしれないわ。

でもなんていうのかしら。

あなたみたいに、遥みたいに、誰かを愛してみたいなって今すぐく思うの。」

「！」

その言葉に、和は不覚にも顔を赤くする。

先程から、何度も自分が遥を溺愛しているかのような実花のその物言いが

なんとも居た堪れないのだ。

それでもなんとか気持ちを立て直すべく、和はひとつ小さく息を吐く。

そうして訊きたかったことを口にする。

「それじゃあ、婚約は解消するの？」

「ええ。私ももう彼と結婚したいとは思わないから。

親がつるさいだろうけど、そこはなんとか説得してみせるわ。」

「……そっか。なんだ、てっきりライバル宣言でもされると思った。」

その和の言葉に一瞬言葉を失くした実花は、次には楽しそうに微笑んだ。

「もしそうしたらあなた、どうする？」

「別にどうも。だって別れる手前みたいなもんだったから…でも戦う気にはあまりなれないかなあ。敵う気がしないよ。」
「どうして？」

「だって今の実花ちゃんすげー可愛いもん。和泉君の隣にいれば、画になるし。」

ふたりの子どもって天使みたいに可愛いんだろうなあ…ちょっとみたい…。」

ぼんやりと遠い目をしつつそんなことまで呟く和に

実花は何を言えばいいのか少々困ってしまった、そのときだ。

目にもとまらぬ速さで教室の外から何者かが侵入すれば、実花はぎょっと目を見開いた。

「和の馬鹿あああああ！！！」

悲愴な叫びと共に、遙が和に飛びついたのだ。

今、実花の目には和をちからいっぱい抱きしめる遙がうつっている。

驚きに固まる実花をよそに、捕捉されてしまった和は恋人に抱きしめられたというのに青い顔になっていて実花はなぜなのかわからずに首を傾げていた。

「実花ちゃん、お願い！引き離してええええええ！！！」

「え、え、な、なぜ？」

「なんでって！最後に接触したのは…！」

「二週間と四日！」

「こまかつ！」

間髪入れずに遙に言われて、和はおもわず条件反射でつつこんでし

まう。

実花は目の前の展開についていけずに、どうしたらいいのかわからない。

「片想い期間中だつて告白してからは

こんなに長い事触れずにいたことはなかったんだから！

もう俺死んじゃうかと思った、和不足で！」

「痛い痛い痛い、ちょ、ギブギブ!!！」

「しかもしかも…あんな嬉しい言葉の数々を…

実花の事、嫌うどころか大切だと思ってくれるなんて。」

後半の震えるような声音に、和はふ、と笑う。

ひよっとして泣いているのではなのか。と少々心配になった。

ゆるんだ腕に安心し、和は先程実花に施したように

遥の背中をぼんぼんとたたく。

「当たり前でしょ。和泉君が思ってるよりも私はあなたが大切なんだからね？」

「和……」

感動に言葉が出ないのかと思えば、遥はくい、と和の顎を上向かせれば

軽いキスを和の唇に落とす。

驚きに固まる実花を視界の端にうつせば、和は顔を赤くする。

「ちよつと！実花ちゃんがいるのに」

「大好きだよ和。そんな可愛い事ばかり言って、もう。」

ただでさえ自制きかすの大変なのに煽るなんて本当小悪魔だなあ、どうしてくれようか、この可愛い生き物は！」

捲くし立てる言葉の数々がどんどん危険なものになっていつて和はなぜ先程逃げなかったのだらうと後悔する。

「あの、離して」

「嫌だよ絶対に離さないから。まだ全然足りない。」

「このまま押し倒してもいい？」

「駄目に決まってるでしょう！！実花ちゃん助けてええええ！！！」

「あー和のその叫び声も久しぶりー。」

ああ、もうちよつと違う声も聴きたいなあ。和は耳が弱いんだよね。

「

「やめて、後生だから！人前でそんな声あげる趣味ないいいいい！

！……！」

「和つてばやらしいなあ、どんな種類の声だと思ってるの？」

「いやらしい意味は全く含まないんでしょうか！？」

「や、まあ、お察しの通り、あえぎ声が聴きたいんだけどね。」

このへん刺激すればいい声で啼いてくれるかなあ……」

「いやああああああ！！！！！」

悲鳴をあげる和をみつっ、遙に顔を向ければ

なんともとろけきった顔をしつつも、その瞳には怪しい光が宿っている。

目の前にいる男はなんなのだろうか。

こんな彼を実花は見たことがなかった。

なぜ和が遙に抱きしめられるのを拒絶したのかやつとわかる。

この様子では、本気でここで事に及んでしまいそうだ。

今更ながら気付いた現実に実花は慌てる。

「ちょ、ちよつと遙！やめてあげてよ、和さん嫌がつてるわー！」

その言葉に、和はぴくり、と反応する。

「実花ちゃん、そう呼んでくれるの？」

「…ええ、和さんさえ嫌でなければ。」

「むしろ嬉しいよ！」

抱きしめられている事実すら忘れ、遙の腕の中で和が弾んだ声をあげれば

実花は和にむかって微笑んだ。

和も同じような笑顔をかえせば、遙の腕がきゅ、と和を締め付けた。

「ちよつと。俺の事無視して仲良く微笑まないでくれる？」

実花も、そんなに懐かなくていいからな。和は俺のだから。」

「あんたのものじゃないっつーてるだろ。」

「大体、さっきのもどういう意味？」

和は俺と実花に子どもができてもいいわけ？」

「えーだってふたりの子ども絶対超可愛いよ？」

「そんなの、和と俺の子どもが可愛いに決まってるでしょ。」

大体、作りたくたって無理だよ、実花相手じゃ勃たな「下品。」

和が遙の言葉を途中でさえぎれば遙はむくれる。

「本当のことなのに。」

「だからって言葉にせんでいい。」

ねえ、本当にそろそろ離してくれない？」

「やだ。」

「帰れないじゃん。」

和のその言葉に遙は一瞬黙る。

そしてなにを思ったのか次には和をぐん、と持ち上げた。
和は、何度目かわからないお姫様抱っこをされる。

「和泉君？」

おそろおそろの遙の顔をみつつ和が声をかければ
遙は顔中に笑みを作る。

「これでくつついたまま帰れる。」

本気が、この男。

あまりの暴走っぷりに和がびきり、と固まれば
傍らにいる実花が呆れのため息を吐いた。

「遙ったら、まさか本気でそのまま帰る気？」

「これならくつついたまま帰れるだろ？」

「目立ってしようがないわよ。」

「法律で禁止されてるわけでもないんだからかまわないだろ。」

さらり、と遙が言えば実花は二の句が告げない。

どこまで本気なのかと疑ったが、どうやらその目は真剣そのものである。

「和泉君。マジで勘弁して。外歩けなくなる！恥ずかしくて死ぬ！！

土日、両方とも会ってもいいから、お願い！！」

「そういえば今日は週末だったね。いつそのまま泊まりにくる？」

大丈夫だよ、優しくするから。」

「なんの話！！？」

「和ってば、言わせたいの？」

「だーもうー!!」

どうしたもののか、と和が頭を抱えれば、遥が和の身体を抱きしめる。

きゅ、と加わった力に、和が顔を上げれば、遥がなんとも情けない表情をして和をみつめていた。

泣く一歩手前のような顔をしている。

揺れる瞳からは、いつ涙がこぼれてもおかしくないような状態だ。

『…そんなに?』

和はふう、と息を吐けば、実花の名を呼ぶ。

「申し訳ないんだけど…先に帰ってもらってもいいかな。」

「え?ええ…それはかまわないけれど…大丈夫?」

ものすごく心配顔をしつつ実花がたずねれば、

和は苦笑しつつもうなづく。

少し逡巡しつつも、

ふたりきりにすれば遥の暴走も止まるかもしれない、と思い直し、実花はその場を去ることにした。

「手のかかる兄だけど、よろしくね。」

悪戯っぽく実花が微笑んで言うので、和はもう一度うなずいてみせる。

やがて、実花が教室を出て行けば、しん、と場が静まり返った。

「…和泉君。」

呼びかけにも応じない。きつと限界なのだろうと感じれば
和はふ、と笑った。

「和泉君、腰下ろして。このままの態勢でかまわないから。」
「……………」

和の言葉に、遙はなにも言わずに腰を下ろす。
ゆっくりと、まるで力が徐々に抜けていくかのように。

そうして遙の膝の上に乗ったまま、
和はゆっくりと両腕をあげれば、遙の頭を自身の腕で包む。
引き寄せて、上半身で遙の頭を閉じ込めれば、ゆるゆると後頭部を
撫でる。

「そんなに怖かったの？ごめんね。
別れるって言葉は、確かに本気だったから…そうじゃなきゃ口にし
ちゃいけないし。
でも、こうなつて本当に良かったって思うの。だって好きだから。
だから、もう不安にならないで。私の勝手を許してくれてありがとう
う、ごめんね？」

和の謝罪に、遙はゆるゆると首を振る。
それが嬉しくて、和は目を細める。

「あのね、顔は見えないから、好きなだけ泣いて？
そうしてほしくてこうしたの。
我慢しないで、全部だしちゃってよ。」

「和…お願い。」
「うん？」

「もう、別れるなんて言わないで……」

震える声に、和はさっきよりも抱きしめる腕に力をこめる。それにつられるかのように、遥の腕も和の腰によりいつそう巻きついてきた。

「……今回みたいなことは、もうない？」

「ない。」

即答っぷりがおかしくてくつくつと笑えば、和はこたえた。

「じゃあ、もう別れるって言わないよ。」

「ほんと？」

まだ訊くか、と内心呆れつつも、そこまで不安にさせたのが申し訳なく感じ和の胸は痛む。

「……遥、大好き。」

耳元でそつと囁けば、遥のからだが大きく揺れた。

がば、と和の腕から頭を解放すれば、遥は和の顔を見つめる。

ふたりの視線が絡み合えば、

どちらからともなくゆっくりと顔を近づけた。

最初は穏やかな啄ばむようなキスも、段々と激しさをはらんでいく。遥が和の下唇を自身の口ではさみこみ、その舌で舐め上げれば和の背筋はぶるり、と震えた。

遥の舌が和の口内へとゆるゆると侵入していき、和はそれを受け入

れる。

少しの羞恥も、今は隅に追いやり遙の愛撫に応えたいと思えば、いつもならば逃げ惑う舌も今日は素直になりゆきにゆだねた。

しばらくそうしていれば、大胆にも和は自分からも舌を絡めだした。遙がいつも施してくれるそれを思い出し、拙いながらも懸命に口腔内を動き回る。

遙はあまりの嬉しさにめまいを覚えれば、

しばらくは和のそれをゆつくりと堪能していたが

やがて我慢できなくなれば、また愛撫を施し始める。

先程よりも激しく吸い上げ、舐め上げられれば、

さすがに和はなにもできなくなりされるがままになる。

口腔内をくまなく蹂躪され、口端からもれる唾液を

遙は追いつがるように舐めとってゆく。

下顎を遙の舌が這って行けば、和は小さく声をもらした。それに遙の瞳が怪しく光る。

「和、ここも弱いんだ？」

にやり、と笑んで、和の下顎を遙の唇が犯してゆく。

「や、だめ…あつ」

ちゅ、と軽く吸い上げられ、たまらず声をあげれば

遙は満足したように微笑み、

段々と唇を下へ下へとずらしていった。

首筋を尖った舌でツツ、と這われれば、

和のからだがびくびく、と反応する。
恥ずかしさに顔を赤くしつつも、制御できずに
どんだん声もれてしまう。

「ひゃ、あ…やあ…っあんっ」

荒い息と喘ぎ声に、遥はどんだん暴走していく自身をとめられない。
ついには遥の手が今まで触れられたことのないふたつの膨らみにの
びていき、
服の上から触られたのにも関わらず和は大きく肩を震わせてしまっ
た。

「や！そんなところ触らないで！」

羞恥で真っ赤になりながら遥の手を止めるも、
うまく力が入らずに遥の手首を形ばかりつかむだけになってしまう。

そのあいだにも、遥は両手を使って和の胸を愛撫しはじめた。

「あっ！」

一際大きな声が出て、和は遥の手首から慌てて自身の手をその口へ
とかぶせた。

やわやわと服の上から胸を揉まれば、
和の身体はびくびくと魚が跳ねるかのようにいちいち反応してしま
う。

和だけでなく、遥の息遣いもいつの間にか荒くなっていて、
そっと遥の顔をみれば、興奮しているのだとわかる。

「和…可愛い……」

夢心地でぼんやりと呟く遙に、和はふるふると首を振る。ついには遙の手がするり、と服の中に入ったかと思えば、いきなり下着の中に侵入し直接ふたつの膨らみをつかまれて、和の頭の中は真っ白になる。

和の身体がびきり、と固まれば次にはされている行為を頭が認識した。

その瞬間、

羞恥心でおかしくなってしまうそうだと思えばどこにぶつけたらいいのかわからない衝動が和の全身を走り、気が付けば和は右腕をす、と真上に向けていた。

「いやあああああああ！！！！」

けたたましい叫び声と共に、勢い良く振り下ろされた和の右手がしたたか遙の左頬を打てば、なんとも痛そうな音が廊下まで響きわたる。

悲鳴とあいまっての衝撃波が遙を襲えば、

先程の和のように理解が追いつかず固まる。

緩慢な動作で、ゆるゆると自身の頬をそ、と撫でた。

そんな遙を目の端で確認しつつ、和は焦る。

足腰が立たない和は、それでもなんとか逃げようと

床を這ってずるずると移動すれば、

教卓の上に置いてある鞆をつかまり立ちでひつつかむ。

そうしてそのままハイハイをするかのように

さかさかさか、と教室を出て行こうとした。

「な、和」

出入り口の扉まで辿り着いた所で、

遙が震えるような、なんとも情けない声で和を呼び止める。

その声に和の両肩がびくり、と大きく震えれば

数秒迷ったものの、振り返らずに教室を転がり出た。

自身の足腰を叱咤すれば感覚が戻ってくるのがわかる。

壁に手をつけて立ち上がり、

へっぴり腰になりながらもなんとか廊下を歩いていく。

「待って！」

大声で叫ばれ後ろを振り向けば、遙が立っていた。

先程の情けない声と同じくらい情けない顔をしている。

「ごめん！もうあんなことしないから、逃げないで…って和！」

言い終わる途中で和は回復した足を確認し走り出す。

すると後ろから自分ではない足音が聴こえてきて、

和は遙が追いかけてきていることがすぐにわかった。

とにかく逃げなければ、という一点で埋め尽くされた

和の思考回路はいまだまともに機能していなかった。

遙の声に反応するも、言っている意味はわからずに、

存在を怖いと感じればただただ逃げなければと強く思った。

そうだったことに免疫がない和の身体は、

とにかく体験した事のない感触にパニックを起こしている。
正直、今なぜこんなに必死に逃げているのかもわからない。

和は昇降口にさしかかって、慌てて靴を履き替えようとする。
いつもならば本気で逃げる際には

上履きのまま靴をひつつかんでさっさと走るのだが、

今の和は気が動転しており逆に常識範囲外の行為ができずにいた。

気ばかりが焦り、なかなか脱げない上履きにまたも混乱が増してい
く。

そうしてもたついていれば当然遙は追いついてしまう。

和の後ろ姿を確認した遙はとにかく逃がすまいと
後ろから彼女を抱きしめた。

その衝撃に和は驚きじたばたと滅茶苦茶に暴れれば
遙はまた名前を呼んだ。

「和！お願い、落ち着いて。」

もうしないよ、もうしないから、そう何度も優しい声音で囁かれ
和はやつと頭の中がクリアになっていく。

「…あ、れ…？和泉君？」

和の心底間が抜けた声に、暴れるからだをおさえようと
力をこめていた遙の腕がびく、と反応する。

そしておそろおそろ時きつけていた腕を解放し
和の両肩にそつと手を置けば、

遙は和の顔をのぞきこんだ。

「和…？あの、ご、ごめんね…？」

「え？なに……」

なぜ謝られたのか理解できずに、和が顔を顰めれば
数秒無言になった。

じつと遙が和の顔をのぞいていれば、
和がみるみるうちに顔を赤く染め上げていく。

「ああああ！そうだった！！

何考えてんの！？和泉君最低だよ！」

ぎゃああああ、と怒鳴るかのような叫び声をあげて

和が遙の身体をばしと両手でたたけば、

遙はしばらく様子をうかがっていたが、やがて安堵の息を吐いた。

「よ、よかった、和が普通で。」

「普通じゃないよ！！外でどこまでする気だったわけ！？」

「え…あの、なんか、キレちゃって……」

「この非道！！外ではしないって言ったじゃん！嘘つき！！
な、何度も私は免疫がないんだって伝えてるのにいい！！！！」

半泣きになりながら叫ぶ和があまりにも可愛くて

遙はまた口付けたい衝動を覚えたが、なんとか踏み止まる。

ここでそんなことをしてしまったら、こんどこそ許してもらえない
かもしれない。

それでも我慢しきれなくて、遙はきゅ、と和の身体を自身の腕に閉
じ込める。

「…………ごめん、ほんつとに。ごめん。
あそこまで自制できなくなったのなんて初めてだ…。
好きだからって、許される行為じゃなかったよね。」

「も、もうしないでくれるよね?」

「えーと。今回みたいに長期間触れられないなんてことがなければ
大丈夫だと思うんですが。」

「…本当?」

「うん、約束する。」

「……………わかった。次破ったら一ヶ月私に触れるの禁止するからね。」

その言葉に、遥の顔色はみるみるうちに蒼褪めた。

一ヶ月も触れられないなんて、拷問だ。

抱く腕に力をこめて、遥はひとつ息を吐く。

「…肝に銘じます。」

「よし。許す。」

ほっとして遥の身体の力が一気に抜ける。

それを確認した和がくすり、と小さく笑った。

「じゃあ、和泉君。帰ろうか。」

「…家に行っちゃだめ?」

「来たいの?」

「行きたい。」

「……………まあ、いいけど。実花ちゃんはいいの?」

「うん、連絡しておく。」

「そう?じゃあ、行こうか。」

それぞれ、靴を履き替えて揃って校舎をあとにする。
遥がす、と和の手をつかめば、駄目？とおうかがいをたてるので
和は苦笑してその手を握り返す。

嬉しそうに笑う遥の顔がなにやら可愛いと思ってしまえば、
和はいよいよ末期症状だ、と自身にある種の絶望感を覚えずにはい
られなかった。

「和。」

「んー？」

「大好き。」

「はいはい。」

「……つれないなあ。」

せりふのわりに楽しそうな顔をする遥になんとかなく腹が立つ。
邪悪な心がむくむくと膨れ上がった和は
気が付けば一週間キス禁止、と命令を出していた。

なだめすかして、

なんとか和を説得にかかる遥が心底うっとおしいと思いつつも
結局、一週間を三日に縮められてしまい、
和なんともは気に入らない気持ちでいっぱいになった。

目の前でににこと笑う遥がとことん癪に障り、
気が付けば遥の足を全体重こめて踏んでいた。

夕陽を背に悶絶する遥の様子に、和は心底満足すれば
彼の隣にまた居れる幸せを実感する。

『あれ、やっぱり私ってサド……？』

そんな事が頭の中で過ぎりつつも、まあいいか、と和は遥をほっぽってすたすたと先を歩き始める。しかしなんと情けない声で名前を叫ばれてしまい、駅前にて和はとんでもなく恥ずかしい思いをするはめになる。

最後に根負けしたのは和で、遥の纏わりつきに疲れてしまいなにを仕掛ける気にもなれず、半ばやけくそでされるがままになっていた。それでも愚痴めいたものをちびちびともらせば、遥はにっこりと微笑んだ。

「俺の愛のが重たいんだから、勝って当然なんだよ。」

その一言に、ふたりのすべてが集約されているような説得力を感じれば

和は素直に負けを認める他なかった。

この男以上に馬鹿にはなれない。

そんな辛辣な言葉を心の中で思いながらも、悔しいことには変わりなかった。

第四十四話「文化祭・準備」

「却下。」

すば、と切れ味良く和が一蹴すれば、クラスはブーイングの嵐になった。

現在、文化祭の話し合いが行われており

和の所属する2・3は喫茶店をやる事に、なっていた。

そう、なっていた。

話し合いが思わぬ方向へと転がっていき、

今や和はひとり頭を抱えるはめになっている。

『ああ適当に訊いてた過去の自分のバカヤロウ…!』

そう、文化祭の話し合いは、合間のHRで何回か話し合いがなされてあり

今回の企画変更はすでにクラス中の知るところになっている。

喫茶店をやるものとはかり思っていたのは和ひとりだけなのだ。

実花と遥の問題で精神的にかなりの集中を必要としていた和は

正直、文化祭など適当に手伝って適当に終わるのだといい加減に考えていて

まさかこんな事態に陥るなどとは思っていなかったのだ。

今回、クラスが行う出し物は「人間スタンプラリー」なるものだ。

簡単にルールを説明してしまえば、4つのスタンプを集めて

2・3に戻ってくれば景品がもらえる、というもの。

そのスタンプを持つのは文化祭が行われる校舎内に散らばったクラスメイト達で、各々が変装をする。

普段の制服姿の写真を手がかりに、客が4人の人物を探し当て制限時間内にスタンプをもらおう、というものだ。

和のクラスは総勢32人であり、男女比が綺麗に半々で16人は女子だ。

その女子が一日目、二日目と午前部と午後部に分かれて4人ずつ当番になって校舎内をうろつくわけである。

ただその制限時間内を逃げ回るのであれば、そこまで問題はなかった。

校舎内をうろついているのだから、当番の時だつてある意味自由に遊びまわつていいということなのだから。

問題は、『変装』の部分である。

そう、クラスの女子はもれなく全員コスプレをして校舎内をうろつき、衆人にさらされるといふことなのだ。

「元々、それぞれ点在してもらおうポイントは決めてあるから。

二日目は一般公開もあるし安全性も配慮して

男子に警備として周りに見張り入ってもらおうし。

万が一ナンパ行為でもされたら面倒でしょ？まあ大丈夫とは思うけど。」

「だから！私その警備をやるって言ってるじゃない。」

「危ないよ、笹森さん普通に女の子なんだから。」

前に立つ文化祭実行委員の女子からそう指摘されても、

和はひかない。

「大丈夫だって、そのへんの男には負けられない自信あるから。」

「どっちにしろ駄目だよ、もう決まったことなんだし。」

「なんで？ひとりくらい女子と男子が入れ替わってもいいじゃん。」

その和の言葉に、クラス中の男子から駄目だしが起こる。

「男のコスプレなんてなんも面白くないじゃん。」

「そもそも、ゲームするのって女の子だっているんだから

話しかけ辛いと思うよー、男子って。」

「そうそう、どっちにしろ女の子のが良いんだってー！」

その言い分は、納得できなくもないが決め手には欠ける。

どうしても女子でなければ駄目な理由はないように和は感じるのだ。

「美形がコスプレすりゃ楽しいんじゃないの？」

託斗がやれば話題性あるじゃん。」

びし、と指差して託斗のほうに顔を向ければ、

託斗は小さく眉を顰めた。

「おい、和。」

託斗から抗議の声があがるも和は軽くそれを無視した。

「変な格好して表歩くのはどうしても避けたい。

私は良心が痛むからこうして今抵抗してるんだけど。」

「??どづいづいと」

男子の実行委員が和に問いかければ、和はかったるそうに頬杖をついた。

「当日ばっくられるのは嫌でしょう？」

悪びれず和が呟けば、クラスはいっせいに騒ぎ出す。

「ちょ、笹森さん！」

「それはないよ！」

クラスの反発はもつともで、和とてそれはわかっている。きちんと話し合いに参加しなかった自分に非があるのだから。

「だから、せめてコスプレをしなければ応じるってば！」

私服じゃ駄目なの？」

「それじゃあつまないよー」

「第一、見つけにくくて一気に難易度あがるって。」

意見を却下される理由だって、わかっているつもりだ。

しかしそれでも、和にとっては苦痛以外のなにものでもなかった。どうしたってコスプレをして表を歩くというのが自分には出来ない。

「衣装をさ、そんな変なのにしなかったらそう抵抗もなくなるんじゃない？」

あまりにも嫌がる和に、お人好しのクラスメイト達はなんとか歩み寄ってこようとす。

またそれが和の罪悪感を高めるわけで、どうにも本番サボってやろうという気になれないのだ。

「地味なコスプレって…なに…？」

弱弱しく和がたずねれば、クラスは一瞬沈黙する。

しかし実行委員はごり押ししてしまおうと必死である。

「本番まで時間あるんだし、皆で考えるから！

とりあえず了承してくれない？

衣装が気に入らなければやらなくていいから！ね！？」

必死の形相と、クラス中からむけられた視線があまりにも居た堪れない。

和は心の中で白旗を上げる他あるまい、と思えば…。

「…わかった。」

力なくそう返事するのがせいっぱいであった。

「笹森さん、そんなに嫌なの？」

文化祭の準備が本格化した今、放課後の時間も騒がしくなってきた。

今、男子メンバーは景品の話し合いや
教室の内装などの打ち合わせをし、
女子メンバーはどんな衣装にするかというのを
話し合っていた。

とりあえずなるべくならばかぶらないほうが良いだろうということとで
各々がどうするかを相談している。

「皆はどうして平気なの…?」

「えーだって面白そうじゃない?」

「そうそう、こんなときでもないとなかなかできないよ?」

「一生できなくていい全然いいけど…」

むしろそれが幸せだろう、と和は思う。

「まあまあ。とりあえず全員かぶらせないようにするのが無理でも
同じグループ内ではかぶらないようにしようよ。」

「そうだねー、すぐみつかったっちゃうのもつまんないし。」

「ね。」

楽しそうに話し合うクラスメイト達がなんだか宇宙人にさえみえて、
和は遠い目をして現実逃避をしたくなった。

『漫画読みたい…』

なんとも悲愴な表情で窓に視線をやるも
なんとか女子が和を現実に取り戻そうと呼びかける。

「笹森さん！だ、大丈夫だよ！メイドとかナースとかなれなんて言
わないから。」

「どうせだから、最初に笹森さんのコスプレ決めちゃおうよ。目立たないのってどんなのかなあ。」

「あ、アウトラインがどこだか訊けば決めやすいんじゃない？ 笹森さん、具体的にこれだけは無理っていうのがある？」

「なんだかこれだけ気を遣われるのが申し訳ないと感じつつ、和は真面目に答えようと逡巡する。」

「うーん…ひらひらしたのは嫌かなあ…なんかこつ、

スカートがボリュームあるのとか、やたら装飾されてるのとか。」

「その基準でいくと、ナースってオツケーな範囲なの？」

「いや…さすがに。なんというか、プレイを連想するようなのもちよつと…」

「ああ、ミニスカポリスとか？」

「なんか違うお店になっちゃいそうだよな。」

「うーん…そうすると無難なのってスーツ系かな？」

「スーツ…。」

確かにそれならば抵抗は感じない。

「でもさ、スーツ姿のひともそこまで少なくはないんじゃない？

一般公開するわけだし、一日目にもってくとしても後姿だと、教師にみえないかな。」

「コスプレだってある程度はわかんないとやっぱ難しいんじゃないかなあ。」

「人混みから探すわけでしょ。」

「確かにそうだねえ。普通のスーツ姿だと先生と間違われて終わりそう。」

「うーん、と皆が頭を抱える。」

「スーツっばいけどコスプレ…っていうと。」

「ああ、そうだよな、それくらいしか。」

「どうかな？これならギリギリ抵抗ないんじゃない？」

「ぱつと見もそこまで目立たないし。」

後ろからならそれこそスーツにみえるかもしれない。」

「前から見てコスプレだってわかるならじゅうぶんだよね。」

みんなのその意見に、和は眉を顰めながらも、

これ以上抵抗すれば迷惑がかかるということもよくわかる。

和は内心でため息をこぼしつつもうなずくしかなかった。

「……………そういえば、今のいままで忘れてた事があったんだけど。」

和の言葉に、話し合いを再開していた女子達が振り向いた。

次に発せられる言葉をまって、和の顔をじっとみる。

多少の居心地の悪さを感じつつも、和は話そうとしていたことを音にする。

「和泉君。予想なんだけど言ったらちよつとうるさそうかなあ、と。」

和の一言に、クラスの女子が固まった。

その反応にやはり自分が自意識過剰であっただろうかと

和は心中で恥ずかしく思えば、ひとりの女子が声をあげた。

「笹森さん、遥様と仲直りしたの！？」

その言葉に、喧嘩をしていたわけではないのだが、と否定しつつも和は説明も面倒なのでこくり、とうなずく。

「い、いつの間に!?!」

「金曜日の時点ではまだふたりぎくしゃくしてたじゃん!?!」

「でもそういえば、今日なんかすごい遥様がこっちみてたような…」

その女子の言葉に、和は苦笑する。

それは、金曜日の夜の出来事だ。

「遅くまでお邪魔しちゃってごめんね。」

「いいよ別に。引き止めたのお父さんだし…。」

疲れた顔で和がため息をつけば、遥は笑う。

「それじゃあ、また明日ね。」

「え、明日って土曜「会ってくれらって言ったよな?」

「…あれ、覚えてたの。」

「忘れませんとも。」

「でも無効じゃないの? あんなことしたんだし。」

「えーでもさあ、和が可愛いのがいけないんだよ?」

「反省してねーのかてめえは。」

「してます、してる！けど！…図書室で全然いいから。会話しなくていいから、会いたい。」

真剣な瞳で言われてしまい、和は了承するしかない、と観念する。また暴走されてはたまったもんじゃないし、いいか、となんとか自分で理由を探しつつ。

「それじゃあ、キスはしないでね、約束通り。」

「う…！」

「三日間なんてすぐだよ。それこそ、会わないほうがいいんじゃない？」

近くに寄らなければそんなに葛藤せずに済むのではないかと和が提案すれば、遥はなんとも真剣な面持ちで考える。その中身はものすごくくだらないことであるわけだが。

「でも、やっぱり、会いたい。我慢するから。」

「そう？まあいいけど。」

「でも学校では一日接触しないようにするね。」

「え、なんで？」

「一人占めしたくなっちゃうから。」

学校だと当たり前だけど和は色んなひとと話すでしょ？

それこそ浩平と話してるところでも近くでみてたらどこかが爆発しちゃうかもしれないから。」

「……そ、そう。」

よくわからない理屈だと思いつつも、とりあえず和はうなずいた。まあこちらとしては一緒にいないことでのびのびできるわけだが。ここで寂しいとか思わない自分は

やはり可愛いという言葉には縁がないと和は思う。

それでも彼は可愛いを連発するあたり、

恋は盲目フィルターというものはなんとも恐ろしいことだ。

「まあ、私と実花ちゃんの話盗み聞きした罪がそれくらいで済むんだから

軽いものだよねー。」

「えーだって早く仲直りしたかったし、一秒も待つの嫌だったんだもん。

実花が前もって俺には和に言ったようなこと話してくれてたし

放課後に和とも話をつけてくるって報告するから。

これはつけてもいいってことだろうと」

「いや、その理屈はおかしいよね。…ったく。」

…とまあ、笹森家の門でこんな会話がなされていたわけであるのだが
クラスメイト達はもちろんそんな事は知らない。

「でもとにかく。仲直りしたのは確かなんだ！やったー！！」

「また間近で遥様がみれるうー！」

嬉しそうにはしゃぐ女子達をみて、
なんとも複雑な思いを抱く。

あの男に、そんな価値があるのだろうか？と疑問を感じるも
見た目やオーラだけならば、まあ確かに完璧なものな、と
自分の恋人を心の中で好き勝手思いたい放題していた。

「あ、でも。」

そんなよんだ思考の中、ひとりの女子が声をあげれば
和は覚醒しつつ音のほうに顔をむける。

「そうなるさっき笹森さんが言ってたけど、
遥様たぶん許可しないんじゃないかなあ。」

「多分ていうか確実じゃないの。」
「そうだよねえ、他の男の前にそんな姿をさらすわけでしょ。

あまつさえ声かけられるわけだしね……」

「笹森さん、できれば隠し通す方向でお願いできないかな……」
「それはかまわないけど。」

「良かったー！本当お願いします。」
それこそ当日とか監禁しそうだもんね、遥様。」

その言葉に和がぎょつとする。

「さすがにそれはないんじゃないか……」

「いやいや。充分ありえるよ……」

女子全員が肯定意見のようで、和は目を見開く。
はたからみても彼の行動は相当らしい。

ああ、なんとというか、いたたまれない。

和はがつくりとうなだれた。

「和のクラスは文化祭、なにやるの？」

タイムリーなその話題に和は苦笑する。

「説明するのがむずかしいけど……スタンプラリーかな？」

スタンプは設置するんじゃないかって人間が持って歩くんだけど。」

「へえ。なにそれ？」

「浩平、近い。もっと離れる。」

久しぶりにお昼休みは四人が揃っていて

斜め向いという一番遠い位置に浩平はいるわけなのだが、

遥にとつてはそれでも不満らしい。

接触は避けると言ったものの、さすがに昼休み別々は嫌らしく

それでも人気のない所は自制をきかす自信がないとのたまうので
仕方なく四人は2・7教室にてお昼を取っている。

遥の恋人として広く認識されてしまっている和は今更いつしょにいる事を注目されるのは気にならない。ただ見られるのが不快なのだ。

だからこそ、これが毎日続くとなれば勘弁してほしいところではある。

和はクラスの出し物について一通り説明すれば、全員が反応を示す。

「面白いことやるのね。私も参加しようかしら。」

「けっこう景品には力入れるみたいだったよ。」

「コスプレって全員が「和もコスプレするの!?!」

浩平の質問に遥が大声でかぶせてくる。

その様子に梓と浩平は呆れた顔をみせる。

そういえば、金曜日に報告電話をしたときも

ふたりはなんともいえない声だった。

そばに遥がいてさんざん電話を邪魔されたのだ。

「まさか。そんな恥ずかしいこと断固拒否するよ。」

実質コスプレに必要なのは一回で4人なわけだし、

午前と午後の部を二日間やったとしたって16人でしょ？

クラスの半分はやらなくていい計算だから。」

「本当?」

「本当。」

遥の声にきっぱりと和が否定すれば遥は微笑んだ。

「じゃあさ、俺と約束してくれない?」

「約束?」

「もしも和が嘘をついてたら。その約束を実行してほしいんだけど。」
「……なに？」

和が訝しんで遥をみれば、遥はそそ、と和の耳に唇を寄せ、梓と浩平には聞こえない小声で囁いた。

「金曜日の放課後の、続きをさせて。」

その言葉の意味をわからないほど、和は鈍くはない。遥をじろり、と睨めば、なんとも妖艶な笑みを和にむける。

「ああもちろん、場所は俺の家でだけど？」
「……………」

ここでこの条件を拒否すれば間違いなく遥は和の嘘を見抜くだろう。

「別にいいけど？」
なに、和泉君は私を疑ってるわけ？」
「いや、和に限ってそんなこととは思わないけど。万が一そうならラッキーだなと思って。」
「……てことは、コスプレをしてほしいの？」

その言葉に、遥のまわりの温度が変わった。久しぶりに彼の後ろに冷気がみえる。

「絶対に当日行かせない。」
「えーでもわかんないじゃん。笹森ちゃんが嘘ついてコスプレしちゃって参加したらどうすんの？」

「和のコスプレ姿見た男の目ん玉ぜんぶくりぬく。」

が、と浩平の頭を右手でつかめば、ぎりぎりと締め上げる。どうやらなんとも気に入らないつつこみをされたらしく、遙はにこにこしながら浩平の頭を握りつぶさんと力をこめていく。

「いたいたいたいたいごめんなさいごめんなさい」

謝罪をきいて、遙はやっと浩平の頭を解放した。

浩平は涙目で自信の額をさすっている。

『これは…だ、大丈夫なんだろうか。』

クラスの全員にはもう通達をしており

2・3一同が示し合わせて嘘をついている。

いざというときはそれを盾になんとか責任逃れをしようと考えていたのだが

なんとも面倒臭い約束事を取り付けられてしまった。

今から不安になりつつも、

もう後戻りできない現実に和は大きいため息を吐いた。

第四十五話「文化祭・直前」

「しかし2・7って消極的なんだねえ。」

「あれだけ良い素材がそろってるんだし、」

「それこそ喫茶店でもやればお客いっぱいいきそうだけど。」

「展示物作っただけでもったいないな！」

「まあ、当日遊びたいひとばっかだったんだろうけどなー。」

「わかるけどさ。」

「うちみたいなのになれば拘束時間も短いし」

「準備もそこまで大変じゃないのに。」

「まあ、考えるのも面倒だったんじゃない？」

「やる気ないなー、青春は一度きりなのに！」

笑う2・3女子一同の会話を聞きつつも、

和は目の前の光景に胡乱な顔つきにならざるをえない。

『怪しい。どう考えても。異常すぎる。』

事情を知らずにこの教室に誰かが入って来ようものならば
すっとんきょうな声をあげるに違いない。

今は所謂、本番前の衣装合わせしている最中であり

教室を借り切って女子全員がわいわいと着替えを行っていた。

目の前には看護師やら警察官やらメイドやらと

なんともいえない非現実的な光景が広がっている。

結局、違う店になってしまいそうだという意見も

一生に一度という言葉に吹き飛んでしまったらしい。

人前でミニスカポリスになどよくなれるものだ、と変な感心をして

しまつ。

衣装は持ち寄ったり作ったりだが、皆どこから調達したのだろうか。

中には巫女の格好をしている女子までいる。

和はもちろんそんな情熱はないので

親切なクラスメイト達にすべて借りたのであるが。

棒立ちで固まる和に、クラスの子が気が付く。

文化祭実行委員の青山だ。

「笹森さん、ほら観念して。

本番前に一回は着ておかないとサイズ合つかわかないでしょ。

向こうで着替えておいでよ、ほらほら。

そして絶対に見せてね。皆できちんと地味具合をチェックするから。

「

へーへー。」

青山の着ている浴衣姿はひよつとしたら

文化祭中はこちらののが普通であったかもしれない、などと

和は今更ながらに後悔していた。

あれならばしたことがない格好でもないのだし、

浴衣が良いと言えはよかったのだ。

『まー…しゃあない、か。』

端っこで着替える女子軍団に混じりつつ、

和も、もそもそと着替えを始める。

終わって和がのろのろとみんなの前に姿をさらせば、

女子一同が固まった。

「……笹森さん、スタイル良くない？」

「足きれいだねえ。」

「胸もけっこうあるんだね実は。」

「本当なんで地味な格好してんの、もったいない。」

驚いた理由は、和の変身ぶりにあっただようだ。

自分では、スタイルが良いという自覚はあまりないし
賞味こんなもんだろくらいにしか思っていなかった。

私服のときに受けた計二回のナンパだって、

やっぱり遥の気にあてられたからではないかと今でも疑っているく
らいだ。

「眼鏡は外したほうが良いかな。みつきりにくい方がいいんでしょ
？」

「うんまあ。でもこれ…遥様にばれないようにしないと本気でマズ
イよ。」

「破壊力が違うねえ。いつそ当日化粧もしちゃったら？」

きらきらと輝いた目をさせながら話す青山に、他の女子もうなずく。

「していいの？学校関係者にはバレるの嫌だしそのほうがありがた
いけど。」

写真だとわからなくなっちゃわない？」

「一応、コスプレしてるひとを探せってなってるから。」

回答権も二回あるわけだしさ、確率的には二分の一だし。」

ルールは、コスプレしている女子を捕まえただけでは
スタンプを押ししてもらえない。

写真と見比べ、同一人物だと思つ写真を見せて

それが一致したときに初めてスタンプがもらえるのだ。

それこそ当日はみんなばつちりとフルメイクを施すつもりらしい。

「髪の毛は、うしろでひつつめるか。」

「ああいいねー。ぱいぱい！笹森さん、化粧とかするんだ？」

「ん？まあねえ。休日はそれなりの格好するときもあるよ。」

外で和泉君と会うときって地味だと逆に悪目立ちするしねー。」

「なるほど。…そっち興味ないってわけでもないんだ？」

「そらね。一般的な女子と変わらずにお洒落もたしなむよ。」

意外そうな顔をするクラスメイトをよそに、もういいだろうと

一本調子で和は着替えてくる、と告げてまた端っこへと歩き出した。

「……………笹森さんで、よくわからない。」

青山の呟きに、女子一同はうなずいた。

文化祭当日は、憎らしいくらいの快晴になった。
いっそ二日目には雨でも降ってしまえば来るひとも少ないだろうに、
と

期待したが、そんな願いもむなしく雲ひとつない青空が広がる。

一日目の一般非公開日は、遙と一日いっしょにまわり
つつがなく終了した。

問題は和の当番である今日、である。

当番はくじ引きでうらみつこなし、と割り振られたわけなのだが、
和は一日目に当たれば良いと期待していた。

もしも遙に見つかった場合（というか見つかると前提したほうが無
難だ）、

一般公開されない一日目のほうが遙の怒りも少ないのでは、と考
えたのだ。

なにをとち狂ってるのかは知らないが、遙は和を可愛いと言って憚
らない。

溺愛されるのも嫌とはいわないが、あの盲目っぷりは時に困りもの
である。

遙が嫉妬深いというのも体験して学習した和は
校内の人間ならば遙の目が届く範囲なわけであるし
彼も渋々でも了承してくれるのでは、と思っていた。

しかし、一般公開日は不特定多数の人間が和を探す事になる。
さらされる目だってそのぶん多くなるのだ。

だからこそ、一日目を、と願ったのだが、
無情にもくじは二日目の午後という

よりもよって最後の最後を大当たりしてしまったのだった。

ひとつため息を吐けば、隣に居る遙が顔をあげる。

ふたりは今、学生以外立ち入り禁止の図書室に来ていた。ちらちらと他にも人がいて、

生徒の休憩室代わりのような役割を果たしている。

「どうしたの？」

「んー…そろそろ当番の時間だから行かないと。」

「ああ、もうそんな時間なんだね。」

腕時計をみれば時刻は12時。

13時ちようどが午後の開始時刻だが準備を考えればそろそろ教室へと向かったほうがいい。

「さて、じゃあ行ってくる。和泉君はここに居る？」

「受付なんでしょ？邪魔じゃなければいっしょにいたいんだけど。」

『そんなにべつたり張り付かずとも。』

内心苦笑しつつ、疑われてる事実がなんとも滑稽だ。

「別にいっしょに来てても楽しくないよ？つか、うっとおしい。」

「…俺が行ったらなにか都合が悪いの？」

「……………いいえー。来たけりゃどうぞ。ウザいけど。」

「二回も言わないでよ、傷付くなあ。」

特にダメージを受けてる風でもなく、どこか楽しそうな視線を向ける。

この男、そんなことは許さないと宣言しておいて
その実どこか期待しているのではないだろうか。

そんなことを思いつつ教室に辿り着けば、和はひとつため息をこぼ
した。

教室前の廊下で止まった和のすぐ後ろに、遙がいるのが気配でわか
る。

和は内心覚悟を決めて、くる、と遙のほうへと方向転換した。

「和泉君。私はこれから服を着替えてスタンプ片手に
校舎内をうろつきます。」

その和の告白に、遙は一瞬目を丸くしつつも、
次にはやっぱりね、という顔で微笑む。

「…嘔吐いたんだ？」

「いいえ？当日まで黙ってただけ。」

「…和、しないって言ったじゃないか。」

「文化祭は二日あるけど、一日目はコスプレなんかしなかったでし
よ。」

「そんな屁理屈。」

「第一、会話をしたその日はコスプレなんてしてないもん。」

文化祭当日にコスプレしないとは言っていないから嘔吐していない。

今、しますって言ったから、和泉君の約束違反にはなりません。」

「……悪徳業者みたいな事言うね。」

「だって拒否したらクラスに迷惑かかるし仕方ないでしょ。」

もう時間がないし代理だってみつからない。」

「ずるいなー、ほんと。」

「てわけだから。それじゃあ。」

言いたい事をいって教室へと消えていこうとする和を
遥の腕がつかむ。

「…その姿って、もう誰かみたの？」

「ああ、クラスの女子はみたけども。」

「男は？」

「みてない。」

和の言葉に遥はにっこりと微笑む。

「ひとつだけ、俺のお願い訊いてくれない？それくらいはいいでしょ？」

「……なに。」

不機嫌に眉を顰める和を、遥はまっすぐとみつめる。

「俺にいちばん最初にみせて。」

「……は！？」

「他の野郎が先に見るとかありえない。絶対やだ。」

「いや、あのね？」

「それが駄目っていうんならクラスの迷惑なんて関係ない。」

このまま和を屋上まで連れてって時間が終わるまで閉じ込める。」

お願いというから何かと思えばそんな事が、と

和は面食らっていただけで、別に嫌なわけではない。

身内にみられるのは恥ずかしいが

どうせそのうちみつけられるんだろとも思っていたのだ。

それならば心の準備をして目の前に立つほうが幾分かマシだと和は
考えていた。

「いや、いいけど。お願いってそんなくだらないこと?」
「くだらなくない。和は男心がちつともわかってないんだから。」
「……………はあ。すいませんね。」
「そこがまた可愛いんだけど。」
「……………化粧もするから時間かかるけど。」
「いいよ。どこで着替えるの?」
「更衣室で。」
「じゃあ、その前で立って待ってる。」
「怪しくない?」

女子更衣室の前で男子生徒が立っている。
なんともいえない、怪しさ120%な行為である。
大概の男性は痴漢に間違われると思うが。さもありません。

「いかにも女性に不自由なさそうな人間が痴漢に間違われると思う?」

その言い切りに反論しなくなったが出来ない。
確かに、と内心思ってしまったからだ。
だがしかし、自分で言うとはどういうことだろう。
ナルシストか、くらいにはつつこめば良かったかもしれない。

「……………着替えとっってくる。」

呆れた声を出しつつ、和は遙と共に女子更衣室へと足を運んだ。

着替えてる最中は外で遙が待っていると思えばなにやら落ち着かなかった。

時同じくして同じ当番の三人が着替えにやってきていたが遙がいることに訝り和に質問する。

「なんか、最初に見たいとかほざくから。」
「すごいねそれ。」

「あーでも私も彼氏に同じ事言われた。」

「え、まじで。あれだよ、四組の石渡君。」

「えー！西川さんにしかわと石渡君いしわたと付き合ってたんだー！」

きゃーきゃー言う三人をよそに、
和はひとりもくもくと着替え始める。

「そんで、どうしたのよー。」

西川の友人である向井が、西川をつつつきつつ話を進める。

「…家で、一回着替えてみせたけど。」

「それだけえ？」

「そのまま変な事したんじゃないのぉ？」

にやにやしつつ西川をからかう二人に、和はため息を吐く。

まあ楽しいのはわかるがなんともな話題だ。

真昼間に女子高生が交わす会話であろうか。

「三人とも、そろそろ本格的に準備をしなくて良いのかい。」

すでに髪の毛をバレッタでひとつにまとめ、化粧をし始めた和に比べて、

三人は未だ制服を脱いですらいない。

和の指摘で我に返った三人は、わたわたと着替えを再開する。

30分程して和がすべての仕度を整えて自身を点検していれば、

左側から視線を感じ、三人のほうへと顔を向ける。
すると三人が三人、口をぽかんとあけて呆けているではないか。

「え？ど、どこがおかしい!？」

和が慌てて鏡をみつめるも、別段変だと思えるところがなく
なぜ彼女達がそろいもそろってそんな表情をするのかわからない。

「いやいや、笹森さん、逆。逆だつて。」

「超綺麗じゃん、やばいねこれ。」

「他の男にみせたくないつて言うかもよ、遥様。」

一気に過剰な誉め言葉をもらつて、なんともむずがゆくなれば
和は、まさかあ、と軽口をたたきつつそそくさと更衣室の扉を開け
る。

そうして廊下へと出れば、当たり前前の事だが遥が立っていた。
どんな反応をされるだろうかとかまえれば
最近見覚えのある表情を遥が浮かべている。

『……さっきの西川さん達とまったく同じ顔してる。』

しかも固まっている。

微動だにしない遥にひとつ息を吐けば、
和は遥の顔前まで手の平をもつていき、左右に振って呼びかける。

「おーい、和泉君。もどつておいでー?」

その言葉に遥の身体がやっとぴくりと動き出した。
覚醒した遥は、あらためて和の全身を上から下までながめる。

「それ…ウエイトレス、だよな。」
「喫茶店風味だよな〜。でもこれ、このエプロン外したらカジノのディーラーっぽくない？」

和の言葉に、遥は確かに、と思い小さくうなずいた。

和の今の格好は、

黒いタイトなミニスカートに、
長袖Yシャツに合わせたのはこれまた黒いベスト、
シャツの襟首には蝶ネクタイが付いており
スカートに少しフリルのついた白いエプロンがなければ、
先程の本人の言葉通りカジノディーラーに見えることであろう。

「これでも地味なほうなんだよ。
後姿はまあぱつと見てスーツっぽい。」

まあそれでも恥ずかしいけど、と少し和が顔を赤らめる。
眼鏡を外して、髪をアップにしている彼女はいつになく色っぽい。

「駄目。」
「へ。」

低い声音で呟かれれば、次の瞬間にはその腕に抱きしめられていた。

「え、あの、い、和泉君!？」
「なにそれ!反則もいいとこだよ、絶対に駄目!!
化粧までしてるし、綺麗だし可愛いし色っぽいし
他の男になんか絶対に見せられない!!」
「そんなこと言われても」

「大体スカート短すぎる！なんで生足なの！？」

「ストッキングあんまり好きじゃなくて。」

でも長さは制服とあんま変わらないよ？」

「制服は靴下履いてるでしょ。それに身体の線わかんないし。」

なんでスカートそんなぴっちりしてるわけ？

下にスパッツとか履いてないの？制服のときは履いてるでしょ。」

「（何故覚えてる…）線が出るから、中に履くと目立つかなと思っ
て。」

形が変になっちゃうのもあれだしやめた。」

「そこは曲げてよ！」

「ええー…。」

なんなのだ、この男。なんなのだ、この状況。

とりあえず廊下で抱きしめるのだけはやめてほしい。

「あの、でも、もう行かないと。」

「だから駄目。襲われる。」

「ないって。」

「ナンパされる。絶対。」

「だから、ないって…。」

「和。わかってないね。今どれだけ男を煽る格好してると思っ
てるの。」

「でも、クラスの男子が警備付いてくれるし…。」

「信用できない。」

「とにかくここまできて出来ませんなんて無理だから。」

離して。もう行かなくちゃ。」

少し強い口調できっぱりと和が言い放てば、

遥の腕がゆるむ。

解放されたことにほっとして遙の顔を見上げれば、完全に怒気をはらんだ表情をしている。

どきり、と和の心臓がはねた瞬間、

遙は和の腕をぐい、とひっぱった。

「え、」

何事かを発するでもなく、今は誰も居ない空き教室へと和を連れこめば、

遙は閉めた扉に和の両腕をだん、と叩きつければ、

和の体が扉に縫いとめられたかのように動かなくなる。

「い、ずみくん…?」

震える声で和が遙の名前を呼べば、

遙は冷たい瞳で和を見下ろしつつ、淡々と話し出す。

「どうしてそうやって、俺の言うこと全然きかないわけ。」

「いや、だって」

「なんでそんな格好の和を他の男にさらさないといけない？」

せめてもうちょっと危機感もてよ、ふざけんな!」

常とは違う口調に一瞬ひるむも、

和は遙の物言いに腹が立ってついつい言い返してしまう。

「だから和泉君は目がおかしいの!私は可愛くなんかない!」

「まだそれ言うわけ? だったら少しでも他の男に触れられてみる、もうぜってー俺ん家閉じ込めて出してやらないから。」

遙の完全にキレたその雰囲気、さすがに和はまずいと感ずる。

そもそも少しでもというの是指一本でもとかいう意味だろうか。それは正直スタンプを押したりするわけだし無理だと思うのだが。多少は指先やらが触れる可能性は充分にある。

「下心をもつて触るひとなんていないと思うんだ、けど。」

「あのさ、何度も言わせないでくれる？」

「だ、だって。スタンプとか押しす。指くらいは触れるんじゃないかなー…」

でも！それ以外ではないと思う！」

「もしあつたら？おとなしく軟禁されてくれるの？」

「そ、それはちょっと…」

どんどん迫力負けして萎縮していく和に、遙は少し頭が冷えたのかひとつため息を落とせば声のトーンが通常に戻った。

「あのね？俺のこと馬鹿でも阿呆でも言っていていいから

おおげさでも過保護でも心配なの。それはわかってほしいんだけど？」

「……だ、だったら、遠巻きにみててくれればいいじゃん。」

「え？」

「だから、警備の男子じゃないけどさ。

ただ隣には立たないで、和泉君目立つから！すぐみつかつちやいそつ。

一定の距離からみててくれれば何かあつたら行動起こせるでしょう？ないとは思ってるけど。それで妥協してもらえませんか！」

「見張ってていいの？」

「うん。」

「少しでも変なことする奴がいたら容赦しないでいいってこと？」

「うん。あのでも、やたらに倒そうとするのは駄目だよ！？」

ちよつとくらい雑談とかしたりするかもしれないし！お客さんだから

ら!!」

「……………わかった。」

「ほんと?」

うかがうように和がそろそろと遙を見れば、

遙はふ、と微笑む。

するとなにを思ったのか、和の蝶ネクタイをぷつ、と外す。

「え?和泉君?」

「黙ってて。」

気がつけば素早く和の両腕を遙は左手一本で和の頭上に纏めておさえつけ、

自由になつた右手でYシャツの第一、第二、とボタンを外していく。

「ちょっとやめて…んっ!」

「声をあげたらみつかっちゃうかもよ?」

くす、と笑うその声が和の首筋に空気として触れれば
和はその感覚に背筋がぞくり、と震えた。

そのままゆっくりと遙の舌が和の首筋を這えば、

鎖骨部分でぴた、と止まる。

やがて何回かリップ音が響けば、和はみるみる羞恥に顔を赤くした。

「ふっ…っ、いっ!」

鎖骨を強く吸い上げられて、和の身体にちくり、と痛みが走り
思わず和が声をあげる。

「きれいに赤く痕ができたね。」

「な、な、な……」

「これ、もし見られたら大変でしょ？」

絶対にこれを見られるような状況にならないように。」

「当たり前でしょう！」

「まあそんなこと元々させないけどね。」

もし和の鎖骨を拝む男がいたらそれこそ殺す。」

ツー、と遥の指がキスマークをなぞれば、

和は羞恥心でどうすればいいかわからない。

和の真つ赤な顔をのぞきこみ、可愛い、と微笑めば

遥はおもむろにその顔を近づけてくる。

なにをされるか察した和は、慌てて声を張り上げる。

「だ、だめ！」

「……なんで。」

和の口から発せられた拒否の言葉に遥が不機嫌に呟けば、

いいかげん恥ずかしすぎる状況にいたたまれなくなつたのか

力任せに遥の腕を振り切れば、ぱぱ、とシャツの前をおさえる。

「く、口紅が落ちちゃっうから駄目なの！」

真つ赤な顔で怒鳴る和をみて、遥がふ、と笑う。

「……かーわいいな、もう。」

「なに、……むっ……!？」

くい、と顎がつかまれるのがわかって、それに気がついた時には

もうすでに遥の唇が触れているのがわかった。

なんとも余裕がない、獣に食べられてしまうかのような口付けに和は腰を抜かしてしまいそうになる。

気がつけば遥の胸元をつかんで、遥はといえば和の腰に腕をまわしていた。

最初から唇に割って入られ、口腔内を貪り尽くすかのような舌使いに和の体温はぐんぐんとあがっていく。

「ふ、ん、んん……」

息が苦しくて、もれる声は艶っぽい吐息のみ。

その和の声に遥の欲望がぞくぞく、と煽られる。

それでも和の握りこぶしがどん、と遥の胸を打てば、名残惜しいと感じながらも小さく啄むようなキスを最後に遥の唇がゆっくりと離れた。

「駄目って、言ったのに……！」

「えー、だって鞆の中に化粧道具入ってるんでしょ？直したら問題ないじゃない。」

「この色情魔……！」

「和限定でね。」

その言葉に聞き飽きたわ！と真っ赤な顔で悪態をつきつつもひとつひとつ外されたボタンを留めていく。

「和泉君、蝶ネクタイ。」

「はいはい。」

手を差し出す和を遙が制して、にこにこしながら和の襟を立たせれば
遙は蝶ネクタイを和に付ける。

抵抗するのも疲れたのでそのままおとなしくしていれば
遙はもういちど軽いキスを和の唇に落とした。

「あんだね！」

「つつい。」「

上機嫌で笑う遙にむかむかとしながらも、

和はコッTONを遙に押し付けた。

「なに？」

「クレンジング！付いてるから、口紅。」

「落とすのもつたいな」馬鹿言っでないで落とせ、早くしろ。」

すば、と言われて、ピンク色の唇をしたままの遙がちえー、と口を
尖らせる。

しかし次の瞬間にはにや、と笑うので和はなんとなく嫌な予感がし
た。

「じゃあ、和が落として。」

「なんでよ、やだよ。」

「だって自分じゃ見えないし」鏡。」

「落とすの嫌だけど和がしてくれらんなら良いよ？」

このまま行ったらなにしていたかバレバレだろうね！。

ひよっとするともっとすごい勘違いされちゃったりしてー。」

にこにこしつつのたまう遙を往復ビンタしてやりたい衝動に駆られ
る。

しかし先程の青山達の会話を反芻すれば、そんな馬鹿な、と笑い飛

ばせない。

観念した和は不本意で仕方がなかったが、渋々といった風情で遥の唇にぞ、とコットンをあてる。

『…なんだこの女子顔負けのぷるぷるな唇は。腹立つ。』

睨みつけながら無言で和がクレンジングを施してやれば遥はじ、と和の顔を見ている。

視線に気が付けば途端に和は落ち着かない気持ちになった。

「ちょっと、目つぶるとかしてよ、見られるとやり辛い！」

「やだよもつたいない。和の顔がこんな近距離にあるのに。」

この男は真性の馬鹿だ。きつと死んでも治るまい。

「あーなんか色っぽいよねその仕草。」

「ちょっと喋らないの。作業できないじゃない。」

その言葉に遥が黙る。沈黙もまた居心地が悪かった。

数分で終わったはずなのに、なんだかもものすごく長く感じて和は疲労でいっぱいになる。

化粧ポーチから鏡と口紅を取り出せば、今度は自分の唇を確認しまず最初にコットンで拭ってから改めて口紅を塗りつける。

「…ムラムラしてきた。」

ぼそ、と呟かれたその言葉が、目の前の絵本から飛び出した王子のような

完璧な容姿の男から発せられたとは俄かに信じられなかった。

しかし教室には和と遙を置いて他にはおらず、和が発言したのでなければ消去法でこの男しかありえない。

「その見た目でそういうこと言うのやめてよ。」

「だってすっごい色っぽくない？口紅塗る仕事って。」

「いや、知らないけど。口紅塗ってる女の人次から次に襲いそうな勢いだなアンタ。」

「やだなー、和にしか反応しないって言ったじゃないか。」

抱きしめたいと思うのもめちゃくちゃにしたいと思うのも和だけ痛たっ！！！！」

言葉尻が悲鳴になったのは、

和が遙の足を力いっぱい踏んづけてやったからである。

最近では定番の攻撃になりつつあった。

「さっさと行くよ。」

ため息混じりに和がそう言えば、荷物を持つととする和の手を阻み遙は右肩に和の鞆をかけ、左手で和の手をつないだ。

「こっしないと移動しないからね。」

「…好きにして。」

呆れ返って和が疲れた声をあげれば遙は嬉々として繋ぐ手に力をこめた。

「おまたせー。」

「笹森さん！良かったー来てくれてー！！」

「ごめん、皆の予想が哀しいくらいに当たった。」

先程、更衣室でいっしょだった三人に声をかけられそれに疲れた様子で応じる和の隣には、
がっちりと和と手を繋いでいる遥の姿があった。

やっぱりな、と三人は思えば

苦笑しつつもふたりをみつめていた。

「え、さ、笹森さん！！？」

「マジで！！？」

すつとんきような声をあげたのはクラスの男子達だ。

午後で最後の回ということもあり、

ほぼ全員が教室に集まっている状態だった。

和がどんな格好をするかという好奇心もあったらしい。

女子は皆、どや顔で自慢気にふんぞり返り、

クラスの男子は全員が全員口を間抜けにぼかん、と開き

数人の男子は夢見心地で顔を赤くしている。

遥が隣に居るにも関わらず、

クラスの男子達は全員が全員、和の生足にその視線を集中させる。

「よし、全員並べ、目ん玉くりぬいてやる。」

ドスのきいた声に男子が我にかえるも時すでに遅し。
一番近くにいた男子が憐れ、遙に胸倉をつかまれ絞め上げられていた。

常にはない言動に皆が面食らっている。

女子でさえ、普段のふわふわした言葉遣いがすっかり抜ける遙に蒼褪めている始末である。

「テメー、やらしい顔で見てんじゃねー。」

和の生足拜んでなに想像しやがったアア？」

「し、してませんしてませんごめんなさいいいい！！！！」

「謝るってことはしたんじゃねーか。よし潰す。」

『なにを！？』

男子が真っ青な顔で全員同じ事を思いつつ固まっていれば
慌てて和が遙を止めに入る。

「ちょっと、和泉君やめなさい！！息できなくなってるでしょう！

腕を、腕をゆるめんか！ちょ、託斗！これ止めてよ！！！」

「なぜ俺が。…まったく。」

教室の隅で傍観していた託斗が遙を止めに入る。

「おい、そのくらいにしておけ。」

「鈴木君。きみは自分の恋人が男の欲望の対象になるのは耐えられるのかい。」

「この場合、見るのは仕方ないんじゃないのか。」

「甘いな」。想像しただけでも罪になる国だってあるんだよ?」

「ここは日本だろう。」

「にしたって一発殴るくらいはしたくなるでしょ?」

「……まあ確かに。」

最終的にはと言ってしまう託斗に和は頭を抱えてしまう。

「このお馬鹿共!!! 託斗はそこで同意すんなっつーの!!!」

和泉君いいかげんにして! 大体私で妄想したってなんも面白くないでしょ!

そんなことする男子はいないってば! ねえ!!!?」

ぐるん、と勢い良く和が振り返りクラスの男子に同意を求めるも、皆なぜかそろそろ、と目をそらして無言になる。

「あ、あれ?」

この沈黙の意味するところはなんであろうか。

和は少しの嫌な予感が脳をかすめれば次には嫌々と全力で否定する。そんなはずがない、そんなはずは。

「全員潰す。」

重低音で遙がぱしん、と拳を自身の手に軽くたたきこめば、にっこりと微笑んだ。

「ちよ、誰か止めて! 託斗押さえつけろおおお!!!」

「気持ちはわからんでもないが。」

「ため、うっせえ! いいから止めるおおお!!!」

結局、慌てて和が携帯に電話をし浩平を呼びつけて止めてもらうまで
遙は暴れ馬のごとく好き勝手クラスの男子に襲い掛かったのであっ
た。

「和泉君て…」

クラスの女子が引き攀った声でぼそり、と呟いた時
いよいよ学園アイドルの称号剥奪か？と和は疲れた頭でぼんやりと
思ったのだった。

第四十六話「文化祭・本番」

「なんで当番の前にこんな疲れなきやなんないわけ？」

「お疲れ、笹森ちゃん。」

「大変だったわねえ…。」

ぼん、と浩平に肩を叩かれて、和は苦笑する。

本当ならば梓や浩平にはこの格好をあまり見られたくはなかったのだが

暴れる遙はなかなかどうして手強かった。

浩平が割って入り、なだめすかしてなんとか事無きを得たのである。付き合いが長いぶん、彼は遙の扱いがうまい。

たまたまいしよにいたのか、なぜか梓もいつしよにやってきて和はもはや開き直りつつある。

「にしても…マジでそれでうろろろすんの？」

「え、まあ、そうだけど。」

「遙じゃないけど止めるのわかるなー。」

「どっか変？」

「和って足綺麗ねえ…。」

「え、ちょ、梓さん太腿を撫でるのはやめようよ!？」

さす、と梓が和の太腿を無表情に撫でるので

和はなんとなく悪寒が走る。

なぜそんな怖い目でみつめるのであろうか。

『ピュッ』

電子音が響き、何事かと梓と和がその方角へと振り向けば

浩平が携帯電話をかまえていた。

「…なにをやってるの?」

「だって女の子同士がじゃれ合うのってエロくない?」

「いやいやいやわかんないよ、その感覚がわかんない。」

「もうこれは、ものすごく良いおかず…」

すべて言い終える前に、浩平がうずくまって床に倒れこんだ。

遥におもいきり鳩尾へとケリをくらったからである。

教室の隅で2・3一同に我に返った遥が謝罪をしていたはずであるがそれが済んだのか、はたまた浩平の携帯電話が発した音に反応したのか

遥が勢い良く走りこんできていた。どう考えても完全に入っている。

「わわわ、宮田君!」

「和の馬鹿!しゃがむな!」

慌てて駆け寄ってのぞきこもうとすれば遥がそれを制止する。

和のタイトなミニスカートではかがめばかなり際どいラインまでみえてしまう。

遥は両腕をつかんでそれを阻止したのだ。

「え、あ、ごめん。普段こんな格好しないから。」

「…和、ほんっとかんべんして…」

「これじゃあ遥も心配尽きないわよねえ…」

ふう…とため息を梓がつく。

さすがに和は反省せざるをえなかった。

確かにこの格好でそこまで無防備になるのは危機感がなすすぎる。

遙に気をつける旨を伝えれば、少し満足気にならずいてくれたので和は安堵の息をもらした。

「浩平、ケータイ。」

「え、なに？」

「なにじゃねーよ、出せ。」

「いやあれ、保存してなかったから残ってない…ああ！」

いまだ蹴られた箇所をさすりながら床に座りこんでいる浩平は抗うすべもなく遙に携帯電話を奪われる。

遙は浩平の言葉をまったく信用することなく無表情にデータをチエックしていけば

目を見開いて浩平を鋭い眼光で睨みつけた。

「動画じゃねーか馬鹿！」

下半身二度と使えなくしてやろうか teme エー!!」

勢い良く振り下ろされるケリに、浩平がなんとか立ち上がり逃げる。遙は素早くデータを消去すれば携帯電話をそこらへんに放り、逃げ惑う浩平を追いかけていた。

「…男って。」

「動画の方が許せない度が高いのかねえ？」

首を傾げつつ梓の隣に立つ和が呟けば

梓は胸中で、そこ？とつつこまずにはいらなかった。

騒動もひと段落つき、ポイントに辿り着いたのは開始5分前というギリギリの時間だった。

和含め当番の女子達ならびに警備につく男子達は慌しいことこのうえなかった。

『しっかし…人多いなあ。』

ちらちらと周りを見れば、一般公開されていることもあり物凄い人数が校内をうろついていた。

普段、自分が親しんでいる場が様変わりするというのはなんとも違和感がありむずむずと据わりが悪い。

和のポイントは中庭で外に出てる出店の周りをうろろろしっつ人混みに紛れている。

最初はじろじろと見られるだろうかと懸念したが案外皆こちらに視線を寄越さない。

やはり文化祭効果であるうか。

和以上に奇抜な格好をしている人間も確かにちらほらみてとれる。

「あの。」

「はい？」

振り向いて、声をかけた人物の手元をみれば、

写真とスタンプを押す台紙が握られている。
開始してまだ10分程だ。けっこう早くみつかるものである。

和の最初のお客さんは女の子二人組で、中学生ぽい見た目をしている。

しかしさすが女の子というか、一回で和の写真を取り出し
ご本人ですよね？とおずおずと声をかけられれば
和はにっこりと笑ってスタンプを押した。

「頑張ってくださいね。私の所はあなた達が一番乗りですから。」

「わー、ほんとですか！ありがとうございます！」

お互いに手をふりつつ別れを告げる。

『…こんな客ばかりならラクなんだけどなあ。』

なるべく穩便に終わればいいと思いつつも

和は先程から中庭の隅に腰掛けている遙を見やる。

なんとというか、あそこだけオーラが禍々しい。

他の男子は別々の場所にいるのであるが、遙だけが悪目立ちしていた。

最初の客以来、なかなか次が来なかった。

制限時間は2時間あるが、果たして何組が現れるのか。

腕時計を見れば、開始から30分が経過している。

それにしてもこうぼんやりとしているのはなんとも暇である。

頻繁にまではいかずとも、ある程度は客が来なければ
なかなか時間の経過を感じなく疲れるものだ。

「あー、すいません。」

そんな風に思っていたときだ。

二組目に声をかけられる。男性だ。

校内か、学校外か。

どちらかはわからないが、同じくらいの年齢だろうかと和はぼんやりと思いつつ、はい、と返事をする。

「さっきからこちら辺うろうろしてますけど

待ち合わせかなにかですか？」

「え？いえ、違いますけど……」

「あの良かったら俺といっしょにまわってもらえませんか？」

いっしょにきた奴がどっか行っちゃって帰ろうか迷ってた所なんです。

在校生の方ですよ？案内とかしてもらえませんか？」

『え、ナンパ……!?!』

まさか本当にあるとは、と内心驚きつつ、

和はそれを表に出すことなくにっこりと微笑む。

「すみません、今クラスの当番の最中なんですよ。

良かったら参加しませんか？スタンプラリーやってるんですけど。

私みたいにコスプレしている四人の女の子に声をかけて

よつつスタンプが集まったら景品がもらえるんです。

暇つぶしにもなりますし、その内連れの方もみつかるとかもかもしれません。

どうですか？」

「えーと……どうしよう、かなあ。

あの、それってどこかで受付するんですか？」

「パンフレットお持ちですか？」

和の問いに、男が少し慌てて文化祭のパンフレットを取り出した。それを受け取り、男の傍らでそれを広げて見せる。

「これです、2・3のスタンプラリー。」

ここを左に行つて、校舎内に入つたら階段をあがつて二階に2・3の教室がありますから。

本当は直接お連れできればいいんですけどここを離れられないので、ごめんなさい。」

「いいえ、そんな。ありがとうございます。行つてみますね!」

にっこりと微笑んでその男性は去っていく。

意外と好青年ぽかった。終始敬語だったのがなんだかナンパされている感覚になれなくて

あまり警戒心を抱かずに話し込んでしまった。

遥の方をちら、と確認すれば、その姿がなく

どこにいったのだろうか、と和が首を傾げる。

「…なんでナンパされた男にあんなに親切に接するかな。」

「うわあ!」

頭上から聞こえた声に和が驚きの悲鳴をあげる。

気が付けば真後ろに遥が立っていた。

「いい和泉君!心臓に悪いからやめてよ。」

「くつつきすぎ。あんなに顔近づけるとかありえない。」

「えー?だつてお客さんだし…」

「何言つてんの、ナンパじゃん、ナンパだったよね?」

「こ、ごめん…でも、あんまりきつく言うのもさあ…」

あのひと、しつこくなかったしサラっとしてたよ?」

「そういう問題?」

また声かけられたら彼氏いるってちゃんと言うんだよ?」

「へーい。」

「和。」

「…わかってます。ごめんなさい。」

「よろしい。」

男女比はどちらかといえば女性のが多かったことは和を安心させた。

カップルで参加しているひとも多く、

遥がうるさく言う割にはナンパ行為というものはそうそうない。

開始して一時間経過したときの男の二人組がいちばん酷く、写真と同一人物だということを頑なに信じないふたりにため息を吐き和が髪をほどいてひとつに結び、眼鏡をかけてやっと信用したのだ。

その時点でふたりは挑戦権を失っており、

怒りに我をなくしたのか和に絡んで離れようとしなない。

ついにはその二人組は和の腕をつかんでどこかに引きずり込もうとすれば、

遥が弾丸のごとく飛び出してふたりをボコボコにしようとする。

和を助けようと駆け寄ったクラスの男子は、遥を止めるのに必死になった。

それでも、騒動が大きくなれば最後の最後でクラスの出し物自体が教師からストップをかけられてしまう、と説得すれば、職員室まで連行するという形で遥は渋々納得したのであった。

そうして、

騒ぎからしばらくして、

遥のあの暴走はどうにかならないだろうか、などと和が思考を巡らせている時である。

「あの？すいません。」

「は、はい！」

心の旅に出ていた和は、

慌てて声のするほうへと顔を向ける。

見れば先程、声をかけた男がそこに立っていた。

「あ、参加してくださいっただんですね。ありがとうございます。」

「さっきはありがとうございます。連れとも連絡とれましたよ。」

「あら、いっしょじゃないんですか？」

和の疑問に、目の前の男は苦笑いを浮かべる。

「話しかけた女の子と意気投合したから先に帰るんだそうです。」

「あらら、それはそれは。」

目を丸くして男を見れば、少し情けない顔をしていた。

改めてみれば、本当に穏やかそうな顔をしていて、特別格好いいという容姿ではないものの、若いときはそれ程ではなくとも、結婚するにはこういう人がいい、と発言しそうな女性は多そうだな、などと、なんとも下世話なことを頭の中で考えていれば、和は少し意地の悪い顔をして笑む。

「元々それ目的で来たんじゃないですかあ？ 私にもさつき声かけてましたもんねー。」

お友達は成功したのに残念ですね。」

「そんな！友達は確かにちょっと軽い所もありますけど、いいかげんな奴ではないですよ！」

少しむつとしたような表情に、和は少し驚く。

なにも言えずに固まっていたら、男は慌てて頭を下げた。

「す、すみません！元々は声をかけた俺が悪いのに。」

「いえいえ。私も面白半分で傷付けるような事言ってしまったから。」

「スタンプ、押しただけですか？この写真あなたですよね。」

につこりと笑って、男は和の写真を取り出す。

手にはまだ四枚の写真すべてが残っており、

写真は回答したときに本人達が回収をするため

持っている枚数で台紙をみずともすぐにスタンプの数がわかる。

今までの話しかける人間の中で、

男だけのグループで和の写真を一発で当てたのは

和が最後のひとりになった人々だけであり

複数枚残っているときは皆、和の写真を最初に持ってくることはな

かった。

和は思わず男を無言でしばしみつめれば、ぼつりと咳く。

「……よくわかりましたね。」

「え、だって顔同じじゃないですか。」

「……はあ。ええと、おめでとございます、これでひとつめ終了です
すね。」

ぼん、とスタンプを押して、和は写真を回収すべく手をさしだす。

「返したくないですね、写真。」

「それはちよつと。」

「……ですよ、すいません。」

「はい、たしかに。」

写真を受け取ったとき、耳元で男が小さく囁いた。

「裏面、みてくださいね。」

「え？」

和が顔を上げれば、男は手を振って校舎内へと走って行った。

首を傾げつつ言われた通り写真の裏側を見れば

白紙であるはずのそこにペンで文字列が書かれていた。

一瞬目を細めつつ和はひとつ息を吐き、

写真を他の回収したものと同じく専用の袋へと仕舞い込んだのであ
った。

「あれ、もう着替えちゃったの？」

「当たり前でしょ。」

残念そうな声を上げるクラスの女子に低い声でそう言い放つ。

時刻は15時10分。

終了時刻と共に教室へ走った和は

鞆をひつつかみ女子更衣室へと駆け込んだ。

服を素早く着替え、ついでに化粧も落としてしまったのだ。

「はい、これ。スタンプ。」

写真って枚数全部そろってる？」

「ああ、手元に残ってるのはこれ。20枚そろってるか確認してくれる？」

「了解。」

受付を担当する男子にスタンプと交換で写真を受け取れば、和は今日一日の喧騒に疲れを覚えれば教室をあとにする。

静かなところへ行きたい、とぼんやりと思えば
和の携帯電話に一通のメールが届いているのに気が付く。

『屋上で待ってる。』

遙から送られていたメールを確認して携帯電話を閉じれば
和はゆっくりと階段をあがっていった。

「お疲れ様。：眼鏡と髪はそのままなんだね。」

「んー、面倒臭くて。まあいつかと。」

「そう。」

出入り口扉のすぐ横に遙が座っていたので

和はその隣に腰掛ければ、鞆から写真を取り出した。

「これ、スタンプラリーで使ったやつ？」

「そう。枚数ちゃんと揃ってるか確認するの。ほら、返して。」

ひょい、と和の手から一枚取り出した写真を遙が見つめる。

「これほしい。だめ？」

「え…そんなものどうすんの？」

「別にどうもしないけど。」

なに、用途がないともらっちゃいけないの、写真で。」

「そうそう、呪いの道具的なね。」

「……そういうのって効くものなのかね。」

「さあ？心理的なプレッシャーを与えることはできるかもねえ。自分が呪われてるっていう事実を知ればね。」

「呪われてる事実かー…」

「え、ほんとにやるの？やめてよ。」

「自分しか見えなくなるとか出来るんならやりたい。」

「それは物理的に？心理的に？」

「両方かなあ。」

「気持ち悪い回答をどうもありがとう。さあ返せ。」

遙はひどいな、と笑ってぴら、と和の写真を裏返す。

その仕草に一瞬どきり、とするも和は無反応を装った。

「…枚数って全部で何枚なの？」

「20枚だけど。」

「俺が数えてあげる。」

「…いいよ、別に。それくらい自分で出来るし。」

「なんで？くすねたりしないから大丈夫だよ。」

遙の表情を見れば、笑顔であるにも関わらず

まったく瞳が笑っていないことがわかる。

怒っているのだと理解すれば、和はため息を吐いた。

「…はい。本当にくすねたりしないでよ。」

写真をしまっていた袋ごと遙に渡せば、

遙はそれを受け取り無言で写真を数えつつ

一枚いちまいを裏返していった。

『…』

「なんでわかったの？」

「なんでって。基本的な手法じゃないこんなの。」

「和泉君もそれですいぶんひっかけたの？」

「こんなことしなくても寄って来てくれたけどね。」

悪びれずそんなことを口に出すということは

これは相当キテいるな、と思えば

和はここにふたりきりであることにどこか危機感を覚えた。

今からでも逃げてしまおうか。

その過ぎった思いが遙に伝わったのだろうか。

遙は無言で立ち上がり出入り口の扉に
がちやり、と鍵をかけた。

この屋上の扉は、内からも外からも鍵がないと開けられない。
今この瞬間、脱出するには遙から鍵を奪わなくてはならなくなって
しまった。

遙は写真を検分しつつ、また和の隣に腰を下ろす。

そうして数え終わったのか、写真を袋にしまえば、和に手渡す。

ただ一枚をのぞいて、19枚の写真は和の手元に戻った。

ひらひらと遙が一枚の写真をその手で遊ばせている。

「これと合わせて、きちんと20枚揃ってるよ。」

「そう、それは良かった。じゃあ、返して。」

和の言葉になにも返事をすることなく、

遙は無言で携帯電話を取り出せば、

番号を打ち込んでいく。

和が一連の動作を固まってみつめていれば、
遙が和に向かつて最高に黒い微笑みを試みせた。

「い、和泉く」

「もしもし？」

電話から、向こうの声が少しもれてきた。
戸惑ったような声をしている。

「あんたが今日ナンパしたのはね、俺の彼女。

複数人に声かけてれば誰だかわかんないかもしれないけど、
写真の裏に番号とメルアドと名前書いてよこしたでしょ？

ええと、加賀^{かが}さん？

というわけで今後一切こちらからアナタに連絡することはないので。
それじゃあ。」

言いたいことだけ捲くし立て、遙が通話を遮断した。

そうしてこちらを振り向けば、と遙が右手を差し出した。

手の平を上にして、なにかを催促するような仕草をしている。

その意味する所がわからずに、和は首を傾げる。

「携帯電話。貸して？」

「！」

その意味する所を理解した和は心に黒い塊が沈みこむのを感じる。

自分は今、彼に浮気の嫌疑をかけられているのだ。

その事実にとんどん心が冷え込んでいく。

和は唇を噛み、俯きつつ無言で遙に携帯電話を渡した。

遥が無言でそれを受け取り、なにかをチェックする。
おそらく、メールアドレスと電話番号が登録されていないか
確認しているのだろう。

「はい、ありがとうございます。あのね、和…ってちよ、なんで!？」

こらえきれずにうつむいてぼろぼろと涙を流す和を
視界にうつして遥がすっとんきょうな声をあげる。

なぜ、なんでなどと訊くのだろう。

そんなこともわからないほど、彼は鈍かっただろうか。

「だ…って、わ、わた、」

「え、あ、」

うまく話せず嗚咽をもらす和に心底困った表情をした遥だったが
なにかを察したのか、短く声をあげれば慌てて和の頬を自身の両手
で包み込んだ。

「違うよ、和の浮気を疑ったとかそんなんじゃない！」

「ごめんね、そりゃ、俺になんて言わないのかってむっとはしたけど
！」

「それは…い、和泉君、怒ると、怖い、から。」

「え、ご、ごめんね、なんていうか男が絡むと本当に俺はなんとい
うか…」

でもそうじゃないから!そういうことではないから!！」

遥の狼狽ぶりに、和はやっと自分は本当に

浮気を疑われたわけではないらしいと思えば、

少しずつ涙がおさまっていくのを感じた。

遙は、微笑んで和の涙を優しく指でぬぐいつつ、目元に小さく口付けを落とす。

「わひゃっ」

「泣いてる顔ってあんまり見れないから可愛いんだよねー」

あーもう、このまま色々してしまいたい…!」

「あの、そういうのは言葉にしないほうがいいと思う。」

「言葉にしないと暴走して実行しちゃいそうだからさー。嫌でしょ？」

「う、うん、ちょっと、嫌。」

「だよねえ。」

ふふ、と笑いつつ、遙はぎゅむ、と和の身体を抱きしめる。

「あの、なんでさっき…?」

「ああ、そうそう、それね。」

あのね、さっきのメールアドレスと番号、弾かれるようにしといた。」

「え?なんで?だって私の番号なんて相手は知らないよ?」

遙が和の手元に携帯電話を落としつつ、

ふっ、と息を吐く。

「うーん、心配しすぎで終わればそれでいいんだけどさ。」

この加賀って奴、どうもナンパ慣れしてない気がするんだよね。

でも和に声をかけられるのに物怖じした様子がなかったのは

和に本当に一目惚れでもしたんじゃないかと思って。」

「え、でも慣れてなきゃこんなことしないんじゃない?」

「まあ、そうかもしれないんだけどね…」

ほとんど勘？なんだけど。危なそうだったんだあの男の瞳。

和をみてるときの顔がさ、ちよつとストーカーちつくというか。」

「えー、まさかあ。」

「だから、勘なんだけど。」

「まずいことにこのテの勘ですげーよく当たるんだ。」

遥のその言葉に、和は一瞬固まりつつ、次には蒼褪める。なぜだろう、どこか説得力がある気がしてしまうのは。

和の顔に、遥が慌てて頭を撫でる。

「大丈夫だよ、過剰に心配性なのは俺もわかってるし。本当にただの勘ってだけなんだから。」

「……………返り討ちにしてくれるわ。」

その低い声音に、そろ、と和の顔をのぞきこめば、なんともいえない悪い顔をして笑っている。

「…和。今回はさすがになんかあったら危ないからね？」

「うん、わかってる。大丈夫。こっちから仕掛けるとか

そういうことはしないし、多分そんなことにならないと思うし。」

「そう？」

「だって前提がまずありえない。一目惚れでしょ？」

さつきはつい和泉君の物言いに一瞬本気になっちゃったけどさー。

冷静に考えてないない。ありえない。」

「まーたそういう…。まあいいや、どうする？後夜祭とかあるけど。」

「

「私はそういうの興味ないからいい。帰る。和泉君は？残る？」

「和がいないのに残ってもしょうがないでしょ。家まで送るよ。」

ついでに少し寄ってもかまわない？」

「ん？いいけど…お父さんもいるから疲れるよ多分。」

「…和のが疲れるんじゃない？」

「ははは、かもね…。」

疲れたような笑いをしつつ和と遙は同時に立ち上がる。

遙が屋上の鍵を解放し、その扉を開けば

その瞬間になにかが飛び込んできた。

出会い頭に遙は何者かからぶつかられ少しよろめけば

男は和めがけて飛び込んでこようとす。

それに遙は素早く態勢を立て直せば男の腕を掴み

ぐい、とひねりあげた。

男は苦しそうに小さくうめく。

「か、加賀さん!？」

「下の名前がかまわないよ、和ちゃん。」

につこりと微笑まれて、和は背筋がぞく、とするのを感じた。

先程、おとなしく優しいという印象を持った相手が

今はなんだか別人のように見えてしかたがない。

瞳がぼんやりとしていて、何もみていないように思えてならない。

「お前、なんでここにいる？」

後ろから遙のドスの利いた声がして、加賀は面白くなさそうに眉を顰める。

「和ちゃんとふたりで話がしたいと思ってね。」

しばらく彼女をつけてただけだ…

さっき電話をしてきたのはお前か。和ちゃんだと思ってたのに。」

「ふーん、思ったよりまとものに会話できるんだ。

尾行つてのがなんとも穏やかじゃないけど。」

「和ちゃん、本当にこんな男と付き合っているのかい？」

「こんな、見た目ばかり派手な男と？」

加賀の言葉に和が反応すれば、

空気にもれないようにいつも通りの声音を出せるよう慎重になる。

「そうですよ？」

和の是という言葉に、加賀は目を見開いた。

「嘘だ!!!君はそんな女じゃないはずだ!!!」

君は見かけだけで人を好きになるような、その辺の無能な女とは違う!!!」

「や、まあ…確かに容姿は無駄に良いですけどねえ。

そんなに中身からっぽな男でもないんですよ？彼。

にしてもその物言い…過去になんかありました？トラウマ的な？」

「和。普通に世間話をしないでくれるかな。」

ひょうひょうとした口調に遙が半ば呆れながらも

いつもより緊張しているのを感じ取る。

素直に怖がってくれてもいいものを、

彼女は本当にひとを頼ったりすることに敏感だ。

「…君は、僕の天使なんだ。僕だけの…!!」

「て…はあ？」

あまりにも自分と正反対のその言葉に、和は面喰らってしばらく固まった。

遥とはいえば、うわあ…というなんとも苦々しい表情をしている。まあ、確かに、この発言はちょっとないな、と和も思う。

「天使ねえ…天使って確か性別ないはずですけど。」

「違いましたっけ？無神論者なのでイマイチそこらへんの知識は薄いんですけど。」

所謂、ふたなり？というのでしたっけ。」

「な、和ちゃん？」

「加賀さんてそういうご趣味なんですか？」

私、胸は一般平均と同じくらいか若干あるくらいなんですけど大丈夫なんですか？」

あ、それとも下が付いてるほうがいいとか？」

それだともっと無理なんですけど。」

何を言い出すのか、と遥は頭を抱えなくなった。

しかも和の言葉に今日のあの格好でそういうえば胸がけっこう目立ってたな、

などと反芻してしまう自分も苛立たしい。

「君は…な、なにを言って」

「あ、ひよっとしてEDですか？」

「な、にを…」

「いえ、ですからイン「もうやめろおおお！…！」

ば、と遥の拘束を振りほどけば、

そこには半泣き状態の加賀が立っていた。

「天使なんかじゃない！

お前は、悪魔だああああああああ！…！！…！！」

そう言い放ち、屋上から脱兎のごとく駆けていく加賀を
遙はばかん、とながめていた。

といってももう既に加賀の姿はないので、
屋上の開け放たれた扉をただみつめるだけであつたのだが。

「同感だね。」

「！和…」

「天使つて言われるより悪魔と呼ばれたほうが余程しっくりくるよ。」

「

にや、と黒い微笑みをたたえて、和が遙に近寄れば
携帯電話を投げて遙によこす。

「なに？」

「さっきやった設定、解除しといて。もう必要ないでしょ。」

あと和泉君さっきの写真返してくれる？ないとは思うけど一応保険
ね。」

「保険てなに。」

「保険は保険じゃん。ほれ、寄越しなさい。」

携帯の着信拒否設定などを解除すれば遙は和に電話を手渡す。
そうしてそのまま、ぐい、と和を抱きしめた。

「だーめ。危ない事はさせないよ。」

「しないってば。」

「悪いけど、そこは信用できない。」

「ええー…」

「本当はあんな風に男に迫られるの怖いくせに、
強がっちゃってかっこ良いんだから。俺、出る幕なかったじゃない。」

「

「だって和泉君がこうしてくれるのわかるもん。」

「ん？」

「終わったあと、怖い全部とっばらつてくれるのわかってるからだから私はひょうひょうと立ち向かっていけたんだよ？」

「……あんまり可愛い事言わないでよ、我慢できなくなるから。」

苦笑いをすれば、遙は和にキスを落としました。

こうして疲労感たっぷり文化祭は、終わりを迎えたのであった。

「ちょっと！！なんでお父さんがこんな写真持ってんの！！？」

家に帰ればなぜかウエイトレス姿の和が写る写真が

テーブルに並べられていた。みれば今日のコスプレ写真だ。

和の叫び声に、しれっと高明はこたえる。

遙は高明の隣に座り、まじまじと写真をみつめている。

依子も微笑みながら整理をしていた。

「広未に頼んだんだよ。撮ってきてくんない？って。」

「これ、全部隠し撮りですよね？すごいな、広未君。」

「昔からねー、和ちゃんて写真とか記録するもの嫌つのお。」
「当たり前でしょう！過去の自分を記録するなんて冗談じゃない！！
いつなにがきつかけになるかわかんないんだからね！
自分の弱みになりそうなものは潰しておくのが常識じゃん！！」

和の剣幕に、遙は驚愕して高明を振り返る。

「和ってどこぞの国のスパイなんですか？
それともフリーのヒットマンとか。」

「あいつなー、悪趣味だから。」

他人に同じ事されるの心底嫌なんだよ。」

「そうなのよねえ、こんなに可愛いのにい。」

「あ、依子さん俺何枚かもらってもいいですか？」

「いいわよー、データはいくらでもあるから。」

なんなら全部持っていく？」

「え、いいんですか!？」

「遙君、ガチで全部持ってくの？」

どうすんの、そんなに持ってって。毎日使うわけ？」

「ちよ、高明さん、そういうこと言います？娘の彼氏に。」

「えー、他でするより愛があっというじゃん。」

子ども出来るわけでもなから安全だし。もっというの奥にあるよ、
持ってく？」

「え、ほんとに？」

いそいそと立ち上がろうとする遙と高明を

和が思い切り蹴り上げれば、依子が暴力はだめ、と注意する。

「お前らは本人を目の前になんの話をしてるかあああああ！！！！！！
つつか和泉君も否定しろおおお！！！！！！」

「えーだって事実だし。」

「遥君若いなー。」

今日一番の怒鳴り声が、笹森家に響き渡ったのであった。

第四十六話「文化祭・本番」（後書き）

これにて文化祭シリーズは終了です。

番外編的な雰囲気を書いたりしてみましたが
いかがだったでしょうか。

次のお話もちよっと続きものになりますが、長くなりそうです。

ひよっとすると1、2日構想をまとめる作業で更新があくかもしれ
ませんが

なるべく早く書き上げようと思っていますので
申し訳ありませんが、よろしくお願いします。

第四十七話「攻略（松永家の場合）・その1」（前書き）

今回のシリーズもちよっと長くなりそうです。

よろしくお願ひします！

第四十七話「攻略（松永家の場合）・その1」

「へえー、けっこ普通のもの食べるんだね？」

「やあね、和さんてば。当たり前じゃない。」

私は皇室生まれでもなければ物語のお姫様でもないのよ？」

「でも、通いのお手伝いさん来てるんでしょう？」

それだけで私からすれば充分別世界みただけどねえ。」

「そうかしら？まあ、確かに家事を一通り出来るとは言い難いわ。もう少し自分の面倒をみればいいのだけれど。」

しゅん、と沈んでいる目の前の少女がなんだかいじらしく、和は無意識に頭を撫でていた。

「大丈夫、慣れだよこういうのは。」

料理は出来るようになったんだからさ、他もやれば出来るよ。自分でそれを望めばね。」

「…ほんと？」

その言葉に、和は微笑んでうなずいた。

隣に立つ少女は華のように笑う。

「でも私も…失礼だけど意外だったわ。」

なんとなくだけど和さんてお料理とか興味がなさそう。」

「おお、実花ちゃんもなかなか無邪気に言うようになったねえ。」

まあ確かに興味はないかなあー、好きかと問われたら微妙、だね。」

苦笑する和に実花は目を丸くする。

今ふたりは、実花の部屋の台所で夕ご飯の準備を

並んで行っている最中で
一人暮らしのその部屋の広さに最初和は驚いたが、
もっと驚いたのは和と実花と入れ違いで帰っていった家政婦の存在
だった。

やはりお嬢様なのだと改めて感じていたが
献立をたずねれば、それは特に聞いたことのない横文字料理などで
はなく

和食中心のメニューであった。

それならば、と和はすすんで一緒に台所に立って、今に至る。

「だったらどうして和さんはお料理出来るの？」

「自分の為だよ。学生のうちから一通り覚えておけば困らないから
ね。」

高校生でバイトをしているわけでもなければ時間は余りあるわけだ
し。

それこそいつ一人で生活しなきゃいけない状況になるかわからない
でしょ？

生きる為に必要な知識はなるべく貯金しておいたほうがいいから。」

和のその言葉の数々に、実花はふ、と噴出せば
和さんらしい、と呟いた。

「他人に振舞おうという気概があまりないからねえ…
むしろ出来ないって言うておいたほうが色々ラクできそうじゃな
い？」

「それって、遙に手料理を作った事がないってこと？」

「ないねえ。一応、お菓子も一通り作れるんだけどね。」

それをひけらかさうとも思わないな、面倒くさいし。

自分が突発的になにか食べたくなるときとか便利だよ。」

「ええー！どうして？好きな人に食べてもらっておいしいって言われたら嬉しいじゃない？」

「うーん…それはそうかもしれないけどね。」

でもやっぱり一度振舞ったら次もねだられそうに嫌かなあ。

というわけで、全部実花ちゃんが作ったことにしておいてね。味付けはまかせるから。」

和の物言いに実花は半ば呆れつつも

しかたなくうなずいた。

いつか彼女の作ったものを食べてみたい、などと思いつつ。

金曜日、いつもの週末を過ごすはずであった和の元に血相変えてやってきたのは実花だった。

放課後、授業が終わって間もなく実花がものすごい勢いで教室へとやってきたのである。

その姿に驚いたのは、クラスメイト達であった。

梓といい、実花といい、

なぜ彼女はライバルとも呼べる人々と仲良くなれるのだろうか。

特に女生徒は、その心理を理解するのがなかなか難しい、と感じていた。

とりあえず今の教室の空気は好奇心に覆われていて、

和は実花に何事かとたずねようと思ったが、その視線の集中する様に

ひとつため息を吐けば実花の右手をつかみ教室をあとにした。

下校する生徒であふれる廊下へとふたりで出れば

周りに注目されることもないし、会話を聞かれる心配もない。
和は心の中でひとつうなずき、隣に立つ実花へと顔を向ける。

「どうしたの、なんかあった？」

「それがその…ちよつと、緊急事態というか。」

「…それはまた。」

言い辛そうにしつつ口を開いた実花から出たその言葉に

和は目を丸くする。

「どうかしたの？」

「ええ、ちよつと…外だと話し辛い事なの。」

よかったら、私の部屋に遊びに来ない？ 遙にも聞いてほしい話なの。

「

「実花ちゃんの？ ああ、マンションで隣同士なんだったね。」

まあかまわないけど…そんなに深刻な話なの？」

「私ひとりで解決できれば、とやっていたのだけど…」

ごめんなさい。駄目だった…私、情けないわ…！」

悔しそうに唇を噛むその様子が、今にも泣き出してしまいそう
で心配になる。

和は慌てて実花の頭を撫でてやれば、いいんだよ、と優しく声を
かけた。

「そういうのはね、見極めが大事なの。」

ひとりじゃどうにも出来ないのなら、人を頼るのは悪い事ではない
んだよ。

むしろどうにかしようと思起になって取り返しのつかない所までい
っちゃう事が

いちばん駄目な事。まだ、大丈夫なんでしょう？」

和の言葉に、実花がこくり、とうなずく。

「そう、良かった。じゃ教室に和泉君迎えに行こうか？

どうせだから皆でいっしょに夕飯とか食べる？」

「それなら私ふたりにご飯作るわ！」

「おお、それは楽しみだ。よし行こう。」

笑って手をつないだまま遥の教室へ向かったときの

不機嫌な遥の顔はなんともいえなかった。

女性でも男性でも、彼にとっては

和に必要以上に触れられる事は何かの琴線に触れることらしい。

思い出して少しもれた笑いに、遥が不思議そうな顔を向ければ

和はなんでもない、と首を振る。

それにしても、と和は改めて目の前の湯飲みをながめる。

「…このお茶、すっごい高い？もしかしなくても。」

「え、わからないけど…どうなのかしら？」

「まあ、一般家庭ではあまり出ないかもねー。」

遙の言葉に、和はどこか不思議な感覚を持つ。

やはり彼もそれなりの家で育ったようだが

実花ほど浮世離れはしていないらしい。

コンビニでも普通に色々なものを買っていくし

ジャンクフードに一定の親しみのある人間であることも

和は知っている。

だからこそ、彼の今の言葉はなんとも不思議であった。

食後の緑茶をすすりつつ、三人はテーブルを囲んでいた。

遙がすっかり洗い物もし終えて、

あとは実花の話の聞くだけ、という状態である。

「ご飯すごくおいしかったよ、実花ちゃん。

これで落ちない男はいないよ！」

「…遙は落ちてくれなかつたわよ？」

「彼はね、普通じゃないんだよ。変態という名の紳士なんだよ。」

「なにそれ。」

眉を顰めて意味が分からない、という顔をするふたりに
和は少しのむなしさを覚えた。

『引用ネタが通じないのってこう…どこか哀しい。』

気を取り直しつつ、和はこほん、と小さく咳払いをすればそれで、と実花に本題を切り出した。

「話っているのは？」

実花のからだが一瞬竦み、それでもくい、と緑茶を飲めば湯飲みをだん、と勢い良く置いてひとつ息を吐いた。

「私の両親の事なのだけねど。」

「…話つてやっぱりそれか。だから俺も一緒について言っただろう？」

「だって私の言葉が嘘だと言つてもお父様は聞いてくれないのよ！
遙に責任を取らせるの一点張りで！」

このまま遙が出て行つても火に油でしょうし、
遙は説得に成功したつていうのに私だけ無理だったなんて情けなくて
とても言えなかったのよ！」

918

和を置いてきぼりにしてふたりの会話が進んでいったが、
なんとなくその飛び出してくる言葉の数々から
自分になにを言いたかったかを和は理解した。

「モラトリアム、か。」

「え？」

ぽつ、と呟いた言葉に、

隣に座る実花が不思議そうに和の顔をみた。

「延ばされてた執行猶予がいよいよ打ち切られそうなのわけだ？」

正式に婚約発表をするとか言われちゃったんじゃないの？違つ？」

「和さん…どうして」

実花の言葉に、和は苦笑する。

そもそも呼び出された理由はあれこれと予想していていちばん可能性が高いのはそれではないかとアタリをつけていた。今、改めて話を訊いてああやっぱりな、と納得している自分がいる。

むしろ彼女の両親は良かれと思ってそれをやっているのだろうし元々が正式に婚約しようとしていたふたりなのだから何故今更それが破談になるのかなど、理解が出来ないのだろう。モタモタとふたりが決断するまで猶予を与えてしまったからこそこんな事になってしまったのかもしれない、と頭を抱えているのかもしれない。

娘の為だと周りを省みず躍起になっているに違いない。誰かがそれこそ頭からバケツの水を思い切りぶっかけてやらねばおそらくその目は覚めないことであろう。

「で、和泉君のご両親は了承済みなわけね？婚約破棄。」

「まあね。母さんはまだ納得できてる、とは言いがたいけど…」

基本的に最終決定権は父にあるからそれは大丈夫だよ。」

「そう、ならそっちはまあ置いておくとして…」

実花ちゃんとはご両親とも婚約発表を急いでる感じなの？」

和の言葉に、一瞬実花が逡巡する。

「…お母様は、お父様に基本的に合わせる方だから

あまりご自分の意見をおっしゃらないの。

ただ、幾つか私にお尋ねになったわ。

あなたは、本当に婚約をやめてしまってもいいの？と…

私がい、とうなずいたら複雑なお顔をしてらした…。」

両親に敬語なのか、すげーな、などと
あまりにもどうでもいい事を和が頭で考えつつ
ひとつうなずけば、和はちら、と遙に視線をやった。

「和泉君ちよつと帰ってくんない？」

「え、なぜ。」

「女同士の話があるんだよ。とにかくなにも訊かずに出てけ。」

びし、と和が玄関方向を指差せば遙はす、と目を細める。

「和、何する気？俺はできるなら今回の事に巻き込みたくないんだ
けど。」

「でも和泉君じゃ解決できそうもないじゃん。」

「なら私が一肌脱ぐしかないっしょ。」

「……………おじさんは面倒臭いよ？」

「わかってるよものすごく想像つくもん。」

「俺は、なにがあつたつて実花と結婚なんかしないよ。」

「でも実花ちゃんの将来に傷が付いちやうわけでしょこのままじゃ。」

「……………まったく。」

観念したのか、遙はため息を吐いて部屋をあとにする。

和は外に出たのを確認すれば、がちゃん、と扉を施錠し

ご丁寧にドアのチェーンまでかけていて実花は目を丸くすれば、
実花のその反応に和が苦笑して応える。

「一応ね。さて、と……………」

そのまま和は自身の鞆を引き寄せれば、
そこから携帯電話を取り出す。

「…あ、ごめんね、今大丈夫？うん。
悪いんだけど中村さんをお願いがあって…いやいや、そうじゃない
よ。」

ちよつともらいたいデータがあつて…うん。そう。」

和がどこかに電話をかけているのを実花はぼんやりとながめていた。
ひよつとしたら彼女は、
この問題までもひよい、と解決してしまうかもしれない。
そんなことを思いつつ。

電話を切った和が、こちらに振り返れば
真顔で実花をみつめる。

「…あのさ、実花ちゃん、ちよつと確認なんだけど。」
「な、なに？」

「実花ちゃんて、処女だよな？」

和の言葉に実花はすつとんきょうな声をあげた。

目の前にそびえたつ豪邸に、和はぼかん、と口をあけていた。隣に立つ実花と遙はその様子にどうしたらいいのかわからない。

「はー…すごい。私の家何個分なんだろ。」

「そんなに言うほど大きいかしら？」

「さあなー…。実花ん家は本宅が地方にあるからこれで驚いてたら腰抜かすよ、和。」

「は？家をそんなに何個も持つてどうすんの？」

「それは俺も知らないけど。」

「私も訊かれてもわからないわ。」

『金持ちって…』

和はひとつため息をこぼしつつ

屋敷ともいえるような広さの家を改めて見上げる。

しかし確かに、ずいぶんと近代的な様相をしているな、と和は思う。

どこかのデザイナーズマンションか？とも思わず

白を基調とした家全体はなんとも不思議な形をしており

真ん中が弧を描くようにぐにゃん、と丸まっていた。

ちらりと横を見れば正門とは違う方向に駐車場のようなものがある。

『ガレージ専用の門なのか、あつちは…』

うわあ、となんともいえない気分になりつつも、
和は促されるままに実花と遙の後ろに立って家の中へと
足を踏み入れたのだった。

「三橋さん！…いやね、いないのかしら？
昼ごろには帰るって言うておいたのに。」

土曜日の昼日中。

いつもならばまったりと読書でもしている時間だ。
和は今更ながら失ったひとつの楽しみに思いを馳せる。

「お嬢様、申し訳ございません！」

ぱたぱたと足早に、奥からひとりの女性が現れた。
どうやらこの家の家政婦さんのようである。

年の頃は50代といったところであろうか？
少し恰幅のいいその女性は、
いかにも優しそうな雰囲気醸し出していた。

少し急ぎすぎたのか、足がもつれそうになっているようにあり
実花は三橋の傍へと駆け寄っていく。

「いいのよ、そんなに慌てなくとも。
でもあなたが出迎えに遅れるなんて珍しいわね。」
「それがその…」

言いかけて、遙と和の存在に気付いたのだろう。
三橋は慌てて口を閉ざす。

「お客様も一緒なのでしたらそうおっしゃってくださればよろしいのに！」

お嬢様も人が悪いですわ。まあまあ、とんだ粗相をしてしまいました！」

その狼狽ぶりに、和はなんとも申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

自分が来ることは伏せておいてくれと頼んだのは和自身なのである。

「あの、おかまいなく。こっちこそ連絡もなしに訪ねてしまっくてごめんなさい。

マナー違反でしたよね。」

「まあそんな、とんでもございません！お嬢様のご学友でいらっしやいますか？」

こちらにお嬢様のお客様が来られるのなんていつ振りでございますよ！」

「三橋さん、俺は？」

「あらまあ、遙様いらっしやってたんですか、おほほ。」

親し気な三橋と遙を他所に、和はしばし考え込んでいた。

『ごがくゆう…ご学友か。』

聞き慣れない単語にいささか漢字変換が遅れた和は
やっとその意味するところを理解すれば
心の中でうなずいた。

「ああ、前の学校は腹の探りあいで大変だったって愚痴ってたっけね、実花ちゃん？こっちはまだお友達呼んでないんだ？」

和の歯に衣着せぬ物言いに、三橋が目を剥いてぎよっとする。しかしそれに特には何も反応せずに、実花が和を肘で小突いた。

「もう、和さんたら！お父様がいつも癩癩を起こすからそれ所じゃないのよ。私だって招待したいのは山々なのだけれど。」

「ああーそっか、それもそうだねえ。
つてわけで、ええと三橋さん。その癩癩持ちの実花ちゃんのお父様に会いにきたんですよ私。通してもらってかまいませんかね？」

和のその言葉に、三橋はさらに狼狽する。
どうしたらいいのかわからないようだ。

「あの、それでしたら旦那様にお声をかけてまいります。
その間、あちらでお待ちいただけますか？」

只今お茶を用意してこさせますので…」

その言葉に和は首を振る。

冷静になっっている状態ではどんな相手といえども大人。
一家を支える立派な主なのである。

どんな材料を用意しても、
論破されてしまつかもしれないという懸念を感じたからこそ、
なにも向こうに準備させる暇を与えなかったのだ。

和が訪問するというイレギュラーな事態に
せいぜい慌てふためき隙を見せてもらいたい、と
少しでも勝算を高くしたい和が考えたひとつの策だった。

「許可がいただけないのならこちらから伺います。

実花ちゃん、案内してもらえる？」

「ええ、こつちよ。」

「お嬢様！お待ちください、旦那様は…！！」

「わかっているわ、どうせまた暴れているのでしょ？」

「最近私が訪ねる直前はいつもそうなもの。いいのよそれで。」

「ですが！」

「お母様はどちら？一緒にのかしら。」

「いいえ、奥様は…お嬢様のお好きな甘味を直接買ってきてと

おっしゃいまして…家を空けておいでです。」

「あらそれは楽しみね。和さんにも是非後で食べていただきましょ
う。」

「お嬢様、ですから…せめて奥様がお戻りになるまでお待ちに。」

「三橋さん。あなたにお咎めがいかないようにきちんと措置を取ります。」

「だから心配しないでちょうだい。」

「そういう事ではございません！実花お嬢様！！」

その剣幕に和は苦笑いをしつつ

ドラマでもみているみたいだなあ、などと

今の状況をまるで物語を見るかのような目でみつめれば
ふと隣に立つ遙に視線を向ける。

すると遙はふ、と微笑んで、そつと和の左手を包み込んだ。

それが一気に和を現実へと引き戻せば

和は嬉しさにじわじわと心が染みていくのを感じる。

『私にとって、和泉君に触れる事は現実なんだ。』

やっと慣れてきた彼とのスキンシップに
しかしそれを彼に知られてしまっってはきつと大変だ、などと
呑気に考える。

「私ね、困るんですよ。」

「は？」

和の発せられた言葉に、その意味がわからずに
三橋が少し間の抜けた声をあげる。
それに和はふ、と軽く息を吐いた。

「ふたりの婚約を正式に発表されたら困っちゃうんです。ね、和泉君。」

その和の言葉に、無言で遙は微笑めば、
次にはつないだままのその手を持ち上げて
和の手の甲に軽く触れるだけのキスを落とした。

「うーわー、恥つず。」

「いや、そこで冷静になるのやめてよ。」

ば、とその手を和が離れたものの、

三橋はその一部始終を目撃すればかん、と口をあけていた。

「ね、和さんはね、部外者じゃないのよ。」

お父様は書齋よね？ふたりとも、こちらにいらして。」

三橋はわけがわからずに、固まっただまま
止めることもなく三人を見送ってしまった。

自分の記憶する限りでは、
実花はずっと遙との結婚を望んでいた。
それなのにここ最近になってそれを拒むようになり、
両親はおるか幼き頃から実花の面倒をみていた三橋さえ
戸惑いを隠せなかったのだ。

男として好きなのではなく、兄として慕っている。
そのことによく気付いたのだ、と
両親や三橋の前で打ち明けられたとき
ああ、ふたり揃っての晴れ姿を見ることはもう出来なくなってしま
ったのか、
と落ち込んだ。

しかし遙への執着は異常であると、どこか三橋は感じていて
それが無くなったのをどこか喜ぶ自分がいたのも事実だ。

だからというわけでもないが、実花の幸せを願うのならば、
何も言わずに味方になろうと心に誓いはしたものの
この状況には些かついていけない。

一体どういうことなのか。
なぜ遙の恋人が、実花と仲良くこの家を訪れたのであろうか。
もしやすべて彼女を慮っての行動だったのだらうか。

しかし、三橋が記憶する限りの実花は
横柄ではないものの、純粋な我侭を押し通す
良くも悪くも無垢なお嬢様であった。

そんな彼女が誰かを思いやって欲しいものを手放すとは考えにくい。
それともなにか、彼女に変化をもたらす出来事が起こったのだらう
か？

確かに、近頃の実花はどこかが違っていて
具体的には言えないが、全体的に柔らかな雰囲気になっていると感じた。

だとすれば、

その心の変化に応じて遙への恋心もかたちをかえたという事なのだろうか。

しかしなにがきっかけで？

『…あの方がお嬢様を変えてくださったのかしら？』

先程の和と話しているときの実花の嬉しそうな顔が

三橋の頭に浮かび上がる。

ぼんやりとそんな事を考え込めば、

すっかり自分が職務を放棄しているのに気が付いた。

しかしもう、三橋は書齋に向かう三人を止めようなどとは思わない。

むしろ、どこか期待をしている自分を感じれば

少し自嘲してもうすぐ帰ってくる女主人を出迎えようと動き出した。

「…大丈夫？あの、三橋さん。」

「ええ、お母様にも執り成していただくわ。」

お父様は普段こそ当然然していらっしやるけれど、

本気で怒るお母様にはいつだって勝ったことがないのですもの。」

「え、じゃあ、お母さん説得したほうが早かったんじゃないじゃあ。」

「それは…難しいわ。今回に限ってお父様は頑固すぎるし。」

お母様も何も言わないという事は…完全にお父様に反対しては

いらつしやらないのよ。」

実花の言葉に、和はなるほど、とうなずく。

確かに話を聞いている限りではお父さんよりもお母さんを陥落させる
ほうが

ある意味難しそうだ。

それならばある程度父親を切り崩してしまったほうがいいだろう。

『中ボスってとこかなー。実はラスボスはお母さんなわけだ。』

頭の中でそんなことを思いつつ、

いまだゲーム感覚が抜け切らない自分に渴を入れた。

失敗すれば、ふたりの人生が台無しになる。

それだけは避けなければならぬと感じれば

ある一定の緊張が和を包み込んだ。

「…ここよ。外まで声がもれてるわ、恥ずかしい。」

「なんか怒鳴ってるね。」

「誰かと会話していらつしやるのかしら?」

「うーん、どうなんだろうね?まあとりあえず行くところか?」

その言葉に、遙と実花がうなずけば、書斎の重厚な扉が開かれた。

第四十七話「攻略（松永家の場合）・その1」（後書き）

お気に入り登録が100件になりました！
本当にほんとうにありがとうございます。

記念として、和と遥の文化祭直後の小話を
ブログにて書き下ろさせていただきました。
そちらも読んでいただけましたら幸いです。

第四十八話「攻略（松永家の場合）・その2」

入ってすぐ、ものすごい剣幕で相手に怒鳴り込んでいるその様子に和はまじまじと珍しいものを見るかのようにみつめていた。

『うわー過保護な金持ちパパのデフォルトのようだ。』

恰幅のいいその体格は、

美味しいものを食べてこうなりました、と物語っているかのようで頭は少し薄くなっており、

逆に豊かな口髭は頭に植毛出来たら良いのに、などとなんとも失礼な事を和は考えていた。

一見なんの変哲も無い格好であるにも関わらず

ちらりと見えるネクタイやベルトが、なんとも高級そうであると和の目からも感じられた。

Yシャツにネクタイそれに、Vネックで袖なしのセーターを合わせて下は深緑のスラックスを着ていた。

足元に輝く黒の革靴も、いかにも値打ち物っぽい。

なんとなく、制服姿でここを訪れたのだが

そうして正解だったかもしれない、と今更ながらに思った。ちなみに眼鏡と髪も標準装備で

今日は学校関係者からすぐに笹森和だと悟られる格好になっている。

実花は父親が40、母親が35の時に出来た子どもだと言っていた。という事は、この目の前にいる男性は今56歳ということか。

ふむふむ、と和が頭の中で逡巡していれば
前に立つ実花が声をあげた。

「お父様、只今戻りました。」

「おお、実花！」

「ごめんなさい、お話中だったかしら。」

「かまわん、相手は君の父親だからな。ああ、実花が来たから一端切る。」

遥をちらりと見てそう告げれば、がちゃん、と手元の受話器を置く。
どうやら遥の父親と話をしていたようだ。

ということは婚約相手の父親に対して憤慨していたということか。
和はちら、と遥を見れば、遥は呆れたようにため息を吐いている。
そう珍しい光景ではないらしい。

遥の表情がまたか…と如実に語っているかのようにだったからである。

「しかし遥君はいいとして、そちらのお嬢さんはどなたかね？」

「お父様、紹介します。笹森和さん。今の学校で出来た最初のお友達なの。」

年上だからどちらかといえばお姉さんみたいな存在かしら？」

照れてはにかむような表情をする実花を視界にうつせば

和は悶えそうになるのをこらえる。

「実花ちゃん、超萌える。」

「和、やめて、その眩きはやめて。」

遥とひっそりと馬鹿馬鹿しいやり取りをしたあと、
和はぺこ、とお辞儀をする。

「どうも、笹森和です。遥君と同じ高校二年生です。実花さんとは親しくさせて頂いてます。」

「おお、これはこれは！」

どうやらみつともない所をお見せしてしまったようだ。ようこそおいでくださった！実花の父の晴臣はるおみです。」

その言葉に実花の父は破顔し、席を立って

和の傍近くまで歩けば握手を求めて手をさしだした。

一瞬迷うが、和はその手を取りにつこりと微笑んで

晴臣の手が離れない内に、口を開いた。

「今日はお願いがありこちらにうかがいました。」

その言葉に、晴臣の顔が笑みから一点怪訝な表情へと変わる。

警戒心を抱いたのか素早く和の手から自身の手を離れた。

その様子に、和は胸中でほくそ笑む。

癩癩持ちらしいが、大方の予想通りずいぶんと

感情が表に出やすいようだ。

こういう人間は挑発にも乗りやすいし、和の最も得意とする相手でもある。

とにかく考える間を与えずに、

こちらのペースに引きずり込むのが得策であろう。

そう考えれば、和は変化球を投げることもなく

ストレートに晴臣の目をみて不敵に微笑んで見せれば

本題をずば、と言い放った。

「実花さんと遥君の婚約を、取り下げてください。」

これは遥君の恋人である私含め、ここにいる三人の心からの希望です。」

和のその言葉を、理解出来なかったのだろう。
しばらくその意味を頭の中で反芻したのか
きよろきよろと忙しくなく目玉を動かしたかと思えば、
晴臣は次にはその恰幅のいい身体を戦慄かせ、
顔を真っ赤に染め上げればか、と目を見開いた。

「さては貴様のせいかな!？」

貴様のせいで、ふたりは婚約を取り消したいなどと!?!」
「ア、貴様?」

目をひん剥いて激昂しながら和に指を差す。

その態度と発せられた貴様という言葉が許せなかったのだろう。
遙は思い切りドスの利いた声を出せば、

晴臣の間近まで寄りメンチを切る不良よろしく
その額を晴臣にこすり付けた。

「おじさんさあ、和を侮辱する言葉一回でも吐いたら許さないよ?」

「は、遙君!?! きみは!?! 娘に手をだしておきながら!
恥ずかしくないのか!?!」

「あー!?! それね。………実花ちゃん、和泉君に席を外してもらおう
か?」

「いいえ、かまわないわ。私のしでかした事だもの。」
「そう??! 本当に良いんだね?」

和の再度の問いかけに、実花はこくり、とうなずいた。
それを確認して和も実花の瞳をみてうなずく。

「ちよつと、和泉君、ハウス。」

「和、犬扱いはやめてよ……」

「なんだ、君は失礼じゃないのかね?」

「えーとそれは、誰に対して？」

「恋人に不遜な物言いをして！」

何よりも私は彼と話の途中だ！部外者は口出ししないでもらおう！」

その言葉に、和はすう、と目を細める。

空気が冷えるのを感じれば、遥はすす、と一步退いた。

晴臣といえば、なぜか年甲斐もなく

娘とほぼ同い年の小娘に一瞬でも気圧される感覚を味わい、
なんとも情けない衝動に駆られて齒噛みする。

「部外者ってさー、オジサン。私は和泉遥の恋人なんですよ？」

恋人が勝手に婚約しようとしているのに止めないでどうします。

普通止めるでしょ？

別に私は彼と遊びのつもりで付き合ってるんじゃないんですから。
当然でしょう。」

和の言葉に、晴臣は一呼吸おき、自分を冷静に保つように努めれば
目の前の少女を見やりゆつくりと口を開いた。

「…君は、知っていたのか？実花が、婚約者がいることを。」

「いいえ。その変態色情魔が教えてくれなかったもんですから。」

「和限定だけどね。」

「遥、その付け足しは微妙じゃないかしら…。」

晴臣は考え込むようにしばらく顎に手をやれば
ふう、とひとつ息を吐いた。

「可哀想に、君は遥君に弄ばれたというわけか。

こんな所にまで連れて来て、遥君も人が悪いね。

この私に、慰謝料を肩代わりしろというわけだろうか？」

「お父様、あんまりだわ！」

実花が赤くなつて声を出し、
遙がまた晴臣に近付こうとするが、
和はそれを腕をあげて制す。

そうしてにま、と微笑めば

「そうです。」

と言い切った。

実花と遙は元より、

発信源の晴臣でさえ驚愕に固まっている。

和は噴出しそうになるのをこらえつつ

嫌な笑みをたたえたまま晴臣を見つめた。

「ま、慰謝料つつーのは違いますけどねー。正当な請求書ですよ。
その前にまず、さっきの訂正してもらえませんか？」

和泉君、実花ちゃんに手なんか出してないですから。」

その言葉に覚醒した晴臣は

和に怒鳴り込むように近付いた。

「何を言っている！」

娘ははつきりと妊娠したかもしれないと言ったんだ！！」

「お父様、あれは嘘だと言ったはずですよ！」

「いいんだ実花。なにも恥ずかしがる事はない。」

遙君は責任逃れをしたいのだからうがそうはいかん。」

「お父様……」

何度言っても聞いてくれない、とは実花から説明されていたがここまでとは。

呆れと驚きを抱きつつ、和は娘の肩に手を置く晴臣を冷やかにみつめた。

「ありえないです。」

「君は、娘を侮辱するつもりか!？」

「侮辱う？娘の言葉の都合良い所だけ切り取って成長を阻むひとが何を言いますかい。」

「小娘が!!！」

「実花ちゃん、処女ですよ。」

和の元にまたも向かってこようとす晴臣に

淡々とした声で和が言い放せば、その場がしんと静まり返る。静寂を破ったのは、晴臣の震えるような声だった。

「…なんと?」

「だから、実花ちゃん、処女。」

それはどうやら怒りだったようだ。

顔を赤らめて今にも怒鳴りそうな自分を抑えているようで全身を震わせながら晴臣が言葉を紡いでいく。

「どこにそんな証拠があるっていうんだ?」

「今はないですけど。」

必要ならば、と実花ちゃん自身が検診を受けると言っています。病院に行けば、処女かそうではないか調べられますから。」

「そんな事を、娘にやれと言つのか!？」

「おじさん!!!!」

瞬間、和は晴臣の胸倉をつかみその顔を睨みつけた。
晴臣は驚いて一瞬たじろぐ。

「そこまで追い詰めたのは自分自身だつて気付かない？

あんたが実花ちゃんと言葉を信じないから

そんな事言い出したんだよ。

あんたの娘はね、和泉遥欲しさに妊娠したと狂言したんだよ。
いいかげんその事実を認めな！」

「な…!!」

ぱ、とその手を離し和は遥のほうを見やる。

「そしてそこまで実花ちゃんを追い詰めたのは和泉君だよ。

彼女の好きだという気持ちも、婚約話もまるで本気にしなかった。
だからこういうツケが今回つてきてる。

でもその根本の原因はね、あなたですよ。

娘可愛さに叱ることもしなければ我慢さえさせない。

彼女が我侭放題に人を傷つけるのもこれじゃ仕方ない。」

「実花は良い子だ！私の自慢の娘だぞ!!」

「良くも悪くも純粹に育ってくれたからね。それは同意するけど。

傷つけられる痛みを知らなきゃ、人を傷つけてもそれがわからない
でしょ？」

「私の、育て方が悪いとでも？

子どもを産んだこともない君になにがわかる!？」

その物言いに、和はけるり、と言い放つ。

「そりゃあ、ごもつとも。

すいませんね、こんな小娘に説教できる事なんかありませんけど。

私もこんな事言いに来たんじゃないんですよ。

話がどうもそれちゃってー、もうオジサンがきかんぼつだから。」

あっはっは、と明るく笑う和に

晴臣はなんともいえない頭痛を覚えれば額に手を当てうなりだす。

その様子に、実花はぼかん、と口を開き、一言すごい、と呟いた。遙は、聴こえたその言葉に嘖出す。

「お父様が押されてるわ。」

「おじさんてけっこう力技でいくところあるからな。」

うちの親父もそうだけど和もああいうタイプ得意そうだな。」

「でも今回はおじさまの事も無視しようとしてたみたいじゃない？」

「そうそう。それで面倒がっちゃってさあ。」

自分の時いた種なんだし自分でどうにかしろって言われちゃって。」

「それで彼女に頼むって所が情けないわね、遙は。」

「…まあ、自分でもそう思うけどな。」

ふたりを他所に、和と晴臣の攻防はどんどん続いていく。

「とりあえず見てもらいたいものがあるんですよ。」

えーと、パソコンありますか？

デスクトップでもノートでもどっちでもいいですけど。」

「ノートパソコンなら机の上にあるが…なんだね、一体？」

「まあまあ、見てからですよそれは。」

和が記憶媒体を取り出して晴臣が起動させたノートパソコンに繋げれば、

そこにはとある映像が映し出された。

「これは…」

そこには廊下で実花が不特定多数の女子を罵っている姿が映し出されており、

遙がそれをたしなめる画が目の前にあった。

「この周りを囲んでる女の子達ね、特になにかしたわけじゃないんです。」

和泉君てあの通りの見た目でしよう？

だから女の子の目をひくんですよ。それが気に入らなかつたんでしようねえ。

それからほどなくして、彼女は嫌がらせを受けますようになります。」

「な、どういう事だ!？」

「まあ、端的に言ってしまうえば、いじめ、のようなものですね。けれど今回の場合、彼女の自業自得な部分は大きいです。」

悪戯に周りの反感を買って、それを反省しようとしなかった。

そりゃあ噛み付かれたら誰だって怒りますからねえ。」

「この、怒鳴っているのが本当に実花なのか？」

「まあ信じる信じないは自由ですけど。」

それからこれが、嫌がらせの証拠です。」

一応、これらの品物はこちらで保管してる状態です。」

次に映し出された映像に晴臣はパソコンを抱え込んで凝視する。

それは無残にも引き裂かれた体操服や、傷つけられた教科書、

その他様々なものが被害に遭っていた。

「実花、なぜ言わなかつたんだ!？」

「それは、和さんが新品に取り替えていてくれたから気付かなかつたの。」

「え…？」

「勝手ながら、私がそうさせていただきました。ちなみにこのあと、ついに呼び出しをくらって

体育倉庫に閉じ込められそうになる実花ちゃん映像があるんですが見ます？」

私が助けに入ってるので実質的な被害はありませんが。

そのときの彼女の第一声はなぜ犯人を逃がしたんだ、というものでした。」

「逃がした？」

「ええ、彼女達に二度と嫌がらせをしないと誓わせた上で。

こちらにはこれだけ証拠がありますからね。

余程の事がない限り繰り返すようなことはしないでしよう。」

「確かにそうだ…それでもなぜ逃がしたのか、と娘は言ったのか？」

その言葉に、和はこくり、とうなずいた。

彼女が第三者にどういう風に接していたのか、

晴臣はどうやら全く知らなかったようである。

これは幸いであった。

かなりの衝撃を受けているようである。

「…続きはけっこうだ。それで？」

青い顔で弱弱しく訊ねる晴臣に和はある物を取り出す。

「ちなみに、これがそのときかかった費用です。所謂、立替代金ですけど。」

ばさ、と書斎机に領収書を投げて置く。

これは遙も実花も知らされていなかったらしく目を見開いている。

「全額請求させていただいてかまいませんか？
もちろん不正にかさ増しなんてしてませんよ。」

こちらの証拠と照らし合わせていただければわかるでしょう。
それでも信用できないとおっしゃるならば、お手上げですが。」

「君は…ここにこの領収書の束を届けに来たのかね？」

「まあそれもあるっちゃありますけど。」

あくまでも私がお願いしたいのは、ふたりの婚約解消です。」

「それは、君が決める事なのか？」

「いいえ。もちろん、」

和泉君が私を好きではないと言うのなら私は身を引きます。
最終的な決断はふたりにしか出来ません。そうでしょう？」

その言葉に、晴臣は書斎の椅子に力なく背中をあずければ
ひとつ息を吐く。

「よもや、私を脅す気ではあるまいね？」

「あれ、ばれちゃいました？」

そうです、どうしても許してくれないときは、そう考えてます。

これだけばっちり顔が映ってますからね。

それなりに有名な会社の可愛いひとり娘です。

世界的に有名な動画サイトにでも流せば、

とんでもなく愉快な事になるとは思いませんか？

癩癩持ちの我俣お嬢様、とか言われて叩かれたりとか。」

「…っとうせ、これ以外にもデータはあるんだろう？」

「ええ、もちろん。」

「……君のような、売女にひっかかるなど、遥君も馬鹿な男だ！」

「おじさん、いいかげんにしろよ。」

「そうよお父様！本来なら私達ふたりで解決しなきゃいけない事を

和さんはこうして出向いてくれたのよ！

私はもう遙を好きじゃないの！兄のように慕っていると

何度も言ったのに、それを聞いてくださらないのはお父様じゃない

！

「どうして突然そんな事を言ったんだ！

どうせこの女に脅されているんだろう！？」

だから解消したいなど言い出したに決まってる！」

「お父様！和さんはそんなことしないわ！！」

「今してるじゃないか！！」

目の前の光景がなんとも阿呆らしく思えて

和はため息を吐いた。

「それで？聞いてもらえるんですか。」

「…私がこれを君の言い値で買い取るといったら？」

「欲しいのはお金ではありません、彼です。」

「……………いいだろう。」

娘の名誉にはかえられん。…すまないな、実花。」

「お父様、確かに婚約解消してただけなのは嬉しいです。

でも、和さんも、こんなのは嫌だわ！

お父様に誤解されたままでは…！！」

「うーんでもさ、実花ちゃん。信じてもらえないのも無理ないって。

実際こんな事しちゃってるわけだしさ、

私も実花ちゃんのお父さんだったらなんで突然って思うもん。

いいんだって。解決すればなんだって。」

「和、俺だってこんな嫌だよ。

最後の手段だつて言ったじゃないか！」

「だって思いのほかきかんぼうなんだもん。」

「…それやめてくれんかね。」

大の大人にきかんぼうはない。
晴臣のうなり声に、和は小さく謝罪する。

しかし、と晴臣自身、腑に落ちないものをどこか感じる。
今まで冷静になれなかったが、逆にこの状況は
晴臣の目を広くうつしていた。

娘は心底、婚約解消を望んでいるに違いない。
けれどその理由はどうしたってわからない。
他に好いた男が出来たとか、そういった事ならば
わかりやすかったのに、そうではないという。
それならば今回のような事が起こったと仮定したほうが
単純でわかりやすい。
だからこそ納得しようとは思ったが。

「…君は、よくわからんな。」

「そうですね？」

「なぜ実花を助けてくれた？」

「うーん、和泉君のため、ですかね？」

「遥君の？」

「まあいいじゃないですか。」

とにかく婚約の正式発表はしないとすれば
私は不満はありませんから。」

その言葉に、とうとう実花が我慢できなくなったのか
憤慨して大声をあげた。

「よくないわ！ちつともよくない！遥、和さん押さえつけて！！」

「は？いきなり何言って」

「いいから！和さんの為よ、早くして頂戴！」

「あ、ああ。」

勢いに吞まれて遙は実花の言うとおりに和を押さえつける。といても和はぼかん、と不思議そうな顔をしていただけで実花がなにをしようとしているのか理解できないらしい。

しかし、次の言葉で和は察する。

「お父様もこれをみれば、

和さんがどんなに素晴らしいひとかわかるはずよ！

言うておくけれど、やらせでもなんでもないんだから！」

そう、実花は、遙の目の前であの映像を流そうとしているのだ。

和は慌てて実花を止めようと暴れだしたが

遙が力を込めてそれを押さえつける。

「実花ちゃん、やめてって！いいんだってば！！

やめて！和泉君、実花ちゃん止めて、止めてよ！！！」

和の剣幕に、遙は不思議そうに首を傾げるも

和を拘束から解こうとはしない。

その間にも動画は再生され、音声だけが遙の耳に届く。

実花を助けたあとのあの啖呵。

去ったはずのファンクラブの彼女達はちゃっかり撮っていたらしく

和はもらった映像をみて頭を抱えた。

実花とふたりでチェックしていたので、

そのことを実花も知っているのである。

「やー！聞いちゃ駄目！

せめて和泉君が外に出てええええ！！！！！」

ぎゃあぎゃああと喚く和のその言葉に
遙はその動画がなんなのか気になり、思わず和の口をその手で
おさえる。

「んー！んんんん！ー！」

「ごめんね和。あとでいっぱい苦情はきくからね。」

「むーむー！ー！」

何度も首を振っても、困ったような顔をするだけで
遙はその腕をまったくゆるめる気配がない。

『ガァン！ー！』

けたたましいその音の意味を察すれば、

和は目の前が真っ暗になる。

羞恥を通り越して、和の中にあるのは絶望だ。

だから自分を記録するところくなことがないのだ、と
和が心の中で呟けば、

書斎は今や痛いほどの静寂に包まれていたのであった。

第四十九話「攻略（松永家の場合）・その3」

『関係ねえと思ったよ。アンタの気持ちを無視し続けた遙を最低だとも。』

いつかの会話がついに始まった。
つい数週間程前の話だ。

そのときの自分の声を客観的に聞くことになるなんて拷問もいいところである。

晴臣の反応は、と思ったが、

ノートパソコンに阻まれてその表情をうかがうことはできない。
いつそ停止ボタンを押してくれればいいのに。

そう思っても、動画はどんどん先へと続いていき
和の怒鳴り声はなおも書齋に響き渡っている。

『好きな男が、不幸になるの黙って見ていられる程私はお人好しじゃない。』

あんなに辛そうにしてるのに、そんな顔させてんのに、
まだ泣いて縋るためーに、腹が立ってしゃーねえんだよ。』

その瞬間、

遙の腕が、ゆるゆると滑り落ちていくのがわかった。

どうやらあまりの内容に驚いて和を拘束する余裕もないらしい。

『私は、あなたがそこから成長しない限り彼を実花ちゃんに任せるつもりはない。』

いつか和泉君が壊れてしまう前に、彼を取り戻す。でも……』

ブツ！

強硬手段に出た和は、
データが壊れる事も厭わずに記憶媒体をノートパソコンから
ひっこめいた。

「ああ、和さんてばなにをするの!？」

「拷問以外のなにものでもないでしょうが!!
なんつーことをするんだ君はああああ!!!!」

顔を真つ赤にしながら叫ぶ和に

実花はなにが恥ずかしいものかと反論する。

しかし遥を使つて彼女を止めた以上、

実花は和がこれを恥とすると知っているようだったし
それならば実花だって少なからずこの言葉の数々を
恥ずかしいと感じているのではないのだろうか？

その点を指摘すれば、実花は口を尖らせた。

「だって和さんてとつても照れ屋なんですもの!
だから熱烈な愛の告白を遥に知られるのはきつと
嫌がるかしらと思つて…」

「やめんかこのオオオオ!!!!」

天然爆弾はなんという破壊力なのだろうか。

「もう!ひよつとしたらデータは無事かもしれないわ!
最後までお父様に観て頂かなくちゃ!」

「な、馬鹿!そんな事嫌に決まってるでしょうが!

この天然お嬢様め!純粹培養め!!」

「悪口なのかそうじゃないのかわからない、わ！」

わ！の所で実花が和に飛び掛り記憶媒体を奪取しようとするも和が高々とそれを持ち上げて阻止する。

周りが見えなくなつたふたりは、必死で書斎中を駆けずり回っていた。

「…実花。」

その様子をぼんやりとながめる晴臣の傍らに
気付けば遙が立っていた。

「おじさん。あんな実花、見たことないでしょ？」

学校では普通の姿になつてきたんですよ、あれ。」

「……………公立では色々と危険ではないかと懸念していたが、娘は、楽しくやっているようだね。」

「例の嫌がらせも、やったのはクラスの外の人間でクラスメイト達はむしろ実花を心配してくれてたよ。」

友達もできて、最近は放課後に色々な所で遊んでるみたい。」

「そうか。あの子が…実花の世界を広げてくれたのか。」

「おじさん。俺からもお願いします。」

婚約の件、白紙にしてくれませんか？

このままじゃ、実花が不幸になるだけだ。」

「……………。」

恐らく、もう晴臣の中ではそうしたほうがいいのだろうとどこかで納得しているのだろう。

それでも、やはり理解ができなかった。

16年間好きだと言いつけた相手が実はそうではなかったと今になってそんな事を言うのは何故なのだろうかと。

目の前の娘をながめて、思う。

まだまだ子どもだ。そんな細かい心の機微を自身で判断できるのだらうか？

いつかまた、遙がやっぱり好きだと泣きはしないのか。

そのとき娘の傍に彼がいないという事実は残酷でありはしないか？

溺愛するからこそ、彼は迷う。結論を言い淀む。

「あなた、まだ迷っておいでなの？」

実花と和の騒がしい声が
静かで凜とした音にかき消された。

和と実花がぴた、と動きを止めて書斎の扉を見れば
そこには一国の女王とでも呼べるかのような
年齢不詳の女性が立っていた。

とても若くも見えるし、子どもがいると言われても納得できそうな
どこか厳しさと優しさを併せ持つ雰囲気があるそこにはあって
和はあまりのオーラにその身を強張らせた。
そして瞬時に思う。

駄目だ、
と。

彼女には敵わない。

自分の得意とする戦法どれもが弾かれてしまったらう。

このひとを説得するとか、

そういうことは無理だと和は早々に敗北を認める。

しかしその顔は、実花にそっくりである。
実花に人生を重ねた美しさが備われれば、きっとああなるのだろう。
二重の大きな瞳といい、形の良い唇といい、
どこもかしこも実花にうりふたつである。

この場合、実花が彼女に似ているわけであるが。
唯一遺伝していないのは、髪だろうか。

実花はゆるやかなウェーブがかかった髪質だが
母親はストレートのようだ。

父親の髪がどこか癖っ毛なのでそちらの遺伝なのだろう。

『しかし実花ちゃん、いいとこばっかもらってんのね。』

覚醒した和は、なんとも無遠慮な視線を向けていたと気付けば
慌ててそれを失礼にならない程度に抑えた。

そのとき、実花がぱ、と笑いながら女性に駆け寄った。

「お母様、お帰りなさい。」

「あら、私の台詞をわたくしとられてしまったわね。

「ごめんなさいね、可愛い愛娘の出迎えに間に合わないなんて。」

「そんな、御気になさらないで。」

家を出てあの部屋で暮らしているのは私の我侭です。」

「まあまあ、あなたからそんな言葉を聞くことになるなんて…
これもそちらにいらっしやるお嬢さんのお陰かしら？」

そうして向けられた視線に和は心が跳ねた。

それでも、表に出そうとしないのは、ある種の癖である。

第一印象で相手に怯えを悟られるのはなんとなく許せない。

向こうがそれをすべて察していたとしても
せめて平静を装えたという事実くらいはもらって帰りたいという、
低いのか高いのかわからない和のプライドであった。

「留守の所を勝手にお邪魔して申し訳ありません。笹森和です。」

頭を下げて、まあ一応、ともいえるべく挨拶をする。

しかしこういう席はとんと体験したことがない。

ボキャブラリーが本頼みであるが大丈夫だろうか。

『ぶつちやけ正しい敬語は使えてないし。』

そんなことを薄ぼんやり思いつつも

晴臣にした無礼の数々を反芻すれば今更か、と考えを改めた。

そう開きなおってしまえば、緊張もどこか和らいでいく。

実花の母親は、和の言葉に破顔すれば、まあまあ、と弾んだ声をあげる。

「とても真摯なご挨拶ですこと。きつとご両親の教育がよろしいの
ね。」

私は実花の母の絹江きぬえです。どうぞよろしく。」

「いえいえ！ぶつちやけ礼儀作法はきちんと教育された覚えありませんから。」

一般家庭のそれなんてたかが知れてますよ。」

そんな適当感が漂う挨拶に過分な言葉をもらえば、

和はあまりの居た堪れなさに日本人の哀しい性よろしく

謙遜（とも言い切れないが）しつっ慌てて手を左右にぶんぶんと振った。

その砕けた物言いが珍しかったのか
目を丸くした絹江は、とても楽しそうに、うふふ、と笑った。

「あなたのお話は実花から良く聞いておりましたの。

是非一度お会いしたいと思っていたから、とても嬉しいわ。

よろしければご一緒にお茶を召し上がってくださいさらないかしら。

おいしい和菓子があるの。甘いものは好き？」

にっこりと微笑まれ、傍近くまで寄った絹江は

和の背中にそ、と手を添えれば、和を書斎の外へ促す。

その意味するところはなんなのか、和は逡巡した。

まだ迷っているのか、という出会い頭の台詞。

さつき自分にくれた言葉。

それらを思えば、和はにっこりと微笑んだ。

「ありがとうございます、大好きです。」

「あら、それは良かったわ。実花が昔から好きなお店のお菓子なの
よ。」

三橋さんに言ってお茶を入れてもらいましょう。」

ふたりの様子に慌てた実花を、遥がぼん、と頭を撫でてあやす。

「遥……？」

「良かったな実花。助かったよ俺達。」

「え？」

怪訝そうな顔を実花が遥に向けても、遥はなにとも言わない。

「あら、遙君いらしてたの？」

「…おばさん、それはないよ。」

「あまりにも違和感がないのだから、嫌だわ。」

いるならそうおっしゃって。もちろんあなたの分もありますよ。」

「わー嬉しいな。」

「和泉君、棒読み。」

ふ、と笑って和がつっこめば、遙は和に微笑んだ。

その笑みがなんとも色んな意味を含んでいる気がしてしまい
和はなんとなく身を強張らせる。

『さっきの…そういえばどう思ったんだろっ。』

一瞬忘れていたが、ほぼすべて聞かれてしまったのだ。
今更ながら逃げ出してしまいたい。

「待ちなさい！話はまだ終わってないぞ、絹江！！
勝手なことをするんじゃない！！」

我に返ったのか、慌てて椅子から立ち上がった晴臣は
真っ赤な顔をして声を張り上げる。

「あなた、どういっておつもりですか。」

お客様の前でそんなに声を高く上げるなんてはしたない。
和さんに失礼だわ。ごめんなさいね？」

「いえ、とんでもないです。」

むしろあれがデフォルトなのかと思ってるくらいなんで。」

にへら、と後半余計だったなーと思いつつ和が笑えば、

言葉の意味を絹江は理解できなかったのだろう。のほほん、とした顔で首を傾げる。その顔は51歳とは思えぬほどに愛らしい。

「無礼はその娘も同じだろう！」

「激しく同意します。おあいこですね？」

にや、と黒く微笑めば、晴臣は一步退いた。人のこと散々言ってくれたからなあ。

売女発言は心のメモリーにしっかり記録したぞこのヤロウ。

「なんですか、よそさまの子どもにもみつともない。

自分の娘と同じ歳頃の女の子をつかまえてその娘だなんて。

あなたの言葉は実花を傷つけているも同然ですわ。」

「絹江！」

「先程の意味を理解できていないのならば、はっきりと申し上げます。

ふたりの婚約は白紙に戻します。これは決定事項です、いいですね？」

きっぱりとしたその物言いに、晴臣のどこかが爆発したらしい。

どずどすと騒々しい音をあげつつ、こちらに早足で近付いてくる。

「なんの権限があつてそんな事をする！

お前は娘の幸せを願っていないのか!？」

「願うからこそ、です。あなただつておわかりでしょう。

実花さんと遥君はお互いに恋していません。

そんな状態でどうして婚約なんてできましょう?。」

「なぜわかる!？」

「娘の成長が、あなたの想像の範疇を越えてしまったからって

無理矢理その規格に押し込めようとするのはおよしなさい。
それこそ娘の幸せを願いこそすれ、
鳥かごに閉じ込めてしまつてどうします？」

ひとつひとつの言葉が、じわじわと心に染みていく。
母親の言葉は説得力がまるで違うと感じれば
やっぱりこのひとはすごい人なんだな、と確信した。

しかしそこで、ふいに疑問を感じる。

『なんで実花ちゃん、我侘放題に育っちゃったんだろう？
絹江さんがいれば良い感じにコントロールしてもらえそうなのに。』

ちら、と実花に視線を向ければ、

両親のやりとりをはらはらしつつ見守っていた。

和も、彼女につられてふたりの様子に目を向ける。
考えれば今はけっこう勝負の瀬戸際なのに
なぜかのほほん、とこの場をながめてしまっていた。
絹江が負けるとは思っていないが、少々反省して
真面目に見守ろう、と和は思考を前へと集中させた。

「しかしだな」

「良いですか。傷を知らなければ他人の痛みなんてわかりません。
無菌室で育てれば、実花は傷付かずに済むでしょう。

けれど本当の喜びを知ることもなく一生を終えるでしょう。
あなたはこれまでの人生を厭いますか？

苦労もあり、けれどもだからこそ感じる幸せを
あの子に体験させるのを拒むの？

私はそんな残酷な事を我が子に強いるのは嫌だわ。」

「絹江……私は、」

「私達にできることは、これからのあの子を見守る事です。もしも哀しい事があつたならば慰め、楽しい事があつたならば喜びを分かち合い、間違いを犯してしまつたら一緒に償う。」

何があつても受け止める覚悟を、責任を持つこと。

それが親としての唯一そして最大の義務ではないのかしら。」

絹江が静かに話を終え、美しく微笑めば、

晴臣は大きく息を吐き出した。

「わかつた。…私も親としての責任を果たそう。」

「あなた。」

「遥君、実花。」

晴臣の呼びかけに、ふたりがそろって返事をする。

「婚約は解消しよう。…金輪際ふたりがそつなることはない。」

その言葉に、実花と遥が声をあげて抱き合った。

和も、ほっとして胸をなでおろす。

「和さん、と言つたかな。」

「はい。」

す、と晴臣が和の前に立てば、右手を差し出した。

「これからも、実花と仲良くしてやってくれたまえ。」

「…いいんですか？」

「なんだ、嫌だと言つたらきいてくれるのかね。」

「いえ、くそくらえです。」
「小娘が！」

苦笑する晴臣にむかって、和は満面の笑みで応えれば
力強くその右手を握りしめる。

ふたりが握手を交わす様子を絹江が優しく見守れば
それに気付いた遥がなにを思ったのか
思い切り手刀を繰り出した。

ぺし、と晴臣と和の右手を切り裂けば、
そのまま勢い良く和の腕を引っ張り自身の腕の中へと抱き寄せる。

「ちよつとおじさん、どさくさに紛れて和の手握るとかないよ
いやらしい。」

ぎろ、と晴臣を睨みつけつつ、ぎゅむ、と遥は和を抱きこむ。
その様子に面喰らった晴臣は、固まってぽかん、と口を開けて呆け
ている。

「あらあ、遥君たら噂に違わずの溺愛ぶりねえ。」
「お母様ったら疑っていらしたの？私は嘘は申しませんわ。」
「そうね、実花にもいつかこういうお相手があらわれたら素敵ね。
そのときはきちんとお母様に教えてくださる？」
「ええ、お約束するわ。」

『つーか噂ってどんなんだよ！』

和が声に出せず心の中でつつこむに止めれば
遥に抗議の声をあげた。

「いいかげん離してよ！つつか意味がわからん！
なぜ私は今君に抱きしめられねばならんだ！」

「和の浮気モノ。」

「阿呆！いつつも時と場所と場合を考えろと何度も
言っているのにどうしてそうなんだあんたは！！！」

「えー…さっきの感動のせいでぐちゃぐちゃにしたいの
頑張って我慢してたんだから、もうちょっと。」

『やっぱ原因そつちかああああ！！！！』

ひよつとしたらキスさえされかねない状況に
抵抗なくしばらくこうしてたほうがいいのかと和は悩む。

「遥君…経験上言わせてもらうが、
あまりにも押しが強いと知らない内に逃げられるぞ。」

「それは、おじさんとおばさんの話？」

「とにかく、はなしてやんなさい。」

遥の質問には答えずに呆れつつ晴臣がそう言えば
渋々ながらも遥が和を解放した。

「あ、ありがとうございます…。」
「君もずいぶんと苦労しているようだな。」

絹江、私は書齋で仕事の続きをする。皆はゆっくりしていきなさい。

「わかりました。コーヒーを淹れさせましょうか？」

「いいや、今はいい。欲しくなったら自分で頼むよ。」

「そうですか？あまり根を詰めないようになさって。」

それじゃあ、私達はあちらでお菓子をいただきますしゅっ？」

にっこりと微笑まれて、和含む高校生三人組は
そろそろと絹江のあとに続いていった。

通された客間は、すべてがアンティーク調のつくりで
時計からなにから装飾品すべてが値が張りそうで冷や冷やものであ
る。

座っている一人掛けソファもふかふかで、
なんとも庶民の和は落ち着かない。

「奥様、お茶をお持ちしました。」

「ありがとうございます、三橋さん。」

すべてうまくいったわ。あなたにも心配かけたわね。」

「いいえ、いいえ。本当に良うございました！」

にこにこ微笑みながら三橋が和たちの前にお茶と菓子を置いてい
く。

和菓子はどうやらまんじゅうのようで、和は少し意外だった。

てつきり淒く綺麗な細工のお茶菓子が出てくるのかと思っていたの
だ。

いっしょに用意された緑茶はなんとも良い香りを放っている。

「どうぞ召し上がって。ここの和菓子はどれも美味しいのだけど

実花は特にお饅頭が好物でね、ついこれを買ってしまったわ。」

「嬉しいわ、いただきます。」

実花がにっこりと微笑んで饅頭を口にする。

和も遠慮なくそれを口にすれば、あまりの美味しさに目を丸くした。

『なんだこれ…饅頭…恐ろしい子！』

どうせ口に出しても誰もつつこんでくれないだろうと思いつつ
心の中で呟いてみたが、
よりいっそうの虚しさが和を包んだ。

気を取り直して緑茶をすすり、

和はききたかった質問をぶつけてみることにした。

「あの、個人的な好奇心と言うか疑問というか。

不快に思ったら答えていただけなくてもいいんですけど
ひとつ訊いてもいいですか？」

和が斜め向いに座る絹江をみつめてそう答えれば、
絹江は目を丸くするも、次には優しく微笑んだ。

「私に？ええ、なんでも訊いてくださってけっこうよ。」

その言葉に少しの勇気をもらい、和はゆっくりと口を開いた。

「実花ちゃんが、多少、奔放に育ったっていうのは聞きました。
でも、どうしてですか？」

松永さんみたいなお母さんだったら、さっきの言葉じゃないですけど
実花ちゃんが今日まで無菌状態で育てられたことのほうが疑問です。

「
「あら、それはあなたの目に少しでも私が良い母として
うつってくれたということなのかしら？」

「少しでもなんて。すごく素敵なお母さんだと思います。」

「あなたみたいな方にそんな風におっしゃっていただけるなんて
本当に光栄だわ、ありがとう。」

ふ、と微笑んで、絹江が遠い目をする。
絹江の隣に座る実花が、少し困ったような顔をすれば
やはりあまりきいて良い事ではなかったのだろうか、と心配になっ
た。

しかしそれでも、実花が言葉の続きを引き受けて口を開いた。

「和さん、お母様のせいではないの。」

私ね、お母様と物心つくまであまり接する時間がなかったのよ。」

「え？」

「おばさん、元々身体がそんなに丈夫じゃなくてさ。」

実花を産んでからしばらくはあまり家から出れない生活だったんだ
よ。

入退院を繰り返したり。元気になって普通に生活できるようになっ
たのって

実花が10歳過ぎてからくらいだったんだ。」

「そうだったんですか…。」

「重い病気、というわけではないのよ。」

熱が出やすかったり、身体が疲れやすかったり。

小さい頃に少し無理をして体を鍛えれば良かったのだけれど

私の両親はそれをさせずに私を育ててね。

だからこの歳になって色々な努力をしたわ。

それこそ数々のトレーナーの方についていたりして。」

「今はお元気なのよ。しょっちゅうお出かけしてしまつから

お父様が心配してしまって大変なの。」

「あら、昔の分を取り戻そうと思っただけなのよ。」

あのひとは未だに少し過保護がすぎるのね。」

10歳…

それまでほぼあの父親に育てられたということか。

それならば、とどこか納得してしまう自分が
なんともいえなかった。

「そうだったんですか。」

「ええ、それでも出産に耐えうる体作りを、と頑張ったから
この子が産めたのだし、後悔はもちろんしていないわ。

けれども親としての責務が果たせなかった事実には日々悩んでいたの。
時折、神様は思いも寄らないギフトを授けてくださるわ。

私がしなければならなかったことをあなたが担ってくださった。」

目を細め、愛しむような顔を絹江が和にむける。

その表情に、和は戸惑いつつもどう反応すればいいのかわからない。
絹江はふ、と小さく笑えば深々と頭をさげた。

「本当にありがとうございました。」

あなたのような素晴らしいお嬢さんを

産んで今日まで育ててくださった親御さんにも感謝しています。」

その様子に、和は困ったように頬をかく。

「ええと…私は別に、言いたい事を実花ちゃんに言ったただけですか
ら。」

ていうかなんとも汚い策略にはめっちゃったのも事実ですし、
かかったぶんの費用はきっちり請求させてもらってますんで
そういうのやめてくれませんか？

友だちの親に頭下げられるのとか変でしょう？」

和の言葉に、絹江が頭を上げれば、
もう一度深く微笑んだ。

「和さんは気風の良い方ね。なんだか江戸っ子みたいだね。女性としても素敵だけれどどこか男性的な面もお持ちなのね。これでは遥君も大変だね。男女どちらからも好かれてしまうものね。」

「ええええ？私ぜんぜんモテませんよ!？」

「それは和の自覚がないだけだよ。」

「そこは私も遥に同意するわ。」

たたみかけるように言われて、和がええ、という顔をすれば絹江が声をあげて笑った。

そうしてしばらく談笑していれば、客間の柱時計が鳴り響く音に反応してそちらを見れば、時刻は16時になっていた。

「あら、もうこんな時間なのね。」

「私、そろそろお暇します。」

「えー、和さんいっしょに夕飯食べていっいたらいいじゃない!」

「いやいや、今日は家になんも言っていないからさ。」

ご飯をドタキャンするとあの母は泣くのだよ、さめざめと。

罪悪感がね、ハンパないのさ…。」

「あ、俺もそうします。高明さんに

和を送っていくってメールしちゃってるし。」

「いつの間に!母だけでなく父ともメル友かよ!」

ふたりの言葉に、実花と絹江は残念ね、と声をあげるのでもた来ることを約束すれば笑顔になってくれたのでほっとした。

「駅まで少しあるから、車を使ったほうがいいわ。」

三橋さん、佐山サヤマさんはいらっしやる?」

「はい、奥様。すぐにご用意します。」

「お願いね。」

悪いと言う和をよそに、遙は行為には甘えておけ、と言いつつ、
そういえば来るときも意地で歩いたのであるが
実花がへばって大変だったのを思い出す。

実花はそのまま家に泊まるらしいが

確かにそう近くもない道程を思えばそれもいいか、と考え直した。

帰り際、高級車に和が内心ひいていけば、
絹江に遥のあんな執着ぶりは初めてみた、と耳打ちされ、
和はなんともいえない気分にも包まれたのであった。

乗り込む前に挨拶をしたくて、和が深々と佐山と呼ばれる運転手に
ありがとうございます、よろしくお願いします、と頭を下げれば、
佐山が破顔して車の扉を開けてくれた。

「うわ、す、すいません！恐縮です。」

「和、どっかのサラリーマンみたいだよ？」

「うっせボンボンが。」

「なんでそこで悪態？佐山さんいつもすいません。」

「駅までお願いします。」

「かしこまりました。」

微笑んで一礼すれば、佐山は扉を閉め自身も運転席に乗り込んだ。
別れを告げて駅までの道を走り出し、5分程経った時だった。

ふいに、隣にいる遥が和、と呼ぶので
返事をしようと窓から顔をうつしてふりむけば、
そのまま遥が覆いかぶさってきた。

あまりの出来事にパニックになるも、
暴れて声をあげるのも恥ずかしいと感じれば
和は固まって動けなかった。

運転席と後部座席の間には、さすが高級車といったところか
仕切り板があり、今はそのガラスが上がっている状態なので
運転席からはこちらの様子はうかがえないはずだ。
けれども、いつそれが下げられてしまいかわからないし、
完全に音声が遮断されるもののかもわからない。
だからこそ和は強く抵抗することもできず、遙に口付けを許してし
まった。

「んっ…！」

唇をこじあけるかのように乱暴に遙の舌が入ってくる。
なぜかはわからないが随分と性急に遙は和を求めてくる。
口腔内を蹂躪するその音も、いやにおおきく感じて普段の何倍も心
臓が跳ねた。
唾液を飲み込みきれずに口端からもらせば、
さも当たり前のように遙はいつもそれを舌で舐めとる。
その流れでしばらく下顎をいじめられれば、和はたまらずに声をあ
げた。

「ひゃ、や、だぁ…あっ！」

「和、可愛い。」

ふ、と笑った息ですらも敏感に反応してしまい
和は身体をびくり、と震わせる。
そうしてしばらく下顎と首筋を舌で這いまわり、
時にはちゅ、と音を立てて吸い上げれば、

やっと満足したのか遙は微笑んで顔をあげる。
和は涙目で遙を睨みつけるも、叫んだりしては悟られそう
で無言で抗議の視線を送るくらいしか出来なかった。

駅前に辿り着き、

和と遙が車から降りれば、運転手の佐山がにっこりと微笑んだ。
なんだかいたたまれずに目を逸らすも、

このまま無言で別れるのも失礼だと思い直した。

小さく息を吐き出して和がお礼を言おうと口を開きかけた瞬間、
ものすごい鈍い音が聴こえれば、隣で遙がうめき声をあげている。

遙が佐山に殴られる瞬間を、

和はその目ではっちりと目撃してしまった。

第五十話「攻略・休憩」

目の前で起こっている出来事がどこかスローモーションのように思えて、

和はしばらく動けなかった。

事態を理解したときには、遙が低くうめき声をあげてからだだったが、なんとなく殴られてる彼をみてすっきりしている自分がいる。

それを思うとなんだか素直に助け起こす気になれなくて、

ちら、と殴った人間に視線を向ければ、苦笑ともとれる笑みを返されたので

和はなんとなく過ぎった嫌な予感が的中したのだと考えた。

そう、間違いでなければ

先程の車内での所業のせいで遙は佐山に殴られたのだ。

そう思ったら、和は羞恥心でいっぱいになる。

とはいえまだ確信に至ってはおらず、どういう意図か訊くべきかとも思う。

逡巡して、なんだか面倒臭いという結論を出せば

和は冷ややかに遙を見下ろした。

「…いつまで座ってるの？冷えるよ。痔になるよ。」

「和、ここは大丈夫？って助け起こしてくれる場面じゃないの？」

「ダイジョウブ？」

にっこりと微笑んで、和は遙の手ではなく

胸倉を掴んで半ば無理やり彼を立たせた。

その様子に、殴った佐山が逆に驚いているので

和は失礼だとわかっていつつも噴出してしまった。
佐山は和をしばしみつめれば、静かな声で話し出す。

「どうして殴ったか訊かないんだね。」

「必要性を感じないので。」

「彼氏が目の前で知らない男に殴られたのに？」

「刺されたら訊いたかもしれませんね。」

でも私は清々しい気分なので理由とかどうでも良いです。」

にっこりと微笑んで和が断言すれば、

今度は佐山が笑い出した。

「ちよつと佐山さん、けつこつ本気で殴ったでしょ？」

痛いじゃないですか！」

「ちよつと赤くなつてる程度だから痣にはなんないだろう。」

そのお綺麗な顔に傷が残らないようにはしてやったんだから充分だ。

「

あのね。」

「俺の聖域はな、確かにそういう用途で使うやつもいるけど
ホテル代わりじゃねーんだよ、今度やったら殺すぞ。」

「キスしただけじゃん！」

遥の反論に、今度は和がドス、と鳩尾に一発お見舞いすれば
またも遥が苦しそうな声をあげた。

そんな遥をよそに、和は慌てて佐山に頭を下げる。

「送っていただいたのに不快な思いをさせてしまって
申し訳ありませんでした。」

「いや、君のせいじゃないよ。気にしないで。」

盛ってたのはこいつだからね。」

その言葉に、和は僅か眉をぴくり、と動かしだした。遙も同じだったようで、佐山に不審な目を向けている。

「見えるわけないよな？板上がっつてたし。」

「隙間がちよつとあいてれば声はきこえるだろ。」

音で大体分かるよ。嫌って言われてたし。」

にやにやしなから答えた佐山の目を見て

和は先程の申し訳ない気持ちはどこかに吹き飛んでいった。どう考えてもこの佐山という男はこちら側の人間だ。

『通常の三倍返しリストに入れておこう。』

無表情でそんなことを考えていれば

先程に聞いたばかりの音が耳に確認できて

和はぎよつと目を剥けば大声をあげた。

「和泉君！！」

慌てて遙を止めに入ったがもう遅い。

完全に遙の一発が佐山の顔に直撃していた。

佐山がいつて、と小さい声で呟きながら顔をさする。

必死で和は遙と佐山の間に入るが、

それが気に入らないのか遙は和をひっぱりその腕に抱きこんだ。

「あいつに近付いちゃ駄目。」

…佐山さん、和のあのときの声聴いたんだよね？」

「聴こえたんだよ。」

「和、カッター持ってない？」

不穏な単語に、和は一瞬身を硬くする。

ちら、と腕の中で遙の顔に視線を向ければ恐る恐る声をあげた。

「ある、って言ったらどうすんの？」

「耳を切り落とす。」

「さらっとそういう事を言わないでよ！！」

遙の言葉に、佐山が呆れてため息を吐けば、
ぺし、と遙の額をはたいた。

「そんだけ溺愛してんならあんなこと人前ですんじゃねーよ。
自業自得だばか。」

「佐山さんの目がいやらしいから腹立つんだよ。」

「だって色っぽかったし。」

「和泉君で遊ばないでくださいよ…実害があるのは私です。」

うんざりした顔で和が言えば佐山はふ、と微笑む。

「いやあ、興味深い性格してんなー、和ちゃん。

成人したらお兄さんと付き合わない？」

「あのね、そのテの冗談は俺の前で言わないほうがいいよ、
通じないから。」

「物騒だな。腕っぷしただけならお前のが強そうだしなー。」

体力が落ちてきたおじさんは退散しますか。」

「帰れ、早く。」

「それはないだろ、送ってやったのに。」

ずっと少し痛いくらいに抱きしめられつつ

ふたりのやりとりをずっと見つめれば仲良しさんだな、と和は呑気に思っていた。

「まーいいや。じゃあね、和ちゃん。

遥の相手に疲れたらいつでも呼んで。」

「はあ、恐縮です。」

「…和。」

その物言いがツボに入ったのか、

最後にぶふ、と噴出して佐山は車を走らせて行く。

ふたりはそれを見送った。

「不思議なひとだねえ。親交あるんだ？」

「んー？まあね。運転手としてお世話になってるし

個人的に知り合いだから。歳も近いしね。」

「そうなの？いくつ？」

「24。」

「へー、そうだったんだ。」

にしても、美形の周りには美形ばかり集まるのだろうか。

運転手にしては妙に艶のある雰囲気、佐山は

バーテンダーとかホストとか夜の仕事が似合いそうだ。

黒髪に落ち着いた雰囲気、切れ長の瞳は

どこか大人になった託斗を彷彿とさせる。

それよりも雰囲気は柔らかいし、髪の毛も普通の長さではあったが。

無言になった和になにを思ったのか

遥が突然和の顎をつかめば上向かせる。

嫌な確信を抱いたものの、腕に閉じ込められた和はどうする事も出

来ずに

そのまま遙にキスをされてしまった。

そういえば先程からあまりにも長い間腕に拘束されていたから違和感を忘れていた。

なぜまず最初にここから脱出していなかったのだろうか
和は今更ながらに後悔する。

抗議の声をあげようとすれば、

予想外な遙の鋭い視線に射抜かれて和の口は音を失ってしまう。

「何考えてた？」

「え、」

「佐山さんの事、気になる？」

「まあ、なるっちゃなるけど……」

その言葉に遙の眼光が更に鋭くなったので

和はすべてを察すれば呆れた、という顔をした。

「和泉君、馬鹿じゃないの？」

「俺もそう思うー。」

ぎゅむ、と抱き込まれれば和は慌てて抵抗を示す。

「いいかげん離れてよー!」

「なーんかねえ、わかってるんだけどね。」

なんでこう俺は条件反射のように反応してしまうのか。愛ゆえ？

「知りませんって。」

「あーんな熱烈な愛の告白きたのにね、馬鹿だね。」

その言葉に、和はびし、と固まれば思考を真っ白にした。
遥が和を腕から解放すればするり、と両頬に手の平をあてる。

「…真っ赤。可愛い。」

「…っっ」

さすがに二の句が告げない和は
顔を赤くして睨むくらいしかできない。

しかしそれにもいたたまれずに
遥の手をべり、とはがせば駅改札へと一目散に駆け出した。
結局改札をくぐったところで遥につかまり
にこにこ上機嫌な顔で手をつながれば、
和は無言でそれに従って帰路についた。

「遥君いつも悪いわねー。」
「いや、いつもご馳走になってるのは俺ですから。」

晩御飯の後、遥はすっかり食器を洗う係りになっていた。

和は遙が洗った食器類を拭いて食器棚に収める。
なんとなく最近ではこれがラクで母は遙を呼ぶのではなからうか、と
思うくらいであった。

「和ちゃんもご苦労様。」

「うん。」

「ああそうだ、田舎から送ってもらった柿があるのよー。」

和ちゃん、剥いてお部屋に持っていったら？」

「そうなの？和泉君、柿好き？」

「果物全般苦手じゃないよ。」

「そっか、じゃあ剥くか。お母さんとお父さんは？」

「ありがとう、でも後でいただくから。野菜室に入ってるわ。」

そう言ってお茶をすする母親に和はわかったー、と返事をし
冷蔵庫から柿を取り出せば、

和は軽く水洗いしてスルスルと包丁で柿を剥いていった。

その様子を遙は隣で凝視する。

「……………和って料理出来るの？」

「え？……………」

『し、しまった！！』

言い訳出来ない包丁裁きに和は一瞬固まる。

しかしすぐに和の思考は働けば

なんともみっともない悪あがきを始める。

「…お母さんがけっこう手伝わせるから包丁は使えるけど
私は料理ができるわけではない。」

「……………そうなの？」

「そう。」

「今度依子さんに訊いてみようかなあ……。」

「……！」

その遙の呟きに和は心の中で白旗をあげた。

「言っておくけど！私は恋人における様々な行事を君と

やるつもりはない！！何故ならば面倒臭いから……！」

「ちょ、包丁むけないでよ……！和、お昼のお弁当自分で作ってたの？」

「うるさいな、ほれ上行くよ。」

「へー、やっぱりそうなんだ。」

そこから無言でなにも答えずにふたりは二階にあがっていく。

不穏な様子に両親は訝しがっていたが、それでも何かを言うことはなかった。

私室に着いて卓の上に柿を置けば和は腰掛ける。

遙もそれにならった。

「弁当作れとか言わないでよ。」

「え、今までの不機嫌オーラの原因それ？」

「だって面倒臭いもん、お金もかかるし。なにより時間は有限だし。なにが楽しいのだろう、その行為の。」

和のいかにも嫌そうな反応に遙は苦笑する。

「別にお弁当を作ってくれとは言わないけど、

でも一回くらい和の作ったもの食べてみたいとは思っ。」

「それなんだよ！そこなんだよ……！」

「え？」

「そんでじゃあ、一回なんか作ってあげるーとか言って朝なり昼なり夜なりのご飯を作るとするじゃん。

そしたらさ、まあ私も普通に一定のことは出来るってわかってるし、まずいものは出ないからまずくない限りはまた食べてもいいかなっていう気になるじゃない。」

「はあ、」

「いつしかひとり暮らしの和泉君の世話をするのが自分の役目になっちゃって和泉君もそれが当たり前になっちゃって感謝の気持ちはどんどんなくなっていくわけ。

そんで苛苛して耐えられなくなった私は今後一切作らない宣言をするも

和泉君はそれに謝罪。そしてまた作る、そしてまた謝罪…

その繰り返しになる、いずれ!！」

『ビシッ!！」』

どこかから切れ味鋭い効果音がきこえてきそうだと遥は錯覚する。

微妙に説得力があるような、しかしやはり考えすぎなようなそんなふたつの思いが緋い交ぜになれば遥はどう返答すべきかを迷う。

「相変わらずお前は思考が先へと飛ぶなあ。」

「広未君!！」

扉の前に気が付けば立っていたのは広未だった。あまりにも唐突な訪問に遥は驚きに声をあげるも、和は特段気にする様子もない。

「今回はちよつと遅かつたじゃん、校門の君。」

「お前は本当にわかりやすいな。ほら、これでどうだ。」

「！それ…まさか」

「そう、お前が大好きな和泉昌いずみまさしの今は手に入りにくいとされる初期の短編集だ。もちろん貸すんじゃない、寄贈だ。」

「広未大好きー！」

和が広未に抱きつかん勢いで突進しようとするれば
遙が和の腹部に腕をまわし逆に和を引き寄せた。

ぐん、といきなり後ろにひかれ和はうめき声をあげる。

「げほっ、な、なに！？」

「なに、じゃないよ。」

いくらなんでも大好きの後抱きつこうとするのは駄目ですよ。
彼氏の前ですか普通、そういうことを。」

「そこは俺も同意だ、和。面倒なのはわかるけどな。」

「一言多いなあ、広未君。」

「遙君も、あんまりつかないであげて。」

本当に俺らはそういうの意識下の外だから。」

「うん、わかってるんだけどね。つつい。」

苦笑する男子二名をよそに、和はもう広未の手にもつ本にしか
意識がいつていないようだ。
きらきらとした瞳でそれをみつめている。

「これで今回の件はチャラ、でいいな？」

「ちっ、未来永劫、校門の君と呼んでやろうと思ってたのに。」

「地味にダメージが蓄積されるんだよな、その攻撃。」

「でもま、こんなもの持たされたらね。」

今後一切外部にもらさないといい条件付で呑もうじゃない。」

「言われなくともわかってる。ほら。」

「やったー!!」

広未と和の会話内容がよくわからずに
遥は疑問符だらけの顔をする。

「今回の事って?……あ、もしかして写真?」

「そうそう、察しがいいね。なにか特別な行事にも

和はその記録をおさめるのを極端に嫌がるんだよ。

で、気配を消すのが得意な俺にいつもおじさんとおばさんから
要請がかかる。」

「それって広未君にメリットあるわけ?」

「まあ、写真の出来によつて報酬があるから。」

「え、そんな裏取引が……」

「だからまあ、それ含めこつちの事情知ってるから
和が毎回その直後かなり機嫌が悪くなるんだよ。

それでほつとくと三倍返しの報復が待ってるから、
毎回ご機嫌伺いにこうしてやってくるってわけ。」

「今回の取引材料がその本?」

「そういうこと。」

その言葉に遥と広未が和のほうをみれば、

和はすでに本の世界に取り込まれてしまい

ふたりの会話がきこえていないようだった。

「そんなに面白いの?」

「俺もあの作家は好きだよ。」

初期作品のが今より少しねちっこさがあるけど

それもまた今の作風と比べて読むのが醍醐味だし。

どんな人生送った末にこんな風変わったのかな、とか
考えてみると興味深い。」

「ふうん、そんなもんかー……。」「

「遥君は本読まないの?」

「うーん、全然って言うていいほど読まないかも。」

「漫画はたまーにみたりもするよ。」

「そうなんだ。それで和といっしょにいられるってすごいなやっぱり。」

「夢中になってる和をみるのが好きなんだよ。」

あの空気感、すごい綺麗だと思わない?」

「……………ふうん、わからなくもないけど、そこまで魅力にも感じない。」

「そっか、…やっぱそこが和をそういう意味で好きかそうじゃないかの

違いなのかなー。」

「どうだろう。趣味が合いすぎるのも案外良くないのかもしれないし。」

「そんなもんなのかなー…。」

そんな会話をしばしかわしつつ、広未は退散していった。

どうやら用事はそれだけだったようだ。

和が広未の不在に気が付いたのは、それから10分程してからだった。

「あれ、帰ったんだ。……………ってごめん、暇だったでしょ!??」

「ふうん?ずっと和のことながめてたから。」

「……………そう?」

「うん。」

ここにこしなから遥がそう応えるので、

和も安心して笑い返した。
しかしつくづく不思議なひとだ。
自分の本を読んでいる姿なんてどこが面白いのだろう。

そのとき、遥の携帯電話がうなり、
ポケットからそれを取り出せば遥はしばらく電話を持って固まっていた。

「どうしたの？出ていいよ。」

「ごめんね。」

ため息を吐いて心底嫌そうな顔をしつつ遥が電話にでる。
今まで、電話がかかってきてあんな嫌そうにしている姿を
みたことがあっただろうか？

「もしもし、どこって…別にいいだろどこだって。

は？知らないよ！

なんでそんな四六時中、実花といっしょにいなきゃいけないんだよ
！」

『……………！！！！』

電話相手はどうやら怒鳴っているようだ。
わからないが、女性のような声がする。

「だから父さんから聞いてないの？婚約解消だって、
元々口約束だけでしてなかったも同然なんだから問題ないだろ。
は？だから同意の上だって！松永のおじさんおばさんも承諾してく
れたって！」

自分で電話して確かめたんだろう！？だから…うるさいな！

そうヒステリックに怒鳴らなくても聞こえてるよ。父さんは？いな

いの？」

『……………』

「ああ、父さん？うん、どうなってるの？は？」

「いや今更なに言ってるんだよ、そんなまぜっかえすような真似…それはわかってるけど…だから元々そっち帰ってもいいって。だってそれ持ち出して言ってるんでしょ？」

「…じゃあどうしろって…は？いや、ちょっと待てよ…！」

『……………』

「…っクソ親父！切りやがった…！」

電話が終わったの遥の剣幕に和は若干の嫌な予感がする。どうやら最初の相手が母、後半が父のようだった。

「…和泉君、どうしたの？」

「ごめんなんか、みっともないとこみせちゃって。」

「いや、もっとみっともないところも見てるから、今更。」

「……………和、フォローになってない。」

「あはは、ごめんごめん。で、どうしたの？」

笑って和が向かいに座る遥に寄り添って頭を撫でてやる。それに遥が不機嫌そうな顔をしつつも受け入れれば遥は和を抱きこんだ。

「…ごめん、まさかそうなるとは。」

「……………お母さん、なんて？」

「婚約解消は許さない、実花が可哀想だつて。」

「ああ、予想通りだね、大体。」

「…で、父さんがね……………」

「うん？」

遥が盛大なため息を吐いて和を抱きしめる腕に
いつそうの力をこめる。

「いつまでも押し問答するより、恋人に家に来てもらえって。」
「……………」

やっぱりか、と和は心の中で遥よりも大きなため息を吐いた気にな
った。

第五十一話「攻略（和泉家の場合）・その1」

「それでお宅訪問かー。いつ？」

「次の土曜日。」

「で、和が面倒臭そうな顔してんのはわかるとして…
遥君はなんでそんな不機嫌なの？」

遥と和が上から元々は柿があつた空のお皿を下げに
リビングへとやってきたときだ。

なんともいえない雰囲気、高明と依子が何事かと問えば
今度そろって遥の実家に赴くのだという。

それで和はこんなにかにも面倒という
顔をしているのだとわかったが、
どうにも遥のほうに腑に落ちない。

それは依子も同じのようで、
ぽやん、とした顔に疑問符を浮かべている。

「知らない、なんかずつとこうなの。」

私が行くのがどうも嫌みたい。」

「え、……遥君、娘を弄ぶ気？」

「和ちゃんをご両親に紹介したくないって事なのかしら？」

高明と依子のただならぬ空気に

遥は慌てて否定する。

「違います！そうじゃないんです、そうではなくて。」

……うちの母、実花の事えらく気に入ってたんですよ。」

「実花っていうと、さつき言ってた幼馴染の子？」

「和で言つと広未君みたいなものかしらねえ。」

「そうですね、実の妹みたいな感じですよ。」

うなずいて、少しためらいがちに遥は続きを話す。

「母は、将来、実花が義理の娘になる事を強く望んでいたんです。

だから結婚させようと躍起になっていたというか……

今回、俺が和と付き合つてるとこのことを知って、

なんというか、和が気に入らない、みたいで……。」

高明と依子はその言葉に目を丸くする。

「会つてもいない内からそれは……厳しそうよねえ。」

「自分の子どもの連れて来る相手可愛がるなんて簡単なのになあ……。」

「

『それはどうだろう……。』

遥からすれば、高明はなんとも異質であると感じていた。

普通、娘の男親というものは

連れて来た彼氏に少なからず良くない感情を抱くものではないだろうか。

和の家族は、遥の目からすればなんともおおらか過ぎる、

それこそ将来付き合つていく中で居心地が良すぎるくらいの家ではないかと感じていた。

「……私、いびられるって事だよね？」

「あの、和、ごめんね？なるべく俺が守るから「馬鹿じゃないの？」

遮るように言われた言葉に、遙は固まる。

怒っているだろうか。

彼女は、自分に今どんな感情を抱いているのだろうか。

なんだか確かめるのが怖くて、恐る恐る俯く和をうかがった。

「矢面に立つたらより一層攻撃されるに決まってるじゃん！

だから男ってさー。つうか板ばさみになるよ、耐えられる？

言ってもお母さんだからさ、辛いんじゃない。」

「和…でも」

言いかけたところで、和の顔がなんとも違和感に包まれている事に気が付いた。

自分の目がおかしくなっていないのだとすれば、

彼女はなんともいえないにやにやとした笑いを顔いっぱいたたえている。

「和ちゃん、あんまりやり過ぎちゃうと二度と敷居をまたがせてもらえなくなっちゃうわよお？」

「そつだぞ、せめて三倍返しを一倍返しくらいにしておけて。」

「えーでもさ、年齢重ねた分けっこうツボを心得たねちっこい嫌がらせがくるんじゃないのー？」

「だからこそよー、三倍返しなんてしたら心臓発作で

遙君のお母様、お倒れになっちゃうかもしれないわ。」

「それは自業自得じゃん？」

「だから、やりすぎて思われない程度に手加減しろっつうの。」

「オヤジ、言葉遣いは年齢相応に。」

この一家は、なにを言っているのだろうか。

目の前で繰り広げられる物騒な会話に

遥は固まっていた。

しかしなんとか覚醒を果たせば、
慌てて遥は和に話しかける。

「え、和、あのさ、ちょっと確認いい？」

「うん、どうぞ。」

「怒ったり、落ち込んだり、してない？」

「したほうが良かった？」

「いや、全然。」

「なら良かった。」

にっこりと和が微笑む。

遥はその笑顔に、じわじわと心の底から
ひとつの感情が沸いてくるのを感じる。

それは、喜びだった。

遥はたまらなくなり、和をぎゅむ、と抱きしめる。

「ちよ、和泉君!？」

「…俺の恋人は最強だね。」

「……ああ、ごめん、私が怖がるか思ってた？」

「というか、面倒臭いと愛想尽かされるかなって。」

「ああ、あんまりひどいと考えるけど。」

「ええとそれは…どうだろう。」

「それよりさ、和泉君はいいの？」

お母さんに私がやり返しちゃっても。」

和の言葉に、抱きついていていた遥がゆるゆると離れて

椅子に座りなおせば、先程の和と同じような笑みを作った。

「好きにしてくれてかまわないよ。」

その言葉に、和がなんともいえないきらきらした目をするので、遥はぶは、と噴出した。

「和…か、可愛い。」

くつくつ笑いながら頭を撫でられて、和はわけがわからずに口を尖らせた。

「なんでそうなのさー。まあいいや」

実の息子からお許しも出たし、我慢はせんでいい、と。」

「遥君、あんまり暴走しそうなら止めてあげてね?」

「俺らもたまに怖くなる時あるから。」

「…は、はい。」

あまりにも高明と依子に念押しをされるので

遥は一体今までどんな事してきたのだろう、と

和の歴史を知りたくなつたのだった。

しかし、このとき和はまだ知らない。

遥の不機嫌の本当の理由が、別にあるということ。

実花の家からおおよそ歩いて10分の所に
遥の家はあった。

和泉家と松永家の仲が今のようになつたきっかけは、
同じ頃に出来た子どもだった。

体力作りのためにと

近所を散歩していた絹江と、買い物へと家を出た遥の母が
本当に偶然ばったり出くわした。

お互いに人目で身重だとわかったふたりが
そこから意気投合するのは早かった。

お互いの子どもとの性別が違つとわかれば
夢見がちな遥の母は

大きくなつたら結婚させよう、などと言い出す。

思えば遥と実花の婚約は、生まれる前から
決まっていたのかもしれない、

遥の母の思い入れはそれ程までに強い。

「落ち着きなさい、香苗^{かなえ}。」

室内を右往左往する自分の妻に半ば呆れたような声をあげる。

「私は落ち着いているわ！
というか昌あきひさんが落ち着きすぎなのよ！」

声をかけられた香苗は、ソファに座り新聞を読む夫を
ぎっ！と睨みつける。

しかしそれにひとつのため息で応えただけで
昌はそれからも言わなかった。

『実花ちゃんはあるなに遙が好きだと言っていたのに…
どこの馬の骨とも知れない女と付き合い始めるなんて！』

我が家は松永家ほどの資産もないし
代々伝わる立派な家柄というわけではない。

しかし、世間からすれば
お金持ちだと言われる部類に入る。

その上、息子の遙は母である自分が言うのも難だが
超が付くほどのいい男だ。

きつと遙の外面に惚れて、
しつこく付き纏っているだけに違いない。

そんな女に和泉家の長男をくれてやるものか。

意気込んで、香苗は両の拳に力を入れた。

そのときだ。

呼び鈴が家全体に響き渡り
家政婦を務める滝山たきやまが玄関へと歩く音がする。

それと同時に、バサリ、と新聞を置いた音がすれば隣に夫である昌が立っていた。

「来たか。」

「そうね…楽しみだわ。」

「あんまり虐めるんじゃないぞ。」

「し、しないわ。」

慌ててそう口にするも、香苗の心は裏腹だった。

「ザ・日本家屋だね。」

「まあね、父さんの趣味らしいけど。」

「ふーん…あ、誰か来たっぽい。」

「多分、滝山さんじゃないかなー。」

「え、それはお手伝いさんのあれ？」

「実花の家と違ってうちは滝山さんひとりしかいないからね。運転手とかもいるわけじゃないし。」

「いや、きいてないけど。」

目が金持ちめ、って言ってる、と指摘されれば

和は否定しなかった。

やがて、滝山と呼ばれる人物が扉を開きやってきた。
三橋さんと印象が似ている。
家政婦の人というのは、こういうものなのだろうか？

「遙様、お帰りなさいませ。」

「うん。滝山さんもこき使われてない？」

「まあま、おほほ。香苗様も昌様も相変わらずお優しいですよ。」

快活に笑う滝山という女性は
三橋よりも改まっていない分、和は親しみが持てた。
なんとなくだが、実花の家よりも敷居は高くないと感じる。

「あの、こちらの方が…？」

「うん、そう。笹森和さん。可愛いでしょ？」

「ちよっ！やめてくんない出会い頭に！！」

「あらあら、仲がよろしいんですねえ。」

手のかかるお坊ちやまですけど、よろしくお願い致しますね。」

「あ、それはもう痛感しているので大丈夫です。」

こちらこそ、よろしく願います、笹森和です。

えーとこれは…滝山さんにお渡しした方がいいですか？」

そういつて差し出されたのはお土産の箱。

中に入ってるのはケーキだ。

遙に両親の好みを訊いたところ、

ふたりそろってチーズケーキが好きだというので

和が知っている中でいちばん気に入っているものを用意したのだ。

「まあ、わざわざありがとうございます！」

ささどうぞ、お入りになつてくださいますし。」

「ありがと、滝山さん。和、いこう。」

「うん。お邪魔します。」

家政婦にも冷たくあしらわれるのではないかと

少し警戒心を抱いていたのだが、どうやらそれは杞憂であったようである。

和はにやついてしまいそうな頬を叱咤し、

魔王城（勝手に命名）へと足を踏み入れた。

「遙、お帰りなさい！まったくあなたは最近ちつとも帰らないで。」

「母さんのせいでしょ？」

「まあ、あなたはなんてこと言うのー！」

「まあまあ。遙、今日はゆっくりしていきなさい。」

「うん、ありがと。」

一通り遙と両親が挨拶を済ませれば、

遙は振り返って和の事を先程のように紹介する。

一歩下がっていた和を、遙がそつとその背中を押した。

ちら、と遙を見れば微笑まれるので

和は視線を前へと向ける。

目の前には、最終形態のボスふたりが立っていた。

「ようこそ、いらっしやい。」

「初めまして、お会いできて嬉しいわ。」

にっこりと微笑んで遙の両親が出迎える。
流石にこの顔が無駄に良い男を作った両親だ。

遙の両親共に二重で、
父親に至ってはなんともいえない妖艶なオーラを放っている。
サラサラな黒髪は遙のそれと同じで
顔はそこまで似てはいないが、
父親といえばそうだろうと誰もがうなずく。

なんとというか、遙の発する特別なオーラが
この男からも出ているのだ。
遙ほどに人目につかない顔つきであるはずなのに
それ以上のなにかを感じさせる。

一方の母親は、綺麗で可愛いというのは
こういうことだろう、というものを具現化したような存在だった。
遙の目鼻立ちは彼女をベースとしていて
唯一の違いである母親の髪は、遙と違って少し茶色がかった。
その漂わせる雰囲気と髪を父親からもらっている。
つまりは最高傑作だ。

『つか、若いな。思ったよりも。うちの両親よりちよい下か？』

和の両親も、第一子である彩を産んだのが早かった為
他の年代の親と比べるとやや若い。
だが遙が第一子ということもあり、
和の両親よりも幾分か若いのだろうと思われた。
父親はそうでもないが、特に母からは
なんとも幼い印象を感じた。

短い間に色々なことを逡巡しつつ、
和はお返しに微笑んでお辞儀をする。

「笹森和です、本日はお招きいただきありがとうございます。」

事情も込みこみで知っている為、

和にとってこの言葉はある種の嫌味である。

要約すればテメーらの揉め事に巻き込むんじゃないや、だ。

和の言葉に、反応したのは昌だった。

小さくだがくす、という声がきこえてきて

和がそれに視線をやれば、昌が失礼、と面白そうに声をあげた。

『ほー、これはこれは…。』

どうやら和のメッセージを寸分違わず受け取ったようである。

ひよっとすると遥の父は、和と似た種類の人間なのかもしれない。

「遥の父の昌です、お噂はかねがね。よろしく、和さん。」

「はい、よろしく願います。」

軽くお辞儀をされたので、和ももう一度小さく礼をした。

そうして和は、横にいる人物にそろり、と視線を向ければ

遥の母はにっこりと微笑んだ。

「母の香苗です。今日はゆっくりして行ってね。」

そうしてす、と日本人にしては珍しく右手を差し出されたので

和はならって自身の右手を差し出す。

握手が交わされると思ったそのとき。

ひどい圧迫感を覚えて、和は香苗をみつめれば
香苗は静かに微笑んでいた。

しかし、瞳の奥はなんともぎらついた炎を宿している。

『わかりやすいっつーか…』

どす黒い感情が和の中で広がれば、
香苗に負けない程の満面の笑みをして
和はその手を負けじと強く握り返した。

「きゃっ!?!」

パシッ!と思いつき切り手が払いのけられ
香苗が一步後ずさる。

『えー、自分から仕掛けておいてつまらん。』

香苗の様子に、隣に立つ昌がどうしたんだ?と話しかける。
が、その合間にこちらに投げかける視線が
表現するのは難しいが、苦笑いをその瞳で表している、といった風
情で

和もお返しに、いえいえこちらこそ、と目で会話を試みる。

「あの、どうかなさいました?ご気分でも…。」

いかにも心配気な顔をして和が香苗の傍近くへ寄れば
香苗が一瞬和を睨んだ。

「いえ、ごめんなさい、ちょっと

急に手が痛くなつてしまつて。病気がしら？」

「あらそれはそれは。救急車をお呼びしましょうか？」

「い、いえ、そこまでは結構よ。ご心配してくださつてありがとうございます。どうぞお上がりになつて？」

引き攣つた笑みで香苗がふたりを招き入れる。

ふたりが後ろを向いたその隙に、

背後から遥が顔を寄せて和に囁いた。

「和、手は大丈夫？」

「握力あんまないんだね、お母さん。」

ぼそり、と呟かれた遥の言葉に和は小さくこたえる。

遥が実際の苦笑いを浮かべるので和も実際に微笑んでみせた。

「それで…ふたりは、恋人同士なんですつて？」

客間へと通され、ソファに腰を下ろした四人の中で

まず口を開いたのは香苗だった。

「そつだよ、何度も言つただらう？」

「……その。言い難いんだけど、

和さんはどこまでご存知なのかしら？」

その言葉に、和はびくり、と反応する。

さて、どう答えたものだらうか。

和はにつこりと微笑んで、向かいに座る香苗に口を開く。

「すみません、それはどういった意味合いでしょうか？」

「今日、なぜ呼ばれたのか、とか。」

「遥君からは、付き合ってる人間がいるならば連れて来なさいとご両親に言われたとうかがっています。」

これは嘘は言っていない。

真実、遥からはそういう風に切り出されたのだから。

「そう、そうなの。」

遥、和さんにきちんとお話してあげるべきじゃないかしら？」

「なにをだよ。」

もったいつけるようなその表情に

和は噴出しそうになるのをこらえた。

しかしさすがに今そんな反応をしてしまうわけにはいかない。攻撃らしい攻撃なぞ、まだ受けていないも同然なのだから。

「いいえ、そうね…あなたの言っている事は間違っていないのだしね。」

確かにあなたがどういった方が知りたかったわけだし…」

チラチラと無遠慮な視線を向けられる。

和は心の中で失礼なひとだな、と思いつつ

その視線に満面の笑みで返してやる。

するとはつきりと睨むような視線を送っていたにも関わらず

和がまったく意に介さない様子なので

香苗はきつと和を鈍い女だと思ったのだろう。

嘲笑めいたものをこぼす。

和はあまりにも素直な向こうの反応に

背筋がぞくぞくしてくるのがわかった。
なんなら今、最高に楽しくて仕方がない。

「私も、彼に言われてとても嬉しかったです。
ご両親に紹介してもらえるなんて。」

はにかむように笑って遙に顔を向ければ
遙の同じように笑いを返す。

さすがに遙も、普段は喜怒哀楽が激しいが
元来へたなわけではないのだろう。

なんと面皮が厚いものだ。

「そうねえ……」

お相手のご両親に気に入られればそれは……
嬉しい事なのでしょうけれどね。」

「え？」

「ああ、あなたがわざわざ買ってきてくださった

お土産があるんだったわね？

滝山さんが遅いのはそのせいかしら？

ちょっと見てきましょう。失礼。」

そう言っつて、香苗が部屋をあとにする。

しばらくして、足音が消えたのを確認した時だ。

ばん！というソファを叩く音が二箇所からきこえれば、
こらえきれずにあげられた笑い声までも同じタイミングで響き渡っ
た。

「あーはははは！もう、もう、だめええええ！……」

「あの、あの香苗の顔！あははははは！……」

笑い転げる自分の父親と恋人に、遙はひとり固まれば
次には盛大なため息を吐いた。

「ちよつとふたりとも。あんまり声大きいときこえるよ。」

「つうか父さんはともかく和よくこの場面で笑おうと思ったな。」

笑いすぎて少しむせつつ涙目になっている和の背中を
呆れながらも遙がさする。

「ありがと…いやー、ずいぶんと気が合いますね、おじさん。」

「いやまったく…あ、名前がかまわないよ、いっそお父さんでも。」

「昌さん、それは抵抗あります。ぶふふっ…」

「残念だなー、君が遙と結婚したらさぞ楽しいだろうに、くく…。」

ふたりの会話を呆れながらもおとなしく聞いていた遙の双眸が
そのとき怪しい色を宿した。

「…和、父さんの事はアツサリ名前で呼ぶんだ。」

その低い声に、和が隣をみれば

なんとも怖い顔をした遙が肘掛に寄りかかり頬杖をついていた。

『あー…名前、相変わらず鬼門なわけね。』

遙は、告白した時からずいぶんと呼び名にこだわる。

思えば和に大きくその存在を示したきっかけも

何度抗議しても頑なに遙が名を呼び続けた事だった気がする。

そこからどんどん厄介な相手だという思いは強くなって

今現在でもある意味それは変わらない。

和とて、特別な時に彼を下で呼ぶ癖があるわけで、遥同様にそういった意識があるのは否定しないがあくまでもふたりの間のことであって、特に他の誰かを名前で呼んだ所で特別な意味を含むわけもない。ましてや相手は遥の父親だ。

「和泉君だって私の両親の事、名前で呼ぶじゃん。」

「俺は和の事も和って呼ぶからいいの。」

「何それ…だって和泉さんと和泉君じゃ紛らわしいじゃない。」

「だったら俺の事を名前で呼べばいいじゃないか！」

「それはちょっと。」

「和！」

自分の息子とその彼女とのやり取りを目の前にしばらくぼかん、とながめていた昌は、またこらえきれずに噴出した。

「は、遥……」

肩を震わせて笑いながら名前を呼ばれ遥が不機嫌な顔で昌を振り返る。

「そんな姿、初めて見たなあ。」

「俺も、父さんがそこまで笑ってる姿あんま見たことないよ。」

「昔から、何かに執着する事はなかったな、遥は。」

「…元々備わってる能力のせいもあるんだろうし、環境もかな。」

目を細めて遥を見つめるその姿に、

和は、父親の瞳をしているな、と胸の奥がじんとなる。

「和さん。」

「は、はい。」

真剣なその表情に和は姿勢を正せば

その様子に昌がふ、と優しく微笑んだ。

「多分、すごく色々と迷惑をかけているだろうけど
これからも出来れば捨てないであげてくれるかな？」

恐らく君がいないと遥はまともに生きていけないだろうから。」

「ちよ、父さん。」

「なんだ、間違った事言ったか？」

あまりの物言いに遥が抗議の意を示すも

悪戯っぽい父親のその表情に、遥はぐ、と何も言えなくなってしま
う。

「…多分、私がきっかけで別れる事はないと思いますから。」

「それは…遥を大切に思ってくれてるからかな？」

和は少し逡巡すれば、にっこりと微笑んだ。

「それもありますけど、別れ話を切り出す程の体力ないので。」

ね？と和が遥をみて笑えば、遥は咳き込んだ。

その様子を見て、昌はまた声高く笑ったのであった。

第五十二話「攻略（和泉家の場合）・その2」

それにしても、お茶を用意するには
少々時間がかかっている気がする。

和はちら、と腕時計をながめれば

香苗が退出してからもう10分近く経過していた。

ひょっとしてなにかしでかしているのでは？

頭の中でどうしてもそういう思考が働いてしまえば
和はなんとなくうずうずしてきてしまう。

「和泉君、遅くない？香苗さん。」

「ああ…そう言われたら。」

「私、ちよつと見てきちゃだめ？」

きらきらした瞳でそう申し出てこられて

遙がそれを否定できようか。

小さくうめき声をあげたあと、

ここを右に出てまっすぐ行った突き当たりだよ、

と言えば和はありがとう、と笑った。

昌にも一声かけて和は退出する。

「いやあー、本当、面白い子をつかまえたな。」

「…別に面白いから付き合いたくなっただんじやないけどね。」

「そうか。」

「そつだよ？」

息子の言葉にどこか嬉しさが滲んで、昌は微笑む。
なんとなく身体がむずむずした感覚になれば、

遥は和が早く戻ってこないだろうかと思つてしまった。

会話が途切れたとき、言つておきたかったことを思い出し、遥が短く声をあげれば、昌がどうしたのかと問いかけた。

「あのさ、ちよつと父さんに頼みがあるんだけど。」

「頼み？珍しいな、なんだ？」

「んー、あの……………」

言い淀む息子の様子に一瞬どうしたのかと不安になるも、その内容を訊けば昌はまた大笑いしたくなつたが、遥の真剣な表情になんとか思いとどまつた。

言われた通りに和が歩いていけば、

着いた先がどうにも騒がしい。

キッチンの前で先程の滝山と香苗がなにやら言い争っている。

「だから、これは駄目にしてしまったといつことでもいいでしょう。」

「そんな奥様。きつと遥様にお聞きした上でこれを

ご用意してくださつたんですよ、素敵なお嬢さんじゃございませんか？」

「そうかしら？とぼけた顔してずいぶんとしたたかのように、
なんだか私は気に入らないわ。

とにかくそれは食べたくないから、他のものを用意してちょうだい。

「

会話を聞くくらいしかできなかったが

どうやら和が持ってきたお土産でもめているようだ。

さて、どうしたものか。

逡巡し、ここでガチンコバトルをしてもいいが

しばらく遊ぶのもいいかもしれない、などと

和は考えた。

思いのほか早く懐いてくれた実花は、

前のように和を罵倒しなくなった。

それはもちろん嬉しかったのだが、

密かに実花語録なるものを作りたいと思っていた和は
些か残念だったのだ。

しかし、ばつちり嫌われている遙の母親になら

いつかすごい事を言われるかもしれないと考えれば

和は不快になるよりもわくわく感のが勝った。

基本的に、和は得体の知れない怒りを向けられること以外に

あまり恐怖を感じない。

理解の範疇を越える事こそ、和の最も苦手とするものであり

そつでない相手の感情が透けて見える状態では

特に傷付く自分ではなかった。

好いた恋人の親に嫌われるという事は、

考えれば大抵の人間が落ちこむものかもしれない。

けれども、無駄な努力はあまり好きにはなれない。
嫌われてる相手に好かれようと思うほど
和はお人好しでもないし

遥の母親だからといってまったくの他人である香苗に
嫌われたとて和の感情は揺れはしない。

結婚となったら色々大変なのかもしれないが
そうなったらそのとき考えればいいわけだし、
どんないびりを受けようともそれを迎え撃つ気概があるし
むしろ勝負好きな和はそれらを好む傾向さえある。

なにより面倒になっただらその時は
原因である遥に押し付けてしまえばいいとさえ、
和は思っているのだから。

『まあ、板ばさみって辛いだろうけどね。』

なるべくそうはならないように一応は気をつけよう。

そう思いつつ、和はとりあえず退散する事にしたのだった。

「あれ、お帰り。」

「ただいまー。うふふふ、面白い奥様ですね！」

「そつでしよう、私はあれといると一生飽きる事はないんですよ。」
にっこりと昌に微笑まれて

このひとも歪みねえな！などと和が心でつつこみを入れる。
しかしそれもきかれてしまっているような気がして
和はなんだか恥ずかしくなって少し顔を赤らめた。

しかし何を勘違いしたのか、
遥は和のその反応に不機嫌なオーラが全開になる。

無言で遥が隣に座った和をひっぱり寄せ、
自身の片足にその身体を座らせれば、遥はそのまま腰に両腕をまわし
和が逃げられないようにがちりと押さえ込んでしまった。
当然ながらその状態に和は狼狽する。

「ちょっと、離してよ。」

「なんで？」

「なんでがなんで!？」

焦りで頭がいつぱいになっている和は
いつものように相手を論破することも忘れてしまつ。
なによりもこうなってしまう遥は
いつもの和に翻弄されるヘタレではなくなってしまうのだ。

「遥、さすがに離してやったらどうだ。」

「父さんには関係ない。」

「あんな：香苗が戻ってきたらさすがにまずいだらう。」

「そつだよ！きつと怒鳴られるって!」

どんな反応が待っているか若干の興味はあるものの、
ここで展開が激化してしまえば

真綿で首を締めるかのようなじわじわとした攻防が
一気に楽しめなくなってしまう。
なにより、付け入る隙がまだある今ならば
相手の懐に入りやすくもあるが
ヒステリーを起こした女性を説き伏せるのは
時間も労力もそれなりに必要だ。
和は出来ればそうなってほしくないと思っていた。

「父さんに見られるのが嫌だからじゃないの？」
「は？そりゃ他人にこんな所見せる趣味ないけども。」
「そういう意味じゃないんだけどなあ。」
「いやとりあえず離してよ！いいかげん常識を学んでよ！！」
「じゃ、好きって言って。」

自分を拘束する遥の口から信じられない言葉が飛び出して
和は一瞬固まった。

「……今、なんと。」
「好きって言うてくれたら離す。あ、いつもみたいに名前で呼んで
ね。」
そういうときは和、遥って呼んでくれるでしょ？」

につこりと微笑んで遥がまたも非常識極まりない事を言うので
和は顔に熱が点るのを感じた。
何より、自分の親の前でこの男はなにを言っているのだろうか。
反応が怖くて昌のほうを見ることが出来ない。
鏡で見れるわけではないが、絶対に今、顔が赤い。
そう思えば思うほど、和は真っ赤になっていく。

その様子に、遥が最後のとどめを刺した。

「真つ赤。可愛い。」

ちゅ、というリップ音と共に、頬になにかが触れた。

あまり大きな声をあげないようにと
気を配っていたのにも拘わらず、
ついに和は憤怒の大声をあげていた。

「いい加減にしろ、このオールシーズン発情期がああああ！！！！」
「和限定。」

「そのセツトみたいに言う文句も腹立つんじゃああああ！！！！」

なんとか拘束から抜け出そうと
ぐいぐい遥の肩や頭を押してみたり、腕をほどこうと引っ張るも
あまりの強さにびくともしない。

『ガシヤガシヤァー』

めちやくちゃに暴れてやろうかと模索していた和の耳に
なにかが落下する音が聴こえてきた。

驚いたのは三人とも同じだったらしく、
音の原因を目で追えば、それは盆を持つ香苗だった。
いや、正確には持っていた、である。

湯呑みと茶菓子が入っていた盆は香苗の手からすべり落ち
食器類は無残で儂い姿となっていた。

後ろから台のようなもので続いていた滝山が

小さく悲鳴をあげる。

和は、一瞬固まった後、背中に一筋の汗がたったのを感じれば嫌な予感がふつふつとわいてくる。

『ちよつとこれ…どつから目撃されてたの?』

まさか、まさかね、と

なんとかその可能性を否定しようとする和を香苗がぼんやりとした顔でみつめる。

遥と和に交互に視線をやっている香苗の表情は
いまだ茫然自失、といった風情だ。

「……あ、あなた達。なにをしているの。」

蚊の鳴くような声で訊かれれば、遥が首を傾げる。

「なにつて?」

「どうして、あなたの膝に和さんが乗ってるの。」

「ああなんだ、そんな事。俺が乗せたから。」

「は、遥…あなた、さっき、その女に…頬に…」

その言葉に和はうわあああ…と心の中で悲鳴をあげた。
ばっちり目撃されていたようである。

「その女って誰?俺がキスしたのは和だけど?」

むっとした表情をして遥がはつきりそう告げれば
香苗は次の瞬間には金切り声を上げた。

「ななななにをしてるの!!!
人様の家でそんな事をして!なんて非常識なの!？」

完全に怒りの対象は和であるらしい。

まあ、香苗のフィルターからすればそうなってしまっただろう。

「いい加減離れなさい!いやらしい!!」

交際相手の親の前でよくもそんなはしたない真似が出来たものだから!
「!」

しかし吐き出す言葉遣いはどこか若者言葉とは違うし

そこらへんのひとよりも丁寧でどこか面白い。

案外、語録には困らないかもしれない。

和はなんともあさつてなことを考えつつ思う。

丁寧な言葉ほど、こういう時なんだか劣悪に聞こえるものだ、と。

とにかくぼんやりしている場合ではない。離れなければ。

そう思っ慌てて腰を上げようとすれば

その前に香苗がツカツカとふたりの傍に寄れば

香苗が力いっぱい和の腕をひっぱった後、突き飛ばした。

衝撃を覚えて和が床に倒れこめば、香苗が燃えるような瞳で和を睨む。

「可愛らしい見た目で着飾る割にはずいぶんと奔放な言動をなさるわね。

ご両親がどんな風に教育なさったのか知りたいものだわ!

どうせ男性に媚を売るのがお上手なお嬢さんなんでしょう?」

和の服装は、今日は私服である。

制服というのなんだかつっこまれそうであるし
かといって地味な服もなんとなく失礼かと感じれば
所謂たまに着る部類のものを選んだのだ。

白のシフォンブラウスで黒いリボンがついているものに
黒の膝丈スカート、
それに黒のジャケットを合わせた。
真面目な印象を与えられればと思ったのだが
どうやら失敗したらしい。

『いつそジャージで来れば良かったかなあ。』

ため息を吐きたくなった和はそれをせずに立ち上がるうとすれば
ふわ、となにかが自分を持ち上げる。
後ろを振り返れば、そこにいたのは遥だった。

「ごめんね和、大丈夫？」

「え？ああ大丈夫だよ、別に痛くなかったし。」

遥の瞳をみればこれはまずい。
完全に目がキレてしまっている。

「母さん、無理矢理膝の上のせて離さなかったの俺だよ。
キスしたのも俺だ。」

「は、遥。」

「今の言葉、まるまる俺に言うなら分かるけど
和にぶつけるのは筋違いだ。」

「何言ってるの！どうせこのひとから

あなたに近付いたんでしょー！？」

「いいかげんにしろよ！告白したのも俺だし

そのあとずっと付き纏ってたのも俺だよ!!
一年半も片想いしてたんだから!!」

息子からの衝撃的な告白に、香苗は眩暈を覚えれば
遙に守られるようにしている女が憎くて仕方がないと感じた。

「大体、あなた実花ちゃん存在を知ってたんでしょ!?
それなのにあの子から遙を横取りするなんて!
婚約者から取り上げるなんてまともな神経してたら出来るはずがな
いわよ!」

『ああ、またその話に戻るのかああ…』

さすがにこれにはうんざりするが、
遙がこれ以上ヒートアップするのはまずい。
ここにかばわれても火に油。
はっきり言っておりがた迷惑なのだ。

「母さ、お暇します。」

遙の言葉を遮って和が答えれば遙と昌は目を丸くする。

これには昌さえ虚を衝かれたらしく
和はその顔を見ただけでも今日はなんだか満足な気さえた。

「否定しないのね。」

「和泉君と付き合った時は婚約しているなんて知らなかったし
彼の中では冗談のような意識だったらしいので

話す必要性を感じなかったと言われました。それが全てです。」

「でも今は知っているんでしょ!?」

「ということはあるが実花ちゃんをどうにかしたんじゃないの!」

「それはまあ、否定しませんけど。」

意味合いはあなたが思っているような種類のものではありませんよ。

……とにかく、ここにこれ以上いても

ご不快な気分させるだけでしょうし、失礼します。」

今までの雰囲気とは様子が違う和に、香苗は

多少混乱しながらも、睨む視線は逸らす事がなかった。

無言は肯定と受け取れば、

和がそのまま、玄関を指そうと部屋を出て行く。

しかしその前に昌と滝山に頭を下げるのを忘れない。

「こんな短い訪問になってしまつてごめんなさい。

今日はありがとうございました。」

「とんでもない、謝るのはこっちですよ、すまなかつたね。」

「あなた!！」

昌の言葉に香苗が反応すれば、

それ以上何を言つてもなく昌は肩を竦めた。

「滝山さん、お茶もいただかないですみません。」

「あら、いいんですよ御気になさらずに。」

「これも、私が片付けられたら良かったんですけど……。」

「まあそれぞれこそ私の仕事ですから、本当によろしいんですよ!！」

滝山は恐縮したようにそう言ってくれるものの、

自分が原因の一端だと思えば、

床に散らばる元々は湯呑みと呼ばれたものたちを

掃除して帰りたいと思った。

しかしここにこれ以上滞在するのは得策ではないだろう。

案の定、香苗が刺々しい声で、余計なお節介をどうも、と言いつつ放った。

「…それじゃあ、失礼します。」

「和、俺も行く。」

「何言ってるの、片付けて行きなよ。」

和の言葉に、遙はぴき、と固まった。

それはこの部屋の全員ともおなじだったらしく、皆が地蔵のように動かない。

「そもそも和泉君があんな事しなきゃ、

この湯呑みこんな事にならなかつたんだよ、当然じゃん。」

「落としたのは母さんじゃないか。」

「…後ろから押されて持つてるコーヒー落としてそれ自分で買いなおせって言われたら理不尽だって思わない?」

唐突なたとえ話に、遙はまあ、とうなずく。

「じゃあ、息子が非常識にも親の前でラブシーン繰り広げてて

卒倒して割った湯呑みを自分で片付けろって言われたらどう思う?」

「……………理不尽。」

「はい、それじゃあ頑張つて。あ、お邪魔しました。」

にっこりと微笑んで、和は颯爽と玄関へと向かっていく。

慌てて滝山が追いかけてようとするが、

見送りはけっこうですよ、という和の声に動きを止める。

「……………な、なんなのあの子は。」

ちよっと遙!そんな事しないでいいのよ!」

遥が無言で湯呑みを拾っているのを

滝山も止めているが遥は気にとめることなく片付けていく。

「滝山さん、悪いんだけど掃除機持ってきてくれる？」

大きい破片だけ拾っちゃうから。」

「は、はい！」

遥の言葉に滝山は慌てて部屋をあとにした。

「遥、やめなさいって……」

「……くくくく」

「？ちよと、昌さん？」

急に肩を震わせる夫を怪訝に思えば

香苗は顔をのぞきこんだ。

「あーはははははははははは……！」

「!?!」

常でない夫の大笑いに、香苗が面食らい固まれば

遥が盛大なため息を吐く。

「まーた。」

和が絡むと笑い上戸だよね父さんは。」

「だ、だって…普通あんな事言わないだろう！」

でかしたぞ遥！ふたりの孫は絶対にもっと面白いな……！」

「全部を面白い基準で考えるなよ。」

呆れながら湯呑みを拾う遥と、笑い転げる夫に香苗は驚愕する。

「昌さんも遙も、どうかしてるわ！」

あんな娘に懐柔されるなんて…！」

「香苗はなにがそんなに気に入らないんだい？」

「それは、だって、実花ちゃんが…」

「本人も納得付くだと松永だって言っていたじゃないか。」

「でも、そんなの、信じられないわよ。」

だってあんなに遙の事を好きだと言ってくれていたのに…！」

そう言っただけだと部屋を出て行った香苗を

昌がため息混じりに歩いて追いかけた。

「遙様、掃除機とごみ袋です。」

「あ、滝山さんありがとう。…母さんにも困ったもんだなあ。」

「…奥様は、実花様を本当に可愛がっておいででしたからね。」

「滝山さんは、和の事どう思った？」

「良いご両親がお育てになったのだとすぐに思いましたね。」

「へー、どうして？」

「わかりますよ。とても愛されて、良い環境で育っていったのだから」と

とても感じます。そういう家庭で育った女性は強いんですよ。」

「そういうもの？」

「ええ、そういうものです。」

ふふ、と楽しそうに笑う滝山に

あとの掃除はこちらがやると告げられたので

素直にお礼を言って引き継いでもらった。

『和が途中で面倒がらなきゃいいんだけどなー。』

捨てられる事だけがとにかく不安な遙は
先に出て行った彼女を思えばなんとも気が急いで
早足で実家をあとにしたのだった。

第五十三話「攻略（和泉家の場合）・その3」

感嘆の息を吐いて本を閉じる和を遙が目の前でみつめていた。その事実には驚いて和は悲鳴をあげそうになる。

しかしここは静かな店内。それは適切な行動とはいえない。それが頭を過ぎればなんとか理性が和の声帯をおしとどめた。

「駅前こんな喫茶店あったかな？」

「可愛いよね。ちっちゃくて昔ながらって感じ。」

和の言葉に、遙は微笑む。

和からのメールに気付いたのは家を出てすぐだった。

駅前の「珈琲屋」という喫茶店で待っている、という内容に、遙は首を傾げつつもこの店を目指して歩いてきたのだった。

彼女といると、どこにでも新しい何かが転がっている気がする。何年も住み慣れた街も、

和の視点からみればきつとまた違う発見があるのだろう。

「にしても、和泉君のおかげで面倒臭い事になったねえ。」

ブラックコーヒーを啜る和をみつつ、

その言葉に遙の鼓動は跳ねる。

面倒事は彼女が最も忌み嫌うものであり、

ここ最近ではそれが立て続けに起こったのだ。

もういい、と言われてしまってもおかしくないような気がしていた。

「和、もういいよ。ほっとこう？あれじゃ取り付く島もないし。」

「え、いいの？」

「だって母さんひとりじゃ正式な婚約発表なんて出来るわけないしそれなら無視したって問題ないと思う。」

「昌さんのお仕事にもよるんじゃないの？」

それによつておばさんの行動範囲も変わってくるんじゃない。」

「それは心配しないで大丈夫。」

「ふーん、そつか……」

まあ、実花ちゃんが大丈夫ならそれでいいんだけどね。」

「父さんにも、母さんの様子なるべく教えてくれって言つたししばらくはまめに実家帰ることにするよ。」

「にしても、私が今日来た意味つてなんだつたの？」

「恋人の存在自体も疑つてたんだよね母さん。」

俺が面倒がつてるだけなんじゃないかって。

なんだかんだ、母さんも俺の性格は知らないわけじゃないし……

今までそれこそ恋愛事に本気になる所つて見たことなかつたらうから。」

「じゃあ私がいるつてわかつただけで一応目的は達成された？」

「そついうこと。」

小さな声でそつか、と言う和は

どこか消化不良のような顔をしている。

「……きちんと決着つけたかつた？」

遙が苦笑しつつ和に問いかければ和は肩を竦めた。

「まあ、ね。」

……でもここ最近、疲れることも多かつたしほつとしたかも。」
「ごめんね。トラブル続きだったよね。」

苦笑して、遙も注文したコーヒーを一口飲む。
遙はミルクを入れて砂糖は入れない派だ。

美味しくて一瞬驚いたが、今その感動を伝えるのは
漂う空気に合わない気がして、遙は心の中だけで止めた。

「でも、けっこう楽しかったよ。」

人生でここまで間断なく画策したのって初めてだったし。
さすがにこれが一年続いたら勘弁してほしいけど。」

「和って面倒がる割りに勝負はそう嫌いじゃないよね。」

遙の言葉に、和は顎に手を当てうーん、と小さく声をあげる。

「結果的に一番面倒じゃない方向に動かしたいんだよね。
今は面倒でも総合的にはそうじゃなくなる方というか。」

元々、こうやって色々とするようになったのは
いかに平和に生きるかを模索して得たものだし…

集団相手だとやっぱりうまく立ち回るには色々だね。

ま、最近は防衛より攻撃の多いのは認めざるを得ないけど。」

「攻撃は最大の防御とか和は言いそう。」

「ああ、まあ基本はそうかもしれないね。」

ま、勝負事が嫌いじゃないのは否定しないよ。

自ら飛び込む趣味はないけどね。」

しかし、和の言い分に遙は心の中で納得していた。

思えば彼女はいつも自分から何かをすることはなく、

自分がなにかに巻き込まれればそれにたいして返事をする、という
ような

基本姿勢をとっていると確かに思う。

それでさえ自分に直接害がなければ彼女は手を下さない。衆目は気にするが、個人が自分をどう思うかはそこまで和は気にしない。

先の一件で和が実花に首を突っ込んだのはその基準でいけば非常に稀有なケースといえるだろう。勘違いではなければ、

別れたくないと思っただけから行動してくれたとも取れるし、遥の事が大切だから傷付かぬようにとそうしてくれたとも取れた。どちらにせよ、和が自分を好いていてくれることに変わりはないと思えば

自然遥の頬は緩んでいった。

「なに、ニヤニヤして気持ち悪い。」

「いや、俺ってけっこう愛されてんのかなって。」

「またそういう…。」

「否定しなくていいの?」

面白そうに和の顔を見てにやにやすする遥に

和はすました顔でコーヒーにまた口をつけて言う。

「どうして? 本当の事なのに。」

和のストレート過ぎる言葉に、遥は固まればうっすらと顔を赤くしていった。

それをみて満足気に和が微笑めば、

遥はもう完全にやられた、という気分になる。

「……本当ずるいな、和は。」

「そっ? そろそろ出ようか。」

席を立つ和の後姿をぼんやりとながめたあと

覚醒した遙がすぐに追いかけてくれば和は舌打ちする。

いつも、割り勘にするか遙が持つかで押し問答になるからだ。

結局、今回は遙の騒動に巻き込んだ迷惑料ということだ

遙がすべての会計を持つことになった。

渋々ながらも最後には了承してくれたので、遙はほっとする。

「…和泉君こそ、私の事本当に遊びじゃないわけ？」

カランカラン、というドアベルの音と重なって、

和の言葉は遙にはきこえなかった。

呟くように表に出してしまったそれは、みつともなくて

聞かれなかったことにほっとした。

けれど不安は塊となって、心に重く沈んでいく。

『どうしてそんなに、家にあげるの嫌がったのかな…。』

和は、先日話してくれた遙の理由にどこか納得していなかった。

実花を母親が気に入っているから和を家にあげたくはない。

それはそうなのかもしれない。

けれど、遙の今までの性格からして、

両親に和の存在を隠すようにみせないようにするのは

どこか不自然に思えてならなかった。

自分がいっしょだから、この先もいっしょだから、

巻き込んでしまったけれど、

和以外とはいっしょにいたくはないから。

何度もそう言ってくれた言葉は今はどこか空々しく響く。

両親に会わせたくないっていうことは、
家族にみせたくないということであり。

自分の領土に侵入されたくないということであり…。

つまりは、限定彼女なのではないのかと、
どこかもやもやした思いが和を包んでいく。

知られたくないということに今まで不安もなかった。
和とて、触れられたくない部分はたくさん持っているから
それはかまわない。

たとえば両親に会わせたくない
正面切って言ってくれたのならば、逆にどこかで
納得できたかもしれない。

けれども嘘をつかれた、と感じた。
その事実が、和の心に深く沈んでゆく。

言われない事を探る気はない。そんな事で傷付く自分ではない。
でも、遥が自分に嘘をついてまで隠したいことって、なんなのだろう。

母親のいびりにさらすのが嫌だった。

一回は納得しようとした理由も
実際に訪れたことで和は疑いを晴らす所か濃くしたくらいだ。

『どこか、不自然なんだよね…そわそわしていたというか。』

大体、遙が常識外れだといつても、
頬にキスはいくらなんでもありえない。

あの状況であつてもあの行動は明らかにおかしい。

母親にみつかつてあんなことになれば、

ヒステリーを起こされて早々に退出しなくてはいけなくなる。

あのと看、帰ると言つたとき、遙は驚いてはいたけれど

同時にほつとした顔をしたことを和は見逃さなかつた。

だからこそ不安になる。

母親に傷付けられたくない。本当にその理由がすべてなのだろうか？

見えない。彼の真意がまつたくみえない。

隠していることがある、とか。

言いたくない、とか。

教えてくれればこんなに不安にはならないのに。

普通の女性の心理からすればそれもおかしいかもしれない。

けれども自分はこういう女なのだ。

隠し事をしてもいい。

していると云つてくれればその内容を暴いたりなんかしない。

ただ、わからないことが怖いのだ。

相手をうかがえない事がひどく怖い。

偽っているかもしれないというその事実が怖い。

和は、強い所は恐ろしく強固でありながら、

脆弱な部分は本当に簡単に崩れてしまう。

同じような心理を持つ広未は、本当に付き合いやすい相手でおおよそ不安になることなどなかった。

信頼したいけれど、どこをどう信頼すればいいのか。

大体、自分は遙にどこまでを望むのだろう。

学生時代。当たり前だがほとんどの人間が刹那主義。

それこそ結婚なんて考えられるはずもなく、和とてそれは同じだ。ならば、別に家に来られるのは嫌だ、と思われてもいいのではないか？

…しかし本当にそうだった要因なのだろうか。

結婚までレールを敷かれてしまいそうに嫌だとか、そういう事なのだろうか。

それならそう言ってくればいいのに。

でも、もし違ったら？それさえも真の理由ではないのだとしたら？その他の理由とはなんだ？

考えれば考えるほどわからなくなる。

そう感じれば、和はため息を吐いた。

「和？どうしたの。」

いつの間にか足を止めて考え込んでいた和を不思議そうに遙が振り返ってみつめていた。

和は小さくごめん、と呟けば遙の隣へと歩を進める。

その様子に、遙は若干の疑問を覚えつつも

先程の和の言葉にまだ幸せボケのような心持ちだった。それでもどこか覇気がない和に弾みそうになる声をおさえつつ普通の声音で話しかける。

「まだ14時か…どうする？どこか出かける？映画とか。」
「帰る。」

首を振って和が一言そう答えれば、そこで遙はやっと和がただ疲れているだけではないのだろうという事に気が付いた。なぜかはわからないが、明らかに沈んでいる。

「和、どうかしたの？」
「ん？うーん…。」

疑問は、相手にきいてしまえばいい。しかしそれをやるのがどこかためらわれた。和は詰問されることが好きではない。自分の内面的な部分ならばなおさらだ。今回の質問がそれに該当するのではないかと思えばこんな確信も持てない状態で疑問を形にするのはしてはいけない事のような気がした。

しかしこれは、確かめるチャンスなのかもしれない。

「また、和泉君の家に来る機会ってあるかな。」

「どうして？また来たいの？」

「だって、やっぱり消化不良っていうか…。」

「それなら、今度母さんを家に呼ぼうか？その方が和もラクじゃない？」
「い？」

「それって、和泉君のひとり暮らししてる部屋でってこと？」

「そう。だって和、俺の家にいるときもどこか落ち着かなかったから。」

「それは…そうかもしれないけど。」

「でももう、なるべくこっちでなんとかするから。」

責められる和を見るのも嫌だしもうちよっとな落ち着いてから改めて会えばいい。

だから心配しなくていいよ、ね？」

「……………うん。」

遥の物言いに、和はますます混乱した。

本気で遥の真意がわからない。

『両親に会わせたくないわけじゃないってこと？』

問題をこじらせたままにしたいわけでもないみたいだし…

単に家っていう場所に連れて行きたくないのかな？

あそこになにかがあるの？』

訊かなければ良かった、と和は心のどこかで後悔した。

「和先輩、もう五回目ですよ。」
「え？」

開いたままになっていた本から視線を上げれば
そこには時任がいた。

いつも遥が座るポジションにちゃっかり腰掛けている。
その遥はといえば、最近実家から学校に通っている関係で
母親の事を少しでも早く解決したいのか放課後になればすぐに帰っ
ていく。

和がこうして図書室に寄る日は別行動を取る事が多くなった。

「ため息、もう五回目。読んでないなら閉じちゃえば？」
「…そうだね。」

指摘されて、和は素直に本を閉じた。

この時間はゆっくりと時間が流れるし、静かな分思考の迷路にはま
りやすい。

随分とおとなしい和の様子に時任は頬杖をつきつつ目を丸くする。

「なんとというか、覇気がまるでないね。」
「そう見える？」

「…もしかして、早くも倦怠期？」
「けんたいき…そんなものと自分がご縁があるうとは。」

「え、ずっとラブラブだろうと思っていたってこと？」

眉をしかめて不機嫌に呟く時任に

和はそれ以上の嫌悪を込めて会話を続ける。

「あのね、んなわけないでしょ。」

男女交際自体に縁がないと思つてたつて事さ。」

「あー…先輩らしいね。」

「それよりあんた、仕事しなくて良いわけ？」

今日の当番の片割れ睨んでるよ。」

「高橋先輩より怖いひといませんけどね。」

「良いから、先輩に睨まれると怖いよ？仕事してきな。」

「ええー、今日人そんなに來ないから平気ですよ。」

カウンターから、二年生の女子が睨んでいる。

しかしてあれは…こつちを睨んでいやしないか。

和泉遙と付き合つてるくせに浮気してんじゃねーよ、という目は口ほどにものを言つ状態なのではなからうか。

『でもひよつとすると、時任君が好きなのかもな彼女。』

年下かー…大変そうですね。

と他人事そのものなので無責任にどうでもいい感想を抱ければしかし不誠実な事はできまい、と

和は時任をしっし、と追い払う。

「私まで睨まれたらたまつたもんじゃない。とつとと行け。」

「ん？ああー、そうですね。」

そう言つて、時任がカウンターへと戻つていく。

思ったよりも随分とあっさり離れていくので安心していたらしばらく何事かを話してこちらに戻つてきた。

和があからさまに眉間に皺を寄せれば、時任はふ、と笑つた。

「安心してくださいつて、もう仕事戻るから。」

「じゃあなんでこつちくんの？」

「先輩、今日は一緒に帰ろう。」

「なぜに？」

「帰りたいから。」

その言葉に和はため息を吐いた。

最寄り駅までなんてものの10分で着いてしまうというのに
そんな短い距離を一緒に過ごした所でなんだというのだろうか。

「わかったから、とつとと仕事戻んな。」

和の言葉に、時任はにっこりと微笑んで仕事へと戻った。

図書室が閉まる時、なぜか図書委員である2年の女子に微笑まれて
和は首を傾げたものの、別段気にする事もなく
ふたりは駅までの道を並んで歩いたのであった。

「あー…完全に油断した。もう面倒臭い。」

言い訳をするならば疲れていたし
なによりも時任という後輩をなめていた。

暴走する癖があるものの、

おおよそ和の見解はそこまで頭が回るタイプの人間ではなかったの
だが

どうやらそこまで愚鈍でもなかったらしい。

「ねえねえ、遥様と彼女って復活したんじゃないの？」

「それが違うみたいよー、別れる寸前なんだって。」

「え、もう別れたんじゃないの？」

「私もそう訊いた。彼女の方が他にもう付き合ってるひといるんで
しょ?。」

飛び交う無責任な噂話に、和は頭を抱えている。

朝、生徒が登校してからしばらくして和の所へクラスメイトが
質問責めにやってきた。

上記と似たような話だ。真偽を確かめたかったらしい。

しかし一夜にして、しかも昨日の放課後の出来事ひとつで
ここまで噂が発展するはずもない。

「なんでも、図書室でよく放課後デートしてるんだって!」

「彼女、笹森さんだっけ?後輩の男の子でしょー、一年の!」

『まあまあ、よくご存知ですこと。』

和が横切っても彼女達が噂話をやめないのは、もう禁じ手とした山田さんの封印を和が解いているからである。さすがにこんな調子の校内を普段通りの格好で闊歩する面の皮は持ち合わせていない。

そして学校内をうろろろとしているのは噂がどんな風に広まっているのか

広まり具合はどの程度なのかを調べ

運良く遙から逃げられたらいいな、くらいに思っただけの行動だった。

時任に聞いたですにしたらって、

今接触をはかればより一層噂に火をつけることになる。

そもそも、もう彼の企みだという事には確信を持っているのだ。

接触するならば相手が違う。

『あの二年女子、どう考えても一枚噛んでるよなー。』

図書委員の彼女。

しかし時任に単に利用されただけとも考えられるしどうしたものか。

結局こうなってしまうっては鎮火を待つしかほぼ道は残っていない。

報復するならばその後だが、

時任はなにを思ってこんな事をしたのか。

遙と別れた所で、彼と付き合うなんて選択肢は和の中にありはしない。

いつかの事を懸念して携帯電話の電源をむやみに落とすのはやめたが恐らく遙からの着信で大変な事になってるであろう事を想定し鞆の奥深くへと携帯電話をしまいこんで校内をうろついている。

これなら苦しくとも言い訳も一応立つというものだ。

『いつそ早退するかなー、でもなー、癩だしなー。』

そもそも遙がどれ程怒っているかもわからないし、ひよっとしたら全然気にしていないかもしれない。

現在3限が終わったの中休みだが、

朝から質問責めがうっとおしくて和は時間ギリギリまで行方をくらましていたため、遙とは未だ会っていない。

逆に避ける方が色々と面倒かもしれないと思うが、

この間の件からどこかもやもやしている和は

会ってどうという態度に出れば良いものかと考えあぐねていた。

まるで付き合う以前のよう、遙の事をどんどん信用できなくなっている。

ともすればこれはゲームの延長なのではないかとさえ思えてきて今までの自分達を全否定する勢いだ。

どれが本当なのかが、まったくわからない。

一度疑ってしまうところもすべて胡散臭くうつるものなのか、と和はどこか冷めた目で微笑んだ。

腕時計を確認すると、そろそろ休憩時間が終わろうとしていた。鐘が鳴ると同時に教室へ着くようにと計算して行動していた為、少し焦りつつ和は教室への道を急いだ。

二年の教室へ向かう階段を上っていた時である。

影になっていて顔は良く見えなかったが、

姿形でそれが誰であるかを察すれば無意識にどこかに逃げだしたい

と感じた。

しかし今それを行えば、こじれるのはわかりきっている。

ひとつ小さく息を吐けば、和は階段踊り場に立つ遙の前を通り過ぎようとした。

しかし、当然のように遙がそれを阻んで和の左手首をつかんだ。

ちらり、と遙に目をやればその顔は無表情でどんな感情を持っているのかはわからない。

「あの、なにか御用ですか？」

すぐ傍で人の気配がする。まだ廊下をうろついている生徒はいるのだ。

今の和は、眼鏡もしてなければ髪も結んではない。

この状態で遙の知り合いだと思われるのは勘弁してほしかった。

「和、堂々と約束違反？」

低い地を這うような声を出して遙が微笑んだ。

和はぞく、と背中に悪寒が走る。

この格好はしないでほしいと遙に言われていたし、和自身ももうしないと言った。

文化祭の一件は特別だったからなにも言わなかったが、そつえばそつちの約束があったのだと和は今更ながらに思い出す。

はっとなった様子の和に、遙の瞳が怪しく光る。

「忘れてたんだ？」

「う、うめん…。」

これは素直になにも言い訳出来ない。

和は縮こまって謝罪すれば、遥はため息を吐く。

次の瞬間、つかんでいた和の左手首をぐい、とひっぱれば
遥はそのまま腕の中に和を抱き込んだ。

「ちょ、ちょっと。」

「このまま、一緒に屋上に来てくれるね？」

「でも授業が「和？」

耳元で、遥が妖艶な雰囲気なたたえつつ囁く。

名前を呼ばただけなのに、和は全身を震わせた。

「このままここで足腰立たせなくして強制的に運ばれるのと
素直に自分で歩くのと…どっちがいい？」

「歩きます。」

震えながら即答した和の頬を、遥がにっこりと笑って軽く撫でた。
解放されて歩き出す遥の後に和は無言でついていく。

『何を考えているの？』

遥の背中にそう問いかけても

心の声はむなしく和の中で響いて消えるだけだった。

第五十四話「攻略（和泉家の場合）・その4」

ここには、随分とたくさんのお思いが詰まっている。

まだ彼と知り合って半年ほどしか経過していないのに、
今まで味わう事のなかった感情をもらったし

今まで経験する事のなかった出来事もたくさん起こった。

だから、もう色々と手遅れで

私はもう彼を好きではないとつっぱねる事はできない。

これがゲームなのだとするならば

私は彼に完全敗北している事になるう。

果たしてこれは、なんだ？

いつものように屋上に辿り着けば、

これまたいつものように青空の下の彼は眩しいくらいに光を放つ。

それがなんだか気に食わなくて和は無意識に眉根を寄せていた。

「…なにかな、その不機嫌な顔は。」

そう言う遥の方が、よほど不機嫌な顔をしている、と和は思う。

真実、彼はとてつもなく不機嫌なのだろうし、

そういう顔を今していいのは自分のはずだと言外に告げているのだ
ろう。

まあそれは当然と言えば当然だ。

和も無理矢理ここに連れて来られたとはいえ

授業を一回強制的に欠席させられるくらいの罪は犯していると言えるだろう。

濡れ衣だろうがなんだろうがこれは怒られても仕方がない。すべては間抜けな自身の失態によるものなのだから。

登校してみれば、いつか自分が殴り飛ばした男と

自分の恋人が付き合っているなどとまことしやかにささやかれ。教室へ行けども彼女はおらず（実際訪れたのかはわからない）。連絡を取ろうにも彼女は出ない（実際以下略）。

まあ、苛立って当然だ。

そこでふと、和は鞆の中身が気になった。

朝から全く確認をしていない。

今する事ではないというのはわかってはいるがどうしても見たくなり、和はごそそと鞆の中を漁る。

遥はそんな和の様子を訝りながらも、黙ってそれを見守っていた。

和は目的のものを取り出せば、じ、とそれを見つめる。

「……電池が減ってる。」

「そりゃそうだよ。何回鳴らしたか覚えてないからね。」

口元だけで笑いながら、遥が吐き出すように言った。

着信履歴はすべて遥の名前で埋まっており、

メールも相当数が届けられていた。

和はこれを見てやっぱりわからない、と思う。

遥が自分を騙しているのは、ほぼ間違いない。

しかしこれも演技なのだとしたら、相当な執念といえる。

そもそも、今までの言をすべて覆すような重大な嘘なのかさえわからない。

ひょっとしたら、もっとくだらないものなのかもしれない。

『考えすぎる性分だからいけないのかなー…うーん。』

しかし、自分はこういう性格なのだ。

そう開き直って相手を見れば、なんだかどんどん冷静になっていく。先程まで相手を見て怯えていたというのに。

逆上した彼は正直なにをするかわからなくて怖い。

しかし今、自分はとても冷静だ。へたを打つ気は毛頭なかった。

ばちん、と折りたたみ式のそれを閉じれば

元あった鞆の中へと携帯電話をしまう。

「…ポケットとかに入れておかないと着信に気付かないだろ。

まあ、気付いてて出なかったのかもしれないけど？」

「朝から一度も見えてない。そもそも携帯を携帯する習慣があまりない。」

「まったく、和らしいけどね。」

呆れるかのように遙がため息を吐く。

和にとって携帯電話は作戦行動中のみ重大な役割をしてくれるもので、

それ以外の時は使う頻度が極端に少ない。

遙は何度となくポケットに常備してほしいと言ったが

和はいつもそれを生返事のでかえすので、最近では半ば諦めていたのだ。

しかし今日のような事態に陥って、彼女が一回も携帯電話を確認しなかったのが

そもそも不自然だ。

遙から逃げるかのように教室から消えていた事といい、意図的なものしか感じない。

「今回の事、おおそ見当はついてるんだけど…」

一応、歩き回って情報収集しようかと思って校内うろついてたの。」

「その格好で？」

「笹森和だと目立つだろうからさ。」

噂の張本人の前でべらべら話す人もいないだろうし。

逃げたかったわけじゃないんだけど。

ごめんね、和泉君にも冷静になってほしかったから。…逆効果だった？」

苦笑いして問いかける和に、遙はどうだろうね、と笑う。

まだまだその表情は怒りをはらんでいる。

「わかってるって…時任がやったんだろ？」

本人に問い詰めたりしなかったんだ？」

「和泉君は、殴り込みに行かなかったんだね。」

「んなことしたら噂を肯定するようなもんじゃない。」

「あら、意外と冷静。」

遙の言葉に、和は目を丸くする。

そう、まさしくもってその通りだ。

遙がたとえば時任の教室に殴りこみにも向かえば、

この時点で和と時任の仲を容認したかのようにともすればうつる。

ふたりがまだ付き合ってる状態だとわかったとしても

その時は和が二股のレッテルを貼られてしまうことになり、

それは遙が避けたい最悪の事態なのである。

「沈静化するまでひたすら待つしかない、と。」

「そうそう、時任君も考えましたなあ。…ああもう。私もまだまだだね。こんな簡単に嵌められるとは。」

「…放課後、一緒に駅まで帰ったんだって?」

「図書室ですつと付き纏われてうつとおしかったし駅までなんてほんの10分程度でしょ?」

放課後だから人もまばらだし…まあいいか、と思って。」

「でも登校したらこの通りのありさまだったと。」

「そう。でもまあ、この噂流したのは時任君ではないけどね。」

そう促したのが彼でしょう。ここまで計算してたかどつかはわからないけど。」

自分で言葉にしてみても、なんだか納得しかけてしまう。

そういえばそうだ。

すべて計算済みで時任がやったと思っていただけから違和感を覚えたものだが

ここまで意図していなかったのかもしれない。

登校してこんな噂が流れて

真に驚いたのはひよっとしたら時任自身かもしれないと思えば

和はなんだかそちらのがしっくりきていた。

いつだって彼はどこかしら詰めが甘い。それが和の中での時任像だった。

頭の中であれこれと逡巡していれば、気が付けば遥が目の前に立っていた。

この距離感は少しまずい、と思うものの今更はなれようとするのはもつとまずい。

和は顔に出さないように遥をみつめた。

「…一緒に帰ったのは事実なんだね。」
「そうだけど。…え、なんか駄目だった？」
「ふたりで？相手が和に好意を持ってると知ってて？」
「私、たとえ和泉君と別れても生理的に嫌悪感を持つてるからあなたとはお付き合いできませんって時任君に言ってるけど。」

和のあまりにもな言葉に遥は目を見開く。
断った文句まではそういえば言っていなかったと気付いたがなぜここまで遥が驚いているのかわからない。

「き、きつつ…和、そこまで言ってたんだ。」
「当たり前でしょ。あんな事されたんだから。」

不機嫌に和が顔を歪ませれば、遥はため息を吐いた。
するり、と和の頬に手を添える。

「それならずと無視してればいいじゃないか。」
「男としては気持ち悪いけど後輩としては特に嫌いじゃない。」
「またよくわからん理屈を…。じゃあこの距離は許してないね？」

遥は少し屈めば、和の頬を両手で包み額をくつつけた。
お互いの額がぶつかりあった至近距離。
こんな傍近くまで時任を寄せるなど冗談ではない。
和は眉間に皺を寄せて呟いた。

「当たり前だよ、そんな気持ち悪い事。」
「…俺は？」
「？俺はって」
「俺とのこの距離は気持ち悪い？」
「そんなわけではないでしょ。というか、

和泉君以外はみんなだよこんな距離。」

和の言葉に遥の瞳が揺れる。

驚きと喜びがせめぎあっているかのような表情だ。

「じゃあ、好き？」

「え？」

「俺とこういふことするの、好き？」

それはまた、なんとも難しい質問をする。

具体的にどこからどこまでの話なのだろうか。

目をそろそろと左右に動かし考えれば和は短く言葉を切った。

「程度による。」

「……またなんともな回答だなあ。」

苦笑した遥に、なにか応えようかと口を開きかけたが

それは遥によって阻止される。

ちゅ、と軽い口付けを受ければ、和は少し頬を赤らめた。

「今のは？」

「は、はい？」

「今のは、好き？」

「ええと……時と場合による？」

和の言葉に遥は目を細めて和を見る。

「……じゃあ、ふたりきりで、そうだな。密室だと想定しよう。」

誰かがのぞくわけでもないし、その行為を不謹慎だと感じるような場所でもない。

それをふまえて、今のキスを俺とするのは好き？」

遥の具体性のある物言いに言葉を濁す逃げ場をなくした、と感じるも、

そこまで想定されても、和は心のどこかで懸念を抱いている。是と云ってしまえば、それこそ所構わずされるんじゃないだろうか、と。

しかしじつとみつめる遥の顔はあまりにも真剣で、どこか弱弱しさも感じられる。

観念するかのように、和はため息を吐いた。

「…うん。」

「和、うんじゃなくて、ちゃんと云って。」

「好き。」

和の言葉に、遥が瞳を輝かせる。一方の和は少し仏頂面だ。というか、なんなのだこのやりとりは。

こんなことを言わせてなにが楽しいのだろう。

「じゃあさ、」

「ん…」

途中で言葉を切って、遥がまたキスをする。

和は心のどこかで勘弁してくれ、と思ったが

抵抗しようにも今や遥の腕ががちりと和の腰を固定している為身動きがとれなかった。

片手は後頭部へとまわされ、先程よりも強い口付けをされる。

触れるだけではなく、唇を舌で舐められたり、

上唇や下唇を遥の唇に挟まれて軽く吸われたり。

和にはまだまだまだ赤面ものの行為である。

「これは？」

「え……？」

顔を真っ赤にする和に唇をはなした遙がまたも問いかける。

「今のは？好き？」

「……っあ、あのね、和泉君！いちいちきかないでよ恥ずかしい。」
「答えてくれないの？」

しぼんだ様な遙の表情に、和はう、と詰まる。

その顔はやめてほしい。犬が捨てられてるみたいな錯覚を起こすともすれば自分が悪人のようではないか。

「……嫌なときは嫌だって言うよ。言わなかったときは嫌じゃない。」
「い。」

「じゃあ今のは嫌じゃなかったってこと？」

あまりにもしつこい遙に和はひとつため息を吐けばぎゅ、と遙の鼻を右手でおもいきりつまんでやった。

遙が痛みにも力を緩めれば、和はその隙にするり、と遙の懐から離れていった。

「和……」

涙目で鼻をおさえつつ、遙が和を呼ぶ。

和は、その顔をしばしみつめていた。

最近は言葉にしてくれといわれれば
恥ずかしい状況ではないと判断すれば言葉にしたし
自分も好きだと思うからこそ和は素直にそれを伝えてきた。

「……和泉君。」

「ん？」

「私になにか隠してる事ない？」

自分らしくもない直球勝負。不確定要素があまりにも多いのに。
隠し事をしてるか否か。

確かめられるのは現時点でそれだけで

その内容はまったくもって見当がつかない。

それでも、いいかげん遥を疑うのも疲れてきていたし

和自身の心は、今までを嘘にしてしまるのが嫌だったのだ。

目の前にいる遥の顔を、緊張しながらみつめる。

すると、彼はにこり、と微笑んだ。

「そんなのないよ。どうしてそんな事訊くの？」

ああ。また。

彼はまた、自分に嘘を吐いた。

それをはっきり自覚しつつ、私に偽りの言葉を吐いた。

「…そう。」

ぽつり、呟いた一言。

まったく、嘘を突き通したいならもっとうまく隠して欲しい。
いっそ、自分を家になんてあげなければ良かったのだ。

そう思えば、和の悲しみに満ちていた心には
どんとんと別の感情が沸きあがってきた。
ふつつつとこみあげてくるもの。

ああそうか、これは。

怒りだ。

「ここまで訊いても答えがそれ？ああそうですか。」

「和…？」

「だったらこっちも好きにする。噂の沈静とかどうでもいい。

…いつそもっと酷い噂でも流してみようか？

実は彼女のほうが本命は別にいた、とか。」

和の言葉に、遥がぴく、と反応する。

「…本命ってどういう事だよ。」

「さあ？知らない。」

そう言つて、和は全速力で屋上を飛び出した。

虚を衝かれた遥は、追いかける足が一步出遅れる。

元々、そのまま早退しようなどとは思っていない。

今はまだ4限の途中。

それならば昼休みを待つて紛れたほうが抜け出しやすい。

和は急いで目的の女子トイレを確認し、

そのままそこに立てこもった。

遥が傍まで来ていないのももちろん確認済みだ。

一階の、校門からいちばん近いトイレ。

和はそこへと姿を隠せば鞆の中にある携帯電話の電源を切った。

昼休みを告げるチャイムが鳴るのを待って、

和は学校を出ようと廊下の様子をうかがう。

昇降口は遥が張っているかもしれないが

元々靴を鞆にひそめていた和は体育館側の出入り口から
学校の外へと抜け出すことに成功したのだった。

「ほれ、インスタントだけど。」

「お、ありがと。」

そう言っただけで広末からブラックコーヒーを受け取った。

今いる場所は彼の私室である。

あれから和は駅前で補導されないように気をつけながら
放課後になるまで時間を潰せば、

落としていた携帯電話の電源を入れ広末に連絡をする。

万が一家で待ち構えられている事も考慮して
和は広末の家へ直接うかがう事を考えたのだ。

「随分と愉快な事になってるみたいじゃないか？」

「愉快ねえ…まあ外から見たらそうかもね。」

苦笑しながら和はコーヒーを一口飲む。

本格的なコーヒーも美味しいが、インスタント独特のこの味も
和は嫌いではなかった。

しばし口いっぱいに広がる苦味を楽しめば、ひとつ息を吐いた。

「にしても相変わらずだな。よくまあそれだけ頭に血が上っている
状態で

遥君から逃げ出したもんだ。」

広末が呆れつつもにや、と笑いながらそう言えば

和はそりゃあね、と答える。

「捕獲されたら何されるかわかんないもん。

最後捨て台詞とはいえはずみで逆鱗に触れるような事言った自覚は
あるからね。

キレたらやばいの私じゃなくてもむこうだし。」

「…何言っただ？」

「……………本命は別にいる、て。」

「は？」

「本当にいるって言ったんじゃないよ。

ちよつと面倒な噂が学校中に流されてさー。

だからだつたらもつと酷い噂流してみようかって言ったの。

たとえば彼女には本命が別にいる、とか？って。」

「で、言い逃げてきた、と。」

無言でコーヒーをすすする和をそれが肯定だとれば
広末は盛大なため息を吐く。

「それから一回も連絡してないんだろっ、まずくないか。」

「元々は向こうがなんか隠してるのに直接訊いても答ええないから
イラっとして言っちゃったのに。」

なんで私がこんなにおびえねばならないのかが不満。」

「隠してるんだから言わないのが普通だろっ?」

「そらそうだけども。何隠してるかわかんないけど

嘔吐かれるのは嫌じゃん?もっとうまく隠せつての…。」

「お前相手に難しいんじゃないかそれは。」

「どっという意味なんだい、それは。」

茶化されたり逆に返したりしつつ、

和は居心地の良さに改めて胸が温かくなる。

なにかあっても、広末は無理に訊き出す事を決してしない。

そのときによって言いたい事やそうではないことを察してくれるの
だ。

今日のように愚痴を吐きに来たのだとわかれば上手に手助けをして
くれる。

ふたりの関係性は与えられるばかりではないものの、

男の広末が和に愚痴をこぼすことはあまりない。

そのとき、

和やかだった空気が一変したのは部屋に鳴り響いた着信音だった。

携帯電話を確認すれば、鳴っているのは和のほうだ。

無機質な音が部屋に響く中、少し緊張しつつも和は電話に出る。

「……もしもし。」
「……今、どこにいる？」

地を這うような声に和は叫びだしたくなつた。

最近和の為に怒ってくれる遙を見ることは良くあつたが
和自身にここまで怒りを示す彼をみるのことはあまりなかつた。

自然、握っている手が汗でじんわりと湿っていく。

「和泉君は？どこにいるの？」

『もう一度訊く。どこだ？』

いや、誰だよ！

心の中でつつこむも、相当頭に血が上っている事がうかがえる。
和はひとつため息を吐いた。

「なんでそんなに怒ってるの。」

『どの口がそれを言うんだ？』

「……ふうーん。本当にいるとも思ってたの？本命の彼。」
『……………』

「いいよ、私の事信じられないのなら、私も和泉君の事信じてなん
てあげない。」

『は？どういう意味だよ。』

「遙の浮気モノ。」

『な……！？』

そう言ってぶつり、と電源を落とした。

和はため息を吐いてここにいるのも危ないなと感じる。

「遙君か。ここに乗り込んでくるんじゃないのか。」

「そうだねえ、ありえるね。多分、私の家から電話したんじゃないかと」

「思うから…移動もままならないな。」

「どうするんだ、会うのか？」

「んー…どうなんだろう。向こうが冷静になってくれるなら話さない事もないんだけど。」

「だったらあの切り方はどうなんだ。」

「…確かに。」

ふたりして部屋の空気を重いものにしていて感じつつ
なんの対策も思いつかぬままに、
気が付けば津田家の呼び鈴が鳴り響いていた。

第五十五話「攻略（和泉家の場合）・その5」

「和。さっきの何？」

「さっきのって？」

「浮気モノってなんだって訊いてる。」

「言葉の通りじゃん、私の事は使い捨てなんじゃないんですかー？」

「はあ!？」

「まあまあ、遥君。落ち着いてこれでもどうぞ?」

怒鳴る一歩手前といった風情の遥と和の間に立ち、部屋を留守にしていた広未の腕がよき、と遥の前にのびてきた。

手に持っているのはコーヒー入りのマグカップである。

先程の訪問者は大方の予想通り遥であった。

彼をみた瞬間、広未は逡巡の後、家へ上げようと考えたのである。

今のふたりに冷静な話し合いは難しい。

そう判断して、第三者がいる状態ならば色々と最悪な結果も回避できよう、と結論付けた。

「あ、ごめん広未君…ありがとう。」

そう言って受け取ったコーヒーを

気を落ち着かせようと遥が一口飲む。

その瞬間、遥の眉間におもいきり皺が寄った。

「……………あの。」

広末の方をみて遙が口を開くので、広末はなに？と返事をかえず。

「俺、広末君にコーヒーの嗜好を話す機会あった…け？」

「ああ、口に合わなかった？」

その逆だ。

普通、初めてその人にコーヒーを振舞う時は

砂糖とミルクを入れるか否かで大多数の人間が迷うものである。

大概是、まずブラックの状態で持っていき、

そこからミルクと砂糖をどうするか選択肢を相手にゆだねるものがある。

が、

広末が持ってきたマグカップの液体の色は黒ではなく茶色。

ミルクがもう入っている状態なのだ。

しかも丁寧に砂糖は入ってはいない。

それは完璧に遙の嗜好と合致する形のものであった。

「美味しいよ、ありがとう。」

「そう。それは良かった。」

引き攣りながらもそう言う遙に、広末はにっこりと微笑んだ。

今初めて、和の幼馴染だという事実を目の当たりにしたような気がする。

『広末ってまず相手のデータねちっこく調べる癖あるからな…』

もちろん遙の嗜好に興味がなかった和はそんな事を知るはずもなく

和が教えたのでもなく遙が自ら話したわけでもないとしたら

答えはひとつしかない。

ふたりのやりとりをぼんやりと聞いていた和の顔が一瞬ゆるむ。遥の驚愕の表情に少し胸が空く思いがした。

「和。」

ゆっくりと丁寧な声で遥が呼ぶ。

その声に、和は不覚にもどきり、とした。

どうして、壊れ物でも扱うかのような声で自分の名を呼ぶのか。あるいは、彼にとって自分はそういう存在なのかと大切な存在なのかと勘違いしそうになる。

「和はまだ、俺が君に本気だと信じてくれないの？」

「…！」

哀しい色を濃くして、遥の瞳が揺れる。

そんな風にみつめられて、和のほう胸が苦しくなってしまう。信じたいと思っていた。

別に、たいしたことでもないのだろうと開き直りたかった。けれど自身の性格がなかなかそれをさせてはくれない。

「毎日ぜんぶで好きだって伝えてるのにまだ駄目？」

苦しそうに遥が和をみつめれば、和はみるみる顔を赤く染め上げた。この男は、本当にどうしてこう恥ずかし気もなくこういう事が言えるのだろうか。

しかしなんとか混乱しそうな頭に湯を入れる。

「じゃあどうして何か隠してるの？」

「和…」

「だって、ああまで言っても隠し事をしてるってことすら和泉君は教えてくれないじゃん。」

話したくないならそう言ってくれば良かったの。

嘘をつかれたのがすごく嫌だった。

だから、今更って思うかもしれないけど…

今までの事が全部、空々しく聞こえてきちゃった。」

「……っ」

ついに我慢できなくなったのか、遥は和の腕をつかむ。

「広未君、色々ありがとう。」

「ああ、気をつけて。」

遥の様子に、一瞬引き渡すべきか迷ったが

今までの会話からして遥が和をどう想っているかなんてすぐわかる。

なによりも痛みを耐えかねるようなその顔が

同じ男として同情せざるをえなかった。

愛して止まない人間に、それを信じてもらえないのは尋常ではなく辛い事だ。

無言で玄関まで引つ張られ、和は靴を履く事に抵抗を示したがそれならそのまま外に出すという遥の言に和は渋々靴を履いた。

そうして外に出ても、遥は無言で和の腕を掴み続ける。

「ねえ、そんなに引つ張らないでよ痛い！」

「ごうしてないと逃げるだろう。」

「そんなことな「あんまり暴れると抱き上げて運ぶぞ。」

遥の言葉に和はささやかな抵抗でもと踏ん張っていた足の力を抜いた。

それを確認したからか、掴んでいた腕を遥は解放し、かわりに手をとってぎゅ、とつないだ。

「……どこ行くの？私の家？」

「……………」

不安になった和は遥に質問するも返事はなにもかえってこない。

何を考えているのかもその表情からは読み取れず

怖いと思っている相手自身であるにもかかわらず、

和は気付けば遥の手を強く握っていた。

それに一瞬小さな反応を示した遥は、応えるように和の手を握り返す。

手から伝わるぬくもりに、奇妙にも和は少しの安心を覚えた。

なんの抵抗をする事もないまま、電車に揺られている。

この時点で、どこに向かっているのかなんとなく理解した和は小さく息を吐いた。

『…急に変な流れになったらどうしよう。』

頭の中で違う懸念が浮かぶも
先程までの剣幕でさすがにそれはないだろう、と
心のどこかで打ち消した。

「入って。」

「…お邪魔します。」

やはりというか、いつか実花の部屋を訪れた時のマンションに
和と遥は辿り着いていた。

といっても、遥の部屋に入った経験はない。今が初めてだ。

遥の部屋は、生活感というものがおおよそ感じられなかった。
物が極端に少ないのだ。

台所スペースからそのまま続く部屋には、
ソファがひとつとテレビがぽつん、と置かれており、
他にはなにもない。

収納スペースはあるが、果たして中には入っているのだろうか。

「…住んでるんだよね？」

「あとふたつ部屋があるから、そっちはもっと物があるよ。」

「ああ…なるほど。」

それにしあってこれはなんとも殺風景な部屋である。

一体、他はどうなっているのだろうかと少し気になった。

「和、おいで。」

ソファの隣に遙が促す。

なにもない部屋に置かれたテレビとソファ。

赤いそれはどう考えても二人掛けで

和は嫌でも他の女性の存在を意識せずにはいられなかった。

これで自分ひとりだと言われてもなんだか説得力がない。

赤という色も、なんとなく遙ではない誰かを想像してしまう。

『うーん、あそこで他の女のとなんかあったとしたら
怨念がありそうでなんかヤダな…。』

そこで似たような事になだれこまれてもしたらそれこそなんだか嫌
だ。

あれを買い与えた女性が可哀想だとさえ思ってしまう。

こんな時でさえ和の思惑はどこかあさってた。

普通ならば嫉妬を覚えそうな場面でも思考はあちこちへ飛んでいく。

「…ここで良いです。」

そう言つて和はダイニングテーブルに備え付けの椅子に腰掛けた。

こちらは椅子が四脚。客が来たとき用なのだろうか。

和の様子に、遙はため息を吐く。

「別に取って食いやしないよ。」

本当、俺にばっかり警戒心剥き出しなんだからなあ…。」

別にそのまま取って食われるとは思っていなかったが

和はふたりそろって座る行為そのものが不謹慎なのではないかと憚
ったのだ。

そんな和の心を察することもなく、遙は和の隣の椅子へと改めて腰掛ける。

それにしても、遙にとって今まで付き合ってきた恋人とは一体どういう存在なのだろう？

自分も神経過敏なのかもしれないが

少なくとも彼の部屋に置かれた家具が彼の選んだものではないとしたら

そうして選ばれたそれをなにもない部屋にぽつん、と置いてあったとしたならば

それなりに大切な存在の忘れ形見のように思うのが普通である。

「…そのソファって、和泉君が選んだの？」

「ああ、あれ？いや。俺あまり赤って好きじゃないから。

まあこだわりもそんなないから放置してるけど。」

「そう。」

別段悪びれる事なく言う遙の様子に、和は眉を顰める。

自分の価値基準もひとよりちょっとずれているかもしれないが目の前にいるこの男はちよつとどころではないのではないか？

なんとも平然に今付き合っている相手の前で

他のひとに選んでもらった家具があると堂々と言うものだろうか。

普通の女性であるならば嫉妬に駆られ喚き出すかもしれないのに。

それとも思い入れもなにもない品なのだろうか。

現在進行形で付き合っている誰かのものとか。

いやしかし、それならますますもって堂々と宣言する神経がわからない。

ひょっとして、彼にとって二股は浮気にならないとか言わないだろうか。

浮ついた心ではなくどちらも本気だとかぬかすのならばさすがにそれはいらっとくる。

「あのー…」

「ん？」

「二股はさすがに嫌なんだけど…」

「はい？」

順を追って誤解かもしれない事を考えて訊けば良かったのだが自分の中ですっかり結論を導き出してしまった和はなにもかもすつとばして遥におうかがいをたててしまった。

「あつちと別れるとか言わないからそれなら即私と縁を切ってほし
「和？」

目の前の彼女がなにを言っているのか理解できずにとりあえず遥は和の言葉を切った。

「なんの話？俺、二股なんかしてないんだけど。」

遥の言葉に、和はあれ？という顔をして首を傾げる。

「でもあのソファ、女のひとが選んだものじゃないの？」

「え？ああ…ごめん、誤解させるような言い方だった？」

あれは母さんと実花が勝手に選んで持ってきたの。」

「あ、ああそっかそっかそういう可能性もあったね。」

ほ、と和は息を吐いた。

ひよっとすると無意識にこの部屋に訪れた事で緊張しているのかもしれない。

けっこうな緊張具合になるとどうにも物事をあれこれ考えてしまいなによりその思考が後ろ向きなものになるのは和の悪い癖である。

「真剣な顔して何考えてるのかと思えば…。」

「ごめんごめん。なんか、だつてさあ。」

元力ノとかの置き土産だとしたらそのソファに並んで座るとかすごい失礼じゃない？だから確認しようと思つて…。」

そこからどうやって二股という結論に至ったのか問いただしたくもなつたが

それをやる気力が遥にはなかった。

先程にも熱烈な告白をしたというのに、

まだ他の誰かに遥の気持ち分散していると思つているのか、目の前の彼女は。

遥は一瞬こめかみに右手を置いて顔を顰めれば、ふう、と息を吐いた。

「え、いいい和泉君!？」

遥が急に立ち上がり和の傍近くまで寄れば何を思つたのか

おもむろに和の背中と膝裏に手をやればぐん、と和を抱き上げた。

そのまま無言で数歩移動し、先程のソファに和を抱いた状態のまま腰をおろす。

ふたり掛けのソファにわざわざせまっくるしく座るその状況がなんとも恥ずかしく

和は赤面しておりようともがくが、

横抱きの状態で遥が和を閉じ込めるのでそれもかなわない。

ソファの半分に和は足を投げ出した状態で、

遥に腰周りをがっちりホールドされている。

「あの…?」

「この家にね、今まで女の子を上げたことはないんだよ。」

「え。」

「だから、どこでなにをしてもうしろめたいことはなーんにもない。」

「

「そ、そうですか、それはそれは…。」

引き攣りながら和が口を開けば目の前に遥の笑顔がある。

それがものすごく冷気を放っていて、和は逃げ出したくて仕方なかった。

「和。」

「は、はい。」

「好きだよ。」

なんともいえない色気をはらんだその言葉に

和は腰砕けになりそうだった。

ひよっとしたらもうなっているかもしれない、と思えば顔はみるみる赤面していく。

それに満足したように遥が微笑めば、ゆっくりと唇を重ねてきた。

「ん……」

遥の優しい口付けに和の思考回路はまっしろになっていく。

ゆっくりと啄ばむようなキスから、段々と遥の唇は情熱的になる。

わかっていたのにどろどろに溶けた頭では警告音を鳴らすのが遅れてしまった。

「いっ…ぶっ…」

名前を呼ぼうとしてすでに侵入した遙の舌にそれを阻まれる。

最近では何度となくされている深い口付けでも

和は羞恥心でいっぱいになり、余裕というものもまったく生まれな
い。

いつのまにか頬に添えられた遙の手。

和はその右腕にすぎるとかまっていた。

「和…可愛い。」

「んう…ふ…」

どうして言葉を紡げるのだろう。

絶え間なく口腔内を蹂躪され、呑み込みきれない唾液を口端からこ
ぼしながら

呼吸をするのにただただ必死になる和には到底真似出来まい振る舞
いだ。

いつもいつも自分ばかりがこういう場面で翻弄されているようで
和はなんとも納得がいかない。

遙は和の顎へと舌を這わせ、そのまま鎖骨へと下っていく。

「!？ちよつと和泉君、やめて…あっ！」

「和、ここ弱いよね。気持ちいい？」

いつのまにか体勢がずるずると下がっていき、

気が付けば横抱きというより押し倒されているという格好になって
いて

和は内心焦りっぱなしになっている。

いつのまに組み伏せられたのだろう、その手際の良さにも恐ろしく

なる。

「ちょ、やめてっば、や、あ、やあ…！」

「でもすっごい可愛い声だけど。」

遥の手は、いつかのように和の胸を服の上から悪戯して、和は恥ずかしいと思いつつもながらも反応してしまう自分が嫌になった。する、と遥の手が和の服の裾から中へと侵入すれば、いつかの続きであるかのように直接和の膨らみを遥の手がまさぐりはじめた。

「きゃあ！あ、や、あ、い、いずみく、ほ、ほんとにや、やだ…！」
「…和。」

遥の大きい掌が和のふたつの膨らみを翻弄しはじめれば和はなにかが爆発して、ついにはその瞳に涙を浮かべた。

頭がおかしくなってしまうようだ。

「…どうしたら、和は俺のものになってくれる？」

「え…？」

気が付けば遥の手は和の胸から外されていて和の涙をぬぐっていた。

ぼやけそうになる視界をなんとか涙をこらえつつ遥がしてくれるように、和も遥の頬に手をそえた。

「和泉君…？」

「どうしたら、和は俺だけをみてくれる？」

「なにを言ってるの…?」

「和の、身体だけでもすべて手に入れられたら少しは満たされると思ったんだけど…だめだね、泣かせちゃった。」

今度は遥のほうがり泣き出しそうな顔をしていて、和はわけがわからなくなった。

「どうしたの?なにがそんなに不安なの?

…ねえ、なにを隠してるの?」

「和は、きつと俺なんかみてくれなくなっちゃった。」

「和泉君…私は、あなたが好きなんだよ?」

「!」

遥の両頬を包み込んで、和は真剣な表情で遥をみつめる。

「和泉君がなにを不安がってるのか、私にはわからないけれど…」

こんな風に、誰かとキスをしたり、それ以上の事もいつかゆるそうと思えるのは

あなただけなんだよ?そんなに私の愛情表現ってわかりにくいかなあ…。

なんか、ごめんね?」

「和…」

遥がぎゅ、と和を包み込むように抱きしめたので

和も応えるように遥の背中に手をまわせば、あやすように撫でた。耳元に、鼻をすすするような声がかきこえてきて、

ああ泣いているんだ、とわかれば和はなんだか愛しさがこみあげてくる。

「もう、本当にどうしたの?今日はいつにも増して変だね。」

くすくす笑ってずっと背中をさすりつつつけてやれば、
やがて遙がゆるゆると起き上がったので
和も同じように身体を持ち上げ、遙の隣へ座った。

「あのね、俺隠し事してるよ。」

「うん。」

「和にできたら一生ばらしたくないくらい思ってる。」

「…そんなに大事なの？」

「いや、すごいくだらないよ。」

でも俺にとつたら大事かな、と苦笑する遙に

和は首を傾げるばかりだった。

「とにかく、二股とか浮気とか遊びとかそういう事ではないんだね？」

「違うよ。むしろ逆というか…」

和が俺から離れないように必死で隠してるというか。」

「なんでそんな風に思っの？」

「……和のこと、好きすぎるのがいけないんだよね。」

ばれたらきつともものすごく怒られる気がする、けど…

やっぱり嫌だな。」

「まあ…無理には訊かないけど。」

「うめんね。」

苦笑する遙に和は無言で首を振る。

今までだって和は独断で色々なことをしてきたいる。

遙が隠したいというのなら無理に暴こうとは思わない。

「和、送ってくよ。このままじゃ本気で襲っちゃいそう。」

「またそういうことを…」

「いや、冗談抜きに。」

「そう言っただけっとう和泉君で冷静じゃない？
いつも泣いたら止まってくれるよね。」

「あのね、それだつて理性総動員してるんだからね。」

そのうち泣いても喚いても無理やりしちやいそうで怖いよ。」

ため息をつく遙に和はそんなことを言われても
なんだか真実味がない気がした。

彼は真実自分を傷つけるようなことをしないという
どこか確信めいた自信があるのだ。

和は一瞬考えて、ふむ、とうなずけば

後ろをむいている遙の服の裾をちよいちよい、とひっぱった。

遙がそれに振り向いて不思議そうな顔をする。

和は遙にむかつて微笑んだ。

「じゃあ、限界だと思っただら教えて。」

「え、」

「だから、和泉君がもうここを越えれば

泣いても喚いても事に及んでしまつて思っただら教えて。

申告された一週間後くらいには心の準備ができるようにするから。」

和の言葉に遙が呆然とした様子で固まるので

和は笑つて玄関へと向かう。

靴を履いて扉を開けようと思つたそのとき。

和の手を遙がつかんだ。

「それ、今だつて言っただら週末に泊まりに来てくれたりする…?」

遥の言葉に和はじ、と遥の顔を見る。

「多分、その言葉がほんとうだとしたら今押し倒されてるとおも
なあ。」

「！」

「じゃあ、帰るね。」

和がにつこり笑ってもう一度ドアへと身体を向ければ
遥が後ろから和を抱きしめた。

「ほんつとに…どんだけずるいんだ。」

「え、なんか駄目でしたか。」

「…送っていくって言っただでしょう。」

今日は遅いから家まで送るよ。お返事は？」

「…あい。」

和の間の抜けた声に、遥は苦笑した。

第五十六話「攻略（和泉家の場合）・その6」

遙とのわだかまりはいくらか解けて、
それでもなにを隠しているのかは気になる。

どちらかといえば猜疑心ではなく好奇心であるそれを
なんとか自身を咎めながら探る事を思いとどまっていた。

訊かないでほしい、知らないでいてほしい。

そう言われれば、和は出来る限り守りたいとは思っ

次の日、血相変えて教室を訪れたのは時任だった。
昼休みの鐘が鳴り、教室が浮ついた空気になりつつあるとき。
言ってしまうえば最悪の訪問ともいえるだろう。
皆が好奇心でじろじろとこちらをみてくるのだから。

「和せんば…いた！」

ごいん、という鈍い音が教室全体に響き渡る。
何人かが自分がされたかのように頭をさすっていた。
和の拳骨が時任の頭を強打したのである。

「ちよっくらここにいなさい、ったくややこしい事をしてくれるね。」

「うづうづ…出会い頭にひどい…」

頭をさすりながら呻く時任を視界の端にとらえながら和は電話をかける。

最近、遥と昼を取る事が少なくなっていた。

それは先の件で和が遥をどことなく避けていたというのもあって梓と昼食をとったり、図書室へ通ったりしていたのだ。

遥も忙しさからそこまで気に留める事はなかったが

今日からは別段避けようとも思っていなかったしちよつどいいと和は遥に教室へ寄るようにと連絡をとる。

それを受けて、

ものの数秒後には廊下から騒がしい足音がきこえたかと思えば遥は和めがけて寸分違わずとびついた。

はたからみればタツクルした、ともいえよう。

「うづうづ！」

和の苦しそうな声がきこえていたのかいないのか、

遥は改めて和を抱きしめればその頭に頬ずりをする。

時任がまるで忠犬よろしくすり寄り寄る遥に若干ひいていれば

それをやっつと視界で確認したのか、遥が和を抱きしめる腕に力を込めた。

「…なんでここにお前がいるわけ？」

「なんでって、来たからですけど。」

「和泉君、どうどう。というか離せっつーの。」

和の言葉にしばらく渋っていた遥だが、和のこれ以上離さないと

一週間接触禁止という言葉に慌てて距離をとった。
相変わらずであるがこんな光景をみるのも久しぶりだと思えば
2-3一同はどこかわくわくする心を隠せない。

「ちょうどいい。こんだけギャラリーもいる事だし…」

なんであんな噂が流れたのか種明かしをしてもらおうかな？

ねえ、時任君。」

「なんで、って。そんなの俺が訊きたいくらいです！

朝登校したら俺と和先輩が付き合ってるなんて噂が流れたんですか
ら！」

「ほうほう、身に覚えがない、と。」

「だってまさか、いつか駅まで一緒に帰ったくらいで

あんな風に噂が流れると思いませんよ。」

「まあ確かにね。私達はすれ違えば世間話くらいはするけど
お互いに連絡先を知っているわけでもなければ

学校外で会う様な親しい間柄でもない。

たまたま君が図書委員で、私が常連っただけだからねえ。」

「それは…！」

言い淀む時任に、和の隣で遙が凄みを利かせて睨めば
時任は悔しくも和の為には肯定する他ないと感じる。

「…そうですね、あの日も会話の流れで帰ろうってなっただけで
し。」

「そう。残念ながら、私と和泉君に別れる予定は今の所ないのです。

」

「残念ながらと今の所が余計なだけ。」

「はい和泉君、つつこまない。そういうわけなんだよ…」

あの日、時任君といっしょに図書室の当番をしていた

2-1図書委員の佐藤さとうさん？」

急に名前を呼ばれて、いつの間にか2・3教室内にやって来ていた佐藤の肩がびくりと揺れた。

教室内外の視線すべてが佐藤に集中する。
今や廊下にいる野次馬も、相当数になっていた。

「なにが？急に話を振られてもわからないけど…」

「またまたー。噂を流したのあなたでしょう？」

友達に一斉にメールを送って、
朝登校してきたクラスメイト達にもさも本当のように話をしたんでしょ？

和泉遥と笹森和はもう別れたって。」

「嘘じゃない！時任がもうすぐ別れるんだって言ったもの！！」

その言葉に和の瞳が光る。

すぐ傍に立っていた時任の胸倉をつかんだ。

「ほうほう、なるほど？」

君は彼女にそーんな事を吹き込んだ？」

「それは、あの、

和先輩が落ち込んでるからなくさめてるんだって言いましたけど！
喧嘩してるみたいだとしか言っただけです！」

「…彼女が、和泉君のファンらしいというのは知っていたんじゃないの？」

だから、私と彼が喧嘩していると言えば

仕事中に私語をしても許してくれると思っただけじゃない？

ともすれば君が私をなくさめてふたりがくっついたら別れるじゃん、とか

それでもなくても浮気してるって噂流しちゃえー、とか

少しでもその可能性を時任君は考えなかったとでも？」

「す、すいません…サボる口実にしようと思いましたが…。」

時任の言葉に満足して、和はば、とその手を離れた。
げげほと時任がむせているが特段気にしない。

「おかげでえらいめに遭ったよ？」

彼はなかなか分別のつかない人間だね。

校舎中追い掛け回され、拳句の果てに逃亡先まで突き止められて。」

「当たり前じゃないか。」

理性では和が浮気なんかするはずないってわかってても

他の男に少しでも心を許したのかと思ったら嫉妬で燃え尽きそうになっただよ。」

遥が楽しそうに和を後ろからぎゅ、と抱きしめる。

和はそれに小さくため息をつけばちらり、とふたりを確認した。

「…というわけで、ごめんね？」

私達は別れる予定もなければ浮気した事実もありません。」

「な…！時任、どういう事！？話が違うじゃない…！」

「だから勝手に誤解したの先輩でしょ…！」

びっくりしたの俺なんですからね…！」

噂の真相に2・3一同がぼかん、としつつも

どこかやっぱりなあ、と納得しかけたときだ。

「でも、い、和泉君のほうはどうなの？」

婚約者が一年にいるじゃない…！」

「え、その話を今蒸し返しちゃうの？」

「蒸し返すってなによ…！！？」

和と遙にとつてはとつくに終わった事なので
ついぼろつと本音を和がこぼしてしまつたが、
考えてみればその噂も実花自身が否定しはじめたものの
いまだ完全に沈静化したとはいえなかつた。

それは2・3一同も気になる所ではあつたが
つつこんでいいものかどうかは考えあぐねていて
いまだ真相を知るものはいない。

「和さん！」

そのとき。

少し重くなつた空気を打破するかのよう
可愛らしい鈴の鳴るような声が教室全体に響いた。

「あれ、実花ちゃん。」

「あのね、ちよつとお話しておきたい事があつたの！」

…あの、どうかしたの？」

「うんまあ、微妙に取り込み中っちゃ取り込み中だつたかなあ…？」

噂の本元である彼女の登場にギャラリイすべてが注目する中、
当の本人はわけがわからずきょとん、とした顔をしている。
その姿はとてつもなく愛らしく、
遙以外のすべての人間が見惚れるほどだつた。

「あー！！！！」

しばらく沈黙した教室に、その実花の絶叫が響き渡る。

「また遙つてば人前で和さんにそんな事をして！」

嫌がる事はしちゃだめっていつも言っているじゃないの！」

「えー、和嫌がつてないよ？」

「なに言っているのよ、どう考えても嫌がつてる顔じゃない。もう、離れて！」

和が顔全体で渋面を作っていれば、すかさず実花がべり、とふたりを引き剥がした。

「和さん、遥とふたりきりの時もあんまり心を許しちゃだめよ。」

「実花ちゃん、そんな純粹培養なあなたから

そついうことはおねーちゃん、あんまり聞きたくなかったなあ。」

和に抱きつく実花の頭をよしよしと撫でながら和が言う。

「友達が言ってたわ。男は自分のだと思つとすぐに調子に乗るつて。」

「おおつ…今時の女子高生はなんとというか、凄いね。」

しかしその言葉の意味は真に理解してくれるな、と心底思います。」

「和さん、遥が嫌になつたらすぐに言つてね！」

私おじさまとおばさまに逐一報告してやるんだから！」

「おばさまに報告はどうだろうか…。」

ふふふ、と笑いながら和は実花の頭を撫で続ける。

うーん。この可愛い生き物はなんであろうか。

こついう子をみて辛抱たまらんと思つのはわからんでもないのだが。

「おい実花、いいかげん和から離れるよ！」

和も、いつまで頭撫でてんの！俺には滅多にしてくれないじゃん！

「！」

ふたりを引き剥がそうと躍起になる遙に実花は冷ややかな視線をむける。

和はといえば不思議そうに首を傾げていた。

「え、男の子ってそんなに頭撫でてほしい生き物だっけ？」

「和からならなんだって嬉しいよ！」

「変態…。」

「どうしてそうなるの!？」

もはや実花と遙で和の取り合いをしているような光景が広がって、周りのギャラリーはまさしくなにごどうしてこうなった、状態である。

「…笹森さんは、どうして…」

ぼつり、と呟く声に和は顔をむける。

佐藤が俯いて震えていた。

「そうやって周りの全員味方にしちゃうの!？」

宮田君も、高原さんも、婚約者まで…。」

涙をこらえるようなその声に和は少し同情を覚えた。

彼女と時任は、結局お互いがお互いに利用されたのだ。自業自得といえばそうだし

かといってここまで事態が発展してしまったのも、なんだか可哀想な気がした。

「笹森さんの天然ジゴロ!!!」

うわああああ、と泣き叫びながら

妙な捨て台詞を残して佐藤は廊下を駆け出していった。
何人が足音が続いたので、おそらく友人が後を追ったのだろう。

「…ジゴロってヒモとかスケコマシと同義だから
女に使うのは用途が正しくないなあ。

しかし随分と古風な事を言うものだね。」

呆気にとられた教室に、和の淡々とした声が響き渡る。

はっとして和のほうへと全員が視線をむければ

和は時任に向かってにっこりと微笑んだ。

「というわけで、噂の沈静化は頼んだよ。

…ここにいる皆さんも。今あったことなるべく広めてくれると助かります。

お得意でしょうからね？」

にや、と黒く微笑む和をみて、その場に居る全員の背筋が凍ったのは
いうまでもない。

案外、天然ジゴロは間違っていないかもしれない。

男女含め、彼女にはたらしこむ才能があるのではないかと

遥はどこか困り果てながら思ったのであった。

「え、実花が来たのって偶然じゃないの？」

「そんな偶然が重なるわけないじゃん。」

「和さんからメールもらったのよ。」

偶然を装って教室に入ってきてくれないかって。

ひよっとしたら私の立場が今より良い方向に転ぶかもしれないから
って。」

「和泉君に電話かける前にね。」

時任君が教室来てくれて、しかもギャラリー多いお昼休みでしょ？
ひよっとしたら話がそっち方向に転ぶかもしれないなって。」

「転ぶかもしれない？挑発して実花の話題に及ぶように仕掛けたら
う？」

遙の言葉に和は小さく肩を竦めた。

昼休み、三人には縁が深い空き教室にて昼ごはんを食べていた。

先程の謀ったようなタイミングはなんと、ような、ではなかったの
だ。

「お友達とお昼じゃなくて良かったの？」

「うん、たまには。和さんとも最近お話してなかったし。」

はにかむように笑う実花がなんとも可愛らしくて

和は愛しむようにその頭を撫でてやる。

実花はくすぐったそうにそれを受け入れた。
年下に懐かれるというのがここまで良いものだと思わなかった。

「……和、俺も愛情補充してほしい。」

その言葉に遙をみれば、面白くない、とでもいうように完全に拗ねきった顔をしていた。

ああ、これに可愛いなどと思いたくない。

和は頭痛を覚えた。

「あのねえ、実花ちゃんは和泉君の妹でしょ？」

「関係ない。実花ばっかずるい。」

「いやいやいや。」

「…遥つて、和さんの前だと犬みたいよね。」

「俺はね、和の愛に貪欲なだけ。」

にっこりと淀みなく微笑まれて、和と実花は一瞬固まった。

次には実花がため息を吐いて立ち上がったので

和がどうしたの？と呼びかける。

「馬に蹴られる前に退散するわ。」

…もつと言うと遙が完全に不機嫌になる前に、ね。

それじゃあ、和さん。良かったらまたお家に遊びにきて！」

「うん、メールに応じてくれてありがとう。」

「そんなの、私がお礼を言いたいくらいよ。」

そうして笑って、実花は手を振り去って行った。

しばらく実花が出て行った方をながめていたが
しばらくして横からなんともいえないオーラを感じる。

ため息を吐いて振り向けば、目の据わった遙が和をじと、とみつめていた。

「なんなの？その顔。」

「俺も実花くらい可愛がつて。」

「いや意味わからん。」

「なんで実花は人前で抱きついてもいいのに俺は駄目なの！？」

「あのねえ、幼稚園児みたいな駄々こねるのやめなさい！」

和泉君と私は男と女で、人前で抱きしめあったりしたら

それこそ注目の的でしょうが。つーか最近拒否つても抱きついてくるじゃない。」

「じゃあいつでもどこでも抱きしめていいの？」

「いや駄目だつーてるだろ。お願いだからふたりだけの時にして。」

しばらく口を尖らせていた遙だが、無言で和に近付けばぼすん、と和の懐に頭を寄せてきた。

その様子に呆れはしたものの、

結局観念したかのように和は遙の頭を抱えながら撫ではじめた。

「なんか本当に今日は犬みたい。」

くつくつと和が笑えば、遙はちらり、と上目遣いに和をみる。

その目がどこか怪しく感じて和の背筋が一瞬ぞわりとした。

しかし距離を置こうにも、腰にがちりと遙の腕がまわっていてかなわない。

和はしばし身動きをとれずにいれば、下顎に生温い感触がした。

「ひゃっ！」

顔をあげた遙が、下方向から和の顎を舐めた。それに気が付いて和は後ろに仰け反ろうとすれば待つてましたといわんばかりに遙が黒く微笑む。

『しまった!』

あろうことか、自ら押し倒される態勢をとってしまった和は顔面蒼白になるがもう遅い。

「そんなにお望みなら、俺がご主人様の事、隅々まで舐め尽して上げる。」

「いや、犬だからってそれはおかしいだろ！」

それ以前になにプレイですか、そんな趣味ないです！」

「和ってばこんなときでもよく口がまわるなあ。でも動揺して口数多くなるのも可愛い。」

ふふ、と妖艶に笑う遙の両腕は、和のそれもがっちりとホールドし蹴り上げてやるうかと思っていた足でさえ気が付けば遙の両足によって床に縫い付けられていた。どれだけこの男は女を組み伏せる場を経験したのだろうか。

「女の押し倒し方がお上手ですこと。天然ジゴロめ。」

「ありがとう。貢がれた事はないけどね。」

この先も巧いかどうか試してみる？」

『こいつぜってーうまいの漢字変換かえやがったな!』

なんとかかそういう空気を一掃しようと萎える事を言えと

頭を回転させてみるが、涼しい顔をしている目の前の男がにくたらしい。

どころかそういう会話に持ち込む姿勢をまったく崩さない。

無駄に色気を振りまかないでほしいし、ぺろ、と舌をださないでほしい。

なんなんだ、捕食寸前の狼のような顔をしているではないか。

「私なんか押し倒したってつまんないでしょ、ほらどいて！」

「なんでそんな事言うの？」

「いやだって今までこうしてきた歴代の女性達は絶世の美女でしょうし」

「私みたいなのじゃきつと満足できないでしょうから。さあどこうか、すぐどこう。」

「和ってさあ…馬鹿だね。」

「え。」

「止めたいんでしょう？俺を煽るようなこと言ってどうすんの？」

見れば先程の色気漂う空気に、若干の怒気が混じっているのがわかる。

和はその意味がわからずに混乱してしまふ。

「…あっ」

固まっているうちに、遙が耳への愛撫を開始した。

ぺろ、と舌で舐められたかと思えば

甘噛みするかのように口に含まれ、その状態でちゅっ、と吸い上げられる。

与えられた刺激に和の身体はびくん、と反応してしまった。

「ひゃ、やあ、耳だめえ…！」

「可愛い声…。さっきなんて言ったんだっけ？」

くすり、と笑いながら遙の舌はつつ、と和の下顎を這っていく。

「あ、あ、や…やあつ」

「今まで抱いた女と、どうして同列になんて出来るの？
そもそも比べる事もできないよ。」

遙の指が、和のブラウスとカーディガンのボタンを
ひとつ、ふたつ、と外していく。

気付けば和の身体は力の入れ方を忘れてしまったかのように
抵抗することができない。

あらわになった鎖骨に、遙の唇が触れる。

同時に、下着越しに和の胸を両手で包み込んだ。

「きゃあつ！や、だめ！や、あ！」

「その声をもつと聴きたい。その顔をもつとみたい。
こんなに貪欲に自分から求めるなんて和以外ない。」

遙の両手が、和の頬に添えられる。

「和、こっちをみて。」

涙をためてぎゅっと目をつぶっていた和は、
言われておそろおそろその瞳を開いた。

「わかる？今俺がどんな顔しているか。

和が好きで好きでおかしくなりそうなんだよ？」

熱に浮かされたような、それでいてとても苦しそうな
なんとも複雑な表情をする遙を、和は視界にうつす。
なぜだか、涙があふれた。

「い、ずみく……」

「遙って呼んで。」

「……は、るか……。」

名前を呼んだ瞬間、遙は荒々しく和の唇に自身のそれを重ねた。
貪り尽くすような口付けが、和に遙の熱を伝えてくる。

全身で好きだと言われているような感覚に、和の心は震えるようだった。

呼吸困難に陥りそうになったとき、

そのタイミングを見計らったかのように遙の唇がはなれる。

「笑ってる顔も、泣いてる顔も、……今みたいな顔も。」

俺だけが知ってると思っただらぞくぞくする。」

「……………」

「全部を独占したい。和のぜんぶを、いつか俺にちょうだい。」

「……………う、ん。」

真っ赤になって蚊の鳴くような声で和が返事をすれば
遙は満足したかのように、顔中で笑みを作れば
ちゅ、と額に軽いキスを落とした。

そうして素早く先程自身で脱がせた服のボタンを
ひとつひとつかけてやる。

「自分でやっついていてなんだけど…あまりにも目の毒。こんな明るい所でこんなに肌みたら理性飛んじやいそう。」
「もうほぼ飛んでるんじゃないの？」

涙目になって身体の自由がきかない和が睨みつければ
遥が苦笑した。

「和が悪いんだよ。何度言ったらわかるの？
俺の愛はね、計り売りできるほど安くないんだよ。」

「え？」
「和以外に、好きだとも愛してるとも言う気は起きないし
和以外を可愛いとも抱きたいとも思わない。
いっつも言ってるだろ、和限定だって。」

ぐい、と遥に背中を起こされて寝そべった状態から座る姿勢になっ
た。

そのまま遥の懐に和は閉じ込められる。

「でもそれは今でしょ？そうじゃなくて私は過去のひとと比べてっ
て」

「まだ言うか。」
「だって…。」

両頬を遥の手ではさまれ、額をこっつん、とつき合わせる。

「和と過去の女性は横並びの延長線上にいるんじゃない。
世界がもう既に違うんだ。」

「世界？」

「和が和ってだけで全部が最高以外にないの。
俺の愛撫に反応して赤くなる顔も、啼く声も、身体も、

全部ぜんぶ和ってだけでたまんないの。」

「な！」

「いいかげんわかりなさい。俺の愛は規格外です。」

あんまり理解できないなら無理矢理その身体に言い聞かせるよ。論より証拠。百聞は一見に如かず。俺に一晩中愛されたいの？」

「むむむむ無理！」

ぶんぶんぶんつ、と慌てて和がかぶりを振れば、遥は苦笑した。

「だったら少しは俺の気持ちわかってくれるよね？」

「えと、とにかく比べる対象じゃないっていうのはわかりました。」

「よし。」

満足して遥が和の頭を撫でれば、和はほっとして力を抜いた。

しかし先程、いつかはと言われておもいきり了承してしまったが…。

『最近、キスに加えてそれ以上もデフォルトになりつつあるような

…』

ああああ、と今すぐに悶絶しそうになるくらい混乱していたが撫でる遥の手が相変わらず心地よく、なんとか和は暴れることなく振舞っていた。

「そろそろ教室戻ろう。」

「…また、和はいつつもそうだね。」

「だって遅れちゃうもん。和泉君だって遅刻やでしょ？」

「え、なんでまた苗字に戻るわけ？遥って呼んでよ！」

「んー、時々は、ね。」

にっこりと微笑んで立ち上がる和に遥が納得いかないという顔をす

る。

しかしそれを無視して和は鞆を肩にひっさげ教室を出た。遥が慌ててそのあとにつづく。

「和、時々つてどのくらいの頻度で!？」

「えー、わかんないよー。」

ぎゃあぎゃあ喚く遥の声にうんざりしつつ、ふたりは並んで階段をのぼる。

そのとき和の鞆の底にある携帯電話は、一通のメールが届いた事を知らせていた。

第五十七話「攻略（和泉家の場合）・その7」

「果たしてこれは約束違反になるのだろうか…。」

目の前にそびえたつ日本家屋をみあげながら、

和は頭の中であれこれと逡巡してみたが

結局、あまり良い答えは導き出せなかった。

怒られるのならば素直に怒られよう。

開き直りともいえるその結論に、しかし和はどこか満足を覚えればもう一度訪れたその場所の呼び鈴を自ら鳴らしたのであった。

「実花ちゃん、メールの事なんだけど…」

『ああ、ごめんなさい、和さん。』

遥のいない所で、なるべく早く伝えてほしいって言われたものだから。

届いた一通のメール。

それは実花からのものであった。

放課後になつてそれに気が付いた和は、
気になつて実花に電話を入れた。

「会いたい、つて本当に？」

『ええ、おばさまが、出来ればふたりきりでつて。
不安なら私も一緒に行きましようか？』

「ん、それはかまわないんだけど…うーん、そう。

和泉君つて、最近そつちに帰ってるんでしょ？

私できれば鉢合わせはしたくないんだけど…。」

『ああ、それなら大丈夫よ。

おばさまの様子も大分落ち着いてきていて

遙、最近は週末しかこつちにいないの。

土曜に泊まつて月曜にそのまま実家から学校へ行くのよ。』

「あ、そうなんだ…。」

考えてみれば、今日は一緒に帰つたな、と和は頭の中で思い起こす。
となるとこれまた難しい。

図書室の解放日に早く家に帰るとなると不自然だし

そつじやなくとも一緒に帰るのを拒めばこれまたどうしたのかと
勘繰られてしまつではないか。

「早いうちにか…それつて明日でも可能なのかな？」

『ええ、かまわないと思うわ。一応確認はとつてみるけれど。』

「じゃあ…明日の放課後に何う事にするよ。

夕方頃までには着くように頑張るつて伝えておいて。」

『わかつた。…ねえ和さん、本当にひとりで大丈夫？』

「ん？うん、それは全然。ありがとう、実花ちゃん。伝言よろしく
ね？」

『ええ、それじゃあ。』

今日は木曜で、図書室は閉館日だ。
家に寄りたいと言われたらどう断るか厄介だな、とも思ったがそれは言われなくてほっとした。

もつとも、最近疲れた様子があったので
和は恐らく遙は駅で別れるだろうと踏んでいたが。
そのまま和は地元の駅を目指すべく電車へと乗り込み、
家の最寄り駅ホームで降り立った。

実花に口止めをしてはいるものの、どこでぼろが出るかわからない。
和は辺りを見回し遙の不在を一応確認して
遙の実家を目指すべく反対側のホームへと階段をのぼりはじめた。

そうして現在、和泉家の客間へと通された和は

遙の母である香苗を待っていた。

「…お久しぶりね、笹森和さん。」

「こんばんは。急な訪問で申し訳ありません。」

「あら、いいえ。お呼びしたのはこちらですからね。」

香苗のその言葉に、下げていた頭をゆっくりとあげればその表情から真意を読み取るうとじ、と瞳をみつめる。しかし穏やかな笑みは、ヒステリックになった前以上にどこか恐ろしい。

「…それで、お話というのは？」

「随分と、周りを懐柔なさるのがお上手でいらっしやるわ。」

実花ちゃんも、絹江さんも、松永さんも…

まさかあなたの味方になっているなんて思いもしないじゃない？」

ふ、と嘲る様にこちらをみる香苗に和は同じく微笑んだ。

「随分と子どもっぽい事をおっしゃいますね。」

味方だなんて。まるで私がそう望んで仕向けたようじゃありませんか。」

「あら、違っつて言うの。」

「大の大人がこんな子どもによつてたかつて懐柔なんてされます？

私は自分の器はきちんとわかっているつもりです。」

こんな狡賢くて意地汚い人間の言いなりになる人間なんてそれこそたかが知れてますよ。松永家の人たちは立派な大人です。」

和の言葉に、暫く香苗は言葉を失くしたかのように固まればじ、と和の瞳をみつめる。

そうしてなにかを戸惑うように、目の前にある緑茶を一口飲み込ん

だ。

「わからないわ。…今のあなたが本当のあなたと違っていいのよね？」

「ええ、そうですね。今更猫を被った所で仕方ないでしょう？」

くす、と悪戯っぽく和が笑えば、香苗は苦笑した。

「よく言うわ。右手、すっごく痛かったんですからね。」

「ああそれはすいません。まさかあんなに簡単に降参なさると思っ
てなくて。」

「…実花ちゃんから訊いたんだけど。交際は遥から申し込んだんで
すって？」

「あ、はい。」

「しかも随分長い事、遥から逃げ回っていたとか？」

「そうですね、それも本当です。」

「…理由をお訊きしても？」

香苗の言葉に、和は少しの間、思考を回転させる。
わかってもらうにはどう言ったらいいものか。

「遥さんて、すっごく目立つじゃないですか。」

「え、ええ、そうね。」

「だからですね。」

「は？」

「私は目立つのが心底嫌いなんですよ。」

静かに過ごすのが好きで精力的に何かをするのも得意ではありません。
ん。

本を読んだり、映画を観たり。それが人生です。
けれど、遥さんはそうではないと思っていた。

だから付き合うなんてものすごく疲れるから御免だ、と思っていたんです。」

笑って言う和の言葉を、香苗はぽかんと呆気に取られた様子できいていたものの、

次にはくすくす、と小さく笑いをこぼした。

「…今日のあなたの格好をみれば、なんとなくわかるわ。その眼鏡もきつと伊達なのでしょう?」

「ええ、そうです。」

「そう…そうだったのね……。」

「……あら、あなた本がお好きだとおっしゃった?」

「え?ええ、はい。」

「どんなものをお読みになるの?」

「基本的に雑食です。面白いと思えばジャンルは問いません。」

「そう……。」

「ねえ、和さん。ちょっとこちらに来てくれる?」

「は、はい。」

立ち上がった香苗に、和は慌ててあとをついていく。

急に歩き出したその様子はどこか興奮しているような

こちらをみていないような、とにかく何を考えているのかわからなかった。

扉の前でぴた、と止まると香苗はこちらを振り向く。

「そうそう、もうひとつ、訊いていい?」

「は、はい。」

随分と砕けた言葉遣いに少し驚きつつも、和はうなずいた。

「それじゃあどうしてお付き合いを承諾したの？」

「ええー……と……」

「いいわよ、素直に言っで。遙がそんなにしつこかった？」

瞳をのぞきこむようにしつこく微笑まれて、和は軽く息を吐く。

「まあ、その、逃げ場はないとは感じてました。

転校しても追いかけるとか言っでたし……」

「は？そんな事まで言っでたのあの子ったら！いやね、ストーカーみたい。」

「す、すいません。」

「なんであなたが謝るの、馬鹿ね、悪いのは遙よ。

それで？執念に負けちゃった？」

「うーん……ある意味そうかもしれないです。

一緒にいるのが、いつしか当たり前だと思っでしまっでたんです。

あれだけ目立っし住む世界も違っで考えていたのに。

それっできつと、そういっで事でしょう？」

肩を竦めて笑っ和に、香苗も笑っでた。まるで少女のような顔をして。

「そう……そうね、良く分かるわ。

あなたも、息子に囚われてしまっでたのね。私の二の舞かしら。」

「え、あの、和泉さんもひょつとしてそうだっでたんですか？」

「あら、香苗でいいわよ、もう。そうねえ、親子っで似るのかしら。ずつとなんにも執着しない子だと思っでたから」

心配半分でもどこか安心していただんだけれど……」

ため息を吐きながら扉を開ける香苗の背中をみつめて

和はぼんやりと考えていた。

もしかしくなくても、自分とおなじようにストーリーカーよろしく
香苗も昌にずっと押され続けてきたのだろうか。

想像できない、と一瞬思ったが、
そつえば彼との会話の端々でそんな心を確認できる言葉があった
気がする。

「和さん、どうしたの？」

「あ、いえいえすいません……！！？」

扉を開け放たれて入り込んだそこに、和は固まった。

目の前に広がる一室は、少し小さい図書室そのものだったからだ。

教室よりは小さいスペースであるものの、

資料室のような所よりは全然広い。

というか教室のひとまわり小さいくらいで、
ずらり、と本棚が並んでいた。

当たり前だが中身は本がぎっしりと詰まっている。

和はよだれが出てるのではないかと慌てて口元を手で確認した。

『あ、あぶな、大丈夫だった。』

「あああああの、こここれ……？」

「ちよつと、趣味の一貫というのかしらね？」

和さん私ね、とても好きな作家がいるのよ。」

「え、どなたですか？」

「和泉昌いずみまさしって言うんだけど、ご存知かしら？」

「えー！私も好きです！この前、友達にやつと手に入った

初期の短編集譲ってもらって読んだとこで！

やっぱりああいうひとつともう若い頃から頭角現してるっていうか

すごいんですねー！

でも今の文章のが私は好きなんですけど。香苗さんは？」

興奮して歳相応に話す和は、香苗の目からとても可愛らしくうつって好感が持てるかと素直に感じる事ができる。

なにを今まで意地になつていたのだろうか、とどこか馬鹿らしくもなつた。

『香苗ちゃん、和さんは素晴らしいお嬢さんよ。』

『おばさま。和さんは、私を救ってくれた恩人なの。』

どうしたって言葉だけでは納得できなくて、ふたりきりで話がしてみたくなつたのだ。

しかし今思えば、母親の役割がもう終わるのだという事実から逃げたかっただけなのかもしれない。

遙が、ひとりの男として立っているという事実をなかなか受け止めなくなつたのかもしれない。

「私も今のが好きかしら。」

「本当ですか!？」

「ええ。和さんはどうして今のがお好きなの？」

「初期の頃つてなんていうんでしょうね

文章がちよつと尖つてゐるつていうか、怖さがあつて

色気があるのが好きなひとならあつちのが好みなんでしょうけどなんていうか今は、なにか大切なものが出来たんだろうなーつてどっかで思つんですよ。

ひとを選ばずに読ませる文章になつたというか。

丸みがあつてわかりやすくなつたじゃないですか？

逆に初期の寄せ付けない感じのが好きつていうひとも多いから

まさかここまでになるとは思っていなくて、相当、和泉昌に畏敬の念を抱いているのだからとみてとれた。それとも本の虫だからなのだろうか。

「香苗。騒がしいけれど、どうかしたかい？…あれ、和さん。」

「あ、駄目よ、今近付いちゃ！」

香苗の言葉に、首を傾げながらも昌が室内へと足を運べば和は慌てて香苗の後ろに隠れて服の裾をつかむ。

先程まで対立していた人間に縋るなど、普段なら考えられない事だが今の和はそれほどまでにパニック状態だった。

顔を真っ赤にして、香苗のうしろにちょこん、と丸まっている。

「え？…ああ、その様子だとばれちゃったのか。」

「あら内緒だったの？」

「そう、遥にね、頼まれていたんだ。」

僕が和泉昌だと知ったらきっと彼女は遥の事がどうでもよくなるから黙っていてくれてね。

私としても態度が変わると嫌だったから協力していたんだけど。」

「まあ、そうだったのね。…遥ったら本当にどうしようもないわね。」

「そうかい？僕も遥の立場だったら同じような事をしたんじゃないかな。」

君が他の誰かをこんな風に見つめるのは耐えられないからね。」

「ちょっと、未来の娘の前でそういうことを言うのはやめてちょうだい。」

呆れて逃げられてしまったらどうするのよ！」

ぎゅ、と和を抱きしめて言う香苗に、昌は目を丸くする。

「おや、どういふ風の吹き回し？」

「やっと色々認められる気になっただけよ。」

そもそも反対すべきじゃなかったわ。息子が愛した女性ですもの。個人的に私も好きになっちゃったのは確かだけれど。」

「この子面白いからねえ。」

「おもちゃのように扱うのはやめなさいってば！」

なかなか状況が理解できずにいたが、どうやら自分は遥の恋人としてやっと認められたようだ。

「あの、未来の花嫁というのは承服しかねます……。」「

香苗の腕の中で和がぼつり、と呟くように反抗する。

「あら、うちの遥じゃ不満？」

「…そうなるかは、わからないです。」

絶対なんてこの世にないですから。」

「そうかなあ。…少なくとも、遥は君を手放さないと思うよ？」

「……………」

香苗にまだまだ抱き込まれた状態の和の顔を、昌が覗き込みそれに和はますます顔を赤く染め上げた。

「あ、の、」

「ん？」

「本当に、和泉昌…？」

「そうだよ。写真とか苦手だから、顔出しは一切してないけど。」
「……………あなたが、あの文章を作ってるんですね…。」

じ、と顔をみつめれば昌が応えるように微笑む。

頭の中はどうなっているんだろう。

少し言葉を交わしたただだが、この男から言葉が紡ぎだされるとい
う事実は

なんら意外性を感じなかった。

そもそも今まで気付かなかった事のほうが大失態だ。

なぜ少しも疑わなかったのだろう。

音で聞いていたから漢字変換はできていなかったものの、
珍しい苗字なのだから気付くべきだった。

「ん？」

待てよ、と和ははた、と思考回路を停止した。

香苗の腕からゆるゆると抜け出せば、和は棒立ちになって

今まで馳せていた和泉昌への思いを一端どこかへうつちやれば
現実に考えを戻し思考回路を回復させる。

その様子を、香苗と昌がどこか楽しそうにみつめていた。

「隠し事って…これですか？本当に？」

実家にまつわる隠し事ってそれで全部ですか？」

「僕についての事だけだと思っよ？」

それ以外は特に遥から何もきいていないから。」

昌の言葉に、和はくら、と眩暈を覚えた。

あの男は、ひよっとしてこなくなくだらないことを

一生隠したいのとたまったのか。

しかも、そのとき自分は襲われかけたのだ。

「こなくなくだらない事だったとは、なるほど、そうですか。」

ふ、ふふふふふふ…と和がどこか壊れたように笑えば
香苗は大丈夫だろうかと声をかけようとする。
和は、その行動を自ら制止した。

「香苗さん、昌さん。」

もしも、良かったら、なんですけど。

協力していただきたい事があるんです。」

和の言葉に、昌の瞳が輝いた。

その様子に、今反対しても無駄だろうな…と

香苗は変なオーラを背負う和に向かって了承の返事をする。

通常の三倍返し。笹森和のデフォルトだ。

心の中でいつもの文句を唱えれば、和はにんまりと笑った。

第五十八話「攻略（和泉家の場合）・その8」

それは週末。土曜日のことだ。

いつものように遙が実家へと戻り両親と顔を合わせたときだった。

「それで、母さんは実花と俺の事納得してくれる気になったの？」

「ええ、それはもういいわ。…実花ちゃんが望んでないと分かったし。」

目の前で笑う母親にほっと息をもらし、

遙はやっと和との交際を認めてもらえるのだと安心した。

「でも、彼女との交際は認められないわね。私はあの子が嫌いだわ。」

「は？何言ってるんだよ。和のどこが気に入らないって言うんだ！」

「全部よ。外見も中身も最悪じゃないの。あんな地味な子相手じゃ将来の孫も全然期待できないわ。」

「母さん！和を侮辱するような事言うな！！」

「あら、昌さんだって彼女と付き合っつの反対だって言ってくれてるのよ。」

「は？どういう事？」

遙の鋭い視線に、昌は肩を竦める。

「そのままの意味さ。香苗がここまで言うのなら

僕は和さんを受け入れられない。残念ではあるけれど、ね。」

「父さん、話が違っじゃないか。」

「香苗以上に大切なものはないから…、申し訳ないけど。

遙、期待をさせてしまったね。でもいいじゃないか出て行くなりす

れば。」

「何を言っているのよ昌さん。そんなのは私が許しませんよ。先方に恥をかかせるわけにはいきませんからね。」

香苗の言葉に遙が眉を顰める。

「は？先方ってなんだよ。」

「この間話したでしょう？忘れてたの遙ったら。」

あなたの新しい婚約者よ。懇意にしている方の娘さんでね。

もう向こう方は正式に発表したことだから今更取り消せないわ。」

「な、そんなこと訊いてない！いい加減にしろよ！」

無理やりそんな風にして言うときかせるなんてどうかしてる。

俺は絶対に従わないから。」

「遙、とりあえず会うだけあってみたらどうだ？」

「父さん、何言ってるんだよ！？」

「お断りするにしても、一度くらい会わないと先方に失礼でしょう？」

「……とにかく、俺の気持ちは変わらないから。」

遙はつきあっていてられない、といわんばかりに

勢い良く立ち上がれば部屋を退出した。

「……怒鳴ったところも滅多に見たことなかったわね。」

「本当に彼女の事が好きなんだな。」

「可愛い子だものね、和ちゃん。」

この間の訪問ですっかり親しくなったふたりは

お互いに香苗さん、和ちゃん、と呼び合う仲にまでなっていた。

香苗の言葉に、昌はふ、と笑う。

「君もやっつと、遙から離れられそう?」

とても楽しそうに笑う昌を、香苗がじ、とみつめる。

「…なんだかひっかかる言い方ね。」

「僕はずっと女の子だけがほしかったって言ったたろう?」

「なによ遙の事が不満なの?」

「そうじゃないよ、もちろん遙の事は愛しているとも。」

でも、君を独占しているようでもいつも嫉妬を覚えてた。わかるだろう?」

「…あなたはいつもそんな事ばかりね。」

呆れたような声をあげる香苗に、昌が小さく笑い声をあげる。

「言ったはずだよ、一生君を同じ温度でしか愛せないよ。」

やっとなた僕だけの香苗になってくれるね。」

「はいはい、わかってますよ。遙があなたに似ちゃって残念だね。」

「いいじゃないか、いい加減な男よりは一途なほうが。」

「まあ、そうね。和ちゃんがちょっとお気の毒ではあるけれど。」

「それって君が気の毒って事?」

「私は和ちゃんとは性格がだいぶ違うもの。もちろん幸せよ。」

愛されているっていつでも実感できてね。」

「香苗は、僕を喜ばせるのが本当に上手だね。」

笑い合うふたりの空気は、

長年連れ添う夫婦とは思えないほど濃密なものだった。

週明けの月曜日。

放課後いつものように図書室へと行くところを和を遙が止めた。その顔はどこか思い詰めたような表情をしていて、和の腕をつかんだまま、しばらく遙は無言だった。沈黙に耐えられずに、遙が何事かを話す前に和は声をあげる。

「和泉君、どうしたの？」

「…今日、図書室へは寄らないで。」

「どうして？」

「ちよっと、大切な話があるんだ。俺の部屋まで来てほしい。」
「……………」

遙の言葉に、和が目を見開いて固まった。息を呑むかのようなその反応に遙はどこか不思議に思えば眉を顰めて和の名前を呼ぶ。

「どうしたの？何か変な事言ったかな。」

「え、あ、ううん違うの、ごめん。ただ…」

「ただ？」

『まさか本当に？』

和は心の声をなんとか押し殺して続きを話す。

「日曜日にね、実花ちゃんから伝言もらってるの。なるべく早く会いたいって和泉君のご両親から。」

今日行くなって返事をしちゃったから放課後はつきあえない…ごめん。

「それ…ひとりで来いって言われたの？」

「ん、どっちでもいいとは、言われてたけど…」

最初はひとりで行くつもりだった。」

和の言葉に、遥はため息をついた。

今彼女をひとりで実家へ行かせたら、どんな事態になるかわからない。

かといって今行くなと言えば和が不信感を抱くに違いない。

そう思えば一緒に行くのが一番得策だろうと遥は考えた。

「俺も行くよ。いいでしょ？」

「…うん。」

小さくうなずいた和の手をとって、ふたりは実家へと向かった。

「滝山さん、和を客間まで連れて行ってあげてくれる？」

俺はふたりを呼んでくるから。」

「あら、それでしたら私が参りましようか？」

「いや、大丈夫だよ。」

和としては三度目ともなる訪問で案内してもらわずとも場所はばっちりと覚えているのだが、遙はそれを知る由もない。滝山に微笑んで遙が早足に奥へと進んでいけばそれをしばし見送ってから滝山に視線を戻した。

「この前はどうもありがとうございました。」

お茶もお菓子もとってもおいしかったです。」

「ようございました。奥様もお好きなんですよ。」

「はい、訊きました。香苗さん、甘いもの全般すつごく好きなんですねー。」

「そうなんですよ、ですからよく旦那様が出先で色々とお買いになって

処理するのが大変だ、なんて惚気半分でよくぼやいていらっしやいますわ。」

「へえーすごいですね、自分の親が仲良いって嬉しい反面、複雑そう。」

「そうですねえ…そうかもしれません。」

ふふふ、と笑う滝山も、今回の企みはすっかり加担させられている。

なにより前回の訪問を彼女は知っているので、隠せるはずもない。すつかり仲良しになったかのように

ふたりは和気藹々と客間への道を歩いていく。

そうして和が着席して間もなく、遙と香苗が客間へと入ってきた。

「あら、図々しくも上がりこんでいらっしやったのね?」

「母さん！滝山さんに俺から通してくれってお願いしたんだよ。」

「どうも、お邪魔してます。」

香苗さんもなかなか演技派だなあ、などと心の中で思いつつ
遥がこちらを振り返った時に合わせた香苗の視線はとても優しい。
ああ、本当に自分のことを受け入れてくれたんだな、と感じれば
和の心は温かくなった。

遥が和の隣に、和の向かいに香苗が座る。

「…お話は、あなた方の交際の事ですけど、単刀直入に申します。
すぐに遥と別れてください。」

「母さん。」

「随分と乱暴な事をおっしゃいますね。今すぐ別れるだなんて。」

「遥にはもう決まった相手がいらっしやいます。」

「松永実花さんの事でしたら、」

「いいえ、そうではないの。」

香苗がにっこりと微笑むと、それに和が眉を顰める。

ふたりとも堂々たる演技者ぶりだ。

「…どういう事でしょうか。」

「遥にはね、正式に発表した婚約者が他にいるのよ。」

もう取り消す事は出来ませんし、

いくらあなたが割り切ったお付き合いをしたいとおっしゃっても

私はそれを認められません。ですから別れてください、と申し上げ
てるの。」

香苗の言葉に、和が目を見開けば無言でソファから立ち上がる。

遥はとっさにその手をつかんだ。

「和、ちょっと待って。」

「…隠していたのはこれだったんだね。
出来れば一生隠したいなんて、随分とふざけたこと言ってくれ
るじゃん。」

「違うよ！俺も土曜日に聞かされたばかりで「嘘！」」

「もついい、そういうことなら、別れるしかないじゃない？」

「和、俺は一生はなさないって言ったはずだよ。」

「だってどうしようもないじゃない！」

私は婚約者のいるような人と付き合うなんて出来ない！！」

「必ずどうにかするから、別れるなんて簡単に言っな！言っなよ！」

「…っわからないの？」

隠されてた中身がこれだったのがショックだったんだよ！

くだらないことだなんて嘘ばかり。もう信用なんてできない！！」

和の声に、遥は立ち上がり和をその腕に抱きこむ。

離さないといわんばかりの力強さに、和の顔が歪んだ。

「痛い…離してよ！」

「俺が隠していたのはこの事じゃない！」

「じゃあなんだっていつの。教えてよ、何を隠しているのかこの場
で言っつてよ！」

「…っそれは…！」

言いよどむ遥に和はめちやくちやくに暴れて腕から逃れようとする。

しかしそれ以上に強い遥の腕がそれを全力で阻んでいた。

「和、言ったら別れるって訂正してくれる？」

「それは、言ってくれないとわからない。」

「……………あの、ね。実は…」

「もついいんじゃないかい？」

口を開きかけた遙の声に被さるように、ひとりの人間の声が部屋に響く。

出入り口を確認すれば、そこには昌が立っていた。和と遙をみて、にっこりと微笑んでいる。

「和さん、もう合格にしてやってくれないかい？」

これ以上息子の情けない姿をみるのはなかなかどうして忍びない。」

「……でも、こんなくだらないことを黙ってたのは彼の罪です。私はすつごく悩んだんです！」

和の言葉に、香苗が苦笑する。

「和ちゃん、なかなか許せないのはよくわかるわ。」

けれどこれくらいの事でいちいち腹を立てていたらこの先辛いわよ？」

「……経験談ですか？」

「ええ、そうね。心構えができるようにこの先、色々と教えてあげるわよ？」

「うう…聞くのがどこか怖いです。」

「香苗、和さんが逃げてしまったらどうするんだい。」

「あーら、昌さんだってあんな怖いことと和ちゃんに吹き込んだじゃないの！」

気が付けば遙の腕を抜け出し、和気藹々と喋っている三人を遙がぼかんと見つめていた。

「ちょっと、どういうこと？」

据わった目をして遙が和めがけて歩いてくる。

和はその様子に慌てて香苗と昌の後ろに逃げ込んだ。

「遙ったら、恋人にそんな顔しちゃだめじゃない。」

「独占欲も過ぎると逃げられるぞ?…まあ、僕が言えた義理ではないけど。」

「本当そうね。」

「どういうことかって訊いてるんだけど?」

地を這うかのように低い遙の声音に和はそろり、と顔を出す。昌の服の裾を握っていて、遙はそれにますます不機嫌を覚えた。

「離れる!」

無理やり和の腕をつかめば、先程と同じように腕の中に和を閉じ込める。

「自分のお父さんに嫉妬してどうすんの!?

つーかなんでそんなくだらないことを長々と隠すかなあ!」

「隠すだろう! あんなに好きだと連呼したじゃないか! 親父の小説を!」

「おや、それは嬉しいね。」

「え、あ、…きよ、恐縮です…。」

遙の言葉に和が真つ赤な顔をすれば苛立つ遙がぐい、と和の顔を上向かせる。

嫌な予感を覚える暇もなく、和は遙に間髪入れずに口付けされてしまった。

しかも軽い触れるだけのものではなく咬みつくかのようなそれに和は驚き固まった。

音を立てて唇が離れば、遙は悪びれもせず和を睨みつける。

「俺だけみる、他の男なんてみるんじゃない。」

「……………!!!」

遙の様子に、香苗は頭を抱え昌は面白そうに笑っている。

「…まあ、とつくに僕の正体はわかっちゃってたんだよ。」

「みただね。…つたく、いつここに来たの？和。」

「木曜日よ。私がお呼びしたの。その時すっかり意気投合しちゃつて。」

「はああ？じゃあ婚約者云々っていうのは？」

「う・そ。遙の隠し事があまりにもな内容だったからって

憤慨した和さんに協力したのよ、楽しかったわー。ねえ、昌さん？」

「本当だね。和さんが遙のお相手で良かった。」

「ええ、とつても可愛いものね、和ちゃん。」

ほら遙、まだ真っ赤よ、可哀想に。他所様の大事なお嬢さんをそんな風に扱うなんて

紳士じゃないんだからいやあね。育て方を間違えたかしら？」

香苗の言葉に遙が腕の中にいる和に視線をうつせば、

確かにいまだ顔を真っ赤に染め上げている。

潤んだ瞳も、弱弱しく下がりきった眉も、

すべて自分が与えたものなのだと感じれば、遙の心は明るくなった。

「かあわいい。」

「な、も、やめー！」

甘ったるい声で遙が囁き和の頬をなでさすってくるので

和は慌てて首を振り抗議の意を示すが、まだ思考は回復途中のようである。

言葉にならない叫びは、ますます遙を脂下がった顔にさせていた。

「その様子だと、僕の読みは当たったんじゃないのかな？」

昌の静かな声に、和の肩がびくりと震えた。

それを不審に思った遙は、無意識に和を抱く腕に力を込めた。

「それは…確かに部屋に来てくれとは言われました。

でもそれだけですから、わからないですよ。」

「ついていかなかったんでしょう？」

昌の言葉に和はまたも反応すれば

少し複雑そうな顔をして遙を見上げる。

その様子がなにを意味しているのかまったくわからずに、

遙は首を傾げれば昌へと視線をうつした。

「父さん、さつきからなんの話？」

「いやなに、ちょっとね。僕と和さんである賭けをしたんだよ。」

面白そうに笑う目の前の父を遙は少し不安になりつつ見つめる。

「ああ、お前にとってはむしろいい話じゃないのかな。

…遙、今日君は和さんをマンションの自室へと呼び出したね？」

「和は来なかつたけど、まあ。それが？」

「なにするつもりだった？」

鋭い視線を遙に投げかけて笑う昌が、

普段の温厚な父とは思えないほど激しい双眸を向けていて

遙は心のどこかで畏怖を覚える。

「なにって、…話し合いだよ。」

「ふうん。どんな？婚約者がいますって？」

「そうだよ。」

「わざわざ部屋に呼んで？」

和さんは遙の部屋を訪問し慣れていないんだろう？

だったら彼女の家で話をするほうが

彼女も冷静になれて良かったんじゃないのか。」

「それは、別に…深い意味は」

「遙。僕が代弁しても、まあかまわないんだけどね。

ここまできたら潔くすべて言ったらどうなんだい？

万が一それが僕の考えと違うのだったら僕が誘導尋問したんだと

和さんに言われてしまいかねないし。」

ちら、と和の顔を確認して昌はもういちど遙へと目を向ける。

すると観念するかのようにひとつ息を吐いて、

遙はゆっくりと口を開いた。

「部屋で、朝までずっと和を抱くつもりだった。

場合によっては何日も閉じ込めようと思ってたかもしれない。」

「…どっし、て？」

震える声で問う和に遙は気まずく目を逸らす。

「子どもが出来たら、結婚する口実ができると思ったから。」

遙の言葉に、目の前の昌は驚きもせず微笑む。

どうやら彼は遙の心を完全にわかっていたようである。

「そんなんで子ども出来て結婚したって、生まれる子が可哀想だよ。」

「…そうだね、ごめん。」

低い声で言う和の事を遙は見るのが怖かった。
気が付けばゆるゆると力が抜けた腕は下にだらんと垂れて、
和は遙から一步距離をとっている。
それがなんとも深い心の溝のような気がして
完全に今回のことで見限られてしまったかもしれない事が怖かった。

「最低。ありえない。気持ち悪い。」
「和……」

「もう、気軽に和泉君の部屋あがるのやめる。
何されるかわかんないもん。当分は自重してよね！
そもそも避妊しないつもりだったのがありえないよ、男の義務放棄
だよ！」

「……は？」

目の前でぷりぷりと怒る彼女を

遙は信じられないようなものでも見るかのようにながめていた。
昌と香苗は楽しそうに笑っている。

「さ、これで賭けは僕の勝ちみたいですね？」
「そうですね、不本意ながら。びっくりです。」
「ではお約束です。」
「わからないですよ？私次第というより彼の問題なんですから。」
「それはありえないですから、叶ったも同然でしょう。」
「ふたりのゴールインはいつかしらねえ、楽しみだわー。」

うふふ、と笑う両親にわけがわからず、
遙は物言いたげな顔で昌をみつめた。
その視線に気付いた昌は、遙の肩をばん、とたたく。

「僕がね、和さんに言っておいたんだよ。もしも部屋に誘われたら絶対に行かずにここに連れて来るようにと。そうでなければあなたの自由は永遠に奪われてしまうかもしれないね。」

内容は遥が言ったまさにそのままさ。和さんはまったく信じていなかったけれど

もし遥がそうするつもりだったと言った場合、賭けは僕の勝ち。

遥が別れを切り出したら僕の負けだったんだよ。

それ以外だったら勝者なし。」

「和が勝つたら、どうするつもりだったの？」

「そのまま別れるつもりだったけど。」

「…さらっとすごいこと言うね。」

「そして僕が勝った場合、和さんはある約束を守ると言った。」

「…なに？」

遥の問いに楽しそうに笑ったのは香苗だった。

「あなたが浮気をしない限り、和さんは将来別れずに

必ずあなたと結婚してくださるそうよ。良かったわね、遥？」

「は！？だ、って。和、俺の事怖くないの？」

「はあ？なんで？」

「あんな事しようとしたのに！」

「実行されたらまあ怖いかもしれないけど。」

和泉君に出来たとも思えないよ。いつもやめてくれるし。

それにそこまで追い詰めちゃったの私だからある意味では自業自得かなあ。」

けるり、と言つてのけた和に遥は目を丸くする。

てつきり別れたいとか、離れたいとか言われると思っていたのにまさか結婚の約束をしてくれるとは考えもしなかった。

「和…俺と結婚してくれるの。」

「今すぐとかじゃないからね？将来的にだからね？」

それにわかんないよ、そっちが愛想尽かすかも「ありえないから！」

そう言って抱きしめた遥の腕の力強さに、和は苦しみのあまり顔を歪めた。

第五十八話「攻略（和泉家の場合）・その8」（後書き）

これにて今回のシリーズは終了です。
次回からまたよろしくお願いします。

重要なお知らせがあります！詳しくはブログにて。

第五十九話「その理由（わけ）を教えてください。その1」（前書き）

久しぶりの更新。新シリーズのスタートです！。

第五十九話「その理由（わけ）を教えて。その1」

「にしても…どんどん外堀を埋められているわね。」

和の逃げ道を塞いで行っている気がしないでもないわ。」

「高原先輩もそう思いますか？」

「松永家はその後どうなの？」

「両親はなにも申しませんわ。」

和泉家のおふたりはどうなのかわかりませんけれど…。」

「そう…けれど松永さんも、結果的に良かったわね。」

「ええ、本当に。」

梓と実花が笑い合うその光景は、言っている事はともかくものすごく眼福だ。

なんなら拜んでおこつかと考えたがそれもどうかと思って止めておいた。

「元々、俺は和を逃がす気なんてないけどね？」

「和泉君、いいかげんそういうことを言わないの。」

またもなにか言い出した遙にいつもの如く和がため息混じりにたしなめる。

ここに広がるのは、本当にいつも通りの光景、のはずだ。

「にしても、すっかり仲良くなっちゃって面白くない。」

笹森チャンがお嬢様を虐めるところとかみたかったな。」

「…宮田先輩、それはどういう意味でしょうか。」

「んー？歪曲なんてしてないよ、そのまんま。」

俺的には君への説教が甘つちよろいんじゃないかって思うだけだも
ん。」

「おい浩平。嫌ならこの場に居ることないんだぞ。」

「えーだってこれだけ女の子集まってるところにいたら英気を養えるじゃない。」

「…だったら実花をつつくなよな。」

「元々は遥君がヘタレだったせいなのになー。」

「浩平。」

ふたりのやりとりを苦笑しながらみている和は

どちらかといえばこの神々しい集団には混ざりたくない、と今でも考えないではない。

相変わらず地味でありたいと願う自分はどこかおかしいだろうか。はたまた驚沢なのだろうか。

今日は人数が多いせいもあって中庭というなんとも目立つ場所で昼休みを過ごしている。

早々にごはんを食べてその場を立ち去ろうかと思うのだが

梓には睨まれ実花からは涙を浮かべられてはなんとも立場が弱い。

しかし周りの視線は痛いのだ。

みられるのが不快で、仏頂面になってしまつのも致し方ないことである。

和はなんとか顔をほぐしつつ、お茶を一口飲む。

「…和、居辛いならないよ？図書室行きたいんでしょっ？」

「！和泉君…。」

和の正面に向かい合って座っている遥がにっこりと微笑んでそう告げる。

本来ならば、これは喜ぶべき言葉だ。ありがとうと言って立ち去ればいい。

しかし和は眉根を寄せて遥をみつめている。

何故ならば、彼の発言としてはあまりにも不自然であるからだ。

『私といっしょにいるのが嫌なの？』

一瞬出かかった言葉はしかしそのまま音になることなく呑み込まれた。

なんだか、和が言うには随分とうっとおしい響きがあっただけ好きだ愛しているというよりも彼女にとって照れくさい気がしてしまつものだった。

「…じゃあ、お言葉に甘えて読書の時間に充てさせてもらおうかな。」

「え、ちよつと待つてよ和。」

松永さんとはあまり昼休みを一緒する機会なんてないじゃない？

「遥！あなたは和さんといっしょに居たくないの！？」

梓が慌てて立ち上がった和を止め、実花が遥を詰る。

しかし遥はそんなわけがない、と否定するだけで

特に焦つた様子もなくおだやかに微笑むだけだった。

それがまた、和にはなんとも不可解なのである。

…なんなら多少の気持ち悪さを感じる。

「いっしょに居るのは嬉しいけど周りの視線が気分悪くてね。

凡人の私は衆目にさらされるのがちよつと辛いんだよねえ。

ごめんね、梓さん実花ちゃん、また。」

うしろからまたも制止する声が聞こえてはきたが

和は無視してすたすたと校舎へ戻って行った。

傍観していた浩平が、遙に声をかけようと隣をみれば
なんともせつなそうな顔をして和の背中をみつめている。

「…そんな顔するならなんであんな事言うわけ？」

「は？別に普通の顔してるだろ。」

不愉快だ、とでも言いたげに遙はそっぽをむく。

浩平も、こここのところの遙の異変には気付いていたが
ふたりの問題である以上、今は様子を見る他ないと思っていた。

和の思惑とは裏腹に、ふたりはおおよそ落ち着いたお付き合いとい
うものが

まったくできていない。

なんとも大変な問題が次々とやってきてはふたりに降りかかってく
る。

それを毎回クリアしているのだから、良いといえばそうなのかもし
れない。

和と遙の絆はどんどん深まっていると浩平は感じていたし
実際そうなのだろう。

しかし、いつかそれが乗り越えられない時がきたら。

そのときの遙がどうなってしまうか、友人としてそれだけが怖かつ
た。

勝手な話だが、こんなとき浩平はいつも和に祈ってしまう。

彼女ほど、まわりを吹き飛ばすパワーにあふれる人間はいない。

あれでよく平凡普通が言葉にできるものだ、と半ば呆れなくてもな
い。

しかしきつとそこらへん方面の異常なまでの欲の希薄さが

良いほうに作用してるからこそああいう中身になったのだろう。

浩平は心底思う。

遙が選んだ唯一が、笹森和という女の子で本当に良かった、と。

最近の遙は、どこかおかしい。

これは疑問でもなんでもない確信であるが、しかし理由はさっぱりわからない。

「今度は眉間に皺、ですか。」

「そして君はまたサボる気がい、時任君。」

いつかの風景に似ているこの状況。

そのときは和がため息を連発しているのを時任が指摘したが今はずっとしかめっ面を崩さない和を

やっぱり向かいの席で時任がのぞきこんでいた。

しかしそのときとひとつ状況が違っている。

それは、当番の人間だ。

間髪入れずになんとも容赦ない声が時任へと浴びせられる。

「時任！。このリストにのってる本探して持って来い、至急だ。」

「ちよ、高橋先輩の鬼！」

「なんとでも。お前のお仕置きは俺が卒業するまで終わらないぞ。」

「鬼畜がいる…！」

しかし逆らったら怖いということをもって体験した時任は

素早くリストの載った紙を受け取れば本棚へと消えていった。その様子に和はくすり、と笑う。

「笹森さん、なんだか和泉君と付き合いだしてから大変そうだね。」

先程は時任が座っていた場所へ入れ替わるように高橋がおさまれば和は多少の驚きをみせ、思わず数回瞬きをした。

「あら、高橋君までサボリ？珍しいね。」

「元々昼休みはカウンター内ではけつとしてるだけで良いんだよ。今は貸し出し返却の希望者がどっちもないからね、かまわない。」

ひょうひょうと言ってのける彼はしかし前からこのような印象ではなかった。

どちらかといえばおとなしいタイプだと思っていた高橋はけれどもカウンターに和がすべりこんだときも、特に動揺をみせることなく彼女に協力してくれた。

思えば彼を単なるおとなしい男と評するには裏付けるものが印象でしかなく

実際はまったく異なっていたと言わざるをえない。しかし和は、前よりもむしろ好感を持っていた。

「高橋君の彼女ってさ、マゾ？」

「何を想像したのか知らないけど、俺が鬼畜になるのは同姓限定だよ。」

「あー、だから…うん、よくわかった。」

「勝手に何か納得してるね。まあいいけど…。」

人当たりがいいとか、おとなしいとか、そういう印象しか受けなかった謎が解けて和はどこかすっきりする。

が。最大の謎は謎なままである。

「まーたなんか余計な事考えてるのかなあ。」

「和泉君？ていうか彼こそマゾだよな。笹森さんドSだもん。」

「ちよつと、さすがにドはないよ。」

「ああ、サド部分は否定しないんだね。」

「自分でもたまに自覚しないでもない時があるからね。」

「でもたまになんだ。」

高橋が苦笑するので、和は目を丸くする。

そんなに周りからみたら遙への扱いは冷たいのだろうか。

しかし、所構わずくつつかれるのを容認するわけにもいかないのだから

ああなってしまうのは向こうが原因だろうと和は思う。

「なーんかねえ。最近よそよそしいんだよね。浮気？」

「それは彼に限って有り得ないんじゃないの？」

「それさ、いつだったか忘れたけど

クラスの女子にも言われたことあるんだけど。和泉君でどんだけさ。

「いやだって。溺愛もいいとこだと思うよ冗談抜きで。」

「うーん…じゃあその可能性はとりあえず置いておくか。」

「いや、潰して良いと思うけどな。」

高橋の言葉に、和は顎に手をあてて考える。

しばし逡巡しても、なかなかしっくりくる答えは浮かばない。

「高橋君だったらさ、どういう状況だと思う？」

特に嫌いになったわけでもないのに彼女を避けているって。」

「え、よそよそしいって避けられてるの？」

「多分ね、意図的に遠ざけてる感じ。」

「うーん…わかんないけど……」

和泉君で異様にモテるだろ？ひよっとしたら

「したら？」

「すっごい粘着質な女性に付き纏われてて、

仲の良い彼女がいると知れたら危害を加えられると思ったら？

もしも自分が彼の立場だったら一時的でも冷たい態度取るかもしれないな。」

「はあー、なるほど。うーん…でもなあ。」

「しつくりこないんだ。」

「だって私だからね。そんなもん正直私に打ち明けてくれたほうが解決は早いと思うよ？」

にや、と笑ってさらりと言ったのける和に

高橋はどこか背筋の凍る思いがした。

彼女の凄いところはこれが脅し文句でもなんでもないとことだ。もしもそうであった場合、確かに彼女の言うとおりだろうと高橋は思う。

「でも、差し引いてもさ。和泉君の場合、本当に溺愛だから。

少しでも可能性があるんなら傷付けるものから遠ざけたいって思うんじゃない？」

「あー…うん、そっか。なるほど。」

それも一応念頭に入れてみる。別れ話とどっちだろうねえ。」

「だから、そういう不穏なことを言うのをやめなっ。」

「案外、言ってる起きないもんじゃない？」

起きたとしてもダメージ少ないかと思っ、連発したら。」

「保険？へー、案外笹森さんも普通の女の子なんだね。」

「失礼な。どこにでもいる普通女子ですとも。」

「それは同意しかねる。」

「なぜだ。」

ふたりで笑い合い、その声が少し響いたとき。
時任が奥から戻ってきた。

「高橋先輩！これ、全部ここにはない本じゃないですか…っつてなに和先輩といちゃついてるんですか！浮気だ浮気！」

「時任うるさい。図書委員が図書室で騒ぐな、非常識だ。」
「なっ」

「時任君は仕事をサボる上に最低限のマナーも備えていないのか。なんとも嘆かわしいことだねえ。」

「和先輩まで！この鬼畜コンビ！」

悔しそつに叫ぶ時任を、高橋が拳骨で黙らせれば

そこからはふたり仲良くカウンターでおとなしく並んでいた。

その様子に笑いながらも、やはり和の眉間には皺が寄っていく。

結局、なにを隠しているのかわからない限り想像の域を出ない。

そもそも、隠している事があるのだろうか。それすらわからない。なんらかの理由があつて和を避けているのか。

それとも本能的ななにかが和を否定しているからなのか。

もしそうであるとするならば、本格的に自分は失恋決定ということになる。

それはちよつとしんどいな、と思えば和は暗く沈んでいく。

こんなことで油断すれば泣きそつになる自分は、いよいよ重症だ。

『…思った以上に、好きなんだなあ。』

別れたくない、出来る事ならば。

そう思わずにはいられない和であった。

「あの、和。ちょっと良い？」

「梓さん？どうしたの。」

「ちょっと帰り付き合ってくれない。相談したい事があるのよ。」

「別にかまわないけど……」

「ありがと、じゃあ放課後ね。」

朝の時間。

もう皆が登校し始めているというのに
遙は教室にやっては来ない。

最近はそのも珍しいことではないものの、
どうにも細かい事が気になってしまう。

放課後は日課のように帰りを共にして、和の家へとよく寄っていたが
それもここ二週間ほど遙とは駅で別れるに留まっていた。

原因がわからない限り和はどうしたのかと詰め寄る気にはなれない。
しかしこちらがなにかしてしまっただけであれば謝罪したいと思うし
そうではないのならばなにがしかの止めは刺してほしい、とも思う。

思い至って、和は遙にメールを送った。
今日は梓と遊ぶので一緒に帰れない、と。

遙から返事はきたものの、それは楽しんできてね、という
なんともそっけない一言だけだった。

そういえば、メールの回数も減っている気がした。
あんなにうっとおしいと感じていたものがなくなったのだから
嬉しいと思いきすね。なぜここにきて不安ばかり感じるのか。

「…けっこう普通の女なんだよね、私もきつと。」

ため息混じりの独り言は、誰にきかれるわけでもなかった。

「ちょっと、シヨッピングモールまで付き合っしてほしいのよ。」

「はあ？…まあいいけど、なんでまた。」

「いいから。あ、和、私といるときくらいその装備外しなさい。」

「わ、ちよ、もう！」

そうやって梓は容赦なく和の眼鏡と髪の毛のゴムを外す。

どうにも梓は和がこの格好をしているのが気に入らないらしく

たびたびごういったことをしてくる。

いわく、女性というものは最大限魅力的であるべきなのだとか。

「別にたまの休みにはそれなりの格好もするよ?」

「いつもそうしてればいいじゃない。」

「うーん、それはちよつと。」

「まったく地味思考は変わらないんだから。元はいいのに!」

「まあまあ、いいじゃん。」

「和が納得しているなら無理強いはあまりしたくはないけど。」

ぶつぶつと言う梓に少し噴出しながら、

和は梓に連れだって中心街へと繰り出していく。

「でさあ、相談っていったいなんなの?」

「それは…その。クリスマスが、近いじゃない?」

「あー……そういわれたら11月ももう終わるねえ。」

「和は、遥になにか用意してないの?」

「?なにかって。」

「決まってるでしょう、プレゼントよ!」

クリスマスプレゼントとな。

梓のその言葉を聞いたとたん、和の全身にぶわ、となにかが走る。それは鳥肌だった。

虫唾が走る、と表現してもいいかもしれない。

和にとって、恋人同士のそういったイベントごとに参加するのは苦痛以外のなにものでもなかった。

別に世のカップルがどこでなにをしようとかまわないのだがたとえば自分がそこに参列する姿はどうしたって我慢できない。はつきりと言ってしまうえば気持ちが悪いのである。

和にとって、趣味嗜好というのは生きる上で最重要視している事柄だ。

そんな彼女が好むのは地味で静かな日常。

だからというわけでもないのかもしれないが、

例えばクリスマスにわざわざ混雑の中どこかへ遊びに行くというそういつた思考が正直理解できずにいる。

なによりも、カップルが好んですることを

自分もするということ事態がなんとなく主義に反するのだ。

かゆい、と悶絶したくもなる。

そもそも、クリスマスにプレゼントを渡すその意味もいまだ理解できない。

宗教的にもその日の意味をわかっていないのだから

そんなお祝いをすべきではないだろう、と和は思う。

とにかくそういうものだ、と言われても性格上承服できるはずもなくだから和はそういったイベント事すべてが正直あまり好きではない。

バレンタインも、何故チョコレートを贈るのかわからない。

単なるお菓子会社の商戦に過ぎないと思ってしまうえばそれまででならばそれに踊らされてなるものか、とひねくれものの彼女は思う。

和の漫画や音楽や映画が、

サブカルチャー文化を愛してしまうのは、

ひよっとするとこの素直じゃない性格のせいなのかもしれない。

和にとってこの季節というものは

クリスマス、年末明けにむかって子どもがお金を持つ事からゲームが大量に発売されるといふ事意外重要ではなかった。

年末商戦には魅惑的なタイトルが軒を連ねる。

新機種だつて出てしまうその時期はまさしく勝負のときといえよう。

そんな彼女が正月にきちんと初詣に出かけるのは

自分が日本人であると毎年自覚し確認する為である。

そして神様をお願い事というものを、和はしたことがない。

無神論者を語る彼女にとってそれは無意味なものでしかなく、

いるんならいるでいつもお疲れ様です、という意味を込めて賽銭をなげる。

なんとも罰当たりな話だ。

しかし日本人だとそこに行つて自覚する自分は

ひよつとしたら八百万の神という概念はどこかあるのかもしれない。それをほんのちよっぴり認めるからこそ賽銭を投げるのかもしれない。

けれども宗教的な事にはやはり関心はないので

特にそれ以外なにをするでもなく、彼女は帰っていく。

初詣も空いているときを見計らつていくので

毎年テレビで混雑具合をながめては、うへえ、とうめくのだった。

とりあえず、そういつた諸々の信念ともいえるべき考えを梓に伝えれば

梓は面倒臭い子ね、と一蹴した。

「面倒臭がりって言う割に、和のそういうこだわりってものすごく面倒よ、普通の人間からすれば。」

「はあ、そう?」

「そうよ。だってクリスマスやバレンタインデーに意味を求めるほうがどうかしてるわ。」

「恋人が幸せになれる日って思っていればいいのよ、素敵じゃない。」

「……………」

「ちよっと、今、小声でくっだらねーって言ったわね!？」

梓が憤慨しつつ、和の胸倉を掴むので

和はゆさゆさと揺さぶられつつもなんとかそれを否定する。

「え、いやいや言っていないですよー？」

そんな他力本願じゃなしに自ら幸せにおなりよ、とか思ってもないですよ?」

「皆が皆、和みたいに強固なハートの持ち主じゃないの!」

頼りたくもなるのよ、そういうものに後押しされて

気持ちを伝えられる人間だっているの、世の中には!」

その言葉に、和はにや、と笑む。

そうか、なるほど、そういうことであつたか。

梓はたつた今自分がしてしまった失言に固まれば

慌てて和の胸倉からその手を離れた。

「告白するんだ?託に。」

「…まあ、その、」

「でも託もどつちかといえは私寄りの考えだと思つよ。」

あいつと親しくなつてからもそういうやり取り一切したことないか

ら。」

「…それは、なんとなく想像つくわ。」

「託斗は男だし、そういうものに疎そうよね。」

「そのさ、男はイベント苦手女は大好きって偏見じゃない？」

「私そういうのほんっと駄目なんだけど。」

「うるさいわね。」

「まー、なにか贈るってのは良いと思うけど。」

「託斗の場合私みたいに嫌いとかじゃなくその概念自体がないだけだから。」

「今日ってなんかあったっけ？みたいな感じ。大物だよー。」

「ああ、それはすっごくしっくりくるわ。面白い男よねつくづく。」

「梓さんはいいの？そういう人が恋人で。」

「かまわないわ。一緒に過ごす約束してくれるなら。」

「あー…事前に言えば確かに了承はするだろうな。」

「でもそれでいいんだ。そういうもん？」

「そういうもんよ。」

「ふうん…。」

「やっぱり理解できない。」

「和は心底そう思ったが、その横で梓はなんだか遙に同情しなくなったのだった。」

「で、プレゼント選びか。」

「なにかない？」

「うーん…あいつの趣味って読書以外ないからなー。」

「本だとかやっぱり嫌なの？」

「嫌ではないんだけど…なんというか色気がないのよね。」

「色気っすか。」

「本で、一回読んだらしばらくは読み返さないでしょう？」

「それこそ気に入らなければ本棚に眠ったまま終わるわけだし…」

「なんていうか、毎日目に付くものだったら」

「それを見るたび私を思い出してくれる、かも、しれないじゃない？」

『乙女め。』

ふう、と吐いたため息にまたも梓が抗議する。

今のは梓にとりより自分に呆れたというのが表に出てしまったので誤解であるのだが。

遙が、自分は愛されていない、と嘆く理由がわかった気がする。

和はこういうところがどうしたって皆無だから

きつと彼にとってはわかりにくいことこの上ないだろう。

本当、何故自分を好きになんてなってくれたのだろうか。

さっぱりわからない。

ひよつとしたら、それに嫌気がさしたのかもしれない。

大いにありうると思ってしまうものの

しかしそれを直すのは苦痛でしかない。

遙の隣に居るのは幸せだけれども、苦痛を伴う幸せというのはどうなんだろう。

それとも、やってみれば案外苦痛でもないのだろうか。

和がぼんやりとそんなことを思っていたら、梓が和の肩をたたいた。

「和ってば！どうしたのよ、ぼんやりとしちゃって。」

「ん、ああ、ごめん。…私って女として駄目だなと改めて思っ

てね。」

苦笑いで和が梓へそう告げれば、今までの言葉がまずかったか梓は慌てた。

「和はそのままでもいいのよ。」

だって遙は和がありがりのままで傍にいる事を望んでるんだから！」

「…そうかな。恋人っていう存在にはすごく不都合じゃないかな。」
「なによ、和らしくないわね。自分の信念を貫かなくてどうするの？」

「梓さん…：うん、そうだよね、ありがとう。」

なんだか気を遣わせてしまった。

梓にむかって大丈夫だと微笑めば、ほ、と彼女が息を吐いたので和はそれに安心する。

確かに、そうだ。

遥が自分をそのまま認めてくれた以上、それを信じたいし
もしも譲れない部分が彼にもあるのだとするならば

それを教えて欲しいと和は思う。

そのうちまた、彼と話をしよう。

そう決意した和は、とりあえず目の前の相談事をどうにかしようと思
気持を切り替えた。

「…あ、そうだ。ひとつあるよ。」

「え？」

「毎日使ってもらえる使い捨てにならないモノ。」

「ほ、本当!？」

梓の問いに和は頷く。

「葉。」

「え、それって、本の？」

「そうだよ。ちょっと高価なやつだと頑丈だし、
デザインも色々あるからいいんじゃないかな。」

それこそ、本とセットにしてプレゼントするんでも良いと思う。
「なるほど…：良いかも。そうと決まれば！」

どれがいいのか付き合って!!」

「え、ちよつと、梓さ」

「本については和に任せるから選んで頂戴ね！」

菜は私が選ぶからアリかナシかの判定を横からくだして！」

「いやそんな急がなくても逃げないから」

「さつさとつとと行くわよ！なるべくたくさん見るんだから！」

そう言っつて鼻息荒く和をひっぱる梓はとても可愛らしくて

片想いなのに幸せそうな彼女が、和はどこかうらやましかった。

第五十九話「その理由（わけ）を教えてください。その1」（後書き）

私の憂鬱。と並行して連載中なので

前よりは更新頻度が落ちると思いますが

なるべく三日以内には次の話が更新できるよう頑張ります。

第六十話「その理由（わけ）を教えて。その2」

「和、今日は本当にありがとう、助かったわ。」

「いいよそんなの。良かったね納得のいくものが用意できて！」

シヨッピングモール内のレストランにて晩ご飯をとっているふたりは笑い合いながらその時間を楽しんでいた。

幸せそうにラッピングされた贈り物をながめる梓は本当に可愛らしいと和は思う。

「託斗、受け取ってくれるかしら。」

「今度はそんな心配？大丈夫だよ、」

託、会話する相手には基本無防備で優しいから。

受け取らないなんて絶対ないと思う。」

「そう…和は、託斗の事なんでも知っているみたいね。」

先程まで笑っていた梓が今度はみるみるうちに不機嫌になっていく。

和はその意味が一瞬理解できずに首を傾げたが

次にはああ、と納得する。

しかし、恋する女性は忙しいものだ。みていて飽きないが

おもちゃにすればこれまたへそを曲げてしまうので扱いがむずかしい。

和は少し苦笑すれば、梓の鼻をきゅ、とつまんでやる。

それに梓がきゅあ、と悲鳴をあげた。

「私ね、託が初恋だったんだよ。」

「え…!?!?」

衝撃的な事実には梓が目を見開く。

しかし次には傷付いたような顔をするので和はこら、と声をあげる。

「話は最後まで聞いて。」

お互いに、なんとなくなーくだけど向こうもそう思ってくれてるかも、なんて小さいながらに感じていた。

でもさ、特になにかが実る事はなかった。」

「どうして…?」

「それ程、相手の気持ち信じられなかったし自分の気持ちも信じられなかったから。」

「それは…どういう事?」

わからない、というように梓が首を傾げるので和はにっこりと微笑んだ。

「好きだと告げる程気持ちは育っていなかったし

相手と同じ気持ちだと確信出来る程信頼してもいなかったってことだよ。」

その程度のね、関係なの、私と託は。男と女って意味ではね。」

「和…」

「梓さんだって本当はわかってるでしょ?」

「アイツはもう私の事、異性としてなんかみちやいないよ。」

「そうかもしれないけど…。」

「梓さん、気付いてないの?託が梓さんと話してる時だけ違ってるの。」

「え?そ、そんなのわからないわ!」

「まあ、いいけどさ。…うまくいったら教えてよ。」

協力したのに逆ギレされた身としては行く末が気になりますもの。」

「そ、それは…!ご、ごめんなさい。」

悪戯っぽく笑う和に、梓は顔を真っ赤に染め上げた。
こういうときの梓は、本当に素直な女の子だと妙に和は感心してしまふ。

自分にこれがひとかけらでもあつたなら、
遙もちよつとはマゾなんて言われなくとも済んだであろうかと。

そんな風に遠い目をしていれば

心の中で噂したからなのか、携帯電話が震えた。

今日みたいな出かける日は忘れないように懐に入れておくように、と
遙だけではなく家族にも言われた和は

帰りが通常よりも遅くなる日は忘れない限りそれを心がけている。

今日はきちんと制服のポケットに入れておいた携帯電話は
きちんと和にその振動を知らせた。着信者の名前は、遙だ。

「…ごめん、電話だ。出ても良い？」

「ええ、かまわないわよ。」

「ごめんね…もしもし？」

和が通話ボタンを押せば、聞きなれた声が電話口から響く。

『和？今どこにいるの？』

「え？どこってS駅に梓さんとふたりでいるけど…」

『帰りは方向別だからひとりでしょう？何時になるの？』

「え、これ食べ終わったら梓さんとは別れる、けど。」

『その言い方だとしばらくひとりでぶらぶらする気でしょうっ…』

「う、うん。そうだけど…なんで？」

『週末だし、酔っ払いにでも絡まれたらどうするの？』

そろそろ帰らなきゃ駄目だよ。』

「そんなに心配しなくても。まだ20時前だよ？」

和はちら、と腕時計を確認する。
時々だが遙はこういう電話をかける時がある。
和はそのたびに父親より厳しいと思わなくもない。
どうして彼はこうも心配性なのだろうか。
行動を制限されることは、和にとってあまり喜ばしい事ではなかつた。

『和。21時までには家に帰るよね?』

「う、うん。帰るよ。」

『…本当に?』

「和泉君、しつこい。梓さんが目の前にいるのに長電話させないですよ!」

もう切るから、じゃあねっ!」

苛立ち任せに和は携帯電話を切れば、そのまま電源を落とした。

「ちょっと、和、大丈夫なの?」

「なにが?」

「遙、心配して電話してきたんでしょ?」

「別に大丈夫だよ。大体、梓さんだって出歩いてるのはいつしよなのにな」

まったく腹の立つ!」

「しょうがないわよ、遙は和が心配で仕方ないんだもの。」

「…レイトショーでも観て帰ろうかなあ。」

「は?」

「22時に終わるのだったら高校生でも観れるし。」

「ちよつと和、」

「いいの。今までだって別に親にはなんにも言われた事ないんだから。」

私は自分の事をとやかく言われるのは嫌いな!」

普段であれば、これほどまでに苛立たないかもしれない。けれど今日は和の中にわたかまる不安や不満がせめぎあい、結果、遙への怒りが形作られてしまうことになった。

「ならせめて私も付き合おうよ。なに観るの？」

「いいよ、梓さんの趣味にはきつと合わないから。

私は他人に興味を強要するのも好きじゃない。

というわけでここで解散しよう。じゃあね。」

「あ、ちよつと和！」

ばん、とテーブルに自分のぶんの代金を置いて、和は店をあとにする。

食い逃げするわけにもいかないので、梓は慌てて会計をして和のあとを追おうとしたが、

人混みにまぎれてその姿がみえなくなってしまった。

束縛されるのが嫌だというのはわからなくはない。

けれども今日の彼女は少しばかり様子がおかしかった。

そう感じれば、梓の胸には不安が広がっていった。

梓と別れたあと、和はやけくその中にも機嫌が直っていくのがわかった。

ちよつと観たいフランス映画があったのだ、ちよつどいい。

この機会にそれを観てしまおう。

フランス映画は、全体的に好きだ。色彩が繊細で、実にシニカルである。

毒のある中で笑いながら生活するのはきつと魅力あふれる毎日に違

いない。
直るどころか上機嫌になってきた和の映画館へ行くその足取りは軽かった。

「あの、大丈夫ですか？」
「えっ!?!」

上映が終わって、いつものようにぼうつとしてしまっていたのでまたほとんどの人が退席したのに気が付かなかった和は係員に声をかけられる前に隣に座った男性に肩を叩かれた。

「す、すいません。気分が悪いわけではないので。」
「ああ、良かった。立てないのかと思ってしまっ…。」

にっこりと微笑むそのひとは、スーツ姿だった。
仕事帰りにその足で映画館へとやってきたのだろう。
彼にとってこの時間は有意義なものであったのだろうかとぼんやりと考えた。

お礼を言いつつ、和と男性は映画館の外へと歩を進めた。

「いつもああなんですか？」

「え？ああ、さっきの状態ですか？」

いえ、つまらない映画を観たあとにはなりませんよ。

良い映画だったなーと思うとしばらくぼんやりしちゃって。」

「そうなんだ。でもそれわかるな！。」

これ、すごい良かったですもんね。僕も好きでした。」

微笑んだ男性は、和が高校の制服を着ているにもかかわらず敬語をくずさない、なんとも腰の低いひとだった。

笑うその顔はほんわかとしていて、いかにも優しいお兄さん、といった風情だ。

「でも、高校生の女の子がこの時間にひとりで映画は危ないですよ。」

「う、す、すいません。ちょっと、急に観たくなっちゃって…。」

なぜだろうか。

このひとに説教されるのは素直に受け入れられるのに遥から言われたあの言葉はなんとも不快に感じてしまった。

「家は近いんですか？そうじゃなかったら迎えのひとを呼んだほうがいい。」

「ここらへんは酔っ払いに絡まれやすいから危ないですよ。」

「はい…なんか、重ね重ねごめんなさい、ありがとうございます。」

「いや、僕も初対面のひとにあまり言いたくはないんだけど…」

「同じ年頃の妹がいるものでね、ついつい世話を焼きたくなってしまつて。」

「へえ、妹さんいらっしやるんですね！何歳ですか？」

その問いに、男性が口を開きかけたときだ。
なにかに気付いた彼が目を見開いて和の後ろを凝視した。
和がそれを疑問に思っ て同じように振り向けば、
そこには凄まじいオーラを放つ見目麗しい男が立っていた。

「い、ずみくん!？」

あまりにも恐ろしいその形相に、すつとんきような声をあげてしま
う。

「和!なにやってんだよ。」

「いたつ、ちよつと、腕つかまないと痛いじゃん!」

「映画は楽しかったんだろう?満足したんなら帰るよ。」

「言われなくても帰るよ、ちよつと腕はなして!」

ぱつと和は遙から自身の腕を取り戻せば、
男性のほうへと身体のみきを変える。

「あの、色々とありがとうございました。」

「いいや、彼氏のお迎え?良かったですね、これで安心だ。」

ふふ、と笑つと、お兄さんは遙に軽く会釈してその場を立ち去った。

「…ナンパされてたわけじゃないんだ。」

「…つたく、馬鹿じゃないの!？」

なんでもかんでもそつちに結びつけるのやめてよね!」

「ばつ…あのねえ!俺がどれだけ心配したと思ってるの!..!」

「そんなの、頼んでないし。」

口を尖らせて和がぼそり、と呟けば、遥は苦しそうに顔を歪ませてはあ、とため息を吐く。

「携帯の電源を怒ると落とすの、やめて。本当に気が狂いそうになる。」

「…行動を制限されるの、嫌いなんだもん。」

「わかってるよ。俺の言い方も悪かったよね？ごめんね。でもね、どうしたって心配なんだよ。和の事を、考えてない時なんてないから。」

「和泉君、それは…ちよつと。」

「わかってるよ、俺が重いのもウザいのも！」

でも和は受け入れちゃったんだからもう返品不可だからね。」

そう言つて遥はぐい、と和の腕をつかんで
痛いくらいに和の身体を抱きしめた。

ひえ、という悲鳴を和があげても、遥はそのままの状態だった。

「遅くなる時は、連絡して。いつでもどこでも迎えに行くから。出かけるなどは言わないから。」

「そんなの、和泉君に負担が「和。」

拘束を解くと、和の頬を遥の両手で包み込めば、
ぎろり、とその綺麗な双眸で和の顔を睨みつける。

「わかってないね。今日みたいにどこにいるかわからないで
家でおろおろしているより余程負担になんてならない。

梓が連絡くれなきゃ、俺は色んなところ探し回るつもりだったんだから。」

「え、梓さんが和泉君に連絡したの!？」

「そうだよ。まったくもう、どんな別れ方したの？」

随分と心配そうな声だったよ、梓。」

「うわ、梓さんに連絡いれとかなきゃ！」

「俺が迎えに行く事は伝えたから大丈夫だよ。」

「……たたく、俺のこともちよつとは労わってくれてもいいんじゃないの？」

「……その、ご、ごめん？」

「疑問系が余計だなあ。」

「だって、やっぱり！」

ああやって楽しい時間に水を差されるみたいなのは、好きじゃ、ない。」

尻すぼみになりつつも、和は思った事を率直に伝えれば

それでも自分が我儘だという自覚があるからか、顔を俯かせた。

遥はその様子に、そ、と和の頭を撫でる。

「うん、そうだね。俺ももし友達と出かけていてあんな電話かかったら

良い気分じゃないって思う。和の事をもっと考えれば良かった。

それでも、約束してほしい事があるんだ。」

「……約束？」

「そう。もしも今日みたいな時間になりそうだったら、

俺に連絡してほしい。もう俺から電話を入れたりしないから。

それじゃあ、駄目かな。」

「……………」

確かに、それならば自分が嫌な気分にはならない。

けれどもそれだと結局、和が遊びに行つて自由でいられる時間はせいぜい21時がいいところか。

高校生の身であるし、今までそれに対して不満はなかった。

けれどもこんな風に言われてしまうとどこかが不自由に感じてしま

うのは
なぜなのだろう。

「私、そんなに危なっかしい？」

「そうじゃないよ、俺がただ心配なんだ。」

「今日みたいな時間だったら、連絡するのは良い。」

「それって22時にならない限り連絡しないって事？」

「……………自分で帰るのは危ないって思ったら連絡するから。」

「和。」

「ねえ、大丈夫だよ、ちょっとは信じて。」

だってそんな風にされたら、私なんにもできなくなっちゃう。

和泉君と付き合った事で、不自由を感じるなんて嫌なの。」

「……………。」

頬に乗る手に、和も自身の手を重ね合わせた。

遥の顔をじっとみつめれば、どこか泣きそうな顔を彼がする。

それでもなんとか無理に笑った顔を遥が作れば、

和の心はどこかがひどく軋んだ。

「帰ろう。」

「…うん。迎えに来てくれてありがとう。」

それに遥は小さくかぶりを振り、和と遥はどちらかともなく手をつなく。

それだけを見れば仲睦まじい恋人同士にしか見えないはずなのに
今、ふたりの間には確実にどこか溝のような何かできてしまった
と思えば

和は不安に苛まれる胸を誤魔化すかのように

滅多にない行動でありながら自身から握る手の平に力をこめた。

その様子に、遥は一瞬びくり、と肩を揺すったものの、
遥も同じようにその手に応えた。

「俺はね、和を嫌いになる事は一生ないから。
それだけは、覚えておいてほしいんだ。」

この世に、絶対はない。

それにあぐらをかいて、傲慢になるのは嫌だ。

そう言いたかったし、和は実際そんな自信も思い上がりもない。

けれどもそんな風には話せずに、和はただ無言で頷くしかできなかった。

帰り道はほぼなにも話すことができずに、

しかし彼は家まで送るといつのを頑として譲らなかった。

和も、今日はそこまでの抵抗をみせることなくおとなしく家路へと
ついたのだった。

自室でぼんやりとベッドに寝そべって、今日一日を反芻する。

自分は、彼がそこまで好きだと言ってくれる対象たりえるのだろうか。

そこまでの価値を、何故、彼は自分に感じてくれるのだろうか。

あんな風に傷付いた顔をさせたかったわけではない。

出来ることなら、遥がそうしてくれるように

和も遥を大切にしたいと思うのに。

遥が自分を好きだと言ってくれる事実と、

遥が自分を避けている事実。

一体どちらを信じれば良いのかわからずに

和の頭はただただ混乱するばかりだった。

今夜は、眠れそうもない。

まさか恋人の事で悩み眠れぬ夜を過ごそうとは、
人生でそんな経験をすると思ってもみなかった和は
自嘲するようにふ、と小さく微笑んだ。

部屋には、大好きな静寂だけが横たわって和をみつめている。

第六十一話「その理由（わけ）を教えて。その3」

結局、暗澹とした気分のまま、和は週末を過ごした。ため息混じりの月曜日は、どうにも気分が重い。

遥からの連絡はなく、それもまた和を悩ませた。

結局、自分自身でもどう処理したら良いのか分からないのだ。

和にとっての自由とはなんなのか。束縛とはなんなのか。

遥に縛ってほしいのか、ほっとしてほしいのか。

気持ちが見えれば、こんなことを悩みもしなかったのかもしれない。けれども今の状態では、どうしたって細かい事で確認したくなってしまう。

付き合いが限界にきているのだろうか？

そんな事まで思い始めてしまえば、いよいよ重症だ、と和は落ち込んだ。

『ええい、もう、悩むのも面倒くさい！』

和は半ばやけくそ気味にそんなことを思えば、遥にメールをしようと思気込んだ。

昼休み、屋上で話がしたいのでふたりきりで昼食をとらないか、というものだ。

遥から了承の返事がきて、和はほっと安堵の息を吐いた。

「なんか、ここにふたり並ぶのちょっと久しぶりじゃない？」
「そうかもね。」

少し固い表情で笑う遙が、和はどうしたって気になる。
いつものようにふたり並んで壁によりかかり座っているというのに
遙は微妙に和から距離を取っている。

いつもならくつつくなといってもびったりはりついて隣に座るのに、
今日に至ってはひと一人分は入れるくらいの隙間ができていた。
これがまた、和を不安にさせる。

「…あの、金曜日ごめんね？あんな言い方しかできなかつたけど、
ちゃんと反省してるから。これからは、遅くに帰ったりしないから。」
「そんな、俺のが悪かったから。気にしないで。
でもそう言ってくれて良かった。」

遙がにっこりと微笑んで和をみつめる。
それが嬉しいけれど、距離がなんだか寂しくて、
和は気付けば遙の近くに寄り添っていた。

それに遙が少し強張った表情をしていたが、
和はかまわずにぴたりとくつつく。
そうしてにっこりと微笑めば、和は昼食を口に始めた。

遙が少し物言いたげに口を開きかけたものの、やがてなにか音を発することもなく同じようにご飯を食べ始める。

沈黙が続けば、普段は気にならないのにそれがやけに重かった。なにか話題はないかと探すも、

思考は焦るばかりでなかなか上手く回転してはくれない。

それでもなにか言わなければ、と焦る和はほぼ考えることなく思ったことを口にした。

「あの、そういえばね、香苗さんがね、今度遊びにいらっしやいて。

和泉君抜きでもいいからって言われてなんか笑っちゃった。

おかしいよね、和泉君の実家なのに。」

「え？母さんといつの間に話したの？」

目を丸くする遙に、和はふふ、と笑った。

「私もねー、香苗さんとメル友になったのさ！

すごいよ、返信がね、早いんだよ香苗さん。若いよねー。」

「そんな事になってると思わなかった…本当に切り替えが早いというか。

すっかり気に入られちゃったね、和。」

「駄目？」

「ううん、すごい嬉しいよ。和が嫌な思いをしなくて済んで大切な人同士が仲良くなってくれるのはすっごく幸せ。」

遙の言葉に、ふんわりと心が温かくなる。

やっぱり、彼は自分のことを疎ましく思っているわけではない。

そう解釈すれば、少し余裕も出てきた。

きつと、なにか事情があるのだ。自分を避ける事情が。しかしそれならば話してくれた方がいいのに、と和は思う。もう少ししたら、訊いて見ようか？

「あのプチ図書室も、実はすっごい興味があつて。

一度ゆっくり見てみたかつたんだよねー。

昌さんの趣味なんでしょ？どんなラインナップが並んでるのか見るだけで時間なんか過ぎちゃいそう。

彼の文章を形成した一部があそこにおさまってると思つたらさ。」

小説家である和泉昌の愛する書物。それが気になつての発言だったが遙にとっては気に入らなかつたのだろう。

彼の周りの空気が一段低いものになつたが、和は興奮して気付かない。

「…好きなんだよね、父さん。」

「の、小説がね。ああまあ、人としても面白いなとは思つけど。

和泉君がどんな育てられ方したのかつていうのも訊いてみたいなあ。それこそあのひとの興味つて面白いで埋め尽くされてるわけでしょう？」

くつくつと笑う和に遙は我慢できなくなつたのか、

予告することもなく和の顔の前に遙の顔が迫ってくる。

一瞬和は身をひいたが、後ろは壁なのであまり意味がない。

あつという間に口付けをされ、しかし嫌がる事無く和は目をつぶつた。

それを遙は了承だととらえたのだろう。

遙はそのまま和の唇から自身のそれを離すことなく

彼のほうへ和の身体を抱きこんだ。

後頭部をおさえられ、深くなる口付けに和は眩暈を覚えれば、身体力が抜けてなにも考えられなくなってしまふ。屋上にふたりの荒い呼吸音と、唾液が混じる水音が響き渡れば、そのいやらしさに和は顔を赤く染め上げた。

いつもならば、遥は可愛い、とか、好きだ、とか囁いてくるものだが、今日に至っては無言で和の口腔内を貪るばかりだ。

和はふとそれが怖くなって遥の胸を軽く押す。

しかしそれが気に入らなかつたのか、遥は和の両手をとれば、勢い良く和ごとその身体を横たわらせた。

押し倒されたのだ、と認識して、和は驚きに目を見開く。遥の唇は首元を這いまわり、右手はスルスルと和の制服のボタンを外していった。

上着、セーターとボタンを外されたところで、遥の手が和の服の中へと侵入してゆく。

「ちよつと、和泉く、やめ…あつ！」

ブラジャーをたくしあげられて、直接そこに触れられれば、和の身体にびりびりと電流が走つたような感覚がする。そのまま首元まで下着如たくしあげられれば、明るい中で和の胸が露になる。

羞恥のあまり必死で隠そうとする両腕を、しかし遥はゆるさずに左手一本で和の両手をまとめあげれば彼女の頭上でおさえつけてしまふ。

遥の舌が、和の胸を這い回りだせば、和の瞳にはじんわりと涙が浮かんだ。

怖くて、でもどこかが熱くなって、どうしたらいいのかわからない。このまま、ここですべて暴かれてしまふのだろうか。

けれども遥は、外では決して行為に及ばないといつか和に言っていた。

「和泉君、お願い、やめて、あ、や、やあ…！」

「どうして？和は俺のものでしょうか？」

「ど、うして、って…きゃああ！」

和の身体が、強い快感に襲われ打ち上げられた魚のようにびくり、と反り上がった。

遥が胸の蕾を口に含んだのだ。

最初はそろりと舐めあげるだけだったが、

やがて吸い上げられたり、時には甘？みしたりと和の身体に容赦ない刺激を与えていく。

「あ、や、や、あ、ああっ！」

あげたくもない嬌声が和の口から間断なく漏れ出せば、

遥は口角をあげて妖艶に微笑んだ。

「こんな声を聞いたことがあるのは俺だけでしょう？」

和の女の顔を見れるのは、俺だけだよな？」

「も、う、やめ、てえっ…！」

「和、言って。俺が好きだって、俺に教えて、いっぱい。」

熱に浮かされたような遙の声を、和は素直に愛しいと感じる。どうしてだろう。自分のなにか悪いのだろう。

そんなに、遙は自分と居て不安ばかりしかないのだろうか。

それともただ、自分を怯えさせて自然消滅を狙っているのだろうか。わからない。考えてもなにも答えが出せない。

それでも。

今この瞬間、彼の問いに答えてあげたいと、和は思った。

「遙あ…好き…!!」

「!!」

精一杯の心で、和が声を上げれば、拘束していた遙の腕が和を解放した。

和は安心して先程よりもたくさんの涙をぼろぼろと瞳からこぼせば、遙はその双眸を大きく見開いたまま固まっている。

「俺は……………」

「和泉君…?」

恥ずかしくて隠したいのに、身体が自由に動かさなくて

和はその醜態をさらしたままだ。

遙はそれを直視できなかつたのか、苦しそくに顔をそらせた。

「ごめん。」

一言そう告げて、遙は屋上を足早に去って行く。

こんな状態で放置されたことが信じられなくて、和は呆然と出入り口をみつめた。

しかしもしもひとが入ってきたらと考えれば、

和は慌ててシャツと下着を元の状態に戻す。
さらされていた胸が隠されたことにほ、と息を吐き、
和はのろのろとボタンを留めていった。

その間も、涙は止まることなく、和の頬をつたっていく。

『ごめん？なにが、ごめん？この行為にたいして？
それとも……私とは、もう、って、ことなの？』

考えるのが怖くて、それでも思考は止まらなくて、
和は流れる涙を必死で止めたいと思うのに
それどころかついにはこらえきれずに声を出して泣き出してしま
った。

11月終わりの屋上はすっかりと冷え込んで、
泣く事でよりいっそう和の体温は低くなっていく。

先程の温もりは、みるみるうちに和の身体から影も形も消えていっ
てしまった。

「和。」

「？託、どうしたの。」

「お前だろ。」

放課後、帰ろうとしていた和を止めた託斗に
何を言われたのかと和はしばし目を丸くするが
その言葉を噛み砕き、やっと意味を理解したと思えば和は微笑んだ。

「大丈夫だよ、どこもおかしくしてない。」

「和泉と、喧嘩でもしたのか？」

「だから、大丈夫だって。託こそ、最近なんかそわそわしてない？」

その言葉に、託斗はぽ、と頬を赤らめる。

その顔が信じられなくて和は驚愕に目を見開いた。

なんなら写真におさめたいくらいに珍しいことである。

あの託斗が、顔を赤くするなど。

今までのつき合いの中でおおよそ考えられない反応である。

和はこうまでさせた梓にいつそ拍手を贈りたい、と考えるほどだった。

「ちょっとー、なに考えてその顔なの？」

託のくせに可愛い反応しちゃってー、初々しいのう。」

「おい、やめろ。不愉快だ！」

普段からかう事の出来ない相手をそう扱えるのが楽しくて

つついし和は軽口を叩いて託斗の顔をのぞきこんでしまう。

しかし託斗はそれが心底気にいらないと感じれば

苛立たし気に顔をそらして眉根を寄せた。

そのとき、教室の出入り口でがたん、と物音がした。

ふたりしてそれに気付き振り向けば、そこには顔を蒼褪めた梓が立っていた。

和はこの間の一件を思い出さずい、と考えるも一足遅く、
梓は無言で廊下を走り去ってしまった。

「やば！託、追って！」

「は？なぜ。」

「傷付けたの、梓さんを！いいから追っかけなさい！」

ついでに、思ってること全部伝えておいで。骨は拾ってあげるから

！！」

「…わけがわからん。」

「見つけるまで諦めるなよ！頑張れ！」

首を傾げつつもわかった、と短く返事をして託斗は梓を追いかけた。

それに和はほう、と息を吐く。

託斗とは、これから少し距離を置くほうがいいかもしれない。

いや、ひょっとすると梓とも。

「……恋する乙女は複雑だねえ。」

やれやれ、という風情で呟くも、和はどこか羨ましいと思った。

自分の欲望に素直で、可愛い。

ああいう女性ならば、愛しやすいし愛される事が必然のように感じられる。

自分は本当に、なにをするにしても不器用だ。

やっぱり、むいていないのかもしれない。

教室に少し残った面々は、野次馬根性よろしく何人かが後を追おうとしていたが

和がさすがにそれはやめておけ、と一喝するとおとなしく下校していった。

まったく、どれだけゴシップ好きなんだか。

苦笑いしながら、

また彼らに提供するネタが出来てしまいかもしれないと考えれば

和の心はずきずきと痛むばかりだった。

「和ちゃん、どうしたの？」

「え？」

「ご飯もあまり食べてないじゃない。具合が悪いの？」

「そんな事ないよ。大丈夫。ちよつと食欲がなくて。」

「…遥君、最近来ないのね？」

依子の言葉に、和はびくり、と反応を示す。

それを見逃す事無く、依子は娘の様子をうかがった。

「ね、和ちゃん。溜め込むと、疲れちゃうばかりよ。」

「…お母さん。」

「悪いと思ったら謝ればいいし、なにか訊きたかったら訊けばいいのよ。」

「簡単なことだわ。」

「……………うん。」

確かに、言葉にするととてもシンプルだ。

けれども、今の和にはそれが果てしなく難しいことだと思えば躊躇わずに入られなかった。

なおも沈み込む娘の手を、依子はそつと包み込めば
にっこりと微笑んだ。

「それが嫌なら、言葉にしなればいいわ。」

「え？」

「和ちゃんが心に澱を溜め込んでるんだって

遥君に態度で示せばいいのよ。」

私の可愛い娘をこんなにメロメロにしちゃった遥君に
お母さん、ちよつと嫉妬しちゃう。」

「お、お母さん…。」

なんともゆつたりとした口調でそんなことを言う母親を
しかし和は呆れるでもなく温かいと感じた。

いつだって愛情をくれる父と母を、どこか大物であると思えば
一生かなわない存在であるかのように考える。

「ね、不安でも、訊かない限りは答えなんか出ないわ。」

でも訊きたくないのであれば、むこうから話すように仕向けちゃい
なさい。」

「お母さん、私そんな技持ってないよ。」

ふ、と噴出す和をみて、依子は少し安堵の息を吐いた。

落ち込んでいるが自分の言葉をまったく訊かないような状態ではな
いらしい。

それならば、遥へのお咎めは軽くしておいてやろう、などと
不穏な事を考えていた。

結局、この母もすっかりと和を形成する一部なのである。

「ああ、簡単よ。和ちゃん演技は元々得意でしょう？」

「え、まあ、そうかも？」

「うふふ。だったらねえ、騙されたと思って言つとおりにしてみても、きっと楽しい事が起きるわよ。」
「う、うん。」

少し不安そうにする和に伝授された依子の案は、なんともいえないものだった。

「和、おはよう。」

「梓さん？随分早いね。」

「ええ、ちよつと。和に話したい事があつて。」

「私に？」

和はいつも通りの時間に学校へと訪れた。

ということは、人気がまつたくないといえるような時間という事である。

その自分よりも早く登校していた梓に面食らいながらも和は話があると言われて席へと着けば、梓も和の前方の席へと腰を落とした。

『…すっかり色んなひとに座られてるな向井さん。』

心の中でそんな事を思いつつ、和は目の前に居る梓へと目を向ける。梓は真剣な表情でこちらをみつめていて、そういえば昨日彼女と距離を置いたほうがいいのかもしいないかと考えた事を和は思い出せば、今打ち明けるべきなのだろうかと思悩む。しかしまずは梓の話を訊く事が最優先であると感じれば、和は口を開くことなく彼女の言葉を待った。

「昨日、ね。託斗と、その。」

もじもじとしながら言い淀むその様子にぴんとくれば、和は心の中で良かったと唱えていた。自分が間違っていないのならば、ふたりは。

「告白の言葉ってなんだったの？」

「え、好きだつて一言…つてちよつと！」

なんで付き合い始めたつてわかったのよ!!」

「いや、ばればれでしょう。へーそっかあ。

託はやつぱり男だねえ、いや、漢か。」

「…ごめんなさいね、昨日。」

なんだか余裕がなくなつてたのよここ最近。

不安ばかりで…どうかしてたわ。

これからも、私と友達で居続けてほしいのだけど…。」

「梓さんは嫌じゃないの？私と託が話してるのみのとか。」

「そんなの！もう気にしてないわよ。彼は私にきちんと心をくれたもの。」

和のおかげだわ、ありがとう。」

「そっか。それなら良かった。私こそこれからよろしく。」

にっこりと微笑んで和が言えば、梓も安心したかのように笑って頷いた。

和は、母に伝授された作戦を半信半疑で聞きつつも結局はそれ以外に縋るものがなかったので実行する事にした。しかしこれが及ぼす効果はまったくもってわからない。正直、他人の恋心に疎いとも思わないが自分が施す事で相手を翻弄できるなどと思ったことがない。

いや、出来たとしてもそれは自分への恋心ではなく自分の根性の汚さやその口の巧さによるものだと思っている。だからこそ、こんな作戦が果たしてうまくいくのかどうかと和は疑問だった。相手が自分に傾倒しているからこそ、成り立つような気がするからだ。

しかしそうこう考えている内に、和は2・7へと辿り着いてしまう。

『あああ、自分から来るのってそういうええあったっけ!?!』

なんなら初めてかもしれない、と思えば和は変に緊張してしまう。扉の前に立ってしばし逡巡する。入っていいものかどうかわからない。

遙は何故に堂々と他クラスへと足を踏み入れられるのだろう。ともすればこのクラスにおいての自分の認知とはどういったものな

のか。

それを意識すればする程、変な汗が出てくる。

「あれ？えーと、笹森さん。だよね？」

廊下側一番前の席に座る男子が、狼狽している和に気が付いて声をかけた。

それに一瞬驚いたが、

和は声をかけてくれたひとがものすごく人格者に思えてしまった。

「あの、私の名前ってそんな知られてる？」

「だってほら、このクラスはあの三人が集結してるからさ。

笹森さんの事を知らない奴なんていないんじゃないかなー。」

「そ、そっか。目立つもんねえ、あのひとたちは。」

三人、というのはいわゆる遥、浩平、梓の三人であろう。

しかし7組の男子はその物言いが面白かったのか、

和の前でこらえきれずに噴出した。

「そんな、他人行儀な！和泉君と付き合ってる上に

あとのふたりとも友達なんですよ？」

「え、いやあ、まあそうなんだけどさあ。

私の人生において永遠の命題とも言えるよね。いまだにわかんない。

あんな人種とは一生ご縁がないと思ってたもので。」

その和の言葉がますますツボに入ったのだろう。

今度は彼が高らかに笑い出すので、和は少し口を尖らせた。

「ちょっと、笑いとつたつもりないよ？」

「い、いや、ごめ…笹森さん面白れー！」

げらげらと笑う目の前の男に失礼な！と言いつつ軽口を叩けば和は本来の目的をすっかり見失っていた。それに気が付いたときには、和の視界にひとりの人物が広がって男子が急にその笑いをひっこめる。

遙が、和の目の前ですっかりと微笑んでいた。

「和、どうしたの？自分からこっちに来るなんて珍しいね？」

「……そうかもね。」

普段ならば、きっとその場で抱きしめられている。

でも遙は今それをする事もなく和の目の前に立つだけだ。

そこを不安に思うのも変かもしれないが、

すっかり今までの付き合いで遙の行動パターンを学習したと考えていた和は、こんな些細なことにも軽く驚いてしまう。

まったく重症もいいところだ、と心の中で自嘲した。

「で、なにか用事？」

「ああ、和泉君にはないよ。宮田君に話があったの。」

「浩平に……？わざわざ直接？」

「そうだよ。メールだと時間かかるし、

電話するなら会ったほうが早いじゃん。」

「用事ってなに。」

「和泉君には特になにも関わりない話だから、気にしないでよ。

……あ、でも休み時間もう終わっちゃうや。また来る。

宮田君に話があるって伝えておいて。」

「……………」

すっかり不機嫌な顔になった遙を無視して、

先程話しかけてくれた男子に目をむけた。

「あの、ありがとう、声かけてくれて。えーと？」

「あ、いいよ、そんな。」

「人にお礼を言うときはきちんと名前を訊くのが礼儀ってもんでしよう。」

男子は遥がすぐ傍で睨んでいるのをわかっていて泣きたくなかったがそれでも言い募る彼女に抵抗すると長引くとわかつているので口を開いた。

「こ、小林こぼやし！たいしたことしてないから！」

「そっか、小林君。いや、他のクラスって入りにくくて躊躇してたからさ、

本当助かったよ。ありがとう、小林君。」

「いや、き、気にしないで。」

につこりと微笑む和のその表情がなんだかとても可愛らしくて眼鏡の奥の素顔も、思ったよりも美人なのではないかと考えれば小林は顔がほんのりと赤くなるのを止められなかった。

「じゃ、私戻るわ。じゃね、和泉君、小林君。」

そう言って教室を去って行った和を、梓が自身の席で呆然とみつめていた。

和がまたもなにかを企んでいるのだろうかと疑っているのだろう。浩平を指名したあたりの理由はわからないが。

そう思って、梓は最近の遥がそういえばよそよそしいと気が付いた。和に対して、なんとなくだがいつもより距離を感じる。

そんな事にも思い至らない程に、今まで自分は託斗のことで頭がいつぱいだったのだと感じれば
なにか悩んでいたかもしれない友人に対しての
自分がしてしまった態度の数々にどこか落ち込んでしまう。

和と遥がまた揉めなければいいが。

そんな事を思っていれば、遥が小林の胸倉を掴んでいた。

「って、遥！やめなさいよ、ちょっと話したくらいで……！」

慌てて席を立ちふたりの傍に駆け寄れば、

遥は不機嫌を隠さずに小林の顔を睨みつけた。

「さつき、和の笑顔に見惚れてたよねえ、小林君？

わかってる？俺の恋人だよ、和は。」

「わわわわわかってます！」

「手を出したらどうなるか……身をもって体験してみるかい、小林君。」

「ととんでもない！！絶対にもう近付きません……！！」

「うん、その言葉、忘れないでね？」

ば、と手をはなし、遥はすたすたと自身の席へと戻っていく。

その様子に呆れて梓が小林へと謝罪をすれば

小林は顔を真っ赤にしながら無言で首を振るばかりだった。

「……にしても、和ってばどういっつもりかしら？」

次に教室に来たときにも訊いてみよう。

そう思っ梓も自身の席へと腰掛ける。

遥は無表情ながら落ち着いていると思っっていたが

時間ギリギリになって戻ってきた浩平に
鬼の形相で詰め寄る遙をみれば、授業に訪れた教師が目を剥いて
ちよっとした事件になってしまった。

和の行動が依子の入れ知恵であると遙が知る事になるのは
一体いつの話なのか。
それとも一生知らずに終わるのか。

なんにせよ、今日一番の被害者は、事情をなにも知らずに
巻き込まれてしまった宮田浩平そのひとであるう。
ついでに被害に遭ってしまった小林少年にも、
少なからずクラスの同情が寄せられたのであった。

第六十一話「その理由（わけ）を教えてください。その3」（後書き）

遥がへたれで最低男になりつつある件。

第六十二話「その理由（わけ）を教えて。その4」

「宮田君、ごめんね！」

「いや、笹森ちゃんのせいじゃないから、気にしないで。」

どうせならば、と再度訪れたのが昼休みだったのだが

2・7に足を運んだ瞬間、ぎよつとした。

何故ならば氷点下の冷気を漂わせる遙と、困ったような顔をする浩平が

視界にうつつたからである。

しかもよくみれば、浩平の顔が赤く腫れているではないか。

和がどうしたのかと訊ねれば、遙がそろそろと目をそらす。

それに目を光らせた和が問い詰めれば、遙が浩平を殴ったのだという。

驚いたやら呆れたやらで、遙に説教をかませばすっかりむくれて屋上へと向かってしまったのだ。

梓と浩平に大丈夫なのかと問われたが和は曖昧に微笑むだけでそれに確固たる言葉を紡ぐことはなく。

目を見合わせてなにか言いたそうにするふたりに待ったをかけて、今現在は、保健室に浩平をひっぱってきた状態だ。

「まさか殴ると思ってなくて…何考えてるんだろう、和泉君。」

「ああ、そうそう。話ってそれだよね？」

最近の遙、どうかおかしな思ってたんだけど。」

「うん、まさにそれ。あーこんな事ならお母さんの言うこと実行するんじゃないかなあ…。」

ため息混じりに和が呟けば、浩平は怪訝な顔をする。
ちなみに、今、保健室には教諭である岡元の姿はない。
お昼を取っているらしく、職員室で勝手に治療しろ、とのたもった
のだ。

氷で顔を冷やす浩平がなんとも痛々しい。

梓にはせつかくなので託斗とお昼をとればいいとすすめたので
今は望む望まないに関わらず、和と浩平のふたりきりだ。

梓には相談の内容を軽く話してあるので

後できちんと教えてくれと言われてその場は素直にひいてくれた。
託斗との事も、梓にとっては大事なわけであるし

付き合っただけの時間を明るく過ごしてほしいと和は思っている。

「和泉君さ、最近なんか変なんだよね。」

私の事を避けてるっていうの？なんでだかわかんないけど。」

「あー、やっぱり？俺も疑問だったんだよね。」

遥の奴、マジでなに考えてるんだか。」

「私は愛想でも尽かされたのかと思ってたんだけど。」

「まっさか。ありえない。あいつ俺になんて言ったと思うよ。」

笹森チャンとふたりきりで何か話したりしたのかってさ。」

「それで俺はなんもないうつてんのに嘔吐くなって。」

「それで、その怪我？」

「ちらり、と頬に視線をやったあと浩平の目をみれば、

浩平は苦笑してうなずいた。

「遥はいまだにしつかり笹森チャンに独占欲剥き出しだよ。」

それなのに愛想尽かすなんて事ないって。」

まあ、なんで避けてるのは遥に訊いてみないとわかんないけどさ。」

「それなんだけど。いつつもちから訊くのもいいかげん疲れちゃって。」

なんか最近そればっかだなあと思ったら。

それに私さ、やっぱり合わないのかななんて心のどこかで思っちゃつてもいる。」

「笹森ちゃん？」

「あれこれ探つて外堀埋めてって

やっと最後に観念するってパターンが嫌になってきちゃった。

私の事を信用してないからああうだうだ悩むわけじゃない？

正直、不安なら話してほしいのって思うよ。」

その言葉に、浩平は無言になったが

しばらくして納得したかのようにうなずいた。

「確かに、付き合ってからの問題って

笹森ちゃんが全部解決してきたような気がするな。

それこそ遙が愛想尽かされても仕方ないかも。」

「そんなんじゃないけど。」

なんていうのかねえ、とりあえず話してくれば一緒に考えられるけど。

きつとね、現時点だと怖いんだと思う。

私は案外臆病者だったみたい。もう嫌われたかな、ってどこかで思ったら

質問するのが怖くなっちゃった。」

「……………」

苦笑いする和を、浩平は不思議に思っていた。

彼女はとても強く、普通の女の子とはなにもかも違うのだと思っ
いて。

けれど目の前で恋人との別れを怖がる彼女は
なんとも可愛らしい女性ではないか。
そう思ったら、遙だけではなく自分でさえも無意識に
彼女を頼っていた事実が恥ずかしくも申し訳なく感じた。

「笹森チャン、ごめん。」

「え？な、なんで急に謝るの？」

「いや、ちよつとね。」

「でもお母さんの作戦って一体なんなの？」

「それが…作戦と言っていていいのかどうか……。」

苦笑いをして打ち明けた和に、浩平がぼかんと間抜けな顔をすれば
次にはげらげらと笑い出した。

「それ最高じゃん！すっげー！さすが笹森ちゃんのお母様！

うん、俺から梓にも伝えておくわ。絶対に有効だよその作戦。」

「そ、そうかなあ？」

「笹森チャン、今回は絶対に自分から折れちゃ駄目だよ。」

遥をちよつとは苦しませてやんな。」

「こ、これって、和泉君を苦しませる事になるの…？」

「まあまあ、見てればそのうちわかるよ。」

遥がどのくらい我慢できるか見物だなあ。

なにを考えているのかは、俺も探ってみるからまかせといて。」

浩平の言葉が遥の親友のそれと思えば

和はなによりも頼もしく思えて、久々に気持ちを浮上させることが
できた。

ちなみに、梓から受け取ったメールからも

和の母を絶賛するもので、この作戦のなにがそんなに凄いのか

和にはいまいち理解出来なかった。

こんなことをしたって、ただ遙が怒るだけではないのだろうか…。

首を傾げつつも、周りのみんなの後押しもあって

和は作戦を実行し続ける決意を固めたのだった。

次の日になって、遙が登校し自分のクラスへと着いたとき
目の前の光景を信じられずに我が目を疑ってしまった。

和が、浩平と談笑していたのである。

「そのときさあ、なんて言ったと思う？」

「えー、どうせ宮田君の事だから下品な返ししたんでしょう？」

「そう思っつて事は笹森ちゃんの頭がそういう事でいっばいなんじ
やない？」

「おおっと切り替えしてきたね。」

確かに宮田君をみていると歩くピンクと思わなくもないけどね。だから話してるときはスイッチがそっちになってるのは否定しない。

「え、俺そんなにそういう発言多かつたっけ？」

「自覚ナシ？いつか訴えられるよ！」

「残念でしたーイケメンはむしろ喜ばれるだけですう。」

その言葉に和が声を立てて笑えば、浩平の肩をばしっと叩く。なんだそのさりげないボディタッチは！

遥は自身の友人と恋人がどうこうなるなどと思っているわけではないが、それでも苛立ちを隠す事ができずにいた。

「…随分と楽しそうだね。」

嫌味っぽい口調になってしまった自覚はあるが

その声に和と浩平が振り向けば特に気にするでもなく朝の挨拶をしてきた。

「和泉君、なんでそんな怖い顔してんの？」

「…朝はこういう顔なんだよ。」

精いっぱい笑顔でそう言えば、和は呑気に

ああ、朝弱いんだっただね、などと返事をするではないか。

心の機微に鋭い彼女らしからぬ反応に遥は多少の驚きをみせた。

「さてと、私はそろそろ教室戻ろっかな。あ、和泉君ごめんね机。」

「いや…そんなものはまったくもってかまわないけど。」

「またも浩平に用事だったのだろうか。」

朝一番に会いに来るとは一体どういうことだろう。気になったがここで訊いたところでできつと昨日のように話してはくれないのだろうと思えば、遙は無言になる。

「あれ？まだ他に用事あるって言ってなかった？」

「あ、そうだ！本！！」

浩平の言葉になにかを思い出したらしく慌てて遙の机に落としていた腰を浮かせる和に、遙は声をかける。

「本がどうかしたの？」

「高橋君に前から貸そうと思ってたやつ。」

渡そうと思ってたのにまだ登校してなかったからさー。行ってくる！」

「え、和！？」

ほとんど遙と言葉を交わすこともなく和は教室を去ってしまふ。それに強烈な寂しさを覚えれば遙は思わず和の背中を追いかけた。

高橋は隣のクラスであるらしく、和は2・6へと足を運ぶと出入り口で高橋の名を呼んでいた。

自分のクラスに入るときはあれだけ躊躇していたくせに。それほどに高橋とはたくさんやりとりをしているということだろうか。

談笑する声に耳を傾ければ、本の話で盛り上がっているらしい。自分も、小さい頃から大量の本に囲まれていたのだから、読書を趣味にすればよかった。

しかし今更ながらそんなことを後悔しても、あまりにも遅い。

「じゃあね、いつでもいいよ。」

「うんありがとう。今度俺からもなんか持つてくる。」

そうして別れを告げたふたりは、それぞれの目的地へと戻っていく。教室に戻った高橋に手を振り、和も2・3へと戻ろうと身体を動かす。

そのとき、一瞬反対方向へ振り返る前に和が遙に気付いた。

視界にはいるとは思っておらず、少し狼狽する遙に、和は首を傾げれば

そのまま踵を返して教室へと向かってしまう。

「な、和！」

あまりの態度については我慢できなくなって、和を呼び止めた。それに反応を示して和がぴた、と立ち止まる。

「和泉君、なに？」

「なにつて。どうして気付いたのに声をかけてくれないの。」

「だって私が見ててもなにも言わないから。」

きつと私に用はないんだろうなと思っただけ。違うの？

「それは…用はないけど。少しでも顔をみたいと思っっちゃ駄目なの？」

「別に駄目なんて言ってないじゃん。」

いつもはそんなこと気にしないでくっついてくる癖に、変なの。」

和の言葉に遙は、ハツとして目を見開く。

彼女はなにかに勘付いていてこんなことを言うのだろうか。

そう思えば、和から目をそらしたくなってしまう。

しかしそうする前に、和が遙からはなれてしまった。

「私は教室に行くから。和泉君もそろそろ戻れば？予鈴鳴るよ。」
「…うん。」

返事をしたものの、和の後姿から目をそらすことができずに遙は見えなくなるまで彼女の背中を見送った。

昼休みはいつものようにふたりで過ごすがなんと遙は落ち着かない気分だった。

放課後の予定を訊けば和が今日は図書室という気分ではないので真っ直ぐに帰ると答えれば遙はうなずく。
いつものように一緒に帰ろうと和の教室へ向かえばそこには託斗と話す和がいた。

「本当良かったね。たくひやひやしたわ！」
「別に。」

「はいはい、心配したのは私の勝手ですよー。
今度さ、広末とも顔合わせだよ。久しぶりに！会いたいつつたよ。」

「ああ。梓もそういえば広末に会ってみたいと言ってたな…。」

「おおマジか。じゃあ四人で遊ぼう今度！

梓さんてそういえばなにが趣味なんだろう…私達につき合わせたら
退屈かなあ？」

「どうだかな。今度訊いておく。」

「うん、若干不安だけど任せた。」

「…余計だ。」

「あんたはもう一言くらい余計に話したほうがいい。

まーいいわ、じゃあ都合のいいときあったら教えてね。」

「ああ。明日な。」

「うん、ばいばい！」

楽しそうに手を振る横顔が眩しくて、遙は目を細める。

なんとなく声をかけるのをためらっていると、

気が付いた和が遙に近付いてきた。

「なんだ、いたの？お待たせ、帰ろうか。」

「…和、鈴木君と出かけるの？」

「え、聞こえてたの？盗み聞きって趣味悪いなー。」

けらけらと笑いながら廊下へと歩いていく和の言葉に
少し苛立ちつつ遙はそのあとを追った。

「聞こえてきたんだよ。で、行くの？」

「まだわかんないけど。広末と梓さんもいっしょだよ。」

「なんで梓が出てくる…ああ。やっと付き合い始めたわけ？」

「気付いていたの？一昨日からね。まあうまくいったみたいで良か
った。」

恋する梓さんてなんともかわゆらしいねえ。」

託斗の動向をいつそ神経質なほどつかがっていた遙だ。

最近の彼が梓に惹かれていることくらいとつくに気が付いていたしライバルがひとり潰えたのは喜ばしい。

まあ、若干ひねくれた祝福の仕方ではあるが、祝いたい気持ちに変わりはない。

しかしそこで、ふと遙は思う。

「……なんか、ダブルデートみたいだね。」

「はあ？」

「だって梓と鈴木君に、和と広末君でしょ？」

男女2対2なら周りから見ればそう思うじゃない。」

「あー、まあ、そうかもねえ。」

広末が託斗に前から久しぶりに会いたいって言ってたからさ。

一席設けようと思ったんだけど。梓さんも広末に会いたいって言うてたらしくて。

だったら四人で会おうかという結論にね。」

「…和の彼氏って俺だよな？」

遙の言葉に、和は首を傾げる。

答えてくれない苛立たしさとは裏腹に、

その仕草が可愛いと想着ってしまう自分が憎い。

「なんでそんな当たり前のことを訊くの？」

「…！」

殺し文句をそんな可愛い顔で言われてしまい、

遙は抱きしめて滅茶苦茶にしてみたい衝動に駆られるもなんとか堪えてぐ、と手を握りこんだ。

その行為に、和が傷付いているとも知らずに。

駅で別れようとしたら、和が上りの電車へとついてくるのでどうしたのだと訊ねれば、広未から帰り際にメールをもらい、本屋に行かないかと誘われたのだという。

その言葉に少し心が痛んだものの、遥はそうなんだと言って微笑んだ。

目的地で降りていく和の背中をみつめて、遥は思わずため息を吐く。まるで片想いのときのような感覚だと思えば、遥の心はせつなさに軋むのだった。

「……わからない。」

「なにがだ？」

「広未君、いきなり声をかけて自然に会話するのはやめなさい。」

「自然ならかまわない気がするんだけど。」

「まあ、待ち合わせしてたもんね。行きましよう。」

「だからさ、なにがわかんないんだよ。」

目的地へと向かうふたりは、歩きながらも会話を続ける。

「和泉君がね、またちょっと変なわけよ。」

「うん。」

「で、お母さんがね、私にとあるアドバイスをしたわけ。」

「へえ？」

「したらばなにかが変わるのかしらと思ったけれどもわからない。でも時々哀しそうにこつちをみるので効果はあるらしく。」

「…かいつまみすぎててなにがなんだかだな。」

「どうせ帰りに私の家寄るんだからいいじゃないの。」

「ああ、まあいいけど。」

遙との話題はそこで切り上げて、ふたりは本や映画の話に没頭すればすっかりそれに夢中になっていた。

少し離れたところで和と広未を凝視するひとつの影に、すっかり気付くことはなく。

少女は走り去っていくが、それを追う者はいなかった。

「和、託斗から話聞いたわ。校門の君に会わせてくれるって本当！？」

次の日の昼休み、少しはしゃぎながら教室に遊びに来た梓に和はぶ、と噴出した。

彼女はいつまで広未をその名で呼ぶつもりだろうか。

「せっかくだから、いつしょにお昼食べて予定詰めない?」
「ん?かまわないけど…そんなになんか決める事ってあるの?」

首を傾げる和に梓は苦笑する。

こういうときどこに出かけてなにをやるかなど

いつも話し合うのは女の子同士の会話で、

普通ならばそれを黙ってみているのが男であったりするものだが
和はやっぱり細かく計画を立てたりなどすることはないのだ、と
どこか納得する梓がいる。

「まあいいや、じゃあここで食べる?」

「そうね。和も託斗もこのクラスだし。じゃあ私購買に行つて来る
わ。

…託斗のこと、起こしておいて?」

「了解。」

くす、と笑つて和が答えれば、嬉しそうに梓は教室を出て行つた。

図書室解放日である今日は、基本的に昼を別々にとるから
遙に了承をとる必要もない。

和は熟睡する託斗の元へと移動すれば、梓が隣に座るだろうと考えて
前の席へと腰を下ろした。

そうして本の角を託斗の頭へと照準を合わせれば、

和はそれなりの力だがつ、と託斗の頭へ振り下ろした。

すると悶絶するかのように頭を抱えて託斗が震えたので

あ、起きたな、と和はのんびり頬杖をつきながらながめていた。

「…っ和…!」

「おはよー、授業とつくに終わったよー。昼買って来なくていいの？」

「……コンビニ。」

もうコンビニで朝に買って来たということだろう。

「あそ。梓さんがもうすぐ来るから待ってよう。」

「……ああ。」

しばらくして戻ってきた梓が教室に入ると

空気が一気に華やいだ錯覚を起こすから不思議だ。

真実、空気清浄機のような存在だ、と和は思う。

教室にいる男子の視線を一身に受ける梓は、しかし慣れているのかそれをまったく意に介す事無く託斗の隣にこしかけた。

託斗をちらり、とながめれば、なんとも不機嫌そうに仏頂面をしている。

「……託斗、なんか機嫌が悪いけどどうかしたの？」

「……角で、起こされたからだ。」

「は？」

「和に、本の角で殴って起こされた。」

「え、過激ね、相変わらず。」

『あ、訊けばちゃんと詳細説明するんだな、よしよし。』

内心、和はふたりの会話が成立するか謎だったのだが
考えれば託斗は詳細を求めても別段面倒がることなく話す人間だった。

梓もそれを気にする様子はないので、確認作業が苦ではないのだろ

う。

なかなかどうしていいコンビネーションだ。

というか。

「なにさらつと嘔吐してるの？」

「え？どういこと？」

和の言葉に託斗がわずか、眉間に皺を寄せる。

梓は和に説明を求めているのでその変化に気が付いていないが嘔吐を吐いている確信を持った和はにんまりと笑みを作る。

「教室中の男子が梓さん見てるの気に入らないから不機嫌なんですよ？」

それを誤魔化すなんて案外照れ屋さんだね、託斗。

その言葉に、託斗の顔がみるみる仏頂面になる。

梓はいえれば瞬間湯沸かし器のように湯気が出そうな程真っ赤に顔を染め上げた。

「え、え、託斗、それ本当？」

「……ああ。」

隠しはするけど、嘔吐を突き通せないのが託斗だ。

真実、先程の和の行為も不機嫌の理由だったのだろう。

けれどもパーセンテージとしてはこちらの大きいはずだからこそ託斗は梓の問いに是と答えたのだ。

それがおかしくて、和はぶ、と噴出した。

昔、彼の事を好きだったときはこんなに感情の機微を読み取れなか

った。

だからこそ惹かれたものだが、不思議になる。

今はなにを考えているのか手を取るようにわかってしまっ
きつと彼のことを冷静に見れる自分がいるからなのだろう。

「いやー、ごちそうさま。もう食べる前からお腹いっぱい気分。」

「ちょ、ちよつと和！何言ってるのよ。」

「改めて言っておくわ、おめでとう。」

正式にお付き合いが始まってからちよつと気になってたけど
うまくいつてるんだねー。よかった、よかった！」

気持ち大きめで、しかし不自然過ぎないボリュームで和が声をあげ
る。

他で話すならばちよつと弱いと思うが、2・3においてはこれで充
分だ。

これ以上、餌食になるのは自分だけという状況は非常に面白くない。
友達はあらゆるものを共有するものである。ともすれば。

一蓮托生。死なば諸共。

「……………和。」

思惑に気付いた託斗がびきり、と青筋を立てる。

まあ当然だ。彼も散々2・3一同に梓との仲を勘繰られた被害者な
のだから。

しかしこれで更なる被害拡大は免れない事であろう。

理解できずに首を傾げる梓に、和はにっこりと微笑んだ。

「これで明日には学校中の公認だね、おふたりさん。」

「あ、え！？和、あなた！」

「まあまあ、遅かれ早かれそうなってたって。

いいじゃんお互い浮気とかし辛くなるだろうしー。
なんせ学校中が見張ってってくれるから、ねえ？」

にやにや笑いをクラス連中に向ければ、皆引き攣った顔をして
そろそろと視線を逸らす。

託斗と梓が同時に吐いたため息は、教室全体を包み込んだ。

ある程度の予定を話し合って、確認の為に広末へとメールを送れば
広末からすぐに返信がきた。

「校門の君、なんて言ってるの？」

「誰の事だ？」

「広末さんのことよ。ああ、託斗は知らないわよね、そういえば。」

二つ名の由来を嬉々として語る梓とそれを聞く託斗を他所に、
和は携帯の画面をみつめたまま眉根を寄せた。

それに気が付いた梓が、和にどうしたのかと声をかける。

「ん、ああ。なんかね、予定がはつきりしないんだって。

悪いんだけどしばらく待ってもらってもいい？」

「ええ、かまわないけれど…和、難しい顔をしてどうしたの？」

「…いや。」

ゆるゆると首を振った和を、託斗も梓も訝しんでいたが
何かを追求することはなかった。

和の元に届いたメールは、こうだ。

『わかった。そのうち都合をつける。』

この文面に、和はなにかを読み取れば心がざわつくの止められない。
きつとそれは、和にしかわからない微妙なもの。
しかし彼女にとって半身の様子をうかがい知るには、十分な答えであつた。

「梓さん、和泉君に伝言をお願いできるかな？」

「え？ええ…なんて？」

「今日は一緒に帰れませんか。よろしくね。」

「かまわないけれど…用事でもあるの？」

「うん、ちょっと急用。」

にっこりと微笑んでそれ以上にも語ることがない和を
ふたりは目配せしつつもやっぱり問いただそうなどとは思えなかつた。

相変わらず、他校の校門というものはなんともいえず緊張する。
広末の堂々つぷりを思い出してひとつ息を吐けば、通行人の視線が

痛い。

なんとなく同じ学校の人間には知られたくなくて
無駄な抵抗といえなくもないが彼女は眼鏡と髪
の装備を解いている。

『うっ…まだ来ない。』

和は今、とある高校の門の前に立っていた。
ひとりの人物を待ったためである。

その為にHRをサボってしまった。一応体調を崩して早退、という
事にはしたが。

しばらく落ち着かない気持ちで目当ての人間を待っていたが
やがて視界にそのひとがうつったので和は思わず声をあげた。

「広未！」

「!?!?和、おまえ、なにして!?!?」

驚きに目を見開いて広未が固まれば、その瞬間を見計らったのか
今まで広未の隣にいた人物が勢い良く走って校門へと向かってくる。
広未がそれにはっとして反応するが随分と差が開いた。

「塩澤しほさわ!?!」

和の耳に今まで聞いたことがないような切羽詰った必死な声が
強く印象的に響き渡った。

その瞬間、少しだけ世界はゆっくり進んだように錯覚をした。
彼女は、ひよっとして。

第六十三話「その理由（わけ）を教えてください。その5」（前書き）

お話の最後に、お知らせがあります！

第六十三話「その理由（わけ）を教えて。その5」

広末が叫んでひとりの人間を呼び止めようとするが
制止もむなしくこちらへと走ってくる。

一瞬、こつちに突進してくるつもりかと思ったがそうではない。
恐らく逃げるつもりなのだろう。

和がきらり、と瞳を鈍く光らせれば走るその人物の腕をがし、とつかんだ。

塩澤と呼ばれた女生徒は、一瞬驚きに固まるとこちらに顔を向ける。
見開いてこちらに向けたその瞳には、涙がたまっていた。

和もそれに動揺しかけたが、逃がすまいと腕をゆるめることはしない。

「助かった、和。」

安堵の息を吐いて話す広末の声もまた、なんとも珍しいものだ。

和はいきなり大当たりをひきあてたかのような気分になれば
高揚する気持ちをなんとか抑えた。

「ふーん、ひよつとして彼女が？」

「ああ。」

追いついた広末にほい、と引き渡せば、
「またも彼女がばたばたと暴れている。」

しかし男にかなうはずもないだろう。

その証拠に広末は平然とした顔をして彼女を後ろから抱きしめるように

閉じ込めていた。

いつぞやの、捕捉対象の子。

同じ学校の生徒であったか… 同い年だろうか？
しかしなんだって泣いているのだろう。

なんとも表情豊かな顔は、とても素直そうで

からかいがありそうだとどこかで勘が告げている。
なるほど、これは広末が傾倒するのも無理はない。

肩より少し上に綺麗に切りそろえられたボブカット。

前髪は通常より少し短めで、眉毛がちらりとのぞいている。
茶色く染められた髪はしかしそこまで派手なものではなく。

顔の造作はそこまで目を引くものではないものの
ぱつちりと強い意志が感じられるその二重の瞳がなんとも印象的だ。

愛されるべきマススコットの存在とでもいおうか。
きっと広末もそうだった可愛がり方をしているに違いない。

しかしその大きな瞳は今や零れ落ちてしまいそうな程に
涙でいっぱいになっていた。

和はハンカチを取り出せば、彼女の顔をそ、と拭った。

「あらあら、可哀想に。鬼畜なお兄さんに苛められちゃった？」

「誰が。それを言ったらお前だって自動的にそうなるだろ。」

「私、学校でDS認定とつくに受けてるので。」

「遙君がなんとも不憫だな。」

「勝手にあつちがへたれていくだけだよ、たく。」

軽口を叩き合うふたりに、塩澤は複雑そうな顔をむける。
それに気付いた和が彼女にむかってにっこりと微笑んだ。

「どうも初めまして。私は広未の幼馴染の笹森和つて言います。」
「…は、じめ、まして。」

『ああ、顔ぐしゃぐしゃなのに挨拶はしちゃうんだ。超可愛い!』
なんという殺人的な生き物であろう。

ああ、目に浮かぶようだ、いじられからかわれ泣く彼女。
自分も広未側の人間であるためなんともいえない気分にはなるが
それでも女の子を泣かせてしまうのは忍びない。

「可愛いひとだね。広未の恋人さん？」

「え!?!?ち、ちち違います!」

ぶんぶんぶん!と頭がとれてしまいそうなほど勢い良く否定する彼
女が

またなんとも可愛らしいのであるが、
広未は不機嫌なオーラを後ろから放ちまくっていた。

『ああ、まずい、噴出しそう。』

幼馴染のなんとも珍しい姿のオンパレードに
和は腹を抱えて笑い出したくなるが、そこはなんとか堪えた。

「あ、あの、津田先輩、は、
あなたとお付き合いしているんじゃないんですか？」

先輩。ということになるほど、後輩か。
こんなに可愛く年下とは本当に無敵ではないか。

「え?冗談やめて。」

私、兄妹ばりに育った相手に恋愛感情抱くほど守備範囲広くないから。」

「俺も同感だな。」

「え、え、で、でも…。」

「しょっちゅうふたりで出かけたりはするけど、日常だから。」

趣味がいつしよなんだよね、こいつとは。私、同じ学校に彼氏いるし。」

二股する程これまた心広くないんだなあ。」

「そ、そうなんですか？」

和の言葉に、目に見えて彼女の顔が輝いたのを確認すればわかりやすすぎるその表情にいつそ感心してしまう。

これだけ心が表に出れば、言葉がなくとも伝わるのに、と和は少々羨ましくなった。

しかしそんなことを考えていると、広未の低い声がきこえてくる。

「…ひよつとすると、ここ最近避けまくっていた理由はそれか？」

「うー！」

びくん、と塩澤の身体が揺れれば、

にや、と笑う広未がなんとも楽しそうな顔をしている。

あああ、こりゃあ…とんでもないのにつかまっちゃって、まあ。

「おい、塩澤。答える。」

「ち、違います、違うもん!!！」

「じゃあ泣いているのは何故だ。お前をそんな風にしたのはなんだ。きちんと教えてくれなきゃわからないじゃないか。」

耳元に口を寄せて、広未は艶っぽく囁く。

可哀想に、塩澤は顔を真っ赤にして違う意味でまた泣きそうになっている。

ぶるぶると震えるその様はなんとも加虐心をそそられる。

「そ、れは、あの…!」

「理由を言わなきゃ、泣いている原因は俺だと自惚れるぞ。いいのか?」

たたみかけるように笑う広末に、塩澤はついには耐えられなくなったのか

満身の力をこめて広末の拘束をばっ!とほどけば次には大声をあげる。

「生理痛がひどくて泣いちゃっただけです!!」

男の人にはこの辛さはわからないんだああああ!!!」

とんでもない捨て台詞を残して、脱兎の如く塩澤は校門を駆け出した。

呆気にとられた和と広末は、しばしばかん、と無言で固まっていたがやがて同じタイミングでこらえきれなくなり噴出した。

「あーはははははははははは!!!」

大爆笑するふたりに、周りの人間がなんならちよつとひいている。しかしそうとわかっていても止められなくて、

ふたりはひーひー言いながら必死に笑いを抑えようとしていた。

「た、しか、につ…!辛いもんね…わかる…超わかるよ、塩ちゃん

…!!!」

「おま、いつのまに、あだ名…ぶ、くくっ…!」

なんとか会話しようとするも、なかなか笑いがおさまらない。ああ誰か止めてくれ、と思っただけいれば、呆れたように広未に話しかける人間がいた。

「なーにこんな目立つところで馬鹿笑いしてんだよ、津田。」

「塚本^{つかもと}。今日は部活じゃないのか？」

「元々幽霊部員だからね、俺。ところで、その子は？」

塚本、と呼ばれた男はにこにこしながらこちらを見ていた。

茶髪の髪は長いからなのか、上半分だけを後ろに束ねてまとめている。

一瞬、和は浩平の事を思い浮かべたが

おそらく、たちの悪さでは二手ほど上をいくだろう。

「ああ、俺の幼馴染。…和、なんでいるんだそういえば。」

「あーんなメールくれば気になって仕方なくなるに決まってるじゃん。」

その言葉に、広未はああ、と短く答えれば
気まずそうに鼻の頭をぼり、とかいた。

「メール？」

「ちよつとな。まあ、あれを変だと思っただけだろうけど。」

「そう？私と同じ年数、広未といっしょにいれば

誰だってそんなくらい察知できるようになるんじゃない？」

「親は多分、無理だぞ。」

「ああ、おじさんとおばさんはそもそも

いつもと違ってても気にも留めないだろうねえ。」

ふたりの気安い様子に塚本は首を傾げる。
和はじ、と男を観察し、ちらりと広未のほうをみる。
その瞳がふ、と笑みを作っていたので和は緊張を解いた。
腹黒同盟とでも言ったところか。

「笹森和です、広未と同じ高校二年生。」

「あ、じゃあ同い年なんだ。俺は塚本敦^{あつし}。よろしくね、和ちゃん！」

その言葉に、にっこりと和は微笑む。

「よろしくお願ひします、塚本さん。」

「敬語じゃなくていいよ、そのよそよそしい呼び方も。」

「そう？それじゃあ遠慮なく。よろしくね、塚本君。」

「いやあの、」

「私の事も、遠慮なく笹森って呼んでね、塚本君？」

満面の笑みをたたえて、たたみかける和に塚本は一瞬固まるも、
次にはにや、と笑んだ。

「なにこの子、超面白いじゃん。」

「俺と17年来の付き合いだからな、もちろん性格はそう単純じゃない。」

「ひいては君が裏表が激しいと言っているのではないのかね、広未君。」

「問題ない。俺は友人からしつかりと腹黒認定を受けている。」

「……ああそうかい。」

先程言ったことを根にもっているな、と思えば
和はじろり、と広未を睨みつけた。

「ま、用は済んだみたいだし帰ろうかな。

広未、いつかの借りはこれで返したね？」

「…あそこでまさかつかまえるとはな。」

遥の一件があつたとき、賭けをしたとはいえ

和はその対価を支払えたと思つていなかった。

それが今回、やっと返すことができたと感じれば和はどこかほっとする。

「今度、私の学校にまた来てよ。顔見せはそれで済ませよう。」

「…ああ、そのほうが助かるな。俺も特に寄り道はしないから行く。」

「うん。」

きつとあんなに単純で思い込みの激しい彼女のことだ。

梓といるところなんてみられたらまた変な誤解でもしてしまうだろう。

もしも会いたいというのであれば、和の高校付近で会うのが一番安全だ。

塚本の存在をほぼないものとして扱うふたりが

少々面白くなかったのか、塚本は少し声を高くした。

「津田、あの後輩ちゃんはいいいのかよ？」

その言葉に広未が塚本のほうへと視線をむける。

「質問の意味がわからんが。」

「だってその子。どう考えても特別なんじゃないの？」

その塚本の言葉に、無言で目を合わせれば
広未と和はにや、と口端だけで笑んだ。

その様子にどこか恐ろしさを感じれば、塚本は一步退く。
しかしまるで打ち合わせをしたかのように、
そそ、とふたりが塚本の両サイドへと寄り添えば
耳元で順番に囁いた。

「確かに、和は俺にとって特別だ。」

「一生、恋心を抱く可能性がない異性という意味で、ね。」

ふう、と同時に息を吹きかけられて、
塚本がぞぞぞ、と背筋をのばし震え上がった。

「下種な勘繰りをして引つ掻き回すつもりならやめておけ。」
「私も塩ちゃん気に入っちゃったから。苛めないであげてね？」

すう、と目を細めて、まったく同じタイミングでふたりは微笑む。

「「高校生活を無事に全うしたいだろ？」」

一言一句違う事無く発した和と広未は、そのまま踵を返し
駅への道を歩き出す。

呆然とみつめる塚本の目は、どこか爛々と輝いていた。

「ねーあのひととき、大丈夫なの？」

面白くするのが心底好きなタイプでしょう。」

「あいつも、女性関係があまりしつかりしていないからなあ。

まあ、本気の相手でもみつければ手を出す暇もなくなるんだろっけ
ど。」

「うん、今日の広末は見ごたえがあった。」

「…言っておくが、和も相当だぞ。」

「だろっね。私も客観視してやっと思えたわ。」

笑いそうになりながら、しかし鏡を見ている気分にもなるのは何故
なのか。

和はその実、複雑な心持ちで広末をみていたのかもしれない。

「にしても、まさか来るとは思わなかった。」

「あー、まあねえ。ふいうちのが素直になるかと思っただのさ。
でも、ま。役に立てたから良かった。」

「ああ、…本当、助かった。」

和が広末の異変を察したのは、

『わかった。そのうち都合をつける。』

というメールが届いたからだった。

広末と和は元来面倒だと思っ部分部分が似通っていて

それこそ予定を立てたり、それで何回も相談をするといったことが
苦手だ。

その為か、断定的な物言いをする事が多く、
例えば和がいついつのこの時間にそっちへ行く、
と云えば
広未から返ってくるものは

わかった、という了承か、無理、という否定のみ。
それが普通だ。

しかし今回は違う。

和が決まった予定日にここへ行って四人で会おう、
というメールを出せば

広未はそのうちに、と曖昧に濁すような返信をした。

これは、返事をしているものの今それについて考えるのも煩わしいと
思っている証拠で、なにか重大な悩み事を抱えている、
という広未からの無言のメッセージである。

その事に気が付いた和はいてもたってもいらなくなり、
すぐさま広未の元へと駆けつけたのだ。

和に話していないということは話すつもりがない。

それなのにこんな内容のメールを送るのは、隠す余裕すらないとい
うことで

いよいよ重症の部類に入る。

だからこそ和は焦っていたのだが、予想外に和が問題を解決したら
しく

思惑とは違ってしまったものの、いつもの彼に戻ったことに和は安
堵している。

「いいえ。吉報を待ってるわ。」

「そう遠くないだろうと言っておこうかな。」

「うわ、満々。…まあ、あの子わかりやすいけど。」

「それでも、言葉はほしいもんだよ。」

「……うん。そうだね。」

「だろづ。」

納得してうなづくふたりの笑う表情は本当に双子のようにそっくりだった。

梓に顔見せくらいは出来るというメールをその夜に打ったがそれだけ相手が忙しいのならいつでもかまわない、という返信だった。

どうやら梓が校門の君に直面するのは彼の恋が実るまでおあずけのようだ。

和はふ、と小さく笑むと携帯が着信を告げる。

手の中におさまったままだったそれがタイミング良く鳴ったので驚いて和は電話を落っこしそうになってしまう。

しかしすんでの所で留まれば、発信した人間を確認し、その名前に若干の緊張を覚えつつ通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『和？今大丈夫？』

遥の声に大丈夫だよ、と普通のトーンで和が返事をすればなんか安心したかのような息を遥が吐くではないか。和は少し首を傾げつつ次の言葉を待った。

『今日早退したってどうしたの？具合でも悪かった？』

「ごめんね今日は。違うよ、サボリ。」

和のさら、とした物言いに電話口で遙がまたため息を吐いたのがわかる。

今のは先程と違う種類のものだ。

心配させてしまったという事実申し訳ないと感じつつも、しかし和の口から出る謝罪の言葉は実に軽い響きに受け取られてしまう。

『なんでまた。広末君が気になったから？』

「梓さんから訊いたの？ そうなんだよ、ごめんね。

あんまりにも切羽詰ってたもんだからさ、思わず。」

『いいけど…解決できたの？』

「うん、ばっちり。…広末にも、そのうち春がくるかもよ。」

『へえ本当に？』

「まだわかんないけど。和泉君もうまくいくよう祈ってて。」

『広末君には色々とお世話になったもんね。うん、応援するよ。』

弾む遙の声がどこか嬉しくて和がそれに返事をする。

しかしそのときにまたひとつ思い出したことがあり、

ちようどいいと思えば和は遙に断りを入れようと口をひらく。

「そうそう。明日もちよつといっしょに帰れないの。ごめんね。」

『え…またなにか用事？』

「うん、そう。割と大事な。」

『……それって、俺もついていっっちゃ駄目なの？』

遙の言葉に、和はしばし逡巡する。良いとも悪いとも言い難い。

「うー…あね、私ね、ちよつとした賭けをしたの。」

『また！？』

「そんな…人をギャンブル好きみたいに言わないでよ。」

『お金を賭けてないけどそうだと思うよ。』

少し不機嫌そうな声を遥があげた。

まったく、自分は話す気なんてなくせに。

こっちの秘密はやっぱり気に入らないんだな、と思えば和も少々気分が悪くなりそうだった。

しかし、質問されるだけマシというものが。

「で、私は待ちぼうけをくらうかもしれないのね。

和泉君がいると悪いと思つて気になっちゃうから駄目。」

『別に、かまわないけど?』

「広末の事だから、和泉君が介入したつてわかんないと思うよ。

まあ、そのうち出勤要請をするかもしれないけど。」

『ああ、予定つて広末君の一件なのか。だったら言つてくれればいいのに。』

それなら俺は口出ししないよ。ややこしくしちゃったら悪いし。』

「そっか、ありがとう。」

結局は納得してくれたので、和は安心して遥との会話を終えて電話を切った。

今回の賭けは果たしてどう転ぶのだろう。

ここ最近の遙のことですつと落ち込み沈んでいた和であったが久しぶりの楽しい出来事に気分が高揚せずにはいらなかった。

コートとマフラーをしっかりと着込み、最後はすこし薄手の手袋をはめる。

気合い十分の重装備に和はよし、と意気込む。

その姿をみて託斗が首を傾げた。

暦の上ではもう12月になった。最初の週末だ。

だから特別和の格好に違和感はなかったが、彼女は本来そう寒がりではない。

コートを着ている連中は確かにいるが、

和はいつもマフラーを巻くのみだったので

今日に限って何故そんなに厚着をしているのかわからず、いた。寒波がきたわけでもない。

そんな託斗の不思議そうな視線に和が気が付けば、微笑む。

「今日はね、外でちょっと待ち合わせだから。

どのくらい待つのがちょっとわからないんだよ。だから念の為、かな？」

「…そうか。」

風邪を引くなよ、という言葉に和はうなずいて教室を出た。

この間の図書解放日もそういえば行っていない。

この学校は月・水・金がそれにあたるが、和は少し寂しくなった。本来ならば欠かさずに行きたいところであるのに。

しかし、誘惑に負けるわけにはいかない。

昇降口を出て校門の前へと立てば、和は鞆から文庫本を取り出した。これさえあれば寒空の下でもいくらでも待てる気がするから不思議ものである。

和はへらり、と笑いながら眼鏡と髪の毛を解放した姿で本を読み始めた。

途中、知り合い何人かに声をかけられた。

最近では近しい人間にはもうこの格好が和であるとばれているので同じ学年フロアにおいてはこの変装の効力が薄れつつあった。

まあ、よくもったものかもしれない。

そして話しかけられてもシャットダウン中の振りをして無視を決め込む。

事情をどう説明するか考えるのが面倒だからだ。

梓や託斗、浩平でさえこれで振り切ってみせた和だったが、

しかし最大の難関である遥はさすがに誤魔化せない。

しばらく話しかけて反応がないと悟れば、遥は和の手元から本を奪った。

「…なにやってるの、こんなところで。」

呆れたようなため息混じりのその言葉に和が仕方なく顔をあげた。

「みてわかるでしょ？ひとを待ってるの。」

「昨日言ってた件ね。…まさか男じゃないだろうね。」

「残念、女の子です。ほら、返して。」

早く帰りなよ。薄着で12月の校門前に立ちつくすのは良くないよ。

「

風邪引いちゃうよ。身体、冷たくなってない？」

遥のその言葉に、少しどきりとする。

手を握られるかもしれない、抱き締められるかもしれない。

そう思って少し身構えてみたが、しかし遥は困ったように笑うだけで和に触れることはなかった。

「……ほどほどにしなよ。それじゃあ、月曜日だね。」

「…うん。」

土日に会うつもりもないらしい。大体、校舎から出たとはいえここは校門前だ。

眼鏡と髪を解除しているというのに、遥はなにを言うでもなかった。もう、どうでもいい存在でしかないのだろうか。

彼の言動ひとつに揺さぶれる自分に少し疲れてしまっ。

…いや、元々そんな価値はないのだ。だからきつと、これが本来なのだろう。

和はどこかで諦めそうになっている自分に気が付く。

自己完結をするのは良くないけれど、このままびくびくして別れの時を待つのなら

いつそ言葉にしてほしい。それでないのなら事情を説明してほしい。彼から発信されるのを望むのは、贅沢な願いなのだろうか？

気持ちを切り替える為に目の前の文庫本をもう一度開こうと顔をあげる。

そのときだ。

この高校とは異なった制服に身を包む人物が確認できて、和は思わず口角をあげた。

『広未、貸しひとつ。』

心の中でほくそ笑むと、和はぱたん、と開いたばかりの本を閉じた。

第六十三話「その理由（わけ）を教えてください。その5」（後書き）

みなさんにお知らせ

日ごろ、この小説をご覧いただきありがとうございます。とございます。

この物語も後半に入り、終わりもちらちらと見えている状態です。

まだもう少しこのお話は続いていきますが、

新連載の構想として開店休業のスピンオフ作品を考えています。

そこで、読者の皆様からどの主人公の物語なら読みたいと感じていただけるか

アンケートを実施したいと思い、

ブログにて投票所を期間限定で設置させていただきました。

つきましては、ご協力をお願いしたく、こちらでお知らせさせていただきますました。

詳しい説明は透風真白のブログにてご確認ください。

よろしく願います！

第六十四話「その理由（わけ）を教えて。その6」

「あの、どなたかと待ち合わせだったんじゃないんですか？」

「ん？まあ、ひとを待っていたのは確かだけれどね。」

小動物のようにびくびくとしながらこちらを見つめる生き物はとても可愛い。

余計なおまけがついてこなければ、和の賭けは完全勝利であったのに。

おまけと心の中で称した者を一瞥すれば、和は注文の為に手をあげた。

和にとっては親しみのある駅前の喫茶店。

塩澤が言葉を発する前に、にっこりと微笑めば寒いから話はあとだと言って

駅前までひっぱれば和はこの喫茶店へと案内した。

…なぜか塩澤の隣に座る塚本も渋々いつしよに。

その塚本はといえば、先程から和が不快感を隠すことなく視線をくれているのに

それをやんわりとかわしながらにこにここと笑っている。

まったくもってやりにくくて仕方がない。こういう手合いは苦手だ。

「ブレンドで。塩ちゃんはどつする？」

「ここね、ココアもすっごく美味しいよー。」

塩ちゃん、という呼び名に一瞬驚いたものの

わたわたとどうすればいいのかわからない、という風情だった彼女が和がココアという単語を発したとたんにはあ、と目を輝かせた。

その様子にくつくつと笑いながら、彼女の返事を待たずに和はココアを追加する。

塩澤はといえば、何故わかったんだろう？とでも言いたげに混乱した状態で頭にたくさんのはてなマークを飛ばしている。

いっそ大声を出して笑い転げたいがここは喫茶店。静謐を好むものの集まり所だ。

そこで注文を締め切ろうとした和を制止して、塚本が和とおなじくブレンドを頼んだ。

ないものとして扱っていた和はそれに舌打ちをする。

「あ、塩ちゃん。お金は心配しないでね、おごりだから。」

「え、あのも！」

「お財布に千円未満しか入ってないんじゃないのかな？」

「ここは喫茶店だからものの値段はそう安くないよ。」

「ひっぱってきちゃったのは私だから気にしないで、ね。」

「あ、うう、あの、ありがとうございます…。」

最後のほうは蚊の鳴くような声になりながらも、

身体まで小さく縮めて和にお礼をする彼女に、和はますます好感をもった。

「いいえ、と言ってにっこりと微笑む。

「あの、でも、どうしてわかったんですか？」

「ん？ここに立ててあるメニューの値段をみて

大きいおめめがさらに大きくなってたから、そうかなあって。」

その言葉に、塩澤はその顔を一気に赤く染め上げた。

テーブルに備え付けてある小さな簡易メニュー表。そこにはココア五百円と書いてある。

まあファーストフードからしたら相当な部類に入るだろう。高校生としては飲み物一杯に五百円は抵抗がある。ちなみに、和の頼んだブレンドは五百六十円だ。

「ねえ、いいかげん俺を無視するのやめない？寂しいんだけど。」

「そのまま黙っていてくれると思ってたけど、やっぱりあえて空気を読まない人間にそれは無理でしたか。」

「ここに案内したのは笹森さんだろ？」

「私は塩ちゃんを招いたのであってあなたと話す事はなにもありませんが？」

「どつちかというと俺ってサドだと思ってたんだけど、良いねえ。笹森さんに罵られるとゾクゾクするなあ。」

「変態は間に合ってます。」

うふふふ、あははは、と笑いあつふたりを見ながら

どうしたらいいのかわからずに塩澤はあわあわとするばかりだ。

それをみて和が本来の目的を忘れそうになっている自分に気が付いた。

「とりあえず、話があるんなら訊くから待ってくんない？」

塩ちゃんが困る姿を見るのはやだから。」

「ああ、そうだね、俺も同感。高校生活は安泰のうちに終わりたいから。」

その言葉にす、と和が目を細めたとき、それぞれが注文したものが運ばれてくる。

和がそのままコーヒーに口をつける姿を、塩澤はぼかん、と口を開いてみていた。

その視線に気が付けば、和が笑う。

「私の顔になにかついてるかな？」

「あ、い、いえ、ごめんなさい！」

私、コーヒーって苦手で、カフェオレにしないと飲めないんです。

それなのに笹森先輩はブラックで飲むからすごいなああって…。」

「名前、覚えていてくれたんだ、嬉しいな。あ、でも和でいいよ？」

「和、俺のことも敦って呼んでよ。」

「テメーは笹森だよ、変態。うっさい。」

一蹴した和に面白そうに塚本は笑う。

ああ、こういう奴は相手にすると喜ぶから厄介だ、どうしたものか。しかしとにかく塩澤と話がしたかったのだと思い直し和は堪える。

「え、と…和先輩？」

「あああ、可愛い！！一家に一台塩ちゃんがほしい！」

「ええ！？」

あまりの可愛さに悶絶する和に、塩澤がすつとんきような声をあげる。

隣に座る塚本も訝しんだ顔をしている。

『あいつ絶対いま、そっちの趣味か？とか思ってたんなー。』

いっそそう思わせておくのも悪くないかもしれないと和は考えてしまっ。

「それで、私になにか渡したいものがあって来てくれたんだよね？」
和の言葉に、塩澤がこくん、とうなずいた。
おずおずと差し出されたのは、和のハンカチ。塩澤の涙を拭ったものだ。

「確かに。ありがとう。」

「あの…どうして、わかったんですか？ひよっとして…わざと？」

あの状況でひよっとしてなんて言ってしまふあたり、
彼女はひとを疑う事がほぼ皆無な人間なのだろう。

「そうだよ、もちろん。今日、直接渡しに来てくれるだろうとある程度の確信を持っていたからこそ、私はあそこで塩ちゃんを待っていたの。」

その言葉に、塩澤はもとより、塚本までもが目を見開いた。

その反応が面白くて和はにやり笑いを止められない。

「それじゃあ、あの飴は…やっぱり偶然じゃなかったんですね。」
「甘いものを食べると心が落ち着くから。嫌いな味じゃなかった？」
「いいえ。とっても美味しかったです、いちご味！」

笑って元気良く応える塩澤は本当に打てば響く最高の女の子だ。
それこそ広未みたいな男に目をつけられる為に生まれてきたような気さえして

和はどこか憐憫の情を抱きそうにもなってしまう。

「良くわからないけど…ハンカチの間に飴を忍ばせてこの子に渡したって事だよな？それでどうして今日来るって思った

わけ？」

塚本と会話するのは不本意ではあったが話が進まない。仕方なく和はそれに返答をする。

「塩ちゃんの性格からして、

まだ私と広未のこと気にしてるんじゃないかと思ったんだよ。

でも、それを広未に直接訊くわけにもいかないし、どうしようかと悩んだ。」

頬杖をついてちら、と塩澤のほうをみれば、彼女はことごとく思ったことを

言い当てられるのに衝撃を受けているらしかった。

「家に帰って、泣いたときの記憶を反芻すれば、制服のポケットに身に覚えのないハンカチが入っている。

そこで、あなたは気が付いた。

ああ、これは津田先輩の幼馴染と言っていたひとのものだ。

どういうひとなんだろう。優しく涙を拭ってくれたから、悪い人ではなさそうだった。

でも、津田先輩と一体どういう関係なんだろう、すごく気になる…という所にあなたは飴を発見。なぜこんなところにこんなものが？ひよっとしてわざと私の制服にハンカチを忍ばせたのだろうか？わからない。

一体、笹森和とはどんな人物なんだろうか。

躊躇しながらもあなたは飴を口に含んだ。そうして飴を転がしているうちに

どんだん気になる考えを止められなくなっていくた。

そこで決意する。直接会いに行こう、ってね。」

もはや口を完全に開ききって和をみつめる塩澤になにか食べ物でも放り込んでやれば楽しそうだな、と思いつくがそれはさすがに自重した。

「律儀で、好奇心旺盛。だからこそ知りたくなっただよね、私のことを。」

そして直接お礼も言いたかった。

更に広末の情報をとにかく教えてほしいと思ったから。

奇しくも今日は金曜日。土日はさむと決断は鈍くなるし

それにも後押しされて、あなたは私の高校を訪れる決意をしたんだ。どう、合ってる？」

長台詞に少し疲れてしまった和は、コーヒーを口に含んだ。

芳しい香りが口いっぱいに広がれば和の心は澄んでいく。

「…学校に辿り着けない可能性は？」

塚本が探るような瞳を和に向ける。

「広末に訊けばいい。彼女はどこの高校に通ってるんですか、ってね。」

まあそんな質問したら今日の事は広末に筒抜けになっただろうけど…

案内役を買って出たのはどうやら塚本君、あなたらしい。」

「驚いたな。…笹森さんって探偵かなんか？」

「単に性格がねじくれてるだけだよ。広末も然り。」

塩澤はなにを思ったのか、俯いてぎゅ、と唇を噛んでいる。

「…どうして、私をここに呼びつけたりしたんですか？」

「塩ちゃんに興味があったからだよ。」

私の相棒がひとりの人間をあれほど構う様を見たことなかったからねえ。

いや、あれは本当に見応えがあったなあ。」

くつくつと笑う和を、塩澤はき、と睨みつける。

「わ、私はおもちゃじゃありません！」

「そりゃあ、そうだよ。塩ちゃんは女の子でしょう？」

その言葉に、睨みつけていた顔を歪めて

今度は泣きそうな顔になるので、和は身を乗り出して真剣な表情をした。

「ねえ、わかつてもらえるかはわかんないけど…」

私と広末は、それこそ生まれた時からいっしょだった。だから、家族として大切な存在なんだ。

そんな彼が、あんな風に笑う相手に興味があったと言ったら、やっぱりあなたは怒るかな。」

「え…？」

「ねえ、広末の事、好き？あなたにとって、彼はどんな存在？」

「……………わかりません。」

「うん、そっか。じゃあ、いつかアイツの事好きになってくれたら嬉しいな。」

私ばかり幸せでなんか申し訳ないからさ。」

その言葉に塩澤は顔をあげる。

昨日の言葉を思い出したのだろう。

「私の恋人はね、私をみつ付けてくれた、たったひとりなんだ。」

私は、あなたが広末のそういう存在になってくれたら嬉しいなって

思う。

「もしも、彼のことで相談したいことがあったらいつでも声をかけてほしい。」

「和先輩……あの、本当に、先輩には恋人がいらっしやるんですか？」

「いるともさ。まあ、信じられないのはわかんないけど。」

私の容姿ってなんとも普通というか中途半端だからね。

塩ちゃんはすっごくモテるでしょ？ 広末も苦労が絶えないなあ。」

そう言つて、和はカチカチとメールを打つ。

塩澤がそんな、とか顔を赤らめている。やっぱり可愛らしい。

塚本はいえ、じ、とこちらの顔をみつめるばかり。

なんというか、気味が悪い。

和は携帯電話をぱちん、と閉じる。

はてさてどうなるのか。今回ばかりは自信がないが、いつになってもかまわない。塚本を振り切るのは骨が折れそうだ。

しかしメールを送信した次の瞬間。

なんと、遙が早くも店へと入ってきたではないか。

さすがに予想していなかった事が目の前で起こって、和は驚愕に固まる。

その和の反応が不思議だったのだろう。

ふたりがどうしたのかと和に訊ねようとする。が。

次の瞬間。遙が和の隣に腰掛けた。

急な闖入者に驚いたのだろう。

塩澤と塚本はわけがわからず、俄かに動揺している。

しかしそれ以上に、和は狼狽しているようだ。

「……は、早くないですか？」

思わず敬語になった和がおかしかったのか、遥がぶ、と噴出した。

「すごい、そんな顔、久々にみたな。

和の事だからてつきり計算の内かと思つてたよ。」

「そんなわけないじゃん！」

そもそも予定に組み込まれてなかったんだよ、和泉君の呼び出しは予想外にオマケがついてきたから柄にもなく焦っちゃった。」

「オマケ、ねえ。ふうん、なるほど？」

その和の言葉を心得たかのように、遥は目の前に座る男を検分するように

しばらくみつめれば、冷たい表情から打って変わって満面の笑みを作れば

遥は塩澤にむかつてにっこりと微笑んだ。

「初めまして、和泉遥です。和と広未君と同じく高校二年生。で、彼氏です。」

「いや、肩を抱かなくていいんだけども。」

「は？なに言ってるの、抱くでしょう、抱く所だよ、ここは。」

「いや、意味わかんないし。」

和と遥がどういふつもりなのかはわからないが、

目の前のその光景はどう考えてもバカツプルのそれであり

塩澤は頬を赤らめ、塚本は面白くなさそうに眉根を寄せている。

その姿になにを思ったのか、塩澤の口からぼつ、と本音がもれた。

「いいなあ…。」

その言葉に、和と遙が目丸くして塩澤をみつめた。それは塚本もそうだったのだろう。

三人が同じ顔をして自分を見つめるその状況に狼狽して塩澤はあわあわと口元に手をあてるが、言ってしまったことは取り消せない。

それに微笑んで、和は声をあげる。

「ね、塩ちゃん。大丈夫だよ。」

「え？」

「私達だってね、色々と揉めたりするし悩んだりする。

みんな同じだよ。だから怖がらないで少し踏み出してみて？

まあ、塩ちゃんみたいなのがいたら広未はハードル高いと思うけど…。」

案外あいつも単純なところは単純だから。

いつでも困ったことがあったら協力するよ。」

「和先輩…！あ、ありがとございます。私、その…頑張ってみます…！」

その宣言を頼もしく思えば、和は連絡先をその場で塩澤と交換した。

「今日の事は、広未に内緒にしておいたほうがいいかもよ。意地悪な追及されちゃうかもしれない。」

「……はい、全力で隠します！」

ぶるり、と震え上がる塩澤に、和は一抹の不安を覚えた。

恐らくいつかはばれてしまうだろう。

しかしそれより彼女のこの反応。一体普段どんな接し方をしている

のやら。

遙も同じ事を思ったらしく、苦笑いを浮かべた。

先に帰るといふ塩澤に少し心配顔になって気をつけてね、と声をかければ

にこにここと笑ってうなずき、駅へと向かっていった。

…コケた彼女を、三人が喫茶店から目撃したため息をひとつ吐いた。

「広末君もやっぱ和と似てるかならあ…。」

「いや、男女が逆転すると余計に鬼畜度が増す気がするよ。」

「……うん、そこは否定できないな。」

そうしてふたりの会話が終わった時。

いつまでも沈黙していた塚本が、遙をじろじろと観察しているので遙もそちらに目をむけた。

「…また随分と男前な彼氏さんだねえ。笹森さんって面食い？」

「まあ、無駄に顔が良いのは否定しないけど。」

「……それ、前も言ってたよね。」

和のつつこみに遙が目を細める。

一回といわず、心の中だけでならもう何回唱えたかなんてわからない。

しかしそれを口にするのではなく、和は肩を竦めた。

「それになんか、すっごいラブラブって感じじゃん。」

あーあ、反則だよなあ。せっかく俺も特別がみつかったと思ったのにさ。」

「はああ？」

先程の軽口はすべて口説き文句であつたのだろうか。
とてもそうとは思えずに、和はすつとんきょうな声をあげる。
遥はなんとも気に入らない、といった風情で黒く微笑むばかりだ。

「とりあえず、他をあたつてくれるかな。

俺と和はお互いがお互いしかみえていないから。」

「…和泉君。」

「あれ、違つた？」

呆れたような声をあげれば、遥が和の顔をのぞきこむ。
それに和が一瞬顔を赤くした。

「…私は、少なくとも違わないけど。」

その言葉に遥の眉がぴくり、と反応する。
それをみてなにかを感じ取つたのだろうか。
塚本がにっこりと微笑めば和を射抜くようにその双眸でとらえた。

「俺なら、気持ちを疑わせるような不安材料は一切与えないけど？」
遥が弾かれたように塚本のほうへと振り向く。
しかし何事かを言う前に、和がそれを鼻で笑つた。

「広末から、女関係がだらしないと訊いてるけど？
付き合う前から不安材料たっぷりなひとに言われても説得力ない
なあ。」

「そんなの、払拭してみせるよ。君と付き合つたら君しかみない。」
「わーすごい口説き文句う。女の子ならイチコロかもねー。」

心底馬鹿にした顔をして和は言い放つ。

そのとき和は気がついた。ああ、自分は怒っているのだと。

これは良くない。普段にも増して辛辣な言葉を吐いてしまっそうだ。

「不愉快なんだよ、そういう言葉。実行出来るかもわからない言い切り。」

ふわっとした曖昧表現。君しかみないって具体的になにをどうすんの？

物理的に不可能だし精神的なもんならそれこそ上っ面の言葉にしか聞こえない。」

「…それは、付き合ってみない限り、俺も実行しようがないな。」

とりあえず、今俺は笹森さんしか見えないっていうのは本当だけど？」

しつこく言い募る塚本に、和はす、と目を細める。

「だったら私だけ見つめ続けて階段踏み外して頭打って記憶喪失にでもなればいい。」

そうすれば私は厄介払いができて清々するから。」

苛々しながら吐き捨ててやれば、

塚本は脂下がったいやらしい笑いをするばかりだ。

ひょっとして本当にマゾなのだろうか。だとしたら対処法が思いつかない。

優しくしたらしたで面倒臭くなりそうなのだが。

びりびりしている和の身体を、ふわり、となにかが包み込んだ。

一瞬認識が遅れたが、確かに横に居る遙が和を抱き締めたのだと気が付く。

「なあぎ？どうしてそんなに怒ってるの？」

どうして？問われて和は首を傾げたくなった。さて、どうしてなのだろうか。

自分でもわからない程、どこかが苛々しているのだ。

それにしたって、遙の声が優しすぎるのはどうしたことが。

思わず和はまわされた腕をぎゅ、と両手で握り締めてしまう。

「だって…和泉君が、不誠実みたい、に、言う。」

「ああ、このひとが言ったこと？どうしてそんな風に聞こえちゃったの？」

「そう言ったもん。…和泉君が、嘔吐きみたいに、言った。」

ぎろり、と睨まれて、塚本は苦笑する。

「だってそうじゃないの？さっき言ったじゃないか。

少なくとも自分は彼しかみてないって。

それって裏を返せば、彼の方はそうじゃないと思ってるって事だろっ？」

その言葉に和はぴく、と反応する。

そうか、ひっかかっていたのはそこだったのだと納得すれば

和は唇を噛んだ。

「和泉君の言葉は、いつも、いつこいつこが重たい。」

「……ううん、その言い回しは嬉しくないなあ。」

遙が苦笑するが、和はかまわず続けた。

「一生逃がしてあげられないって言われた時も、

鎖につないで閉じ込めちゃいたって言われた時も、

私は、けっこう引きそうになった。」

「…あんだ、綺麗な顔して随分過激だな。」

「そうかな？だって和がそれを俺に言わせるんだもの。」

すっかりしてるくせにどっか危なっかしくて。時々、足を折りたくなるんだ。

そうしたら俺に頼らない限りどこも行けなくなるかなあって。」

もちろん傷付けたくなんてないからやらないけど、と笑いながら付け足すが

それでも相手の男が引くには充分だったろう。

眉根を寄せて引き攣りながら、なにも言えずに塚本は固まっていた。

そんな塚本に顔をむけて、和は口を開く。

「本気の言葉ってこういうことだよ。あんだみたいのが馬鹿にしないで。」

軽口しかたたけないくせに、喧嘩売るとかありえない。」

「…喧嘩を売ったつもりはないし、割と本気で口説いてたつもりなんだけどね。」

「私が、不安になるのは、臆病だから。和泉君のせいじゃない。」

ただ、怖いから。だから………」

ああ、結局また、自分から言わされてしまった気がする。

そう思っても、和は目の前の男に思い知らせてやりたかった。

どれだけ遥が自分を大切だと思ってくれているかを。

愛想を尽かされたってかまわない。

それでもこれまでの彼は確かな本気を自分にくれたのだから。

「和。ごめんね。そんなに、そんな風に思ってくれてたんだ。」

俺はもう本当に…馬鹿というか救いようがないというか。ごめん、

「ごめんね。」

謝られるその意味がわからなくて、和は首を傾げる。遙が和の身体を横に向かせれば、腕の中へと彼女を導いた。和の視界が真つ暗闇になる。

「泣いてもいいけど、できればふたりだけのときがいいな。和の泣き顔の可愛さは殺人的なんだから。」

その言葉で、初めて自分は泣いているのだと気が付いた。それを自覚した途端に口からひいつく、という声もれる。遙の腕が、優しく和を包み込み、右手で背中をさする。

「和、大丈夫だよ、大丈夫。話をしようね。思っていること、全部伝えたい。まだ遅くない？訊いてくれる？」

遙の言葉に和はこくこくと何度も小刻みにうなずいた。

その姿があまりにも愛しくて、

遙はできることならばこの唇で雫をすべて取り払ってやりたいと思う。

しかしこんな場所でそれをやるのは憚られる。

それこそ、こんな可愛い彼女の機嫌を損ねてしまいたくはなかった。

「ああ、そういえば君。早く帰ってくれない？

まだいるんなら君の目玉を両方くりぬくけど。」

さらり、と言つてのけた遙の言葉に塚本は一瞬意味を把握できずに固まった。

しかし次にはやっと短く声をあげる。

「…は？」

「だって和の泣き顔をみたじゃないか。俺ね、困っちゃうくらいに嫉妬深いんだ。」

普通の男ならいざ知らず、君は和を口説くような男だろう？

だからね、さつきからずつと苛々してるのを我慢しているんだけど。ひよつとして伝わっていないかなあ？君ってば随分と鈍いひとなんだね？」

目の前で無害そうな顔でにこにここと微笑む彼の

その姿の得体の知れなさがあまりにも恐ろしく、

塚本は顔面蒼白になれば足がもつれるのもかまわずに転がるように店を出て行った。

「…つつか、あれ誰？あ、あいつ金払わずにいきやがった。」

遙の独り言に和が鼻声でぐずぐずと返答した。

「広末の友達だって。多分、そう悪いひとじゃないみたいだけど…なんか、ひっかきまわすの好きみたいだから、悪ノリしたんだと思う。」

「ああ…広末君と付き合うんならそれくらいじゃないとあれか。」

引き際もああだったし、言葉も確かに

和を本気で気に入ったというよりも、

自分達の行く先に興味を抱いたという雰囲気だった。

だとすればあっさり踊らされてしまったということであるが、なんとも不本意なことに結果は良好そうだ。

遙だけではなく和もそれに気付いているのだろう。

拗ねたような声がいかに悔しい、と言っているように響く。

しかしその次の瞬間。

「お金は、広末に請求するから、いい。」

和の言葉に遙がくす、と笑った。

別におごつてもいいかもという気になっていたのは遙だけのようだった。

「こんなときでもちゃっかりしてるなあ、和は。」

「…転んでもただでは起きません。」

「うん、知ってるよ。ね、和？」

くすくすと笑いながら遙が声をかけるので、和がなあに、と返事をする。

「俺の部屋、いっしょに来てくれる？」

その言葉に和は無言でうなずいた。

第六十五話「その理由（わけ）を教えて。その7」

すっかり涙も落ち着いて会計をする際、

店主に騒がしくてすみません、という言葉を和がかければ

彼はにっこりと微笑んでまたいつでももお待ちしています、と言った。

和はそれにまたもじん、ときてしまい泣きそうになったが

遙に握られた手の温かさを思いふんばってこらえたのだった。

電車に揺られているときも、マンションまでの道もふたりは無言だった。

和はちらりと遙をみれば、遙はにっこりと微笑む。

その顔に、今までの不安がどんどんなくなっていく気がして

和も同じように笑みをかえした。

二回目となる訪問は、一回目よりも少し冷静になれると思えば和はそろり、と部屋のなかへと進んで行く。

「いっぱい泣いて喉渴かない？お茶でも入れようか。」

「あ、ありがとう。」

遙も前のようにぎすぎすした状態で和を招き入れたわけではないので前のように余裕がないわけではないらしい。

やかんに水を入れれば、IHのコンロでお湯を沸かした。

お湯が沸くまではしばらく時間がかかる。

遙はふたつのマグカップをあらかじめ用意し、

お茶の葉を棚から取り出した。

どうやら緑茶のようだったが、湯呑みはないらしい。

ひよつとして台所用品や食器類はそれほど充実していないのかもしれない。

色々と準備する遙をぼんやりと眺めながら、

和はダイニングテーブルに備え付けの椅子にちんまりと三角座りをした。

その様子に手負いの獣のようだと遙は思ったが

次にはこんな可愛い獣もないか、と自分の考えに笑った。

「なに？」

「ん、ああごめん、和のその格好がなんか可愛くて、ちまっと纏まってるから。」

「…和泉君の可愛いはいつもよくわかんない。」

首を傾げつつ、しかしどこか恥ずかしいと感じたのか

和は足を解いて地面につけてしまう。

遙はどこか残念そうにそれをみていたが、

やがてお湯が沸いたのでお茶を入れることにした。

目の前にこと、と置かれた緑茶がとても良い香りだと気付く。

実花のところにあるものと同じものだろうか、

と少し考えながら和は口を付けた。

『…美味しい。』

心の中で呟く必要もないのに、和は声にしなかった。

一口飲んだら、和はテーブルにゆっくりとそれを置く。

前をむいてみると、遙は頬杖をついてこちらを見ていた。

一連の動作すべてをみつめていたらしく、

遙の視線になんとも強いなにかを感じれば和は自然顔を赤くした。

それに気付いたのだろう。遙がふ、と目だけで笑うとその鋭さをゆるめた。

「和は、気付いていたんだよね？」

その言葉の意味するところは、本当はわかっている。普段ならば当たり前でしょう、などと軽口をたたくが和は今日、遙にたくさん言葉をもらいたいと思った。だからこそ、和はわかっている事にも疑問を呈する。

「なにが？」

その言葉は、意外だったのだろう。

一瞬目を丸くして無言になった遙だったがやがて困ったように眉を下げれば、口は笑みを作っていた。

「そっか。今日は、一から十まで話せてことだね。」

「…駄目？」

和の問いに、遙はゆっくりと首を横に振る。

それにほっとして、和はまた一口緑茶を含んだ。

遙も、これから話す数々の事を考えれば口が渴いてくるのかカップを持てばそれなりの量をその喉に流し込んだ。

そうしてゆっくり和のほうを向く遙の顔は真剣で

和は緊張のせいかがくり、と唾を飲み込んだ。

「…俺さあ。思っただけど。校門はアウトじゃないかな。」

「……………は？」

本当に意味がわからなくて和が眉を顰めれば
遥はふ、と息を吐く。
その顔は先程とは様子が違ってなんとも子どもっぽい、
拗ねたような表情になっている。

「よりもよって校門なんてさあ、全校生徒がみるじゃないか。
それとももう統一するつもりなの？」

「あの、ごめん、本気でわからない。なにが？」

和が困ったように遥に訊ねれば、遥ははあ、と息を吐き
がたん、と立ち上がればマグカップを持って席を移動する。
向かい合って座っていたのが
和の隣に腰を下ろすので距離が一気に近くなった。

それに多少動揺した和は若干椅子をひいたが、
遥はかまわずに和の髪を一束とれば、それを口元に寄せる。

「…髪、と眼鏡。」

「！」

さらり、と髪を解放すれば遥は咎めるような声音で和をのぞきこん
だ。

和はやつと合点がいつて目を丸くすれば、なんともいまさらな話だ
と呆れる。

「なんにも言わなかったじゃない。」

「あのときはね。だって、あの塩ちゃんて呼んでた子
和の眼鏡姿知らなかったんじゃないの？だからその格好なんですよ
っ？」

「わかってるなら今そんなこと言わなくても。」

「素顔みられるのは単純に気に入らないんだよ。」

「だから、これで一日過ごすとかはしないってば。」

「せめて俺のだってプラカード持ってその姿の和と校内練り歩きたい。」

「絶対やだ!」

「わかってるよ、言ってみただけ。」

苦笑して遥がお茶を一口含む。

言ってみただけ、といいつつ、多分実行はしたいのだろう。

そんなことを思えば和は自然ため息を吐いていた。

「学校でナンパもないでしょう。好意を抱いてくれたとしたって調べれば私が笹森和だってすぐわかるじゃん。」

和泉君押しのけて私に手出す奇特な人間校内にいないでしょう?」

「うん、だろうね。俺もそう思う。」

遥が和の言葉を肩を竦めて肯定する。

彼の溺愛ぶりは異常だというのは、もはや周知の事実だ。

その遥よりも強い感情を持って彼女をどうしようという人間は学校中を探しても存在しないだろう。

なにより遥の容姿をみて敵前逃亡する男がほとんどだ。

「だからつまりさ、好意を持たれるって時点で腹立つんだよね。」

その言葉に、和は固まった。

「なんとなくあの子可愛いな、とか目で追う心理って誰にでもあるでしょ。」

俺も昔はそういう風に街中の女の子みたりとかしてたからわかるよ。」

「今も別に良いんだよ?そう思ったって。」

そこまで心を縛るつもりはない。和がそう言えば遥は眉を顰めた。

「俺は他に向く心がもう死滅しちゃってるから頼まれても無理なんだよ。」

たとえば身内を可愛いと思うことはあるよ。

でも女性としてすれ違う他人をあの子綺麗だな、とか思えなくなってるの。」

「はあ、そうですか。」

「ていうか、和。…街に出たりしてそういう事思ったりすんの？」

遥の声が不穏なものになる。目を細めて、和をうかがっている。その姿に多少の焦りを覚えるも、冷静を心がければ和は逡巡する。

「あのひとカッコイイな、とかそういう事だよねえ？」

まあ…好きな種類の顔っていうのはなくはないけど。」

「え、初耳だよそんなの。」

「そりゃあ、まあ。訊かれなきゃ言わないよ。」

女の子同士じゃあるまいしそんな会話あんましないでしょ。」

「好きな顔って…どんなの？芸能人とかで言うって誰！！？」

物凄い剣幕に、和は恐ろしくなるが

そんな反応をされるとは思ってもおらず、若干ひいてしまう。

「総合的な雰囲気かなあ…有名な人でいえば加　とか、大南　とか。」

でもいちばん好きなのはね、真　和！」

「……え、誰？」

「ドラマとかでね、目立つポジションはあんまやらないんだけどけっこう出てるよ色んなの。映画もかなり出てる。」

「ふうん…なんというか、あまり良くわかんないんだけど…」

少なくとも俺の顔は好みから外れてるっていうのだけわかった。」

「和泉君、王道だもんね！。芸能界—イイ男とか普通に言われそう。」

「

さらり、とそんな事を言われてしまい遥は地味にダメージを受ける。

「じゃあ、そういう感じのひとが街中で歩いてたら

目を奪われたりとかするの？」

「んん—？どうだろうねえ。あ、とかは思つかもしれない。」

「……………ふうん。」

なんとも不機嫌になる遥に、少しの焦りを覚えるも

和は、はた、とある事に気が付いた。

「ちょっと待って？その言い方だと…」

つまり、私が学校とか街中とかで道行く男のひとに

あ、と思われるのさえ嫌だったこと？」

「そうだけど。」

「いや、さらりとそういうこと言わないでよ。ないわ。ひくわ。」

「でも和は他の男のひとに目を奪われたりするんだ…。」

「別にそれ以上でも以下でもないんだけどねえ。」

そこから好きって感情は生まれないんだし。

私のそういう部分を占めてるのは和泉君だけなのにそれじゃ不満なの？。」

首をかしげて訊ねる和に、遥は、う、とうめく。

なんとも可愛らしい言葉と仕草に、

今すぐ抱き潰してしまいたいという衝動に駆られた。

「…ごめんね、本当に嫉妬深くて。」

「うん、まあ、あまりその、暴走しないでくれればそれでいいんだけどね。」

「疲れない？ずっとそんなんじゃない。」

「私が梓さんみたいな美女じゃなくて良かったね。」

「…うん。でも和の容姿だって決して普通ではないよ。」

「またそれ言うのか。……私と和泉君の中身が逆だったら大変だろうね。」

「きつと毎日喧嘩するんじゃないの。」

「今日もまた女の子がみつめてた！とか、ファンクラブってなに！とか、

また声かけられてまんざらでもないんでしょ！とか。」

「ああ…。」

それを言われてしまうと遥はなんとも心苦しかった。

おおよそこの彼女は、自分の周りの女性にむかって

嫉妬というものをしたことがない。

それは寂しくもあつたりするが、確かに自分のような状態であればここまで目立つ容姿の人間と付き合うのは心神耗弱状態だろう。

「わっかんないなあ。浮気じゃないんだし気にならないけど。」

「和は、俺が学校中の女の子にみつめられてもなんとも思わないんだ？」

「不思議には思っけどね。なんでこの男が自分の恋人なんだろう、とか。」

あとは…中身を知ったらどれくらいの子が残るんだろう、とか？」

「あのね。」

遥のがつくりとうなだれる姿に和は微笑む。

「私はね、勝負にならない相手に気を揉むほど心広くもないし余裕もないんだよ。」

和泉君の顔が大好きでそれに寄ってくる子なら放っておいてもその内いなくなっちゃうでしょう？

でもそこを飛び越えて近付いてこられてしまったら嫉妬するんだろぅなっと思って。

初めてそこでライバルだと感じるからだろうね。」

「……っことは、和が妬いてくれてる時って

俺がそのひとを気にかけてると認定したときってことだよな？」

「うーん？どうだろう、そうじゃなくて私と同じくらい真剣だと思えば

きつとそういう気持ちも表に出ると思うよ。」

実花ちゃんのと きだっ て、まったく抱かなかつたというわけでも…。

「

「え、そうなの!？」

「寂しいな、とか、実花ちゃんくらい可愛ければ

和泉君の隣で違和感ないな、とか。そんな事はまあ思ったよ？」

「出してよ、言っ てよ!！」

…束縛はてつきり嫌がられると思っ たがそっ でもないのだろうか。

和が首を傾げていれば遥が笑った。

「だっ て愛され実感俺もほしいもん。わかっ てるつもりでもやっ ぱりね。」

「そっ か…うん、わかつ た。今度そっ 思っ たら口にしてみる。」

「ありがとっ 。でも、なるべくそん な気持ちにさせないようにするからね。」

嬉しそっ に笑っ 遥につられて和も微笑んでうなずいた。

遥は和にもっ 一度笑いかけ、頭にそっ と手をやれば

いかにも愛しいという表情で優しく撫ではじめる。

その手がとても嬉しく感じれば、

和は知らず知らず頭を遥のほうへと寄せてしまっている。

遥がそれにぶ、と噴出した。

「和、おいで。」

「え？」

「頭をもつと撫でてあげる。おいで？」

とろけそうな顔をしている遥を見て、それからぼんぼん、と

自身の膝を叩く遥の手をみつめる。膝の上ののっかれ、という事だ。

少し戸惑いながらも、和は誘惑に抗えずにゆっくりと立ち上がると

そろそろ、と遥に近寄ればとても緩慢な動きで遥の膝に音もなく腰

掛けた。

遥はこれで満足なのだろうか。遥と同じ方向をむいているので

和は顔を見ることができない。遥の息が和の後頭部にあたったので

どうやら笑ったようだ、と想像する。

和の頭への愛撫が再開されれば、和は顔をふやけさせた。

後ろから遥が左腕で和の腰に巻きついて抱きしめられれば

和はぼんやりしていた意識を覚醒させる。

「……………俺、ここ最近、和に触れてなかったでしょう？」

やっと本題に入ったことに気が付いた和は態勢を横向きにしようか
と思ったが

遥の左腕がそれを阻止した。

「ごめん、このまま。見られながら話すのは緊張する。」
「…それ前も言ったことなかったっけ？顔みないでって。」
「そうだったっけ？」

和はそのときのことを反芻し、しかし今回は赦す心積もりが持てないと感じれば

半ば強引に遥の膝から降りた。

それに遥が固まるが、和は無視して遥の隣の椅子にまた座りなおせばわざわざ横に並んでいた椅子の向きを遥のほうへと転換させ間近で向き合う形をつくった。

遥がそれに狼狽しているが、和はやめるつもりもない。

「ちゃんと、目をみて話して。いつとも逃げてばかりはずるい。」
「……………参ったな。」

顔を手で覆って俯いた遥に和は顔を顰める。

そんなに自分の顔をみてし辛い話というのは一体なんなのだろうか。

「……………うん、うん、わかった。」
「話してくれる？」
「うん、きちんと目をみて話すよ。確かに卑怯だもんね。」
「……………とりあえず、話し終わるまでは怒らないから。」
「それはありがたいな。」

ふ、と遥が笑う。…怒られるような話なのか。

「さつきも言ったけど。和に触れないようにしてたじゃない？」
「うん。」

「最近ね、父さんの事があったから余計だったのかもしれないけど。」

なんていうか、色々と解決したじゃない？」

「解決。」

「そう、実花のことも、うちの両親のことも。」

梓とかも言ってたけどさ、周りはほとんど固められていって

お互いに学校公認、親公認。

俺としてはありがたい話だけど和は別れたくとも逃げ場がないって
いう。」

「別れたいとか思ってないけど。」

「うん、ありがとう。」

和の間髪入れない回答に遙が顔を綻ばせる。

わかっていても、不安にはなる。

言葉はやっぱりほしいものだ、と言っていた広未を思いだせば

和は再度心の中で納得していた。

「だからかな……？安心はしたんだけど、それと同時に気になっちゃったんだ。」

あとひとつ、完全にもらえてないものがあるなって。」

「……なに？」

「和の身体。」

「はい!!!？」

遙の双眸が真っ直ぐに和の顔をとらえ射抜くように見つめられれば
言われた事とあいまって、和はみるみるうちに頬を赤らめる。

「嫉妬深いつて話したけど、本当に俺はなんというか、

とにかく自分のだつていう実感とか、安心がほしいんだと思う。

でもただ単純に和の全部みたいっていう感情がいちばん強いけど。」

「……………それは、つまり？」

「うん、限界きてた。」

苦笑する遙に、和は頬だけでなく顔全体を赤く染め上げれば耐えられなくなり顔を両手で覆った。

「触つたらなに仕出かすかわかんないから、とにかくまずいってふたりきりのときとか特に怖かったな、それこそ押し倒しそうでそれをまた言わずに抑えてるわけだから余計にね。

感情が自分の中でどろどろになってる感じっていつのかなあ。」

「私、言ったじゃん。そうだったら教えてって。」

なんとか顔から手を離し、それでも顔は赤いまま遙を睨む。

終わるまでは怒らないと言ったが、怒るより混乱してしまうような内容だ。

くだらないといえばくだらない、と和は思うが

遙は相当苦しんだのだろう、そこまで思い悩むのだから。

「…だって、やっぱり待ちたかったんだよ。」

和が自然と俺ともっとくっつきたいな、とか思ってくれるのを。

抱きたいってというのは俺の我儘で無理やりじゃ意味がないと思うからだから、和が自然にもうちよつと振舞えるまで待ちたかった。

でも暴走しそうなのは止められないからおさえてた、のに。」

「のこ？」

「和が、俺の周りで他の男と仲良くするから。」

余計に爆発しそうになったしさつき言ったような周りを固めたっていう安心も

どっかいつちやいそうになった。すっげー不安で。

ある程度は触らないとやっぱり変に思われてんだろうなって。」

その言葉に、和が目を見開いた。

まさか、本当に母の助言が役立つとは思っていなかったからである。

和がなにかに驚いているその反応に、遙の瞳がきらりと光った。

「気のせいだったらいいんだけど…和さ、わざとやってなかった？」
「え。」

「俺の近くをここ最近うるうるしてたのに全然話しかけないからなんつか変だな、と思ってたんだよね。」

遙の言葉に、隠す理由もないと思えば、和は素直にうなずいた。

「お母さんがね、沈んでた私に言ったんだよ。」

…極力、和泉君の周りをうるうるしてみなさいって。

でも、避ける必要はないけどなるべく和泉君をかまうなって。

そしたらきつと良い事が起こるからそうしてみなさいって言われて。

「…で、実行した。」

「そう。あの、でも、男と仲良くとかは別にやってるつもりなかったんだけど…。」

「……………つまり普段話してる人間が男のが多たって事だね。」

はあ、という遙のため息に、和は肩を落とした。

「まんまと依子さんの術中にはまったわけだね。」

さすが、和を産んだお母さんだけある。」

「あのう、お、怒ってる？」

「いいや。そうさせたのは俺だし…結果的には良かったんじゃないかな。」

そんな事があったからこそ俺は駅前で張ってたわけだし。」

張っていた、という言葉に和が目丸くして遙の顔を凝視する。

遙は視線に多少の居心地の悪さを覚えれば少し目をそらし、

しかしすぐに戻して和と真っ直ぐむきあった。

「先に帰った振りして、駅で待ってたら喫茶店に入っていくからさ。しかも男が居る！と思ってさ。相当焦った。

ひよっとして嘔吐かれたのか、とかぐるぐる考えて。

最近の態度は見切りをつけられたのか？と思ってたから…。そしたらこのメールが届いたんだよね。」

テーブルに肘をつき、手の平に頭をあずけながら

遙が携帯電話の画面を開きこちらへと向ける。

和はそれにぼり、と頬をかいた。

『SOS！駅前の喫茶店』

簡潔な一言が、しかしなんとも切羽詰った状態です、と言っているように思えてしまい、遙は相当焦った。

だからこそ店まで走ったのだ。すぐ目の前だったにもかかわらず。

「いや、なんかね、私の印象でしかなかったんだけど

どうも…広末の友達やってるって時点でめをつけられたら

面倒そうだと思っではいたんだよ。

で、なーんかやっぱり面倒な事言うなあこのひと、と思っで。」

「で、俺の事を呼んだんだ。」

和がこっくりとうなずく。

「塩ちゃんと会話してる間も

頭であれこれシュミレートしてたけど打破する方法が思いつかなくて。

なんか話も長くなりそうだったから。

和泉君に話さずに男のひとと会う事に結果的になつたわけだし…
最近の様子が変だつていうのもあつて喧嘩にならないように
呼んだほうがいいかなあつて…迷惑だつた？」

ちら、と遙に目を向けてうかがうその表情がとても愛らしく
遙は怒る気にも問い詰める気にもなれない。

まず首を横に振って迷惑だなんて、という思いをあらわした。

「むしろ嬉しかった。現場に呼んでくれたつて

少なくとも俺は頼りにされてないわけではないみたいだし。

都合の良い男にだつて和の為なら喜んでなるよ。」

「だからそれは駄目！今度ぜつたいになにかお礼するからね。」

「お礼、ねえ。」

その言葉に遙は苦笑する。

和からもらいたいものなど、たつたひとつしかありはしない。

それは彼女にしか与えられないものであり、

遙が付き合う以前も、今も、

彼女を知つてからずっと求め続けてやまないものだ。

しかしそれでは意味がない。

なんの為にわざわざ愛しい彼女から距離をとつたのかわからないで
はないか。

好きだからこそ、大切だと思つからこそ、

無理強いなんてしたくない。乞つて遂げるものに、なんの価値があ
るのだろう。

それでも遙の理性が消し飛んでしまえば、

強引にでも奪つてしまつたらう、と矛盾した心で考える。

心では、本当にすべてで受け止めて欲しいと思う。

しかしその一方で、自分の中の悲しい男が暴れ狂つのを制御できな

いのだ。

一時でもいい、彼女のすべてを手にしたと実感できるなら、と。

結局、遙は自分がなにより信用できずにいたのだ。

だからこそ、目の前の彼女と接触するのを避けて避けて避けた。

しかし不思議な事に、和の心のうちをあゝの喫茶店で垣間見ての今、遙の心は凧いでいた。

和の心のうちは、見え辛い。言葉をねだれば言葉をくれる。

しかしそれが本当なのが、遙はいまいちわからずにいた。

実花との事や、実家での事をを思えば、

十二分に愛してくれていると感じることは確かにできた。

しかしそれは、人間としてではないのか？と

遙はどこかを感じずにはいられなかった。

どんな形であれ、和から好意を持たれるのは嬉しい。

しかし付き合い始めてから、逆に不安が増えていった。

自身の欲深さに呆れたくらいだ。

ひととしてではなく、男として自分を求めてほしかった。

付き合いだしてから彼女は、好きだと言葉をくれる。

恋人同士でしか及ばない行為にも、嫌と言わずに応えてくれる。

けれども、彼女から求められる事はあまりにも少なく、

頭を撫でられるのが好きなのは自分から施されるそれだけだと言われたとき

やっと自分はこの子にとって男なんだと思えたけれど

それも段々と薄れていった。

そもそも、頭を撫でるといふものに遙はセクシャルなものを感じなかった。

どちらかというと安心とか庇護の対象めいた事で、それは保護者として、父とか兄とか、そういうものに近いのではないかとか
そんな馬鹿な事で悩んだりしたのだ。

キスは、遥以外は気持ち悪いと言った。

けれどそれでも、彼女からそういうものをねだってほしくて遥は随分とせつない日々を過ごしたものだ。

喫茶店で和の口から発せられた言葉に、遥は眩暈がした。幸せて倒れてしまうのではないかと思ったのだ。

不安だと、不安になるのだと確かに彼女は言った。

それは自分の臆病さゆえだと。

和は、平気ではなかったのだ。

遥に触れられない事が平気ではなかった。

それはつまり、そういうことなのだろう。

遥はにや、と笑えば、目の前の和を見やる。

その笑顔になにを思ったのか、

彼女が少し引き攣った顔をしているが気にする事なく口を開く。

「お礼、今してもらってもいい？」

その遥の言葉に、和の身体が固まった。

第六十五話「その理由（わけ）を教えてください。その7」（後書き）

中途半端な所ですいません。長くなるので切りました。

第六十六話「その理由（わけ）を教えて。その8」

『お礼、今してもらってもいい？』

遥のその言葉の意味を考えると、どうにも変な汗が出てしまう。

ここは遥の一人暮らしの部屋で、ふたりきりで。

状況的にも、なにかを想起せずにはいられないのだ。

「な、なあに？」

和の顔が緊張で強張る。しかし遥はにっこりと微笑んだ。

「簡単だよ。俺の質問に正直に答えてほしい。」

その遥の言葉に些か驚いた和は、拍子抜けすると共に目を丸くしてしまふ。

「え、それだけでいいの？」

「……和、なんか変な事想像した？」

なんともいやらしい笑い方をして遥がそんな事を言う。

その言葉に、普通の女性ならば顔を真っ赤にして怒ったりだとか俯いてしまったりするだろう。

けれど目の前の彼女は心底嫌そうに顔を顰めた。

「余程世間知らずでもない限り、さっきあんな告白されて今お礼してくれて言われたらそっという事を連想しない？」

うふふふー、と笑って、すっかり不機嫌になった和は遥の頬をちからいっぱい引っ張った。

「いひやいいひやいほへんらはい」

「……ったく、質問てなに？」

ば、と手を離して和が訊くので

遥は頬を自身の手でこすりながら、ああ、と声をあげた。

「俺が触らなくて、寂しかった？」

「……は？」

「抱きしめ合いたいな、とか、キスをしたいな、とか。思った？」

「……………」

正直に答えるならば、和の心はイエスだ。

なんせあれほど不安になったのだから、結局は彼に施されるそれらを彼女が嫌がるどころか好きだから受け入れている、という、

なんとも恥ずかしい自身でも気付いていなかった一面を彼女は知ってしまったのだ。

が、しかし。

それを言うにはとてつもない抵抗があった。

和にとつて、そこは未知なる部分だ。

ブツているとかそういう事ではなしに、知識としてあるもの。実際に体験していないそれらにたいしてまるで免疫のない彼女は

その分野においてなんといおうと初心そのものである。であるからして、こんな事を言うのは彼女の中で

大袈裟に言ってしまうえば自分は淫乱です、と宣言しているかのようなそんな恥ずかしさがあった。

遥がなぜそんな事を自分に言わせたいのかもわからずに和は声を出せずにいればみるみる顔を赤くしていった。

遥は、物言わずとも雄弁に語る彼女のその顔を確認すればにやける表情を止めることができない。

「……なんでそんなこと訊くの？」

「知りたいから。俺のことを求めて欲しいから。」

「……………っ、ひ、ひいたり、しない？」

恐る恐るそんなことを言う彼女に

遥は半ばもう勘弁してくれ、と叫びたくなった。

さっきまで大丈夫だと思っていたのに、

あまりの可愛さに本気で理性が飛びそうだと感じれば、

遥は和と同じように顔を染め上げ頭を抱えた。

それに何を思ったのか、和が泣きそうな顔をする。

遥は、中途半端に触れてしまえば逆に危険だと自重していたがもう限界だった。

勢い良く立ち上がれば和の腕を持って腰を浮かせれば、今度はその腰に腕をまわしてちからいっばい和を抱きしめた。

「い、和泉君？」

「ねえ教えてよ。さっきの質問に答えて。」

ひどいところか、もしもそうだと言ってくれたら俺は嬉しい。

和が、男として俺を好きだと思ってくれるのは何より嬉しい。」

その言葉に、あまりにもいまさらではないかと和は驚いた。

男として好きだと思わない限り、恋人関係を築こうなどと誰が思う

だろう。

彼がそんな不安を抱いているとも知らずに、和は今日まで過して来た。

もっと早く言ってくれればいいものを、と思ったが口にしたところで、本当の意味で彼の不安はきつと拭えなかったのだろう。

言葉がほしい。行為がほしい。気持ちを確認したい。

なぜなのだろう。

両想いになって、幸せなはずなのに。

怖いのはなぜなのだろう。

いつもどこかが不安で。けれどもやっぱり幸せで。

ずっと飽きることなく、彼とふたり努力していけたらと願う。

「……遥。」

「！」

名前を呼ばれて、遥の心臓がおかしいくらいにはねた。

ああ、彼女はほんとうに。自分を喜ばせる天才だ。

次の言葉を待つその時間が恐ろしく長く感じられる。

鼓動はどんどん早くなり、和の耳にもそれが聞こえてきて、嬉しさに顔が綻んだ。

遥が、和の一挙手一投足に注目し、心をざわつかせる。

それがとても嬉しいのだ。

「遥、あのね。…キスしてほしい。」

「……」

彼女は、いつだって予想の上をいく。

それは遙をいつも翻弄し、時には大きくため息を吐くことだってある。

しかし、これは、あまりにもだと遙は思う。

寂しかったと。

ずっと触れられないのは嫌だった。

遙の抱きしめる腕や唇は好きだ、と。そう言ってくれさえすれば心は十二分に満たされたのである。

「…和の馬鹿。」

「え？」

一瞬なぜ、と訊こうと思った言葉は、しかし遙の次の呟かれた言葉と折れそうなくらいきつく抱きしめられた事で阻まれてしまった。

「可愛すぎ。」

それを最後に、遙の唇が和のそれを覆った。

荒々しく与えられるそれに驚きで目を見開けば次には足が小刻みに震えだす。

そろ、と舌で舐められて催促され、和は唇を薄く開く。

遙の舌がまるで軟体生物のようにうごめいて、和の口腔内を犯していく。

最初の乱暴さとは裏腹に、入ってきたそれは

久しぶりの中を堪能するかのようにゆっくりと動き出す。

歯の一本一本を確かめるようにつつかれ、

それが終われば上顎全体をぬるりと舌が這う。

その感覚に和が背筋を震わせた。

しばらく口腔内への愛撫がつづき、それがおわると
遙はまた緩慢な動作で和の舌をつつく。和の手がきゅ、と遙の服を
つかんだ。

延ばしきった遙の舌が和のそれを完全に捕捉すると、
いやらしい唾液が混ざる音が部屋中に響き渡った。和が羞恥で頬を
赤らめる。

このまま、もっと和と深く繋がりたい、と欲望が告げる。
しかし理性はそれを頑なに拒めば、遙はひとつ気になった。

ゆっくりと舌を後退させ、名残を惜しむかのように
和の唇を甘噛みしたあとに少し強く吸い上げて、唇をはなした。

「ん…」

甘い響きのある声をあげられて、遙がそれに応えるように囁く。

「和、好きだ、どうしようもなく、好きだよ。」

耳元で艶っぽく囁くそれに、和がまた身体を少し震わせた。

夢心地のように瞳をとろん、とさせて唇を半開きにさせている和を
みていると

またも理性が飛びそうで遙は慌てて目をそらす。

しかし、その表情もどこか気にかかって、遙は眉間に皺を寄せた。
唇を耳元に寄せたときもそうだったが、先程キスをしている最中、
思ったのだ。

…異常に熱い。

遙は改めて和をみつめれば、
理性の二文字を心の中で呪文のように唱え続けると
前髪を掻き分けて、自身の手の平を和の額にそつとあてた。

「！やっぱり…だから言ったじゃないか、身体を冷やすよって。」
「へ？」

「さっきの、熱に浮かされて言ったとかいうオチじゃないだろうね。
…だったら相当ショックなんだけど。和、熱あるよ。」

「え、マジでか。っていうかそれはないって。」

私、熱が出ても基本的に会話とかそういうの変わらないから。
記憶が飛ぶとかもないし。そのぶん気付かれにくいんだけどね。」

あつはつはと笑う和に遙は慌てて腰と膝裏に手をまわせば
ぐん、と持ち上げた。

もはや定番になりつつあるお姫様抱っこだ。

「ちよ、ちよつと!？」

「あははじゃないよ、もう！体温計、この家に置いてないから
何度あるかわかんないけど…タクシーを呼ぶからそれまで寝てて。
俺のベッドで悪いけど、寝室運ぶよ。」

「え？で、でも、風邪菌をつつしちゃうし蔓延させちゃう…」

「もう遅い。あんだだけ濃厚なキスしたあとに何を言っちゃってるか
な。」

遙の言葉に、和が顔を赤くする。

その様子をみても思うが、顔すら赤くならないのはどういうことか。
額はどう考えても異常なまでに熱いというのに。

唯一潤んだ瞳が風邪を引いている人間にみえなくもないが。

遙が扉を開くと、そこにはリビングの続き部屋とは違いきちんと人間が住んでいる空間ができていた。

部屋に入りまず気になったのがCDラックだ。店にあるような、くるくると回るタイプのそれがどうしても気になる。

趣味はないなどと遙は言っていたが、どうやら音楽を聴く人間らしい。立派なコンポもある。

簡素なテーブルにはデスクトップ型のパソコンが鎮座しており引き出し付きではないその机をみて

筆記具などをどこに入れているのだろうか、と和は気になった。

小さめの本棚には辞書や、数冊の漫画と料理の本もある。

灰色のベッドカバーがついているそこに和はゆっくりとおろされれば遙が掛け布団をめくって和を中へと押しやる。

この状況でラックをみせろと言ったら怒られるだろうか。

しかし彼がどんな種類を好んで聴くのかが非常に気になった。

和の視線がちらちらとそちらに向いているのを気付いたのだろう。

その先を追って確認すれば、遙は盛大なため息を吐く。

横になる和の傍らにしゃがむと彼女の額を人差し指でピン、と弾いた。

それに和がおうつ、と妙な声をあげる。

『うつ、デコピンされた…病人なのに。』

痛い、と涙目になっていれば、目の前で遙が睨んでいる。

「あのね、こんなときくらいさういう事気にすんのやめなってるの。」

「えーだって。嘔吐してたじゃん、今まで。趣味ないとか！」
「あれは趣味っていうのかなあ。なんとなく買ってるって感覚だけどね。」

「えー？大型のCDシヨップとか繰り出したりしないわけ？」

「ここらへんで買えないのはネットで注文しちゃうから。」

「ああー…って、普通のCDシヨップで買えないような種類のをやっぱり聴いてるんじゃない。趣味だろうそれ。完全に。」

「俺あまり執着ないんだけどね。まあ嫌いとは言わないけど。なんなら全部あげたっていいよ？」

肩を竦めてそんなことを言う遥を

和は信じられないものをみるかのようにみつめていた。

彼女にとつての絶対ともいえるそれらをまるでこだわりがないように遥が淡々と片付けようとしている。

なんということだろうか。

「ねえ、今度貸してよ。つか、なに聴くの？洋楽？邦楽？」

「んー…邦楽のが多いかなあ。ほぼ邦楽だから…ってじゃなくて。寝てなさいってば。いつでも来ていいから。」

「えーと……………うん、わかった。」

言いよんだ和に遥ははつとなる。

恐らく、遥の告白を気にしているのだろう。

「和、別にそういう意味じゃないから。」

「いや、そんな事を言ったらだめだよ。」

その気もないのにこの部屋入ったらいよいよ私、悪魔じゃん。だからその、次来るときは…ええと、あの、い、いいよ？」

恥ずかしそうに布団で顔半分を覆う和は、
遙にとつて殺人的な可愛さであった。

胸のド真ん中を撃ち抜かれたような衝撃に眩暈を覚えれば
遙は頭を抱える。

そんなことを、この状況でなぜ言ってしまうのだろうか。

遙は思う。今、充分、彼女は悪魔であると。

「…和、無理しなくていいんだってば。」

「別に無理してないよ。確かに、したいって感覚はないけども…
かといって嫌だとは思わない。」

「え、そ、そうなの？」

「うん。恥ずかしいなあとは思うけど、その。

愛情確認は私もしたいと思うというか…

和泉君の不安を全部取り払ってあげたいというか…

ああああもう！なにを言わせるかな君は！！」

ついには耐え切れず、和は遙の頭をべしべしと叩き出した。
遙がそれに慌てて謝罪するが、にやける顔を止められない。

「う…クラクラしてきた。」

「わ、ごめん、寝てて、安静にしてて！すぐにタクシー会社に電話
するから。」

「でもタクシーとか悪いよ。こっから家までだと一体いくらかかん
の？」

「馬鹿！そんなことをこんな時まで気にするんじゃない。

こんな状態で徒歩と電車で帰れるわけないだろう。」

「だって、そんなの…！」

和がなおも言い募ろうとするのに苛立ったのか、遙は無言で和の唇

をふさいだ。

突然施された口付けに和が目を白黒させれば
次には吸い上げられた下唇がじん、としびれて思考がみるみる蕩け
ていった。

無言になって赤く染まる和に、遥はふ、と微笑む。

「これ以上抵抗すると、今すぐに抱くけど。どうする？」

適度な運動は風邪に良いってきくしね？などと

笑っていない瞳で遥がそんな事を言うので、和は降参した。

「…ごめんね。」

「なーぎ。もう、どうして俺の恋人さんはちっとも甘えてくれない
かな。」

もうちょっと頼ってくれないと、寂しくて爆発するよ。」

「ば、爆発!？」

「そうそう。肉体的にも精神的にもね。」

精神的になにかか爆発してしまう、という表現はまあわからなくは
ないが

肉体的にとはどういう意味合いなのだろうか、と和はつい考えてし
まった。

しかしそうか、と和は思い至れば、遥をじ、とみつめる。
視線に気が付いた遥が首を傾げると、和は微笑んだ。

「ありがとう、よろしく願います。」

「!和…。」

目を丸くして次には満面の笑みを顔いっぱいにした遥が

和にもう一度口付けようと顔を近付けたが、ゆるゆると緩慢な動作で和が遙の顔に手の平をぺた、とくつつけた。

「いいかげん、駄目。うつる。」

「……けち。」

しかし。

遙は手の平から伝わる熱の異常さに眉根を寄せれば、

それを自身の手でそつと顔からはなすと、きゅ、と握り締めた。

和も反応して握り返すが、力があまりに弱い。

よくよく観察すれば瞳は潤み、息が少し上がっている。重症だ。

というか、なんだろうか、この破壊力は。

相手は重病人だというのに、なぜ風邪を引いた女性というものはこうも色香漂うのであるうか。

悲しい男の性なのか、さつきからやけに口の中に唾液がたまる。

ごくり、と飲み下してもあまり意味がない。

そらせばいいのについつい視線は釘付けになってしまふと思えばいいかげんここにいるのは危ないと感じて、遙は立ち上がった。

「すぐに電話をしてくるから。いい子で寝てるんだよ?」

「…起き上がる気力がないから大丈夫だよ。」

笑う顔にも、先程の余裕が感じられない。

遙はまた顔を少し顰めたが、次にはにっこりと微笑んで和の額にそつとひとつキスを落とす。

そうして、遙が部屋をあとにすれば待っているのは静寂。

ほ、と息を吐けば、和は天井に瞳を向けた。

遙の匂いがそこかしこに広がって、その気配を感じる。

病気の時、心細くなつてかまつてもらいたくなるという人間がいるが

和は性格ゆえか全くの真逆であった。

床に伏している状態のときはなるべくこうしてひとりでいたい。

誰にも構われず、この空間に身体をじ、と横たえていれば

いつしか感じられるその空気に和の心は癒されてゆく。

施されるばかりなのが嫌いだという生来の性格も手伝つてか

自身が看病するのは苦ではなくとも、されるのが嫌なのだ。

気になつて仕方がない。

それでも、厚意自体は素直に嬉しいと思つている。なんとも複雑だ。目をつぶれば、ぐらぐらする頭がゆっくりと落ち着き

待っている暗闇に身を預けてみると思考はどんどんクリアになつていった。

病氣中にする考え事は、くだらなかつたり壮大なテーマのものが多い。

起きればまた辛い現状が待つているが、

この半覚醒で広がる世界観は、そう嫌いではない。

もっとも、病氣にならないにこしたことはないのだが。

「ちよて…」

「遙、ちよつといい？」

「！実花。」

遥がタクシー会社に電話をしようとしたところで偶然にも実花が訪問してきた。

いつも彼女はインターホンを鳴らすことなく入ってくる。声を上げようとする彼女をし、と制すると、遥は事情を説明した。

「え！熱って…和さんは？大丈夫なの？」

「今、寝室で横になってる。だからタクシー呼んで家に帰すんだよ。」

「タクシーって、今から呼ぶところ？」

「そうだけど。」

「だったらいいわ、私が佐山を呼ぶから。」

「は？」

タクシーなどよりも佐山を呼びつける！と目の前の実花が意気込む。それに遥が慌てて待ったをかけた。

和が金銭的なことを気にしなくなるのはありがたいが

今度は実花に恐縮してしまわないか考えてしまう。

「和ってそういうのけっこう気にするんだよ。」

「でも、タクシーを呼んだって気にするわけでしょう？」

それなら安全に運べる手段を選んだほうがいいじゃないの。

車は広いから和さんも楽できるし。佐山は信頼できる人間だわ。」

「それは…まあ、そうだけど。」

実花の主張にそこまで反対する理由はない。

なによりも、今は押し問答している時間が惜しいと感じれば

結局はその意見に賛同し、車の件は実花に任せる事にした。

実花は了承すれば、すぐさま隣の部屋へと戻ってゆく。

実花の様子に、よくもまあ、あそこまで彼女に懐いたものだと半ば呆れたが、和の様子が気になった遥は寝室へと向かう。なるべく音を立てないように扉を開いて、和？と声をかけようとすれば、ベッドからは可愛い寝息が聞こえてきた。

「…寝ちゃったか。」

寝顔をみたのは初めてかもしれない。

そう思うと遥の顔は自然と緩んでいく。

額に手を当ててみると、やはり先程よりも熱い。

暫く額から頭のとっぺんを撫でるように手の平を行き来させ小さく息を吐き出した。

「元気になったら、…続きをしようね。」

くす、と小さく微笑んで、遥はゆっくりと立ち上がり寝室を出て行った。

和の家にも電話を入れておかねばならないと思えば、リビングで携帯電話を操作した。

遥が和を抱きかかえて運ぶ際、運転手の佐山が和の顔を覗き込んで可愛いなどと発言すれば、みるみる遥は不機嫌になった。

「みるな、減る。」

「それがわざわざ足になった俺に対する態度か？」

ま、お前の為にやっってるわけじゃないけど。」

「佐山、からかうのはおやめなさい。遙もよ！」

和さんを自宅へ帰すんでしょう？さっさと乗りなさい。」

「実花もついてくんの？」

「そのまま実家に行くのよ。週末はいつも帰るから。」

「ああ、なるほど。」

眠り込んだ和を抱えて遙が車に乗り込むと、実花もそれに続いた。遙は膝に抱えて和を離さない。後部座席には充分にスペースがあるというのに、

心配顔をした遙はじっと和の顔を覗き込み、頭を優しく撫でていた。

助手席に乗った実花がミラー越しにそれを視界にうつす。

大きなため息を吐けば、佐山がくつくつと笑った。

「佐山、仕切りを上げてちょうだい。」

「…よろしいんですか？」

「さすがに病人に滅多な事はしないでしょから。」

和さんが万一起きた時にこっちを気にしてしまっっては可哀想でしょう。」

「かしこまりました。」

実花の発言に、佐山は心のどこかで嬉しさと寂しさを同居させていた。

成長したお嬢様は前よりも遣える者たちへの態度が優しくなった。

それにもない度々、大人をにおわせる発言をしては娘を溺愛している父親を翻弄している。

その様子に佐山は嬉しくもあり寂しくもあるというなんとも複雑な感情を抱いているのだ。

生意気な我儘お嬢様は、しかしどうして良い女に成長しそうではないか。

いつか彼女に現れる結婚相手は、どういう人間なのだろう。

そのときは自分にも決まったひとがみつければいいが。

ふ、と苦笑する佐山に、実花はどうかした？と声をかけるが

佐山はいえ、と短く答えるだけだった。

「…和ちゃん？」

「お、かあ、さん？」

冷たい感触に目が冷めた。後頭部を持ち上げられてひやり、としたそれが頭にくっついた瞬間、私の意識は覚醒したらしい。

氷枕の存在に気が付いた和は、ほう、と息を吐いた。

「起きたなら何か食べてもらえると嬉しいんだけど。薬が飲めないわ。」

「ああ、いいよ。自然治癒に任せるから。」

「和ちゃんはいつも薬を嫌うわねえ…でも寝ている間にはかつたら熱が39度あったわよ？解熱剤を飲んだほうがいいんじゃないかしら。」

「あんまし薬に免疫付けたくないんだけどねえ。…でも。大分ラクだよ？」

そう？と言いながら体温計を渡されたので、和はそれを受け取るとはかり終えるまでじっと待つ。

そこでふと、和はあることに気が付いた。

「あれ、ていうか今何日の何時？和泉君なんか言ってた？」

目の前の光景に特に違和感は無かったからこそ

和は遙の部屋にいた事を思い出せば、疑問を目の前の依子に投げかける。

依子は和の言葉にああ、と短く答えてふふふ、と笑った。

今は土曜日の昼前らしい。随分と眠っていたようだ。

「松永実花さんという方が、車を呼んで和を運んでくれたみたい。すごいわねえ、運転手さん付きの車って。お嬢様かなにかなの？」

「え、実花ちゃんか！？うわー、申し訳ないなあ。」

佐山さんとか松永夫妻にもお礼を言わないと。…なんか持つていくかな。」

それならば、と依子は和に釘を刺した。

「まず遙君に言ってあげなさいね？」

遙君、すっかり眠り込んだ和を部屋まで運んでくれたのよ。

車内でもずっと膝の上に抱え込んでたんですって。」

「ええ！？風邪うつつたらどうすんだろう…大丈夫かなあ。なんもそんな風にしなくとも。」

「心配だったんでしよう、きつと。」

帰り際もなんていうか愛しむ、っていろいろの？

そんな様子で和の事をいかにも大事そうに撫でてたわよ。」

「……………はあ。」

自身の母親からそんな報告を受けるのはなんとも照れくさく、ついつい間抜けな返事をしてしまう。

そんな和に依子はにこにことした顔をむける。

「仲直りしたみたいで良かったわねえ。」

「あ、ごめんね。心配かけた？」

「そうね、和ちゃんが元気がないのは心配だったけど、遥君と別れるとかそういう心配は一切してなかったかしら。」

なんで？と訊く前に、体温計がピピ、と鳴った。

和は無言でそれを取り出せば小さくおお、と呟いた。

デジタルの文字盤は、37.3 を示している。微熱程度だ。

「脅威の回復力だね。」

「あらあら、良かったわ。それじゃあごはんはどつするっ。」

「用意してくれてるんならもうっよ。」

身体もなまってるし、下で食べる。」

「そう？無理しないでね。ゆっくりいらっしやい。」

「うん。」

また笑いかけて出て行った母に、そういえば先程の理由を訊きそびれた。

しかし和はまあいいか、と思い直す。

ゆっくりと起き上がると、部屋をきよろ、と見渡した。

制服はきちんと仕舞わ和はパジャマに着替えている。

鞆も所定の位置だ。依子に申し訳ないと少し思っ、

和は鞆の中から携帯電話を取り出せば、通話ボタンを押した。

遙と実花にそれぞれお礼の電話をかければ

ふたりから安堵の声がもれてきて、和は心が温かくなった。

電話を切って下におりてきてみれば、リビングには

父と姉がそろっており、勢ぞろいした家族に苦笑すれば

滅多に病気にならない自分は随分と心配をかけたものだ、と

温かさとし訳なさで心の中をいっばいにしたのであった。

第六十六話「その理由（わけ）を教えてください。その8」（後書き）

これにて今回のシリーズは終了です。

お付き合いくださいありがとうございました！

消化不良な方もいらっしやるでしょうか…す、すみません。

次回はまた新シリーズになります。がよろしくお願い致します！

第六十七話「感謝は正しく伝えましょう。その1」

日曜日の朝。

すっかり回復した和はまず家族に頭を下げた。

「ご心配をおかけしまして。復活しました。

彩ちゃんも、わざわざ休みの日に来てくれてありがとうね。」

「和ー！良かったー！」

がばーと飛びついてきた彩に、和はうお、と声をあげた。

この姉は、自他共にシスコンの気があると認めているつわものだが、和はいつも彼女がどうして自分をそこまで好いてくれるのかがよくわからない。

昔からだ、彩は和を可愛いと言って溺愛している。

「姉ちゃん、病み上がりだから手加減しておくれよ。」

「あ、ごめんね。…でも良かった。熱出したのなんて久しぶりだよね？」

「うん、まあ。ちょっと、身体を冷やしちゃって。」

ぼり、と頬をかいて和が苦笑する。

「そっだ、彩ちゃん。時間のあるときでいいから来週のどっかで出かけない？」

「え、和と！？わー久しぶりだねえ！！

いつでもいいよ、どこでも！」

「いやお姉さま。私もあなたも学校があるでしょうよ。」

「ああ、そうねえ。せっかくだから休日使ってゆっくり一日中遊びたいなあ。」

最近は遙君とばかりだったから寂しかったのよう。」

「…姉ちゃんだって、モテるんだから彼氏作ったらいいのに。」
「うーん、みんな長く続かないのよ。なぜかしら？」

その原因は、家族全員が知っている。

彩はなにかにつけ和を優先するところがあるためか、あいた時間に実家へと戻っては和をかまうのだ。

そのせいか恋人が皆はなれていってしまう。

一度、憎悪の対象として紹介された姉の恋人に睨まれた事がある。

あるうことか、彩はその空気を読み取った瞬間に相手に別れを告げたのだから驚きだ。

そのときの出来事は事件として家族のあいだでも語り草になっている。

両親と和が同時に吐いたため息の意味をわからずに、彩が首をかしげていた。

「…来週はとりあえずちょっと忙しいかな。」

ぽつり、と呟いた言葉は、自分に確認させる為に言った言葉であった。

「遙君、醤油とっってくれる？」

「どうぞ。…高明さんって付いてるタレ使わないんですね。」

「俺これあんま好きじゃないのよ。」

「へー。もつたいたくないですか？」

「和ちゃんがねいつも二個使うのよ。ダシの味が好きだからって。」

「そうなんですか！またひとつ嗜好を発見しました。」

朝の食卓風景。

三人で談笑するそのさまはなんともにぎやかであり
なおかつとても自然だ。

はてしかし。目の前には男がいるわけであるが

笹森家には男児はいないはずである。

和は額に手をあてれば、低くうめいた。

「…なんでいるのさ。」

「おはよう、和！昨日のメールでの約束守ってくれたんだね。

嬉しいなあ。」

当たり前のように笹森家の朝に加わる遙に

和はどう反応すればいいのかわからない。

ひょっとしなくとも、病み上がりの彼女を心配して訪れたのである
う。

しかし美形が納豆を食べる姿というのはなんとも不思議だ。

遙はただでさえ西洋っぽい顔をしているのでなんだかしっくりこない。
い。

和がどうでもいい事を考えて食卓につかずに固まっていると、

父である高明が首をかしげた。

「メールって？」

「日曜日の夜にお願いしたんです。

病み上がりなんだし、いつものような時間じゃなくてもうちょっとゆっくり起きてって。」

「で、和はそれを守ったんだ？へー、ほー。」

「…お父さん、朝から疲れさす事言わないでよ？
労ってくれる人間の言葉をありがたいと思うのは当然じゃない。
でも、なるほど。ここまで想定してなかった。」

苦笑して、和は遙の隣の席に腰掛ける。

依子が微笑んで緑茶を注いでくれたので、和はお礼を言って受け取った。

「それでもずつと早いよ。俺いつもならまだ寝てるもん。」

「だから、眠気をおして来なくてもいいんだって。

和泉君てほんつと過保護だよね…。」

「和。」

低くなったその声は、父のものである。

和は久しぶりに聞くその声にびっくり、と身体が反応すれば自然と姿勢を正した。

「はい。」

「お前はなんで風邪引いたんだった。」

「自分の愚かな行動故です。」

「そんなお前をここまで運んでくれたのは誰だった。」

「和泉君です。」

「今日、彼がここに来てくれたのはなぜだ。」

「病み上がりの私を、心配してくれたからです。」
「だったらその彼に言うことは？」

その言葉に和はちら、と横にいる遙をみれば
立ち上がって遙に身体を向ければ勢い良く頭を下げた。

「その説は本当にお世話になりました！
今日もわざわざありがとうございます！」

和の行動に遙がぼかん、としている。

高明の父親らしい威厳も初めてみたので、二重に驚いていた。
そんな遙をよそに、和は何事もなかったかのようにまた椅子に座り
なおし

高明はお茶をすすったあとに笑った。

「もうちょっと愛ある柔らかい言葉をかけてやれよ。」

「やだよ馬鹿オヤジ。親の前でそんな発言するかつーの。」

「へええ、ふたりつきりだとするんだあ？」

「朝からそんなにやけ面ひっさげて電車に乗ったら痴漢に間違えら
れるよ。」

「和ちゃんたら、ちょっと口が悪いわよ。」

「だって父が娘で遊ぶから。」

「そうねえ、高明さんもあんまり意地悪言ったらよくないわ。」

「えー依、俺の味方してくんないのー？」

あまりにも意外すぎた一連の流れに、いまだ遙が固まっていると
それに気が付いた和が遙に声をかける。

「和泉君、食べないの？おっさんタレちようだい。」

「なんだよー、父はおっさんじゃないよ？」

口を尖らせながら和に納豆のタレを渡す高明がなお不思議だ。
お茶を一口すすって、まじまじとふたりの様子をみつっ
遙がやっつと口を開いた。

「…そういう言葉遣いは叱らないんですね。」

「ん？ああ…そんなもんは形だけだろう？」

口ではおやじとかおっさんとか言われたって心で父親だって
思われてりゃそれでいいんだよ。」

朗らかに言う高明の器の大きさを遙は感じれば

やはりこの両親でなければ彼女の人格形成はこうはならなかったで
あろうと

しみじみと感じてしまう。

「我が家の教育方針はひとつだけ。筋を通せて事だけだよ。

望む望まないにしろ、与えられた事に対して礼を尽くすのが筋って
もんでしょ。」

「和ちゃんはちょーつと遠慮深すぎるところがあるけれどねえ。」

「それは俺のせいじゃない。和の元々の性格だよ。」

苦笑いする高明に、和はそう？と言って首を傾げる。

意外な一面をみたと思うものの、やはり和の育った家庭環境が

こういったものではない限り、今の彼女はなかったのだろうと思えば
高明と依子に一層感謝をしたくなった。

朝から少し疲れた顔をする和をみて、遙は苦笑する。
この時間は多少電車が混雑するがそれほどではない。
しかし遙が和をかばうように壁側へと囲えば、和はありがとと微笑んだ。

「…この時間もちょっと混むんだね。でもこのくらいなら大丈夫か。」

ぼつり、と呟いた言葉に、遙は眉根を寄せる。

「なにが？」

「ん？ああ、ちょっと人酔いじゃないけど、混雑って苦手だから。」

「あ、そっか…ごめんね、かえって負担だったかな？」

「ううん、このくらいならなんともないから。」

首を振って曖昧に笑う和の頭を遙は思わず撫でた。

朝から疲労させてしまったのは自分のせいだと感じれば
本当にありがた迷惑でしかない行動だったろう。

しかし、この時の和が思っていた事は実はまったく違うものであった。

痴漢に遭って以来、和は満員電車に乗るのが怖くなったのである。
神経が太いといわれようと、

そういう部分ではそう強くなれない彼女は、この程度だから良かったものの

遙がいなくてはひよっとすると

満員電車に乗れないかもしれないと思ってしまつほどで
依存してしまつている気がしてそれが嫌だと感じれば
多少、落ち込まずにはいられなかったのだ。

電車内であるにもかかわらず、遙の手を喜んでしまい
和は拒否するのが遅れてしまった。

「…ねえ、和。」

「ん？」

「……………どこがって言えないんだけどなんか変じゃない？」

「変て？」

「うーん…病み上がりだからかなと思つたけど、

疲れているというよりはなにかに怯えてなかった？電車で。」

「！」

「満員電車にはいつしよに何回か乗つたことあるけど、

こんな風になつたことないよねえ？」

それは当然と言えば当然だ。

遙と一緒に居るといふ安心感があつたからこそ

和は満員電車に乗ることができたし、

今日のように通学中ではない限りそれほどまでの恐怖を覚えなかつた。

しかし、今日は病み上がりで精神力を保てなかったからか
通学中に混雑した電車に乗る事になったからなのか
おそらくそのふたつともだろうが、
遙と一緒にいるにもかかわらずどこか和の身体は固くなってしまっ
ていた。

それを遙が不思議に思うのも無理はない。
しかし、今更それを彼に言っていていいものなのだろうか。
いつもの時間であるならば和はなんとも思わないし
トラウマというほど根深いものだとも思えない。
だからこそ、大袈裟にしてしまうのは嫌だった。

「この時間だから、学校の生徒にみられるかなあとか
色々と気になっちゃったんだよ。怯えてみえた？」

「うーん、うん。なんとなく。」
「本当？なんでだろうね、自分でもわかんないや。」

和は首を傾げつつ誤魔化す。
遙は納得したのかしなかったのかわからないが
結局それ以上を追及することはなかった。

「すいませーん、松永さんいる？」

一年のフロアに来るのはなんとも落ち着かない。

しかし朝いちばんに伝えたかった事を思えば
和は躊躇することなく、ここを訪れていた。

1 - 5の教室。

入り口で後輩に声をかければ、松永一、と呼び出しをしてくれた。
その声に反応すれば、実花がぱつと顔を綻ばせてこちらに駆けてく
る。

なんとも可愛らしい表情だ。

その証拠に教室にいる男子が何人か見惚れている。

「和さん！良かった、元気になったのね。」

「その節はお世話になりました。これね、お礼。」

「え、そんな、いいのに。」

「もらいっぱなしじゃすつきりしなくてね。大したもんじゃないか
ら。」

紙製の手提げ袋に入ったそれを実花が興味津々でのぞきこむ。

「なんだか良い匂いがするわ。」

「クッキーだよ。けっこうたくさんあるから良かったらお友達とわ
けて？」

「ついでに、作り方が書いてある紙も入ってるから。」

「え！手作り？」

「実花ちゃん、いつかお菓子作りもやりたいって言ってたでしょ？
割と作り方は簡単なほうだから。」

「これね、お酒のつまみにも出来ると思うから男の人にも良いと思う
よ。」

「しかも大人の男でもオツケーだから守備範囲が広いつていう。」

「な、和さんたら。まだそんなひといないわよ？」

「でも覚えておいてもいいんじゃないの？」

にやにやと笑う和に、実花の顔が赤くなる。

「……今度作ってみるわ。でもクッキーでお酒のつまみ？」

「チーズが入ってるんだよ。甘しょっぱい感じ？」

仕上げに黒胡椒とかふってある。」

「へええ…ありがとう、和さん！なんだかかえって得しちゃった！」

満面の笑みになる実花がなんとも愛おしいと感じれば
和も同じように微笑みを返した。

「それじゃ、私戻るね。お邪魔しました。」

あ、ええとそこの君。さっき呼び出してくれてありがとうね。
実花ちゃんとお友達？」

教卓で何人かの男子がたむろしている中でひとりの男が
先程、実花を呼び出してくれたのだ。

「え！？いやまあ、話したりはします、けど。」

「ちよつと佐久間君。なんなのその嫌そうな声！」

「別に嫌とか言ってるねーじゃん。一方的に友達宣言とかやだろ！？
違うとか言われたらへこむじゃねーか！」

「あら、意外と繊細なのね。」

「おまえなあ……」

がっくりとうなだれる佐久間とそれをからかう実花のやりとりがお
かしくて

和はついつい笑ってしまう。

「楽しそうだねえ。佐久間君、良かったら君もクッキー食べてね。
嫌いじゃなかったら。」

「え、いいんですか？」

「実花ちゃん、もしお友達だったらわけてあげて？」

「和さんてば。」

悪戯っぽい顔をして和が実花に告げると、実花は可愛らしく口を尖らせた。

和は何をしても可愛らしいなあと思ったが腕時計をみて目を開く。

「つと。本当にそろそろ戻らなきゃ。じゃあ実花ちゃんまたね。」

「ええ。元気になってくれて良かったわ。」

その言葉に和がもういちど微笑んで、

そのあとに佐久間へと視線を向ければ会釈する。

佐久間は慌ててそれにならって会釈を返した。うーん、好青年だ。

1 - 5の出入り口から廊下に顔をむけ、階段へと向かおうとした時だ。

どこかから声をかけられて和が反応する。

あたりを見回すと、階段付近に遙が立っていて和はぎょつとした。

「和泉君！？なにやってんの。」

「…2 - 3に行ったら慌しく教室を出て行ったっていうから気になつて。」

実花のところに行ってたんだね。」

「うん、まあね。」

「俺もほしい。」

「なにを…ってああ、聞いてたの？」

階段を下りながら口を尖らせる遙に和が苦笑する。

「和泉君、甘いものそんなに好きじゃないでしょ。」
「別に嫌いでもないよ。」
「……自分でも食べようと思って持ってきたのがあるからそれで良かったら食べる？」
「実花にはお礼として渡して俺にはついで？」
「別にそんなつもりはないけれども。いらないんじゃないよ？」
「……もらうけど。」

その言葉がおかしくて和は噴出した。
彼は本当にこういう部分が子どもっぽい。

「ねー、邦楽のが好きってなんで？」
「ん？またその話？」
「私も音楽は聴かないわけじゃないから興味あるんだよ。」
「んー……ちよつと長くなるから昼休みにでも話そうか。」
「えー、なんか気になる引つ張り方だね。」
「和にばかり焦らされてるからねえ。たまには俺もね。」

にやりと笑って言い放たれた言葉に、和はびし、と固まった。

「お礼、和さえ嫌じゃなければ俺もほしいなあ。
昼休みに一部だけでももらっていい？」
「……言い回しがどつかのエロオヤジみたいだよ。」
「えー、和のがやらしいじゃないか、俺具体的に言っていないのに。」
「ああそう。じゃあそういう意味合いじゃないんだね？」
「いや、違うないけど。」
「……………変態。」

眉を顰めて遥を睨む和にいつもの決まり文句が出たのは言うまでもない。

いいかげん聞き飽きたのに、
どっかのヒーローのキメ台詞のように振舞われてしまうことが
和はなんとも複雑だった。

「和限定でね。」

楽しそうなその声は、しかし艶っぽくて
大概の女性を腰砕けにしまいそうな怪しい響きを持っていた。

「…今日は教室で食べない？」

「え、あの場所じゃなくてここで？」

昼休み、教室に迎えにきた遙に、

和は場所について色々とおうかがいをたてていた。

朝の一件が気になったからか、今は遥とふたりきりで
密室にいたくない、と思ったからである。

本来ならば、例の空き教室へとむかうはずだったのだ。

「こんなゴシップ好きさん達のまえであんな事やそんな事してもいいの？」

「いやいやいやいや！」

「まあ、和の声とか顔とか聞かせたり見せたりするのは嫌だから
たいしたことはしないけど……。」

「何もしてくれるな……！でもほら、室外はさすがにそろそろ寒いし
さ。」

まあ、どっちかというところと2・7の落ち着くけど。」

「……じゃあ、むこうの教室にしようか。」

いいよ、また和が身体を冷やしたら俺も嫌なもの。」

その言葉に和がほ、と息を吐いて、遥と共に2・7へと向かった。
教室へといけば、浩平がひとりパンをかじってぼけっとしていて。
和が少し首を傾げれば、遥が苦笑いした。

「ガラにもなく恋煩い中みたい。」

「え、ってことは……例のひとつとなんか進展あったのかな。」

「和、相手のひとのこと知ってるの？」

「うん。和泉君が実花ちゃんの記事でかかりつきりになってるときに
そんなような話をちらつと。」

「へ……あいつさあ、俺に頑なに教えないんだよね。」

なんかそんなだから異様に気になっちゃって。」

「そうなんだ。」

こそこそと小声で話しながら笑い合うふたりに気が付いたのか
振り返った浩平がふたりをみとめれば、途端に顔を顰めた。

「……なんだその顔。」

「べっつにい。今日はここで食べるの？」

「そのつもりだけど。」

それに無言でため息を吐けば、浩平は机から降りて

スタスタと教室を出ようとする。

「み、宮田君、なんか不都合なら私達場所移動するよ?」

和の慌てた声音に浩平は無言で首を振れば苦笑した。

「ごめんね、そうじゃないんだ。ただ…」

幸せカップルのオーラにあてられるのが今は辛いだけだから。」

「浩平……大丈夫か?」

あまりにも沈んでいる浩平に遙は心配そうな顔をするが
浩平は視線だけで大丈夫、と応えれば、
ひらひらと手を振りながら教室をあとにした。

「……やっぱりなんかあったのかなあ。」

「どうだろうね。まあでも、俺達に出来ることといえば
見守るくらいしかないし……気にしても仕方ないよ。」

「……うん、そうだね。」

肩を竦める遙に和もうなずけば

遙の席とその前の席にそれぞれ腰掛けて座った。

「確かここって川口君だったよね、席。お借りします。」

へこ、と合掌しておじきする和のその言葉に遙はぴくり、と反応する。

「……なんで名前知ってるの?」

「前にも借りた事あるもん。そのとき話しかけたから。」

「……和、そっちじゃなくて俺の席に座って。」

「は？なんで？」
「いいから。」

むすつとした遙にわけがわからず首を傾げるが特に拒否する理由もない和はおとなしくそれに従った。

「なにを怒ってるの？」

「だってその席に座ってる間って少なくとも川口を連想するわけでしょ。」

「…はあ、まあ。」

「それで更に川口も和の事を知ってるってことは和が座った席っていう意識がどっかにあるわけじゃない。」

「そんなの今が初めてってわけでもないけど。」

「なんで他の男に和のぬくもりをわけてやんなきゃいけないのさ。」

その言葉に和が固まったが、

同じような反応をしたのは彼女だけではない。

クラスに残って昼食を取っている人間すべてが遙の物言いに思考回路が停止した。

「……………ないわ。」

あまりにも簡潔かつ適切なつつこみに

胸中で2・7の人間が頷いていることだろう。

「和がもうちょっと男に対して警戒をしてくれたら俺だってここまで妬かないよ。」

「ああそう。いただきまーす。」

お弁当を広げて手を叩けば和は遙の言葉を流しつつ

昼食をとりはじめた。

遙が気に入らないといわんばかりに和を睨みつけるが
特段気に留めることもなく、和はもくもくとごはんを食べる。

「ねえ、和。」

「んー？」

「佐久間君になんで話しかけたの？」

「……………」

おかずを咀嚼していた和はごくくん、とのみこめば
次には水分を摂取しようとお茶を流し込む。

「なんでがなんで？」

「お礼を軽く言えば済む話じゃないか。」

どうしてあんな風に話しかけてあまつさえクッキーどうぞ、なんて
笑って言うわけ？

「実花ちゃんのお友達だと思ったからだけ。」

っていうか、どっからどこまで見てたんだあんだ。」

「佐久間っていう後輩の子が、和に惚れたらどうすんのさ！」

「……………はあ！！？」

あまりの言い分に和はすつとんきような声を上げれば
次にはありえない、と首を振った。

「あのねえ。どこに惚れる要素があるのかわかんない。」

「あんな風に笑いかけて優しく声かけられたら

充分そっとうきっかけになるでしょ。」

「…んなあほな。歩く女性ホイホイの和泉君と違うんだよ。」

和のつつこみに、何人かが我慢できずにぶふ、と噴出す。

ぼそりと『うまい』という声まで聞こえてきた。

「あーあ、まったく。本当に目を離すと危ないんだから。」

「だからさあ。後輩にもしっかり伝わってるんじゃないの？」

和泉君の異常ぶり。嫉妬通り越して変態だよな本当。」

「和がそうさせるんだよ。」

「責任転嫁をするんじゃないの。」

「というか男性慣れしてないのは仕方ないでしょう。」

彼氏という名称が付く存在を持ったのは和泉君が初めてなんだから。

「

「…なんかその言い方、愛が感じられないよ。」

「なんなら、三人くらいと頑張ってお付き合いしてからまた縊り戻す？」

「

「え、本気で言ってるの？それ。」

遙の周りの温度が瞬時に低くなるのを和は感じる。

さすがにこれは失言であったと思えば首を振った。

「じよ、冗談だつてば。」

「そのテの冗談は俺に通じないってまだわからないの、和つてば。」

本当にそういうところだけ鈍いんだからー。」

ふふふふふふ、と笑う遙がなんとも恐ろしい。

瞳がまったく笑っていない。

「…まあ、いいや。」

和、今日は家に寄つてもいい？」

「うん、いいよ。」

「じゃあそのときに、俺以外の男と付き合うなんて

二度と口に出さないようにしてあげるからね。」

その言葉に和がびし、と固まる。

目の前の遙は多少満足したのだろう。

先程よりは本来の笑みをその顔に作りつつ

お昼ごはんのパンを取り出ししていた。

「あ、そうだ、はいこれクッキー。

ごはん食べ終わったらいつしよに食べよう。」

その和の声に遙がぱ、と顔を綻ばせる。

たかだかクッキーでよくもこんな顔になれるものだな、と思えばそれを表情で察したのか、遙が眉根を寄せた。

「和の手作りっていうのが重要なんじゃないか。

ああ、それについてもちよっと話があるから…

というかちよっとお仕置きが必要かなあ。口で言ってもわかんないんだから

和ってば手のかかる彼女だなあ。

まあそのぶん可愛いから良いんだけどね。」

「さらっと反応に困ることを言うのいいかげんやめてほしいわ。

…ていうか私なんかした…?」

首を傾げて腕を組む和を遙は楽しそうに頬杖をついてみつめれば口角をあげたまま、す、と目を細める。

「放課後のお楽しみだよ。」

いまさら取り消したいなど言えばきつと遙は笑って

だったら自分の部屋に連れていく、などと言うに違いない。

それを考えれば自分の家のが安全面でいえば鉄壁だ。

親もいるわけであるし、そうそう変な事はできはしまい。

そう思うのに、得体の知れない恐怖に包まれた和の類は
いつまでも引き攣っていた。

第六十八話 「感謝は正しく伝えましょう。その2」

「…そんなに端っこにいかなくても。」

「え？いや、無意識？」

いつもの放課後、いつもの帰り道、いつもの部屋。

遙が居ることすら日常になりつつある自室で

しかし部屋の主たる和は座椅子に腰掛ける遙から距離をとり
机に備え付けの椅子の上で三角座りをしていた。

キャスター付きの椅子は部屋の角にびったりくっついていて

それを見て遙は困ったように笑う。

「別に変な事しないよ。和、ただね話をしたいだけだよ？」

「…話。」

「そう。…まあいいけど。」

そういつて、遙は和の身体を椅子ごと運べば

自分はベッドに腰かけると、和をくるりと回転させ向かい合わせに
する。

和は慌てるが隙間なく遙との距離を詰められてしまい足をおろせな
いし、

遙がキャスター部分にしっかりと足をのせているため椅子が動かない。
彼の両腕は椅子の背もたれにのっかっており、檻の役割を担ってい
た。

完全に捕らえられてしまった。

「クッキーすつごく美味しかったよ。」

「それはお昼のときも聞いたけど…」

「手作りのそれをさ、なんで俺より先に食べる男がいるわけ？」

「……ええーと。」

「和、自分がけっこう残酷な事をしているって自覚がないでしょう。」

「

遥の言葉に和はぴくり、と反応すればいかにもわからないという顔をした。

「例えばだけど。」

俺が廊下を歩く女の子に和をみなかつたかと尋ねたとするね。

そうしてその子は親切にあっちでみたよ、と教えてくれた。

当然ありがとうとお礼を言う、そうだね？」

その言葉に、和は無言でうなずいた。

「もしもそのとき、俺は君の名前を呼んできちんとお礼を言いたいから

名前を教えて欲しいと言ったらどうする？

たまたまポケットに入っていたお菓子をにっこり笑って

その子から訊いた名前を呼んで、渡してあげたら、どう思う？」

「はい。」

「はい、和さん。」

なぜか目の前の和が真剣な顔で拳手をするので

遥は少し笑いつつもそれにならった。

「確実に相手の女性は和泉君が自分に好意を持っているのではないかと

勘違いすると思います！」

「つまり？」

「和泉君が彼女にたいしてなんの興味もない限り、とても残酷な行為だと思います！」

「はい、百点満点の回答です、大正解！……で？」

にっこりと微笑んでいた遥の顔が最後の語尾だけ下がり表情も歪な笑みになったことで、和はどきり、とした。

「……ええーと。イコール私のお礼は過剰だと？」

「わかってるんじゃないか。」

呆れたように息を吐く遥が少し気に入らなかったのか和は少々不機嫌そうな顔になる。

「ええー…でもさ、ちょっと違うんじゃないかなあ。

だって和泉君みたいなひとだったらわかるんだけど、

私に親切にされたところで相手は何も気にしないとと思うんだけど…。」

その言葉に遥は今度こそ我慢できなくなったらしい。

馬鹿、と一言添えて和の頭にチョップを繰り出した。

「ううー…。」

「この場合、容姿レベルはさほど重要じゃない。

そのへん歩いてる女の子だとしてもそんなことされれば

少しはそういう気になるもんだよ。」

「……そういうものなの？」

「そう。あのね、お礼を言うなどとはいわない。ただ、やりすぎ。」

「…ううーん、そ、そっか。」

「そうだよ。和は異性にたいしての距離感の掴み方がヘタすぎ。」

雰囲気は柔らかくなったしそれこそ俺がいなかったら君、人生最大のモテ期にでもなってると思うよ。」

最後の言葉には納得できないような顔をしているものの、和は遥の言葉をきちんと受け止めたらしくうなずけばもうしない、と遥に約束をした。

「あとこれは推測なんだけど。」

「え?」

「和、満員電車が怖いんじゃないの?…痴漢に遭って以来。」

「!?!」

話というのはその事もあつたらしくお仕置きという言葉に過剰反応していた和は完全に油断して思いつき素のリアクションをしてしまう。

「…やっぱりね。」

ため息を吐く遥に、和は慌てて弁解する。

「あ、あのそれは、別に隠していたわけでは。満員電車に乗れないんじゃないの!」

制服で朝の満員電車には乗れないってだけ!

休日とかに乗る電車は混んでも怖くなんかないんだよ!??」

「うん、責めてるわけじゃないよ。ただ、自分に反吐が出るだけ。」

「なんで…?そ、そんな顔しないで。」

そんな顔をされるのが嫌だったから言わなかったのに!」

歪む遥の表情が、和は心底悲しかった。

笑っているときがいちばん良いけれど、怒っているのをみるのも別

に痛くはない。

けれど自分が原因で彼が傷付いた顔をするのはどうしたって耐えられなかった。

だからこそ、和は遙にその話をするのをためらったのだ。

和は思わず遙の懐へと飛び込んだ。

正面から抱きついて背中に腕を回せば、ぎゅ、とシャツを握り締める。

遙が驚いて固まっていたが、しばらくすると

和と同じように彼女の背中に腕をまわし、華奢な身体を抱きしめた。いつも、彼女に守られてしまう自分を情けなく感じるも、

遙は一生かなわないままで良いと思ってしまう。

「違うんだよ、これは、俺のエゴなんだ。

和から痴漢の話を訊き出した時にさ、俺言ったじゃない？

一ヶ月必ず送るって。でも、結局は守れなかった。」

「それは、直後に実花ちゃんの事があったから……。」

「うん、でも俺は自己満足させることすら出来なかった。

せめて和の傍にいて恐怖を取り除ければと思ってたのに。」

「そんなの私も和泉君も悪くないじゃん。だから責めるのやめようよ。」

「……和、もしも気分が悪くなったら、次からは必ず伝えてほしいんだ。」

それくらいは、俺の我儘を叶えてくれないかな……？」

「うん、そうだよね、変に遠慮しすぎるのもよくないんだよね。

ちゃんと言うし、満員電車に乗れないって思ったら和泉君を呼ぶ。

それでいい？」

和の言葉に、遙は心底安堵した息を吐けば、

ありがとう、とお礼を言ってお笑った。

「……………痴漢てさあ、たいがいお尻触るイメージなんだけど。やっぱり触られたのってそのへん？」

「え、いや、あの、」

「ああごめん、思い出したくないよね。」

『別に言うのはかまわないんだけどそうじゃなく!』

先程から、遥の手の動きが怪しくなっているのは気のせいだろうか。背中を撫でるその手つきがなにかの意図を感じる。

我に返れば、先程の自分の大胆さに和は頬を染める。

今は遥と正面で向き合っている為、遥の膝を跨いだ状態で和は彼と密着している態勢である。

着替えているため下はパンツスタイルではあるが些かこの態勢はよろしくない。

「あの…ちょ、ちょっと。」

「あのときはまだ、今以上に和は免疫なかったし

余計怖がらせるだけかと思って我慢してたんだけどね。」

「手、手を段々下げないでよ!」

離れようとしても、

がっちりと背中にまわされた左腕の拘束が強すぎてびくともしない。焦ってなんとか身を擦ろうとするが、

抵抗するとますます遥が身体を密着させてくるため逆効果だ。

びくり、と和の身体が震えた。

遥の右手が、ゆっくりと和の臀部を撫でさすってきたからである。あまりの所業に和は狼狽するが、遥は怪しく笑っただけだ。

「和泉君、やめてよ！」

「ここ触られてもあんまりなにも感じない？」

まあ、服の上からだもんね…。」

「へ、へへへ変な事を言わないでよっ…!!！」

「…これくらいでそんなに真っ赤になつてて本当に大丈夫？」

「え。」

遥の悪戯していた手はびたりと止まり

今はゆっくりと和の頬を両手で包み込んでいた。

遥のいわんとしていることを和は正確に理解すれば
どう反応すればいいのかわからずに目を泳がせた。

「裸になるんだよ？」

その一言に、すこし身体が揺れる。

しかし次にはやけくそにでもなつたのか返事をした。

「わ、わか、ってるよ。」

「嫌がつても俺、全部見るし、触るけど。」

「え、そ、れはちよつと……」

「…可愛いなあ。」

真っ赤になつて涙目になる和を、遥が目を細めてみつめれば
耳をぺろり、と舐めた。

それにまた和の顔が赤くなる。小さい悲鳴もあがった。

「中途半端な気持ちで了承すると多分後悔するから、よく考えて。
これは俺から最後の忠告。」

今はね、気持ち伝えた分前よりはギリギリじゃないから。

…まあ早く抱きたいのは確かだけどね。」

「和泉君、したいんだかしたくないんだかわかんない…」

睨むような顔で涙を浮かべる和に遙は困ったように微笑んだ。

「めっちゃくちやしたいよ。それこそ俺は一人暮らしだからいつだって連れ込めちゃうわけだし。」

ただ、和が途中で怖くなってやめてくれって言って泣いても今度はかりは

きつと聞いてあげられないから。だから、ちゃんと考えてほしかったんだよ。」

「……そっか。」

「そう。意地悪言ってるわけじゃありません。」

遙の言葉に和はくす、と笑えばわかった、とうなずけば

ゆっくりと身体を起こして遙の膝からはなれていった。

それを、遙はせつなく感じれば無意識に拳をぐ、と握った。

彼女が自然に受け入れてくれるまでは。

そう自分に言い聞かせて遙はベッドから退いた。

「そついえばさ、部屋のCDの理由を未だに訊けてないよ。教えてくれるんだよね？」

コロコロと椅子を戻して和はいつものように座椅子へと腰掛ければ遙もそれにならって隣へと腰を落とす。

何度も質問されるそれにくすり、と遙は笑った。

「そんなに気になるの？同じ質問ばかりだねえ。」

「気になるよ！まずどんなジャンルが好きなの？」

「どうだろう…：わかんないな。」

「特に偏ってないってこと？オールラウンド？」

「いや、種類とかあまりわからないから。」

俺はそもそも、音を聴きたくてCDを買ってるわけじゃないから。」

「は？どういうこと？」

わからないといった風情で和が眉を寄せる。

遥はうーん、と短く声をあげてぼつり、ぼつり、と話し出した。

「俺はさ、和泉昌の一人息子っていうのがプレッシャーだったんだ。」

「

「え……」

「和は不思議に思わない？父親が作家で、家にはあんな大きい書物庫があるのに

皆無ってくらい本を読まない俺の事。」

「ああ、それは確かに……けっこう思ってた。

いくらなんでも読まないほうが不自然だよなーと。」

うなずく和に遥は苦笑をもらしながら、わざとなんだ、と答えた。

「意識してそれをしなかった。小さい頃からずっと言われ続けたんだよ。」

容姿も目をひくし、それこそ作家デビューしたら話題になるだろうって。

あんな素晴らしい作家の下で育てば才能だって養われるだろう。

そうじゃなくとも、ある程度書ければ話題が先行してきつと売れる、とか。

けっこう好き放題。」

「なーる……それなら本嫌いになっても納得かも。

つつか興味ありませんってスタンスを貫かないと面倒に巻き込まれそうだね。」

「そうそう。父さんがさ、顔出しNGだって言うのずっと出版社は不満みたいだね。」

テレビにでも出ればそれこそ絶対に芸能人としても売れるのに、とか。

俺はそつち方面のスカウトもけつこうされたけど

正直これ以上注目浴びる気もないからずーっと断ってきたんだよ。」

肩を竦めてそんなことを言う彼に、和はなんともいえない気分になった。

やはりこれだけ人目を惹く姿に生まれてしまうと、

背負わされるものはとてつもなく大きい。まして親が売れっ子作家では…

和は初対面の時の言葉を反芻すればよく逆鱗に触れなかったな、と感ずる。

「和泉君が目立ちたいわけでもないんだろっけど

目立つ事にそれ程抵抗があるわけじゃないんだよね。」

「まあ、ずっとこの顔で生きてきたからね。」

そこらへんの神経は太くならないと胃に穴ができちゃうよ。

それこそ昔は悪い気もしない、という時期だってあったし。馬鹿みただけだね。」

「はー…よくまあ、その年齢で落ち着けたもんだね。」

「むなしくなった事が多かったからかもね。」

もちろん中身だって好きになってくれてると思ったけど

やっぱ最初はかっこいいとか綺麗から相手は入ってくるし。

俺の内側だけ好いてくれたのって和が初めてだよ。」

そういうものか。

けれども和とて、見た目なんて関係ない、なんていう美しい心持ちがあるわけではない。

「私は別に容姿を気にしていないわけじゃないよ。」

嫌だったからこそ避けたんだもん。綺麗で目立ちすぎるから。」

「それこそもつとこないよ、そんなの。」

だからこそ余計に救われるんだ。俺の見た目をそんな風に一蹴する和に。」

「でもその割りにかっこいいとか綺麗とか言っていると嬉しそうだよな？」

「そりゃあそうだよ。好きな子にかっこいいって言われたら嬉しいもの。」

遥のその言葉に和は目を丸くすると、じ、と遥をみつめて首を傾げる。

できたらやめてくれないだろうか、と遥は思った。

そんな可愛い表情をされては、今すぐどうにかしたくなってしまっているではないか。

しかし和がそんな事を知る由もなく、うーん、と顎に手を当てた。

「……色々複雑？」

「複雑。」

遥はくす、と笑ってそう応える。

彼女と出会ってからのというもの、毎日が楽しい。

「まあ、そんなだから文章と縁が遠かったんだけど……」

なんていうのかな、父さんは嫌いどころかむしろ尊敬もしていたから少しでもなにかその欠片をつかみたかったんだろっね。

なにか近しい世界観のものをみたくなって、でも本はタブーだし。」

「……ああ、歌詞!？」

得心した和はやつとわかった、という表情で遥に言葉を叫んだ。

遙は正解だ、というように笑ってうなずく。

「近いのか遠いのか今でもよくわかんないけど…」

言葉を作って並べるわけだから通ずるものはあるでしょ？

だからとにかく、色んなひとの歌詞を読み漁りたくなっただよ。

そうしたら父さんの世界を少し理解できるのかなあって。

小さい頃って今よりも余裕なさそうに働いていたから寂しさもあったのかな。」

「ほー…でもそれが今も続いているって事は好きなんだね。」

そうだ、と肯定する遙に和はどこか嬉しく感じた。

彼のこういった面をみるのはなによりも楽しい気がした。

自分にとっては、かなり価値ある発見だ。

「なんかこう、くじみたいで面白いんだよ。

今って歌詞をインターネットでみれるけど昔はそうじゃないから

買ったCDを開いてどきどきしながら歌詞を読むんだ。

そうすると好きなものとまったく響かないものが極端に分かれたりして。

で、聴いてみると今度は歌が好きか嫌いかってなるからそれも楽しい。」

「…導入が面白いねえ。」

「今は歌詞を確認して買うけどね。でも曲は絶対に事前に聴かないよ。」

それをしちゃうとくじ引き感覚が完全になくなっちゃうから。」

「へええ…ね、どういう歌詞が好きなの？」

占めてるジャンルが一番多いのってどれ？」

「うーん…最近は流行しているのは全く手を出さないね。

苦手なんだよ、分かりやすすぎるといっか…」

こう、直接的な言葉がたくさん出てくるでしょう？」

遥の言葉に和は首を傾げる。

なぜならば、彼女は流行の音楽というものをほぼ聴いていないのだ。それを理解した遥が、和にわかるように言葉を探しつつ説明をする。

「俺の中でなんだけど歌詞ってあくまでも読んだひとそれぞれのイメージがあると思うんだ。

男女の恋愛模様を歌詞にしたとして、多分みんな想像する人物って違うでしょ？

だからこそ聴いてて共感できたりとか感動したりとか。

でも今ってあまりにもはつきり書きすぎる所があるというか……。」「はつきりと書きすぎる。」

遥の言葉を反芻した和に、遥はうなずく。

「昔の歌は、『この店』とか『あの海』って表現してたものを最近のってわざわざ『駅の喫茶店』とか『の海』とかわざわざ具体的に名前を出すでしょ？

そうするとイメージが限定されちゃって好きじゃないんだ。

相手の女性像もそうだなー。『君』だったのが

料理得意で笑顔が可愛くて髪が長い彼女、とかね。

そこまで書くとなんかもう想像の余地がないでしょう？」

「ああー、確かに。歌詞世界ってあくまでも曖昧でいいよね。

それぞれの中にそれぞれの物語があるわけだしさ

共感し辛いのがどんどん出てきちゃうというか……。」「

「そうなんだよ。だから最近は一般的に有名なものをわざわざ避けてるところがあるかな。

流行だから仕方ないけど、売れるものってそういうのばかりだから。」「

遙の言葉に和は目を輝かせて納得している。

こんな話をして楽しいのだろうか、と遙は疑問に思ったが彼女の趣味を考えればきつと今は至福のときと言ってもいいのだろう。

「ねえ和泉君、…っていうバンド知ってる？」

「いや、俺が買ったCDの中にはないな。」

「へー…そうなんだ。」

「そういえば和も音楽聴くって言ってたね。どんなのを聴くの？」

「私？ロックバンドがほとんどかな。偏ってるよすごく。」

「へえー…なんか意外。」

「そうかな？」

「うん。なんか静かな音楽が好きなんだと思った。」

「ああ…私もね、歌詞が好きなんだよ。」

でも綺麗なだけの言葉って苦手だから、自然とそうなったのかな。にしても和泉君、読まないだけで小説好きだねきつと。

いつか就職したら一通り読んでごらんよ。はまるから。」

「…かなあ。」

「だよ。」

「うん、そっか。…そうしようかな。」

お互いの大切な部分を共有できたようで

和と遙はとても満ち足りた気分で微笑み合っていた。

「佐山さん。」

「！あれ、和ちゃん？ひとり？」

「はい。あ、和泉君には言っておりますよ、お家に遊びに行くつて。」

「

「…ここは松永家だけど？」

「この時間は車のメンテナンスをしているとうかがったので。」

えへら、と笑う目の前の少女を佐山は目を丸くしてみつめていた。初対面から思ったが、何事にも物怖じすることがない彼女はなにかに慌てふためいたりする事はあるのだろうか。

しかし車内での出来事をそのとき思い出せば、

佐山は男性に対しての免疫はそれ程ないのだなと結論付けた。

和泉遥という人間が初めての男だとするならば、

最初からなんて厄介な者につかまっただらうと同情してしまう。

松永家のガレージで作業をしながら佐山は和に声をかける。

「それで、俺に用事かな？」

「はい。この間はお世話になりました。」

母から聞いたんですけど、佐山さんが送ってくださいだったつて。」

「ああ、俺は呼び出されて仕事したただけだから。」

お礼ならお嬢様に言ってくれるかな？」

「それはもう言いましたよ。でも仕事上仕方なく送っていただいたとしても」

私を安全に送り届けてくださったのは佐山さんですから。

本当にありがとうございます！」

言って、和はぺこり、と頭を深く下げた。
その様子に、佐山はふつと微笑む。

「いえいえ、どういたしまして。照れるな仕事しただけなのに。
あ、仕方なくなんかじゃないからね？」

「はあ。」

悪戯っぽく笑って顔を覗き込まれた和は
なんとも女性を口説き慣れていそうなひとだ、と思った。

佐山は佐山で、こういうのは大丈夫なんだなあ、と心の中で呟いて
いた。

「…そういえば、佐山さんでどうして和泉君とあんなに親しいんで
すか？」

個人的に親交があるみたいでしたけど…。」

「え？遙からなにも訊いてない？」

佐山の言葉に、和はいはい、と返事をしてうなづく。
別に隠す事もないのだが遙が言っていない事を喋って良いものか。
その様子になにかを察したのか、目の前に立つ和が苦笑する。

「なんとなくか、和泉君の前で男性に興味を示したかのような態度を
少しでもとってしまうと面倒なんです。だから深くつつこめなくて。
あ、別に佐山さんが話し辛い事であるなら良いんです。

無理に訊きたいわけではないですから。ちょっと疑問に思っただけ
で。」

「…アイツ、そこまで独占欲強いのか？呆れるなあ。」

別に隠すような事じゃないんだよ。俺がね、遙の父君のファンでだ
け。」

「え、昌さんの？佐山さんも読書が趣味なんですか？」

「も？え、和ちゃんも？」

その言葉に、和は強くうなずいた。
心なしかその目がきらきらしていないだろうか。

「和泉昌は本当に天才だと思います！！」

「だよなあ！俺さすっごい好きでさあ！」

意気投合したふたりはしばらく興奮状態のままに

いかに彼の小説が素晴らしいかを話し合った。

ひとしきり満足すれば、佐山は先程まで話そうとしていた事を思い出す。

「まあ簡単に説明すると、×切直前とかあのひとよく逃げ出そうとするんだけど。」

「っこり笑って車出してとねだられると弱いんだよなあ。」

「え、逃亡のお手伝いですか？」

「まあ、さすがに松永家の車は使わないけどね。」

俺が個人的に所有してる車で、彼に色んなところまでひっぱりまわされるの。

…で、それを遥が突き止める役なんだよ。」

「そ、そんな事を！！？」

「遥はまだ未成年だけど、小説家の昌さんのサポートみたいな仕事を少しやっていてね。身内だけど会社から給料も出てるみたいだよ。アルバイトって扱いで出版社の雑用も時々やってるからなあ。」

「はー、そうだったんですか、全然知らなかった！！」

「多分、俺にも和泉昌さんにも近付いてほしくないんだな和ちゃんに。」

だから言葉を濁したんだろう。」

佐山の言葉に、和は少し前の騒動について話をした。

実家に遊びに来てもお、遙が父である和泉昌の職業を隠し、なおかつ近づけさせないようにあれこれと画策していたことだ。それを聞いた佐山は、さすがに呆れを通り越して戦慄する。

「…やばいんじゃないの、それ。自分の父親に嫉妬って。」

「こんなもんでひいてたら、身が持ちませんよ。まあ怒りはしましたけど。」

「え、こんなもんで…まだなんかそういうネタがあるの？」

「お父さんの件は、作家として昌さんを尊敬しているという点で一応の根拠があるので全然マシな部類ですよ。」

それはつまり、彼は道行く男すべてに嫉妬するとかそういう事だろうか。

恐ろしく感じたものの、好奇心が手伝い佐山は質問してみれば和は苦笑してまあ半分当たりですかね、と肯定する。

「すれ違った相手が私をみていると感じたら

もう嫉妬の理由には充分だそうですよ。

自分はあるだけ人目を惹く容姿をしておいてなにほざいてるんでしようかねえ。」

「……確かに。」

「大体、街中で私のことを視界に留めるひとなんてそうそういないのに。」

はあ、とため息を吐いて頭を抱える彼女をみて、

佐山はそれはどうだろう、と疑問を浮かべた。

今は眼鏡をしているが、これは伊達であるらしく

普段は素顔で街を歩くらしい。

そもそも佐山くらい女性の顔を見慣れている男性であれば

今の姿でも可愛い部類に入るということは充分わかる容姿でもすればナンパくらいはされるのではないかと感じた。

「…遙の気持ちもちよつとだけわかったな。」

「は？佐山さんも独占欲強い方なんですか？」

「いや。俺は割りとおつさりしてるかなー。」

「へー、そうなんですか。……じゃあ実花ちゃんだけ特別なんだ。」

「ん？なんか言った？」

「いいええー。」

鋭くなった佐山の眼光に、聞こえてくるくせにわざとらしい、と和は思ったが

大人の男をからかうのは色々と危険なので特攻はやめておこう、と自重した。

「それじゃ、私はそろそろ。」

お礼のつもりがお仕事の邪魔をしてしまいました。」

「いや、楽しかったよ。またいつでもおいで。」

「ありがとうございます。」

会釈して走り去っていく後ろ姿を、佐山は目を細めてながめる。いつしか彼女達がああ制服を脱ぎ捨てて大人になっていくのを自分はどんな心境で見守るのだろうか。

『…ってしつかり毒されてんな、俺。』

いたいけな子どもで遊ぶのは趣味じゃない。

そこまでひどい男には成り下がるつもりはないのだから。

そう思い至れば、佐山は仕事を再開した。

「あ、佐山。これとさんからあなたに渡してくれって預かっていたのよ。」

「この間のお礼だそうよ。今日もご苦労様。」

「ありがとうございます。失礼いたします。」

「一礼して松永家をあとにした佐山が袋の中身をのぞきこむとそこにはとある有名店の生チョコプレートが入っていた。」

「…なんで俺の好物を知ってるんだよ。」

ネットで注文してしまうほど顔に似合わずこの品が好きな佐山はしかしこの嗜好をどこか恥ずかしく思っていてあまり他人にもらしたことはなかった。

「遥とは別の意味で恐ろしい。単なる女子高生とは思わないようにしよう。」

『笹森和は敵に回すべきではない。』

その日の佐山が頭に何度も叩き込んだ一文であった。

第六十八話「感謝は正しく伝えましょう。その2」(後書き)

しまった、不用意にフラグを立ててしまった…。

あ、例のアンケートなのですが、

期限を今月末に設定いたしました。

興味のある方はよろしく願います！

第六十九話「感謝は正しく伝えましょう。その3」

「佐山さんに会いたくて行っただの？」

「え？…ああ、昨日の話？もちろん直接会って

お礼を言おうとは思ってたけどそれがメインというわけでは。」

「…あのひと基本的にノリが軽すぎるから心配なんだよ。」

外で会うのはいいけど室内にふたりきりとか駄目だよ、襲われるから。」

「んな獣じゃあるまいし…大丈夫だよ、外で五分程度話したただけだから。」

まあ、和泉君の言葉も頭には入れておくから。」

「うん。」

最近気が付いたが、遙はとりあえず否定しなければ

それ以上不機嫌になる事はないらしい。

和はそれをやっとなら学習したのであの男に気をつける、など

たまにとんでもなくありえない物言いをされるときでも

堪えて一応は了承する事にした。

頭の隅に入れるのもまあ本当なので罪悪感もない。

そんな風に考えれば自分はやはりイイ性格をしているものだと

しみじみと思つた。

「今日は金曜日だから図書室寄るんだよね？」

「うん。」

「俺も行つていいかな。」

「そうだね、最近はずいぶん来たりにしてただけ

周りの反応も大丈夫だったもんね。いつしよに行こう。」

にっこりと微笑んでうなずき合ったあと、朝の2・3を和に手を振って遥は出て行く。

何度目かの平穏が訪れたのを感じた和は、小さく息を吐く。このまま何事もなく過ごせればいいが、やはりそううまくはいかないのだろうか？

退屈しないが、かといって疲れないわけではなくて和は複雑な心でもって遥との今までを反芻していた。

『……でも、具体的に心の準備っていつかできるものなの？』

朝っぱらから何を考えているのやら、と自己つつこみをしつつも和は遥の気遣いを嬉しいと感じつつもしかしそれを待っていたらそれこそ機会は一生やってこないのではないのだろうか、と思った。

どんなに考えていたって怖いものは怖い。

心情的なものを思えばそう感じるし

冷静な思考回路で物理的な事を思えば

そうなったときにどうしても女性のほうがリスクはあまりにも大きい。といえ。

とはいえ。

遥がそこらへんの諸々をまったく考えずに事に及ぶような阿呆男だとは和も思っていないので

そういった面ではあまり心配はしていない。

ただ、なんといおうか。

恐怖にも似た羞恥心は、どうしたって取っ払う事など出来はしない

だろう。

そう考えたとき、果たして遙の良く考えてという言葉はどういった意味合いなのだろうかと思う。

風邪を引いて遙の寝室に運ばれた時に言った言葉は特に考え無しに言ったわけではないのだが。

『……ま、いいか。また和泉君の様子がおかしくなったら考えよう。』

紳士の過ぎた遙の行動が結果として彼の望むものを遠ざける形になってしまった事を今の遙はまだ知らなかった。

放課後の図書室は寒くなつてくると人がまばらになる。

夏はそうでもないのだが、本を読む人々にとって暑さよりも寒さのがこたえるらしく皆早々に本を借りては家へと帰っていく。

足元から冷えたり、手が冷たくなつてうまく本がめくれなかったりそついったことが要因なのかもしれないが

室内なのでそこまでの寒さはない。
和は冬の図書室が通常よりも空く理由はいまだによくわからなかった。

しかしいつもより人が少ない事になんの不満もない。
むしろ大歓迎だと両手をあげたくなるほどだ。

いつも以上に静かな図書室で本を読む。とても贅沢な時間。
和にとって、なににも変えがたい瞬間である。

本を決めていつもの場所に腰を下ろし、
パラパラとページをめくる。

確かこれは最初の数ページを読んだだけで失念していた本だ。
いつだったかなにかの騒動に巻き込まれて
足早に図書室をあとにした日だったろうか。

そのときを少し反芻しながらも
和はすぐさま本の世界へのめりこんでいった。

「……相変わらずですね。」
「仕事しろよ、時任。」

じ、と向かい側の席で和をながめていた遙は
横に立つ時任に向かい直る事もなくずっと視線を正面にやっている。
和を観察する目を止めずに時任と言葉を交わしているということとで
それが後輩の彼は少々気に食わない。

「無駄にフェロモン撒き散らさないでほしいって
図書利用してるクラスの子が言っていましたよ。」
「は？どういう意味？」

その言葉を疑問に思ったからなのか、遙はおもわず時任を振り返る。しかしそれに満足したのか、時任はふ、と笑って本棚奥へと消えていった。

「…なんだあいつ。」

「妙に色気があるからそんな事言われたんじゃない？」

「！高橋君。びっくりした。」

背後に立つ気配を感じなくて心底驚いた遙は飛び上がりそうになった。

この男が実はなかなか侮れない人間である事を遙は知っている。

他校の彼女に骨抜きだという事も知っているので、特別ライバル視などはしていないが。

「…色気って？」

「笹森さんを見つめる君だよ。」

なんか前にも増して熱くなった視線に遠くからでも女子一同はフェロモンを感じて卒倒しそうになるらしいよ。」

「そんな馬鹿な。」

「まあ、大袈裟に誇張してはいるだろうけどね。」

失神者が出たらさすがに出禁にはさせてもらおうよ。」

悪戯っぽく笑う高橋はぽん、と肩を叩いて一言呟く。

「発散させないと、そのうち視線だけで妊娠させちゃうかもよ？」

「！」

どういう意味だ、と訊くのはやめておいた。

高橋の声色とその皮肉な笑い顔をみれば、どういった意味合いなのかなど

簡単に想像がついてしまう。

「……そんなに欲求不満に見える？」

「直球で訊かれると返答に困るなあ。」

「それって見えるって言ってるのと同義だよ。」

苦笑する遙に、高橋は肩を竦めればカウンターへと戻ってゆく。

遙は、言われた事を頭の中で処理しつつも、目の前の彼女をみつめる。

そんなに欲求が顔に出てしまっていたか、ともう一度苦笑した。

「やー、しかももう大分寒いね。…和、コート着ないの？」

「首を暖めるのは寒さ対策として一番良いと言っても過言ではないんだよ。」

そういつてマフラーを指差す和は

もう12月も半ばだというのにセーターを着て

マフラーをするのみで、コートは着用していない。

遙はいつも風邪を引くのではないかと心配になる。

ただでさえ病み上がりだというのになぜここの薄着なのだろうか。

「そういうことを言っているんじゃないんだけど。」

「月別の平均気温ってあるでしょ。」

「え？」

「今は12月だけど、1月2月はそれがもっと下がるんだよ。

で、3月にはまた12月と同じくらいに戻るんだけどね？」

「えーと、だから？」

「今コート着ると、防寒対策の最高を12月のレベルでやっちゃうわけじゃん。」

個人的に1、2月は乗り越えられる気がしない。」

和の説明に、遥はわかったようなわからないような複雑な顔をする。

「でも、それってあくまでも平均値でしょ？」

「今年はそうじゃないかもしれないじゃないか。」

「確かにねえー。でも1、2月のがやつぱり寒いと感じるから

どうしても12月にコートを着る気になかなかねなれないというかね。

あ、さすがにすごい寒いなって日は着るけどね!？」

「ああ…校門の前で待ちぼうけをしていた日だとかね。」

ちら、と横目で和を見てやれば和は遥からそろりと目を逸らす。

それに小さく息を吐けば、遥は和の手を取った。

「…あれ、案外あつたかいんだ。」

「なんかねえ、手はいつもけっこうあつたかいんだよ。」

ていうか和泉君冷たいね!冷感性?」

「そういう自覚はないけど。そんな寒がりでもないし…」

でも和の手あつたかくて放したくないなあ。このままでいい?」

「ええー…駅までね。」

「けち。」

「電車で手つなぐとか馬鹿みたいじゃん。」

「いや、ぜんっぜんその感覚がわからないんだけど。」

「とにかくやだ。」

「…はいはい。」

こういうところは優しくなったと思っても変わらない彼女の面白い所だ。

遙にとつてはあまり良いものではないのかと思いきや、
こうやって笑わせてくれる彼女といるのはきつと毎日新鮮だと感じれば

遙の心は弾んでいた。

結局、和であればなんでもいいというのが彼の結論なのであろう。

「和、明日は用事ある？」

「彩ちゃんと出かける。」

「ああ、姉妹でお出かけなんだね。」

「そう。ごめん、家に来るつもりだった？」

「もし和が用事ないなら行こうかなと思ってたけどいいよ。」

せつかくだし実家に帰る。」

「ああ…香苗さんがちよつと寂しそうにしてたよ。」

そして昌さんが怖い顔してた。」

「……それはまずいね。このまま帰っちゃおうかな。」

遙の父である昌の愛妻家ぶりは凄まじいものだ。

香苗が口癖のように息子が彼に似てしまった、と嘆くのは理由がある。

とんでもないエピソードのひとつとして

高校生になつてすぐである頃の遙が聞かされたものがある。

香苗の懐妊が判明した際、もちろん周りは祝福した。

それは夫である昌も同じ事である。

しかし彼はまだ性別もわからぬうちから腹の中にいる我が子は
妻に良く似た可愛い女の子だと信じて疑わなかった。

検査の結果で男だと判明しても、昌はそれを頑なに否定する。

医者が男だと言っただから、結果は変わらない。

生まれる子は男だと何度言い聞かせても夫の態度は変わることがなく
香苗は半ば諦めるようになった。
生まれればさすがの夫も現実を受け入れるだろうと
どこか楽観視していたのだ。

しかし、甘かった。

いよいよ最愛の妻から男児が生まれたとき、
彼はしばし固まり次にはにっこりと微笑んでこう言った。

「養子に出そう。」

香苗はその言葉に驚愕し、なぜそうも男の子を拒むのかと問えば
自分以外の男性に妻である香苗が心をいっぱいにするのが耐えられ
ないと言う。

さらにべたべたと自分のものである妻の愛しい身体に触れられると
考えれば

そんなことは許し難い、とのたまうたのだ。

さすがにこれには香苗も最愛の夫であることも忘れ
あらん限り、昌のことを罵倒した。

ふたりの言い争いが激化の一途をたどったそのとき。

この世に生を受けて間もない赤ん坊が

その生命のあらん限りの力でもって泣き喚いたのだ。

我に返った彼の両親は我が子の傍に駆け寄れば

その子どもをちからいっぱい抱きしめた。

そのときはじめて、昌に父としての愛情が芽生えたという。

それからは遥と名付けられた男児は

たくさんの愛情を注がれるわけであるが
昌はそれでも時折いじけてみては妻であり母でもある香苗を困らせ
る。

それは結婚して22年もの月日が経った今でも変わることはなく、
息子のことばかり気にかける妻をみると昌は途端に遙に理不尽にな
るのだ。

僕の最愛のひとを泣かせるのはいけないな、という言葉から始まって
とにかくくちくちくと小さな皮肉を日にいくつも聞かされる。

それは精神的にけっこうなダメージになるので

遙はできれば母親に冷たく接しないようにと心がけてきた。

和も昌の愛妻家ぶりはよく知っている。

遙の今から帰ろうか、という発言にはおおいに賛成だった。

「ああ、いいじゃん、そうしなよ。」

「えー、ちよっとは惜しんでくれないの？」

「和泉君の身がいちばん大事だと思うなあ。」

「……ありがとう。」

苦笑する和に、遙はしばらく思考を巡らせる。

その結果、気が付くと和にお礼を言っていた。

遙にとって、いまだに父親という存在は脅威なのであった。

「ただいま……あれ？お姉ちゃんもう居たんだ。」

玄関扉を閉め、リビングへと顔を出せば

ダイニングテーブルにてお茶を飲んでいる彩が目に入る。

和は特に他意もなく思ったことを口にしたのだが

彩がそれに拗ねたように口を尖らせた。

「もうつてなあに？実家だもの、いつ居たっていいでしょう？」

和は私が居ないほうがいいの！？」

「んなことないよ。明日どうせ会うからさ。」

土曜から泊まるのかと思ってたんだよ。大学の友達とかいいの？」

「別にそれはいつでも会えるものー。」

「それを言ったら私にだっていつでも会えるんじゃないかと思うけど。」

「」

「そんな事ないわよ！平日はなかなか会えないし！

お姉ちゃんは和を堪能したくて今ここにいるのにー！」

目を潤ませて嘆く姉を、和はいつものように生温かい瞳でみつめる。

この姉はいつもなぜこうなのだろうか。

特別、溺愛される要素をなにひとつ持っていないのであるが。

「じゃあせつかくだからリクエストに応えようかな。」

彩ちゃん、なにが食べたい？」

「え？」

「本当はね、明日待ち合わせするつもりだったから

そのときにクッキーを作って持っていこうかと思っただけど

まだなにも作ってないし。せつかくだからなんか好きなもの作るよ。お菓子に縛らなくても全然いいけど。材料なかったら買ってくるし。どうする？」

「えー本当!!?」

あ、じゃあ今からいつしよにスーパー行こう!

それからなにを作ってもらうか決める!

「いいけど…そんなに飛ばして大丈夫? 明日もあるのに。」

半ば呆れるかのように苦笑している妹に

姉はしかし気にすることもなく握りこぶしをぶんぶんと振る。

「だーいじょうぶよう。飛ばしてるうちに入らないもの!」

「…姉ちゃん。」

「まーまーいいじゃないの。お母さん行ってきてもいい?」

姉妹の会話を台所からずっと聞いていた依子はひよっこりと顔を出して笑う。

「晩ご飯できるまでには帰ってきてね?

今日はビーフシチューよー。」

間延びした声に和が申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「お母さんごめんね。なにも手伝わないで…」

「あらそんなに気にしないのよ和ちゃんてば。」

そのかわり後片付けは頼むわね?」

「はい。」

「あ、ふたりとも荷物持ち兼ボディーガードにお父さんを連れていきなさい。」

今日は高明さん直帰だったから早かったのよ。部屋に居るから。」

依子の言葉に姉妹合わせて返事をすれば
疲れてるのにと渋る高明をあとで肩を揉むからと彩が説き伏せて
三人は近所のスーパーへと足を運んだ。

「なにがいいかなあ…晩ご飯のあとだしやっぱりお菓子かなー。」

きらきらと瞳を輝かせきよるきよるする彩をみて
高明と和は少し落ち着け、となだめる。

「…にしても和、俺達には礼の品はないのか。」

「えー父にも母にもクッキー作ったじゃん。」

「彩だけ特別待遇なのはなんでなわけ？」

「だってお姉ちゃんシスコンだから人一倍心配かけたかと思って。
最近はいっしょに遊んでもいかなかったしそのお詫びもかねてとい
うか。」

「サラっと言うなよ、シスコン。」

「だって事実だし…。」

まあな、と和と共に苦笑する高明は
カートを押す和の横からぽいぽいとお菓子やらつまみやらを
買い物カゴへと入れていく。

「ちょっとオツサン、お母さんに怒られるよ。」

「依子の好きな冬季限定チョコも買っていくから大丈夫だ。」

子どものように好きなものを入れていく高明に半ば呆れつつ少し前をうろつくと歩く彩に和は視線を向ける。

「ねえ、お父さん。」

「んー？」

「彩ちゃんがああなったのってなんか原因あるの？」

「和バカになった理由か？なんだ、今更気になるのか。」

「うーん…なんていうのかな。」

ひよっとして自分の何かが原因でお姉ちゃんのどこかの心を縛ってるんなら

解放してあげたいと思うんだけど。

本人に訊いても笑ってばっかで答えてくれないんだよねえ。」

和の言葉に、高明が目丸くする。

「和、今までそんなこと考えてたのか？」

「だって、どう考えても私、可愛がられるタイプじゃないでしょう。むしろ煙たがられる存在というか…」

「彩ちゃんみたいなのとでしょ？周りから愛される人間って。」

「まーだそんな事言ってるのか？」

「いや、事実じゃん。」

和の言葉に、ひとつ息を吐いた高明はくしゃり、と娘の頭を撫でた。その行動の真意がわからずに和は不思議そうに父親をみつめる。

「あんな親戚連中の言葉いつまでも引きずってんなよ。」

俺と依子はお前らにどっちも同じくらい好きだと言ってきたつもりだぞ？」

高明の言葉にどこか照れ臭さを感じながらも苦笑しながら和はわかつてるよ、と応える。

「もしお父さんとお母さんがそうしてくれなかったらきつと私すごいやさぐれてると思うよ。」

…別に、今ではそんな気にしてないんだけどねえ。

容姿や性格にコンプレックス抱いてるわけでもないし。」

高明は和がこつこつという形で成長してしまったことにはどこか口惜しさを感じていた。

根本的に、女性としての自覚が少し足りないのだ。

遥がやきもきするのは傍から見てもよくわかる。

父である自分だっていつかどこかで酷い事をされないかと

時折心配になるのだ。広末もそんなことをいつか口にしていた。

少し変わった人間に育ったものの、娘はおおむね真っ直ぐな人間になっけてくれた。

それは長女の彩も同じだ。

母である依子も、ふたりの成長に喜んでいた。

しかし和がいまだ自分の容姿をあくまでも冷静に可愛くはないと分析してしまうのには、昔の体験がおおいに影響していると高明は思っている。

他の面では強すぎるくらいなのに、異性についての危機感がどうにも薄い事には

年頃になる娘を持つ父として結構気を揉んでいた。

遥が現れてから、やっとそれを解消してくれる人間が出来たと喜んだが

彼もなかなかてこずっているらしく、時々相談のメールが来る。

それでも遥の存在は大きいと感じているから

高明は焦らなくとも大丈夫だと未来の息子にたびたび伝えているのだが。

「…まあ、安心しろ。彩が和を好きなのは別に義務とか罪悪感とか、そういう変な理由じゃないから。」

「そうなの？」

「確かに原因はあったみたいだけどな。」

元々、生まれた時から妹が出来たと喜んでいたしちよーつとある日を堺にそれが過剰になっちゃっただけだから。」

「……………行かず後家になつたらどうすんの？」

「行けず後家じゃなく行かず後家。」

和が強調してゆっくりと言葉を切りつつ高明に言う。

しかし高明は和の心をよそに疑問に思った事にたいして首を傾げた。

「え、そのふたつってなんか違う意味あんの？」

「父よ、ある程度わかってるんならそのまま言葉をきちんと頭に入れてくれれば良いのだが。」

「なんだよ言っておいて教えてくれないわけ？」

いい年して口を尖らせないでよ、と娘にため息を吐かれる。

もう40を過ぎた人間がするにふさわしいリアクションなのかわからない。

「微妙に違うけど大雑把に言っつてしまえば

貰い手がみつけれないまま婚期を逃しちゃったのが行けず後家。結婚してくれてという声があったのにも関わらず

そのまま結婚をしないで歳を取っちゃったのが行かず後家。」

「…それはつまり、引く手数多なくせに

和可愛さに結婚しないでずっと妹最優先にしゃしないか、という懸

念か。」

「高明にしては随分と綺麗にまとめてくれたじゃん。」

「父を名前で呼び捨てにするなよう。」

「だから、口を尖らせるのやめてよ、気持ち悪いな。」

またそれを窘められて少しため息を吐きながらも

高明はぱたぱたと忙しく動き回る娘に目をやった。

「……大丈夫だろう、お前にも相手できたしな…たぶん。」

「多分が多分に不安ですが。」

「和ちゃんは言葉遊びをするのが好きね。」

「なにその口調、気持ち悪い。」

「娘に言われる気持ち悪いは威力がやばいと何度も言ってるだろうが！」

半泣きで訴える高明に和は目を細めて冷たい目を向けていた。

忙しく動く彩は、ふと並んで会話する父親と妹に目をやる。

ふたりは仲良く楽しそうにしている

和へと視線を限定してみれば、その顔がとても良い笑顔になっていた。

彩はおもわず自信の顔を綻ばせる。

あの日から、彩は心に誓った事がある。

出来る限りの力で、何年経っても自分より小さなあの生き物を守る
うと。

いや、守る、というのはちょっとおこがましいかもしれない。

ずっと、彼女を愛し続けたい。最愛の妹を。

だって彼女にはその価値があるのだから。

第六十九話「感謝は正しく伝えましょう。その3」(後書き)

次回、ひよっとすると彩視点になるかもしれない。
もう少しだけこの雰囲気にお付き合いください。

第七十話「シスターコンプレックス解説書」

最近、妹は可愛くなった。

：いや、この言い様では些か語弊がある。元々彼女はとても可愛い。前よりもっと、可愛くなったのだ。

そうしたのが他でもなく妹の恋人であると感じるのは、ちょっと寂しい。

祝福しないわけがないけれど、寂しい。

お姉ちゃん心は複雑なのだ。

「彩ちゃん、そんなに焦らなくとも街が丸ごと逃げたりする事ないって。」

「時間は有限なのよう!」

朝の笹森家リビングにて、身支度を終えた和は頼杖をついて

右往左往する姉をみつめていた。
携帯電話で確認した天気は降水確率0%で空はどこまでも青い。
最適なお出かけ日和といえよう。

目的地までの乗り換えや所要時間などもついでに確認し
和はふう、と息を吐いた。

腕時計に視線をやれば現在時刻は午前10時。

昨日、姉には9時に家を出ると言っておいたのであるが
この姉は時間通りに動けた試しがない。

和は元々10時15分に自宅を出る予定を頭の中で立てており
姉が落ち着くまでリビングにてお茶を飲んだり本を読んだりと
優雅に過ごしていた。

彩は、鏡で自身を検分し焦って洗面所を出れば
リビングに居る妹の元へと走った。

そのとき、磨かれたフローリングに見事に足をすべらせ転びそうに
なる。

しかしそれも予測済みですよ、といわんばかりに
リビング外へと顔を出していた和は彩を素早く支えた。

後ろに倒れそうになっていた姉を背中から抱きかかえるその様は
はたからみれば騎士が姫を助けたかのような若干異様ともいえる光
景である。

慌てて体制を立て直し、口を開こうとした彩に和はにっこりと微笑
む。

「どういたしました。格好もどこもおかしくないよ。行こうか。」

腕時計をみつめ時間もジャスト、と呟いた妹に彩は首を傾げていた。

確か昨日、9時には家を出ると言っていたはずで
自分は一時間以上もタイムロスをしてしまったのではなかったらう
か。

不思議そうにする彩をよそに、和はすたすたと玄関へ移動する。
彩も慌ててそのあとに続くがあつと声をあげる。

「彩ちゃん、鞆ならここにあるし、
父と母にいつてきますの声もかけといたから。」
「あ、そ、そう。」

淡々と靴を履きながら発言する妹を相変わらずすっかりしているな
あ、と

彩は関心しきりでひとつ感嘆の息をもらした。
今日の姉妹の格好は図らずも示し合わせたようにワンピースであつ
た。

彩のワンピースは全体的に柔らかいシフォン素材のもので
ふんわりと広がるように太腿までその裾が広がっていた。
淡いピンクのワンピースは七部丈の袖部分には黒いリボンがあしら
われており、
下にくしゅつとした袖使いのシンプルなクリーム色のロングTシャ
ツを着て
ワンピースと似た色合いのポンチョをその上に着ていた。
足元はブーツ、首元にはマフラーを巻いていた。

姉もそういう主義なのかはわからないが、姉妹そろってコートは着
用していない。

和はいえは丈はほぼ足全体を隠すもので

少しレトロな色合いの黒とクリームのボーター柄のワンピースだ。下にあわせているのはセーターで首元がややゆったりとして折り重なるように生地がその部分でだぶついている。上着に黒いシンプルなジャケットを合わせ、どちらかといえば姉妹の年齢を逆に感じさせるような出で立ちだった。

「和、今日は眼鏡かけてるね、なんで？」

元々、彼女の眼鏡が伊達であるということとは家族全員も知っている。

休日には滅多にないその姿に、彩は首を傾げていた。

「和泉君が、お姉さんとふたりで出かけるんなら出来る事ならしてくれないかって言うから、了承しておいた。」

その言葉に、彩の眉はぴくりと反応する。

確かに休日の遠出となれば妹は常より可愛い格好をする。

だからといって彼氏が強制的にそれを阻止するなど気に食わない。女の子が可愛く着飾る権利はすべからず誰にでもあるのだから。

心の中に遙への悪感情が一瞬芽生えそうになったが、改めて妹へと視線をやって苦笑してしまう。

遙が心配でそんな発言をしたのはよくわかるがきつと和はその質問の意図をまったく読み取っていない。

現に、彼女の今日の格好である眼鏡をしていても特別浮いているわけでもなく、ただのお洒落な女の子にしかみえない。

地味だという印象にもなっていないから、

きつと彼女なりに眼鏡と合うコーディネート考えたに違いない。

多少、過保護だと思っていた心は

しかし目の前の和を見ていると過ぎるという事はないかもしれない、と

密かに妹の彼氏へと軍配をあげてしまった彩だった。

『遥君みたいな男の子が彼氏で良かった。』

元々、妹はとてもしつかりしていたし

自分と言うものを確固たる意志でもって立たせている人間であると誰よりも理解しているつもりだ。

だからこそ彼女が選んだ相手なら間違いはないだろうと思っていたし昔、和の彼氏になるための条件なるものを勝手に心の中で作ったが遥はそれらをあっさりとクリアしてしまっていたのだ。

1340

広未と恋仲になれたらとても素敵だと彩は思っていたがお互いに兄妹という感情しかないというのは彩から見ても明らかであつた。

それをずっと残念だと思っていたものの、遥が現れてからは彼で本当に良かったとシスコンの彩から見ても感じている。

隣を歩く妹のことを色々と考えていたら

その彼女が彩のほうへと顔を動かし話しかけてくる。

「彩ちゃん、なにかほしいものあるの？」

「ん？うん。服がみたい！」

「服か…また色々歩き回るのかあ…」

「アウトレットいこうよ、アウトレット。」

「元々そこに行くつもりで出かけるんでしょ、わかってるよ。」

苦笑する和に、彩は慌てて声を上げる。

「な、和が嫌ならいいんだよ？」

そうじゃなきゃお姉ちゃんだって楽しくないもん！」

「何言ってるの。いつも疲れたら疲れたって言うでしょう。」

大丈夫だよ、楽しくない事なんかしないから。」

そうやって微笑む和の顔を見て彩は抱きしめたい衝動に駆られた。遥ほど非常識ではないので、街中でそんなことはしなかったが。

「わー、これ可愛い！和、どう思う？」

「似たような家にふたつくらいなかった？」

「えーそうだっけ。」

目の前の彩をみて和は半ば呆れていた。

彩は思い立ったら即行動、というのがモットーで

買い物をするときも予算が許す限り躊躇というものをしない。

和はなにを言うにも吟味し長考する事がしばしばあるが

時折この姉のように決断できたらと思う。

それでも、あくまでお金を使う時の話であって

和も優柔不断な性格なわけではない。

「あ、姉ちゃん。ここの買い物終わったら昼休憩しよう。」

和が腕時計で時間を確認すれば、もう12時をまわっていた。それを彩に伝えれば、彼女も携帯電話を取り出し時間を確認している。

「もうそんな時間？どこで食べようか。」

「どこでもいいよ。駅ビル内の店でもなんでも。」

「移動すると荷物多いから面倒だしそれでいいかー。」

「うん。」

お互いに意見が一致して彩は結局買う事にしたハンドバッグをここにこしながらレジへと持って行った。

その手には既に大きな紙袋がふたつぶらさがっており、親切な店員にご一緒にお入れしましょうか、とおうかがいを立てられていた。

和はそれをみつめながら毎度まいどすごい量だな…と心の中で呟いていた。

「和ー、お待たせ！お昼食べにいこっか。」

「うん。」

うなずいて、ふたり店をあとにしようとフロアへ出たときだ。見知らぬふたり組の男にその行く手を阻まれる。

「ねえ、お友達同士なの？」

「俺らもこれから昼飯食いに行くところなんだけどさ、良かったらいつしよにどう？おごるよ。」

親しげに話しかけてくる男達を、しかし彩はにっこりと微笑んで追いやる。

「間に合ってるんで他を当たってくださいます？和、行くよ。」
「う、うん。」

姉に手をつかんで促され、和はうなずいてその場を離れようとする。しかし男ふたりはなおも食い下がる。

「そんな警戒しなくてもいいじゃん。お友達になりたいだけだよ。」

「野郎二人で飯食うとまずくなりそうだしさあ、ごはんだけでも！」

普段ならば、てきぱきと対処しそうな和であるが

しかしこういった事に関する所有データが極端に少ないためかどうしたものかといつも考えてしまう。

姉とふたりでいるところという事はよくあつて

和はいつも姉は本当によくモテるなあ、などと思っていた。

しかし彩はわかつている。

和はひとりでも声をかけられるほど充分可愛いという事を。

だからこそ無自覚な彼女にはいつも頭を悩ませてしまうのだ。

『…遥君もそこらへんは苦勞が絶えないんだろうなあ。』

ため息を吐きそうになりながらも無視してすたすたと歩いていく。しかしそのときだ。

男のひとりがあるうことか和の腕を掴んだ。

「え、ちょっと。」

「逃げる事ねーじゃん！」

瞬間、彩の中で何かが発火した。

荷物をドサリ、とその場に落とせば

和に触れた男のその手をおもいきり捻り上げる。

痛がる男に間髪入れず、彩は次の瞬間にはナンパ男を蹴り倒していた。

「汚い手で妹に触んじゃねーよ、粗手 野郎!!」

大音量で発せられた罵倒の言葉に、和があちゃー、と額を覆う。

彩がぎろり、ともうひとりの男を睨むと

すっかり戦意喪失したのか、先程の勢いはなく

倒れてうめく連れの男を肩で支えればそそくさと立ち去っていったのだった。

周りにいる人間はもちろん騒ぎに足を止め

驚愕に固まる者もいれば、歓声をあげて拍手までする者もあり

果てしなく目立ってしまった事に和は赤面せずにはいらなかった。

「彩ちゃん…。」

「お姉ちゃんてばまたやつちやたあ。」

えへへ、と小首を傾げる動作は可愛らしいが、

実行してしまった一連の流れはすべて可愛くもなんともない。

彩がこういう面を持ち合わせている事を和はよく知っていた。

昔から、発揮される時にはほぼ必ず彼女が傍らにいたのだから。

呆れながら荷物を抱える和に彩はごめんね、と謝ったが

和はそれに無言で首を振った。

「お騒がせして申し訳ありません。」

そういつて周りの人混みに謝る和の隣に、彩は急いで駆け寄った。警備員に軽い注意を受けただけでふたりは特に咎められる事はなかった。

彩が空手を習いだしたのは、彼女が8歳の時である。

毎年夏のお盆と冬のお正月には父方の親戚が田舎の本家に集まって会合という名の宴会をする。

特別、名の知れた名家や旧家というわけではなかったが

地主であった田舎の曾祖父の影響なのか

現在笹森家が住んでいる関東圏から遠く離れた地にあるその大屋敷に毎年、親戚が顔を合わせるのだ。

少し前にヒットした某アニメ映画を観たとき、和は田舎の屋敷を思い出した。

もつとも、あんなにこまごまと決まりがあつたりだとか

ど迫力の祖母など姉妹にはいなかったが。

親戚での集まりの際、そこまでの悪意があつたとは思っていない。両親も、そうだろうと思う。

それでも、何回か和の為に怒っている両親をみたとき

自分はこの父と母の子で良かったと何度か思ったことがある。

とても簡単に言ってしまうれば、姉である彩は愛想の良い天真爛漫ともいうのか、ここにことよく笑い親戚一同に可愛がられる存在で対する妹の和はどこか可愛がり難い女の子だった。

昔から人が多く集まる所がどこか苦手だと感じる和は挨拶などはきつちりと出来るものの、笑顔が少ない子どもだった。それをみた親戚連中はちくり、とお姉さんとは正反対だねえと言うのだ。

それを訊いた子ども達も、和のことをブスだ、彩ちゃんは可愛いなどと

よく和にちよっかいをかけていた。

しかしそれでも和はいつも姉や両親に泣きつくことはなかった。彩は特別和が傷付いているとは思っていなかった。

しかし、ある日それは重大な思い違いであった事を知る。

姿が見えない妹を心配して彩はあちこち探し回っていた。

屋敷の裏庭に立つ大きな一本の木の下で、彩は和を発見し声をかけたその時。

和のその瞳は涙でしっかりと濡れていたのである。

それをみつけた彩は動揺し、固まって動けなくなった。

しかし妹は涙を拭ってにっこりと微笑むと

さっき転んで痛くて泣いちゃった、とその幼さで言っただけ。

彩はそれ以上どうしたら良いのかわからず、妹の頭を撫でた。

くすぐったそうに笑いながらお姉ちゃんだいすき、と言った彼女を心底守りたいと思ったのはそれからである。

しかし、話はまだ終わらない。

彼女のシスコンに止めを刺したのはもうひとつの出来事がある。

大きくなっても、親戚の態度はあまり変わらずに

和は相変わらず可愛くないと言われ続けていた。

彩はいつしか、自分が嫌われやしないかと懸念した事があった。いつも比較され、可愛い彩と可愛げのない和と言われ続ければ、憎悪の対象となってもおかしくはないからだ。

しかしその恐怖さえ、払拭してくれたのは他でもない妹自身なのである。

ある日廊下を歩いていた際、曲がった先で話し声が聞こえてきた。親戚のひとりと、和が話をしているようで彩はぴたりと足を止めた。

「ねえ、和ちゃんさあ、お姉ちゃんの事嫌だって思わないの？」

自分達と同じ年頃の女の子も何人かいるため、

その子達とは和も打ち解けておりよく楽しそうに話す姿はあった。だからこそ、彼女は和にそんな質問をしたのだろうが

彩はそれに心底どきりとした。

続いて聞こえる妹の言葉は、一体どんなものなのだろうか。

「嫌？なんで？」

「だってさあ、すごい比べられるじゃん、彩ちゃんと。」

和ちゃんだって別に可愛くないわけじゃないし、

むしろ彩ちゃんが愛想良すぎるだけだと思っただけだ。」

彩は、少し悪意のこもったその言葉にちくりと胸が痛んだが

和の今まで受けた屈辱に比べればなんてことはないと思ひ直す。

「…確かに姉ちゃんは愛想良すぎるとは思っけど。」

その言葉に、彩は目の前が真つ暗になる。

しかし次にはなたれた一言で彩は泣きそうになった。

「ここまで可愛がる要素が皆無の妹を可愛いかわいいって愛でってくれるくらいだから相当、許容量が広いんだと思うよ。」

「また、和ちゃん。そんなことないって！」

「いやいや、亜紀ちゃん。考えてもみなって。」

こんな嫌味つたらしい理路整然とした妹ほしいかい？」

「……………」

「ちよ、そこは嘘でもほしいって言っつてよ！」

「あ、ごめんつい。」

「ひでえ。」

「あははは！ごめんごめん！でも彩ちゃんて確かに和ちゃん溺愛してるよね。」

「そうそう。あんなに愛されて嫌えるわけもないでしょー。」

大体、彩ちゃんなんにも悪くないじゃん、周りがうるさすぎるだけだし。

私はさあ、彩ちゃんが姉ですごい幸せだと思うよ。

安心して可愛げない私も好きだつてお姉ちゃんには言えるしさ。」

「かもねえ…私もあんな優しいお姉ちゃんほしいもん。」

「君もたいがい調子がいいね。」

「えーいいじゃん！」

笑いながら遠ざかっていく声を感じて

彩は堪えきれずにその場に崩れて泣き出した。

和は可愛い。世界一可愛い。
親戚一同がなんと言おうと、あの子は可愛い。

そして呆れるほどに優しい。
こんなどうしようもない姉を好きだと言ってくれるのだから。

「そういえば、あとちょっとしたらまた田舎に行かなきゃいけないね。」
「なぜかあれって大きくなって結婚するまでは結構強制参加だよね。」

やっとありつけた昼ごはんを前に、姉妹は話をする。
もうすぐ年末だ。

正月まではもうそんなに間がないと思えば彩はどこか憂鬱になる。

「そういえば、彼氏が出来たってなったらまた騒がれるわね。」
「…ああ、おじちゃんおばちゃんうるさそうだねえ。」
「いやだ、和ってば。そうじゃないわよ。」
「え?」

本当になにも気が付いていないのだから、この妹は相変わらずだ。
彩も向こうで何回か告白をされたことがあるが
和はその性格からなかなかそういう雰囲気を持ち込めないらしく
自分を口実に和に纏わりついてくる男連中は何人かいる。

恐らく彼らは和に恋人ができたとかわかれれば心底落胆することだろう。それを考えれば、どこか楽しみだとも思えてしまった。

『…遥君にはきちんと情報を横流ししておいてあげよう。』

彩が彼氏だと認める相手は恐らくあとにも先にも彼しか現れない。そんな妙な確信を得つつ、彩は目の前の妹を見やる。

「和、今日は本みるの？」

「今日はね、CDみるよ。こっちにしか売ってないやつ買うから。」

「ああ…相変わらずそういうの好きなんだね。」

お姉ちゃんにはよくわからないや。」

「彩ちゃん、わかりやすいもの好きだもんね。本当に真逆。」

性格が素直というか、単純のが近いか。」

笑う和に、彩はなによお、と膨れる。

愛しいと感じる思いは人それぞれ違うものだが

温かさはみな変わらない。

彩は、その温かさを遥から感じたからこそ、

彼を和の恋人だと認めた。

『…私もそろそろ本腰入れてみつけるかなあ。』

これまで妹第一で生きてきた彩。

しかし彼女に大切な存在が出来た以上、自分もそろそろ妹離れをすべき時だ。

少し寂しくも思ったが、恋をしようと前向きになった
昼下がりのひとときであった。

第七十話「シスターコンプレックス解説書」(後書き)

次回はまた感謝は〜シリーズに戻ります。

番外編的なお話にお付き合いくださりありがとうございました！

第七十一話「感謝は正しく伝えましょう。その4」

月曜日。

冬休み前最後の図書解放日を満喫した和と遙はいつものように駅までの帰り道を歩いていた。

「もう今週末には冬休み突入だね。」

「そうだね。…ねえ和？」

「ん？」

「週末泊まりに来てくれる気とかないよね？」

遙のその言葉にぴたり、と和の身体が歩みを止めれば目を見開いたまま彼女はその場で固まってしまう。

恐る恐る、遙が和の顔をのぞきこんで和？と呼びかけてみる。

「…週末って金曜日？」

「え、いや、まあ…。」

「金曜日って24日だよな。」

「……うん。」

「絶対嫌だ。」

ものすごい形相で話す和を見て、今度は遙が身体を強張らせた。

前々から高明や依子とメル友状態になっている遙は毎年クリスマスイヴは家族で過ごす決まりだということをお話してくれていた。

そのときに、和がいかにそういったイベントを嫌っているかも依子と高明は語ってくれていたので、

実はこの和の反応は当然あるものだと思っていたのである。

が。

クリスマスイヴというものは恋人のイベントというのが遥にもやはりある。

出来ることなら好きなひとと一緒に過ごしたいと思うのが心情だ。

高明達から聞いた話はいくまでも和が

まだどこの誰とも付き合っていない時の話で、

もしも自分という恋人がいれば考えも変わってくれるかもしれない
と思ったのだが

その可能性はもろくも崩れ去ってしまった。

こういう特別な日というきっかけがあれば

和も気持ち的に遥を受け入れやすくなるのではないかと目論んでいた所があつた。

だからこそ遥はしばらく様子見というか

彼女にそういつた雰囲気を感じ取らせないように努めていたのだが
どうやら意味はなかったようである。

普通の女の子であるならば、

初めての夜が記念すべきクリスマスイヴという事に

喜びそうなものであるし、勇気をもらって彼と、なんて

可愛い決意をしてくれそうなものであるのだが、

やはりというかなんというか、彼女にとってそれは屈辱以外の
なにものでもないらしかつた。

遥は盛大なため息を吐く。

「そっかー…じゃあ今年はひとり寂しく過ごそうかな。」

「は？実家に帰ればいいじゃん。」

「毎年ふたりは旅行に出かけるから。」

「……………ば」

続きを言おうとした和が慌てて口を噤むが、
遙はたった一文字で彼女がなにを言おうとしているのかわかってしまっただ。

『馬鹿じゃないの。』

多分、そう言うつもりだったに違いない。
遙は自分の予想に確信を抱けば、絶望の二文字を頭に思い浮かべていた。

「家も、特別クリスマスだからって
それらしい料理を作ったりするわけじゃないよ。」

「え、そうなの？」

「家族が必ず集まる日だから。」

毎年全員の好物を一品ずつ並べるんだよ。」

「へー、それはそれは。」

ある意味、そちらのほうが余程クリスマスの概念に近いような気が
遙はした。

本来ならば家族を大切にする日であって、恋人と過ごす日ではない。
日本においてはどうしたって恋人同士のイベント事として扱われて
しまっているが。

「…なんなら和泉君も家に来る？」

「え？」

「訊いてみないとわかんないけど多分大丈夫だと思うよ。」

「でも、家族水入らずなんでしょう、いいの？」

「気持的にひとりで過ごすのが虚しいというならば構わないけど。
あ、それとも宮田君と遊ぶ？」

「…なんで浩平と。」
「ひとりよりは寂しくないかなあって。」
「野郎ふたりでクリスマスなんてより一層の哀しさを誘うじゃないか。」

遥の言葉に、和が笑う。

彼にとっては笑い事でもなんでもないが。

「でも本当に良いの？」

「うん。あ、どうせだから好物教えてよ、いつしよに並べよう。」

和の申し出に遥は久しぶりに道のど真ん中で和を強く抱きしめる。それに反射で上がった悲鳴もまた、かなり久々なものであった。

「い、いいい和泉君！」

「すっごい嬉しい。…俺も笹森家の一員になっていいんだ。」

「！」

「そういう風に解釈しちゃっていいでしょ？」

満面の笑みで遥は和の顔を覗き込む。

それに少し頬を染めながらも、和は小さく肯定した。

「あれ、でも和泉君は長男だからお家継ぐんだよね？」

「…なんで急にそういう話？」

「あー、でも私、苗字が和泉になるの嫌だなあ…」

まあ、結婚するかなんてわかんないもんね。」

さささ、と慣れた動作で遥の腕から距離を置けば、和は考え事をするかのようにぶつぶつと呟きつつ、駅までの道をまた歩き始めている。

しかし聞き捨てならない言葉を耳にした遙は、慌てて和の手首を掴んで彼女を制止した。

「なんで俺と結婚したくないの!？」

「え、いや、…ていうか今から結婚とか考えられないよ。」

高校生がそんな事言っただってママゴト以外のなにものでもないですよ?」

「そういう現実的な話ではなくて!気持ちの問題だよ。」

「どうだろうね?一ヶ月くらい一緒に暮らしてみて」

息が詰まらないのであれば結婚しても大丈夫なんじゃない。」

「だーかーらーあ。」

なおも言葉を迫る遙に心底面倒だという顔をしながら和は、ひとつため息を吐く。

「ああ、はいはい。結婚したいと思うくらい好きですよ。」

「……愛を感じられない。」

今度は口を尖らせている。

…なんなのだろうか、この面倒臭い生き物は。

好きだと言ってるのに何が不満なのか。

「じゃあ、これあげるから機嫌直して。」

気が付けばもう駅前に着いていて

改札をくぐるまえに和がはい、と鞆の中からなにかを遙に取り出した。

袋には入っているが手応えでなんとなくわかった。

おそらくこれは、CDだろう。

「……和？」

「和泉君にはすごく心配かけちゃってごめんね。

熱出した私を家まで運んでくれて本当にありがとございました。」

ぺこり、と頭を下げる和を遥はぼかん、とみつめている。

「あの、これって？」

「お礼に。私から和泉君にプレゼント。

私が心酔していると言ってもいい、いちばん大好きなバンドなんだ。歌詞がね、他に類をみないものだから。是非読んでみて。」

「……………和から、俺に？」

「うん。そうだよ。本当はねー、アルバム全部良いんだけど一応、メジャー第一弾のヤツにしてみた。

興味あるなら他のアルバム全部貸すから言ってね。

私もね、同じヤツが家にあるんだけどせっかくだから…！」

言葉は、最後まで発せられることなく途切れた。

遥が和の口を完全にふさいでしまったからである。

話している途中だった為、当然口は開ききっており、

遥は性急に和の口腔内へ舌をねじこんできた。

驚きに目を見開き、胸を叩く和の拳を、遥はやんわりと押しつけてふたりのあいだに隙間が出来ないように身体を密着させた。

後頭部をがっしりと押さえ込まれ、和は逃げる術がない。

どんどん口付けは荒くなり、上顎をぞろりとなぞられれば

駅前であるにも関わらず恥ずかしくも背筋は快感でぞくりと震える。

羞恥で真っ赤になりながら、生理的な涙が彼女の瞳を濡らしていく。声をあげればそれこそ羞恥的な響きのものしか出ないというのかわかっているから
和はどうしたら遙が正気になってくれるのかを必死に考える。そもそも、どこがスイッチだったのかすら彼女にはわからないでいた。

「なにをやってるんですか！！」

大声で叫んだ声に反応してか、遙の身体から一瞬力が抜けた。その機会を逃す事無く、先程まで蹂躪され続けた男の腕から逃れると和は強い力でもって目の前の恋人を睨みつける。

しかしそれも束の間で、声の主を確かめればそれはよく見知った後輩であった。

驚いた和は目を見開いて固まれば声にならない悲鳴を上げる。

「…先輩、大丈夫ですか？」

いかにも同情するといったその表情に和はありがたくも情けなくなる。

真っ赤に染まった顔は次には蒼くあつたりと忙しく、

普段の彼女からは想像するのも難しい感情むき出しのその顔はしかしそのテの事にたいして免疫が皆無である事を目の前の後輩は知っている。

であるからこそ、彼は驚く事なく同情した顔を和に向けているのであった。

和はなんとか無言でこくこくと頭を縦に動かしつつも

しかし羞恥心は増す一方で、和の傍近くまで寄った彼に情けなくも彼女は倒れこみそうになったその身体を支えてもらう。背中に添えられた手に我に返れば、和はそこでやっと小さくごめんと声を出した。

「時任、離れる。」

ものすごい重低音が響き、和はその不機嫌な声に腰を抜かしそうになる。

気が付けば、かつて好きだと言われた後輩に恋人との濃厚なキスシーンを目撃され崩れそうになる身体をその後輩に支えられているという現状。

…嫉妬の権化ともいえる遥が怒らないはずがない。

しかし目の前にいる時任は完全に呆れた、という風情でため息を吐き、

遥には及ばないまでも気迫充分でその声に返事をする。

「自業自得って言葉を知らないんですか。」

男性と初めてお付き合いをする女性をつかまえてあなたは何をやってるんです？」

「…その点については、あまりお前に言われたくはないな。」

「恋人ならば何をしても許されると？」

俺は公衆の面前で和先輩を辱めるような鬼畜な趣味はありません。」

バチバチと火花を散らしながらふたりの男が睨みあつ。

和はしばし呆然としていたが、我に返れば後輩の後頭部を軽く叩き、遥には思い切り鳩尾に蹴りを入れた。

「余計目立つ。」

ぼつりと呟いた言葉に、うめきながら腹を押さえる遙と頭をさする時任が

はい、とシンクロナしながら返事をした。

「和…痛い。時任はなんでそんなに軽いの？」

「馬鹿じゃないの、助けてくれたんだから当たり前じゃん。ありがとうね、時任君。でもそこまで口を出さなくても大丈夫だから。」

にっこりと微笑む和に、時任は少し口を尖らせながらも遙にいいかげんもうちょっと普通にラブラブしてくださいよね！とわけのわからない言葉をかけつつも去って行った。

遙は、時任の去り際に礼を言っていたので、自分でも暴走が過ぎたと思っているのだろう。

苦笑し合いながら別れた男二人の世界観は、和には良くわからないものであった。

「和、本当にごめん！」

「……もういいかげんにしてね？本当にやめてね？」

非常識な人間は大嫌いだよ。」

「……ごめん。和に嫌われたら俺、駄目になっちゃう。」

「だったらお願いだからそう感情にまかせて行動する癖直してよ。心臓がいくつあっても足りないじゃん。」

疲れた声で和がため息を吐く。

遙は自身の失態にばつが悪そうに頬をかいた。

「和から贈り物っていうのがあまりにも嬉しくて…。」

「そ、そんなことで？これからいくらでもそういう機会あるでしょう！？」

「そういう問題じゃないよ！」

だってこれを買った時、和は俺の事を考えてくれてたってことじゃないか。

それがどれだけ価値のあることか和はわかってくれないの？」

「……………えーと、ごめん、わかるようなわからないような。」

万が一わかったとしても人前でこんな事される云われはないと思うんだけど。」

「それは…うん、ごめん。もうしないように気をつけるから、俺に愛想尽かしたりしないで！」

またそれが…と思えば和は大きくため息を吐く。

毎回、同じ事を確認したいから言うのだろうか、意図をはかりかねてしまう。

「何度も言うけど、こういう所業で愛想を尽かすんだとしたらもっと早く尽きてるよ。というか嫌いになってるよ。」

まあこういうことで嫌いにはならないから…あ、でも距離は置くかも。」

「えーや、やだ！」

「だったら自重してください。…じゃあね、今日はここで別れよう。」

「な、和、怒ってるの？」

狼狽する遙に和はだったらどうする？と訊けば

遙はみるみる顔面蒼白になっていく。

それに少し溜飲が下がったのか、和はにんまりと笑む。

軽く噴出したと思えば、和は違うよ、とすぐさま否定した。

「…弄ばれてる。」

「そんなことないよー？」

ほら、今日はさ。買ったCD部屋でゆっくり堪能してよ。」

「ああ、そっか。和、ありがと。」

先程の顔はどこへやら、和の言葉に途端にご機嫌になった遙は頬を赤く染めてどこぞの乙女のような可愛らしい笑顔を和に向ける。それをみて和はまた少し笑って、うん、と返事をした。

笹森家の玄関にて靴を脱ぎ、リビングに向かった和は扉を開くとただいま、という帰宅したあいさつもそこそこに忘れないうちに、と台所に立つ依子に話をふる。

「お母さん、24日の事なんだけど。」

「あら、やっど？」

「は、やっどってなに？」

にこにこしながら発した依子の言葉の意味がわからずに和は眉間に皺を寄せる。

台所にある冷蔵庫をぱかっと開きながら

フライパンで炒め物をしつつ楽しそうな声をあげる依子へと再度問いかけた。

食器棚から取り出したコップに麦茶を注ぎ、和は一気に飲み込めば流しにそのまま置く。

一連の動作をちらとながめつつ、依子は再度微笑んだ。

「遙君とふたりで過ごしたいからって言うつもりじゃないの？」

「は？なんでよ、違う。」

「ええー！」

和ちゃん、やっぱりクリスマスイヴを恋人と迎えるのは嫌なのね…。

「

「……その日になにがなんでもふたりで過ごしたいかと言われたら嫌だね。」

「もう、よくわかんない信念持つちゃって難しい子ね。」

少し和を睨みつけながらも、

先回りして出来上がったきんぴらごぼろを盛るに最適な皿を手渡されれば

依子はあるがとう、と言いつつふう、とため息を吐く。

無言でフライパンを持ち上げそのまま流して汚れ物を洗い始める娘は少なくとももしっかりもので気遣いも出来る人間だ。

そんな彼女が譲らない部分は、恋仲になった男性からすればさぞや苦痛であるだろう。

しかし遙がそれくらいで愛想を尽かすはずもないとわかっているのに依子からすれば余計に可哀想だと同情せずにはいられなかった。まさしく惚れた弱み、というやつだ。

「だからさ、和泉君に家に来てもらったらまずい？」

「え？」

「毎年、皆の好物を一品ずつ作るじゃん？和泉君のも作ってさ。

なんか話訊いたらご両親がその日旅行なんだって！。

中学くらいからずっとそうらしくて。

今年はひとりで寂しく過ごすとか言うからなんか可哀想だなと思っ

て。」

その言葉に、依子は目を丸くする。普通だったらそんな日に家族と過ごすなんて！と相手は嘆くかもしれないが、遥からすれば相当に嬉しいことだろう。依子も、一瞬娘の言葉が信じられずにいたが、すぐに覚醒すれば大袈裟にうなずいた。

「もちろんよ！一品といわずたくさん遥君の好物作りましょう！！」
「いや、それはなんか不自然じゃん…。」

あくまでもお客さん扱いするよりも家族扱いしたほうが和泉君喜ぶんじゃないかなあ……。」

「まああ、和ちゃんたら！すっかり恋人っていう存在が自然になっ
たわね！」

「そ、そう…?」

複雑そうに顔を歪めながらも、和は洗い終わったフライパンの水を切った。

「じゃあ、オッサンにも話しておいてもらえる？
彩ちゃんには私から話すから。」

「もう、お父さんでしょ!？」
「娘の恋愛事情をからかうのがだいじすきなお父様にお母さんからお話していただけます?」

おどけてそんな事を言う和に、依子はもう、と笑いながら和の頼みを了承した。

「じゃあ、着替えてくるね。」

「あら、そういえばまだ制服だったのね。袖、濡らしてない？」

「大丈夫だよ。」

リビングをあとにして二階の自室へと入る。

彩にとりあえずメールをせねば、と考えるが

そんな内容のメールを送ったら

きつとすぐに折り返しの電話が掛かって来るんではないかと予想すれば

とりあえず晩ご飯のあとにしよう、と思い至った。

『和、近いうちに遙君と結婚するとかじゃないよね!?!』

かなり興奮した様子で彩から電話口で言われたとき、
やっぱりなあ、と和は苦笑せずにはいらなかった。

家族のイベントに遙を招くというのは

恐らく姉の発想からするとそうであろうと思ったのだ。

それは案の定で、暫く興奮状態が続いた電話口の彩を
なだめながら説明するのは大変だった。

家に帰って自室へと入った遙は、寒さにぶるり、と震えれば
すぐさま暖房のスイッチを入れる。

部屋で制服を脱ぎながら、遙は和に初めて貰ったプレゼントを机に置けば緩む顔を引き締めることもしない。もしも今、実花などが部屋に入ってきたならば思い切り不審がられる光景だろう。

すっかり部屋着になった遙は、制服をハンガーにかければ、少し震える指先でゆっくりと机に置いたそれを取る。

普段ならばまず歌詞を一日かけて読み込み、次の日にCDをかける。そうして一周流し聴きして特に気になる所がなければそのCDはお役御免だ。

ポロポロになるのは歌詞カードばかりなのである。

しかし今日は待ちきれないと思ったのか、遙は床にそのまま置かれたコンポの電源ボタンを押せば、少し焦りつつCDをセットする。

音量を調節しつつ、流れてくる音を耳で確認しながら歌詞カードを開きつつベッドに腰掛けた。

「…バンドの名前がそのままアルバムタイトルなんだな。」

ぽつり、と呟きつつ少しレトロな雰囲気あふれる表紙を堪能し、次にゆっくりとページ目をめくった。

一曲目は四季を感じさせる曲で、この花をテーマにしている楽曲は数多く存在する。

しかし、この中にある歌詞表現は今まで類を見たことがなかった遙はまず最初にもう衝撃を受けた。

情緒あふれる歌詞を売りにするバンドなのだろうと思って歌詞を追えば、

二曲目にアップテンポの曲がくる。

ロックバンドと言っていたからまあ珍しくはないだろうと

次の曲の歌詞へと視線を向ければ、

今度は先程の雰囲気たっぷりの歌詞とは打って変わって

奇天烈な言葉遊びがそこには広がっており

遙はこの歌詞を作った人間はどれだけ広い引き出しを持っているんだ、と

驚愕せずにはいられなかった。

意味不明なものもしかし噛み砕けばそうではない。

そこにはきちんとは必然があり、

なんとなくでやっているのではない事がすぐにわかる。

「和って趣味も面白いんだなあ。」

彼女が選んだものなのだから、嫌いだと思うはずもなかったのだが正直これほどまでとは思わなかったのだ。

改めて笹森和という女性の面白さをしみじみと感じてしまった遙は、何気に父親と気に入る基準が似てしまっていたのかもしれない、と部屋の中でひとり苦笑した。

『あとで和にメールを入れておこう。』

とりあえず自分のいちばん好きな歌詞はどれだろう、とわくわくしながらページをめくる遙の部屋には、

上手くもなければ下手でもないボーカルの声が響いていた。

第七十一話「感謝は正しく伝えましょう。その4」(後書き)

えーと…趣味全開で申し訳ありません！

書いたあとにやりすぎたな、と思ったんですけど

これもどうせ趣味で書いてるんだし、と開き直ってしまいました(笑)

今シリーズはこれで終了となります。

ここまでお読みいただきありがとうございます。

次回はいいよ…でしょうか。あくまで予定は未定ですが。

第七十二話「恋人の形・その1」(前書き)

お待たせして申し訳ございません！

第七十二話「恋人の形・その1」

「…にしても、好物がこれって嘘でしょう？」

そんなにそういう気分を味わいたかったの？それとも空気を読んだの。」

「ていうか、今度こそいちばんに和の手作りお菓子が食べたかったというか。」

「まだこだわるの…？やっぱ好物じゃないんだ、これ。」

「なんか料理で思いつかなくて。食に対する欲がないのかな。」

牛乳だけは毎日飲まないと落ち着かない。」

「……………はあ。」

ため息を吐いた和と遙は、今私服で笹森家に程近いスーパーへ足を運んでいた。

終業式である今日は学校が半日で終わるので、

遙は一旦家へ帰って和の地元駅にて待ち合わせをしたのだ。

そうして現在に至る。

買い物カートを押して和の傍らに立つ遙は先程から気持ち悪いほどに満面の笑みを絶やさない。

多少怖くなつて、和はついに疑問を口にした。

「…あのさあ、なんでさっきからにやにやしてんの？」

「そんな、不審者を見るような目をしなくてもいいじゃないか。」

「ずっとそんな顔してたら冗談じゃなしに通報されるかもよ。」

眉間に皺を寄せていかにも怪訝な顔をする和をみれば

途端に遙は先程の表情を止めて通常の状態に戻そうとするが、

和が製菓売り場にてこれこれ、と言いながらカゴに商品を入れると

またも遥の顔がだらしなくゆるんでいく。
和は背筋に寒気を走らせながらも、無言で次はあっち、と
乳製品が陳列している方向を指し示した。

「やーっばいいねえ。」

「なにがあ？」

キユコキユコとカートについているキャスターと床がこすれる音が
する。

遥はまるでその音を楽しむかのように歩けば歩くほど
その顔に笑みを深く刻んでいく。

「こうやってスーパーで並んで買い物してるのが。」

「…買い物が好きなの？」

目的地に到着すると、遥と適当に会話をしつつ

和は手をのばし、しばし迷ったものの動物性の生クリームをとって
カゴに放り込んだ。

そうしてまたそこでぴたりと止まり、顎に手をやる。

「なんでそうなるかなあ。和はいつつもこういう時に鈍い。」

口を尖らせて拗ねた声をあげる高校生男子に、

和は、はいはい鈍くてごめんねー？と言いながら、並ぶ商品を指し
た。

「いつもどれ飲んでんの？」

「え？これ。」

「おい 牛乳か…地味に高いやつ飲むんだね。」

まあお取り寄せとかの高級品とか言われなくて良かったけど。」

眉間に少し皺を寄せつつも、まあいいか、と言って和はカゴへ牛乳を追加した。

「え、別に良いよ！」

「だって好物っぽいものに該当するのはこれなんですよ？
だったら買おうよせっかくだし。」

「…ありがとう。」

和の言葉にくす、と笑って遙がそのまま彼女の頭を撫でる。
そこで和がゆるゆると自身の頭からその手を掴んで浮かせた。

「…なにその静かな抵抗。」

「人前でやめてください。騒いでも目立つと思って。」

数センチほど強制的に和の頭から離された遙の手の平は
そのまま和の手に手首を掴まれたままカートの取っ手へと導かれた。
不機嫌な顔をしているだろうかと覗き込めば、なんと彼は笑っている。

またも驚いて目を丸くする和に、遙は耳元で囁いた。

「こうしてると夫婦で買い物に来たみたいだね？」

「！」

まったくもって想定外だったその言葉と
あまりにも艶めいたその声色に和は僅か顔を赤らめてしまう。
それに気を良くしたのか、遙は満足気に目を細めてふふ、と笑った。

「まあ近い将来そうなるだろうけど。」

「はあ？なんで近い将来なのさ？」

「だって俺そんなに待てないと思うんだよねー。」

「いいじゃないか、減るものでもないんだから。」

「いや、色々失うものがあるよ。勢いで結婚とか危険だよ！」

混み合った店内は、レジに長蛇の列が出来ていた。

カップルはそこまで多くないが

当日にクリスマス料理の材料を買うひともし少なくないらしい。

『バイトしてる人からしたらこんな日にカップル見るのって不愉快以外のなにものでもないよね。』

リア充は爆発しろ！とかひとり絶対思ってる。』

和はと言えばクリスマスにカップルを目撃したところで

特になにかを思うわけではない。

ただ彼女が思うのは、11、12月付近は街がいつも騒がしくうるさいだとかうっとおしいだとかそういう事を人ではなく街の雰囲気に対してよく思っていた。

そんな彼女は、年末年始に街を出歩くのが好きである。

あの静けさが一ヶ月くらい続かないものかと、

和は毎年、本気で望んでしまいそうになる。

「和っていつもマイナスから数えるよね、それって癖？」

「んー？」

「俺が告白した時もそうだったでしょ？」

この男といると目立つし周りがるさくなるし

自分の平穩が壊れてしまう！って。

普通の女の子はきつとマイナス要素としたら浮気されそうくらいじゃない？」

「またえらい自信ですなあ、否定しないけど。」

確かにこれだけ綺麗な男性をみて、

ああもマイナス要素を並べ立てられるのは彼女くらいかもしれない。

「結婚も、きつとそうなんですよ？」

隣で遙が和へと顔をむけて訊いて来る。

和はそれに頬を一回かいて小さく肯定の返事をした。

「まあまず自分で自分を面倒見れないうちから結婚とか馬鹿じゃないのなに言っちゃってんの、とは思っよね。」

「そこはまあ俺も否定する気はないけど。」

頷く遙に和は少し安堵する。

さすがにそこまで無責任ではないらしい。

和は内心これにすらそうかなあ、と言われてしまったらどうしようなどと思っていた所であった。

「あと他人とずっといつしよにいるわけだから煩わしい所もたくさん出てくると思うわけさ。」

生活習慣が全然違うんだからさ、それこそ金銭感覚から扉の閉め方までね。」

「……でも好きなひととずっといつしよにいられるんだよ？」

「だからこそ、好きな人間に汚い部分を見せたくないと思えば気も遣うってもんじゃない。」

ストレスどんどん溜まっていきそうだけどねー、繊細な子は特に。」

「洗濯とか？」

「あーねえ。生理の時とか他人の男が傍に居るとすごいうっとおしいかも。」

「どうしてそうリアリストかなあ。」

半ば呆れたように声を出す遙に、和は視線だけで彼をみれば次にはにや、と笑う。

「そういうマイナス面も全部気にならなくなったからこそ和泉君に好きだって言ったんだよ？」

「！」

「普通の女の子より多分、そのぶん私は気持ち重いよ。」

そこんところわかってんの、君。と

なんとも普通な顔をして言われてしまった遙は和を直視できないほどに顔を真っ赤に染め上げる。

いつも、遙は彼女を心底卑怯だ、と思う。

ただでさえ好きでどうしようもないのに、どうしてこれ以上ないくらい自分を喜ばせるんだろう。

次の日にはなにを言われてしまうのかと考えると、

遙は嬉しい半面怖かった。

今でさえ自分の感情は狂気をはらんでいると思うからだ。

両想いになって、満たされていると感じてなお、

永遠に彼女が欲しいと望む遙は、やはり恋に狂っていると自身でそれをいやというほど自覚している。

それなのに、愛しいひとは遙の心を増幅させてしまうような事を日常の少しに気まぐれに放り込んでくる。

明日には自身の気持ちに押しつぶされてしまうかもしれないと思えば遙は和を怖いと感じていた。そして、それ以上に自分自身を。

大切な彼女を、いつしか自身で傷付けてしまう事が彼はとても怖かった。

「ねえ、和。」
「んー？」

レジでの会計を終え、並んで品物を袋詰めしつつ会話を進める。

「和の好きが重いつていうんなら、俺のってなんだろうねえ。」

「……なんか変な質問をするね。」

「そう？」

「重さを比較する話ならわかんなくもないけど

和泉君の好きとは一体なんぞや、と訊かれても

私はさあ？としか言えないけれど。」

「重さなんて比較する気にもなれないよ。」

物理的な話になればそれこそ和に鼻で笑われちゃいそうだし。」

隣で苦笑する気配を感じつつ、和は斜め上を仰ぎ見れば一瞬動きを止めた。

そうしてひとつ頷く和は、ひとりなにかを納得したらしい。

「……米粒と地球くらい違うとか馬鹿な事確かに言いそうだもんね！。」

「！！？」

「とか今、思った？」

遥の言葉に、和は買い物カゴと袋をみつめていた顔を勢いよく隣に立つ遥へと向けてしまった。

どうやら凶星であつたらしい。

「……和泉君にまで考えている事を読まれるとは。

私って最近、思考回路が単純？」

「俺が和の事を四六時中考えてるから。愛の力。」

「……すごいね、いつか地球救ってね。」

「その、いかにも鼻で嗤うみたいのやめてくれないかなあ。」

肩を落とした遙に和はしばし笑いつつ、カゴを戻した。

遙が重い物袋をすべて引き受けようとするので

和が私を非常識な女にする気が、と睨んでそれを阻止した。

結局、重いものを遙が引き受け比較的軽い荷物を和は手にしたのだ
った。

好きとは一体なんぞや。

『……こんな日に絶対考えたくないテーマだねえ。』

和はひとり心で呟きつつ、遙と連れ立ってスーパーをあとにした。

随分と冷え込んでいる外の空気が和と遙に襲い掛かる。

お互いにぶるり、と震えれば早く帰ろうと笑い合った。

「……結局、具現化できるものでもないんだよねえ。」

「ん？ああ、さっきの。その不毛な話まだ続くの？」

「何度も何度も、和には否定されるけどさ。」

ひとの気持ちは移ろいゆくものだし、それこそ一番信用出来ないと
かって。「」

「……うん？」

「俺、断言するよ。一生ずっと和の事好きな気持ち変わらないって。
」

「……あ、そう。」

「もしもそれを破ったら、俺死んでもいいよ？」

曖昧に微笑む遙のその表情はなんとも危なげで
それでいて消えてしまいうそに儂かった。

なぜだか和はそれに泣きそうな気持ちになりながらも
なんとなく真剣な雰囲気をぶち壊してしまいたくて、
物騒な事を言うな日本一の阿呆男！と言いながら遥のすねを蹴り上
げた。

痛い！と悲鳴をあげながらも笑う遥の表情をみて
和は少し安堵した。

「…ケーキ作るって本当なのね。」

目を丸くしながら材料を検分する依子に和はため息を吐く。

「だって和泉君がそれがいいって言うから。」

「しかも作った事ない種類の。」

「いちばん大事なスポンジは何度も作った事あるのだから
なんとかなるよ。…作った事ないので一番最初に食べたいって言わ
れたの。」

「あらあら、遥君らしいわねえ。」

「ごめんねお母さん。最初の20分くらいはこっちかかりつきりに
なっちゃうけど…。」

「いいのよ、お母さんのだってこれでも専業主婦歴けっこう長いん
だから。」

「…そうだね、ありがとう。」

くす、と笹森家の台所で母と娘は笑い合った。

「あの、俺達なにもしなくて本当に良いんですか？」

同じく一階にある依子と高明の私室は、笹森家リビングの二番目に広い部屋だ。

先程、和と依子から追い出された三人はここで時間を潰している。

二人掛けのソファがあるだけのこの部屋にダイニングテーブルに備え付けの椅子を持ち込んで、今は遙がそれに座っている。

少し低めの作りであるテーブルには、ちゃっかり三人のお茶がのっかっていた。

台所の様子がどうしても気になる遙は、恐縮するかのように訊ねたがそれに長女である彩が笑いながらぱたぱたと手を振った。

「いいのよう。私とお父さんが行っても邪魔になっちゃっただけなの毎年。」

彩の隣に座る高明が賛同するように頷く。

「そうそう。かえって時間かかるんだよなあ。」

俺らは後片付けがメインだからいいの、いいの!!」

「…なんだか、イメージだと彩さんの料理出来そうな気がします。」

首を傾げる遙に、彩が口を噤んで一口茶を含む。

ふっつてはいけな話題であつたか、と遙が頭の中で考えた時高明がくすり、と小さく笑つた。

「ああ、彩はな。出来ないわけじゃないんだけど恐ろしく時間がかかんの。な？」

「む…なんでだろう。私だつて一人暮らししているしお料理出来ないわけじゃないのよ？まずいものが出るわけでもないし…」

でも、でもお父さんが言つたようにすぐ時間がかかつちゃうの。」

「だからこういふ日は彩も一緒に締め出されちゃうわけだ。」

「本当は一緒に作りたいたんだけどね。」

口を尖らせながら話す彩に、高明は拗ねるなすねるな、と娘の頭を撫でてやる。それに対し彩はわかつてるよ、と父に顔を向ける。

黙つてそれを許容する彩に、遙はまたも不思議な感情を抱いた。

普通、この年頃になつた娘が、父親に頭を撫でられて受け入れるものだろうか。

『…彩さんてシスコンじゃなかったのかな。』

遙は普段こそ和の前で様々な失態を露呈してはいるが基本的に要領の良い人間であり、察しも悪くない。

むしろ自分に対してむけられる感情には敏感なほうだ。

彩との初対面で遙が感じ取ったのは、胡散臭い、という警戒心だった。

半ば強引に自分を笹森家へと招き入れたのも、きつと両親の反応を見たかったからに違いないし自身でも大事な妹の恋人を審査しようと思ったからであろう。

変にはしゃいでいつつも、そのテンションのままならばあけすけな質問もしやういと判断した彩は、決して頭の悪い人間ではない。

あくまでもすべて遙の憶測であったが、遙はそうであると確信していたし

トドメのように広未から姉には注意しろ、と連絡をもらったのだ。どうやら自分は合格したらしいと安堵したのは広未に情報をもたらってからの事であった。

その上で、遙は目の前にある光景を不思議に思っている。シスコンの上にファザコンだとしたら

色々ときついものがないだろうか、となんともし礼な事を考えていた。

まあ、この家族は仲が良いし、

和の性格からしたらありえない話ではあるが

彩にとってはそう変な事でもないのかもしれない。

甘え上手そうな彼女は、ああいうものに慣れてるから拒絶反応も起きないのかもしれない。

「…遙君、私別にファザコンじゃないよ？」
「え。」

思った事が透けて見えていたらしく、彩は目を細めながら

遙をじつと見据えて気持ち低めの声をあげた。

「私だってこの歳だし、父親に頭撫でられて喜んでるわけじゃないけど。」

「おい、彩。」

「和がああいう性格だから、姉妹そろって毛虫みたいに扱ったらお父さん死んじゃう、って泣きつかれたんだもの。」

私も別にそこまで嫌じゃないから拒否しないのは暗黙のルールというの？」

肩を竦めて話された真相に、遙はどう反応したものか、と一瞬固まったが

次にはくす、と小さく笑う。

「彩さんは、感情表現が基本的にストレートですね。和とは本当に正反対というか。」

「おんなじ環境で育ったのに確かに不思議っちゃ不思議だよな。」

それにうなずきながら、高明は遙につづいて言葉を嚙む。

彩はそれに不満そうな顔をした。

「別に和だって自分の気持ちははっきり伝える子じゃない？」

「口では確かにはつきり言ってはくれませぬえ。」

でもなんとというか態度とか、表情とか、そういうのはいつだって和は冷静ですから。

……まあそのぶん、ふいにみせる顔が破壊力抜群なんですけど。」

「……遙君、顔がいやらしいよ。」

ますます不機嫌になりつつある彩が淡々とした声でつつこみ、隣に座る高明はなんとも楽しそうに声をあげて笑っていた。

遙は、今日ここに来て本当に良かったと感じていた。
大好きな彼女の家族に、自分が一員だと認められたようで
それが心底嬉しかったのだ。

第七十三話「恋人の形・その2」(前書き)

なんとか今日中に3をアップできるように頑張ります! ;

第七十三話「恋人の形・その2」

時間はあっという間に過ぎた。

三人で雑談をしていたら気が付けば料理は出来上がっていて、テーブルの上にはひとりひとりの好物が所狭しと並んでいる。

好物と言っくらいなので、本当に和洋中が関係なく混ぜっついていて遥は思わず噴出しそうになってしまった。

筑前煮、餃子、ビーフシチュー、ロールキャベツ。

真ん中には遥がリクエストしたチョコレートケーキが乗っている。

どれが誰の好物なのだろう、と興味津々にながめていた遥だがひとりひとり取り分ける皿が用意されているのでよくわからなかった。

「…和泉君、ものすごい楽しそうに観察してるね。」

「え、だって誰が誰の好きなものか気になるじゃない。」

遥のぶんのビーフシチューをよそって渡す和にお礼を言いつつ和の質問に遥が答えた。

「ビーフシチューが父で、ロールキャベツが母で、

餃子が彩ちゃん、で煮物が私だけ。」

「和って和食が好きなの？」

「あー……そうかもしれない。」

あんまり意識したことなかったな、と呟きながら和が食卓に着く。

全員がそろったところで号令がかかった。

どの料理も美味しかったが、

いつものことながら依子の料理は一般家庭の水準よりもかなり高くないだろうか、と遥は感じていた。

そして驚いたのは和の作ったケーキだ。

「…美味しい。和ってお菓子作るのうまいんだね。」

「そう？良かった。初めて作ったから大丈夫かと不安だったけど。」

その会話に、和ははっとして周りをうかがえば

あからさまに嫌な笑いを浮かべている家族が目に入った。

和はそれからしばらく眉間に皺を寄せつつ、沈黙を心に誓ったのだ。

「本当に美味しかったです、ご馳走様でした。」

「いいえこちらこそ、後片付けご苦労様。あつちで一緒にお茶を飲みましょう。」

「遥君、アップルティー大丈夫？」

「あ、ありがとうございます、好きです。」

「じゃあこの前買ったのいれましょう、遥君、座って待っていてね。」

「

笑いながら依子と彩に言われた申し出を遥はありがたく受けてダイニングテーブルに腰を下ろした。

テレビのチャンネルをかちかちとかえながら

高明がソファに座っていたが

紅茶の匂いを嗅ぎ付けていそいそとテレビを消し遥の横へと腰掛ける。

「…高明さん、あんまり後片付けもしなかったですね。」

「遥君がふたり分働いてくれたからねえー、若いっていいね!」

あははーと言いながらしばしば背中を叩かれて

遥は、はあ、と曖昧に笑った。

「…あれ、和がない、部屋かなあ?」

「あ、だったら俺みてきますよ。」

「うん、お願い。」

彩にうなずいて、遥は二階にある和の自室へとむかう。

ノックを試してみたが返事がない。

どうしようかと一瞬迷ったが、結局扉を開けた。

「……………やっぱり。」

くす、と笑いながら扉を閉める。

ベッドの上には背中を壁にあずけて本を読みふける和がいた。

読んでいる本がなにか気になって視線をむけると、

よりにもよってと言うのも変だが遥の父親である和泉昌が執筆した本であった。

自分が部屋に入ってもまったく気付かないその原因が知っている第三者の男だと思つと、遥は底から沸き上がるなにかを抑えられない。

足をベッドにまっすぐのばして座っている態勢の和に遥はゆっくりと馬乗りになれば、和の手から本を奪つてしまつ。そこでようやく和は何が起こっているのかを理解したのか、驚きに見開いた。

「え、い、和泉君いつ入ってきたの？」

「……その集中力、本当にすごいね。」

遥は相変わらず和の両足を跨いだ状態で、膝立ちをしつつ自身の両手で和の両手首を掴んで壁へと縫い付ける。

「な、なに!？」

焦った声をあげる和を無視して、遥は和の唇に自分の唇を重ねた。いまだ驚きで固まる彼女の抵抗が弱いのをいいことに、遥はそのまま口付けを段々と濃いものにしていく。

「ん、ふっ……」

和の口から発せられる艶めいた声に背中をぞくぞく粟立たせながら遥はその唇の甘さを堪能する。

歯列を一本一本きれいに尖った舌でなぞっていけば和の身体がびくり、と震える。

気配で、遥が笑つたとわかつた和は、そこでやっと足をばたつかせ

て抵抗した。

しかしそれも一瞬しか許されなかった攻撃で、遥の両足が器用に動けば和の足を絡んだ彼のそれが綺麗にベッドへ縫い止めてしまう。

対抗手段をすべて奪われてしまった和は、悔しくも酸素を得ようと口を開く。

そのタイミングを待って遥の口が今まで以上に大胆な動きでもって和の唇全体を食い尽くすようにくわえる。

そのまま舌はどんどん奥へと侵入し、そこだけ違う生き物なのかのように

いやらしくもねっとりとしたうごきをされて、和は頭が沸騰するのではないかと思った。

唇も、口腔内も欲しいままに貪られれば和は目に浮かぶ涙を止められなかった。

どれくらいの間そうしていたかわからないが、気が付けば遥の口付けは終わっていて、今は目に溜まる雫をその舌で舐め取ってる最中だった。

ぼんやりと麻痺した思考はしばらくされるがままになっていたがやっと我に返った和は、慌てて解放されていた両手で遥の胸を押した。

「い、いきなり何するの!」

「あれ、もう覚醒しちゃったのか、残念。」

「残念、じゃないよ!なにをしてんのさ!」

「だって和が、俺が入ってきてきてもぜんぜん気付かないくらい父さんの本に夢中になってるから。」

「いやでも俺の事しか考えられないようにしてやるつもりで。」

「!」

すりすりと頬を遙の右手が撫でていく。その体温は心地良いと和は感じた。

「いきなり奇襲攻撃みたいなのやめてよね。」

ぎろり、と睨みながら和が低い声で抗議をすれば
遙はあまりにも悪びれなく次の言葉を口にした。

「でもあんまり嫌そうじゃなかったけど。」

「…はい？」

「だって、すごい可愛い声出してたし、すごい可愛い顔してたし。」

もう見てるだけで欲情しちゃう反応されてどうしようかと「離れてください。」

ぐいぐいと胸を押す和に笑いつつ、遙は素直にベッドから下りた。

「俺の前ではあんまり父さんの本読まないでね。」

「読むたびこうなったら嫌だから、そうする。」

「依子さんと彩さんがお茶入れてくれたよ、下行く？」

「うん、すぐ行くから先下りてて。」

そう言ってベッドから立ち上がるうとしない和をみて

遙はしばし和を無言でみつめる。和がそれになに？と小さく声をあげた。

にや、と笑った遙に和は嫌な予感を覚える。

「立てないくらい感じちゃった？」

「な、馬鹿！とつと出ていけ！！」

やっぱりろくでもないことを遙に言われた和は顔を真っ赤にしておもいきり反応してしまえば居た堪れなくなり、遙に怒鳴ってしまった。

楽しそうに笑いながら、遙は待ってるね、と言って部屋をあとにする。

扉をぱたん、と閉めてしばらく下を向いていた遙はこらえきれないのかいやらしい笑みをたたえたままになっていた。

「…ああいうときの馬鹿ってくるなあ。」

これを耳にすれば今度は遙が好む種類ではない馬鹿が飛んでくることは

火を見るよりも明らかであった為、独り言のように呟いては顔を頑張っけて引き締めつつも余韻に浸ってゆっくりと階段を下りていった。

リビングへと戻ると、すでに人数分のカップが用意されていた。遙がテーブルに着くと、高明が嫌な笑いを浮かべて遙をみつめている。

特にそれに反応することもなく、アップルティーが注がれたティーカップを彩からお礼を言って遙は受け取った。

「和、部屋にいたんじゃないの？」

「いましたよ。」

「呼びに行っただけにしては時間かかったねえ。」

高明の言葉に遙はにっこりと微笑んだ。

「和が本を読んでいたの、声をかけるのにためらっちゃって。あ、これ美味しいですね。」

「そうでしょー、この前ちょっと奮発しちゃったのよ。」

うふふ、と依子が嬉しそうに答える。

遥の堂々たる振る舞いに、高明は不満気な声をあげた。

「遥君はつまらんなあ。色男はこういうネタに慣れすぎてて。」

「やましいことがないから動揺しないだけですよ?」

「…遥君を揺さぶれるのって和だけなのよ、お父さん。ねえ?」

「そうですね、揺さぶられっぱなしです、かつこ悪いですけど。」

彩の言葉に遥が肯定して眩しいくらいの笑顔をみせる。

高明はそれにため息を吐いてつままないの、と呟き紅茶を一口飲み込んだ。

それと同時に、リビングをがちゃ、と開ける音がして

先程まで話題になっていた和が姿をみせる。

「…おやじ、なにをそんな眉間に皺を寄せてんの。」

「和ちゃん、お父さんでしょう。」

「あ、ありがとうお母さん。」

和の分の紅茶を入れてカップを差し出される。

高明の斜め横である席に和が腰を下ろした。

今は高明と遥が、依子と彩がそれぞれ隣り合って座っている。

「……二階で遥君になにされてたの?」

先程の結果では不満だったのか、和にターゲットをうつしたようだ。

しかしこういった場合の彼女は強い。

「なにつて、部屋に呼びにきてくれたけど。」

「えー、その割りに随分時間かかってたけど。」

「そうなの？本に集中してていつ和泉君が部屋に入ったのかわかんなかったんだよね。ごめんね、和泉君。」

「いいよ、本を読む和をみるの好きなもの。」

にっこりと微笑む彼に、僅か和は眉をぴくりと動かした。先程それが気に入らずにあんな事をした彼であるのに。

「じゃあなんで下りてくるまで時間掛かったんだよ。」

「キリが悪いところだったからだけど？」

あれ、和泉君にもうちよつとだけ読んだら行くって伝えただけ
ど。」

「ああ、高明さんには伝えてなかった。」

あまりにもすらすらと言葉を紡ぐ和に遙は内心苦笑しつつ話を合わせる。

相変わらず、彼女は平気でとっさに嘘をつく事ができる人間だ。悪いと思っていないからこそできる所業であろう。

「えー、あんまりにも激しくちゅーされて

腰砕けにでもなってたんじゃないのー？」

「！」

遙がその言葉に一瞬動揺しそうになった。

この男は、ひょっとしてのぞいて見ていたのか？と少し疑ってしま
う。

しかし和はそれにゆっくりとカップを置いて、

眉間に深い皺を刻んだまま高明の胸倉を掴んだ。

「四十しじゅうを越えた男があるうことか接吻をちゅーなんて表現すんな、気持ち悪い!!」

「え、接吻とか今時言わない…」

「せめてキスとか言えんのか、セクハラオヤジが!!」

ぶんぶんぶんぶんと揺さぶられる高明を助けに入った方がいいものか悩んでいたとき。

遙の携帯電話が鳴った。

「!この着信音……。」

和がぴくりと反応したのは、遙が和に貰ったCDの一曲を自身の携帯電話に着信音としてダウンロードしたからだった。そのおかげで拘束を解かれた高明はむせている。

遙は和にっこりと微笑んで、すいません、と一言添えれば携帯電話を開いた。電話は実花からだ。

「もしもし、どうした?」

遙が電話中なので、笹森家の面々は静かに紅茶を飲みつつその様子をながめていた。

しかしどうしたとか、段々と様子がおかしくなる遙に和は紅茶のカップをことり、と置いて訝る。

「ああ、わかった。とにかく落ち着け。うん、大丈夫、連れて行くから。」

電話、繋がった状態にしておくか?平気なんだな?ああ、じゃあ一旦

切るぞ。」

遙が携帯電話を切ると、少し焦った様子で和に話しかけてくる。

「ごめん、実花からだっただけだよ。」

「うん、どうしたの？」

「なんか要領を得ないんだ、ただ、すぐにマンションに向かってくれって。」

実花の部屋に来てほしって言われた。

ひよっとしたらなにかまたおじさんとおばさんがトラブルったのかも

…」

「え、どうして？」

「わからないけど、和にもできたら来てくれないかって

かなり切羽詰った状態で言われたんだよ。おかしくない？」

「確かに…どうしたんだろっ、心配だね。」

「悪いんだけど、和もついてきてくれる？」

佐山さんがすぐにこっちに来るから外で待機してほしいって。」

「とにかく急ぎなんだね？わかった、行こう。」

ちら、と家族のほうをうかがったが、三人とも無言でうなずくだけだった。

こっぴどいとき笹森家に生まれて良かったな、と和は思う。

「荷物とか、そのまま置いときな遙君。うちはかまわないから。

すぐに出たほうがいいんだろ？」

「はい、でも…」

「外から車の音がしてるわ…佐山さんじゃないかしら？」

依子の言葉に、遙と和は顔を見合わせる。

こんなに早くここに着くなんてありえない。

ひよっとしてかなりまずい状況なのだろうか。

遙と和は家族の申し出をありがたく受けてるくに支度もせぬままに慌しく玄関から靴を履き替え飛び出した。

「あ、遙！良かったよ、和ちゃんといっしょで。ごめんな、こんな日に。」

「いいですよ、そんな事は。それよりも実花どうしたんですか？」

「今は時間が惜しいから説明はあとな。遙、携帯持ってるか？」

「はい、持ってますけど。」

「悪いちよつと貸してくれ。ふたりは車に先に乗っておいてくれるか。」

佐山もかなり焦っている様子がかがえる。

遙は素直に言われたとおり佐山へ携帯電話を渡せば和といっしょに車へと乗り込んだ。

それから少しして佐山が車へと乗り込む。

運転に集中したいから、と仕切りを完全に上げた状態で、車は発進した。

佐山らしからぬ少し乱暴な運転は、和と遙の心をざわつかせる。気が付けばどちらからともなくお互いの手を握りしめていた。

「遙、和ちゃん！先にお嬢様の所に向かってくれるか。」

ちよつと連絡したい所があるから、すぐに俺も追いかける。」

「わかった。和、行こう。」

「うん。」

和と遥は走って実花の部屋へと向かえば、出迎えた実花が遥の胸へ飛び込んできた。

「遥！和さんも、来てくれたのね…！」

「実花！どうした？」

遥が慌てて実花を抱きとめれば、遥の横から和が実花の頭を撫でる。

「大丈夫？とにかく事情を話してもらえるかな。」

「それが、私…ど、どうしたらいいのか…！」

「実花？落ち着け大丈夫だから。」

「実花ちゃん？」

真つ青な顔をして震える実花の様子に

ただ事ではないと思えばふたりはどんどんその胸をざわつかせる。

そこに後を追ってきた佐山が慌てた様子で入ってきた。

「お嬢様！」

「！佐山…！！！」

実花がついには泣き出してしまい、震える声で今度は佐山へと縋りつく。

佐山は慣れた様子で実花の背中に手を回した。

「大丈夫ですよ、お嬢様。大丈夫…！」

遥、急いで来てもらって悪いんだが、少し隣で待っていてくれないか？

お嬢様をなだめてからそつちに行くからさ。」

「…そうですね、わかりました。」

こんな様子ではきつとなにも話すことはできないだろう。

遙と和はひとまず実花の部屋をあとにして遙の部屋へと移動した。

三度目となった遙の部屋へと足を踏み入れつつ、

和は隣に視線を送った。

そんな和を遙が笑って後ろから抱きしめる。

安心させるように、遙が和の耳元で囁くように声をかけた。

「大丈夫だよ、佐山さんも動いてくれるみたいだし。

きつと、悪い結果にならない。」

「……うん。」

温もりをもつと感じたくて、和は遙のまわされた腕を

自身の手で握り締めた。

しかし、遙に抱きしめられた安堵感からか。

いくらか冷静になった和は先程からずっとなんとなく違和感を覚える。

それが濃くなっていくのを自覚しつつ段々と眉間に皺を寄せていく。

遙の腕からゆるゆると抜け出せば、和はぐるりと部屋を見渡した。

「ねえ、和泉君？」

「ん？」

「出かける時、鍵を閉めて出たよね。」

「もちろん。」

「……開いてたよね、鍵。」

「ああ、実花が合鍵を持つてるから、閉め忘れたんじゃないかな。」

「なんの用事でここに入ったんだろう。」

「さあ。しょっちゅう勝手に入ったりしてるから…。」

しかし和の疑念ははまだ晴れることなく

ますますなにかがおかしい、と頭が警鐘を鳴らしていた。

「なんでこの部屋あったかいの？電気ついてるの？」

「…そういえば。暖房ついたままになってるな。」

「実花ちゃん、随分取り乱した状態だったし、

たとえばそのあとに和泉君がいるかどうか確認しようと部屋に入ったんならわかるんだけど。

鍵を閉め忘れちゃったっていうのも…でも」

「さすがに電気も暖房もつけっぱなしって状態は今までなかったな

あ。」

「……………ちよつと、隣行ってくる。」

「え、和！」

和が慌しく遥の部屋から出て実花の部屋へと向かえば、

先程は開いていた部屋の鍵が今はしっかりと施錠されていた。

一応、と呼び鈴を鳴らしてみるも、反応はない。

眉間に皺を固定させつつ、和は今度は下へと走る。

エレベーターのボタンを押してマンションを飛び出してみると

あったはずの佐山の車は跡形もなくなっていた。

呆然としながらも、いつまでもここには仕方がないので、

和は再度、遥の部屋へと戻る為に入り口で遥の部屋の番号を入力し
インターホン越しに遥にロックを解除してもらった。

実花もいっしょに入居しているからか、このマンションは
オートロックが装備されている。

「和泉君、佐山さんと実花ちゃんが消えてるんだけど。」
部屋に戻って遙に話しかければ、遙が突っ立ったまま
なにかをみている。
和がどうしたのかと遙の横に立ち手元をのぞきこめば、
それは一枚のメモ用紙だった。所謂、置手紙だ。

「……………やられた。」

遙が不機嫌な声をあげるが、内容を確認した和はもはや二の句が継
げない。

メモには可愛らしい文字で次のように書かれていた。

『メリークリスマス。』

ふたりつきりでゆっくり明日まで過ごしてください。

松永実花・佐山繁・笹森家一同より。』

佐山さんてしたの名前、繁っていうのか、と
どうでもいいことを頭の中で考えつつ、
どうにか混乱を抑えて冷静になるように和は自身の頭へ指令を下す。

「別に帰ればいいのでは。」

やっと声を発した和は、遙にそう促すが遙はなんとも複雑な顔で笑
う。

「和、財布持ってる?」

「持っていない。」

「俺もなんだよ。スイカとかも全部財布だし…」

携帯電話すらさつき佐山さんに取りられちゃった。」

「私も電話すらない!」

「鍵がないからへたにここ動けないし。」

今日はここで一緒に夜明かしするしかないみたい。」

「えっ…!?!」

まじですか、と和は心の中で呟いた。

第七十四話「恋人の形・その3」

しん、と静まり返った部屋の雰囲気押し潰されそうになりながら、和はとにかく何事か浮かばないものかと考える。

「…あ、実花ちゃんの部屋に私が泊まればいいんじゃない？」

和泉君も合鍵持ってるんじゃないの？隣。」

「え？ああ…そっか、それもそうだね。」

「勝手に借りたっていいよね、実花ちゃんだって仕掛け人だったわけだし。」

「大丈夫だよ。待ってて、部屋の机に入ってるから取ってくる。」

先程までの空気とは一変して、緊張が解けたふたりには
笑みものぞく。

和はどうやらここにふたりで泊まらなくても良さそうだと
ほっと胸をなでおろした。

戻ってきた足音に、和が目を向ければ、遙がこちらを無言で見つめる。

和はそのときものすごく嫌な予感がした。

「…このメモが入ってた。」

遙が掲げるそれに和が走り寄れば、そこにはまたも可愛らしい文字で

『鍵没収 by 実花』

と書かれていた。

「ちょ、これ…いくらなんでも周到すぎ…ってああ。
私の家族が協力者ということは、広末も一枚噛んでる、絶対！」
「…もしそうなら、これうなずけるね。」

目の前で苦笑いする遙がなんとも弱弱しくて、
和はどうしたものかと頬をかく。

「あのー…どうしようか？」

さっきまではすごいパニックみたいになっちゃってたけど
部屋も複数あることだし、別々には寝れるわけだよね？」

「うん、予備の布団があるか…：ら…：…：…。」

遙が少し固い笑顔で最後まで言おうとしたのを止めた。

和も遙も、お互いに目を見開けば

遙を先頭にはたばたと布団が置いてある部屋へと向かった。

このあいだ通された部屋ではなく、客間のような場所だ。

ベッドもない六畳の部屋は広く、隅にあるベンジャミンが妙に存在
感がある。

主に衣装を置いてある部屋らしく、収納スペースが多くあった。

入りきらない衣装とCDが表に出ており、

服はハンガーラックに、CDはダンボールへ収められていた。

床にはカーペットが敷いてあり、

クッションと座椅子と折りたたみ式のテーブルがちょこん、と置いて
あった。

遙は慌ててクローゼットをのぞきこめば、やはり的中らしい。

焦って中を探ろうとしたせいで、メモ用紙がはらり、と床に落ちた。

和がそれを見つけて拾えば、そこには予想通りの人物からのメッセ

ージがあつた。

「『往生際が悪い。津田広未。』……やっぱりか。」

「え、広未君から!？」

遥が和の手元をのぞきこむ。

それを確認すれば盛大なため息を吐いた。

「…仕方ない、俺はソファで寝るから。和はベッドで寝て？」

「え、でも掛け布団もあそこにあるのしかないんでしょ？」

「コートとかを重ねてかぶればなんとかなるよ。暖房かけたままで…
最悪、一晩くらい寝なくなつてなんとかなるし。」

遥の申し出に和は狼狽する。

さすがに部屋の主がソファに寝て、自分がベッドというのが和にはどうにも納得がいかなかった。

「駄目だよ、身体おかしくなる!和泉君がベッドで寝てよ、

私、一晩中本読んだりとかしよつちゆうしてるから余裕だもん。
本棚にちよろつと本あつたでしょ、あれ貸してもらえれば。」

「和、そんなの俺が許可すると思ってるの?」

「私だつて許可できないよ!」

ふたりの押し問答は、永遠に続くのではないかと思われた。

『それで、指示通りにしていただけましたか？』

「ああ、君の言うとおりで、実花お嬢様の鍵も予備の布団も部屋から持ち出したけど……すごいね、徹底ぶりが。」

『当然です。そうじゃなきゃ仕掛けた意味がないですから。』

遥の携帯電話を使って話している相手は、広未。

そして携帯電話を操っているのは

先程、遥の手からそれを強奪した佐山と、実花である。

松永家のガレージへ辿り着いたふたりは、

車の中で暫し作戦執行者同士で会話をしていたのだ。

ちなみに携帯はスピーカーがオンの状態になっているので実花も会話に参加している。

更に言えば、相手先は笹森家で話をしているのだ。

「でも、笹森家の皆様はよろしいのですか？

賛同してしまった私が言うのもおかしいですけど

手塩にかけてお育てになった大事なお嬢さんでしょう？」

実花の言葉に、電話口で大笑いしたのは高明だった。

『最近、ふたりがぎくしゃくしてるのわかってたからねー。』

別れの危機より発展のが良いと思わないかい？

それに笹森家は、もう遥君を一員と認めちゃってるからね。オールオツケー。」

「おじさん、相変わらずノリ軽いよ。和が怒りそうだな。」

「広未君にも遥君って気に入られてるんでしょ？」

私達が反対するところないものねえ。」

「正直、避妊してくれればそれでいいわよね。」

依子が話したあとの彩の言葉を、

佐山は実花に聞かせないようにと物凄い素早さで耳を塞いだ。

「!?!え、ちよっと、佐山なによ、聞こえなかったわ。」

「…お嬢様、懸想する相手が出来たらお教え致しますよ。」

電話口では、今の会話がツボに入ったらしい高明が馬鹿笑いをして
いる。

それを彩がたしなめているようだった。

「…まあ、なんにせよ。良い形で終わればそれに越した事はない。」

ぼつり、と呟いた広未の言葉に、会話していた全員がうなずいた。

「とにかく安眠なんてこの状態でできないんだよ!」
「だったら一緒にベッドで寝ればいいじゃんもう!」

遙の部屋にて、いまだ客間に言い争いが続くふたりはこの譲り合いにも飽きてきたのかやけくそ気味に叫び合う。しかし弾みの言葉なのかなんなのか、和がとんでもないことを口にした。

「はあ?馬鹿だろう、いいかげんにしろ!」

「馬鹿つてなにさ、結局それしかないじゃんだって!」

「お前が隣に居てなんにもせず俺が寝れると思ってるのか!?!」

「思ってたねーよ!」

どっどっ言葉が乱暴になる遙に釣られてか、和も最後には女性らしくらめ台詞を吐いていた。

それは遙を固まらせる言葉であつたらしく、今までの勢いはどこへやら、和の爆弾発言に遙は目を見開いて無言になつた。

しかしそれは和も同じであつたらしい。

今自分が口にしてしまった言葉の意味を理解すれば、しまった、という表情をあからさまに作つた。

ポーカーフェイスも取り繕えない程に狼狽しているらしい。

「えーと、ごめん、今のはその。つい出ちゃったというか。」

「……………うん。」

和の言葉に、遥がなんとか笑顔で応える。

「ねえもうさ、ふたりで起きてようか？ テレビある部屋のソファに座って。」

「ああ…そうだね、なんかそれが一番良い気がしてきた。」

「じゃ、そうしよう。」

結局はふたりで完徹という結論に達して、遥と和はようやく落ち着いていた。

それでもどこかしらから流れる気まずい空気はそのまま、

和と遥は少しぎくしゃくしながらもなんとか会話を成立させていた。

「そういえば…俺の部屋に

見慣れないポストンバッグが置いてあつただけだ。」

「え？ ちょっと見てきていい？」

和の問いに遥がうなずく。和はいつか運ばれた部屋に扉を開けて入ると

そこにはよく知った鞆がベッドの上へと置かれていた。

慌てて近寄り中を開けてみれば、和は脱力する。

中に入ったメモ用紙。

『二泊三日分の着替えが入ってます by 依子・彩』

書かれている文字の羅列を見て、怒ったらいいか呆れたらいいか反応するのも疲れた和は、

無言でリビングへとポストンバッグを運び、遥にメモ用紙を渡した。

「…え、二泊って。それまでここに閉じ込められるとかはないよね

「？」

「さあ？とりあえずこれ、私の服が入ってる。…もう、なんなの。」

「でも今日いっぱい料理とかしたし、匂い気にならない？」

「和が良ければお風呂入ったら？10分くらいで沸くから。」

「え、で、でも……」

この状況でお風呂というのはいかなものか。

和は少し躊躇しながらも、入りたいという気持ちはあるらしい。

遙の様子をうかがいながら悩んでいる。

「大丈夫だつてば。嫌がることはしないから。」

「…う、うん。じゃあ……あ、でも和泉君がいちばんに入つてよ。家主なんだから。」

「わかった、わかった。じゃあ、沸かしてくるから、座つてて？」

風呂場へと消えた遙に言われた通り、和はなんとか気持ちを落ち着かせようと

真つ赤なソファへと腰を下ろした。

『赤つて確か心理的に興奮作用があるんじゃないか。…あああもう。』

どうでもいいことを考えるな！と頭を抱える。

これだけお膳立てされてどうにかなつてしまうのは、正直非常に抵抗がある、というのが和の見解だった。

遙にしてみれば、自分の恋人はいまだそういう事が怖いのであつてまだまだ気持ちを追いついていないと感じているだろう。しかし実際問題、そういう事ではなかった。

和は今、自身のプライドと、遙の理性を天秤にかけて激しく揺れている。

ここまで仕組まれた策略にはまってしまったのはなんとも情けないが油断していた自分が結局は悪い。

ならば、せめて最後の抵抗としてなにもなかった、ということと終わりたい。

更に言ってしまうえば、和にとって今日という日に

初めて出来た恋人と初めてそういう事になるといっものはなんとも言い難い屈辱があった。

『クリスマスイヴに処女喪失とか、ベタすぎる…！気持ち悪い！！』

心の中でうわあああ、と悶絶しながらも

しかし心中を知った誰かからすれば

こんな事で遙を拒むのはあまりにも可哀想だ、と和に向かってたしなめるに違いないだろう。

それもわかっているから、彼女は悩んでいた。

もしも遙がなりふりかまわずそういう態度できたら、それでも自分は拒んで良いものなのか。

男性という生き物事情はなんとなくしかわからないが

今のこの状況下で特に遙のような人間が

理性を保つのは相当しんどいに違いない。

それを思ってしまうえば、和の心は揺れに揺れていた。

「…難しい顔だねえ。」

「うわー！！」

気が付けば目の前に遙の顔がある。

それに驚いた和が飛び上がれば、遙は笑って隣に腰掛けた。

「まだなにか悩んでるの？」

「え。」

「俺が我慢できるのかどうなのかとか？」

「あ、いやー…その。」

「前も言ったけど、和の気持ちを追いついてからでいいんだよ。

無理して俺に合わせてもらう必要ないんだから。」

「……………」

その言葉に、和の心はずきり、と痛んだ。

こんな下らないことを気にして、今日ずっと遙を拒み続けるのか。

優しく笑う自身の恋人を、和は直視できなかつた。

『ていうかもう、もっと前にいつそオツケーしてしまえば良かった

…！

ぶっちゃけ今日この状況じゃなきゃこんな悩んでないし…！』

身も蓋もない事を後悔しつつ、

しかしこんなくだらない事で悩む彼女の心中を知らない遙は

とてつもなく優しい手つきで和の頭を撫でる。

それに、和の身体がぴくり、とわずか震えた。

「…和、俺の事怖い？」

「！そんなわけないでしょう。」

「本当？」

「怖くないよ。」

遙がなおも言い募るので、和は俯いていた顔を上げ、遙と向かい合

う。

じ、とその顔を見据えれば、遙が熱っぽい瞳をこちらにむけていた。頭を撫でていた顔がするり、と頬に滑り、遙の顔が間近まで迫る。ほぼ無意識に、和はゆるゆると瞳を閉じた。

『ピー・ピー・ピー』

なにかを知らせる電子音が部屋全体に鳴り響き、驚いてふたりとも身体を揺らせば、一呼吸置いて遙が苦笑する。

「お風呂沸いたみたい。…じゃあ、俺先に入ってくるね。」
「う、うん。」

こくこくとうなずきながら頬を赤く染める和を遙はふ、と目を細めて空気だけで笑ってみせれば、先程のように頭を撫でて立ち上がった。

服が置いてある部屋へと一度ひっこんだ遙は、リビングに戻って浴室へとむかう。和はそれを見送って、しばらく呆然とすれば次にはばたり、とソファに倒れこんだ。

『流されそうになった…！』

顔に手を当てて、ソファに仰向けに寝そべったまま足をばたつかせる。

常でない状態がまた更に羞恥心をあおって、和はなぜこんな反応を示さねばなるまい！となんとか足を落ち着かせた。

「もう、なるようになれ、でいいのかなあ……。」

ぼつりと呟いた言葉は、果たしてやけくそなのか本心なのか。いずれにせよ複雑な感情を心の中でぐるぐると混ぜ込みながら、和は上体を起こして両足を抱え込んでいた。

「ぎ、なぎ、和！」

「……ん？」

身体を揺さぶられて和は目を覚ました。どうやら眠ってしまっていたらしい。

「ごじごじと目をこすれば、目の前にいる遙と目が合った。

「ごめん、寝ちゃってた？」

「……………」

「和泉君？」

あ、髪の毛濡れてるな、と心の中で思いつつ、和は無言の遙に首を傾げながら呼びかける。

「……………可愛すぎるだろっ。」

小さく呟かれた遥の言葉が和は聞き取れなくて再度呼びかけてみるも、顔をほんのり赤くした遥がぎくしゃくした笑顔を向けている。風呂上りだから顔が赤いのだろうか。

「和泉君、のぼせちゃったの？お水飲んだら？大丈夫？」
「うわっ！」

和がぺた、と遥の頬に触れると、それに驚いた遥が振り払って和から一步距離を取った。しかし遥以上に、彼の反応に和は驚愕して固まる。それにまずいと感じたのか遥は何事かを発しようとするが慌てて和はそれを制止した。

「や、ごめん、あまり触らないほうがいいんだよね？」
「相変わらず和泉君のスイッチはよくわからんけども。」

ばつが悪そうに頬をかきつつ、ごめんね、と言って和は遥が用意してくれたバスタオルを手にし、バッグから着替えを取って風呂場へと消えていった。

和の姿が見えなくなったところで、遥がため息を吐きソファへと沈み込む。

「…中学生かよ、俺は。」

額に手を当てたまま、なさけねえー、と呟きつつ遥は撃沈した。

「…ひとん家のお風呂って変な感じ。」

じろじろとながめつつ、和は改めて依子と彩を恐ろしいと感じる。いつも使っているシャンプーの旅行用ミニボトル、そして歯ブラシまでもが

その中に入っていたのだ。

まさしくお泊りセットといった風情のそれらを、

和は呆れを通り越して感心しつつ検分してしまった。

男性用のシャンプーを使うのは確かにちよつと抵抗があつたので和はありがたくそれを使わせてもらうことにした。

「でもここまで読まれてるってなんかなあ…。」

苦笑しつつ、浴槽へ身体をあずける和は、ぼんやりと出てからの事を考える。

おそらく、なにがきっかけでそうなるかはわからない。

そういう雰囲気になるかもしれないし、ならないかもしれない。

狡いと感じながらも、自ら積極的にしよう、などと言えないと思つた和は

結局先程の結論を採用することにした。

流れに身を任せる。

それでどうにかなってしまったら、まあいいか、と開き直る。

なんとか心が固まったので、和は勢いよく浴槽から立ち上がる。

ざん、と波が立ったお湯がいくらか外へとこぼれた。

「和泉くん、申し訳ないんだけどドライヤーをお借りしても…」

風呂から上がって顔を少し火照らせた和を遥がしばしながめていれば、反応が少し遅れる。

「あ、ああ、いいよ。洗面台のところにあるから。」
「そっか、ありがとう。」

その言葉に、しばし遥が考えたかと思えば、次には立ち上がって洗面台にあるドライヤーを和より早く持ち上げた。

「ねえ、和。」
「ん？」
「俺にやらせて。」

につこりと微笑む遥に、はあ？と和は首を傾げる。しかし言葉の意味を理解した和は特に拒む理由もなかったのでもいいよ、と了承した。

「じゃあここに座って。コンセントすぐそこにあるんだ。」
「はいはい、よろしく願います。」

いそいそと準備を始める遥がおかしくて、
噴出しそうになりながらもなんとか普通に声を発しつつ
和は赤いソファへと腰を下ろした。

背後からかちり、という音がすれば心地良い温風が首をかすめる。

「お、けっこう難しい。」

「人の髪を乾かすってあんまりないもんね。」

くすくすと笑いながら和が返事をする

遥が動いちゃだめー、と注意しながらドライヤーの熱をあてていく。

「熱くないですかー。」

「ないです…ってそれ言いたかったの、もしかして。」

「そういうわけじゃないけど。とりあえず言っておくべく場面じゃない？」

「まあわかんないけどもさ。」

しばらくそのまま和やかな雰囲気が続ぎ、

和はどこか安心して自分の気が付いた。

張り詰めて緊張した空気はどうしたって居心地が悪い。

遥も、もしかしてそれを読み取ってくれたのだろうか。

そんな事を考えているうちに、ドライヤーの音がぴたりと止まった。

背後でかちり、という音がしたのできつと終わったのだろうか。

「あー、気持ちよかった。ありがとう、和泉君。」

「どういたしまして。俺も楽しかったよ。」

くす、と笑って遥が洗面台へとドライヤーをしまいにいく。

和は立ち上がり台所へと歩いた。

「お水もらつてもいい？」

「いいよー。」

「和泉君は飲むー？」

「あ、ほしいかも。」

勝手にやっていいものか一瞬躊躇いつつも、

おうかがいをたてたのだからいいか、と思い直して

和は食器棚から適当なコップをふたつ取り出すと

水を汲んで戻つてきた遙に渡す。

お礼を言つた遙と向かい合いながらそのまま水をごくごく飲み込んだ。

お互いに喉がからからだったらしく、あっという間に飲み干してしまふ。

それがまたおかしかったのか、笑い合つて和が遙からコップを受け取れば

軽く洗つてきちんと拭いた後、所定の位置へとまたそれを戻した。

それをしばらく見守つていた遙が、微笑みながら和に手を差し出す意味がわからなかったがとりあえず和も同じように手を前に出してみると、

どうやらそれは正解だったらしい。

和が差し出した左手を遙が自身の右手で包み込めば

手をつないだ状態のまま、ふたりそろってソファへと戻った。

並んで腰を下ろしても、遙は手を離すことをしない。

和は心臓が飛び出すのではないかというくらいどきまぎしながらも表面上はなんとか平静を保とうとしていた。

今、遙はなにを考えているのだろう。

「和。」

静かな優しい遥の声に、和は無言で顔を遥のほうへとむける。遥も和のほうへと顔をむけて笑っていた。

「今、なに考えてる？」

その問いに、和はふ、と微笑んだ。

「和泉君が、今なに考えてるのかなあつて思ってた。」

和の言葉に、遥が一瞬目を丸くするが、次にはにっこりと笑う。ゆっくりと握られていた手を外して、遥がぴったりと和の横に寄り添った。

和の頬を撫でる遥の手はとても熱い。

どちらからともなく近づけられた顔は、

やがて自然な流れでお互いの唇へと導かれた。

「ん…」

小さく上がった和の声が合図であったように、

ゆっくりと啄ばむようだった遥の口付けがやがて深いものへと変わってゆく。

和もそれに応えるように慣れないながらもゆるゆると舌を遥へとさしだせば、

遥が熱をもってそれを自身の口内へと導く。

気が付けば遥の首に回された和の手を、遥はこれ以上ない程の喜びで意識していた。

和の背中を折れないようにしかし力強く抱きしめながら、溺れてしまったかのようにその唇を貪った。

やがてゆっくりと離された唇から、どちらのものかわからない荒い息遣いがもれる。

潤んだ瞳でみつめる和の顔を視界にうつしてしまえば、遥は理性が決壊するのを止められないと思った。

「……ベッドいごうか。」

遥が耳元で囁いた言葉はほぼ祈りにも似た願いだった。

ここでイエスと言ってくれたら、と卑怯にも彼はたぎる欲望をおさえきれない。

無言になった和に、ああやはり駄目なのか、と一瞬しほみそうになった心は、

しかしとてもゆっくり首を縦に動かした和の反応に途端膨れ上がった。

なんとかはやる心を落ち着かせようと、遥はにっこりと微笑めばもう何度目になるかわからないそれを和へとほどこす。

「ひゃっ！」

予告無しにお姫様抱っこをされた和は、驚いて間抜けな声をあげてしまった。

遥が頭上でくすくすと笑うので、それをじろり、と和は睨みつける。

「ごめんごめん、ただ可愛いなと思って。」

「…余裕だね和泉君。」

「そうみえる？」

苦笑して、ぎゅ、と抱き込まれた和の左耳がちょうど遙の心臓部分に当たる。

和は、その心音の速さに驚く。

「…和泉君も緊張してるの？」

「当たり前でしょう。そんなにひょうひょうとして見えた？」

「……うん、ごめん。」

少しおどけた口調でお互い笑い合えば、和はがちがちだった身体が幾分和らいだ。

きつと自分の心身を柔らかくしてくれたのだと思えばやはり自分よりは余裕があるのだろう、と和は感じた。

ゆっくりと寝室のドアが開かれ、和の頬が赤く染まる。

みえてきたベッドが異様に生々しくうつれば、

和の心を不安とも恐怖ともとれる感情が襲う。

ぎゅ、と遙の服の裾をつかめば、遙がそれに気付いた。

ゆっくりと壊れ物を扱うかのように和の身体をベッド淵へと座らせれば、

遙はそのまま跪いて和の顔を見上げた。

微笑みながら、ゆっくりと頬に触れる。

「和、やめる？」

遙の柔らかな言葉に、一瞬うなずきそうになる。しかし和は、ぶんぶんと首を横にふった。

「は、遙が、好きだから…やめない。」

小さく囁くように発した和の言葉は、遙の理性を完全にとっばらうてしまった。

そのままぎゅ、と和の身体を抱きしめれば、

耳元で遙がなるべく優しくするから、と囁いた。

和がもはや顔を真っ赤に染めながら無言でそれにつなずく。

部屋の明かりがひとつ落とされて、いちばんほのかな光だけが部屋全体を包んでいる。

遙と和は抱き合ってお互いに口付けを交わしながら、

この日同じ心のままに心身を愛しい恋人に渡しあった。

和と遙の奇妙な関係は、

いまや一般的な恋人同士のそれとなら変わりないのかと和は心で感じれば、

それも案外悪くはないかもしれない、と

人生でいちばんらしくないことを考えていたのであった。

第七十四話「恋人の形・その3」（後書き）

す、すいませーん！

一応R15なので、直接描写は避けました。

さんざん焦らしてこれって…悩んだんですけど結局orz

次の話には、冒頭で和の回想が入りますので

ダイジェスト版ではありますが多少そういう描写がございます。

（ダイジェストって・笑）苦手な方は次回お気をつけください。

今回は冒頭に注意書きつけたほうがいいでしょうか…？

あ、恋人〜シリーズは今回で終了です。

次回またよろしくお願い致します！

第七十五話「一夜明けて、そして。」（前書き）

冒頭部分に少し際どいR15表現がございます。

苦手な方はお気をつけくださいませ。

今後こういった表現は増えると思いますので、初回だけ注意書きをさせていただきます。

性表現が苦手な方は今後この物語を読み進めるのが難しくなってくると思いますのでご了承くださいますと恐縮です。

第七十五話「一夜明けて、そして。」

触れる手はどこまでも優しいのに、どこまでも熱かった。

『大丈夫だよ、そんなに緊張しないで。』

『だって恥ずかしい…』

『和、可愛い。全部見せて。』

熱に浮かされたその顔と声に、なんて綺麗な男だろうと思った。
ああ、このひとが好きなのだと実感したときには、
どうしてか涙がこぼれて。

『大丈夫だよ、なにも考えなくて、俺の事だけみてて。』

穏やかに微笑むその顔とは裏腹に、私をいじめるその指が
いつしか快感の声すら我慢するのを咎める彼が
ひどく残酷だと思ったのはなぜだろう。

羞恥さえ、快感に変えられてしまっていたからなのか。

『和、好き…愛してる。』

『遙…はるかあ……』

鼻にかかったその声は本当に自分が発しているかもわからない。
身体すべてを遙の指と舌が這い回って、きつと触れられていないと
ころなんてない。

恥ずかしいだとか、そんなに見ないでほしいとか、
言つたたび彼は「可愛い」と耳元で囁くばかりで。
ちっともその行為を止めてはくれない。

そのすべてが甘やかな毒をもたらして上手に私を駄目にすれば、

私の頭はまっしろになって、ただ施されるそれらを享受していた。そうして打たれた熱のあつさに目が眩んだのか、いつしか意識を手放した。

ひとつになった、という表現は、どこかふさわしくない気がした。きっと、その刹那、大切ななにかをあなたと交換し合ったのだと思う。

ああ、私は、彼と本当にまじわってしまっただんな。

「ん……」

小さく身じろぎした和は、あまりの気だるさに眉を顰めた。身体全体がとても重く感じる。

ついでいえば真ん中あたりに異物感を覚えて、和の頭は多少混乱した。

しかし何故、と上体を起こそうとした瞬間、

それを阻んだ原因を突き止めれば、和の思考はみるみる晴れていく。

「……………つつかオイ。」

昨夜の事を思い出してしばし頬を染めた和であったが、腰に絡まった遥の腕に小さくつつこみの声をあげた。

しかもテンションが妙なのか、

所謂お笑い芸人などがする例のアクションも右手でやっていた。ビシ！というツッコミ音がむなしく空を切れば、

部屋に訪れた静寂に今度は自身がつつこまれている気がしないでもなかった。

『シャワー浴びたい、お腹すいたからなんか食べたい。』

身体中がなにやらべたついているようで落ち着かない。

和はせめても裸で抱き合っている状況からは脱却したいと思えば熟睡する遥を起こさないように脱出を試みる。

回された腕の一本は和の身体の下にあるわけで、

起き上がらずに転がってベッドから抜け出せば恐らく気付かれない。問題は上から巻きつかれているほうの腕だ。慎重にどかさねばなるまい。

和はとにかくゆっくりゆっくりと、自身の気配を消していく。

元々そういう行動が得意である和は、なんとかベッドから抜け出す事に成功する。

『って私裸じゃん、着替え！』

ここでまごつけば遥が起きてしまうかもしれない。

焦った和はポストンバッグを抱えたまま浴室へと逃げ込んだ。

「えーと、昨日のパジャマと下着はとりあえず置いて、何気にバスタオル入ってるんだよね、助かった。替えの下着と、服…いいか、シャツと短パンで。てか装備充実してんなオイ。」

裸でぶつぶつと呟きながら、和は浴室へと入った。脱衣所にも鍵をかけたことを確認し、シャワーを浴びる。万が一遥が乱入したときのことを考えた措置である。

「一晩経って昨日のことは夢ではないか、などと思ったりするのではないかと考えていた和は、それがいかにありえないことであつたかを知った。名残というものはこれほど色濃くあるものなのか、と驚く。」

「腰痛いし、股痛いし、お腹もちよつとなんかあれだしなによりダるい。」

しかし激痛、という記憶がいちばん強く残るものかと思つたがそれも違つていた。

初めては痛い、というのが常のセオリーであるがまさかそれを塗り替えるほどの快楽を与えられてしまうとは思ひもよらず

和は少し反芻してしまった自身を呪つた。

『朝からなに考えてるんだ私は!!!』

そこで、ふと。

和は目の前の姿見へと視線をうつした。集中して物事を考えているとまわりがみえないのは彼女の癖だが、

今初めて気が付いた自身の身体の変化に驚愕し目を見開いた。

「ぎっ………!!」

叫びそうになった和は慌ててその口を噤めば、
おびただしい数の鬱血痕にしばし思考を停止する。

「あの性欲製造マシン、なにしてくれやがる……!!」

鬱血痕、所謂キスマーク。

上半身にはほぼその後が散らされ、
さらによくよく見てみれば、太腿付近にもそれらが散見している。
襟首の開いた服を着れば見えてしまうのではないか、という
際どい部分にもそれらが確認できて、和は愕然とした。

起きたらいのいちばんに抗議してやるわ、と思いつつ
和は浴室を出て身体を出れば服を着替える。

そうして脱衣所の鍵をかちり、と開けると棒立ちしている遙と出く
わした。

「うわあ！びっくりさせないでよ……!!」

「……なにしてるの？」

完全にふてくされている、といった風情で遙が和を睨む。

昨日と同じシャツに下は下着だけだ。寒くないのだろうか。

和も短パンを履いているので似たようなものといえばそうであるが。

「なにつて、シャワーを浴びてただけだ。」

「鍵閉めるなんてひどい！っていうか夢かと思って焦った!」

「え、ああ、それはごめん…。」

泣きつかん勢いで遙が和を抱きしめるので
和はよしよし、と頭を撫でてやる。

遙からすればやっと念願叶ってという心持ちなのだから
夢かと思っただという感想も決して大袈裟ではないだろう。

「起きたら第二ラウンド…シャワーしてる最中に突入…
ああ、お楽しみがすべて奪われた…。」

ぼそ、と呟かれた言葉に和は不穏なものを感じ取れば
即座に遙と距離を取った。

「無理だからね、今日は絶対に無理だからね!?
すっごいダルいし、なんか色々鈍く痛いし!」

「ええ…どうしても?」
「どうしても!」

ちえー、と口を尖らせながら不機嫌そうにしている遙をみて、
和は思い出した文句を口にする。

「それより和泉君!びっくりしたよ、鬱血痕だらけじゃない!」
「うつけつこん…?」

言葉がぴんとこなかったのだろう。

首を傾げてしばらく考えていた遙はやがてああ、と思い至った。

「ひよつとしてキスマークのこと?」

「ひよつとしなくてもそうだよ!」

「そんなにたくさんつけちゃったけ?」

どれ、と言いつつ遙が和のTシャツの裾をめくろうとしてくるので和はぎゃー！と悲鳴をあげて遙の手をはたいた。

「なに普通にめくろうとしてんの！」

「だって昨夜さんざんみたよ。」

「そういう問題じゃないっつーの。」

第一、部屋薄暗かったじゃん、明るい所で見られるのとか絶対嫌だ。

「

「えー、和お肌すべすべだしスタイル良いんだから

明るい所で観察したって絶対に大丈夫でしょ。」

「觀賞に耐えるか耐えないかの問題ではなく！」

大体、自分のがよっぽど綺麗なくせに何言っちゃってんの。」

「えー、和やらしい。」

「どの口がおっしゃいますの？」

にっこりと微笑んで和は遙の頬を力いっぱいいつねる。

それに遙が降参し謝罪をすれば、和は手を放してやる。

「それよりもさあ、お腹すかない？冷蔵庫ってなんかある？」

「あ、それなんだけど…、笹森家に置きっぱなしにした荷物が玄関先に置いてあった。これで財布も携帯も戻ってきたよ。」

その言葉に、和はぴくり、と眉を顰める。

「…広未だな。休日はよっぽどの事がない限り、7時には起きてるから

それまでに戻しておけて指示したんでしょう。…ったく。」

「じゃあ今日は寝坊になるの？今もう9時だもんね。」

「よっぽどの事が昨夜あったもので。」

「え、あはは。」

「何度も待つてと言いましたよね。優しくするとまああなた言いましたよね。」

「優しくはしたつもりなんだけど…途中でちよつと暴走したかも？」
目が泳ぎ始めた遙に和が呆れのため息を吐く。

「…もう疲れたしなにか作るのも嫌だ。すぐそこにコンビニあったよね？」

和泉君のおごりでごはんを買ってこよう！」

「あ、俺てきとうに買ってこようか？」

「いいよいっしょに行く。着替えよう、お互い。」

苦笑して申し出た和の言葉に遙は笑顔でうなずけば
部屋へと消えていく。

とりあえずコンビニに行くだけなので、

和は下はジーパン、

上にはVネックの灰色で黒いラインが一本入ったセーターを着る。

先程シャワーを浴びた際濡れないようにとしばったゴムをほどこき
学校にいる時のように斜め横へ結びなおした。

脱衣所から出てきた和をソファに腰を下ろしていた遙が
微笑んで迎える。

立ち上がって和の横に並んだ遙が、笑顔から一変真顔になり
なにかを凝視して固まった。

その様子にどうしたのかと和が和泉君？と声をかけると

遙は無言で和の髪ゴムをその髪からするり、と取り払った。

なぜそんなことをしたのか理由がわからずに和が疑問の視線を投げ

ると

遥が和の手を取って髪ゴムを渡してやる。

そうして小さくごめん、と呟いけば、

和のうなじに人差し指をあてて数回とんとん、とつついた。

「ここにも付いてるから、髪おろしておいたほうがいい。」

「は……？」

「キスマーク。」

「……………え!!?!？」

あまりの事実には驚愕し和が声を高くして叫ぶ。

慌ててバッグからマフラーを取り出すと、和はぐるぐると首に巻きつけた。

無言で遥をじろり、と睨むと玄関まで歩き出した。

遥は和の後ろを慌てて追う。

ずっと不機嫌そうに眉を寄せる和だったが

遥はごめんね、と何度も繰り返すのでいつしか和は怒りを解いた。

みえるところに痕を付けるのならもう二度としない、という和の言葉に

遥は力強く絶対しない!と約束した。

「はー、ごちそうさま。」

「和けっごう食べたねえ。」

「すっごいお腹すいてたんだもん。」

おにぎりふたつとサンドイッチを平らげた和に

遥は楽しそうな笑みを浮かべた。

「ごめんね、そんなに激しかった?」

「……自覚あるんなら手加減してよね工口魔人。」
「和限定なんだから一身に引き受けてくれてもいいじゃないか。」
「いや、なにその理屈。」

そしてなんだその変化球、と和がつっこめば遙は声を上げて笑った。

食後のお茶を入れようと和が立ち上がるうとすれば、
遙がまだ疲れてるでしょ、とそれを止めた。

やかんを手を持ったのでどうやら遙が入れてくれるらしい。

和は素直に礼を言つて椅子に座りなおした。

ダイニングテーブルの上にはコンビ二袋が置いてある。

先程消化したものは別に、お菓子をいくつか買ってきたのだ。

「…ねえ和。」

「んー？」

やかんを火にかけて換気扇を回した遙が和に視線をやったまま話しかける。

このマンションは対面式のキッチンだ。

「元旦から休み明けの直前まで田舎に帰省するって本当？」

「……誰から訊いた？」

「笹森家の皆様から。」

「ああ、メル友だもんね、そりゃそうか。」

内心しまった、と思ったが顔には出さなかった。

休みに入ってから話そうとは思っていたことなので隠すつもりもないが

いかんせん今はタイミングが最悪だ、と和は考えていた。

こうして身体を重ねてしまった今、
遙がどういう頻度で自身を求めてくるかはわからないが
直後にも次をねだってくるのだから、そう長い周期は待ってくれな
いだろう。

そして今までの彼の行動パターンを加味すれば
和が達した結論はまさしく酷使労働そのものであった。

『…離れてる間のぶんも抱くとか言いかねないんだよこの男。』

内心頭を抱えつつも、しかし顔には出す事無く
和は頬杖をつきながら遙をみつめる。

さて、どうしたものだろうか。

この状況は些か分が悪い、と和は思う。
なにせ逃げ場がないのだ。

例えばこれが家に居る時ならば拒む事もできよう。
しかしここは遙の一人暮らしの部屋なのだ。ある程度の無茶は出来
てしまう。

『まあ、必ずしもそう出るとは限らないけど。』

とりあえず様子をつかがいながらも和は頭を巡らしてゆく。

「毎年恒例なんだよね、夏休みもしばらく居なかった時期あったで
しょ。」

「うん。夏休みと冬休みは毎年そうなんだ?」

「そ、親戚一同が一斉にお屋敷に集まるわけよ。なんつうかある種
イベント?」

「だってね。なんかすごいな想像つかない。」

「まあ別にそんなかたつくるしいもんでもないよ。けっこう強制参加みたいになっちゃってはいるけれども。」

かちやかちやと手際よくお茶を入れる音がして

広がる緑茶の香りに和が目を細めた。

遥はお茶の入れ方がとてもうまいのである。

マグカップをふたつ遥がことり、と置いてそのうちのひとつを和に差し出した。

相変わらず湯呑みは置いていないらしい。

ありがとう、とお礼を言っ和は一口含んだ。

「高明さんと依子さんが、一緒に行く？って言ってくれたんだけど

……。」

「は？それなんてサーオー？」

夏じゃないけど、と一言付け足す。

『いや、ついでに惚れてるお兄さんも居なければ偽装彼氏でもないけどね。』

遥がしばし首を傾げれば、

ああ、そういえば少し前にテレビでやってたよねと声をあげる。和としてはあれは是非とも映画館で観てほしい映画のひとつだ。しかし今言いたいのはそういうことではなかった。

「それは無理。やめて。駄目。」

「……なんで？」

「からかわれておもちやの対象にされるからに決まってるでしょ。」

あと、和泉君も嫌な気分になるだけだろうからやめときな。」

「それ、ふたりからも言われた。あまりオススメはしないけどって。」

「親戚が集まるとさあ、嗜好きが終結するみたいな強烈な破壊力を生むの。」

下世話なお話がみんな大好物。」

「大好物。」

「そう、大好きではなく大好物。」

人差し指をぴ、と立てながら、和が遙を説き伏せる。

「悪気がない、大人、っていうのもあってね。」

残酷な事をけっこうぽんぽん言うのよ。」

子どもをお説教してやってるんだっていう免罪符が奴らにはあるからさ。」

「単体だとそうそう悪いひとたちでもないんだけどね。」

「…それって例えばどんな？」

お茶を飲む和の眉間に皺が寄る。

こく、と飲み込めば下らない事だよ、と吐き捨てるように呟いた。

「多分、私が遊ばれてるとか騙されてるとか」

和泉君にはもつと綺麗な相手いくらでもいるんだろうとか」

「一体和ちゃんは何番目の彼女なんだいとか、そんなような事かな。」

「あ、彩ちゃんならわかるんだけどなあとかも言われそうだねえ。」

「…彩さんがどうして出てくるの？」

「昔からお姉ちゃんは親戚一同のお気に入りで」

私は可愛くないって言われ続けてたの。まあ事実だから良いんだけど。」

「けっこうあんまりにも繰り返し聞かされるとさー、」

たまにすごく残酷な気分にもなるわけよ、積み重なるとね。」

「……くだらないことでも？」

「そう、くだらないことでも。」

「だから俺は巻き込みたくない、と。」

「ていうか私が余計に被害を受けるから嫌かなー。」

そう言っただけ苦笑する和に、遥はため息を吐いた。

「…わかった。ついて行くのはやめておくよ。」

「うん、そうしたほうがいいよ。」

「でも毎日電話するから。絶対に出て。」

「ええええー…。」

渋い顔をする和に、遥がにっこりと微笑む。

「彩さんから聞いたんだけど、

歳の近い男の子がけっこうな人数いるらしいねえ？」

「電話毎日します。」

「うん、そうじゃないと俺は絶対に行かせないからよろしくね？」

「別に今までなにもなかったんだからこれからだってないよ。」

「俺が嫉妬の権化っていうのはもうわかってるでしょう。」

「うっ…。」

遥が和の頭を撫でつつ微笑む。

そうしてお茶を飲み干せば、遥は立ち上がって和の手を取る。

和は首を傾げつつも黙って従えば、ソファへと歩いて導かれた。

隣り合って座るのかと思えば、

遥が両足を開いてこの隙間に座りなさい、と指差す。

少し気恥ずかしく感じながらも逆らうとこの流れは危ない、と判断しゆっくりとそこへ腰を下ろした。

素早く、遙の腕が和の身体を閉じ込める。

「…彩さんは確かに客観的に見て可愛いと思うよ。」
「?うん……?」

突然紡がれた遙の言葉の趣旨がわからずに、それでも和は一応声を上げて返事をした。

「でも、和だってとっても可愛い。」
「!」

「ぶっちゃけ、俺には和しか可愛いとか思えないんだけど。客観視できる冷静さは持つてるから。和も知ってるでしょ? 可愛い子には告白もナンパもされない。」

「う、うん…でもあの、親戚のひとたちが言うのはきくと中身の話で…」

「だったら尚更だよ。和は可愛い。」

俺はそのせいでいつもどうにかなっちゃいそうになるよ。」

「またまたあ。」

「嘘じゃない。昨日さんざん証明したでしょう?」

頭上からの爆弾発言に和は顔を赤くする。

遙は無言になった和にそれを察したのか、

和の両足を持ち上げればぐい、と強引に横へ方向転換させる。

あまりの事にうあ!?!と間抜けな悲鳴を上げつつも、

視線が合った遙がなんとも強い双眸でこちらを見つめていたので肩を竦ませた。

「…やっぱり可愛いなあ。ほんとどうしよう。」
「いや、あの、」

会話はもうほとんど成立することなく気が付けば和は遙に唇を塞がれていた。

啄ばむように優しく施されるそれは気持ちが良い、和は身体が浮いているような錯覚を感じる。

しかしそれでもこれ以上はまずい、と理性が警鐘を鳴らせば和はやんわりと遙の胸を押した。

「和、好きだよ。」

「…うん、ありがとう。私も好きだよ。」

にっこりと微笑んで応えた和を、遙はぎゅ、と抱きしめる。

本当ならばこのまま押し倒してしまいたい、と遙は思ったが彼女の少しだるそうな反応をみれば、なんとか自分の欲望をせき止めた。

「和、送っていくよ。何時ごろ帰る？」

「ん？そうだね…あともう少ししたら。」

「そっ？」

「うん。」

結局、予測していた事態はその場では免れた。

それから二日間、和は協力したすべての人間へ報復する事を忘れなかった。

実花は妹のように可愛がっていた存在だがそこはそれ。

笹森和のモットーは通常の三倍返し、である。

それぞれの弱点を突くべし、というのも彼女のいつもの手段だ。

どうやってそれを成し遂げたのかは彼女にしかわからない。

しかし笹森和はやつてのけた。

佐山繁氏と個人的な付き合いのある女性のひとりと

街中を歩いている所をばつちり実花に目撃させ、

また松永実花嬢がクラスメイトの男子生徒と偶然街中で出くわした場面を

佐山繁氏に目撃させた。

現在ふたりは微妙に距離を置きつつ相手を探り中である。

笹森高明氏は仕事上の凜々しさからか既婚者であるにも関わらず複数の女子社員から告白をされたり言い寄りされたりする日々だ。

しかし妻である笹森依子さんはそれを知っている。

知った上で夫の浮気を疑う事はないわけであるが、それでも嫉妬は割とするほう。

家庭環境を円滑にする為にも、そういう痕跡を高明氏は一切家へと持ち帰らない。

しかしどうしたことが。

ある日、笹森家のダイニングテーブルに、一通のメモ用紙が置かれ

ていた。

そこにはこう記してある。

『この間のお返事を聞かせてください 祥子』

これを依子さんがまず発見し、鬼の形相で高明氏へと突き出した。

家庭内は戦場と化していたが、

そこにまた火に油のような言葉を笹森和嬢が投げかけるので、

笹森家の夫婦戦争はもつれにもつれたのであった。

最後に自身の姉である彩。これは簡単だ。

笹森彩嬢は帰ってくるなりにつこりと妹に微笑まれ、一枚の紙切れを渡された。

『しばらく口をききたくない。』

笹森彩嬢がそれからしばらく必死で妹のご機嫌取りをしたのは言うまでもない。

「…で、今回はどんなブツう？」

和がなんとも嫌な笑いをたたえつつ、手を前に突き出す。目の前にいる男はあ、と小さく息を吐いた。

「今回はかなり必死だった。なにせ一番握られたくない弱味をお前に握られているからな。」

「塩ちゃん真つ直ぐだもんねえ、かわいいよねえ？」

「…ったく、ほれ。」

眉間に皺を寄せる広末が手にしたものは、ひとつのCDアルバムだった。

「こ、これは…!!」

「デビュー前、売られた枚数わずか2000、完全生産限定ミニアルバム。」

ネットオークションで破格の値段が付いている今やプレミアム商品だ。」

「まさかこんなものを持つてくるとは!!さすが広末、恐ろしい子！」

「ふ、対価を考えれば当然。等価交換が原則だろう。」

「どこの錬金術師だ。」

「それが出来れば苦勞もなかったんだけどな。」

久しぶりにそのテの冗談を言って感じる手応えを和は喜びつつ与えられたものの価値に震えていた。

「塩ちゃんのごことは、これからもちろんと監視してあげるからね。」

「……ああ、期待してるよ。」

こんなふたりに外堀を埋められてしまったのは
恐らくどこにも逃げ場がないであろう事を、まったくこの件に関係
なかった

塩澤嬢は知る由もなかった。

ともあれ、最終的に和が施したお仕置きはきちんと良い形で収まり、
それぞれが前よりも絆を深める結果になった。

そうして笹森和という人間の恐ろしさを改めて感じるのであった。

第七十五話「一夜明けて、そして。」（後書き）

幕間のお話でございましたー。

このあとに今度こそ新シリーズが始まります！が、その前にアンケートの結果をブログにて発表させていただきました。もしよろしければご覧ください。

ご協力いただいた読者の皆様、本当にありがとうございます！

第七十六話「一部に特化して」盲目的な彼女・その1」（前書き）

新シリーズです、お待たせしました！

第七十六話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その1」

「あれ、ブックカバーなんて持ってた？」

新幹線に乗っている間の時間は、空間に強制的に閉じ込められる時間だが

和はそんな時間がむしろ好きだ。

趣味の読書をいくらしていても咎められることはないし、

なによりもこの時間を限定されている特殊な空間では

集中力がいつもよりも増す感覚があるし、

読解力が高くなったと錯覚すらしてしまいそうになるほどだ。

そんな彼女であるから、

長旅の時に持つて行く本を選ぶのには余念がない。

数ある家の本棚から持ち出されたいくつかの文庫本は、

和にとつての選抜チームのようなものだった。

そして今。お気に入りの中の一冊をほくほく顔で和が取り出せば向かいの席に腰を下ろしていた彩がその変化に気が付いた。

いつもは、特に本を読む時はカバーをすることがない和が

今日に限って布製のそれをあしらった本を持っていたので

どうしてなのか彩は疑問を抱いたのだ。

藍色の中にもぼつかりと浮かび上がっている円と、

その隣に小さくぼつ、ぼつ、と打たれた点々がふたつ。

それは表紙側に描かれていて、

段々と斜め下に行く如に円の端っこが欠けていった。

折り返し地点になるとまたそれは徐々に上へと上がっていくが、

上がっていく裏表紙側の円は欠ける事なく綺麗な円のままだった。

そしてその隣にはまたふたつのなにかが形作られて寄り添っている。その形から推測すると、恐らく雲だと思われる。

子どもが落書きしたかのような簡略化したそれが、裏表紙側の円に寄り添ってふたつ描かれているのでこれはひよつとすると太陽だろうか。

彩はまじまじとそれをみつめて、可愛いね、と呟いた。

和はそれを受けてにつこりと微笑めば、カバーを指して説明をする。

「なんかね、表側のが月と星で、裏側のが太陽と雲らしいよ。普通、表を太陽にするんじゃないの？って訊いたら本を読む時って夜のが多いと思ったら

夜から始まるほうが自然なんだと思っただって言った。」

「え、それ手作りなの？」

「オーダーメイドだって。」

「えーじゃあ世界に一つのブックカバー。」

「らしいよ。ネットとかで簡単に注文できるらしいから。」

「ふうん…。」

誰の、とは言われなくとも、

彩にはなんとなく渡した人間が誰であるか想像がついた。

指輪など、アクセサリ類を安易に渡さないところがまた小憎らしい、と

彩は心の中でなんとなく嫉妬の炎を燃やし始めていた。

これは彩の予想でしかないが、恐らく和に指輪やネックレスを贈っても

彼女は身に着けるのを嫌うだろう。

そっぴいなんとも不思議な女の子なのだ。

なにも言わずに禍々しいオーラを放ちつつ、口元だけで何故か笑みを作る彩を

和は視界に入れつつも、しかし話しかけたりはしなかった。

なんとなく今声をかけると厄介な方面へ行きそうだと察知したからである。

姉の事はとりあえずそっとしておこうと心の中で呟いて

和は手に持ったブックカバーへと視線をやる。

家に帰り、和の復讐が綺麗に完了した二日後の夜、遥から電話をもらった和は

次の日に彼の家を訪れた。

一度そうなったからなのか、和はどこか開き直っていたところがありもう何かを気負う必要もないと考えていたので

そのときの彼女は警戒心はほぼゼロ、完全に油断しているという状態だった。

訪問するなり渡されたそれに、和は戸惑う。

遥が持っているのは綺麗に包装されたなにかで、

それはどう考えても恋人へのクリスマスプレゼントであると推察さ

れた。

「え？ いらないよ、そんなの！」

「和はこの前、俺に贈り物をくれたでしょう？」

だからそのお礼だと思ってくれればいいよ。」

「それじゃあ、お礼のお礼になっちゃっじゃん！」

「日本人にはありがちな無限ループだよねえ。」

ふふ、と笑いながら答える遙に、和はどうしたものかと頭を抱えた。

この雰囲気は彼はまったくもって人の話を聞かないということ、和はよく知っていた。

「たいしたものじゃないから、受け取ってくれてもいいでしょ？」

「でもさ……。」

「これは俺が和の事を考えながら選んだものなんだよ？」

だったら和がもらってくれなきゃ行き場がなくなっちゃっよよ。」

「……………」

「そんなに気にしなくても、お返しはたっぷりもらっから。」

そう言っつてにつこり笑う遙に、和は背筋がぞつとした。

いやいや、まさか。

そもそもそれが見返りになるとは思えない。

しかし彼ならそう言っつても不思議ではない。

頭の中で葛藤しつつも、手元にある贈り物を見た後、

和はそろり、と遙に目を向ける。

「お返しっつてさあ、『和の身体をたくさんもらっから』とか
さすがに言っつたりしないよ、ね……………」

言葉尻がどんどん小さくなっつたのは、

目の前に立つ遙がとてつもなくいい笑顔でこちらをみつめているからだ。

穏やかにうつるその表情はしかしその双眸が既に獐猛な獣のそれと化している。

激しさと穏やかさを同居させる表情なんて作れる人間がいたのか。頭の中で変な所に感心しつつ、和は目を見開いて固まっていた。

「やーっぱり和はそのへんの勘が良いねえ。

まあなんだかんだ理由付けて結局たくさん抱くけどね。」

「いや、さらつとそういうことを言わないでください。」

「だってねえ？あの夜、あんなに葛藤してたのって

その日がクリスマスイヴだったからなんだってね？」

「え。」

遙の言葉に、和は身体をびくん、と揺らした。

確信を持って伝えられたその言葉は、

言い逃れなんてさせないという響きが感じられ

油断していた事もあってか和は取り繕う事が出来なかった。

「まさかそんなくんだりない理由であそこまで焦らされたとはね。

しかもその前から別に心の準備は出来てたなんてさ、

俺はどれくらいタイムロスしちゃったのか具体的に訊きたいなあ。」

「え、え、え。」

じりじりと詰められる間合いの意味がわかっているし

遙の言葉の意味もわかっているが、

何故それを知っているのかわからない。

家族の誰かが話したのだろうか。

しかし、そんな心のうちまでわかりやすく暴露した覚えはない。

ダイニングテーブルを背に、遙が和を追い詰める。
なんとか身体を思い切り反らして遙の身体が密着しないようにしていたが
あっさりと限界がやってきた。

遙がとん、と和の身体を軽く押せば、和はテーブルに乗り上げてしまい

あっさりとテーブルに縫いとめられてしまったのだ。

正直、こんなところで押し倒される経験など絶対に一生ないと思っ
ていた和は

身体中から変な汗が噴き出るのを止められずにいた。

遙が至近距離で和をとらえたまま、

和の懐にあったプレゼントを椅子へと置き、

その隙に抜け出そうと思っていた彼女はしかし頭上で両腕を一纏めに
されてしまい

まったく身体を動かせない状態だった。

「…やっぱりそれだけ焦るって事は凶星なんだね。」

「え!!!?」

「情報源がなんなのかに気を取られてたでしよう?」

嘘を吐く暇もないくらいに動揺しちゃったみたいだねえ。

…あそこうやって迫るとまだまだ弱いね和は。可愛い。」

ちゅ、と軽いキスを施され、和は顔を真っ赤に染め上げる。
相変わらずこの男の吐く言葉は悉く甘い。

砂を吐いてもおかしくはないだろうと和は皮肉ってやりたかったが

この表現は漫画をあまり読まない彼に果たして伝わるのだろうか、と
迷走する思考はなんともあさってな事を考えていた。

「…何を考えてるの？」

「え？すごいくだらないこと。」

「ふーん、余裕だねえ。」

にやにやと笑う遙に無表情で和は答えてみるが余裕なのはその表情だけだ。

和の頭の中では警報機がけたたましく鳴り響く。

しかし打開策がまったく思い浮かばずに、和の思考は虚しく空転するだけである。

「まあ、いいや。こっちで勝手に取り戻させてもらっよ。」

「ひゃんっ！」

耳を軽く？まれて、和が悲鳴とも嬌声ともつかない音をその口から発する。

遙はちゅ、とそのまま耳に口付けて囁いた。

「広未君から伝言。今回の等価交換はこの事態も含めて、だそっだ

よ。」

「！…！！」

ネットオークションでかなりの高額がついているCDアルバム…。その価値を考えれば、和は広未にそれ以上のなにかを求める気にはならなかった。ならなかったが。

『小さい嫌がらせをネチネチとしてくれる…！』

恐らく広未もそれくらいは想定済みであろう。

そんなことを頭の中で考えていれば、和は遙の行動に反応する速度が遅れる。

ぐい、と両腕をつかまれて起こされたかと思うと、勢い余って遙の腕の中へとすっぽりと収まってしまふ。すると和の視界が急に背が伸びたかのように高くなつた。

ひえ、と悲鳴を上げれば、真下で遙が睨んでいる。

子どもを抱えるかのように横抱きにされたのかと気が付いて和は次の遙の行動を理解すれば暴れようかと身構えた。

「…押し倒してる時に他の男の事なんて考えるんじゃない。」
「！」

「和のぜんぶを隙間なく俺で埋め尽くしてあげるからね。」

「い、和泉君、広未は男にはいらな」

「わかつてないなあ。ああいう状況で」

目の前の恋人以外に思いを馳せること自体が嫌なんじゃないか。」

「だったらはじめっからそういえばい…わっ！」

会話している内に、とつくに遙の部屋へと移動していたらしく多少乱暴に和はベッドへと放り出された。

「生物学上、男だったらたとえ高明さんだとしても

あの状況下なら尚の事気に入らないのは事実だからねえ。」

「なにを言つて…ってちよつと、和泉君！」

「和、もう観念してくれないかな。出来る限り優しくしてあげたいのに」

俺に乱暴なことさせないで？」

「なんで私が悪いみたいに言うわけ！？」

怒鳴るように和が声を荒げれば、遙はす、と目を細める。

「俺がどれだけ苦しんだかくらい、和は知ってるはずだよな？」

静かな、淡々としたその声が恐ろしい。

しかもまずいことに和には反論の余地がない。

彼の葛藤を十二分に理解していたと思うからこそ、

和はそれ以上、抵抗する気がおきなかった。

しばし逡巡して、和はゆっくりと口を開けば頬を赤く染めつつ

和はぼそりと呟く。

「…お手柔らかにお願いします。」

その言葉が、遥の無駄なスイッチを押すはめになったことに和は気付かない。

可愛い、と小さく呟いた遥の必死な平静はその言葉と共に
すっかり崩れ去ってしまったのだった。

「栞も、買ったの？あとこの前みた携帯電話にもストラップ付いてたわね。」

「…お姉ちゃん、目ざといね。」

遙いわく、本に夢中になっっている合間にも自分の事を考えてほしいらしい。

そうして強制的に約束した

田舎に行っている間毎日欠かさずに電話をするというものもストラップをプレゼントすれば

遙の気持ちが伝わって忘れないうから、と彼は笑っていた。

『気持ち…というか怨念ぽいけどね。』

苦笑しながらも栞とブックカバーという

なんとなく梓にアドバイスした託斗への贈り物とかぶったのが和はどこか嬉しく思った。

本の虫である自分のことを考えてくれたからこそ、

遙はこういう贈り物をしてくれたのだろう。

栞は、黒猫が毛糸玉にじゃれている姿をそのまま金属で模ったもので何故なのかと問えば、遙にとって和は動物に喩えると猫のようだからだという。

やっと懐いてくれたと確信したと思えば、気まぐれにどこかへ行ってしまふ。

遙にとって和はそんな存在らしく、それには苦笑してしまつた。

『ストラップはストラップでまた面白いんだなー。』

それはミニチュアのコーヒーカップで、カップの横には袋に入ったコーヒー豆とスプーンが一緒にぶら下がっていた。

和が好んでよくコーヒを飲むからこれを選んでくれたのだろう。

変に可愛らしすぎないレトロなデザインと併せて

和はとても気に入っていた。

しかし改めて、遥が名実共にモテる男だと和は感じざるを得なかった。

こんなに特殊な自分の好みを無理なくおさえたそれらはなにもかもがぬかりなく、余裕すら感じられる。

和は、遥が見た目だけであれだけの女性の心を掴んでいるわけではないという事実に変に感動してしまっていた。

彼は単なる女性ホイホイではない。稀代の女性ホイホイだ。そんな彼が一生自分だけだと公言して憚らないのがまた和になんともいえない感覚を覚えさせた。

贈り物の数々が、まんまと遥の策略通りの働きをみせたことに和は悔しくもどこか嬉しかった。

会えない時のがむしる彼で頭がいっぱいになりそうである。

和は小さくため息を吐いて、

今度こそ本を読もうとブックカバーのかかるそれに手をかけた。

「…ぎ、和！もう着くよ。」

「え！相変わらず早いねえ…。」

「和は本当に集中すると周りがみえないんだから。」

「あはは。」

和と彩は、そろって荷物を抱えながら駅へと降り立つ。

高明と依子は、高明の仕事の関係上いつもふたりより滞在期間が短い。

大きくなってからは、家族揃ってではなく先に姉妹だけで田舎へ向かうのが常になっていた。

「今回のお迎えは誰だろう？…去年は誰が来てくれたっけ？」

彩が駅からきよきよと辺りを見回す。

田舎の屋敷には車が何台か置いてあり、いつもそれに乗って誰かが駅まで迎えに来てくれるのが通例だ。

毎年集まる人数は増えたり減ったりしてはいるが

世帯数でいうと大体、二桁いくかないかのギリギリになる。

忙しければそれこそ欠席する人間もいるし、

夏か冬のどちらかだけ出席の家族も多い。

一同すべてが集まればそれこそかなりの人数になるので屋敷といえど収まりきるのはわからなかった。

和は彩の質問に記憶を手繰り寄せながら答える。

「えーと、確かもう免許持ってる人も増えたからって

おじさんおばさんじゃなくて始君めじろとかあたりが。

夏なつの時は真衣まゐちゃんだったよ。」

「ああ、そうだった。今日もそうだといいねえ。」

そんな会話を交わしていると、少し遠くで名前を呼ぶ声が聞こえた。

「彩ちゃん！和ちゃん！久しぶり〜！！」

その声に振り向けば、彩は一瞬顔を顰める。

手を振るその男の存在を彩が少なからず悪感情を抱いている事を

和はよく知っていた。

そしてその理由が、彼に罪のないものである事も。

爽やかな好青年は、彩と同じ年の大学二年生である後藤進ごとうすすむだった。

後藤家と笹森家の住む地は、実はそれほど離れてはいない。

それでも電車で40分ほどはかかる距離ではあるが。

端的に言ってしまうと、彼は彩にかなり惚れ込んでいる。

引き合いに出してしまうのが難であるが、

遥ほどの狂愛、とってしまうほどの執着はない。

しかし、控えめで心優しい好青年である彼はとてつもなく打たれ強い。

殴っても殴っても起き上がってくるボクサーのようだ。

和は、目の前で彩が辛辣に彼を振ったシーンを何度も目撃していて

それでも後藤は嫌いになれないんだ、ごめんね、と笑う。

親戚連中によく告白をされていた彩は、

和に優しくない男は大嫌いだと一刀両断していた。

軒並みノックアウトした男連中のなかで、

いまだ彩を好きだとおおっぴらに公言するのは彼くらいのものなのである。

はつきりいって、和は彩が後藤をこれほどまでに嫌う理由がわからない。

正直、彩と後藤はお似合いであると和は思っていた。

普段の行いがどこか頼りない彩は、芯はしっかりしていつつもパニックになってしまつと周りが見えなくなる事がままある。

そんなとき、穏やかで冷静に笑う後藤のような男はきつと彩にびつたりだと和は思う。

しかし彩いわく、彼はどうしても駄目らしい。

理由を訊いてもなかなか言ってくれないので、

和は後藤に協力したくともそれを知らない限り手の施しようがなかった。

特に和をけなしたりするような男でもないしむしろ優しく接してくれる。

シスコンである彩の事もよく理解しているから申し分ないのに。本当に彩はどうして彼をそう毛嫌いするのだろうか。

「彩ちゃん、和ちゃん、長旅お疲れ様。」

「進君も。車でお迎えありがとう。」

そういつてにつこりと笑い合う和と進を一瞥しつつ、彩は無言で車へと向かう。

「あ、彩ちゃん！荷物持つよ」

「私のはいいから、和のを持ってあげて。」

「ちよつと、お姉ちゃん！ごめんね、進君……」

申し訳なさそうに和が眉を下げると

進はにつこりと微笑んで和の頭をぽんぽん、と叩いた。
気にしなくていいよ、と顔が言っている。

「ちょっと！気安く和に触らないで！！」

少し前を歩いていたはずの彩が、荷物を置いて
身体だけでこちらに駆け出すと進の手をはたいた。

いつもの事ではあるが、和はやれやれ、とため息を吐く。

「…彩ちゃん、妬いてるの？」

「な、馬鹿言わないで！もう和のはいいから私の荷物運んでよ！」

「はい、喜んで。」

「進君、居酒屋店員みたいだよ。」

「和ちゃん、未成年なのによく知ってるね？」

「別に行ったことあるわけじゃないよ、知識としてあるだけで。」

思わずつつこんだ和が逆につっこまれてしまい

しかしそういう返しも嫌いではない和は笑って答えた。

それに進も声をあげて笑う。

しかし、と和は思う。

このふたりのやりとりは、いつかどこかで見た光景のような。

「……………あ。」

そこでぴんとくる。

付き合う前の遙とのやり取りが、確かこんな感じであった、と。

『なんか…プレゼントがなくても』

このふたり見てれば嫌でも和泉君のこと考えちゃうかも。』

思わぬ伏兵に、和は小さく苦笑した。

荷物をトランクに積んだ進が、小走りでこちらに駆け寄ってくる。どうやら和の荷物も運んでくれるようだ。

なんとなく申し訳なくなってしまう、和も少し走った。それに気付いた進は苦笑する。

「和ちゃん、こういう時は男を使っていんだよ？」

昔から本当に小さいところでも遠慮しちゃうんだから。素直に甘えてくれたほうがお兄さんは嬉しいな。」

その言葉に、和はふむ、と心の中で唱えればにっこりと微笑んだ。

「彼氏には甘えてるから大丈夫だよ、ありがとう進君。」

「和!!」「え!?!」

彩の声と進の声は、ほぼ同時に叫ばれた。

一瞬耳がきいん、となったが気にすることもなく

和は車の後ろまで辿り着くとトランクへと荷物を積んでゆく。

「あれ?誰か乗ってる?」

トランクを閉めた時、リアウインドウ越しに何者かの頭が和の視界にうつる。

その言葉になにかがぴんときたらしく、彩は勢い良くドアを開けた。

「!やっぱり、雄大^{ゆうだい}!!」

叫んだ声でその主の正体がわかると、和は心の中で雄大か、と唱え

た。
ふと気が付けば、横に進が並んでいる。

「ねえ、和ちゃん。彼氏出来たの？」

「うん。自分でもびっくりしたけどできたよ。」

あ、他の人には言わないでくれない？うるさそうだし。」

「確かに。今回は斉藤一家が居るから話さないほうがいいかもな。」

「げ、まじですか。」

「まじまじ。あそこは夫婦揃って噂好きだよなあ。」

「…ねえ、進君。」

「ん？」

「私に恋人ができたことで、進君の恋がちょっとは希望みえてきたかな？」

「ちょっとどころじゃなくなかなり。」

お礼言うのも変だけどありがとう、和ちゃん。」

「応援するよ、頑張ってるね！」

「うん！」

ふたりして握りこぶしを作っていると、

彩が中の人間と口論になっているのがわかって和はため息を吐いた。

「ちょっと彩ちゃん、着いた早々に怒ってばかりなのは良くないよ。」

「和、だって雄大が前に移動しろって言っても

面倒臭いとか理由つけてどかないのよ！」

「雄大の隣が嫌ならお姉ちゃんは前ね、はいのいた、のいた。」

「え、ちよ、和、駄目よ！だったら私が真ん中座るから

和はその隣に」

「なに言ってるの、狭いからやだよ。」

わがまま言っていないで乗って、早く。」

狼狽する彩を押しつけて、和はさっさと後部座席へと乗り込む。迎いの車は所謂コンパクトカーで、無理をすれば後ろに三人乗れない事はないが、真ん中が苦しい。助手席にひとり乗るのが常だろう。

助手席側のドアを、どうぞ、とにっこり笑って後藤が控えている。彩は数秒ためらったものの、結局は渋々前におさまった。そのまま後藤が扉を閉めて、運転席へと乗り込む。

和は、ふう、と息を吐いて、
いまだ挨拶が済んでいない親戚へと顔を向けた。

しかし後藤も目の前の彼も、親戚といっても両親いわく
けっこう遠いらしい。

正直、血がどこからどこでつながっているのやら、である。
そんな他人なのかそうでないのかよくわからない隣の男を視界にい
れて、

和はにっこりと微笑んだ。

「久しぶりだね、雄大。ていつても夏にも会ったけど。」
「……まあな。相変わらずお前はパツとしねーな。」
「夏にパツとしなかったらちよつとの間で変わらないでしょうよ。」

けらけらと笑う和に、雄大と呼ばれた男はため息を吐いた。

「ほーんと、彩ちゃんはあるに美人なのに姉妹で違いすぎだよな
あ。」

おじさんとおばさんだって美男美女なのにさ、

お前やっぱり拾われっ子なんじゃねーの？」

「ちよつと雄大！和は可愛いわよ！！」

「彩ちゃん、シスコンは相変わらずだね。それさえなければ完璧なもの。」

「うっさいわね！！」

前方から叱責するのは、もちろん彩だ。

毎回同じ事を言われているのだから、いいかげん無視すればいいのにと

和はいつも心の中で姉に対して思っている。

辛辣な言葉を口にする彼は、実はけっこういいヤツであることを和は知っている。

なかむら 中村雄大は、和と同じ高校二年生であり

実は彩と後藤よりももっと実家の距離は近い。
車でなら20分程度だ。

金髪に近い茶色に染め上げられた短い髪は、
浅黒い肌ととてもよく似合っている。

態度とは裏腹にくりくりとした丸い目は、なんだか子犬を思わせる。

そんなふたりは家は近くとも、地元で滅多に顔を合わせる事はない。
和は元々、それ程頻繁に人を訪問することもなければ
学区が違うため同じ学校に通ったという経験も彼らにはない。
だから結局、他の親戚と会う頻度は変わりなかった。

そして彼のこれは、毎回聞いている彼のお決まりのせりふみたいなものだ。

どうしても和の事を彩と比べてこきおろしたいらしい。

彼がどうしてそうするのか和にはよくわからなかったが、彼にとって意思疎通の手段が悪口なのかもしれない。軽口を叩いてご機嫌伺いをしているのだと思えば、大きくなった今、和は劣等感を抱く心もありはしなかった。

むしろ、ちよつぱり不器用な彼を可愛らしいとさえ思っている。

「いやー、不細工過ぎて雄大の隣に並べないよねー。

雄大はイケメンだから腰が引けるわあ。

彩ちゃんみたいな素敵女子を思う存分はべらせられる人生だね。」

そうやってますます自分をけなす発言をすると、

彼がどんな反応をするのかさえ、和はわかつているのだ。

「…それは、俺の隣に並ぶのは、いいんだよ。」

「なんで？」

「俺様が許可するからだ。」

「あはは、ありがとう。」

そう、ここまでが毎回の流れ。

これを聞いてしまえば、和は怒る気にはならない。

つまり彼は、和のことを嫌ってはいないと言っているからだ。

むつつりと黙り込んだ雄大は、カチカチと携帯電話を弄りだした。

『…そういえば、携帯電話ちゃんとポケットに入れておいたよな。』

雄大のその様子を見て思い出した和は、

ごそごそと自身のポケットを確認すれば、それを取り出す。

確かにきちんと携帯できていたようだ。

隣に座る雄大がそれに気が付けば、おい、と狼狽するような声をあげた。

「ん？」

「お前、いつ携帯持つようになったんだよ！」

夏は持つてなかったよな？」

「いや、持つてはいたけど…家に忘れて来てたから。」

「は！？お前：それ携帯電話の意味ねーだろ。いつ頃買ったんだよ。」

雄大の言葉に和が反芻すれば、遙の顔が浮かび上がる。

携帯電話を買うきっかけになったのは彼なのだ。

本当に、家にいるときよりも格段に彼を思う頻度が多い。

「えーとね、夏休み入る少し前かな。7月とか。」

「なんで急に？」

「いいかげん不便になって。広末にも言われてたから。」

「…ああ、お前の唯一の親友って奴の事か。」

「うん、そう。」

広末は昔からの付き合いではあるが、親戚ではないので夏と冬のこの旅に同行したことはない。

「なんだ、色気ねえな。ま、お前じゃありえないか。」

「え？なにが？」

「携帯電話、彼氏でも出来たから持ったのかと思った。」

「ああ…そういう発想に普通はなるもんなの？」

「なるだろ。高校生にもなって彼氏いないってやっぱ和らしいよな。」

ははは、とご機嫌そうに笑う雄大に、
和は彼氏がいることを言おうかどうかどうすべきか少し迷ったが
やめておこうと思った。

彼は誰かに喋るタイプではないが、
それでもあまり多くの人間には知られたくはない。

「ああ、和が携帯持ったきっかけて遥君じゃなかったのー？」
「ちょ、お姉ちゃん！」

「あ、和ちゃんの彼氏ってはるか君って言うんだ。」

「進君まで、言ったそばからバラさないでよー！」

雄大、ごめん、これ親戚連中には黙ってて、うるさいからさあ！」

和が前のめり気味にふたりに話しかけた後、隣の雄大へと振り返れば
彼は口を開けたまま呆けていた。

「……………あの、雄大？」

「え、ああ、……………お前に彼氏ってマジで？実在してんの？」

「一応は。」

引き攣って見える顔に少し疑問を抱きながらも、
和は苦笑して答える。

そこにまた彩の軽口が飛んできた。

「ちょっと和、そんな事遥君に聞かれたら大変よー？
遥君てね、和への溺愛ぶり半端ないんだから。」

「彩ちゃんが和ちゃんの彼氏って認めただから、そうなんだろう
ね。」

「そつよー、唯一合格した男だもの、遥君は。」

後藤と彩が、なぜか結託してそんな話をしているの
和としては仲良くするふたりの様子を止めるのもなんだか嫌で
ははは、と力なく答えていた。

「んなこと言つて、どうせたいしたことねえんだろ？」

百歩譲つて物好きなイケメンだったとしてもすぐ振られるつて。」

「どうだろうねー、そうかもしれないね。」

「……しれない、じゃねえよ、そうなんだよ。」

「雄大？なんか機嫌悪い？」

「……………別に。」

それ以降、隣に座る雄大が黙ってしまったので和もそれにならつた。
別に騒がしいのが好きなわけではないのでそれは良かったが、
なんとなく車内の空気が重苦しく感じられて

屋敷に着くまでの30分間が、ひどく長い時間を感じられたのだっ
た。

第七十六話「(一部に特化して)盲目的な彼女・その1」(後書き)

登場人物が多い、そして回想が長い。

第七十七話「一部に特化して」盲目的な彼女・その2「前書き」

おかしいな、話が進まない…。

第七十七話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その2」

「進君、なんか疲れてる？ごめんね、運転してもらっちゃって。」

黒いフレームの眼鏡を外して眉間を揉む後藤を見て、和が声をかける。

屋敷の駐車場へと辿り着いた一行は、車から降りて身体を少し伸ばしている最中だった。

柔らかそうな黒髪がさらりと揺れて、優しい瞳が和を視界にうつす。遙と違って、後藤の髪の毛は少し癖っ毛だ。

「本当に優しいね、和ちゃんは。」

…お姉さんの愛情をたっぷり受けて育ったからかな？」

「それって、彩ちゃんしか誉めていよ結局。」

「ばれたか。…ってそんな事ないでしょ、まったくこの子は！」

笑って額をぴん、と弾かれ、和はいてっと小さく呟いた。

その様子に進が微笑みつつ大丈夫だよ、と一言残して雄大へと声をかけた。

「雄大、荷物下ろすから手伝えよ！」

まったく、君と一緒にいきたいって言ったから連れてきてあげたのに。」

そんなんじゃ略奪なんてとても出来ないぞ。」

「な、ななに言っただよ、進！！」

その言葉の意味がいまいちわからずに和は首を傾げたが彼女の弾き出した結論は、ひょっとして進も彩が好きなのだろうか、

というものだった。

考えてみれば、よく彼はふたりの周りをうるついでいたし彩にもよく追いつかれていた。

和の事を貶すからなのかと思ったが、ひよっとすると好意に気付いている彩がうっとおしがつているからかもしれないかった。

『なんだ、そつか。…でもライバルに塩送るみたいな真似するとは進君もけっこう余裕あるんだな。』

普段の彼女からはなかなか想像することのできない見誤りぶりは遥が過剰なまでに心配するその理由を如実に表していた。

笹森和は、自身にそういつた感情をむけられることをまずありえないと考える。

それは長年培われた彼女のコンプレックスが、しかしコンプレックスとしてではなく開き直ってそのまま受け入れた彼女の強さなのかもしれない。

傷付く事もなくなり、自身があるままを受け入れたのは確かに人として素晴らしい事かもしれない。

卑屈になることなく、自分はこの程度の人間だけど特に不満もない。そうばつさり言い切ってしまう彼女だから様々な人間を惹きつけるのだろう。

故に、恋人になる人間は並々ならぬ苦勞をせねばならない。

ひよっとすると、遥のように自身が異性を惹き付けてしまう存在だと自覚のある人間よりも浮気の心配は絶えないかもしれない、ただでさえ嫉妬深い遥がああなのはある意味仕方がないのかもしれない。

れない。

しかし、和は自覚がない為、それを理不尽で異常だとしか認識していなかった。

これからも、遙の気苦労は多いことであろう。

「雄大、荷物くらい自分で運ぶよ。」

和の言葉に、眉を寄せたまま雄大がぼそ、と呟く。

「そんなに非力じゃねえ。」

「え、いやそういう意味では」

最後まで言い切る前にスタスタと砂利道を歩いて行ってしまう雄大を和は後ろからお礼を言いつつ慌てて追いかける。

木々に囲まれたここは、誰もが浮かべる田舎の雰囲気は

まんま切り取ったかのような風景だった。

一本道をしばらく走らせれば、それなりに街の風景に変化するもののある一定の場所から途端に家が少なくなり、

田畑の合間を縫ってぽつぽつと小さい家や、

この山田家のような大屋敷が見えるだけのような風景になる。

元々は、高明の曾祖父が建てたという話のこの大屋敷は

曾祖父である山田の名を継ぐ者が代々ここに移り住んでゆくらしい。

高明の母が元々は山田の姓を名乗っていた。

なので、一応は山田という苗字を冠している親戚が言ってしまうば本家筋であるらしいが、そこらへんはかなり適当になっている。

というのも、今この屋敷に住んでいる人間は山田家に嫁いだ

山田知恵やまた ちえという人物と、後藤多恵ごとう たえという

後藤家、つまり進の祖父に嫁いだ祖母が夫に先立たれ
静かに余生を過ごしているという状態だ。

家系図を遡ると後藤家は曾祖母が産んだ娘のひとりが嫁いだ先だとい
うが

間に戦争などもあったから、いまいちそのへんがはっきりしない。
とにかく昔から親戚だとして交流があり、

仲が良かったふたりがこの屋敷に住んでいるということは
血筋にそうたいしてこだわりはない、というのが山田知恵と先立っ
た夫の見解で

要はこの屋敷が存続していけばそれでいいのだという話だ。

遺言で指名するという方法も特にとつてはいないらしく、

和はこのいい加減さでここまで屋敷が存続してきたことも含め
神秘的なこの場所がとても好きだった。

ある種ここが異空間のようにも思えるくらいだ。

『川端康成でもいいし、宮崎駿でもいいかなあ…』

トンネルを…という有名な一文を思い浮かべ和は口元を緩める。

毎回ここでの思い出が嫌なものだけしか残らないのは、
彼女自身がここを気に入っているからである。

そしてこの屋敷にひっそりと隠居している祖母達が、和は好きなの
だ。

ひよっとすると双子なのではないかというくらい、
ふたりはとても仲が良い。

名前も似ているから小さい頃は本当に双子なのだと思っていたくら
いだ。

ガラガラと屋敷の扉を開き、靴を脱いでふたりはそれを袋に入れる。ここでは靴は各自持っていくのが決まり事だ。そうしないと玄関口が大変なことになってしまう。

いくら広いといっても、それぞれが自身の靴を探してうろろするよりは

そのほうが余程ラクであることを誰しもが知っている。

そんなわけで、

ここに来る時はポケットに必ず専用の袋を忍ばせておくのが常であった。

「ねえ、雄大はいつ来たの？」

「：今日着いたばかりだよ、俺も。」

「あ、そうだったんだ。もうちいちゃんとかあちゃんには挨拶した？」

「いや、まだだ。一緒に行くか？」

「うん。」

ちいちゃん、たあちゃん、というのはもう80になる祖母達の名前だ。

彼女達はおばあちゃん、と呼ばれるのをとても嫌い、

親戚の子ども達に必ず名前前で呼ぶように、ときつく言って聞かせる。

そんな茶目つ気たつぷりなふたりは、

どこの家の子どもにも好かれることが多かった。

「あ、女子部屋の前まででいいからね？」

「わかってる。あいつらうるせーしな。」

女子部屋、というのは名の通りで、

屋敷では男性と女性に分かれてそれぞれ大部屋に寝泊りする。大体二部屋ずつになっているのが常で自然と親世代と子ども世代に分かれて寝ていた。夜は、修学旅行並みにやかましく、和はここにいる間それが苦痛といえそうだった。

襖の前までで荷物を降ろして、雄大が突き当たりで待っている、と言って去ってゆく。

和が部屋に入ると親戚連中が一斉にこちらをみてきた。

「あー、和ちゃん久しぶり！あけましておめでとう！」

「あ、おめでとう。」

心の中でしまった、と思った。

今は年明けの一月二日だ。新年の挨拶をすっかり忘れていた。あとで雄大にも言うておこう、と和は心の中で呟く。

部屋の中には8人程の同世代の女子達が集まっていた。今この屋敷にいるのは5世帯ほどであるらしく、明日にはまた少し増えるらしい。

ひとりの女の子が、不思議そうに声をかけた。

「彩ちゃんは？」

「すぐ来るとは思うんだけど…なんか進君と話してるっぽい。」

その言葉に、場が一気に沸いた。

「えー、進君、まだ彩ちゃんあきらめてないの？」

「ねえねえ、彩ちゃんて彼氏今はいるの!？」

「遠恋にならなきゃここで恋人探しもいいのにねー。」

「あのふたりならそのへんもクリアしてるじゃん。」

確かに、ここには日本全国から親戚一同が集まっているわけで、地元を離れていない人間も少なくないが、それでも都心部に移り住んでしまったひとはやはり多い。

笹森家のように関東圏へ行った人間もいれば、それぞれ地方都市に移り住んだ者もいる。

そういう人間同士ならまだいいが、こちら近辺に住む者と上京してしまった人間が交際を始めるのは物理的なことを考えてしまえば難しいだろう。

だからこそ、後藤家に生まれた進と、笹森家に生まれた彩は運が良かったといえる。

彩からしてみれば悪かったのかもしれないが。

「まあ、なるようになるんじゃない?私、ちいたあちゃんに挨拶してくるわ。」

そう告げれば、いつてらっしゃーいという声が部屋に響く。

すぐに抜け出せたことに安堵し、和は小走りで雄大の元へとむかった。

「…早かったな。」

「あまりああいうおしゃべりは好きではないんで。」

「ああ、そうだったな。」

くす、とお互い笑い合って屋敷の中心部へと歩き出した。

「なあ。」

「んー？」

「どんなヤツなんだよ。」

「ん？それはあれかな、物好きな私の恋人のことかな？」

「……自分で言ってるや世話ねえな。」

和が察してそう揶揄してみれば、てっきり笑うと思ったのに雄大はむっつりと表情を固くしている。

和は気付きようもないが、

どうやら彼女の口から放たれた恋人という言葉が彼の琴線に触れたようだ。

「どんな……それは、容姿ですかね？それとも中身？」

一言で彼を表すのはなかなかどうして難しいと考えた和は、まず彼が求める情報がなんなのか、お伺いを立ててみる。

彼とスムーズに話すコツは、下手に出ることだと和は心得ていた。

「別に、どっちでもいいけど。」

「珍しいよね、雄大がそんなこと気にするの。」

やっぱり雄大も私みたいな不細工に彼氏が出来ればびっくりするし興味も沸く？」

「うるせーな！自分で不細工連呼すんじゃないやねえよ！！」

真っ赤になって怒鳴る彼に目を丸くするも、和は穏やかに微笑んだ。

「中身も可愛げがないからさ、そういう意味合いも含め。

容姿は並くらいはあると思ってるんだけど、図々しい？」

「……別に。」

「うん、ありがとう。」

お礼を言えば、雄大は顔を赤くしてそっぽをむいてしまう。
それに和は微笑んだ。

彼の別に、という言葉の先には、良いんじゃないか、という
肯定の意味が含んでいるということを和は知っている。

誤解されやすい性格の彼はなかなかどうして損をする事が多そうだと
和はここに来て話すたびいつも感じる。

寡黙というわけでもないの、男友達とは普通に接しているようだが。

そう考えたとき、ふと彼の女性関係はどうなのだろうと和の頭に浮かぶ。

しかし今訊いても彼の質問に答えない限りはきつと彼も答えてはくれないだろう。

和はそう考えて、とりあえず遥のプロフィールを頭で描いてみる。

「容姿端麗、成績もまあ良好、運動も出来るし人当たりもいい。

黒髪はさらさらのストレートで風になびくだけでも画になる。

存在がどこぞの絵本から飛び出した王子様かとおつこみたくなるね。
事実、学園のアイドルみたいな存在だから。」

「……………は？」

「性格は穏やかなほうかなあ、にこにこ笑ってるし。

ただ、誰にでも優しいという事は裏を返せば他人がどうでもいいとも取れるね。

彼はけっこう腹が黒い所があるしと思えば単純だと思っ部分も多い。
私に対しては感情表現はけっこう激しいほうかな。」

「おい、和。…今言ってるのはひょっとしてお前の彼氏の事か？」

「うん、そうだけど。」

「本当にそんな完璧な男前が彼氏なのか!？」

「えー、無駄に顔が良いけどけっこう欠陥多いよ和泉君。」

「いずみくん？はるかじゃないのか？」

「苗字が和泉君なの。私の名前和むって書いて和でしょ？」

和泉君の苗字もそうなんだよねー、和むに泉はそのまま水の泉で和泉。

で、名前が遥。遥はえーと、遥か彼方、とかの遥かな。」

「和泉遥っていうのか。」

「そう。たとえばだけど結婚して和泉和になったら和みに挟まれるんだよ、

嫌じゃない？ないわー。まあ、別れる可能性だって大いにあるからわかんないけど。」

結婚、という言葉に雄大がぎょつと目を見開く。

彼女の口からそんな単語が飛び出すとは思ってもみなかったようだ。

「な、馬鹿じゃねえの。高校時代に付き合った相手と結婚なんてするかよ！」

「うん、私もそう思う。ただそれを相手に言うとすげー怒るからあんまり口に出来ないけどね。」

しかし次に聞く彼女の言葉に、雄大はどこか安心する。

彼氏が出来たといっても、どこか斜に構える性格は変わりないらしくなんとも現実主義者らしい和の言い分に雄大の表情は多少柔らかいものになった。

後半の言葉は多少気にはなるが。

そう思って、雄大は少し探るような口調で訊ねてみる。

「…そういえば、彩ちゃんが溺愛とか言ってたよな。」

「ああ、それはわかんないけど、嫉妬は凄いされるね。若干引くくらい。」

「嫉妬……それって、男と話してるだけで怒られるとかそんなか。」
「うーん、そこまで理不尽でもないか、な……？」
相手に親切心を見せたりすると、
あつちが和に惚れたらどうするんだ、とかは言われる。
言われるたびに女性ホイホイのあんたと違ってそんなないわ、と返すけど。」

気に入らない事を聞いているはずなのに、あまりにも和らしいその言葉に

雄大は思わず噴出していた。

「なんか、いちいちお前らしいな。」

しかしそんなんじゃないや近いうちに振られるんじゃないの？」

「かもねー。そのときは雄大様がなくさめてください。」

「……別に。」

ふ、と笑ってそう答える雄大に、和も微笑む。

彼女は、この時、彼に対してどれだけ残酷な言葉を吐いていたかわかつてはいなかった。

雄大もまた、この様子ではそう長続きしないだろうとどこか楽観視していたのだ。

しかし、次の瞬間、彼の安心は焦りに変わる。

廊下の静寂を、携帯の震える音が破ったのだ。

マナーモードにしても、これだけ静かな場所だと振動音が響くらしい。

和は慌てて懐から取り出せば、携帯電話は着信を知らせていた。名前を確認すると、それは話題にのぼっている遥からだった。

「ごめん、雄大。出ても良い？」

「……ああ。」

和が申し訳なさそうにごめんね、ともう一度呟いて、雄大の前で通話ボタンを押す。

聞きたくない気持ちと、どんな相手なのか気になって仕方がないという

相反する心がせめぎ合い、結局、雄大の耳は音を捨うのに必死になっていた。

「もしもし？」

『あ、和？もう着いた頃かなと思って。今大丈夫だった？』

電話口から聞こえる遙の声は、昨日聞いたままの声だった。

隣に立つ雄大は、どこか落ち着かない様子で、ちらちらと和の方へと視線を向けている。

「大丈夫だけど……つきり夜にかけてくるもんだとばかり。」

『えー、一日一回なんて言っただけよ？』

「は！？ちよつとお待ちなさい。君は一日に何回もかけてくるつもりなのかい。」

『もちろん、朝、昼、晩の最低三回は。』

「いやいや、勘弁してください。つうか昨日も会ったじゃん。」

『でも昨日は和を抱けなかった。』

「そういう発言はやめてくれませんか。」

『帰ったらたくさん取り戻さないとねー、体力付けておいてね。』

「ね、じゃないよ、嫌だよ。本当君はなんなんだ。」

嫌だ、と言いながらどこか嬉しそうに頬を染める和は可愛い女の子の顔をしていて、

雄大はこんな顔を見たことがないと感じれば

これ以上和と彼の会話を聞きたくはないと思った。

「和、もうすぐ部屋に着くぞ。」

少し低く放ったその声に、和はうん、と返事をする。

「ごめんね和泉君、今ちょっと移動中で。」

『声が聞こえたけど……誰かいるの?』

「親戚といっしょに屋敷のトップに挨拶に行く途中。」

『そうなんだ……年齢近いひとなの?』

「うん、同い年だよ。」

『……ねえ、それって「和!そろそろ切れって!!!」

「わっ!ご、ごめんなさい、雄大様、切りますから!

ごめんね、和泉君、親戚の子が怒っちゃってるから切るね。

また後でメールするから。」

『ちょっと待って!!!』

和の切る、という言葉に、電話口の遙が声を高くする。それに驚いて、和はどうしたのかと訊ねた。

『親戚の子とちょっと話させてくれない?』

「はあ?なんで?」

『ちよつと興味あるんだよ、和の親戚。』

「……………ねえ、なんかまた変な勘違いしてない?

雄大は確かに男だけど、ありえないから。」

『相変わらず勘が良すぎてやりにくいなあ、和は。』

電話口で恐らく苦笑している遙を思い浮かべ、

和はここで切ると後々面倒だなと考えれば少し悩む。

しかし目の前の雄大は、苛立っている様子を隠すことなく

こちらを睨みつけている。

「貸せ、俺が切つてやる。」

そうして手を伸ばしてくる雄大に和は慌てれば
仕方がない、と観念して彼に願い出てみる事にした。

「え、あ、ちよつと待って！ごめん、雄大。

申し訳ないんだけど、ちよつと変わってもらえない？
和泉君が、雄大と話したいらしくて。」

「は？…それは、嫉妬の一貫か。」

「えーと、恐らく。ほんつとごめん、面倒なヤツで。」

『和、聞こえてるよ。』

「うるさい、この阿呆が。」

彼氏に向かってする態度か？と少々の疑問を抱きつつ、
しかし雄大はそれに多少気を良くしたのか

渋々ながら電話口に出る旨を了承し、和の手から電話を受け取った。

「…もしもし。」

『どうも、和の恋人の和泉遥です。ええと、雄大君？』

「そうですけど。」

『ひとつ、忠告しておくけれど、無駄だよ？』

その言葉の意味がわからずに、雄大は眉を顰める。

傍らに立つ和は、どんな会話をしているのか気になって仕方がな
かった。

『彩さんから貰ったリストの中に君の名前がある。』

和の事が好きらしいね？でも残念。俺は和と別れるつもりは一生な

いよ。

彼女が嫌だと言って泣き喚いても手放す気はさらさらない。

諦めて次の恋へむかうほうが君のこれからの時間も余程有効だと思わない？』

彩のリスト、という言葉の意味がわからなかったが

雄大は、とにかく彼に自身の気持ちが見抜けであることを悟った。

そうして彼がつつらと一方的に述べる言葉に雄大の顔は朱を帯びていく。

「……………そんなものは、お前が決める事じゃない。」

『恋愛は誰が誰を口説こうが自由だって？』

「そうだ。」

『いつから好きなの？和の事。気持ちすら伝えられてないのにどうやって彼女と発展するつもりなのかな。』

遥の言葉に、雄大は唇を？む。

雄大が和をはつきりと好きだと自覚したのは、

和が中学に上がってすぐの頃だった。

制服姿の彼女と地元で話をしたとき、雄大は自身の恋を自覚したのだ。

それから、実に四年以上の月日が流れた。

このままではきっかけもない限り、一生告白などできはしないだろう。

雄大は、ちらりと和を視界にうつす。

心配顔をした彼女が、じつとこちらをみつめていて

心の中でこみあげるなにかを雄大は感じずにはいられない。

「…今までは今までだろう。」

『彼氏が出来たから焦ったって？でも告げても振られるだけだよ？』
「それは…わからない。そうならないかもしれない。」

少し強気な口調で雄大は言い放つ。

本当は自信など欠片もなかったが、懸想する相手の恋人だという男に弱い部分など見せたくはなかった。

しかし、次に飛び出した遥の言葉に、雄大は心の中で首を傾げる。

『あのさ、ちょっとお願いがあるんだけど。

電話、和にも声が聞こえるようにしてくれない？』

何故そんなことを頼むのか理解できずに、しかし言われた通りに携帯を操作すれば、和へと視線を向ける。

それを察した和がどうしたの？と雄大に声をかけた。

その声が遥にも聞こえてきたのだろう。

電話口でマイペースに遥は話し始めた。

『和、聞こえてる？』

「う、うん、聞こえてるけど…なに？」

眉を顰めて応える和に、遥はなんでもないように次の言葉を口にした。

『和、好きだからね。浮気しちゃだめだよ。』

「は…!!？」

『帰ってきたら、離れてる間、どれだけ和の事想ってたか心にも身体にもわからせてあげるからね？』

その言葉に、和は顔を真っ赤に染め上げ、雄大は驚きに目を見開いた。

彼とて年頃の男だ。その意味がわからないわけがない。

『それじゃあ、メール待ってるよ。雄大君も、お話ししてくれてあげよう。』

「……………この宇宙一のお馬鹿男！！！！」
『馬鹿になるのは、和限定でだよ。じゃあね。』

あはは、と笑って、電話は一方的に切れた。

ありえない遥の爆弾発言の数々に、和は全身を真っ赤に染め上げつつわなわなと身体を怒りで震わせる。

「帰ったら覚えておれよ、歩く恥知らずめ…！行こう、雄大！！」
「え、あ、ああ。」

電話を握り締める和があまりにも怒りに満ちていたので

雄大は問い詰める機会を失ってしまう。

恋人が出来たのだから、待っているのは確かにそういう展開だろう。

しかし、和に限ってはありえないとどこかが告げていた。

その予想は、あっさりと砕かれてしまったわけだが。

雄大ではない男が、和の身体に触れた。

その事実には、彼の心にはどろどろと黒い何かが徐々に流れ出てくるのを感じた。

目の前で、好きだと言いつつ、和泉遥という男。

和を溺愛しているという様子も先程の少ない時間で

嫌というほど実感させられた。

あの男と別れるなんて未来が果たしてあるのだろうか。

雄大は、一生やってこないのではないかと考えれば
焦る心を抑えられなかった。

目の前に目的地が見えた所で、雄大の決心は一瞬霧散しかけたがそれでも彼は自身を叱咤する事で、なにかを固く決意したのだった。

「て、あ、そうだ！部屋に入る前に。」

雄大、あけましておめでとう。今年もよろしく！」

「……俺も忘れてたけど。おせえよ。」

苦笑する雄大に、和はへへへ、と笑った。
彼の心を、いまだ彼女が知ることはない。

第七十八話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その3」

「笹森和です、失礼します。」

「中村雄大です、失礼します。」

告げて、ふたりはその部屋の襖を開いた。

ここを訪れる時は、こうして名前を口にするのが決まりになっていた。

何故か、と問われたらそれはふたりにはわからない。

親からそうしろと教えてもらったからであり、

その親もきつと代々そう教えられてきたのだろう。

開いたその部屋は、広々とした空間だった。

部屋の隅に安楽椅子がひとひとりぶんの間を置いてふたつ並べられ、その傍らには台のような小さな机がちょことん、と置かれる。

部屋の真ん中には特に何が置いてあるわけでもなく、

畳がただ広がっているだけだ。

襖から正面にあたる場には所謂、床の間があり、

掛け軸と生けられた花がこの部屋に少しの色を与えていた。

日本家屋であるこの屋敷は、ほぼ全ての部屋が襖で出来ている。

唯一そうではない造りのものは、風呂場やトイレくらいのもので現代人である世代からすればノックが出来ないのは色々と不便だ。

ここに来ると、入る前に一声かけるのが欠かせなくなる。

開いた瞬間、先客がいることに気が付いた和は若干身構える。

振り向くとそこには会いたくない顔が揃っていた。

斉藤家の大黒柱と、山田家の大黒柱だ。

揃って挨拶に来たところに行くわすとはなんとも運が悪い。

60代の脂ぎった中年男ふたりは、和と雄大を認めると声を上げた。

「おやおや、笹森さんとこのと中村さんとの。

相変わらず仲が良いんだねえ。」

「あれ、和ちゃん。お姉さんは一緒じゃないのかい？

にこにこ笑う彼女と一緒にのほろがお二方も喜ぶんじゃないのかなあ。

「

その言葉に、和は内心で苛立ちつつ無表情に答える。

「私は本当昔から愛想なくてどうしようもないですもんね。

おまけに気も遣えなくて、おじさん達に言われて気がつきました。」

「ははは、和ちゃん。高校生になっても相変わらずだねえ。

行かず後家なんてことにならないように気をつけなきゃね。」

「おいおい、若い子にそんな事言っても通じないだろう。」

笑う中年ふたりに、和はびしり、と青筋を立てる。

普段ならここまで苛立たないがこのふたりは特に彼女の苦手とする人種で

自身の阿呆ぶりに気付かないその様がなんとも見苦しいのだ。

それにこいつらだけならば無害なのであるが、

呼び水になって他の連中からもちくちくと言われるので

和はどちらかといえばそちらにいつも嫌な思いをする。

彼らの言った通り、隣に立つ雄大はその意味を理解していないようだ。

ぽかん、とした顔で突っ立っている。

しかし、彼女はその言葉の意味をはっきりと認識している。

つい先日、高明にその言葉を放ったばかりだ。彩に対して、である

が。
和は、にっこりと微笑んだ。

「そうですね、最近では売れ残ったクリスマスケーキ、なんてもつと俗っぽい表現がたくさん出てますから
今度使うときはそつちを使ったらどう？若い子にも通じるよ、おっさんふたり組。」

その言葉に一瞬ぎよつとしたと思えば、山田が顔を赤くする。

「君、本家の人間に失礼だとは思わないのか！

まったく高明君はどんな教育をしているのかつ！！」
「たけふみ健文。」

凜とした声が部屋中に響き渡ると、山田の身体がびくりと震えた。

「おやめなさいな、あなたのが余程失礼ですよ。」

「そうねえ、礼を失くすとは良く言ったものだわ。」

うふふ、と笑い合うふたりを、斉藤と山田は狼狽してみつめる。

和は、一歩進み出て頭を下げた。

「山田のおじさん、斉藤のおじさん、

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。
ごめんなさい、挨拶もなく生意気な事を言つて。

ちよつと久しぶりに会つたから悪ふざけしたくなつちやいました。
言葉が過ぎたつて思つてます。」

先程とは打って変わったその態度に、焦りながら斉藤が山田をつついた。

「ま、まあねえ。謝ってくれたんだし。こちらこそよろしくね。」
「ああ、明けましておめでとう。雄大君も。」

そう言われて雄大が軽く会釈したのを確認すれば、
ふたりはきまりが悪くなったのか、それでは、と言って去って行った。

和はゆっくりと歩いて開け放したままの襖を閉めれば
くるり、と大好きな祖母ふたりに向き直った。

「ちいちゃん、たあちゃん、明けましておめでとうっ！
今年も会えて嬉しいよー！長生きしてねっ！！！」

そう言っつて、和はふたりの手を取る。

満面の笑みで笑う彼女を、ふたりの祖母は温かく迎えた。

「いつも言っつわねえ、それ。あまり言い過ぎると早く死にそうだな
ね。」

「そうねえ、多恵ちゃん。でも私100まで生きてみたいとも思っ
わ。」

「生きてよー！」

その声にまあまあ、と可愛らしいころとした笑い声が響く。
知恵と多恵はとても可愛いおばあさん、といった風情の容姿をして
いる。

「ちいさん、たあさん、明けましておめでとう。」

「雄君、また背が伸びたんじゃなーい？」

「…ちいさん、さすがにもう成長期じゃないんだから。」

「あらあ、でも私もそう思うわよお。1センチちよっとくらいい？」

「そう、2センチまではいかないのよねえ。」

ふたりのやり取りに、雄大は相変わらず不思議なひとたちだ、と目を丸くする。

今すぐにでも身長を測れないものかと思ったが、年に一度の健康診断での記録しか頭にはないので夏から冬までの期間にそうなったのかは確認できないと気が付けばどこかすっきりしない自分がいた。

和も、ふたりの様子にとっても楽しそうに笑っていた。

「それにしても、和ちゃんがあんな風に反論するのは珍しいわね。とつても良い傾向だわ。」

「ええ？どうして？」

知恵の言葉に驚いて和が目を丸くすれば、多恵がうふふ、と笑って後半のせりふを引き受けた。

「反論する自信がついたってことですもの。愛されているのねえ和ちゃん。」

「とつても素敵なお相手なのね？」

「た、たあちゃん！何言ってるの！？」

「近いうちにここに連れていらっしやいな。私達もどんな子なのか見たいわ。」

和ちゃんが恋人に選んだ方だもの。ねえ、多恵ちゃん？」

「本当ね、知恵ちゃん。」

悪戯っぽく笑い合うふたりに、和は反論する気も起きなかった。こつても確信を持って言われてしまうと否定もできない。

本当に、彼女達は千里眼だと和は思う。

年齢を重ねたら、いつか彼女達のようなひとになれるのだろうか。

しかし、修行が足りないな、と改めて先程のことを反芻する。和がここで親戚連中にいつものような毒舌をお見舞いしないのには理由がある。

ここでは、どうしたって家族単位で扱われてしまう。

もしも自分が彼らの不興を買えば、

それはひいては和の家族が貶められる結果につながる。

少し反論しただけでも、高明の育て方が、依子のしつけが、と

怒鳴るような人種も少なくはない。

愛想よく振舞えない自分は、とにかくたださえ印象が良くないしこれ以上ここで笹森家が肩身の狭い思いをするのが和は嫌だった。

「…まあ、そのうち連れて来れたら、ね。」

苦笑してそう応えつつ、和にふたりの祖母は約束よ、と微笑んだ。

雄大は、面白くないのか横でまた不機嫌になる顔を隠せずにいた。

それにきらり、と瞳を光らせて、知恵が雄君、と声をかける。

「な、なに？ちいさん。」

「焦っちゃ駄目よ。焦ってしまつとね、色々と良くない事が起きるから。」

「ええ、そうね。傷付けてしまう結果になるかもしれないわ。

そうならたら雄君だって痛いでしょう？」

「間違えては駄目よ、ねえ、多恵ちゃん。」

「ええ、間違えなければ苦くても甘くなるわ、そうでしょ、知恵ちゃん？」

まるで謎かけのような言葉で話されても、

そういうものに明るくない雄大はわけがわからなかった。

自身のことを言っているのはわかるが、
甘いとか苦いとか、一体全体なんのことなのだろう。
自分は料理なんてしないのであるが。

「…食べ物的事ではないとおもいますぜ、雄大さん。」
「！」

「雄大にたいしてのアドバイスだから具体的にはわかんないけど、
多分なんかの比喩表現だよ。」

「ちいちゃんとかあちゃん言葉遊びが好きだから。」

「…ああ、そうだな。俺はここに来るたびにふたりは
占い師の才能があるんじゃないかと思う。」

そして、隣に立つ少女もまた、その才能があるのではないかと
雄大は思っていた。

昔から、彼女はなんにつけ勘が良い。

鋭い洞察力がなせる技なのであるうが、誰にでも習得できるものでも
ない。

そんなことを頭の中で考えていれば、襖の外で物音がした。

「笹森彩です、失礼します。」

「後藤進です、失礼します。」

その声と名前に、和と雄大はどちらからともなく顔を見合わせた。
知恵と多恵はまあまあ、と嬉しそうな声をあげる。

「あ！和！雄大といっしょにここに居たのね。」

「彩ちゃんも、今まで進君となにしてたの？」

首を傾げて彩をみつめれば、彼女の瞳が気まづげに揺れる。

和はそれを見逃すことなく訝しむ。

「彩ちゃん。今まで俺に口説かれてたつて素直に白状しちゃったら？」

「な、ななななにを言ってるのよ後藤君！」

「昔みたいに進って呼んでくれればいいのに。」

「うるさいなあ！もう成人過ぎたのにいつまでも馴れ馴れしく下の名前で呼ばないでよね、あなたも！」

後藤の言葉に、和が思わず口笛を吹きたくなった。

しかしその囃し方もいかなものか、とこらえればあとにはにやにやとした笑いしか残らない。

ああ、自分の家族もこんな風に思いつつ私をからかうのだな、と心の中で呟けば、あまり咎める事が出来なくなってしまう気がした。なんとも楽しい気持ちでいっぱいであるからだ。

「ちょっと和、その笑い方…って、ちいちゃんもたあちゃんも！そんな風に意地悪く笑うのやめてよう！」

真っ赤になる彩に、知恵と多恵は目を真ん丸くしながらも口元はにこにここと笑みの形を作っていてきらきらと子どものように目を輝かせていた。

「まあまあま、やっぱりそうね。」

「本当ねえ、楽しみだわ。」

「どうやら生きているうちに見られそう。」

「少し前までどうかしらと思っていたのにね。」

ふたりの可愛いおばあさんは、そう言っ
て目をうるうるさせつつも、

手に手を取り合いなにかを喜んでいる。
和は、その様子になにか得心がいった。

恐らくは間違いないんだろう、ふたりの予想は
それこそ予言か！？というくらいよく当たるのだ。
本当に、雄大ではないが占い稼業でも始めればいいのに。

和は心の中で思いながら、
しかし純粋な好奇心であるからこそ、ふたりには色々とみえるのか
もしれない
と思い直していた。

少し狼狽する彩と、その横で穏やかに微笑む後藤をそれぞれ視界に
うつしたあと、
和は雄大をつんつん、と指先でつついて退出を促す。
雄大は無言でうなずいて和のそれに応じた。

「なあ、さっきのってなんだろうな？」

少し廊下を歩いたところで、雄大が首を傾げて訊ねるので
和がそれにああ、と声をあげる。

すぐに言ってしまうおうかと思っただが、
そういえば彼は彩が好きかもしれないのだと気が付いて
和は口にしていいものかどうか逡巡してしまう。

「あ、のさー。雄大は、彩ちゃんが綺麗だっていつも言うじゃない。」

「ん？ああ、まあな。」

「そのー、それはー、どういった意味合いです？」

「は？」

眉を顰める雄大に、和は心の中でああ、と嘆く。
彼は本当に真つ直ぐな人間で、それでいて純粹なのだ。
だからこそ、歪曲な遠まわしな表現がなかなか通じない。
それは彼の長所でもあるし短所でもある。

「ええーと、ぶっちゃけ、雄大様は彩ちゃんに恋心とか抱いちゃってます？」

「はあ！！！？」

勢いで訊いてみた和は、あまりの返答に仰け反った。
すぐ隣で大声を出され耳の中がきいん、と不快に響く。

「おま…っなんだってそんな勘違いをする！！」

「え、ああ、良かった、勘違いだったのか。」

良かった、という言葉に、雄大の体がびくりと反応を示す。
彼女の今の言葉は、果たしてどういう意味だろうか。

「進君と、彩ちゃん、多分だけど結婚すると思う。」

「は！？あのふたり付き合ってたのか？」

先程の言葉の意味が気になりながらも
またも彼女の口から飛び出た発言が気になってしまい
雄大はなんとも素直に反応をしよう。
和がそれにはいない、と手を振った。

「そんな事実は今のところないけどさ。」

ちいちゃんとたあちゃんの言ってたの、そういうことだと思っよ。
ほら、良かった、とか楽しみね、とか言ってたでしょう？

ふたりみてなにか確信したみたいだったし。

きつとふたりは結婚するのね、良かったわ、晴れ姿を生きているうちに私達はみれるのね、ってそんな意味じゃないかな。」

「…あのふたりが結婚。ほんとにそうだったらすげえな。」

「ねえー、どうなるかわかんないけど。」

でも、もしそうだったら彩ちゃんを好きな雄大には酷だと思ったから。

私の単なる勘違いで良かった。」

「ああ…。」

和の微笑といっしょに放たれた言葉に、雄大はなんだ、と小さく気持ちを落とした。

しかし、と雄大は次の瞬間、思い直す。

彼女の言葉に一喜一憂するようになってから、もう随分と経つ。

彼女もまた、自分の言葉に少なからずなんらかの影響を受けるのならば

どんな感情であるにせよ、嬉しいかもしれない、と雄大は思った。

望む形ではなかったにしろ、彼女は雄大が傷つく事を厭うてくれたのだ。

ならば、少なくとも今この時は和にとって雄大はなにかしら大切な存在なのだと思います、雄大の心は弾んだ。

「ああー…もう憂鬱ねえ。」

「彩ちゃんは特にひっぱりだこだもんね。」

「まあ、ここで将来のOLスキルを学ぶとも思えばさ。」

「あー、マジでけっこう役に立つよ。」

ぞろぞろと若い親戚一同が宴会場へと食事を運ぶ。

ここでの食事は当たり前だが皆の手作りで

ほとんど女性を取り仕切る。

若い男性や、そういつたことに抵抗の無い男連中は

手伝いもしてくれはするが、

それでも布団を敷いたりとかテーブルを出してきたりだとか所謂、力仕事関係以外を中年世代の男がやることはなかった。

役割分担というものもあるしそれは仕方がないが

なぜおっさん連中に酌をせねばなるまい、と不満を述べる

親戚も少なくは無い。

もちろん、和も心の中でそれを思うひとりであり、

事実、彼女は酒を注いだりすることは無い。

「おー、大きくなって随分べっぴんさんになったなあ！」

「なんだ、久しぶりじゃないか！子育てで忙しかったって？」

宴会場では、食事を運んで女性連中もご飯と一緒に食べるが早々に席を立つことも少なくない。

なんとかかうまくかわしつつも、にこやかに笑って
おじさん連中に挨拶へと回る。

和は、この雰囲気がいいつも大嫌いで、
最初は黙々と食事をとれば、10分でお腹を満たしひたすら裏役に
徹する。

それがいつもの彼女の常だ。

だからこそ、和は一部親戚から不興を買っても、
愛想さえあれば気の付くとってもいい子、という評判をもらって
いるのだった。

今回も急いで食事をかきこんで、和はまず自身の食器を台所へと下
げれば

熱燗を手に宴会場へと戻る。

真っ直ぐに向かったのは知恵と多恵のもとで、
和が手酌をするのは毎回彼女達にだけだと決めていた。

正座が出来ないふたりは、唯一高いところから場を見下ろしていて
なんとなく玉座に着く女王のようだと和は思うが
その優しい微笑みからは見下ろすというより見届けるといった
表現のがふさわしい気がした。

そのふたりに、にっこりと微笑む。

「ちいちゃん、たあちゃん。これが最後の熱燗だよ、呑みすぎない
でね。」

「あら、いつもありがとう和ちゃん。」

「本当、和ちゃんはいつも素敵な時間に来てくれるわね。」

かわるがわるふたりに頭を撫でられて、和はえへへ、と笑えば

呑み終わった酒を片付けてゆく。
そうして、済んだ食器を片付けて回りながら、
和は親戚のおば連中に声をかけてまわる。

「おばさん、そっち足りてますか？なにか持つてきます？」

「あ、和ちゃんありがとう。お願いしてもいいかしら。」

「了解です。」

食器を下げに台所へと戻った和は、忙しなく料理を作る女性達にも声をかけた。

「おばさん、これとこれ、運びます。」

しばらくは大丈夫ですから、交代しましょう。ごはん食べてきてください。」

「あらあ、和ちゃん。いつも悪いわねえ。それじゃお願いしていいかしら？」

「はい、もちろん。」

そう告げれば、台所に立つ女性達はささっと抜けていった。
和は宴会場と台所へ行ったり来たりをしばらく繰り返し、
最後には食器洗いへと専念した。これがいつもの流れなのだ。

そうして場が落ち着くまでがおおよそ一時間程。

そろそろいいか、と和は台所を離れた。

戻って腰を下ろすと、それをみつけた親戚のひとりが声をあげる。

「和ちゃんはまた、どこに行ってたんだい。」

酌しないでうるうると好き勝手してるのは和ちゃんくらいのもんだ。

「おじさん、和はずっと台所で働いてくれたのよ！」

傍らに座る彩が少し顔を赤らめながら反論すれば
ああそうか、と親戚が笑う。

それから、また違うところからも声があがった。

「しかし陰でなにかやっただって、見られないとどうしようもないぞ。
和ちゃんは愛想も無いんだし、社会に出てから困るぞお。

おじさんだったら、彩ちゃんみたいな部下がほしいもんなー。」

「ああ、いえてるなあ。彩ちゃんが入れたお茶を会社で飲みたい！」

「もう、おじさんだったら。私まだ学生なのに気が早いよ。

それに和は縁の下の力持ちなの。そういう人がいないと

世の中成り立たないし、見られないところで頑張るひとのがずっと
偉いわ。」

「うんうん、彩ちゃんは本当に妹思いだなあ。なあ、和ちゃん？」

その言葉に、彩がまた顔を赤くして今度こそ怒鳴りそうになってい
たので

和は慌ててはい、と返事をする。

「私も彩ちゃん大好きだから。ありがとう、お姉ちゃん。」

そうしてにつこりと和が微笑むと、

まわりからは姉妹仲が良くて、笹森家は素晴らしい、などと
酔っ払った声で盛り上がる。

なんとか軌道修正できて、和はほ、と息を吐く。

しかしそれが気に入らなかつたのかはわからないが、
昼間悪態を吐いてしまった山田家と斉藤家が、口を揃えて笑い出し
た。

「でも姉にだけ笑うってのもなあ。愛想が無くてシスコンじゃあ本当、将来が心配と言うか。」

「彩ちゃん、和ちゃんに遠慮しないで早いところお嫁にいきなよ。そうじゃないと和ちゃんに邪魔されちゃうぞ。」

そのふたりの言葉に、また周囲が笑い出した。

今度は斉藤の妻が声を上げる。

「そういえば、和ちゃんはもう高校生だけど恋人はいないの？」

「おいおい、母さん。聞くのは酷だろう。」

大丈夫だよ。お見合いとか結婚相談所とか、今は充実してるんだしそういう方面に頼れば、30前には結婚できるさ、なあ？」

それに、和の傍らに座るおばが気にしちや駄目よ、と小さくなくさめてくれる。

和は、いつものことなので特に気にせずありがとう、とうなずいた。

結婚はどうかかわらないが、今は遙がいるのだし心は痛まない。

『あーでも…和泉君が今この場にいたらなんて言っただろう？』

『そういやそろそろ電話くるかなあ。』

そんなことをぼんやりと考えてしまったからか、和の反応が遅れた。彩が、ついに我慢できなくなったのか顔を真っ赤にして立ち上がる。和はそれに気付いて慌てて立ち上がり彩ちゃん！と叫ぶが間に合わない。

「いいかげんにして！和には遙君ていうとっても素敵な彼がいるんだから！！」

勢い余って彩に飛び掛り、姉妹仲良く転ぶ。

それでも彩の叫びには間に合わなくて、和は心の中で泣いていた。視界の端には、慌ててこちらに駆け寄る後藤と雄大が見える。

そうして和はおねえちゃあんと小さく呟いた。

第七十八話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その3」

（後書き）

一日のユニークアクセス数が1000を突破しました！

本当にありがとうございます！！

記念というのもアレなのですが、感謝を込めまして

ブログにて開店休業。のスピノフ作品をひとつ書きました。

もしよろしければ是非ともご覧ください！

第七十九話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その4」

どさっ！と倒れた瞬間の時間は、どこかスローモーションのように感じられて

和はとても不思議だった。

情けなくも悲痛な声で和が彩を呼べば、次に耳に入ったのは知恵と多恵の声であった。

「まあまあまあ。彩ちゃん我慢できなくなっちゃったのね。」

「ええ、ええ。可愛い妹をああも言われてはそうでしょうとも。」

うふふふふ、と笑い合うふたりの声。

その後、駆け寄った進と雄大がそれぞれふたりを起き上がらせれば宴会場は爆発が起きたかのような声が上がった。

「な、和ちゃんいつの間になんか来たのよー！！！！！！」

「教えてよお！！！！ちよつと、おじさんのいてっつ！！！！」

酌もそこそこに、和や彩と同年代の親戚達が次々になだれ込んでくる。

最初は驚いて声をあげた中年連中も、若い熱気にたじたじだ。

『あああ、やっぱりこうなった…。』

あまりにも予想通りなその反応に、和は力無くうなだれれば目の前に座る彩をじ、とみつめる。

彩は、自分が口走ってしまった事にもものすごく狼狽すれば目がこぼれんばかりに涙をためていた。

これでは、和は彩を責められない。

「彩ちゃん、私は大丈夫だから。怒ってないよ。ずつと言いたくて我慢してたのも私の為だもんね？」

「こういうのが私は苦手だっていうのもわかってくれてるもんね？」

和の言葉に、彩はぶんぶんとうなずく。

それにふ、と微笑んで、和は立ち上がった。

「彼氏については私は一切ノーコメントで。

許可するんで詳しい事は彩ちゃんから訊いてくださいーい。」

今日だけは許してもらおう。

苦笑して、和は中座することを謝罪しつつも許してもらおう。

屋敷奥へと消えていった和を見送った一行は、すぐさま彩へと食いついた。

雄大は、立ち上がって和についていこうとするが

何人かの親戚に呼び止められる。

「おい、雄大。お前、知ってたのかよ、和ちゃんに彼氏できたの！」

「え、あ、ああ。」

「まじかよおー！俺、けっこう本気で好きだったのに！」

「ふざけんな、俺もだつつうの！おっさん連中はわかってねえけどささばさばしてるだけで別に和って笑うし可愛いんだよなー。」

「たまに物静かなところとかもけっこうイイし。」

「なんだかんだ表情そんなないってだけで十分可愛いよ。」

そんな風に、軽く好きだと言える心のなかが本気なのか。

雄大は心中で毒吐きながらも、男連中を睨みつける。

「別にとつと諦めて次いきゃいーだろ。」

その言葉に、まあな、とか、ちくしょう、今夜は失恋パーティーだー！とか、皆それぞれ騒ぎ出す。

その様子に雄大は怒る気も失せて呆れ返った。

ぼん、と誰かに肩を叩かれて、雄大が振り向けばそこには進がいた。

「けっこう陰で和ちゃんも人気あつたからね。」

雄大は参加しないのか？失恋パーティー。」

「……っ俺は別に、あいつのことは」

「ふーん、この期に及んでそんな事言っちゃうの。」

ビールをちびちびとあおりつつ、からかい口調で進がそんなことを言うので、

雄大は呑んでいるわけでもないのに顔をみるみる赤くする。

それになや、と笑いつつ進が目を細めた。

「素直になれよ。それこそ表に出さないとずっと辛いままだ。」

彩ちゃんから聞いた限りじゃ相手の子すぐく出来た相手みたいだし、お前も和ちゃんの幸せ願ってやれば？」

進の言葉に、雄大は唇を？みつつも自身の心を弱弱しく吐露した。

「伝えるのさえ、いけないのか…？」

「んー？ああ、当たって砕けるってやつか？

まあ、トドメを刺されてすっきりしたいんならいいんじゃないの？」

「………砕けなきゃやっぱいけないのかな。」

「お前、略奪する気なの？」

「……………」

「まあま。とりあえず今日はそっとしておいてあげよう。
和ちゃんも暴露されて混乱してるだろうから、な？」

進の言葉に、彩のほうをちらりと見て、雄大は無言でうなずいた。
あんなに囲まれて、あれが和だったならば
きつと疲れ切っていただろう。

この場にいれば、それこそ心無い言葉を浴びせられるかもしれない。
明日からの心の準備をきつとこいっばいこいっばいの和を、
追い詰めるような行為は雄大もしたくはないと思った。

「はーあ…明日からが嫌だなあ。」

ぼんやりと中庭の様子をながめつつ、足をぶらぶらとさせる和は
冬の寒さにぶるり、と震えれば
立ち上がって適当な部屋へと入り込んだ。

畳がいつぱいに広がる部屋で、和は部屋から持ってきた上着を羽織
りつつ

端っこに三角座りをして
いっしょに持ってきた文庫本をみつめていた。

遥のくれたブックカバーをつつ、と指でなぞり彼の事を考えれば
和の心はどこか沈んだ。

ここに来ると、昔の事を思い出していつも一時自信喪失になる。ここでは得意の口八丁も封じられてしまって

和は、田舎での自分は爪を抜かれた猫のようだと思った。

遙が自身を猫みたいだと言ったので、それにちなんだ例えだ。

本の途中に挟まった栞を頼りに続きを開けば、

毛糸玉にじやれた黒猫が姿を現す。

こうやってじやれつくときも、爪が無ければすぐに取りこぼしてしまっただろう。

馬鹿な事を考えて、和は力無くふ、と笑う。

和の心がどんどん暗いほうへと行きそうになったとき

まるで計ったかのように携帯電話が震えた。

びくん、と身体を揺らして、和がゆっくりとそれを取りだせば、やっぱり着信者は遙であった。

和は無表情に通話ボタンを押せば、無言でそれを耳に当てる。

『和？今大丈夫だった？』

「……………うん、大丈夫。」

『…声が沈んでるよ、なんかあった？』

「んー…いつものことだもん。」

『いつものことだからって傷付かないわけじゃないでしょう。』

「うん…そうかもしないけど。」

『かも、じゃなくてそうでしょ？』

「かなあ。」

『だよ。』

電話口の遙の声が、優しいのと怒っているのが混ざり合っていて和はどこかおかしいと思えば噴出してしまった。

それに電話口の遙が安心したかのような声をあげる。

和はもういちどぶ、と笑って、ぽつぽつと話し始めた。

「なんかね、ここだとね、態度が悪いと
家族の教育が悪いんだとか言われちゃうからね？」

『うん。』

「だからいつもの調子で反論したり開き直ったりできなくてね？
曖昧に笑うしかできなくて、ちょっと疲れるの。」

『そっか…』

「でも、彩ちゃんとか、お母さんとかお父さんとか
皆揃ってるときはけっこうかばってくれるから平気なんだけど。」

『ああ、まだ高明さんと依子さんこっちなんだよね？』

「うん。…でも彩ちゃんも、かばってくれるから平気。」

「瞬だけね、弱気になるだけだから、大丈夫。」

『和？』

「んん。」

遙の声に目をつぶりながら、和は膝を抱えて前後に揺れる。
なんとか気持ちを立て直そうとしていた。

しかし、頑張ろうとせずとも、遙はいつもの調子で
いちばん欲しい言葉をさらりと saying のけてくれた。

『誰がなんと言おうと、和は可愛い。』

「！」

『誰がなんと言おうと、俺は和が好きで、和を愛してるよ。』

「……………」

『ねえ、和。俺ひとりで一生和を好きだって言い続けるけど、
和は俺のわがまま受け取ってくれる？』

「……………時々うっとおしいって言っちゃうかもしれないけど、
それでもいいなら。」

その言葉に、電話口の遙が和のサド！と叫べば

和は声を上げて笑う。

「遙は、優しいね。」

『！』

「遙が私の恋人で、良かったな。」

『和………』

「ありがとう、私も誰が何を言っても遙が好きだよ。」

『ううううううう……！！！！』

てつきり喜んでくれるとばかり思ったが、

遙が電話口でうなっているのどどうしたのかと狼狽すれば
遙がああもう！！と大声で叫んだ。

『今すぐ和のことめちやくちやくに抱きたい！』

遠距離でそんな可愛い事言わないでよー！！』

「えっ。」

『キスすら出来ないなんて……拷問だあああ！！』

「いや、あの、和泉君？」

『ねえ和、お願いがあるんだけど』

「電話ありがとう、また明日ね、おやすみ。」

ものすごく嫌な予感がした和は、有無を言わずに電話を一方的に切った。

それでも、いつものように電源を落とす事はしない。

またかかってくる気配もないので、

遙は恐らく自身のお願いは頼んでも叶えられない種類のものであると判断したのだろう。

『……一体なにをお願いしたかったのやら。』

考えても色々と羞恥が募るような行為ばかりが過ぎるので和は携帯を懐へとしまえば、女子部屋へと戻ることにした。

歩いて部屋の前まで来ると、廊下に誰もいない事を確認し最小限のスペースだけ襖を開く。

二間になっているこの部屋は、奥で着替える人間が圧倒的に多いものの

たまに横着をする子もいるので、開く時はそれなりに緊張する。誰か異性が一緒の時は必ず声をかけるのが礼儀だ。

そして中へと入れれば、明かりが漏れていたのかわかっていた事だが何人かの親戚が一齐にこちらを見てきた。

部屋に居る人数は一桁台なので、まだ片付けをしている連中もいるのだろう。

視線に一瞬だけ気後れしそうになりながらも、和はなんとか真っ直ぐ前を向く。

無言で上着をハンガーにかけて部屋の隅のフックに吊ると、和はまたそのまま部屋を後にしようとする。

片付けが終わっていないのならばそちらを手伝おうかと思ったのだが、しかし、ひとりの親戚が、和ちゃん、と声をかけた。

「……………な、なに？」

ギギギ、と油が切れたからくりのように和が後ろを振り向けば瞳を輝かせた女性がそこには座っていた。

親戚の中でもなにかと話す機会が多い、亜紀である。

亜紀は、和の二つ年下の中学三年生で、推薦によりもう進路が決定している身だ。

「彩ちゃんから、い、色々と聞いて、写メも見せてもらって…」

『写メ』という単語が普段あまり耳馴染みのない和は、一瞬疑問符を浮かべそうになるが、携帯電話で撮った写真の事だと思いつく。

そして得心したあと、カツと目を剥いた。
それに亜紀が僅か後退する。

「写真で…彩ちゃん、和泉君の写真持ってんの?!?!」

しまった！そこはノーマークだったのだ。

彼女の事だ、きっと各方面に妹の彼氏はイケメンだ、などと自慢してまわったに違いない。

和はあまりにも容易く想像できてしまい、額に手を当てて息を吐いた。

「ちょっと、亜紀、ずるーい。お姉さんも色々訊きたーい。」

「あ、ちょっと智子ちゃん割って入ってこないでよ！」

亜紀の隣にずるずると這い出してきたのは大学二年である智子だ。同じ年というのもあってか彼女は彩と仲が良い。

「…私、片付け手伝いに行こうと」

「やめときな、おじさん達完全に出来上がってるから。」

「そうそう、なに言われるかわかんないよ。」

「さっきもさあ、ひどいんだよ、おじさん連中！」

こんなにカツコイイのが本当に彼氏なのかって。

彩ちゃんの彼氏なのを偽ってそう話してるんじゃないのかなんて言い出して…！」

ぶりぶりと怒る亜紀はなんだか可愛らしくて、苦笑しつつも和は観念して腰を下ろした。

「今日はノーコメントって言ったはずなんだけど。」

ため息混じりのその言葉に、智子がかからからと笑った。

「まあまあ、いいじゃないの。」

明日は朝ごはん、ちいちゃんとたあちゃんが仕出し頼んでくれるみたいなの。

いつもなら朝は早く起きなきゃいけないけど今日はゆっくり出来るって

必死で今おっさん連中、潰してるのよ。女子飲み会といこうじゃない？」

和はすかさず、未成年ですけどー？と声をかける。

「そうやってあんたは、可愛くないつつこみいれるからあんな奴らに色々言われんのよ？」

大体、和は容姿だってスタイルだって悪くないのに

雰囲気だけであいつらは駄目って決め付けるんだから。」

「そうだよお！さっきだって男連中で失恋パーティーだとか言っつてやけ食いしたりやけ酒したりしてる子けっこういたんだから！」

「失恋？ああ、彩ちゃんの彼氏かもしれないって話になったからか。」

智子と亜紀の言葉を受けてなおもそんな事を言う和を

これでもか、という力の強さで智子が頭を叩く。

和が痛さに悶絶して頭を抱えれば、盛大なため息が周りから聞こえた。

涙目になりつつも顔をあげれば、いつの間にか部屋にいた全員が円を作って
会話に参加している状態になっていた。親戚の女子一同が次々と声をあげていく。

「和ちゃんに失恋してショック受けてるに決まってるでしょ？」

「知らなかったんだろうけど和ちゃん結構人気あるんだから！」

「そうそう、彩ちゃんがいつも軟弱な男は認めない！って

ガード張ってたからわかんなかっただけだよ？」

「彩ちゃんダシにして近づく人間もいたくらいなんだから。」

数々の信じられない言葉に、和は目を見開いた。

そんな話は寝耳に水であり到底受け入れられるものでもない。

「…あの、それは、彩ちゃん目当てで私に近付いていたのでは…」

「まだ言う？だってさ、和ちゃんて私達にはけっこうずけずけ物を言うけど」

同年代の男共はそこも気に入ってる連中多かったんだって。

さばさばして話しやすいって。」

ひとりの親戚の言葉に、そうそう、と他の人間もうなずく。

「おじさん達には何言われても我慢して無言でできばき動く姿勢も健気だよなって言ってたし。」

「姉のフォローとかする姿もしっかりしてて

甘えたいとか言ってる奴もいた。」

「逆に自分の前だけで泣いてほしいとか言ってるのもいたよね。」

「ああ、それ、真吾兄まごあたりが言ってた！？」

「静かに本読んでる所をみたことある親戚なんてさ、

あいつけっこう綺麗じゃねえ？とか頬染めたりして？」

「さりげなく優しいしね、和ちゃんてー。私も一緒にいてラクだもん。」

「ああ、そうそう。面白いのもあるけどね。」

「地味なオーラを解除するとすごい可愛くなるよね、途端に。」

「学校ではどうなの、けっこうモテるんじゃないの？」

「それでもクールだし、鈍いから彼氏できたの超意外だったけどね。」

ぼんぼんと飛び出すとんでもない言葉の数々に、和は処理できそうもない。

とりあえず、彼女達の言葉が嘘ではないのだとしたら

和は陰で何人かの親戚に好意を寄せられていたということになるが頭の中に回る言葉は、ありえない、に尽きる。

我慢できなくなり、和はついにそれを口にした。

「ありえない。言っただとしたって絶対に冗談とか、ふいにとかだよ。」

あとほら、ここに居る間っていわば普段と違う生活なわけじゃん。

特殊空間に入れられる事によって異性に対するハードルが一気に下がって

私みたいな平凡女子にもそんな事思ったんじゃないの？

だから外に戻ったら私のことなんかなんとも思わないよきつと。」

つらつらと流れるように話す和に、皆呆れた顔を向ける。

自分はないにひとつ間違っていないと思っっている和にとって

彼女達の言のが余程理解できない。

それでもむこうはむこうで同じように信じられない、と

言いたげな視線を和に向けている。

目を細めて和になんともいえない視線を送るのは、智子だ。

「…彼氏、相当独占欲強いらしいじゃない。」

「え、は、はあ…まあ。」

「あんたがそんなだからなんじゃないの？」

「勘は良くせに異性に対してはとんと鈍いんだから。」

「ああ…それは、何回も言われた事があるけど。」

「やっぱり！イケメンを困らせるんじゃないわよ！」

「え、イケメンじゃなきゃ困らせて良いの？」

「あと和泉君でけっこう残念なイケメンだよ。」

「何言ってるのよ！イケメンは七難をも隠すのよ！！」

智子の面食いは今に始まったことではないが、

和はそれに眉間に皺を寄せつつええ〜、と声を上げる。

色々な彼の所業はあの顔で隠せるものだろうか。

「でもさあ、和泉君でそれこそ女性ホイホイみたいに
周りから女の子が群がってくるんだよ。」

「そんな彼氏面倒じゃない？智ちゃん、浮気ありえない！つて
すごい言ってたじゃん。嫉妬とかもすごいするんでしょ？」

「あいつ、学園のアイドル化してるから相手すんの大変だよ。」

毎日喧嘩になるよきつと、と和が言い募れば、

周りの連中がきゅきゅと声を上げた。

「えー！和ちゃんはどつなの？嫉妬とか！」

「私？なんとも思わないけど…。」

「うっわ。さすがクール…！」

「私だつたら嫌かも…彼氏が学校歩いてるだけで
女の子の視線が集中するってことでしょ？無理ー！」

「学園のアイドルかー、でもあの容姿ならなるかも。」

「そこらの芸能人よりかつこいいもんねえ！」
「愛想もいいわけ？」

雄大に言った事を繰り返すようになったが、和はうなずく。

「基本的に他人には優しいんじゃないかな。言葉遣いも柔らかいし。勉強も運動もまあ出来るほうだし、要領も悪くない。」

「なにその完璧男ー！」

「そんな彼氏ほしいいいいい！！！」

「え、まさか和から告白したんじゃないんでしょ？」

「まさか。あんな目立つ男、隣に並ぶのだって嫌だったのに。」

和のそれを受けて、じゃあ告白はむこうからなんだ、と何人かが目を丸くする。

しかしそのうちひとりの親戚がああ、と声を上げる。

「彩ちゃんが言ってたよ、そういえば。」

なんかだいたい長いこと付き纏われたって？」

「あー……」

「え、待って。告白されて振ったわけ！？」

「最初は、そうだけど。」

和が目泳がせながらぼそり、と呟けばありえな〜い、という声が響き渡る。

そろそろ話し疲れたと思えば、和はなんとなく眠たくなってきた。まだ21時過ぎだというのに。

腕時計をみつめて、ああ、本読みたいな、などと関係ない事を考える。

けっこう話したし、そろそろ解放されても良さそうなものだが。

そのとき、襖ががらり、と開いた。
顔を出したのは親戚女性のひとりである。

「ついに最後のひとりが潰れたわよー！みんな宴会場に移動しろー
！！」

その言葉に、部屋が一齐に沸く。

和はいえば、こそこそと反対方向へと消えてしまおうとしたが
智子に首根っこをつかまれてしまう。

「逃がすわけないでしょ。」

今夜の酒の肴はあんたよ！さ、いらっしやい！！！」

おほほほほほほ、という甲高い笑い声が廊下いっぱいに響き渡り、
和は絶望の二文字を頭に浮かべながらもおとなしくひきずられてい
った。

第八十話「(一部に特化して)盲目的な彼女・その5」 (前書き)

八十話突破！ここまで読んでいただいております。ありがとうございます。

第八十話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その5」

「ふああ…」

大きなあくびをひとつして、和は顔を洗いに長い廊下を歩く。窓から差し込む朝日に目を眇めながら、昨夜の事を反芻していた。

宴会場にひきずられ、和がまずしたのは

彩の携帯電話を奪ってデータをすべて検分する事であった。遥のデータはまだ良いが、和はひとつ思い当たる事がありそれがとても気になったのだ。

やはり、と思った和は、文化祭でのコスプレ姿を問答無用で消去すれば

涙目になる彩に携帯電話を投げてよこした。

そこから先は、思い出したくもない質問の嵐だ。

散々遥のことを弄られからかわれ、彩は隣にべったり張り付いて離れない。

そんな状況で、和はとにかく悪態をつけることだけが喜びだった。

洗面所へと辿り着けば、

和は顔を洗い、鏡の中の自身をみつめる。

どこにでもいる、普通の女だよなあ、と頭の中で思えば

昨日の話を全く信じられることのできない和は首を傾げるしかなかった。

その場をあとにして部屋へ戻る途中、

こちらに歩いてくる三人組へ出くわした。

朝から疲れなければならぬのかと人影に一瞬身を強張らせたが、目の前にいる人間は自分と同じく歳若い親戚だけだった。皆、和より少し年上の男たちだ。

和は笑って、おはよう、と声をかける。

「女の子じゃないんだから三人一緒に仲良く顔洗いに行くの？」
「うるさいよ、和は。朝から口が減らねえなあ。」

苦笑してひとりの親戚が小突く。

その隣にいるのは、真吾という親戚だ。

昨日の会話に出てきていた事を思い出して、和の心臓が変な動きをみせた。

両隣にいるふたりは、笑ってぼんぼん、と真吾の肩をたたけば、先に行ってるぞ、と声をかけて去って行ってしまふ。

和はそれに僅か狼狽したが、意識するのがなんだか自意識過剰に思えて

その考えをどうにかとっぱらおうと必死に思考を働かせていた。

「……な、和？」

そんなときに名前を呼ばれて、和は一瞬びく、と震えたがなんとか笑ってなあに、と返事をする。

「彼氏できたんだって？」

「真吾君もそれ言うー？もう、皆ずっとその話題出すんだよ。昨日の夜なんて散々だったんだから。ったく彩ちゃんももう。」

「……ほんと、なんだよな。」

「え、うん。あの、なんか……どうしたの？元気ない……？」

顔をのぞきこむように和がかがめば、泣きそうになっている真吾の顔がうつる。もう一度名前を呼ぼうと口を開けば、真吾が和の腕をひっぱる。あ、と思った瞬間には、もう和は男の腕に抱かれていた。

驚いて、指先ひとつ動かすことができなくなる。

「し、し、真吾、くん？」

「……俺さ、けっこう本気で、和の事好きだったよ。」

「！」

「まあ、彩ちゃんに不合格通知もらってる時点で

ほんとは諦めなきゃいけないのかもかもしれないけどさ。

でも……なんていうか。俺にだけ甘えてくれたら可愛いだろうな、とか思ってた。」

「……真吾君。」

「ま、鉄壁の壁をぶち破れなかった俺の自業自得だよな。

ごめん、言われたって困るだけなのに。」

す、と身体を放しながら、真吾が泣き笑いのような表情を作る。

和は、その言葉に勢い良く首を振った。

「ご、ごめんね、自分なんかが、誰かに好かれるなんて考えた事もなくて。」

「……彼氏いるのに？」

「それだって、ずっと信じられなかったから。」

和泉君は、四ヶ月間ずっと毎日私に言葉をくれてたの。」

「毎日？」

目を丸くする真吾に、和は苦笑してうなづく。

それに、真吾はぐしゃぐしゃと髪の毛をかきまわした。続いてとても長く息を吐く。

「…かなうわけねえな、俺みたいなの。」

「いや、あれと比べたら皆そうだと思うよ。異常だもんはつきり言つて。」

「でもそいつが良いんだろ？」

「私もたいがい変な奴みたいだからね。」

「みたい、じゃなくてそうなんだよ。……でも、好きだった。」

「……ごめんなさい。」

ぺこ、と頭を下げれば、真吾は和の頭をくしゃりと撫でた。

「ありがとな、すつきりした。」

そう言つて笑つて、真吾は和の横を通り過ぎていく。

和は泣きそうになる自身を叱咤しながら、なんとか平静を装つて歩き出す。

自分のような人間を、そんな風に想つてくれるのはなぜなのだろう。親戚一同の言葉がずっと信じられなかったが

和はひよっとして本当なのだろうか、とどこかで考えていた。

とぼとぼと落ち込んだ様子で歩く後姿を僅か開いた襖の間からみつめながら、

出て行くかどうするか戸惑っている腕を引かれ阻まれる。

それにき、と視線を送るも相手は全く意に介する事無くにっこりと微笑んだ。

「彩ちゃん、今はそつとしておいたほうがいいよ。」

「でも、」

「見られていたと知ったらきつと和ちゃんはショックを受けるよ。」

その言葉に、彩は唇をかねて俯いた。

あんな悲しそうにする妹に、姉としてなにもしてやれない事が悔しかった。

「後藤君は、随分と冷静なのね。」

「どうということ?」

「だって、和が、目の前で告白されたのに。」

その言葉に、後藤は首を傾げる。

彼女の言っている意味が良くは理解出来なかった。

「確かに、少し驚きもしたけど…別に。」

「ショックじゃないの?」

「どうして?彩ちゃんが誰かに告白されたなら、焦るかもしれないけど。」

「……………もういいでしょ、ここに隠れてなくても。私部屋に戻る。」

「彩ちゃん、何を怒ってるの?」

「怒ってないわよ!」

そう言いつつ、彩は怒鳴りながら勢い良く襖を開け放せば

廊下を小走りに進んで行ってしまふ。

その様子にため息を吐きながら、どうしたものか、といった風情で後藤が前髪をぐしゃり、と握りつぶした。

「和ちゃん、ありがとねえ。今日で三が日は終わりだから
嫌味な連中相手にするのは今日で最後だよ。」
「またそんな。おばさんてば。」

雄大の母である中村のおばは、おおよそ和に優しくかった。
ここは父親もそうで、昔から和を可愛くない、などとは言わない。
いつも、それぞれの良さがあるとかばってくれていた。
だからこそ、雄大とも仲良く出来たのかもしれない。

正月からの集まりである場合、
毎年三が日だけは毎食全員がいつしよにご飯を食べる事が通例にな
っており、

それを過ぎると各自が自由に買出しにいたり、
大体がその世帯ごとに面倒を見るようになるのだった。
つまり、あのような席も三日になる今日が終わってしまえば開かな
くなり、

大量の嫌味を浴びせられることもなくなる。

雄大の母は、そのことを言っていた。

仕出しの弁当に付ける味噌汁と緑茶を用意する台所と
弁当をひとつひとつ並べる為に宴会場とを行き来しつつ、
和はその言い草に笑って応えていた。

おば連中には、良く手伝いをする和はおおよそ優しくされている。

一部からは批判めいたこともたまには言われるが、さほど気にならなかった。

箸を並べていく和を、また違う家の親戚が笑いながらつつく。

「和ちゃん、昨日、おばちゃんも写真みちゃったわよあ〜イケメンじゃないの、あんな良い男つかまえちゃってえ!」

「ちょ、勘弁してくださいって。」

このこの、と言われながらからかう親戚連中に

和は苦笑したり照れたりと反応を示しながら働く。

たまにちくりと、地味なのにそういうのはうまいなんて和ちゃんもけっこう女なのね、などと言われたりしたがそれにはどうなんですかね、と曖昧に笑いながらかわしていった。

朝もきつと、同じような事を男連中から言われるのだろうと思えば和は憂鬱だった。

腕時計を眺め、そろそろかな、と思えば、近くの親戚に声をかける。

「おばさん、女子部屋行ってきますね。」

「ああ、いつも悪いわねえ和ちゃん。お願いねえ。」

はい、と返事をしつつ、和はぱたぱたと目的地へ向かった。

「はいはい、みなさん、そろそろ起きましょー!」

もう朝の7時ですよー!!」

毎年、女子部屋の皆を起こすのは和だ。

手伝いをするからというのもあるが、普段から朝は早い為

それほど苦痛にはならない。

まだまだ酒が抜けていない二十代のお姉さま連中を中心に起こしつつ寝ぼけた様子の十代には適当に声をかけていく。

「ほら、智ちゃんも起きたおきた！あんなに呑むからだよ！」

二日酔いの薬、あとで誰かに買ってきてもらおう？」

後ろから智子の両脇に腕をまわしつつ上半身を起こす。

こうでもしないと、彼女はなかなか目を覚まさないのだ。

「んんんー…私朝食いらないいい…。」

「山田家にちくちく言われるのが大丈夫ならどうぞ、でもそうじゃないなら起きましよう。」

「むー…」

まったく、と笑いながらそれぞれを起こしていくが、そのときふとあることに気が付く。

「あれ、彩ちゃんがいない。ねえ、亜紀ちゃん、お姉ちゃん知らない？」

「ん？あれ、そういえばいないねえ…どこ行ったんだろ？」

寝起きが悪い姉にしては珍しい。

心の中でそう呟きつつ、和は首を傾げるもそこまで気に留める事なく全員を起こす作業を再開した。

そろそろ朝食の席に着く人々を目で追いつつも、

その中に彩がいないことを確かめれば和は落ち着かない。

お茶を配る女の子達をちらちらと視界にうつしつつ、

和は席を立つて探しに行こうかと考える。

一旦腰を浮かしかけたところで、後藤と揃って彩が入ってきたので和は安堵の息を吐いた。

そうして、何事もなかったかのように彩がお茶汲みへと加わるとまた親戚のひとりから和ちゃんは座っているだけか、と嫌味が飛ぶ。しかしそれに反論するでもなく笑いながら親戚をまわっていく彩を和はどこかおかしいと眉を顰めてみつめる。

しかし彩の様子になにを思ったのか、

山田や斉藤はどんだんその口を調子良く開き和を責め立てる。

ついには彩以外の人間が朝からいいかげんにしたら、とふたりをたしなめる結果になり、

知恵や多恵もごはんがまざくなりそうねえ、と

ほえほえとした声で言い添えてくれたおかげでふたりは黙ったがそれでも、その激しさが落ち着いただけでちくちくと何かしらは言われ続けた。

結局朝食の間、和がなにを言われても

彩の口から妹を擁護する言葉が発せられる事はなかった。

後片付けもそこそこに、様子が気になって仕方なかった和は彩がいらないかと女子部屋へと走った。

なんとも苛立つ朝食ではあったが、それ以上に彩が気になってしまい和は朝食の味がまるでわからなかった。

走って辿り着いたその部屋に慌てて駆け込むと、
部屋の真ん中にぼつん、と座り込んだ彩がいた。
どうやら皆出払っているらしく、ここに居るのは彼女だけだ。

和は少し控えめに、お姉ちゃん、と彩に呼びかけてみる。
すると、座っていた彩がゆっくりと和の方を向き、
和の存在を確認するかのように妹の顔を凝視する。

どうしたらいいのか逡巡し、結局和はそのまま棒立ちしていた。
そうしてしばらく彩が和をみつめていると、
彩の瞳が揺れ、ぼろぼろと涙を流す。

和はそれに目を剥いて、姉の名を呼ぼうとしたが
そのまえに彩が突然立ち上がり、和に体当たりをするかのように抱
きついてきた。

慌てて受け止めようとしたが全体重をかけられたその身体は
ただでさえ反応が遅れたので、結局支えきれずに彩と一緒に倒れこ
んでしまう。
すっかり布団もしまいこまれたので、
なにがクッションになるでもなく、ふたりは畳の上に強か身体を打
ちつけた。

「いったたた：あ、彩ちゃん？大丈夫？」

和がうめきながらも彩に声をかければ、彩がふるふると首を振った。
一瞬どこか痛めたかと思っただが、
きつとそういう意味合いではないだろうと考えを改めた。

「私……和が大好き。」

「うん、ありがとう。私もお姉ちゃん好きだし大切だよ？」

倒れこんだ状態のまま、和は彩の背中をぼんぼんとあやすようにたたいた。

彩がそれにひいつく、と喉を鳴らす。

「……………進君も、同じくらい、好き。」

「！……！」

彩の小さく呟かれた言葉に和が目を見開く。

しかし何かを発する事無く、和は次の言葉を待った。

「…だから、駄目よ。」

「え？」

「駄目なのよ。彼は…駄目なの。」

「彩ちゃん？なんで？両想いなのに…？」

「違うの。」

「え？」

「……………和、私やっぱり、和がいちばん大切。」

「彩ちゃん？」

「ずっとずっと、私は和がいちばん好きよ。」

「そう？ありがとう、彩ちゃん。起きようか。」

よっこいせ、と言いながら和と彩は倒れた形から座る態勢になる。

顔を見てみると、彩は涙でぐしゃぐしゃになっていた。

和は苦笑して、彩の顔を丁寧に拭いてやる。

「ねえ彩ちゃん。進君とちゃんと話してみたの？」

「……………したわ。」

「ふうん。…他に好きな子がいるとでも言われた？」

「……………。」

「だったらなんですっとお姉ちゃんの周りをうるうるして

ずっとお姉ちゃんのこと好きだなんて言うの？意味ないじゃん。」

「それは、私が…」

「彩ちゃんか？」

その先を促してみたが、彩は唇を？んだまま、なにを言うこともない。

和はこれ以上何を聞き出すのも無理だなと思えば、立ち上がる。

その様子に不安気に瞳を揺らす彩だったが、

和が一言、智子を連れてくる、と告げれば、安心したような表情を
してうなずいた。

こういうときは、自分では駄目なのだ。

和は急いで宴会場へ向かうと、何人かの親戚と話し込む智子に耳打
ちし

うなずいた智子は小走りに女子部屋へと向かって行った。

「…進君どこにいるか知らない？」

「進？進なら確か台所だったと思うけど。」

智子と話し込んでいた親戚に進の居所を訊いてお礼を言い、

和はすぐにまた台所へと走る。

異変に気が付いたのか、和の後姿をみつけて雄大が呼び止める。

廊下を走る和の手首を彼は掴んだ。

「おい、和って！どうかしたのか？」

「雄大：おはよう、ちよつとね。」

「…恋人となんかあったのか？」

「へ？違うよ。彩ちゃんの事。朝様子おかしかったでしょ？」

「え、あ、ああ…そうだったっけ？」

雄大は、朝の席で和が詰られるのを庇いたくともなかなか口に出れない自分に苛々してばかりで、そのあとはずっと和のことをちらちらと視界にうつっていたので彩の様子などまったく気に留めていなかった。

「そうだったって…：そつだよ。ごめんね、雄大、ちょっと急いでるから。」

「あ、ああ、悪い。」

短く言つて掴んでいた手首を放したとき、和はまた慌てて廊下を走り去っていく。

雄大は、掴んでいたその手首の細さに驚きながらこみあげる自身の恋心に、せつないため息を漏らしていた。

「進くん。」

「あれ、和ちゃん？どうしたの。」

台所で食器棚に湯呑みをしまいつつ、和の声に進は返事をする。和は隣に立つと、進の仕事を手伝いながら声を潜めた。

「彩ちゃんの事有话があるんだけど。」

「………わかつた。」

首肯すると、進は作業速度をどんどんあげていく。その様子に周りが不思議そうに目を丸くしていた。

誰も居ない事を念入りに確認し、和と進はお互いにうなずく。和はまわりくどいことはやめようと、直球で思ったままを口にした。

「単刀直入に訊いちゃうけど。」

彩ちゃんに、なにか誤解させるような発言しなかった？」

「誤解？なにを？」

「多分だけど、彩ちゃんは進君が私を好きだと誤解してる。」

「え、……………」

驚いて目を開きかけた進だったが、眼鏡をくい、と上げると何事かを得心したかのようにうなずいた。

「心当たりがあるの？」

「あ、ごめん、そうじゃないんだ。誤解に至った理由の方じゃなく、彩ちゃんがそう誤解してたって事実のほうの心当たり。」

今までの彩ちゃんの不可解な発言の意味はそういうことだったのかと。」

「不可解。」

「うん、和ちゃんに恋人が出来たのは気にならないのか、とか和ちゃんが告白されてなんとも思わないのか、とか。」

「！…のぞいてたの？悪趣味な。」

進の発言に和がぎろ、と睨めば、進はばつが悪そうに頭をかいた。

「偶然だったんだよ。まさかあんな場面に遭遇するとは思わなくて…真吾の気持ちも汲んでやりたかったから、」

なんとか止めようとする彩ちゃんを近くの部屋にひきずりこんで。」

「…そう、ありがとう。」

眉間に皺を寄せてため息を吐きながらもお礼を言った和に、
ごめんね、と進が苦笑した。

「にしても、そんな発言ばっかされてて何で気付かないわけ？

ったく、察しが悪いにもほどがあるわ。あんだけ追っかけまわして
おいて！」

「…鈍い云々は和ちゃんだけには言われたくないなあ。」

「私は、自分にそういう感情を向けられる事に特化して鈍いのは
否定しないけど、それ以外の他人の機微には敏感ですよ？」

「まあ、そうだけどさ。その自負があるからこそ鈍さに磨きがかか
るんじゃない？」

「……………ああー、そうかもね。」

「そうそう。」

「まあ、うん、その、気を付ける？」

「…彼氏、気苦労が耐えないだろうね。」

「そこはね、けっこうお互い様なんだよ…。」

はああ、と息を吐く和に、進は少し噴出す。

和はそれが少し気に入らなくて、口を尖らせた。

「にしても厄介だよ。ああなったら彩ちゃんなかなか信用しない。」

「口で違うって言うても駄目ってこと？」

「そう。根が深そうだし…ありゃあ、けっこう前から思い込んでる
なあ。」

「和ちゃんは どうして気が付いたの？」

「んー？なんで他に好きなひとがいるのに彩ちゃんに近づくわけ？
って

訊いた後、彩ちゃんがそれは私が、で言葉を切ったから。」

「それだけ？」

「いや、十分でしょ。それは私が、のあとに続く言葉で和のお姉ちゃんだから以外にしっくりくるの思いつく？」

「……………」

「ね、ないでしょ。多分なんて言ったけど、私はそれ以外ないって確信してる。」

「やっぱり勘は悪くないのにな。」

「うるさいなあ。……………でも、どうすんの？」

私がおか言ったところで、彩ちゃんは余計に頑なになるだけだと思う。

なんせ彩ちゃんの中では私が進君の想い人なわけだし。」

「……………」

「とにかく、どうしてそう思うに至ったのか色々と探ってはみるけど。」

進君はこれからも彩ちゃんにちよっかい出し続けるしかないかね。」

「それで、混乱が頂点に達した彩ちゃんが本音を言うのを待つ、って？」

「結局それしかない気がします。」

「……………そうだね、いいよ。長期戦にはもう慣れたから。」

そう言って笑う進の瞳は、時折、肉食獣のようになる遙を和に想起させた。

まずいところをつついてしまったらどうかと一瞬思ったが、

それでも彩の心は彼に傾いているのが確信できたわけであるし、とりあえず進と彩の問題であろうと和は見守る決意を固めた。

「……………手加減はしてあげてよ。」

「やだな、和ちゃん。今まで手加減なんてたくさんしてあげてたよ。それで駄目だったんだから、……………わかるでしょう？」

和の言葉にそう発言した進が、ますます遙とだぶってみえれば姉妹そろってこういう男にかまる運命だったんだろうか、と和はどこか思わずにはいられない。

とりあえず引き攣った顔でお手柔らかに、と言ってみればもちろんだよ、と進は微笑む。

はっきりと言ってしまえば、その言葉を和はまるで信用できなかった。

部屋から出た進と出した結論は、

とりあえずなるべく一緒に行動するのはやめておこう、という事だった。

これ以上彩にいらぬ誤解をされない為の最低限の措置である。

和は姉に対してなにもしてやれない事が悔しかったが

それでもこういう問題は外野がうるさく言つと余計こじれると和はわかっているし、

落ち込む彩を元気付けるくらいには役に立てれば、と気持ちを立て直した。

廊下を進と別方向へ歩き出した和は、震える携帯電話にびく、と身体を揺らした。

ちようど話し合いが終わったところへの着信だったので、

そのはかったようなタイミングに和はどこかすっきりしないと感じれば

しかし今そんなところに気を回しても仕方がない、と息を吐く。とりあえず電話に出ようと和は震える携帯電話を取り出した。

「…もしもし。」

『おはよう、和。』

「……………本気で一日三回とかかけてくる気なの？」

『だって、近くにいないのに声も聞けないなんて耐えられないじゃ

ないか。』

「和泉君で、遠距離恋愛とか向いてなさそう。」

『大丈夫だよどこにでもついていくから。』

「左様で。」

反論するのも面倒で、和は呆れた声で返事をする。

廊下の壁に背中をあずけながら、和は遥の次の言葉を待った。

『会いたいなー。』

「別に、二、三日会わなかった事くらいいくらでもあったでしょ？」

『学校で顔を見ることは毎日できたし、』

付き合い始めてから長期休暇を迎えたの今回が初めてでしょ？」

「ああ、まあ。だから？」

『冷たいなあ、もう！だから寂しいの！』

付き合う前はさ、会っても色々出来ないから嬉しいのと同時に
せつなくなったりもっと寂しくなったりしてたけど。

恋人になってからは会えば抱きしめてもキスしても和は怒らなくな
ったから。』

「…まあ、その時々にもよるけどね。」

どこでもそれを許しているような事を言わないでほしいと思ったか
らこそその

和の反論であったが、

電話口の遥からはなおも不満気な声があがる。

『そういう細かい事につっこまないでよう、和の鬼畜！』

とにかく、俺は！和に触れられないのが嫌だって言いたかっただけ
！』

「だったら最初からそう言えばいいのでは。」

『…和が冷たいことばかり言う。愛が感じられない。』

可愛い恋人からの愛がほしい……。」

「えー、昨日ちゃんと伝えたじゃん。」

『昨日は昨日。和、大好きだよ。』

「だから毎日言うことじゃないだろっていうさあ……あなた本当アレだよ。」

『和限定だよ。』

「それもいいかげんやめようよ……。」

はああ、とため息を吐いたところで、廊下に足音が聞こえてくる。和は素早く「ごめん、ちょっと切る」と一言残して電話を切った。懐にしまったのと、人物が見えたのはほぼ同時であった。

親戚のおじ連中が、なぜか何人かで固まって歩いてくる。

和は素早く何事もなかったかのように装いながら、歩いてくる人間達に向かって頭を下げ挨拶をした。

「おはようございます。」

「……ああ、朝食のときに挨拶しなかったのは和ちゃんだけだったね。」

「……ごめんなさい、色々と忙しくて。」

「気にしないでいいよ。縁の下の力持ち、なんだろう?」

「まあ、それすらなかったら和ちゃんは本当に何も出来ない女の子だものねえ。」

「せめて容姿が特別可愛いとかだったらまだ救いもあったのに。」

くすくすと笑う彼らに、和は無表情にそうですね、と返事をする。

「彩ちゃんも、可哀想になあ。和ちゃんがそんなだから

よその家よりふたりぶん愛想をふりまかなきゃいけない。」

「いやいや、彩ちゃんが和ちゃんのぶんの愛嬌も全部とっちゃった

んじゃないか？」

「…ああ、そうかもかもしれませんね。お姉ちゃんは本当に可愛いですから。」

今ちよつとどこにいるのかなってさがしてたんです。」

いまだ自分を笑う連中にあつちもみてきます、と一言告げて

和は気持ち速度をはやめて廊下を歩き出した。

遙にどろどろに甘やかされて、そのあとに冷水を浴びせられたような状況は

どこか夢から覚めてしまったかのような気分だった。

懐にしまった携帯電話をもう一度取り出してみると

焦っていたようで折りたたみ式のそれが開きっぱなしになっている。

和はため息を吐いてそれを無言で閉じた。

閉じたその音が、夢の終わりにさえ思えてしまって、

馬鹿な事を、と自身でその考えに苦笑する。

それでも、彼女の中の小さな不安は完全には取り除けなかった。

第八十一話「一部に特化して」盲目的な彼女・その6「(前書き)

ごめんなさい、今回ちょっと暗いです。

第八十一話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その6」

「今日で最後か…。」

一月三日の夜。

今日が過ぎればおじさん連中に嫌味を言われる頻度は格段に少なくなる。

そう思えば、和はどこか沈んだままの気持ちも浮上できる気がした。

遠目から、雄大は支度する和をみつめていた。

今は和も雄大も、料理を運んだり

食器を出したりと忙しく動いている最中で、なかなか話しかけることができない。

どこか彼女の表情が曇っていると思えば、

ひよっとしてまた何か言われたのだろうかと心配になる。

雄大も、和と同じでひとが大勢集まる場はどこか苦手だ。

けれど女性である和と違って愛想がないと嫌味を言われたりなにか手伝いに走ったりとそういう苦労をせずに済んでいる。

ここでは、男のが逃げ道が多いということを雄大は知っていた。

だからこそ、理不尽だと感じるが

それでもおおっぴらにかばえないのは

そうしてしまえばより彼女の立場が悪くなると

雄大は知っているからだ。

いや、自身の立場も面倒なものになるからかもしれない。

そうならなかったで、家族全員がここに来る事をしなければいいが雄大ひとりの勝手だけでそれを強いるのはどうしたって憚られた。彼自身、親戚のことは少し面倒だと感じるが

ここに来るのはやはり嫌いではない。

知恵と多恵も、同年代の親戚達も、ここで会って笑い合っつのは楽しかった。

大人たちだって、本当は和がいい子だとわかっているはずだ。

それでも従わせたくないのは、

輪からほんの少し外れてる人間をどうしても許せないからなのだろう。

自分達の常識と照らし合わせて、

そう振舞えない彼女を、彼らは忌避したり排除しようとする。

綺麗な円から少しずれて歪になるのを全力で阻止したがるのだ。

あの年代特有の価値観も、雄大のような若い人間にはなかなか理解出来なかったし

したいとも思わなかった。

自分の両親がそうだった種類の人間ではなかった事は

彼の救いだっただかもしれない。

味方になってくれる大人も多いが、少ない言葉でも長年聞かされればどうしたってそのひとの傷になる。

和がどこか異性に対して無防備なものも、

女性としての自身を軽んじるのも、ここの連中のせいだと雄大は思っている。

きつと、他の連中もそうだろう。

そう思ったとき、雄大は考えたくもない

和の恋人の事をふと思い出してしまふ。

あの電話での少ない情報だけでいえば、彼は和にたくさんの言葉を与えられる男なのだろう。好きだと毎日のように囁いているのかもしれない。

それくらいでなければ、彼女は相手になにかを任せる気にはならないかもしれないと思えば、

雄大は自分と彼女では無理なのかとどこかで諦めそうになる自分を感じる。

それでも、挑発めいたあの言葉が、雄大の心に火を点したのは確かだ。

自身の目の前で放たれた好きだという愛の告白。

お前には到底できやしない、と言われていたようで雄大は悔しかった。

いや、事実彼はそう伝えたかったのだろう。

それが、たとえ告げても和は揺らがない、という絶対の自信があったのか。

それを思えば、雄大は略奪までいかずとも、

告げたいという気持ちを止められそうもなかった。

そして、出来る事なら、そう意識してもらおうことで

新しい感情を彼女の心に芽生えさせることができるなら、と燻る想いを胸に抱いて、そんなことを希うのであった。

「なあ。」

和をみつめたままぼんやりと考え事をしていれば、

雄大は横から突かれて意識を浮上させる。

隣を見れば、そこにいたのは自分よりひとつ下の親戚だった。

「なんだよ良人、お前も働け。」

「わかつてるよ、今ちようど箸並べ終えたところなんだって！」

それよりさ、聞いた？」

「はあ？なにをだよ。」

「真吾君がさ、和ちゃんにコクったんだって！」

『コクった』というなんとも軽い表現に雄大は眉を顰める。

いかにも高校生らしいその響きは、

しかし雄大にとって適切な表現とは思えなかった。

今時堅苦しいと言われようとも、告白、という言葉まで

簡略化してしまう若者言葉はいかがなものだろうか。

それとも、現代を生きる十代達にとって、

想いを伝えるという行為はその言葉通り簡単なものになってしまったのだろうか。

自身も同じ世代でありながら、どうにも違和感を覚えてしまう。

雄大は、彼の事が嫌いなわけではなかったが

同じクラスになったとしてもあまり話さない人種だろうな、と頭の隅でぼんやりと考えていた。

しかし言われたそれはとても衝撃的なものだったので

雄大は思い切り反応してしまわないように平静を装うのに必死になった。

それでも少し瞳が揺らいでしまい、

いつもあんなに詰られても曖昧に笑う彼女を

改めてすごい女の子だ、と思わずにはいられなかった。

とりあえず、なんとか口を開いて目の前の彼を窺ってみる。

「…そんな事をあまりぺらぺら言うもんじゃないだろ。

将来、お前も斉藤じいとか山田じいみたいに性格ひん曲がるぞ。」

「えー！そんなの絶対しないって。

でも和ちゃん断ったらしいよ。今の彼氏とうまくいってんだね。」

付き合ってもう三ヶ月くらいらしいんだけどさ、

倦怠期とかくる時期なのにラブラブってすごくない？」

「！もう、そんなになるのか？」

「みたいよ。あー、俺も彼女ほしーなあ。」

「お前、夏に付き合ってる子がいるって言ってなかったか？」

「もう別れちゃったよ。なんか俺もたないんだよね、なんでだろ？」

首を傾げる良人をみて、雄大は知るか、と吐き捨てて立ち上がった。

彼が一体どこからそんな情報を手に入れたのか気にはなったが

それが事実ならば雄大は先を越された、と思った。

そして、振られたという事実も、雄大の心に深く突き刺さる。

安堵と、やはり、という焦燥感。

自分も同じように振られてしまうのかと思えば

怖気つく心を必死で叱咤する。

振られても、それでも良いと思った。

地元に戻ってから、彼女にこまめに会いに行けば

自分達の関係もなにか変わるかもしれない。

そう考えて、自身を何とか奮い立たせた。

「彩ちゃん、もうごはんだけど…大丈夫？」

「ん？お姉ちゃんは大丈夫よ、和。」

「……そう？」

「そうよ。笑えるもん。」

ね？と言いながら微笑む彩に、和は不安気にならず。

ぞろぞろと廊下を宴会場へと歩く親戚の中に智子を見つければ
和はうかがうように視線をやる。
智子の瞳が困ったような色をしているので
やはりこの姉はまだまだ落ち込んでいるのだ、と思えば
和は小さく息を吐いた。

宴会場は、最後の夜というのもあってか
昨日以上に盛り上がっていた。

元旦からここにいる人間も少ないけれど毎年いるので
三日三晩、酒盛りを続けた連中もいるわけである。

和は食器を下げながら、よくやるなあ、と心の中で呟いた。
彩の様子を見てみればさすがというか

何事もなかったかのように、にこやかに酒の相手をしている。
和は姉も自身の役割をきちんとこなしてくれているのだと思えば
あと数時間頑張って働こう、と気合いを入れた。

「おい、ちよつとお前呑み過ぎだつて。」
「うるせーなー、大丈夫だよ！」

後ろから声がきこえてふりむけば、

二十代の男連中の一部がすっかりできあがっていた。

その中に真吾の姿がみえて、ひよつとして自分のせいだろうか
と眉をさげてみつめていれば

真吾とよく話す親戚のひとりが、和の視線に気が付いて
大丈夫だよ、というように苦笑してみせた。

和はそれに無言で縦にした手の平を顔の前にもっていき、
ごめん、というポーズをして応える。

きつと昼間も、彼の愚痴などに付き合ってくれたに違いない。

そう思えば、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「あー、しんごお！和ちゃんがこっちみてるぞお！」

「和ちゃん、振ってからこいつのこと惜しくなったあ？」

酔っ払った真吾の傍らの連中がとんでもない事を口にして

和は一瞬凍りつく。

それは他の連中も同じで、

周りにいる酔っていない人間達がなんとか黙らせようと必死になった。

しかしそれがいけなかったのだろう。

本気で押さえようとするその様子を見つけたおじ連中が言葉を拾って和にたたきつけてきた。

「なんだなんだ、和ちゃん浮気でもしてるのか？」

「二股なんてやるなあ。」

それに和が堪らずに頬を染め上げれば、

今度は女子連中が和をかばいだした。

「なんてこと言うのよ！」

「そうだよ、和ちゃんは真吾君の申し出をちゃんと断ったんだから！」

身持ちは固いよ、一途だよ！と和を囲いながら怒る

同年代の親戚達をみて、和は何故皆知っているんだ、と驚くもそんなに不思議なことではないか、と思考を必死に立て直す。

きつと誰かに目撃されたか、

なぐさめられている真吾の様子を不審に思った誰かが

その理由を訊いたに違いない。

「しかし真吾も変わった趣味してるなあ。」

「そうだよなあ、和ちゃんを好きになるなんてな。」

はははは、と笑う五十、六十代を今度は若い男連中が怒鳴りだす。皆酒が回っているせいか、どうにも喧嘩っ早い。

「おじさん達いいかげんにそれやめろよ！」

「別に和だつて可愛いじゃん！」

そうだそうだ、と

赤信号、皆で渡れば怖くない、よろしく一度もなかったおじさん連中に歯向かうという

この屋敷のバランスを崩すような行動を彼らは起こしてしまう。

こうなつてくると、

いよいよこの親戚で集まるこの会自体の存続が危なくなる。

和の懸念は的中し、そんな生意気な事を言っんならば二度とこの屋敷をまたがなくていい！

などとおじさん連中がヒートアップしてくる。

毎年奇跡のようにこうやってここに皆が集まれるのはそれぞれの均衡が保たれていたからなのだ。

確かに、おじさん連中が気に入らない人間は多い。

しかし彼らがいなければこの屋敷を管理してくれる大人がいなくなるし

知恵や多恵を大事に扱って様子を交代してみてくれるのも五十代や六十代の人間なのだ。

それらを労う意味をこめて、毎年こうして文句も言わず

にこやかにお疲れ様、と皆が彼らに酌をする。
そうして三日が過ぎれば、この人たちだつてそれ程無茶は言わなくなる。

たまに男は呑みに付き合え！とひっぱられることはあるが
それだつて財布はおじさん達なのだ。

こつちからしてみればたまつたもんじゃないが、
和を詰るのだつてある種、毎年のお楽しみなのだろう。

若い連中は完全にそれを見失ひ、

ああ別にこつちだつて好きにするよ！などと売り言葉に買い言葉で
応戦してくる。

和は一番避けたかつた事態にどうしたものかと狼狽するが
次に放たれた一言で、和は目を見開いた。

「ただの売女を笹森家は育てたらしいな。

地味ななりをして、男をたらしこむ能力だけは姉の分も根こそぎも
らつたららしい！」

そう言つて高らかに笑つ山田に、和は力が抜けていくのを感じた。

以前、遙の母である香苗にも同じように罵られた。

けれどそれは先方が誤解しているというのもわかつていたし
状況がまるで違つ。

和がなによりも嫌だつたのは、父や母や姉を侮辱されること。

自身のせいで、最悪の烙印を押された事に和は動揺を隠せなかつた。
もう、知恵や多恵に会いにここには来れないかもしれない。

それを思うと悲しくて、和は固まる。

『ああ、なんかあつたときとか親戚に援助頼んだりも出来なくなる
のか…』

ごめんなさい、と家族に心の中で謝っていると、激昂した雄大が怒鳴る声が和の耳に入ってきた。

「いいかげんにしろよ、おじさん!!!」

和がそんな事できないってあんただってわかるだろうが!!
謝れよ、言っつていい事と悪い事があんだろう!!!」

その剣幕に、中村の両親が雄大を止めに入るが、雄大はそれを振り払って和の隣へと立つ。

しかし、その言葉も耳に届かなかったのだろう。
斉藤はあるうことか嫌なうすら笑いを浮かべている。

「なんだ、雄大。お前も和ちゃんの事好きなんじゃないのか？」

その言葉に、雄大の頭の中は真っ赤に染まった。
正常な判断が出来なくなったのだろう。

「おまちなさい、雄君!」

知恵と多恵が声を揃えていった言葉も、彼には届かなかった。

「ああ、好きだよ!! だったらなんだっていうんだ、
てめーらに迷惑かけた覚えはねえよ!!!」

その言葉に、和はもうこれ以上受ける事はないだろうと衝撃を
またも強くその心に受けた。

親戚の女子一同が和を囲い、手を強く握る。
そのぬくもりだけがただ救いであった。

狂ったような笑い声が、宴会場に響き渡る。
それは何人かの中年の笑い声だ。

「やっぱり和ちゃんは男をたらしこむ天才だ!!」

いや、これなら結婚だけは早々にできるだろ良かったじゃないか!

「それどころか玉の輿だって乗れるかもしれないぞ!」

「金目当てに妊娠なんてしそうだなあ、

それこそ将来できちゃった婚なんてなったらいよいよ笹森家の恥だ
!」

愉快そうに笑うその声を破ったのは、がしゃーん!!という
けたたましい食器の倒れる音と、

ついで聞こえた鈍いどごっ!という音だった。

この宴会場では小さな卓がひとりひとりの席に置かれるのだが
なんと彩があるうことかそれを思い切り持ち上げて
床に強か叩き付けたのだ。

「これ以上、妹を侮辱すんじゃないねこのセクハラじじい共!!!」

私の和が、世界一可愛い和が、世界一途なあの子が:

金目当てでどこぞの男と結婚なんかするわけねえだろうが!!!

目えひん剥いてみてろよクソじじい共!

和は将来、絶対、ぜーったい、遥君と結婚するんだー!!!
!」

そう怒鳴る彩を止めに入ったのは、進だった。

叫んだと同時につかみかかりそうになった彩を
進が落ち着いて、と押さえ込む。

親戚連中は可愛がっていた彩に罵られた事に目を見開き、次には妹も妹なら姉も姉だ！！と真っ赤になつて切り返す。

しかし、これ以上の争いを、屋敷の主達は許しはしない。

『スパン！！』

鋭い音がして、その場に集まった全員が沈黙する。知恵が、手にしていた扇を卓に叩き付けたのだ。

「まあまああ、みんなちよつと熱くなつてしまつたわねえ。」
「そうねえ、落ち着きましようねえ。」

うふふふふ、と笑いながら一同を見回す。

「山田家を筆頭に、あなた達はちよつと落ち着きなさいな。おじさん連中が揃つてみつともないわあ。」

「若い人間に尊敬されるどころかこんな大人になりたくない、なんて思われるのは情けないし嫌でしょお？」

知恵と多恵の言葉に、おじ連中がぐ、と顔を赤くし押し黙る。

「笹森家や中村家の子達もねえ、お怒りはごもつともだわあ。でも大人への労いは忘れてはだめよお？」

「そうねえ、ここを維持できているのは、あなた達が嫌っている大人達のおかげよお？」

その言葉に、今度は若い連中も唇を嚙んだ。

「さあ、それじゃ、今日はこれでお開きにしましょう。おじさん達はお部屋にお戻りなさい。」

「そうして夫をたしなめるのはあなた達妻の役目だわ。」

今日は坊ちゃん嬢ちゃん達でここのお片付けをしましょうねえ。」

「「ね?」「」

知恵と多恵の有無を言わせない迫力に皆が従った。

父親世代、母親世代は夫と離れたって部屋に戻っていけば残された子ども世代で部屋の始末を始めた。

「和、先に部屋戻ってる?」

声をかけてくれたのは智子だった。

放心状態の和を気遣ってか、声がとても優しい。

周りの皆も、それに賛同するようにそうしたら?と言う。

「でも…私、私のせいでこんな」

「大丈夫だよ、別にいざとなったら皆で謝ればいいんだし。」

「そうそう、一回は言ってみてやりたかったからいいんだって!

和ちゃんのせいじゃないでしょ、そもそも。」

そう言っつて、ぎろり、と酔っ払い連中のほうを皆がみつめる。

元凶達はいえはすっかり酔いもさめてしまったのか、

蒼い顔をして謝罪の言葉を繰り返していた。

和にも何度も頭を下げてくる。

そこでふと、和は雄大の顔を視界にうつした。

彼は和の隣で不安気に和をみつめている。

「雄大……………」

「……………」

苦しそうな顔をする親戚をみて、和はついに堪えきれずに瞳から涙を流した。

我慢していた分堪え切れなかったのだろう。それをみて雄大が目を見開いたあと狼狽する。

「ごめんね、ごめん、ごめんなさい……………」
「な、和…」

焦点が合っていないような瞳で謝罪の言葉を繰り返す和にほぼ全員が声も出せずに固まっていた。

「和ちゃん、私達をお部屋まで送ってくれるかしら？」

その声を上げたのは知恵だ。

多恵も、ゆっくりと立ち上がり和の傍へと近付く。

智子が和を座り込んだ状態からなんとか立ち上がらせる。

「まあまあ、大丈夫よ、和ちゃん。」

「優しい子。優しくすぎてちょこつと困っちゃう。」

うふふふ、とふたりの可愛いおばあさんは笑う。

「今日は、いつか起こる今日だったわ。」

「そうよ、誰が原因でもないの。」

いつか起こる今日はそれがたまたま今日だった。」

「だからみんな、責任があって責任がないのよ。」

誰かひとりを責めてはいけないし、全員が知らん振りをしてもらえない。」

「愚かな大人が減って、傷付く子どもが減るだけよ。とても良いこと。」

「ええそうね。」

「ただ…間違えてしまったのはきつと、」

「ああ、それは、ここで言ってしまったては可哀想だわ知恵ちゃん。」

「…そうね、そうだね。きつとこの姿をみて、もうわかっているはず。」

うんうん、とふたりはうなずいて、それから和に微笑む。

和は、ぼんやりとした頭のまま、

知恵と多恵に挟まれて部屋をゆっくりと出て行く。

それをしばらく見守って、全員がはああああ、と深く吐いたため息は、

確実に部屋の空気をよどませたのだった。

それから、どうしたかは和はよくわからない。

気が付けば女子部屋に戻っていて、働かない頭がずきずきと痛んだ。考えるのが面倒になり、いつしか布団で眠ってしまった和を

戻ってきた女子が心配顔でのぞきこんでいた。

彩のそっとしておいてやって、という言葉に、その場の全員がうなずく。

和はその日、遥からの夜の電話に出る事ができないまま、

次の日の朝を迎えたのであった。

「……ん………？」

ぼんやりとした意識のまま、和は目をひらく。記憶がいまいちはつきりせず、今は一体何時なのだろうと働かない思考でぼんやりと考えていた。

服も昨日のままで、腕時計もつけられたままだ。

和はゆっくりと上体を起こせば時計の文字盤をみつめる。

周りが明るいから、きつと朝なのだろう。

そう思ってみた時刻は6をさしていた。

「………四日になったのかな。」

ポケットをぐそぐそと探ってみると、

携帯電話にこつんとぶつかる。

開いてみたら日付が四日になっていた。

やはり、あのまま泣いて眠ってしまったのか。

なんだか小さい子どもみたいだ。

苦笑して、和は顔を洗おうと静かに立ち上がって部屋を出た。

携帯電話を開いてみると、昨日出られなかった遥からの着信が一件

入っていた。

和は、それに眉を顰める。

『電話に出なかったのに…一件しか履歴がない。メールもない。』

普段の遥ならば、きっとありえない。

考えると和は動揺を隠せなくなって、顔は蒼くなり心臓が変な動きをみせる。

通常の和なら、もちろんこの異変になにかがあると突き止めただろう。

しかし、今の彼女はおよそ普通ではなかった。

昨日の出来事を反芻すれば、和は責任を感じずにはいられなかったしかばつてくれた人々すべてに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

皆、自分の為というよりも鬱憤がたまっていたからふいに噴出してしまったに違いない。

けれどもそれを誘発させた原因は自分にあるのだと思えば

和は悔しいやら悲しいやらで、唇を強く？んだ。

どうすれば、真っ二つに割れてしまった大人と子どもの仲を修復させることができるのか。

ある種、大規模な親子喧嘩であるが

どこからどう謝罪したものが、と和は頭を抱える。

考えなければいけないのはとにかくまずその事のはずだ。

そう思えば、遥の事はとりあえず頭の隅に追いやろうと思うのに和はどうしてもそれができずに、自身の心に嫌悪感を覚えた。

「あら、和ちゃん。」

声にゆっくりと顔を上げれば、おば連中が宴会場で座り込んでいた。どうやら無意識に足を運んでしまったらしい。洗面所はここを通らなくとも辿り着けたのだ。

「…おはようございます。」

力無く頭を下げれば、おば連中が無遠慮な視線で和を見てくる。

「昨夜は、随分たくさん男の子にかばわれてたわよね。」

「私達もね、あれは驚いたのよ。」

…今までそういう機微に鈍感な子だとばかり思ってたものだから。」

「それが蓋を開けてみれば、ねえ…。私達の手伝いをしていてくれたのも」

あなたのことだから関心を向けてもらおうと思っただんじやない？」

「女の子達は皆、少し嫌がりながらも私達の夫に酌してくれたりしていたじゃない？あなたはいつもそれをやらずにいて…」

ひよっとして随分と高飛車な性格なのかしら、なんて、ねえ？」

「若い男の子に媚を売るのはあんなに上手だなんて。」

汚い仕事は他の子に任せて自分は楽しようとして。」

私達おばさん連中だって、ずっと見下してたんじゃないの？」

和は、鉛のように固まって動けなかった。

さすが、女の言う事は男の何倍もえげつない。

そんな発想にいくとは思ってもおらず、和は8人のおば連中のなかに齊藤一家の妻が居るのを確認すれば

ああ、このひとがきつと巧みに意見を動かしたのだろうか、と合点がいった。

それでも、どこかしら自分に対して悪感情を抱いてなければつづいたってどうともならないはずで、

きつと彼女達の中でどこかそういった所が不満だったのだろうか。

和は、虚ろな瞳でおば達をしばしみつめていたが、
やがて大きな声が響いた。

「昨日の事まだ蒸し返すのかよ！いいかげんにろよおばさん達まで
！」

「…ゆ、雄大。」

かばうように和の前に立つ雄大に驚いて固まるままだったが
やがてこれでは逆効果だと思いを覚醒させる。
しかし、こうなってしまうてはもう遅い。

「あらー、やっぱり和ちゃんも男性を手玉にとるのがお上手なのね。
」

「うちの娘にもご教授願えないかしら。将来玉の輿かもー。
」
「やめなさいよ、そんな風に育てたら娘さんが可哀想だわ。」

そう言って笑うおば達に、また真っ赤になって雄大がなにかを言おうとするが

和がそれをさせなかった。

「まだ言うつも「やめて雄大。」

「…和、でも」

「やめてって言ってるでしょう！！！」

大声を上げて和が遮ると、雄大の瞳が揺れる。

和はそれにはっと気が付けば、ごめん、と呟いて
逃げるようにその場をあとにした。

『…もう、ここに来るのはやめよう。』

知恵にも多恵にも会えなくなるが、それでも。

こんなに嫌な思いをするくらいならば、もうここへは来たくない。
腫れた目からまたこぼれる涙は、どうしたって止まりそうもなかった。

第八十二話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その7」

「ねえ、和…朝からなにも食べてないでしょ？
お腹すかない？」

「ううん、大丈夫…。」

「でも、もう夕方だよ？町のほうへ行かない？

智子がね、車出してくれるっていうの。」

「私はいいから、お姉ちゃん達だけ行っておいでよ。」

「でも」

「彩ちゃん、お願い。今だけ、私の我儘きいてほしいの。」

今日ひとりで居る事を許してくれたら、明日には頑張るから…。」

「……………和…。」

女子部屋とは違う、主に具合が悪くなったりすると

運ばれる屋敷端の一室。

そこに和はひとりで布団を敷き、寝転がりながら本を読んでいた。

黙々と本を読み続ける彼女は、いつも通りといえばそうかもしれない。

けれど虚ろなその瞳からは生気がまるで感じられない。

心を完全に閉ざしてしまっただかのようで、

今ここにひとり残して行くのは、彩の自己満足であったとしても嫌
だった。

妹の頼みは、出来る事ならばきいてやりたいと姉として思う。

けれど、今一歩引いてしまったら、

和が二度と和ではなくなってしまうのではないかと彩は恐怖して
いるのだ。

和の傍らに置かれている携帯電話に、ちらり、と目をやる。

彩は、こんな時になにをしているのか、と苛立てば
遙に心の中で思いつく限りの罵詈雑言を浴びせていた。

「彩ちゃん、君が辛いのはわかるけれど、押し付けちゃ駄目だ。」
「！後藤君……。」

気が付けば部屋の外に立っていた後藤に、彩は目を見開いた。
こんな時に、彼に口を出されたくはない。
そう思えば、彩は後藤を睨みつける。

しかし、それに呆れたかのようにため息を吐き、後藤はあることが
彩の腕をつかんだ。

「おいで。」

「ちよつと、なにをするの放してよ！」

「君では駄目なんだよ、わかっているだろう？」

「なにを、」

「君の役目は、もう終わっていると本当はわかっているはずだ。」

そう言つて、力いっぱい掴んだ腕をひっぱれば、
立ち上がった彩は後藤の腕の中に抱き込まれた。

抗議をしようとする彩を、後藤はおかまいなしに部屋の外へと連れ
出せば

襖を閉める。

そのまま無言で廊下をずんずんと彩を引っ張りつつ歩いていくので
彩は慌てながらも怒りが沸いてくるのを止められない。

「ちよつと後藤君！なんで、」

怒鳴ろうとした彩の耳に、後藤が何事かを囁く。

すると彩は言葉を失くして、みるみるうちに目を見開いた。

「……そ、それ、本当なの？」
「ああ。きちんと本人から聞いたことだよ。」
「後藤君は、その、辛くないの？」
「なにが？うまくいけばいいと願うばかりだよ。」
「それは、もちろん私だってそう思うけど、後藤君は……」

彩の言いたい事を察した後藤は、またそれか、と息を吐く。
いいかげんここから話が進まない事にそろそろ我慢できなくなっ
てくる。

彼は元来、そこまで辛抱強い人間ではない。
ただ、欲しいと思ったものはとことん諦めたくないだけなのだ。

後藤は、注意深く声音を優しいものにしながら
諭すように彩に言葉をかける。

「ねえ、彩ちゃん。ああいうときに支えてあげる役目を
彼に託せるとおもったからこそ彼を認めただろう？」

「……そうよ？」
「だったら、任せてあげればいいじゃないか。」

それより、もっと自分自身の事を考えてくれないかな？」

「…何言ってるの、こんなときにそんな、」
「こんなときだからこそ、だよ。」

これで和ちゃんが浮上すれば、いよいよ彩ちゃんの役目も終わる。
妹離れをそろそろする時だと思わない？

俺はね、ずっつとこういう日を待っていたんだ。」

そう言って、後藤は彩を抱きしめながら、耳元で艶っぽい声をあげ
る。

それに彩がびくり、と一瞬震えたが、

次には後藤の耳を思い切りひっぱった。

「どつという意味よ。和が泣く日を待ってたって言いたいの？
弱ってる時を狙ってつけこむつもり？最低！」

その言葉に、後藤は今度こそ堪忍袋の緒が切れたらしい。
ぷつ、と彼の中でなにかが小さく弾ければ、彩を力いっぱい睨みつける。

彩は、この男がそんな顔をしているのを今まで見たことがなくて怖くなったのかその身をゆっくりと後退させた。

後藤が、とても緩慢な動作で眼鏡を外す。

「いい加減にしろよ。いつまで妹に嫉妬するつもりだ。」

「な、なにを言ってるのよ。」

後退する彩を、後藤がどんどん追い詰める。

足がもつれそうになったとき、

そのタイミングで後藤が背後の襖をす、と開き

彩はそのまま部屋の中へと倒れこんでしまう。

後藤は、そんな彩を一瞥しながら無言で襖を閉める。

たん、という短い音が彩の肩を震わせた。

腰が抜けているのか、立ち上がるうとする様子がない彩の正面に

後藤は腰をおろし、その顔をのぞきこむ。

「好きだ。俺は、笹森彩が好きだとずっと言っている。

これ以上なにをどう言えってんだよ。」

「…だから、ずっと、お断りしてきたでしょう。」

「無理、とか駄目、とかそればかりだったよな。」

一度だって、お前は俺が嫌いだからとかそういう対象にみれないとか
そういう言葉で俺を振ったことはない。」

「別に、断りの言葉なんてなんだっていいでしょう。」

口にはしなくなつて、そういう意味だもん。」

「俺の事、好きで仕方がないくせに。」

「なっ!」

にっこりと微笑んで、座った態勢のまま

後藤は彩をひっぱれば前に倒れこむ彩をそのまま抱きとめた。

「ねえ、彩ちゃん。俺は君が好きなんだよ。」

観念して、俺を受け入れて。好きだって言つて。

認めてくれれば、俺はこの先全部を君にあげるから。」

「す、進君……。」

「やっと、そう呼んでくれたね。」

耳元で囁かれて、彩の体がぞくりと震えれば

頭の隅でこのまま流されてはいけない、と警告音が鳴る。

「…進君、ごめんなさい、今は、やっぱり嫌。」

「彩ちゃん……。」

「和が、あんな状態なんだもの。この上進君のことなんて考えられないよ。」

「……………わかった、もういい。」

その言葉を最後に、進が彩を解放してやれば

眼鏡をかけてそのまま振り向く事もなく部屋をあとにした。

残された彩は、今の誰、と心の中で眩きながら呆然となる。

最後の言葉の意味を、今、彼女は必死で考えていた。

和泉昌の小説を読みながら、和は鳴らない電話をちらと視界にうつしていた。

この本は昌の作品の中で一番とっていいほどに、どこか遙の存在を思わせる。

特に親子愛であるとか、そういう描写があるわけではない。

しかしはつきりとわかりやすく書いていなくとも、

この小説に漂う愛は、昌が遙にみせる愛情そのものだ。

彼が生まれなければこれほど優しい表現は

一文字も昌の頭から生成されなかっただろう。

それを思えば、和はこの物語を読んでいて嬉しく感じる。

まるで遙の一部を覗き見しているような感覚にさえなって、

それがどこかくすぐったかった。

ひよっとしたら、会わない内に飽きられてしまったかもしれない。
熱に浮かされたかのようにだった彼が、突然我に返ったのかもしれない。

自分は、何の面白味もない、無価値な人間であるから。

けれどそれでも、と和は思う。

それでも、彼に出会った事を和は後悔していなかった。最初は無関心から始まって、次には煩わしくなった。

会えば会うほど嫌いになって、それがどうしてか好きになっていた。

不思議だ。

恋というのは、本当に不思議なものだ。

これまで抱いた事のなかった感情をかわるがわる味わって、刹那でも自身の人生に彩りを与えてくれた事に感謝できる。この思い出があれば、別にいい。

悲観するでもなく、樂觀するでもなく、突き抜けてしまった和の空虚は、達観してしまったのだ。

高校生の身空で、最早、余生を楽しもうかというほどの彼女の心の内は

怖いくらいに穏やかだった。

瞳には若い気はななくとも、彼女はもう笑えている。

『もう、いいんだ。もう、大丈夫。』

大切にされる価値なんて、最初からなかった。だから、彼にはありがとうと言おう。

そう心の中で唱えて、和はとろとろと瞳を閉じた。

和は、夢を見ている気がした。

ふわふわと、とても温かいなにかが、彼女の傍らに寄り添っている。そう思えば和は嬉しくて微笑んだ。

しかしそうすると、今度はしばらく息苦しくなる。その事だけが不満で、和はふわふわのそれを叩いた。

それに応えるかのようにふわふわした何かは、

和の肌に優しく触れる。額に、一瞬柔らかい何かが触れた。本当に温かくて、心地がいい。これは、一体なんだろう？

「ん……………」

小さく吐き出したその声は、自身の口から漏れたらしい。

その証拠に、誰かから返事のように名前を呼ばれた。

「和？」

もう一度呼ばれて、和は短く返事をする。

「んん。。。」

「まだ眠い？」

眠い？とても優しい声で、誰かが囁いている。

全身を包み込まれるような感覚に陥って、和は泣きそうになった。

無言になる和が気になったのだろうか。

身動きして少し離れようとする物体を、しかしどうしても放したくなくて

和は顔を擦りつけた。

それを感じ取ったのか、物体はあやすように彼女の背中へ腕をまわせば

ゆっくりと撫でさする。

「あつたかい…。」

ふにゃ、と安心しきつたような顔で声を発した和に、

耳元で小さく「可愛い」と誰かは囁いた。

そこでようやく、和は目をぱちりと開ける。

先程から毛布とでも思っていたそれは、どうもまるで違うらしい。

温かいという点で変わりはないが、

毛布は意志を持っていないし声も発しない。

考えればすぐにわかったのに、呆けた頭というのは恐ろしい。

間違いなく、和は誰かに抱きしめられている。

その誰かが想像通りであるとするならば、これは夢に違いない。

「んー…こんな夢見るなんて、変なお…。」

「…ぱっちり目が開いてるみたいだけ。」

「夢の中でだって、目は開くよう…。」

「ああ、まだちょっと寝惚けてるんだね、かーわいいなあ。」

「和泉君の夢なんて、今まで見たことなかったのに。」

「ひどいな、俺は和の夢をしょっちゅう見るのに。」

「そうなの？どんな内容？」

「それは……ちよつとノーコメント。」

「…一体夢の中で私は君にないをされているんだい。」

「男の子の妄想にそれは言いつこなしだよー。」

『 ……随分とリアルな夢だな。阿呆な会話がまるで、』

そう、まるで、本物の彼と話しているかのような。

…本物の、彼？

和は目を見開いて、勢い良く状態を起こせば
きよろきよろと辺りを見回す。

田舎の屋敷だ。風景を見ても間違いない。

次にないを思ったのか、和は壁までずると這っていけば
壁に向かって思い切り頭突きをした。

「うわ、ちよつと！なにやってるの和！！」

「い、痛い……。」

「当たり前でしょ、見せて！屋上での時も言ったでしょう！

女の子なのに、顔に傷が残ったらどうするの！！」

「和泉君がもらってくれるから良いんじゃないの？」

「そりゃそうだけど、そういう問題じゃないよ………って和。

まだ寝惚けてるでしょ？今の録音しとけばよかった。

そうしたら嫌がっても婚姻届にサインさせられたかもしれないのに

…。」

夢の中なのか現実であるのか、

痛む頭を抱えながらもいまだ判断のつかない和は

目の前の遙をまじまじとみつめる。
物騒な事を口走った和の恋人は、その視線にっこりと微笑んで応えた。

「……こじごじ？」

「和の田舎のお屋敷だよ。」

「本物？」

「俺がってこと？ そうだよ。高明さんと依子さんにくっついてこっちに来ちゃった。ふたりももう到着してるよ。」

「今何時？」

「お昼近くかな？ 十二時にはまだなっていないと思うけど…携帯見る？」

遙はずっと和の額を検分したままてきぱきと質問に答えていく。そうして良かった、怪我してないね、と言って額にひとつ口付ける。その感触は、先程夢の中で味わったそれとまったく同じであった。

混乱した状態の和をよそに、遙は和の携帯電話をぽすん、と彼女の手にのせてやる。

和は無表情で数秒それを見つめれば、そっと二つ折りの電話を開いた。

「一月五日、十一時三十二分。」

「まだ夢だと思ってる？」

苦笑して、和の頬を遙の右手が優しくさする。

その感触も、夢とは到底思えない現実感があるとわかっている。わかってはいるが。

田舎の屋敷で、女子部屋から少し離れた一室で、布団の上で、

向かい合って遙と座っている。

昨日まで、てつきり飽きられてしまったのだと思っていたのだ。これが夢でないというのなら、なんだというのだろう。

和にとつてあまりにも都合が良すぎるではないか。

起きたら、いちばん会いたい人間が横にいるなど。

和は自身の考えに少し羞恥心を覚えながらも、

やはり顔は無表情のままにふらふらと立ち上がる。

「…………顔を洗ってくる。」

そう一言残して、和は襖を閉めた。

それから、数秒その場に立ち尽くして取った彼女の行動は

…………全力疾走だった。

自身が今出来る最高速でもって長い廊下を一気に駆け抜ければ、

和は女子部屋の襖を思い切り開いた。

ばん！という大きな音に驚いた人々が、一斉にこっちを見やる。

「…………彩ちゃんは。」

「彩なら、宴会場でおじさんたちと話してるけど…」

ちよ、ちよつと和、あんた目え血走ってるけど大丈夫？」

智子の言葉に短くお礼を言えば、和はまたも廊下を走る。

宴会場へと辿り着いた時には、せいぜいと肩で息をしていた。

真ん中で、三人の人間が卓を囲んでなにやら談笑している。

何者かを認識した和は、驚きに固まった。

「お、お母さん、お父さん、……いつ着いたの？」

「あら、和ちゃん、まだパジャマなの？」

着替えてらっしゃいなー、また下らないお小言をもらっちゃうわよお？」

「なんか俺らが居ない間に色々面白くなってるみたいだなあ。

遥君はどうした？部屋にひとりで残してきたのか？」

「ちよっとお父さん、あんまり大きい声で言わないでよ。

ちいちゃんとたあちゃんと進君しか知らないんでしょ？連れて来たの……。」

「どうせすぐに人前に入るんだからかまわねーだろ。

何したってオツサン連中はうるさいんだし言わせとけ言わせとけ。」「もっ……。」

呆れたようにため息を吐く彩と、おかしそうに笑う高明の会話は明らかに遥がここに来ている事が真実だと語っていた。

「……じ、じゃあ、あれ幻でもなんでもなく、本物なの？」

なんと情けない表情で訊ねる娘に、母である依子は目を丸くした。

「あら和ちゃん……夢だっと思って思いながらここまで走ってきたの？」

「お前、それじゃ報われねーぞ、遥君。」

和に会いたい一心でここまで来たんだから。

誰かに見つかる前に早いとこ戻ってやつたら？」

「着替えたなら一緒にご挨拶に行つてらっしゃいなー。」

お母さん達はここで待ってるからね、ゆっくり行くのよ。」「

「走ると転ぶしまったなんか言われるからな。

俺からもちよっとな話があるから、遥君とふたりでここに必ず来なさい。」

いいな？という高明の言葉に、和は短く返事をすれば帰りは歩きで部屋へと戻っていく。

和は、部屋の前まで来てぴたりと止まれば、襖に手をかけるのを躊躇った。

一旦あげていた右手をおろし、目を閉じる。

息を吸って、思い切り吐いた。

深呼吸をして、なんとか思考回路を通常へと戻す。

起床して、高明と依子がこちらに到着しているのは現実だ。では、彼は？

恐る恐る、和は襖へと手をかけた。

「お帰り。なんかものすごい足音だったけど、走って行ったの？途中で転んだりしなかった？」

襖を開いたまま固まる和に、遙は心配顔をしつつ

和の正面に立つとすぽ、と彼女を抱きしめた。

無言で襖を閉める。

「い、和泉君：昨日なんで連絡なかったの？」

「ああ、ごめんね…声を聞いちゃえば、

昨日にも駆けつけそうな勢いだったから自重したんだ。

依子さんと高明さんから

単身で行くのはまずいから一日待ってくれって言われて。」

「てつきり、会わない間に我に返ったのかなと思った。」

和の言葉にびく、と眉を寄せた遙は、

抱きしめたままだった腕を解放し和の肩に手を置けば

彼女の顔をのぞきこんだ。

「…どういう意味？」

「あの、飽きたのかな、と思って。私に。」

「は？」

「だから、もう好きでもなんでもなくなったのかなって、」

「和…なにがどうなってそんな事を思っちゃったのかな？」

するり、と頬に這う手の平はいつになく冷たく感じた。

和はそれにびくり、と肩を竦ませて俯きそうになるが、

遙が顎を掴んでそれを阻止する。

「一生放すつもりはないって言ったはずだよ。

大好きだって、何度も伝えてるのに。」

「そ、そうなんだけど。」

「あんなに愛し合ったのに、まだそんな事言うの？」

その言葉の意味を理解すれば、和の顔は赤く染まる。

それでもなんとか、懸命に言葉を伝えようと和は口を開いた。

「自分が、無価値だって思いはほとんど膨らんでいて

それなのに争いの火種になっちゃって、

私は、役に立たない所かそういうものの原因なんだって思ったたら…」

目をそらして、唇を？みそうになった和に、

そうはさせまいと遙が唇を寄せた。

問答無用で侵入する舌が、和の唇を強制的に開かせてゆく。

久しぶりに感じる熱とその甘さに、和の瞳は濡れていた。

それに気が付いて、遙はゆっくりと唇を放せば

流れる雫をその唇で受け止めてゆく。

「…寂しかった？」

「うん。」

「心細かった？」

「うん。」

「たくさん、傷付けられたね。」

「……………」

「大丈夫だよ、和の価値は、和が和であるってだけで俺には変わらないから。」

好きだから、ただ、和の事が好きだけなんだから。」

「……………うん。」

「難しく考えて悩んで、そういう時期はもう終わったはずでしょ？」

「……………和泉君は、私がここで貶されてるような存在でも呆れないでくれる？」

不安気に揺れる和の瞳を、遙はじっとみつめて

次には盛大なため息を吐いた。

両頬をその手で包み込んで、遙はこつ、と和と額を合わせる。

「なんで呆れなくちゃなんないの？俺がここに来た理由、教えてあげようか？」

「え？」

「電話、切れてなかったんだよ。」

その言葉に、和はここでの出来事を反芻する。

いつの電話だろうと一瞬悩んだが、和はすぐさま合点がいった。

「廊下で、おじさん達と出くわした時だ。」

「かなり慌ててたでしょ。電源ボタン押したつもりで

そのままになつてたんだらうね。」

「多分…私、折りたたみもしないでポケットに突っ込んでたから…。」

「あの会話を電話口で聞いてたとき、俺がどんな気持ちを抱いたと思つ？」

「え、と……？な、んだらう、なあ……ははは…？」

天使のような顔で微笑む遙を、和はそのときどうしてか怖いと思つた。

あまりにも綺麗なその笑みはしかしなにかを孕んでいる気がしたからである。

「……………殺す。」

地を這うような一言は、とても簡単な言葉だった。

特に若い人間の中には冗談でそれをを用いる人間は多々いる。

しかし、彼は普段こういった言葉を使わない。

これと似たような状況だったのが文化祭の時だが、

そのときですら遙は潰す、という言葉を口にしたのだ。

以上それらをふまえれば今の彼の怒りはどれ程のものだらうか。

和は、ぶるり、と一瞬震えた。

「あ、あの、和泉君。まさか本当にやつたりしないよね？」

「とりあえず完全犯罪ってどうやったたら遂行できるか考えようか？

ゴミみたいな人間の為に服役とか死刑とか冗談じゃないし。」

「いやいやいやいやいや！？」

慌てて遙に呼びかけても、遙はうすら笑いを浮かべるだけだ。

完全にイってしまっていると思えば

和はどうかこうにか遙を止めねばと必死に頭を巡らせる。

『和泉君にとって一番ダメージが強いのは……』

ええと、ええと、となんとか思考を開いてゆく。

その間にも遙は何事かを思い浮かべているようだ。

「とりあえず、山田と斉藤だっけ？その家は潰しておくべきだね。そこから始めなくちゃ。」

「やめてよ、望んでないし！私はそんなのやだつてばー！」

「俺の気が済まない。悪いけどこれは俺の自己満足なんだよ。」

「ちよ、なに言つて……ああーもう、わかった！」

だったら和泉君の事なんか嫌いになるもん！！！」

この時、怒りに我を忘れたのが遙ならば

それを目の当たりにして我を忘れていたのが和だった。

パニックになったそれは一種の幼児退行でも起こしていたのか

普段の彼女からは発せられないなんとも可愛らしい脅し文句であった。

しかし、この威力は彼にのみ恐ろしい効果を発する。

「やめる。」

けろりと即答した遙に、和が目を見開いた。

次にはあまりの馬鹿馬鹿しさに、全身の力がなくなればへなへなとその場にくずおれてしまう。

「……い、和泉君さあ……。」

「和、やめればずっと俺の事好きでいてくれるんでしょう？」

「いや、あのね…？」

正面にしゃがんで顔をのぞきこむ遙を和も視界に入れてみればその顔はなんとも情けないものだった。不安気に瞳が揺れている。

和は、今更ながら心の奥から沸々とこみあげるなにかを感じれば自身に呆れざるを得なかった。

『この男は…どんだけ私を溺愛してるんだろう。』

そうだ、いいかげん認めてあげなければならぬ。

彼は、和を溺愛しているのだと。

それを自覚しないことには、彼の想いはなかなかどうして本当の意味で報われる事はないのだ。

「好きだよ、遙が。…人殺しなんてしないでくれたら、ね。」

苦笑して和が言ったそれを耳にした瞬間、

遙はまるで大型犬のように和にとびついた。

大好きなご主人様にじゃれる犬よろしく、

押し倒した和をどうにかしてしまおうとする遙に

こんなところで何をするつもりだ、という

飼い犬の手綱をしっかりと握った和の怒声が響いたのは言うまでもない。

第八十三話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その8」

「あ、あの、和泉君…そろそろ着替えて挨拶に行かないと。」

和の身体がびくり、と揺れる。

遥が和を抱きしめたまま、その舌を耳元に這わせたからだ。押し倒された態勢からはなんとか立て直したものの、

遥は座った状態で和を膝へ抱え込んだまま、解放しようとはしない。

放してくれ、と何度か言っても、

まだ和が不足している、とわけのわからない事をのたまうばかりである。

「挨拶？」

「ほら、最初の日に電話で話したでしょ？ひゃうっ！」

話の途中で、耳朵を食まれた和は思わず嬌声をあげてしまう。

遥はそれに調子に乗ったのか、

和の顎を軽く掴んで上向かせれば首筋へとその舌を移動させてゆく。

「屋敷のトップとか言っていたひと？」

「そ…う、ねえ、だから…、」

どっどっ言葉を発せられなくなる和をあざ笑うかのように遥がどっどっ唇を下へとずらしていく。

そしてついに、パジャマのボタンへ手がかかった。

それに和は「まずい」と心の中で呟く。

寝る時は、大体の女性が恐らくそうであろうが、

和は下着の上をつけない。

遙の部屋に泊まった日は例外だったものの、ここでの日々はある意味、家に居る時のような油断している状態が多く

それこそ寝起きで顔を洗いに行く場面を親戚の男連中に見られた所で、和は特になんとも思わない。

それは他の女子達も同じであるから、ここでは風呂上りや寝起きの女性を目撃したところで、それにおおげさな反応を示すような男子はいない。心中は複雑であろうとも、とりあえず表には出さない自制心はあるということだ。

しかしながら、和の無防備すぎる姿は遙と対峙している今、とても都合が悪い。

理由は、今までの彼を思えばいうまでもない。

きつとこのままではますます彼が調子付いてしまう、と焦る和だったが、しかし驚いた事に遙の手は布越しに胸を触った所でぴたりと止まったのである。

「……………和。」

「は、はい？」

「…いや、いい。とりあえず着替えようか。」

部屋の外で待つてるね。あ、急がなくていいよ。」

「…は、はい。」

なんと第一ボタンを外した状態で、遙は懐から和を放し

にっこりと微笑んで立ち上がった。

そうして部屋の外へと出て行く。

和はあまりのことに拍子抜けして固まったが、すぐに気を取り直し着替えを開始した。

和の性分では待たせるという行為がどうにも我慢ならないのだ。

遙もそれをわかっていたからこそ、

急がないで、と添えたのだが、無駄らしい。

ものの数分で身支度を整えた和は、小走りですぐ外へと飛び出した。それに遙は苦笑する。

「急がなくていいって言ったのに。」

「いや、だって…待たせちゃ悪いし。」

「……………今は、つけてるよね？」

ちら、と胸元をみられて眩かれ、和は顔を赤くする。

今日の和の格好はAラインの薄いグレーのワンピースだ。

下半身はレギンスと厚手のくしゅくしゅとした靴下を履いている。

ワンピースの下に薄手のシャツを重ねて合わせているものの、

さすがに下着をつけていなければ線ですぐわかる。

「…当たり前でしょ。」

ぼそり、と呟いた一言に、遙は苛立った声を上げた。

「……………いつも田舎に泊まる時、お風呂上り下着つけてないの？」

ここには野郎だってたくさんいるんだらう？」

「そうだけ…って。さっきそんなこと考えてたの？」

「廊下とかですれ違ったりしたんでしょ？今までも、

和の風呂上り姿とかパジャマ姿とか…見てる同年代の男が

ここにはたくさんいるんだよね？」

「まあ…そうだけ。」

「だったらこれ以上、俺だけが知ってればいい和を見せるのはやだ。」

「は？」

「あんな声で啼かせてる時、廊下をひとが通ったら多分そいつのこと
どうしちゃうかわかんないから。」

「え！！？」

「ただでさえ俺の知らない和をたくさん知ってる事実があるから
苛々するのに、これ以上にもわけてなんかやらない。」

口を尖らせて、そんな事をのたまう遥が信じられなくて、
呆然と口を開いて和は固まる。

しばらく無言でそれをみつめていた遥だったが、
気になったのかばかりと見事に開くその上下の唇に指を添わせれば、
ぐに、と和の口を閉じさせた。

「乾燥してるから、口を開いてると喉が痛むよ。」

「……………ああ、そうだね。」

そう答えた彼女を笑いながら、遥が指をぺろ、と舐める。
それに和はまた抗議しなくなったが、
疲れて声を発するでもなく、ただ長いため息を吐いた。

もうなにも言うまい。

心の中でそう呟いた和は、遥を連れだって廊下を歩き出した。

「和。」

「え、いや、それはちょっと。」

名前を呼ばれて、遥が無言で左手を差し出してくる。
その意図はわかる。

手を繋いで歩きたいのだろう。

しかし、ここは田舎の屋敷だ。

廊下を歩くとなると、誰に出会うかわからない。

和はこれ以上嫌味を言われるのもいやだったし、

なにより遥を蹂躪されるのだけは赦したくなかった。

だからこそ、和は無言で首を振る。

しかし、遥はそんな彼女に、にっこりと微笑んだ。

「和、お姫様抱つことどっちがいい？」

「親戚連中に見られたら、また何を言われるかわかんないよ！」

「そんなの、俺は赦さないし、気にしない。」

それよりもね、俺は拡声器を持って和は自分の恋人ですって

屋敷中歩きたいくらいなんだよ。だから、それくらい許して？」

「だ、で、でも」

なおも言い募ろうとする和に、遥は短く息を吐く。

そうして、和の頬へと手の平を這わせた。

「ねえ、和。もちろん、和を傷付けた親戚の腐ったおっさん連中だ
って

俺は殺したいなんて思っちゃうくらい怒ってるけど。

怒りの矛先は、それだけじゃないんだってわかってくれてる？」

「え」

「告白されたことも、大勢の男から可愛いとかばわれたことも
ぜんぶ知ってるんだよ。」

「は！！？」

「だから……」

「う、」

言葉を切った遙が、和の唇を突如吸い上げた。
ちゅ、という卑猥な音が耳に響いて和の身体はびくり、と震える。
遙はそのまま数回、唇を舌で舐め上げた。

「…和を色んな魔の手から守る為に俺は来たんだから。
お願いだから、ここに居る時は俺の我儘きいてほしいな？」

そう言って困ったように首を傾げる遙に、和は眉根を寄せる。

自身の容姿を知り尽くしている上での計算された仕草。

それに苛立ちを覚えるものの、

こういうときの彼の心はどす黒いなにかが渦巻いているのを
和はよくわかつている。

それを隠す為に、彼はこんな事をするのだから。

結論を出して、和はため息を吐けば、無言で遙に手を差し出した。

遙がば、ととてつもなく眩しい笑顔を顔中に作るので

和は生温かく目を細めるくらいしか出来ない。

握られた手は、どこまでも熱い。

とにかく、おじさん連中には会いませんように、と

心の中で祈りを込めた和であった。

手を繋いで歩いている間、お昼時だったからなのか

外に出払っている人間も多いようで誰かと出くわす事はなかった。

和はそれに安心していたが、遙はといえば少し不満気な顔をしていて
それをみた和は小さく噴出してしまった。

知恵と多恵の部屋に着いた時、遥はなぜか背筋がぴん、と伸びる。緊張しているのはどこか違う。理由はわからないが、この部屋の主には礼儀を尽くさなければと心のどこかで遥は思ったのだ。

「あのね、入る時は必ず名前を言うの。」

怖い人たちじゃないから大丈夫だよ。私のあとに続いて名乗ってね。」

にっこりと微笑む和に、遥は笑顔でうなずいた。

特に緊張した様子のない遥に安心して、和はいつも通りの挨拶をする。

「笹森和です、失礼します。」

「和泉遥です、失礼します。」

和の凜とした声に続いて、遥も真っ直ぐに前を見つめたまま声を発する。

そうして和が襖を開けば、

そこに居たのはなんとも可愛らしいおばあさんふたりだ。

あんなにちよこん、としているのに、部屋が小さく見える。

それだけふたりの存在感が強いのだろう。

遥はふたりから目が逸らせないうまま、襖を閉めて奥へと進む和に続いた。

「ちいちゃん、たあちゃん。お昼時にお邪魔します、ごめんねー。」

思いのほか軽い言葉遣いに、遥は一瞬目を丸くする。

しかしふたりの老婆はそれを咎めることもなく、優しい顔で穏やかに微笑んだ。

「大丈夫よお、和ちゃん。今日はね、ちょっと早くいただいたの。」
「可愛い和ちゃんの恋人に早くお会いしたくてね。」

うふふ、と笑うふたりの不思議な掛け合いに、

遥は一瞬驚いたが、次には和の隣へと立てばにっこりと微笑んだ。

「初めまして、和さんとお付き合いをしている和泉遥です。
今日は突然の訪問をお許しいただきありがとうございます。」

遥の言葉に、知恵と多恵は瞳を輝かせる。

「まあまあ、なんて素敵なお子さんなのかしらあ。」

「和ちゃんは素敵なお子さまをうまえたわねえ。」

「あらあら、それは違うわよ。」

「そうね、遥君が和ちゃんにつかまっただけですものね。」

うふふふふ、といたずらっ子のように笑うふたりに
和が頬を赤くしてなにを言ってるんだ、と抗議する。
しかしそれに遥がつっこんだ。

「その通りじゃないか。俺ずっと和につかまりっぱなしだけど。」

「な、人前でそういうことを言わない！」

「照れてるの？可愛い。」

そうやって微笑む遥に、和は苛立って蹴りを入れる。

それに知恵と多恵があらあらあ、と声を上げた。

しばらくは元気ねえ、などと呟きながらにこにこ笑うふたりだったが、
いつしかその顔から微笑が消えていき真顔になった。

じ、となにかを探っているかのように、
知恵と多恵は恋人同士となった若いふたりを見つめ続ける。
和と遙は、一変した空気に緊張を覚えれば、
いつしかどちらかともなくその手を握り合っていた。

知恵と多恵は、ゆっくりと言葉を紡ぎだしてゆく。

「…とっても強い孤独。」

「もう大丈夫、良かったわ。」

「けれど気をつけなければ。」

「ええ、そうね。」

ふたりの言葉を無言で訊きながら、

和と遙はその手を繋いで真剣な面持ちをしている。

彼女達は、恋人であるふたりをみて、なにを思ったのだろうか。

「遙君は、少おし、激しすぎるところがあるみたい。」

「和ちゃんは、まだまだ自覚が足りないみたい。」

「きちんとバランスが取れるまではもう少しかかるかしらね？」

「そうねえ。私達が生きているうちにみられるかしら？」

「まだわからないけれど。ふたりとも、仲良くね？」

「遙君、和ちゃん、お互いを幸せにしてあげてね？」

ふふふ、と笑い合うふたりに、和と遙は同時にうなずく。

あわせた手は、お互いにとっても温かかった。

「遙君、これからも休みの度に一緒にいらっしやいな。」

「ええ、もうあなたはここの家族なのだから。」

「え、いいんですか？」

目を丸くする遙に、知恵と多恵はもちろんよ、と笑う。

「だって、これから先あなたは和ちゃんをひとりでなんて
寄越したくはないでしょう？」

「和ちゃんも、愛されすぎて大変ねえ。」

「ちょよ、ちいちゃん、たあちゃん!!」

和はふたりの言葉に顔を真っ赤にして、繋いでいた遙の手から
ば、と自身の手を抜き取った。

遙がそれに少し不満気な顔をする。

「じゃあ、知恵さんと多恵さんと、またお話できるんですね。嬉し
いな。」

「私達も、こんなに素敵な男の子とお話できるのは嬉しいわあ。」

「そうねえ、寿命が延びそうだわあ。」

うふふふふ、と笑うふたりの声に、遙はにっこりと微笑む。

「俺も、ここまで綺麗に年齢を重ねた女性を初めてみましたよ。
和も将来こんな風に魅力的になってほしいですね。」

遙の言葉に、和はあからさまに顔を顰めるが

知恵と多恵はころころと鈴の音のように笑ってとても嬉しそうだ。

「私達を心地よくさせた上に和ちゃんにプロポーズするなんて。」

「遙君は女性の心をつかむ術をよくわかっているのねえ。」

「そんなあなたからあれだけ逃げ回った女の子は、きっと和ちゃん
だけね。」

くすくすと楽しそうに話すふたりに、遙は苦笑して応える。

「良かったわね、今が幸せで。」

「ええ、本当に。」

「それじゃあ、宴会場へそろそろお行きなさいな。」

「高明さんと依子さんが、ふたりを待つてますよ。」

知恵と多恵の言葉に、和はうなずくとふたりに手を振りながら部屋をあとにした。

遥は、そのときちらりとふたりを見たが、

知恵と多恵はとても優しい微笑を遥に返すのみである。

襖を閉める瞬間まで、逸らされることない優しい瞳が

遥はとても嬉しかった。

「…なんか、千里眼だね。」

「そうなんだよねー。だからここで変な事はできないんだよ。」

「変な事って？」

「今、君の頭に過ぎったあれこれだよ。」

「えー、具体的に教えてくれなきゃわからないけど。」

「だからそのテの言葉責めは通じないと何度言えば？」

せいぜいキスマでだからね。」

呆れながらはつきりと言葉にする和に遥は口を尖らせながらも並んで歩く和の頬にひとつ口付けた。

「！な、」

「今のはセーフ、でしょ？」

「時と場所と場合を考えると何度も言ってますけど。」

「暴走しそうになったらごめんね。」

「怖い宣言をするなあ！」

ぶつぶんと手を振り回すも、遙が強く掴んでいるので離れることがかなわない。

そんな風に必死になる和がまた可愛いと感じてしまい、遙はまた鼻先にキスをひとつ落とした。

「和、愛してる。」

「……全身砂糖男め。」

「和限定だよ。」

「ちいちゃんとかあちゃんにも甘さを振りまいてなかった？」

「あれは敬意を表した言葉であって全然違うよ。」

「さすが、スケを思う存分コマしてるだけあるよね。」

将来、ホストとかなれるんじゃないの？」

うへえ、と言いながら和から飛び出した台詞を

遙はうーん、と顎に手を当て考えていた。

「…でも、好きも愛してるも和以外には言えないからなあ。」

「昔は言えてたんだから言えるんじゃないの？」

「むかし…？」

「や、だって、付き合ってた彼女さん達とかに、

好きとか愛してるとか言ってたんじゃないの？」

「え、言っていないよ。」

目を丸くしてきよとん、とする遙に和はええ！？と声を上げて驚いた。

「だ、だって和泉君、毎日のように」

「だーからー、和限定だってば。」

俺、言われたらそうだね、とか俺もだよ、とかは言ってたけど。

思えば自分発信で伝えた事ってないんだよなあ。」

「えー、梓さん可哀想。あんなに乙女なのに。」

「……………」

「あ、だから愛想を尽かされたのか。」

そうかそうか、とうなずく和に、遙はたまらずに声を上げる。

「もう、返答に困る事を言わないでよ！」

「えーなんで？」

「なん……和って、俺の事どう思ってるの？」

「好きだけど？」

今度は和がきよとん、と首を傾げながらはつきりとそう言葉にする。遙はたまらずに、腕をぐ、と引つ張った。そのまま浅く口付ける。

「ん、」

「和……」

はあ、とせつない息を漏らす遙を、和はじ、と睨みつける。眉を寄せて、無言の抗議をしているのだ。

遙は無言で反対方向へと顔を逸らせば、がっくりと肩を落とす。

「妬いてはくれないのに欲しい言葉はくれるんだもんなあ。

もう俺、振り回されっぱなしでどうしよう……。」

「えーと……どんまい？」

「自覚がある時はまだいいよ。無自覚な時が一番たちが悪い！」

「え、だって、じゃああの場合なんて応えれば良かったの？」

「あれで正解だけど！むしろ正解以上だったけど……！」

「……昔の女性の話をされるのが嫌なの？難しいんだね、なんか。」

「和はさあ、想像したら嫌にならないの？」

俺が和にしているみたいに、昔他の女性に触れたって思ったら。」

その言葉に、和が視線を上に向けながらしばし考える。

そうして隣に立つ遙へと顔をむければ、にっこりと微笑んだ。

「全くおんなじようにしてたの？毎日好きだって言って、

道行く男の人に嫉妬して、冷たいって情けなく泣きついて？」

「……………違うけど。」

ぐ、と詰まりながら情けない顔をする遙に、

和は楽しそうに微笑んだ。

「だったらそこに妬いたりはしないよ。

まあ、想像したら楽しい気分ではないけどねえ。

……………私の場合、嫉妬というか不安になるかな。

ある意味ではそれも嫉妬になったりするのかね？」

「不安？」

「え、いや、まあ、あの。」

口ごもる和に、遙は続きを促すようにじりじりと顔を近づける。

和はそれに観念して言うから、と答えれば、遙の顔を遠ざけた。

遙が満足したかのように微笑む。

「だから、さー…今まで美女達を組み敷いてきたわけじゃん？

その、私、の、か、身体で大丈夫だったかなー……………とか。」

和が顔を真っ赤に染め上げながら、ぼそぼそと呟く言葉に

遙は一瞬固まる。

しかし次には、どこの部屋ともわからない襖を開いて

和を中へと引っ張り込んだ。

襖を後ろ手で閉めながら、遙は性急に噛み付くような口付けをする。和はそれに息が詰まりながら、

目の前がちかちかと点滅するかのような錯覚に陥った。

身体力がどんどん抜けて、遙に支えてもらわなければ立っている事もできない。

混ざり合う唾液の音も、強く吸い上げられた舌も、お互いの激しい息遣いも、

すべてが彼女の羞恥を煽れば和の瞳からは生理的な涙がぼろぼろと流れ落ちる。

遙の舌がようやく口腔内から抜け出して、

それでも和の唇をつつ、となぞったり甘噛みしたりする彼を咎めるように

和は拳でもって遙の胸をどん！と叩き付けた。

そこでようやく、遙は和の唇を解放した。

それでも、足腰に力が入らない和を遙が支えている状態だ。

涙目になりながら、和が至近距離で遙を睨みつける。

「…つなにすんの。」

「だから、一応、廊下ではやらなかったでしょ？」

「そういう問題じゃない！」

「だってあんまりにも馬鹿で可愛い事を言うから…」

和、学習しないなあ。前も同じこと言っただけに襲われたじゃないか。

「

和泉君に馬鹿とか……でも、あのときは、ま、まだ、だったから……。」

ため息混じりで和がなんとか言葉を紡ぐ。
それに遥は呆れたような顔をした。

「和の裸見て幻滅したかもしれないとでも思ったの？」

「……………」

「あのときも言ったけどさ。比べる事なんて出来ないから。

俺はさ、和の全部に溺れてる状態なんだから。

抱いてるとわけわかんないほどクラクラするのなんて和だけだよ。」

「う、は、はあ。」

「というか幻滅してたらここまでがつかないと思うんだけど。」

「……………それもそうだね。」

「その言葉で納得されるとすごい複雑。」

とてつもない説得力をもたらしたらしい遥の言葉は

しかしなんとも情けないもので、

落ち込み和の肩へと顔を埋める遥に、和は笑いながら頭を撫でてやる。

そうしてお互いに苦笑しながら、仲良く廊下を歩きつつ目的地へと向かった。

「…ふたりとも随分遅かったな。」

「私のせいじゃないから。」

「誤魔化すのも面倒になるくらいってどんだけ…

遙君、あんまり暴走しないでやってな？」

「すみません。」

苦笑し合うふたりを一瞥しながら、和は彩の隣に腰掛ける。

遙も和の隣へと腰掛けた。

今は四角い卓に五人が腰を下ろしている状態だ。

「…誰もいないの？」

「ああ、もうそろそろしたら出払った奴らも帰ってくるんじゃないかね？」

「…十二時半か。十三時過ぎには確かに皆帰ってくるかな。」

「それにしたってここにこれだけ人が集まらないのは…
みんな意識的に避けてるんでしょうね。」

依子が口にした言葉に、和は身体をびくり、と揺らす。

高明は、それにふう、と息を吐いた。

「なあ、和。前々からお前に訊きたい事があったんだ。

ここまでになつたわけだし、俺はやっぱり疑問で仕方ない。」

「？なにが？」

首を傾げる娘に、高明は頼杖を付きながらじ、と視線を合わせる。

和はその意味がわからずに、少し緊張して言葉を待った。

「なんでやり返さない？」

「……………は？」

高明の言葉に、なんとも間抜けな声で返事をしてしまった和の思考は完全に真っ白な状態になっていた。

第八十四話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その9」

『なんでやり返さない？』

その言葉に、和は狼狽する。

なぜ、と今理由を問われた意味がわからない。

「だって……笹森家が親戚中から総スカンくらったら」

「だから我慢してるって？頼んでないぞ。」

「お、お父さん……。」

父の久しぶりに怒っているような声音に

和はびくり、と身体を揺らす。

「いつも曖昧に笑うばかりで、ちっとも可愛くない。

気に入らないなら少しは言い返せばいいのに、なにを考えてるのかわからない。」

「！」

「親戚のおっさん連中が、一体誰を指してるんだか俺にはわからん。そんな娘、持ったつもりないからな。」

「でも、今だって私のせいで派閥みたいになっちゃってて」

「だからいいんだろ。これ以上は悪くなんねえって。」

どうせ一応で謝ってみてもしこりは残るんだ。」

「でも、」

「和！」

なおも言い募ろうとする和を、高明は一喝する。

「そんな風に言い訳を繰り返す娘を持った覚えも俺はねえ。」

落とし前はいつだってつけてきたはずだろうが。

お前だつてこのままじゃ気持ち悪いだろ？その被ってる猫とつと外せ。」

「お父さん、和を責めないでよ！」

「そうよお、高明さん、元々はあちらからぶっかけられた喧嘩よお？」

苛立つ高明に彩と依子が抗議する。

高明はそれにわかつてる、となおも苛々しながら答えていた。

「だからこそだろ。親の俺達が庇おうもんならまた酷く言われるだけだし

和だつてそんなの全然本意じゃないだろ？

それなら自分できつちりやればいいんだよ。小さいことうだうだ悩むな。

家族つてのはな、無条件でみんな味方なんだ。

販されて苛々してるのは親の俺達も姉である彩もいっしょなんだ。」

頭をかいて、少々声高に話す高明に、遥がす、と小さく手を上げた。

「高明さん、俺も忘れないでくださいね。」

にっこりと微笑みながら和の頭を撫でる遥を、高明は苦笑してみつめる。

依子と彩も、大きくうなずいた。

「私達はね、和ちゃんが本来面倒事が嫌いだからずっと我慢してたのよ？」

丸く収めたいっていう気持ちは、行動からすぐく伝わっていたし。」

「そうよう。私は我慢できなくて結局キレちゃったんだし、

和が素に戻るには絶妙のタイミングでしょう?」

「揉め事の火種はここにいるしね?」

黙ってても俺と歩いてれば色々言われるから和も怒りやすいでしょう?」

最後の遥の言葉に、和は目を見開いた。

「え、まさか…それで来てくれたの!?!」

「いや、単に会いたいからだけど。あと害虫駆除かなあ。」

首を傾げて和に話しかける遥は、それこそ天使の羽でも生えていそうなほどに

綺麗な顔をしている。

それなのに、和の顔は引き攣っていた。

「…ねえ、和泉君に情報提供してたのって、彩ちゃんなの?」

「今更。とつくに気付いてると思ってたよ。」

「…今の今まで、そういう冷静さがなかったもので。」

ねー彩ちゃん。ひょっとしてもうひとり一枚? んでたりしない?」

「え!?!?!」

急にいつものような切れ味を取り戻した和に、彩は心底驚いて身体を揺らす。

その反応だけで、和は確信を持ったようだ。

やっぱり、と声をあげて息を吐けば、和は頬杖をついた。

「和泉君をここまで来させるように仕向けたのは

多分お姉ちゃんではないよなあ、と思ってたんだよねー…。」

なんというか、やり方が黒いというか。」

「和ちゃんにそれを言われたくはないなあ。」

和の言葉に、その場にいる人間以外からの返事が聞こえて
笹森家と遙は廊下方面へと顔を振り向かせる。
そこには、和の予想通り、進が立っていた。

にっこりと微笑みながら、彩の隣に腰掛ける。

「いや、正直腹黒さではかなわないよ。

私、進君みたいに二重人格じゃないもーん。」

「失礼しちゃうなあ、二重人格なんて。」

「眼鏡がスイッチになってるよね？」

「……………またそんな。」

「時々、眼鏡外した進君にすーごい睨まれてたもん。

彩ちゃんが頑なになったのは私のせいじゃないのにさあ。」

その言葉に、進が珍しく苦虫を噛み潰したかのような顔をすれば
彩は隣に座った事への抗議すら忘れて目を見開いた。
彼の顔をまじまじとみつめる。

「自分への愛より妹への愛のが重いのが気に入らないんでしょうけど
いい迷惑だよ。巻き込まれたこっちは冗談じゃない！」

「え、もしかして原因ってそれ!？」

「そうですね。あとは若いおふたりさんでヨロシクやって。」

和の言葉に頭を抱える進と、

それをみてにやにやと嫌な笑いを浮かべる和を彩は交互にみるが
結局ふたりの会話の意味はまるでわからなかった。

しばらくして気を取り直した進が、にっこりと微笑んで
高明と依子に視線を合わせた。

「高明さん、依子さん。問題は全部クリアできたみたいです。」
「あらそう！良かったわー。それじゃあ進君、彩ちゃんをよろしくね。」

「あんまりいじめないでやれよ？彩は和より受け取り方が素直だからな。」

「はい、ありがとうございます。じゃあ、彩ちゃん、おいで。お話ししよう。」

「え、ちょ、」

ぐい、と腕を引つ張られて、彩は無理矢理立たされれば抵抗むなしく、ずるずるとどこかへ引きずられていった。どうやら、屋敷の外へと連れて行かれるようである。

「いやああああ」という叫び声が、ドブプラー効果によって遠ざかるたびにその響きの色を変えていった。

「…で、結局、彩が長年、進君の想い人が和だと勘違いした理由はなんだっただ？」

「え、お父さん気付いてたの！？」

「私が先に気が付いてたのよー。進君にはね、頑張っって壁を壊してねって」

毎回言ってたの。」

「地元に戻ってからもけっこうマメに会いに行ったりしてるみたいなのに」

「なんでそんな勘違いをするんだか。」

苦笑いする高明に、和も同じような表情で返した。

「さっきのが理由だよ。進君てさ、私に相当嫉妬してたんだよね。」

彩ちゃんて私にべつたりでしょ？だからけっこうな頻度で私に怒りの形相を向けてたんだよね。彩ちゃんのいない所でこっそりと。

でも、彩ちゃんはそれを隠れてたびたび目撃してたみたい。」

「…それって、彩さんに見てみたら、

和に恋する進さんが和に熱視線を送ってる風に見えたって事？」

「正解！」

和が遙を指差して答えると、遙はうわあ…と声を上げた。

彼と進の愛情表現は、実によく似ている。

その激しさや、スイッチの入りがそっくりなのだ。

だからであろう。

長年勘違いされていたとわかった時の心境を考えれば

遙は進に同情せずにはいらなかったのだ。

そんな遙をちらりと確認しつつ、それにしても、と和は言葉を続ける。

「お母さん、お父さん、止めなくて良かったの？」

「ここで止めるのは可哀想じゃない？」

「それにあいつだってもう成人男子なわけだし、

そついった意味合いで無茶はしないだろ。

よしんばしたところで責任はきっちり取ってもらってから心配すんな。

「いや、そつという問題か？と思ったが

さすが父と母はそこらへんがなんともおおらかだ。

「まあ、それじゃあ、私は思った通り動いていいんだね？」

「ちーさんとたーさんの許可も取ってある。」

「大掃除をしてほしいそうよ。」

高明と、にこにここと笑う依子から飛び出した言葉に和はまたも驚いた。

そんなところまで根回ししていたとは思わなかったのである。

「…それは、ご期待に添えねば。」

「あ、遥君も。程ほどに手加減してあげてねーって知恵さんがおっしゃってたわよー。」

「え、俺も？いいんですか？」

「駄目つつつてもやるでしょ遥君は。」

俺からも頼むけどあんまりいじめないでやって。

純粹に悪気はない奴らばかりだから。」

「ええ、大丈夫ですよ。和を完全に諦めてもらうよう仕向けたいだけですから。」

にっこりと微笑んだ遥の表情は、今までのなかでいちばん恐ろしいそれであった。

「あああああ！！！」

そのときだ。急に大きな声が上がって和は思わず耳を塞いだ。

遥はといえば、和の隣で声の出所のほうへと身体を動かす。

「ひよつとして！！和ちゃんの！！？」

「え！？あああああ！！！」

親戚連中が何人か帰ってきたらしい。

和もようやくそちらに振り向けば、

十代から二十代の女の子達でご飯を食べてきたのだろう。

家族単位ではなくバラバラで同年代の女子一同が固まっていた。

「うるさいなあ…怒鳴らなくても聞こえるよ…。」

「和、そんな言い方しなくとも。」

苦笑する遙に、和は眉を寄せる。

「あんなテンションずっと相手してたら疲れるじゃん。

あー、学校始まった気分。」

「最近ではここまで騒がれた覚えもないけどね。」

「君が人前で抱きついたりしなきゃね。」

その言葉に、遙がそろり、と目を逸らす。

和はしばらく隣に座る恋人を睨みつければ、はあ、と息を吐きだした。

「ちょっと！勝手に会話してないで私達にも紹介してよー！！」

彼氏さん、ちょ、真ん中来て！ねえ、居ない子にも連絡してあげなよー！！」

興奮して捲くし立てているのは智子だ。さすがイケメン好きは凄まじい。

遙は、そんな彼女に余裕の表情で挨拶をする。

「初めまして、和泉遙です。突然お邪魔してしまってすみません。どうしても和に会いたくなってしまって、押しかけちゃいました。」

につこりと綺麗に微笑んでそんな事を言えば、ほとんどの女性はもう降参だ。

智子以下、すべての女性が夢心地のように目をとろん、とさせてい

る。

そこに、間がいいのか悪いのか、
よりもよって斉藤家の連中が揃いぶみでやってきた。

「なんの騒ぎだ！！？」

驚きに声を上げる斉藤に、高明と依子が挨拶をする。

「ご無沙汰してます。」

「あ、ああ、高明君、依子さん…これは一体。」

「娘の婚約者に同行してもらったんです。」

将来はそうなるんですし、若いうちにここに慣れてもらおうかと思
つて。」

「婚約者！？それは…あ、彩ちゃんのかい？」

「いえ、和です。遥君、ちよつと来てくれるか？」

高明の言葉に、遥が微笑をたたえたままに斉藤家の並ぶ廊下へと歩
けば

一同にゆつくりと頭を下げて挨拶をする。

「初めまして、和泉遥です。」

本日は突然部外者のような自分が押しかけてしまい申し訳ありません
ん。」

「おじさん、おばさん、ちいたあちゃんの許可は取ってますんで
心配なく。」

間髪いれずに素早く隣に立った和が、同じように微笑んでそう言い
添えた。

斉藤家は、男であるおじ以外、皆夢心地で頬を染めている。
妻も、一人娘も、遥のあまりの美しさに言葉を失っていた。

大黒柱であるおじひとりが、眉間に皺を寄せている。

「しかし、そうは言っても。」

「屋敷の主に許可を取ったんですから、これ以上なにか必要ですか？ ああ、そうそう、その主から伝言ですよ。今日は五日ですけど夜に全員残らず、宴会場へ集合させるようにとのことです。」

常とは違う和の物言いに動揺を隠せない斉藤だったが、和の後半の言葉に反応を示した。

「今日も？なんでまた…。」

「明日の朝イチで帰る世帯が多いからでしょう。」

原因になった私が言うのもなんですけど、

このまましこりを残したまま帰らせるのは嫌みたいですよ。

まあ、盛大な親子喧嘩の仲直りとも思ってください。

手配はすべてこちらでしますんで、伝言だけしてもらえませんか？」

「……わ、わかった。伝えておこう。遥君、だったかな？」

「はい。」

「君も変わった趣味をしてるねえ？」

にやり、と粘つくような笑顔で放った斉藤の言葉に和は顔を蒼くする。

その和の反応が満足だったのだろう。ますます斉藤はにやにやと笑みを深める。

しかし、斉藤は知らない。

和が今の言葉に蒼褪めたのは、斉藤の身を案じてだということ。

遥が妖艶な顔で微笑めば、そのままゆっくりと耳元へ何事かを囁いた。

それに斉藤は顔を蒼褪めて、一歩足を退ける。

「な、なんで」

「おっしゃるとおり、和の趣味は変わってますよ。」

こんな僕を恋人に選んでくれたんですから。ねえ？」

「ちよ、やめてよ、人前で！」

笑いながら和を抱き寄せる遙を、和は必死で拒否する。

その様子は、恋人を溺愛する男そのままだった。

「…屋敷の主から頼まれた伝言、急がなくてよろしいんですか？」

鋭い視線で言い放った遙の言葉を、失せろと解釈したのだろう。

斉藤は小さく悲鳴をあげながら、

まだ遙と一緒に居たそうにしていた娘と妻を無理矢理引つ張ってその場をあとにした。

「……何言っただの？」

「んー？高明さんから、斉藤のオッサンはキャバ嬢にご執心で妻に内緒にしてる散財がかなりあるらしいよって話を聞いたからね。」

「ああ、なんとなく察しがついた、ありがとう。」

「あははー。」

きつと、奥様はご存知なんですか？とか、

こんなところまできて愛人にお電話なんて大変ですね、とかそんなようなことを言っただろう。

あるいはその両方でコンボ技を繰り出したのかもしれない。

電話していたかどうかはわからないが

斉藤はよく電話を弄ってカチカチやっているから

きつとメールは頻繁に送っているに違いない。

想像して、和は小さく息を吐いた。

それからしばらくは、とにかく大変だった。

遥は年下から年上まであらゆる女子達に囲まれ、

和に好意的なおじおば連中までもかわるがわる部屋を訪れた。

それは男性陣もで、和の恋人がどんな容姿をしているのか
とにかく気になったらしい。

和はそれに都合がいいと感じれば、去り際のおじ連中や

少し様子が落ち着いた女性陣に何事かを順番に囁いていく。

それに皆がうなずいて賛同してくれたので、和は小さく安堵の息を吐いた。

遥が動けそうもないな、と思えば

和は今度は男性陣の輪へと近寄っていき今まで伝えた話を同じように話し出した。

「司君しつか、あのさ、夜のことなんだけど。」

「ああ、ここに集まられて話でしょ？聞いたよ。」

「うん、それもそうなんだけどさ、せつかくだし

仲が修復しやすいように役割分担しないでみんなで用意しないかって。」

「え？どういこと？」

「出来合いのものでも、作ってもいいけど、

とにかく皆が食べたいものそれぞれ持ち寄ってわいわいやったらどうかって…」

後片付けだけまた若い世代でやれば上の連中も納得するんじゃないかって

ちいちゃんとかあちゃんが。」

「なるほどー、いいかもね…」

うなずく親戚のひとりである司の傍らに、ほかの連中もなんの話？と寄ってくる。

そうしてまた事情を話せば、ひとりが車を出すか？と話し出した。

「何班かに分かれてさ。それぞれ希望聞いてメモして。」

「ああ、いいかもねー。じゃあそうしよっか？」

「じゃあ和ちゃんは俺らといっしょに行こうか…」

語尾が小さくなったのは、目の前で遙が和をその腕に引き寄せたからである。

うわ、と和が声を上げながら遙にすっぽりと覆われる。

後ろから抱きしめている格好だ。

「和の浮気モノ。」

「いやいやいや。あなたも女性陣に囲まれていらしたでしょう。」

「無防備なのが駄目。」

「あのねえ！」

「最初に宣言させてもらいますけど。」

俺はそれはそれはもう独占欲が強いんです。

へたに彼女に触ったりしたら責任持てないんでよろしくお願いしますね？」

にっこりと微笑んでのたまう遙に、親戚一同が固まった。

女性陣は何が起こっているのか気になってしかたないらしく、こちらをみてきやあきやあとつるさい声を上げている。

和と言えば諦めの境地で無表情になっていた。

「へえええ…彩ちゃん包囲網を突破したのは伊達じゃないってか。」
「こんだだけかつこいいのに…俺がこの容姿持ってたなら遊びまくるけどな。」

「それこそ毎日違う女とヤレそうだけど。」

まじまじと遥をみつっつそんな事を言う連中の言葉を
しかし軽蔑することもなく和は「確かに普通そうだよな」と
実に淡々と遥のスペックについて改めて考えていた。

「なあぎ。今、なに考えてたのかなあ？」

頭上から響く遥の声に、和の身体がびく、と震えた。

「なにつて？親戚の男連中サイテーとかだけど。」

「へえええー。俺はてつきりあのひとたちの言葉に賛同して
普通はそうだよねー私も不思議ー、なあんて考えてるのかと思った
けど？」

「……………最近エスパー技術に磨きがかかったね。」

「やつぱり！なんでそこで男側に賛同しちゃうかなあ！」

「えー、いやだつて。ねえ？司君だつてこのひと異常だつて思うよ
ねえ？」

「お願い、俺に振らないで！」

狼狽する司に、和がええー、と声をあげていれば周りの親戚は笑っ
ている。

しかし次には遥の低い声にその笑みが凍りついた。

「…司君。」

「苗字で呼べないでしょ？家族単位で皆ここに来てるんだから。
いいかげんそのネタで怒るのやめてよ。」

「だっていつまでたっても俺のこと名前で呼んでくれないし。」
「たまに呼ぶしそつちのが特別ぼくていいじゃん。駄目？」
「……ずるいなあ、和は。」

上目遣いにそんなことを言われたら、遙はなにとも言えない。

蕩けるような顔で微笑んで和を抱きしめる遙を

親戚一同は見てはいけないものを見てしまった気がして
頬を染めながらそろそろと視線を外していった。

「あの、そろそろ放していただけませんか。」

「車乗るんなら絶対俺といっしょに乗ってね。」

そうじゃなかったら却下。」

「いいけど……じゃあ同行するひと女の子にしようか、
男性陣はみんな嫌がるだろうし。」

苦笑してそう話す和に、親戚一同は胸中で安堵する。

遙のこの態度を目の当たりにしてしまったら

彼女に近付きたいなどと誰が思うのだろうか。

車の数も限られているので、

買い物班はよつつに分かれることとなった。

みなそれぞれの希望を聞いて、町へと繰り出す。

和と遙に同行したのは、亜紀と智子で、

終始テンションがあがりっぱなしの智子を穏やかにいなす遙に

和はずっと感心しっぱなしであった。

それに反してずっともじもじしていた亜紀にも、

ゆっくりと柔らかく話しかける遙は

本当に生粋のスケコマシである、と和は認定せざるを得なかった。

『……帰ったら、みんな準備か。』

なんとかうまくいこと収まればいいけど、と和は心の中で囁く。

「和。」

隣に座る遙から声をかけられ、和は左側を向く。

その微笑が、大丈夫だよ、と言っているように和には思えて、目の前の恋人に、和も無言で微笑を返した。

遙の手が優しく頭を撫でて、それがとてもくすぐったくも嬉しかった。

「ちょっと、所構わずイチャつかないですよ。」

智子のつつこみに、和は無言で遙から距離を取るが

それを許さずに遙がより一層距離を詰めて和の手を取った。

「すみません、ここに居る間とはかくマーキングに必死なんです。」

「よく言うわー。ここには見せ付けなきゃいけない相手いないですよっ？」

遙君、噂通りね。お姉さんはなんだか安心したわ。」

「恐れ入ります。」

遙の言葉に、智子は苦笑すれば

あーイイ男どっかにいないかなー！と運転しながら声をあげる。

それに、亜紀も力いっぱいいうなずいたので

和は遙を視界にうつしつっつ考えていた。

『イイ男か…和泉君って他の女性からみれば文句なしにそうなんだ

ろくなあ。』

そこらへんの感覚はあまりなくとも、

和は遙が自分にどれだけ心をくれるかよくわかっていたので
少なくとも自身にとって彼は最高の彼氏だと心の中で呟いた。

一瞬、彼にだけ聞こえるように囁こうかとも思ったが

その後になにをされるかを想像して和はなにも言わなかった。

彼女の心にあつた不安は、もはや跡形もなく霧散している。

最愛の恋人は、ただ手を握って自分に微笑んでくれるばかりだった。

第八十五話「(一部に特化して)盲目的な彼女・その10」

「ちょっともう、いいかげん放してよ。」

苛立った声でそう話す女と、それにまた不機嫌そうな顔をする男。周りの人間は、そんなふたりをどこかハラハラしつつしかし楽しそうに見物している。

「それよりさ、さつきすれ違いざまに話しかけたひと誰？」

「えー？さつきって？男？女？」

「男に決まってるじゃないか。」

「どういう趣旨で訊いてるのがわかんなかったんじゃん。」

「ちょっとだから！隣に立つんなら手伝えっつーのよ！」

「いいけど、離れなきゃいけないんならヤダ。」

先程から、宴会場と台所を行ったり来たりする人間で賑わっている。

和ももちろんそのひとりで、

必要な食器類などを運んだり料理の補助をしたりしているのだが、なにをするにも遙がまとわりついていてとても邪魔そうにしている。

現に、邪魔で仕方がないのであるが。

少し前までいちばん会いたい人間であったはずなのに、

こうなってしまうと途端に帰れと思う自分はなんて現金だろうか、と和は心の中でため息を吐いていた。

今は、棚から出した食器類を盆にのせて運ぼうとしている途中であることが遙は和の腰を抱いていた。

こいつは真性の馬鹿だ、と何度も心の中で思っているが

この今の行為を容認してしまうと自分も馬鹿なカッパルの仲間入りをめたく果たしてしまうわけであり、和はなんとも頭が痛い。

そんなに広くない台所で派手に暴れるわけにもいかず、しばらくは口でやめると諭していたがいかげん限界を感じれば和は得意技のひとつである「足を思い切り踏む」を繰り返せば、痛がる遥を無視して無言で食器類を運びに廊下へと出ていった。

「は、遥君、大丈夫か？」

和に対して特別な感情を抱いてはいない親戚の男達が引き攣りながら遥へと駆け寄るが、

遥はひとつ大丈夫です、ありがとうございますと答えながら微笑めば和ー！と大声で愛しい彼女の名前を呼びつつ廊下を走っていった。

「……ありゃ、犬だな。」

その場にいる全員が呆れた顔をしてうなずいた。

周りにどう思われているかなど歯牙にもかけない遥は廊下を小走りで移動して目的地へと辿り着く。

宴会場を見渡して食器を並べている和を発見すれば、

和の隣でまた知らない親戚が声をかけていた。

害があるのかないのか、顔を見れば大体わかる。

遥はす、と目を細めれば男を排除の対象と判断したのか足早に和の元へと駆け寄れば、

遥の存在をやっと認識した和が抗議に出る前にぐい、と引っ張って和を懐へと抱き寄せた。

にっこりと微笑みながら相手を上から下までながめる。

遥に話しかけた中には見なかった顔なので、

間近で顔を合わせたのはきつと今が初めてだったのだろう。
むこうも同じように遙を検分すれば、多少、顔を引き攣らせた。

「ちょっと和泉く」黙って。」

低い声で遙が告げれば、和はその怒りを感じて静かになる。

こういうときは逆らってはいけないと本能が知っているのだ。

「お互いに恋人がいるからって軽く遊べるとでも思っていました？

俺は、浮気を容認するほど心の広い男じゃないですよ。」

「な、なに言ってるのかなあ。」

「いいんですか？地元の彼女にばらしちゃっても。」

その言葉に男は目を見開いて蒼褪める。

表情でわかる、なんで知っているんだ、とでも言いたいのだろう。

「べ、べつに、懐かしくて話しかけてただけだよ！

ここに来たの久しぶりだったから。」

慌てた様子で去って行った男に、

遙は不快指数100%のオーラを投げた。

その殺気を感じ取ったのかは定かでないが、

男が廊下でおもいきり足をもつれさせて転んだので

遙は多少胸がすく思いを味わえた。

「…びっくりした」。マジであのひと五年ぶりとかじゃないかなあ。

「そんなひともいるんだ？」

「たまーにね。…和泉君、さすがにああいつのは私でも対処できる
つてば。」

「いいじゃないか、和がするより俺がするほうが早いもん、ね？」
「…はあ。」

呆れ口調で遙に返事をした瞬間、和は我に返った。

見渡してみれば宴会場にいるほぼ全員がこちらの様子をつかがっている。

和は顔を真っ赤に染め上げて、遙の胸をどん！と押した。

「まあ、助かったよ、ありがとう。仕事に戻ろう。」

「やっぱりずっと隣にいる、心配だから。」

「単に話しかける相手さえ睨みつけるじゃない、やだよ。」

「だってとりあえず和に男が近付かなくなればそれでいいんだもん。」

「

「ちょっと、他意のない大事な親戚連中まで排除する気？」

「そこまでするつもりはないけど。」

「自分は女の子はべらしてるのになんで私だけ…」

「え、やきもち？」

和の言葉に遙がぱ、と顔を輝かせるが、

和はいいかげんうんざりだ、といった風情で顔を顰める。

食器を並べて、傍らに置いた盆を持ってまた台所へと戻ろうとすれば
またも遙が腰を抱いて歩こうとする。

今度こそ我慢出来ないと思った和は、びしり、と額に青筋を浮かべれば

鬼の形相で遙を睨み、

「いいかげんはなれろ、うざい！！」

と怒鳴って遙の鳩尾へ蹴りを一発お見舞いしたのだった。

それに観察していた周囲がどよめく。
中でも驚き目を丸くしているのはおじさん連中だ。
無理もないが、今まで物静かな面しかみてこなかった彼らは
まさか和が怒鳴って恋人を蹴り上げるなどという所業を働くとは夢
にも思わない。
驚きすぎて、ものたえでもなんでもなく開いた口が塞がらない
者までいる。

しかし蹴られた遙は寸前で避けた上、相当慣れた様子で
和にこら！と叱責の声を浴びせた。

これには他の親戚連中が驚いて目を丸くする。

「今日はスカートでしょう、そんなに高く足をあげない！」

そこか！？とその場にいる全員がずっこける。

つつこみ体質で我慢できなかった親戚のひとりなどは
そこかい！などと声をあげてしまっていた。

「下にレギンス履いてるからパンツなんてみえないもん。」

和の返しもなんだかな、というもので

またも親戚一同は複雑な心境でふたりを見守る。

ついには忍び笑いを漏らすものまで出る始末で、

人々はまるで夫婦漫才でも見ているかのような気分になった。

「なに言ってるの、身体の線がおもいつきり見えるんだから
際どい所を他の男の目にさらすなんてありえないよ。」

「えー和泉君、変態。」

「男はみんな多かれ少なかれ変態です。」

ちつつち、と人差し指で動作しながら遙が和に言い募る。
男連中は、なんとも複雑な心持ちだ。

言っている事は理解できなくもないが、
それを口にしてしている男があも色男では説得力に欠ける以前に
綺麗な顔から発してほしくはない種類の言葉だった。

「とりあえずこの人たちでそんな風に見るひといないよ。
夏場なんてもつと薄着でお風呂上りに廊下歩くんだよ？ねえ？」
「和つ、この馬鹿！！」

和が振り向いて同意を求めようとした瞬間、
慌てて司が止めに入って口を塞いだが、もう遅い。

しかも意図していなかったものの、おもいきり和に触ってしまった
ことに
司は顔面蒼白になった。

「は、遙君、俺はちゃんと地元には彼女いるし…む、無害だよ！？」
「ええ、わかってますよ、妹のようにしか見ていないのもわかっ
ます。」

でも…触られて不機嫌になってしまふのは仕方なくないですか？
ねえ？とにこにこ笑って仁王立ちする遙のなんと恐ろしいことが。
真っ青な顔のまま、司は即座に和から距離をとり
両手を高くあげ、降参のポーズを示した。

遙はそれに満足そうに微笑むと、で、と仕切りなおしの声をあげる。

「ねえ、和。記憶の限りでいいんだけど…」

この夏に廊下で風呂上りに遭遇した男はあの中のどれかな？」

「え、あの、い、いない」

「ああ、そうだね、毎年来ていれば一度はみんな見た事があるかもね。

面倒だから全員潰すことにしよう。」

その言葉に和はざ、と司と同じくらい蒼褪める。

これは…文化祭での二の舞だ。

遥は顔とそのひよろりとした体型からは想像できないほどに妙に喧嘩慣れしている。

あの見た目だ。

きつと、幼い頃から同性と色々としりがあわない事も多かったのだろつ。

しかし今は、そんな所に思いを馳せている場合ではない。

「い、和泉君待つて！別になににもされてないんだつてば！！」

「当たり前だよ、それこそなんかあったら潰すだけじゃ済まない。」

「それだつて十分駄目ですつて！お願いやめてええええ！！！」

「和、大丈夫、すぐ終わるよ。」

「ちよ、まつ！皆お願い、和泉君困んで！」

お触り自由です！許可します！なんでもいいから止めてえええ！！！」

親戚の女子連中に向かって和が叫べば

何を思ったのか、和と同年代というよりお姉さん世代の方々が

こぞつて遥を取り囲んできた。

さすがに女性には手が出せず、遥は狼狽するに留まる。

輪の中心から、和ずるい！という声が聞こえてきたがそんなことは知るか、と

和は安堵の息を漏らす。

そこではた、と和を笑っていたひとりのおじと目が合った。
おじは、ふ、と苦笑してみせた。

「和ちゃんも大変だねえ。…でもなかなか女冥利に尽きるんじゃないか？」

「……いや、こんな風に愛されたいなんて一度も望んじやいなかったんですけどね。」

頑張って逃げ回っても無理だったんで、諦めました。」

常がない和の気安い物言いに、一瞬目を丸くするも、
おじはそうか、と声を高らかに笑い出した。

和はこのとき、今までの自分を後悔した。

はじめから、こうしていれば良かったのだ。

そうすれば、傷付けられてもどうとだって頑張れたし

くれる言葉ももったときちんと受け止められていたはずだろう。

目の前の親戚のひとりに、和は心からの微笑を返したのだった。

「ちいちゃん、たあちゃん、ありがとうね。」

和が笑ってお酌をしながら、ふたりにお礼を言う。

宴会場へと足を運んだふたりは、なにかも心得た様子でただ微笑むのみであった。

「素敵ねえ。もう、毎年これでもいいのではないかしら。」

「そうねえ…格式めいたものを好きなひとたちもいるから…まあ、この先色々と考えたらいいのではない？」

「そうねえ。そうだわあ。」

笑うふたりのおばあさんを、和は心底偉大だと思った。

いつも通り、空いた皿を下げたりと色々忙しくする和だったが、遥はすっかり親戚のおじ連中に囲まれて今は別行動になっていた。和はそれに安心したが、遥がまた変な事を言わないかがとても心配になっていた。

ちら、と遥のほうをみてみれば、

高明の隣に座り楽しそうに笑っていた。

もう少し歳のいった連中は、少し距離を置いて遥をみている。

「おおーい、和ちゃん。こっち持ってきてくれー。」

「あ、はい。」

声をかけられ、和は持っているお酒をテーブルへと置いていく。済んだ食器は盆に次から次へとのせていった。

「和ちゃん、やるなあ。ものすごくいい男じゃないか。」

「ああ、しかも和ちゃんにべた惚れだなんて。」

あれだけ想われたら嬉しいだろう？」

「あー、まあ…嫌ではないですかねえ？」

嬉しい、という表現はなんとなくしっくりこず、
和は首をひねりながら曖昧に返事をする。
かちやかちやと食器をまとめてみると、山田のおじと目が合った。

「それにしても、ここまで非常識だとは驚いたよ。
恋人をここに連れてくるなんてねえ。」

「別に私が呼びつけたわけじゃないですけど？」

「都合が悪い事は相手に押し付けるのかい？」

「別に、ちいちゃんとたあちゃんには許可もらってるんで
おじさんの嫌味くらいは聞いてあげてもいいですけどー？」

和の言葉に、山田が目を丸くする。

それは他の親戚一同も同様だったようで、

和の発言が信じられない、とばかりにしばし固まっていた。

「な、な、なんだ、その口の聞き方は!!！」

「疲れたのもう猫を被るのをやめようかなあ、と。」

家族の皆にも、もうやめたらって言われたしじゃあいいかって。」

「な、な、和ちゃんは…無口な子じゃなかったのかい？」

山田以外の親戚も、顔を強張らせながらきいてくる。

和はなんだか面白くなって、わざと含みのあるような笑みをしてみ
せた。

「色々都合が良いかと思ってたんですが我慢の限界です。」

私は確かに酌をしないでいますけど、別にやるこたやってるつもり
ですよ。

準備だって、洗い物だって、こうして食器下げるのだってけっこう
重労働です。

おじさん達を労おうって気持ちは私にだってありますよ。

なきや普通にサボってます。」

和の言葉に、親戚連中は耐性がないぶん言い返せずにたじたじた。何人かの男連中は、うつむいて黙ってしまった。

「……腹の中で、馬鹿にしていたのか。私達を。」

「馬鹿にしたたのそつちでしょ？私の事を散々罵ったくせによく言うなあ。」

泣いたのだから演技じゃないですよ。本当に悲しかったからですよ。馬鹿にしたら本気で傷付いたりします？

少なからず好意がどつかしらにあるから傷付くんですよ。私だってここ好きだし、ちいちゃんたあちゃん好きです。それを守るおじさん達にだって

少なからず感謝はしますし礼は尽くしたいと思います。」

和の言葉に、はっとなったように次々とおじ達が顔をあげ彼女の真摯な顔をみつめる。

今まで、自分達が詰ったその意味を考えてはなぜだったのかわからなくなっているようだった。

彼らにとって、ある種、ゲームに近いものであったのかもしれない。和はそんなことを思えば、心がどんどん冷えていくのを感じた。

こんな事に傷ついて、トラウマまで抱えるのはあまりに馬鹿馬鹿しい。

齊藤だけは、いまだにこちらを侮蔑の表情でみつめている。

ああ、この男は本気で駄目なのだ、と和は理解する。

しかし、山田のほうは少し意外であった。

和の言葉を、怒鳴って遮るでもなく一応は耳を傾ける心の広さはあったのだ。

頭の中でそんなことを考えれば、和は自然と山田へと視線を向けて

いた。

山田のおじは、真っ赤になって震えている。

『ああー…こりやあまた最大級の罵倒がでるかな？』

もうなんでもこい、状態の和は

くるぞくるぞ、と半ば楽しめる余裕をみせつつ心の中で身構えた。

しかし、発せられた言葉は、あまりにも予想外で

和はこの瞬間、確かに時が止まったと感じた。

山田の唇が、ゆっくりと開く。

「…じゃないか。」

「……え？」

すいません、きこえない、と和が眉根を寄せれば、

山田のおじはか、と目を見開いた。

「だったらなんで笑ってくれないんだ！昔からそうだったじゃないか！—」

あまりにも予想外過ぎた言葉に、和は本気でずっこけそうになった。いや、もう、これはそうならなかった自分を誉めてもいいレベルだろう。

しかしそれでも、は！？というすっとんきょうな声を上げるのは止められなかった。

「おじさん、ちょっと意味が」

「だから！和は昔からそうだったろう？

彩は誰にでもよく笑う子だったが、

お前は家族とか同年代の子にしか笑わなかったじゃないか。」

「……………まあ、昔は人見知りとか緊張もあったんで」

「ある程度大きくなったらなったで曖昧な薄気味悪い表情しか作らないし。」

それも仕方ないかと納得しようとはしたが…

私にだけだつたらろう？全然笑わなかったのは。好かれてるなんて思わんじゃないか。」

「えええーと…ちょっと待ってみよう、おじさん。」

捲くし立てるような言葉に、和は頭を抱える。

その意味を噛み砕こうとすれば、それはあまりにもな結果になるが。

「私が懐かないのが気に入らなくて…苛め抜いたと？」

「泣いたりすればもつと素直になるかと思つたんだ。」

親戚の子のひとりだぞ。高明や依子だつて私はよく面倒みてたんだ。その子どもが可愛くないわけないだろう。」

どうやつたら懐くか色々と試行錯誤してたんだ。」

「いやいやいやいや？マゾでもない限りあの所業は喜ばませんぜ、ダンナ。」

「なんだお前は、言葉遣いがなつとらん。」

「え、好かれないの、嫌われないの、どっちなの？」

「だから、懐かれたかつたに決まつとる！」

いちばん可愛い盛りの幼少時代に手懐けるのに失敗したら

なんだかお前を罵倒するのが当たり前みたいな変な流れになつてしまつて…」

気のせいではなければ、周りの取り巻きっぱかつた親戚連中も引いている。

当たり前であろう、これには誰だつてドン引きもいとこだ。

こんなに年齢を重ねているというのに、彼はあまりにも不器用すぎ

る。

「私はどんどん頑なになるから周りも増長するし？」

最初に罵った手前、かばうことも出来ないし？」

「……………まあ、そうだが。」

「小さい頃に目の前で泣けばそれをなくさめて和解しようと思ってたんだ。」

「……………むう。」

「せこくね？」

「だからおまえは！なんだその目上に対しての言葉遣いは！！」

「その無駄な威圧感が怖くて頑なになってたんですってば。」

泣いたら最後負けだと思って。」

その言葉に、おじさんはショックを受けたかのように瞳を揺らした。あれ？なんだ、これ、可愛くないか。

60過ぎたオッサンに可愛いとかあまりにもじゃないか。

「まあ、私もさっさとこういう人間だって暴露しちゃえば良かったですね。」

「ごめんなさい、幸仁おじさん。」

「！和…私の名前を覚えてくれたのか？」

「いや、まあ。そりゃあねえ？…にしても開けてびっくりだね。」

おじさん究極のツンデレじゃん。つつかこれツンデレで合ってるのか？」

「つつ…？」

「ああ、ごめんごめん、この年代には絶対わかんない単語だったよね。」

「ひとを年寄り扱いするな！」

「面倒くせえ。」

「和！」

打てば響く幸仁がどうにもおかしくて、和は声を出して笑ってしまった。

怒られるかと思ったがしかし、

彼は目を細めて愛しそうに親戚の女の子をみつめるだけだ。

「…そうやって、笑ってくれたら良かったんだ。

なんならおじいちゃんとか私は言われたかった。」

「なにその衝撃的なカミングアウト。私どんだけ愛されてるの？

ていうか趣味がマニアックだよゆきおじさん。」

「あ、愛称まで!?!」

「…………おじさん、どうしよう。」

傍に座っていた中村家のおじに和が助けを求めれば

中村は苦笑する。

「まあ、これで若い連中とのしこりもとれるんじゃないかな？

山田さん、あなたが長年蒔いた種なのだし、頼みますよ。」

その言葉に、幸仁は苦々しげにうなずく。

若い連中に謝ったりするのは色々と苦痛だろう。

和は、そこらへんもなんとか丸く収めてあげようと心中で思った。

ちら、と斉藤をみつめれば、悔しいのかなんなのか

ものすごい憎悪をこちらに向けて和を睨みつけていた。

『…このひとも、なんだかなあ。』

和は小さく息を吐けば、食器を下げようとまた動き出す。

「じゃ、また追加の酒でも持ってくるねー。」

「和。今日くらいは私の酌をしてくれないか？」

「え…。」

その言葉に、和は目を丸くする。

ひよっとしたら彼は、この一言だけがいいたくて今日まできたのか
もしれない。

和はちら、と中村のほうをみれば、

彼は困ったように微笑む。了承してくれないか、ということだろう。

「あとでおばさん連中に今度は嫌味言われるー。」

「そ、それは…。」

「今までしなかつたくせにーとかさー。」

まあ、本音隠して話すのが無理だと思ったからしなかつただけど。

「

はあ、とため息を吐いて、和は立ち上がる。

幸仁は、寂しそうな顔をしてそれをみつめるが無理強いをするつもりはないようだ。

和は、その様子に苦笑した。

「これを下げたらだからね。それくらい待てるでしょ。」

和の言葉に、幸仁の目が輝いた。

『…なんだこの可愛い60代後半は。』

本気で孫馬鹿な祖父のようだ、と思えば

和は少し足早に台所へと向かったのだった。

第八十五話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その10」 （後書き）

一日待たせた拳句、あまりにもお祭り騒ぎのご都合主義でごめんなさい。

自分で書いててもずっとこけそうでしたが、

幸せなお話が好きなのでこの結末は最初から決定してました（苦笑）

第八十六話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その11」

その日の夜、はっきりと和解という形ではなく
自然と打ち解けた盛大な親子喧嘩は、むしろこれが最高の形であっ
たらうと

屋敷の主ふたりは喜んでいた。

お互いを尊重する気持ちさえ忘れなければ、
壊れてもいつだって修復は可能だと、

ありふれた言葉はしかし年月を重ねたふたりが放つ事でその重みを
増した。

和は結局、その日の夜はおじさん連中にひっぱりだこで
たくさん声をあげ、たくさん笑った。

特に幸仁は和をなかなか放さずに、酔っ払った彼を部屋にまで運んで
和は苦笑してしまう。

「こつなるとは思ってたんだよな。」

「お父さん？」

「俺はさ、昔からけっこうおじさんに懐いてたし、

親戚連中で依子を真っ先に気に入ってくれたのも幸仁さんだった。」

「そつなの？」

「ああ…それなのになんで和にああなんだろうなあ、とずっと思っ
てて

何回か探りいれても頑なに何も言わないからさ。俺も困ってたんだ
よな。」

「そつなんだ…。…なんというか、可愛いひとただけだったね。」

「お前…本人にはさすがに言ってやるなよ。」

「わかつてるよ。」

さすがに和もそこらへんの分別はついているつもりだ。布団の上で豪快にいびきをかく幸仁をながめながら、父と娘は苦笑した。

そうして、高明は娘の頭をぽん、とたたく。

「まだ、風当たりが強い連中もいるだろう。」

「それもわかってる。私の怠慢の結果だから、自業自得。」

「和は…今までを自分の怠慢と言い切るあたり男らしいな。」

くつくつ笑う高明に、和はそう？と首を傾げる。

「ま、明日から大変だろうから頑張れ。色んな意味で。」

「んん？」

「いや、大変なのは…遥君かな。」

「…よくわかんないけど、一応頭には入れとく。」

「ああ、そうしとけ。じゃ、俺は風呂に行くわ。」

「うん。」

部屋の前で手を振って別れ、高明の言葉の意味を考えつつ和は宴会場へと戻ってゆく。

後片付けをする人間に混じる和を、遥が認めて駆け寄る前に鋭い視線で射抜かれた。

それは、年配の女性連中である。

これは、和も予想の範囲内だった。

恐らくいちばん反感を買うのはここらへんの人々だろうと覚悟していたので

特段、なんとも思わない。

「結局、男の人は皆手玉に取っちゃったわねえ。」

くすくすと笑う連中に、和はにっこりと微笑む。

「よろしければ娘さんに手解きしますが？」

あ、報酬はいただきますよ。慈善事業は趣味じゃないんで。」

和はおば連中に負けないくらいにやにやしなから人差し指と親指でもって輪っかを作ってみせる。

端的に言ってしまうえば金寄せ、であろう。

それを見た何人かが、あからさまに顔を顰めたり頬に朱を上らせた。やはりまだ和のこのキャラクターに慣れないらしい。

「まあ、本当、良い娘さんにお育てになられたのねええ？」

依子さんも昔はすごかったのかしら。」

「高明君をつかまえたあたり、なかなかの腕じゃない？」

その言葉に和はテーブルを強く叩き付けた。

それにはさすがに驚いたのか、周りの様子をつかがっていた連中もびくり、と身体を揺らす。

「両親は少なくとも、よつてたかつてこんな小娘を虐める様な

厭らしい人間性は持ち合わせていません。

私は、父と母を尊敬しています。今の言葉は訂正していただけませんか。」

「なっ…！」

「私は、これからもあなたがここでやる仕事を手伝つつもりだし必要になったら酌もします。今まで以上に働きます。

性格が悪いのはここで培われた歪みが原因なので、

それとんとんにしてもらえませんか。」

「私達のせいだつて言いたいわけ!？」

「そう思うんなら勝手ですけど、誰もそんな事言つてませんよ。それより片付け進まないんでもういいですか?まだやります?

いずれにせよ、私をこんな風に詰つても

どんだんあなた方の立場が悪くなるだけだと思いますが。馬鹿になりたいんですか?」

辛辣な言葉でどんどん言い募る和を、和を嘲る連中と同年代の人々はどこかはらはらした気分で見守っていた。

和に悪感情を抱いてはいないが、同年代ということもあって心中は複雑なのだろう。

目の前のおばたちはおばたちで、悔しいが山田率いる人間達が和と和解した以上

確かに自分達の立場が悪くなるのは彼女の言うとおりなので何も言い返せなかった。

「和ちゃん、それくらいにしておいてあげて。」

「あ、おばさん。」

沈黙が落ちる中、静寂を破つたのは雄大の母だった。

傍らに依子もいる。

「少なくとも、私は和ちゃんとってもいい子だと思います。

確かに口は多少、達者かもしれないけれど、

この子はいつだって何も言わずに働いてくれていましたから。

それは忘れてはいけないと思いますよ?」

中村の言葉に和を罵倒していた連中が悔しそうに顔を歪め、うつむ

く。

依子は、一步進んで頭を下げた。

「和ちゃんは、人一倍家族思いなんです。だから私や高明さんの事を言つと」

どうしても熱くなってしまうけど…自分が貶されても我慢する子なんです。

だから私からもお願いします。

これ以上、この子に我慢を強いるのはやめていただけませんか？
親ですから、どうしたって娘は可愛い存在なんです。」

依子の言葉は、子どもを持つ母親達の胸を打った。

和を傷付けようとしていた連中は、気まずげに視線を逸らしながら廊下を足早に去って行ってしまふ。

周りで見守っていた人間は、依子と和に気にするな、と温かい言葉をかけてくれた。

すべて解決したわけではないが、

最良の結果が残せた事に、和も依子も顔を見合わせて微笑む。

中村のおばにも、親子揃ってお礼を言った。

遙が、笑いながら和に駆け寄る。

「なんか出番なかったなあ。やっぱり和はかつこいい。」

「あれ、前にも言わなかった？和泉君が居てくれるからこそだよ。」

「……俺ももういつかい言うけど。あんまり可愛い事言わないでよ。ここじゃあ色々したくたって出来ないんだから。」

がっかりと項垂れる遙に、和はくつくつと笑う。

「そつえば、私達が帰るのは明後日だけど、和泉君は？」

「俺もいつしよに帰っていいよって言われたから明日も居るけど。」
「そか。…あ、そういえば…進君と彩ちゃん、今頃どうしてるだらう?」

「あのひとな…俺より怖いんじゃないかな。」
「それは…彩ちゃんに執着してるって意味で?」

和の言葉に、遥は苦笑しながらもうなずく。
その返事に和も小さくうなずいて顎に手をあてた。

「私と違って彩ちゃんには過去があるから…」

多分そこは大きいでしょう、男のひとにとつたら。」

「ああ…。」

「良く言うじゃん。男は女の初めてになりたがるって。」

「女のひとは違うの?」

遥が首を傾げながら問いかけるので和はくす、と笑った。

「最後のひとになりたがるのが、女らしいよ?」

「へ…じゃあ俺達って理想のカップルじゃない?」

「さあ、それはどうだか?確かに私の最初は和泉君だけど和泉君の最後が私になるとは限らないよ。」

「まあたそこういう事を言うー。」

「拗ねない拗ねない。驕れる者も久しからず、だよ。」

口を尖らせる遥がおかしくて、和は背中をぼん、とひとつ叩きながら言う。

手は先程から忙しくなくテーブルを拭っていて

遥はどこかの出来る店員のようだ、と思いつつながら

自身も片付けが済んだテーブルを下げようと動き出す。

「和は驕ってくれないんだけどなー。」

「相手に対する思いやりがなくなったら駄目だよ。」

「もちろんそうだけど。遠慮ばかりするんだもん。」

たまには我儘言われると嬉しいのになー。」

肩を竦めながら遥は和の傍で仕事を片付ける。

しかしそんな遥を視線で追いつつも、和は首を傾げていた。

正直、我儘なら相当きいてもらっていると和は思うのだ。

放課後や休日の時間の使い方を、あれだけこちらに合わせてくれているから

和は遥と無理なく付き合っていていける。

クリスマス的一件事にしたってそうだ。

普通ならば、流行のスポットなどに連れて行かれそうになってもおかしくはない。

毎回、彼には苦痛ではないのかと訊くが

決まって和と一緒にならば、とそればかり言う。

映画も、結局遥が観たいと言ったものを観た事がない。

「私は今でもじゅうぶんなんだけどなあ。」

「趣味関係のこと言ってるの？でも何回かゲームセンターとか行っただじゃない。」

「あれは、結局私も好きだもん。」

「でも対戦とかはやったことないって言ってた。」

「そうだけどさー、プリクラは死ぬるって言ったらやめてくれたでしよ？」

「そんなの、我儘に入らないよー。」

笑いながら言う遥に、じゃあなんなら我儘になるの？と

和は結局はつきり訊いてみた。

「んー…今すぐ会いたい、とか。今日は帰りたくない、とか。」

「……………言ってるね、よく。和泉君が。」

「あとは…他の女の子と仲良くしちゃうだ！とか。」

「……………言ってるね、それもよく。和泉君が。」

まあ、今日は帰したくない、であったり
他の男と仲良くしちゃうだ、ではあるが。
結局、嫉妬云々の話に戻るのであろうか。

「私だつて、会いたいと思うときがないわけじゃないんだけど。」

先回りして和泉君が来てくれるし言葉をくれるから

どうしたつて後手後手になつちゃうんだよねえ。」

「えー！じゃあ俺しばらく我慢する！！」

「そっか、それじゃあ男の子と喋ってても寛大でいてくれるんだね。」

「

よかったよかったと笑いながら食器を下げに行く和に

遥がええ！？と後ろで声をあげていた。

そう言ってる傍から、和に声をかける親戚が多い。

ここではそもそも、クラスメイトよりも距離が近い人間が集まっているのだから

当然と言えば当然である。

牽制も、和をそういう目でみていない連中にはやはり意味がない。

やましいところがまったくない人間は、

和を姉か妹のようにしかみていないのだ。

わかっていつつも、困った事に遥の嫉妬心は燃え上がるばかりなのである。

「はーるつかくん。」

ぼん、と肩を叩かれて遙は後ろを振り向く。

そこにはここに来ていちばん最初に親しくなった人間が立っていた。

「智子さん。」

「あんまり無差別に妬くと嫌われるわよー。」

適度な嫉妬は嬉しいけど束縛も過ぎると危険だわ。」

「さすがにそんなに無茶はしてないつもりです。」

「まあねえ。和も言いくるめるのうまいから。良いコンビだわほん
と。」

遙君で今までもずっとこんな感じだったの？相手に対して。」

「いえ、全く。」

「はーん…じゃあある意味あの子が初恋？」

「そうですね…そうかもしれません。」

遙の言葉に、智子は面白そうにそれはそれは、と目を丸くする。

そうしてしばらく、智子は顎に手を当てた。

「うーん…和って全然妬かないの？」

「さっきの話聞こえてました？ええまあ…。」

目の前でいきなり知らない女性に抱きつかれても平然としてました
から。」

「それはまた。…じゃあ抱きつくくらいじゃ駄目なのね。」

「俺も悪いのはわかってるんですけど。」

自分で言うのも変ですけどこの見た目なんで…

女の子にそういう目で必要以上にみられますから。

嫉妬深い子だったらそれこそたないでしょうし…。」

「ああ、そうねえ…ふたりが立場逆だったら、遙君は和を監禁しそ
うよね。」

「軟禁くらいにはします。」

「え、そのふたつってなにか違うの？」

その言葉に、遙が無言で苦笑した。

和も遙も文章が好きなぶん、変なところが明るかったりするものだ。

「まあ、じゃあ、わかったわ。お姉さんが協力してあげましょう。」

「え、どういうことですか？」

「和を嫉妬させてあげるわ。ただし後悔しないんなら、だけど。」

「！出来るんですか？」

「できるわよ。でも何度も言うけど、後悔しても知らないわよ？」

「し、しません！」

このとき、遙はきつとどこか舞い上がっていたのだろう。

忠告した智子の言葉の意味を、彼は理解していなかった。

まあ、はっきりと名言しない智子の悪戯好きな性格も悪かったのであるが

とにかく、冷静な判断ができなかったのは確かだ。

会話が終わったところで、ちょうど和が帰ってくる。

智子がおおーい、と和を呼びつけた。

それに首を傾げつつ、和が傍らへと駆けつける。

智子の隣に立つ遙は心臓が高鳴ってどこか緊張しているのが自分でもわかった。

「どうしたの？」

智子に和が問いかければ、問いかけられた彼女はただにっこりと微笑んで

隣に立つ遙の胸元を掴んでぐい、と引っ張った。

瞬間、ふたりの距離がなくなる。

和の目の前で、智子は遙にキスをした。

それは一瞬であったが、まるでスローモーションであるかのように和の目には実にゆっくりとふたりの唇が重なったのが見えた。

「ごちそうさま。」

そう言う智子と、固まる遙。

和は、目を見開いてふたりを凝視していた。

「ああ、和。言うておくけど私遙君のこと好きでもなんでもないわよ。

方法は伝えてないけど、あんたを嫉妬させたいって言うから協力してあげただけ。美少年とキスしたのはまあラッキーだったけど。」

「……………そう。智ちゃん、ありがとう。」

とりあえず智ちゃんは対象にしないから安心して。」

にっこりと微笑みあうふたりを、遙はいまだ固まってみていた。

そういう対象、とは、和の復讐の対象という意味だ。

こういう場合、相手の女性に嫉妬するのが常であるが

和にはあまりそういう観念はないらしい。

あくまでも事実関係をみて判断を下すのが笹森和なのである。

和は、す、と目を細めて遙を見据える。

いくらなんでも遙にもわかる。

これは…

明らかに彼女は怒っていた。

「な、和」

「信じられない。そこまで嫉妬させたかったわけ？」

それなら今度から学校で寄るな触るなって騒いであげましょうか？」

「いや、あんな事されると思ってたなくて」

「回避できなかったとでも？まったく予測の範囲外だったとでも？嫉妬させる、となったらそういう種類の行為がついてまわるなんて誰にだってわかるでしょう、違う？」

「それは…ご、ごめん、和」

伸ばされた遥の手を、和は確かな意志でもって叩き落した。
ばしん！という痛々しい音が場に響き渡る。

「ありえない。恋人同士でしかない行為を他の女に赦すなんて。」

「な、和…」

「遥は言ったよね、和は俺のだけど、俺も和のだって言ったよね！嘘だったんだ、信じた私が馬鹿みたい！！」

人前でそんな事を怒鳴る和に一瞬驚いた遥だったが
和の言葉を慌てて否定する。

「嘘なんかじゃないよ！！」

「だったらなんで智ちゃんときスなんてするの！？」

心がともなわなきゃなんともない、とか精神論がますつもり？

浮気男によく見られる傾向だよね！！」

「な、そんな事言っていないだろう！！」

「私が…私が、遥を嫉妬させたいからって他の男と抱き合ったら遥はどんな気持ちになるの？」

「そ、れは…」

「………そこまで私の気持ちが信じられないなら、いい。」

付き合っている意味なんてない。」

「和！」

そう言っただけで走り出す和を、必死で追いかけてやろうとした遥だったが、周りの親戚がそれを制止した。

「遥君、ああまでなった和はどうしたって頑固だし言う事きかないから。」

「そうそう、普段が冷静な分、まともに考えるの放棄した状態なんだよ。」

「なんにせよ、十分愛されてるわよ、遥君。」

「うんうん。まさか和があんなこと言うなんてねえ。」

「よっほど好きなんだな、君の事。」

周りから口々に言われて、遥は自身の浅はかさを呪った。

多少、智子を恨みたくもなったが

彼女は本当にいいのか、と確認したのだし、

やはり馬鹿なのは自分だ。

「遥君、お馬鹿さんねえ。あの子の愛情はまあわかりにくいけど…自分のテリトリーに入れた時点で和ちゃんはじめうぶんあなたを愛しているのに。」

「依子さん…。」

「今回は、自業自得ね。ぎりぎりまでひとりで頑張ってみて、どうしても駄目だと思ったら私と高明さんの所へ来なさい。ね？」

「……………はい。」

少し厳しい言葉を投げかけながらも、

慰めるように背中をさすってくれる依子ありがたかった。

ここまでになるとは思わなかった、と悪びれなく言った智子には一瞬だけが殺意が芽生えてしまった遙であった。

「和!泣いてるのか。」

「ゆ、雄大!」

慌てて涙を拭う和をみて、雄大は顔を歪ませる。

しかし、次の瞬間には、和は温かい腕の中へとおさまっていた。

「ちょ、」

「…やましい気持ちはないから。」

つて説得力はないかもしれないけどさ。」

あんな風に告白したあとじゃな、と苦笑しながらも和を抱きしめる腕の力は変わらない。

そのことを、今の今まで忘れていた和はなんて無神経なのだろうと自身を叱責する。

「雄大、ごめん、あの、私雄大とは付き合えない。」

「嫌いか?俺の事。」

「まさか。親戚で、いちばん仲良かったの雄大じゃない。」

「…俺の事、男として見れない?」

「それは…そうかも。なんていうか、弟みたいな。」

「せめて兄が良かったな。」

苦笑する気配が伝わって、和もふ、と顔を綻ばせた。
やんわりと、雄大の腕の中から身体を動かす。

「ありがと、もう大丈夫だから。」

「役得だったのに。」

「……ねえ、ちょっと、キャラが違わない？」

あけすけな物言いに驚いて、和が目を丸くしつつ
まじまじと雄大の顔をみつめる。

雄大は、眉間に皺を寄せつつ和の疑問に答えた。

「遠慮すんのも、照れるのも馬鹿馬鹿しくなっただよ。

これから俺は、全力でお前奪うって決めたから。」

「は!？」

「ラッキーな事に家も近いからな。

悪いけど、お前の迷惑とか考える余裕ないから。覚悟しといてくれ。

四年越しの片想いだからさ、諦めわりーんだ。」

「え、でも、雄大!」

「まあそんなわけだから、よろしく。今日はゆっくり休めよ。」

一方的に言いたい事だけ言って去って行った彼を

和は呆然とみつめていた。

明日には鈍行を乗り継いででも

帰ってしまうおうかと思っていた和であったが、

それはそれで問題が山積している状態になるのは変わらない。

遙と別れるかのような宣言をしてしまって、

広未とはまた違った存在の親しい男に告白されて、

和の心は混乱の極みに陥っていた。

結局、高明と依子に止められ

帰りも新幹線で帰ることにはなったが、

一日過ぎて七日になっても、遙とはぎくしゃくしたままになった。

帰り際、知恵と多恵には「どう転んでも和ちゃんには幸せが待っている」と

ものすごく意味深な事を言われてしまい、

結局、今回の里帰りは波乱含みのまま幕を閉じたのであった。

第八十六話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その11」（後書き）

これで今回のシリーズは終了です！お付き合いありがとうございました。

当初の予定ではこのあとしばらく私の憂鬱。というもつひとつの連載作品に

集中しようと思っていたのですが、

これではらく更新放置ってまずいですが、ね…；
すみません、また考えてみます。

あ、あともうひとつ。

ブログにて、彩と進の番外編を一本書きました！

もしも興味のある方はご覧ください。

第八十四話「（一部に特化して）盲目的な彼女・その9」にて
進に連れ去られた彩がその後どうなったのかを書いてみました。

第八十七話「どうしたもののか。」

反射的にでも、言ってしまった言葉はもう取り消す事は出来ない。そう思えば、和はとても憂鬱だった。

『付き合っている意味なんてない。』

言い過ぎてしまった、と和は自身でも感じていた。だからこそ、遙に早く謝罪をしなければ、と思う。しかし、どうしてもそれをするのは癪だった。

確かに、そこまで言わずとも、とは感じるものの遙があの行為に加担したのは事実で、

ともすれば和の心をいまだに疑っているのかもしれない。

そう思えば、和はどうしたって謝ろうという気になれないのだ。

素直になるとかならないとかではなく、自分から謝罪する結果に納得がいかない。

そう思えば、和はどうしたものかと頭を抱えた。

旅行を終え、こちらで一晩過ごした。八日の今日と、明日、明後日が過ぎればもう学校が始まってしまふ。

それまでになんとかできればと思っていたのだが、

和はどうにもこうにも打開策が浮かばずにいた。

現在時刻は朝の十時だ。

なんとなく自身を持って余ってしまった和は、

本屋にでも繰り出そうと鞆を掴んだ。映画に行くでもいい。

たまには、ど真ん中の娯楽映画でも観て心を単純にしまえばいい。

和は依子に一声かけて玄関をあとにした。

小春日和の暖かい陽気は、憎らしい程に休日にはふさわしい。和は苦笑しながらも、駅前を目指して歩く。

忘れないうちに携帯電話を移動させておこうと、鞆から取り出してデニムのポケットへと入れようとしたその時だ。携帯電話が急に震えて、和は驚きに声をあげそうになった。

驚いて数秒遅れたが、慌てて電話を開けば着信相手は先程までどうしたものと悩んでいた男の名前であった。

和は暫し逡巡すれば、しかし避けた所でそれこそ仕方がないと感じれば
恐る恐る携帯電話の通話ボタンを押した。

「……………も、もしもし？」

『和！！？……………良かった、出てくれて。』

驚愕と安堵が混じったその複雑な声音に、和は歩きながらも苦笑する。

「どうしたの？」

『うん…、あの、やっぱりこのままじゃ嫌だから会って話がしたくて。』

これから、家に行ったら駄目かな。』

「え！？えーと……………」

これから出かけようとしていた所である。

むしろ家に来られるならば、和が向こうへ行ってもいいと考えていたが

それだと色々と遙が気を遣うであろうかと暫し悩む。

『あの、会いたくない…?』

遙の泣き出してしまいそんな情けない声に、和は慌てれば思わず声を高くする。

「いや!そういうわけじゃなく………て……。」

歩きながら会話していて駅に着いた和は、驚愕に目を見開く。駅前に、とてつもなく目立つ男が立っていたからだ。

『和?どうした……!』

声が途中で聞こえなくなった事を訝った遙が和に呼びかけるがその遙も、途中で言葉を切った。

目の前に、電話で会話をしていた相手が立っていたからである。

遙の前に立つ和が無言で電話を切れば、彼もそれにはつとしたのが、もう必要なくなった携帯電話をぱち、と閉じる。

しばし、無言でお互いを見つめ合った。

「……どこか、出かける所だった?」

「ん?うん、本屋とか、映画とか…気晴らしに。」

「…そう。」

「和泉君は、行っていい?って訊いておいて

最初から押しかけるつもりで電話かけてきたんだね。」

苦笑する和を遙は視界に捉えつつ

口角を歪に上げて少し無理矢理に笑みを作った。

「だってこのまんま別れるなんて、俺の中にはないから。」

「……な、ない、ですか。」

「うん。俺が悪かったってわかってるけど、それでも、別れない。」

「ああ、そう。」

遥の言葉に、少し冷ややかな顔をして和が返事をする。

どうやら、彼の言葉が開き直っているようで苛立ちを覚えたようだ。それに、遥が今度はふ、と苦笑する。

「他の、和の願いはなんでも聞き入れる。許してくれるならなんだってする。」

でも、別れるっていう願いだけは絶対に駄目だから。」

遥の言葉に、和は多少心臓が跳ねたものの、特別驚かなかった。

たとえば、なにを命令したところで彼は本当にやってしまうだろう。それを確信してしまえば、和はなんともいえずにため息を漏らす。

殺し文句なのか、脅し文句なのか。

和はどちらにも取れる気がしてしまっただ底複雑である。

「私だって嫉妬くらいするってわかってくれたんだよね？」

「うん、よくわかった。ごめんなさい。」

「そっか……じゃあ、もうああいうことはしないでくれる？」

怒ったっていうのもそうなんだけど、悲しいから嫌だな。」

「しない。絶対にしない！！」

勢い込んで遥が声を上げるので、和がふ、と笑んだ。

「次にやったら、一ヶ月、私に指一本触れなくてももらいます。今回は…今日一日、私に触らないでくれたら明日からいつも通り。どう？条件としては悪くないでしょう？」

「……そ、そんなんでいいの？」

今日一日、という条件に拍子抜けしたのだろう。

目を丸くして遥が和をみつめていれば、和はにや、と笑う。

「私からも話があるんだ。今から和泉君の部屋行ってもいい？」

和の言葉に、遥がみるみる顔を顰める。

そういうことか、と合点がいった。

このままそれぞれ家へ帰るか、せめて和の部屋に行くならば自制するのはさほど難しくはないが、

何度も和をその手に抱いた場所である。

いっしょにいて、

なにもしないことはこれ以上ないくらい遥にとっては拷問だった。

和はそれをわかっているからこそ言っているのだから

彼女は本当に鬼畜だ、と心の中で泣きそうになりつつ呟く。

「嫌なら、やっぱり一ヶ月「行こう、今すぐ。」

条件を延ばそうとしたところで遥が即答したので、

和は計算通りの言動に思わずいやらしい笑みを顔全体に湛える。

遥は恋人のその様子に盛大なため息を吐いたが、

代償がこれならば安いほうであろう、とどこか安堵の意味も混じっていた。

「お邪魔します。」

「どうぞー。なにか飲む？」

「あ、なら私が入れるよ。コーヒー飲みたい。和泉君は？」

遥の部屋に着いてすぐ、すたすたと台所へと歩く彼女はもう、この家の使い勝手を大分その身体に覚えこませてしまっている。

それに遥はこれ以上ないくらいの喜びを感じれば、微笑みながらじゃあ俺も同じものをお願いします、と頼んだ。

了承の返事をして和がコーヒーメーカーをセットする。

この家にあるコーヒーはとても上等なもので、ただで飲む事に恐縮していた和であったが

遥から、お隣さんのおこぼれだ、と言われれば少しだけ安心した。それでも、悪いと思う心は変わらない。

そのうちインスタントの粉を買って来よう、と頭の隅で考えていた喫茶店に好んで行きはするものの、和は特段コーヒーにこだわりはない。

味の違いもそれほどわかっていなくて、酸味の強いものは少々苦手だ、とか好みなんてそのくらいのもんだ。だからこそ、恐縮してしまう思いは強いのだろう。

コーヒーメーカーからのこぼこぼという音と、良い香りが和の心を
攪る。

出来上がるまで多少時間があると感じれば
カップやミルク、スプーンなどを用意して和は腰を下ろした。
和のすぐ隣に、遙は既に座っている。
頬杖をついて、じっと和の様子をうかがっていた。

「…なあに。」

「ん？もう本当に怒ってないのかなーと思って。」

「怒ってないよ。いやまあ、思い出したら苛々はするけど………和泉君。」

「え？な、なに！？」

またも失言してしまったらどうかと遙は焦った。

目の前の和は、とても不愉快そうに彼の顔を睨みつけている。

しかしどうしたらいいのかわからなくて、遙は無言で固まっていた。

「和泉君、ぜつつたいに動かないで。動いたらさっき言ったように接触不可の期間延ばすからね？」

和の言葉に、遙はごくごくと首を縦に振る。

それに満足したように微笑んで、和はじゃあ、と右手を振り上げた。平手打ちをされる、と思えば、遙は反射的に目をつぶる。

予想していたような痛みはなく、遙の唇を柔らかい何かが覆った。

唇だとわかったときには、遙の身体がわずかぴくり、と揺れる。

和の両手が遙の頬を包みこみ、躊躇することなく彼女の舌が遙の口内に割り入った。

驚愕にしばし固まるも、いつも遙が和にするかのように

ぞろり、と上顎を和の舌で撫でられれば遙の背筋はぞくり、と震えた。

舌を絡め取る湿った音も耳に聞こえて、遙は内心興奮せずにはいられない。

和の攻めがどんどん大胆になっていくのに、

自身からなにも仕掛けられないのがなんとも歯がゆくて、

遙は思わず唇を押し付けるかのように和の方へと顔を傾けた。

それにも応えるかのように和の舌が遙のそれを思い切り吸い上げる。お互いの唾液が混じりあい、遙は味わうかのように和のそれを嚥下した。

抱きしめたい、今すぐ彼女をベッドへ運びたい、
いいや、いつそこで組み伏せてしまいたい。

頭の中を男の欲望が渦巻いて、遙は無意識に和の唇を食んでいた。
しかしそれはお気に召さなかったのだろう。

ちゅう、という唇に唇が吸い付く音がしたとたん、
和が遙のそれをがり、と？んだ。

痛みに顔を歪めると、和の舌がそろ、と傷を消毒するように舐め上げる。

遙の上唇をゆっくりと和の舌が這ったところで、行為が終わった。

「…ちようどコーヒーできたみたい。」

にっこり笑って、和がカップをふたつ持ち上げ台所まで
できたてのコーヒーを注ぎにいく。

遙は、あまりの所業に撃沈すればテーブルに勢い良く突っ伏した。
ごっつん、と小さく鈍い音がする。

その光景を目の当たりにした和は、くつくつと笑えば

遥の後頭部を慰めるように撫でてやる。

二、三回往復したところで、仕上げにぼんぼん、と軽く遥の頭を叩いた。

「はーるか。コーヒー入ったよ。ミルクも入れたからどうぞ？」

「……………和の鬼いいいい……………」

頭を倒した状態のまま和の方へ顔を向かせ、本気で涙目になる恋人の顔を見れば、

和は心底愉快そうに声を上げて笑った。

お腹を抱えてテーブルを自身の手ではんばん叩く。

「はー、面白い。和泉君、涙いっぱい瞳にためちゃって、なんかチワワみたいだよ。あーおかしい。」

その言葉に眉を顰めながら、ゆるゆると遥が頭を起こした。むっつりと不機嫌なままコーヒーを一口飲む。

「……………いつからこんなにキスが上手くなったの。」

「そんなの和泉君がいちばん良く知ってるんじゃないの？」

くすくす笑いながら、和もコーヒーに口を付けた。

遥は唇を尖らせて頬を染める。

「そんなぐつとくるせりふを言うのも計算？」

ほんつとずるいな、和は。」

「え、今のつてなんかぐつとくる要素あった？」

「あーんないやらしいキス、俺としかしてないわけでしょう。」

全部自分からそういう行為を学んだって思ったらくつとくるじゃない。い。」

「…それはつまり、俺が調教してやったぜという…」
「ちよう…そういう部分があるのは否定しないけど、
もうちよつと言葉選んでよ！俺が変態みたいじゃないか！」

遥の言葉に、別に意味はいつしよなんだからいいじゃーん、と
軽い口調で言う彼女に、遥はなにもいえなくなってまたコーヒーを
飲んだ。

そんな様子の遥に、和は悪戯っぽく微笑む。

「これも嫉妬の一貫なんだからいいでしょう？」

「え。」

「もう怒ってないのか、とか訊くから。上書きじゃないけど。」

今で智ちゃんのキスの感触は思い出さなくなった？」

「……………最初っから記憶にも残ってないよ。」

「それはそれは……………なに、その顔。」

思い切り眉間に皺を寄せ、遥は和の顔をこれでもかというくらい睨
みつけている。

あまりの表情に和が思わず訊いてみれば、遥が目を剥いた。

「さつきから可愛い事ばっか言うからでしょう！？」

抱きしめたいよう、キスしたいよう、押し倒したいようっ！！」

「ああ、耐える顔だったのね…大丈夫、話を終えたら帰るから。」

にっこりと微笑んで、飲み終えてしまったコーヒーにおかわりを注
ぐべく

和は席を立つ。

遥にも注いでやろうと無言で和はふたりぶんのカップを持った。
ありがとう、と遥がお礼を言う。

和は微笑んで、先程と同じように遙のものにだけミルクを入れて戻ってきた。

彼女はいつものようにブラックである。

席に着いた和を、遙はじ、とみつめた。

視線が、一体話とはなんなのだと訊いているのがわかって

和はふう、とひとつ息を吐く。

「……雄大の事、なんだけど。」

「！ああ…全員の前で和に告白をしたんでしょっ？」

「うん、それもあるけど、そうじゃなく。」

「…まだなにかあるの？」

不機嫌に眉を顰める遙に、

和がコーヒーを飲んでカップを置いたあと、うなずいた。

「その、まあ、戻るみたいで悪いんだけど。」

智ちゃんとの事があって、私宴会場飛び出してったでしょっ？」

「…うん。」

「そのとき、まあ、泣いてたんだけど。」

雄大が、なぐさめてくれて。で、そのあとにまあ、その。

お付き合いはできませんと、好きになれませんかと言っただんですけど。

全力で奪うとか、四年越しの片想いだから諦め悪いとか、

言われてですねー……まあ、そのまま言い逃げ。」

「……………は？」

遙の声が一音低くなったのがわかって、和がびく、と震える。

「雄大とは家もそう遠くないし。」

まだなんにもされてないけど…これからひょっとしたら

私に会いに来たりするかもしれない。

浮気だつて思われるのは嫌なので一応報告をしておこうかなーって

…。」

「ふうーん。そう。雄大君が、ねえ。」

遥が微笑みつつ、うしろに黒いオーラを纏いだす。

その様子に、和は小さく悲鳴を上げた。

「特にそれから反応はないし、このまま諦めてくれればいいけど。」

「和。」

「その、きちんと毅然とした態度をとるから。」

「和。」

「もちろん、親戚だからって不用意にふたりきりにはならないし！」

「…なあぎ？」

三回目の呼びかけが特に甘ったるい声で、

和は思わず身体をびくり、と揺らす。

そうしてそろそろと視線を合わせれば、

につこりと微笑む遥に力無くはい、と返事をした。

「俺のしばらくの我儘は、もちろん訊いてもらえるよね？」

「……………はい。」

諦めたかのようなその口調に、遥は満面の笑みでうなづく。

「しばらくの登下校はふたりで。」

「…いや、いつそしばらくここから和も学校に行けないかな。」

「え、いや！それはさすがに！！！」

狼狽した和の声に、遥は眉を顰めながらもうなづく。

「そうだね、さすがにそれは…、
じゃあ、金曜日の放課後から月曜日の登校まではここで一緒に過
そう。」

「ええ！！？ちょ、あの、やり過ぎでは…？」

「今まででいちばん厄介そうだからなあ。」

油断しないって言ったってやっぱりするでしょ？昔馴染みて。」

「それは…その、」

「ただでさえそのへん無防備なんだし。」

ここに閉じ込められるのとどっちがいい？」

「……………あの、期間で、ちなみにどれくらい…？」

「向こうが諦めるまでだよ。早くそうなってくれれば

そのぶん早くもとの生活に戻る。」

その遥の言葉に、和は力無くうなだれていた気持ちを回復させる。

「だったら大丈夫か！なに血迷ったか知らないけど

きつとすぐ諦めるよね！」

「……………いや、うん、まあ。そうかもしれない、ね。」

相変わらず、

彼女は自身に好意を寄せる相手をどこか軽んじる傾向にある。

果たして四年間も想い続けた相手が、そう簡単に彼女を諦めるもの
だろうか。

遥は甚だ疑問だ。

「あ、あと家族に了承取らないともちろん駄目だから。」

「それはわかってるよ。大丈夫。」

「彩ちゃんにもだよ？私は説得に協力はしないので、よろしく。」

「え！……………まあ、確かに彩さんに黙ってたらあとが怖いか。」

とりあえず、進さんに賭けるか。」

ため息を吐いた遙を和は小さく微笑んでみつめていたが、次には釘を刺すように言葉を紡ぐ。

「新学期になってからの話だからね？今日は帰るし

明日も明後日も家にいるよ。」

「……………今日も、送ってはいくからね？」

「……………はいはい。」

遙の言葉に苦笑しつつも了承の意を示せば、遙は満足気にならずいた。

これからまた起こり得る色々な事を考えてしまつと頭が痛くなりそうで

和も遙もなんとなくそこからは口数も少なくなり、早々に家を出た。

帰路に着く中複雑な胸中を語る事はなかったが、

お互いに、いつになったら自分達の周りは落ち着くのだろうと考えるては

曖昧な笑顔を浮かべつつ心を通わせていた和と遙であった。

第八十八話「事情聴取」

「実花ちゃん、ありがとう。助かったよ。」

「いえ、それは全然かまわないのだけど…なにかあったの？」

首を傾げる実花に、和はちょっとね、と苦笑する。

昨日の仲直りしてからこんな短い時間内で

またこの部屋に來なければならなかった事を思うと、

和はなんともいえない気分になった。

毎日のように会いたい、と思う人間の気持ちは和にはやはりわからない。

会いたくないというわけではないが、

やはり自分のリズムを崩してまでそれをしたとは思えなかった。

現在、実花から借りた鍵のおかげで、和と実花は遙の部屋へと侵入している。

侵入、というと語弊があるようにも感じるが、

家主である遙が不在であるため和の心持ちは割りとそういう気分なのだ。

ぐるり、と部屋を見回したあと、和は顎に手を当てる。

「うーん…実花ちゃん、この物件で、一応はオートロックなんだよね。」

「え、ええ…ただ、そうね、和さんの言うとおり一応の部分は否定しないわ。」

受付があるわけではないから、

入り口の番号さえわかってしまえば出入りはそう難しくないのでしょ
うし。」

「そうだよねえ…高級物件まではいかないんだよね、ここ。」

実花が住むには少々危ないようにも感じるが

彼女の話では今まで誘拐事件などに巻き込まれた事はないらしい。
となると、けっこう周りのガードが厚いためなのだろうか、と
和はぼんやりと考えていた。

「ちょっと気になった事があって、

わざわざ和泉君の留守を狙っちゃったんだけど…

今日はバイトなんだよね？帰りは何時くらいなのかな。」

「ええと…夕方には終わるって言ってたわ。」

バイトとは、父である昌関係でのものだ。

今日は出版社での雑用をこなしているらしい。

「帰りは七時前くらいかな…うーん、どうしよ。

正直、ルール違反だとは思ってから直接問い詰めたんだけど
話してくれるかどうかかわからないんだよねー。

かといって、証拠を探すのは主義に反するし。」

「証拠を探す？」

わからないという顔をした実花に和がふ、と笑ってうなずけば
リビングで立った状態の実花をついてくるように手招きしながら
和は台所へと移動する。

あれ、と言って指差した先にあるものは、なんの変哲もないゴミ袋
だった。

「半透明だから、中身ちょっと透けてるでしょ？」

みて…あれ、プレゼントみたいに見えない？包装された箱かなんか。
「……えーと、どうかしら。」

和の言葉に、実花は心臓が跳ねるのがわかった。

彼女が言わんとしていることが、

実花の思っているそれと一致しなければいいと祈る。

「ま、あれだけじゃさすがになんともいえないんだけどね。

彼の事だから多方面から色々と貢物はありそうだし。

ただ、開きもしないで捨てるのはちょっと凄いな、と思って。」

「そうね…遥は昔から…

イベントがあるときは女性に囲まれて大変そうだったわ。」

「あと、封筒みたいなものも何枚か一緒に捨てられてるっぽいよね。袋から透けて見えるだけでもけっこうな数。

ダイレクトメールかとも思ったんだけど普通の手紙っぽくみえるなあ。」

それらの言葉になにかしらね？と平静を保とうと返事をする実花に、
なにかの確信を得た和は

にんまりと笑えば彼女に座ってくれと促した。

実花は、おとなしくリビングのテーブルへと腰掛ける。

和も、隣へと腰掛けた。

「最近妙な申し出を和泉君からされてしまっただね。」

「…妙な申し出って？」

頬杖をつきながら実花を見据える和がどこか怖いと感じつつも、
なんとか会話をしようと思花はその瞳をみつめかえす。

和の瞳には、怯えた小動物のような可憐な女性がうつりこんでいた。

「登下校は一緒にして、週末は必ずこの部屋で過ごしたいって言われた。」

しかも金曜の夜から泊まって月曜の朝はここから学校に通えって。」

「そ、そんなことを言ったの……。」

「なるべくいつしよにいたって言われたけど、私はこんな性格だから」

急に言われても困っちゃってねえ……自分の時間で大切だし。」

「ええ、そうよね……。」

だらだらと背中中に汗をかきつつ、実花はついに居た堪れなくて和から目を逸らしてしまう。

彼女はそのタイミングを見逃す事無く、

実花がテーブルへと視線をさまよわせたその瞬間に

ぼん、と懐から取り出したなにかをテーブルへ投げて置いた。

それは、ばつちりと実花の視線にうつりこむ。

「……これ、」

「実花ちゃん、今から私の質問に正直に答えてもらえるかな。」

「和さんも、脅されてるの!?!」

顔色を失くした実花に、和はひとつ息を吐けば

やっぱり、と一言呟く。

「和泉君に、熱心に言い寄る女性が今現在居るんだね?」

和のその問いに、観念したように実花が力無くうなずいた。

帰宅した遙を待っていたのは、温かい料理と愛しい彼女、
そして大切にしている実の妹のような存在の女の子だった。

恋人はにこにこ満面の笑みをその顔にたたえ、
その隣に立つ妹のような女の子は真つ青な顔をしてる。

「あ、作ったのは実花ちゃんだよ。」

私は話したら帰るつもりだったんだけどいつしよに是非と誘われた
んで。」

「和さん、私ひとりに遙を押し付けるなんてするいわ！」

「いやいやそんなつもりじゃないって。」

それに実花ちゃんが悪いんじゃないよ、私がいけないんだから。
ほとんど脅しちゃったようなもんどもん、ごめんね、本当に。」

「いいえ、私こそ、口止めされてたとはいえ黙ってて…。」

ふたりの会話に、どこかびん、ときた遙は小さく息を吐く。

その反応に実花がびくり、と震えたので、

遙は安心させようと頭に手を置いて撫でてやる。

「いって、大体過程は想像つくから。お前に隠し通せる事じゃな

いよ。

和の尋問はベテラン刑事みたいだっけ前に梓が言ってたしね。」

「遙…。」

「でもどうしてここに？しばらくは危ないから実家に戻ってろって言っただろ？」

遙の問いに、和は小さく手を挙げた。

「私。悪いと思っただけでこの部屋開けてもらうのと証人確保のために呼びつけちゃっただよ。」

でも今の反応だとそこまでする必要なかったみたいだね。話してくれるつもりだった？」

「まあ…すぐバレるだろうなとは思ってたんだ。」

きつと和のほうにもそのうちなにかあるんじゃないかって。」

「まだなんにもないから大丈夫だけど…」

実花ちゃん、随分危ない目に遭ったみたいだね。」

「え、なにもないってさっきの手紙は！？」

和の言葉に、実花が目を見開いて和の方へ顔を向ける。

まあ、とりあえず先にご飯を食べようか？」

ずっと玄關口で話していた三人は、

和に促されとりあえず先に夕飯を食べることにした。

ご飯を食べ終え片付けも終わり、やっと落ち着いた三人は先程の会話を再開させた。

「ごめんね、実花ちゃん。」

さっき見せたこれ、中身なにも入ってないんだ。」

苦笑しながら言う和の手には、一通の封筒があった。
真っ白い封筒に機械の文字で笹森和様と書かれている簡素なもので
遥はそれを見れば合点がいった。

「ああ…実花がそれをみて和が脅されてると勘違いしたんだね。」
「そ。まあ、動揺しているときに見せれば気付かないかと思って。
どんな封筒かも宛名付きなのかも私にはわからなかったからね。」
「こつこのつだったよ、確か。でも宛名はなかったんじゃないかな。」
「

な？と遥が隣に座る実花に問いかければ、そういえばそうだった、と
実花が目を丸くする。
すっかり騙されたとわかった実花は、顔を真っ赤にして和を睨みつ
ける。

「ひどいわ和さん！」
「ごめんね。でも和泉君に絶対に話してもらわないと思って。
相手のこととかその他諸々、詳細がなにもわからない状態だったし
確信は持つてる段階じゃなかった。
学校関係者なら新学期始まる前に突き止めておかなきゃとちよつと
焦ってた。」

和が先の件でおかしいと感じたのは、昨日遥の部屋を訪れた瞬間か
らだった。

コーヒーを入れようと台所に立ったとき、
昼間実花に話したようにゴミ袋が視界にうつって、
和は中身がとても気になった。

それを考える暇もなく、遥から提案された半同棲のような宣言は

確かに彼の嫉妬深い性格なら100%ありえないとは言い切れないものの

あまりにも大袈裟だと和は考えた。

止めを刺したのが携帯電話の着信だ。

何回か和の前で鳴り響いたそれに、遥は一度も出なかった。

どころか三回目あたりでついに不機嫌を隠す事無く顔を顰めれば苛立たし気に電源を落としてしまったのだ。

そんなことをされたのは初めてで、普通ならばまず浮気を疑う場面だろう。

しかし、和は彼に限ってそれはないだろうと一応は考えてその可能性をとりあえず消した。

開けられていない贈り物。複数の手紙。

しつこく鳴り響く携帯電話。

自分を傍に置きたいという彼の言葉。

少ない材料から導き出された答え。

『片時も傍を離れたくないのではなく、離れられない事情があるのでは？』

そう思ったときに、遥の態度と照らし合わせてしまえば結論を出すのは彼女にとってそう難しいものではなかった。

多分、遥は自身によって自分が迫害される事を恐れているのだ。

それはきつと、女性関係であるに違いない。

和を家へと送り届けたその足で、両親へ承諾の返事を迫った事で自身の考えに自信を持った和は遥を問い詰める材料を揃えようと考

えたのだ。

「でも、居ない間に家探しとか、さすがに気が咎めてねえ。自分だったらそんなことやった相手と一緒に居たくないし一生心に残る傷を作ってやるくらいには思うから、だったら実花ちゃんに証拠になってもらおうかな、と考えて。」

「……相変わらず、お見事。」

「遙、きつと浮気は一生できないわね。」

すべてを語り終えた和に、遙と実花はどこか呆けた顔で拍手を贈る。実花の言葉に、遙がむ、と眉を寄せた。

「いいんだよ、そもそも一生浮気なんてしないんだから。」

「ああ、そうだったわね、ごめんなさい。」

遙の言葉に、和と実花は同じような表情になる。どこかおかしくて、ふたり同時に噴出した。

「まあ、そういうわけで、実花ちゃんには申し訳ない事をしちゃったね。」

本当にごめんなさい。」

頭を下げた和をみて、実花は慌てる。

先程は確かに怒りが頭をもたげたが、和の考えを聞いてすっかりそんなものは消え失せていた。

実花は狼狽して謝罪はいらない、と声をあげる。

「実花、とりあえず今日はもう帰ったほうがいい。」

佐山さんに電話するから迎えに来てもらえ。」

「あ、だったら待ってる間、もうちょっとだけ話訊いてもいいかな？」

相手の女性にどんな事をされたのかとか、どういつひとなのかとか。

「

その言葉に、実花の顔がどんどん苦いものになる。

和は失言だったろうかと少し狼狽したが、

どうやら実花のその顔は怒り一歩手前の表情であつたらしい。

テーブルを拳で叩き付けたと思えば、実花は顔を赤く染め上げた。

「あの女！マンションの前で遥を待ち伏せするわ、

イベントがあるたびにプレゼントを無理矢理寄越すわ、

直接遥にいやらしく言い寄る事だつて何回もあつたのよ！

自分に過剰な自信をもつてる女つて嫌いよ！！」

「…ストーリータイプってこと？」

「うーん、まあそうっっちゃそうなるのかな。」

「付き纏われてるっていうのは事実なんだよね？」

遥のはつきりとしめない物言いに首を傾げて訊ねる。

彼は和の言葉に一応はうなづくが、困つたように頬をかいた。

「なんていうのかな…高飛車というか。

プライドがものすごく高いタイプなんだよね。

だからこう、盲目的に勘違いしてる、っていうのではない。」

「あーなるほど。メンヘラみたいなのではないと。」

和の言葉に遥はまたうなづく。実花が、少し身体を乗り出した。

「殊勝なタイプじゃないから余計たちが悪いのよ！

私にむかってあなたみたいなのも知らないお嬢様が

どうやって彼を悦ばせるのか知りたいわ、なんて嫌味言つて！

自分のファンをつかって私を襲わせようとしたんだから！！」

「ファン…?」

和の疑問の呟きに、遙が答える。

「ああ。モデルをやってる子なんだ。

ファンていうのは女の子。取り巻きみたいな男連中はいるけど
そういう奴らは見返りに色々求めてくるから面倒なんだろうな。

使うんなら盲目的な女性ファンにしたほうが確かにあとあとラクだよ。

┌

遙の言葉に、和の眉間に皺が寄る。

これは今まででいちばんの敵であるに違いない。

聡い人間を相手にするのはなにより骨が折れる。

それでいて根性が汚い人間は本当にとことん強いのだ。

「プレゼントもね、別に俺が捨てるのだって想定内なんだ。

ただ、俺の為に金を遣ったっていう事実がほしいだけ。

勝手にやっている事なんだけど、それでもここまでしたんだから
見返りをくれと俺に迫ってくるんだ。周りを味方につけて

俺を悪い男に仕立てながらね。」

「それでも遙が相手にしないってわかったら、

今度は遙の周りの女性関係を調べたんでしょね。

少し前、遙のところに、私の写真が送られてきたの、何枚も何枚も。

┌

自分で自分を抱きしめるように実花が蒼い顔をしながら話す。

その様子に、遙は労わるように頭を撫でてやり、

和も気遣わしげな瞳で実花をみつめた。

「それは怖かったろうね…ごめん、そこまでされてるんなら

今日ここに呼ぶべきじゃなかったね…。

最近実花ちゃんの姿が見えないのって事情を知っててなおかつ実花ちゃんに危害を加えないように和泉君がした措置だと思っただけだ

もうすでにそこまで巻き込まれてるんだと思わなかった。」

「いいのよ、和さん。幸い私は周りが恵まれているから、

彼女もなかなか手が出せないでいたし、最近周りも静かになったの。どうやら、私と遥が男女関係にないって確信を持ったみたい。」

「でもプライドが高いタイプとなると…」

「そこまで必死に男を追いかけてると認めたくないだろうね。」

遥は疲れた顔でそうなんだよ、と声をあげる。

「俺が何度追及しても、知らない、周りが勝手にやったんだって言い張るし

それよりも一度でもいいから試してみないか、とか
けっこう下品な誘い文句もらったりするし。」

「へえええ…何歳なの、相手って。」

「19。今、大学一年だよ。」

「大学生かぁー……。」

きつと美人で、遥の隣に立つても遜色しない相手なのだろう。

色々と想像してみても、和はどこか浮かれている事に気が付く。

正直面倒事であるのは変わりなくて

今まででいちばん厄介だろうと思うのであるが

やりがいのある相手だと思っただらどこかしら和の心はわくわくした。

そんな様子が遥にも伝わったのだろう。

ため息を吐いて彼は和に釘を刺す。

「言っておくけど。今回は本当にたちが悪い相手なんだ。ひとを傷付けるのも厭わないし、おおよそ弱味というのを持たないから。」

俺は彼女が和になにかしたら容赦するつもりないからね。

和もへたに自分から仕掛けようとか思わないように！」

「ん？わーかってますよ。さすがに学校外の相手じゃ手出しできないし。」

絶対的に情報量が少ないからさー。

モデルやってるんだっけ？名前とかくらいは教えてよ！」

「……和。」

「和さん……。」

呆れ返るふたりをよそに、和は心の中でひとり呟く。

正直、前向きにならなければやってはいられない。

こんなことはきつと何回もあるのだろうし、

そのたびに傷付いていたら身が持たないのだ。

遙の隣に立つと決めたとき、こういうことは想定していたから

ならば迎え撃ってやる、と持ち前の性格でそういう気概をもった。

とはいえ、疲れないわけではないのである。

しかしそれを表に出せば、遙はどうしたって気にする。

遙以外の要因で、彼を嫌いになったり、彼と付き合えないと諦めた
り、

そういう敗北を味わうことだけは、和はいやなのだ。

だからこそ、こんな問題が浮上するからこそ笑っていたいと彼女は
思う。

そうこうしているうちに佐山の迎えがきて、

実花は部屋をあとにした。

和と遙は笑って実花を見送れば、少し気まずい空気がおとずれる。

「…和、無理してるでしょ。」

「え？」

「さつきからちよつとはしゃぎすぎだもん。」

こんな問題にあと何回直面するかわかんないし、なるべく明るくしよう、とか考えてたんじゃない？」

「……最近まじで神がかってきたね。」

さすがに驚いて固まった和は、苦笑する遙に手をとられうながされるままに赤いソファへと腰を下ろした。

遙が和の肩を引き寄せ、和の頭に自身の頬をくつつける。

「確かに、今後ないとは言い切れないし、

こんな事で和を永遠に失つたらと思うと冗談じゃないけど。」

「って言うと思ったからさ…。」

決まり悪そうな声を出す和に、遙は微笑んでわかってるよ、と返事をする。

「でもだからこそ、和の事いっぱい甘やかしたいんだよ。」

どんなに疲れてしまっても俺から離れたくないって思わせたい。

好きも愛してるも飽きるくらい言いたいし、

キスもそれ以上も和がもういいって言ったって四六時中してたい。」

「いや、あの、それはちよつと。」

狼狽する和の頭を、遙が無言で撫ではじめる。

気付けば肩に置かれていた手は、和の頭へと移動していた。

「おかしくなるくらいどろどろに甘やかすから。」

和は黙って受け入れてよ。」

「……………それもちょっと。」

「えー、和のけち。」

「それは、けちとは言わないじゃ。」

「だったら疲れたなって思ったら言つか態度で示して。」

「……………うん、わかった。」

苦笑する和の顔に、遙は自身のそれを近付ければ、無言で唇をふさぐ。

和もそれを察知していたのか、目をつぶってそれを受け入れていた。

耳のあたりに手を当てたまま、遙がなんども啄ばむようなキスを施し、

時折和の唇を食んでは、舌を這わせ吸い上げる。

それに翻弄されていて気が付かなかったが、次に目を開いたときには和の身体が浮き上がっていた。

うわ、と短い悲鳴をあげれば、間近にある遙の顔が妖艶に微笑む。

「今日はもう泊まっていきなよ。依子さんと高明さんには連絡入れておくから。」

「え、でも、」

「どうせ疲れて帰るの面倒になるんだしいいじゃない。」

「疲れる事をしなければいいのでは。」

和の言葉に、遙は渴いた声で笑う。

「冗談。昨日、俺に火を付けたのは和だよ、忘れたの？」

今日も手を出さないでいられるほど俺が我慢強くないの知ってるでしよう？」

「え、いや、そんなつもりじゃなかったし、

そもそもあんなことで経験豊富な和泉君が翻弄されるとも思ってたかったし。」

「まだそんな事言うんだ？」

「じゃあどれだけ昨日、和のキスに興奮したか詳しく詳しく教えてあげようね。」

「につきりと微笑んで、遥はすたすたと自室に運んでいく。」

和は、だらだらと背中にいやな汗をかいているのを自身で感じた。

「ま、待って！今日はその、本当にそういつつもりじゃ」

「あと、二度目の告白でどうなくさめられたかも訊いてなかったなあ。」

遥の言葉に、和はぎくり、と顔を強張らせた。

「泣いてる所を見られた上に、なくさめられたと。」

「ひよっとして抱きしめられるくらいはしたんじゃないのかな？」

「いや、あの、それは…」

「今度は俺が事情を訊く番だね。」

「あの、だったらリビングで話そうよ！ちゃんと話すから！！」

「ベッドの中だとすぐ素直になるからそっちのが早い。」

部屋の扉が開き、ぼす、とベッドに投げ出された和は

多少、涙目になりながら目の前の遥に視線をむける。

遥は和の顔をしばしみつめて微笑めば、つるり、と頬を撫で上げた。

「その顔…かわいいなあ。」

「逆効果だよ、ここでそんな風に瞳を潤ませるのは。」

「泣き顔って普段ならダメージでかいけど、ベッドの上ではそそるだけ。」

ひとつ学習できてよかったね？と言って遙は和の眦に唇を寄せる。
和はひえ、と声をあげた。

「あの、ならせめてお風呂に」

「終わったらいっしょに入ろうね。」

にっこりと笑ったその顔に、気が付けば和は絶叫していた。
そこから遙と和の攻防がどれ程続いたのかは、本人達にしかわからない。

第八十九話「安らぎと揺らぎの狭間で」

新学期。

高校二年生も残す所わずかになり和は小さく息を吐いた。今日の朝も寒い。なにもかわらない冬の朝だが和はどこかが複雑だった。

これから先待っている懸念事項が不安なような、学校がまた始まった事への安堵感のような。

身支度を整え一階へ下りる。

リビングを開くと、当たり前前に存在する男に、そろそろ反応するのも面倒になれば和は小さく苦笑した。

「おはよう。起きるの辛くなかった？」

台所で依子からコーヒーをもらい、遥の隣に腰をおろす。

和の質問に、遥は肩を竦めた。

「このくらいなら大丈夫だよ。和がいつもより遅く起きてくれてるし。」

「…せめて学校の最寄り駅で待ち合わせ、とかじゃ駄目なの？」

「それじゃあまり意味がないからね。」

多分、登下校の時間がいちばん危ないと思うんだ。」

遥の言葉に、和はなるほど、とうなずく。

依子と高明には、実は前もって和から事情を話しておいたのでストーリー、と言っているのかはわからないが、の、女性についてはふたりとも知っている。

難攻不落と思われた彩は、進になんだかんだと言い包められて納得してくれた。

やはりさすがだ、と和は感心したものである。

あちらも、なんだか同棲している勢いになってきているが高明も一緒に住んじゃえば、などと冗談半分で言っていた。

進も一人暮らしをしているため、もっぱらあちらの家に行く方が多いようである。

「その女の子って、そこまで警戒しないとまずいタイプなのか？
19歳つつつてたっけ？」

「警察に被害届みたいのは出さないの？」

高明と依子の言葉に、和はコーヒを一口飲んで遥が何事かを話すまえに口を開いた。

「実質的な被害にはまだ遭っていないから出しようがないだろうね。そもそもその言い寄ってる彼女自身が手を下してる事象があまりに少ない。

実花ちゃんの写真を投函したのもひよつとしたら本人じゃないかもしれないし。

そのぶん、警戒心は強く持ったほうがいい。

重要なのはね、馬鹿じゃないってことなんだよ。」

和の言葉に、高明と依子が眉根を寄せる。

そう、遥の言葉を総合して導き出された結論は彼女が単なる自暴自棄になって癩癩を起こすようなヒステリーではないということなのだ。

感情に身を任せ、和に襲い掛かるような人間ならば

色々対策も出来るし話は早いわけだが、
狡猾にふたりの仲を引き裂こうというのならは過剰といつくらいには
警戒していいように思う。

まず、相手がどんな人間なのか知るのになによりも大切な事だし
能力を見誤ることはいちばん愚かな行為だ。

「俺達もできる限りは警戒しとこう。」

和、遙君、処理できそうもないと感じたらいつでも頼れよ。

大人にしかできないこともある。」

「そうね。変に遠慮して、取り返しのつかないことになってしまっ
たら

それこそ元も子もないわ。」

高明と依子の言葉に、和と遙は無言でうなずいた。

どこか重苦しい雰囲気を引きずりながらも、
和と遙は最寄り駅への道を歩き出した。

空気をかえようと思ったのか、和はにっこりと遙に笑いかける。

「ま、なるようになるよ。」

あんまり暗くなっても相手の思うツボだしね。まず出方を待とう?」

「うん。……和、ごめんね?」

情けない顔をして手を握る遙に、和は苛立ちを覚えれば空いている手でもいきり鼻をつまんでやった。

「いた！な、なに」

「謝るのはやめてよ。和泉君のせいじゃないでしょ。」

私は、あなたみたいなのと相手にしようと思ったときからこういう面倒事を覚悟してたつもりだから。」

「和……。」

「むしろあんた自体がいちばん面倒臭いから、心配すんな。」

「っそれどういう意味!？」

あまりの物言いに狼狽する遙を他所に

和はけらけらと笑いながら、駅への道を歩き出す。

遙が和のあとを慌てて追いかけた。

「和先輩！」

「和さん！」

少し焦ったように走り寄るふたりに

和は首を傾げる。なんとも珍しい組み合わせだ。

学校の校門をくぐるうとうとうときに呼び止められて振り向けば可愛い後輩ふたり組にでくわした。

「あれ、時任君に実花ちゃん？おはようー。」

「……なんで俺は無視なんだろう。」

ひらひらと手を揺らしながらふたりに応えれば
時任と実花も同じく挨拶を返す。

「駅で偶然会って…、朝から説教がますんですよ、こいつ。」

「こいつってなによこいつって！」

私はただ、和さんにつきまとしてないかって訊いただけじゃない！」

うんざりしながら指を差す時任と、それに顔を赤くしながら反応する実花は

ある意味お似合いの可愛い組み合わせではあるが

和は個人的にあちらを応援したいものだと感じれば
さりげなくふたりのあいだに割って入った。

「実花ちゃん、昨日と一昨日は大丈夫だった？」

「ええ、まったくなんにも。…和さんは？」

「私のほうも今の所はなんにもないから大丈夫だよ。」

「よかった。」

お互いに安堵しながら微笑み合い、校舎へと向かっていくふたりを
男達は少し遅れてついていく。

「…なんなんですか、あれ。」

「ちよつとね。…なんか朝から野郎ふたりで並ぶってむなし。」

「いいじゃないですか、和泉先輩は和先輩がいるんですから！」

少し拗ねた様子でそう発言する後輩に、遙は苦笑する。

時任は相変わらず和に懐いている様子ではあったが

ここところはどこか恋慕という感情ではないようにも思えた。

それこそ和にちよつかいをかけようものなら全力で潰そうという気
にもなるが

個人的には遙もこの後輩が嫌いなわけではない。

「時任君はいいひといないわけ？」

「…ライバル排除の一環ですか？」

ま、確かに和先輩とどここうとかはもう思ってないですけど…」

「実花は簡単にはやらん。」

「いや、あれはいらないます。」

即答する時任の頭上に、あれ呼ばわりするな、と遙の拳が一発降りた。

いつものある程度にぎわいのある教室の一角にて、和は本を開くでもなく携帯電話を睨みつけていた。

遙と別れて、ひとり席に着いた和はどうしたものかと画面をみつめている。

「笹森さん、おはよう。どうしたの？」

「ああ、向井さんおはよう。…ちよつとねえ。」

息を吐く和の様子に少し首を傾げつつ、向井は席に着く。

和は、悩んでも仕方がないと返信すべくメール画面を立ち上げた。

「和、久しぶりね。」

「笹森ちゃん、久しぶり。」

「久しぶりー。………和泉君、なんで目が据わってんの？」

午前授業で終わった今日は、特に他クラスであるふたりに会う機会がなかったが、
遙と連れ たつて挨拶にきてくれたらしく、
放課後になって迎えにきた遙と共に、2 - 3へ浩平と梓が足を運んでくれていた。

もつとも、梓は託斗を迎えにきたのであろうが。

和の疑問に、浩平がけらけらと笑いながら答える。

「休みの間に笹森チャンに悪い虫つかないようにガードできたあ？
つて

訊いたらこんな顔してんの。ひょっとしてなんかあったの？」

なんともタイムリーな話題に合点がいつて、和は額に手を当てる。
遙がこのタイミングで不機嫌になってしまつては、切り出すのが難しい。

和はどうしたものかと逡巡するが、
黙っているほうがそれこそまずいと思ひなおす。

「まあ、その…色々。和泉君、実はさあ、雄大からメールが」
「は？なんでメルアド交換なんかしてんの！！！！？」

『あ、しまった、そこからか。』

そこからして怒られるとは思つてもおらず、和は出鼻をくじかれる。
気が付けば梓の傍らに託斗が立っていて、
三人は遙の剣幕と多少狼狽する和をまじまじとみつめていた。
クラスの連中も、見守っているのやら遊んでいるのやら
好奇心旺盛な視線をじつと目立つ集団に向けている。

「ええと、その。連絡先を交換し合ったのは
雄大になんにも言われてなかった時です……、」

「他にも居るの？地元が近い男で和と連絡取り合ってる奴。」

「いや、男では雄大だけだ……」

「なんで?!？」

「親戚連中でいちばん仲が良いのが雄大だから……」

「へええええ、いちばんねえ？」

ずいずいと距離を詰めて言い募る遙の迫力に負け和は思ったまま発
言するが

よくないことに、遙をどんどん不機嫌に陥れることばかり言っ
まっている。

和は自身でも気付いていたが、他に言い様もないわけだし仕方がな
い。

「梓、行くぞ。」

「えー、もうちょっと……」

「阿呆。ここの連中の悪い癖がうつったか？」

託斗にそう言い放たれて梓は短くうめき声をあげれば、

和に頑張ってるね、と一言残してその場をあとにする。

和は残った浩平に助けを求めるような視線を和は向けてみた。

「和、他の男をみつめるんじゃない。」

「ええええ……」

それが気に入らなかつたらしい。

ぐい、と両頬を挟み込まれて遙のほうへと真っ直ぐ顔を向けられて
しまう。

あまりにも見境がなくなつた彼に、和は呆れとも驚きとも取れる

なんとも奇妙な声をあげてしまった。

「ごめん笹森チャン。俺からも、頑張つてとしか言えないみたい。」
浩平の声と、去って行く足音が聞こえる。

しかし和は別れの挨拶もかわすことができずに、無言で遙と対峙していた。

気が付けば、遙の雰囲気気圧されてしまったのか
ふたりを囲んでいたギャラリーの気配がない。

ひよっとしてふたりきりなのだろうか。

だらだらと背中に嫌な汗をかきつつも、

和はどうしたらいいのかと思考回路を働かせていく。

とりあえず、と思い無言で遙の両手を頬から引き剥がし、

緩慢な動作で所定の位置に戻すかのように

遙の手を彼の大腿へとぴったりくっつけてやる。

ちようどきをつけをしているような態勢になった。

遙は一連の和の動きを黙って見ていたが、その目は決して優しいものではない。

不機嫌を通り越して本気で怒る寸前の鋭い眼光を放っている。

そんな遙の心を探りながら、和はなんとかこの空気を一掃したいと思えば

えへら、となんとも緊張感のない笑いをひとつ浮かべた。

それでも、心臓は早鐘を打っている。必死で作った愛想笑いだ。

遙は、さすがに毒気が抜かれたのか、ふうつと息を吐けば

先程までの雰囲気緩和する。

和はその様子を受けて強張った身体の力をやっと抜くことができた。

握ったままであった遙の手を放せば、遙はそれを待っていたかのよう

に
今度は彼から和の手を握り締める。

和は少し身体を揺らしたものの、特に抵抗する事無くそれを受け入れた。

それになにを思ったのか、遙は無言で和の左手を自身の顔付近へ持つていくと

その手に軽く口付けた。

日本男子のすることか、と和は頬を赤くする。

それに気を良くした遙はにっこりと微笑んで先程までの会話を再開した。

「ね、それで？メールってどんな内容なの？」

「ええと…雄大がっ……い、和泉君？」

和が狼狽したのは、彼女が雄大の名を出した次の瞬間に

遙の舌が和の手の平をぺろ、と舐めたからである。

驚いて手を引き抜こうとするが、遙が握る手に力をこめてそれを阻止する。

「つづき、話して。」

命令するかのような口調に怒る暇もないくらい狼狽しながら

和は促されるまま口を開く。

「あの、ひ、昼を、いっしょにとらないかと、ぎゃっ！」

かり、と軽く人差し指を？まれて、和が色気のない悲鳴をあげれば遙は妖艶な微笑をたたえたまま、指の先を始点としてそこをまず吸

い上げ

舌を尖らせながらツツ、と人差し指と中指の間に這わせていく。

そんな事に快楽を覚えるはずがないと思っていたのに、和は自分の口から吐息がもれるのを止められなかった。息が上がって、頬が上気するのが自身でもわかる。

「和、今すぐ襲っちゃいたいくらい可愛い顔してる…。」

「なに…んっ！」

「そんな顔して、他の男に会いに行くつもり？」

「だ、から…ちょ、もうっ遙…！」

指の付け根を吸われて、今度はまた上に這い出した遙の舌の動きにいいかげん翻弄され過ぎていると感じた和は名前を叫んで彼が反応を示した隙に手を無理やり引き抜いた。

少し息を荒げながら遙をみつめれば、遙はまた不機嫌になっていた。ただ先程と違って危険な感じはしない。純粹に不貞腐れているといった風情であったため、和は内心安堵する。

「ずるいな、和は。」

口を尖らせる遙に、和は呆れた顔で会話をする。

「会話を中断させたのそっちでしょう！」

「じゃあ話が終わったら続きしてもいいの？」

「続きってなに。あれに始まりとか終わりとかあんの？」

「えー、和だつてそういう気分になってたくせに。」

「行為っつーかあんだの醸し出す雰囲気にあてられたというか。」

「え、俺の表情に感じちゃった？」

「さつきみたいな顔してたら触らなくても近くの女性が想像妊娠すると思うよ。」

「和限定だよ。」

「そんな限定はいらん。……っただーからあとりあえず聞け、ひとの話を最後まで！！」

「またも逸らされようとしている会話に苛立って和は叫ぶ。

相変わらず、彼女の気を逸らすのは難しいと感じれば

遙は諦めて眉間に皺を寄せる。

和は、その様子の遙に更に苛立って眉間に拳骨をお見舞いしてやった。

眉間が予想外だったのか、う、と声をあげた遙は涙目になりながら悶絶する。

それに多少満足すれば、和はやっと話そうとしていた事を言葉にした。

「和泉君も同行してくんない？」

無神経かもしれないけどこの際。…あれで頑固だからね雄大。

諦めてもらう為には仕方ないかなって。」

「え…目の前でみせつけてもいいの！！？」

「まあ平たく言えばそうなっちゃうんだけど…」

やめてよ、悪魔の所業みたいな気いしてきた。…やっぱ断ろうかな

あ。」

「いや、いいよ、会おう。和のことだからもう返事しちゃったんじゃないの？」

「うん。わかったって書いてあった。」

「だったら行こうよ。…俺がいつしよだとは書かなかったの？」

「……知らずに同行させるほうが向こうもダメージでかいかなあ

て。」

相変わらず、容赦がない。

和の誠実さは、排除対象にされてしまった相手からすれば本当に悪魔の所業だといわれてしまいそうになる所がある。しかし、遥にはそれがなによりも嬉しかった。

彼女といっしょならば、とことん悪くなってもいい。

「俺もいっしょに悪魔になるよ。」

「…ごめんね、よろしくお願いします。」

にっこりと微笑んだ遥に、和は小さく頭を下げる。

それにまた顔を綻ばせながら、遥は和に行こう、と促した。

「和、目が悪かったか？」

「ううん、伊達。学校ではこういう格好なんだよ。」

「ふうん？」

某駅前で待ち合わせをしていた和は、先に到着していた雄大に声をかければ予想していた質問をやはりされたな、と和は考えていた。

和の高校での姿を初めて見た雄大は、少し不思議に思いながらもそこで言葉を切る。

隣に立つ男の存在がどうしても気になったからである。

「……そいつも連れて来たのか。」

「だって告白された相手とふたりきりで会うのはまずいかと思って。」

雄大はみるみる顔を強張らせた。遙を視界にうつしたからだ。

雄大の言葉に特に悪びれることなく和は淡々と話せば

ついには、不快に思ったのなら私はここで帰るけど、と付け足す。常でない彼女の行動に傷付きながらも、

雄大は首を振って無言で店へと歩き出した。

「…で、なんか話でもあったの？」

「どうしてそいつと付き合いたしたのか興味があったんだ。」

そういう事…色々詳しく聞いてみたくて。」

ちら、と和の隣に座る遙を一瞥すれば、余裕なのかなんなのか

遙はにっこりと穏やかに微笑む。

それに苛立ちを覚えれば、雄大はすぐさま彼から視線を逸らした。相変わらず腹が立つほどに整った顔立ちである。

平凡なファミレスが、どこぞの高級店にでもなってしまったかのよう

に彼の周りだけ空気が違う。

女性からの視線を一身に受けているというのにそれに慌てるでもない。

当たり前のように受け流すその姿勢にも雄大は苛々して仕方なかった。

同時に、和にはこんな男は似合わないと思つた。

「うーん…付き合うまでの過程ねえ…まあかまわないけど…」

ちら、と遙のほうを見つめれば、なにか都合が悪いのか
少々やり辛そうな顔を和がする。
それに雄大が疑問符の浮かんだ顔をしていれば
和が気配に気付いて苦笑する。

「なんといいますかですね、雄大様。本人の前でいうのはあれです
けども」

彼は立派なストーカーでございました。」

「ちょ、和！身も蓋もない事言わないでくれない！？」

「だって説明するとなるとそうなっちゃう気がして…違う？」

「……………まあ、近いものは、ある、とは…。」

段々言葉尻が小さくなる遙に眉根を寄せれば
雄大は声をかける。

「あなたのほうから告白したんだろ？」

そんなに長いこと付き纏ったのか、和に。」

「……………結果的にこうなれたからいいじゃないか。」

「そういう問題じゃないだろう。」

「まあまあ、ふたりとも。ちょっと長くなるけど、かまわない？」

「ああ。」

苦笑して言う和に、雄大はうなずく。

そうしてどこか懐かしい顔をする和は、彼の見たくない種類の
可愛らしい女性の顔をしていて、

遙もそれを嬉しそうにみつめていた。

雄大は唇を噛みながらも、和の言葉に集中しようと
改めて彼女の声に耳を傾けた。

雄大は、紡がれる彼女の言葉を何度も止め、信じられないことをいくつも聞かされることとなるのだった。

「……………全部現実の話なんだよな？」

呆気にとられたかのようにぼんやりと話す雄大に和はうなずく。

「まあ、そうだねえ。わかった？彼に色々欠陥があるって。」

「和、その引つかかる言い方やめてほしいんだけど？」

遥が和の隣で口を尖らせながらそう指摘するが

和は真実なんだからしょうがない、と改善する気配を見せない。

ひどい、と言いながら涙目になる遥を、

和は少し呆れた顔をしながらもはいはい、と言って頭を撫でてやっている。

目の前で繰り広げられる光景と、先程までの話。

それらをすべて総合して処理しようとすれば、

雄大の心はどこかがぺきり、と折れた。

ああ、きっと、無理なのだ。

認めるしかないという事実がとても残酷で、

雄大は泣きそうになる自身を叱咤すれば無言で何かを叩きつければ足早に出入り口へと去って行った。

和は、叩きつけられたそれを見やる。

そこには千円札が二枚置かれていた。

「…雄大の分、だとしたらちよつと多いよね。」

「返そうとか思っていないよね？さすがにやめておいてあげなよ。」

「馬鹿な。そんな傷口に塩塗りたくった上に」

ナイフでじわじわと肉をそぎ落とすような真似しないよ。」

やたら惨いたとえに、遙は苦笑しつつぽん、と和の頭に手をやる。和が少し泣きそうな顔で微笑んだ。

「彼の矜持は、守られなきゃいけない。」

「……デザートでも頼もうか。」

遙の言葉に、和は無言でうなずいた。

このまますぐに帰りたい気分でもあったが、

もしかしたらどこかで立ち尽くしたままの雄大に

鉢合わせしてしまうかもしれない。

そう思ったら、せめて30分くらいは間を置いてお店を出たかった。

遙は、そういう意味で今の言葉を発したのだろう。

店を出て、駅方面へと覚束無い足取りで歩く雄大の瞳には

涙があふれていた。

こんなところで、男の自分が泣いてたまるか。

歯を食いしばってそう思っても、どうしたって流れてくる感情が

雄大の涙腺をゆるませる。

どうにか涙を止めたくて人気の少ない路地裏へと入れば、
雄大は深呼吸をした。

「中村雄大、君？」

「……………」

何回か深呼吸をして、涙を袖口で乱暴に拭いたそのときだ。
うしろから自分の名を呼ぶ女性の声がきこえて、雄大は振り向いた。

夕方になった街並はどこか寂しくて、和はきゆう、と胸を縮こまらせる。

しかし、自分が傷付く資格はない。

だからせめて、自覚を持って強くありたい、と和は願う。
いつだって笹森家の家訓を守る自分でありたい。

店を出てから、なんとなくひとりになりたくなかったが
かといって遥の部屋を訪れる気にもなれずに

和は珍しく遥と街を歩きたい、と彼女にとっては我儘を
遥にとっては嬉しい申し出をされた。

そうして空が茜色に染まった頃、

どちらからともなく手をつないで駅へと歩き出していた。

「和。…なに考えてる?」

「……………なんにも。」

遥の質問に、和はにっこりと笑って微笑んだ。

和の手を握る遥の手が瞬間、少し力がこもったのがわかって遥の優しい微笑みがとても温かった。

これから先、何が起ころうとも自分からこの手を離すことはしない。和は声にこそ出さなかったが、ひとり心の中で強く誓った。

第九十話「甘辛い半同棲生活・その1」(前書き)

切り所が難しく今回ちょっと短くなってしまいました。
新シリーズよろしくお願い致します！

第九十話「甘辛い半同棲生活・その1」

「そつえば接点がないと思ってたんだけど、
にしもりはなえ西森英恵さんてこの高校の卒業生なんだね？」

昼休み、いつものように空き教室にて和と遥は並んでお昼を取っている。

あれから、当たり前かもしれないが雄大からの連絡はない。

どうしようもない事だけに、和はちくりと胸が痛んだ。

誠意をどんなに見せたところで、ひとの気持ちはどうにもならない。誰かと誰かが幸せになる一方で、泣く人間がいるのかもしれない。遥のような人間は、それこそ泣かせた女性は多いのだろう。

自分で質問しておいて、どこかぼんやりしてしまった和は改めて遥のほうへ顔を向ける。

西森英恵とは、件のストーカー女性である。

モデルである彼女とどういった接点があるのか不思議でならなかったが

どうやらこの高校のOGであるらしい事が判明した。

というか、和ひとりがそれを知らないだけであつたが。

今の二年、三年生では、知らない人間のほうが少ないというくらい彼女はこの高校において有名人であつた。

「名前を言ったきり質問してこなかったからわかつてると思つたよ。」

「有名人だったの？いやあ…私そついうのさっぱりだから。」

「そつだつたね。」

あははー、と笑う和の頭を、遙はふ、と微笑んで撫でる。なんとなく、ここ数日の遙は和の頭を撫でる機会が多い。和は、きつと気のせいではないのだろうと思っていた。こういうさりげない優しさにはいつだってかなわない、と和は感じる。

「今回は一体どんなテでくるのかわからないけど…」
「うーん…今のところ、特になにもアクションはないんだよね？」

和の言葉に、遙はうなずく。

「……にしても、気になってたんだけど。
なんで今更そんな風に付き纏われてるの？」
「今更って？」

「いや、だって。卒業生ってことは在学中の接点とかあったんじゃないの？」

それこそ付き合ってたりとか。
「……………」

「そんなわかりやすく目を逸らさなくとも。」
「いやあ…付き合ってたというかあ…、まあ、うん。」
「適当に好きな時に会う、みたいなの？」

言い淀む遙に和がなおも言葉をかけると、
遙はばつが悪そうな顔をして頬をかく。

「まあ、そうかもしれない。
あくまでも、お互いがフリーの時だったけどね。」
「ああ、和泉君、二股とかはしないんだっけ？」
「和、さらっと言われるとすごい嫌なんだけど…」

「自分のせいなんだからしかたないよ。」

「いや、まあ……そうなんだけどさ！」

「今は私一筋でいてくれるんでしょ？」

「!…うん。」

にっこりと微笑んで和がそう言えば、

遥は目を丸くしつつもこくこくと首を縦にふる。

その言動に和がまたも微笑んだ。

「だったらなにも問題ないでしょう。ね？」

「…っ和、愛してる！」

そう言い放った途端、遥が和へと抱きついてくる。

かなり勢い良くのしかかっってきたので、和は支えきれずに悲鳴をあげながら遥と共に床へと倒れこんでしまった。

「いたた…またスイッチ入ったの？」

「好きだよ、大好き！」

「はいはい、ありがとう。わかったからどいて、重い。」

「冷たい！」

押し倒された状態で淡々と遥の胸を押す和に

遥は口を尖らせて抗議をすれば、次には首筋をぺろ、と舐めた。

和は思わずぎゃあ！と悲鳴をあげる。

「言っておくけど、学校でそういう事をするのは

ぜーったいに嫌だからね！」

「そういうことってどういうこと？」

「セックスとそれに付随する行為。」

きつぱりはつきりと口にされてしまった、
わかっていつつも遥は頂垂れた。

こういうとき、彼氏としては顔を赤らめて口ごもってほしいもの
がある。

和も、それをわかっているからこそその発言ではあるのだが。

遥は渋々、緩慢な動作で和の上から退いて和も起こしてやる。

「で、まあ大人のお付き合いをしていたわけだね。」

もう話は終わったのかと思っていた遥は、
なおも確認作業をする和にわずか引き攣った顔を見せた。

「あ、戻るんだね。」

「……うん、まあ。むこうだって恋人居る時期あったんだけどなあ……。」

「実花ちゃんの事があったのって最近なの？」

「いや、写真が送られてきたのはけっこう前なんだ。」

最初は実花のストーリーカーなのかと思ったんだよね。」

先輩とは結び付けて考えてなかったし。」

「ああ…そうだよね。」

和泉君はあくまでも向こうも割り切ってると思ってたわけでしょ？」

和の言葉に、遥はうなずいた。

「でも…先輩がしょっちゅううちのマンション来るようになったり
実花も、彼女に色々言われたとか俺に話してくれて…」

それでどうもおかしいなって思ったんだ。

疑問が確信に変わったのは、実花が先輩のファンに囲まれた時だっ
ただ。

「ああ……」

「そのときは佐山さんが女の子のひとり締め上げてくれて。その子が白状したんだよ、先輩に頼まれたって。」

「まあ、問い詰めても先輩はそんな事知らないって言い張るだけだったけどね。」

「確かに証拠がないんじゃないでしょうか？」

和は、その数々の手口を頭の中で整理しては考える。

あくまでも自身で手を下さないとこころは利口かもしれないが、実花に直接文句を言いに行ってしまうあたりはどうにもうまくない。自信過剰ゆえにそうさせてしまったのだろうか？

しかし、時間をかけて追い込んでゆくのだとするならば

きつと自分の正体はわからないままのが動きやすいだろう。

遙に嫌われてしまつては、元も子もないのだから。

あるひとつの結論が和の頭をかすめる。

「……………ね、和泉君。西森英恵さんの家って一般家庭なの？」

「ん？いや…確かけっこういいところのお嬢様じゃないかなあ。」

「……………。」

和の中に出来たある仮定が、今ひとつ確信に近付く。

しかしいずれにせよ、生き死にを左右する敵というわけでもないのだから、肩の力を適度に抜きつつ対処していったらいいだろう、と和は考えていた。

このときはまだ、彼女の恐ろしさを知る由もなかったのだ。

「ま、和泉君は誘惑に負けないように気をつけて。」

「ひどいな。俺が和以外に目移りすると思ってるの？」

「さあ？迫られてる和泉君見たことないし。」

「またそんなこと言うー。
いいよ、週末にどれだけ和しか見えてないか教えてあげるから。」
「……………」

楽しそうに意地悪く笑う遙に、固まった和は何も返せなかった。

遙と登下校をするようになってから初めての週末だが
今日まで何事も起こってはいらない以上、
和にとって周りの反応がいちばんなんともいえなかった。

クラスメイト達にはさんざんどういった心境の変化なのかと言われ
曖昧に逃げる和と単にしたくしてしているだけだとこにこ笑う遙は
格好の餌食であった。

最近には特にあまり事件がないためゴシップに飢えているのかもしれない。
託斗と梓も思った以上に落ち着いているカップルなので
和と遙ほどは話題が豊富でもないようだ。

どちらにせよ、和にとってはいい迷惑以外の何者でもなかった。

今日も図書室に寄って本を読んだあと、

遙と連れだって学校を出る。

ここ最近はどう問題はないだろうと思ひ、普通にふたりで図書室を利用している。

学校内では恐らくもう和と遙に変なちょっかいを出そうという連中はいないだろう。

「そついえばさー、いつまで続けるの？」

結局なんにも起こらないで終わる可能性だつてあるわけでしょ？」

「そうだね…しばらくは様子みたいけど。…和は嫌？」

「嫌というか…そつちばかり負担かかっているからさあ…。」

「まーたそれ？俺は一緒に居られて嬉しいだけなんだけどな。」

にこにこ笑いながら手を差し出す遙に、和は眉間に皺をよせしばらくみつめていたものの、結局は息を吐いてそれに従った。

最近、外で手をつなぐ機会が多くなってきている。

和としてはあまり好きではない行為なのだが、

遙は隙あらば和の手を取ろうとするので、抵抗するのが面倒になってきた。

こうやって徐々に慣らされていくのだろうかと思つと少し怖かったが本当に常識の範囲外だと思つ事柄はどんなに面倒でも拒否せねばならぬまい。

和は目の前の遙に宣言するでもなく心の中でひとりごちた。

手をつなぎ、ふたり校門まで歩いたときだった。

隣に立つ遙の様子がどこかおかしいと感じたのは、握られた手の力が強くなったからか。

それに気が付いて彼の顔を見やれば、その眉間に深い皺を刻んでいる。

和は、ゆっくりと遙の目線の先を確認する。

ひとりの、とても綺麗な女性がそこには立っていた。

「遙、久しぶりね。」

あなたが連絡先を勝手に変えるからここまで会いに来ちゃったわ。」

「……………先輩と会いたくないっていう意思表示だと思ってくれないんですか？」

とても低い冷たい声が、隣から聞こえる。

女性に向けてこれほどまでに冷えた態度を取っている彼を初めてみた和は

僅かだが目を丸くした。

しかし女性はそれをまったく意に介する事はなく
なんとも妖艶に微笑んでみせる。

「あれだけ散々楽しんだくせに、都合が悪くなったら排除しようとするなんて

私、あなたの便利屋になった覚えはないわよ？

大体、今度の子だってそうそう長く続かないでしょう？
今までだってそうだったじゃない。」

そう言ってゆっくりと遙と和に近寄ってくる。

和は、完璧に化粧を施され、

真っ直ぐな黒髪を腰まで伸ばした女性にしばらく見惚れていた事に気が付いた。

純粹に、彼女はとても綺麗だと感じる。

和泉遙のまわりの女性は、なぜこうもレベルが高いのか。

久しぶりに、和は遙が自分という女を溺愛する理由がわからないと思えば

頭を抱えたくなくなった。

「確かに、恋人が出来ても長続きしなかったですし積極的に持続させようという気もなかったように思います。でも、それは今までの話ですよ。」

「…今は本命の彼女が出来たから、私は必要ないってことかしら？」
「そうです。」

遥と女性の視線が絡み合い、火花が散るかのような攻防が見て取れる。

和はさてどうしたものかと頬をかいた。

十中八九、彼女こそが西森英恵そのひとであろう。

出方をうかがっていたら、それが伝わったのかはわからないが今まで遥としか話していなかった彼女が和のほうへと顔を向ける。和は挨拶をしたほうがいいのかしばらく考えてとりあえず相手が何か話すまで待とうと思った。

「あなたが…笹森和さん、かしら？」

ちら、と和と遥の手元を見て英恵が言う。

つながれている手がなければ、和のような一見地味な人間が遥の彼女だという事実は信じ難いと思ったのだらう。

和は無表情でそれを肯定する。

「ええ、笹森和は私ですが。」

「それじゃあ、遥の現在の恋人は…あなたなのね。」

「はい。」

和を上から下まで検分すれば、英恵はふ、と小さく笑う。

それが嘲笑だとすぐにわかるくらい、下品な反応だった。

「……遙、婚約者のお嬢さんとはなんにもなかったわけ？」

「それは誤解ですよ。そもそも彼女とは婚約なんてしてませんから。」

「あら、あちらのお嬢さんはそうじゃないみたいだったけど。」

「実花ちゃんの事はもう全部解決した話ですけど、蒸し返すんですか？」

遙と英恵の会話に和が割って入ってそんなことを言えば、

英恵が不快感を露に眉根を寄せて和のほうを向く。

「……元婚約者の女の子を名前で呼んでいるの？」

「ええ、可愛い妹みたいな存在なんです。」

「あの子を見た目は釣り合っているけど、中身がともなってなかったわ。」

でもあなたはどうかのかしら。遙の隣に堂々と立てる人間なの？」

英恵の言葉に、和は一瞬固まれば次に声を出すのをなんとかこらえながらも

しかし笑わずにいられるのは無理だったようで、

声にならない笑い声をあげてしまう。

なんとか頑張って呼吸しながら、苦しそうに笑っている彼女は異様にうつつたのだろう。

ずっと勝気だった英恵が、初めて少したじろいだ。

和ははー、と間延びした声をひとつあげれば、手を挙げて失礼、とまず一言告げる。

「隣に堂々と立てる人間なのか、って。」

あなたは和泉遥がただけ価値ある人間だと思ってるんですか？」

「…どういう意味かしら？」

「彼は、単なる高校生ですよ。無駄に顔が良くて、ヘタレで、
けっこう面倒臭い、ごくごく普通の高校生男子です。」

「いいかげんその無駄についてののやめてほしいなあ。」

「そして私は犯罪者でもなければ他に恋人がいるわけでもありません。」

にっこりと微笑んで言い放った和を、

信じられないものでも見たかのように英恵が目を見開く。

「…あなたは、遥の隣に自分こそがふさわしいとおっしゃりたいわけ？」

「いや、だから。そのふさわしい云々の意味がわかりませんよ。」

この恋人になるのになんか特別な資格とか要るんですか？」

「和、これって。」

「もうさつきからちよいちよいうるさいなあ、黙っててよ。」

「和の意地悪うっう！俺をかまってくれてもいいじゃないかあ！」

「心底うっとおしい。」

「彼氏に向かってひーどーいー！」

和の様子にも驚いたが、それ以上に遥のそれに驚愕したのだろう。

しばらく固まってなにも言えなかった英恵は

気を取り直したかのように和を睨みつけければ、それからにっこりと笑う。

「…いいわねえ、とつても仲が良くて。」

せいぜい、お互いに愛想を尽かされないといいわね？」

そう言つて、ピンヒールと地面がぶつかり合う音を響かせながら彼女は停まっていた車に乗り込んで、どこかへと消えていった。

和と遙は、しばらく去つて行つた車の方向をみつめていたがふたり顔を見合わせれば苦笑する。

「帰ろうか。」

「うん。」

遙が言つて、和が首肯する。

ふたりは、手をつないで駅への道を歩き出した。

「そつえば、お母さんが今日から毎週週末ははりきつて晩ご飯作つてくれるつて。」

「え！本当？依子さんのご飯おいしいよね〜！」

「服とか、ある程度和泉君の家に移動させちゃったほうがラクだね。」

これから先ちよいちよい持っていくかあ。」

「どんだんマーキングしてっいいよ。」

「……嬉しそうだねえ。」

あんまりにも上機嫌な遙を、和は少し呆れた顔をしてみつめる。

今日から、半同棲のような生活が始まるのだと思えば

遙にとつてそれはそれは楽しい日々の始まりなのだろう。

和は、対峙した英恵の事を考えていたが

やがて隣で笑う遙がおかしくて、つられて笑つた。

シリアスになるのはなんだか馬鹿馬鹿しいとさえ思えてしまった和は心の中で少し遙に感謝する。

これからどんな日々が待っているのだろう。

きっかけはあまり良くないことだったけれど、

浮かれる彼に苦笑するのもこれからはより日常になる。

そんな日々は、きつとそう悪くはないと和は思った。

第九十一話「甘辛い半同棲生活・その2」

「和泉君、本と違ってどこに置いたらいいかなあ？」

「あ、寝室の本棚まだスペースあるからどんどん入れちゃっていいよ。」

あっちの部屋にも本棚ひとつ買っちゃおうか。」

「いや、そこまでしなくとも。」

苦笑しながら遥の申し出をありがたく受け取り、

かなり余裕のある本棚へと自分の愛用する小説を入れていく。洋服は、とりあえず衣装部屋になっているところの

客用布団が入っている押入れの空きスペースへと押し込んだ。

下着類は若干どこに置こうか迷っていたが、

遥が引越しの時に親が用意してくれた鍵付きの棚があるがほとんど物を入れていないので

そこも良かったら使ったらどうかと言ってくれたので

和は衣装部屋にあるそれに下着を入れることにした。

おそらく、困っていたのを見越してそうしてくれたのだろう。

相変わらず異様に気が付く男である。

「寝る時はこっちの部屋で布団敷いて寝ればいいよね？」

洋服も仕舞い、あらかたの作業が終わった和は

リビングにいる遥へと話しかけた。

ソファに腰を下ろしていた遥は、和の問いに返事をすることなく無言で立ち上がれば、

そのまま手をひいて和を寝室へと連れてくる。

そうしてベッドの前まで辿り着くと、遥は無表情で和をそこへ押し

倒した。

「寝る場所はここだけだよ。」

「え、あの、」

「和ってたまに変な事言うよねえ。」

「線を越えておいて今更、別々の部屋で寝るわけないでしょう?」

「でもひとりで寝ないと完全に疲れ取れないらしいよ。」

「俺は和が別の部屋にいると思うたら眠れない。安眠妨害。」

「えーと、それじゃあ、自分ひとりのときと同じだと思えば」

「和。」

怒気を孕んだ状態で微笑を浮かべる遙はなんとも異様で、

和は押し倒されたまま固まってしまふ。

しかしそれも束の間で、

遙はふ、と空気を緩和させると、触れるだけのキスを唇へと落とすた。

「どうしても嫌だつて時は無理強いらたりなんかしないから。

ただ、いっしょに眠りたい。駄目?」

潤んだ瞳でそんな事を言われてしまつては和はなにもいえない。

ましてや小動物を想起させるかのような情けない顔をされては、

こちらが悪いことをしてしまったような気になるではないか。

和はため息を吐くと、一言了承の意を告げた。

「ぱ、と顔が明るくなった遙をみて、苦笑しつつもどこか嬉しくはなつたが」

しかし次の瞬間、和は言葉を撤回したくなつた。

「晩ご飯も食べ終わり、あまつさえお互いお風呂にも入って」

さあ後は寝るだけ、という状況も悪かったが
押し倒された状態で気が付けば先程のような戯れのキスから
なんとも艶っぽいそれにとって変わり、
結局そのままなし崩し的に遙の腕の中で抱かれる事になってしまっ
たのだった。

朝、和は今まで感じた事のない身体のだるさに気が付けば
意識が覚醒してもなかなか目を覚ます気にはなれなかった。
しかしいつも通り決まった時間に起きてしまう自分を
少しいまいまいしく思えば、ひっそりと眉間に皺を寄せる。

考えてみれば、この部屋のベッドで遙と共に朝を迎えたのは
今回が二度目である。

ここでそういう行為をしたのが二回目なわけではないが
西森英恵のことを打ち明けられたあの日も、
泊まっていったらいいと言われはしたが結局断ったのだ。

そう思っつて、和はゆっくりと瞳を開けば
視界にうつつたのは真っ白ななかで和は一瞬頭に疑問符を浮かべ
る。

しかし次にはそれが遙の上半身だとすぐにわかった。
曲線を視界の端に認識して、それが彼の肩だとわかる。

昨日、わけのわからないままに意識が途切れた気がしたが
どうやら自分もTシャツを着ているらしく、和は少し安堵した。

『……下は履いてるけどさすがにブラしてないなあ。』

裸だったわけではないことが前と違い自分を冷静にしていたが
どうやら下はショーツのみのようで、

無防備な姿に変わりないと思えば和はすぐさま起きて着替えたいと
考える。

鉛のように全身が重くはあったが、

それでもなんとか身体を起こそうと身動きしてみると
和はすぐさま前とは違う何かに気が付いた。

遥の両腕が、がっちりと腰に巻きついていたのである。

前の時はゆるく身体に添えられているといった様子だったものが、

今度は抱き枕の如く、いっしょに眠るぬいぐるみの如く、
和をその腕に抱え込んで閉じ込めている。

これではどんなにゆっくりと動いても遥を起こしてしまう可能性が
高く

和はどうしたものかと考える。

もう少しすれば遥が先に起きるだろうかと思っていると
隣で遥が動く気配がする。

向かい合って寝ているが、遥の胸元に頭があるため表情はわからな
い。

和は小さく頭を上へ動かしてみたが、遥は特に何も発しない。

ため息を吐いて、とりあえず身体の向きだけでも動かしてみようと

遥の腕の中で少しもがいてみれば
なんとか反転させることに成功し、部屋の風景が視界にうつる。

『ここまで動けたしなんとか腕外せないかなあ…』

腰に巻きついた腕にそつと手を置いてみたそのとき。

今までよりいっそう強く、和の身体を遥の腕が抱きしめた。

驚いて一瞬身体を強張らせると、頭上から声が聞こえてくる。

しかしそれは言葉になっておらず、変なうめきになっていた。

それから数秒後のことだ。

ゆるゆると遥の両手が胸元へと移動してくるので、焦った和は
思わず悲鳴をあげた。

「いいいい和泉君！？寝惚けてるでしょ、起きてよ！」

「んんー……？」

そういえば寝起きがあまり良くないと言っていた事を思い出し
和はなんとか遥の手を寸前でつかめば、
そのまま背後にいる遥を足で何度も小突いてやる。

小さな痛みによつと頭が覚醒したのだろう。

遥はやつと和の名前を呼び始めた。

「…え、朝からなんで蹴られてるの？」

「寝惚けて変な事しようとしたからだよ！」

とりあえず腕どけて、起きれない。」

「ええー…今何時い？」

「だからそれを確認したいから腕の拘束をといってくれと。」

「……やだ。」

「いや、あのね？まだ寝惚けてるの？」

呆れたような和の声音になにを思ったのか、

遥は無言で彼女の肩をつかみひっぱれば、遥と反対方向をむいていた身体が

ああむけに寝ている状態になった。

遥は横向きに寝た態勢のまま、肘を突いた手に頭をのせて
ああむきになった和を見下ろしている。

「……この前のときさ、和がベッドからいなくなっちゃったでし
よ？」

「え、う、うん。」

無表情で淡々と話し始める遥に多少びくつきながら、和は返事をす
る。

「あれすーごいショックだった。夢だったんじゃないかと思った
し。」

「…はあ。」

「というか、起きて和が真っ赤な顔しておはよう、って言うのとか
想像してにやにやしなから寝たのに叶わぬ夢になっちゃって。」

「え、なにその乙女的思考は。」

「とにかくー、俺は同じ轍は二度と踏まない！と思ったんだよ。」

「だからあんなに必死に腰挿んでたの？」

「そう。」

遥の言葉に、和はため息を吐けば、わかった、と了承の意を示した。

「じゃあ、とにかく先に起きても

勝手にベッドから抜け出さないほうがいいんだね？」

「うん、起こしてくれていいから。いつしよに起きたい。」

「わかった。じゃあ次からはちゃんとそうするね。」

「お願い。」

にっこりと笑って満足そうにならずに遙に、和は苦笑して首肯した。

「じゃあ、起きよう。……ってまた9時！？寝坊しちゃった。」

ベッドの脇にあるナイトテーブルに置いた腕時計を確認して

和は少し驚いたかのような声をあげた。

「9時で寝坊になるんだね。」

「普段は大体6時とか7時に起きてるからね。」

「……ううー、でも身体がだるくて辛い。」

「ごめんね、さすがに昨日無茶させすぎた。」

苦笑いしながらなんとか身体を起こそうとする和を

遙は横から補助する形でいつしよに起き上がる。

その様子に、和はじ、と遙の顔をみつめた。

「な、なに？」

「いや…和泉君はだるいとかないわけ？」

「俺？大丈夫だよ。少しいつもよりは疲れてるかな、くらい。」

「……なんか不公平。」

わけがわからずに翻弄されてしまうのは毎回のことで、

和はこういった方面で遙にかなうことはきつと一生ないのだからと思つと

なんとも複雑な気分だ。

遥はそんな和にくす、と小さく笑って、優しく頭を撫でる。

「普段は俺ばかり翻弄されてるんだからこれくらいはね。」

「せめてもうちょっと手加減をしてくれればいいのに。」

なおも言い募る和に、遥は今度は困ったように苦笑する。

「俺も無茶させないように抱ける程の余裕はないんだよ。」

どうしても夢中になっちゃう。

…でもさすがに今回みたいな抱き方はしないように気をつけるから。」

「……お願いします。」

なんとやっていいのかわからずに、

少し顔を赤くしながら和がぼつ、と呟けば、遥が固まる。

その反応の意味がわからず首を傾げていれば、

遥が盛大なため息を吐いた。

「……ちよつとシャワー浴びてくる。」

今の反応が可愛すぎてまた事に及んじゃいそうだから。」

「え、」

「和は身体あつたためたほうがいいよ、だるいんでしょ？
入ってる間にお湯ためておくよ。」

「あ、ありがとう。」

うん、とうなずきながら遥は足早に部屋をあとにした。

和は遥が去って数秒後、ぼす、とベッドに撃沈する。

『しばらくこんな生活なのかなあ…』

いいのやら悪いのやら。

とりあえず身体がもたない気がする、と行ってしまおうだった。

「和って出来ない事とかあるの？」

「は？なにそれ。」

夕方になってやっと疲労する身体が回復してきたところで和は晩ご飯の支度にとりかかっていた。

昼も結局なにもする気になれずにコンビニで済ませてしまったので夜くらいは野菜中心のものを作ろうと思った和はそれでも凝ったものはまだ気力がわかないのでとりあえず簡単に作れる野菜スープを調理していた。

材料を取り出して切っている最中なのだが遥はその様子をみて感嘆の声をあげている。

恐らく包丁さばきが年齢の割りに見事な為だろう。

「いやだって、料理もそんなに出来ると思わなかった。」

「別に出来るつつうほど出来ないけど…圧力鍋とって。」

「え？どれのこと？」

いくつもの鍋が仕舞ってある棚を開いて遥が首を傾げる。

ここにあるものはみなとてもいい性能の調理器具であるため、

宝の持ち腐れだ、と和は心底感じる。
フライパンはマーブルコートだ。

「……圧力鍋つつつたらこれだろ、これ。覚えておきたまえ。」
「はい。」

ため息混じりに和がそれを取り出せば、遙がははは、と渴いた笑いをもらす。

「まあ、この野菜と鶏肉ぶちこんで煮れば完成するから。
料理つつーもんでもないよこんなの。切って入れるだけ。」

「そんな身も蓋もない……少なくとも圧力鍋がなんなのかわかんない人間が

これは作れないでしょう?」

「……うん、まあね。」

そうして遙が途中の洗い物などを担当して、
和が作った晩ご飯が完成すれば、遙はなんとも嬉しそうにそれを平らげた。

どうしてこんな生活をするに至ったのか、
このときばかりは忘れてしまいそうになったふたりだった。

「ふああ…。」

「眠そうだねえ。だからあとから来ればって言ったのに。」

「それじゃあ意味ないでしょう。」

ほぼ和が出てる時間と同じに近い時間帯に遙の部屋を出たふたりは電車に揺られながら学校へと向かっていった。

起きて支度を済ませた和を見て焦った遙が

自分もすぐに起きるから待っていてくれ、と和を呼び止めたのだ。

和は、正直そこまで警戒する必要もないのではないかと思っていたが遙の狼狽ぶりだと

実花はけっこう危ないところだったのだろうか、と推測できた。

「……そのブックカバー、使ってくれてるんだね。」

「ん、ああ。」

自分といっても、いつも通りの時間を過ごしてくれてかまわない、むしろそうしてほしい、と言われた和は遙の部屋で過ごしていた時もほぼいつもと変わらない日常を過ごした。

今も、朝の電車では本を読む事が日課であるので

黙って鞆から取り出したのであったが、

自身が贈ったものを和が継続して使ってくれている事に気が付いて遙は顔を綻ばせた。

「可愛いし、気に入ってるよ。和泉君で贈り物するのが上手だね。」

「そう？良かった。」

お互いに笑んで、やがて和は本へと視線を落とす。

遥は、その綺麗な横顔をじ、とみつめていた。

「最近ずっといっしょにいるんだねえ。」

浩平の言葉に、和は目を丸くする。
てつきり遥が事情を話していたのだと思っていたからだ。

最近は図書室をふたりで利用できるようになったので
前のように一週間に何回かは浩平とも昼を共にするようになった。
今日は梓と託斗もいっしょだ。2・7にて昼食をとっている。

「和泉君：言ってなかったの？」

「ん、今日皆に話すほうが一回で済むかなあ、と思って。」

「いっそ学校中に話して噂にしちゃってもいいかもね。」

和の言葉に、遥が少し考えてうなずく。

「そうだね…まあ向こうには悪いけど実花の一件があるし…
そうしたら学校周辺では手を出し辛くなるかもしれないね。」

ふたりの会話に疑問符を浮かべ続ける一同は
なんの話か、と先を促してくる。
遥が少し言い辛そうに口を開いた。

「それがさ…西森英恵って覚えてる？」

「え、西森先輩？」

「英恵さんがどうかしたの？」

前者を梓、後者を浩平がそれぞれ口にする。

英恵さんという呼び名に和の眉は僅かぴくり、と動いた。

遥と和は、改めてその場にいる人間に事情を話す。

実花が一時嫌がらせと呼ぶには過剰な被害を受けたこと、

その流れで和となるべくいつしよにいるようになったこと、

先日、英恵が学校前に現れたことなど。

それらをすべて話し終えると、梓は眉間に皺を寄せた。

「……あのひとがそんなことするなんて。」

「まあ、サバサバした感じのひとではあったよなあ。

遥相手にしているとけっこうな割合で

皆、遊びが本気になったりするみたいだけどあ？」

にやにやしながらのたまう浩平の頭を遥がけっこうな力をこめて

はたいてやれば、痛みに浩平が涙目になりながらうずくまる。

託斗は、眉を顰めたままずっと無言であったが、

次にはじ、と和をみつめるので、和はそれに応えるように微笑んだ。

「大丈夫だよ、託斗。あと和泉君の昔の女性関係は

別になんとも思っていないし。」

「……まだなんにも言っていないが。」

「あれ、そんなようなことを言おうとしてたんじゃないの？」

「……しかしいくらお前が普通の女と違うとしたって

複数の人間に囲まれてもしたら対処のしようがないんじゃないのか。

「んー、まあねえ……って。」

そこまで会話をしていると、梓と遙がなぜか同じような顔をして梓は託斗を、遙は和を睨みつけていた。

するとこれまた託斗と和は同じような顔をしてそれを見つめ返す。

「…仲が良いわね、相変わらず。」

「目と目で会話なんかしちゃって。」

お互いに同じように嫉妬されているのだとわかると

和と託斗は苦笑して目を合わせた。

しかしそれがまた気に入らないらしく、梓と遙はまたも不機嫌顔を強める。

「梓。お前は現状が不満なのか？」

「えっ……」

「お前の事が好きだと俺は何度も告げている。

それ以上になにがほしい？」

「……そ、…そうね、ごめんなさい。」

託斗の言葉に、和と遙は目を見開いて驚き、浩平は声をあげる。

「へーえ鈴木君やるー。超かっこいいじゃん。」

離し立てるようにそんなことを言えば、梓は顔を真っ赤に染め上げる。

和は、隣でなにかを期待する遙をちらと視界にうつせば

苛立って彼の頭をべし、と叩いた。

「な、和！なんで!？」

「いいかげんに面倒臭い。」

「ひどっ!」

「託斗じゃないけど、これ以上なにがお望みですか、は・る・か君?」

「……………ごめんなさい、機嫌直りました!」

よろしい、とにっこり微笑んだ和と隣でしばむ遙をみて

浩平が遙を指差して尻にしかれてるー、とけらけら笑いだす。

それにびし、と青筋を立てた遙がまたも浩平を叩いた。

同じ所を寸分違わず攻撃された浩平は、かなり痛そうにうずくまる。

しかしやがて気を取り直したかのように、後頭部をさすりながら和に声をかけた。

「でも笹森チャン。本当に今回は気をつけたほうがいいよ。

俺は遙の隣にわりと長いこと居るからわかるけどさ、

遙に執着した女の嫉妬はなにより怖いよ。」

その言葉が、和に重くのしかかる。

それまでの軽い雰囲気を一気に吹き飛ばすかのような

真剣な面持ちの浩平に、和も真つ直ぐに視線を合わせてうなずいた。

しかし次にはまた表情を和らげて、悪戯っぽい口調で浩平は遙を肘で小突く。

「遙、ヘタレ王子の汚名返上しなきゃね?」

「……………うるさいな。」

『文句は言っけど否定はしないんだな。』

和は心の中の自身の呟きに小さく笑って、
改めて遙と浩平の絆はけっこう厚いものなんだな、
と思い至った。

日課になっている毎日の送り迎えだが、和は今日だけそれを断った。
家まで送ると言っただけでかなり渋っていた遙だったが、
駅前まで送ると待ち合わせをして彼の家へ行く事になっていると告げ
た。

さすがに電車内でなにかされることは可能性として低いだろうし
駅を出てもひとりにはならないから、と何度も説得をした。

そうしてやっと承諾された珍しくひとりの帰り道、

和は遙に告げた通りに最寄り駅にて待ち合わせした相手の存在を認
めれば
手を挙げて呼びかける。

「和、遅かったな。」

気付いた相手が、微笑んで彼女に応えた。和は、その問いに苦笑す
る。

「ごめんね、雄大。」

そう言って、目の前に立つ彼に話しかけた。

第九十二話「甘辛い半同棲生活・その3」

「けっこう待った？」

心底申し訳ないという気持ちで、和は雄大へと話しかければ彼はいや、と短く声をあげる。

土曜日の昼頃、和は雄大から会いたいというメールをもらっていた。そこには絶対に遥抜きで、と記されており、とにかくふたりきりで会いたい旨のそれを少し迷いつつも了承した。和は
いけないとわかっていたが遥にはつきりと嘘を吐いてしまった。彼女の中でそれはけっこうな罪悪感をともなう行為ではあったが、きつと本当の事を話しても遥は許してはくれないだろうと和は考えた。

なにより、目の前の親戚とはかれこれ十年以上の付き合いだ。告白をされたからとて、今までの関係をすべて失ってしまったわけではない。

だからこそ、目の前の彼の言葉を和は真摯に受け止めたのだ。

「……どうする？話があるんなら、近くにお店あるけど。」

そこに行くのか？」

「ああ、頼む。あんまこの駅降りたことないしな。」

苦笑する雄大の顔に和はうなずいて、駅を少し歩いたところにあるファーストフード店へと赴いた。本来ならこういった場所を和はあまり好まないが特別嫌いだというわけでもない。

元よりこの近辺には喫茶店のような比較的安価で落ち着いた飲食店というのがないので、選択肢はなかった。

和は、自分と同年代やそれより少し下の層でいっぱいになった店内を無表情で検分すれば、最上階ならば静かだろうと考えて注文を終えてトレイを持てば雄大を連れて三階へと足を運んだ。

「……………」

一口注文したものを飲み込んで、和は僅か眉間に皺を寄せる。

相変わらず、コーヒーはあまり美味しくない。

味にたいしてこだわりのない自分でもそう感じるのだから相当だろう。

いつものように、割りとどうでもいいことを頭の中で考えながら和は目の前に座る彼へと視線をうつした。

「それで、早速で悪いんだけど。

あまり会話を楽しむ余裕もないから、用件を教えてほしいんだ。」

ごめんね、と言い添えて困ったように笑う和に、

雄大は不愉快そうに顔を顰めた。

「…それは、お前の恋人が自由を奪ってるからなのか？」

「私が、恋人に束縛されてそれに従う人間に見えますか。」

「……………」

雄大は、確かにそのとおりだ、と一度は思ったらしかった。だからこそ、今の疑問符が浮かんだ顔に繋がったのだろう。

ならばなぜ、と彼は言いたいに違いない。

「今ちょっと、色々と事情があつて。あまり傍を離れられないんだ。」

「…俺のせいなのか？」

それに和は無言で首を振った。

最近よくみる困ったような笑いではなく、含みのない笑顔で雄大は自身の胸がきゅ、と縮みこむ感覚がした。

「でも、嫉妬深いっていうのは変わらないんだよな、あいつ。」

「…うん、まあ。」

「俺、あの日もう無理だなんて思ったんだ。」

ふたりのこと見てたらさ…なんか入る余地なんかねえんだって。」

「……………」

ふ、と自嘲するかのように笑う雄大に、

和はどう答えたらいいかわからず無言になる。

雄大はそれを察しているのか、見たこともないような優しい顔で微笑む。

しかし、どうしたことが。

次の瞬間には、その雰囲気が一変した。険悪なものに変わっていった。

「…別れたほうがいい。」

「え？なに」

「今は、和の事も大切にしてくれてるかもしれない。

でも、いつそうなるかわからないぞ、あの男は。」

「……………何か知ってるみたいなの口ぶりだけど？」

雄大は、声を発しようとして口を開くが、それでも迷っているようだった。

開いては閉じ、を何回か繰り返して、テーブルの下でぎゅ、と拳を握り締める。

それでも、ここに呼び出した本来の目的を思い出せば

雄大は和に向き直って真つ直ぐと彼女をみつめる。

和は、ただことではないその様子に息を呑めば、

同じように雄大を見つめ返した。

「会ったんだよ、現在進行形でそういう関係にあるっていう女に。」

「え、」

「ちようどあの日、駅前の店で話し終わったあとのことだ。」

店を出て、道を歩いてたら後ろから話しかけられた。」

その言葉に、和は目の前の雄大には申し訳ないと思いつつもすぐさま西森英恵を連想した。

彼女が何事かを彼に吹き込んだ可能性は大いに考えられる。

そう感じれば、和は携帯電話を取り出し、ひとつの写真を雄大へと向けた。

「ねえ、雄大。それってこの女の人じゃない？」

和の言葉に雄大は彼女が手にする携帯電話を受け取ると眉根を寄せて首を振った。

「いや、違う。……ひょっとして、これ西森英恵とかいう女か？」

「！？雄大、知ってるの？」

「彼女から聞いたんだ。嫌がらせを受けて別れを迫られたけど

それでも彼を諦められなくて、段々と悪化していると言っていた。

この前は何人かに囲まれたそうさだ。」

何箇所が目立たない部分に痣ができていた。」

雄大の口から発せられる言葉の数々が信じられなくて和はしばし混乱する。

一体どういうことなのか、わけがわからない。

「和、お前も同じように狙われているから、和泉遥と一緒に暮らしてるんじゃないのか。」

「……暮らしてる、ってどうして」

「羨ましそうな声で話していた。

あのひとは、本気で大切にされているんだらうと。

自分はいつも、気まぐれに呼び出されては身体を重ねるだけの関係だと

寂しそうな顔で話していたよ。」

「ほん、とに？」

驚きに見開かれたままの瞳を雄大に向ければ、

雄大は神妙な面持ちでうなづく。

「俺も、最初は信じていなかった。

そもそもおかしいと思わないか？ 謀ったようなタイミングでなんで俺に話しかけたのか。」

「そうだね……」

「学校前まで、来てしまったそうだ。

最近全然連絡がなく、連絡をしてもあまりにもそっけなく返されてしまいには電源を落とされてしまうんだと。」

雄大の言葉に、和は少し前の遥の様子を思い出した。

てつきり西森英恵からだと思っていたあの連絡はひょっとして違うのか。

ともすれば、言い訳に彼女を使ったのかもしれないとそんなことまで彼女の心に浮かび上がってくる。

「そうして尾行して同じ店にまで入って俺達の会話を聴いていたらしい。」

彼女は、お前がどういう人間なのかを知りたがった。

最初は戸惑ったけど、結局俺は話をしようと決めただ。」

「そ…うなの。」

「それで、確認したいことがあったんだが

11月の終わり頃から12月頭くらいにかけて、なにかあいつとなかったか？」

雄大の言葉に、和はその頃の出来事を反芻する。

それは、遥が和を避けだした時と合致していた。

あのとき遥は、和とふたりになるとどうしても求めたくなってしまうと

極端に接触を避けていたのだ。

「その頃、常になく頻繁に呼び出されたようだ。

それでひよつとしたら今付き合っている女性と別れるかもしれないと

彼女は期待したらしい。しかし…結果はそうではなく落胆したと言っていた。」

「…そのひとは、いつから関係が？」

「もう一年以上にはなるらしい。」

別れを告げようと何度も思ったらしいが、そうすると和泉遥から

甘い言葉をかけられて結局それができなくなってしまつと笑っていた。

俺は…もしも本当ならば同じ男として奴を軽蔑する。

和の話をしたときも、彼女は羨む気持ちももちろん大きいがそれ以上に心配だと言っていた。

自分の為だという面があるのも否定しないが、
割り切れないなら戻れなくなる前にやめたほうがいいと、伝えてく
れないかと。」

「……………」

冷静な思考をなんとか立て直そうとしていた。

していたが、和はなかなかそれができずにいたのだ。

色々な可能性があるはずである。

落ち着け、となんとか自身を叱咤する。

「あの、もしも、相手が良ければなんだけど。」

直接会ってお話は、できないかなあ。」

「そうだよな、俺から急にこんな話しても信じられないだろうし、
信じたくもないよな。…正直、俺も迷っていたんだ。」

彼女を全面的に信じたわけじゃなかったから。

あの男の瞳は誠実だって俺は思ったから、諦めるしかないと思えた。
その勘を信じたい。…………でも、彼女のあの哀しそうな顔も忘れられ
なくて。」

「雄大…！」

テーブルの上できゅ、と震える両手を、雄大は握り締める。

泣きそうな顔をする彼に、和はこれ以上なにを言ったらいいのかわ
からず

それでも目の前の優しい男を一時でもなくさめられればと
声をかけて拳にそっと自身の手の平を置いた。

雄大の拳に重なるように、和の両手が添えられる。

雄大は、うつむいていたその顔をゆるゆると前へ向ける。

「……………和…。」

「ありがとう、私の為に、嫌な役を引き受けてくれて。」

「……………彼女から、連絡先を受け取ってる。」

「もしも嫌でなければ、会って欲しいと向こうも言っていた。」

「ただ…和泉遥には……………」

雄大の言葉に、和は力強くうなずいた。

「もちろん、和泉君にはなにも言わない。重ね重ね、ありがとう。連絡先、教えてもらえる？」

彼女と直接会ってから色々考えてみるよ。私も信じられないから。」

「ああ。…なんかあったら言えよ。頼りにならないかもしれないけど……………」

「じゅんばん、助けてもらってるよ。」

……………でも、もし彼と別れることになっても、雄大とは付き合えない。それだけ……………ごめんね。」

和の言葉に、雄大は一瞬瞳を揺らしたが、やがてふ、と微笑めば連絡先を教えたあと、帰ろうと言って籍を立ち上がった。

和は無言でそれに従えば、駅前で彼と別れたのだった。

「……………」

雄大と話を終えて、和は色々と思いを巡らせていた。

本当ならば正直許せない話だが、なにせわからない部分が多めに多い。

相手の女性の名前は『瞳』^{ひとみ}と言つらしいが
苗字すらわからなかった。

どんな容姿なのかもわからない。

そうなれば、彼女が何者なのかは会ってから調べる他なかった。

和は、雄大の話を信じているのかと問われたら
ほぼ八割方信用していない、と言える。
そのくらい、自分は可愛げのない女なのである。

例えばだが、西森英恵が動かずとも動く女性はいくらでもいる。
雄大に近付きいかにも本当であるかのように話を吹き込むのは
そう難しいことではない。

和と遥がすれ違っていた時期を知っていたのだった
高校の卒業生というのであれば在校生につてがあつてもおかしくは
ない。

和と遥はもはや学校中知らない人間はいないというくらい
名物カップルになりつつある。まあ見世物のようなものだ。
であるからして、ふたりが多少の仲違いをしていたのだった
知り得ただろう。

お金持ちならば、それこそ興信所を使つたかもしれない。
彼女がどれくらい遥に執着しているかは、まだわからないが。

あの場で雄大にその話をしなかったのは
これ以上混乱させたくも、巻き込みたくもなかったからである。
正直、和は怒っていた。

本当の話ならばその矛先は遥にむかつていくわけだが、
すべてが虚言なのだとすればいちばんの被害者は和でも遥でもない。
雄大だ。

心優しい彼をあんな風に悩ませた相手を、憎く思わないわけがない。そこまで考えて、和はため息を吐いた。

『それでも…可能性がゼロじゃない限り。』

和は眉間に皺を寄せれば、やっと自宅への道を歩き出す。

程なくして目的地へと辿り着けば、扉を開いて帰宅の挨拶をする。そうしてそのまま自室へと閉じこもれば、もくもくと着替えを始める。

どうしたらよいものか、考えてもなかなかいい案が思いつかない。しかし和は、どうしても無理だと思えば、なんとかもつともらしい理由を付ける他ないと頭を抱える。

それを承諾させる方法。

無理でも何でも、とにかく了承を得なければならなかったし、頑として譲りたくもなかった。

けれども真相は話せない。それは現時点では嘘だと断言できないからだ。

もしもすべてを話す時が来るとするならば、それはすべてに確信を持つてから。

最低限、和は誠実でありたい、と思った。

それが笹森家に生まれた人間として最低限通したい筋であるから。

そのときだ。

いつものように電話のコール音が響き渡り

和は机の上に置かれた形態電話へ目を向ければ、それを手に取った。相手が誰だかわかっているからこそ、

和は多少うんざりした顔でそれをみつめる。

しかし出なければ余計うるさくされるとわかっているので和は仕方なく通話ボタンを押した。

「…もしもし？」

『遅い！なにをしてたんだ！？』

まさかあの男が近くににいるんじゃないだろうな！！？』

その声に盛大なため息を吐けば、和はちがう、と相手の言葉を否定した。

「ゆきおじさん、毎回それ訊かないでくれない？

言っておくけど四六時中一緒に居るわけじゃないんだからね？」

『あんないつ泣かされるかわからないような相手は別れて

もっと誠実そうな男と付き合いなさいといつも言ってるだろう！』

電話口の幸仁は、なおも熱く言い募る。ここまで毎回の決まり文句だ。

屋敷での一件以来、和と山田のおじとの関係はすっかり修復され幸仁は実の孫であるかのように和を可愛がってくれている。

自分のところにその存在がないから、余計に和が可愛いのだろう。

そこまでは良かったのだが、問題は遙との事であった。

高明が大変だろうから頑張れ、と言っていた意味を、

和は嫌と言うほど味わっている。

幸仁はとにかく遙との交際を認めたくないらしく

ほぼ毎日のように決まった時間に電話をかけてはこうして別れの催促をするのだ。

一度、こんなに毎回電話をしなくてもいいと和が言えば

ものすごく哀しそうな声を発するので、
以来にも言えなくなってしまうたな和である。

山田家は笹森家と県は違えど、そう遠い距離にあるわけではない。
幸仁は、なにかあれば自身の家に連れて行くとまで高明と依子に宣
言しており

身体があまり強くないいつも集まりには不参加な妻である徳子とくこにまで
話をしているらしかった。

徳子はとても優しい穏やかな女性で、数えるくらいではあるが会っ
たこともある。

たまに電話口に出てはごめんね和ちゃん、と始まって
これからも嫌でなければうちのひとの我儘につきあってやってね、
と締めくくる。

和はそんなふたりの孫のような存在になれたことは決して嫌ではな
かったし

そのうち家にも遊びに行く約束もしていた。

が、いいかげん遙のことになるとおじはうるさすぎるのだ。
毎日のようにそんなことを言われれば、耳たこで、
和はうんざりする心を隠せない。

「私と和泉君が結婚するってなったらおじさんどうすんのー？」

『け、結婚！！？ゆゆゆるさーん！！』

和、今すぐ荷物をまとめなさい！迎えに行つてやる！……』

「いや、冗談だつてば。本気にとらないですよ。………あ。」

最後の呟いたような声に、幸仁はどうした？と問いかけたが
なんでもないと誤魔化して、

しばらく会話に付き合ったあと、和は電話を切った。

幸仁がこういった電話を頻繁にかけることは、彼も知っている。そう思えば、和はなんとかなるかもしれない、と考えた。

そこまで考えて、しばらく頭であれこれ巡らせたあと、和はとりあえずメールを打った。

どんな反応をされるのか考えるのが少々怖かったが、それでも和は今の状態で続けられるとは思えなかったのだ。

遥と、しばらく一定の距離を置きたい。

考えたくはなかったが、もしも真実であったとき

瞳に対する最低限の礼儀を通したいと和は思ったのだ。

彼女が日陰のような女性として存在しているのならば、

いちばん悪いのは遥であるがその原因の一端は和にもある。

そう思えば、自分だけが遥の傍らに立つことなど出来ない。

心の片隅に植えつけられた彼への疑心を完全に払うのはいつの事になるのか。

鵜呑みにするでもなくしかしすつきりとしなない心は

わずかであっても和に影を落としたのであった。

第九十三話「甘辛い半同棲生活・その4」

メールを送ったあと、遙からすぐ電話があり
和はやっぱりな、と思えばため息を吐いた。

通話ボタンを押して電話口に出る。

「もしもし?」

『あ、和!?!明日は一緒に行けないってどういうこと?』

「ちよつと理由があるんだってば。」

今のところ危険はないしさあ…、数日くらいなら大丈夫でしょ。」

『俺がぴつたりくつついてるから手出しできないだけだよ!』

実花だって、佐山さんが注意してくれてたから間一髪で助かったんだし!』

その遥の言葉に、やはり実花はけっこう危ない目に遭ったのだと思えば

和は数秒ほど無言になる。

「うーん……ちよつとねえ、困ったことになって。」

『困ったことって?』

「この前さあ、ゆきおじさんと話してるとき

電話口で和泉君がいることバレたじゃん?」

『ああ…親戚の。幸仁さんだっけ?』

「そんでなんか半同棲みたいな状態になってることバレそうだしー。自分ところに強制的に住まわせるとか言い出してんだよね。」

『は!?!そのひとの家って近いの?』

「いや、県外だよ。…まー、電車で一時間くらいでは着くかなあ。

だから高校はまあ通えなくはない。」

『なっ、だ、駄目だよ!』

焦り始める遙に和は心の中で悪いとは思いつつすべてが嘘ではないと半ば開き直った。

真実、むこうに今の状態がすべてさらされれば和は連れて行かれるだろう。

それほど、幸仁は和をかわいがっていた。

「あのオッサン、異様に敏感だね。

電話もすぐ出ないと怪しむし…しばらく距離取ったほうが無難かと思つて。

まあ、送り迎えまでナシにするのは大袈裟だとしても週末の泊まりせめて今週は控えるべきだと思ふんだ。

そしたら電話の頻度もちよつとは落ち着くだろうから。…だめ?」

『うーん…わかった、それくらいは仕方ないもんね。

でもこまめに連絡は取っていいでしょう?』

「うん、それは。ごめんね、なんか。」

『どうして和が謝るの?悪いのは俺だよ。』

電話口で穏やかに笑う遙としばらくたわいない話をすれば和は電話を切った。

「…なんとかうまくいった。」

脱力して安堵の息を吐く。

元々、遙と完全に距離を取れるとは思っていなかった。

せめて週末べつたり遥と一緒にいることだけでも避けたいと思つた和は

最初送り迎えをやめてほしいというメールを送り、

そこからせめて半同棲の状態だけでもやめたいという話に行

ったのだ。

なんとか交渉成立したことに胸を撫で下ろし、自身で時間制限を設けてしまったため、今日は大活躍の携帯電話の発信ボタンに手をかけた。

登録された番号には人見ひとみと表示されていた。

一応、遥に見られる事を想定しての措置である。変にイニシャルなどにしてしまえば怪しまれるので単純に名前の漢字を変換して苗字にしまっただけではあるが。

『……もしもし?』

五回ほどコール音がしてから、女性の声が聞こえる。和はごくり、と喉を鳴らせば多少緊張しながら声をあげた。

「…あの、瞳さんですか?」

『! …………… ひょっとして、笹森和さん……?』

電話口で息を呑んだかのような沈黙が数秒あり、それから和と同じ探るような声が入った。彼女も、かなり驚いているようだ。

「申し訳ありません、少し考えて、一応非通知設定で電話させていただきました。」

『ええ、かまいません。あなたは…私の事にも知らないんだもの。』

「それで、会っていただけなんですよね? 私と。」

『はい。あの…あなたが嫌でなければ。』

「とんでもないです。というか…瞳さんこそ

私なんかとお会いする時間を割いていただいて良いんですか？」

『会いたいと申し出たのは私ですから…もちろんです。』

あの、いつならお時間取れますか？和さんは遥と同じ年なんですよ？』

その言葉に、和はぴくり、と眉を動かす。

「あの、瞳さんは？」

『私はひとつ上なの。三年生。』

「え、じゃあ受験大丈夫なんですか！？」

『推薦だから。ありがとう、心配してくれて。』

和がすつとんきような声をあげたことで緊張がほぐれたのか
電話口で瞳がくすくすと笑った。

「それじゃあ…どうしましょう？なんなら明日とかでも全然いい
ですけど」

学校が終わってからでいいなら。」

『そうね…遥の事もあるしなるべく早くお会いしたほうがいいでし
ょうけど。』

あの、会うってこと、彼には？』

「ああ、言っています。」

その後も、あなたと話してそれからどうすべきか考えたいなと思っ
て。

それでいいでしょうか？」

電話口で明らかにほっとしたかのような声でありがとう、と言われ
和は複雑な顔をしながらいえ、と短く返事をする。

『明日と明後日ならば、どちらがいいかしら？』

「それなら明日のが無難です。明後日だとちょっと動き辛いので。」
明後日はいつも和が図書室に寄るので帰りがどうしても遅くなる。
なんとなく今の確認の言葉に
和の日常を把握しようとしているのではないかと疑いたくなかったが
いずれにせよ相手方には
ほぼすべての情報が回っていると覚悟するのが無難だろうと思いついた。

『じゃあ、明後日の17時にY駅ではどうかしら？』

「広場の前で待ち合わせすればいいですか？」

『ええ。着いたら私の携帯を鳴らしてくださいね。』

「わかりました、じゃあそれで。」

『お願いします。』

「はい、それでは、失礼します。」

和は、電源ボタンを押して通話を遮断した。

緊張で汗ばんでいた手の力を抜くと、それに呼応するかのよう
に全身の力が抜けてへなへたとベッドに腰掛けた。

思った以上に、和は緊張状態であつたらしい。

明日というのはまた随分と急な話ではあるが、

色々で見極めなければならぬのでちよつどいいといえはそうかも
しれない。

瞳という名前と、高校三年生という肩書き。

わかったのはそのふたつだけだ。

和は眉間に皺を寄せたまま、暫し無言で虚空を見つめていた。

「和、今日は帰りどこか寄る？」

火曜日の放課後、いつものように教室へと迎えに来てくれた遙が和に笑いかける。

それに和はふるふると首を振って笑みを返した。

「ううん、真っ直ぐ帰るよ。」

「そっか。じゃ、いこう。」

「ん。」

ここ最近、彼に嘘を吐いてばかりいる。そう思えば、和の心は痛む。遙が本当に最低な男であるならば、今の罪悪感だって消えるだろうが、

和にはやはりそれが信じられない。

常人と意識が違うというのであれば、

当たり前のように本命でない女性を抱いたりしているのかもしれない。

しかし彼の数々の言動からはそれらは感じられないので

そういう特殊な感覚世界に生きているわけではないのだろう。

とすれば、もしも相手が本当の事を言っているのであれば彼はかなりの策士であり、詐欺師にもむいていると思われる。そこまで考えて、和は心中で自嘲した。

結局、信じてるのやら信じていないのやら、だ。

遥を信頼しているからではなく、

自己防衛の気持ちは働いているだけかもしれない。

だからといって、あまり感傷にひたつてもよくない。

とにかく冷静な客観的思考がどうしたって必要なのだ、と思えば和は自身の脳に改めて湯を入れた。

家まで送るという遥に、和は幸仁からの電話がかかってくるので上がってもらえないから申し訳ない、と添えれば

遥はいいよ、と笑って和を家まで送り届けてくれた。

「じゃあ、和。明日ね。」

「うん、ごめんね、こんな家の前で。」

「引き離されるのが回避できるんなら全然。」

そう言っただけで笑えば、遥は門の前で踵を返し駅への道を歩き出した。その後姿を見送って、和はひとつ息を吐く。

「ただいまー、お母さん、私ちょっと出るね。」

リビングにいる依子へと声をかければ、目を丸くして和を見る。

「あら、遥君じゃない子と待ち合わせ？」

「ちよっとね。和泉君には黙っておいて。」

「あらあらあ、浮気は駄目よ？」

「お母さん……。」

「うふふ冗談よ。危ない事はあまりしないようにね？」

「うん、防犯グッズも持っていくから。」

和が言えば、依子はうなずいた。

遥から実花の話聞いて以来、一応ではあるが

和は様々な防犯用の品を持ち歩くようになった。

うしろからふいうちを食らえば役には立たないが

女の子に囲まれてもまあなんとかなる程度の備えはある。

男も、ひとりで正面から向かってきてくれるならば大丈夫だろう。

自室に入って着替えをし、鞆の中を点検してひとつうなずく。

時間もあまり余裕がないので行くとしよう。

和は10分程で帰ってきた家をまた出た。

遥と鉢合わせしないとは思うが、一応ゆっくり歩く。

駅前に彼の姿は見られなかったので安心し、和は改札をくぐった。

上りの電車に乗ったとき、また少し緊張しているのがわかって

和は目を閉じ小さく深呼吸をする。

『待ち合わせ場所に複数の人間がいることも考えられるし
なるべく後ろに人が立てない位置にいよう。』

警戒する心も忘れずに、和はゆっくりと目を開く。

車内のアナウンスは、目的の駅に着く事を告げていた。

目的地に着くと、時間は10分前だった。

まだ相手はいないかもしれないが、

連絡しようかと壁を背にして携帯電話を取り出す。

そのときだった。

少し遠くから、こちらに近寄ってくる人物がいる。

ひょっとしてと思ったなら、和の前で女性が止まった。

「笹森和、さん、よね？」

「……………瞳さん、ですか。」

和は今、眼鏡をしていないし髪も下ろした状態だ。

それにジーンズに深緑色のポアコートという、シンプルな出で立ちである。

にも関わらず和の存在を確認できたということは

相当数、和の顔を直接見た事があるのか、写真を見たのか。

どちらにしろ、和にとってはあまりよろしくない事実である。

「あの、どうして私をご存知なんでしょうか？」

「……………何回も、あなたと遙を見たもの。」

学校でも、家でも。…やっぱり普段は眼鏡をかけていないのね。」

「……………ええまあ。」

学校にも家にも押しかけてしまいそうになるくらい追い詰められている。

それが真実だとしたら本当に遙と自分の存在が申し訳なくて仕方が

ない。

しかし、遠目から距離を取って見たのだとしたら、やはりそう顔を覚えられるものだろうか。

和は自身がなんら特徴のない見た目であることを自覚しているため、どうにも彼女への疑いを深めてしまう。

すこし眉間に皺が寄りそうになったため、和はにっこりと微笑んだ。

「それじゃあ、どこかお店入りましょうか。」

「ええ…静かなところのがいいわよね？あっちのカフェはどう？」

「ああ、あの喫茶店ですね。いいですよ。」

どうでもいいが、和は喫茶店をカフェと言うのがどうにも嫌いだ。

というか、日本語に食い込んでくる余計な横文字が全般的に駄目である。

それは小説を読む人間であるからか、彼女自身の性格によるものか。

和はその両方からきているのではないかと自分では考えている。

少しかだけ歩いて、

瞳が言うところのカフェ、和が言うところの喫茶店に辿り着いた。

ここは比較的安価で、チェーン展開している店だ。

料金は前払い制で、払ってから席に着く。

なんとなくファーストフードと折衷しているような雰囲気があつて、瞳が喫茶店ではなくカフェというのもなんとなくなずける。

それでも、和がこの店を一度でもカフェと呼んだことはないが。

和はブレンドを頼み、瞳はカフェラテを頼んだ。

それぞれ支払いを済ませれば少し奥の席へと腰を下ろした。

改めて瞳を検分すれば、彼女は実花や梓、そして英恵のような派手

さはなく

どちらかといえば日本人女性らしい容姿をしている。

所謂、和風美人というやつだ。

す、とした一重の瞳、黒よりもより漆黒のその髪はさらさらと流れる。

和は肩より少し下の髪の長さだが、彼女はもう少しだけ長かった。

前髪は左に流されていて、少しおとなっぽい雰囲気がある。

服装は、制服姿だったが上はセーターだけで下は平凡な紺のスカート。

上着がない限り学校名を特定できない。

私立でもなければ公立高校の制服など区別があってないようなものでもすれば皆同じ学校に見える。

セーターも指定のものではなく某有名な学生ブランドのものなのでまったくもってお手上げた。

直接訊けば、答えてくれるだろうか。

よぎった考えを、和はそのまま口にした。

「…あの、瞳さんはどこの高校なんですか？」

「え、ああ…実は、雄大君と同じところなの。」

「えっ！！？」

「嘘じゃないわ。これ、学生証よ。」

そうやって鞆からごそごそとなにかを探って出せば
定期入れを開いて瞳が和にむける。

和は失礼します、と言って自身にそれを引き寄せた。

「飯島瞳…ああ、もう18歳なんですわ。」

本当だ、雄大と同じ高校名。……偶然ですね？」
「ええ本当に。」

にっこりと笑った和に、瞳が同じように微笑みを返す。
ここでまたどちらに比重を置くべきか、と和は迷う。

雄大が同じ高校だと知った英恵が

動きやすい相手にと彼女を選んでいてもおかしくない。

しかしここで彼女が学校名をばらしたのは信用に値するのか。

こんなものを偽造する情熱はさすがにないと思いたいものだが。

なにせ金持ちだと聞いているので

そこらへんはどこまで可能なかが和にはどうにも想像できない。

「……それで、具体的には私とどういったお話がしたかったんでしよう？」

「そう、ね。まず、私の存在を信じて欲しかったというのが第一かしら。」

「どうやら、あなた私の事まったく信じていないみたいだし。」

「それは……普通だったらそう思っちゃいますよ。」

自分の恋人である男性が不誠実だとは考えてませんし。」

「遙は、あなたには優しい？」

「そうですね、まあ、だと思えます。」

和は少し答え辛いと思いつつも、正直に話せば

瞳はふ、と微笑んだ。

「そう……いいわね。やっぱり私は、あなたを求められない間の代替品でしかなかったのね。」

「あー……お付き合いは私よりも瞳さんのが長いんじゃない？」

「あら、あなたへの片想いは随分長かったと訊いたわ。」

はつきりと私に、和がいちばん好きでそれ以下はないと言っていた

もの。

それでもいいからそばにいたいと言ったのも、私よ。」

その言葉に、和は目を見開く。

どうにもこういつた機微にはうとくてぴんとこない。

そうまでして、相手の傍にいてなにか嬉しいのか理解し難い。

そこまで、遥には魅了するなにかがあるのだろうか。

「あー、まあ、仮に本当だとしてですね。

私は彼とは別れますよ。そんな男は無理ですから。」

和の淡々とした口調に、今度は瞳が驚きに目を見開いた。
どうやら予想外の言葉であつたらしい。

「あなた…あんな男に溺愛されて、簡単にそれが手放せるの？」

「いやあ、あんな男がどんな男かはわかんないですけどね。

もしも本当なら最低じゃないですか。

それだけで私としたら一緒にやつてはいけませんよ。

それで納得して関係が続いているあなたもあなただとは思いますが、
彼はそれ以上に最低です。」

「そうね…なんだかねで、都合良い女がいなくなるのも嫌みたくて
別れをほのめかすような言葉をかけると途端に優しくなるのよね。

だから時折そんな言葉を使ってしまうの。

…それでも、いつもういって言われるかは怖くて仕方ないんだけ
どね。」

あまりにもな言葉の数々に和はため息を吐く。

遥に呆れたのか、瞳に呆れたのか。

あるいはそのどちらかかもしれない。

「いいですか？私は彼の取り合いとか

そういうった面倒事に巻き込まれるのはごめんです。」

「それは…周りの女性からつつかれたら簡単に諦めるということ？」

「いいえ？彼が私に誠実でいてくれる限り、私もそれを返します。」

今までだって学校で怖いお姉さん方に囲まれたって鎮圧してきましてし

彼を本気で好きだと言うひとが現れたとして身を引くつもりもありません。」

「だったら」

「ですから。あくまでも彼に非がない場合のみです。」

今回のように二股みたいな事をされたのが事実ならば

私は彼をとつと相手方にくれてやります。そんな男いませんから。」

「…随分とさっぱりしてるのね。」

「浮気する男のひとつーのはですね、次も絶対やります。」

統計からみても人間の性からみても間違いないありません。」

私は浮気を容認できる女ではありませんから、これ以上続けられませんが。」

ただそれだけの事です。」

にっこりと微笑んで言うてやれば、瞳は複雑そうな顔を和に向ける。しかし、どこか嬉しそうにしているのは気のせいかな。

ひよっとしてすぐにでも遥を一人占めできるとでも思っているのか。そうになると、彼女の言っていることはやはり真実ということになる。

「まあ、あくまでも本当ならば、ですけどね？」

「……信用できない、ということね。」

「いやー、和泉君に訊いてみないことにはなんとも。」

「そんなの！遥は否定するに決まってるわ！あなたと別れたくないはずだもの！！」

「わかってますよ。でもあなたの言い分だけ聞いてじゃあ別れます、とは」

さすがに私も言えませんから。」

「どうしたら、信じてもらえるかしら。」

その言葉に、和はしばし思考を巡らせれば、

テーブルに置かれたひとつの携帯電話をみつめる。

す、とそれを指差した。

「たとえば。携帯電話を見せていただく、とか。」

「電話を……」

「一年以上続いているのならば、メールのやり取りや和泉君からの着信も入ったりしますよね。」

差し支えなければ、それを見せていただけませんか？」

「それは……ええと、ちょっと待って、確認してみるわ。」

和の言葉に、初めて焦ったように彼女が電話を開く。

何かを探しているのか、かちかちとボタンを押す音が忙しく耳に入った。

「あの、ちょっと古いけれど。」

「……拝見します。」

日付を見ると、それは一年前の今頃のものだった。

遥からのメールで、確認してみると和が登録しているものとアドレスは同じものになっている。

内容を見る限りでは、確かにふたりはそういう関係……というか恋人のそれであるらしかった。

どうにも、印象が合わない。

彼女の言い分だと、遙は瞳にたいしてもっとそっけないのではないか。しかしメールの彼は優しい文面で待ち合わせ場所をどこにしようかと瞳を気遣っている様子がうかがえる。

「あのー…これだと、あなたと和泉君が昔恋人だったという証拠にはなるかもしれませんが」

私と二股かけてる証拠には残念ながらないと思います。」

言って、和がありがとうございます、と彼女に携帯電話を戻せば瞳はどこか悔しそうな顔をする。

しかし次の瞬間、その表情がぱ、と明るくなった。

「ああ、待って。…今、彼からメールが届いたわ。これを見せれば？」

「！……ええ、お願いします。」

和は届いた新着メールを瞳から見せられ、目を疑った。

遙のアドレスから、『今夜会いたい』という一文が送られてきているからである。

「これで、信じてくれたかしら？」

「……………あの。」

「はい？」

「直接、彼と会うのはやはり駄目ですか？

どっちにしろ、私は彼が二股していたから別れる、と理由を訊ねられたらそう答えます。あなたの存在は知られてしまい

ますが？」

和の言葉に、瞳が黙ってうつむく。言い方がきつかっただろうか。

「あの、すみません。さすがに黙って別れるのは無理です…

あなたが会い辛いとおっしゃるなら私から話しますよ？

本当に本当ならきっぱり別れますから。

あなたからしたら私なんて憎くてしょうがない存在ですもんね。」

今度は、無言でふるふると首を振る。心なしか顔が青い。

「…あの、少し時間をいただけないかしら？ちよっと…考えたいの。ひよっとしたら、彼は私を憎むかもしれないし。」

あなたはこのまま黙ってひいてはくれない、のよね？」

「えーと、そうですね。ごめんなさい。」

「いいの。…痣まで作って立場を守って。本当に私は馬鹿な女だわ。」

「痣？」

そういえば、と雄大が言っていた言葉を思い出す。

和が疑問を口にする、と、瞳が無言でうなずけば、

テーブルの下にあった足をそつと前にだし、靴下をしたにおろした。そこには、棒でたたかれたような形の痣がはつきりとある。

和は、不快感を露に顔全体を顰めた。

「…ひどいですね。それ、西森英恵に？」

「彼女からは直接なにもされてないわ。…でも、そうなんだと思う。」

「和泉君は、なにもしてくれなかったんですか。」

「言っていないの。…誰かに尾けられている気がするって言ったときも」

彼は無反応だったし…無駄だろうなって。」

「そう、ですか……。ごめんなさい、なんて言っていないのか……。」

「いいのよ、あなたのせいじゃないもの。」

哀しそうに笑う彼女と和の間に、暫し沈黙がおとずれた。

しかし次には、和が静かに別れの言葉を口にする。

「あの、それじゃあ…今日はこれで解散しますか？

もう話す事もひとまずないでしょうし。」

「ええ、そうね。」

「今週の日曜日、またこちらから連絡します。」

そのとき、答えをいただけますか？」

和の言葉に、瞳は逡巡してやがてうなずいた。

ふたりは席を立ち、店をあとにすればそこで別々の方向へと歩き出す。

和は駅前の広場に戻って壁に寄りかかりながら、

息を吐いて携帯電話を開いた。

「……………もしもし？今大丈夫ですか？ええ、はい、たったいま。」

どうやら電話をかけたらしく、どこぞの誰かと和は会話をする。

「え？ああ、やっぱり。…これはほぼ黒だと考えていいですかねえ。

写真を添付して送りましたので、顔はそれで確認してください。

はい、必ず接触した状態のものを願います。

まだ和泉君には話せないの……はい、はい。」

ある程度話をして、和は携帯電話の電源ボタンを押した。ふっ、と息を吐くその顔は、どうやら笑っている。

「これはー…：どうなんかなあ。瞳さんにとつたら想定外か？」

ぼつり、呟いた和は空を見上げてなにかを考えたあと、やがて改札へと向かって行った。

「頭脳戦は、嫌いじゃない。」

口角を上げながら言った彼女の瞳は、鋭い色をしていた。

第九十四話「甘辛い半同棲生活・その5」

水曜日の朝。

いつもとおり、遙が和を迎えに来ていたがどこか彼の様子がおかしいことに和は気が付く。

はつきりと挙動不審というわけではないが、いつものように穏やかな表情をしていると思うと

和が遙から顔をそむけた途端に鋭い瞳で彼女を凝視する。

それがなんとも居心地が悪く、和は心の中で首を傾げた。

朝の電車内でも、いつもより会話が少ない。

なぜなのか考えてみると、どうにもいやな予感が頭を過ぎる。

どうかそんな事態にはなっていませんように。

そう願いながらも、接触したのが事実ならば

何事を吹き込まれてもおかしくはないのだろう、と小さく息を吐いた。

教室に着くと、いつものようにまだ誰の姿もない。

和は心臓が嫌な動きをするのがわかって、

一瞬、拳をきつく握り締めてから平静を装いつつ机に鞆を置いた。

「……………和。」

「なあに？」

遙の静かな呼びかけに、和はぎこちない微笑を見せながら背後に立つ彼へと振り返った。

「昨日、誰かと会ってた？」

「……………どうしてそんなこと訊くの？」

「質問に質問で返すのはよくないな。」

笑っている遥のその顔は、しかし瞳はまったく笑っていない。

和はてっぺんからつま先にかけて

瞬間的に冷たい何かが駆け抜けていく感覚に、喉をこく、と鳴らした。

「これは、けっこう重要な質問だからね。

私達は、しなくていいすれ違いをしようとしているんじゃない？」

「どうかな。そうかもしれないけど、見過ごせる程心が広くない。」

なおも言い募る遥に、和は眉根を寄せる。

「……………西森嬢からなにか言われたんだよね。」

「言われたし、見せられもしたかな。」

そう言って、無表情なまま遥が一枚のなにかを取りだした。
写真だ。

「…これ」

「どづいつことが、説明してもらえるかな。」

驚愕に目を見開く和に、笑顔が消えた遥が低い声で話しかける。
穏やかな口調を保つことで精一杯のようだった。

写真には、月曜日にファーストフードで話をした

和と雄大が写っていた。悪意を感じるはその内容だ。

ちょうど、落ち込む雄大をなぐさめる為に

和がその手を握り締めたシーンが切り取られており、それはちよつとしたラブシーンの様相を呈している。

なんとも汚いそのやり口に和は小さく舌打ちすれば
みるみるその身体に怒気をみなぎらせてゆく。

「……………下衆が。自分と似ているところがまたむかつくわ。」

弱味につけこむその姑息なやりかた。

和は今までの自分と照らし合わせるとなんともいえない気分になる。

そんな和の様子にため息を吐きつつも、遙は和の手から写真を自身の懐へと戻す。

「和。いつ中村君と会ってたの？」

「月曜日。和泉君には、広未と会って嘔吐いた。

雄大に、どうしてもふたりきりで話が出来ないって言われて…

和泉君が許可してくれないと思ったから嘔吐いた…ごめん。」

「……………なんの話をしたの？」

「私と和泉君の間に割ってはいるのは無理だと思ったって言われた。」

嘘ではないので、目をじ、と真つ直ぐにみて答える。

しかし遙は、その強い双眸で和を見据えたまま
写真を手に持ったまま和へと再度むける。

「なにがどうなって中村君の手を和が握り締めてるの？」

「雄大が、すごく苦しそうな顔をしてたから…

ごめんとありがとをどうにか伝えたくて。」

「それだけ？」

遙のその質問に、和はどうしたものかと悩む。

もう、これ以上彼に嘘を吐く事はどうにも抵抗があった。

こういった信頼は一度壊れてしまつとなかなか取り戻せない。

真剣な場面で平気で嘘を吐く人間だとはどうしても思われなくなつた。

どちらにせよ迷つて言い定めば、まだ何かあると語っているようなものだ。

それはわかっているので、和は唇を？みつつ、

保身には走りたくないと考えた。

今、反故にしてしまえばそれは瞳を裏切る行為だ。

むこうが英恵と協力関係にあつたとしても

可能性がゼロではない以上、この時点ですべてを話す事はしたくない。

結果、口にしたものはなんとも最悪だった。

「……もう少ししたら言う。今は、言えない。」

顔を顰めながら和が遙にそう言えば、

遙は氷のような冷たい表情で和を見つめる。

それがあまりにも恐ろしく、和はその場から逃げだしたい衝動にか

られれば

一歩後退した。

そのとき。

遙が手にしていた写真を、ぐしゃ、と握り締めれば

教室後ろにあるごみ箱まで歩いて丸めた写真を粉々になるまで破いて捨てた。

和は呆然とその様子をみつめているとくる、とごみ箱から振り返った遙と目と目が合う。

「い、ずみく…?」

喉がからからになっていて、まともに声が出せない。

和はどうしてなのか、先程から恐怖のようなものをじわじわと感じていた。

目の前の遙が、怖くてこわくてたまらないのだ。

遙は固まる和の手を掴むと、そのままどこかへと歩き出す。

引っ張りながらかなり早足で進む遙と、

足が竦んでもつれる和はどうしても歩調が合わない。

やがて苛々が頂点に達したのか、遙は無言で和を抱き上げればもう何回もされているお姫様抱っこで校内を闊歩しはじめた。

「和泉君…どこに行くの?」

蒼い顔になりながら訊ねる和になにも言わずに

遙はそのまま無表情で歩き出す。

辿り着いた先は、保健室だった。

もう岡元は出勤している状態らしく、扉は簡単に開く。

和はなぜかそれに恐怖心が増していった。

いつかのようにふたりが保健室を訪れたことに驚いたのか、

目を丸くしながら岡元がふたりに声をかける。

「あらあら。どうしたの？」

和はなにも答えずに無言でいたが、やがて遙が壊れ物を扱うかのようにベッドへと和を置く。につこりと微笑んで彼女の頭を撫でる遙に困惑した顔をすれば遙はそのまま岡元へと向き直った。

「貧血なのかわからないけど、倒れちゃったんですよ。

朝からこんな体調だし、早退させてもいいですか？

タクシーとか呼んでもらえるよう手配してもらえたらと思って。」

「あら、大丈夫なの？本当、顔が真っ青ね。笹森さんは2・3だった？」

岡元の問いに、遙がそうです、と答える。

和は、遙の言葉の意図するところがわからずに

抵抗しようかとふたりに割って入ろうとするが、

遙がそれを制止するかのよう鋭い双眸で和をとらえる。

和は一瞬にして竦んでしまい、

結局そのままタクシーへと身をあずける他なかった。

遙はそのまま自身のマンションまでタクシーを走らせると運転手にお礼を言って和と共に部屋へと入って行った。

がちや、という鍵の音に身体が大きく揺れて

和はまた逃げ出したくなった。

しかし遙がそれを許すはずもなく、

靴も脱がさずに遙がまたも和を抱き上げて寝室へと連れて行く。

半ば乱暴にベッドへと投げ出されれば、
和は眉を顰めた状態で遙をみつめた。

「！和泉君……？」

鋭い顔でこちらを見ているのだろうと思っていた和だったが、
遙の表情はそれとは真逆のものだった。
なんとも情けない顔をして、彼女をみつめている。

「和…駄目だよ。」

「え？」

「出来ない。絶対に出来ないよ。駄目だ。」

「あの、なんの話？」

「だって、和は俺のものだもん。」

その声を合図に、遙の中にまた激情が戻ったのか
荒々しく和の上へのしかかれば強引に彼女の服を脱がせていった。
抵抗しようともがくが、
与えられる愛撫が強引な腕とは違ってなんとも優しい。

和は、その温度差のようなものに混乱すれば
どうしたらいいのかわからなかった。

和をベッドへと押し付け、両手を一纏めにする左手はとても痛い
に、

彼女の身体を這う唇はなんとも優しい。
それこそ、壊れ物を扱うかのようだ。

それになぜか目の奥がつん、として、気が付けば和は涙を流していた。
心の裏つかわのようなものが痒いような気がして、
けれどもそれがどこなのが和にはわからない。

表層ではきつと怖かったり悲しかったりするから泣いているのだが
それよりもっと奥の奥では、遥を抱きしめてやりたいとさえ感じる。

和はその理由がわからずに、ひどく混乱すれば
ついにはひく、と喉を鳴らした。

声を出さずに泣く事に限界がおとずれたようだった。

「……………嫌なの？」

弱弱しい声で、遥が小さく呟く。

それに、和は返事をしようと思うが涙でぼやけて遥の表情もわからない。

「和、俺に抱かれるのが嫌なの？」

…もう、和にとって触られて嫌だと思っ対象に俺はなったの？」

「なん…なに……………う、く、」

「泣かないで。和、泣かないで……………」

涙をためた眦に、遥が優しく口付ける。

通り道をたどるかのようになり、頬にも唇をすべらせてゆく。

和は、あまりにも優しいその愛撫にまた泣きそうになった。

「俺は…もう手放せない。」

ごめんね、こんなに好きになってしまっで。」

最後にそう告げて、遙は咬み付くようなキスを和に与えた。
これまでのゆるやかな愛撫とは違い、
和のすべてを奪って、翻弄するかのような刺激。

思うまま、その日和は遙に何度も何度も抱かれた。

やがて彼女が意識を手放してしまうまで。

遙、と呼んだ和の声に、遙が目を輝かせたのを和は確認できないまま
深いふかい眠りに落ちる。

遙はそうなつてしまった和の頭をしばらく撫で続け、

やがて身体をぎゅ、と抱き込めば遙もゆるゆると瞳を閉じた。

温かくて身体がゆらゆらふわふわする。

曖昧な思考でなんとも曖昧な表現を用いれば、

和はどこかおかしくてふ、と笑んだ。

「和？起きたの？」

「……………んん？」

至近距離で聞こえた遙の声に眉根を寄せれば、
和はゆるゆると瞳を開いた。

しばらく思考がはつきりしなかったが、どこか違和感を覚える。

水のようなものに濡れているのは気のせいだろうか、と思えば和は次の瞬間には目を見開いた。

「え、ここどこ?!?!?」

「…お風呂。さすがにあのまま眠って起きたら辛いなと思ってべたべたして気持ち悪いし身体も冷えちゃってたし。」

「……………あ、の、和泉君?」

「ん?」

「やっぱり和泉君?!?!?」

「そうだよ。他の誰かだとも思ったの?まさか中村」

「そうじゃなくて?!?!異性と風呂入ってるとかありえないじゃん!ぎゃー!!最悪!!!!」

和と遥は同じ方向を向いているので身体をまじまじと見られる心配はないが

明るい場所で一糸纏わぬ姿をさらしていることには変わりなく和は羞恥心でおかしくなりそうだった。

和の後ろに座る遥が、

彼女の腰に回していた腕にきゅ、と力を入れて抱き込んだ。

和はそれにびくり、と肩を上下させる。

「あの、ちよ、ええと、ど、どうしよう。

とりあえず!和泉君先に出てくれない?」

「えー、そんな今更。俺がここまで運んだんだから、ばっちりしっかり見ちゃってるよ?」

「うっうっうっー最低……………」

湯加減のせいではなく和が全身を赤く染め上げれば、背後で遥が笑う気配がする。

「…和、俺の事どう思ってる？」

「?どう、って。」

「俺は和の恋人？」

「恋人同士でもないのにお風呂いっしょに入るのは嫌だよ。」

「……………そっか。」

そうぼつり、と呟くと数秒無言になれば、
遥の両手がなぜか上へと移動してきた。

「…っちょ、和泉君！」

「だって、このポジション、触るなっていうほうが無理じゃない？」

「だ、ったら、あっ、お風呂に、いれなきゃいっ…い、でしょ、…
んんっ！」

「和…その声はちょっとどうかと思う。やばいよ、えろすぎ。
せっかく我慢してるのにできなくなっちゃっ。」

話そうとしても遥の手に刺激され

鼻にかかったような甘ったるい声を和が漏らすので
それを聞いた遥までもが息を荒げる。

しかし、それに和は危機感を覚えれば次には大声で怒鳴った。

「え、ちょ、やだ、もうっ！先に出て!!!」

エコーがかかった声でそう言われて遥は我に返ったのかはわからなかつたが
ひとつため息を吐けば、遥は肩にちゅう、と吸い付くようなキスを
して

無言で浴槽からあがった。

その間、和は見ないように顔を逸らしていればやがて風呂場のドアを開閉する音が耳に確認できた。

そこからしばらくしてから和も脱衣場へと出れば、身体を拭いて着替えはないものかと辺りを見回す。

やがて下着とTシャツが目に入って、広げてみればショーツは和のものだった。

遙が出したのだろうと考えたら、なんとも恥ずかしくはったがとりあえず渋々それを履けば

今度は長袖のTシャツへと袖を通した。

しかし次の瞬間、和はリビングへと顔を出して怒鳴り込む。

「ちよつと和泉君！下着は用意したくせになんで着る服は用意されてないの！？なんか落ち着かないんだけどこの格好！！」

憤慨している理由は、遙が用意してくれたのが

彼のロングTシャツのみだったということである。

丈が長いし大きめなので、下着がみえるわけではないが

それでも学校のスカートとそれ程長さは変わらないので落ち着かない。

なんせスカートの下にはいつもパッツを履いていたからだ。

しかし当の遙はうつとりと恍惚な表情をしている。

「可愛い……あーやばい襲いたい。」

「な！言っておくけど無理だからね！？…いたっ」

怒鳴って遙を指差そうとするが、腰に激痛が走って和は崩れそうになる。

慌てた遙が、大丈夫！？と声をあげて和を抱きとめた。

「ごめん、相当無茶したから…身体、だるい通り越してあちこち痛いんじゃない？」

「……………まあね。」

むす、とした表情で和が低い声をあげれば遙が息を吐いた。

「もう、俺の事好きじゃなくなった？」

「…さつきからそんなことばっかり。」

好きだよ！好きじゃなきゃあんな風に触らせないよ、おばか！！」

あまりの悔しさに和は遙の顔面を手の平でばん！と叩いた。

遙がつっ、とうなり声をあげる。

しかし、次には微笑んだ。

「和、大好きだよ。」

「……………うん。ありがとう。」

苦笑いして答える和に、遙は幸せそうに微笑めば身体を支えたまま彼女をソファへと運んだ。

「…あのさ、こんな事言ったら、和泉君は疑うと思う。」

でも、私もよく和泉君の言いたくない宣言に待ったりしたでしょう？」

和の言葉に、遙は小さく首を傾げる。

どうやら先をうながしているらしい。

「だから。まだ話せないんだけど。そういう事情があるだけなの！全部済んだら、きちんと話すから。それまで待っていてくれない？」

「……………うん、わかった。ごめんね和。俺、また暴走して。」

「…本気で軟禁されるのかと思って怖かったよ。」

「……………途中までは、本気でする気だったからね。」

ぼそ、と呟いた言葉に、和は数秒固まった。

目の前の遥は、ばつが悪いのか和と目を逸らしている。

「……………とにかく、私は今現在も遥が好きだから。」

「うん、ありがとう、俺も大好き。」

「…知ってるよ。」

苦笑しながら、嫌と言うほどね、と付け足す和に

遥は鼻に触れるようなキスをしてもう一度謝った。

和は、こんな彼でも逃げ出したいと思わないのだから
自分も相当だろう、と心の中で自嘲していた。

第九十五話「油断禁物」

日曜日。

和は予告通り瞳の携帯電話に連絡を取れば

向こうから、この間とおなじ駅で待ち合わせをしたい、と言われた。それを了承すれば、12時ちょうどに駅前広場でおちあうことになった。

「笹森さん。」

「飯島さん、こんにちは。また同じ場所でいいですか？」

「ええ、かまわないわ。」

駅前で再び会ったふたりは、また火曜日と同じ喫茶店をおとずれた。注文したものは、

瞳は同じカフェラテを、和はアメリカンを頼んだ。

たまにだが、和はこれを飲みたくなる時がある。

しかし今回はある人物がこれを頼んだので飲みたくなったのだ。

それを思い出して和がふ、と笑うと、

瞳が訝しんで彼女をみたので、和はなんでもないです、と誤魔化した。

「それで、飯島さんの出した結論をお訊かせただけですか。」

「…やっぱり、遙と会うのは怖い。」

別れたくないし、これからも関係が続けたいから…ごめんなさい。」

「……………そうですか。じゃあ、私が信じないし別れないと言ったらどうします？」

「それは、あなたの自由だから。…ただ、私が遙に抱かれているのは事実よ。」

『成程、そうくるか。』

相手からしたら、とにかく和と遙が揉める材料がほしいのだろうし和が疑心暗鬼になって自滅するのを待つのもいいだろう。いずれにせよ、なんとも粘着質な謀である。

「…私が、あなたの事を彼に問い詰めてもあなたは困らないんですか？」

「責められるでしょうね。どうして会ったのかって言われるかも。でも、扱いは今だってそんなに良いものじゃないもの。」

あなたにもう二度と会わないから、彼女にはきちんと誤解だって話せば

信じてくれるんじゃない？って言えばきっと関係を続けてくれるわ。あなたは、せいぜい彼の言う事を信じて彼に甘えていればいいじゃない？」

妖艶に微笑む彼女が、やたら不気味だ。

普通の女性なら、こうまで言われて遙と続けていくのは難しいかもしれない。

ただでさえ人目を惹くプロフィールなわけで

歩いているだけで誰しもが振り返るいい男だ。無理もない。

いつだって浮気されるんじゃないかとびくびくするのが普通だろう。

しかし笹森和嬢は、どこもかしこも普通ではなかった。

「そうですか。ま、いいですけどね、それでも。

あなたの話がすべて嘘だっていうのは全部わかってるんで。」

「!?!?」

にや、と笑んだ和に、瞳はどういうことかと言いたげに狼狽する。和は椅子に置いた鞆をこそごと探ると、一枚の写真を取り出した。そこに写っていたのは、目の前に座っている瞳。そして、西森英恵だった。

瞳は、一瞬驚愕したかのように固まるが、開き直ったかのように微笑んだ。

「これがなにか？私だって彼女に会ったことはあるのよ。」

別にこんな写真があったからってなにも不思議じゃないわ。」

「私と会った日に撮ったものですよ、これ。」

とん、と人差し指で写真を叩いてやれば、瞳はまた狼狽する。

彼女は度胸はあるようだが、どうにも態度がわかりやすい。

西森英恵は、使う駒をじっくりと吟味する余裕はなかったらしい。

そんな彼女を一瞥して、和は次々と写真を取り出してゆく。

「これも、これも、これもそうです。」

そこには、駅前で立ち話をしたあと、

ふたりして西森家の車に乗り込む姿がとらえられていた。

とてもじゃないが、英恵が瞳に乱暴を振るったり脅しているようにはみえない。

瞳の顔が、みるみる蒼褪めていく。

「わ、私が！彼女と会っていたからなんだってどういうの!?!?」

だからって遙と私の関係が嘘だっていう証明にはならないじゃない！！」

「まだ言うんですか？ 往生際の悪いひとですねえ。」

和泉遙の元恋人の、飯島瞳さん。

交際期間は一昨年の12月20日から、去年の2月3日まで。」

和の言葉に、今度こそという言葉を失ったのだろう。

顔色を失くした瞳は、凍りついたように和の顔を凝視した。

「そのときの振られた理由が「やめて！！」

言い募ろうとする和を、金切り声をあげて瞳が制止する。

燃えるような双眸で、和の顔をとらえる彼女は

なにも言わずとも彼女が憎くてたまらない、とその顔で語っていた。

「私は、恋人にはもう戻れないけれど、

彼とつながってるのよ！あなたと遙が付き合ったあとも、

私と彼は、本当に、身体を重ねたの！！」

「だから、いつまで言うつもりですか？」

「本当よ！遙は、私の身体を知り尽くしてるし

私だって、彼がどうすれば悦ぶのか知ってるわ！！」

その言葉に、和は無表情で小さな機械をこと、とテーブルへと置けば無言でそれを操作した。

すると、そこからなにか声が聞こえてくる。

『笹森和。高校での出来事も色々調べてみたけれど厄介ね。

馬鹿どころか随分と小賢しい性格をしているみたいだわ。』

『あなたに協力すれば、また遙と関係を持てるって言いましたよね？
今更、無理ですなんて言わないでよ。』

『わかってるわよ！とにかく決定打になるような証拠をつかませない限り、

彼女があなたと遙の関係が嘘だという確信を持つことはないわ。

そこにつけこみましょう。』

『うまくいくかしら…』

『あら、少なくともあんな平凡な子で遙は満足しやしないわ。

とにかくあの子と別れば彼だって打撃を食らうでしょうし、

本当の勝負はそこからなんだから、あなたもとにかく強気でいなさいよ。』

『……そうね、あんな地味な女に取られたなんて納得できないわ。』

『あの子が原因であなた振られたんでしょ？私もよ。』

笹森和さえいなきゃ、また前のように彼を共有できるのに…』

『本当、遙の愛を一身に受ける資格、あんな女にあるはずないわ。

遙も遙だわ。本命が出来たからって彼女一筋になるなんて信じられない。』

『今までは三ヶ月もすれば飽きてたのに。…絶対に別れさせてやる。』

『

ええ。』

』

そこで、会話は途切れた。

よくよくみれば、その機械は小さなボイスレコーダーであった。

どうやら、ふたりの会話はどういう手段を持ってしてかはわからないが

盗聴されていたようである。

「……嘘。これ、あのひとの車の中で話していたことなのよ！どうやって」

「言っておくけど私じゃありませんよ？とある協力者の功労です。」

そう言ってさ、とボイスレコーダーを鞆へしまふ。

和は、コーヒを一口飲めば、協力者へと思いを馳せた。
あのひとは、アメリカンしか飲まないのだろうか？とそんなことを
考えつつ。

「ま、そういうことですのよ。」

私や彼から手を引いてくださるといっているのであれば
今回の事は不問に処します。これ以上なにかされるといっているのであれ
ば…

こちらもそれなりの対応をしなければいけなくなりますが、どうし
ますか？」

ちら、と瞳をみればその言葉に彼女はびくり、と跳ねる。
小刻みに震えてもいるようだ。

「どう、いうことよ？それなりの対応って…」

私はただ、あんと遥を別れさせたかっただけよ！
恋愛は誰が誰を口説こうか自由じゃないの！！」

「口説いてないでしょうが。汚いこととして破滅に追い込もうとした
だけのくせに。」

鼻で笑う和に、瞳は憤慨したようにか、と目を剥く。

「あんたに何がわかるのよ！？」

付き合っている時だって、確かに優しくかったけれど、
愛されている実感なんて持てやしなかったわ！

いつ別れを切り出されるかとびくびくして、でもそういう態度を隠
して

少しでも気持ちを通じ合えると思えたのはやってるときくらいよ。

それでも遥は、絶対に一人暮らしの部屋に上げてくれることはなか
った！！」

「直接的すぎますね。」

せめて、身体を重ねるときくらい、とか綺麗な表現できないんですか？」

「ぶってんじゃないわよ、処女でもないくせに！」

どん、とテーブルを叩いて怒鳴る瞳にため息を吐けば、和はコーヒーを飲み干して立ち上がった。

「出ましよう。ここじゃ周りのひとにご迷惑ですよ。」

「…話はまだ終わってないわ。」

「いくらでもお付き合いしますから。場所移動しましょう。」

その言葉に、瞳が顔を真っ赤にしながら勢い良く立ち上がる。

和は歩き出す彼女の背中をながめつつ、店員に一言謝罪して店を出た。

駅前通りを歩く彼女に声をかけようと足を進めれば、和は違和感を覚えた。

なぜか、自分の周りを囲うように人垣ができている。

日曜日のこの通りは、元々が混んでいる為、周りも不審には思わない。

やられた、と心の中で呟きつつも、声にはならなかった。

次の瞬間にはもう薬のようなものを嗅がされ、和は何事を発するでもなく昏倒した。

「……………んん。」

眉を顰めて声をあげれば、和は眩暈を覚えつつもなんとか瞳を開く。もうすでに陽は傾きかけていて、四時間ほどは眠っていたらしいと考えると

どこに運ばれてしまったのだろうかと焦る。

「…気が付いたのね。」

微笑む目の前の人物は、和の見知った人物。当然と言えば当然だが西森英恵そのひとだった。

和は不快感を露に、吐き捨てるかのように声を発した。

「どこですか、ここ。」

「…心配なく、あなたが知る必要はないわ。」

微笑む彼女を一瞥して和が辺りを見回せば、もう使われていないオフィスビルの一室であるとわかった。

西森英恵は大企業のお嬢様だ。

父親の名を使って好きに出来る場所はきつと多いのだろう。

目の前の窓からは、高層ビル群の景色がみえる。

オフィス街だということもわかったが、果たしてどこのかはわからない。

地元からそう離れていないところなのかもしれないし、

地方都市のどこかなのかもしれない。

和は、遠くまで運ばれてしまったのならば色々と絶望的だと内心で

歯噛みした。

そうして、目の前で悠然とデスクに腰掛ける英恵に視線を戻す。後ろ手に縛られた紐をどうにか取れないものかともがいてみるがドラマや漫画のようにそうそう上手くはいかなかった。

「…飯島瞳さんは？」

「彼女はここには居ないわ。あの子、もうちょっと使えると思ったらいまいちだったわね。簡単に隙を見せて情けないったら。」

和は、大分身体が楽になったと思えば、横たえていた自身を起こして地べたに座った状態になる。

英恵は、和を一瞥して頼杖をついていた。

「飯島さんに近付いたのは、あなたからですよね。」

はじめから、彼女を利用するつもりだったんですか？」

「もっと賢い子であったのなら、貸してあげてもいいと思ったわ。」

遙がひとりの女におさまっていられるなんて思っていないし。」

「……そこがわからないんですけど。」

彼は、昔も今も浮気はしていなかったと思っただんですが。」

和の言葉に、英恵はああ、と短く返事をすれば

物憂げにふう、と息を吐いた。

「そうねえ…遙は、浮気はしない男よ。ただ、乗り換えちゃうだけでも私からしたら似たようなものだったわ。」

二股はしないけれど、違う子が気になれば

すぐにそっちにいつてしまうような男だったから。

それなら、浮気を容認して本妻の座におさまるしかないじゃない？

まあ、私が狙っていたのはそれだったわけだけ。」

英恵の言葉に、和は心中で納得していた。
遥と長い間関係を持っていたのは、確かに彼女が初めてだったのか
もしれない。

それは、恋人同士というものではなかったが。

「…あなた、遥と付き合い始めたのは夏頃らしいわね。」

「へ。ああ…えーと、9月の…上旬？あれ、中旬？ですかねえ。」

「告白されたのは、5月の事なんでしょう。」

「ああ、まあ、そうですね。」

「付き合いだしてもう四ヶ月…遥があなたに思いを告げてからは
八ヶ月も経過している。」

こんなに長いこと、彼がひとりの人間に執着するなんてありえない。
いえ、ありえなかった、と言っべきかしらね。」

自嘲するように発した英恵の言葉に、和は黙って耳を傾ける。

英恵は、淡々とした口調で続きを話し始めた。

「今でも、信じられない。あなたみたいな普通の…」

まあ、中身はそうでもないのかもしれないけれどね。

遥の隣に居て見劣りするような女性が彼の愛を一身に受けているな
んて。」

「……………」

「ただ、私は瞳ちゃんみたいに彼があなたを溺愛しているのを
子どものように認めないつもりはないわ。

それは事実としてあって、

だからこそ私はあなたから自主的に遥を手放すように仕向けたかっ
たのよ。」

「あの。」

「なにかしら？」

少し迷いつつも、声をあげてしまったので
和は続きの言葉を口にした。

「これを言うと怒られるかもしれませんが……」

多分、私から別れを切り出しても、彼は承服しないかと思います。」

「あらあら、随分と自惚れているのね。」

「……あなたが撮影した雄大と私の写真を見て
別れを切り出したわけでもないのに勘違いしそうになった彼に
私は軟禁されかけましたからね。」

和が話した事実には、英恵は驚愕に目を見開けば
ぽかん、と口を開く。

美人のなんとも隙だらけな顔を見て、和は奇妙な事に
どこか可愛いな、などと呑気に考えていた。

「……よくわかったわ。」

ということとは、やっぱり最初からこうするしかなかったのね。」

その言葉に、和はぴくり、とわずか眉を動かす。

そうして無駄だとわかっていつつも、お伺いをたててみた。

「……この手、痛いんですけどどうにもなりませんか。」

「逃げ出すつもりでいるなら無駄よ。ここにはたくさん見張りがい
るし」

あなたの荷物は全部没収させてもらっただわ。」

「……どうして、穩便に済ませようとしたものを荒立てるんですか。
こんなことをしてしまったら、警察沙汰になります。」

「あなたがみつからなければ問題ないでしょう。
大丈夫、うちのスタッフは優秀なのよ。」

にっこりと微笑んだまま、英恵は携帯電話を取り出した。

「これから自分がどうなるか、知りたい？」

「ひよっとして、死体になっちゃったりしますか？」

今の状況だと冗談では済まされないとわかっていたが、なんとかこの場の空気を一掃したくて和は軽口を叩いてみる。

「殺しはしないわ。今の日本で隠蔽するのは色々大変よ。

ただ、あなたをボロボロにはできるじゃない？」

そうなったら彼の元にも、昔の知り合いにも会いたくなくなるだろうし

自ら死にたいと思ってくれるんじゃないかと考えたの。」

とっても名案、と言わんばかりのその内容に和がぎょっと目を剥けば英恵は楽しそうに笑った。

「そういう顔、見たかったのよ。

あなたは随分としたたかみいだし、私とどこか似ているから。

相手の裏をかくのがとってもお上手みただけねど今回は無理だったみたいね？」

「こつまですると思わないでしょう。

和泉遥に…自分を振った男に、そこまで執着する意味がわかりません。

焦るのは、あなたにもう自由があまりないからですか？」

「！あなた、」

「もうすぐ、正式にご婚約なさるそうですね。

この平成の世に親に決められた相手と結婚なんて、とってしまえますが

あなたのような家の人間には色々としがらみも多いのでしょうか。」

「お父様は、そこまで融通のきかない人間ではないわよ。」

「ええ、だからこそ、あなたに言ったんじゃないですか？」

懸想する相手がいるのなら、連れてきてかまわない。

しかし決まった相手がないのであれば、そろそろ身を固めてほしい。

申し訳ないがお前はそういう立場の人間なんだ、と。」

和の言葉に、英恵が悔しそうに顔を歪めた。

「そうよ！私は…これから新しい恋愛を楽しむ余裕なんてないし
なによりも遥以外に欲しい人間なんていないわ！！
だからこそ…私は、なんとしてでも彼を手に入れなければいけない
の！！」

「お父様ともつと話し合ってみればいいじゃないですか。
せめて相手と会ってから決めたいと相談してみるとか。」

「無駄よ、彼でなければ意味がないのよ！！！」

これまでの冷静さを失ってしまったように

英恵は大声で和の言葉を制止する。

追い詰められているのは、和なのか英恵なのか。

英恵は再度携帯電話を握りなおし、

どこかに連絡を入れようとしていた。

和はそれにもどうにも悪い予感しかしないと考えれば
立ち上がって英恵に体当たりをお見舞いする。

英恵と和と一緒に倒れこんで、強か背中を打ちつけた。
お互いに痛みに顔を歪めるが、それどころではない。

和はなんとか英恵を押さえ込もうと上にのしかかるが、両手が自由な分、英恵は有利だ。

思い切り和の頬を英恵が叩けば、痛みが抜ける和の身体を突き飛ばし、英恵は扉へと走って外へ出ると、外側から鍵をかけた。

和は、英恵がいなくなったことに数秒呆然としていたが、先程から気になっていた室内にひとつだけあるデスクへと足を向ければ、
なにか使えそうなものはないかと検分する。
しかし、当然ながらそこにはなにも入っておらず、机上にもなにも置いていないことを確認すればどうしたものかと悩む。

そこで目に付いたのは、窓だった。
頭でこっん、と強度を確認してみると、やはりけっこうな堅さがある。

それでも迷っている暇はないと思えば
和はあらん限りの力をこめてガラスを蹴った。

幸いなのは、強化ガラスではないということである。
網入りガラスは、火災予防のガラスであるので、強化ガラスと比べれば

強度はそこまでではない。
和はそれに一縷の望みを託し、
自身の足をかまうことなく力任せにガラスを蹴った。

何度もけたたましい音がするが、やはり簡単に破損することはない。
それでも、ヒビが入ったのが確認できて、和は蹴り上げる足の速度

をあげた。

音を立ててガラスが割れ、あまり飛散しないその一欠けらを寝転んで取ると

和は急いで手首を拘束する縄を切り出した。

不審がられないように、窓から離れた位置に移動する。

ずきり、と痛んだ足を引きずって、部屋の真ん中へと座りなおせば和は作業を再開する。

『足大丈夫かなー…折れてはいないけど腫れるかもなあ…。』

痛みにはそんなに強くないのに、と心の中で泣きつつ、

和は真剣に縄を切っていく。

そのとき。がちゃ、と扉が開く音がして、和は視線をそちらへと向けた。

嫌な笑いをした英恵のうしろには、

それ以上に嫌な雰囲気醸し出した男が四人並んでいた。

第九十六話「焦燥」

遙は、和からの連絡を待っているところだった。

自室のベッドへと寝転んで、携帯電話をじつとながめる。

時刻は午後二時。正午に野暮用があるといっていたので、もうそろそろなにか連絡があってもいいのではないかと思っていたのだが。

遙はしばらく悩んで、電話をかけてみることにした。

しかし、何故だかコール音が鳴ることなく、おなじみのアナウンスが耳に入って

遙は眉を顰めた。

和に関して言えば、電源を切っている事自体はそう珍しくもないがなんとなくこのタイミングはどこか胸騒ぎを覚えた。

それでも連絡が取れない以上、どうすることもできない。

起き上がった部屋の中をしばらく右往左往したあと、

どこに行ったのか依子には告げて出たのだろうかと考えて

遙は再度携帯電話に手をかける。

そのとき、チャイムの音が響いた。

「…和？」

遙は呟くように彼女の名を口にして足早にインターホンへと向かった。

小さなテレビ画面を確認すると、そこに立っていたのは和ではなく何故かかつての恋人だった。

またどうしてこんなときに昔の相手が自分の所へ訪ねてくるのだろうか。

どうにも嫌な予感が払拭できずに、

遥は短く「すぐ下に行く」と告げて玄関をあとにした。

「瞳さん！」

「遥…ごめんなさい、突然。」

ぎこちなく微笑む瞳に、遥は無言で首を振る。

どうにも様子がおかしい。

そう感じれば、遥は変に動悸が激しくなるのを止められなかった。

「どうしたの？」

「あ…ね、私、」

「!…ごめん、ちょっと待って。」

口を開きかけた瞳に、申し訳なさそうに遥が微笑む。

その優しい笑顔に、瞳の胸は高鳴った。

遥は、響く着信音を止めるためにもポケットに突っ込んだ電話を取り出すと

通話ボタンを押して耳にあてがった。

「佐山さん、どうしたの？」

『和ちゃん、お前んとこ帰ってるか?』

電話口で少し焦ったかのような彼の声が耳に響いてくる。
突然に恋人の名が口に出て、遙は顔を顰めた。
一体、和と彼との間になにがあったのだろうか。

「来てないけど…つうかなんで」

『説明はあとだ！…遙、今お前家に居るのか？』

「うん、正確には家の前だけど…ちょっとひとと会ってて」

『西森英恵か！！？』

「え、違うけど……」

遙の言葉に、佐山が舌打ちする。

『まだ飯島と話してるのか…？』

「…佐山さん、今なんて？」

なんとなく、嫌な予感が的中しそうだった。

遙は、思考を巡らせれば目の前の瞳にっこりと微笑んで
す、とその手を取れば恋人のように自身の手を彼女に絡めた。

瞳は、それに驚愕しつつも頬を染めて潤んだ目を遙へと向けている。

『飯島瞳…まさか、今会ってるのその女か！？』

「佐山さん、どうすればいい？」

『逃がすな。俺がそっちに向かうまで絶対にだ。』

マンション前なら、部屋にあげておけ、すぐ行く。切るぞ。』

遙に言いたい事だけ告げると、佐山は電話を切った。

様子からしてかなり切羽詰っているようだ。

遙は、ごめんね、と微笑んで電話をしまえば、瞳の耳元に唇を近づける。

「俺に、会いに来てくれたんだよね？」

甘く囁く遙の言葉に、瞳はこくり、とうなずく。

遙は、それに艶っぽい声をあげながら笑んだ。

「嬉しいな。ここまで来てくれたんだし…せつかくだから部屋にあげて？」

「え、でも…遙、彼女いるんでしょう？悪いわ。」

「ふたりでいるのに、他の女性の話なんてしてほしくないな。

それとも、ここで別れる？」

する、と彼女の頬に右手を添えて遙が瞳をみつめれば、

瞳は熱に浮かされたかのように夢心地でとろん、とした顔を遙へと向ける。

「……あがっていくわ。」

その答えに満足したかのように、遙は満面の笑みで瞳を部屋へと案内した。

「…すごくシンプルなのね、遙の部屋って。」

「そうかな…座ってて。コーヒーでも入れるよ。」

「あ、ありがとう。」

瞳は、夢なんじゃないのかと思うくらい浮かれていた。

もしも彼が帰れ、と瞳を一蹴すれば、きつともう企みはすべて

笹森和によって暴露されていたあとだろうと考えていたが

そうでなければ話くらいはできるかもしれない、とここに立ち寄ったのだ。

結果は、瞳に軍配が上がるものであったので
内心で馬鹿な女だ、と笹森和を嘲笑していた。

変なところで良い子ぶらなければよかったのだ。

汚い人間ならそれらしく振舞っていればいいものを。

それとも彼の前だとしおらしいのだろうか？ 遙は、そんな面に惹かれたのだろうか？

愛しいかつての恋人を視界にうつせば、それに気が付いた遙が微笑む。

瞳も、それに微笑を返した。

ひょっとして、彼も自分に未練があるのかもしれない。

淡い期待を、このとき瞳は抱き始めた。

きつと、笹森和は無事ではすまないだろうし、

それならばどっちにしろ彼はフリーになるのだ。

彼女を貶めたのが英恵かもしれない、と彼に告げ口すれば

あの女さえも遙から遠ざけられるかもしれない。

そう考えれば、瞳は口角が歪に曲がるのをとめられなかった。

なんなら、声をあげて笑い出してしまいたいほどに、

彼女は今歓喜していた。

「…はい、どうぞ。あ、ミルク入れる？」

「あ、ありがとう。」

そう言って渡されたクリームを手にとってコーヒーへと流し込む。

遥はそれをみつめていれば、何故、という思いに駆られた。

ここを自由に訪れる愛しい恋人は、
コーヒーにミルクを入れたりしない。彼女はいつだって、ブラック
派だ。

とすれば、目の前にいる女はなんなのだろう。

ぼんやりとそんなことを思いつつも、しかし遥の顔は微笑を形に
していた。

瞳は、遥の胸中をなんら察する事もなく、その微笑に見惚れている。

「遥…私ね、まだあなたのことが好きなの。」

「…本当？」

「別れたあとも、あなたのことが忘れられなくて…

ごめんなさい、突然来て、迷惑だったわよね。」

「とんでもない、嬉しいよ。…俺も、ちょうどあなたの顔が見たか
つたんだ。」

「え……………」

「ふふ、そんなに驚かなくてもいいのに。」

「だって、なんで…あなた、今の彼女を本当に好きなんでしょう？」

その言葉に、遥は何を答えるでもなく微笑めば、

瞳の髪を一房すくいとれば、さらり、と梳くように流す。

そうしてゆるゆると頭を撫でられれば、瞳は潤んだ目で遥をみつめ
る。

「好きよ…。遥は…私のこと、今でも好きでいてくれる？」

震えるような声で囁くように告げれば、遥は彼女の頭から手を離す。
チャイムが鳴り響いて、遥が弾かれたように立ち上がれば

インターホン越しに焦ったように入って、と声をあげていた。

こんなときに、訪問した人間をあげるなんて、遙はなにを考えているのだろう。

瞳は不安気な視線を遙へと向ければ、

振り返った遙が無表情で瞳の顔を見つめていた。

瞬間、彼女が顔色をみるみる失くしていく。

「まさか。」

冷えた瞳で、遙が言い放つ。

その言葉の意味がわからずに、瞳がえ？と小さく訊き返した。それに遙はく、と冷笑する。

「さっきの質問の答え。自分で訊いていけないでくれない？」

いやだなあ、と笑って、遙は玄関扉へと足を向ける。

瞳はその瞬間、夢から覚めたかのような気がした。

なぜ、のこのこと部屋にあがってしまったのだろうか。

彼女が何も話していないと思ひ込んでいたなんて。

あの女は、ずるくて、卑怯で、小賢しいと英恵も言っていたのに！

焦った思考は、しかしここから脱出する術がないとわかると

なにかを諦めたかのように絶望していった。

「遙！！逃がしてないだろうな！！？」

「まさか、ちゃんと居るよ。」

「でかした！」

言って、ばたばたと誰かが侵入してくる。
びく、と肩を竦める瞳を視界にうつせば、佐山がほ、と息を吐いた。
見知らぬ男の存在に、瞳は心底わからないという表情をすれば
佐山がにっこりと微笑んだ。

「悪いけど、紳士的な方法を取っている暇がないんだ。
正直に答えてくれれば君に危害は加えない。」

「……？な、なんのことですか？」
「笹森和の居場所を知りたい。」

佐山が放った言葉に、瞳が目を見開けば、
つぎにはがくがくと震えだした。

「今日、あんたと会って話をつけたらこっちに連絡をくれる手筈だ
つたんだ。」

多分一時間もあれば片付くだろうと彼女は言っていた。
でも、待てど暮らせど連絡は来ない。彼女の携帯も電源が落ちてる。
おかしいと思わないか？」

その言葉に、今度は遙が目を見開いた。
目の前の女性が自分の恋人になにをしたかを察すれば、
遙は瞳の腕をちからいっぱい引つ張って立たせる。
瞳が、痛そうに顔を歪め悲鳴をあげた。

「和をどうしたんだ！どこにやった！！？言えよ！！！！」

剣幕に、びく、と震えた瞳が完全に萎縮して涙目になる。
しかし遙はそれを冷たく見据えるだけだ。

「泣いてる暇があったら早く言えよ。」

言っておくけど俺は昔みたいに誰しも平等になんてしない。
今の俺は優しさのすべてを彼女に注ぐ事に必死なんだ。
そんな彼女を傷付けた人間は女であろうと容赦しない。」

言って、遙は掴んだ腕に力を込める。

瞳は、どんだん痛みに眉を顰めてうめき声をあげた。

慌てて、佐山がそれを制止する。

「馬鹿、遙。喋れなくしてどうすんだよ。

ごめん、こいつそのくらい彼女の事大切なんだ。わかってやって。君も、やっちゃいけないことの区別くらいはつくよな？大人なんだから。」

ひく、と喉を鳴らして、瞳が涙を流した。

ぼろぼろと堰を切ったかのように彼女の目から大量の水分が放出される。

しかし遙は、それをなんの感慨もなくみつめていた。

「わか、わかり、ません。ごめ、なさ…」

英恵さんの車で、彼女が連れ去られて行くのだけわかって…」

「本当に？居場所を知らないの？」

肩に手を置いてなおもうながす佐山に、瞳がこくこくとうなずく。

「ただ…彼女、薬のようなものを嗅がされてました。

眠らされたんだと、思います。」

その言葉に、佐山は眉を顰める。

どうやら緊急事態のようだ。嫌な予感が確信になってしまった。

「おい、本当なんだろうな。」
「ひっ…ほ、ほんとに、知らなっ…」

遙に物凄い形相で睨まれて、瞳はまた身体を震わせた。
苛立ったように遙が頭をぐしゃぐしゃと掻き回して、
それを見た佐山がぼん、と遙の肩を叩いた。

「とにかく、彼女も一緒に屋敷へ連れて行こう。
こうなったら警察沙汰にできない、なんて甘い事言ったられないだ
ろっ。」

捕まったとき、この子にもなんかしら証言してもらおうことがあると
思うから。」

「…わかった。」

「というわけで、ごめんね。拒否権はないから。わかってくれるね
?。」

言って瞳の傍らへと立つ佐山に、瞳は顔面蒼白で金切り声をあげる。

「……………わ、私は、なにもしてな」

「おい、無駄口たたいてないでさっさとついてこいよ。」

間髪いれずに遙が言えば、それになにを思ったのか、
瞳は涙を流して遙へとすがりつく。

「私は、あなたが好きだったのよ！好きで好きで仕方なかったの！！
あなたをなんとしても手に入れたくて…いいえ、そうじゃなくても
たくさんうちのひとりでも良かったの。一時でもそういう存在に
なれたらって！」

「…だから？」

「え。」

必死の訴えも、遙は一蹴すればこれ以上ないというくらい無表情に瞳を見下ろす。

瞳は、今度こそその表情に凍り付いてなにも言えなくなった。

「こっわー。和ちゃんにはみせられないなその顔。」

脱力する瞳を支えながら佐山が歩き出せば
その佐山を遥がき、と睨みつける。

「で、どういふことなんだよ？説明してもらえるんだろう？」

「ああ、悔しい事に時間はあるからな。…言っておくけど今回の黒幕は

俺の雇い主だからな。俺は命令に従っただけ。」

「…おじさんが？なんで…あ、実花の事があったからか。」

マンションを出て、佐山の車へと乗り込む。

瞳は後部座席へと押しこんだ。

「ま、お嬢様の事もそうだけど、個人的に借りを返したかったんじゃないかな。」

晴臣様もまー素直じゃないから。」

「……和と、連絡取ったりしてたの？」

「ああ、昨日も会ったよ。」

「………ちよっときつちり説明してよ、本当に！」

「わーってるよそう怒鳴るな。詳しい事は屋敷でな…」

ま、かいつまんで言えば協力関係にあったわけなんだけど。

昨日も、その打ち合わせだったんだ。」

自身の言葉を確かめるように、佐山が昨日の出来事を反芻する。

あれは、夕方過ぎのことであった。

「佐山さん！お仕事大丈夫ですか？」

「もう上がりだったから平気だよ。緊急の呼び出しでもない限りは。」

珈琲屋という喫茶店にて本を読んでいた和は

微笑んでそれを閉じれば向かいに腰を下ろす彼をじ、とみつめた。

アメリカンを頼んだ佐山がそれに気が付いたのか、

悪戯っぽく和の顔を見つめ返す。

「なに？見惚れる程いい男？」

「……いや、まあ、整ったお顔立ちだとは思いますが。」

「ま、遥が傍に居れば俺なんて通行人Aにしかみえないか。」

肩を竦めてそんなことを言う佐山の顔を、和は再度みつめる。

正直な話、遥のようないかにも男前、という顔が和は苦手である。

どちらかというに一重のすっとした目が好きで

なによりどこかしら雰囲気のある男性にどうしても目を引かれる。

「……顔の造りで言えば佐山さんみたいなのが好みはドストライクですけど。」

和が放った言葉に、佐山が飲んでいたコーヒーを噴出した。アメリカンは少し薄くて甘い。

和もたまに欲しくなる時があるが、佐山は日常的にコーヒーを嗜む人間なのだろうか。

ぼんやりとそんなことを考えながら、和が佐山をまたみつめれば佐山は胡散臭い微笑を彼女に寄越す。

「お誘い？和ちゃんならいつでも大歓迎だけど。」

「いや、和泉君にそれを正直に話したら佐山さんはどうなるんだろうか、と

今考えていたところです。」

その言葉に、佐山の顔が凍りつく。

「ま、私も軟禁されかねないのでやめておきましょう。」

…危なかったです今回は。」

「されそうになったの？」

「どうも和泉君と別れて雄大と付き合うとでも妄想したようですね。とにかく、早急に証拠固めをしないとどんどん動き辛くなりそうです。」

実花ちゃんはどうですか？」

「うん、大丈夫だよ。本当うそみたいにパツタリ止んでる。」

「そうですか、良かった。」

今回は改めてご協力いただき感謝しています。ありがとうございました。

す。」

深々と頭を下げる彼女に、佐山は苦笑した。
なんともマイペースすぎて、なかなかついていくのが大変だ。

「いや、こっちは命令に従っているだけの身だし。

…個人的にはうちの大事なお嬢さん傷付けた輩野放しにすんのも嫌
だったから。」

「……………最近、実花ちゃん学校楽しそうですよ。」

「そう。」

「時任君ていう、仲の良い友達もできて…初々しいです。」

「……………そう。」

時任君、という単語に僅か彼の眉がぴくりと動いた事を和は見逃さ
なかった。

楽しそうな顔をしてにんまりと笑めば、しかしそれ以上にも言わ
ない。

こういうことは適度に放り込んでやるくらいがちょうどいいのだ。
そう思えば、和はひとつ咳払いをしてその場の空気を変えようと努
めた。

「それで、こちらが瞳さんと接触しているタイミングで、

西森英恵さんは和泉君のもとを訪ねたんですよね？」

「ああ。和ちゃんから連絡事前にもらって張ってたらビンゴだった。
これがそのときの写真だよ。なんて言って呼び出したかまではわか
らないけど。」

「まあ、それはどうとでもなるでしょう。」

彼女が今どこでなにしているのかしらね、なんて意味深に言えば
慌てて部屋を飛び出してくるでしょうから。」

佐山に差し出されたそれを検分しつつ、和はそんなことを言い放つ。それに佐山は肯定しつつも苦笑していた。

「あと、今回のメイン。やっと掴んだよ。

飯島瞳と西森英恵のツーショット。

和ちゃんと別れたあと、電話じゃらちがあかないからって駅前でもたおちあつてた。

西森英恵は車移動が常みたいで、まずい話し合いはいつもそこでしてるみたい。

で、そのときの会話を録音したものが、これ。」

「……！ど、どうやったんですか？」

佐山がなんでもないことのように

ボイスレコーダーをテーブルに置いて淡々と話すので和は目を見開いて驚いた。

「回収するのがちよーつと大変だったみたい。

言っておくけれどやったのは俺じゃないよ。」

苦笑する佐山をみて、

仕向けたのは間違いなく実花の父である晴臣だろうと合点がいった。一体なにをしたのだろう。金と地位があると無駄に怖い、と和は身震いする。

「まあ、諸々助言したのは私ですけど…娘溺愛は相変わらず、ですか。」

「うん…まあただ、猫可愛がりみたいな育て方は随分なくなつたよ。絹江様も喜んでたな。」

「そうですねか……。」

目を細めて微笑む和に、佐山も同じように柔らかく微笑んでうなずいた。

「あとはまあ…これで彼女達が近づかなくなる事を祈るだけかな。」
「そうですね。…諦めてくれないとなると

それこそ法的措置を取らないといけなくなってしまいます。」

「松永家はそうしたい面もあるんだろうけどな。」

「ええ。…私も、実花ちゃんが無事ではなかったら止めはしませんけど…」

難しいですね。今現在、ターゲットは私ですし

そんなに迷惑被ってる印象もないですし…公に裁かれるってのはなあ。」

「まあ、やられたほうは元より、やっちゃったほうも色々としこりは残っちゃったりするよねえ。」

「そうなんですよね。そのひとの一生を狂わせたなら、とか思うと。変な話、前科持ちみたいなのレッテル貼られやしないかとひやひやします。」

「訴えられた事があるっつーのは確かにちょっとよろしくないもんなあ。」

お互いにならずき合いながら、これから先を吟味する。

正直、ほぼ勝負は着いた、と和はこのとき考えていたし

松永家サイドもそうだったように思う。

この先の采配は和に一任する、という晴臣からの伝言を佐山にもらい和はありがとございます、とまた佐山に頭を下げた。

このとき和は、知らなかったのだ。

彼女達の激情がああも恐ろしいものであることを。

あそこまで、ひとを狂わすなにかがあるのだということ。

屋敷に着いた三人は、とりあえずリビングへと集合した。
実花も、顔面蒼白で駆け込んでくる。晴臣と絹江も一緒だ。

「さらわれたというのは本当か？」

「はい、申し訳ありません。…油断するべきではありませんでした。」

「いや、それは私とて同じだ……こうなつては、仕方がないな。」

警察に協力を仰ぐ他あるまい。絹江、昌に連絡を取ってもらえるか。

その言葉に、うなずいた絹江がリビングをあとにした。

「そんな…和さんが、和さん、私、どうしたら、」

「お嬢様、気弱になってどうします。こういう時程、御気を強くお持ちなさい。」

「佐山……和さんは、大丈夫、よね？」

「もちろんです。なあ、遙？」

佐山の言葉に、遙は無言でうなづく。その瞳には強い意志を宿してその様子に、実花は少し心を落ち着かせたのかほ、と息を吐いてへなへたとソファへ座り込んだ。

しかし、と思いなおす。遙は、今なぜ父の名前が出るのだろうかと訝しむ。

その様子に佐山と晴臣が同時に似たような表情をした。少し悪戯っぽい笑みだ。

「知らないのか、遙。昌さん、知り合いに刑事がいるんだぞ？」

「は！！？」

「協力を頼めるかはわからないが…佐山、ナンバーは？」

「もちろん控えてあります。」

その言葉に、晴臣がうなずいた。

「Nシステムを使って追跡してもらえるかもしれん。

さすがに人員を割いて、とはいかないだろうが…データを照合するだけならば。」

「本当に！？」

「あんま期待すんなって。まだ事件だつて決まってるじゃないし、そうなると思昌さんの友達が個人的に調べてくれることになるだろ。どこまでやってもらえるかがわかんないんだよ。」

「ああ…そっか。」

頂垂れる遙に、しかし晴臣はぼん、とその背中を叩いた。

「なに、まだ希望はあるさ。あの子が目覚めれば…あるいはな。」

「それは、どういっ」

遙の言葉を遮るように、リビングへばたばたと足を運ぶ音がすれば全員が扉へと顔を向けた。

「あなた、昌さんこちらへ今すぐ来るそうです。」

「そうか…佐山、どうだ？」

「……今のところは、反応がないようです。」

佐山が、携帯電話を取り出してなにかを操作している。

彼の言葉に、晴臣がうなった。

一体なんだというのだろうか？

遙が首を傾げていると晴臣と佐山が苦笑していた。どうやら、まだ秘密にしていることがあるらしい。

「晴臣！！連れ去られたのか！！？」

そのとき、血相を変えた昌がリビングへとやってくる。後ろをみれば、なんと香苗も一緒だった。

「母さんまで、なんで」

「未来の娘がいなくなったのよ！？心配するのは当然じゃないの！！」

その言葉に、遙ははっと目を見開いた。

「おじさん…どうしよう、依子さんと高明さんには……」

「それは、お嬢ちゃんのご両親か？」

「うん、連絡をするべきじゃないのかな……」

思案げに顎に手をやる晴臣に佐山は遠慮がちに声をかけた。

「しかし、まだどうにかなったわけじゃないのに

無駄に不安をあおるのはあまり良くないのではありませんか？」

「いや、連絡してあげるべきだろう。」

この場に、誘拐された当の本人の両親がいないのは奇妙な事この上ない。

遙、とりあえずここに張り付いていても仕方がないんだ。

佐山と車で迎えに行っておいで。ここまで連れてくるといいい。

晴臣、依存はないよな？」

「ああ…混乱を招くかもしれないがそのほうがいいだろう。」

ご両親がいたほうがなにかと安心だろうしな。遙、佐山、頼むぞ。」

その言葉に、佐山は無言で頭を下げれば、視線で遙をつながした。

遙も、それにうなずいて歩き出す。

誘拐、という言葉に遙の心臓は妙にざわざわとした。

しかしそれは紛れもない事実なのだと思えば、

携帯電話を開いた手が一瞬、躊躇する。

彼らに、責められるかもしれない。

「遙？」

「…佐山さん…」

助手席に座る遙の思いつめるような顔が気になったのだろう。

佐山が心配そうな視線を向ける。

「…安全運転で飛ばしてもらえろ？」

「……了解！」

笑って言い放った遙に、佐山は同じように微笑んで車を出した。

今は、細かい事を気にしている場合ではない。

そう考えれば、遙は携帯電話の電話帳から依子呼び出し電話をかけた。

『和…絶対に助けるから。』

そう強く誓って、遙はコール音に耳を傾けていた。

第九十七話「奪還」(前書き)

すみません、今回思った以上に過激な描写が増えました；
こんなはずではなかったんですが…

暴力描写、女性に対する陵辱シーンなど、

諸々に嫌悪感を抱く方は今回閲覧をお控えください。

申し訳ありませんがよろしく願います。

第九十七話「奪還」

電話で、震えた声を必死に隠しながら気丈に説明を進めた遙を、依子と高明は家を訪ねた瞬間に微笑んで迎えてくれた。

遙は、不覚にも涙を流しかけたが

それはまだ彼女が助かったあとだと強く思えば息を吐く。

「依、彩にはまだ伏せておいたほうがいい。」

「…そうね、パニックになりかねないわ。」

うなずいて、佐山に向き合えば高明と依子は頭を下げた。

佐山も、深くふたりに頭を下げれば無言で後部座席の扉を開いた。

「…これから、松永家の屋敷にお連れします。」

遙君から説明は聞いていると思いますが…本当に、申し訳ありません。

責任はすべて私にあります。」

依子と高明は、悲哀に満ちた瞳をしながらも、微笑んでいた。

「いいえ、あなたのせいじゃないわ。」

憶測だけ…提案をしたのは和のほうではないかしら?」

「それは……」

「佐山君だっけ?…あんたはあんたの仕事してくれればいいから。」

依子、忘れ物ないよな?」

「ええ。」

につこりと笑んで、ふたりは早々に車へと乗り込んだ。

佐山は、少し驚きながらももう一度頭を下げて扉を閉める。

遙に目でつながせば、お互いにうなずいてそれぞれ車へ乗り込んだ。

「まさかこんな形でお会いするとは思ってもみませんでした。」

屋敷に着いてまず行ったこと。

それはそれぞれの両親がそれぞれに挨拶を交わすことだった。所在なさに部屋の隅で丸くなっている瞳は、その様子を無表情にながめていた。

昌が苦笑して伝えた言葉に、高明と依子も同じような反応で返す。

「本当に。まあ、結婚する前に交流を深めるのは悪い事ではないですよ。」

「そうですねえ…これもなにかのご縁なんでしょう。」

微笑む高明と依子に香苗は眉を下げながら泣きそうな顔をした。

「今回は本当に…息子が持ち込んだ厄介ごとに

そちらの大切なお嬢さんを巻き込んでしまつて…

和ちゃんになにかあったら、私はどうしたらいいのか。」

「まあ、そんな。香苗さん…とおっしゃいましたか？

大丈夫ですよ。私達の娘は、そう簡単にあきらめない子ですから。」

「香苗、君がそんな顔をしちゃいけないよ。」

和さんのご両親のが余程心配なはずなのだから。」

困った顔をする依子にすみません、と言って香苗の肩に昌がそつと手を置いた。

香苗は、涙目になりながらもこらえてうなずく。

依子は微笑んだまま、晴臣に話しかける。

「あの、すみません、お手洗いはどちらに？」

「あ、ああ、ここを出て真っ直ぐ行って突き当たりを右に。」

「ありがとうございます、ちょっと失礼しますね。」

言って、依子は一旦リビングをあとにする。

高明は無言で出て行った依子に少し遅れて部屋を出た。

ちら、と昌と目が合って、一瞬お互いを視界にうつしたあと彼らはふ、と微笑んだ。

それほどこのなにかが通じ合ったかのような一家を築いた男達の笑みだった。

「依子。」

廊下の隅で棒立ちになっている依子へ、高明はうしろから声をかける。
る。

ゆっくりと慎重に彼女の背後へと立てば、

後ろからそつとその震える身体を抱きしめてやる。

「…こんなこと、今までなかった。」

「ああ。」

「あの子はいつだってびっくり箱みたいな娘だわ。」

だから、大概のことじゃ驚かないように、耐性だって出来たと思つてたのに。」

「……そうだなあ。」

「怖いよ、高明。…あの子になにかあったら、私生きていく自信がない。」

その言葉に、高明は依子を抱く腕に力をこめる。

「依、お前が死んだら俺が生きていけない。」

「……和が死んでも平気なの？」

「平気じゃねえよ。でもボロボロになっても生きてはいけると思う。」

「

「不謹慎じゃない？こんなときに。」

「馬鹿、だからそういうこと全部、まず口にすんな。」

不安は俺もお前もいっしょ。家族がひとつでも欠けるのは大変な事だ。

だから考えるな、信じる。和は、俺と依子の娘だぞ。」

「……あなたと私の娘…そうね。」

「殺しても死なないくらいに思っとくんだよこういうときは。」

和が、勝負に負けたことがいまだかつてあったか？

「ない。」

依子の即答に、高明が笑う。依子も、涙を流しながらも同じように笑った。

肩を抱いて、くる、と依子の向きをかえて高明とむかいあわせにすれば

夫は大切な妻の涙をていねいに拭ってやる。

「遥君が気にするから、戻ろう。」

ひよっとするともう、あの子の俺らよりも辛い心境なのかもしれない。」

「……ええ、そうね。遥君…思いつめないといいけど。」

うなずき合うふたりは、自分の娘と、最愛な娘の最愛のひとを想った。

そのときだ。騒々しい足音が響いたかと思うと、実花がふたりを追ってきたように姿をあらわした。高明と依子をみとめると、実花がふたりを呼ぶ。

「おじさま、おばさま！急いでお戻りになって！
昌さんが進展があったとおっしゃって！！」

その言葉に、弾かれたように三人はリビングへと駆け足で戻る。室内はどこか緊張に満ちていた。

「あの、どうしたんですか？」

「高明さん。実は、ちよつとしたつてがありました。
和さんをさらった車両をNシステムで照合してもらえたんです。」

昌が知り合いの刑事にそれを頼んでから一時間。
現在時刻は16時前だ。随分と陽も傾いている。

高明と依子は、昌の言葉に息を呑んだ。

「あの、それで？」

「おおよその場所は見当がつかしました。M地区近辺にいるみたいだ。
ここから車をとばして、一時間以内には着くでしょう。ただ……」

昌の言葉に、晴臣が続きを引き受ける。昌は、悔しそうに唇を？んだ。

「これ以上は、本格的に人員を割いて動いてもらわなければ

正確な場所を特定できない。

ある程度のエリアは絞れはしたが…知り合いの刑事ひとりでは
できることがあまりにも限られる。

事件だとはつきりわからなければ警察は組織として動いてくれませ
ん。

とにかく…今から車でその近辺に向かいますが、

我々の足で捜すとなると一体どれほど時間がかかるのか…。」

「あなた。とにかく向かう他ありませんわ。

高明さん、依子さん。あなた方は一緒に向かいますか？」

絹江の言葉に、高明と依子はもちろん、とうなずいた。

ふたりの強い意志を確認して、絹江もうなずく。

「私と主人はここに残ります。

こちらでも出来る限りの事はするつもりですので…

病院や、警察の手配はお任せください。

あなた方は和さんの無事だけを考えて行動してください。

本当に…大変な事に巻き込んでしまって、謝罪のしようもありません。
」

深々と頭を下げる絹江に、高明と依子はいいえ、と首を振る。

「あの子は、突っ込むなといつても身を投じていたでしょう。」

「和の勝負強さに、私達は賭けます。どうか、頭を上げてください。
」

「…本当に、彼女をお育てになったご両親でいらっしゃるのね。

あなたたちのようなひとから、あんな素晴らしい女性は生まれるん
だわ。」

ほう、と息を吐いて微笑んだあと、表情を変えて絹江が佐山に顔を

向ける。

「佐山、頼みましたよ。現場でのことは、あなたに一任します。」
「お任せください。責任を持って和さんを連れ戻します。」

絹江が、佐山の言葉にうなずいた。

昌と香苗は、遥の傍らへと立つ。

「遥、お前もしっかりやりなさい。…なによりも大切なひとだろう？
僕達もここで待機しているからね。」

「うん。…絶対にこの手に戻す。」

「あんまり暴走しないのよ。和ちゃんに、優しくしてあげてね。」
「わかってるよ。」

高明さん依子さん、しばらくすつこい甘やかしたいんですけど駄目ですか？」

遥の言葉に、高明と依子が笑う。

「それっていつもじゃないか？」

「いつも以上ってことでしょうか？いいわよ、遥君、お願いね？」

遥も、はい、と笑って返す。

しかし次の瞬間。

その場にふさわしくない狂ったような笑い声が部屋中に響いた。
発信源の人間に顔を向ければ、全員が顔を顰めてそのひとをみつめる。

「馬鹿みたい。もう絶対に遅いわよ！」

さらわれて四時間は経ったのに…とっくに彼女はとうになくなって

わ。

きつと、英恵の言葉通りの悲惨な末路。」

あはははは、と笑いながら叫ぶ女に、遥はす、と目を細めた。

「そんなことにはならない。」

「いちばん大切なものを失くして、あなたはどうなるのかしら。その綺麗な顔がどんどん歪んでいくのが楽しみだわ！

誰も好きになんてなつてくれなかつたくせに今更なによ！

私達はあなたが欲しくてたまらなかつたわ。

あなたも、私達と同じ苦しみをせいぜい味わつたらいいのよ！！」

ソファに座つて笑う瞳を、黙らせたのはなんとも意外な人物だった。すたすたと無言でそこまで歩けば、

あらん限りの力を込めて瞳の頬を張った。

なんとも痛々しい音がリビングに響き渡る。

「なにすんのよ！！」

「うるさいわね！！！見苦しいのよっ！！

好きになつて欲しかつたですって！！？

そんなの片想い中のひとは皆そうに決まってるじゃないの！

自分ひとりが苦しいみたいに言うんじゃないわよ！！！」

「あ、あんただつてしつこく遥の周りうるちよろしてたくせに…

偉そうに言わないでよ！」

「そうよ。なにもかも和さんが教えてくれたのよ。

好きだと主張するだけじゃ意味がないってことも、

そのひと個人を尊重するにはどうしたらいいのかも。」

「だつたらなによ…！」

遥は、すべての女性が羨むような男なのよ！欲しいと思って当然だわ！！」

「和さんはね、遙の事を無駄に顔が良い男、なんて揶揄するような人間なの。」

「いいかげんあんたなんか足元にも及ばないって気付きなさいよぶす！」

「なっ!!?」

ヒートアップしそうなふたりに待ったをかけたのは絹江だ。
にこにここと微笑みながら、間に割って入る。

「まあまあ、落ち着いて？実花さん、手をあげるのはよくありませんよ。」

瞳さんも。あなたがここにいる意味は正しく理解していただかないと。」

自分がやってしまった事にたいしての責任は取らなくてはいけないわ。」

佐山、皆さんともうお行きなさい。ここは私達がおさめます。」

それに佐山がうなずいて礼をすれば、高明と依子をうながした。
リビングを出た三人をちら、と見て、遙は瞳を視界につつます。

「……瞳さん。俺、確かに失礼だったと思う。」

誰も本気で好きじゃなかったって、今ならわかるから。」

無意識に傷付けてしまったことも、本当にごめん。」

でも…彼女が無事に戻らなかつたら、
やっぱり俺はあなたを許さないし赦せない。…それだけ覚えておいて。」

実花、あんまり挑発すんなよ。じゃあみんな。行って来ます。」

「わ、わかつてるわよ！」

顔を赤くして声をあげる実花を笑って、

そのあと視界にうつした松永家の両親と自分の両親それぞれに
いってきなさい、と声をかけられる。
うなずいて、遙は三人の待つ車へと走って行った。

扉が開いて、のぞいたのは四人の男達。

その雰囲気の悪さに眉を顰めれば、

和は不自然にならないように座る姿勢を変えれば

両足をぺたん、と折り曲げて地べたにくつつくようにする。

程なくして、ブラインドが下げられ

部屋の電気がついて広いフロアの一部が明るくなる。

男達の顔がより一層はつきりと見えれば、

なんともいやらしい笑いを湛えていて和は不快気に眉を顰めた。

「…随分がらの悪そうなお友達ですねえ。」

「あら、まだそんな余裕顔できるなんて、さすが肝が据わってるわ
ね。」

扉が閉められ施錠のがちゃん、という音が部屋に響けば

和は心臓が高鳴るのを止められない。

しかし顔には出さずに英恵と男達を無表情で一瞥しつつ、

後ろ手の縛られていた紐がほどけたのが確認出来れば
和はゆっくりと靴の中へと手を忍ばせた。

「……これから、一体全体なにが始まるんでしょう？
そのひとたち、西森さんの取り巻きかなにかですか。」

和の言葉に、英恵は楽しそうに微笑む。

「このひとたちは違うわ。業界の仲間よ。」

「けっこう有名なのにあなた全然そういうの興味ないのねえ？」

知らないんですってよ？とくすくす笑いながら英恵が言えば
四人の男はえーシヨックー、などと軽口を叩いて下品に笑う。

「しっかし、けっこう可愛いじゃん。」

「スタイルはどうなんだろー。剥いてみないとわかんねえか。」

「お前露骨。」

「言いつつ、いつもいちばん鬼畜なお前だろー？」

これからまず何をされるのか察しがついてしまえば
和はさてどうしたものかと思案する。

あまりにも分が悪い状況だが、おとなしくしている気は毛頭ない。

気合を入れれば、床に座っていた身体をゆっくりと起こして立ち上
がる。

男達と英恵が、おもちゃをみるかのように楽しそうな顔を和へとむ
けた。

「薬は？」

英恵が男達を振り返って無表情に問えば、ひとりの男が微笑む。

「もちろん。でも最初に打つてもつまんねーし。」

「だなあ。泣いて叫んでくれなきゃ面白くない。」

「抵抗もされないんじゃ燃えないよな。」

「英恵、きつちりいちばん良いアングル探しとけよ。」

男の言葉に、英恵がわかつてるわよ、と答える。

その意味を正しく理解すれば、和は一瞬絶句した。

それでも無言でいるのは悔しくて、和はなんとか言葉を紡ぐ。

「あらあら、最低過ぎて一瞬言葉を失くしましたよ。」

西森英恵さん、同じ女性としてそれ程までの苦痛を私に強いるつもりですか。」

「そんなの。わかんないじゃない？そのうち気持ちよくなるかもよ？」

和は、その言葉にさすがにはらわたが煮えくり返りそうになった。

しかし怒りで我を忘れては、どうしたって隙ができてしまう。

そう考え、冷静の二文字を頭に思い浮かべた。

「いやあ、人生であなた方のような人種に初めてお目にかかりましたが

いるんですねえ。生きていても有害でしかないようなひとつて。

死んで良い人間なんていない、なんて都合の良い詭弁ですねえ。」

「…おい、無駄口もそこまでにしとけよ。」

和の言葉にさすがにかちんときたのか、男が彼女を睨む。

しかしかまうことなく、和は笑ってその視線に応えてやる。

「そもそも、人間が死んでも生きても、この世界はまわると思いませんか。

だからこの言葉にあんまり意味はないと私は思うんですよ。人間の尺度で言えば、

死んだほうが良いと感じるひとつつーのは案外多いのかもしれないが

それだつてどつちでも良いと思うひとが大半。

私もそのひとりでしょう。死んでても生きててもどつちでもいいひと。」

「……あなた、なにが言いたいわけ？」

眉を顰める男達に、和は大袈裟にため息を吐いてやる。

「死ねば歴史が変わるような人物であるとか、

生きてても有害分子にしかならないような人物とか、

そういうんでもない限り大半はどつちでもいいに分類される。

まあ、言うまでもなくあなた達は後者です。

と、するならば。

多くの人間が当たり前に与えられた権利を自ら放棄する、

ありえない程頭の悪い人間に成り下がっちゃってるね、どうしよう、

つていう人種なわけですけど、そのへんどう思います？

とここまで説明しないと理解できないあなた方の頭は大丈夫ですか？」

振ってカラカラ音がしないか確かめてみましょうか、手伝いますよ？と真顔で言う和に、今度こそ男達は顔を真っ赤にして和を睨みつけた。

「この女！ぜつてー手加減しねえ！！後悔すんなよ！！！」

言って、男達が団子になって和に襲い掛かってくる。
和はそれをひらり、と避ければ後ろ手にしていた手を前に戻して
ひとりの男に握っていたガラスの破片を向けた。

横一文字に軌道を描いた右手は、ひとりの男の顔にしっかりと傷を残す。

情けなくも悲鳴をあげた男が、
切れて血が出る顔を両手でおさえた。

「あらあら、モデルさんなのに変。
顔って傷が浅くてもけっこう血い出ますよねー。大丈夫ですか？」

距離をとりつつ和が声をあげれば、
四人の男は憤怒の形相で和をみつめる。

『うっわーまずいなあ。時間稼ぎがどんどん煽る結果に……』

頭の中でなんとか現状打破に努めようと考えるが
どうしても和にとつての時間稼ぎは
こういった類のものしか思いつかない。
そもそも相手に対して怒りしかわかないので、当然といえば当然だ。

「四人同じ方向に追いかけても逃げられるわよ！ 囲みなさい！！」

英恵の言葉に、和は内心舌打ちする。

さすがに馬鹿な男共とちがって、彼女はかなり冷静だ。

「っ、」

気付けば、握り締めすぎていたのか、自ら持った破片で和は右手を

傷付けていた。

だらだらと血が流れる。

和は仕方なくガラスを床へ放った。

重い足を悟られないように走って、

和は椅子をふたりの男めがけて投げつける。

男達は命中した椅子に倒れこんでうめき声をあげた。

そのあいだにまた迫ってくるあとのふたりには、

無傷な状態の左手足をつかって机をひっくりかえせば

思い切りその方向に叩きつけてやった。

さすがにそれは命中までいかなかったが、男達からまた距離ができて和はそう狭くもないフロアを右往左往逃げ回る。

しかし、それも束の間だった。

元々足を捻挫したような痛みがあった和はどんどんスピードが落ち、男連中も最初の頃よりはコンビネーションを駆使し和を追いかける。

「つつかまーえた！」

「鬼ごっこおしまいだよー！」

楽しそうに笑うふたりの男に、和は両腕を拘束されれば
悔しそうに顔を歪ませた。

「……さすがに、このまま何も知らされないのはあんまりだと思
います。」

息絶え絶えになりながら、和は真正面に立つ英恵へと顔をむける。

英恵は、背筋が凍るようなそれでいて今にも笑い出しそうな

歡喜に満ちた顔をしていた。

「…自分自身がこのあとどうなるか、知りたいということ？」

「ええ。それくらいは教えてくれても良くありませんか。」

どうせ、まともじゃなくなっちゃうんでしょ？」

「切り替えの早さには感心するわね、笹森和さん。」

「恐れ入ります。」

くすくす笑いながら、薄く小型の機械を和のほうへと英恵がむける。きくまでもない、あれはカメラだ。

和が男に陵辱されるその様を、彼女は記録するつもりなのだろう。

今日の格好は、Vネックのカーディガンにドレスシャツを合わせている。

ふたりは和の両腕をがっちり掴んでいるので、

あとのふたりのうちひとりが和の服へと手をかけようとした。

それを阻止しようと、和は足を振り上げる。

男はそれに苛立って舌打ちすれば、おい、と両脇の男達に声をかける。

瞬間、両肩を思い切り後ろへとひかれ、

踏ん張ろうとした足も掬い上げられてしまった和は

ほとんど抵抗できることもなく床へと押し倒されてしまった。

振り上げようとした足は、ふたりがかりでおさえつけられてびくともしない。

両手は、頭上でひとりの男に一纏めにされていた。

余った男が、今度こそ和のカーディガンへと手をのばす。

「……ちょっと、話してくれるんじゃないんですか？」

「大丈夫、脱がせながらも話は出来るよ。」
「…っ！」

言いながら、男が和の双丘へと手を這わせる。

服の上からでも遙以外の男に触られれば、全身はざわ、と鳥肌が立った。

「けっこう胸大きいっばい。」

「おい、ずりーぞ自分だけ。早く脱がせろよー。」

「あれ右手血だらけじゃないじゃん、さっきガラス握って切っちゃった？俺より深いんじゃないのー？俺もう止まったよ。」

「…それはそれは。良かったですね、唯一の長所がなくなるところでした。」

いまだに挑発するような言葉に、かっとなった男が和の頬を思い切り叩いた。

さすがに男の力でそんな事をされれば痛みで頭がぐらり、と揺れる。和は意識が持っていられないようにと歯を食いしばった。

「おーい、キレんなよ。この状況じゃあ

あと残ってんのなんて悪態吐くくらいなんだから。

俺、女の子の顔に傷付けるのは趣味じゃないんだけどー。」

「あーわかる。いくらんでも萎えるよな。」

「るっせーな。そんな強くたたいてねーし。」

「でもちよっと赤くなってんじゃないん。かーわいそー。」

けらけら笑う四人の傍らに、優雅に椅子に座る英恵が和の視界にうつる。

この状況で、いちばんまともではないのがこいつだ、と和は思えば今更震えだしそうになった。

「…これからどうなるか、だったわよね。教えてあげてよ。」

英恵の言葉に、四人がにやにやと笑う。

「これからー、まあ、俺達と楽しいことしてえ。」

ああ、そのへんはさすがに察しついてるよねー？」

言って、男はカーデイガンのボタンをひとつひとつ外していく。

和はなんとか抵抗しようとして身体を動かすが、

さすがに大の男四人に組み敷かれてはまったくかなわない。

「そのあと、すっごく気持ちよくなるお薬があるわけよ。」

それをね、君にたあくさんあげる。」

「そしたら今の君の意識なんてゼーんぶふっとんじやうよ。」

「そうそう。辛いとか、そんなの感じないから。」

「カメラは俺らの保険みたいなものだから、おまけだよ。」

綺麗に撮ってあげるからねー？」

ついに、シャツのボタンに手がかけられた。

ひとつひとつ外されるたびに、和は泣きたくなってきたがなんとか堪える。

なんとしてもこの男達の前で涙を流したくはなかった。

下着があらわになり、男達の顔がますますにやつく。

「わーほんとだ、けっこうあんな。」

「何気に肌もすべすべだし。…一期一会じゃもったいないくらい。」

その言葉に、英恵があら、と声を上げた。

「だったら飼ってあげればいいじゃない。この後は自由よ?」

英恵の言葉に、男達が興奮した声をあげる。

和は、英恵のような人間が本当に実在するのだということが恐ろしかった。

なにが、彼女をここまで駆り立てるのか。

「じゃあ、もう先に上全部剥いちゃおうぜ。」

その言葉に、ついに下着にまで手がかけられた。

和は、ぎゅ、と両目をきつくつむる。

『遙…!!』

こころの中で恋人の名を呼んだそのとき。

フロアに大きな音が響き渡った。

がん、という何度も同じような音が響いて

男と英恵の動きが止まり、意識がドアに集中した。

そのタイミングを逃すことなく、

和は腕と足を思い切り切ればたつかせて拘束から逃れれば、

目の前に座っていた英恵の手元にあるカメラに手をのばす。

次には奪い取ったそれを思い切り床へとたたきつけた。

「なにをつ!!?」

英恵が驚きに目をみはるが、かまわず和は何度もそれを床にたたきつける。

自分が襲われる姿を記録した媒体を残すなんて冗談ではない。
そう思えば和は夢中でそれを壊した。

しかし英恵は和にかまうよりも、ドアが気にかかったのか
そちらに視線を向けたまま立っていた。

男達とはいえ一応は拘束しようとする和にまた手をかける。

立った状態でまた腕をつかまれて、和ははなせ、と声をあげた。

やがて、けたたましい音と共に扉がふつとんで、

そこから複数の人間がなだれこんでくる。

「和!!!!!!」

呼ばれて和は目を見開く。

そこに居たのは、何度も心の中で助けを呼んだ人物だった。

第九十八話「大切なもの」(前書き)

すみません、ちょっと短いです。

第九十八話「大切なもの」

扉から何人かの人間がなだれ込んできたのはわかってはいたが、和がそのとき視界にうつしていたのは遥だけだった。

遥もまた、和しか目に入っていない状態だったのだろう。

一瞬放心したその状態は、しかしふたりにだけは随分と長く感じられたらしい。

お互いに同じようなタイミングで周囲の状況に気が付いたのか、呆然とした声で遥がもういちど和、とその名を呟いた。

「和泉君……………」

ぼんやりとした顔で、和も遥の名を呼ぶ。

遥と佐山だけではなく高明もいて、何故なのだろう、と首を傾げた。しかし、次の瞬間。

遥の顔が恐ろしい程歪められれば、鬼のような形相をみるみる広がらせる。

そんな顔をして和へと迫ってくるので、和は多少逃げたくなった。

しかし、それは彼女に向けられたのではないと和はすぐさま理解する。

両脇の拘束が突然に解かれたからだ。

あれ？と心の中で疑問に思い顔を左右に振ってみれば、

大の男ふたりが吹っ飛んでいた。

遥が、和を拘束していた男を物凄い速さで殴ったからである。

「和…？」

吹っ飛ばした当の本人は、なんとも情けない顔で和を見下ろしている。
不安そうに、目の前の彼女が幻なのではないかとも思っているように

和は安心させるために、遥の頬へと左手を滑らせた。

「笹森和ですよ、和泉遥君。…今回は本当に王子様みたいなタイミング。」

くす、と笑って言えば、遥は瞳を揺らし、和をその腕に閉じ込める。小刻みに震えながら、和の存在を確かめるように段々と抱く腕に力をこめた。

和は、あやすように背中をこすってやる。

やがて、遥がゆるゆると身体を離せば、一瞬固まるので和はどうしたのかと首を傾げた。

ばさ、となにかががぶせられる。それは遥が着ていたコートだとわかった。

素早く前のファスナーを上げられ、和の下着姿が隠される。

しばらく和の顔をじ、とみつめていると

遥は無表情で口を開いた。

「あの男達が、やったの？」

これまた抑揚のない一本調子の声がなんとも怖い。
和はそれを思えばどう言ったものかと狼狽する。

「え？いや、ええと、」

言いよどんでいると、なにかを発見したかのように目を丸くして表情を変えた遙に和は身体を揺らす。今の遙は、少し得体が知れない。

「……………頬が、」

震えて、遙が和の少し腫れた左頬をそ、と指先で触る。

和は慌てて両手をあげてたいしたことはない、と否定しようとしたがそれがいけなかった。

和の右手をが、と掴むと、出血するそれを視界にうつして凝視する。無言でハンカチを取り出すとぐるぐるとその手に巻きつけていった。

「あ、ありがとう。これはね、自分でやっちゃっただけで……………」
「他に、怪我は。」

遙は顔を動かしたり、両腕を持ち上げておろしたりと和の身体を検分し始める。

それは当然だが右足にもおよぶ。

遙がしゃがんでジーンパンの上からゆっくりと足を触り、やがて足首をゆっくりと持ち上げれば和は小さくうめいて顔を顰めた。

それに、遙は素早く反応する。

和を一旦抱きかかえ、椅子へと丁寧に座らせれば

遙は無言で和の靴を脱がす。

それは、痛々しいほどに腫れあがっていた。

「あの、これも自分の落ち度というか、」

「こんなに、怪我を。……誰が。」

「え。」

遥の瞳に燃えるようななにかが宿った。

部屋には、佐山と高明が一緒に乗り込んでいたので

逃げようとする男ふたりを拘束しているところだった。

問題は、遥が先程ふつとばしたふたりだ。

意識がもつろろつとしていたのか、

やっと起き上がった状態のふたりに、遥が無言で近付いていく。

「お前か。」

低い声で呟いた遥が、男を殴った。

痛みを歪ませた仲間を助けようと、もうひとりが遥に襲いかかろうとする。

しかしふたりめの男も、遥は無表情のまま蹴り上げた。

痛そうにうめくふたりを他所に、遥はどんどん男達を痛めつけていく。

「や、遥！だめ、そこまでしたら！遥、遥！！」

名前でも止まらない。

和は慌てて足を引きずり遥へと近寄るが視界に入らないのか男達を痛めつける手が止まらない。

和は、遥の腕を必死につかんだ。

「遙、私は無事だから！怪我はしたけど、本当の意味で傷付けられてはいない！間に合ったの、大丈夫だったの！」

だから、もうやめて、お願いだから！！」

和の言葉に、一旦彼の手が止まる。

しかし、次にはまたぎろり、と男二人をにらみつけた。

「こいつらは、和を襲った。俺が部屋に入ってきたときも

和の事を拘束してた。和の頬を叩いたのは、どいつ？」

「遙、だめ、やめて！！こいつらは拘束はしてたけど私に手をあげてない！！」

遙は、いまだ半覚醒のような状態で腕をつかむ和をみつめれば

ゆっくりと男の胸倉から手を外し、和へと顔をむける。

男二人は、完全にのびた状態で床に倒れこんだ。

「…和を、いちばん傷付けたのは、誰なの？」

「い、和泉君…」

あたりを見回す。

遙は、ひとりの人間を視界にうつした。

「ああ、忘れてた。首謀者は、アレだった。」

「和泉君！！だめ、やめっ…遙！！」

和のすぐる腕をゆっくりと外し微笑めば、

遙は無言で椅子を持ち上げる。

逃げようと扉へと走っているひとりの女性をみつめれば

遙はその女性めがけて同じように走る。

「……っお父さん、佐山さん！遙止めて！！！！」

その言葉に、すっかり意気消沈して座り込んだふたりの男から視線を外し

高明と佐山が遙のほうへと目をむけた。

しかし、信じられない事に、振り返って遙を視界に留めた英恵は、走っていた足を止めれば、じ、と椅子を持ち上げる彼をみつめる。

遙は、それになんの感情を動かすこともなく、

そのまま無表情で彼女めがけて椅子を投げつけた。

けたたましい音とともに、椅子が壁へと強く叩きつけられる。

遙は、その表情とは裏腹に随分と内に怒りをたぎらせているらしい。冷静ではない彼は、興奮し過ぎて照準がずれてしまったようだった。

倒れた椅子をちら、と横目でみつめ、ついで遙へと視線をむければ、驚いたことに英恵はにっこりと微笑んだ。

それがまた琴線に触れたのか、遙が英恵へと歩を進めようとする。

しかし佐山が、あわてて遙を止めようと彼の前に出れば

遙をなんとか押し込もうと両腕をつかんだ。

「遙、駄目だ！」

「どけよ、止めるな！！！」

取り乱して自身をみつめる遙に、英恵はもう一度微笑めば、

優雅な仕草で開きっぱなしになった出入り口から英恵は出て行った。

「待て！！！！！」

遙が吠えるような怒鳴り声をあげ、英恵を追いかけようとする。しかし佐山の腕はそれを許さずに彼の身体をおさえつけた。

「止めるなよ！あの女、追わないと！！！」

なおも暴れる遙に、佐山が何度も落ち着け、と声をかけるが耳にまるではいらぬらしい。

みかねた高明は、歩いて彼らに近付けば、佐山にどいて、と声をかける。

佐山が多少不安顔をしつつも、言われたとおりに遙の拘束を解いた瞬間。

痛々しい音がフロアに響き渡った。

高明が、遙の顔を拳でおもいきり殴った音だった。

がつ、という効果音がきこえ、目を見開く和を他所に、高明が遙を睨みつける。

「ばかやろう。あんな女追うのなんていつだってできるだろ。それこそ誰だってできる。」

でも、あそこにいる君の恋人はどうなる？」

「！！！」

「あの子は、強がってるけど相当怖い目に遭って、今かなり傷を負ってる。」

それをいちばん取り除いてやれるのは、誰だと思ってるんだ？」

少し悔しそくに苦笑しながら、遙の胸を拳でどん、といっかい高明が叩く。

「高明さん……」

「わけーな、遥君。俺らは、君が当然のように和を大切にしてくれ
るって

信じてるから役割譲ってるんだぜ？重要な場面で我を忘れて間違え
るな。

君にしかできないことをしてやって？」

高明の言葉に、遥はゆっくりとした動作で後ろに立つ和へと身体の
向きを変えた。

すると、和は顔面蒼白になって遥をみつめている。

『どうしてあんな顔……ああ、そっか。俺がひとを過剰に傷つけると
思ったから。』

彼女を甘やかすと、決めただけだったのに。

心の中でそう呟けば、遥は走って和の傍らへと立てば、そのまま彼
女を抱きしめた。

背中に腕を回し、彼女の温もりを確かめる。

「和……俺、間に合ったの？大丈夫だった？」

「うん、本当にありがとう。来てくれて嬉しいよ、和泉君。」

そ、と拘束した腕をゆるめて、和の顔を遥はのぞきこむ。

すると、心からの笑みで彼女が笑ったので、

遥も心底安堵して満面の笑みを返した。

そして何を思ったのか、遥が和の膝裏へと手を回せば
ぐん、とその身体を持ち上げた。

「わ、」

和は、突然浮き上がった身体に驚いて思わず遙の首へ両腕を絡める。いいかげん、俗に言うお姫様抱っこというものを自分はされすぎではないかと和は心の中で感じれば、和はなんともいえない気分になった。

「和、…ここまで危ないまねするとはなあ。」

「お父さん…ごめんなさい。」

苦笑する高明に、なぜいるのかと問いたかったが

和はまず謝罪が先だと思えば真つ先にその言葉を口にした。

高明が、それに首を振る。

「無事ならいい。俺は怒らん。」

ただ…依子と彩からの説教は覚悟しておけよ。

彩にはまだ知らせてないけど、必ず伝えるからな。」

「うう…はい。」

「依子が下にタクシー呼んでくれるから、遙君と依と乗って病院行つて来い。遙君、お願いね。」

「はい。佐山さん、高明さん、あと頼みます。」

遙の言葉に、高明と佐山がうなずいた。

和は遙に抱かれたまま、下へと降りて外へ出れば、外に立っていた依子が和の視界へとうつる。

和と目が合った瞬間、弾かれたように走ってきた依子になんともし訳ない気分を和は抱いた。

「和ちゃん…お母さん、今回はさすがにびっくりしちゃった。」

「う……ごめんなさい。」

「……………良かったわ、本当に。さ、乗って。」

依子にうながされ、和と遙は後部座席に、依子は助手席へと乗り込んだ。

運転手に救急病院へ運んでくれと言っている声がきこえて、了承したのか、車は程なくして発進した。

高明と佐山はどうしたのだろう。

ぼんやりとそんなことを考えながら、和は揺れる車内で無言になっていた。

和の怪我は、右手意外さほど重傷ではなかった。

少し腫れた頬は冷やせばすぐおさまったし、

足も捻挫程度で骨に異常はみられなかったようだ。

唯一右手だけが少々重症だったようで、

和は自分で傷付けてしまったが三針も縫う怪我をその手に負ってしまった。

遙と依子は随分と狼狽していたが

自分でしてしまったことだから仕方がない、とふたりに微笑んだ。

病院の帰りでは、どこから来ていたのかまた見知らぬ車がそこにあ

り、
見知らぬ誰かが運転していたが和は突っ込むのも疲れていて
おとなしくその車へと乗り込んだ。

それは、松永家が手配した臨時の迎えの車だったのだと、
あとから実花や遙の両親から教えてもらった話だ。

寝てていいよ、という遙の声に、和は安心したせい
かすっかり眠りこけてしまっていた。
起きた時は、もう朝になっていたのだった。

まだ完全に覚醒していない状態で瞼を閉じた状態であった和だが
それでも外が明るいらしいことはわかった。
どこかしらから、人工的ではないような光が感じられ、
小鳥のさえずりのようなものも聞こえる。

和はいつもの性質で一体何時なのだろうと思えば
小さく身動きをした。

「……………んんん？」

「和、起きた？気分はどう？」

その言葉に、うめいた和はゆっくりと瞳を開く。

「！！！？」

「あ、今日は寝惚けないみたい？」

くす、と笑う遙を、

和はしっかりと視界にうつして目を見開いた。

一体全体ここはどこなのだろう。

自分はなにをしているのだろう。

そう考えて、和は起き上がろうとするが、隣に寝ている遙がそれをやんわりと阻止した。

むかいあって眠っていたらしい遙は

にこにこ笑みを浮かべるばかりで、和は意味がわからなかった。

「ああ、ここね…大丈夫、和の部屋だよ。

昨日寝ちゃったの、覚えてない？」

「……………ええーと。」

目を多少さまよわせて、和は昨夜の出来事を反芻してみる。

しかしなんとも曖昧な気がして、和はどうしたものかと首を傾げた。

「身体もけっこう無茶したみたいだから安静にしてないとしたし

俺は俺でどーしても起きた時に傍にいたくて…

で、なんとか大丈夫だから隣で寝たらって依子さんと高明さんが。」

「……………相変わらずうちの親はすごいね。」

その言葉に驚くやら呆れるやらで和が苦笑した。

確かに、見回せばここは自分のベッドに部屋である。

起き上がろうとして、遙は慌てて起き上がれば

和が身体を起こす前に彼女の背中へそつと手をついて和を起こしてやる。

「ありがとう。…でも、重病人でもないのに。」

「いいの！俺、依子さん達呼んでくる。」

和、うるちよろしちゃだめだよ、足だって治ってないんだから。」

「…はいはい。」

上半身を起こしたまま、和は笑った。

ひとつ気になったのは服が眠る時に着るそれになっていたことだが依子が着替えさせてくれたのだろうと無理矢理納得した和だった。

和の部屋の扉を開き、廊下へ出ようとした遙が

なにかに気が付いたかのように声を発して和へと向き直った。

「そうそう、しばらくは俺、和の傍でできる限り離れないから。」

うっとおしいと思うだろうけどあきらめてね。」

「え。」

言っただけでつこりと微笑めば、遙は彼女の部屋のドアをぱたん、と閉めた。

和は遙の発した言葉の意味を正確に理解しようと考えたが

なんとなくあまりピンとこなくて、とりあえずのため息を吐いた。

『……………ていうか、和泉君学校どうしたんだらう。』

一日経ったのなら今日は月曜日だ。

高明もだが、仕事は大丈夫なのだろうか？そもそも今は何時だらう。

頭の中でそんなことを考えながら、

和はほんやりと虚空をみつめていた。

第九十九話「終息はいまだ」

けたたましい足音と共に、ひとがなだれこんでくる。
そこにいたのは、笹森一家であった。

彩までいるということは、昨日のうちに事情が話されたのだろう。
和は目を見開けばまじまじと全員の顔を見やった。
一様にみな、複雑そうな顔をしている。

「……………おはよう?」

首を傾げて一言、呟いた和の言葉に全員ががく、と膝を折った。

間違えたのだろうかと一瞬思ったが、
そういう意味でうなだれたのではないだろう。
恐らく間が抜けた言葉に呆れているのだ。

しかし、挨拶は基本じゃないのか、と和は心の中でひとり開き直る。

「和ちゃん、身体は?どこも痛いところはないの?」

「頬は……………湿布取り替えるか。もう大分腫れは引いたけど。」

「はあ!?!顔まで傷付けられたの!?!?どこのどいつよ!?!?!」

和!と慌ててベッド脇に座り込み、彩が和の顔を検分する。
さすさすと頬を優しく撫でる彩に和はにっこりと微笑む。

「全然痛くないから大丈夫。……………私、昨日からずっと寝ちゃったみたいだけど

今何時?お父さんと彩ちゃん、会社は?」

やっと疑問を口にした所で、全員が苦笑する。

「今日は半休とったんだよ。午後から出る。

お前が目覚まさないきゃまる一日休もうと思っただけだな…良かった。」

ぼん、と頭に手を置かれ、和は肩を竦めてごめん、と呟いた。

彩もため息を吐きながら馬鹿ね、と和に声をかける。

「妹が怪我して倒れたのに大学なんて行っただけでいいじゃないですか。」

私は今日一日ここに居るわよ。明日からはちゃんと行くから大丈夫。」

微笑んだ彩に、ありがとう、と和が返事をする。

「遥君もね、和が気にするかもしれないってわかっているけど、

どうしても一緒にいたいって学校お休みしたのよ。

あちらのご両親もそうさせてやってくださいっておっしゃるから…

明日からは遥君も学校に行くわ。」

「そっか…松永家の皆さんにも迷惑かけちゃったなあ…

さすがに今日むこうに出向くわけにいかないよね。」

痛くはない、と言ったが動かさなければの話で

和は先程ひとりになって足を動かしてみたときに

ズズズ、と自身の右足が痛んだのを感じたので、

しばらくは無理できないと思っていた。

「当たり前よ、きちんと治さないきゃ！」

今は朝の8時だから…まだ朝食ね。ご飯たべられる？」

「うん、なんかすつこいすいてる。」

「そう。じゃあ、こつちに運んでくるわね。」

しばらくはあまり歩き回らないようにしないと。

今日と明日は最低でも必ず学校を休む事。いいわね?」

「えー、明日からなら行けるよう。松葉杖もらってきたんだし…」

「和ちゃん。」

たしなめるような声に、和は観念して了承の言葉を口にした。

高明が苦笑いして依子の頬に右手をすべらせた。

「あんまりヒス起こすんじゃないぞ、依。じゃあ行ってくる。」

「いつてらっしゃい、きをつけて。」

両親は微笑み合って、部屋を出て行く。

彩と和は、お互い目を見合わせた。

「…こんな大きい娘がふたりもいるのに、相変わらずよねうちの両親は。」

「彩ちゃんはどつなのー?うまくいつてんの、進君と。」

「……………」

「あれ!?!」

そこで無言になると思わず焦った声をあげた和に

彩は慌てて両手を振る。

「べ、別にたいしたことじゃないのよ!些細な喧嘩っていつか…

むこうが悪いんだし私は謝ったら許してやるかくらいで!」

「……………彩ちゃん、まあ、いいけど…

あんまり意地張りすぎちゃだめだよ?お姉ちゃん。」

その言葉に、彩は若干口を尖らせつつも、うなずく。

少し心配ではあったが、まあ進むならば大丈夫だろう、と和は息を吐いた。

なによりふたりの問題であるのだし、外野が口を出しすぎるのはよくない。

和は少し困ったように微笑んで彩にうなずきを返した。

こんこん、というノック音がきこえて和と彩は扉へと視線を向けた。和はどうぞ、と声をかける。

「お話中でした？」

「いえ、大丈夫よ。」

顔をのぞかせた遙に、彩がにつこりと笑う。

机の上に運んだ盆をのせて、遙はそうですか、と首を傾げた。

「…遙君、間に合わなかったら一生許さなかったところだったわ。

まったくあなたは本当に勝負強いわね。和の隣に立つのが君で良かった。」

「…悔しいけどね。」

「光荣です。…それに、肝に銘じておきますね。」

遙の言葉に彩は肩を竦めれば、そのまま部屋をあとにした。

てつきり依子が来ると思っていた和は多少疑問に思いつつも身体をベッドから下ろそうと踏ん張る。

「ああ、いいよそのまま。移動するのもまだ痛いでしょう？」

「え、でも…」

戸惑う和を他所に、卓をベッド脇へと移動させた遙は

机にのせた盆をそこへと運ぶ。

そうして最後にはキャスター付きの椅子をころころとベッドの横、和のすぐ横へと持ってきた。そこに彼が座る。

この時点で若干嫌な予感はしていたが、和はまさか、と何度もその考えを振り払った。

「依子さんがね、昨日の昼間からなにも食べないで疲れて寝ちゃったし、て

具沢山のおじやにしてくれたんだよ。これなら食べやすいだろうから。」

にっこりと微笑む遙に、和もそう、と返事をする。

土鍋からお椀におじやをよそい、スプーンと共に遙がそれを手に持った。

「あ、ありがとう。じゃあそれもらおう………」

手をのばした和に、満面の笑みを湛えた遙が

和にとって死刑宣告のようなそれをついに口にした。

「あーん。」

和はその言葉に、みるみる顔を赤く染め上げた。

気が付けば、お決まりのあの台詞を口にしてしまっていた。

「だが断る……！！！！！！」

必死で叫ぶそれを、しかし遙はまったく意に介す事なく

もう一度あーん、と繰り返した。

きゆるん、と彼女の腹の虫が鳴る。

しかし、これを受け入れるのは苦痛の極みだ。

はつきりいって、恥ずかしさで死ねるなら今、命を落としてもおかしくはない。

大袈裟だろうがなんだろうが、それが笹森和という女子なのだ。

和はぎりぎりとお歯を噛みながら、とりあえず遙に伺いを立ててみることにした。

「あのですね…なんで私が子どものようにあなたからご飯を食べねばならないのでしょうか。」

「なんで敬語？」

「そこにつっこむんじゃねえ！」

首を傾げ疑問を呈した遙に思わず口汚い言葉で咬みつけば、遙はぶ、と噴出した。

「だって和、右利きじゃないか。」

「だからなんでしょうか。別にスプーン握るくらい大丈夫ですけど。」

「だあめ。万が一傷が開いたらどうするの。おとなしく従いなさい。」

「いえ、そんなご面倒をおかけするわけには参りません。」

「いやだから、なんでずっとそんな敬語なの。」

俺、むしろやりたいくらいなんだけど。助けたご褒美って、駄目？」

その言葉に、和は完全に詰まった。

遙になにも話すことなく危険に首を突っ込んでしまったのは和だ。ただでさえ心配性の彼の心労はどれ程のものであったか。きつと和が拉致されて無事に戻るまで、生きた心地がしなかったに違いない。

あれこれと遙の心情を察しようと努めれば、和はどんどん追い詰められていった。

怒鳴って罵ってくれたなら、こちらもまだすつきりしたのに。優しく迫られるなんて拷問だ。

苦虫を噛み潰すかのようなその苦悶の表情を、遙はじ、と見守った。和は、真っ赤になりながらもなにかを決心したのか、ぎ、と前を睨みつけ

ぐるん！と勢い良く遙のほうへと顔を向けた。

「……………お願いします。」

消え入りそうな声でそう言った和を、遙は目を見開いて数秒みつめる。

それこそ清水の舞台から飛び降りるくらい覚悟で言ったというのに無視するとはどういうことだこの男、と

心の中で悪態を吐きつつ真っ赤な顔で眉根を寄せる和になにを思ったのか、

その赤く染まる頬に遙が手を添えれば唇を寄せてきた。

寄せられた顔が近付いてくる速度は緩慢であったのに、

触れた途端に急変した荒々しいその口付けに、和はわけがわからず固まる。

力が抜けてゆるゆると倒れこむ背中を追いすがるように遙が和へと身を寄せてくる。

はじめ壁際へと向かっていたがあまりにも激しい遥の攻めに
ずるずると和の身体が下がっていく。
ついにはベッドに倒れこんでしまったが、その間もまったく離れる
ことなく
遥の口付けは続けられる。

鼻で呼吸しても間に合わず、和はなんとか呼吸しようと口を大きく
開くが

遥が舌を入れ酸素の入り口を塞いでしまう。

苦しさに喘いでも、部屋に響く生々しい粘液が混ざり合う音とあい
まって

艶っぽい嬌声のようなそれに取ってかわってしまい、
ますます遥の行動が大胆になるだけだ。

目がくらくらしして意識が遠のきそうになったころ、
なんとか自身の意思を伝えようと遥の胸を弱弱しく叩いた。

「……………っは、」

それが伝わり、やっと解放されたそこから呼吸をしようと
和は息を思いきり吸い込んだ。

遥はさすがにやりすぎたという自覚があったのか

半ばベッドに乗り上げてしまっていた身体を下ろすと、

ごめん！と叫んで和の頭を撫でた。

「うわー、ごめんねごめんね！！」

あんまりにも可愛くてキスしたいという欲求がおさえきれなくて！」

ぜえはあと忙しく呼吸をしている和に

遥は眉尻を極限まで下げて泣きそうな顔をしつつ謝罪の言葉を繰り返す

返す。

『ああ…あらん限りの罵詈雑言を浴びせよと思ったのに…』

そんなに謝られたらできないじゃないか、と胸中でうなだれつつ和はまだ少し荒い呼吸を整えつつも苦笑してみせた。遥がそれに安心したようにほ、と息を吐く。

「……相変わらず和泉君のスイッチはわからない。」

身体を起こすのを手伝ってもらいやつと食事、という所で和は首を傾げつつ呟いた。遥は、それに苦笑する。

「和ってそういうところはまったく計算してないからたちが悪いよ。…完全に天然じゃないぶん余計そうかも。」

俺は一生苦労し続けるんだろうなあ、と情けない声で呟きつつ、お椀とスプーンをその手に持った。和はそれになり声をあげる。

「…和泉君、ひとつお願いがあるんだけど。」

「え？なに？お腹すいてるよね？今更やっぱり駄目とか言わないでね!？」

「いや、そうじゃなく。」

「よかった。それじゃ、口開けて、あーん。」

にこにこ笑いながら言う遥に、和はそれ！と指差して叫んだ。

「その言葉、禁止。それを口にするなら絶対に食べない。」

お願いだから言わないで、恥ずかしすぎるから。」
「え？『あーん』？」

遙が首を傾げ再度その言葉を放てば和がぎゃあ！と叫び声をあげる。

「だから言わないでっば！よくもそんな恥ずかしい事が言えるね！！！」

おとなになった男女が一方の口に食物を運んで一方がそれを食すの
だって

恥ずかしい事この上ないのに！！！」

「いや、なんでそんなまわりくどい。

食べさせてもらうのなにがそんなに恥ずかしいの？

人前じゃないんだし、誰も見てないよ？」

「母親とか家族ならまあ、そこまでじゃないけど。」

「…ああ、俺が和の恋人だから？」

「わかってるんならきかないですよ！だってこんなの馬鹿みたいじゃ
ん。

みたいじゃない、馬鹿だよ。恋人にそんなことをされる女は馬鹿の
極みだ。」

ははははは、と濁いた笑いをもらす和に

遙はため息を吐いてわかった、と短く返事をする。

「わかったから、ほら食べて。冷めちゃうと美味しくないよ？」

「む。…いただきます。」

基本的に食べる事が好きである和は、依子の美味しいご飯が心底好
きである。

それを知っているからこそ遙はそんな言葉を口にする。

もう大分彼女の扱いに慣れた彼氏であった。

やっと癩癩を起こすことなくおとなしくなった和を

遥は可愛いなあ、と心の中で呟きつつみつめた。

更に、口元にスプーンを持っていつてやり

それを和がぱく、と食すこの一連の流れも、愛しさが募る瞬間だ。

「ふふふふふふ。」

我慢できなくて笑い出す遥に、和は狂った人を見るかのように
胡乱な目で彼を見やった。

遥が和のその顔に気が付けば、むう、と頬を膨らませる。

「だってしょうがないじゃないか！可愛いんだから！！」

「いや、何ギレ！！？わかったから、次食べさせていただいてもよろしいですか。」

「ああ、はいはい。」

一回食べさせられるともう開き直れたのか、

和は顔色も変えることなく二口目をねだった。

遥はにこにこしながら次も食べさせてやる。

遥のそれを受け入れ、咀嚼する彼女を遥はとろん、とした表情でみつめる。

「…今、和は俺がご飯を食べさせないと食べれないんだよねえ。」

「いや、なんとか食べられはするけど、」

「俺なしじゃ和は今生きられないんだよね。」

「いや、だから」

「ああー、超可愛い。俺なしじゃ生活できない和……」

物騒な発言の連発に頬を引き攣らせる和だったがやがて呆れきつたため息を吐いた。

「…和泉君は弱ってる私が好きなの？」

「そんなことないよ。早く元気になってほしい。」

「そう？」

「当たり前じゃない。痛がってる和とか見たくないもの。」

ただ、普段頼ってくれないから異様にこの状況が嬉しいだけだよ。」

ちよつと暴走した発言だったけど、と付け足して肩を竦めた遙に和はう、と短く声を発した。

確かに、今回の件ほどきちんと言に伝えておけばよかつたと思つたことはなかつた。

なんでも自身で処理しようとするのは彼女の悪い癖である。

「ごめんね、心配かけちゃつて。」

「いいよ。さ、食べて！」

「…うん。」

それからしばらくは会話もなく、もくもくとご飯を食べた。

咀嚼する和を恍惚の表情でみつめる遙が途中怖くなつたりもしたが基本的には右手もあまり使いたくなかつたしありがたかつたので和は食事を終えたときにお礼を言った。

目を丸くした遙だったが、むしろこつちがお礼を言いたいくらいだったよ、と

笑つて和の頭を撫でれば空の食器を下げに部屋を出て行つた。

そのとき。

どこからか着信音が鳴り響いて、和はん？と首を傾げた。
よくよく目を向ければ、

昨日奪われた荷物の鞆が、ベッド脇下、和の足元に置いてあった。
いつ返ってきたのだろうと疑問に感じつつ、

和は掛け布団を剥いで、右足首を使わないように四つんばいで足元
へと移動すれば

ベッド脇にある鞆へと手を伸ばした。

携帯電話を探し当て開くと、和はあ、と声をあげて電話に出る。

「もしもし！？もしかしてそっちにも連絡いってたの！？」

『ああ。元気そうだな。…昨日は運ばれて帰って来たって？』

「うん、ごめんね、心配してた？」

『いや…俺が知ったのは全部終わった後だったからな。』

無事だって聞いていたから。今回は随分危なかったみたいだな、ら
しくもない。』

「いやー、相手の執念を見誤ったよ。女の嫉妬ってやつぁーねえ。」

あはは、と声をあげる和に、電話口で広未がはあ、と呆れたように
息を吐いた。

『今回、俺はノータッチだったからいいもの…』

皆お前の無事を知るまで生きた心地がしなかったんじゃないのか。
和、お前は女だ。出来る範囲をきちんと把握して行動しろ。

ああいった状況下では性別自体が弱点になる。』

「わかってるってえー。でも男だと即死だったかもよ？」

『死ぬより辛い目に遭ったかもしれないぞ。』

「ああ…まあ否定はしないけど。うん、肝に銘じます。」

その言葉に、広未は声を立てて笑い出した。

『なんだ随分素直だな。さすがに心配をかけすぎたとへこんでるか。』

「わかってるのにそういう言い方どうかと思うなー。」

『ま、今回ばかりは仕方ない。へこむだけへこんだらいい。それじゃあ、そろそろ次の授業が始まるから切るぞ。』

元気な声で安心した。』

「ん、ありがとう。…じゃあまたね。」

和は電源ボタンを押し、ほ、と息を吐いた。

携帯電話を検分してみると、遙や佐山の着信がかなりの件数入っており

和は申し訳なく感じた。

メールも開いてみると、そこには雄大からの受信メールが一件あった。

目で追って読んでみると、今回の一件は彼には知らされていないらしく

和はそれに心底安堵した。

彼にはこれ以上巻き込まれて欲しくはない。

そう感じて、和を氣遣う彼の言葉にどう返事をすればいいものか悩む。

会ってすべて誤解だったと話すのはいいとして、

この怪我をどう説明したものか。

とりあえず、うまい言い訳を思いつくまでは保留にするとして

和は解決したと簡単に説明したメールを雄大へと送った。

こんなものでも、だんまりよりは幾分ましだろう。

和はひとつ息を吐き、そういえば事の顛末はいつ話してもらえらるだろう、と

ぼんやり考えていた。

そして一番気になっていること。

西森英恵は、現在どこでなにをしているのか。

みつけて報復をしてやる、というつもりもない。

ただ、彼女が今なにを考えているのか。

和は、何故かそれだけがひどく気になったのだった。

「和さん！良かったああああ！！！！」

「こら、実花。あんまり勢い良く飛びつくなよ！」

それこそ突進しかねない彼女を、遙が首根っこをむんず、と掴み止める。

和はそれを笑いながら見守れば実花に謝罪のため頭を下げた。

「ごめんね、実花ちゃん。随分と心配をかけたみたいで…」

佐山さんも、本当に申し訳ありませんでした。

松永家には全面的に多大なご迷惑をかけてしまつて…」

それに、佐山は慌てて頭を振る。
夕方になって、学校帰りの実花とここまで車を出した佐山が
笹森家へとお見舞いに来たのだ。

ここは、笹森家のリビング。

遙からふたりが見舞いに来ると聞いて、それならば、と
こちらへ移動してきたのだ。

階段は狭いからと拒否したのに、

問答無用で遙が和を抱き上げ下まで運んでしまった。

和はいいかげんこの扱いは恥ずかしい、と抗議したかったが
全員に無理してはいけない、と言われてしまえば黙るほかなかった。

「それで…改めて。」

昨日は結局、和ちゃんが目覚めてからって事で
皆さんに説明していなかったですし。

君を襲った四人の男、麻薬所持の現行犯って事で警察に引き渡した
よ。」

「………そうですか。ありがとうございます。」

ダイニングテーブルでは辛いので、和はテレビ前のソファに腰掛け
ていた。

隣には遙、向かいにはテーブルを挟んで座椅子に実花と佐山が座っ
ている。

台所付近のテーブルには、彩と依子が腰掛けていた。

和の言葉に、佐山が苦笑した。

「…お礼を言ってくれるの?」

「当然です。…もし、私を強姦しそうになったとして彼らを引き渡したのなら

私も事情を説明しなければいけません。

それが苦痛だろうと思ったから、

そういう理由で引き渡してくれたんじゃないんですか？」

まあ、麻薬所持も事実ではありましたが、と

付け加えて和が紅茶に口を付けながら佐山へと視線を向ける。

それに半ば呆れたような顔をしながら、佐山がほう、と息を吐いた。

「毎回、君には驚くな。罪をすべて償わせてやりたかったのに、と叱責されるかもしれないと一瞬でも思った自分がなんだか恥ずかしいよ。」

君のお父さんに娘さんが納得しますか、と聞いてみたら

笑うだけだったんだが…こういうことだったんだね。」

「すいません、あの父は無意味にもったいぶるところがありました。

まあ、人一倍こういった類のものは苦手ですんで、助かりました。

ネットニュースでけっこう話題になっていたので

まあ、私にした事への代償にはじゅうぶんだったでしょう。

顔が知られてるぶん、社会復帰は難しいでしょうし。」

和は、部屋に閉じこもって暇だったということもあり

ノートパソコンを立ち上げ何か目新しいものはあるか、と

某検索サイトのトップニュースをながめていた。

そこには仰々しい文字で、

人気絶頂モデル、相次いで麻薬所持で逮捕！という文字が躍り出ていた。

和が気になってクリックしてみれば、

昨日の男たちの顔写真が次々と出てきたので目を丸くしたのだ。

本当に、それなりに有名な人間であつたらしい。

「知ってたのか…うん、でも、納得してくれたのなら良かった。」

「十分です。本当にありがとうございました。…あの、それで……」

なんとなく言葉を濁したが、佐山はそれを察したらしい。

ああ、と呟けば、眉間に皺を寄せた。

「西森英恵は、まだ消息がつかめていないらしい。」

両親も、彼女はたびたびいなくなるのでそこまで気にしてないみたいだ。

まったく、お嬢様っていうのも本当色々だよ。」

「あら、佐山。それはどういう意味かしら？」

「私が仕える家のお嬢様は素敵な方でよかった、という意味ですよ。」

にっこりと微笑んで言ったその言葉に、実花は半眼になって佐山をみる。

やがて少し頬を染めて、ふい、と顔を背けた。

和はそれにおや、と思ったが隣の遙もそうらしい。

同じような表情でふたりを目に留めた遙と次に目が合って、

和と遙はお互いふ、と苦笑すればこの場でなにかを言うのは自重した。

「それで、捜している、ということは見つけた場合、

松永家では彼女に何を求めていますか？」

和の言葉に、佐山が難しそうな顔をした。

「うーん…逆に訊いてしまうけど、和ちゃんは？彼女をどうしたい？」

「……………」
「和？」

佐山の質問に、和は驚く程感情が動かなかった。

確かに彼女と会いたい、とは思っていたが
その後どうするのか。

彼女に報復のようなことをしたいのか。

考えても、よくわからなかった。

何事もなく終わった今、和は彼女に怒りの感情を抱いていない。
それよりもどうしてか。

彼女への純粹な興味のようなものが強いのだ。

「私は、話をしたいです。それから先、どうするかは
西森英恵さんにお任せします。」

言葉に、その場に居る全員が目を丸くした。

「和、何言ってるのよ！？その女、今回の首謀者なんでしょう！？
それなのに罪を償わせないなんて！」

「んー、そうは言っても証拠がないし……」

まあ、瞳さんが証言するんならある程度は罪に問えるかもしれない
けど……

多分、英恵さんは麻薬もやっていないだろうし。

ひどい事をされたんだろうけどあまり自覚がないというか。」

「いやいや！男をけしかけたのはあのひとなんだよ！？」

「あー…そうか、ビデオ回してたのもあのひとか。」

「はああ！！？」「」

和の爆弾発言に、彩と遙が同時に叫んだ。

そういえば、これは話していなかったと今更ながらに気が付いた。

「大丈夫、映像は壊したから。」

彼女に対して償って欲しいとかあんまりそういう感情ないんです。そうしたところで、彼女に打撃は与えられないって思っちゃうからなのか

よくわかんないですけど。

ただ、話してみてもそれからかな、とは思いますが。

松永家の皆さんが、実花ちゃんの件で彼女をどうにかしたいというのなら

私はそれを止めるつもりはありません。

怒りはないけど、かといってかばいたいという感情もないですから。

「

和……大丈夫？」

気遣うように遥が頭を撫でる。

和は、それにうん、とうなずいた。

遥には伝わってしまったかもしれない。

和は、彼女が怖かったのだ。

とてもわかりやすい気持ちで、彼女に恐怖心を抱いている。

しかしそれは、得体が知れないというよりも

彼女の心がどれ程深い感情を抱えているのか

その中身をしっかりと確認していないからなのだと、和は思う。

今回、遥がどれだけ女性に愛されてしまうのかを知って

和はそれを怖いと感じた。

彼の感情一切を無視したそれは、刃物を押し付けていると言ってもいい程、

遥を深く傷付けていると和は思う。

本当なら、彼のが余程傷ついているのかもしれない、だからこそ四六時中、大好きな恋人の傍にいたいのかもれない。和は、そういう怖いものの正体をはっきり知りたいと思った。二度と遥を傷付けたくないから。

そして、あるひとつの事が気になっているから。

『彼女は、自分と似ている。』

それを思うと、どうにも落ち着かなかった。

いつか自分も、彼に刃を向けてしまったらどうしよう。

馬鹿な考えかもしれないが、和はどこかその可能性が恐ろしくて彼女とどうしても対話してみたい、と思ったのだ。

今まったく怒りを覚えない理由も、

ひよっとしたら似ているからなのかもしれない。

そこまで考えて、和は曖昧な笑顔を遥へとむけていた。

第一百話「甘辛い半同棲生活・その6」

「ちょっと和！その怪我どうしたのよ!？」

「あれ、今日いつもより早いね。おはよう、梓さん。」

松葉杖をついて歩く和に、梓が目を見開いて叫んだ。

ものすごい形相の友人に迫られているのに、

和はいつもの調子で彼女へと挨拶を交わす。

そんな和に、当然といえば当然、梓は真っ赤な顔をして憤慨した。

「おはよう、じゃないわよ！」

私は、その怪我がどうしたのかって訊いてるんじゃないの!！」

梓に、和は苦笑いを浮かべる。傍らに立つ遥と実花も似たような顔をしていた。

「あ、佐山さん、わざわざありがとうございます。

晴臣さんと絹江さんにもよろしくお伝えください。」

「いいえ、とんでもない。それでは、お嬢様、いつてらっしゃいませ。」

「ご苦労様。」

ここまで実花と遥、和の三人を送り届けてくれた佐山が

松永家へと戻って行った。

いいと何度も言ったし、むしろ自身の責任で迷惑をかけたと考えていた和は

そんなことをしてもらう義理はまったくないと思っていた。

しかし、松永家の面々はそれを譲る事無く、

水曜日に学校を復帰すると知った佐山と実花が
笹森家へと車を走らせてやってきたのだ。

これは松永家当主の意向であると強く言い添えて。

頑として乗らないと言い続けたが、

ずっと玄関で押し問答しているわけにもいかず。

遙や両親にもせっかくの好意なのだから、と言われれば
渋々ながらもそれに了承したのだった。

なかなかどうして、ひとの好意を素直に受け取るのはむずかしい。

和は、自身の性格が難儀であることは感じていたが

それでも他人にうまく甘える事がどうしたって苦手だ。

なるべくならば自分で解決をしたいと思うし

出来る範囲でならやろうと考える。

それでも、自分の器を見極める事は毎回きちんとしているつもりだ。
出来なければ協力を請う。

頼らないのは美德といえはそうかもしれないが

抱え込みすぎればかえってひとに迷惑がかかる。

和は、その辺のさじ加減は間違えていない、と思っていた。

それでも今回こういう結果になってしまったことにひどく落ち込んで
だし

だからこそこれ以上借りを作りたくはない、と思っていたのだが…

自分の周りに立つ人間は優しい。

こんなずるく生きる自分を、周りは心配してくれる。

ある程度は甘えなければもっと迷惑がかかる。

わかっているが、和はどうしてもそれが難しい、と感じる。

現在の彼女の悩みの種であった。

「ちよつとね、階段から足踏み外しちゃって、
たいしたことないんだけど…」

実花ちゃんと居た時にした怪我だったから、

気を遣ってわざわざ車を出してくれたんだよ。ありがとだね。」

「私はなにも…お父様がそうしなさい、ておっしゃったのだし。」

実花が少し戸惑ったように笑う。

事情が事情だし、あまり漏らすのもよくないだろうと確かに思うが
梓は和の友人だ。

真実を伏せておいていいのだろうか、と実花は言いたいのだろう。

和は実花の表情に特になにを返すことはなかった。

「…嘘でしょう。」

「え？」

「右手も怪我してるみたいじゃない。何かあったんじゃないの？」

睨みつけるように梓に言われれば、和は心臓が跳ねた。

他人との距離の取り方は、難しい。

それがよくわかるからこそ、深い人間関係を築く事をしなかった。

しかし、手にした以上は、間違えてはいけない。

「ちよつと、ここでは言いにくいから。」

周りになんか訊かれたらとりあえずそう言っておいて。

今日、昼時間ある？」

「…話してくれる気があるわけ？」

「そりゃあ、知りたいって言われたら拒否するつもりはないよ。」

「……誰にでも訊かれたら話すわけ？」

「いや、そんなわけないでしょう。」

和の言葉に、怒り心頭に発する梓の顔から、
みるみるその感情が抜けていくのが和の目からもわかった。

「なら、いいわ。」

「え？」

「訊かない。その答えだけでいいわ。昼はいつも通り託斗と食べるから。」

遥、あんまり情けない彼氏ばかりやってんじゃないわよ。」
「わかってるよ！」

梓の言葉に隣に立つ遥が間髪いれずに返答した。

和はその様子にぶ、と噴出す。

しかし梓は、笑う和に近寄ればびん、と額を弾いた。
和がふいうちのそれに短く声をあげる。

「まったく、あんたって子は。」

時々本当に友達なのかと疑いたくなるじゃないの！

あんまり無茶するんじゃないのよ。」

「…へーい。」

「なにその気の抜けた返事は。」

「まあまあ。いいかげん教室行こうよ、寒いし。」

あ、でも杖ついてると時間かかるから、先行っていいよ？」

和のその言葉に、遥が無言で彼女を睨んだ。

「和、俺の言葉を忘れてない？」

「……………なんだっけ。」

「和の傍を出来る限り離れないって言ったはずだよ。」

ああ、と声をあげる和に続いて、呆れたように梓が声を上げる。

「いつもとどこが違うのよ。」

「梓、うるさい。四六時中いっしょなわけじゃないだろ。」

「…はいはい。松永さん、行きましょ。お邪魔みたいだから。」

「そうですね、そうします。」

完全に呆れた顔の梓と苦笑いを浮かべた実花がさつさと校舎へ歩いていく。

和はそれを数秒みつめていれば、やがて腕時計を確認し杖をついた。ゆっくりとした足取りで、校舎へと進んで行く。

遥が、少し心配そうな顔をしながら横に並んだ。

「…あの、そんな顔されると歩き辛いんだけど。」

「じゃあ抱っこしてあげる！」

「全力で拒否する。」

両腕をめいっぱい広げた遥が満面の笑みで受け入れ態勢だった。

和はそれを視界に留める事もなく前を向いたまま

こつ、こつ、と杖を打ち鳴らしながら前進する。

遥の耳にはそれがひどく冷たい音に聞こえ、

しかし足元がふらつく彼女が次には愛しくてたまらなくなった。

遥は隣に立つのはやめて、後ろを少し遅れて歩く。

じっと彼女の背中をみつめた。

昇降口につき、靴を履き替えてさあ次は難所の階段だ、と思っ
ていと

何を思ったのか、遥が無言で和から松葉杖を奪った。

わけがわからずに和が顔を顰めて遥を見やると、

もうすっかり覚えてしまったある事をする為に遥が動いているのが

わかる。

「やだ！」

慌てて拒絶するが、右足が使えない以上は派手な抵抗ができない。そんな彼女を慣れた手つきで遙が抱き上げる。

身体が浮き上がった和はみるみる羞恥心で叫びだしそうになったがそんなことをすればより一層注目を浴びてしまうとわかつているので真っ赤になりながら俯いた。

しかしその顔は怒りで燃え上がり、奥歯をぎりぎり噛みしめている。

周囲のざわめく声がきこえ、和はますます眉間に皺を刻ませた。

遙はといえば、相変わらず全く気にする事もなく涼しい顔をしている。

更には、あたりをぐるりと見回せば、

ひとりに視線を合わせてあろうことか声をかけた。

「ええと…佐々木君だったよね？おはよう。」

和を抱え上げた遙にっこりと微笑まれて、

呆然とその様子を見ていた佐々木が慌ててどもりながらも挨拶を返す。

『さ、佐々木君！！？』

クラスメイトに声をかけた遙を下からぎろり、と睨みつけるが

遙はそんな彼女にはかまわずに佐々木へと一歩近付いた。

「悪いんだけど、松葉杖持ってくれるかな？和のクラスだし、かま

わないよね?」

「あ、ああ…笹森さんの席に置いておけばいいの?」

「うん、おねがい。」

「わかった。」

視線を忙しくさまよわせながら、佐々木は松葉杖を抱えて足早に去って行く。

とてもじゃないがふたりと並んで歩くことなどできないと思ったのだろう。

正直、当事者であるが自分自身こんな風に校内闊歩なんて冗談じゃない、他人のふりをしたい、と思ってしまう。

自分相手に他人のふりもなにもないのであるが、誰かととってかわれるものならそうしたかった。

「和、すごい顔してるよ。」

「……………」

「怒ってる?」

「……………」

「ごめん。でも、階段は辛いでしょう?なるべく足に負担かけてほしくないんだよ。」

「万が一にもすべったりしたら危ないし。」

「……………」

彼の言い分は本当によくわかる。

しかし、和はどうしたってお礼を言えないと思った。口を開いて声を発しようとしても、なにかが詰まってるように音が出ない。

きつと和の心がそれを拒絶しているからだろう。

「いいよ、無理にお礼言おうとしなくて。
俺は朝から和を抱きしめられたし、和は恥ずかしい思いしちゃった
し、で

おあいこだから。ね？」

遙の言葉に、和はまたぎりり、と奥歯を噛みしめる。

こういうとき、途端に彼がおとなになるのはどうしてなのだろう。
まったく、普段は子どもか！と言いたくなる場面が山ほどあるのに、
やめてほしい。

これでは全面的に負けた気分になるではないか。

それでも和は、何事も口にするのはかなわなかった。

「いつやー、朝からすげえ面白いもん見ちゃった。

知ってる？えらい人数にムービー撮られてるよ。

チェーンメールみたいに学校中にばらまかれてるみたいだけど。」

げらげら笑いながら言う浩平に、和は知ってる、と息を吐いた。

ここは2・7の教室で、現在昼食をとっているところである。

どこかにふらりと行こうとしていた浩平が、

せっかくだし、と今最も校内で話題になっているカップルと

一緒にお昼をとることにしたのだった。

和の反応はどういったものなのか気になったらしく、
浩平はにやにやしながらその顔を和に向けている。

しかし注目される事を忌み嫌うその彼女は、何故か平然としていた。

おかずを咀嚼して一口お茶を飲めば、ごくんと喉が鳴った。

「らしいねえ。」

言っただけの彼女に、浩平は一瞬固まれば、
あまりにも意外なその反応に首を傾げる。

「……いいの？自分の顔が不特定多数の人間に見られるかもしれないの。」

「どうして？」

「え、どうして、て……」

にっこりと微笑む彼女のその顔がどうしても気になって

浩平は懐から携帯電話を取り出せば件の動画を開いた。

遙も気になるらしく、腰を上げて浩平の携帯をのぞきこむ。

「……………映ってない。」

「！？ちょ、俺にも見せる。」

浩平の言葉に、遙が電話を奪い取り動画を再生した。

見てみると、何故かその動画には遙の顔はばっちり映っているのに
和の顔がごとごとく隠されていて全く映っていないかった。

彼女はまるでカメラがどの角度から自身を撮るのかを想定している
ように

遙の身体に上手く顔を潜ませ、

防御しきれそうもないときには鞆を利用して自身の顔を隠していた。これでは顔はおるか、髪型さえもわからない。

「え、ちよつと待つて。…回つてる動画つてひょつとして、」

「全部、顔は映つてないはずだよ。」

「…なんで、」

「いやあ、なんとなくね。元々写真を撮られるの嫌いだからさ目の前でカメラ向けられるとすつごい逃げてたんだよ。

まあ、その成果、なのかなあ。

さすがに隠し撮りまではわかんないと思うけど。」

「……にしたつてこれはすごいな。」

はあー、と感心したように漏らす浩平のため息に、和は苦笑する。

そんなにたいそれたことをしたつもりもなかったのだ。

こんなに驚かれるとは思わなかったのだ。

「ま、出回り過ぎないように火消しもしてくれてるみたいだからなんとか大丈夫だとは思うんだけどね!。」

和泉君、さすがにこれ一回きりにしてね。毎回だと防ぎきれないし。

「……………」

「私の顔がインターネット上にさらされてもかまわないと?」

「絶対にもうしません。」

遙の即答に、和はにつこりと微笑む。

その様子をみれば、相変わらずだなあと浩平は苦笑する。

彼もまた、遙になにが起こったのか詳しく問いただすことはしなかった。

「……なんでこうなるの。」
「だーからあ。言ったじゃないか。なるべく一緒にいるからね、つて！」

「いや、そうかもしれないけど、さあ。」

和が今居る場所は、遥のマンションの一室だった。

金曜日の放課後、自分の家へ寄ってほしいと言われ

ひよっとすると事件のことでもなにか話でもあるのだろうか、と考えた和は

別段なにか拒絶的な言葉をいうこともなく遥に従った。

しかし蓋を開けてみればなんのことはない。

遥は和との半同棲生活を続けたい、と言い出したのだった。

「いいじゃないか、金曜日から月曜日の朝までなんだし。」

捻挫って一カ月くらいは経過見たほうがいらしいし

とにかく俺が安心し切れるまでは、この生活でいてもらおうから。」

「はい!!?」

すっとんきょうな声をあげた和に、遙がす、と目を細める。嫌な予感がして和が身体を強張らせれば、目前に迫った遙の顔が和の唇にゆっくりと口付けた。

それは、激しいものではなかったが

唇を甘噛みされればそれだけで和は羞恥心で赤くなる。それを見た遙が意地悪な顔で微笑んだ。

今、ふたりは赤いソファへと腰掛けている。

「俺が今回の件、ちーっとも気にしていないと思った？」

「う…、」

「俺が知らない所でもなにもかも進められて、気が付いたら恋人は拉致されていました、なんて。笑えない冗談だね。」

「それは、だから言ったじゃん。」

瞳さんの件を確定させてから和泉君に話そうと思ってたから…別に隠したかったわけでは、」

「写真が撮れた時点で言っても良かったんじゃない？」

変に義理立てするからそういうことになるんじゃないか。

大体、浮気なんてするはずないってわかってたでしょう?」

「そうだけどさあ…万が一ってこともあるし。」

「和。」

自身を睨みつける遙に、和はしかたないじゃん!と声をあげる。

「和泉君はモテるわけだし、実花ちゃんの一件とか岡元先生の一件

とかあるから

曖昧に終わらせて向こうはそうじゃなかったのでは、とか色々考えちゃって。

そうだったら相手の女のひとだっけと忘れられないでしょう？」

「…それは、そうかもしれないけど。」

だったらだっけで、俺にすぐ会わせてくれればよかったのに。

相手のことばかり気にして…和は時々お人好し過ぎるんだよ。

和には無理にでも引き合わせる権利があったんだから。」

「うーん…まあ、そうなんだけど。」

でもさあ。自分が彼女だったとしたらと思うとね。

会わせないでって言ったのに！て私をすごく恨んじやうかもだよ。

それなら穩便に済ませる方法を模索したいじゃん。」

「まあ…自分のだらしなさというか、不誠実が原因だったわけだし、俺は和を責めちゃいけないってわかってるんだよ？」

わかってるんだけど、と繰り返す遙が、横から和の顔を肩へと引き寄せながら

和の頭にこっん、と自身のそれをくっつけ、息を吐く。

「……もし、と思うだけでも怖かった。」

「！」

「生きた心地がしない、ってああいうことを言うんだなって思った。足元がふわふわしてどこに自分があるのかわからなくて。」

「和泉君……」

「もう、二度とこんな思いしたくない。」

ぎゅ、と強く肩を抱かれて、和は小さくごめん、と呟く。

顔を見たくて、和は遙へと向き合う。

すると遙も和を見つめていて、視線が絡み合った。

無言で遙が和を自身の膝の上へと導く。
こうして横抱きにして和を懐へおさめるのが、彼はどつちから好きらしい。

「…どこにもいかないで。」
「ん。」

瞳を揺らす遙に、和が短く返事をすれば、
彼女のほうから顔を寄せ口付ける。

遙は一瞬驚いたが、確かめるように和の頬へと手の平を添えれば、
そのままゆっくりと彼女の口腔内を探りはじめた。

「ん、ふ、……っ」

水音と、少し喘ぐような彼女の吐息が部屋いっぱいに響き渡って
どうしたって遙は自身の身体が熱を持つのをとめられない。

「……和、これ以上はちょっとまずい。」

「…珍しいね、遙がそんなこと言うの。」

「……っ！ちよ、煽らないで。」

足に負担がかかるから、なるべくなら抱きたくない。」

相変わらず、和が彼の事を名前で呼ぶのには弱いらしい。

しかしその言葉に、今度は和の瞳が揺れた。

遙はその意味がわからなくて、話してくれるのを待つかのように
無言で彼女の顔を見つめる。

「…あの、」

それに押されて、和は言葉を紡ごうとしたが、しかしそれは難しいようで、開いた口をすぐに閉じてしまった。それでも、訊かねばならない気がして無理強いはなるべくしなくなかったがなるべく優しい声色で遥は和？と名前を呼んでみた。

それにまた和の瞳が不安気に揺れる。

頑張つて言葉を続けようと、和は小さく深呼吸すればもう一度口を開いた。

「……………私、」

「ん？」

「……………大丈夫、かな。」

言葉の意味がわからずに、遥が小さく首を傾げる。

「あの、なん、ていうか。身体が。その……………嫌じゃない、よね？」
「嫌？つて？」

なんとか察してあげたかったが、あまりにも足りなくて遥は言い辛そうにする彼女が愛しくて何度も優しく頭を撫でた。

それに気持ち良さそうに小さく身動きをすれば、和はほづ、と息を吐く。

「ううん、そうだよ。こうして触れてくれるのに。

…一瞬でも馬鹿な事思っちゃった。」

「……………あの、なにを？つて訊いてもいい？」

「……………き、」

「きっ、」

「汚くは、ない、かな、と。」

いや、汚いというか、嫌じゃないかな、って。

私、四人の男の人に身体をおさえつけられちゃったし

その、ちよつとだけど、触られたりしたから…

そういうのって、自分の恋人がそうなたら、

ええと、その、和泉君は、触れるの嫌じゃないかって。」

和の言葉に、遥は目を見開けば、数秒程固まった。

『や、やっぱり言わなければ良かった…。』

一瞬でも、どうしても不安になってしまったのだろうか。

そんな事を気にするような、矮小な愛情を持っている彼ではないと十分わかつているはずであったのに。

和は深く自身の言葉を後悔すれば、慌てて言葉を続けた。

「あのね、一瞬思っちゃっただけでそうじゃないってわかつてるから！」

ごめんねやっぱり言わなきゃ良かったよね、そんな事言われたら自分の心を疑ってるのか！？って和泉君だっけむっとくるよね！！」

焦って必死に言い繕う彼女に何を思ったのか、

遥は無言で和を横抱きにしたまま立ち上がった。

しかし何度施されても、この身体が感じる浮遊感慣れない。

和は、毎回短い悲鳴をあげてしまう。今もやはり声をあげてしまった。

すたすたと無言で遥が向かう先は、恐らく和の予想と合致しているだろう。

扉を開くと見えるベッド。やはり寝室だ。

とてもゆっくりと、遙が和をそこに横たえる。

そうして遙もベッドへと乗り上げると僅かにぎし、と軋む音がした。

恐る恐るみつめれば、遙は怒気をはらんだその顔を必死に深呼吸して隠し、

次には満面の笑みを浮かべた。

とても優しいそれに、和の心臓が跳ねる。

「……ごめん、さっきのはね、どうしてあの虫共に

拷問のひとつでもしておかなかったんだろって思ってたから。」

「え、あの、」

「……一瞬でも、そんなことを思わせるなんて。俺、恋人として駄目だよ。」

「そんな、和泉君のせいじゃないよ!」

「ありがとう。……しばらくは、なにもしないでおこうって思ってたんだけど。」

「ねえ、和。言葉で伝えてもわからないだろうから、教えてあげるよ。」

なにを、と訊くのはあまりにも怖くて、無言でいれば

遙は優しい笑顔のままに、物凄い爆弾を落とした。

「和の身体のどこにも、汚いところなんてありはしないんだってこと。」

俺が、ゆっくり時間をかけて、教えてあげる。」

「!?!?!」

「黙って、愛されて。」

恐怖と歡言が混ざって、和はどんな顔をしていいのかわからなかった。

ただ薄れゆく意識の中で思ったことは、
墓穴を掘った、というなんとも色気のない言葉だけだった。

第一百一話「甘辛い半同棲生活・その7」

「和泉君、いーずーみーくーん。」

何回目かの遙の部屋で迎えた朝。

和はいつものように隣で眠る部屋の主より先に目が覚めた。ナイトテーブルに手をのばせば現在時刻は八時半。若干の寝坊である。

それでも、随分早く起きられるようになった、と和は思う。

遙との情事があった次の日は、いつも目覚めるのが遅くなるからだ。そこまで考えて、和は少々頬を赤くした。

『慣れたって思ったらなんかすごい居た堪れない…！』

揺すっていた手を一旦止め、自分の顔をぱたぱたと扇いだ後、和は息を吐いてすやすやと眠る彼をながめる。

こうやって起きない彼を見てみると、

和はいつも物語に出てくるプリンセスのようだ、と思う。

王女様というかなんというか。

それこそ王子様のキスとかで目が覚めそうである。

しかし和は、その役を自分がやるうという気にはならなかった。

万が一それで彼が起きたとしたら、朝からなにをされるかわからなくて怖い。

「んー…十時くらいまで起きないかもしれないな。」

平均起床時間はいつもそれくらいだ。

それだって、和が目を覚ましてもぞもぞと動いたり声をかけたりして

やっと遙が目を覚ます、というものだから
普段の彼の休日はもう少し遅い時間に始まるのだろう。

和はそれを考えて、起こせと言われたのもわかっていたが
あんまり自分に合わせてもらうのも申し訳ないと感じれば
結局遙を起こさずにベッドから抜け出せば、
足を引きずって少し不自由に歩きながらもシャワーを浴びる事にし
た。

着替えを持って、なるべく簡素にそれを済ませれば
和は冷蔵庫を開いて中をのぞきこんだ。食材らしい食材はない。
薄々気が付いていた事だが、どうやら遙は料理というものを一切し
ないらしい。

「…確か二十四時間の百円ショップあったよなあ。」

記憶では野菜類などの食材も売っていたはず。
頭の中で近辺の地図を呼び起こし、
少し迷ったが和は結局買物に出る事にした。
とりあえず、あまり荷物にならない程度に買えば大丈夫だろう。
そう思つて、空のリュックを背負いポケットに携帯電話をしまつて
一応は遙が起きた時の事を想定してメモを書き、
寝室へと戻ればナイトテーブルにそれをそつと置いた。
遙は、いまだ深い夢の中へと誘われているらしかった。
無邪気な寝顔についつい可愛いと思つてしまい
その考えを否定するのが和は大変だった。

部屋の扉をそつと閉めて松葉杖を持てば、和は玄関にて靴を履く。
鍵をかけることを忘れずに終えれば、
こつ、こつ、という杖の音を響かせてエレベーターへと歩を進めた。

「…今日はあつたかいな。」
「そうね。」

かえってくるはずのない返事に和は一瞬心臓が止まりそうになる。しかしそれを表に出さなかったのは彼女の矜持故なのか。なにより、隣に立つ女にそんな姿をさらしたくない、という思いが強いからなのかもしれなかった。

和は横目でちら、と見知った女性を視界にうつす。松葉杖であるため、体の向きを変えるのは面倒だ。するとその意図を察したのか、女性は横から正面へとわざわざ移動すれば

にっこりと和に微笑んだ。

「随分と情けない姿ね、笹森和さん。」
「勝利の代償ですよ、西森英恵さん。」

和の言葉に眉がぴく、と動いたことを見逃さずに視界に留めれば、口角をあげてなんとも嫌な笑いを顔にたたえる。和はどっちが悪役なんだか、と思いつつもにやついた顔で彼女を見やった。

「…まあ、そうね。認めるしかないかしらね。」
ここまでやって駄目だったんだからさすがにこれ以上は面倒だわ。」

英恵の言葉に、和はあらあら、と目を丸くする。

「案外潔いんですね。」

「一度負けた勝負はしない主義よ。それこそ完膚なきまで……って感じだし。」

……ねえ、私あなたにひとつ訊きたい事があつただけど。それだけ訊ければもういいわ。付き合つてよ。」

「ああ、かまいませんよ。私もお話したいと思つてたんで。」

その言葉に英恵がそう、と短く返事をすれば

和と英恵は近くの公園まで歩いてベンチに腰を下ろした。

寒いから、と自動販売機で買った缶コーヒ―は火傷しそうなくらい熱い。

英恵は特になにも買うことはなかった。

一度飲んでみたらお茶類はまずくて二度と飲みたくないと思つたらしい。

ジュース類は大丈夫だが、寒い中そんなものを飲む気にはなれないらしい。

「まあ、私も缶コーヒ―ってあまり美味しいとは思いませんけどね。」

一口飲んでも特になんの感慨もない。

うまくもまずくもないそれに和は無表情になつた。

その様子を数秒英恵が見つめていれば、やがて横から正面へと顔を向き直した。

ゆっくりと足を組んで、和を見ないままに口を開く。

「……ねえ、あの時のことなんだけど。」

「ああ、はいはい。なんですか？」

「随分タイミング良く遙達が助けに来たわよね。」

あなた、発信機でも付けてたの？」

「ああ…違いますよー、携帯電話です。」

いやだな、とけらけら笑って和が言うので、英恵は眉を顰める。

「…一応、ボディチェックもしたのよ。」

あなた携帯電話、二個も持ってるの？」

「いえ、松永家から支給されたものです。」

緊急時には電源を入れるように、という約束で。

折りたたみ式じゃないちよっと小型のやつをね、靴下の中に仕込んでたんですよ。」

言って、和は怪我をしている右足を持ち上げれば側面をとんとん、と二回叩いた。

「今、色んなサービス機能あるでしょう。」

その中のひとつに

契約すれば持ち主の現在地がかなり詳しくわかるサービスがあるんですよ。」

まあ、子どもの防犯対策みたいなもんですかね。」

私は松永家から渡されたそれでその契約をしていたんです。」

GPSに感謝ですねー。あの建物内に居る事までバッチリだったって言っていました。」

「それじゃあ、あなた、目覚めてすぐに電源入れたの？」

「いえ、西森さんが部屋を出てからです。」

途中までは、Nシステムを使ってある程度の居場所を割り出していたそうですから。」

「まさか、警察関係者に知り合いがいた？」

「そのまさかだったらしいです。私は知りませんでしたけどね。」

肩を竦めて苦笑する和に、英恵ははあ、と長い息を吐く。

「…最初から失敗だったのかしらね。あなたを貶めようとしたこと自体。」

「……………」

「あなたを失った遥がどうなるかなんて想像つくわ、今なら。使い物にならない、どーしようもない男になってたでしょうね。見たくもなかったからまあ、良かったけど。」

脱力して濁いた笑いを漏らす英恵に、和は顔を向けて声をあげる。

「あのとき、なんで笑ったんです？」

「え？」

「去り際。和泉君に向かって笑ってたでしょう？嬉しそうに。」

「ああ……まあ、くだらない心理よ。」

あの男は、女性を二種類にしか分類してなかったってこと。」

「……………自分になびくひとと、そうじゃないひと、ですか？」

「さすがね、勘がいいわ、笹森和さん。」

そ。…付き合ってきた女全員、あいつにとって異性っていうくくりしかない。

個人の人格なんてほぼ見てやいなかったのよね！。

まあ、自分の美醜にかなう相手ならば誰でもお付き合いしてたのよ。二股してないからってあれで誠実気取るんだもの、笑っちゃうわ。」

吐き捨てるように言った言葉に、和は首を傾げる。

「でも、あなたは…自分がどこか特別だと思っていたのではないんですか？」

「……………思いたかっただけかもね。結局私も変わらなかったのよ。あなたっていう特別な女性を見つけたら簡単に切り捨てられる存在だったわけだし。」

「だからね、躍起になったのはくだらないプライドよ。」

「プライド。」

「彼にとって私達は思い出しにもならない無のような存在なの。」

「それこそ、学校でミーハーにきゃーきゃー言ってる女共とそう変わらない。」

「私はそれがたまらなく嫌だったのよ。」

「……………」

「あのとき、やっと満たされたわ。」

「あんなに強い感情を彼からもらったのは初めて。」

「それがたとえ憎悪だったとしても、私は彼の心に引っかけた唯一の女。」

「友人でも嫌だったし、姉でも嫌だった。」

「女として、彼の心に残りたかったのよ。……………あなた以外の唯一としてね。」

「くだらないでしょう？」と自嘲しながら、英恵はゆっくりと立ち上がった。

「和はぼんやりとそれを眺めていたが、やがて慌てて声をあげる。」

「あの、鞆とコート！あなたが家の前に置いていったんですよね。」

「…ええ。さすがにもらえばなしもどうかと思ったのよ。」

「そうですか……………」

「遙は、どうしたって特別なひととして周りに扱われる男なのよね。あなたも、今回ばかりは痛感したんじゃない？」

「そうですね。私にとっては普通でも、」

「周りからしたらきつとそうじゃないんですよね。」

「…まあ、いつあなたも私みたいになるかわからないわね。」

自分の中には女の激情が存在しない、なんて思ってやいないでしょ？
せいぜい悩みなさい。世の女性が渴望する男を一人占めしている、
罰よ。」

きつぱりとした英恵の口調に、和は無言で眉間に皺を寄せる。
その様子に、英恵はふ、と口元を綻ばせた。

「ま、遙が選んだのがあなたみたいな女で良かったわ。
それこそ、完璧な美女だったら納得できなかったもの。」

「……そりゃどうも。」

「これでやっと未練なく将来のレールに乗れるわ。」

「じゃあね、もう二度と会いたくないわ。」

「気が合いますね、同感です。」

そうしてお互いにふ、と意地の悪い笑みを浮かべて
今度こそ英恵は公園をあとにした。

近くに車が控えているのかと思ったが、英恵は駅までの道を歩いて
いる。

その後ろ姿をぼんやりとながめながら、やがて姿がみえなくなると
和は真つ青な空へ視線をうつす。

缶コーヒ―は、その大半を残しているのもうぬるくなってしまっ
た。

もつたいたいと思いつつも、熱くないそれはどうにも飲む気になれ
ない。

それでも、和は捨てる事無くそれを一気に飲み干す。

「……まずい。」

口に出してみたら、なんだか妙にすっきりした。

腕時計をみると、あれから三十分経過していた。もう九時半になる。空き缶をごみ箱へ持って行かなければ、と思うのだが、松葉杖について公園のはしにあるそこまで行くのが面倒だ、と考える。

和はいつそ持って帰ってしまおうかと心の中で悩んでいれば、急に和の体から太陽の光が奪われ、陰る。

どうしてそうなったのか確認するのが怖くて、

和は後ろを振り返りたくなかった。

無視して気付かないふりをしていれば、

和の顔を上向かせ気持ち後ろへと傾かせる両手がある。

ぐぎ、という嫌な関節音がして、和はぐえ！と色気のない悲鳴をあげた。

「……………な・に・を、してるのかなあ？」

「……………おはようございまーす。」

顔を遥の両手に掴まれたまま、和はぎくしゃくと右手をあげれば、軽い雰囲気を出そうと緊張感のない声で朝の挨拶を試みる。

しかし遥は真つ黒な笑い顔を解除することもないままに、再度和へ質問をする。

「なにをしたのかな？」

「……………ひ、ひなたぼっこ。」

その回答に、遥はなにを思ったのか無言で和をみつめれば、次には屈んで和へひとつキスを施す。

休日の朝、しかも公園だ。いつひとが通るとも限らない。

和はあまりのことに目を見開いて固まれば、
遙がその彼女の反応に満足したかのように、にや、と笑んだ。

「最後のチャンスね。ここで、さっきまで、なにをしていたの？」

言葉を切つて遙の前髪が和の顔にくっついてしまいそうな程の至近距離にて

低い声で質問される。

和は流石に誤魔化しきれないと観念すれば、
ぐぐ、と遙の両手を自身の顔から遠ざけた。

「…西森英恵さんとお話してました。」

「……………やっぱり。」

「やっぱり？」

「俺の携帯にね、メールがきたんだよ。『公園』とだけ書かれた。
知らないアドレスだったけど多分そうかなと思って。」

「…そうだったの。」

遙はため息を吐いて和の傍らに置いてある空き缶を持ち上げれば
歩いてごみ箱へと捨てに行く。

戻ってきた足で、和の隣へと腰掛けた。

自身の足に肘をおき、頬杖をついて遙は和のほうへと顔をむける。
和は、そのまま横を向いているので上目遣いの彼と視線が合った。
下から見上げられるのは少し新鮮だ。

「どうして起こしてくれなかったの？彼女に呼び出されたから？」

「違うよ、たまたま。和泉君、何度起こしても起きないし、
冷蔵庫の中なんにもないから近くの100均に野菜とか買いに行こ

うと思つて。」

「で、降りてきたら彼女に話しかけられた、と。」

「そう。」

「……………なんでこんな所にいたんだか。」

「さあねえ。」

和は、ひよつとしたら、と考えていた。

それはあまりにも可愛らしい賭けであるが、悪くはないと思った。

たとえばの話だ。

和がひとりで出てきたら、諦める。

遙がひとりで出てきたら、諦めない。

ふたりがいつしよに出てきたら……………どうなっていたらうか。

その場合もやっぱり諦める、だったのだろうか。

しかしそれすらも推測の域でしかない。

もしかしたらただ単純にもう一度だけ、

遙に強い感情をもらいたかつたのかもしれない。

いずれにせよ、と和は隣の遙へと視線を向ければ

ふう、とため息を吐いた。

「…今回ほど、和泉君をスケコマシだと思つた事はないよ。」

「…というか悪い男だね、罪な男でもいいけど。なんというかハート泥棒的な？」

「……………彼女と一体なんの話をしたの。」

「ねえ、もしさあ。」

「ん？」

一度言葉を濁した和だったが、隣で見つめる遙の瞳があまりにも優しかったので、なんとなく口にしてみようという気になった。

「もし、和泉君が私に別れを告げた時、私が嫌だつて泣いて縋つたら、どうする？」

通り過ぎていった彼女達。

遙にとってはまさしく、彼女達でしかない。

しかしひとりひとりには名前があり、

また遙に傾けた愛情もそれぞれ違う形をしていたのだろう。

自分も、もし過去にされてしまったら。ひとくくりにされてしまったら。

和は一体、目の前に居るこの男になにを思うのだろう。

別れたくない、失いたくないと泣くだろうか。

そしてそういう感情を向けたとき、彼は自分に何を思うのだろう。

考えたら、つい訊ねてみたくなつたが

ひよつとしなくともこれはかなりうつとおしい質問だったろうかと考えれば

和は途端にどこか居た堪れなさを感じた。

「ごめん、やっぱり忘れて、今の」

なし、と言おうとしたときには言葉が遙の唇によって吸収されていた。

一度ならず二度までも、休日の公園でキスをするなどと

そんなうすら寒い事をよもや自分がやるとは思ってもおらず、

和は恋人である彼を気が付けば思い切り突き飛ばしていた。

ベンチの端と端まで距離があいたふたりの顔は
一方が真っ赤になつて顔を顰め、一方が半眼で口を引き結んでいた。
端的に言つてしまえば、羞恥にまみれた顔と不機嫌な顔である。
前者が和で後者が遙だ。

「…前提がありえない事には答えられないよ。」

「は？」

「なんで俺が和にそんな事言つての？」

もしかして言つてほしいの？」

「いや、なんでそうなるの！泣いて縋つたらつて訊いてるのに！」

「和が泣いた時点で抱きしめてるしキスしてるしベッド」もういいです。」

こんな暖かい日和の爽やかな冬の朝に、この男は何を言うのか。
和は右手で遙の口を覆えば、呆れながら彼の発言を止めた。

「！ぎゃつ！！？なんで手を舐めるの！！！！？」

生温かいぬくもりが手の平に伝わって、

和は思わず遙の口を塞いでいた右手をひっこめる。

遙は首を傾げてさもなぜそんな当たり前の質問をするのか、といわんばかりに

きよとん、と目を丸くする。

「和の手がおいしそうだったから。」

「馬鹿じゃないの！」

「馬鹿な質問するからだよ。」

「うわ、和泉君らしからぬ切り返しのうまさに腹が立つ！」

休日の公園に、明るい声がふたつ響き渡る。

笑うふたりの間にはなんの隔たりもないのだと思えば

和と遥はやっと心からの平穩を取り戻す事が出来たとお互いに感じていた。

「…さて、と。じゃあ買い物行こう。」

「荷物は俺が持つからね。」

「はいはい。」

「和？」

「んー？」

「俺の事、ずっと好きでいてね。」

「………まあ、確約はできないけど。」

「言うと思った。」

「でも、まあ。今の所はわかったくらいは言える心持ちではありますよ。」

その言葉に、遥が満面の笑みを和へとむければ、

立ち上がった和を松葉杖ごと抱きしめる。

ふいうちをくらった和が、からんからん、と松葉杖を落とせば

遥の抱く腕にはますます力が込められる。

すると先程は気が付かなかったすぐ傍の道を歩く人々が

抱擁する遥と和を凝視する。

その視線に気が付いた彼女はとにかく羞恥心で心をいっばいにすれば、

公園に、もう校舎内ではあまり聴こえる事がなくなった

懐かしいあの叫び声が響き渡った。

第一百一話「甘辛い半同棲生活・その7」（後書き）

作者体調不良につき、更新が遅くなりました！
大変申し訳ありません。

今回でこのシリーズは終了でございます。

間に私の憂鬱。の更新を挟んでから新シリーズ突入になると思いますが、
すので

開店休業。の新しいお話はしばらくお待ちくださいませ。

今シリーズも最後までお付き合いくださりありがとうございました
！

第二百二話「女三人寄れば…」(前書き)

申し訳ございません、お待たせしました！；
幕間のようなお話になったのでそういう扱いになっております。

第二百二話「女三人寄れば…」

「随分とお人好しだよねえ。」

「それ…彼女からも言われたねえ。」

苦笑する和に、遥は目を見開く。

学校の屋上にて寒い中、和と遥はふたりきりで晴天の空をみつめていた。

お昼ごはんを教室にてとったあと、話があると言われやってきたのはここだった。

なんとなく、和は言われることは予想していたのであるが的中率が100%でなんとでも笑えた。

いや、逆に笑ってはいけないのかもしれない。それだけ自分という人間が浅はかに思えてならなかったのだから。

一月ももう終わるといふ頃、右手の抜糸も終了し

どうやら綺麗に治るらしい事を医者から言われ周囲が安堵していた時の事だ。

随分とあちこちを放浪していたらしい西森家のお嬢様は

どうやら疲れたのか、はらをくくったのか、最後の自由を満喫したらしく

とても晴れ晴れとした顔で屋敷へと帰ってきたらしい。

報告の際にそこまで言われたのを反芻し、そのまま遥に伝えた。

しかし遥にとつたら英恵の晴れ晴れとした表情などどうでもいいらしい。

そうじゃない、と顔が如実に語っている。

和は、無言でわかってますとも、といわんばかりにため息を吐けば

その続きを話す。

「彼女がしたことは犯罪なんだよ？」

「わかってるよ。」

「わかかってない！」

「拉致されて監禁されて…強姦されかけ薬漬けにされそうになり？」

まあ、楽しい小旅行、とはいかなかったのは確かだね。」

「和。」

今の彼には冗談も通じないらしい。

あまりにも鋭い双眸をむけられ、

和はごめん、と小声で謝罪の言葉を口にした。

「でも、私わかつちやつたからなあ。」

「なにを？」

「彼女が、すべての罪を贖おうと決めた事。」

自由も、地位も、なにもかも捨てる覚悟をしていた事。

だからこそあつちこつち歩き回ってたんじゃない？

最後の青春を謳歌したかつたんでしよう。」

「………だつたらその通りにさしてやつたらよかつたじゃないか。」

「んー？ふふふ。」

私ねえ、自分のせいで誰かの人生が損なわれるのなんて無理なの。

だから事前に頼んでおいたんだ。

彼女がどんな罰でも受けますって言ってきたら

じゃあその罪悪感一生背負ってくださいと伝えてください、てね。

松永家の皆さんにも了承してもらおうまでちょっと時間はかかったけ

ど。」

「当たり前だよ！それは和のせいじゃない。彼女のやったことへの責任だ。」

「そうなんだけどー…」

もし彼女が親に捨てられたら困るじゃん。

まあ、娘可愛さに金にモノ言わせて圧力かけたり黙らせたりするかもだけど？

どっちにしる松永家に迷惑かかるし面倒だし。」

「だけど」

「遥。」

なおも言い募る彼に、和は究極の一手を放つ。

彼女はほんとうにずるいひとだ、と遥は思う。

たった一言で自分を黙らせてしまうのは、彼女だけなのだ。

「彼女はね、快樂犯罪者なわけじゃない。繰り返さない。

この先の自由も奪われたんだから、もういいじゃない。」

「自由？」

「正式に婚約したみたいよ？」

いよいよ親の会社の歯車になる決意をしたってわけだね。

…ま、幸せな結婚になるかもしれないけどそればかりはわからない。
「い。」

「……………そう、なんだ。」

「和泉君もねえ。お人好しだと思っけど？」

和が遥をのぞきこんでにやついた表情を作るので

遥は訝し気にその意味を理解しようとして彼女を見やる。

「今、同情したでしょう、英恵さんに？」

「！まさか」

「うーそうぞ。歴代の彼女達、それなりに愛情もって接してたんでしよう？」

報われないねえ、その他大勢と同じだったんだなんて言われちゃつてえ。」

「……それは、でも、当たってる部分はかなり大きいよ。」
「ふうん？」

「言っておくけど、和は違うからね。」

「わかってるよ、そんなこと。」

「さー、それじゃあ話はこれでおしまい！で、いいよね？」

「……………和にはかなわないよ。」

その言葉に和が音を立てて笑って、屋上の出入り口へと歩き出す。しかしそのまえに何を思い出したのか、遙は待ったをかけて和の腕を掴んで止めた。

「どうやってお人好しだって言われたの？」

「…報告の時に言われたんだよ。」

『あなた、呆れるくらいにお人好しね。…って笹森和さんに伝えてください。』

松永家で口調まで真似されて言われた。

そのときの事を思い出し、和はこみあげる笑いをおさえきれずにぶ、と噴出す。

「ま、和がそれでいいなら…これ以上俺はなにとも言えないもんね。」

「よく言うなあ。飯島瞳さんは随分と脅して帰らせたみたいじゃない？

次やったら社会的に抹殺してやるって言ってたってきいたよ？」

「佐山さんからきいたの？」
「たく、口軽いなあ…」

でも、帰り際これあげるつってビデオ渡したのはあのひとだからね。

「

「ああ…松永家でまわしてたビデオね。あれすごかったよね。私も見たけど。」

「あれみて自分の醜悪さにのたうちまわったら？って
にこにこしながら言ってたからね佐山さん。実花の事で相当キてた
んじゃない？」

瞳がなにか話したり暴れたときに証拠になるだろうと、
和が拉致され瞳が居たあのリビングでは、
なんと隠しカメラが回されていたらしい。
その事実にも和は驚いたが、あの豹変ぶりにも和は二重で驚いたも
のだ。

「これで解決…でいいのかな。」

「いいんだよ。そう言ってるじゃない。」

私がいいって言ってるんだからいいの！」

「うん。…そうだね。」

お互いに微笑みあって、ふたりは屋上をあとにした。

「にしても、珍しいわね。」

和が私と自ら出かけたいなんて言うなんて。」

「さらっと嫌味をどうもありがとう、梓さん。」

「別に嫌味のつもりはないわよ。私だってそんなに誘わないし。

まあ、嬉しくはあるわよ？ねえ、松永さん。」

「はい！女の子だけでお出かけて楽しいですよね！」

一月最後の金曜日。

本来ならば和は図書室に寄って帰る日なのであるが

遙には事前に今日は女子だけで遊びに行く、と連絡をしてあった。

本当ならばもう少し早く申し出たかったのだが

足もだいぶ普通に扱えるようになった今まで待たないと

出かけるにしても迷惑がかかるだろうと思ったのだ。

捻挫は癖がつくといけないので今の時期も油断は禁物だ、と

保険医である岡元からも釘を刺されていたが

経過は順調らしいので、無茶をしなければ大丈夫なようだ。

それでも、体育教師からは補講を受けてもらうかもしれないと

不穏な事を言われてしまった和であったが。

あくまでも「かもしれない」なので

とりあえず憂鬱な事は考えないようにしよう、と決めれば

和はにこにここと笑うふたりに気が付けば両脇に並ばれていた。

正直に言おう。真ん中は多少、勘弁してほしい。

容姿を気にしない、コンプレックスは持っていない、とはいっても

美女に囲まれるのは辛いものがある。

現に、周りの視線はなんとも痛々しい。

なんで平々凡々なお前がモデル並みのふたりと歩いてんの？と

その行き交う人々の顔が言っているようで

和はなんとも居た堪れなくなった。

「和、眼鏡と髪、とんなさいよいいかげん。」
「あう。」

そんな事を思ったからなのかなんなのか、
梓が和の髪ゴムと眼鏡を勢い良く抜き去った。
思わず立ち止まってしまい、

駅前を歩く人々は多少迷惑そうに通路を阻んだ三人をみつめている。

それに気が付いて、和含む女子三人組は
慌てて歩く事を再開した。

「梓さんたら姉御なんだから……」

「わけわかんないこと言わないのよ。ほら鞆にさっさとしまっ！」

「へい、姐さん。」

「和！」

ふたりの会話にしばらく目をぱちくりさせていた実花だったが
やがて面白さが頂点に達したのか、声を出して噴出した。
可愛らしい声で笑う彼女自身もまた、なんともいえず殺人的な可憐
さである。

道行く人々の視線を一身に浴びている当の本人は無自覚だ。
これでは佐山も苦勞が多かるう、と和は自分を棚にあげ
運転手の男に憐憫の情をもよおした。

梓も何を思ったのかぼん、と実花の頭に優しく手を置けば
諭すようにこれまた優しい声を発する。

「松永さん、そういうものはおきなさい。
出し惜しみしてこそいい女よ。」

「はあ…?」

「それじゃわからんと思います、姐さん。」

「あんたもいいかげんやめなさいよそれ。腹立つわね。とりあえず…目的の場所に着いたけど?」

その言葉にはつと気が付いたふたりは、歩いていた足を止めた。

「実花ちゃん、こんなところ来たかったの?」

「ええ!」

「来たことないんだったわよね?」

「ええ!!」

「私もあんまり来ないけれど…そんなに楽しいかしらね?」

「え?あー、梓さんもそうかそつちか。」

「そつちつてなによ。」

「いえなんでも。じゃあ入ろうか。」

実花ちゃん、煙草くさくなるのは覚悟しておいてね。いざ出陣!」

「はい!」

三人が突進していったのは、なんの変哲もないゲームセンターだった。

「和ってすごいわね…」

「本当！どうやってたらこんなたくさんとれるの？」

「いやあ…店員さんのおかげだと思う。」

UFOキャッチャーの戦利品をみて、和は苦笑する。

大きい袋ふたつぶんも取れてしまったのは、

実花と梓にでれでれだった男店員が

かなり甘めに中身を移動させてくれたからだ。

昨今、申し出れば落ちやすい場所などに景品を移動させてくれる店は少なくないが、それにしただって随分甘め過ぎる場所だった。

それでも実花は随分と苦労して、

何度も店員からアドバイスをもらってやっとひとつのぬいぐるみを獲得した。

かかった費用は……… UFOキャッチャー恐るべし。

「それにゲームもうまかったじゃない？」

「カーレースのとか、あとなんか叩くの…。」

「ああ、音ゲーね。まあまあ好きでやったりするからねえ。」

「和さんでできないことないのね、すごい…！」

『ただのオタクを褒められた…』

心の中で渴いた笑いを浮かべつつ、和はごくん、と飲み物を流し込む。

とあるファミレスにて、三人は休憩がてらデザートをつつきつつ他愛ないお喋りに華を咲かせていた。

「それより、今回私達を呼んだ理由、いいかげん教えてよ。」

「あ、私も気になります。」

向かいに座るふたりに興味津々の顔をむけられ、
和は顔に苦笑いを浮かべる。

「そーんなに重大ななにかがあるわけじゃないんだけどさあ…。」

「なによ?」

「和泉君ってさあ、どうにも罪な男って自覚がくない?」

いや、男性に対して無防備だ、とは私もよく言われるんだけどもさ。

「

「はあ?なによ急に。」

「昔の彼女達を見て感じた事なんだけど。」

皆言っんだよね。特別になれない彼の特別になりたいって。」

「……………」

「無神経かと思っただしけっこう悩んだんだけど」

こんなこと、ふたりにしかきけないかなと思って。ごめん気分悪く
した?」

申し訳なさそうに顔を顰める和に

梓はぎゅむ、とその鼻をつまんでやった。

「馬鹿ね、違うわよ。」

ひよっとして呼び出した理由って恋愛相談?

だったらそう言っつてよ、緊張しちゃったじゃない!」

「私も…無駄に焦って損した気分です。高原先輩、私の分もお願い
します。」

「ちょ、ふたりとも私のサドがうつったんじゃないの?」

「自分で言っんじゃないわよ!…ったく。」

ひりつく鼻を擦りつつ、和が涙目でそんなことを言えば

梓と実花はただ呆れるしかなかった。

「なによ、後学のためにつてやつなの？」

そんなにまとわりついていているわけ、遥の彼女達。」

「うーん、まあ…それもあるし知りたかった、のかもね。

柄じゃないんだけどさあ。」

「あら、別にいいんじゃない？昔の恋人が気になるのは

当たり前なんだし。きいてもあまりいい気分ではないと思うけどね。

「

「というか…なんて言ったらいいのかなあ。うまい言葉が見つからないけど。」

私は今までのひとは違うって何度も繰り返されるけど

それを信用していないわけでもないんだけど、なんか言い切られて

も複雑。」

和の言葉に、梓と実花はわからない、というように首を傾げる。

和は伝えたいことがどうやったらうまく説明できるのかがわからずに

もどかしい思いがする。

こんなとき、語彙がもっとある人間であったなら、と和は感じずにはいられない。

「昔の色々な女性遍歴を経て、今の和泉君があるわけじゃん？

だったらそれも彼の一部だと思うのに和泉君はどうもそれを否定するよね。」

私は今の彼だけを肯定して隣に居ないといけないのかなあ。

なんかそれも失礼な気がするんだけど。どうなんだろう。」

「…過去もひっくるめて彼を好きになりたいってこと？」

「んー…？いやそうじゃなくてさ…ああ、わかった。」

私ね、ちよっとイラっとしてるのかも知らない、和泉君に。」

やっと合点がいったのか、和はうなずきながら自身の未消化だった部分を噛み砕く。

自己完結しそうになってる彼女に、説明要請をしたのは梓だ。実花も、隣で面白くなさそうに拗ねた表情をしている。和はそれを視界に留めれば可愛いな、と単純に感じた。

「えーと、つまりさ。」

私とその他みたいに区分するけどそうじゃないじゃん。ひとりひとり、彼の中にはきっちり残ってると思うわけよ過去の恋人って。」

「…それを誤魔化されるのが嫌だど？」

「いや、本心もあるんだと思うよ。」

だからさ、そこが彼の罪なわけよ。」

「はあ？」

「和さん…申し訳ないのけどもう少し噛み砕いて…、」

「ごめんね、ちょっとまってね、整理中だから。」

総評するときは、和泉君でけっこう冷たい男認定されてるでしょう？

昔の彼女さん達に。」

「そうねえ…私もまあ、そういう評価をくだしたと思うわ。」

「でも、そんなわけない。」

和泉君で、優しいでしょう、女性には。」

「……確かに、ちょっと勘違いしそうになるときもあったもの。」

実花の言葉に、和はそう！と勢い良く指を差す。

和が言いたかった事の核心を突いたらしい。

「彼は優しい。自分のある一定より中側に認定した女性には特に誰彼かまわずじゃないよ、それじゃそれこそ天然タラシだし。」

「……………」

和の言葉に、梓が頼杖をついてなにやら考え始めている。どうやら過去の出来事を反芻しているようだ。

「懐に入らせたと思うから、皆彼を手に入れたと思う。でもふとした瞬間に気付くんだよ。まだ彼には壁があるということに。」

「！ああ……」

「そう、一層目が剥がれただけで、全部じゃないんだよね。でも女性のほうはさ、一回相思相愛になったって安心したわけじゃないん？」

優しくされて丁寧に扱われて心から喜んだのに急になに？みたいな。

「

「うわ… ちょっと古傷抉られた気分だわ、それ。」

「私の場合… 恋人ではないけど他のひとより特別だっという感覚はあったから

似たような痛みは受けた覚えがあります、高原先輩…。」

その言葉に、梓ががし、と実花の手を握った。

なんとも倒錯的な絵面ではあるが和はとりあえず流すことにする。

「その先にある本気が誰だっってほしくなる。

でもその頃にはすっかり壁が立ちただかってて、

それを壊そうと躍起になったところではいさよふなら、じゃあ…

確かにあとに残るのは冷たい男っつー印象になるよねえ。」

「…言われたら、遥と別れたきっかけてそれな気がするわ。

踏み込もうとすると逃げるから疲れちゃうのよね。」

そこから先も、和は口を開きかけてとめた。

さすがにここから先を言葉にするのはあまりにも図々しく思えて自重しようかと思ったのだ。

しかし梓と実花は、それを許さないらしく続きを催促する。

「全部言いなさいよ、気持ち悪いじゃない。」

「私、今日寝れなくなっちゃうかも。」

ふたりの気迫に押され、和は口を尖らせつつ渋々ながら続きを話す。

「壁を取り払う事に成功したのは多分私が初めてだと思う。」

「ちよつとなによそれ、盛大な惚気？嫌味？」

「だーかーら言いたくなかったんじゃない！」

「あら、でも。」

和さんたらやつと素直に遥の気持ちを受け取るようにしたの？」

「実花ちゃん……いや、まあ、うん。」

それはとりあえず置いといてさ。」

「あんたが言ったんじゃないの。」

「だからあ！続きがあるの！！」

彼女達からしたら、辿り着けなかったポジションに存在する人間が居るんだから

次は私がそこに取って代わる事ができるんじゃないのか？っていう希望ができたわけでしょう？」

和の言葉に、梓と実花がやつと納得したような顔がする。

「なによ、西森先輩と揉めた一件、

つまりは自分にも遥にも責任があるって言いたかったわけ？」

「ってやつぱり梓さん言わずとも察しはついてたんだね、怪我の原因。」

「当たり前じゃないの、少し前に名前聞いてて原因じゃないって誰が思うのよ。」

梓の言葉に、和はひとつ息を吐けば一瞬視線をそらす。

そうしてまた正面へと戻せば和を真っ直ぐみつめる梓と目が合った。

「ま、そうだよな。…うん、要約するとね。」

つつか、そういう気概であるの隣の隣に居ないといけないなって。

もちろんむこうに責任ないなんて綺麗事言わないよ。

でも、和泉君の無知は罪だし、

彼女達のそういう心を煽る存在の私も罪ではあると思うから

せめて正面から受けて立とうくらいには思っとかなきやなあ、って。

「でも、和さんに罪なんてあるのかしら？

今の話だと、単に遥が駄目な気がしてくるけれど。」

「そうよねえ？ 遥さえしつかりしてれば

悪戯に期待する女も増えなかったわよ。」

「いや、だからさ。私はうらやましがられるポジションにいるわけ
でしょ？

とりあえずそれは自覚せんとな、つつー話よ。」

和の言葉に、梓と実花はふむ、とひとつうなずいた。

「でも和さんはやっぱりお人好しだと思っわ。」

「私も同感ね。それに、和は重大な見落としをしてるわよ。」

「…見落とし？」

「和だけなのよ。遥を特別な男だと思わなかったのは。」

「！」

「彼を心底上等な男だと思っ隣に立つのは当たり前よ。」

だってあいつはそういう男なんだもの。

退屈しない会話も、さりげなく優しい所も、柔らかい仕草も、

キスとかその他諸々が上手いのも、

あの男が持っているものが全部そんな風に思わせるわ。
当然よね、遙は誰がどうみたって特別に素敵な男だもの。」
「…別に、顔の造作が美しいくらいは思うけど。」

和の言葉に、梓と実花が苦笑する。

実花にまでそんな反応をされたので和は少し目を丸くした。

「そういうことじゃないわよ。」

「美醜じゃないわ、和さん。それに遙をみて

かつこいと思わないほうがおかしいじゃない。」

「…うん？じゃあなにが違うの。」

「和は、いつだって遙を普通の男として扱うじゃないの。」

そこらへんを歩いている男よりはかつこいかもしれないけど
その程度のものでしょうか？」

「だって、無駄に顔が良い以外は普通じゃん。」

「周りの女性はねえ、そうは思っていないのよ。」

彼を特別な人間として扱うの。」

「……だから私は彼の恋人になれたと？」

「そういうことよ。しかも向こうからの猛アプローチ。

今までなら本当にありえないわ。あの遙が、って言われるわよそり
やあ。」

「……………ふーん。」

「ま、いつまでもそのままでないさい。ね、松永さん。」

「ええ。和さんらしくてすごく素敵だと思います。」

笑い合うふたりの言葉は、納得できても

それを理解するのはむずかしかった。

彼を上等な男だと思っ根拠ってなんなのだろう。

けっこう良く泣くし、落ち込むし、へたれだと思っのだが…

頭の中でそんなことを思いつつ、和はあ、と短く声をあげる。

「なによ?」

「実は訊きたい事ってそれだけじゃないんだよ。つーかこつちがある意味本題というか。」

実花ちゃんも、気が付いたことあったら教えて欲しくて。」

「ええ、それはもちろん。どうしたの?」

「あのね、最近ちょっと気になる事があるんだけど。」

少し言い辛そうにする和の言葉に、梓と実花はしばらく耳を傾ければそれからこらえきれずに盛大に笑ってしまった。

信じられない事実を和が耳にするのは、

彼女達の笑いがおさまって随分と経ってからのことであった。

第一百三話「彼女が白旗をあげるとき・その1」

和泉遙。

現在高校二年生、17歳。

誕生日は4月18日、身長184cm、体重70kg、血液型A型。さらりとした黒髪は絹のごとく滑らかで

吸い込まれそうな二重の瞳と合わせて妙な色香を放っている。

成績優秀、スポーツ万能、その他何をやらせてもそつなくこなす物語から抜け出た王子様のような存在。

他人にも物腰が柔らかく、特に女性には優しい。

普段から言葉遣いも丁寧なもので、

余程の事がない限りそれを崩さないが、親友である宮田浩平には碎けた口調が多い。

総合して多少女性性が漂う柔らかさがあるためか、なよっと思われていると思われがちだが案外喧嘩は強いようである。

女性関係は派手に噂になっっていないものの、

今までいちばん長く続いた交際歴も三ヶ月程度。

自分から別れを告げる事が多いが、そうではない時もある。

その後も曖昧に関係を保った元恋人も何人が存在する。

乱れているとまではいれないが女性遍歴はあまり誉められたものではない。

現在の恋人である笹森和は和泉遙自ら片想い期間が長かったと告白しており

前代未聞のそれは学校内外で波紋を呼んだ。

ふたりの交際は9月から始まっておりもうすぐ四ヶ月を記録する。

これは最長記録であり、和泉遙氏の溺愛ぶりからいけば

この先もつと継続していく可能性が高い。
特記する趣味はなかったが、
現在はその溺愛している笹森和を愛でる事が生きる理由であるよう
だ。

「……って何これ。」

目の前にある冊子をめくってそれを読んでいれば
和はなんともいえない気分で固まる。

本の形をしていれば他人のノートでも幾分か楽しめる自信がある彼
女だが

さすがにこれは楽しくないのか、その顔は引き攣っている。

「なにつて、遥のファンクラブの広報じゃない。

会員になると最初にもらえるまあ入門書みたいなものよ。」

「……………プライバシーとか、肖像権とか……………」

「あら、写真の一部、横流ししてるんでしょ？」

この中に入っているかもしれないわよ、提供してるものが。」

梓の言葉に、和はう、と短くうめき声をあげた。

現在、梓と和は朝の誰もいない教室で

和泉遥ファンクラブが非公式で配っている彼の情報と写真が掲載さ
れた

冊子をめくってながめているところである。

冊子は文庫本程のサイズをしていてやや小さめだ。

いつでもどこでも持ち運びたい人間が多いのだろうか。保存用などと称して何冊か余分に持っているひとは珍しくはないらしい。

そこまでの話を聞いて、和はどこか頭がくらり、とした。

「まさかこんな愉快なものが……」

「さすがにないわよ。なんていうか、遥ほどではないみたいよ。簡単なプロフィールくらいは出回ってるかもしれないけどね。」

「げっ… 個人情報の取り扱いにはかなり気をつけてるつもりなんだけど…」

そういうの得体が知れないから怖いなあ。誰が調べてるんだろう…。

「

「ちょっと和？あまり物騒な事考えるんじゃないわよ？」

そもそもまだ本調子じゃないんだから。」

「わーかってるってば。……しかし、やっぱり気のせいじゃないんだね。」

「ま、私も似たような扱いだからわかるけどそのうち慣れるわよ。」
「……はあ。」

顔を歪めて心底嫌そうな表情を作る彼女に、梓は苦笑いをする。

まあ、彼女のような人種にはそれこそ耐え難い苦痛といえよう。

まさか、こんな事態に陥ろうとは、人生とは時に不思議な事が起きるものだ。

和にとって、遥と交際を始めた時点でもう十分だった。

それ以上の不思議はもう起こらないだろうと心のどこかで思っていたのだが

目下、彼女を悩ませる頭痛の種はしかしどう解決するべきか、今回ばかりは笹森和にもお手上げな事案であった。

「…あれ、和まだ来てない？」

もうだいぶ人が集まった2・3の教室。

和の席が空いた状態であることに遥は首を傾げる。

足がすっかり回復してからは、朝は別々になった。

遥は相変わらず朝が弱いようで、

和もやはりいつもの時間に登校したいというので結局そうしている。

遥は若干不満であつたらしいがさすがにこれ以上贅沢を言うつもりもない。

そんなわけで、彼は朝一番に自分の教室へ行く前に恋人の姿を確認しようとする。

こちらにやってきたわけであるが、肝心の和がいないのだ。

すると前の席である向井がやはり遥と同じように不思議そうな顔をして

あれ？と声をあげた。

「さっきまで居ただけど…どこに行っちゃったんだろう。」

「あ、そうなんだ。ありがとう。」

遥は微笑をひとつ残して、教室をあとにする。

何人かのクラスメイトは相変わらずそれに見惚れていた。

「……………どこにいったんだろう。」

このときはまだ、遙はただ首を傾げるだけで済んでいた。

「…和が居ない。」

身体中から不機嫌なオーラを発し、遙は地を這うような声でぼつり、と浩平に呟く。

その言葉に、引き攣った笑みでぎぎ、と首を傾げれば、
なんでだろうねえー、と間延びした彼の声が響く。

遙はそれになんとか立てば、彼の頭を自身の手で力いっぱい叩きつけた。

「ちよ、遙！なんも知らないのに俺！」

「当たり前だろう、お前ごときが事情を知ってるなんてありえない。」

「だったら俺にあたるのはやめろ！」

頭頂部をさすりながら浩平が悲鳴のような声をあげれば、
遙はうるさそうに眉を顰める。

浩平はその扱いの酷さに若干本気で落ち込みそうになった。

「梓！和と今日会った？」

「は？なによ遙、今日会ってないの？もう四限になるわよ。」

「わかってるよ！でも毎回教室に行ってもいないんだって！」

「お昼になれば会えるんじゃないの？携帯は？」

「電源が落ちてる。」

「またなの？…たくあの子は……。でも来てるわよ、朝会ったもの。」

「会った？なんか話したの？」

それに梓が答えようと口を開いたそのとき、

教室の扉を開いた教師によって会話が途切れてしまった。

渋々席に着いた遙だったが、その妙な雰囲気は教師すらも圧倒するなにかがあり

2・7は異様な空気に包まれたまま四時間目の授業を終えたのだった。

「和！！！！？」

教室に飛び込んできた遙は、名前を叫んでみたがそれに返事はない例によって気の毒そうな2・3一同が、

終業の鐘が鳴って弾丸のようにどこかに飛び出してしまったことを遙に告げた。

それに短くお礼を言うと遙は先程の和のように勢い良く教室から走り出す。

とにかく彼女が出現しそうなスポットを片っ端から探す。

こうして和を探して校舎を奔走するのも一体もう何回目だろうか。

そう考えれば、苛立っていた心に少し笑いがこみあげもしたが、どこもかしこも空振りだとわかると今度は焦燥感が襲った。

知らぬうちに何かしてしまっただろうか。

ここ数日の自分を反芻して、遙は身に覚えがあるのかわからないのかよくわからなくなっていた。

そうしてため息を吐いてすっかり気落ちしてみても

結局和の居場所はわからずに

お昼抜きのまま、無情にも予鈴は鳴り響く。

戻って来た遥のあまりにも淀んだその空気は

教室全体を覆いつくす程に凶悪なものであった。

放課後の教室、止めを刺すかのように和の不在を知らされた遙はとにかく彼女を捕まえることしかもう頭には残っていない。

あてがはずれた図書室でも、ただならぬ遥の雰囲気には怯える人間多数で

高橋も少し顔が引き攣っているくらいだ。

「…なにかあったの？」

「ちよつとね。今日まだ和と会ってなかったから。」

「え、そうなんだ。…またなにか企んでるのかな。」

「……まあ、それならそれでいいんだけど。」

ため息混じりの遥の言葉に、図書室カウンターにいる高橋が疑問符の浮かんだ顔をすれば、遙が苦笑する。

「俺の存在を抹消したんじゃないかなければ、なんだっていいよ。」

「ああ…いくら笹森さんでもさすがにそれはないと思うよ?」

「だいたいいいけどね。…ありがとう。」

一日話していないだけで、こつも不安になる。
自主的にそうしているときはなんとも思わなかったが
こつも相手の心が見えないと苛立つものなのだ。

いつも事情を無理に訊こつとしない彼女を改めて尊敬した遥だつた
が、

自分には到底できそうもないその言動に、遥は呆れ自嘲していた。
どうしたつて、和の事になると分別がつかなくなる。

いやというほど自覚している心なだけに、

遥はこの暴走を早く止めてほしい、と馬鹿みたいに願っていた。

それをとめられるのは、愛しい彼女ただひとりなのだ。

「広未つて学校でそういう扱い受けた事あんの？」

「さあ…どうだかなあ。さすがにないんじゃないのか。」

「だよねえ。そんな漫画みたいだねえ。」

苦笑する和に、広未は無言でコーヒー入りのマグカップを渡す。
中身は当然ブラックだ。

ありがとう、と呟いて受け取つた和は

遥の思いを知つてか知らずか、呑気に広未の部屋にて
彼のデスクの傍らにある椅子に腰掛けていた。

「しかしお前：そんなことやってたらそりゃあ目立つだろう。」
「まあ考えてみればそうなんだろうけども。」
でもそれって全部副産物なわけでしょう？
和泉君と関わってなきゃ起こらなかつた事態だし全部。」
「だからってひとりになつてみたってどうにかなるか？」
「んー……。」

考え込む和に、広末は苦笑を漏らす。

久しぶりに訪問してきたと思えば、彼女はまた面白い事に巻き込まれている。

その大半は恋人である遙に巻き込まれてではあるが彼女自身がそうしなれば起こらなかつた結果だ。

それを思えば、どっちが呼び込んだのかはよくわからない、と広末は考えていた。

「しかし結局、そんな事をしてなにがしたいんだかな。女つてのは集団になるとますますわからなくなるな。」

「確かに……実害はまあないと思うんだけど……」

「まあ、周りにはないとは思うが。お前にはあるんじゃないのか。相当、迷惑な話だろう？」

「うん。…結局、和泉君と離れた所で收拾つかないのかな。そんなくらいしかいまんと思いつかないんだけど。」

考え込むように眉間に皺を寄せつつ、コーヒーを一口飲む和に広末はそうだなあ、と苦笑を返す。

「俺もなんともいえないが……とりあえず了承はとったのか？」
「ん？」

ベッドに登り壁に背中をあずけていた広末は

和の首を傾げるその仕草に一瞬嫌な予感が頭をかすめる。

「だから。遥君なんて言ってた？簡単に良いとは言わなかったろ？」
「……………あ。」

その言葉に、嫌な予感が確信に変わってしまった。

広未は顔の上半分を手の平で覆えばおい、とうなり声をあげる。

「お前：なんも言っていないのか？」

「だって、和泉君なんにも言っていないから…忘れてて。」

「そりゃあ、話す前に実行されたら確認しようもないだろう！」

「そうだけど！納得いかなかったら連絡くるでしょ？」

メールなり電話なりしてくれば別に出るんだしさあ。」

口を尖らせる和に広未は一瞬無言になれば

次には半眼になって和に視線を向ける。

「お前：そういうえば携帯電話はどうした？」

「え？」

「今日。ここに来るのもなにも連絡なかったらう。」

「つかったのか、今日一回でも。」

和の姿は制服のままだ。

恐らく学校から直にこちらに寄ったのだらうと広未は考えていたがそれはそのとおりだった。

わざわざ家に連絡せずとも、

図書室解放日である今日はいつもより帰宅時間が遅い事を

依子はよく知っているのになにも考えないままに

広未になにか知恵をもらえないか、と考えた和は

ここに足を向けたのである。

そうして和は反芻してみる。今日一日の自身の行動を。梓と朝に会ったのは、偶然だった。

金曜日に質問した事を気にかけていてくれたのか、わざわざ遥のファンクラブの広報を取り寄せて持ってきてくれたのだ。

それをながめたときも、もちろん電話は使っていない。特別なにかで待ち合わせをしたわけではないからだ。

和はしばらく考えてその事実には驚愕すれば一瞬固まり、次にはぎ、と顔を蒼褪める。

慌てて上着、カーディガン、スカートのポケットをまさぐるがどれも空振りだ。その存在は確認できない。次いで、和は通学鞆を取り出した。

中身を確認しようと鞆を開き中を検分する。そこでやっとはっきりと判明した。

「……ない。」

「と、いうことは？」

「家に携帯電話忘れちゃってたみたい。」

ははははは、と濁いた笑い声をあげる和に、広未は呆れた顔をすれば盛大なため息をつく。

「お前の未来を予言してやろうか。」

「…そんなの私にだってわかるよ。」

「そうか。じゃあどう思う？」

「えー、と。まず、しばらくしたらこの家の呼び鈴が鳴る。」

その言葉を待っていたかのように、津田家全体に玄関の呼び鈴が鳴り響く。門の前に誰か訪問客がやってきた証拠だ。

和と広未は、そのあまりのタイミングの良さに一瞬肩を震わせたが次にはもう広未が嫌な笑みをその顔にたたえていた。

「なるほど。じゃあ次は？」

「言いたくない。」

「まあ、だろうな。」

ふたりして部屋の出入り口である扉へと顔を向けていればけたたましい足音が近付くと共にその扉もかなり乱暴な力で開かれる。

そうして開いた扉の先に居たのは、男だった。

和は、それが本当に自分の知っている人物であるか、と誰かに訊きたくなくなった。

そこには物凄い形相をした遙がこれでもかというくらい不機嫌なオーラを背負って立っている。

「和！……！！！」

怒鳴られたその声に、部屋全体がびりびりと振動するのがわかって和はわかっていたのにもかかわらず、あまりの事に驚愕して固まっていた。

『ああ…連行される。』

馬鹿な自分を呪いつつ、言い訳させてくれる時間は与えられるだろうか、と

目の前の恋人を視界の真ん中に留めながら和はぼんやり考えていた。

第一百四話「彼女が白旗をあげるとき・その2」

「えーと…おはよう?」

気の利いた言葉がこういうときどうして出てこないのだろう。和は追い詰められた状況で頭が働かない自分にいつも呆れる。

少し前に略取・誘拐罪に相当するような出来事に巻き込まれたわけだが

そのときの頭は良くまわっていたのではないか、と和は感じる。どうにも、完全にキレているような彼を目前に映し出すと冷静さを欠く。

このあとどう扱われるのかが未知数だからかもしれない。

和の言葉に、遥がにつこりと微笑む。

しかし妙な禍々しいオーラは増す一方だ。

「今はもう午後四時だけど。朝のあいさつをするのはどうしてかな? ああ、今日はまだ一度も顔を合わせていないからだね。」

遥の刺々しいその言葉に和はひく、と口角を引き攣らせた。

広未はといえばちらりと横目でうかがえば笑いをこらえている。

ああ、こんなときでなければ校門の君と大声で呼んでやりたい。

なんなら塩澤に面白いネタがあるとメールしてやろうか。

不穏な考えを頭が過ぎった所で遥が和、と名前を呼ぶ。

その声に反応して遥へと再度神経を向ければ

とても冷えついた顔をしているのに燃えるようなその瞳に

和は心臓がおかしいくらいに跳ね上がった。

怖いと感じるのは、あまりにその顔が美しいからか。

「どういうつもりなのか、ゆっくりと説明してもらおうよ。」

「別に、わざとじゃないって。たまたまだよ、たまたま。」

「偶然？今日ずっと俺と会わなかったのが？」

「そ、それは偶然じゃないけど。」

「へえ？じゃあなにがわざとじゃないって？」

「携帯電話は、忘れちゃっただけ。狙ってないからね！？」

「そう。じゃあ、とにかく帰るよ。」

「……………わ、私の家だよな？」

「俺の部屋のが良かった？」

その言葉に、和が思い切り首を横に振る。

遙は眉間に皺を寄せて和の顔をしばらく見つめれば、
和の鞆を持ち上げてため息をついた。

「広未君、毎回押しかけるように入ってきちゃってごめんね。
お邪魔しました。」

「あ、ちよ、和泉君！広未、またね！」

自身の鞆を人質に取られ和が遙の後を追う。

慌しく部屋をあとにするふたりを見送ったあと、広未はしばらく何
事かを考えれば

携帯電話を取り出してどこかに電話をかける。

「…声が聞きたくなかった、なんて言ったらどんな反応するんだかな。」

□

相手が電話口に出る前から、そんな意地の悪いことを考えつつも、彼の顔はなんとも優しい表情をしていた。

「ただいまあ。お母さん、ちょっと上で和泉君と話すけどお茶とか大丈夫だから。」

「依子さん、こんにちは。」

「あら、遥君。お夕飯食べていく？」

「いえ、今日は。」

「あらそう？残念ねえ。ゆっくりして行ってね。」

リビングでテレビを眺めていた依子の顔が少し残念そうに曇ったが、なんとなくふたりの妙な気配を感じ取ったのか、そのままにつこりと微笑んでまたソファに落ち着いた依子であった。

和と遥は二階の部屋へと上がり、扉を閉める。

自分の家だと思つと大分冷静になれるのはありがたい。

和は一回小さく深呼吸し、ベッドに背中をあずけ地べたへと座りこんだ。

遥は、正面にあぐらをかいて座れば、じ、と和を見据える。

その瞳が妙に真剣で、和は少し怖かった。

「あ、の……」

「今日一日、俺と顔を合わせなかったのは意図的だって言ってたよ

ね。
どうして？」

遙の言葉に、和はそろり、と視線を泳がせる。
隠し立てするようなことではない。
けれども言つて納得してくれるかわからない。
そう感じれば、彼女の心は揺れていた。

「……ちょっと、学校ではもうあまり顔を合わせたくなくて。」
「……どうして。」

「最近ずつとべつたりだったでしょ？ちょっと嫌だったっていうか……
自分の時間が欲しいし。放課後や休日はけっこう会ってるんだし
そろそろ学校では別行動でもいいんじゃないかなって。」

「だから、今日一日俺を遠ざけた、と？」
「和泉君だつて、そんな四六時中べつたりしたつてうつとおしい……
でしょ？」

宮田君とかと会話だつてあまりしてないし「和。」

呼ばれて、彼女の肩が大きく揺れる。

遙はふたりの体ぶん距離がはなれているのがもどかしく感じれば、
彼女の腕をぐい、とひっぱった。

立て膝をついたような姿勢になった和は、
ひっぱられたことで一瞬バランスを崩しそうになり慌てて遙の肩を
つかむ。

遙は両足の間に和を置けばその状態のまま腰をつかんで和を留まら
せる。

いつもは見上げる遙の顔を見下ろしていて、
和は新鮮だと感じたがそれも一瞬の事だった。

あまりにも鋭い視線が下から注がれていてなんともいたたまれない。ふたりの距離はほぼゼロだ。

顔はそんなに近くないが身体はぴったりとくっついている。和は腰を抱え込まれてなんとも落ち着かない気分になった。

「……さっきからどうして目を逸らすの。なにか嘔吐してる？」

「別に、本当の事しか言っていないけど？」

正直、先程言ったのは和の本心といえばそうだった。

最近は色々なことがあってあまりにも共有する時間が多い。

うっとおしいとまでは言わないが、

もうちょっと離れてもいいんじゃないだろうか、という思いは幾度か和が抱いてきたことだった。

「……じゃあ、俺から離れたいのは事実なんだね。」

「え、……ま、まあ。ほら、今までが一緒に居すぎたし。

もうちょっと距離を保ってもいいでしょ？」

「和は、楽しくなかった？週末ずっといっしょにいたこと。」

遙の言葉に、和は一瞬言葉を詰まらせたが、ゆっくりと口を開いた。

「楽しかった、よ？」

「だったらいいじゃないか。別ににも変える必要なんてない。」

「でも、必要以上にいっしょにいる理由なんてもうないんだし。」

「和。恋人が寄り添うのに理由なんてないよ。」

むしろ、俺は今でも必要だからいっしょにいたいんだ。」

「……………」

やがて和が押し黙ってしまつと、下からため息がきこえる。

和はそれに反応して身体を揺らせば次には腰から遙の腕が外れてい

るのがわかり
ゆっくりと立ち上がれば和は遙から一步、後退した。

遙も、なにも言うことなく無言で立ち上がる。

「……学校だけ？」

「え？」

「学校で、あまりいっしょにいたくないってこと？」

「……………うん。」

「俺を徐々に避けていくつもりじゃないよね。」

「……………うん。」

質問の意図が理解できずに眉を寄せる和をちらとみつめて

遙はいったん開きかけた口を嚙む。

何事かを言いたいのだとわかるのに、苦しそうに耐えているような表情をする。

和はどうしてもそういう表情をされると弱い。

遙がなにを考えているのかは図りかねるものの、和は彼の顔を見て苦しいと感じる。

「……………和。」

遙は目の前の和が泣きそうな顔になっている事に気が付けばゆっくりと頬に手を添わせる。

名前を呼び、愛しい彼女をじ、とみつめた。

「……………和は、」

言いかけて、またも遙が口を閉ざしてしまふ。

和は思いつめたかのような遙をみつめてうかがうように顔をのぞく。

やがて何かを気まずく感じたのか、
遙はすっと目を逸らすと、そのまま添わせていた手の平も放してしまえば

もう一度和へと視線をうつした。

「？和泉君……？」

「……………帰るよ。」

「え？でも、」

「とにかく学校で和と顔を合わせなければいいんでしょう？」

「そ、うなんだけど。」

「それだけでいいんだよね？」

「うん、でも」

「わかった。」

「え！？ちょ、和泉く」

まだ話したい事があったが、遙が足早に部屋を去ったので和は完全にその機会を逸してしまった。

「……………理由をまだ話してないのに。」

ぼつりと呟いたその言葉は空間にむなしく響き落とされた。

いつも通りの朝。
行き交う人々の数はまばらで、冬の澄んだ空気はきん、と脳に響く。
快晴といえる空をながめて、しかし和はどこか気持ちがおさまらな
い。

原因はわかっている。

すぐさま理由を話さなければいけないことも、わかっている。
しかしそれをしなかったのは、

目の前にある好都合な出来事がどうにも捨てきれないからだ。

正直かなり自己中心的なことをしている自覚はある。

が、遥をどう説得したらいいのか迷っていたのも本当で

どうせならばこの状態のまましばらく捨て置いてもいいのではない
か、と

和の心は揺れに揺れていた。

「一週間様子見たいなあ…だめかなあ…」

事実を切り取れば、和の言葉を了承してくれたのだ、ということに
なる。

彼女は今、学校で遥と接触するにはまずい立場に立たされていたか
らだ。

だからこそ、遥に近付かないでほしい、と伝えた。

しかしあっさりとそれを承諾した彼の様子は、明らかにおかしい。

これを放っておくのは鬼の所業ともいえるが、彼女にとっては都合
が良い。

どっちをとるか、なのだが、普通の女性ならばここで果たして迷うだろうか。

「んー…あいだをとるか。」

うなずいた彼女の眩きは、やはり鬼畜と呼ぶにふさわしいそれだった。

次の日になれば回復するのではないかと楽観的に考えていた浩平や梓は

今日もぴりぴりした様子である遙を見てため息を吐かずにはいられなかった。

正直、教室の空気が尋常ではないくらい悪い。

「…なあ、梓。笹森ちゃんからなんか事情きいてないの?」

「え?なんで遙を避けてるかってこと?」

廊下に出て教室前で梓と浩平が密談を交わす。

中で話すと遙がまた癩癩を起こすかもしれないので異様に慎重だ。二時間目終わりの休憩時間。放課後まではまだまだ長い。

「んー…最近和の周りで変わったことといえばひとつあるけれど…でもそれが原因なのかしら?」

いまいちふたつの要素が繋がらないらしく、梓は首を傾げる。

しかし梓の言葉に一縷の希望を見出したのか、浩平がずい、と顔を寄せてきた。

「変わったこと？なに！？」

「ちよ、浩平落ち着いてよ…あのね、」

続きを話そうとして、梓と浩平が顔を寄せ合うと

急にそれを阻むかのようにぐ、と梓の身体が後ろへと遠のいた。何が起こったのかわからずに梓の後方へとふたりが顔を向けるとそこには梓の腰をがっちりと掴んだ託斗が立っていた。

「あれれ、鈴木君…なんかものすごく顔が怖いのは気のせい？」

引き攣った愛想笑いを浮かべながら浩平が訊ねれば託斗は睨んだ顔から一転、冷笑を浮かべた。

「まあ、自分の女がどこの馬の骨ともわからん男と至近距離にいたら愉快ではないだろうな。」

「え、俺、馬の骨！？」

ひどいや鈴木君！と叫びながら口を尖らせる浩平を他所に、話題の中心である梓は託斗の懐で頬を染めている。

「…馬鹿ね。自分だって妬いてるじゃないの。」

「なんだ、俺がそういう感情を微塵も抱かないとでも思ってたのか？」

「そ、ういうわけではないけど…だって和の時とかよくなにが不満なんだ、って言ってたから。」

「たとえばあれと同じことを宮田や和泉とされても俺はなんとも思わない。」

ただ身体を触れられているのはたとえ友人関係だとしても我慢ならん。

お前の全部は俺のものだからだ。」

つらつらと流れるような言葉の数々に梓のみならず

浩平まで顔が赤くなりそうだった。

こういう冷静な男の口説き文句はなんとも艶っぽい。

遥の普段の言葉の数々も相当なものだが

こちらのほうがなにやら何倍も聞いていて恥ずかしいのはなぜなのか。

「ごめんごめん、鈴木君。梓とはもう付き合いも長いから

どうにもそういう意識が希薄でさ。今後は気をつけるね。」

「いや、わかつてる。俺のつまらない我儘だ、すまん。」

「託斗…私も、ごめんなさい。」

いまだ懷で抱きしめられている梓が

おずおずと託斗を見上げながら謝罪の言葉を告げる。

すると託斗がふ、と梓に微笑んで頭を撫でた。そうして梓を解放する。

「これからはもうちょっと自覚してくれよ?」

「…別に、誰にでも無警戒ってわけじゃないわよ?」

「わかつてるよ。」

梓はこの容姿だ。

それこそ寄つて来る男は後を絶えないと言つてもいい。

だからこそ、あしらい方は和よりも心得ている。

浩平や遥に対しての無防備さはまた特別なのだ。

「…和泉。なんだその怪しい雰囲気は。」
「え？うわ、遙！！」

託斗の声に浩平が後ろを振り返れば教室の扉で虚ろな目をした遙がそこに立っていた。じ、と梓と託斗を見つめている。

「……梓になにか用事だったの？」

「あ？ああ、この前借りた本を返しにな。」

「あら、いつでもよかったのに、ありがとう。」

言って、手に持っていた文庫本を託斗が梓へと差し出した。梓がそれに微笑む。

それをまた遙がじい、と見つめるので託斗が眉を顰めた。

「…お前、一体どうした。」

その言葉に、遙が力なくふ、と微笑んでみせる。

「いいねえ、ふたりは学校内で好きなだけいちゃつけて。」

「いつでもどこでも恋人に抱きついてる奴に言われるとはな。」

「そんなの遠い昔の話だよ。」

「……和は至って普通だったから気付かなかったが…お前らになにか揉めてるのか？」

託斗の言葉に梓と浩平が慌てて待ったをかけたが遅い。遙が彼の言葉にびしり、と固まった。

「和……普通なんだ、そうなんだ。」

「は、遙！違うって多分なんか事情があるんだって！！！」

「そうよ！和にきちんと理由は訊いてみたの！？」

梓の言葉に、遙の身体がびくり、と反応する。

「……………理由、か。」

ふ、と自嘲するように笑えば、遙はそのまま教室をあとにする。

「上のぼったから、多分屋上だな。」

「でしようねえ。」

梓と浩平は顔を見合わせてにっこりと微笑めば、託斗へと顔を向けた。

「和。」

「った…なに、託。」

べし、と後頭部を叩かれて、本を読んでいた和はすぐさま覚醒した。しかし思いのほか力が強かったのか

涙目になりながら和は託斗を睨みつける。

教室で憩いの時を過ごしていたというのに一体なんだというのか。恨みがましい目付きで見つめられ、託斗は呆れのため息をこぼした。

「お前…和泉には心底同情するな。」

「？和泉君…？」

「瀕死状態だぞ、奴は今。」

「は、」

「屋上だ。」

「え、ちよつと託…」

疑問符だらけの和を一瞥して、託斗はそのまま自身の席へと着いてしまふ。

和は一体全体なにが起こっているのかわけがわからなかったが、ちら、と腕時計をみて休憩の残り時間が僅かであることを知れば、迷うことなく身体が動いていた。

勢い良く立ち上がった和の後姿を、託斗はふ、と笑んで見つめていた。

「…あいつらも、なんでああトラブル体質なんだかな。」

ぼそり、と呟いたその一言に胸中で2・3一同は大きくうなずいていた。

やはり、昨日彼を捕まえてきちんと理由を話せば良かった。今更ながらに和は後悔している。

『本当は放課後に事情話すつもりだったんだけどなあ。』

苦笑しながら階段をかけのぼる。

どうやら彼には、今日一日を何事もなく終了させるのも辛いらしい。たった一日半、それも学校でのみ避けただけだというのに、どうしてそんなんで「瀕死状態」などになるのだろうか。

和はあまりの遙の情けなさに一周回って大笑いしそうになっていた。この事態を引き起こしたのは自分なのだが、それにしたってこうも事を大きくされるとは思わなかったのだ。

ひよつとすると、2・7での遙は色々和最悪だったかもしれない。教室内の空気を悪くしてしまったことにも今更ながら罪悪感を覚え、た和は、

辿り着いた扉の前でひゅうひゅう、と息を切らしていた。

全力疾走ともいえる速さでここまでかけのぼってきたのだから、まあ当然といえれば当然だ。

和はゆっくりと深呼吸して息を整えた。

第一百五話 「彼女が白旗をあげるとき・その3」

呼吸が整った和は、屋上扉に手をかける。

一瞬懸念していた事はしかしすぐに解決した。

施錠されていたらどうしようと思っていたが、すんなりと扉が開いたからだ。

「…和泉君？」

ゆっくりと呼びかけたその声に反応する者はいなかった。扉を閉めて、和はゆっくりと屋上へその足を踏み入れる。

奥へと進んで左を向けば、なにかが転がっているのが確認できて和は慌てて走り寄る。

「……なんだ、寝てるのか。」

てっきり倒れているのだと思っていればそこには目を瞑り寝息を立てる遙が居た。

和は、綺麗なその顔をじ、とみつめればさら、と前髪を横に梳く。寝顔に、いちばんに伝えたかった言葉をとりあえず口にする。

「……ごめんね。」

「それはどういう意味の？」

和の言葉に、応えるはずのない声がきこえて和は狼狽する。気付けば遙が目を開いて和を見上げていた。

「お、起きてたの!？」

「和に触られたら起きた。…ねえ、それよりなんでごめん？」

「え？ああ…理由を昨日きちんと言えば良かったなって。」

和泉君が逃げるように帰っちゃったのも気になってただけど…」

口ごもって言い辛そうにする和を遙がじ、と見つめる。

その視線が居た堪れなくて視線を泳がせつつもなんとか口を開いた。

「その、本音を言えば…学校でとりあえず近付かなくなるのは好都合だし

ほっとこうと思いましたが、ごめんなさい！！」

「……………そのことにたいしてだけの、ごめん？」

「え？」

遙の言葉の意味が理解できずに首を傾げていると

そんな和を他所に彼は何事かを考えるようにしばらく押し黙ると和、と彼女の名前を呼ぶ。

「ん？」

「膝枕して。」

「はい！！？」

「謝るってことは俺に悪いと思ってるんでしょう？」

「え？う、うん、まあ…」

「じゃあお願い。」

「でもあの、風邪引かない…？」

「和に介抱されるんならそれもいいね。」

「…あのさあ、和泉君。」

「ほらほら、足出して。」

言って和のスカートをくいくいひっぱるので、

少し顔を赤くしながらやめろ、と声をあげれば和は仕方なく足をの

ばした。

それに嬉々として遙が頭をのせるのでその様子に呆れてため息を吐く。

しかし遙はにこにこことご機嫌な様子だ。

和は、遙の頭が自身の太腿に乗っている事実がなんともむずがゆく落ち着かない。

下を向けば遙と視線がかちあうので慌てて前を向いた。

「……あのさあ、和泉君、なんか誤解してたら申し訳ないんだけど。」

「誤解？」

「不機嫌になってるだけなのかと思ったら落ち込んでるから。」

本当に、それ以上も以下もないよ？学校で話しかけないでって言った意味は。」

「俺のことを避けたいって事でしょう？」

「結果的にはそうなるんだけど……厳密に言つとちょっとちがう。」

無意識に遙の頭へ手を置いていた和は、

これまた無意識にさらさらの髪に触れれば撫ですにはいられなかったのか

遙の髪を梳くように何度も手を行き来させていく。

それが心地よいのか、遙はうつとりと目を細めている。

どうにも思考が鈍くなっていけないと思うのだが

遙は今の状況がもつたいたいなくて自身からこの柔らかな拘束を解く事などできない。

なんとかかぼんやりしそうになる頭を叱咤して遙は和を真っ直ぐに見つめる。

和も下を向いていたので、自然と視線はかちあった。

「違ってます?」

「んー…実は理由がありました。本当はね、放課後いちばんに話そうと思ってたの。」

そうじゃなくとも学校外では普通に過ごそうと思っている意思が伝えられればなって。」

「理由?なに、またなにかに巻き込まれてるの!?」

先程までこの状態をどれくらい維持できるかと考えていたのに和の口から紡がれた爆弾発言に驚き、

遙は思わず自身から身体を起き上がらせてしまった。

しかしもうそんなことはどうでもいい。

遙は自身が想定していた最悪な結末は免れそうだとわかったがそれでも彼女の口から発せられた事柄は無視できるものではない。目を見開く彼女の手を取り、説明を迫る。

「和、俺に隠している事があるなら全部教えて。」

「うん、だから、言われなくとも今それを話すから。」

ええーと、あと、もうひとつ謝っておくけど。大丈夫。すっごくくだらない事だから。」

和の苦笑しながらの言葉を怪訝に思えば、遙は眉を顰めてくだらない事?と

彼女の言葉を繰り返す。

「そう。西森さんのときみたいなそういう事件性のある事はまるでないの。」

ただ、私にとってはあまり良くない事だから和泉君を避けたかっただけ。」

「…その、和の問題は俺と離れていれば解決するものなの？」

「うーん、あくまでひとつの可能性だけ。」

実は想定外もいいところで、どうしたらいいのかわかんないってのが現状。」

困り果てているといった風情のその表情に遙は目を丸くした。

記憶の中で彼女がここまで言っていた事が果たしてあったろうか。

いつだって和はなにかを画策するのが得意だったし

問題が目の前に立ちはだかっても都度向き合って解消してきたのではなかったか。

それなのに、彼女があまり真剣そうではないのもひっかかる。

遙は疑問だらけの頭を抱えながら、首を傾げた。

「でも、くだらないこと？」

「そう、超がつくほどにね。」

「さっきから、言いたくないの？ なんだか話を引き伸ばしてるみたい。」

「……………」

凶星だったのだろう。遙の言葉に和は眉間に皺を寄せれば小さくうなり声をあげた。

「あの、さあ。お願いがあるんだけど。」

「なあに？」

「先に、和泉君の話を聞かせてもらったら駄目？」

「俺の？」

和の言葉に遙はまたも目を丸くする。

彼女は毎回、言うことが突拍子もない。

「なんか決心が着かなくて。あと気になってたから。わかんないけど…なんか、和泉君苦しそうだから。そんなに嫌だった？学校で別行動するの。」

眉を下げながらごめんね、と謝る彼女に、遙は苦笑する。彼女はいつだって勘はいいのだが、その中身を見極める能力はなんとも偏っている。

今回だってひよっとしたらもうばれているんじゃないか、と遙は思ったくらいだ。

「違うよ、そうじゃないんだ。誤解してただけ。」
「誤解？」

「その…和が、俺と別れたがってるのかと思った。」

「はあ！！？」

遙の言葉があまりにも想定外だったのだろう。

和があげたすつとんきょうな声に遙は心底安心して微笑んだ。この反応をみればわかる。

遙の考えていた事は単なる被害妄想でしかなかったのだ。

「てつきり自然消滅でも狙ってるのかと思ったんだ。」

「え？………あー、まず、学校で会う機会を減らして？」

放課後に家に寄る回数を段々減らして？」

「そうそう。」

「んなわけないでしょ、もう。」

苦笑して遙の頭を軽く小突いた彼女がなんとも可愛いと思えば遙は我慢できずに彼女を抱きしめた。

「……ひよつとして別れ話を聞きたくなくて逃げたの？」

「……………ええーと、その、」

「へたれ。」

「うづ……………」

遥の腕が和の身体をなおも強く抱きしめる。

ひどい、と呟きながらも力を強めるとは、単にへたれでもないから始末に悪い。

もしも変な方向へと暴走されればどんな事態に陥っていただろうか。和は苦笑しながらも、遥の背中を数回あやすように叩いた。

「ごめんね、今回は私が悪いね。」

「……………本当だよ、誤解した俺も悪いけど！心臓止まるかと思った。」

「宮田君に謝っておきなよ？どうせ当り散らしたんだでしょう。」

「……………」

無言になった遥に和は凶星か、と呆れのため息を吐く。

遥は気まずい空気を一掃するようにごぼ、とわざとらしく咳をすればそれで、と先を促した。

「俺の話はこれで終わりとして。もう理由を訊いてもいいのかな？」

遥が腕をゆるめて一步分の距離をとれば彼女の顔をのぞきこむ。

和は、苦虫を噛み潰したかのようななんともいえない表情をしていた。

それほどまでに言い辛い事とは一体なんなのだろうか。

「……………最近、周りに群がってる女の子、ちょっと増えたと思わない？」

「え？」

「前から和泉君のファンはたくさんいたけど。それにしても若干、当社比上がったと思わない？」

和の言葉に、遙は暫く考える。

そういわれてみれば、と遙はここ最近の学校生活を反芻していた。確かにところかまわずキヤーキヤー言われるようなことはさすがにないが

みつめられる視線の数が増えたな、とは少し感じていた。

しかし彼女の理由がそこからどう繋がるのかは、遙にはわからない。

「それがどうしたの？」

「……見られてるの、和泉君だけじゃないんだよ。」

「え？」

疑問符を浮かべて首を傾げる遙に、和は観念して重い口を開いた。

「私も、騒がれる対象になってるんだって。」

「え？それって……」

遙の戸惑いに、和は答えを出すようにうなずいた。

「和泉君だけじゃなく、

私にも二つ名が付いて何故だかファンらしきものがあるんだって……」

「……それは、えーと、女の子、なんだよね。」

「男のファンが付くってありえないでしょ。いや、今でも充分ありえないけど。」

はあ、と憂鬱なため息を吐く彼女の頭を、遙はなくさめるように撫でてやる。

しかし、とまたも遥の疑問は色を濃くしていた。

「それは確かに和にとっては死活問題みたいなものだろうけど……」

遥の言葉に和はうなずく。

彼女はなによりも目立つことが嫌いな人間であり

特に学校内では集団に紛れて平和に過ごしたいという意志が強いことも

遥は嫌というほどわかっていた。

なにせそれが原因で長いこと彼女に受け入れてもらえなかったのだから。

しかし、それとどう自分の事が繋がるのかが、遥にはわかりかねた。

「どうして俺と校内で接触するのが駄目なの？」

「……可能性でしかないんだけど。」

どうも、梓さんから話を訊いて総合してみると

和泉君とセットで騒がれてる感が否めないわけよ。

今までで一番長続した彼女、和泉遥を振り回してる彼女。

で、なんかしらんけどクールでかっこいいとか噂に尾ヒレがついて回ったようで。」

「噂？」

「和泉君のみならず、和泉君の周りに居る人間まで陥落させたとか。」

「それ、別に嘘じゃないんじゃない？」

「学校内の和泉君に付きまとう女性達を一纏めにして一掃したとか。」

「ある意味本当だよ、それも。」

「実はあの眼鏡を外すととてもない美人だとか。」

「それも嘘でもないじゃないか。」

「あの学園のアイドルを完全に手玉に取っているとか。」
「それ完璧に本当の事じゃん！」
「実は学校を支配してるのは笹森和だとか。」
「ああ、それだけだね、嘘なの。」

遥のいちいち繰り返されるつつこみに、和が彼を睨みつける。

「いちいち茶々いれないでよ、全部嘘でしょ！」
「いやいやいや、それこそ何言ってるの、和ってば。
それで二つ名ってどんなの？」

「……………」
「え？なに？」

呟いた言葉があまりにも小さくて聞き取れなかった遥は再度和に質問してみる。

すると涙目になった和が、大声をあげて叫んだ。

「学園の魔王！」
「え、魔女じゃなく！！？」
「私も同じこと思ったよ！でも魔女じゃなくて魔王がしっくりくる
とか

わけのわからん話し合いで議決されたことなんだから梓さんが言う
てたの！」

「ぶっ…アイドルよりよっぽどすげえ……！！」
「笑い事じゃないよお！もう全部和泉君のせいなんだからー！！！」

子どものように癪癪を起こして泣き始めた和に
遥は一瞬面食らうが、次にはまずいと感じて慌てて彼女を抱きしめ
た。

「ごめんね、笑って。嫌だよね、こんな風に騒がれて！
見世物みたいになるのなんてごめんだもんね…
だから俺と学校内で接触しなければ収まると思ったんだね？」

遥の言葉に、和はこくこくとうなずいた。

「もう、どうしたらいいのかわかんなくて……
開き直ろうかとも、思ったけど…どこにいても、視線を感じて、
怖い…」

ひく、としゃくりあげる彼女の頭を、遥は優しく撫でる。

和がこつも集団を怖がるのは

結局、根底にトラウマがあるからなのだろう。

最近になって遥はやっとそれに気がついた。

田舎での事は解決できたが、きつと度重なる集団から痛めつけられ
た記憶は

そうそう無くなるものではない。

心の奥底では、きつとそれがいまだに横たわっているはずで

それでも微塵もそういったものを悟らせない彼女を遥は脆くとも強
い人間だと感じる。

日頃なかなか守らせても甘やかせてももらえないのだし

今回、彼女の我儘をめいっぱいきいてやるのも悪くはないと遥はぼ
んやり考えた。

「……じゃあ、とりあえず別行動とってみる？」

「え、いいの……？」

涙を湛えた彼女の瞳に優しく口付ければ、

遥はそのまま涙の跡をゆつくりと唇でたどり水分を拭っていった。

「ただ、根本的には解決できるか俺にもわからないけど。」

どうしてそんな風にみられるのか、得体がしれないから怖いんでしよう？」

「うん…。」

遥の言葉に、和は情けない表情でうなづく。

それがあまりにも可愛くて、遥は口付けたい衝動をこらえると必死に微笑を作った。

「とにかく、ひとりでもそのファンっていう人たちが減らないんなら

覚悟するしかないんじゃないかな。

和は、自分が思うよりもひとを惹きつける魅力があるみたいだからね。」

「え？地味な私が？なんで？」

「まあ、気配を消すのは得意みたいだけど…一度気が付いちやうとなあ。」

ため息を吐いて和をまた抱きしめた遥は、少し昔の思い出を頭の中から呼び起こす。

思えば彼も、最初は彼女をただの地味な女の子だと思っていたのだが、しかし一度そうではないと気付いてしまうと、目が離せなくなってしまう。

彼女はそういう、麻薬じみた魅力を自身が持っている事に気が付いていない。

「とりあえず、今週いっぱい様子見ようと思うの。」

それで、和泉君とセットで騒がれてるって確信できたら別にいい。

自分自身が見られてるわけじゃないってわかれば別になんとも思わないから。」

「…その先は俺といっしょに行動してもいいってこと？」

遙の問いに、和はこくん、とうなずいた。

「ありがとう。……こんな目立つ奴が恋人でごめん。」

「本当だよ。しなくていい苦労ばかり。」

「…………ごめん。」

「でも、最初から覚悟してた事だからいいんだ。

ちよっと、今回はびっくりしすぎちゃったけど大丈夫。」

「和…………。」

ゆるゆると腕から抜け出して遙から距離を取った和は、にっこりと微笑んでいた。

「こういう事があって、自分の生活が損なわれたとしたって、それでもいっしょにいたいと思ったから好きだって伝えたんだもん。全然後悔なんかしてないよ。」

その言葉に、遙はもう自身を抑制することなどできはしなかった。気が付けば和の腕を掴んで引き寄せ、彼女の唇に口付けていた。

和は、突然の彼の行動にわけがわからず目を見開いていたがやがてその激しさにきつく目を閉じた。

遙の舌が和の唇を割って侵入すれば、口腔内を端から端まで犯しはじめる。

その激しさに、和は目の前がちかちかした。

呼吸が正常にできなくなり、口を開けば遙はそれさえも利用して口

付けを深める。

わかっていても和は苦しさに喘いでいつも思い切り唇を開いてしま
うのだ。

嚙下しきれない唾液が口端からもれても、

羞恥で身体を熱くする和とは真逆に遥は意に介すことなく彼女の舌
を貪る。

好きなだけ弄ばれてすっかり身体の力が抜けた和の腰を、

遥は確かな動きでがっしりと支えた。

「や、だめ……」

「ここ濡れてるからもったいない。」

「なに言ってる……あっ」

先程受け取りきれなかった唾液を、遥がその舌で舐め取る。

毎度の事ながら、その行為が恥ずかしくて仕方ない。

彼はこういった事をするときにおよそためらいというものが見られ
ない。

ベッドで和を抱くときも、いくら汚いからやめてくれと叫んでも

汚いところなんてひとつもない、と言ってきたいはくれない。

和はそのたびに羞恥で顔を染めるのだが、遥は止めを刺すかのように
その顔を見るのが好きだ、と和に告げてくる。

和はいつも二度と恥ずかしがってやるものか、と思うのだが
何回同じ事をされても慣れるときがくるとは考えられなかった。

ぼんやりと遥の腕に抱えられてそんなことを頭の中で巡らせていれば
行為を終わらせた遥と視線が合った。

「……なに考えてるの？」

「え？」

「顔がすごくやらしくて可愛い。」

「!?!?」

「ひょつとして俺に抱かれてるときのこと考えてた？」

「え、いや、あの、」

遙の言葉が思い切り凶星だったため、和は遙の言葉に

ぼん、と音が出そうになるくらい瞬間的に顔を真っ赤に染め上げた。それをみて得心した遙は、にや、となんとも意地悪い笑いを浮かべる。

「感じちゃった？」

「はい!?!?」

「責任とって俺がその熱を冷ましてあげようか？」

「馬鹿! 学校でそういうことはしないって言ったでしょうが!!」

「えー、だって和がそんな可愛い顔をするのが悪いんでしょう?」

「責任転嫁をしないでよ!! とにかくしませんから!!」

そろそろ終業の鐘が鳴るから戻るよ私。」

「ああ…そういえば三時間目さぼっちゃったね…。」

「さ、和泉君もこんなところいつまでもいたら風邪引くよ!」

和の言葉に遙は顔を綻ばせる。

授業をさぼってまでここに来てくれたことも、

今遙を労わるような言葉をかけてくれることも嬉しかった。

遙はにこにこしながら彼女の手を取れば仲良く屋上をあとにする。

二年生のフロアに戻るまで、という条件を渋々呑み込んで、

ふたりはゆっくりと手を繋いだまま階段を下っていった。

「笹森。」

「! ! ! ! !」

ちょうど終業の鐘が鳴り、休み時間になって生徒が廊下へとぼつぼつ出始めた時。

遙と別れて教室前の廊下へ戻ってきた和に低い声音で何者かが声をかける。

和は大きく肩を揺らせばその声の主からいつそ逃げ出したい、と思つたが

そういうわけにもいかずため息を吐いて声の方向へと振り向いた。

「なにか御用でしょうか。」

「へー、笹森さんつてばそんなとぼけたこと言っちゃうつ?」

無表情になりながら和は内心、心臓が飛び跳ねている事をひた隠す。どうしてもこの目の前の人物にはそれを悟られなくなかつた。

「お前、三限さぼりやがつたな。」

「急な腹痛に見舞われまして。」

「岡元先生からはなにも言付かつてないが?」

「トイレですつと悶絶していたものですから、申し訳ありません。」

「…花もはじらう現役女子高生がそんなこと言っちゃっていいんか。」

「腹痛によりトイレにてその痛みと闘っていた事実を何故隠す必要がありますか。」

「いや、女の子だろ。17歳だぞ。」

「先生、私はまだ16です。」

「そりゃすまん…つてそうじゃないだろう。相変わらずお前は話を

逸らす天才だな。」

「恐れ入ります。」

「皮肉もまた斜めに受け取るんじゃないよ。」

笹森、放課後居残り決定な。逃げたらペナルティが増えるだけだから。

「ら。」

「…チツ。」

「舌打ちしたか、いま。」

「とんでもない。自身の怠慢が招いた結果ですから。」

「残業代も出ないというのにお手数をおかけします。」

ぺこり、と頭を下げる和に生意気な奴だな、と苦笑いを浮かべて出席簿でぼこ、と軽く頭を叩かれれば和は顔をあげる。

男は、もう職員室へと歩き出していた。その背中をみつめてため息をもらす。

優等生の仮面を最初から剥がされた食えない担任。

それが彼、ながしまじか長島円であった。

『そうだ、三限って奴の授業だって忘れてた…』

自分の犯してしまった失態と、

先程の言葉、残業代も出ないのに、という言葉が縋い交ぜになり和はなんとも複雑な胸中になっていた。

申し訳ない気持ちもおおいにあるが、

それならば面倒な事はしなればいいのに、とも思う。

しかし担任という立場上、そういうわけにもいかないだろう。

教師というのは大変なものだなあ、と原因のくせに明後日なことを考えていた。

「あれー、笹森さんどうしたの？」

教室に戻り自身の席へ着くと、中村と向井に話しかけられる。

「んー……放課後お呼び出しくらっちゃった。」

「あらら。えんちゃんの授業さぼっちゃったからねえ……」

「……愁傷様。」

苦笑を苦笑で返されて、和は力なく渴いた笑い声をあげる。

「ま、自業自得だしねえ。しゃーないよ。」

「一部の子は喜びそうだけどね。」

「ああ、えんちゃんって女生徒から人気あるからねー！
若くてかつこいいい上にあの軽い感じが良いんだよね！」

きやあきやあと騒ぎ出した女子ふたりを頬杖について

和はぼんやりとながめていた。

『まあ、教師と生徒が恋仲になっちゃうのってどうかと思うけどね
……』

正直、禁断の恋だのなんだの言うが

やることやるにしても卒業後に告げるのが礼儀だろう。

そんな風に生徒を恋愛対象にみてしまうような大人に
自身の子どもを安心してあずけることなど出来ようか。

まあ、迫る生徒側にも問題があるとは思うが。

珍しくあまりにもくだらないことを長いこと考えてしまった、と
和は心の中で呟けば机の中にある文庫本へと手をのばしたのだった。

第六話 「彼女が白旗をあげるとき・その4」

和は放課後になって重いため息を吐き出せば担任が来るのをおとなしく教室で待っていた。

遥にはメールを送ろうか一瞬迷ったが
もしもいつしよに帰る気があるならば教室に寄るだろうと考えていた。

しかし少し待ってみても遥が訪れる事はなく、
今日の流れならばひよっとしたら家に寄りたいと言いかもしれない
と思った和は

長島が来る前にメールをしようと携帯電話を開いて一報をいれることにした。

しかし開いてみれば、偶然にもそこには遥からのメールで
用事がありいつしよには帰れないがあとから家に寄ってもいいか、
という連絡だった。

和はそれに目を丸くしつつ、短くいいよ、という返事をした。

送られたメールをみるとそれは昼休みにきたもので
放課後まで気付かなかった自身に苦笑しかけたが、
前よりは余程成長しただろうと開き直った。

そうしてすっかり教室から人間が居なくなった頃を見計らったのか
担任が音も無くぬぼ、と教室に顔を出した。

なんとも気だるそうな雰囲気をかもしだした男の顔は
確かに遥を見慣れている和からみても整っていると感じていた。

『……………ていっつか私の周り異様に美形多くね？』

ひとり新発見をしたかのように心の中で呟けば
和に美形認定をされた担任が無表情に和へと視線を向ける。
少し茶色がかった髪にすっきりとした一重の瞳。
しかしその双眸はなんともやる気なく濁っていた。

この男が必死になったり本気になったりする事があるとするならば
なんであろう。

是非とも見てみたいものだ、と和はひとりごちた。

「笹森、来い。移動すつぞ。」

てっきりここで説教されるとばかり思っていたがそうではないらしく
和は驚いたものの質問をすれば面倒がられた拳句、
小言のひとつやふたつくらいそうだと感じれば素直に立ち上がった。

「はい。」

その素直な返事が少し意外だったのか長島は目を丸くして驚く。

「お前、随分ききわけいいな。」

こっからなんで移動する必要があるのか、とか訊かないのか。
「何故ですか？どこだつてすることは同じでしょう。」

最初後ろを歩いていた和だったが長島が彼女に話しかけてくるので
和は若干速度をはやめ彼の斜め後ろへと立つ。
そうして嫌味な程にっこりと微笑んでやった。

「……お前まで俺に説教されたかっただか言わねえよな。」

心底嫌そうに顔を顰める長島をみて和は胸中でおやおや、と呟いた。

どうやら元々素行が悪いわけでもない生徒が

彼の担任になると途端に道を外すようだ。もちろん女生徒限定で。

和はそれらを瞬時に理解しはあ、とひとり小さくうなずけば
またもにこにここと笑顔を浮かべて一言告げる。

「心中、お察し致します。」

「……………冗談だよ、こええなあ。」
「怖い？」

「だってお前、背中に禍々しい怒りのオーラ背負ってるもん。」
「心外ですねえ。」

二十四時間、女生徒に心を碎かねばならない余りある魅力を持つ
先生の気苦労をお察ししての心からの労わりの言葉だったんですが。

「ったく、お前と話していると16の女子高生と話してる気がせんな。」

「あ、年齢覚えてくれたんですね、光栄です。」

その言葉に、長島が深くため息を吐く。

和は心の中で先程の溜飲が下がる思いがしたが同時にしまった、と
気付く。

一応、自身も心労のひとつになってしまったので

にこにこ愛想笑いを浮かべながらはいはいと返事だけするつもりだ
ったのだが

長島の言うとおり、先程の台詞に心の中で

『誰でも彼でもてめーに惚れると思うんじゃないやねえよこの自惚れ野郎
』

と思わず怒鳴っていたのでついつい舌を滑らしてしまったのだ。

まだまだ修行が足りない…と和はひとり静かに落ち込む。

しかしそんな彼女を他所に、長島はマイペースに次の言葉を投げかけていた。

「お前の彼氏も教師なんかになったら大変だろうなあ。それだけはやめておけって言っと思ってやれよ。」

「………確かに、先生以上に苦労しそうですね。」

「それは惚気か？」

「やだなあ、あくまでも客観的に見て出した結論ですよ。」

「おとなの魅力はお子様にはわからんってか。」

「なんすか、それ。」

呆れて思わず碎けた言葉遣いをすれば長島がにや、と笑んだ。

「やっと出たな地。」

「……！」

先程のふざけた問題発言の数々はその布石であったか。和は彼の真意をやっと理解できれば悔しさに一瞬眉をぴくり、と動かしだした。

相変わらず、この男は食えない。

辿り着いた目的地に長島がぴたり、と足を止めた。

和が上を見上げれば、ここは三階にある生徒指導室であった。

長島が特に開錠することもなく扉を開くので和は怪訝に眉を顰める。

「先約でもいるんですか？」

「お前も怖いくらい察しがいいねえ。ほれ、入れ。」

和が促されるまま足を踏み入れれば、そこに居るのはふたりの人物。ひとりはつい先程ある意味仲直りのようなことをした相手だ。

「い、和泉君!!?」

驚きに目を見開いて彼を見た和だったが、それは彼も同じだったよ
うだ。

2-7担任である長谷川祥子はせがわ しょうこと向かい合って座ったまま
遥は目を見開いて和を見つめていた。

しかし驚きに見開かれたその顔が突如、不機嫌なそれになり
和はその理由がわからないと思えば小さく首を傾げた。

素早く立ち上がった遥は短い距離を足早に歩き和と長島へと近寄れば
長島の隣に立つ和の腕をひっぱって自身の身体へと包み込む。
遥の右腕に抱かれた格好になった和は、半ばパニックを起こす寸前
で固まった。

よもや担任教師の前でこんな姿をさらすことになるとは
誰が予想したであろうか。

「ちょっと、なんで背中に手を置く必要があるのかな。
触らないでよ、えんちゃん。」

入れ、と促された時に軽く和の背中に添えられた長島の手が気に入ら
なかったようだ。

「お前……独占欲強すぎ。ないわー。」

長谷川も、半ば呆れたように遥の行動をみつめてはため息を吐いた。
最近の学校では新任に担任をまかせることがままあるらしく

長谷川もこれまた若い女教師で、ふんわりと可愛らしいと評判だ。

なんとなく子犬を思わせるその容姿は、色素の薄いふわふわとしたくせつ毛とくりくりとした丸い目が特徴的だ。

どこか庇護欲をそそるその見た目とは裏腹に、よく生徒を叱り飛ばしている所を目撃する。

しかし生徒思いであると子どものみならず、保護者にも評判だ。ひとえにその母親的な面倒見の良さがその人気を支えているのだから。

「和泉君、笹森さん、とりあえず座ってください。」

咳払いをして長谷川が指示を出す。

和は慌ててそれに返事をした。

「はい、すみません！ちょっと和泉君、離れてよ！」

「和、なんで簡単に男と密室に来ようとするの？」

俺と祥子先生がいなかったらあれとふたりきりだったんだよ！？」

そう言うこともあろうに「あれ」とのたまった長島を指差せば和は心底不快であるという顔をして低い声をあげた。

「…目上の人間に敬語も使えない、指示にも黙って従えない。担任教師に苦労かけてるのはこっちなのにその自覚もなし？常識のない人間は嫌いだって私言わなかった？」

「ごめんなさい。」

即答して遙が席へと着けば、

和はため息混じりに失礼しました、と告げて彼の隣に腰かけた。

並んで座る三組と七組の担任はその一連の様子を黙って見ていたがやがて同じようなタイミングで噴出す。

「お前……っ魔王の二つ名は伊達じゃねえな。とんだ猛獣使いだよ……」

「ちょ、長島先生、失礼ですよ……くっ！」

「そういう長谷川先生も、笑ってるじゃないですか……」

肩を震わせてこらえるふたりを、和は冷ややかに見つめる。

「もう先生の耳にまで届いてるとは……そこまで広がってる事に驚きですね。」

それとも、長島先生のことですか？

たくさん仲良くしていらっしやる女生徒の中の噂好きなどなたかにお聞きしたんでしょうかねえ？」

「和、ちょ、おさえて。」

「おかしなことを、私は十分冷静だよ、和泉君？」

絶対零度の微笑を浮かべながらふたりを見つめる和を隣の遙がどうどう、となだめる。

先程とはまた違うその様子に、なるほどいいコンビだ、と長島はひとりうなずいていた。

「すまん、あまりに噂通りだったことに驚いてな。」

「あら、校内でふたりが仲良くしているところなんて目撃していないひとはもういないんじゃないですか？」

「そうはいつでも遠目からちらつと見るくらいでしょうっ？
間近でみてこれってけっこう感動しませんか。」

「はあ……まあ、なくはないですけど。本当、仲が良いのね、ふたり

とも。」

そのふたりの言葉に複雑な思いを抱きつつも、和は恐縮です、と短く返事をした。

しばらくして落ち着いたのか、長島と長谷川が目配せをしてうなずくと

長島のほうから口を開いた。

恐らく、若いといっても彼のが年上でキャリアも長いので

この場を取り仕切っているのは長島なのだろう。

「で、まあ、予想はついていると思うんだけどな。

和泉は前からたまあに無断欠席する事があったから今更驚く事でもない。

成績もまあ、悪くはないし。」

「そうですね。素行も悪いわけではないので…

出席日数がぎりぎりだとか、そういうことはないから心配していないわ。

でも、和泉君。あなた最近、頻繁に授業中抜けしてるでしょう?」

「え、あ、はあ、まあ。…ってそうでしたっけ。」

はて、と首を傾げる遙に、和は呆れのため息を吐いた。

「馬鹿だね、そんなくらい覚えておきなよ。

にしても、随分と声をかけるタイミングが遅いようにも思いました

が。

和泉君はともかく、私は今まで前歴もなかったですし

周りの先生方は驚かれたのでは。」

「…お前、よくもまあ言うな。

そのあとの裏工作しっかりばっちりやってたじゃねえか。

やれ保健室に寄れない程具合が悪くなったとか
反省した顔して積極的にその教科の教師に質問したり授業の準備手
伝ったり…

担任の俺に今日まで話がいかないようにしてたろう。」

長島の言葉に、和はそろり、と目を逸らす。

遙はといえばそんなこととは知らずに、驚愕して和をまじまじと見
つめていた。

「まあ、どう言い訳しても意味ないってここまで来ればわかるな？
今回ふたりを同時に呼び出したのは笹森。

お前が授業をふけるようになったのが和泉と関わってからだからだ。
一応、教師としての仕事はしとかなくちやいけないからな。」

「えーと、別に彼のせいではないですが？」

「そうかもしれないけどふたり同時に説教したほうが早いだろう。
そんで笹森。今後和泉が問題起こしたらお前もセットで呼び出すか
ら覚えておけ。」

「はい!!!？」

「今ので確信したからな。和泉の手綱をしつかり握ってる飼い主さ
ん。」

「長島先生、そういう身も蓋もない言い方をしないでください。

ごめんなさいね、笹森さん。

要はあなたからしつかり和泉君に言ってくれないかな、と思ったの
よ。

中抜けは癖になっちゃうとけっこう自覚なしにやっちゃうから…

和泉君、けっこう抜けてるところがあるでしょう？

今は問題ないけれどそのうち出席日数に響くようになったら問題だ
し。」

担任ふたりの言葉に、和ははあ、と声をあげれば

暫し何事かを考えていた。

「留年したら後輩が喜びそうですね？」

「和、ひどっ！」

「あんたがしつかりしてれば問題ないだろう。馬鹿？」

休むにしたって計算しなよね、ちゃんと。馬鹿？」

「に、二回も言ったー！和の阿呆ー！」

「うわ、馬鹿に阿呆って言われた、どうしよう。」

ふたりのやりとりに、またも長島が肩を震わせている。

長谷川は、和の物言いに多少面食らっていたが

これが地なのだとわかれば呆れて小さくため息を吐いた。

「まあ、それはそれとして、だ。

どちらにせよ、お前らに一応罰を科さないとならない。

形だけでもそうしないと学年主任が納得しないんだよ。

てことで、ほれ。」

「あ、和泉君もね。」

ぴ、と差し出されたそれは、数枚のプリントだ。

見てみると、今までさぼった教科それぞれの問題集が用意されており

遙は面倒そうに眉を顰めていた。

しかし隣に座る和は違う。プリントを暫し見つめれば顔を蒼褪めていた。

「え、これ…わざわざ用意したんじゃないやありませんよね？」

「まさか。過去の問題集の寄せ集めとか、

こういうときに使われるもんはある程度用意されてるんだよ。」

「あ、なんだ。一瞬、私のせいでたくさん先生の先生方に迷惑がかかったのかと。」

「お前：変なところに気を使うんなら最初からさぼんなよ。」
「ごもつともです。で、これを提出すればとりあえずは大丈夫なんですよ？」

その言葉に、長谷川がうなずいた。

「笹森さんは成績もかなり上位だし、生活態度も真面目だからそれ以上のお咎めは必要ないだろうってというのが見解よ。今の話を聞いてもあなたが常習犯になる可能性はゼロだってわかったし」

まあ：ほどほどにしてちょうだいね？」

「はい、本当に申し訳ありませんでした。」

頭を下げる和に満足したのか、長谷川がうなずいて微笑む。

その彼女をちらり、と横目でみつつ、遥は担任へと視線を戻した。

「…って、先生。その言い様だと俺ってもしかしてもっと罰があるんですか？」

「和泉のは笹森よりも量が多いつてだけだ。あと提出期限も早い。」

「は！？普通多いほうが期限が遅くなるんじゃないかあ…」

「反省の意味もこめて、だ。」

「今度やったら和泉君には補習授業を受けてもらいますからそのつもりで。」

和泉君の期限は明後日まで、笹森さんの期限は今週いっぱいよ。」

「問題違うからお互いに写そうとか考えないようにな。」

「えええ！明後日までって：10枚あるんだけど！」

「守れなかつたら補習授業よ、和泉君。」

「鬼ー！」

「あんたねえ：補習やるのだってタダじゃないんだよ？」

その時間また複数の先生が拘束されるってわかってんの？

サービス残業だよ、サービス残業。」

和の言葉に、遙がぐ、と詰まる。

わかってはいるが、そんなに教師側に立たれると遙は子どもとしてどうしたらいいのかわからない。

「私のは5枚ですか…。」

「今週中だときついかな？月曜まででもかまわんぞ。」

「なにその態度の違い！先生、和の事狙ってないよね！！？」

き、と長島を睨みつけて和を横から抱きしめる遙に

和は呆れて心底嫌そうな顔をする。

それをみて、からかうように長島がにやにやと笑った。

「もしそうだって言ったらお前どうするつもりなんだよ。」

「え？潰すけど。」

普通にけろり、と言つてのけられて、それがまたツボにはまったのか長島がけらけらと笑いつつこええな、と声を上げた。

「あのー、長島先生。」

「ん？」

「冗談でもなんでもなく、本気でやるのでお気をつけください。」

あの…文化祭での一件もありますので。」

「ああ…俺その場にいなかったからなあ。ひどかったらしいな。」

一回、遙がクラスメイトに暴れて怪我をさせたことがあるが

そのときも後処理をしてくれたのがこの担任だ。

笑い話で済ませてくれた借りが和にはあるのでどうにもやりにくい。

世話になった当の本人はまるで恩義を感じていないようだったが。

まあ、あのときは怪我をした男子も遥をかばってくれていたのだから、それも手伝って大事には至らなかったたのであるが。

「しかし笹森。やっぱり惚気か。」

「違いますって。妙にスイツチゆるいときがあるんですよ。」

「ふうん……なんつーか、本当に猛獣使いだな。」

「和になら喜んで飼われるけど。」

「和泉君、発言がいちいち怖いわよ。笹森さん…大変ねえ。」

心底同情するといった風情でため息を吐かれてしまい

和はどう返事をしたらよいか考えてしまった。

結果、曖昧な笑みを浮かべるに留める。

「提出期限は、金曜日でかまいません。」

これからは可能な限りきつちりと授業に出ますのでご安心ください。情報漏れにも注意しますね。やむをえない場合は徹底いたします。」

「頼もしいがなんとも怖いお言葉だなあ。」

「笹森さん……。」

担任ふたりの少し疲れたような顔を見つめて和は笑う。

ある意味、遥よりも彼女のが余程問題ある生徒だ。

「和泉君。私に尻拭いさせるつもりはもちろんないよね?」

「え。」

にっこりと微笑んだ和に胸倉をつかまれて、遥は引き攣った笑みをみせる。

和はそのままの状態で立ち上がったので、遥も自然と立ち上がらざるをえなかった。

「補習になった場合、私も巻き込まれる可能性がおおいに高い。ですよね？」

「まあなあ。」

「監督して問題集をやらせる分には、問題ありませんか？」

「ええ、それはもちろんよ。むしろありがたいわ。」

「いいでしょう、おふたりの思惑通りに動くのは多少癪ではあります……」

借りもありますしご迷惑をおかけした身分です。

しつかり責任は取らせていただきましょうか。さあ来い、馬鹿犬。」

「え、ちよ、和！」

ぐい、とひっぱられた遙が多少抵抗すれば

それが気に入らなかつたのか、和は遙を睨みつけた。

「今日は覚悟してもらおうよ。私の貴重な読書時間をあんたに費やすんだから。」

おおいに鬼畜になってあげよう、遥限定で。」

にっこりと微笑んで発したその言葉に、遙は目を見開けば固まった。いつもの十八番をとられたような気分だ。

しかし次には失礼します、と無理矢理退出をうながされ涙目になりながらも遥は和に連行された。

取り残されたふたりは目を見合わせてそれからふ、と微笑んだ。

「頼もしいかぎりね。」

「まあな。……しかしあいつ本当可愛気ねえな、恐ろしい。」

「あら、他の男にそんなもの振りまいてどうするのよー。」

和泉君にはしつかりそういう面も見せてるに決まってるわ。」

「はあー、そんなもんかね。……なあ、賭けないか。」

「週末の飲み代？」

長谷川の問いかけに長島がにやり、と笑む。
「どうやら是のようだ。」

「賭けにならないんじゃないの？」

私、ふたりとも明日提出に一票。」

「やっぱりか。…なら俺は、和泉の提出物が明日、

笹森が明後日に一票入れておくかな。」

「それはありえないんじゃないの？」

「さてな。案外ふたりとも外れるかもしれないし。」

「…それはどうだが。先輩、相変わらず性格悪いよねえ。」

「お前も同じようなもんだろ。」

親しげに秘密の賭け事に興じるふたりの事実を知る者はこの学校にはいない。

しかして、賭けの行方はどうなるか。

熱心なのか無責任なのかよくわからない担任ふたりは
楽しそうに笑い合っばかりであった。

第一百七話「彼女が白旗をあげるとき・その5」

水曜日。

和と遙はそれぞれが別々に学校へと登校してきたがその顔はどこか疲れた様子をしていた。

珍しく通常の生徒が登校してくるような時間に教室へとやってきた和を

クラスメイト達は少し目を丸くしながらみつめていたが

なによりも疲労したようなその顔になんとなく2・3一同は話しかけるのをためらう。

「笹森。」

そのときだ。

まだHRの時間までは幾分かある教室内に担任である長島が訪れた。そして和の名前を呼べばクラス一同はそれに注目して視線を寄せす。和は特にそれを意に介す事はなく、淡々と返事をして立ち上がった。クラスで気配を消す事をもはや彼女は諦めているらしかった。それでも、日常生活が平穩であつてほしいと願う気持ちは変わらない。

教室入り口で名前を呼ばれ廊下に出れば和はあくびをかみ殺しながら口を開いた。

「失礼しました、多少疲れているものですから。なんででしょう?」

「これ、俺の机に置いてあったが。直接持つてこなかったのはなぜだ?」

長島が手に持っているのは昨日渡した課題のプリントだ。和のもののみならず、遙の分まで置いてあったので長島は密かに賭けに負けてしまったな、と落胆半分。本当にあの量を一晩で済ませてしまった目の前の生徒に面白さ半分を抱え

朝から複雑な感情をぐるぐると自身の中に渦巻いていた。

和は長島の問いかけに短くああ、と呟くと

何故か怖いくらい上機嫌な笑みをその顔に貼り付ける。

その瞬間、長島は本能的に背筋に悪寒が走った。

この生徒は、齢16にしてなんとという表情をするのだろうか。

「もちろん直接、と思ったのですけれど

長島先生も長谷川先生もご不在でしたので…仕方なく机に置いておきました。」

和の言葉に、長島は僅か眉をびくり、と動かした。

「……別に、俺が長谷川先生が学校に出勤してからでも良かったろう。」

どちらにしる今日提出したことに変わりないんだから。」

和は、満面の笑みを浮かべていたその顔を今度は控えめなそれに変える。

客観的に見るとそれはなんとも嫌味つたらしいそれであったが彼女は十二分に意識してやっているに違いない。

「いいえ、違います。」

「……なにがだ。」

「昨日です。提出したのは昨日の午後六時半。」

一応、そのときいらつしやった学年主任の稲垣先生いながきに

明日よろしければ伝言をお願いしますか、とお話しましたが？」

「…稲垣先生からはなにも聞いていないが。」

「ああ、それじゃあきつとお忘れなんですね。」

そのとき二、三お言葉を交わしたのでお訊きしていただければ
覚えていらつしやると思いますよ。」

和の淀みない言葉の数々に長島は一瞬声を失いぽかん、と

間抜けな表情を作ってしまったがすぐさまいつも通りの態勢を立て
直す。

「そりゃあ、お疲れさん。ご苦労なこつたなあ。

助かったよお前がそれほどまでの優等生で。」

「いえいえ、これは反省の表れですから。」

そうして普通の表情に戻ったと思っていた長島は

またなにかからかいの言葉でも投げかけてやろうと口を開きかけたが
和がまたも妙な雰囲気醸し出し始めたので一瞬、ひるむ。

そこにまたも嫌らしい笑みを浮かべて和はゆっくりと一歩進めば
声量を多少落として囁いた。

「賭けは勝者なし…ですか？飲むのもほどほどになさらないとお身
体壊しますよ。」

「！……………ばれてたか。」

「まあ、格好の餌食だとは思っていましたが。」

「飲み台だとまでばれると思わなかったけどな。」

「いつだったかは忘れましたが

この高校の先生方は割とみなさん交流が多いと稲垣先生から聞いた
もので。

ひよっとしたらそうじゃないかと。」

「お前、そんなに昨日俺と長谷川先生に苛立ってたのか？こえーな、まじで。」

苦笑する長島に和は無言でまた近付けば、す、と真横に立ち耳元へと顔を近づける。

そうして今度は最小のボリュームでひそり、と声をあげた。

「社内恋愛って、大変ですか？」

「！！！！！」

今度こそ驚いて完全に固まった長島を、和は腹を抱えて笑いたい衝動を抑えつつ見つめれば歪に口角をあげてみせた。

「口外は致しませんからご安心を。」

今回の一件、なるべく広めないでいただけると助かります。カップルで呼び出しくらったなんて、

また噂好きさん達が喜ぶネタを提供するみたいで癪なんで。」

「……………教師を脅すつもりか。」

「まさか。最初に口外しないと言ったじゃありませんか。」

ただ、ただですよ？

人間、うっかりということがありますから。」

「笹森！」

思わず声を荒げた長島を確認すれば、

ついには我慢できなくなり和は噴出してしまふ。

長島は怒りのオーラを背負いながら自身の生徒を睨みつけていた。

「応援していますよ、先生。」

繰り返しますが誓って噂なんて流しませんのでご安心を。

私そこまで暇でも馬鹿でもないですから。
さ、そろそろHRの時間じゃありませんか？教室入りましょう。」
微笑んでさっさと教室へひっこんでいく彼女をみつめて
長島は笹森和を今後敵に回さないことにしようと思つて強く心に誓ったの
だった。

「遙、なんでそんな疲れた顔してるわけ？」
「んー？ちよつとね…。」

不思議そうな顔をする梓に、力無く笑つて遙は言葉を濁す。

昨日、てつきり家に帰るものだと思つていたが
和は遙の首根っこを掴んで学校駅前のファミレスへと連行した。
彼女いわく時間が惜しいということらしい。
家へ遅くなる旨を伝え和は注文もそこにプリントを広げては
目の前の遙を見てこう告げる。

『私、やられっぱなしってなんか不愉快なの。
これは和泉君が原因の一端でもあるんだし…協力してもらえよね
え？』

その一言と満面の笑みだけで、遙は背筋を凍らせればただ従う他な

かった。

元々頭の出来は悪くないふたり。

問題集も思っていたより難解ではなかった為、多少手間取ったもの
そこまで苦戦することもなく終わらせることができた。

ただ量だけが懸念材料であったため、

午後七時がデッドラインだと告げられた時の遥の顔はまさしく顔面
蒼白であった。

しかし、昨日のうちに済ませることが一体どう彼らに一矢報いるこ
とになったのか。

そこらへんの種明かしは疲れたからといって彼女は教えてはくれな
かったが

どうやらかなり高い勝算があったらしい。

「…もう決着はついてるころなのかなあ。」

長島が焦る顔はちょっとみたかったな、と遥は思ったが

それ以上に今回の事で

多少なにか自分の我儘が成立するかもしれないと考えていた
遥の脳内はとてご機嫌であった。

余談ではあるが、すっかり落ち着いた様子のカップルに、

なによりも安堵の息を吐いたのは隣に座る宮田浩平氏であるう。

彼の度重なる境遇には、クラス一同が心から同情しているような状
態だ。

とりあえずもうしばらくは痛い思いはしたくない、と
心より願う浩平だった。

ほとんどの生徒は支度もそこそこに足早に帰路へと着くか
どこか寄り道しようと友人と騒がしく教室を出て行く放課後の学校。
例によって和は図書室へと足を運べば、
その静かな空間に心から安堵してめいっぱいその空気を吸い込んだ。
いつも自身が決めている所定の場所へと歩を進めれば
椅子に通学鞆を置く。

本来であればこうして席を取るような行為はそう積極的にやらない
のであるが

放課後の図書室はひともまばらなのが常であるため
和は本を選ぶにしてもまず席へと鞆を運ぶ。

そうして彼女はいつも通りマイペースに本棚へと進めば
今日はなにを読もうかと棚を物色し始めた。

先日一冊読了したので、次はシリーズものでも読もうか、と考えて
いる。

最近短編が多かったのになんとなく長編を読みたくなったのだ。

「んー…たまには童話全集とか読もうかなあ…。」

案外そちら方面は明るくない。

それを思えば有名なグリムやイソップ、アンデルセンなどを
読み漁ってみるのも悪くないかもしれないと考えた。

結局はシリーズ物でもないわけだが、

なんとなく通常の小説よりは世界観が統一されていて
同じ作者というだけでなくその一冊一冊作品すべてが

つながりがある感じが有り良いかもしれない、と和は思った。

遙は今日はさすがに少し疲れたので先に帰っているとメールで連絡がきていた。

それでも、もしも遅くなるならば必ず連絡するように、と添えるところがなんとも過保護な彼らしい。

和はそれを思い出して小さく微笑めば、目の前の一冊を手に取り席へと戻る。

「……………」

普段ならば特に冬場は窓越しにも冷気が入るため和が座る席はその長机自体座る人間があまりいない。しかし今日は何故か三人ほどの女生徒が確認できた。

先程までは居なかったので和が本を選んでいる間にやってきたのだろう。

授業でなにかグループ課題でも出たのだろうか、と和は特段深く考えずに鞆を掴んだ。

本音を言えばいつもの席で本を読みたくはあったが三人が知り合いらしいということもあり

読み始め、話し声で気が散る事が嫌だった和は特に何事かを発するでもなくそのまま別のひとがいない机へと席を移動し

そのまま腰を下ろした。

その行動に、何故なのか三人の女生徒たちはにわかに狼狽した。少しざわつきつつ、何事かをひそひそと話し合っている。

おまけに和のほうへちらちらと視線を寄越すので

和はそれに心をざわり、と落ち着かなくさせたが
おとなしそうな女子だと判断して一瞬ためらったものの声をかけた。

「あの、どうかしました？」

和が控えめに発した声が聞こえたのか、

女生徒三人は顔を真っ赤に染め上げて先程以上に狼狽し始める。

その反応が何故なのか和は疑問符だらけであったが

とりあえずこのまま彼女達を見つめても返事はかえってきそうにな
い。

ちら、と足元を見てみると上履きの色から下級生だと確認できた。

「お邪魔かな、と思つて席を立つただけなので

気にしなくても大丈夫ですよ？気分悪くさせちゃったかな？ごめん
なさい。」

その言葉に一年生達は目を見開いてますます顔を赤くさせれば
とんでもない！と初めて声をあげた。

「そ、そんな！私達こそ失礼しました！！」

そう言つて、きゃあきゃああと声をあげながら

結局三人はなにをするでもなく図書室を去ってしまった。

「……なにあのうるさい集団。」

首を傾げながら短く呟くも返事はない。

そもそもが独り言ではあつたのだが、

高橋か時任が居ればなんらかの返答をしてくれたであろう。

あいにくふたりとも今日は係りの日ではない。

和は一瞬悩んだが、結局は気分ではなくなっ
てひとつため息を吐けば帰宅をしようと図書室をあとにした。

「ただいまー……っであれ、和泉君。来てたの？」

帰宅してリビングへと顔を出すと、

そこには遙が当たり前のように座っている。

ここまで違和感なく我が家に溶け込まれてしまつと
なぜだか苦笑したくなってしまう。

「お帰りなさい、和ちゃん。」

「お帰りー。早いね、どうしたの？」

遙が少し不思議そうな顔をしつつ首を傾げれば
和は多少困つたように頬をかいた。

「んー、ちょっとね。なんか気分じゃなくなつて。」

「ふうん？」

「着替えてくるね。」

先程の事は少し気になっているものの、
特に彼に話すことでもない。

和はそのままリビングを出て二階の私室へと向かった。

部屋に入り、着替え用と部屋着を用意して
制服の上を脱ぎ始めた時、扉を叩くノック音が和の耳に聞こえる。
待ってもらうよう返事をしようとしたのだが
そうする前に扉が開いてしまった。

「和……あ、ごめん。」

「ごめんじゃねえし。そしてそう思うんならドア閉めて出て行け。」

開いた先に居たのは遥で、

口では謝っているものの態度からみると頭に一応の文字が付くのが
みえみえだ。

幸い和はYシャツのボタンを外し始めたところだったので
裸をみられたというわけではないが

半分は下着が見えている状態なので内心和は焦っていた。

それでも目に見えて狼狽すれば遥が喜ぶだけだとわかっているので
なんとか平静を保ちつつ前がはだけないようシャツを握り締めながら
和は遥を睨み付けていた。

てつきりすぐに出て行ってくれろと考えていた和だったが、
なにを思ったのか遥はにや、と笑めば無言で部屋に入り扉を閉めて
しまった。

さすがに和は狼狽して、少し焦りながら中ほどまで開いていたYシ
ャツのボタンを
閉めようと手を動かそうとする。

しかしそれをするよりも早く、遥が和の両手を取った。

「……な、なんのつもりかなあ。」

にっこりと笑っているその顔がなんとも恐ろしい。

和は悪寒を感じつつも引き攣った笑みでその行動の理由を訊いてみる。

「今日はうまくいった？」

「え？あ、ああ。うん、おかげさまで。」

「そういえば詳しい事まだ話してなかったよなごめん。」

「そうなんだー。えんちゃんも驚いた顔みたかったなー。」

「あれはけっこう見物だったと思う……ってあの、ちよ、」

気になりつつも普通の会話を意識して続けていたが

遥が平然とした態度のままその延長のように顔を首筋へと近づけるので

和は腰をひいて抵抗の意を示した。

しかしそれを許さないかのように遥がぐっと腰を持って

鎖骨付近へと唇を漂わせ始める。

「な、や、やめ、」

「今回、無茶な要求もきいたよね？俺けっこう頑張ったよね？」

「え？ん！」

少し吸うように口付けられ、和が思わず声をもらす。

なんとか唇を噛んで耐えるが、遥はそのまま行為を続ける。

「ごほうびほしいなあ、駄目？」

「な…ちよ、待って！話はきくから待って!!！」

「わかったって言うてくれないの？」

無茶な事はしないよ。週末泊まりに来てほしいだけ。だめ？」

上目遣いに遥にそう問われれば和は狼狽する。

なんとも危ない事を了承されそうだが今も危機的状况には変わりな

い。

なんといつても階下には母親である依子がいるのだ。声を上げてしまつて困るのは遙も同じな気がするが彼はそういつたところにひどく無頓着そうだと考えを改める。

「わ、わかつた！わかつたから……っ」

「やったー！約束ね、和！大好き。」

「ん、」

目を輝かせて両手の拘束をほどいた遙は、そのまま軽い口付けをして和を抱きしめた。

和は真つ赤になりながら慌てて遙を引き剥がした。

「可愛い。」

「！もう、うるさいなあ。出てつてとにかく！」

「はい。」

にこにこ笑みを湛えたまま、上機嫌に遙は出て行くこととする。しかし去り際彼の瞳は怪しく光った。

「約束を破つたら、多少無茶するから……覚えておいてね？」

「……！」

瞬間、捕食動物にでもなつたかのように和の心臓が跳ねる。

遙はその反応に心底満足したように微笑めばようやく部屋をあとにした。

「……………やられた。」

ため息混じりに諦めの呟きを一言発した和は

とりあえず着替えの続きをしようとシャツのボタンに手をかける。

そのとき、携帯電話が着信を伝えて震えた。

ちょうど充電している時だったので、机上に置かれたそれは接した床面とこすれあつて鈍い音を発していた。

それが思いの他大きく、和は驚きに声をあげそうになった。

電話だと気付き、和は慌てて第二ボタンまでを留めて電話に手をのばす。

結局いつまで経つても着替えられないのに多少苛立ちながらも和は電話の主を確認すれば片眉をあげて通話ボタンを押した。

「もしもし。どうしたの、電話なんかして。」

『いや、ちよつとメールでお伝えすると遅れそうだからさあ。』

さっちゃん返事けつこう遅れる時あるから。』

「え、ってことは緊急なんだ？どうかしたの。」

さっちゃん、というのは電話口の主が笹森からとつてつけた和の呼び名である。

何度抵抗しても結局そう落ち着いてしまったので今では諦めて受け入れてしまっている。

『そこまで緊急つてわけではないんだけど』

可哀想だからちよつと助けてあげてほしいなって。

あと、またお願いしたい事があったから。緊急はどつちかというところちかな。』

「あらまじで。」

『塩澤ちゃんにはちよつと厳しいかなと思ってさ。』

男子は近付けない事案だし…こつち一回来てもらえとありがたいんだけど。』

「それはかまわないけど。」

『じゃあ話を通しておくからさ、放課後こつち来てくれる？
校門まできたら連絡してよ、案内するから。』

「了解。明日でいいの？」

『うん、会長にはもう話してあるし。』

「おっけー。んじゃ、詳しい話はそのときにつて事で。」

『うん、お願いします。』

「はいはい、それじゃあねー。」

電話を切った和は短く息を吐くと、

やっと着替えられる事に安堵して今度こそ服を脱ぎ始めた。
ぼんやりと、今話していた内容を思い浮かべる。

『お呼び出しなんて初めてだよなあ…なんだろ。』

あんまり面倒な事には出来れば巻き込まれたくはない。

和はひとり考えながら

とりあえず遙に隠し事をするような事態に陥ると後々が大変だろう
な、と

着替えが終わり制服をハンガーにかけながら難しい顔をしていた。

第一百七話「彼女が白旗をあげるとき・その5」(後書き)

長らく更新をお待たせしたお詫びというのもあるのですが、
ブログにて和と遙に50の質問に答えてもらいました。
よろしければあわせてご覧くださいませ。

第一百八話「彼女が白旗をあげるとき・その6」

「また訪れる事になろうとは…。」

苦笑いを口元に湛えながら、和は広末の通う高校をながめている。

昨日の呼び出しで再度ここに足を運ぶ事になり

和の胸中は面倒の二文字でいっぱいであった。

昔の自分ならば自分以外に気を使う必要もない。

特別許可を取らずともここに来る事自体は問題なかった。

しかし、である。

今、彼女は恋人がいる。

とてつもなく過保護で、とてつもなく独占欲が強くて

とてつもなく彼女を溺愛するなんとも厄介な恋人だ。

ここまで辿り着いた過程を反芻しては、和は小さくため息を吐いた。

2006

帰り際、さらっとメールで用事がある旨を伝えこちらに来よつと思
っていたのだが

それに何を思ったのか、遙が校門前で待ち伏せていたのである。

にっこりと微笑んだ遙がなんと怖く、和は思わず頬を引き攣らせた。

「用事ってどこかに寄り道するの？だったら俺も行ってもいいですよっ？」

「えー…と、ごめん、それはちょっと。」

「……………誰かと会っの？」

「言っでなかつたっけ？広末と会っただけ。」

「……………本当に？」

「本当ですが。え、なに、浮気でも疑っでんの？」

にやにやしながら話す和に、遙は鋭い双眸で彼女を射抜く。

前までここまで束縛も強くなかつたが

雄大の一件や、事件の事があつてから遙はどうにも警戒心が強くなつている。

しばらくは仕方がないだろうと思つていたがどうにもうっとおしい。和は短くため息を吐けば、冷やかな眼差しで遙を見やつた。

「……………最初に嘘を吐いたのは和じゃないか。」

前も広末君と会つて言つて中村君と会つてた。」

「別に浮気したわけじゃないじゃん。」

「そつという問題？」

「あんたがそんなだからそう言うしかなかつたんでしょ！」

大体、その件はもう終わった話じゃないの？

隠し事とか迷惑事なら和泉君のがよっぽど多いけど。わかつてる？」

和の言葉に、遙が瞳の色を落として狼狽した。

付き合ひだしてからというものの苦勞続きだとは遙とて感じている。

こんな自分はいつ愛想を尽かされてしまっただろうか、と
毎日ひやひやしているくらいなのだ。

「なんなら広末に連絡する？それとも待ち合わせ場所まで来る？

……そんなに信用ないならもうどうしようもないよねえ。

ま、そっちがその気なら私も考えるけど？」

「……どういう意味かな。」

「女の子が群がるたび浮気だっつって暴れてあげようか。

ものすごく面倒臭いけど。」

「和にそんなことできるの？」

「やりたかないけどねえ。和泉君、今それくらい面倒臭いよ、正直。」

「……………」

和の言葉に、遥は瞳を揺らしながら唇を噛んでうつむく。

その表情を見ると自分が極悪人になったかのような気分で

なんとも居た堪れないと感じれば、和はまたため息を吐いた。

「遥。」

「！」

「浮気するって、本気で思ってるわけじゃないでしょ？」

「……………」

少し開いていた遥との距離を縮めて、和は彼の顔をのぞきこむ。

下から上目遣いに見つめて可愛らしく名前を呼ぶ彼女を見て

卑怯だ、と遥は心中で叫んだ。

「もしも私が、遥以外の男のひとと不貞行為をしたってわかったら
私のこと閉じ込めていいよ。」

「和……。」

すっかり先程の雰囲気が一掃されて、
今はただ戸惑いが色濃く彼を取り巻いている。

「なにか反論はおありですか、和泉君。」

「……ごめん、ちょっと過敏になりすぎてるかも。」

ふ、と苦笑して、遥はゆっくりと和を抱きしめる。

すっぽりと腕の中に閉じ込められても、彼女は特に抵抗しない。

それが嬉しくて、遥は和の匂いをめいっぱい吸い込んだ。

「ま、あんな事件もあつたしねえ…私も出来たら怪我しないでいた
かつたんだけど。」

でも本当に傷付けられるよりはあんな軽い傷で済んで良かったでし
ょう?。」

「いや、まあ、そうだけど!和は自分で処理しようとしすぎる。」

「自覚はあるけど。今までそうやってきたから、癖かなあ。」

「……もう少し頼ってくれてもいいんじゃないかなあ。」

「そうだね、私もそう思う。次からちゃんとそうしようって考えて
るから。」

「考えてるじゃなくて確約がほしいなあ。」

「はいはいはい、必ずそうします。」

和のあまりにも適当な響きのその言葉に、遥は怒りよりもおかしさ
が勝って

思わず噴出してしまった。

それが合図だったと感じたのか、和はゆっくりと遥の懐から抜け出
す。

腕の中から消えたぬくもりが寂しくて、遥はしばらく名残惜しげに
和をみつめた。

「…じゃあ、いつてきます。あ、家寄っていく?」

「いいの?和、何時に帰る?」

「んー…?はつきりとはわかんない。」

そんなに遅くはならないと思うけど……」

「和。」

「遅くなっても広未と帰って来るから大丈夫だってば。」

万が一広未と別々になりそうだったら和泉君に連絡するから!」

「本当?」

「本当。」

「……じゃあ、俺は先に和ん家行ってるね。」

「ん。お母さんに言っておいて。晩ご飯は家で必ず食べるから。」

「了解。じゃあ駅までいっしょに行つていい?」

「うん。」

お互いに微笑んで、駅までの道を手をつないで歩いた。

少し遠い目になりつつも、なんとかここまで辿り着けた事に安堵し
つつ

和は懐から携帯電話を取り出した。

電話帳を開いてはある人物の名前を確認して通話ボタンを押す。

『はいはい、着いた？』

「着いたよー。今正門にいる。」

『了解。迎えに行くから待っててー。』

「へーい。」

短い会話で電話を切って、和は、迎えを待つ。

五分ほど待っている、ほどなくしてひとりの男子生徒がこちらに向かって走ってくるのが見えた。

「さっちゃんーん！」

声のするほうに胡乱な目を向けながら和はため息を吐く。

「いいかげん、その呼び名やめませんか？」

「えーだって下の名前で呼ぶと嫌がるじゃん。」

「うーん…和泉君の前で塚本君に名前呼ばれる状況を考えると怖いんだよね。」

「彼氏君、相変わらずいい男？」

「そりゃ顔の造形は変わらんでしょう。」

「あはははー、そっか、そっか！」

この男は毎回、発言が適当すぎる。

しかし狙っていいかげんな男を演じているという面もあるからなかなかどうして油断ならない人間だということをや和はよくわかっていた。

広末の友人でなければ、恐らくあまり関わり合いになりたくない人種だったろう。

和は塚本に連れられ、校舎内へと歩を進める。

広末の通う高校も公立であるため、制服は特別和のところと大差は

ない。

ブレザーには校章があるため、和は今日セーターだけで登校してきた。

案外、学校の生徒全員を把握している教師は少ない。

現に数人の教師とすれ違ったが、誰も和を部外者だとは気が付かなかった。

「…さっちゃん堂々と歩くねえ。」

「こそこそしてたら私は不審者ですって言ってるようなもんじゃん。」

ひょうひょうと言ってのける和を、

塚本はしばらく見つめていれば次にはにっこりと微笑む。

その笑みにどこか寒気を感じて僅か距離を取ろうとしたが、その前に塚本が和の左腕を掴んだ。

「…ねえ、さっちゃん。」

掴まれた腕を振りほどこうと力を込めるがびくともしない。

和は眉根を寄せて不機嫌をそのまま顔に表した。

「なに。」

「彼氏君と別れるご予定は？」

「ありません。つか、あんたアレに会った事あるくせに言うつ？」

「だよねえー、俺も彼に勝負挑む気にはなれんわ。」

言って、すぐに先程までの空気を一掃するかのよう

に塚本はへらへらと笑った。

和はそれのため息を吐けば、彼は一体なにがしたいのだろうと頭を抱えなくなる。

時折、塚本は和を、女性一般を試すかのような振る舞いをする時がある。

彼はそれほど人目を惹く容姿をしているわけではないが、かといって一定水準は満たしている顔だと和は思っている。

加えてこの遊び人風の見た目をもってすれば割と女性には困らない身分だろう。

だからなのか。

彼は女性不信なのではないか、と思える面が多々ある。

こういう輩を見ると、どうしても塩澤が心配になってしまふ。

このテの種類の間人は、おそらく彼女のような純粹培養には弱いはずだ。

そこまで考えて、和はなんとも下世話なことに脳みそを使ってしまったと感じれば

とりあえず頭の中を切り替えようと少し下がった伊達眼鏡をくいとあげた。

「関係者以外は立ち入り禁止だから、内緒話にはうつつつけだよ。」

言つて、立ち止まった先にあつたのは生徒会室と書かれた部屋。

和はその扉をみつめて、いよいよもって厄介事に巻き込まれたな、と実感する。

『帰つたら和泉君に事情話したほうがいいだろうなあこれは…。』

隠し通せるならばそれでいいがおそらくここを訪れるのは

今日だけではないだろう。

和はどこかでそれを感じ取って、憂鬱な空気を吐き出すように

ひとつつ長いため息を吐いた。

「あれ、入る前からそんな顔？」

「言っておくけど、私を使うなら高くつくよ。」

「……津田とまったく同じ事言うんだねえ。」

「思考回路はあれとほぼ同じだと思ってくれてかまわないよ。」

和の不敵な表情を見て、塚本は引き攣ったような笑みを浮かべる。

「そのいやあな笑い方もそっくり。……とりあえず、どうぞ。」

うながされ、和はうなずいて扉を開く。

そこには予想通りというべきか、塩澤と広未が目丸くして和を見つめていた。

……目を丸くして？

「おい、塚本。誰の許可も得ずにここまで連れて来たんじゃないだろうな。」

据わった瞳と低い声音で

ぐい、と扉を閉めて傍らに立った塚本の胸倉を和が掴めば、塚本が慌てたように声をあげる。

「さすがにそんな非常識な事しないよ！」

そもそも今回のお呼び出しは俺じゃなく生徒会長直々なんだから！」

「……ああ、あなたが。」

ぱ、と塚本から手を離すと、横で塚本が咳き込む。

しかしそれを誰も意に介する事はなく

和が見つめた先ではソファに座った見知らぬ男が微笑んでいた。

さらさらと流れるような茶色い髪、くりくりとした二重の大きな瞳。遙ほどではないが彼もまた随分と周りの目を惹くタイプだ。

またも美形の知り合いが増えて、和はなんとも複雑な気持ちになる。

「おい、齋賀^{さいが}。まさか罔に和を使うつもりか？」

広末の言葉に、和が目丸くする。

テーブルを挟んで二人掛けできるソファがふたつ置かれている。

一方には齋賀、もう一方には塩澤と広末が並んで座っており、塩澤は驚きにせわしなく広末と齋賀と呼ばれる男を交互に見つめていた。

「だって塩澤さんにはやらせたくないだろ？」

齋賀の言葉に、広末が苛立ったように眉根を寄せる。

和はその光景が新鮮だと感じればどこか心が弾む。

「当たり前だ。そもそもこれにそんな大役ができるとも思えん。」

「先輩！これ呼ばわりするのはやめてください！」

ぎゃあぎゃあと騒がしく会話を続けようとする三人に和はとりあえずこのままでは埒が明かかないと思えば拳手をして割り込んだ。

「あのー。とりあえずここまでせっかく足を運んだんですし。事情をお訊きしてもよろしいでしょうか。」

和の言葉に、齋賀がこちらに視線をやれば一瞬目を丸くして「っ」と微笑む。

「もちろん。あ、敬語はいいよ、俺も君と同じ年だから。」

「齋賀君だっけ？よろしくね、笹森和です。」

「こちらこそ、齋賀直澄なおすみです。よろしく。」

自己紹介をし終わって、齋賀がどうぞ、と自身の隣を勧める。

和は促されるままに齋賀の隣へと腰かけた。

この男は無害だと瞬時に判断したらしい。

目の前にいる広未と塩澤は、なんともいえない表情でこちらを見ているので

和は苦笑してみせた。

「…和先輩、どうしたんですか？急に。」

困ったようなそれでいて泣きそうな顔をする塩澤に、和は微笑んで答える。

「いやあ、塚本君から緊急のお呼び出しをくらってね。

でもお話だと用件があるのは齋賀君のほうみたいだけど？」

「……和、おまえ塚本とどうして連絡取り合ってるんだ。」

「どうしてって？普通に友達だからだけ。ねえ？」

パイプ椅子を開いてテーブルに着いた塚本に同意を求めれば塚本は胡散臭い微笑を湛えつつうなずく。

「そうそう、ただならぬオトモダチってやつだよ。」

「塚本てめー言葉を選べ。塩ちゃんにはそのテの冗談通じないっつ

「の。」

「えー？あはは、塩澤ちゃんびつくりした？」

「……………か、からかうのはやめてください！」

顔を真っ赤にして叫ぶ塩澤に、この場に居る全員がなんとも温かい視線を寄越す。

塩澤はその意味がわからずに、ひとり首を傾げていた。

「まあ、事情を話す前に。」

お恥ずかしい話なんですけど、今の生徒会役員は少々頼りない連中が多くてね。

事なかれ主義といつかなんといつか…

内申点稼ぎたい為にこの仕事やってます、ていう人間が多くて。

広末も塚本も、正式な生徒会役員じゃないんだけど補助員みたいな形で

俺がスカウトしたんだ。」

そこまで聞いて、和はうなずき今の実情を把握すれば自身が何をやらなければならぬのかおおよその見当をつけた。

「なるほど。つまり事実上信頼できる生徒会役員はここにいる人間のみで

なおかつ女生徒にしか出来ない仕事があるのだけれども

塩ちゃんにそれを任せられないから、私が呼ばれたわけですね。

女生徒にしか頼めなくて困捜査っつーと……………けっこう深刻そうですねえ。」

和の言葉に、斎賀と塩澤は目を丸くし、塚本は楽しそうに笑っていた。

広末はといえば、特段何か反応するでもなく淡々と和を見つめてい

る。

「女の子の囲捜査ねえ…？売春、援助交際、セクハラ、」

最後の言葉に、塩澤の身体がわずか揺れる。

和はそれを確認すれば得心したようにうなずいた。

「女生徒が教師のセクハラ被害を受けている？」

「！！笹森さん…ちよ、ちよっと待って。まだ何も説明らしい説明してないよ！？」

「ああ、塚本君にも言ったけど、私の思考回路は広未と大体同じと思ってくれていいよ。」

勘が割りと働く所も、性格と口の悪さもね。」

にや、と笑んで広未を見やれば、言われた当の本人はため息を吐いていた。

「口の悪さはお前には負ける。」

「えー！」

「ん？なんだ、塩澤。それはひょっとして今の発言に対する異議申し立てか？」

「そそそそそんな、滅相もない！！！」

叫んだ塩澤に対して広未が独特の声音で微笑んでやれば

塩澤は自身の失言に顔色を失くす。

和はその様子を苦笑してながめつつ、斎賀へと向き直った。

「で、最初に言っておくけど、私は基本的に慈善事業はやらない。面倒だし、関係ない事に足突っ込むのも御免。」

「……ああ、だろうね。広未と同じ思考回路じゃあ。」

力無くうなだれる齋賀を横目でちらりと見つめて
和は背もたれに背中をあずけて息を吐いた。

「ただまあ、広未や塩ちゃんが困ってるって言うんなら考えなくもない。」

「!!!!」

「でも見返りはもらいたいなあ。」

ここに来る時もけっこう苦労したんでねえ。割に合わない事はしたくないの。」

「……そういえば、遥君ここにお前が居る事知ってるのか？」

和がそれに無言で首を振れば、広未は呆れのため息を吐く。

「馬鹿か。今度こそキレてなにをやるかわからんぞ、遥君。」

「嘘は言っていないよ。『広未と会う』って言ったもん。」

「また逃げ道作ってきたのか。」

「はるかくん、て？」

「和の恋人だ。相当これを溺愛してる。」

たとえば今お前は和の隣に座っているが、遥君が目撃しようもんならお前は胸倉を掴まれるんじゃないか。」

「はあ!?!?どんな彼氏!?!?」

驚く齋賀に、和はぱたぱたと手を振って広未の言葉を否定する。

「いや、さすがに胸倉は掴まないと思うよ。」

とりあえず私はこの席から移動を余儀なくされるだろうけど。」

「いや、十分すごいよそれ! そんなに独占欲強いのか?」

目を丸くする齋賀をみて、

和はぼんやりとやはり彼は普通ではないのだな、と実感すれば
なんとなく不思議な心持ちになった。

「セクハラ教師の捜査だよねえ？」

私、自分自身の安全の為に

彼に事情説明をきちんとしないとバレたときまずいんだよ。

で、説明したら多分絶対に許可は下りないと思う。」

「……そうだね、今の話を聞いたら俺もそう思う。」

「ただ、実際問題、被害に遭ってる人たちはいるんだよね？」

和の言葉に、斎賀だけでなく広末や塚本も苦い表情でうなずいた。
どうやら、思った以上に深刻な状況のようだ。

「匿名で俺に宛てて手紙が届けられたんだ。

それがその手紙なんだけど……」

言ってテーブルに置かれたそれを和が手に取ると

そこに書かれていたのはシンプルな助けてという言葉と

ひとりの名前が書かれていた。

パソコンで打たれた文字は、機械的で冷たいものだが

この一文には鬼気迫る何かが感じられる。

「悪戯って事も考えられるけど、

それにしたって何かしら恨まれる要因がその人物にあるって事だろ
う？

俺は、広末と塚本にこの名前の人物……って

体育教師の原田武（おのたけたけい）なただけ。

を、ちよっと調べてもらったんだ。」

「そしたら？」

和の言葉に、塚本と広未は首を振る。

「何人かの女生徒と接触している所までは調べる事が出来た。」

「けどそれ以上つてなると……」

「そもそも、被害届が大々的に出されないのもおかしい話だ。

何故、女生徒が訴えてこないのか……なんとなく察しがつくだろう。」

「……ああ、最低最悪の塵以下の男だね。趣味の悪い。

脅したデータの身元がわからない以上、下手に手出しをすれば被害者である女の子達が苦しむ結果になりかねない。」

和が眉根を寄せて呟いた言葉に、広未がうなずく。

「更に、生徒会が調査している事も被害者である女生徒たちにばれれば

逆に漏洩を恐れたその子達が原田に告げ口しかねない。

かなり慎重に調査を進める必要があった。」

「ま、それでもけっこういい所までは調べがついたんだ。

かなりの信憑性を持ってこの教師がクロだっていうのはほぼ確定。」

「これが調査結果だ。被害に遭っている女生徒も絞り込めてる。」

和は広未が差し出した数枚の紙を手にとって目を通す。

そこには原田武のプロフィールや被害に遭っている女生徒の名前、証拠写真などが添付されていた。

そこには、何人かの女生徒と親しげに歩いている原田が写っていて肩に手を置いて自身の車へと押し込んでいるものや、

原田の自宅マンションらしき所へ連れ込んでいるものもある。

「……いずれも学校外に連れて行かれてる写真みただけど

これだと決定的証拠とは確かに言えないねえ。」

「そうなんだよね。よしんばこれを学校側に提出しても
言い訳されちゃえばおしまい。」

報復が怖いからなかなかこれ以上つつこめない。」

「現場を押さえるのが一番良いと判断したんだが、
いかんせん原田はひどく慎重な男でな。」

後を尾けるのも一苦労だったくらいだから校舎内でなかなか事には
及ばないし

そうだったとして防音設備が整っている場所や

自分以外が入り込めないような場所をわざわざ選んでいる。」

「逆にそのテリトリーに入り込めれば盗聴器も隠しカメラも
仕掛け放題ってわけか。」

「そういう事だ。」

顎に手を当て和はしばし考える。

「……根本的な事訊いてもいい？」

「なんだ。」

和の言葉に、広未が返事をする。

「その原田先生のお眼鏡にかなわなければ困捜査もクソもないんじ
やないの？」

「ああ、それは大丈夫だよ。笹森さんばっちりあいつの好みだから。
」

「原田の好みは黒髪で真面目そうないわゆるおとなしい清純派タイ
ブだ。」

お前は演技ができない人間じゃないからまあ大丈夫だろう。」

斎賀と広未に畳み掛けるように言われてしまい、和はますます頭を

抱えてしまっ。

「んー……そうかあ。私としては協力したいんだけど。まずどうやって和泉君を説得するかが問題なんだよね。」

「確かにな。いくら対策を練っても全く危険が無いわけではない。」「とりあえず、俺と広未が出向いて話を聞いてもらうしかないんじゃないか。」

「……そうだな、無難だがそれしかない。しかし和。お前自身は本当にいいのか？引き受けても。」

「これが最初で最後だっというんなら、かまわない。次はないから、最後のカードを切りたくないならやめておいて。」

和の言葉に、斎賀が一瞬眉を顰めたが、すぐに決心したようにうなずいた。

「元々、他校生である君にこんな凶々しいことを二度と願えないってわかってる。」

でもそれくらい、今の俺達は切羽詰った状態なんだ。

苦しんでいる女の子達の為にも……協力してもらえないかな。」

「会長！でも、和先輩だっって危険な目に遭うんじゃないあ。」

「それは、俺達が全力で守るって約束する。塩澤さんも笹森さんを守ってくれるよね？」

「！も、もちろんです！」

力強くうなずいた塩澤に和はにっこりと微笑む。

「だったら異存はないよ。私はかまわない。」

まあ……和泉君の説得が無理だったらそのときは申し訳ないけれど……。」

「ああ、わかってる。笹森さん、本当にありがとう。」

真剣な表情でうなずいた斎賀を見て、
彼のような人間がいずれひとつの上に立つ人種なのだろうか、と
和はぼんやりと考えていた。

第一百九話 「彼女が白旗をあげるとき・その7」

話し合いは予想したよりも深刻であり
面倒事に関わるのは勘弁したいと感じていた和だったが
結局はもう心では了承してしまっている。

少し前の自分だったなら、もしかしたら首を縦に振っていなかった
かもしれない。

和はそんなことを心の隅で思った。

無理矢理、男性に奪われる怖さの一片を、和は知っている。

ほんの一部でもあれ程までの嫌悪や恐怖を感じたのだから

最後まで奪われてしまった女生徒達の空白はどれ程大きだろうか。
和は想像しただけで寒気がした。

塩澤も、話を聞いている最中ずっと真つ青な顔をしていたから
相当気分が悪かったのだろう。無理もない、と和は心中でうなずく。
彼女はもうきつと、広未にその心を囚われているだろう。

となれば、好いた男以外と誰がそういう行為に及びたいと思うだろ
うか。

自身に当てはめて考えるだけで、恐怖はじわじわとせりあがって
くる。

「……それじゃあ申し訳ないけれど、明日にでも会えるよう
セッティングしてもらってかまわないかな。」

まだ話し合いの途中であったことに気付いて

和は沈んでいた意識を急浮上させればしかし顔に出す事なく
ずっと斎賀の言葉を聞いていたかのようにうなずいた。

「遥君がこちらに来たらかなり目立つだろう。」

中間地点になるしY駅で待ち合わせするほうが無難だな。」

「目立つ？笹森さんの恋人って有名人かなんかなの？」

「ある意味そうかもなあ。会長、会ったら驚くよ。超が付くほどイイ男。」

にやつきながらなんとも楽しそうに発言する塚本に、

斎賀は同じような表情を返しながらへえ、と呟く。

「ここにいる男全員太刀打ちできないくらいかっこいいの？」

斎賀の言葉に、和と塩澤は一瞬斎賀へと視線を向け次にはお互い見つめあう。

そこで無言の女の子同士の会話をすれば和と塩澤は苦笑してみせた。

「難しいですよ。きっと好みもありますもん。」

「へえー、じゃあ塩澤ちゃん是谁が一番かっこいいと思うの？」

「お前にしてはなかなかいい質問をするな、塚本。」

悪戯っぽく質問した塚本に、広末までも便乗してどうなんだ？と聞いてくる。

塩澤は真っ赤な顔をしていや、その、など言葉にならない音を発し混乱した様子で狼狽していた。

「そ、そそそんなの！」

和先輩の彼氏さんがいちばんかっこいいに決まっています！」

きっぱりと断言されたその言葉に、塚本はにやりと笑んで

広末はあからさまに自身に纏っている空気を凍らせた。

「へえー。塩澤はあのテの顔が好きか。知らなかったなあ。」

一段と低いその声音に、塩澤はあからさまに怯えた表情で固まっている。

和はひとつ息を吐くと呆れ顔で広未に視線をやった。

「たく、広未も一度執着するところなんだから…」

あんたねえ、すでに他人のものになった男と対抗してどうすんの？」

「別に対抗する気はない。単に面白くないだけだ。」

「はつきりきつぱり言つなよ！塩ちゃん、鬼畜のいじめに耐えかねたら
いつでも言っただよ？」

和の言葉に、塩澤は目を潤ませながら和先輩！と声をあげている。

その様子に和はますます心配になってしまった。

そしてふとあることに気が付く。

「あー、言い辛いんですが。」

「ん？どうしたの？」

拳手をした和に、不思議そうな視線を向けて斎賀が答える。

和は頬を一度かいてぽつりと呟いた。

「ちょっとトイレ行きたくなくなっちゃって。

塩ちゃんに案内お願いしてもいいかなあ。」

「あ、はい、もちろんです！」

「じゃあ、このまま解散にしようか？話はあらかたし終わったし。」

斎賀の問いかけに、全員が了承してうなずく。

生徒会室を出た五人は、それぞれ散り散りに帰路へと着く。
和と塩澤は男子三名を見送りながらふたりで女子トイレへと向かった。

「最近、広未とどう？」

「あ、あの……。」

「ん？」

手を洗っていた和と、外で待っていた塩澤の目と目が鏡越しに合う。
和はつとめて優しく微笑めば、なにかを飲み込もうとした塩澤はためらいがちになりながらも、おずおずと口を開いた。

「津田先輩って……甘いものはお嫌いですか？」

「え？特別好きでも嫌いでもないけど。……なんで？」

ハンカチで手を拭い振り返った和が投げかけた疑問に、
塩澤は何を言うでもなく両手を合わせて指を遊ばせる。
その顔は真っ赤に染まっっていて和は悪戯心が顔を出すのを止められない。

「ああ……ひとつだけあるなあ、広未が嫌いな甘いもの。」

「え、な、なんですか？」

和は、一歩近付いてきた塩澤に、微笑んで答える。

「チョコレート。」

「ええっ！？そ、そんなあ……！」

真つ赤な顔が今度は涙目になって泣きそうになった。

それをみて和は思わず堪えることもできなくなり声を上げて笑ってしまう。

塩澤とはいえば、その様子にわけがわからずぽかん、と固まっている。

「あははははは、か、可愛いー！」

「え、な、和先輩？」

「広末、嫌いじゃないよチョコレート。」

バレンタインには堂々と本命チョコを贈れるから大丈夫。くくく……」

「！な、なんで、」

「えー？この時期にそんな質問されたら誰だつてわかるでしょう。

ただでさえ塩ちゃんわかりやすいんだからさ。」

「ごめん、ごめん。ちよつと悪戯したくなつちゃった。」

「うう……和先輩だつていじめてるじゃないですかあ……女版津田先輩

……。」

「あはは、ごーめん！ついだよ、つい。愛ゆえ！」

ぽんぽんと肩を叩く和に、塩澤は力無くうめき声をあげている。

和は頭を撫でて塩澤に再度謝罪をした。

それでやっと浮上したのか、塩澤が顔を上げて和をみつめる。

その瞳はもう潤んではいなかった。

「ね、塩ちゃん。ひよつとして告白しようと思ってる？」

「えーう、あ、その、」

「広末に、もう何度も好きだとは言われてるんでしよう？」

「……先輩から聞いたんですか？」

塩澤の言葉に、和は首を振る。

「大体わかるよ、ふたり見てたら。」

本当は協力者の情報提供によるものなのだがあえて言うことでもない。和は黙っていた。

「……先輩は本当に、津田先輩の事なんでもわかつちゃうんですね。」

「んー、ま、思考回路があれだけ似通ってればねえ。

でも違うところは違うから、なんでもかんでもわかるわけではないよ?」

「はあ……でも、私にはさっぱりです。」

せつなそうな顔をして呟く塩澤に、和は首を傾げて視線を向ける。

「塩ちゃん、広未の言葉が信じられない?」

「……………」

「自分のことを好きだなんてそんなわけないって思ったりしてる?」

「……………だって、私、こんなです。」

「こんな?」

「単純だし、暴走するし、ちんちくりんだし。」

津田先輩はいつもからかうような言葉ばかりだし……

きつと好きだって言ったのだって、私の反応を見て楽しんでるんです。」

「……………」

目の前で沈んだ声をあげる塩澤を見て、和は複雑な思いがする。遙の告白を聞いたとき、和も似たような感情を抱いた。

「不思議なもんだね。」

「え?」

「私と塩ちゃんは全然違うけど、抱く感情は似てるから。」

「和先輩と…?」

「私もねえ、ぜんっぜん信じてなかった。和泉君の告白。」

「え!!!?でも、だって、彼氏さん、どう考えたって

和先輩のこと大好きですよ…?」

その言葉に、和が微笑む。

「私にも、そう見える。」

「え、」

「広未、塩ちゃんのこと溺愛してるように見える。」

「!!!?でも、」

「和泉君てさあ、見た目もそうだけど他もなんでもできるのよ。勉強も運動も、かなりそつなくこなす。」

和の唐突とも思える言葉に、塩澤は黙って耳を傾けた。

「女性に対しては特に優しいからねえ、モテるよ。」

ただでさえ学校のアイドルみたいになってるもんだから歩けばきゃーきゃー言われるし。」

対して私はごく普通の容姿をした女子。信じられると思う?」

「で、でも…和先輩は綺麗ですよ?今は伊達眼鏡されてますけど…素顔はとっても綺麗です。」

塩澤の力説に、和はありがとう、と微笑む。

「でもねえ、和泉君の付き合っていた女性達はそれこそ芸能人みたくに可愛かったり綺麗なひとばかりなんだよ。」

だから余計に思った。なんで私?て。今の塩ちゃんといっしょ。

ま、私はまたちょっと別の理由で彼を拒否し続けたんですけど。」
「……………あの、じゃあ。どうして和先輩は今の彼氏さんとお付き合いを始めたんですか？」

塩澤の疑問に、和は一瞬困ったように頬をかき、やがて真剣な顔で塩澤に視線を向けた。

「好きだと思っちゃったから。」

「！」

「うん、このひとになら騙されてもいいかなって。

好きだから、それで駄目だったとしても、ま、しょうがないなって。」

「そ、そんな、投げやりな……………」

「そうだねー。確かに。でもねえ、不安なんて皆、大なり小なりあるんじゃないかな。」

それこそ、付き合ってけっこう経ってからだよ？私。

どうやら彼が私を溺愛しているらしいって素直に認められるようになったの。」

「そうなんですか！？」

あんな甘い雰囲気垂れ流した遙に対して

そこまで信頼するのに時間がかかったことに、塩澤は驚いているのだろう。

和は、彼女の反応に思わず苦笑してしまう。

「だからさ、周りにはわかってても自分では見えにくいものなんじゃないかな。」

塩ちゃんも。わからないんなら飛び込んでみてもいいと思うな。

少なくとも、広未は女の子を弄んで傷付けた経験はないよ？」

「……………」

「

「勇気が出ないのも、怖いのも、わかる。

でも、それならばそれで、きちんとお付き合いはできませんって
広末にきっぱり伝えてあげなきゃ。

「じゃなきゃ広末は、曖昧なままずっと期待し続けちゃうよ？」

「……………私で、いいんでしょうか。」

不安気に揺れる彼女の瞳に、和はなにかを察する。

これは恐らく、外野の人間に色々よくないことを言われたのだろう。
和のような性格ならば一蹴することは容易だが

彼女ならばきつと真正面から傷付いてしまう。

和は、それを考えるとなんだか自分のことのように痛みを覚えた。

「他人はどうしても、広末は塩ちゃんしかほしくないみたい。」

「！」

「塩ちゃんは？例えば誰かに広末は最低な男だって言われたら
一緒になって彼を非難する？」

和の言葉に、塩澤は勢いよく首を横に振った。

それに、ふっと和は微笑む。

「じゃあ、広末も同じだね。なんと言われようと

好きだって気持ちは消えない。塩ちゃんも、毎日痛感してるでしょ？」

少し視線をさまよわせたが、きゅ、と和が塩澤の両手を包み込めば
塩澤は揺れていた視線を正面で微笑む和に合わせた。

そうして、何事かを決心したようにきゅ、と唇を一回結んでゆっく
りと開く。

「……………はい。」

静かに響いた塩澤の肯定の言葉に、和は心から感謝したくなる。どうやら自分の相棒も、いいひとをつかまえられそうだ。

「よし、塩ちゃん。お姉さんと賭けをしようか？」

「え？」

「広未は今どうしてると思う？」

「どう、って…普通に帰宅してると思いますが。」

「それが塩ちゃんの答えね。」

ふむ、とうなずいたあと、和はにやり、と笑んだ。

「私は、広未はまだ待ってると思うな。」

もう外も暗くなったから、きつと家まで送り届けるために。」

「……和先輩をですか？」

「なーんでよ。塩ちゃんを、に決まってるでしょう。」

間抜けな塩澤の回答に、呆れ笑いを浮かべながら和は彼女の頭を軽く小突いてやった。

塩澤が、あう、とこれまた少々抜けた声をあげる。

「そんな、今まで何回か送ってくれたことはありませんけど…」

大体が会長に命令されてって感じでしたよ。

今日はそれぞれ自由解散だったし、きつともう帰っちゃってます。」

「まあ、かれこれ三十分くらい話し込んだしねえ。」

じゃあ私が勝ったら、塩ちゃんは必ずバレンタイン、広未に本命チョコ渡してね。」

「え！」

「必ず本命ですって言って渡すんだよ？」

「そ、それじゃあ告白といっしょじゃないですか!」

「だから、あくまでも賭けに私が勝ったらだつてば。」
「でも……」

「私が負けたら、塩ちゃんの言うことなんでもひとつきいてあげる。なんなら広未関連のお願いでもいいよ?」

「え! な、なんでも、ですか……?」

「うん。」

にっこりと微笑む和に、塩澤は頬を染めながらにやにやと笑んでいる。

和は、一体何を考えているのやら、とその様子をながめていた。少なくとも、広未関連であることは間違いなさそうだ。

「わかりました。和先輩が勝ったら、言うとおりにします。」

「よし。じゃ、行こうか。」

「はい!」

元気よくうなづく塩澤に、和は苦笑する。

どうやら彼女にとって広未が自分を送り届けてくれる未来はないらしい。

「遅かったな。一体なにをやってたんだ。」

「女の子の話を少々。塚本君と斎賀君は?」

「とつくに帰った。……塩澤、なに真つ青になつてる?」

女子トイレからいちばん近い階段にて、

壁に背中をあずける広未を目撃した和と塩澤はそれぞれ全く違う反応を示した。

和は小さく笑っただけだったが、それはおそらく広未が塩澤を待っていた事に対するからかいの表情だろうと

広未には判断できたが、

塩澤が顔色を失くす理由までは彼にはわからない。

おそらく和が何かをしたのだろうということはわかるが一体全体、彼女になにを吹き込んだのだろうか。

広未は和に多少責めるような視線を寄越すと、和はそれに微笑む。どうやら悪い事をしたつもりはないようだがやはり意味はよくわからなかった。

「……まあいい。塩澤、もう暗くなっただし家まで送る。ついてこい。」

「え！あ、あのでも、和先輩は!？」

「遥君に連絡をしておいた。もうそろそろ着く頃だと思っぞ。」

「え!？和泉君ここまで来るの?」

「ああ。学校にいると伝えたら場所はわかると言っていたからな。ということ、ふたりとも、行くぞ。」

結局、最後にひとり勝ちしたかのような広未の後姿をみて

和は多少面白くない気分になった。

『まだちょっと心の準備できてないんだけどなあ。』

遥の反応を思えば、若干怖い。

和はろくに自身の言い分もまとめていないのだ。

しかし隣に並ぶ塩澤が和以上に狼狽していたので、逆に和は冷静に

なれた。

まあ、当然と言えば当然だろう。

なにせ好いた男に告白をせねばならなかったのだから。

仕向けたのが自分とはいえ、和は少々謝罪したい気分になった。

「和！」

「和泉君、ごめんね、ここまで来てもらっちゃって。」

「広未君が連絡してくれてむしろ助かったよ。」

こんな暗い中ひとりで帰したくなかったし。広未君、ありがとう。」

「いや、全然。」

「あと塩澤さん、だったよね？こんばんは。」

「！こ、こんばんは。」

一瞬肩を揺らしながら塩澤がおずおずと声をあげた。

どうやら遥のオーラに多少圧倒されているらしい。

しかしそれが気に入らないのか、広未は強引に塩澤の手を取れば短く行くぞ、と声を上げた。

塩澤はおろおろしながらも、拒否する事無く広未のあとについていく。

和はそんな塩澤をみてにたり、と笑めば後姿に声をあげた。

「塩ちゃん！約束忘れちゃ駄目だよ！！！」

「！和先輩！！！」

「それじゃあまた明日ー！」

ひらひらと手を振る和をうらめしそうに見ながら
小さく会釈して塩澤と広末は歩いていく。
遠目から、広末が約束とはなんのことだ、と問いただしているらしい事がわかった。

「……明日って？明日もここに来るの？」

「ううん。」

「じゃあ個人的に彼女と会うの？」

「ううん。」

和の否定の言葉に、遥は首をひねる。

とりあえず、校門前に突っ立っていても寒い。

和は一言遥に自分達も帰ろう、と告げれば、遥もとりあえずうなずいた。

「和泉君に、聞いてほしい話があるんだ。」

「俺も、和に訊きたい事あるよ。」

「ですよね……。」

あはは、と苦笑する和に、遥はにっこりと微笑む。

「とりあえず、今日ここに和を呼び出したのは誰なのか訊きたいなあ。
あ。

広末君じゃないんだってね？」

「……！」

『ひ、広末の奴ううう……！』

先程まで幸せになってほしいなどと思っていた自分が憎い。
いや、塩澤には心から幸せになってほしいと思っているのだが。

しかし和はなんとか焦る心を押さえつけ、同じような笑顔を遙に向けた。

ふたりの手はしっかりと繋がれていて

遙の逃がさない、という無言のプレッシャーも感じていたが
元より今日は逃げるつもりなど和にはない。

「もちろん、全部話します。その上で、私の話も聞いてくれる？」

「……………なんか怖いなあ。あまり良くない話？」

「うーん…あの、変にまた誤解してないよね？」

「ああ、大丈夫。別れ話云々とは思ってないから。」

遙の言葉に、和はほっとしたように息を吐く。

「良かった。けど……………うーん、少なくともいい話ではないかも。

ちよっと、面倒事に巻き込まれたと言えればいいのかな。」

「……………聞くのがちよっと怖いよ。」

「とりあえず、帰ってお母さんの美味しいごはんを食べ終わってか
らということで。」

「そうだね。依子さん、待ってるから早く帰ろう。」

「うん。」

微笑み合うふたりは外から見れば単に仲のいいカップルだが
その間にはなんともいえない緊張した空気が漂っていた。

第一百十話「彼女が白旗をあげるとき・その8」

「……またなんかあったのか？」

「うーん、どうかしら？」

食後、くつろいでお茶をすする高明と依子を他所に笹森家の台所にはどこか緊迫した空気が流れていた。食器を洗う遙と、それを拭いて食器棚にしまっていく和。

いつもならばそこそ会話をするものの

今日はどちらから作り出されたものなのか、

どこか気まずい空気が流れてどうにも会話がし辛い状況だった。

「……………」

「……………」

正直な所、お互いに特別怒りがあるわけでもない。

和には多少の後ろめたさが、遙には多少の恐怖があった。

それが今、ふたりが口を噤む理由なのだろう。

片付けがすべて終わって、ちらりと壁にかかる時計をみれば現在時刻は20時過ぎだった。

遙はいつも遅くとも22時前には帰っていくので

そんなにゆっくりと心の準備をしてはいられない。

和は心の中を落ち着かせるように努めれば、リビングでくつろぐ両親の元へ歩く。

「片付け終わったから。」

「ご苦労様。お茶飲む？」

にっこりと微笑んで問われた言葉に、和は無言で首を振る。
そのまま遙に視線を投げかければ、遙も和を数秒見つめてふたりは
リビングを出た。

「……なにかしら。」

「……なんだろうな。」

興味津々な両親を他所に、ふたりは階段をあがり和の自室へと入る。
ぱたん、という扉を閉めた音がやけに響いたと感じれば
和は僅か肩を揺らした。

「……和泉君、ベッドにでも座って。床冷たいから。」

今日はいやに冷え込む。

和は暖房のスイッチをいれ、自分はキャスター付きの椅子へと腰か
ければ
ベッド脇へところどころと椅子を運んだ。

「和、そんな横着しなくても。」

遙が苦笑した理由は、和が座ったまま足で漕いで椅子を移動させた
からだ。

少しでも空気を和ませるために狙ってやったものだったが
恐らく遙もわかっていて呼応してくれたのだろう。
和も同じように苦笑いを浮かべる。

「……あのね、和泉君。」

「ん？」

ベッドに腰かけた遙は、足を床におろした状態なので

和と向かい合う格好になっている。

特に乗り上げて背中を壁にあずける気はないようだ。

和は遙がすっかりと自身の話を聞く態勢になっていることにまた少し緊張すれば

小さく唾を飲み込んだ。

真つ直ぐと遙を見つめる勇気がなかなかもてない。

それでも、誠実を通すのならばそうせねばなるまい。

和は太腿の上に置かれた両手でぎゅ、と握りこぶしを作れば覚悟をしたかのように彼と視線を合わせた。

遙は、向けられた瞳の強さに思わず息を呑む。

これはますますもってなんとも嫌な感じだ。

「……今回の事、確かに巻き込まれたんだけど。」

「うん？」

「私のすることを、黙って見守ってほしい。」

「……………」

「あのね、広末の学校ではね、深刻な問題が起きてるの。」

それを解決する為にはある程度、面の皮が厚い人間が必要なんだけど残念ながら信頼できてなおかつ根性ひん曲がってる人間がいない。」

「……和、その言い草はどうなの？」

よくもまあ、自分をそうも堂々と貶められるものだ。

遙は半ば呆れ顔で思ったが、和は特にそれについて何も考えていないらしく

無表情で遙の顔を見つめる。

「だって私の根性が曲がってるのも、猫被れるのも、事実でしょ？」

「少々の事では動揺しないひとが必要ってこと？」

「まあ……うん、そう。」

あのね、とある教師がいてね。その教師っていうのがとんでもない人間なの。」

「……その教師って、男？」

遥の瞳がきらりと光って、その双眸に危険な色が灯る。

和は一瞬怯みそうになったが、無言で首を縦に動かした。

「教師は……女子生徒をまるで自分の所有物のように扱ってる
とんでもない男なの。何人もの生徒が苦しんでるのが現状。」

「和、ちよつと待って。」

「ガードが固くて、なかなか証拠をつかめない。」

決定的な証拠が出ない限り、下手に動くと女の子達の恥が流出して
しまう。」

「和、」

「てっとり早いのは、囿捜査。懐に入りさえすれば証拠固めは容易
でしょ？」

「和！」

叫ぶように名前を呼ばれ、和は口を嚙む。

直視していた遥の瞳は、今や燃えるような色をしていた。

「和は他校生だよ？」

「別に、制服は借りれば問題ない。」

それに他校生だって思われたほうが都合が良いかもしれない。」

「どうして？」

「相手が私の弱味を握りやすいから。」

そうすればせまられても拒めない演技もしやすい。」

「他の人間がやればいいじゃないか！」

「だから、いないの、できるひとが！」

生徒会役員から直々にお問い合わせされたことで、私自身、無視できない内容だと思って。安全は保障するって言ってください」

「それだって素人のやることだろう？なにがあるかわからないじゃないか！

駄目、絶対に許可なんかできない。」

「和泉君！」

「駄目だったら駄目。」

そんな危ない男の下に和を放りこめだつて？無理言つなよ！！」

もはや激昂しそうな勢いの遙に、和は瞬間、何も言えなくなってしまう。

それでも、なんとか心を立て直せば、和はなおも食い下がった。

「私だつて、大概の事は無視できるよ。そこまでお人好しじゃないでも、実際問題、屈辱を受けてる女の子を知って

私が困になれる能力を持っていて、何もしないなんて出来ないよ。

私は……好きな人以外に触れられる恐怖を知ったから。」

和の言葉は、遙が傷付くかもしれない。

だからこそ、なるべくならば言いたくはなかった。

目の前に居る彼の顔が、どんどん歪んでいく。

ああ、やはり、言いたくはなかった。

和は、心の奥がナイフで切られたかのようにちりちりと痛む。

自身の言葉で遙の心が抉られるなど、あってほしくはないのに。

「和……ごめん、俺、」

「違うの。責めたいんじゃない。」

ただ、その教師に最高に苛立ってるだけなの。」

「和……」

「だから、協力するのを許してほしい。」

「お願い、絶対に危ないと思うたらそれ以上つっこまないから！」

「……………」

遥の瞳は、揺れていた。

彼女の言い分は、よくわかる。

遥とて、鬼ではない。

確かに話を聞くだけでもその男に吐き気をもよおすくらいには嫌悪感を抱いていた。

けれど。

自分の大切な女性を、そんな相手に差し出したいと、誰が思うだろう。

出来る事なら、安全なところでずっと囲ってやりたいとさえ考えってしまうのに。

遥は何かの衝動が自身の心を突き抜けていくのがわかってがむしゃらに頭をかき回した。

「……………っやっぱり駄目だ。」

「……」

「ごめん、どうしたって俺は許可できない。」

「和泉君……………」

「そんな男が、和に少しでも触れると思うと嫌だ。」

そいつが、和を視界に留めて、和を和だと認識するのさえ許したくない。」

「……………」

そこまで、彼の心は強いのか。

和は遙の深遠を思い知れば、もはや無理だと諦める他なかった。完全に、折れてしまった。

和は、渡された資料のことをぐるぐると考えてはゆっくりと目を閉じる。

遙は、そんな彼女の様子に何を思ったのか。

ゆっくりと和に近付けば、その頭を優しく撫でる。

「……要は、決定的な証拠を掴めればいいんだよね？」

「え？」

ぱち、と和が瞳を開くと、目の前でにっこりと微笑んでいる遙がみえた。

和は今更ながら、その美しい顔にしばし呆ける。

「ガードが固いということは……」

普段女性を連れ込む場所に何かを仕掛けるのが難しいし何よりも現場を盗撮した証拠を提出なんてしたら相手の女の子が傷付くわけだ。」

遙の言葉に和はうなずく。

「勇気を出して、女の子達が証言してくれればいいけど……」

決定打がうてないかぎり学校側がどう対応するかも気になるか……確かに、難しいね。」

「そうなんだよ。だから……」

「そうだね、囮作戦はいちばん有効だし確実だ。」

「……ね、和。今日話したひとたちには近いうちにまた会う約束して……」

「うん。明日、和泉君と直接話したいって……」

「それじゃあ、ちようどいい。」

「……和泉君、誰か他の女の子に囿を頼むの？」

恐る恐るといった様子で囁いた和の言葉に、遙はにっこりと微笑めばひとつ小さなキスを落とした。

「!? な、なぜいきなり、」

「なーんで今更これくらいで照れるかなあ。大丈夫だよ、って態度で示したのに。」

「た、た、態度って！言葉でいってくれれば十分です！」

真つ赤になって狼狽する和を楽しそうに遙が見つめる。

先程の暗い空気は一掃され、部屋にはなんとも甘やかな雰囲気充滿していた。

「週末はお仕置きね？」

「え!？」

「俺に内緒で他校に行つて、なおかつそんな話に巻き込まれて。お仕置き決定。」

「いやいやいやいや。昔なら黙って実行してたよ？」

それをきちんと打ち明けたんだから成長したでしょ!！」

「黙って実行なんかしてたらどうなつてたと思う？」

「う。」

遙の後ろに氷の世界が見えて、

和はゆつくりとキャスター付きの椅子をベッドから遠ざける。

しかしそれを許す事無く、遙は和の腕をぐい、とひっぱれば和を抱えたまま自身もベッドに乗り上げた。

座った態勢で、遙の上に乗る形だったそれがぐるん、と視界が反転したかと思うと何故か押し倒される形になる。毎度思うことだが、この男は女を組み伏せるのがうますぎる。和は胡乱な瞳で目の前の恋人を見やった。

「……なにかな、その表情は。」

「やっぱり今回お仕置きされるのは理不尽だと思う。」

「まだ言う？」

「だってさあ。ちゃんと許可をもらおうとしたよ？頼ったよ？」

「和、ひとつ忘れてることがあるねえ。」

するり、と頬に滑る遙の手の平を感じて、和はびく、と身体を揺らす。

遙の異様な雰囲気は圧倒されてしまいそうで

和はそれがなんともいえず嫌だった。

『……ここ最近、なんか負けてばっかな気がするなあ。』

不機嫌に眉を顰めながら、それを隠す事もせず

和は自然低くなる声を止められない。

「……忘れてることって？」

「………なんで急にどんどん不機嫌になってるの？」

半ば睨むようになっていたのだろう。

先程の雰囲気と一変した和を見て、遙が目を丸くする。

今責められる立場であるのは自分だと信じて疑わない遙の態度が和をどんどん苛立たせているのだが、

彼はそれに気が付いていないようだった。

「これ以上、なにが不満なの。なにを伝えればいいの！
そんつつなに束縛したいんなら首輪でも付けて鎖に繋いどけば！？」
ついに何事かが爆発した和は、遙のみぞおちを思い切り蹴り上げる。
容赦ない攻撃に、遙がうめき声をあげてベッドに倒れた。
和は、自身の体がベッドと彼に挟まれる前に転がって脱出する。
相変わらず機敏な動きだ、と遙は痛みを耐えながら横目で彼女を見
やった。

「でも屈服とか絶対しないから！！」

びし！と人差し指を遙に突きつける和をみて、
遙は疑問符を浮かべながら和をしばし呆然と見つめていた。

それから沈黙がしばらく部屋を包み込めば、
遙はやっとの思いでゆるゆると身体を起こす。
そうして和に発言の許可を求めるかのように、彼は拳手をした。

「なんですか、和泉君。」

「どうして急にそんなこと言うの？」

「……具体的な理由はわからないけど怒る事ってそういうネタなん
じゃないの。」

私、必要以上に束縛されるの好きじゃない。というか嫌い。」

「……………」

「私の交友関係全部に口出す権利って和泉君にあるの？
例えば和泉君にだって、私が知らない異性の友達とかいるんじゃないの。」

それでなくたってアンタ付き合ってた彼女多いんだし。

立場が逆だったらひとりひとりどんな人間か訊きそうな勢いじゃん。

「

睨まれながら言い募る和に、遙は凶星をつかれた様な顔をする。
やはり、と思えば自然出るため息を和は止められなかった。

「……じゃあ、どうしたらいいの？」

「え？」

「俺、こうやって小出しにしないとどうすればいいのかわかんないよ。」

全部ひとり占めしたいとか理不尽な事を毎日考えてる。」

「！」

「俺はかまわないよ。それこそ今までの女性遍歴全部和に話したって。」

和の知らない女の知り合いだって全部紹介する。

……そうすることで、和が俺に縛られてくれるんなら。」

「なんでそんなことをする必要が？」

心底くだらない、と冷めた目で彼を見つめれば遙はため息を吐く。

「一生、わからないだろうね和には。」

俺だって、自分のこんな感情捨てたいって何度も思うよ！

和みたいに自由な心でいたいっていつも！でも、できない。」

「……………和泉君。」

「和が俺以外の男と楽しそうに話してるのが嫌だ。」

和が俺以外の男に笑いかけてるのが嫌だ。

和が俺以外の男に触れているのが嫌だ。

見るのも嫌だけど、知らない所でそんな事をされるのはもっと嫌だ
！」

激昂する遙を、和はどこかぼんやりと見つめていた。

これこそ温度差というものなのだろうか。

彼女はどごその安いドラマでもみているようだ、と彼の言葉をあまり深刻に受け止められずにただただ耳に入っては抜けていく。

そうしてひとつため息を吐けば、少しあいていた距離を詰めて和は遥のすぐ正面に立った。

遥は、和の様子を無言で見ている。

両手で遥の頬をゆつくりと包み、和は柔らかく遥に微笑めば遥は少し目を開いて真っ直ぐと遥を見つめる和を見つめ返した。

次には、和は息を小さく吸い込んで、頭を若干引く。勢いにまかせて、強か遥の頭に自身のそれを叩き付けた。

「っ……！！！」

予想外に頭突きをされ、遥は痛みに悶絶すればその場につづくまる。和はそんな彼を冷ややかに見つめていた。

涙目になって下から和を見つめる遥に、一言呟く。

「馬鹿じゃない？」

「！な、」

「あんたそんなさあ…四六時中そんなこと思ってたら疲れるじゃん。もつと余裕持ちなさいよ余裕。」

「それができれば！」

「なにがそんなに信用できないわけ？」

私が浮気すると？でもそういうことじゃないんだよね？ただ嫌なんでしょ？」

「……………それは、」

ぐ」と詰まる遙に、和はため息を吐いた。

「苦しいだけじゃん、そんなの。」

なんか深刻そうに言うけどさあ。

逆に訊くけど、どんな私だったら君は満足するわけさ。」

床に座り込んでいた遙に視線を合わせるように、

和はかがんで彼の顔をのぞきこむ。

真っ直ぐな瞳に、遙は一瞬言葉を詰まらせた。

「和泉君の言う通りにしたらいいの？」

それとも和泉君と同じようにわかりやすく嫉妬すればいい？」

そうしたらあなたは永遠に安心する？」

「……和、意地悪なこと訊くなあ。」

苦笑する遙に、和も同じような表情を返す。

「別に、いいよ？私が他の男のひとと話すたび苛々しても。」

まあ、今に始まった事じゃないし。ただ……」

「？」

「こうやって苦しむようならやっぱり離れるべきなんじゃないかな
って思うから。」

お互いに辛いだけになっちゃったら、いっしょにいるのは嫌じゃん。」

「

「……和、」

「でも私達、こうやってけんかできるし、随分かつこ悪い所も見せ
合えてるよ？」

悪戯っぽい微笑を浮かべる和の顔を、遙は驚愕に目を見開いて

固まりつつも凝視する。

その遙の様子が面白く、和はぶ、と噴出した。

「勝手に追い詰められて深刻になんないですよ。

別にいいじゃん、私が他の男のひとと会うのが気に入らないんなら拗ねれば？」

そのたび私は適当に相手してあげるよ。

そんで仲直りすればいいじゃん、そうでしょ？」

だから、ああやって追い詰めるみたいにキレるのやめてよね！」

私の体力がもちません、と言って和が遙の鼻をつまんだ。

遙が苦しそうな表情をしたまま、くぐもった声ではい、と返事をする。

「ま、今回は私も怒っちゃったから悪かったけどさ。

お互いに深刻にならなきゃ冗談で済ませられる事なんだから。

わかりましたか、和泉遙君。」

鼻から手を放して、笑う和の顔をしばし見つめれば

遙は疲れたような様子で深いため息をひとつ落とす。

どうやら、彼の中でもう今しがたの決着が着いたらしい。

「……………もう。俺、一生和にはかなわないね。」

「そう？」

首を傾げる和に、遙が苦笑してすぐ、彼女をひっぱって自身の足の間に座らせる。

向かい合った至近距離が多少恥ずかしく感じれば

それを誤魔化すように無表情になりながら和は首を傾げた。

「ずっと負けっ放しだもん。いつか勝てるのかなあ……。」

ため息と共に吐き出された遙の言葉は、

先程和が考えていたものとまったく違っしよで目を丸くする。

お互いに相手に負けていると思っっているなんて

一体、勝者はどちらなのだろうか。

しばらく考えてもわからずに、やがて遙が施す口付けに翻弄された和は

思考が溶け出して消えていくのを止められなかった。

『勝者なしで、いいのか。』

ぼんやりと頭の隅で導き出した結論は、しかしいかげんなものながら

ふたりの関係を簡潔かつ正確にあらわしているのではないかとさえ思っただった。

「……………私、ここに居たくないんですが。」
「なに言ってるの。和が居なきゃどうしようもないでしょう。」
「いや、そうなんだけどさ…………。」

金曜日の放課後。

約束通りY駅にて待ち合わせた面々と顔を合わせて

眼鏡と髪を解除した和は

とあるファーストフード店にて隅の席へと腰かけていた。

店の端っこを選んでも、あまり意味がない。

なぜなら今行動を共にしているこの集団は、あまりにも目立ちすぎる。

和は店内中の視線がこのテーブルに注がれているのがわかって静かに憂鬱になっていた。

今、和の向かい側の席には

塚本、斎賀、広未が順に腰かけていて隣にはいちばん目立つ遙がいる。

この神に祝福されたかのような面々に囲まれていれば憂鬱にもなるというものだ。

女性の視線が心なしか刺々しい。

視線だけで傷を付けられるというのならば、

今、和の肌には無数の傷跡ができてることだろう。

「……………和を呼び出したの、彼だったんだ。喫茶店でお会いしましたね。」

少し禍々しいオーラをその背中にしょって、遙はにっこりと微笑む。

相対する塚本はといえば、彼のそれを意に介さずひょうひょうとなんのにごりもない微笑みを湛えていた。

「久しぶりですねえ、さっちゃんの泣き顔みちゃって、あの時はすみません。」

「……さっちゃん?」

ぴく、と不愉快そうに眉を動かした遙に

和は一瞬肩を揺らしながらも、落着こうと目の前のコーヒを飲んだ。

相変わらずファーストフードのそれはあまり美味しくない。

密かに眉を寄せながらも、しかしそんなことを思っている場合ではないと

和は遙に顔を向けて意図的に彼の名前を下で呼ぶ。

「遙。私は何度も嫌だつて言ったからね?一応、苗字でしょ?」

「……なんつか気に入らない。」

塚本さん、和の事狙ったりしてませんよね?」

「ん?まあ、最初はけっこう本気でいこうかと思ったりしたけど。」

けろり、と言つてのける彼に和はまたも引つ掻き回すつもりかと睨みつつ視線を寄越す。

その様子に塚本がけらけらと笑った。

「和泉君の溺愛ぶりみてなおも挑むほど俺根性ないな。」

いいね、相思相愛。うらやましーなあ。」

「ね。万事があんなだからまともに対手すると疲れるよ?」

「ちよ、さっちゃんひどい!」

「寸分違わぬ事実だと思つが。」

和の言葉に、抗議をしようとした塚本だったが

広末が更に和のそれを肯定し、最終的に斎賀までもがうなずいたので結局塚本は遥以外の全員にくらげのような男だと称されてしまった。

「……うん、まあ、よくわかった。

和から訊いたんだけど、塚本君と交友関係築くようになったのって喫茶店の代金請求がきっかけだって？」

「そうそう。まさかね、逃げ帰ったあの店のコーヒー代を請求されると思わなくて。

だからこそ、さっちゃんに興味が沸いたんだけどねー。

でも、和泉君にもすごい興味あるなあ。」

「俺に？」

「だってそこまでひとを好きになる事ってなかなかないじゃん？
どんな感じなのかなーと思って。」

なによりそんだけ色男なのに彼女一筋ってすごいよね。」

笑う塚本に、斎賀が横から確かに、と呟くように同意したので

なんとなく遥は戦意喪失してしまった。

和はそれにほ、と胸をなでおろす。

「それで…遥君。今回の一件についてなんだけど。」

「ああ、ごめん……それなんだけど、

やっぱり広末君の頼みだとしても受け入れられない。」

本題へとうつつた早々に、広末の言葉を遥が一蹴してしまう。

それでも斎賀は黙って引き下がるつもりはないらしく
きっぱりと拒否する遥をなんとか説き伏せようと、

目の前に資料を取り出して遥へと突き出した。

しかしそれを一瞥すれば、遥はにべもなく斎賀の元へと返してしま
う。

傷付いたような齋賀の表情と、少し面食らったような広未と塚本に、その反応をみた遙は狼狽して両手を振った。

「ごめんごめん、ちょっと誤解させるような対応をしてしまって。詳しい話は和から聞いたから、いちから訊く必要はないと思ったから。」

俺は今回、和を巻き込む事は絶対にできないけれど協力は惜しみなくするつもりだから！」

遙の言葉に、和以下四名は、全員が全員疑問符が浮かんだ顔をしている。

「ええ、と、和泉君……今回の件を解決するには、

彼女が協力してくれないことにはどうしようもないと思うんだけど……」

「そのことなんだけど。実は俺にある提案があるんだ。」

遙の言葉に、広未が訝りながらも提案？と疑問の声をあげる。

「そう。多分こっちのが安全だから、

みんなの精神的負担も少ないと思うんだ。」

「……その提案の中身って、なんなの？」

恐る恐る、といった風情でたずねた和に、遙がにっこりと微笑む。

「まずは、俺の話を黙って訊いてほしい。」

静かな遙の言葉に、その場に居る全員が固唾を呑んで注目していた。

第百十一話「彼女が白旗をあげるとき・その9」

「うーん……」

遥の話が終わって、彼以外の四人は皆眉間に皺を寄せ
難しい顔をしながらもうなり声をあげていた。

「確かに、そっちのが俺らとしては安全だし助かる、けど……。」「
戸惑ったように言い淀む斎賀に和がうなずけば、遥の方へ顔を向け
る。」

「和泉君、それってバレたら終わりじゃない？」

「なんとなく、そういうの見抜くのうまそうだけどああいう奴って。」

「

和と塚本の言葉に広末と斎賀もうなずく。

遥は四人の反応は予想しているものだったのか
につこりと微笑んで余裕の表情を見せていた。

「実物をみればその心配は完全に払拭されると思うよ？」

「！遥君…ずいぶん自信だが、その、そんなに……なのか？」

広末が恐る恐るといった風情で訊ねれば、遥はまたも無言で微笑む
のみ。

それだけ自信があるのだから相当なのだろう。

誰もがそう思って結局はうなずく他なかった。

もとより、遥の作戦を受け入れなければ斎賀は自身の責任をまっ
つできない。

誰よりも学校を愛する彼だからこそ、どんなものにも縋りたい思いだった。

「でもそういえば。そのひと、受け入れてくれるの？
すすんでやりたがらないでしょう、普通感覚だったら。」

和の疑問の言葉に、遙がああ、と声をあげる。

「それは大丈夫。絶対に断らないから。週末に話つけておくよ。」
「和泉君……ありがとう。本当に助かる。」

斎賀が頭を下げたが、遙は苦笑して顔を上げて、と困った様子だ。

「俺は、和が巻き込まれていなかったら何もしていないだろうし
本当にたまたまだから。」

「それでも、協力してくれた事にはかわりない。
笹森さんもだけど、和泉君もたいがいお人好しだね。」

その言葉に、顔を見合わせ和と遙が苦笑いをする。
お互いにあつた色々な出来事を反芻していたのだろう。

「まあ、同じ女性として色々思うところがあるからねえ。」

「俺は、和の言葉にただ従ってるだけ。」

「……本当に、ずいぶんと仲が良いんだね、ふたりは。」

斎賀のしみじみとした言葉に和は目を見開けば
我慢できずに噴出してしまふ。

その様子を、斎賀がまじまじと見つめていた。

「斎賀君、面白い事言うねえ。そりゃあ仲良くなきゃこつなっとな

いでしょ。」

「いや、まあ、そうだろうけど。もっと碎けて言えばラブラブだね
って事だよ。」

「……うわ、鳥肌立った。」

眉間に皺を寄せて腕をまくる和に、遥が涙声で和！と叫ぶ。

その様子を面白そうな顔をして見つめているのは広未と塚本だ。

斎賀といえば、多少面食らったという表情になっていたが
昨日の出来事を反芻してひとり納得してうなづく。

広未のような人間であるということを、今の今まで失念しかけてい
た。

それほどに、遥の隣に座る彼女を普通の女の子として見ていたのだ。
しかし、これほど見目麗しい彼の前でも、彼女の態度は変わること
はない。

それに斎賀は好感を持った。特別な意味ではもちろんないが
彼は案外、ひとの区別が激しくどうでもいい人間にはとことん冷た
いものだ。

それを勘違いして人当たりのいい人間だと評価する周りはすっかり
彼に騙されている。

誰にでも優しいのではなく、どうでもいいと認定されると
彼にとってそのひとたちは単なる人間としか認識されなくなる。

分け隔てなく、といえば聞こえはいいが、
要はどれもこれも同じに見えているだけなのだ。

しかしそれを逆手にとることも狙ってやっているのだから、
彼もそうそう単純な人間ではない。

広未も、そんな彼だからこそ従ってしまう面は多かった。

責任感の強い斎賀は、人望が厚い事でも学校内で評判だが
しかし彼はひとが好きというわけでもない。

そんな斎賀がなぜ生徒会長になったのかと問われれば
学校という箱が好きだから、という他ない。

彼にとってそこは最愛の地であり、
学校生活をただ無為に過ごすことよりも、特別な事をしたいという
思いは強かった。

全校生徒が幸せになれるように、とか、誰かのためにという発想は
ない。

ただ自分のしたいことが、イコール生徒のために繋がったからにす
ぎない、と

斎賀は自身でよくそんなことを思う。

それでも、広末からはよく斎賀が真面目だと評されるし
ひとと距離を置いているにも関わらず

集団を好きなお前は変わっている、とよく言われるものだ。

斎賀は、集団が生むあの力強さが好きで

なにかの行事ごとに爆発するあの一体感も好きだった。

冷めているのか熱いのか、自分でも時々自分がわからなくなる。

表層しかなくてくれない周りに勝手に失望したり、

かといってこじあけられると無神経だと感じたり、

斎賀自身、彼の事を面倒な人間だとわかっていた。

集団の中にいれば、あまりそういうことは気にならなくなる。

ひとりひとりが一個の集合体になったとき

個人はなくなりただただ同じものをみるひとつのエネルギーになる。

そんなとき、自分は一時寂しさから解放されるのだ。

寂しい、という言葉は、斎賀の胸にどこかすとん、と落ちた。

ひよっとすると探しているのだろうか。たったひとりを。

だから表に自分が出るのかもしれない。

そこまで考えたとき、名前を呼ばれている事に斎賀は気が付いた。

「どうしたの？なんだか考え事してるみたいだったけど。」
「……いや、ごめん。なんでもないよ。」

目の前に座るふたりは、まるで違うようにみえて漂う何か酷似している。

それは、お互いに同じ時間軸を生きていく上で築かれた絆のようなものだ。

きつとふたりのこの空気にあてられたのだ。

斎賀はそんなことを思えば、今の今まで自身が考えていたことに苦笑した。

「それよりも、笹森さん、なにか言いかけたんじゃないかな？」

斎賀の言葉に、和が声をあげる。

「あ、そうそう。私からもひとつ提案なんだけど。」
「なんだ？」

広末の問いかけに笑んだ和の顔は、塚本と斎賀をなんともいえない複雑な気分させた。

女版、津田広末。

彼女のその表情は、その看板を背負うにじゅうぶんなものであった。

「会長、なんかずいぶんふたりのこと気に入ったみたいだね？」
「……そんなの、お前にそっくりそのまま返すよ。」

帰り道、逆方向になった齋賀と塚本のふたりは並んで電車に揺られている。

齋賀の言葉に、まあねえ、と塚本が笑んだ。

「最初はちよつと良からぬ事も考えたんだけどね。
どうにかしてさっちゃんを手に入れられないかな、とか。」

「一度ロツクオンしたのにやめたの？塚本が？」

信じられないな、と目を丸くする齋賀に、塚本がげらげらと笑う。

「見ちゃったんだよあ、彼の為に泣くさっちゃん。

ああいう性格の子が泣くつてでかいじゃん？それで無理だなーって
思ったの。」

「それつて口説く前から失恋したつてこと？」

「まあねえ。でもふたり並んでる所、今日改めてみて思ったけど
和泉君とさっちゃんと一緒にいるの見る方が楽しいみたい。」

「ふうん？……ま、わかる気はするけど。」

齋賀の言葉に、会長、と呼びかけて塚本がにやにやと顔をゆるませ
たので

なにやら悪い予感が齋賀の心に過ぎった。

「……なに。」

「会長、初恋まだでしょ？」

「は？」

「言っておくけど、お付き合いした女の子がいないでしょ、とかそういう意味合いじゃないからね。」

「……お前はそうじゃないのか？」

「俺え？俺はねえ、初恋のときに深く傷を負ったから誰も好きになれなくなっちゃったの。純情だから。」

ふふ、と微笑む塚本の口調は相変わらず軽かったが、

その言葉は真実なのだろうと察しが付いた。瞳の奥が冷えている。

「……お前も、女遊びはほどほどにしたら？いつか怪我するぞ。」

「うーん、女の子自体は好きなんだけどな。ムズカシイよね。」

「……俺も別にそんなストイックなわけではないけどさ。」

言ってからどこか気まづくなったのか、

齋賀はひとつ咳払いをしてから目を僅かそらす。

そんな彼を見て、塚本は先程のような嫌な笑みをまた顔に作った。

「会長つて案外ドライだもんねえ。」

「ていうかちゃんと正式に段階踏んで付き合い合った事ってあるの？」

「……まあ、ぼちぼちは。」

完全に目を逸らしあさつての方向をみながら、

齋賀は言い辛そうに言葉を紡ぐ。

そのまましばらくぼんやりと流れていく車窓からの景色をみつめていたが、

やがてぼつ、と齋賀の口から声もれた。

「いつかは、まあ、なんとかなるだろ。……若いし俺ら。」

その言葉に一瞬目を丸くした塚本は、続いてふ、と笑う。

「……いやあ、あそこまでは、どうなの？」
「……うん、一生ないかもな。」

逡巡の後、割とはつきり答えてしまった齋賀は
塚本と顔を見合わせてお互いに複雑な笑みをたたえていた。

「広未、夕飯食べてく？」
「ああ……そういや最近行ってなかったな。」

相変わらずこのふたりは仲が良い。
広未と和が並ぶこの光景を見てさすがに何かを思うわけではないが
遥にとって寂しさが過ぎる瞬間でもある。

「あ、そういえば。やっと新刊出たよね。5年ぶりだった？」
「あのひとは遅筆で有名だからなあ……。正直、若くないし
生きてるうちにもう出ないんじゃないかとまで思ったな。」
「確かに。ファンはかなり熱心なひとが多いから文句もそう出ない
んだよねえ。」

「つつか漫画家よりもそのテの文句は少ないかもな、小説家のが。」

「かもな。律儀に間隔あけずに書く有名作家のが珍しいかもしれん。」

「でもほら、あのひととさー。漫画家のくせに年間掲載率が何%なんだったつけ？」

週刊誌に連載してる作家のくせにね。」

「あれはまた特殊だろう。さすがに俺は面白くとも読む気になれない。」

「同意。人格疑う云々より待つのが辛いわ。」

和を真ん中に挟んで並んで歩く三人は

一体どんな関係にみえているんだろうか、と遥は下らない事を考える。

案外、三角関係にでもみえるかもしれない。

そこまで心の中を過ぎった所で、いいかげん馬鹿馬鹿しいと苦笑した。

「あ、和泉君ごめん、つまんなかった？ぼけつとした顔してる。」

和の言葉に、遥が悪戯っぽく笑う。そうして和の手をきゅ、と握った。

「つまらなくはないけど寂しいな。」

「……はいはい。」

べり、と勢い良くつないでいた手を離されて

遥は不満そうに口を尖らせた。

その様子に、広未がおかしそうに笑う。

「相変わらずだなあ。遥君は何年経ってもそのままなんだろうね。」

「それ、広末君もいつしよじゃないの？塩澤さん、かなり可愛いみたいだけど？」

「どうだろうな。からかいがなくなったらちよつとは控えるかもしれない。」

「……塩ちゃんは多分一生あのまんまじゃないかなあ。」

和の言葉に、広末は心の中でどこか納得してしまふ自分がいた。

その日、広末は和のすすめもあり笹森家にて夕食をとった。

広末が帰る時間と同時に遙と和がそろって家を出たので

遙の家に週末泊まる事が広末に露見してしまい

和はしばらく彼にからかいの言葉を思う存分かけられてしまふのだった。

「和ー。先にお風呂入る？」

すっかり勝手知ったる他人の家になった遙の部屋を

和は複雑な思いのままうろろしつつ、くつろぎつつと

居心地の良い時間を過ごしていた。

リビングにてコーヒーを一口飲んだ時だった。

時刻はもう夜9時をまわり、そろそろ風呂を沸かすと先程遙が席を立っていた。

和はそのこともあって、悪いと思い首を振る。

「和泉君、先に入っつていいよ。」

その和の答えに首を傾げつつ遙がそう？と声をあげたが次の瞬間にはあ、と何事かを思いついたような顔になった。

「いつしよに入るうか。」

「はい？嫌に決まってるじゃん。」

遙のとんでもない発言を一蹴しようと眉間に皺を寄せた和をしかし彼はにっこりと微笑みながらそうはさせない、と彼女の懐に入り込む。

「お仕置きは確かに理不尽だけどさー。ご褒美はほしいなあ。」

「はい？」

「だって今回、俺は和の意見を優先して手助けをしたわけだよ？それにたいしてなんらかの見返りはほしいと思ってもいいじゃない。」

「それは……か、感謝してるけど。」

「塚本君の件にしたって、今回たまたま無害だったから良かったけど。」

和は基本的に男の機微に対してえらく鈍感なんだから。

そこは自覚してくれないと困るよ。」

「う。」

「昔からの知り合いならともかく、新しく出来た異性の友達は警戒したくもなるよ、和だもの。」

つらつらと言ひ募る遙に、珍しく和は押されそうになる。

しかし、和とてこのまま言い包められるつもりは毛頭ない。

「……じゃあ、和泉君は見返りがほしくて今回の件に協力してくれ

「たんだあ。」

「え？」

「私は、実花ちゃんの事があつたときも、ふたりの両親と色々あつたときも」

「見返りなんて何も考えないでただ和泉君の幸せを願っただけだったんだけどなあ。」

「あ、あの、それは、」

「同じ気持ちじゃなかったなんて、悲しいなあ……。」

「和、そんなことないよ！俺だってなんにも見返りなんてほしくない！」

和が笑ってくればそれでいいんだ！！」

そこまで言つて、遙は自身の口を縫い付けなくなった。

こんなに勢い込んで言つてしまったことを、もう取り消すことなどではしない。

案の定、和が勝者の笑みを顔いっぱいたたえて言った。

「じゃあ、お風呂お先にどうぞ？」

「……和の鬼畜う……。」

涙声でへなへなとくずおれる遙に

にっこりと微笑んでそれはどうも、と答える。

そんな彼女をうらめしげにみつめながらも、

ため息を吐いてすごとごとひとり風呂場に向かう遙を

和は不思議な気持ちでみつめていた。

結局、いつも恋人らしい行為をするときに翻弄されるのはいつだって和だ。

それは経験の差だとか、根本的な性格によるものだとか、色々ありはするが

だからこそ、遙がああも落ち込む理由が和にはよくわからなかった。普段散々、無茶な事をしておいて誰の事を鬼畜だなどと言うのか。朝に足腰がだるくて立てなくなったことだって一回や二回の話ではない。

それだけ身体に彼を刻み付けられていて、これ以上何を望むというのだろう。

和はひとり首を傾げながらも、コーヒーをまた一口飲んだ。

今夜だって、きっと彼は深夜、場合によっては朝方まで放してはくれないのだ。

それを思って和は少し頬を赤らめる。

ああ、とんでもない男に惚れられてしまったのだなあ。

改めてしみじみと恥ずかしい事を考えて、和の顔は複雑な表情になりっぱなしであった。

「ちょ…っと！和泉君！！」

「うん？」

「なにしてるの！」

「うーん、和、今そこまで身体だるくないでしょ？」

毎回、執拗なまでに求める彼に驚きながらも

結局は受け入れるしかなく次の日には疲労が蓄積される。

昨日もきつと、そんな風に彼の腕の中で翻弄されてしまうのだろうか
と思っていた和は

正直、いつもよりあっさりとしていた彼に安堵した。

何故そうだったかはわからなかったが

なにはともあれ、明日の朝はきつとすっきりと起きられるだろう。

程よい疲労感だけを覚えつつ、和はすやすやと眠りについた、はず
だった。

そうして今朝。和は目覚めた瞬間に頭になにかの感触が伝わり

寝起きのぼんやりした脳で一体なんだろう、と一、二度まばたきを
する。

はつきりしてきた視界にうつっていたのは遙で、

横向きに寝ながら和の頭を優しく梳いているのが彼だとわかった。

しかし、とここで不思議に思う。

現在時刻はおそらく朝の6時頃であろうと推測される。

それなのに遙がはつきりと意識を覚醒させているのはなぜなのだろ
うか。

あまつさえ、なぜ自分の頭を撫でているのか。

疑問符だらけの和をよそに、目の前の遙はただ微笑んでは
なぜか横に居た身体を和の上へと跨って移動する。

ちょうど、いつものように押し倒されている格好と同じだ。

和の顔横に置かれた遙の両の手の平が、なんともいえず恐ろしい。

和は恐る恐る和泉君、と呼びかけてみると遙が艶めいた声で耳元で
囁いた。

「遙、って呼ばないとだめだよ。」

そうして耳を舌で這われ始めたところで、和は叫び声をあげたわけである。

ここまですでが先程まで起こった出来事で、時間を今現在に戻すと遥の問いかけに和がはて、と首を傾げたところである。

確かに、和は今それほど身体がだるくはない。

体調はむしろ良好かもしれない。

そう思ってきよとん、と遥の顔をみつめる。

目の前の男は、ただ微笑むばかりだ。

「朝にしたこと、今までなかったでしょ？」

今日はねえ、絶対にしたいなと思ったんだあ。」

「え、あの……」

「和に体力を残してあげないと辛いだろうと思って。」

本当は俺はいつも通りにしても良かったんだけど。

和が可哀想だからね。」

にっこりと微笑む遥に、一瞬はあ、と受け入れそうになったが

和は慌てて彼女のパジャマのボタンを外している彼の手を握り締め、

だめだ、と叫んだ。

しかし遥はそれを意に介す事なく、行為をどんどんすすめてしまう。

和はこうなったときに自身の勝率が恐ろしく低い事をよく知っていた。

「や、だあ、こんな、明るい、や……！」

「可愛い声。もっときかせて？」

嫌がる声っていうのも、すごいくるなあ、ぞくぞくする。」

くすくすと笑いながら愛撫を続ける彼にどう反応していいかわからず和はただ翻弄されるばかりだ。

「和の綺麗な身体、隅々までよくみせてね。」

にっこりと微笑みながら、考えたらお風呂場じゃなくても別にいいんだよね、と

呟いた遥の言葉を耳にして、和はぎ、と顔を蒼褪めた。彼は、昨夜のことをなにひとつ諦めていなかったのだ。

「ちよ、や、和泉く、」

「ああ、まだ名前で呼んでくれないの？困ったなあ、もっと可愛がってあげないと。」

妖艶に微笑む彼の顔を和は視界に確認すれば、

和は赤くなったり青くなったりとその顔をころころ変えて忙しい。

久々にマンションの一室から恐怖の叫び声が響き渡ったのは、ついに一糸纏わぬ姿を彼の前に和が強制的にさらされてしまった時であった。

第一百十二話「彼女が白旗をあげるとき・その10」

「はじめまして、加藤優かとうゆうです。」

にっこりと微笑んだその先にいるのは、なんとも可愛らしい女子高生だった。

さらさらで栗色の髪は染めてあるようだがずいぶんと彼女に馴染んでいる。

肩より少し上のストレートなそれは、触ったら柔らかそうだ。

目はぱっちりとした二重で、肌は雪のように白く、唇は艶やかな赤。惜しくも髪色は黒くはないが、

現代版「白雪姫」を地でいけそうなその容姿に

その場に居る全員がなんとも間抜けな顔をしていた。

「……なるほど、聞きしに勝るね。」

ぽつ、と呟いた和の言葉に、斎賀、塚本、広末が肯定する。そうしてまずは斎賀が、微笑んで会釈をした。

「今回は、こちらのご無理を承諾してくれて本当に感謝してます。」
「いえ、厄介事を持ち込んできたのは彼なのでお気になさらずに。」

その加藤の言葉に、和はどんな取引をしたのかなあ、とぼんやり頭の中で考えた。

外で会う姿もあまり目撃されたくはないということでも曜日を待って生徒会一行、和と遙は再会を果たした。今回も例によって放課後の生徒会室である。

考え事をしている間に、三人の挨拶は済んだようで
気付けば加藤は和を真っ直ぐ見つめていた。

値踏みするかのようなその表情に、どこか居心地の悪さを感じたが
和はひとまず、表には出さずにつこりと微笑んだ。

「はじめまして、笹森和です。」

今回は、ほぼ私が巻き込んでしまったようなものです、ごめんなさ
い。」

「いいえそんな、お気になさらずに。あなたが…遥の恋人なんです
ね。」

そう言つて微笑む彼女に、和はどこか不穏な空気を感じ取る。
しかし他の男連中はふたりをよそに何事かを話し込んでいた。

「あ、こつからは敬語なしでいいかな？」

一応一回きりではあるけど、チームを組むわけだし。かたくるしい
と疲れるから。」

斎賀の言葉に、加藤が首肯する。

「そうね、あまり気を遣いすぎるとも良くないだろうし……」

ちよつと遥。なんかおかしい？」

「いや。」

ふるふるとなにかを堪える遥を、皆が訝しい顔をしてみるが
遥はなんでもない、と一言告げて咳払いをした。

「そついえば、塩ちゃんは？」

その質問に、広未が声をあげた。

「ああ、今日は補習があつて少し遅れている。」

「……補習。裏切らないキャラクターだねえ。」

うんうん、とうなずく和に、加藤以外の全員が苦笑する。

微妙な空気になったところで斎賀がとりあえず、と全員に着席をすすめた。

広未と斎賀が並んで座り、遙の隣には当たり前のように加藤が腰を下ろす。

その様子に和は小さくおや、と心の中で呟いた。

「あ、さつちゃん椅子どうぞ。」

「ありがとう塚本君。自分のぶんは自分で運ぶよ。」

「そう?」

言つて、塚本から椅子を受け取つて和がうしろを振り返れば遙が不機嫌顔を作つていた。

「……和泉君。」

「大丈夫、ただの条件反射。」

「自分だつて美少女の隣座つてるんだからいいじゃん、あいこでね?」

にや、と笑んだ和に物言いたげな遙であつたがすぐに口を噤んでとがらせた。

相変わらず、子どもっぽい仕草をよくする。

「……いやあ、やきもちを妬くレベルが恐ろしく低いね。」

「ありがとう。」

向かい合ったソファのうち

斎賀が座る隣に椅子を移動させた塚本の苦笑しつつの言葉に
遥がにっこりと微笑むが、

加藤の隣に移動した和がそれに呆れ顔でつつこんだ。

「ほめてないよ、馬鹿。」

その言葉に、目を丸くして和を見たのは加藤だ。

和はその視線に気が付けば、にっこりと微笑む。

とりあえずなにか言っている遥は面倒なので相手にしなかった。

場の空気を一掃しようと、斎賀が一度咳払いをする。

すると不思議と空間に緊張が流れ込むのを感じた。

これはある種、彼の才能なのであろう。

「……とりあえず、確認なんだけど、加藤さん。

今回の件、和泉君から詳しいことは全部聞いてる?」

斎賀の言葉に、加藤は神妙な面持ちでうなづく。

「ええ。……本当に、ひどい教師がいたものね。」

「それを理解した上で、君は我々に協力してくれるんだね?」

「もちろん。そうじゃなきゃ私はこの場にいないわ。」

加藤の言葉に、広未が少し言い辛そうな表情をしながらも
重い口を開いた。

「しかし……君は女だ。」

確かに今回、女性が必要ではあったし最善を尽くそうとも思っている。

けれど、所詮は素人のやることだ。必ず穴ができるだろう。安全面は、100%はとても保障できない。それでもやってくれると？」

探るような広末の言葉に、加藤は微笑んだ。

「それも、承知の上よ。ご心配なく。私、けっこう強いものよ。それに、いざとなれば遙が守ってくれるって信じてるもの。ね？」

「……ああ。」

小首を傾げる加藤に、遙は複雑な表情で応える。

微笑みながら彼女は隣にいる遙の腕に自身のそれを絡ませた。約束よ、と言いながら楽しそうに遙へと視線を向けている。

和はその様子に、またも内心で疑問が発生する。

ひよっとすると新たなライバルの出現なのかもしれないが応戦したらこのチームが崩壊するとわかってるので、

和はとりあえず彼女を気にかけないようにしようと決めた。

「それで、具体的に私はどうしたらいいのかしら。」

「おい、いいかげん離れるよ。」

「あら普段そんなこと言わないくせに。彼女の前だから？」

にやにやと笑む彼女に、遙は怒りをぶつけようと口を開くが和はそれを制止した。

「今は内輪もめしてる場合じゃないから、喧嘩なら後にももらえらる？」

加藤さんも、和泉君をからかうのが楽しいのはわかるけどできればあとで。」

「あら、笹森さんたら、遥の事そんなに普段からかっているの？
じゃあ私は仕方ないから優しくしてあげようかなあ。」

くすくすと微笑む加藤に、和は微笑む。

「そのほうが穏やかにすすめられるので、出来ればそうしてあげて
和泉君も、普段そうならいちいち触られるのに抵抗しない！
会話が止まって面倒臭いでしょうが。」

「……彼女の前で他の女の子触るなんて最低じゃないか。」

「私が気にしないっつってんだからいいでしょ。」

長年付き合いのある方なんでしょ？

私だって広未と多少くっついたりはするんだしいいじゃん。」

和の言葉に、遥がまた変なオーラを醸し出そうとするので
本気で話がすすまないと感じた和は無視して強引に会話を戻した。

「で、加藤さんの了承はとれたとして、齋賀君。

具体的にどうしようか、もう決まってるの？」

和の言葉に感謝するかのように息を吐きながら、齋賀はうなずく。

「ああ、それなんだけど……」

単純だけど、彼女のほうから原田に告白してもらったというのが
いちばんいいのかなって思うんだ。

塚本が調べてくれたんだけど、そういう例の子もいたみたいだし。」

齋賀の言葉に、隣に居る塚本がうなずく。

「実際問題、けっこう原田って女生徒に人気があるんだ。表向きは爽やかな生徒思いの教師を演じてるからね。だからこそ、厄介なんだけど。」

ふうん、と声をあげた和の次に、広未が眉間に皺を寄せて口を開いた。

「だが……少々懸念材料が出来てしまったな。」

「あー、やっぱり？だよねえ……、今更私がやるわけにもいかんし。」

「これ程までとはさすがに予想外だったからな。」

「やっぱボツにしたほうがいいんじゃない？」

失敗したら相手に警戒心強くされるだけだしさ。」

「そうだなあ。しかしどうしたものか……。」

広未と和の会話に、置いてけぼりをくらったのはそれ以外の人間だ。遥など、眉を寄せたまま広未と和を見ている。

和泉君怖い、とつつこまれて、やっと遥が自身の表情に気付いたのか皺を解いて和に問いかける。

「一体、どういうこと？」

「和泉君、見てご覧、加藤さんの神々しいまでの美少女っぷりを。」

「……ああ、まあ。」

じろじろと無遠慮に視線を向ける遥を、加藤はちょっと、とたしなめる。

「これだけ目立つ存在を、今まで校内で見かけていないというのも変な話だろう？」

ともすれば原田のことだ。めばしい女生徒は細かく調べているかも

しれない。」

広未の言葉に、和もうなずいた。

「私くらいの容姿レベルだったら、今まで原田が気付かなくても説明はつく。

けど、加藤さんじゃ無理だよ。一発でここの生徒じゃないってばれる。

そうになると、告白っていうのも信憑性がなくなるでしょ？

原田先生って車通勤なんだよね？」

「ああ。」

和の疑問に広未が短く答えた。

「てことは、電車でいつもみかけて一目惚れ、ってパターンも駄目なわけだ。

変にエピソード捏造するのも危険すぎるよ。

相手が単なる馬鹿ならいいけど、今回は警戒心が強いチキン男なわけだしね。」

「……………」

和と広未の見解に、その場に居る全員が感心したかのようにうなずいた。

広未は、和がやるならばあるいは最初の作戦でもいいと思っていたが加藤がやるならばやはり無理がある。

それは、斎賀と塚本も納得の意見だった。

「じゃあ、またいちから考えないとな。」

「あ、それなんですけど。ちよーっと提案が。」

拳手をする和に、広末含め全員が和に注目して視線を向けた。

「まわりくどいかもしれないんだけど、これなら多分、相手も警戒しないし、
ともすれば無理矢理連れ込まれるっていう状況にも陥りやすいかも
しれない。」

しばらく和の話に耳を傾けていた一同は、
彼女のそのあまりにも働く悪知恵に、斎賀などは絶句しそうになっ
た。

この学校の生徒ならばいちにもなく、スカウトしていた、と言わ
れたが
和はきつとやっていないと思う、と苦笑するだけであった。

「遅れてすみません！」

ちょうど概要すべてを話し終わったときだ。

塩澤が生徒会室に駆け足で飛び込むように入ってきた。
立ち上がったため息を吐いた広末は、塩澤の傍らに立って背中をさ
する。

「馬鹿だな、そんなに急がなくともこの場所は消えない。」

「で、でも、じか、ん、は、有限、です！」

ぜえはあ、と息を切らしながらなおも声を上げる塩澤を
広末は喋るな阿呆、と言って小突いた。

和はつい、にやける顔を止められずにいれば、無言で広末ににらま
れてしまった。

「……彼女が、最後の生徒会の役員の方ですか？」
「ええ、さつき話していた塩澤さんです。」

斎賀の言葉に、慌てて塩澤が加藤に頭をさげた。

「はじめまして、塩澤直子なおこです！一年生です！」

「あら、それじゃあ後輩にあたるのね、加藤優です、よろしく。」

微笑んだ加藤の顔に、塩澤はしばし見惚れて固まるが
次には覚醒してもう一度よろしくお願いします！と頭を下げた。

ここで塩澤も含め作戦会議が本格的に始まる。
しばらく話し合った結論は、

今日は細かい打ち合わせに留め、動くのは明日からに、ということ
になった。

「じゃあ遥、送って行ってよ！」

「はあ？ふざけんなよ、なんでお前なんか」

「こんな美少女、ひとりでうるうるしたら
襲われるかもしれないじゃない！」

「おまえな、」

青筋を立てて腕に絡む彼女を引き剥がそうとする遥に、

和は遥の横から声をかけた。

「送ってあげなよ。確かにもう暗いから危ないし。」

「はあ！？なに言ってるの、和！」

和の言葉に遥が目を剥いて反論するが和はそれに呆れた顔でため息
を吐いた。

「今回巻き込んだ責任もあるんだしさ。」

私を送つてもいいけどそれじゃあ意味ないだろうし……

気をつけて帰つてね、加藤さん。」

「駄目だつてば！和だつて女の子なんだから危ないよ！」

「でも、広未は塩ちゃん送らなきゃだし。」

和の言葉に、塩澤が真っ赤になつて顔を横に振る。

「ええ！？そんな、いいですよ！」

「阿呆、お前がいちばんぼけつとしてて危ないだろうが。」

「な、津田先輩……！」

咬みつく塩澤を、楽しそうに広未がからかっている。

それをしばらく見ていた和は、わかりました、と言つてため息を吐いた。

「じゃあ、三人で行こう。加藤さんを送つてから私の家に行く。

それでいいでしょ？」

「和は、それでいいの？」

「別にかまわないよ。加藤さんの家って遠いの？」

「いや、最寄り駅は俺のマンションといっしょだから。」

「ああそうなんだ。じゃあそんな遠くないじゃん。加藤さん、それでいいかな？」

和の言葉に、目を丸くして驚いたのか

はたまた申し訳なく思ったのか、慌てて加藤が首を振った。

「いえ、ごめんなさい。そこまでしてもらわなくても大丈夫よ。そもそも笹森さんは遥の恋人なのに、昔みたいに甘えちゃって。」

私はここでいいわ。ひとりで帰るから。」

「え、でも……」

心配顔の塩澤に、加藤はにっこりと微笑んで繰り返し大丈夫、と答えた。

「まだそんなに危ない時間じゃないし。ちょっと急いで帰ればいいもの。」

それじゃあ、申し訳ないけど私、お先に失礼するわね。また明日！」

そそくさと逃げるように帰る彼女に、塩澤だけが首を傾げている。

和はにや、と口角をあげるに留め、

それを見ていた斎賀と塚本はうわあ、と声をあげそうな顔つきで和に視線を送り、

広未と遥はやれやれ、といった風に小さく首を振った。

それぞれの反応の意味がわからずに、

塩澤は疑問符を浮かべますます首を傾げて全員を順番にながめていた。

今日はどうしよう。

いつものようにまた誰かを呼び寄せようか。

最近、家ばかりでいささか刺激が足りない。

騒がれても困るが、従順すぎるのもやはりつまらないというものだ。

また学校で少し遊ぼうか。

自分のテリトリーならば問題ない。慎重さには自信がある。

今まで一度たりとも表に露見するようなへまをしたことはない。

この学校もあと数年したら異動すればいいだろう。

体育教官室の窓辺にて嫌な笑いをたたえながら、

体育教師である原田武はたたずんでいた。

普段、生徒の前では温厚に笑う彼からはとても連想できないその表情は

きつと見た瞬間に目の前の人間が驚きで目をみはることだろう。

しかし彼の本心は、どこか狂気に満ちていた。

それは恐ろしいと言われても仕方がないような支配欲。

自分よりも弱い者を、思い通りに操りたい。

人形のように。気に入りのおもちゃのように。

渴いた彼の心を満たす瞬間は、そのときしかない。

刹那の為だけに生きているというのは、なんとも不憫な話だ。

しかし彼はじゆうぶん人生を楽しんでいた。

少なくとも彼自身は、そうだった。

それがどんなに愚かであるかは気が付かない。

きつと彼は、気が付かない。

蹂躪され続ける女達の悲鳴には、きつと一生、気が付かない。

『……どうするかな、直接呼びに行くのもいいか。』

時間にして放課後。生徒の数もまばらだ。

今日呼び出すつもりだった女生徒には、

適当に校内で時間を潰していると言っている。

携帯電話で呼びつけてもいいが、

怯え慄くその姿をじっくり観察するのもいいだろう。

先程までの笑みを顔から消し、原田は体育教官室をあとにする。

渡り廊下を歩いて、校舎へと向かおうとするそのときだった。

中庭に、見慣れない生徒をみつけて、原田は眉根を寄せせる。

遠目から見てもかなり存在感のある女生徒だ。

もっと近くで見たい。

己の欲望のままに、原田は校舎へと向かっていた足を止め、

渡り廊下からそのまま中庭へと出る。

そうしてゆっくりと近づくと、段々はつきりと女の顔がみえた。

恐ろしく可憐なその少女は、

透き通るような白い肌に、真っ赤な唇、綺麗な二重の瞳をもって

少し隠れるように校舎の窓へと視線を向けていた。

よくよく見ると、手には双眼鏡らしきものを持っていて

一体全体どういうことだろう、と原田は僅か眉根を寄せた。

……惜しむらくは、髪だろうか。

原田の好みは黒髪だが、この女生徒は栗色の髪を揺らしている。

まあ、それをマイナスにしたところで余りある容姿をしてはいたのだが。

それにしても、これだけ目立つ女生徒を自分が知らないはずがない。ということ……導き出される結論はひとつしかなかった。

まだこちらに気が付いていない女生徒を視界に留めて、原田は体育教官室内でしたときのような顔を一瞬作ってにやりと笑んだ顔をまたすぐ戻した。

ゆっくりと慎重に、原田は彼女に近付いていく。

「君。」

「!!」

話しかけたついでにぽん、と肩をたたいてみれば驚きに目を見開いて女生徒が固まった。

原田は、人好きするような笑みを浮かべて、穏やかな口調で彼女に話しかける。

「ここでなにをしているのかな？」

「あ、あの……。」

「いえ、べ、別に。そろそろ帰ろうかなって思ってたんです。」

目を泳がせる女生徒に、なおも優しい声で原田が話しかける。

「本当に？こんな所にいなながら？誰かとかくれんぼでもしてたんじゃないのかい。」

「いえいえいえ！私、その、失礼します!!」

「待ちなさい。」

走り去ろうとする女生徒をつかみ、

原田は少し鋭い双眸をむけて若干低い声を上げる。

「名前と、学年、組、出席番号を言いなさい。」

「ええ……と、あの、い、一年A組の、」

「ほう？1-Aなら僕の担当クラスだけど、君を見た事がないなあ。」

「えっ」

次の瞬間、ざあ、と顔を青くした生徒に原田は内心ほくそ笑む。

思ったとおり、彼女は他校の生徒のようだ。

「ちょっと話をきかせてもらおうかな？

すぐそこに部屋があるんだ。そこにおいで。職員室には連れていかないから。」

「あの、でも、」

「大丈夫だよ、僕はそこまで頭の固い先生ではないからね。」

「……はあ。」

困惑顔をした生徒ににっこりと微笑みながら、

原田はついてくるように彼女をうながす。

おとなしくうしろをついてくる彼女を見て、

原田は口角を歪にあげる。

またひとつ、みつけた。

第一百十三話「彼女が白旗をあげるとき・その1」

「さあ、入って。」

おずおずといった風情で足を踏み入れようとしたが、女生徒は途端に怖くなったのか、一瞬の隙をついてその場を一目散に駆け出した。

「!」

校舎内へと走っていく彼女を一瞬追おうとしたが、足元に落ちているなかに目を留めれば原田は無言でそれを拾い上げる。

それを目にした瞬間、邪悪な笑みを原田はたたえた。その瞳は怪しく光り、爽やかな体育教師の仮面はすっかり消えてそこに立っているのは危険なものを宿した狂気的な男ひとりであった。

「……うん、無事に定期入れ拾ったみたい。」

双眼鏡からのぞく景色を目にして和はその場に居る人間に報告する。図書室内の生徒達はその声に安堵の息をもらっていた。

四階に位置するこの図書室からは、体育館や渡り廊下の様子がよく見え

体育館の脇にある体育教官室の様子も確認できる。

とはいえ、目視できるほど近くはないので、

前述したように和はその手に双眼鏡を携えていた。

「思ったとおり、彼は頭が悪いわけではないみたいね。」

和の言葉に、広未がひとつうなずく。

「ああ……今まで逃げおおせていたんだ、そうだろうな。」

「じゃあやつぱり、あれだけの情報でもう察しはついてるでしょ。

わざわざ加藤さんに双眼鏡持たせたのはやりすぎたかなと思ったけど」

「生徒会室は三階になる。まあ、違和感はないだろう。」

加藤さんにも誰かさんのような打てば響くキャラクターを演じてもらったわけだしな。」

そう言つて後ろに立つ塩澤へと広未が顔を向ければ

塩澤は眉を顰めた。

「津田先輩、それひょっとして私の事言ってます?」

「誰もそんなことは言っていないが?」

「顔がそう言ってるんです!どうせ私は単純ですよっ!」

「別に単純とは言っていないが?打てば響く上にお前は単純だったのか、

知らなかった。」

「うぎー!むかつくうううう!」

「相変わらず語彙も貧困だな。」

もう少し俺の内部を抉るような言葉を放てるように本でも読んだらどうだ？

幸い、ここは図書室だ。お前が読めるような大きい文字のものもある。」

「わ、私だって本くらい読みます!!」

「それでその表現力か？読んだそばから忘れるとはお前どれだけ脳の容量が小さいんだ。」

「忘れてなんかないもん!!!」

真っ赤な顔をして応戦する塩澤を、和は不憫な子を見るような目で見つめるが

とりあえずふたりの事は置いておこう、と

斎賀と塚本、遙と加藤が座る席へと腰かけた。

「さっちゃん、なんか楽しそうだねー。」

「そう？あ、双眼鏡はい。塚本君なんか趣味でもあるの?」

「けっこうどこの家にもひとつはあるもんじゃない?」

「うちあったかなあ……加藤さんも持ってたんだしそういうものなのかな。」

ふたつの双眼鏡をながめつつ、和は塚本の隣へと腰をおろす。

しかしそれを遙の鋭い瞳が見咎めた。

「和、なんで塚本君の隣に座るの?」

「え?なんでって……歩いてきた位置からいちばん近かったし。」

「こっちに座ればいいじゃないか。」

六人がけの机には、斎賀と塚本、そして遙と加藤が隣同士に座っており

手前にあった塚本の隣の空席へと和は座ったのだが

遥にしたらそれがどうにも気に入らなかつたらしい。

「……でも、邪魔しちゃ悪いし。」

遥の隣には、べったりと加藤がくっついており

遥を挟んで和が座るといふ図はなんだか男の取り合いをしているかのようで

和からしたらなんとなく居心地が悪いと感じる。

その言葉を受けたからか、遥がばり、と加藤を引き剥がした。

「お前いいかげんうっとおしい。」

「……和泉君の口からそんな言葉を聞くとは、驚いた。」

「和!?!?」

「あ、いえいえごめんなさい。」

和の言葉に遥のみならず、隣に座る加藤が反応した。

「え、遥から、ってどういう意味?」

「よく私が和泉君に同じ言葉を言ってるから。ちょっとびっくりして。」

「え!?!?遥が笹森さんにうっとおしいってよく言われてるってこと……?」

「うん、そう。だってうっとおしくない?和泉君。」

「ちょ、言い切らないでよ!」

和の言葉に遥はなおも抗議の声をあげるが、

しかしそれ以上に驚いている加藤に途中でさえぎられた。

「クール通り越してドライな遥が、ねえ。ずいぶんとあなたにご執

心なのね。」

その言葉に、和は小さく首を傾げ、遥はびくり、と眉を上げる。

「別に、私はこれが普通だと思ってたから…

他の彼女にもここまでじゃなくとも優しかったんでしょ？」

「遥は、優しい？」

「うん。」

「へええー……。」

和の言葉に笑いながら遥をちらちらと見る加藤に

遥が完全に不機嫌な様子でちよつと来い、と低い声をあげた。

図書室の隅まで引つ張られた加藤と遥は

なにやらこそこそとふたりで話をしているようだった。

それを特に意に介する事なく、和は斎賀と塚本に話しかける。

「とりあえず、最初の接触としては成功だね。」

「しかし笹森さんはなんと…よくこういう事を思いつくね。」

斎賀の苦笑混じりなその質問に和はにやり、と笑う。

「いかにひとの弱い部分を的確に突けるかは私にとって重要だから。」

「……さっちゃん、怖いよ。」

塚本の若干おびえたその声に、和はぱたぱたと右手を動かす。

「いやいや別にだからって誰にでもこういう事をするわけじゃない

よ。

まあ、明日からまた油断できないけど頑張つて成功させないと。」

「……失敗したら最悪の結果につながるからね。」

斎賀の言葉に、和と塚本が力強くうなずいた。

「斎賀君の提案通り、こっちのが安全だし确实だね。」

「うん、目視してるってことは向こうからも見られる可能性があるからね。」

火曜日の生徒会室にて、
昨日のように覗き見をするのは危険だという提案が斎賀からあがった。

和もそれには同感で、特に体育教官室へ入ってしまったば中の様子は確認できない。

簡単ではあるが、携帯電話を使ってこちらが声を拾えれば目視する必要はないだろう、という結論に至った。

更にそれならば、と追加で意見を出したのは広未だ。

「イヤホンを使えばこちらから指示を出す事も可能だろう。なんとか隠せないか？」

それに難しい顔をした和がうーん、とうなる。

「耳元は髪で隠せるけど……」

加藤さん髪の毛の毛ショートだから服の中コード通しても
首元からみえちゃうねえ。」

「マフラー巻いたら？それならほぼ見えない状態になるよ。」

遥の提案にそれだ！と声をあげ実行したところ、
なんとか全体が隠せた。

「……なんか本当に探偵にでもなった気分ね。ちょっと興奮するわ。」

弾んだ加藤の言葉に、斎賀が笑う。

「ちょっと試してみようか。携帯かけてみるからちょっと離れて。」

塩澤さん、声落として加藤さんと会話してみてくださいる？」

「はい。」

斎賀が加藤の携帯電話へと電話をかける。

通話状態になったところでポケットへそれをしまい

加藤が塩澤に声をかけた。

「塩澤さんて可愛いわね。」

「へえ？な、ななななんですか急に。」

加藤さんのがよっぽど美少女ですよ！？」

全然音量は落とされていない塩澤だが、

加藤の声も聞こえるので問題はないだろう。

「探し物はこれかな？」

背後から聞こえた声に、女生徒はびくり、と体を震わせた。ゆっくりと後ろを振り返るとそこには

昨日声をかけられた男性教師が微笑んで立っている。

手に持っているものを目で確認すれば、女生徒はその目を見開いた。

「か、返してください！」

「おっと。」

慌てた様子で教師からそれを奪おうとした女生徒だったがそれを阻むように教師の腕が高々と持ち上げられた。

女生徒は、世の女性の平均身長より大分高かったが、それは教師も同じである。

ふたりの身長差では手に持っているそれを奪い返す事は
どうやっても出来そうもなかった。

「これはすぐに君に返そう。だがその前に……」

お話を聞かせてもらえないかな？」

『お話を聞かせてもらえないかな？』

張り詰めた空間の中で、
皆が固唾を吞んでスピーカーから流れる声に耳をかたむけていた。
誰かのこく、という喉が動いた音まで拾えそうなくらい
生徒会室は静寂に包まれている。

和は、不思議と緊張感はなかった。

この静かな場所は、自分の陣地でしかない。
そんなことを思えば、和は不敵に微笑んでみせる。

「すぐに応じないで。不信感たつぷりの視線を相手に向けてください。」

このまままた逃げ出しそうな雰囲気を一回作って。」

和の言葉に、向こうがどんな反応をしているかはわからない。
しかしおとずれた沈黙は、無言の攻防をあらわしている。

『そう警戒しないでくれ。』

昨日も言ったけど、君をどうしようなんて思ってないよ。
ただ色々と確認したいことがあるんだ。こんなでも教師だからね。』

「……職員室には本当に連行しないか、と確認してください。」

和が放った通りの言葉を、加藤が発する。

しばらくふたりで会話が交わされて

いよいよ体育教官室へと連れ込まれる流れになった。

「……ここ、先生の専用のお部屋なんですか？」

「まあ、そんなようなものだよ。体育教官室だからね。」

「そうなんですか……。」

きよろきよろと辺りを見回す生徒に、教師はにっこりと微笑んだ。近くの椅子をすすめれば、おとなしく応じて座る。

教師も腰を下ろした。

ふたつの隣り合ったデスクに、ふたりは並んで座っている。

「それで、君は他校生だよな？」

「あ、あの…中身見ました？」

「ああ。これか。この定期入れの写真……うちの生徒会長だ。」

「……！」

教師が中身を開いて生徒に見せる。

生徒は、顔を真っ赤に染め上げた。

「昨日は、双眼鏡を持っていただろう。」

ひよっとして彼をのぞいていたんじゃないのかい？」

「そ、それは……違います！」

「それじゃあ、なんで君はここに居るんだい？」

「じ、この、生徒だからです。」

「すぐにわかることだよ？全校生徒の名簿を確認すればいいんだか

ら。」

「……………」

うつむく生徒に、教師はため息を吐いた。

「この定期からして……学校は 高校かな？電話で確認してもいいけど。」

「や、やめてください……！」

はじかれたように顔をあげた生徒と、教師の目が合う。

生徒はしばらく教師を見つめれば、やがてあきらめたかのように息を吐いた。

「……そうです。私、この生徒じゃありません。

先生のおっしゃる通り……斎賀直澄さんを見たくて、ここに侵入してました。」

「一体いつから？」

「……一週間程、前からです。」

顔を赤く染め上げて泣きそうになる生徒に
教師は微笑んでそうか、と声をあげる。

「別に、恋愛は自由だ。それを悪いとは思わない。

ただ……物事にはルールがあるっていうのは、わかるだろう？」

「はい。」

神妙にうなずいた生徒に、教師は同じようにうなずく。

「じゃあ、自分がどれだけ非常識だったかはわかるね？」

「はい、本当に申し訳ありませんでした。

ここには、もう来ません。約束します。だから……」

「ああ、それを約束してくれるのなら、君の事は特別罰したりしないよ。」

「あ、ありがとうございます……！」

華のように微笑む彼女に、
教師は安心させるようにぼん、と肩を叩いた。

『加藤さん。これから、私の言う言葉を繰り返してください。』

耳に聞こえてきた指示に、加藤は緊張で心臓を高鳴らせた。
流れに任せて会話をしろと言われたが

このままではそのまま解決しそうだと内心焦っていた。

そもそも目の前の教師の意図がわからなかった。

この男は、いいひとを演じたまま自分を帰そうとしているのではないかと。

加藤は、心の中で彼女の指示にうなずいていた。

「あの、ひとつだけ、お願いがあるんです。

こんな事、頼むの図々しいとわかってるんですけど……

先生が、とても優しい先生みたいだから、あの、駄目でしょうか？」

上目遣いに教師を見れば、

教師はまんざらでもなさそうな顔をしてはは、と笑い声をあげる。

「それは嬉しい言葉だね。内容にもよるけど、何かな？」

言い辛そうに口ごもりながらも、彼女は言葉を続ける。

「私、勇気がなかなかなくて、今日までずるずる来ちゃいました。
でも……なんとか頑張ろうかと思えます。」

斎賀さんを……ここに呼び出してはもらえませんか？」

目を見開いて、教師はしばらく生徒を見つめれば控えめな声をあげた。

「ええと、それは……告白を、する、ということかな？」

「……駄目でしょうか。」

「いや、かまわないけど……大丈夫かい？」

教師の問いに、生徒は力強くうなづく。

「はい。これでふられたら、きっぱりと諦めようと思います。」

「そうか……、うん、わかった。彼は今の時間生徒会室に居るはずだ。」

直接呼んでこよう。」

「ありがとうございます！」

「いいよ、これくらいなら。待ってて。」

「ここまで多分五分くらいだ。」

斎賀の言葉に和、遙、広未がうなづく。

「加藤さん。この時間が勝負です。とにかく隠しカメラの類がないか

探してチェックしてください。

盗聴器もあるかもしれないので、こちらに返事はしなくていいです。齋賀君を連れて原田が戻るぎりぎりまで、搜索を続けてください。ふたりが戻ってくるタイミングは、広末が尾行して知らせます。そのあとのあなたの役目は、泣いて走り去ること、以上です。」

そこまで話して、和が無言で広末へと携帯電話を渡す。

広末はそのまま廊下を出た。

彼は表立って生徒会の仕事をしていないので出来ることならば原田にここにいる姿をみせたくはないのだ。

遙と和は生徒会室内にある掃除用具入れへと身を潜ませた。

一連の流れを済ませてしばらくしてから、生徒会室の扉がノックされる。

齋賀がどうぞ、と声をあげた。

「ああ、齋賀。やっぱりここに居たか。」

「原田先生。どうかしました？」

「なにか先生にお渡しする重要書類でもあったかな。」

「いや……そういうわけじゃないんだが。」

「ちょっと体育教官室まで来てくれないか？」

「どうかしましたか？」

「頼まれ事だな。別に変な用事じゃない。ついてきてくれればわかるよ。」

「怖いなあ。まあ、かまいませんけど。塚本、塩澤さん、ちょっと外すね。」

齋賀の言葉に、塚本と塩澤が返事をする。

ふたりは、連れ立って生徒会室をあとにした。

「先生、ありがとうございました。」

微笑む女生徒に、教師はにっこりと笑みをかえす。

この場で、連れて来られた斎賀だけが混乱顔をたたえていた。

「あの、一体なんなんですか？」

「ごめんなさい、私が、あなたを呼び出してくださいって頼んだんです。」

「？君が？」

斎賀の問いかけに、女生徒がうなずく。

「私、高校の二年生で、加藤優って言います。

突然こんな話を話すと変な奴だって思われるかもしれないけど……好きです、私と付き合ってください！！」

ぱっ！と勢いよく頭をさげた加藤に、斎賀は目を丸くする。

「あの…、ごめん、俺、加藤さんの事全然知らないし。」

「これから、訊いてくださればなんでも答えます！」

加藤の言葉に、しばし逡巡して目をさまよわせた斎賀だったがやがて何かを覚悟したかのようにため息を吐いた。

「わかった、はっきり言おう。申し訳ないけど付き合えません。俺は今、誰かと真剣に交際するつもりは一切ない。」

「……好きなひとが、いらっしやるんですか？」
「うん、ごめんね。」

困ったように微笑む斎賀に、加藤の瞳が揺れる。
衝撃を受けたような顔でしばらく固まっていたが、
やがてなにかを耐えるように唇を噛み締めながら頭を下げた。
そうしてまた勢い良く頭を上げたかと思うと
いつかのように加藤は一目散に渡り廊下を走り去ってしまった。

「あ、君！」

「先生、今追いかけたら無神経ですよ。」

斎賀の言葉に、追いかけてよとした原田の体が止まった。

「用事ってこれですか。もういいなら帰りますが。」

「お前、案外クールだな。」

「別にそんなんじゃないですよ。しかしすごい美少女でしたね。」
「それをあっさり断るお前は相当だなあ。」

原田のそれに特別声をあげることなく肩を竦めて返事をすれば
斎賀はそのまま元来た道へと戻って行った。

結局、原田の手元には定期入れがそのまま残ったままである。

「……失恋か。けっこうじゃないか。」

そうして笑った原田は、何事かを思いついたのか
またも体育教官室へと足を踏み入れた。

第一百四話「彼女が白旗をあげるとき・その12」

生徒会室に集まった面々は、

少し重苦しい雰囲気に含まれながらも、

パイプ椅子に座る和に視線を集中させていた。

「……うん、予定通りいけそう。」

斎賀君、明日で多分決着になると思う。」

和の言葉に、斎賀がうなづく。

「広末、塩澤さん、そっちはどうだ？」

「ぎりぎりだったが、了承がもらえた。」

「きつと、嘘はないと思います。」

それにほ、と小さく安堵し良かった、と声をもらして

次いで斎賀は隅にあるデスクに腰を下ろした塚本へと視線をやる。

「塚本。」

「ほいほい。こっちも動きはありませーん、万事オツケーですよ。」

「よし、じゃあ他はすべて整ったってことになる。」

塩澤さん、広末、塚本、ここまでご苦労様。

笹森さん、和泉君、加藤さん、本当に協力ありがとう。」

頭を下げる斎賀に、遙が苦笑する。

「和と加藤はともかく、俺はなんにもやってないよ。」

「なに言ってるのよ遙！あなたに言われなきゃ私引き受けてないわよっ。」

「うん、本当に。彼女みたいなひとを紹介してくれて感謝してるよ。」
斎賀と加藤にかわるがわる言われてしまい、遙は困って頬をかいた。和はその様子にふ、と微笑む。
その顔を、加藤は視界に留めて目を細めた。

「笹森さんて、そんな顔もするんだ。」
「え。」

先程まで遙の隣にいつものようにへばりついていた加藤がなぜか今は肘掛に体を乗り上げて、
加藤の隣でパイプ椅子に腰を下ろしていた和へと体を寄せている。

和がそれに目を丸くして一瞬固まれば
間髪入れずに立ち上がってぐい、と和の腕をひっぱった。

「ね、ちょっとトイレ。笹森さん場所知ってる？」
「へ？う、うん。」
「じゃあちょっと行こう、つきあって！」

遙がそれに憤慨して止める前に、
加藤はさっさと和を掴んで生徒会室から出てしまった。

場所はどこだ、と訊いた割りに、彼女は迷う事無くトイレへ歩を進めている。
どうやらふたりきりでなにか話したいようだ、とその時思い至った。
しかしその前に一度歩みを制止しようと、和は声をあげた。

「加藤さん！」

「ん？」

「はい、これ。」

和は自分のかけていた眼鏡を外せば、そのまま加藤へとかけてやる。その行動の意味がわからなかったのか、加藤はきよとん、とした顔で和を見つめる。

「えーと、ごめんね突然。それ伊達なんだけど……
万が一、原田にみつかったら厄介だし一応。案外見つからないもんだから。」

微笑んで説明する和の顔を、何を思ったのか加藤が凝視する。

『なんか美少女に見つめられるってちょっと心臓に悪いなー。』

遙にみつめられても案外大丈夫だったのに、と和は心の中でひとり呟く。

同じように何事も発することなく、加藤の次の行動を待っていると何を思ったのか加藤がにっこりと微笑む。

「ちゅ。」

なんとも可愛らしいリップ音が耳に届いて和は思考が真っ白になるのがわかった。

「素顔可愛いねー、笹森さん。うふふ、びっくりした？おトイレ行くっ！」

固まる和を他所に、

やった当の本人はちよつとした悪戯を成功させたかのようにそのまま歩き出した。

「おい、加藤！和に何か変な事吹き込んでないだろうな！？」

「ああら、遥つたら。なにかやましいことでもあるのお？」

にやにやと笑いながら戻ってきた遥にかいかいの声を加藤がかかる。しかし遥はある一点に視線を集中させれば

次には鬼のような形相で加藤の右手を思い切り叩き落した。

和とつながっていた手を遮断したのである。

次にはぐい、と和の身体をひっぱれば、遥は彼女を横抱きにした。

「おい、なにもしてないだろうな？」

「なにもつて、なに？私が彼女をいじめたとでも言いたいのか？」

「お前なあ！……和？どうしたのか？」

今の今まで声をあげなかつた彼女が気になったのだろう。

遥が和の顔をのぞきこむようにして自身の顔を近づければ

和はそこでやつと意識を覚醒させた。

「え、あれ、和泉君！！？」

狼狽して遥の顔から逃れようとしたが何故か肩に腕をまわされていて身体をそらすことができない。

一連の彼女の行動を観察し、遙はそのままゆっくりと加藤へ顔を向き直した。

「……おい、なにしゃがった。」

「いや、和泉君、落ち着こうよ。」

ちよつと驚いたただけだから大丈夫だよ。しばらく安心してただけ。」

剣呑な雰囲気がちこめたことを察知し和が少し慌てながらもそれをあまり前面に出さずに声をあげる。

顔に手をあててみれば、すでにいつもの伊達眼鏡が装着されていて加藤はいつの間に関身にかけなおしてくれたのだろう、とぼんやり考えた。

遙は、今にも殴りかかりそうな勢いだったその顔をひっこめ彼女をちら、と視界に留める。

こういうときの和は、とても嘘がうまいのだと遙にはわかっていた。やんわりと腕から抜け出してソファに腰かける彼女を、遙はじつとみつめる。

加藤は、またも和の隣を陣取った。

「さっきのそんなに驚いちゃった？ごめんね、半分以上冗談だから！」

「えー、ほんと？ちよつと本気にしそうになっちゃった。」

でもそうだよな、そんなわけないもんね。」

「そうよー、やあだ、笹森さん！」

加藤に調子を合わせながらも言葉を紡ぐ和の心中は混乱の極みだっ

た。

一体全体、彼女はなにを考えているのだろう。

『く、唇にキスされたんですけどお………』

半分以上冗談とはこれいかに、と

和は軽い調子で考えようと頭の中をひたすら明るくしながらなんとか思考回路を働かせる。

そんな彼女をしばしみつめていた遙だったが、

やがて読み取るのを諦めたのが、

ため息を吐いて和の隣に座る加藤を無理矢理引き剥がして立たせたのだった。

もう逃がさない。次はきつと、自分のものにしよう。

二度も手に入れ損ねた、とびきり美しい人形。

きつと、馴染めばなによりも可愛い人形に成長することだろう。

しばらくは、手放せそうにない。長く遊べそうだ。

ほの暗い部屋の隅でくつくつと笑う男の顔は、

犯罪者のようにいかにも怪しく危険な香りを放っていた。

窓越しに見える視界を目に留めて、男は口角を歪にあげる。目の前には体育教官室を前に右往左往する女の子。加藤優、と昨日名を告げていた。ゆづ、と呼んだら、どんな顔で返事をするのだろうか。

しばらく困った顔でうろつく彼女の様子を楽しんだあと原田武は扉のドアノブへと手をかけた。

がちやり、といやにゆっくりと自身の耳に音が響いて原田は高揚する心をなんとか落ち着かせようと軽く息を吐いた。

「あ、」

戸惑いの滲んだ声を短くあげて、眉尻を下げた加藤が視界にうつる。原田はゆったりと優しい微笑をその顔いっぱいに広げた。先程の歪んだ嗤いを湛えた男と同一人物であるとはとても思えない。

きっと彼を知る人間の多くはまさか、と声を上げることだろう。しかし、原田は間違いなく普通ではない人間だった。

「やあ、もう来ないと思っていたけど……取りに来たんだね？」

懐からそれを取り出した原田は、加藤に見せるように右手に掲げてひらひらとそれを振ってみせる。

加藤の視線が、定期入れを追い、その頬を少し赤く染めた。

「もう、本当ドジですよ。まさか二度も忘れちゃうなんて……持ってくれたんですね、ありがとございます。」

「いや、気にしないで。」

微笑む原田のその表情にすっかり安心しきっているのだろう。

加藤は信頼を寄せた眼差しを彼へと送っている。

原田はそれに内心ほくそ笑んだ。

単純な女は嫌いじゃない。気落ちも激しいが、従順にもまたなりやすい。

これだけ容姿が優れているにも関わらず、

高慢な態度もなく素直な感情を見せる加藤を原田はますます気に入っていた。

「それじゃあ、私、これでここに来るのは最後にします。

ありがとうございます。」

「いいえ、どういたしまして。」

受け取るうと手を差し出した彼女に、原田は素直に定期入れを渡してやる。

そうして次に、原田は心配気な顔をして加藤の顔をのぞきこめばぼん、とその頭に手を置いた。

「……良かったら、お茶でも飲んでいかないか？」

「え？」

驚く加藤に、原田はふ、と微笑む。

「ここでの過去を振り返った時、そう悪くなかったと思ってもらえるように。」

思い出の書き換えじゃないけどさ。

俺みたいなおジサンで悪いけど、ああこんな事もあったなって

笑ってくれたら嬉しいなと思ったんだよ。コーヒー好きか？」

「……あの、はい。」

頬を真っ赤に染め上げて上目遣いに原田を見つめる彼女は心底可愛らしい。

原田は彼女の頭を二、三度撫でてそうか、とまた微笑んだ。

「じゃあ良かったらどうぞ？なんなら愚痴でもなんでも付き合おうよ。」

「ふふ、じゃあちよつと甘えちゃおうかなあ。いいんですか？」

「もちろん。誘ったのは僕だからね。」

そつと背中に手を添えて、原田は自身のテリトリーへと彼女をうながす。

なんの警戒心も抱かずに、檻の中へと自らやってきた餌を見つめて原田は優しい教師の仮面を剥がしながらがちゃり、と扉の鍵を閉める。

この空間は、完全に彼のものとなった。

振り返った加藤は、しばらくきょとん、とした顔をして原田をみつめていたが

やがて何事かを察したのか、少し怯えた表情をその顔にみせる。

「あの、先生……？」

「君、今まで男性と付き合った経験は？」

「……あ、りません、けど……？」

「そうか。大変、結構。」

くつ、と酷薄に笑んで原田はゆっくりと加藤へと近付いた。

後退するも、ここはそう広くはない。

あつというまに間合いを詰められてしまい、加藤は恐怖で叫びだしそうになった。

しかしそこは経験からの知恵なのか。

いつの間にかその手に持っていた丸まったハンカチを

原田は無言で加藤の口にねじこめば、彼女の両手を強い力でひとまとめにしてしまう。

「んー、んー!!!」

「暴れば暴れるだけ、男を悦ばすだけだよ？」

にや、と笑んでデスクに加藤を押し倒したような格好になった原田はそのまま首筋へと舌を這わせる。

「んんんんん!!!」

首を振って足をばたつかせ暴れる彼女に

原田は苛立ったのか、その頬をひっぱたいてやろうと手を振り上げた、そのとき。

『がちゃり。』

「!!!?」

急に扉が開いて、原田は固まった。

何故、自分が持っているはずの鍵があるのだろうか。

この部屋の鍵は、スペアも今自分の手の中にあるというのに。

「……まさか、こんな。」

「決定的瞬間、てやつです。どうですか校長先生？」

震えて目を見開くその人物の顔を、原田はよく知っていた。それは自身の上司、この学校の校長を務める男だったのだから当然だ。

しかし状況がよく呑みこめないままに、
原田は呆然と、加藤を組み敷いたまま固まるばかりだ。

「原田君！いいかげんにしないか！！その子を離してあげなさい！！！」

校長の悲鳴のような怒鳴っているようなその声に
やっと我に返った原田が、加藤の拘束を解いてすぐさま距離を取る。

「なんていうことを、き、君、怪我は？」

震える校長のかたわらで、加藤も真つ青な顔をしたままふるふると首を振る。

塩澤が横に立つと、ねじこめられていたハンカチを取ってやった。そうして解放された加藤は、涙に濡れた顔で浅く呼吸を繰り返す。

「大丈夫ですか？校長先生、とりあえず彼女を保健室に連れて行ってもいいですか？」

精神的にも、かなりショックでしょうから……。」

塩澤の声に、校長は重々しくうなずく。

見ると、外には校長以外にも何人かの男教師が並んでいた。皆、信じられないものを見るような目で原田をみつめているが目の前の光景は夢でもなんでもないのでと認識すれば
厳しい顔をして原田の両脇へと腕を差し入れる。

「詳しい話は、校長室で聞こう。」

それ相応の処分は覚悟してもらおうよ、来なさい！」

「そ、そんな、待ってください、俺、僕は……」

押さえられながら無理矢理運び出されようとする原田を視界に留め
齋賀と塚本が穏やかに微笑んだ。

目が合った瞬間、原田は理解する。

自分は彼らにはめられたのだ、と。

「嫌だあ！俺は、俺はなにもしていない！！！」

体育館で部活をしていた生徒達の視線にさらされながら

原田は男教師に囲まれて連行されていく。

齋賀は、淡々とした口調で校長へと声をかける。

「今回、我々に情報提供をしてくれたのは

彼に脅され先程の彼女以上に苦痛を味わっている女生徒です。

話を聞くときは、女性の先生を同行してあげてください。

それと……」

「ああ、わかっているよ。この部屋も彼の家も、きちんと調べさせる。

まさか……撮影したものを脅す材料に使うなどと…卑劣極まりない。

このことはきちんと処理をするから、安心してほしい。

生徒会の諸君は、本当にご苦労だったね、ありがとう。」

その言葉に、齋賀と塚本は頭を下げる。

やっとすべて終わったのだと実感したのは生徒会室に戻って
興奮するメンバーと一通りの話を終わらせた時だった。

「校長先生がもみ消す心配とかはないの？」

生徒会室にてしばらく作戦の成功を祝っていた面々だったがやがて和が浮かべた当然と言えば当然の懸念に齋賀がああ、と声をあげた。

「それは大丈夫。ここの校長、そういう不正にはけっこう厳しいので有名なんだ。」

それに万が一にもそうならないように、上から圧力かけてもらってるから。」

「上？」

「俺の親戚にね、そういう教育関係のお偉いさんがいて。前もって口利いてもらえるように頼んであるんだ。」

「え、そうなの！？」

「まあ、そんな近いわけでもないんだけど。利用できるものはしないとね。」

からからと笑う齋賀に、塩澤は気が抜けたような息を吐いた。

「でも、良かったです。被害者の多田さん、やっと応じてくれて。」「ぎりぎりだったんだって？」

遙の問いかけに、塩澤はうなずいた。

多田と言うのは、いちばん最初に生徒会へSOSの手紙を送りつけた張本人だ。

今回の作戦を彼女に伝え、絶対に露見することはないから証言をしてほしい、と繰り返し説得し続けた。

「私と津田先輩が説得役だったんですけど……」

本当、もう間に合わないかと思っちゃいました。」

「最後は、塩澤の勝利だったな。お前みたいな単純な奴のがああいう場面では武器になる。」

「それほめてます?」

「素直に受け取っておけ。」

ぼん、と頭を撫でられて、塩澤は顔を赤くする。

その様子を微笑ましく思いながら、で、と和は塚本へ視線を送った。

「塚本君は、原田サイドに寝返る生徒がいないか監視してたわけだ。」

「そ。まあ、目立った動きはなかったからけっこう暇に終わったけどね。」

遙は全員のチームワークに感心したような声をあげる。

「なんか、きつちり成立してるじゃないか。

俺達がいなくともじゅうぶん優秀だったんじゃない?」

「そんなことないよ。今回のいちばんの功労者はなんといっても加藤さんだし。」

微笑みながら彼女へ視線を向ける斎賀に、加藤は曖昧な笑みを浮かべた。

「……それで？お前着替えなくていいのか。」

遙の声に、塩澤以外のその場にいる全員がびくり、と反応する。塩澤だけが、小さく首を傾げた。

「ちょっと遙、なに言ってるのよ。」

狼狽する加藤に、遙は深いため息を吐いた。

「言っておくけど、塩澤さん以外は全員そのこと知ってるぞ。」

「は！？ちょっと、話違うじゃん！！」

「うるさい。いいからもう着替えて来いよ、気持ち悪い。」

「うるさいな」。私だってしたくてしてるんじゃないわよ。」

加藤の声に、遙はますます眉間に皺を寄せる。

「絶対に楽しんでただろう、マサル。」

言われた本人は、ふてくされたように口を尖らせている。

そのさまは、なんとも可愛らしい。

「え？」

わけがわからない、という風情で声をあげたのは、塩澤ただひとりだった。

第一百五話「彼女が白旗をあげるとき・その13」

「え？あの？」

戸惑いながら狼狽する塩澤に皆が困ったように笑いながら顔を向ける。

最初に口を開いたのは遥だった。

「ごめんね、塩澤さん。」

とりあえず優まほろ、着替えて来なよ。」

「トイレまで行くの？ここじゃ駄目？」

「なんなのお前、馬鹿なの？早く行って来てくれない？」

「えーだって面倒「優。」

言い募る加藤に遥が声を一段低くして名前を繰り返す。

加藤は仕方ない、というように肩を竦めて鞆をつかめば生徒会室を出て行った。

呆然とその姿を見送った塩澤は、金魚のように口を動かししかし何事も発する事は出来ずに目を見開いていた。

広未が、隣でその様子をのぞいていれば堪えきれずにぶ、と噴出す。

「ただでさえ間抜けな顔が当社比2倍くらい間抜けになってるぞ、塩澤。」

「津田先輩！」

「おお、てつきりショックで言葉を忘れたかと思ったけどそうじゃなかったか。」

塩澤、あいつえおは言えるか？」

「な！かきくけこだつて言えます！！！」

塩澤の反論にその場に居る全員が『そこか？』とずっこけそうになったが

当の本人は別段気にしていないようだった。

「お待たせー！」

明るい男性の声が響いて、開いた生徒会室の扉に全員が顔を向ける。遙以外の人間はその人物を確認すれば固まった。

「うわ、男が居る……」

「本当に男に見える……」

「詐欺だ……」

「双子の兄か弟だと言われてたら信じられそうだな。」

それぞれが勝手な感想を口々に言い合い、

塩澤はその人物を凝視すれば指を差して叫び声をあげる。

「ええええ！！加藤さんって男の人だったんですかあ！！！！？」

化粧を落とし、男性用の制服を着、低い声音で話す加藤は塩澤のその言葉に悪戯っぽく微笑んだ。

現在、ソファには広末と塩澤、遙が座っており

塚本は入り口側のソファとは反対方向にあるデスクの上に腰を下ろし和と斎賀がソファの傍らにパイプ椅子を運んで座っている。

加藤は先程まで居た遙の隣へと落ち着くことはなく

肘掛部分に腰を下ろせばにこにこ和の横にぴったりとくっついた。

「おい、優！！和の隣にちゃっかり座んな！」

「えーけちゃんぽ。」

ただでさえびったりくっついていていた身体を加藤が更にすりよせてきたので

さすがにまずいと感じた和は慌てて立ち上がれば

加藤と遥の間に移動した。

「あの、とりあえずここでいい？」

曖昧に笑いながら遥へと顔を向ければ

とりあえずそれに満足したのか、遥はそれ以上怒ることなく落ち着いていた。

和はその様子には、と胸をなでおろす。

「和ちゃんはー、僕が男だって知ってたんだ？」

急に名前で呼ばれて多少驚いたが、特に表に出すことはせずに苦笑しながらうなずいた。

「ごめんね、加藤君。」

あなたを紹介してもらったとき和泉君はあなたが男だって塩ちゃんをのぞくこの場に居る全員に話してたの。」

「塩澤さんを除く全員？なんで？」

「それはたまたまだよ。」

その日塩澤さんには別のお仕事をしてもらってたから。ね？」

斎賀の言葉に、塩澤がうなずく。

「例の多田さんの説得です。

あの日は津田先輩には話し合いに参加してもらっていて……私ひとり彼女の家へ行っていました。」

あの日、本当に偶然にも塩澤は話し合いに参加する事が出来なかった。そこを利用としようと言ったのは、他でもない和である。

「和泉君にまだ相手に話を通していないって言われてたから私から提案したの。

私達に加藤君を男性だって知ってるって事を相手に知らせないでくれって。」

「どうして?」

加藤の問いに、和が少し申し訳なさそうに微笑む。

「私達が男性だって知っていたら、どこかで油断が生まれるかもしれない。

それこそ、こうやって皆で生徒会室で集まっている時にスイッチをオフにして男性に戻ってしまったら緊張感を持続させるのは難しいでしょう?」

だったら、ここに居る間は優ゆうちゃんを演じ切ってほしかったの。「なるほど」。和ちゃんもひとが悪いなあ。」

そう言いながらも、加藤はどこか楽しそうにくすくすと笑う。そこに納得いってないような声を差し込んだのは塩澤だった。拳手をして、おずおずと問いかける。

「あのおう、なんで私にも内緒だったんですか?」

それには、和が困ったように言い淀む。
生徒会メンバーや和と遙はおるか、加藤にだってその理由はわかっている。

皆が困った顔をしているところに、広末が疲れた顔をしてため息を吐いた。

「お前、自分がいかに嘘をつけない人間かわかっていないだろう。」
「え？」

広末の言葉に、塩澤が目を丸くする。
その顔に多少苛立ちを覚えたのか、苦笑しながら広末は彼女の額を指で弾いた。
いで、という間抜けな声が部屋に響く。

「猪突猛進、単純馬鹿な塩澤のことだ。絶対に顔に出るだろう。皆、加藤君に事実が露呈することを懸念してお前にも伏せておこうって結論付けたんだよ。」

そのあまりにもな言い草が気に障ったのだろう。
塩澤は真っ赤な顔をして隣に座る広末へ抗議の声をあげた。

「そんなことありません！私にだって隠し事くらいできますー！」
「ほーう？じゃあ、初対面で彼の顔を凝視せずにいられたか？」
「え。」

「本当に男なの？このひとが？という考えを表情に出さずにいられたか？」

例えば和のように平静を装って一緒に女子トイレに入る事は出来たのか？」

「そ、それは……」

質問に、自身の普段からの行動を照らし合わせているのだろう。先程までの顔とは違ってかわって、みるみるうちに塩澤の顔がかげっていく。

それに苦笑しながら、和は謝罪の言葉を口にした。

「ごめんね。塩ちゃんに内緒にしたいって言ったの私なんだ。

その……塩ちゃんはとっても真つ直ぐで嘘がつけない子だから

そんな純粋な子に意図的に人を欺く行為を課してしまうのは

心の負担にもなるだろうし苦痛になってしまっただろうからと思って

……

でも、余計なお世話だったかな。」

「え！？い、いえ、そんな！」

ぶんぶんと首を振る塩澤に、和は良かった、と微笑むが

その場に居る全員がものはいよいよだな、と心の中で呟いていた。

程なく場に沈黙がおとずれたが、気まづくなる前にじゃあ、と加藤が声をあげる。

「トイレに一緒に行ったときも、そのあと会話しているときも

和ちゃんは僕を男と認識しながらお話してたんだあ？」

にこにこ笑いながら和へと顔を向ける加藤に

和は内心焦りながらもなんとかそれを露見せずに微笑んだ。

「うん、そうだよ。騙しちゃってごめんね？」

「ぜんぜん？むしろ好都合かも。」

「え？……あのー、加藤君？」

何故か握られた右手が、和はとても気になった。
その拘束をほどいてはくれまいか、と訴えようとしたそのとき。

「まさる。」

顔から笑みを消した優が、真顔で和を真っ直ぐみつめる。
和はその表情に若干距離を取りたくなった。

「はい？」

「優って呼んでくれないとお返事しません。」

「ま、優君。」

「なあに、和ちゃん。」

その会話は、遥を怒らせるには十分だった。
彼にとって名前は鬼門だ。

なによりも、和の口から昔からの知り合いをのぞいて
名前を呼ばれている異性を遥は知らなかった。

自分でさえ、特別な場面でしか呼ばれることはないというのに。

加えて今気が付いた事実にも、更に彼の怒りに火がついた。

なぜ、恋人である自分を差し置いて、他の男が彼女の手を握っているのだろう。

遥は身体を乗り出し和の肩へと右手をまわせば
左手で力いっぱい加藤の手を和から引き剥がした。

和がそれに困った表情を解除してほ、と息を吐く。

遥はその顔を見て幾分か怒りが消えたようだ。

微笑みながら、和の右手を握り締める。

「和、大丈夫？」
「だ、いじょうぶ、だけど。」

和は、探るような視線を遥に向けている。

彼の今の怒り指数はどれ程のものだろう、と考えているのだろう。
遥はそれを察しながらも、加藤へと視線をやった。

「おい、お前何考えてんだよ。」
「なにつて？」

「ひとの恋人に堂々とくつつくな。」

「手を握っただけだけど。」

「だけじゃない。和は異性に触られるの苦手なんだ。」

そうやって誰彼かまわず無遠慮に触るのやめるよな。」

遥の言葉に、加藤はへえ、と意外そうな声をあげて目を丸くする。

「えー、じゃあ遥はいいの？遥だけ？」

「……はあ、まあ。」

加藤の質問に、
なんとか顔を赤くせずには答えたが、不自然なほどに一本調子になっ
てしまった。

和はなんとか平静を保とうと必死になる。

その様子をきらきらした瞳で加藤がへえ、やらそうなんだ、やら咳
きながら

まじまじとみつめてくるので

和は拷問にも近いのではないか、と今の時間を感じていた。
どうにも彼はやりにくい。

何よりも、昨日のがどういつつもりだったのか結局いまだにわからない。

先程も反芻させるかのように繰り返し言葉にしていたしこれ以上ここに居れば面倒な事になるとどこかで思考が告げていた。

「……………斎賀君。」

名前を呼ばれて、斎賀が返事をする。

和は、真っ直ぐ彼の顔をみつめて微笑んだ。

「面倒事ではあったけど、楽しくないわけでもなかったよ。

ま、二度目は嫌だけど。……………じゃあ!」

「え!?!」

すく、と勢い良く立ち上がった

和はそのまま生徒会室を走り去った。

あまりにも強引な別れにその場に居る全員が固まっていたがやがて遥がはじかれたように立ち上がった。

「ごめん、俺追いかける。

今回の件でなにかまたあったら声かけて。それじゃあ!」

「ああ、本当にありがとう。」

いまだ驚いていた斎賀だったが、なんとか遥に微笑んでお礼を言うと遥も同じように微笑を返す。

そうして加藤を冷たい視線で一瞥すれば、

遥も和と同じように慌しくその場をあとにした。

「……………うわー、置いてけぼりにされちゃった。」

従兄弟にする仕打ちかなあ。」

「あ、加藤先輩って和泉先輩の従兄弟さんなんですか。」

「そうだよ。あ、言っただけ？」

微笑む彼の顔を、その場に居る全員がまじまじと見つめる。系統的には微妙に違うが、遥と同じように顔が整っている。親戚揃って美形とは、集まればなんとも迫力がありそうだ。

しかしそれ以上に気になる事があった塚本は、勢い良く拳手をしてはいはい、と声をあげた。

「しつもん！まーくんは、さっちゃんにフォーリンラブなんですか！？」

「……塚本。頭が痛くなる日本語を操るな。」

間髪入れずにつっこむことではないとわかってはいたが、どうしても我慢できなかったのか、

広末が顔を歪めてうなりながら声を上げた。

塚本はしかしそれを意に介することなく、好奇心あふれる視線を加藤へと向けている。

加藤は、そんな塚本に向かって微笑んだ。

「言わなーい。」

「ええー、けちだなあ！」

なんとなく、塚本と加藤はどこか似た空気があるが加藤のほうはより素に近い部分で話をしている気がする。間延びした声はどこか油断を誘うようだが

その実、有無を言わせぬ我儘さが感じられた。どこことなく、子どもの言う事をついつい訊いてしまうような感覚に似ている。

ぼんやりとそんなことを考えていた広未だったがやがて出した結論はこのタイプの広未や和のような人間がもっとも苦手とする人種だというものだった。

塚本や宮田のように、ある種狙ってそれを行っている人間はふたりとも突き所を把握しているし、話していてそう苦痛でもない。しかし、加藤のように本能でもって行動する人間は先読みがなかなかし辛く、理解できないぶん得体が知れなくて恐怖する。

もしも彼に気に入られてしまえば、なかなかどうして厄介だろう、と広未は和を心の中でどこか心配してしまっていた。

しかしそんな広未の複雑な心のうちをわかってはるはずもなく、加藤は無邪気な微笑を顔いっぱいになたえながら言葉を続ける。

「本人にまだ言ってないんだから言わない。減るもん！」

なにがだ、とつつこめる人間は、その場には居なかった。

「和！」

「あれ、和泉君？」

首を傾げながらも校門を出た所で名前を呼ばれ和は立ち止まった。特に遥を避けたかったわけではないので素直に彼の到着を待つ。

「……大丈夫？」

「え、ああ、うん、大丈夫。」

遥の心配そうな顔に、和は苦笑してうなずいた。しかし何を思ったのか、遥はその言葉に眉間に皺を寄せれば次には和を自身の腕に閉じ込めてしまう。

「え、ちょー！」

「だって顔が全然大丈夫そうじゃないんだもん。」

「……………」

隠せていなかったか。

和は心の中のため息を吐きながら、いまだこういった事に慣れない自分を呪った。

彼がどういつつもりなのかはわからないが

どこかしら危険信号を自身の本能は点滅させる。

正直、あまりにも得体が知れなくて和は混乱しっぱなしだ。

冗談であのような行為をしているというのなら即刻やめてほしいのだが

なんの裏もないような視線を向けられると、和は言葉に詰まってしまふ。

単純明快な、塩澤のような人間ともまた違う。しかし加藤には、およそ何かの考えでもって行動しているというものが感じられない。まるでやりたいままに動いているだけのようで。現代の日本社会において、それをやれる性格の持ち主は稀有だろう。実際、和はあんな人種に初めて関わった。そうして気付く。

彼は苦手だ。そして……危険。

遙との穏やかだった時間にまた変な波風が立ちそう。台風のような彼の存在がなんだか酷く怖かった。

「……和泉君。」

「ん？」

「帰ろう。」

「……………うん、そうだね。あ、俺の部屋行こうか？」

「今日まだ木曜日だから自分の家に帰ります。」

「えー、そこは雰囲気流されようよ。」

「え、そういう感じだったの、今？」

「和のドライ！」

「はいはい。」

腕の中から抜け出して、それでも手はつないだまま。いつものように遙と会話をし、彼のことを追い出そうと必死になった。

なぜこんなに不安なのかは、わかっている。遙が知らない秘密を、加藤と共有してしまったからだ。

『……あの数々の行動は、単に和泉君で遊びただけ、とかだったらいいんだけどな。』

なぜ、彼はあのおとき自分の唇に触れたのか。その答えがわからないから、和は怖かった。

どこかで本当の本当は女性なのかもしれない、と思っていたのかも
しれない。

男性だった事実を突きつけられて、こんなにも動揺している。

事件は解決したはずなのに、

和はなにかが始まる嫌な予感に頭がいつぱいになった。

これ以上、面倒事は正直勘弁したい。

和は珍しい程に気弱な自分の心に気が付いて

なんとかそれを立て直そうと、遥の手を握った。

応えるように握り返された彼の手は、いつものようにあたたかかった。

第一百十六話「彼女が白旗をあげるとき・その14」

「……うわ！」

驚いて、小さな悲鳴のような声をあげた和は
思わず椅子からのけぞった。

放課後の図書室で本を読むのは彼女の日常で

その日常に向かいに席を下ろす彼も加わって久しい。

しかし、眼前に端正な顔を確認したら、驚くのは当たり前である。

真ん中の机を挟んで存在しているはずの彼は

どうしてだか今日は真横の席から机にぺと、と顔をくっつけ

じ、と斜め下から彼女の顔をみつめていた。

ずっとその状態だったのならばまだ少なくともふたりの間に

幾分かの距離はできていたのだが、

本を閉じて机に置こうとした瞬間、遙が和の顔を更にのぞきこんで
くる。

遙は和をほぼゼロ距離で見上げていたのだ。

いくらなんでも近すぎるふたりの距離感に、和は一体全体何事か、と
遙を問いただしたくなった。

「ちょっと和泉君？」

それでも図書室ということもあり、

なんとか自重して普通の声音で彼をにらみつけてやれば、遙は小さ
く首を傾げる。

「なにを怒ってるの？」

「あんな至近距離に公共の場で顔を近づけるのは非常識です。」
「じゃあ、ふたりきりのときはしていいってこと？」

和は遙の問いに脱力しながら呆れの息を吐き出しては、そのまま無視して本棚へと本を返却しに向かった。

薄々感じてはいたが、今日の遙はどこかおかしい。

和は改めて自身の頭でそれを理解すれば、
先程とは違う種類のため息が漏れ出すのを止められなかった。

昨日の一件が間違はなく影響しているだろうとわかっていたが妙にくつついてくるのはどうしたものか、と和は首をひねった。

正直、昨日は自分のが動揺していた、と和は昨夜を反芻する。

漠然とした不安が襲って、
どうしたらいいのかわからずに彼の手を強く握り締めた。

けれども一夜過ぎた和は、どこか開き直って楽観視もしはじめていた。

もしも厄介事にまた巻き込まれるのならば、いつものように対処するだけ。

いくら相手が今までにないほど読みにくい相手であるとしても人間は人間。感情が一切読めない獣なわけでもあるまい。

言葉も通じるし、会話だってできるはずだ。

なにやら加藤に対して失礼な言い草ではあるが、

精神年齢を脳内で10くらいひいてやればよいのだ、と和は思った。

ほぼ初対面に近い人間と相対する時、大切なのは冷静な観察眼、客

観的思考だ。

恐らく、慣れていない出来事の連続にそのへんの頭が欠如していたと思う。

女性の演技をしていた加藤とは何回も会ったが、男性である素の彼は初めてであつたし、唇に触れられた事実が和を動揺させた。

しかしそれだつて、人懐っこそうな彼の事。単なるスキンシップの一環かもしれない。

外国人でもあるまいし、二度と御免ではあるが。

開き直れば、もうきつと自分は大丈夫だ。

そう、考えを改めていた和であるのだが。

「……………和泉君。」

無言で後ろから体重をかけられ、子泣き爺のようにくつつかれてはただでさえ身長差もあるのに、和では彼を支えきれない。

多少前によるけながらも、和は重い重い、と

鎖骨あたりにまわされた遥の腕をとんとん、とたたいた。

それを了承したのか、体重をかけることはしなくなったが

今度は腰に両腕を巻きつけてきゅ、と和の身体を抱きこんでくる。

首元に顔を埋められれば、

柔らかい綺麗な黒髪の感触が左側の耳元から首筋に伝わってきてくすぐったさに多少身体を振ったものの、

小さく息を吐いただけで和は離れる、と言葉にはしなかった。

昨日の自分は、確かになんとも情けない頼りない人間であつただろう。

それが、遙にも伝染してしまったのだろうか？

不安で仕方がないとしてもいうような彼のこの態度が自分のせいかもしれないと思えば、

いつもならばうつとおしい、ととつくに引き剥がしているのだが今はどうにも一蹴できない。

しばし視線を右往左往とさまよわせながらどうしたものか、と考える。

結局たいした思い付きも起こらずに、和は遙の頭を撫でた。

「遙？私もう大丈夫だよ？」

「……うん。」

努めて優しい声でそう言ってやると、遙は情けない声でありながらも返答する。

しかし顔を起こす気配も、身体を離す気配もない。

ここは図書室だ。不特定多数の生徒が自由に出入り出来る場所なのだ。

それを考えれば、和はいいかげんこの態勢はよろしくない、と感じる。

「ほおーら、遙。さすがにそろそろ離れて。」

別にくつついてなくともどこにも行かないから、私。ね？」

「……ほんと？」

情けない声音に、和は苦笑すれば遙の頭をぽんぽん、とたたく。

「どうしちゃったの？ほんとだよ。こんなときに嘘は言いません。」

「うん……。」

いまだ弱々しい声音であったものの、遙は和を解放する。

和は振り返って遙の顔を確認すれば、

そこには予想通りともいえる捨てられた子犬のような表情をした恋人が立っていた。

和は自分が彼を泣かせたかのような衝動に駆られ、

なんともばつが悪いと感じれば、どうしたものかと困ったように遙をみつめる。

彼のこういった姿は初めてではないがここまで長引いたのは初めてかもしれない。

「ねえ、和。」

「ん？」

「優のこと、怖いって思ってるでしょ。」

「え、ああ…昨日まではね。もう大丈夫。」

「……今はけっこう興味津々な感じじゃない？」

「なくはないけど。ああいうひと初めてみたし。面白そうとは思っ

」

かといって、みずから関わりあいたいというわけではないが。

和は心の中でひとりごちる。

遙の従兄弟であるというのは昨日聞いたし、

あまり口悪く言うものでもないだろうと後半は心の中でのみ唱えた。

「なんかさあ、俺のときと似てない？」

「は？」

「最初は厄介な人間、恐怖の対象、関わりたくない人種。

それが話してみると案外大丈夫だって思って興味に変わっていった。

「……その先はもしかや恋心を抱くとこまでいくのでしょうか。」
「……………」

「えー！んなことで不安になってたの？」

「だって和が弱気そうにしてるの初めてみたんだよ？誰だって動揺するよ！」

「ひょっとしてもう好きになりはじめてたりして、とか色々と渦巻いて……………」

「うう、とうめき声をあげながら、またも遥が和を抱きしめる。

今度は正面からすっぽり包まれてしまい、和は狼狽する。

もう閉館時刻になるだろう。

「そうなれば見回りの人間がこちらにやってくるかわかっているのに、和はなんとか離れようと身体を動かすが、遥の力は強い。」

「ありえないってば。なんで和泉君以外をわざわざ好きになるの？そもそも恋愛なんてすすんでやるつもりなかったんだよ私。むいてないから。」

「向き不向きとか関係ないよ。恋はするものじゃなく落ちるもの。」

「……………なにその雑誌のキャッチコピーにでもなってそうな一文は。」

「えーだってそうじゃん。」

「そんなにぽこぼこ落ちないよ。」

「人生で落とし穴に落ちる確率なんてそうそうないでしょ？」

「それこそゼロで終わる人間のが圧倒的に多いと思うんだけど。」

「なんで具体的に穴に落ちる話になるの。」

和の言葉に遥がふ、と噴出した。

「まあ。時間は流れるもので、

それこそひとの気持ちなんて不確定要素ばかりの不安定なシロモノ

だと思うよ。

私はそれを否定する気はないし、確約なんて口ではいくらでも言えたって

本当は存在しないと思う。」

「……………」

「でもさあ、和泉君。だからこそ、何度も言うけど努力するんじゃない。

気持ちがそこから固定されて動かなくなったら人生はきつとつまらないよ？

嫌いになることももちろんあるんだろうけど

そのかわり前よりも愛情が増えたとも感じられなくなるじゃない。

私はね、この先遥とそういう努力をし続けるのを厭わないから一緒に居るの。

いいかげんわかってほしいんだけど。」

和の言葉が終わると、遥はなにを思ったのか、ば、と彼女を引き剥がす。

その勢いに和が目を丸くしていると、遥は真剣な表情で和をみつめた。

「……………帰ろう。」

「は？」

「今すぐ帰ろう。今日は俺ん家直行で。」

「え？でも、」

和の言葉を待たずに遥は携帯電話を取り出すと

電話口の相手と短くやり取りしてすぐに電話を切った。

どうやら依子にかけたようだ。

今日は晩ご飯はいい、と遥は相手に断りを入れていた。

一連の流れをぼんやりとながめてみると
電話を終えた遙が和にっこりと微笑んだ。

「愛情の確認作業、しないかね。」

「……………ええーと。」

「言葉だけじゃ伝わらない事はたくさんあるよ、和。」

まあ、俺を煽ったのは和の可愛い言葉の数々だけだね?」

「ひいっ!」

正直、先程このままキスされてしまいかもしれない、と
和はどこか身構えていた。

けれどもすぐに身体を解放されたので自分で自分の考えを恥じたところだったのに

まさか彼の暴走がおかしな方向に進化するとは思ってもいなかった。

ぐいぐいと彼女を引っ張る遙に抵抗するように和は後ろに体重をかける。

無駄な抵抗だとわかっていても、そうせすにはいられなかったのだ。

予想通りなのかそれとも彼女の予想の上をいったのか。

再度微笑んだ遙の顔は多少危険を孕んだそれになる。

「和。家まで我慢しようとしてる俺の努力をふいにする気?」

ああ、それとも和も了承してくれてるのかな。態度であらわしてくれてるの?」

遙の発言に首を傾げた和だったが、遙が口角を上げて和の耳元で囁いた。

「今すぐ校内で抱いてもいいの?」

「！！！！！！」

「真っ赤。超可愛い。」

『なんだこの攻守交替みたいな切り替わりはあああ！！！！』

妖艶に微笑む遥と真っ赤になる自身に、

先程とのギャップがあまりにも激しくてなんとも納得できない。

和はそれでもこれ以上抵抗すれば本気で実行しかねない遥の態度に降参を余儀なくされる。

不本意ではあれど、暴走した彼を止める術をいまだ和は知らないまだまだ。

一体何時間ベッドに拘束されるんだろうと考えて

自身の思考にまたも和は頬を染め上げた。

「あ、遥！」

弾んだような声音に、

遥と和はつい先程話題にしていた人物が目の前に立っていることに驚いていた。

マンション前に辿り着いて、さああとは部屋に入るだけ、という状態であったのに

遙にとつたら出鼻を挫かれた気分であろう。

多少間抜けな顔をしながらもふたりはしばし沈黙していたが先に復活して声をかけたのは遙だった。

「優、なにやってるの。」

「んー？勅令を受けてやってきた。」

「は？」

優の言葉にわけがわからないといった風情で遙が首を傾げればなにを思ったのかぐいぐいと優が遙を後ろから押した。

「え、ちよつと何！」

「何って。目の前にタクシー止まってるでしょ、乗って。」

優の言葉に遙が前を向けば、確かに数メートルほどの所に車がある。しかし和をここに置いてどうしてそんなものに乗れるのだろう。そもそも、今すぐ和をこの手に抱きたいと思っていたのにどこか連れ去られるなど冗談ではない。

「俺はこれから和と用事があるから無理！」

「和ちゃんも一緒だから。」

「はあ！！？」

「あ、そっか。こうしたほうが早いね。」

納得したようにうなずいた優は、遙の背中から手を放す。

押されないようにと抵抗して後ろに体重をかけていた遙は予告なしのその行動におもいきりバランスを崩して転びそうになったが

すんでのところでなんとかこらえた。

「ぎゃっ！！！」

色気のない悲鳴が短く上げられ、ついで優の楽しそうな声が反響する。

遥が視線をやると、そこには抱え上げられた和の姿があつた。

「ちよつと！！」

「ほら遥、乗って。」

米俵のように担がれた和は、両手足を動かして抵抗してはいるが態勢的にどうにも分が悪い。

「おい、優！下ろせよ！！」

「和ちゃんもいつしよでオツケーだよ、いこ。」

にこにこ無邪気に笑ったまま、優はタクシーに歩いていく。

無理に下ろそうとすれば和が怪我をしてしまうかもしれないと思えば遥は結局、躊躇して手をだせなかった。

相手の思惑通りに事が運ぶのがなんとも面白くない

遥は優をにらみつけたままタクシーに無理矢理放りこまれた和の隣へと腰かける。

しかしそんな遥から発せられる怒りオーラをまるで気にする事もなく優は楽しそうな弾む声で行き先を運転手に告げた。

「……………ん？和泉君の実家に行くの？」

タクシーが発進するのと同時に、聞こえてきた住所に反応した和は後部座席から助手席へと身体を乗り出しながら訊ねる。

「そうだよー。あれ、言わなかった？」

「……言っていない。」

はああ、と深いため息を吐いて遙が前髪をくしゃ、とかき混ぜる。
和はそれに苦笑しながら、態勢を戻して席に着いた。

「和、大丈夫だった？さっき……。」

「ん？ああ、平気だよ。でもみてこれ！ほら、鳥肌ー。」

あははー、と笑いながら和が袖をめくって腕を遙へと見せてやれば
遙がうわ、ほんとだ、と言いながらまじまじとそれを見つめる。

「ええー、和ちゃんひどい。」

「だって急に抱え込むから！別に加藤君が気持ち悪いかじゃない
けどね。」

なんとというか条件反射みたいなものだよ。」

遙には言っていたことだが、
あの一件以来、和は前よりも男性に触れられる事に拒絶反応が出る
ようになった。

しかしそれも無差別なわけではなく

広末のように自分を完全に異性と判断していない人間には鳥肌は立
たない。

不特定多数の人間に触れられる場でもそれは同様だ。

他意をもたない触り方をされたと感じれば特に怯えたりという感情
もないので

非常に難しいが要は自分がどう感じるか、でそれは変わる。

加藤のようにどっちにもつかない曖昧な認定である男はどうにも判

断が難しい。

今みたいに嫌悪感を抱くこともあれば、そうじゃないときもある。

男性恐怖症というわけでもないのに特に和は気にしていないが、遥はやはり少し敏感になっているようだ。半面、喜んでいるところもある。

「……なに、その顔。」

「んー？和が異性を意識しててなおかつ触られても鳥肌立たないのって俺だけ？」

「ま、まあ、そう、ですけど？」

思わず敬語になって遥から幾分か距離を取るも、狭い車内ではあまり意味がない。

和が警戒しているのを知ってか知らずか、遥は和を引き寄せて思い切り抱きしめた。

「……いつそ俺以外みんな受け付けない体になってくれればなー。」

「なにそれ。」

「そしたら和は俺しか好きになれないでしょ？」

「外から一歩も出れなくなっちゃうじゃん。」

「それこそ学校なんて大変だよ。満員電車とか。」

「ますますいいねー、俺が一生そばにいてあげるー。」

「うわ、こわ、きもちわる。」

そんなふたりの会話に特に何かを差し込む事もなく、助手席に座る加藤は最初の元気はどこへやら、

その後は終始無言のまま和泉家へと到着したのであった。

「ありがとうございました。」

運転手に代金とお礼を言い、三人はタクシーを降りる。目の前にそびえ立つのは最近ご無沙汰だった日本家屋だ。

「香苗さんと昌さんふたりとも居るの？」

和が左隣に立つ加藤へと声をかけるが、加藤は無視して門へと歩き出す。

その状態に多少動揺した和は、

先程の鳥肌発言を怒っているのだろうか、と遥を仰ぎ見る。

しかし、それに遥は首を振った。

「あの程度の悪態であいつキレたりしないから……多分、他が原因だよ。」

「……他。」

結局考えてもわからなかったので、和は気にしない事にした。

まあ、あんまりにも怒りが膨れ上がれば向こうからアクションを起こしてくれるだろう。

「おじさーん、おばさーん！」

その声に、奥からバタバタと音がする。

加藤の後ろからのぞきこめば、香苗がリビングから走って出てきたのがみえた。

『最近あんまり帰ってなかったのかもなあ。』

隣に立つ遥にちら、と視線をやりつつ

もうちょっと頻繁に帰ってあげればいいのに、などと考えていると

想定していなかった圧力が感じられて和は何度目かわからない短い悲鳴をあげた。

「え、あれ！？香苗さん、相手が違います！！」

狼狽した和が言つと、香苗が何言ってるのよ！と声を張り上げた。

抱きしめる相手は実の息子である遙だろうと思っていたのになぜか和に突進してきたので慌てたのだが、

どうやらはじめから遙ではなく和に飛びついてくる予定であったらしい。

「最近すーっかり来ないんだもの！寂しかったのよう私は！」

「え、ご、ごめんなさい。」

でもあんまり和泉君が喜ばないみたいなので……。」

「遙っ！あなたただくだらない嫉妬してるの！！？」

いいかげんにしなさい！！」

和ちゃんが家に寄り付かなくなつちゃうじゃない！とにらまれて、遙は脱力しながらもはいはい、と返事をする。

「和、これからはあまり気にせず来てもらってもいいかな？」

俺も……父さんの事は前よりも心広くなった、と、思うから。」

「……つかえないですよ。」

「あはは。」

「まあ、でも、わかった。」

香苗さん、許可もらったんでこれからはちよくちよく来ますね。」

「本当？約束よ！？私、和ちゃんと一緒にお料理するの夢だったのよー！」

「料理。」

「娘と並んで台所に立つのが夢だったのー！」

「こう、一から教えてあげるのとか、素敵じゃない？」

「……出来ない子の良かったですか？」

「あら、和ちゃんお料理じょうずなの？」

「どう言ったらいいものかわからずしばし逡巡していたが隣に立つ遙が助け舟をだした。」

「和は一通りできるから、逆に母さん教えてもらったら？」

「まあ、失礼ねえ。」

「普通のご飯はそれなりに作れるようになったけどお菓子とか壊滅的だもんね。」

「だって何度作っても失敗するんだもの、レシピがおかしいのよ。」

「……これだよ。」

ため息をつきながら、遙は呆れ顔でリビングへと歩を進める。

「和ちゃん、お菓子も作れるの？」

「ああ、はい。趣味なわけではないんであくまでもそれなりですけど。」

「あらあ、でもすごいわねえ。お家のお手伝いとかきちんとやるのね。」

「家は母が料理大好き人間なので、基本台所にはあまり。」

「どちらかというと片付けだとか、細かい皮向き作業とかを手伝います。」

「家事全般はひとり暮らしたときに出来ないと困るだろうと思って高校生って恐らく日本人の一生においていちばん暇な時間なので有効活用しました。」

肩を竦めてそんな話をする和に、香苗はこらえきれずに噴出した。

世の高校生が皆こんな考えであるならば、子育てをする親も幾分か楽かもしれない。

「じゃあ今度本当に教えてもらおうかしら。」

「全然かまわないですけど、いいんですか？私あまり遠慮を出来なくて。」

「あら、どういう意味？」

「違ったら違うって言っちゃうし、

作ったものが失敗だったら素直にまずいって言っちゃいますけど…

…」

困ったように眉を下げて話す和に香苗はいやねえ、と声をあげて笑った。

「鬼教官でなければいいわよおー！和ちゃんたら相変わらず面白いわね！」

「はあ、恐縮です。」

「今日はねえ、滝山さんお休みの日なのよー。だから今からお茶いれるわね。」

「あ、じゃあ手伝いますよ。」

「あら、早速並んで台所ね？」

「あはは、そういえばそうですね。」

笑いながら、和と香苗はリビングにて一言告げてから台所へと向かった。

ソファに座った遙と加藤は無言だったが

にこにこと笑う加藤に苛立ちを覚えた遙は、彼をにらみつけて不機嫌な声をあげる。

「……どういっつもりだよ。」

「どつって？ 昌さんに頼まれたから迎えに来ただけだよ。」
「それはわかってる。どうせメ切りぎりだからカンヅメなんだから。」

「そうそう。それでおばさんが退屈しないようにって。」

「俺が言ってるのはそつちじゃない。」

「じゃあどつち？」

きよとん、とした顔で加藤が首を傾げれば
怒鳴りつけたい衝動を堪えるように遙が額に手をやりため息を吐いた。

「相変わらずだな。……単刀直入に言えば答えてくれるの？」

「僕に答えられるんなら。」

その言葉に、遙は再度息を吐く。

「優……お前、和の事好きなのか？」

「言わない。」

「はっ？」

「本人に言っていないのに言ったら減るから言わない。」

「……お前な。それ好きだって言ってるのと同義だろうが。」

びし、と青筋を立てながら遙が引き攣る。

加藤はそれに口を尖らせた。

「僕だつてわかんないのにそんなにせつつかないですよ。」

「そうかな？ くらいにしか思っていないだもん。」

「はあああ？ だったら違うか、で終わらせておけよ！」

「今のところどんだん気になっちゃってるから無理な気がする。」

「じゃあやっぱ好きってことじゃん……」

「……うーん、やっぱりそうなのかな。」

「大体、和の前ですーっと俺にくっついてたのはなんなの？」

遥の言葉に、ああ、と加藤は笑い出す。

「遥の恋人って持ってぎりぎり三ヶ月とかだったでしょ？」

それがおばさんの話じゃ一年も想いを秘めて、

告白してからも四ヶ月かかったって言うじゃないか。

で、今現在もつつがなく交際中。気になるじゃない。」

「長続きしないのはお前もいつしよだろう。」

「えー？僕と遥をいつしよにしないでよう。」

僕は遥みたいに恋愛ゴツコなんてしないよ？

恋人ができたら浮気しないしそれなりに長く交際もするよ。」

「不特定多数と付き合う男がよく言う。」

「だからー、それは相手がないときじゃない！」

僕、好きになったら一途だよ。前の彼女とは一年付き合ったもん。」

「どっちも似たようなもんだろう。」

ま、自覚なかったぶん確かに俺のがたちわるいだろうけどさ。」

ため息混じりに脱力した遥を、加藤はじ、とみつめる。

遥はその視線に居心地の悪さを感じれば、なに？と口を開いた。

「……気付けたのは、和ちゃんのおかげだ？」

「……ああ。」

「あの子、面白いねえ。」

僕が男だっってわかってたから嫉妬しないのかと思ったら

そっうい感じでもないみたいだね？」

「ああ。和は俺が不特定多数に騒がれても全然だからね。」

「肝が据わってるし、男を手玉に取ってもよさそうなのに

そっち方面は経験がないのか初心で可愛いよね。すぐ赤くなる。」

「……やらないよ？」

「別に略奪したいってつもりもないよ。でも、そつだなあ。僕だけみてくれたらすつごく可愛いだろうねえ。」

「それは略奪したいって言うてるだろ。」

「んー？そつかあ、そうなのかなあ？」

でも嫌がる事したいとも思わないんだけどなー。

相手が楽しくないと僕も楽しくないしー……。」

うーん、と首をひねる目の前の従兄弟に、遥は頭を抱える。

相変わらずこの男は規格外だ。

和とはまた違った意味で厄介なこの男に、遥は空恐ろしさを覚えていた。

「……和のこと無視してるのは別に怒ってるわけじゃないんだ？」

「無視？してないよ。」

「は？してたじゃないか、さっき。返事してなかったらう？」

遥の言葉に心底わからないといった風に加藤が首を傾げる。

何か言おうと遥がまた口を開きかけたが、

その前に和と香苗がリビングへと歩を進めた。

「はい、お茶とお菓子持ってきたわよー。」

「これいいですね、いっぺんに運べて。おおよそ一般家庭では必要ないですけど。」

「ふふふ、まあそうね、廊下でつつかえちゃうわよね。」

台車を運びながら和がまじまじと興味深げにそれを観察する。

香苗が紅茶をセットし始めたので、和も視線を戻して香苗を手伝った。

「……またチーズケーキ買ってきたの？」

「あらいいじゃないの。しばらく帰ってきてないんだから食べてないでしょう？」

ぎろり、とにらまれて実の母にそんなことを言われてしまえば遥は気まずく視線を逸らすことしかできなかった。

「美味しそうー。おばさん、これどこの一？」

「これはね、Y駅の地下にあるお店のなのよー。」

前にいただいてから気に入っちゃって最近はこのばっかりよ。」

「！食べてくれてたんですか？」

それは、和が初めてここを訪れた時に手土産にと持ってきた店のものだった。

香苗がにっこりと微笑んでくれたので和の質問の答えは是らしい。和は予想外の嬉しさに顔が綻んだ。

「あのときは最低な事をしてしまったと今でも思っていたのよ。大人になっても、感情つてままならないものねえ……」

和ちゃんを永遠に失ってたらと思うと今でも少し怖いよ。」

「あ、大丈夫です。あれくらいで落ち込む性格じゃないので。」

「そうね、本当あなたでよかったわ。」

ふふ、と楽しそうに笑い合うふたりに、遥が目を細める。

遥の向かいに座る加藤は、あまり面白くないのか口を尖らせていた。

「ふうん……おばさんも和ちゃんお気に入りなんだね。」

「あら、だってこんな子他にはいないもの。」

馬鹿息子をここまで優しく包んでくれる子いないわよ？」

「ちよっと母さん。」

「まったく実家に寄り付かない親不孝者なんだから！」

それを言われてしまうと耳が痛い。

遙は反論もまともにさせてもらえずに無言で紅茶を受け取った。

「はい、加藤君。」

「……………」

ケーキを手渡ししたが、またも加藤は和を無視する。
香苗は目を丸くし、遙は眉根を寄せる。

しかし和は何かに気が付いたのか、短くああ、と声をあげれば苦笑した。

「はい、優君？」

「ありがとう。」

ああやっぱり。疑問が確信になって、和は遙をちらりと見つめた。
前に彼は、優君でなければ返事をしないと書いていた。

つまり無視ではなく、彼にとっては和に声をかけられていないのと同義だったのだ。

しかし何を思ったのか。遙が悔しそうに齒噛みする。

「俺もそれでごり押しすればよかった！」

「感心するな、そこ！」

……………にしても恐ろしく子どもだね。まーくんのがしっくりくるなあ。

「

「まーくんでもいいよ？」

「……………いや、やめておく。」

「そう？」

微笑んで首を傾げる優に、和は盛大なため息を吐いた。

これからは加藤とは呼べなくなったが、まあ遥もあの調子であるし大丈夫だろう。

和は今にも怒りださないかと内心で戦々恐々としていたが

遥は他に気になる事があるのか、何事かを考えているようだった。

しばし遥をみつめていたが、くい、と袖をひっぱられ和は視線を変えろ。

その気付いてもらうために行う仕草も非常に子どもっぽい。

和は多少、生温かい心になりつつなにか？と優に声をかけた。

「和ちゃん、あのとき嫌だった？」

「……あのときって？」

「キス。嫌だった？」

本気で彼は台風そのものなのではないか。

固まりつつ心の中で過ぎつた間抜けな言葉は、

けたたましいカップを落とす音に解凍された身体と共にすぐに消え去る。

カップを落とした張本人である遥は、いまだに固まったままだった。

第一百七話「彼女が白旗をあげるとき・その15」

「きすいやだった」

「キス。嫌だった？」

その言葉の意味をきちんと文として変換するまでに和は些かの時間を要した。

やっとあてがうべき文字をみつけ、音を言葉として理解したとき、もう目の前の遙は優の胸倉をつかんでいるところであった。

「優、今のはどういう意味？」

かろつじて笑っているが、今の遙は爆発寸前だ。

眼前の優をこれでもかとその力強い双眸でにらみつけている。

「どついう、って？そのまま。」

あのとときの和ちゃんがとっても可愛くて思わずキスしちゃったんだよ。

「……それは、唇につてこと？」

「うん。」

震える声で訊ねた遙に、

優は何故そんなことをきくのだ、といわんばかりに首を傾げる。

もはや開いた口もふさがらずに、呆然とその様子をながめていたが痛々しい音がリビングに響いて、和はやっと正常な思考を取り戻した。

殴られた優が勢いよく床に倒れれば、それを制止したのは香苗だった。

「遙、一発でやめておきなさい！」

「母さん、」

それが納得いかないのか、香苗にも怒りをぶつけようとする遙を今度は和が慌てて傍らに立ち止めに入る。

「和泉君、すわ」

座って、と言葉を続けようとしたが、それはかなわなかった。何故ならば音を発するはずの彼女の唇は今、第三者によってふさがれてしまったからである。

傍らに寄った和の顎を問答無用でつかんで持ち上げ、何事も発しないうちに、遙は自身の唇を彼女のそれに寄せた。触れただけのそれではなく、恥ずかしい水音が小さく耳に届き、和は状況を考えてあまりの羞恥に身体を震わせてしまった。

「……………」

真っ赤な顔をして震える和の腰を引き寄せ、遙はじ、とその顔をのぞきこむ。

「……………こういうキスしたの？」

「えー、違うよ。触れる程度の。」

だって僕そのとき女の子だったしー、あんまり変に思われたくないじゃん。」

「お前に訊いてねえ！そもそも和、なんで黙ってたの？」

のぞきこんで迫ってくる遙に、和は完全に混乱しているのか

小刻みに震えながらうつむいている。
なんとか冷静になるうとしていたが
目の前で起こった展開があまりにも早すぎて思考が追いつかないの
だ。

それを察したのかはわからないが、香苗が遙！と再度声をあげて息
子をたしなめる。

「和ちゃん震えちゃってるじゃないの！
落ち着くまで待つてあげるとかそういうことが出来ないの!？」

香苗の言葉にやっとその事実が付いたかのように目を見開き、
遙は一步下がって和の様子を観察する。

確かに震えていたが、それ以上に彼が目を剥いたのは
和の瞳から涙がこぼれそうだったからだ。

さすがにやりすぎてしまったか、と狼狽した遙は
今までの剣呑な雰囲気を一掃すれば和の背中を優しくさすりはじめ
た。

しかし何を思ったのか、
次の瞬間にはその手を和が身体を振って拒絶する。

それだけでは飽き足らず、和は遙からある程度距離を保つように
数歩、後ろにさがった。

「な、和……」

そんなに怒らせてしまったのかと、遙は真っ青な顔をして彼女をみ
つめたが

和は慌てて違う！と声を上げながら首を振った。

「そうじゃなくて。……黙ってたのは私が全面的に悪い、から。優しくなくていい。ごめん。」

淡々とした冷静な声色は、いつも彼女がまとっている空気と同じだった。

しかし遥はその言葉に多大なる衝撃を受ける。自分が正しく認識しているかはわからないが、今の彼女の言葉は恋人以外とのキスを許し、なおかつそれを故意に黙っていた事を認めたことになるのではないか。それはつまり。

浮気をしていた、ということなのだろうか。

遥はあまりの事実にも然となりかけたが、その雰囲気を感じたのだろう。和が再度狼狽しながら強く首を横に振った。

「ちが、違うちがう！！同意してキスしたとかでもなく！優君はこんなだから、なんかの冗談なのかと思ったんだよ！深い意味なんてないんだろうと思ったら、言うのもあれだなとか！ふいうちとはいえ、他人に口くつつけられたわけだしまた隙がありすぎる、とかすごい怒られたらどうしよう、とかも考えたし……。」

後半は段々と声が小さくなりつつ、和はぶちぶちと心情を吐露する。

「……要約すると面倒だから黙っていた、と？」
「いや、その、だって！自分でも真意を計りかねていたというか……」

彼にとつたら単なるスキンシップなのかなあ、とか。
そうなっちゃうと私が騒ぎ立てたらなんか馬鹿みたいじゃん。」
「外国人じゃあるまいし、あいさつで唇にキスされてたまるか！」

遙の怒鳴り声に、香苗が冷静に

口と口は外国人だつてあまりやらないんじゃないの？とつつこんだが
遙が無言で自身の母をにらみつけたので、香苗はすぐに口をつぐん
だ。

「……まあ、いいや。とにかく和、座つて。」

「……………はい。」

罪悪感からか、多少ちいさくなりながら和はすすすこと
指し示された遙の隣の席へと腰かける。

優はといえば、殴られたままずっと地べたに腰を下ろして
体育座りをした状態だ。

そんな優に、遙は無表情な視線を超越した。

「優。お前どういうつもりだよ。」

「いや、ごめん。やっちゃったあとまずかったかなあ、とは思っ
ただけ。」

それで和ちゃん、嫌だった？」

「嫌だった。」

はつきりきつぱりと即答した和の声に、優はそうかあ、と
力が抜けるような呑気な声をあげる。

「あのおときね、和ちゃんが伊達眼鏡を外して僕に貸してくれたんだ
よ。」

廊下歩いてて万が一みつかっちゃったら大変でしょ、って。それでみえた素顔がとーっても可愛くてえ。」

えへへえ、と笑いながら膝を抱えてゆらゆらと揺れる優は一体全体こいつは何歳なのだ、と思わせるくらい無邪気な顔をしていた。

「……なーぎー。」

「え？な、なんか駄目なところあったあ！！？」

遙の声が自身の名前を呼ぶので、矛先を向けられると思わなかった和はわかりやすく狼狽する。

「和ちゃんってけっこう天然なのねー。こう、意外な一面というのかしら。」

「え、いや、私ギャップ萌えとかそんな要素ないと思うんですけど。」

思考がかなり雑多になってしまった和は常ならば大概の人間には使わないような言葉まで用いてしまい自身で発してしまった後にまた慌ててしまった。

幸い、言われた香苗はわずか首を傾げるだけで済んだから良かったが。

「……あの、眼鏡って貸しちゃだめだった、の？」

「いや、そういうことではなくてね？」

「じゃあ、かけてあげたのがいけなかったの！？」

「は？渡したんじゃないかってかけてあげたの？直接！？」

再度の怒鳴り声に、和は疑問符だらけの頭を抱えながら全くわからない、という顔をしていた。

「え、だって、別に他意は……」

「かけてあげたら自然と至近距離になるじゃないか！」

「そ、そうだけど……」

「それでキスされたんなら確かに隙がありすぎだよ!!」

遙の言葉に、和がええ……という顔をする。

「でもそれでされるとか普通思わないよ……」

「そうかもしれないけど、基本的にやっぱり警戒心が足りない。」

「そ、そうかなあ。」

「そうだよ！」

鬼気迫る遙の様子に、和は若干引きながらも一応は気をつける、と返事をした。

「……母さん、申し訳ないけど帰る。」

「まあ、そう言うと思ったわ。」

ため息混じりに仕様のない子ね、ともらすと遙は苦笑する。

和はなんとか拒否することはできないものか、とぐるぐる考えていたが

今のところ退路は絶たれたとはらをくくるしかないだろう。

せめてもの抵抗にこのソファから立ち上がらなければ時間稼ぎになるだろうか。

そう心の中で呟いたそのときだった。

急に身体が浮く感覚があり、またも遙に横抱きにかかえこまれたと理解したときには
すっかり持ち上げられてからであった。

「優。」

抗議の声をあげるまえに、遙の静かな声がりびングに響き渡る。
呼ばれた優は、和と遙の様子をじ、とその目に確認しつつ
立ち上がってはやがて遙へと視線を合わせた。

「なに？」

「……もしも俺からとる気になったら正面から来い。
絶対に渡すつもりはないから。」

そうじゃなきゃ中途半端にちよつかいだすな。和が混乱する。
「遙、けっこう余裕？」

首を傾げる優に、遙が眉間に皺を寄せながら深く長いため息をこぼす。

「余裕あったらしないよ、こんなことは。」

「……和泉君、いいかげんおろしてもらえない？」
「もう抵抗する気ないよね？」

先読みされていた行動に少し悔しさを覚えつつ、
しかし素直に従わなければこの場はまずいと感じれば
和はこくこくとうなずいた。

ゆっくりと遙に床へ下ろされて、和は小さく息を吐く。

「和ちゃん。」

香苗の呼びかけに、和はい、と返事をすれば
目の前には困ったように眉尻を下げた香苗が立っていた。

「ごめんなさいね、愛情表現が激しい子で……」

なんとというか、若い頃の昌さんを見ているような気分だわ。」

こめかみをおさえてそうこぼす香苗に、和は苦笑して囁く。

「あのう、じゃあ、このあとのアドバイスとかありますか？」

「逆らわない事かしら。変に抵抗すると余計長引くから。」

なにが、とはさすがに訊けずに、

和は引き攣った笑みをたたえながらまた来ます、と一言告げて家を出た。

去り際、ちらり、と視線をやった優は、

どこかぼんやりと窓の外をながめていた。

ひよつとするとなにか考え事をしているのかもしれない。

本当によくわからないひとだ。

和は起こりそうな頭痛をなんとか押し留めて、

半ば無理矢理つながれた手をほどくことなく和泉家をあとにした。

遙の部屋にて、ソファに座る遙の前に
和は床に正座をしつつうつむいていた。
ともすれば親に説教を受けているような格好だ。
もしくは浮気男が言い訳している現場に見えなくもない。

「確かに、アレは俺の従兄弟だしね、言い辛かったのかもしれないけど。」

「はい。」

「でも前に、おんなじ事されたとき和はかなり怒ったよね、覚えてる？」

「は、はい……。」

和は、田舎に帰省したときのことを反芻する。
状況こそ違うものの、

確かにあのときは別れをほのめかすような事まで口にしたのだ。
それを思えば、和はなんとも居た堪れない。

「あのときは、俺が全面的に悪かったけど……」

和だっといういかげん危機感を持って男と距離保ってほしいなあ。」

「は、おっしゃるとおりです。」

「どう思った？」

「え？」

「優にされたとき。何を思ったのかな、て。」

その言葉に、和はしばし逡巡すれば、ためらいつつも口を開いた。

「あれ？かな。」

「……え？」

「いや、本当一瞬だったし、幻だったかもくらいで。そのあと特に向こうもなんにも言わないし。」

嫌だとか思う暇もなかった。もうなんにも思い出せないし。」

「ふーん……でも今、思い出してたんでしょ？」

「いやだって、和泉君がどう思ったか訊くから！」

「……でもやだ。」

理不尽を覚えたものの、今回は全面的に自分が悪いのだから仕方ない。

諦めの境地のため息をひとつ落として和は立ち上がれば遥の隣に腰かけた。

「なんかね、ごめんて言うのも変な感じで。」

「そうだね、俺も謝られるのは微妙かも。」

『浮気したわけでもあるまいし。』

困ったように遥が笑う。和も同じ笑いを返した。

口にはしなかったがお互いに過ぎった言葉はおなじだ。

「まあ、アイツがどう出るのかなんてわかんないけど。」

「あの超絶マイペースはなかなかすごいね。」

「和、浮気は駄目だよ。」

悪戯っぽい遥の笑い顔に、和はようやく緊張していた身体の力を抜く。

「しないよ。」

「うん、したらどうなるかちょっと教えておこうね。」

「え？」

雰囲気急速に変わった遙の様子に和は一瞬動揺する。しかし次には何が言いたいのかを正確に理解すると無意識にソファの肘掛にぎゅ、と腕をまわす。

「じゃあ、和から誘って？」

てっきりまた持ち上げられると思えば予想外の言葉を口にされ和は今度こそ目にみえて狼狽した。

「そ、それはつまり」

「うん。だって和が100%悪くないわけではないでしょ？ やっぱりキスされたわけだし。」

「う、」

「だから、ね？俺としては誠意がほしいなあ。」

「きゅ、急に悪徳業者みたいなこと言い出さないでよ！」

違法取立てのようどこか遙が怖い。

和はますますソファに抱きつきながらにこにこ笑う遙に怯えていた。

「俺がどうしたら今回の件をすっかりきれいに水に流せるか考えて行動してみて。」

なんでもいいよ。」

なんでもいいよ、と言いつつ

どういった類のものを求めているかは察しがついている。

しかし自分からそういう行為に誘うにはあまりにもハードルが高いではないか。

和は混乱の境地に立たされ、しばし遙を呆然とみつめていたが

今回の件はさすがに自分が悪かったと言いつき聞かせれば
やがて決心したかのように小さくこくり、と喉を鳴らした。

ゆっくりと、まるで魔法にかかったかのように
和は緩慢な動きで恐る恐る遥の膝へ跨った。
目線が上になり、遥の綺麗な顔を見下ろす。

遥は、ずっと微笑みを顔に浮かべながら、和をじ、と見上げていた。

彼の肩に手を置き、和はゆっくりと唇を重ねる。

自分からしたのは初めてではないのに、これ以上ない程に和は緊張
していた。

心も体も、どうにかなってしまいそうだ。

いつもならば唇が重なったところですぐさま遥に翻弄されてしまっ
のだが

今日は違う。

頑なに和から施されるそれだけを受け入れ、

遥から積極的になにかを仕掛けることはしないようだった。

和はそれに頭の隅で動揺しつつも、

懸命に遥の唇を開き自身の舌を彼の口腔内へと滑り込ませた。

遥がいつも自分に与える快楽を思い出すかのように

和はゆっくりと彼の中を侵していく。

やがてなにかを堪えるように、遥が艶っぽい吐息をもらせば
和は背筋にぞく、となにかが走るのを感じた。

『いつも、和泉君はこんな気持ちなのかな。』

相手が昇りつめていく様子を観察し、
それにまた自身の快感を煽られつつ悦びを共有する。

上顎をなぞり、唇を吸い上げ、舌を吸い上げた頃には
お互いの呼吸が恥ずかしいほどに大きなものになっていた。
部屋中が淫らな水音と息遣いで満たされた頃合いを見計らって、
和はゆっくりと唇を放した。

遥の潤んだ瞳をながめなら、

自分も今同じような顔をしているのだろうか、とぼんやり考えた。

これでは許してくれないのだろうか。

和はしばらくうかがうように遥をみつめていたが、

彼はじ、とこちらを見るばかりで何も言ってはくれない。

心底困ったように和は眉尻を下げれば、脱力して遥の肩に頭をもた
れかけた。

遥は、そこで初めて身体を動かし和の頭をゆっくりと撫ではじめた。
それでもやはり何事かを発するでもなく黙ってこの状況にゆだねて
いる。

このままでいても仕方がないが、
ここから先は果たしてどうしたらよいものかわからない。

和は結局観念すれば肩に顔をあずけたまま小さな声で呟いた。

「もうどうすればいいのかわかんないよ……」

可愛らしい声に、遥はくす、と空気だけで笑う。

それに苛立ったのか、和が肩から勢いよく顔を放した。

真っ赤な顔をして、遥の顔をにらみつける。

「好きだってこれだけ態度で示したのに！
もう、この先は遥の好きにしてよ……！」

赤い顔に、潤ませた瞳がなんとも挑発的であり
それだけでも遥からすれば抜群の破壊力であった。

にもかかわらず、愛しい彼女からもれた言葉は信じられないもので、
遥は一瞬、不覚にも反応らしい反応を返せず固まってしまった。

和がそれを訝り首を傾げるが、その仕草もまた殺人的な可愛らしさで
遥はふ、とひとつ息をもらせば和が跨った状態そのまま立ち上が
った。

うわ！？と和の口から悲鳴がもれる。

「え、ちょ、なななに!？」

「好きにして、とどんだけ殺し文句かわかってる?」

「だ、だってそんなこと言われて、もっ!!?」

も、のところどころでさ、とベッドに押し倒され、

和はいつにも増しての遥の早業に一体全体どういことなのか、と
焦らずにはいられない。

「あの、和泉君!？」

「この領域に入ったら和泉君は禁止です。」

「でも、」

「お言葉通り、好きにさせていただきます。」

「なんで敬語!？」

「和、好きだよ。」

にっこりと微笑んだ遙に性急な口付けを施され、
そこから和は何を発することも許されはしなかった。

もれる声はすべて艶っぽい喘ぎにとってかわり、
信じられない事に目を覚ましたらとくに日付は変わっていたのだっ
た。

第一百十八話「彼女が白旗をあげるとき・その16」

だん！

欠片が思いきりよく和の方向へとんできたので、

察知してそれを真横にひよい、とかわす。

うしろからいて！という間抜けな声が聞こえてきたが

和は無視して目の前のかわいい女の子にっこりと微笑んだ。

「塩ちゃん、気合じゅうぶんだねえ。」

「はい！！あ、あああの、和泉先輩、ごめんなさい……。」

「いや、気にしないで。」

現在、和泉遥ひとり暮らしのマンションにて

三人の人間がダイニングキッチンへと集結していた。

ひとりテーブルに着き頼杖をついて台所へと視線をやっているのが
遥。

台所に立つのは和と塩澤のふたりである。

現在、日曜日の午前10時。

なぜこのような状況になったのか、話は土曜日の夜にさかのぼる。

金曜日から土曜日の朝方にかけて翻弄され続けた和は、
結局昼を過ぎても身体が重だるく、

遙に半ば看病されるような形でその時を過ごしていた。

夕方頃になってやっと回復すれば、

当然であるが目の前の恋人に和は怒り心頭であった。

「加減をしてって何度も何度も何度も言ってるじゃん!!!!」

「なんか、あの、夢中?に、なっちゃいました。」

「もうこんなの絶対に嫌だからね?」

待ってっていくら言っても待ってくれないし!」

「だってあまりにも和が可愛くて「言い訳無用!」」

和の怒声に遙が背筋をのばしてはい、と返事をすれば
やっと沸騰する頭の中も落ち着いたので、

和は諦めの境地であるかのような深いため息を吐き出した。

「……ご飯、作るから手伝って。」

「は、もうなんでもいただきます。」

小さくなってうなずく遙に、またため息を吐いては
和はさっさと寝室を出る。

遙も慌てて彼女のあとへとならった。

夕食が終わり、やっと険悪な雰囲気も一掃されたとき、

小さな騒動が和の元へと舞い降りてくる。

赤いソファのある部屋にて、

和は毛足の柔らかいラグに体育座りをしながら読書をしていた。

壁に寄りかかる和に向かい合うように、

遙はソファから降りてちょうど座ると足が当たる位置を背もたれに
しながら

お互いなぜかソファでくつろぐことなく向かい合わせに座っていた。

これはもともと遙が言い出した事で、本を読む和をどうしても正面からみつめていたい、と彼はのたまう。ソファに座ると、横顔になってしまるのが不満であるようで、それならば自分が和を横抱きにしながら本を読んでくれ、と遙が主張してきた。

当然和は全力でそれを拒否し、今のような状態に落ち着いたのである。

そんな憩いの時間ともいえる穏やかなこの空間に、似つかわしくない電子音が響いた。

冷たい機械の呼び出し音に先に気が付いたのは遙で、和はまったく本から目を離していない。

遙は相変わらずだな、とひとりごちれば

ダイニングテーブルに置かれた携帯電話を立ち上がって手にし、

彼女の傍らへと腰をおろせば本と彼女の間に携帯電話を差し入れた。

「和、鳴ってるよ。」

「わーびっくりしたー……ありがとう。」

一瞬間を揺らして驚きつつ、遙に視線をやって携帯電話を受け取る。

音の長さで電話だと気付いた和は

一体誰だろうとディスプレイの名前を確認した。

そしてそれを目にした瞬間、何事かを察した和は

くす、と小さく微笑んで通話ボタンを押す。

その顔に遙が剣呑な雰囲気を一気に放出したので

和はそれを一瞥すればおもいきり額を指で弾いてやった。

う、という短いうめき声が彼の口からもれる。

「はいはい。」

『あ、和先輩！』

電話口から元気な声が聞こえてきて、和はもう一度微笑んだ。

「塩ちゃん、どうしたの？」

その言葉に、いましがた自分がなぜ彼女に呆れられたのかを理解すれば

遙は両手を合わせて頭を下げた。和はそれに苦笑で答える。

『あ、あの、あの………』

困ったような、ためらうような声音が耳に届いて和はこのまま彼女の言葉を待とうかとも思ったがかなりの時間を要するであろうことを考えればそれはあまり建設的ではないような気がした。

「チョコレートもう作った？それとも買った？」

『……！あ、あのっ』

「どうしても手作りを渡したいんなら協力するよ。」

なにを作るのか迷ってた？それとも失敗の連続で困り果ててた？」

『ど、どどどどど』

すらすらと淀みなく塩澤の現状を読み解いていく和に

彼女は動揺が隠せないのか、かなり狼狽した様子である。

先程から会話らしい会話をいまだ交わしていない。

「どうしてわかったかって？塩ちゃんが純粹で素直だからかなあ。で、失礼だけどひよっとして後者かな？」

くつくつと笑いをこらえつつ和が言葉を紡げば束の間、携帯電話から騒がしい音が鳴り止んだ。

和の一言一句にいちいち動揺していた塩澤が、先程からどっすんばったんと奇怪な音をあげていたのであるがその音も、塩澤の声もいつさいがしなくなったのだ。

和はそれにならうように無言になれば、今度こそ彼女の言葉を待った。

『……………お、』

おっしやるとおりでございます……………、と

蚊の鳴くような塩澤の声を優秀な携帯電話は拾い上げる。

それを耳に入れ、和は我慢できなくなればついに笑い声をあげてしまった。

「あははははっはー!!」

『ちよ、先輩！ひどいですよう!!』

「じゅ、じゅめ、」

ひーひーと苦しそうに息を吐き出しながら涙目になった和を遙が半ば呆れたような視線で見つめる。

それに我に返ったのか、和はごほん、とひとつ咳払いをした。

「じゃあ私と一緒に作ってみる？」

『え、い、いいんですか!!?』

「いいよー。」

和の軽い物言いに、塩澤は嬉しがったり恐縮したりと大忙しのようである。

はしゃぐ塩澤を想像しつつしばらく無言でいると、

何を思ったのか正面に座っていた遙が和、と彼女の名前を呼ぶ。

和がどうしたのかと首を傾げれば、目の前の恋人はにっこりと微笑んだ。

「ここを使ったら？良ければだけど。」

和の家で作るよりは緊張しないんじゃないかな。他に人がいないし。広末君も近所だから鉢合わせると色々気まずいでしょ？」

「ああ……そうかもしれないね。え、でもいいの？」

携帯電話を顔から少し離しつつ、和は遙に訊ねる。

申し訳なさそうに眉尻を下げる彼女に、彼はもちろん、と再度微笑んだ。

「そのかわり、明日俺に和の作ったチョコちょうだい。」

「……別にいいけど。好きだったけ？」

「……………男心だよ。」

「ふうん？……あ、塩ちゃん？あのね、場所なんだけど。」

和が遙の提案を説明している間も、

塩澤は大声をあげてみたり、がん！という騒音をあげてみたり、かと思えばはあ、と気の抜けた空気のような音をもらしてみたりと忙しかった。

日曜日に駅前まで迎えに行く事を約束し、その日の電話は切れたのだった。

そして、時間は現在に戻る。

塩澤にあまり難しいものは作れないだろうと判断した和が提案したのは

定番と言えば定番のトリュフチョコレートだった。

これならば極端に言ってしまうと溶かして固めるだけである。

まあ、なんとかなるだろう、と和は考えていたのであるが。

今現在、彼女は自身の認識が甘かったと言わざるを得ない状況に陥っていた。

チョコレートを「刻む」というよりも「粉碎する」と表現したほうが正しい

なんとも危なげな彼女の手つきを見つめては、和はため息を吐きなくなった。

『まさかこれほどだったとは。』

口に出しそうになり和はなんとか呑み込めば、

まあくるくると動く彼女を観察するのは面白いしいか、と結局変な方向に開き直った。

「和泉君、そのチョコレートの欠片食べていいよ、使わないから。」

「……ありがとう。」

塩澤が力いっぱい砕いたチョコレートの破片は見事、遙の額に命中

し、
それを手にした彼を指差して彼女はにべもなく言い放つ。

しかしそんな冷たい和には慣れたもので、
遙は傍観者よろしく呑気にふたりを観察しながら一言お礼を口にすれば

塩澤が先程放った攻撃の残滓を口の中へと放り込んだ。

「塩ちゃん、直火は駄目だよ？」

「え！そうなんですか！？」

「そうそう、湯せんして。」

「湯せん……なにか聞いたことあります!!！」

ぼん、と左手の平に右手の拳を叩き合わせた塩澤は
チヨコレートを直接火にかけたまま放置している。

和はそれはよかった、と淡々と答えつつかちり、とコンロの火を止めた。

背後からくつくつと笑い声がもれ聞こえ、和はゆっくりと振り返る。

「和泉君。」

たしなむような和の声音に、慌てて遙が謝罪する。

しかし次に彼の口から出た言葉は、なんともいえないものだった。

「あ、ごめん、つい……塩澤さんはくるくる動いて可愛いねえ。

なんかゼンマイで動くおもちゃみたい。」

「ええ!？」

「珍しくサドな発言……」

塩ちゃんてやつぱりいじめられる星の元に生まれてきたんだね。」

「ど、どうしてそうなるんですかあー!!」

「だって和泉君、普段すごいマゾっ気たっぷりだもん。」
「和限定でだけどね。」

お決まりの文句を音にされ、和が呆れてため息を吐いた。

「……さ、じゃあ気を取り直して。」

湯せんていうのはね、お湯をこっやっ張ってチヨコを溶かす事だよ。

じゃあ、やってみようか？」

「は、はい!」

言って、彼女が手に持ったのはしゃもじである。

遥の提案を素直に受け入れた和であったが

少々困ったのは、菓子類を作る器具がことのほか不足しているという事実だった。

恐らく実花がお菓子作りに着手していなかったためだろう。

へらがなくともまあ似たようなもので混ぜればいいのか、と開き直ったが

チヨコの匂いがついたしゃもじはなんとも間抜けな様相を呈している。

これがいま言葉を発するならば「出番じゃないはずなんですけど」と戸惑いを吐露しているに違いない。

そこまで馬鹿馬鹿しいことを考えてから、

隣に立つ塩澤へと意識を戻した。

少しも気が抜けないのは、割と緊張感が漂う。

彼女の手元をしっかりと監督しながら、和は細かい指示を出していた。

「うん……そうだね、もういいかな。じゃあボウルこっちに置いておこうか。」

「はい。」

刻んで溶かすまでだけでけっこうな時間がかかった。

ここから先は一体どうなってしまうのだろうか。

ここまで苦勞したのだから、良い方向にいったほしいものだと疲れる頭でぼんやりと考えていた和であった。

「うー……っ、疲れた。」

「お疲れ様。良かったねえ、うまくいった。」

「まさかここまで時間かかると思ってなかったけどね。」

テーブルにて力無く笑う和に、

遙は再度勞いの言葉をかけながら頭を撫でた。

時刻は午後6時。

昼前から始めたことを思えば疲勞困憊になるのも無理はない。

「晩ご飯どうしようか？なんか頼む？」

「んー……いや、確か乾麺を前に買ったから
茹でてにゅうめんにしよう。簡単だし。」

いい？と訊ねると遥がもちろん、とうなずいた。

「じゃあ、茹でると材料切るのは俺がやるよ。
つゆだけお願いしてもいい？」

和がテーブルに左側面だけ顔をぴったりとくつつけながら
ありがとうー、と抜けた声をあげるので、遥は苦笑した。

「本当に大丈夫？」

「へーき、へーき。よし、お腹減ってるし作っちゃおうか。
じゃあ和泉君もお願ひします。」

気合を入れて立ち上がる彼女をしばらくみつめ、遥は了承の返事を
した。

和はそれくらいやると言ったのだが、
結局は遥が押し切って後片付けもすっかり彼任せになってしまふ。
和は少し申し訳なさそうに微笑んで
食後のコーヒーを淹れるべく台所へと立った。

「チョコ食べる？」

「食べる。……あ、でも日付変わってから食べたいかも……」

「でも和泉君、腐らせちゃうくらいもらえるでしょ？明日。」

「わかってない！和からバレンタインチョコもらえるんだよ！？
嬉しいじゃないか！！」

「……ふうん？」

首を傾げながら遙の言葉に一応逆らわずに声をあげる。相変わらず、彼という人間がよくよくわからない、と和は思う。

もうふたりは交際というものをしている、

こうしてお互いに家を自由に行き来するような仲であるにもかかわらず、

なにゆえ彼はチョコレートがほしいのだろう。

そもそもバレンタインというのは日本においては

好きな男性に女性が愛の告白をするという日である。

既に彼女はそれを目の前の彼に伝えているわけで

和はますますその必要性を感じない。

イベントに便乗することで勇気を後押しされる女の子の多くを

可愛らしい生き物だと和は思ったりもするが、

その輪の中に自分と言う人間が入る画はどうしたって想像がつかなかった。

「まあいいけど……じゃあ今食べないの？私食べるけど。」

「……それはどうかと思うんだけど。」

「だって私、自分のぶんも作ったもん。チョコけっこう好きだし。」

「いや、そうじゃなく……ごめんなんでもない。俺も今もうつよ。」

心底寂しそうな顔をしながら遙がうなだれる。

内心面倒臭い男だな、と思いつつも、和は冷蔵庫からチョコを取り出した。

まずコーヒーを注いだマグカップをふたつテーブルに置き、

それからチョコレートの入ったステンレス製のバットを

遙の目の前に置く。

「……なんとなくか情緒もなんにもないね。」

「今からラッピングしてほしい？」

「……………いいです。」

「まあまあ、明日はきつとたくさんもらえるよ。
可愛くラッピングされたチョコレートたちを！」

「和以外からはほしくないし。」

「ああそうですか。……………あ、美味しい。」

ひよい、とアーモンドコーティングされたトリュフをひとつつまみ
口の中へ放り込めば、いっぱい甘い香りが広がった。

「せめて最初に食べたかった……………和って本当なんでもできるね。」

涙目になりながら遙もあとに続いてチョコを口に放り込む。
すると目を丸くしながら手作りのそれを味わった。

「おいしい！」

「まずく作ったもんさすがに他人様に食べさせようと思わないけど
ね。」

「またそんな身も蓋もない……………こっちは普通の味？」

「これがビターで、これがスイート。」

「へ……………すごい。塩澤さんもこんなに色々種類作ったの？」

「いや、ビターのだけ作らせた。」

本当は飾りつけとか可愛く色々とさせてあげたかったんだけどねえ
……………ふっ。

「和……………あまり思い出すと疲労感がまた、」

「私も自分という人間の力不足を痛感したよ。まだまだだね、本当。
」

ふるふると首を振る和に、遙は劳いの心をこめつつ頭を撫でた。

彼女が唯一かなわない人間が居るとしたら、

ひよっとすると塩澤のような人間なのかもしれない。

そこまで考えて、またひとりの人間が遙の頭の中に浮かんでは、消えた。

可能性はゼロではない。

それだけで、遙は情けないくらいに弱くなってしまう。

彼女を永遠に失いたくない。

目の前の恋人にそれを言っても、きっと真顔で一蹴されてしまうだけだ。

それを想像すれば、遙の心は少しだけ軽くなった。

第一百十九話「彼女が白旗をあげるとき・その17」

日曜日の出来事ですっかり疲労してしまっただからか、和は次の日いつも通りの時間に起床することができなかつた。

遥が普段目覚める時間とほぼ同じ時間になったため、その日は珍しくいつしよに朝食をとるはこびとなる。朝から上機嫌な遥をよそに、今日だけは別々に登校したかったのに、と

内心頭を抱える和であつたが、今の時間帯にひとりで電車に乗るのは少々抵抗があるため仕方がない。

『女子の視線に殺されたらどうしようかなー。』

どこか遠い目をして半笑いをする目の前の恋人に首を傾げつつ、遥は朝食のパンを咀嚼していた。

「ちょっと、後生だから離れて歩いてくんない？」

「なんか言葉の割りにお願いの仕方が軽いよ、和。」

「元々しばらくは学校で別行動だって話してたでしょー！」

「でも金曜日は放課後の図書室は普通にいつしよに過ごしたし。」

「あれは生徒の数もまばらだったからで……」

「それにまだ校門くぐってないよ。」

「屁理屈を言うな、それは私の専売特許だ!!」

学校最寄り駅にて、遙と並んで歩く事を拒んだ和は遙に先を歩け、と後ろからその背中を押している。

先程の言葉に遙が少し噴出してなにそれ、ともらしていた。

「なんでそんなに並んで歩くの嫌なの？今更……」

「何言ってるの！今日ほど女子が活発になる日がある!？」

まだ死にたくないんだ！などと叫ぶ和に

遙はおおげさだな、と笑い飛ばせない自分を内心で自嘲する。守ると言い切れないところが情けない。

遙は過去の様々な今日という日を振り返って背筋が寒くなったが、なんとかそれを表に出さずにひとつため息をこぼしてみせた。

「……わかったよ。浮気しないでね、和。」

「なぜそうなる……」というか、今日に限っては私のせりふでは？」

いや、普段からそもそも私のせりふでしかないか、とぶつぶつ呟く和に

遙は一瞬苦笑しながら、寂しさを胸に覚えつつ歩を進めた。

相変わらず、彼女は嫉妬心という恋人がいる人間ならば多少はあるであろう

当たり前の感情を持ち合わせていない。

いや、持っているのだろうが、彼女の場合はそれがひどく特殊なのだ。

遙は、この世界というものはとてもうまくまわっているものだ、と

思う。

自分のような人間はともすれば一生安寧を知らないまま終わる気がしていた。

父親と母親の仲睦まじい姿をいつもどこかしら冷めた目でみていたしなにより自分がそれを求めてはいなかったのだ。

昔から、女性を可愛いと思う反面、ひどく醜いと思う自分にも気が付いていた。

可愛くて、残酷な存在。それが女だ。

男の自分には到底理解できない所業も、しかし彼女達は涼しい顔でやってしまう。

それが恐ろしく、何をそこまでする必要があるのか、とずっと疑問に感じていた。

しかし囚われてしまえば、

坂道を転がる石がごとく、あまりにも速い心の変化に自分自身でひどく戸惑った。

彼女を想いこそすれ、狂気染みたこの愛情を向ければいつか壊してしまうのではないか。

まさか自分がそんな心配をする日がこようとは、思ってもみなかった。

彼女は、遙にいつも自分の隣に無理なく居てくれる事がひどく安心すると言った。

それは遙にとってもまさしくであった。

目立つ自分に群がる女性達を特に気にする事もなく

面倒な恋敵が現れたとてそれに応戦する覚悟を持ってくれている。

まるでパズルのピースのように、遙と和はびつたりと隣り合わせでくっついている。

遥はそれを感じれば、嬉しさがこみあげてくるのを止められない。

「……ま、和が嫉妬深かったとしても失望なんてしなかったけどね。」

呟いた独り言は、誰に聞かれるでもなく吹いた風のかき消された。

少し小さくなった遥の背中をみつめて、よしよし、とうなずけば和はやっと自身の足を動かした。

2月14日に和自身、人生において特に思い入れはないのだが彼女は今日の女子がどれほど恐ろしいのかをよくわかっていた。学校で傍観している自分は一步ひいて周りを観察するぶん、輪の外にいるわけで、熱に浮かされた人間を冷静に見つめる事が出来る。

だからこそ、毎年引いてしまうその勢いに気圧される自分がいた。

「……簡単に承諾したってことは、彼も散々な目に遭ってるなありや。」

現代言葉で軽く表現すればモテモテな和泉遥君。

そしてモテない男にはともすれば罰ゲームのような日なのだろうか。しかし、和は思う。

今日ほど、遥に憐憫の情を抱いた日はない。

きつととんでもないテンションの女子に追い掛け回され、

とんでもないチョコレートやプレゼントを

鬼気迫る様子で押し付けられてきたに違いない。

歩きながら、どんなものを過去もらってきたのだろうか、と色々予想してみる。

「……髪の毛編みこんだマフラーとか。さすがに古風すぎるかな。」
無責任であるが若干みてみたい、と思う和はやはりどこかずれてい

る。
恋人に同情しながらも、どこか翻弄される彼をみて笑いたいと思う。
和は相反する自身の感情に内心で苦笑しながらも
しかし自分という人間は汚いものだ、と変に開き直っていた。

「……………なにこれ。」

昇降口にたどり着いた和は、いつものように自身の下駄箱へ向かい
外履きと上履きを履き替えようとしていた。
しかし眼前に広がる光景は、彼女の行動を阻むように立ちふさがっ
ていた。

和の下駄箱の中に、見慣れぬものがいくつかが存在している。

綺麗に包装を施され、
綺麗であったり可愛くあったりする大きさ形様々なそれらを見つめ
ていけば、

中身を察するまでそれなりの時間を要した。

彼女にしてみれば珍しく察しが悪いことであったが、
ひよっとすると無意識下で認めたくないと思う頭が

その事実を拒絶していたからなのかもしれない。

やっと受け入れたその答えに、しかし彼女は頭を抱える。何かの間違いであってほしい、実際に隣の下駄箱のかっこいいと評判の誰々君と間違えていた、とか、

そういうことを期待せずにはいられなかった。

「……女が女にこんなもの贈ってどうすんだよ。」

「あら、やっぱり和のところにもきたのね。」

「……あ、梓さん!？」

唐突に後ろから声をかけられ、和は驚きにすっとなきよんな声をあげた。

梓はどこか面白そうな様子で、和ではなく彼女の正面にある下駄箱へ視線を向けている。

「これやっぱ私宛なの……?」

「あら、往生際が悪いわね。ほら、これなんてカード付よ。」

『笹森和さまへ』ですって。」

「……梓さんももらったんだ。」

ちら、と視線をやると、梓の手にはいくつかの紙袋がぶらさがっていた。

梓はまあね、と肩をすくめる。

「害はないんだし、素直に受け取ってあげたらどう?」

「いや、どうかと思うけどね。」

靴を入れているところに食物を入れるとか常識ある人間のすることじゃないよ。」

嫌そうな顔をして和は自分宛のバレンタインチョココレートを下駄箱からどかす。

『うわあ、よつつも入ってる……』

割と小ぶりなそれらは無理矢理押し込んだものもあって箱の形が若干変形しているものすらあった。

「じゃ、私は寄るところがあるから。」

「え？ちよつと、和？」

梓の声にはこたえずに、和は靴を履きかえればそのまま歩き出す。向かうところは決まっていた。

「それはちよつと酷なんじゃねえのか。」

「……うつつわ、最悪ー。」

「おお、朝から素だな、笹森。」

職員室前に備え付けられている落とし物箱。

校舎内で落とし物を拾ったらそこに届けるのが決まりだ。

和は、手に持っていたチョココレートをあるところかそこにすべて放りこんだのである。

その決定的瞬間を担任である長島に目撃されたのだ。

被る猫もつつちゃり、悪態のひとつも吐きたくなるというものである。

目の前の男は、とても楽しそうに微笑んでいた。

「それよりも、これ。マジで全部置いていく気か？」

長島が、目の前にある箱へ指を差す。

落とし物箱は、名称こそあるが単に机の上にダンボールがのっけてそこに『落とし物箱』とマジックで書いてあるだけだ。

だからまたすぐに取り出せるわけだが、和はそんな気にはならなかった。

そもそも捨て置いて罪悪感を覚えるくらいなら

一直線にここまで向かつては来ない。

ともすれば彼女の心の中にあるのはいい迷惑だ、というくらいの感情しかなかった。

「落とし物ですからね、もちろんここに置いていきます。

ひとのものを無断で奪うのは窃盗罪にあたりますから。」

「でもこれ、お前宛だろ？名前書いてあるし。」

「宛名がそうであったとしても、元々所持していたのは私ではありません。」

そもそも本当に私に渡すつもりがあったのかすら判断できない。

直接譲渡されたものではないからです。よってこれは、落とし物です。」

「それは無理がねえか。」

「そんなことはありません。私は常識に則って行動しているだけです。」

「常識ねえ……。」

ちらり、と箱に目をやる長島に、和は一瞬鋭い双眸でにらみあげることが、

それに気付いて目を丸くした長島にすぐに極上の笑顔を向ける。

「長島先生、今日は女生徒のお相手がいつにも増して大変ですね。」
「まあねえ。お前も大変そうじゃん?」

にやにやしながらのたまう長島に、和はふふ、と声をあげる。

「長谷川先生の機嫌を損ねないようにするのも、きっと大変でしょう?」

「!」

普段と変わらぬトーンで声をあげられたため、長島は思わず狼狽してしまふ。

そんな様子の彼を視界にうつした和は、噴出さないように必死だった。

「ひとがいないからって……いけない、私ったら。

普段はこんなに口が軽いわけではないので、許してくださいね?」

「……………」

呆れたような少し怒りが含んだようなその顔に多少気が晴れた和はそのまま失礼します、と一言残して職員室前を去ろうとする。

しかし長島がそれを許さずに、笹森、と和を呼び止める。

さすがにこれを無視することもできない。

和は渋々ながら、振り向いて立ち止まった。

「非常識には非常識で返したいってか?」

「!」

「図星だろう。まあわからなくてもないが……下駄箱って靴入ってる場所だしな。」

ただでさえ顔も知らない人間にこんなもの押し付けられてご立腹だろう。」

「それは、」

「でもこれは落とし物じゃない。お前のところに突っ込まれてたんだから」

「これはお前の。」

「ちよ、ちよつと先生……」

箱からそれらを取り出せば、ほい、と和に手渡して長島は微笑んだ。

「だから、最後の面倒も自分でみろや。捨てるのは、お前の自由だぞ？」

「……………」

あまりの切り返しに一瞬言葉が出なかったが

和は再度微笑めば、一旦戻されたそれらをまたしても箱に置いた。

今度は、置くというよりも投げ捨てる、といったほうが正しい。

乱暴にダンボールの中へと叩き付けたのだ。

「言い方を変えます。私にとってこれはごみ箱へ捨てる事と同義です。」

本当に捨てればどこから噂になって自分の首を絞めかねないのでこの箱は大変都合がいいんですよ。

こんな薄気味悪いシロモノ誰が受け取りたいですか、受け取りたくありませんよね。

……ってここまで言わせたくてさっき行動しやがりましたね。」

ぎりぎりど歯噛みしながら目の前にいる人物をみれば

長島は腹を抱えて笑いをおさえている。

声にならない声をあげ、ひいひいと苦しそうに酸素を求めていた。

「……これから夜道にはお気をつけください?」

地を這うような声にぴた、と長島が笑うのを止めれば、和は苛立った様子を隠す事もなくその場から離れた。

長島は、その様子にどこか満足感を覚えつつ、箱をちらり、と見やる。

「……まあ、薄気味悪いつつーのは同感だな。」

受け取り拒否をしてもなお食らいつく去年の生徒達を思い出し長島はひとり長いため息を廊下中にもらしていた。

「……あの、ちょっとすみません、通してもらえます?」

「さ、笹森先輩!」

教室の扉前に群がる女生徒に声をかければ振り向いた三人の女子達が和をみて頬を染め上げた。和は、その様子にどこか戦慄が走る。

とりあえず名前を呼ばれてしまったがその先に何事かを言われたわけではないので、

扉から散った三人を無視して教室へと入ろうとする。

しかし次の瞬間、再度、先程よりも幾分か高い声で名前を呼ばれてしまい、

仕方なく和は眉根を寄せつつも振り返った。

「……………なにか。」

「あ、あの、よろしければ、これを……………」

真っ赤な顔です、と包装された箱を和に向ける彼女に和は一瞬固まりかけた。

しかし隙をみせれば自己完結してこれを押し付けられてしまつかもしれない。

そう考えれば和は間髪入れずにいりません、と返事をしていた。

「え……………」

「というか、なんですかこれ。」

「え、あの、それは、」

口ごもって言葉を切る女子生徒にため息をひとつ吐けば、

和はそのまま踵を返して教室内へと入ろうとする。

しかし和の身体が完全に教室内へおさまる前に、何者かに腕をつかまれた。

少し驚いて目を見開きながら伸びた腕から視線を上に向ければ、

箱を持った女子生徒の隣に居た、おそらく友人であろう、が

和の腕をつかんで声をあげた。

「待ってください！あの、私達は笹森先輩と和泉先輩のファンで！」

「……………はい？」

「これ、チョコレートなんですけど、是非おふたりに食べていただ

きたくて」

「ちょ、ちよつと待った！」

言っている意味がなかなか理解しがたく、ついに和は捲くし立てようとする後輩に待ったをかけた。

「ええとー……これを和泉君に渡してほしいの？」

「違います！笹森先輩と和泉先輩ふたりに贈りたいんです！！」

「ごめん、意味がわからない。」

あなたたち、和泉君が好きなんですよ？なんで私にまで？」

「正確にはおふたりに憧れてるんです！」

『……あー、やっぱりそういうことなのか。』

和はここにきてようやく自分の立ち位置というものを正確に把握できたような気がした。

彼女達にとって、和と遙のカップルは一種の夢なのかもしれない。平凡な女と、完璧な男（和にとっては欠陥だらけであるが）。にもかかわらず、あるうことが男は女を溺愛している。

それはこの女の子たちにとってある種の奇跡であったり、希望であったりするのかもしれない。きつとこの学園内で、ふたりは名実共に公認カップルになったということだろう。

これからはやつかみを買うことは滅多になくなったのだろうが余計な副産物は正直いつて煩わしい。そもそも敵意を向けられるほうが和にとってはよほどわかりやすかったのである。

「……えーと、ごめんね？受け取れない。」
「えーど、どうしてですか!？」

先程真つ赤な顔をしてうつむいていた方の女の子が声をあげた。
おとなしく無口なのかと思っていたがきつと単に緊張していたのだ
ろつ。

暴走気味なふたりを半ば呆れて視界にうつし、
和は後ろに控えるもうひとりの女生徒にも視線を向けた。
おそらく付き添いでやってきたのだろつ。終始困った顔をして狼狽
している。

「私ね、基本的になにかもらったら返すのが礼儀だと思ってるの。
でもあなたたちに押し付けられたものにまで何かを返すのが面倒臭
い。」

「別にお返しなんていりません!」

その言葉に、和は今度こそ不機嫌をあらわにため息を吐いた。
後輩ふたりが、びくり、と肩をすくませる。

「わからないかなあ。私が、気にするの。あなた達がどう思おうと
関係ない。」

さらに言つと、迷惑でしかないから。他人から何かを受け取るつも
りはありません。

わかったら帰ってもらえる?」

「……………」

ショックを受けたようにうつむいたふたりは、
そのまま無言で立ち去ろつと下を向いたまま廊下を走る。
しかしそれがいけなかったのだろつ。

反対方向から歩いてきた男子生徒に思い切りぶつかってしまい、

反動で後ろに弾かれたまま地面に倒れこんだ、はずであった。

三人のうちひとりの女子生徒、最初に和に箱を差し出してきた女の子であるが、は、

覚悟を決めてこれから発生するであろう衝撃に耐えるよう目を固く瞑った。

しかし予期していたものはいくら待っても起こらずに、そろそろと目を開ければ誰かに抱きとめられたのだと認識した。

おそるおそる瞳を上向かせると、そこに居たのは笹森和であった。

固まったまま動かない後輩を怪訝そうに見下ろし、和は大丈夫？と声をかける。

やっと覚醒したのか、女生徒は慌てて預けていた体重を自身で支えるよう

態勢を整えた。

「じ、ごめんなさい！」

「マコ！なにやってんの大丈夫！？」

ばたばたと先を走っていた友人のふたりも戻って駆け寄ってきた。

それを確認すれば、和は三人それぞれに視線をやり、ため息を吐いた。

「あなた達ね。周りをもっときちんときちんとよくみなさい。」

「……………」

「これは物理的な意味ばかりじゃないよ。

今日みたいに、自分以外を省みずに行動すれば迷惑をかけるだけでしょう？」

まずは状況を把握してから行動しなさい。じゃないと今みたいに痛

「目みるよ？」

うつむいて赤くなる女生徒ふたりの頭を、和はひとつぼん、と叩いてやる。

「ま、私もちよつと物言いきつかったかもしんないけどさ。とりあえずこういうのは困るから今後はしないでください。

今度は前を向いて、ゆっくり歩いて教室に帰りなね？ 転んだら痛いでしょ？」

和の柔らかい声音に何かを思ったのか、目を丸くして後輩が顔をあげる。

微笑む和をみたふたりは、なぜか顔を真っ赤に染め上げた。

「あ、あの、ありがとうございます。」

蚊の鳴くような声でお礼を言われ、和はどういたしまして、と返事をする。

用もなくなつたと思えば、和はずつと入りたくても入る事ができなかった

教室内へとやつと足を踏み入れた。

朝からどつと疲れた和は、

椅子にすべての体重をあずけるかのようにどか、と座り込めばそのまましばらく休もうと机に頭を突っ伏した。

クラスのざわめきが段々と遠ざかっていったころ、

真上から鳴らされたかのようなチャイムの音で和はぴくり、と身体を揺らした。

今日一日、居眠りなどしなければいいが。

過ぎつたそれを実行しない自信が、今の和にはどうにももてそうになかった。

「笹森さん。」

「んー？」

昼休み前の授業中、結局和は眠ってしまった。

教師の仕事中に生徒の自分が惰眠を貪るなどあまり誉められた事ではないが

注意されない先生を狙ってそれをやったのは和自身である。

心の中で一応は申し訳なさを感じつつ、和はクラスメイトへ視線を向けた。

「どうしたの？」

「いや、なんか……教室の外が大変な事になってるよ。」

「大変な事？」

首を傾げつつ、気になった和は席を立ち上がると

出入口からひよい、と上半身をのぞかせる。

すると廊下で一列に並んでいる集団がいることに気が付いた。

和は一体全体なんなのだろう、と連なつた六人に視線を向けるが声をかけるのもまた面倒だと教室内へ再度身体を戻した。

『……そういや今日飲み物持ってくるの忘れたな。』

ふと思い出した和は、おそらく教室にいと朝のような手合いにも遭遇しかねないし、と
飲み物を買いがてら人気のない所で昼食を取ろうと決めた。
鞆に手をかけ、前から教室を出る。

和が廊下に出て自動販売機を目指して歩いていくと、
先程廊下に並んでいた集団も用事があるのか和の後ろを歩き始めた。
多少うっとおしく思いながらも、まあすぐ別れるだろうしいいか、と
あまり気にせずにあたたかい缶紅茶を購入する。

振り返ると目的地が同じだったのか先程の六人がまた連なって立っていた。

不気味に思いつつ、和はそのまま通り過ぎて歩を進める。

そこでやっと、和はあることに気が付いた。

と同時に、彼女は前を見据えて全速力で走り出す。

後ろを振り返る事はしない。そうしてしまえば速度が落ちてしまうだけだ。

適当に走ったところでいつもの空き教室の存在を確認すると
和はそのまま身体をそこにすべらせた。

呼吸を整えながらちらり、と視線を廊下にやると人影はない。
安堵して和は黒板下に腰かけた。

『完全に尾けられてたな……』

眉間に皺を寄せながらも冷えてしまうのも癪に障るので
和はプルトップに手をかけてあたたかい紅茶を口にする。

それから昼ごはんのサンドイッチを鞆から取り出し、一口かじった。

咀嚼しながら、和は考える。
気配から彼女達が追いかけてきたのもわかった。
しかし目的はとんとわからない。

たとえば、和を痛めつけたいのが目的なのだとすれば
自動販売機へ向かう途中にいくらでも機会はあった。
おそらく和をどうこうするのが目的ではないのだろう。
だとするならば？

見当もつかないその理由に思いを馳せながら、
和の眉間にはずっと深い皺が刻まれたままであった。

結局ろくに味わうことも出来ないままに昼食をたべおわり、
重い足取りで教室への道を歩く。

そこに誰も居ない事を願ったが、それは叶わなかった。
教室を出たときとまったく同じ光景が目の前に広がっていたのであ
る。

和は頭痛を覚えつつ、ゆっくりと整列する六人の女子達に近づいた。

「……………あの。」

他の人間はなにも聞こえていないのか、
声に反応したのは和からみていちばん左に位置する女生徒だけだっ
た。

和の呼びかけにゆっくりと首をこちらへ向ける。

「……………先程は、申し訳ありませんでした。」

無表情に頭を下げられて、和は多少困惑するがとりあえず表には出さずにいいえ、と返答した。

「あの、差し支えなければあなた方の目的を教えてくださいませんか？
てつきりまた和泉君関係で喧嘩売られたのかと思ってたんですけど
違うみたいだし。」

和の言葉に、今まで無反応だった五人が目を見開いて一斉に和をみた。

「和様を痛めつける!?!」

「そんなとんでもない!!」

「はあ!?!?」

『和……さま!?!?』

さすがにポーカーフェイスも限界がきたのか

和はあからさまに驚愕してすつとんきような声をあげてしまう。

口々に名前を様付けて呼ばれば、そんな反応をしても無理はない。

「失礼しました。」

私は、笹森和非公式ファンクラブ会長を務めます清水です。」

「同じく副会長の山崎です。」

「会計の池田です。」

「同じく阿部です。」

「書記の橋本です。」

「同じく山下です。」

「「」

信じられない言葉を聞いて、和はめまいがしそうになる。

こいつら、いまなんつった？と素で声にしそうになってしまった。

「……………つそれで、あなた達はここで何をしていたらっしゃる？」

どう対応していいものかわからずに

とりあえず目下の疑問を解消しようと問いかけてみれば

ああ、と声を上げたのは会長である清水だった。

「朝、和様がバレンタインチョコの対応に

困っているとの情報をキャッチしまして……………」

それならば我々で受付をしようかとここで見張りをしているんです。

「

なんとということだ。

こんなざらり、と列をなしたわけのわからない集団が

そんなことに気を配っていたとは。

「それは、私の為に、ってこと？」

「はい、そうです。」

「なら解散。」

「は……………」

「朝の子達にも言ったけど、あんたら周りをもっとみる。

迷惑以外の何者でもないっつーの。

私は極力目立ちたくない人間なんだからこんなことされたくないし
自分に降りかかった災難くらい自分で処理できますから。」

和の絶対零度の微笑みに何事かを感じ取ったのか

六人の自称ファンクラブ会員を名乗る女子達は慌てた様子で頭を下

げれば

そそくさと教室前から離れて行った。

「……………一体私になにをしたっつーの。」

泣きたい、とぼそりと呟きながら

完全降伏するからそのふざけた会を解散してもらえないだろうか、と痛む頭をおさえながらよろよろと教室へ入った。

「俺、自分のファンクラブの子達から聞いたんだけどね
やっぱりそこから派生したみたい。」

放課後になり、遙と行動を共にしようがしまいがあまり意味がなくて
思えば

和はふらふらと2・7の教室へ足を運んだ。

目を丸くし狼狽した遙が和を抱きしめるので、とりあえず和は遙を蹴り上げた。

その光景がもう日常化しつつある2・7のクラスメイトは
ちらりと一瞥するだけで特別ふたりに注目することはなく
そのまま遙が和をなだめつつ帰宅する事となった。

現在は和の自室にて遙と隣り合って座っている状態だ。
目の前には緑茶とみかんが置いてある。

「てことはやっぱり和泉君と付き合わなければ……はあ。」
「いや、それは、そうかもしれないけど！待って、ちょっと待って！
駄目だよ、別れるとか絶対にだめだからね！！？」
「……そんなこと言っていないでしょ。」

何度もため息を吐きながらも、
「一応そんな事は本気で考えているわけではない、と和は遥をフォロー
する。」

そうしなければあとが怖いのだ。

「だからさ、俺の相手って少なからずいやがらせみたいのは受けて
たんだよね。」

それが原因で別れちゃった子も居たから。」

「あ、そうなの？それは初耳だね。」

「うーん、同い年と下級生の子は居ないんだけど」

今は卒業しちゃった三年の先輩は何人か居たんだよね。」

「……年上好きな？」

「まあ、ラクっていうのはあったかも。」

「……あんたなあ。」

気まずそうに目を逸らす遥に、和は呆れの視線を向ける。

やがて誤魔化すように咳払いをして遥が話しの続きを始めた。

「和はね、今までの誰とも違ったからファンの子達も驚いてたみた
い。」

まさかああも完膚なきまでに撃退するとは思ってなかったらしくて
そこから和に対してかっこいいとか素敵とか言い出した子はいたよ。」

「え、和泉君知ってたの？」

「まあ……割と周りから評判がいいです、つてのは聞いてて。ファンクラブの子達はけっこう俺に有益な情報を純粹に教えてくれるからね。」

付き合う前のが反発は強かったみたいだけど。

ほら、俺に対しての物言いとかが？」

「え、今も変わらないでしょ？」

「恋人同士になってもそのスタイルっていうのがむしる株が上がった原因みたいだよ？」

遙の言葉に、女の子ってわからない……と呟けば和も女性でしょ、と笑われた。

「それでさー、和、今日の朝に後輩の女の子助けちゃったでしょ。」

「『ちやった？』 転びそうになったのを支えただけだけど。」

「しかもちよつと優しく諭すみたいなことしちやったでしょ。」

「いや、まあ……説教みたいなのはほんのり？」

しかしそれがどうしたというのだろう。

わからずに和が狼狽していると遙が苦笑する。

「それが決定打みたい。後輩の子がお姉さま、とか言って騒いでるみたいよ。」

なんというか、女子校のノリ？」

「はああ！？意味わかんないんですけども！」

「いやー、無意識にどんどん好感度あげちゃった結果だね。」

まあ、表立ってくつつかれるのは俺も面白くないけど。」

「……女子にまで？つうかそうではなく！」

本気で勘弁してほしいんだけど！」

うわああああ、と落ち込み悶える和を遙はまあまあ、となだめる。

「高校生活もあともうちょつとだし。すぐ終わるよ。それにファンクラブって基本は隠密だからね、そんな気にならないと思うよ。」

まあ……最初はけっこう暴走する子もいるみたいだけど。発足して間もないみたいだししょうがないんじゃない？」

「その、一度通る道、みたいな言い方やめてくんない。」

……何言ってもだめなの？本当に？」

和のすがるような顔に、遥はただ曖昧に笑っただけだ。

言われなくともわかる。あきらめろ、とその表情が語っている。

和は絶望の二文字を頭に思い浮かべれば

本当に自分がなにをしたというのだ、と自身を取り巻く世界すべて呪いたくなった。

今このとき、和の思いとは裏腹に

笹森和非公式ファンクラブはその会員数をぐんぐんのばし続けているわけだが

不幸な彼女はそんなことを知る由もないが、

人生初の絶対的な敗北を味わっている気分であった。

第百十九話「彼女が白旗をあげるとき・その17」（後書き）

これにて今回のシリーズは終了です。

こんな馬鹿馬鹿しいオチなのにここまでお付き合いくださりありがとうございます！；

そして次回更新なのですが、

諸事情によりもうひとつの連載作品である私の憂鬱。を

一月中に終わらせたいと考えておりまして、

しばらくはそちらに集中するつもりです。

おそらく憂鬱が最終回を迎えるまで開店休業。の更新はごさいませ
るので

申し訳ありませんが気長にお待ちいただけますと幸いです。

もしよろしければ私の憂鬱。は随時更新予定ですので、

そちらのほうも是非ご覧くださいませ。

第二百二十話「そこに君が在るから」

「試写会？」

遙から発せられたものと同じ言葉を繰り返して和は目を丸くする。

遙は和の言葉に肯定するように微笑んだ。

最近、2・7にて昼食をとることが増えていた。今日も例に漏れずふたりは向かい合って座り、適当な話をしながら昼ごはんをつついていた。

どのような流れで切り出されたのか和はもう忘れてしまったが遙が先ほど試写会、という言葉をなにかの流れで口にしていた。

「ほら、少し前に和も騒いでたでしょ？父さんの小説が映画化するって。」

「ああ！『淑女と犬』でしょ！？」

淑女と犬。

それは和泉昌が書いた小説の中のひとつである。

彼の作品の中でも割と読み易い部類に入るもので

一般の知名度的にはある意味代表作といっても過言ではない。

和にとっても、遙と出会い、彼が小説家・和泉昌の息子だと知ってから

この作品が前よりも好きになった。

彼や香苗なくしてこの作品は完成しなかったと感じたからなのだろう。

「あれは確かに恋愛物語なわけだし映画化しやすそうだと思うってはいたけどね。

でも映像になるとカナタの描写が軽くなる気がしたんだよなあ。」

カナタというのは、その題名通り、淑女と生活を共にしている犬の名前である。

本編はこのカナタの語りによって構成されており

映像描写となるとこのカナタの声をどこぞの俳優が吹き込む事になるだろう。

そうなつてくると、和はどうしても軽い物語になりそうで嫌だった。

小説であればこそ成立する、あの全編通してのせつない感情の流れは読んでいて感情の箍が外れてしまいそうになるほどであった。

だからこそ、声が入ってしまうとそのせつなさが半減してしまう気がした。

某有名オレンジ猫の漫画のように、カナタは人間と話が出来るわけでもなければ

逆に淑女が動物の言葉を理解できるわけでもないのだ。

だからこそ、この『淑女と犬』はファンタジーではないと感じられる。

地に足がついた、確かにカナタという犬が語り手の物語なのだ。

余談だが和は某オレンジ猫の物語が嫌いなわけではない。むしろ好きである。

だがしかしそれとこれとは話が別だ。

とりあえず、映像化はあまりしてほしくないというのが第一の感想だった。

「多分映画は観に行くだろうけど抵抗あるってというのが感想だった

和も言つてたもんね。」

「うん、そうなんだよー。……でも試写会って。」

「まあ身内だからそのツテで。母さんも行くんだけど和もどうかなあ?と。」

来週の土曜日なんだ。」

「そうなんだー。……行きたい、けど。」

「何か気になる事でもあるの?」

和が何かを言い淀むように口を噤んだので

遙は微笑をたたえながら首を少し傾げて先を待っていた。

こんなとき、彼は大人である、と和は感じる。

いつもそうなのだが、基本的に遙はよく対話を大切にしてくれる傾向にある。

暴走してしまうときはひどいと思うことは多々あれど

和がこうして口ごもったり何かを言いたそうにしているのに黙ってしまったりと

そういったときにいつも苛々することなく優しく先を促してくれる。

和は、こういうところは敵わない、といつも痛感してしまう。

和がもし同じような状況下だったとするならば、

どうやって吐かせようかあれやこれや画策するとわかりきっているからだ。

事実、彼が嘘を吐こうとすればそれを黙認するふりだってしてきたし本当に自分は可愛げというものが皆無である、と和は内心自身に呆れてしまう。

常々思うが、遙はなにをもってして自分を可愛いなど言うのだろう。

和は遙の言葉を今ではもうなにひとつ疑っていないのだが、だからといってやはり理解はできそうもなかった。

自身がくだした評価は、きつと間違っていないと今でも確信を持って言える。

「……あの、昌さんも来るよね？」

「そうだね。顔出し嫌いだから舞台には上がらないけど。」

「だよねえ……ううーん……。」

「和？」

「いやさ、例えばだけど、終わって感想を訊かれたとするじゃない？」

「うん。」

そこで一旦言葉を切って、和はへによ、と眉尻を下げた。

こういう表情のひとつひとつにも、

遥が心の中で可愛いを連発している事を和はいまだ知らない。

遥がまたも胸中で和に言わせれば馬鹿な事を考えている間にも彼女は困った顔をそのままに口を開く。

遥は、今のこの表情を出来れば誰にも見せたくないとまで考えていた。

「……私、絶対言えない。」

「……………ん？え？ごめん、なに？」

しばらく和の顔に見惚れていた遥が、間抜けな声を上げる。

どうやら小声を聞き取れるほどには集中していなかったらしく

それを理解した和はむ、と眉を顰めたが

やがてまた浮かぬ表情になり小さくため息を吐いた。

「感想。つまんなくても面白いとか言えないからどうしようかなって。」

「……………はい？」

「だーからあ！観た映画が駄目だったら素直に駄目って言っちゃうから！」

そんな人間が作り手側の人間と一緒になっつて観に行くのどうなの、
というか。」

むう、と口を尖らせて発言した和に一瞬呆けたが、
やがて遥はこらえきれない、とばかりに噴出した。
笑う空気がもれ、そこからは教室中に響く笑い声を上げる。

「ちよ、和泉君！」

「いや、だっ……………ご、ごめ、ん。」

苦しそうに笑う遥に和は不機嫌な顔を作りつつもそこまで怒っていない様子はない。

遥は遥で本当は笑いを止めたいのだがツボに入ってしまったのか
いかんせん自分の中にあるものが引く気配をみせなかった。

「笑いすぎだつて。……………大丈夫？お茶飲む？」

若干苦しそうになってきた遥が逆に心配になったのか、
和は席を立てて遥の背中をさする。

そのぬくもりに反応したからか、遥はなんとか笑いをおさめた。

「大丈夫、ありがとう。」

「そう？まったく、何をそんなに笑うかな君は。」

呆れながらも心配そうに遥をのぞきこんでくる和の顔はかなりの至
近距離だった。

それがいけなかったといえはそうかもしれないが

かといってそれは誰も予想できないことであつたらう。

ぼんやりとした顔で和の顔をみつめていたかと思うと
遙は和の唇に触れるだけのキスをした。

『ちゅ。』

リップ音が教室全体に響き渡つたかのように感じられ、
実際はしたかしくないかくらいの音だったが、
とにかく和の耳にはとても大きくそれが感じられたのだ。

その錯覚は、恐らく静まり返つた教室のせいでもあつたらう。
なんだかんだ慣れたといつてもそこはそれ。

学校中を騒がせるカップルが目の前で食事をとつていれば、
表面上は興味のない顔をして、皆ちらちらと遠巻きにふたりを盗
み見ていた。

だからこそ、遙の所業をばつちりその網膜に焼き付けてしまった目
撃者は多い。

遙は心の中でやっちゃったな、とか、つい、とか、
そんな軽々しいことをぼんやりと考えていた。

しかしされたほうである和はそんな感覚になれるはずもない。
顔どころか首まで真っ赤に染め上げれば、小刻みに身体全体を震わ
せた。

しかしその顔に何を思ったのか、しでかしたはずの遙が顔を歪ませ
どころか信じられない事をのたまつた。

「そんな可愛い顔ふたりきりの時以外でしちゃだめだよ。」

「……！！？」

声にならない叫びを出しながら、和は両の手で拳を握り締める。和からすれば怒りで我を忘れないように必死だが、遥はまたもその様子に抱きしめて顔を覆いたくなくなってしまった。目が潤んで、感覚を狭くした呼吸がなんだか妙に扇情的なのだ。

そういう顔をさせてしまったのが自分だと自覚してはいたが、それでも勝手な男の醜い嫉妬心が遥の心からもれて来るのは止めようがなかった。みるみる気に入らない、とでも言いたげに険しくなる遥の顔を見れば、和が限界を感じるにはじゅうぶんであった。

遥が気が付いた時には頭上まで和の足が高々とあげられており、我に返った瞬間にはもう和がその足を遥の頭めがけて力の限り振り下ろしていた。

踵落としが遥の頭に完璧に決まった瞬間、教室は驚愕の悲鳴に包まれた。

「遥、お前今度は何したわけ？」

「なんもしてない。」

「嘘吐くな。なんだよその顔、めっちゃ赤くなってんじゃん！」

げらげらと笑いながら指差す浩平を、梓が一応たしなめる。

2・3にて託斗と昼を共にしていた梓は和が怒り心頭で教室に戻ってきた際、

彼女から事情を聞いた為あまりかばいたい気持ちはない。

正直、梓の見解は自業自得といったところであった。

「そりゃあ、和だって怒るわよ。よく踵落とすと平手だけで済んだわね。」

「え！？踵落としまでされてんの！？」

マジでー、と遥の机の傍らで立ったまま腹を抱えだす浩平に

遥は容赦なく足払いを繰り出した。

突然素早い動きで机の下から遥の長い足が浩平の左足を襲ったので浩平は咄嗟に身体をかばうことも出来ず、そのまま尻餅をついてしまった。

うわ、という狼狽した彼の声と梓が浩平！と叫んだ声が同時にあげられる。

「ちょっと遥！あたるのやめなさいってば！」

「別にあたってない。浩平そのものに腹立ってるだけだから。」

「まったく、どうして余計な事言っちゃったのよ。」

最後の一言がなければあの子あそこまで怒らなかつたかもしれないわよ？」

梓の言葉に、遥は顔を最大限顰めれば、うめきながら机に撃沈する。その様子を梓と浩平がため息混じりに呆れながらながめていた。

「……………で、なにがあつたの？」

「……………あとでね。」

梓の言葉に、浩平はまたどんな事が起こったのだろう、と落ち込む遙を他人事に野次馬根性を発揮していた。

「和。いいかげん顔が怖いぞ。」

「託斗うるさい。」

「俺にまであたるな。」

「あたつてない！」

「……珍しく冷静じゃないな。」

意外すぎた和の返しに託斗がおかしそうに笑う。

しかし和はそれが心底気に入らないと思えば顔を顰めた。

「そろそろ予鈴が鳴るぞ、落ち着け。」

ぼん、と和の頭に手をのせて、託斗が自身の席へと戻っていく。

和は自身の頭に手を置いて、むう、と口を尖らせた。

ああ、思い出しても腹立たしい。そう感じずにはいらなかった。

遙に踵落としを食らわせたあと、和はさすがにやりすぎたか、と狼狽した。

怒りで頭に血が上ったとはいえ頭上をしこたま打ち付けたのである。ひよっとすると脳震盪を起こしてしまうかもしれない。

和が謝罪の言葉を口にしようとした次の瞬間、急にが、と遙が和の

左手首をつかんだ。

驚いてひえ、と声を上げたが、遙は特にそれを気にする事なく真っ直ぐに和を睨みつけていた。

『うわあ！やっぱり怒ってるよ、痛かったんだ！！』

和はさすがに慌てて、先ほどの事を許せる心はないもの自分がしてしまった行為についてはやはり謝罪しようと思いを開いた。

「あの、ごめ「何考えてるの？」

和の声を途中から遮断して、遙が声をあげる。

そこまで怒らせてしまったのかと、和は瞳を揺らした。

「ごめん、さすがにやりすぎた。痛かった？よ、ね……保健室に

「そうじゃない。」

「……え？」

膝立ちになった状態である和の手首をつかんだまま、遙は椅子から立ち上がる。

自然、和も遙に引つ張られて起立を余儀なくされた。

遙は冷たい瞳で和をじ、と見つめている。

それを受けて和は混乱していた。

どうやら怒りの種類が、自分の思っていたそれと違うようだ。

しかしそうになると、和には遙が一体全体なにを怒っているのかまるでわからない。

謝罪の言葉もこれ以上口に出来ぬまま、疑問符だらけの顔で和は遙を見た。

「……なんで足をあげるの。」

「は？」

「スカートの中が完つ全にみえたじゃないか！」

「は？」

「だから！さっきの！なんで和っていつも足技ばっかり使うの？

上半身使つてよ！もしくはズボンを履いてる時にしか使わないでよ

！」

「っはああああああ！！！！？」

あまりの言葉に、和はたまらず再度怒りの声を上げてしまう。

当然と言えば当然だ。

遙の言っている事はこの状況に置いてあまりにも馬鹿馬鹿しい事の上ない。

下着が見えたのならまだしも、何度か話題にしているように和はスパッツを着用している。

しかしそれ以前に問題はそういうことではない。

たとえ下着が見えてしまっていたところで、

今それを怒りの理由にすること自体がすでにもう和にとってはありえないのだ。

教室の空気も完全に和の心中と一致している。

怒りこそないだろうが、

皆呆けてぼかん、という擬音がまさしくふさわしい表情をしている。

そこか！と浩平がいればたまらず声をあげていたことであろう。

「馬鹿なの？それとも頭を打ったから馬鹿になったの？」

「馬鹿なのは和だよ。」

「え。」

あまりにきつぱりとした言い切りに和は怒りも忘れて一瞬固まる。

遙はしつかりと和の左手首をつかんだまま、
説教ともとれるような口調でそのままつらつらと話し出した。

「いい？この教室にだってけっこうな人数がいるんだよ。それも半数以上は男。」

別に和の事を特別な感情で見えてないとしたってスカートが翻れば誰だって反応するよ。

そもそもただでさえ女子高生のスカートって短いのに
なんでわざわざ自分から更に見せるような真似をするかなあ、本当
無自覚なんだもん。」

「……原因を作ったあんたがそれを言う？」

「だから、上半身使えばいいじゃないか。」

その言葉に、和は今日という日ほど理性的でいられなくなった日は
ないと感じた。

怒りで頭が沸騰しそうだ。

和はつかまれた手首をそのままに、にっこりと微笑んだあと
次には強い双眸で遙の顔を睨みつけた。

「だったらお望みどおり上半身使ってやらああああ！！！！！」

痛々しい破裂音のようなものが教室全体に響き渡り、

綺麗に平手打ちを食らった遙がたまらず和の手首を解放した。

「な、和」

「半径一メートル以内に接近禁止。」

「そ、そんな！」

「うるせえ、三メートルにしてやるつか。」

「えええ！やだ、気に入らないならもつと殴っていいから！」

「え、なにこの子、気持ち悪い。」

和の言葉に思わず何人かうなずきそうになる。

はてしかし、彼は学園のアイドルではなかったろうか、と教室に居た女性徒の心になんとも不思議な感情が過ぎった。

「和限定だもん。」

「言っとくけどそれ免罪符じゃねーからな。」

和の言葉に遥が口を尖らせる。

その反応の意味もわからない。和は思わずため息を吐いた。

「とりあえず私教室戻るから！ついてくんなよ、世界一の変態男！」

「和好きだよね、そのフレーズ。世界一とか、稀代の、とか。」

「そんなくらの形容を用いないと」

あんたの変態度も馬鹿度も表せられないからだよこのお馬鹿！！」

好きなだけの罵詈雑言を浴びせつつ、和は湯気を出す勢いそのまま教室を出て行った。

現在に至る今、当たり前ながら怒りはおさまっていない。

次の授業は長島の担当する現国であったはずだ。

和はため息を吐きながらも、なんとか授業に集中しなければ、と気合いを入れた。

「和ー、お願いだからもう許してえええ！」

情けない声をあげながら遙が距離を取って歩いてくる。

図書室解放日ではない今日、大体が真っ直ぐ遙とっしょに笹森家へ帰るのだが

今日は半径一メートル以内接近禁止令が下されているため、

遙は愛しい彼女と並んで歩くことがかなわない。

放課後の昇降口でこんなやりとりをしていれば目立つ。

遙がそれを狙っているのかいないのか和には量りかねたが

なんとも情けないその声だけでも止めてはくれまいか、と頭を抱える。

ふう、と息を吐き、和はくるり、と遙の歩く後方へと体の向きを変えた。

歩いていた遙の足がぴたり、と止まる。

放課後の校舎から校門までの道は、当たり前だが生徒でごった返している。

にも関わらず大衆に埋もれないこの男の存在感が、和は眩しいと思う。

前は自身と並んで歩く事に違和感を覚えるだけであつたが

最近、和には違う種類の感情が芽生え始めていた。

それは一抹の寂しさである。

彼と並んで歩く事が今は自然だと感じているし和も卑屈な感情は特
にない。

それなのに、彼をぼん、とどこかに放り込んでしまった時には

やはり美しい男なのだと痛感せざるを得ず、

そうになると和はなぜこれが自分と並ぶのだと感じずにはいられなくなる。

そうしてふと、孤独感を覚えるのだ。

人の波に放り込まれてなお、紛れない彼の輝き。

隣に立つ人間が自分ではあまりにもつきはぎな画に思えてしまう。

それは卑屈な感情というよりも純粋なおかしさで

そうになると和は自分で抱いた感想なのに寂しいな、と過ぎるようになってしまった。

これはもうどんなに努力したところで埋まらない距離で

それこそ整形でもしなければ今以上に美しくはならない。

かといって自分は常より遥の容姿にコンプレックスを抱いているわけではないのだ。

だからこそ、この感情は一生抱えるものなのだといつも自分に言い聞かせる。

なによりもそんなことを気にして彼を無視するのはあまりに酷だ。

寂しいと思うのならば、単純に隣へ歩み寄ればいい。

隣でいつしよに笑ってしまえば、

和は彼を単なる自身の恋人だとしてか認識しなくなるのだから。

「……和泉君。」

「は、はい。」

真っ直ぐと見つめる彼の視線は、しかし和しか見えてはいない。

周りの人間が彼を見つめ、女生徒が和を羨望の眼差しでみつめていたとて、

遥は和しか目に入っていないのだ。

和はいまだ、その事実を正確には理解しきれていなかった。

今も、彼女は遥が自分しか目に入っていないからこそ周りを気にせ

ず大声をあげて

和に許しを請うのに必死であった事実には彼女は全く気が付いていない。

むしろわざと反応を起こすことで、

周りが注目し自身の立場を有利に運ぼうとしているのではないかと疑っているくらいだ。

和が注目される事を嫌い、なんとか場をおさめようとする性質であるのを

遥は知っているからである。

和はそのしたたかさゆえに相手の思惑というものをあれこれ考えてしまいがちだ。

だからこそ時折、塩澤がうらやましいと思う事があるのだろう。

遥の揺れる瞳を見つめながら、和は言葉を紡いだ。

「……なんであんなことしたの？」

「あんな、ああ、キス？」

「言葉を濁したのにわざわざ具体的に言ってくれてありがとう。」

「え、あ、ご、ごめん！」

にっこりと微笑む和の額に、うつすらと青筋が浮かんでいる気がして遥は狼狽しつつ急いで謝罪の言葉を口にした。

和が今日何度目になるかわからないため息を吐く。

「で、質問に答えてくれる気はあるの？」

「………そんなの。俺のすぐ傍に和の顔があったからだけ。」

首を傾げて当たり前のようになたまつ遥を和は再度平手打ちしたくなかった。

いつそホチキスで口を縫いとめてやりたいとさえ思ってしまう。

『ホチキスってひとつの会社が商標登録した名前だから
総称した一般名称ってステープラーなんだけどね。』

……って自分の頭に豆知識、とかつつこんでどうすんの、私が馬鹿か。』

だいぶ混乱していたと自身でも気付いたのだろう。

ここで冷静になれなければ昼休みの二の舞だ。

さすがにこんなところで足技を繰り出せば目立って仕方がない。

『あ、今は上半身しか使っちゃ駄目なのか。』

ふ、と苦笑する和を、遙が訝りつつながめる。和は視線に気付いて表情を戻した。

「あなたは、とりあえず私の顔が付近にあったら

どこでもそつという行為をするんかい。」

「ええーと、うん。」

「おい。」

さすがにたまらずにつっこむ。しかし遙は困ったように眉尻を下げた。

正直、困った顔をしたいのは和のほうだ。

「だって、和が至近距離で俺の顔心配そつに見つめるんだよ？

可愛いなあ、キスしたいなあ、って普通思っじゃないか。」

頭を抱えてうなり声をあげる和を遙はみつめる。

いいかげん、この近いような遠いような距離に彼は焦れていた。

「……わかった、ってちょっと。あんたなんでじりじり近寄ってきてんの？」

怖いんだけど、と和が一步引いた所で、

遥は無意識に和へと歩み寄っていた事に気が付いた。

自分では完全に止まっているつもりであったのに、欲求とは恐ろしい。

しかしここでまた強引に近付いても彼女の怒りが爆発するだけだ。

遥はなんとか足を止めながら和へと向き直った。

そこには多少、期待するかのような眼差しがこめられている。

「和、わかったって？」

「ああ……だから、百歩譲ってそれを心で思うのはいい。でも実行すんな。」

「思うだけなら和と会ってる間中思ってるんだけど。」

「は……!？」

「隣歩いてたら手を繋ぎたいなとか、頭撫でたいなとか、抱きしめたいなとか。」

「お昼食べてる時はご飯食べてる和の唇が可愛くておいしそうだなーとか……」

「いやいやいやいや、待ってください、なんですかあなたどこの変態ですか。」

混乱も境地になろうという最中、なんとか遥の暴走を止めようと

和は右手を上げて彼の発言を制す。

遥はそんな彼女に何を今更、と呆れた声をあげていた。

「俺の愛が過剰だって、とっくに認めてくれてたんじゃなかったの

「？」

「いやそうだけでも…うん、ごめん、認識が甘かった。」

「そうなの？じゃあ強化してくれた？」

「うん、外で至近距離になるのは駄目だって今気付いた。

帰ろうか。この距離を保ちつつ。」

言っただすたと早足で歩き出した和に遙は悲痛の声をあげた。

「待つて、だからそうなんだけどそうじゃなくて！」

「何が言いたいのかわからんよ。」

「さすがに実行してないでしょ！？」

「したよ、今日。」

「だからそれは、想定外に和が俺の至近距離にあつたからであつて、隣を歩いている時にそんなことを毎回しないってば！」

「だってスイッチがどこにあるんだかわかんないだもん。」

「それは俺のせいじゃないよ！和が鈍いの！」

遙の発言に、和がびたり、と歩みを止める。

急に立ち止まった今度は反応が遅れてしまい、とうとう遙は接近禁止令を破った。

しかしそれを特に気にする事無く、和は後方の遙へと再度顔を向けた。

ふたりの間はもう三十センチほどしかひらいておらず、至近もいい所であるが

さすがに遙が和に何かをすることはない。

「つまり。」

「は、はい。」

和の静かな声に、遙がびくり、と背筋を伸ばす。

自然、きをつけをしているような体勢になった。

「……私は男女の機微に鈍感である、と？」

「え？ま、まあそうかなあ。」

「もつと言つと男心がわかってねーなこんちくしょう、みたいなの？」

「ああ……」

本当たまたに可愛さ余つて憎さ百倍という言葉の意味を痛感する時があるよ。」

ふふ、と力無く笑う遙に何を思ったのか、和はそうか、とうなずく。

「じゃあ、両成敗ということぞ。」

「え？」

「もう並んで帰ろう、なんか色々和阿呆らしくなってきた。」

「和、もう怒ってないの？」

今度は普通の歩調であるきだす和を、遙は左へと並んで歩き出す。多少、狼狽した様子だ。

「怒ってないわけではないんだけどさー……この前の話じゃないけど。」

確かに私つて隙が多いのかなと思って。」

「別に俺の前で無防備になつてくれるぶんにはかまわないんだけど。」

「でも所構わずは本気で嫌だもん。あ、あのさあ、提案なんだけど。」

「なに？」

「なに？」

「我慢できなくなつたら口にしてくれるっていうのは？」

「はあ？」

「はあ？」

今度は遙が、先ほどまで和があげていたような種類の声を出す。和はひらめいたとばかりに微笑んでいる。

「だからさ、いつも思ってるけど我慢できてるわけでしょ？」

「てことは感情のメーターが振り切っちゃいそうな瞬間があった

それが無理になっちゃうとお昼みたいな事態が起きるわけじゃん。」

「うん、まあ、そうだね。」

「だからそうだったら和泉君が声にだせばいいんだよ、そのとき。」

「……えーとそれはつまり、キスしたいとかそういうことを？」

「いや、限界だと言ってくれるだけでもいいんだけど……」

「そうしたら私は距離を置かれるじゃん、和泉君から！」

「……………そんなうまくいくかなあ。」

「だって打開策がないんだからしょうがないじゃん、馬鹿馬鹿しい案だけ！」

「しないよりましでしょ、それくらい申告する努力してよ！」

「うう、ごめんなさい……………じゃあ、とりあえず手は繋いでいい？」

「あなたな……………反省してないでしょ。」

「はあ、と呆れてため息を吐く和の手を取って、遙がしてる、してます！と声を上げる。」

校舎から駅までの道歩くふたりの姿をみつめながら、

生徒達はこんなにお似合いのカップルもそうあるまい、と笑いながら思っていることは

和と遙はいまだ知らないままであった。

第二百二十話「そこに君が在るから」（後書き）

お知らせ

このたび、アルファポリス様の恋愛小説大賞に参加しました！
拙い作品ではございますがもしこの作品を気に入っていただけましたら、

投票よろしくお願いします。

投票は登録をしていたただかないと出来ないのですが、
アドレスとユーザー名を無料登録していただく形なので
お手数ではございますが、

もしよろしければ一票よろしくお願い致しますm()m

第二百一十一話「いちばん最初に伝えたい言葉」

「で、結局試写会は行く事にしたのね。」

「うん。……はあ。」

「なんでそこでため息なのよ。」

「いや、最近なんか和泉君に甘いかなあ、とかふと思った。」

「それはちよつと答え辛いところだわ。」

苦笑する梓に、和も似たような笑みを返す。

次の日にいつも通り早く登校してきた彼女と合わせるように梓がかなり早い時間に教室へとやってきたので和は些か驚いた。

昨日あれからどうなったのかがどうしても気になってしまいメールや電話よりも直接会って話を訊きたかったらしい。

顛末を話している途中で先ほどのような話題になったのであるが梓は胸中で「微妙」の二文字を浮かべる他なかった。

付き合う以前、それこそ梓は和の態度を鋼鉄のようだと感じた事がある。

彼女の守りは鉄壁すぎて、なかなか懐にはいるのは難しい。

だからこそ遙も押して押して押し続けたわけであるが

その後も遙の脂下がった表情ならびに態度は崩されることはない。

普通ならば、それに安心して傲慢になっても良さそうなものであるが目の中の友人はそういったことにはならなかった。

相変わらず伝わりにくい愛情表現ではあるものの、

実花に示した態度からしても彼女のそれはとても深い。

常から過剰なほどの遙からの言葉にも驕る事はなく、

冷静にそれを受け止め、また彼女も彼へ想いを伝えている。

しかし。

甘やかしているといわれると、それはなんと答え難い質問であった。

是とも非とも梓には結論付けられない。

一見して和の態度は冷たいが、愛情は深い。

対して遥は表面的にも深層でも愛情は深いと思うが

普段の過剰すぎる人目を憚らないあの対応はいかかなものか、と梓も感じる。

それでも和は、最後には許しているし

となるとやはり甘やかしているという結論になるのだろうか？

しかし和とて何度となく遥に許されている場面はある。

「……梓さん、そんな考え込まなくていいよ？」

変な事呟いてごめん、と苦笑する和を視界に留めて、

梓は自分が眉間に皺を寄せとても難しい顔をしていたことに今更気がついた。

慌てて表情を元に戻す。

「なんていうのかしらね。」

私は、今がいちばん良い状態じゃないかしら、と思うけど。」

「良い状態……ってそうかなあああ？」

「あらだつて。仮に遥が外で全然触れなくなったら和不安にならない？」

「……………」

梓の言葉に、和は口を噤む。

ならない？と言われたがもうすでにそれは経験済みなのだ。

わかっているからこそ梓もそう発言するのだろうか。

まったくなんともひどが悪い。

「でも理由がわかってなかったしなー、あのときは。」

「あら、やっぱり不安になったの？」

「またそんな。今気付きました、みたいな発言やめようよ。」

「確信は持ってなかったわよ、私。」

くすくす笑う梓に、和は肩を竦める。

「ま、確かに全然触れなくなっても複雑なのかもしれないね。

でも今でも外で手をつながれたりするのは気持ち的には苦手だと思ってるんだけど。

嫌というよりも苦手意識の強いんだよね。」

「でもそれすら許さなかったら遙はもつと暴走するでしょうねえ。」

「そうそう。だからお互いの折り合い地点を見極めないとな。」

恋愛も人間関係のひとつなんだし諦める所は諦めなきゃ。」

「それは倦怠期のカップルが操る言葉じゃないのかしら、普通。

相手にくつつかれるのを我慢するってどんなよ。」

梓の言葉に和はそういうもんか、と呟きながら頬杖をついた。

「今がいちばん良い時だとすれば……果たして落ちるのはいつだろう。」

「一般的に倦怠期って三ヶ月とか言うわよね。」

でもねえ……あなたたちが落ちる時って私一生ないと思うわよ？」

「それは言いすぎじゃないかなあ？お互いがお互いに飽きる瞬間でいつかきつとおとずれるでしょう？」

「そうかしら？」

「今は何かと事件が起こるから盛り上がってるんだよきつと。」

平坦で特に何も問題がなくなったらきつところになっていくんじゃないな

い？」

こう、と言った所で和が自身の右腕で

下がり行く歪曲したグラフの線を示すかのよう

に右手の平を下向きにして徐々に腕全体を下げていった。

梓はそれを目で確認すれば、ふう、と息を吐く。

「まあ、それはなんとも言えないけれど。私にはとてもそう思えないわ。」

そもそも遥と付き合っていたら色々な問題は起きるものよ。

それなのに皆、一ヶ月から三ヶ月程度で別れているんだから。」

「それは女の子達がみんな常識的な可愛いお嬢さんだったからじゃない？」

「じゃあ和は非常識で可愛さの欠片もない粗野な人間なわけ？」

「言い得て妙だね。」

「そこで肯定するんじゃないわよ。」

まったくもう、と呆れの声を上げる梓を他所に、和はおかしそうに微笑む。

「まあ、あのくらい変態なわけだし私でちょうどいいのかもね。」

「馬鹿ね、遥が変態になるのは和限定よ。」

「まあね。」

急に響いた男性の声音に、和と梓が教室の出入り口扉に視線をやる。案の定、そこには遥が悪戯っぽい笑みを浮かべて立っていた。

「それから和は誰よりも常識的で可愛いお嬢さんだと思うよ。ちよっと他が規格外なだけで。」

「……いつから聞いてたの？」

驚きに固まる梓を一瞥して、和は遙をにらみつける。

遙は和と梓の前まで歩くと和の左隣である机の椅子を借りて座った。和の前の席には梓が座り込んでいる。

「梓がいつ来たのかは知らないけど、今から十分前くらいかな。なんか興味深い話をしているから思わず。」

「うわー、趣味悪い。」

「遙、最低ね。」

「その女二人で責めるのやめてくんないかなあ、けっこうへこむ。」

うう、とうめく遙をしかし女子ふたりは冷ややかな視線でみつめていた。

しばらくそんな状態であったが、何を思い出したのか遙が声を上げる。

あ！と急に発した為、思わず和と梓の身体が揺れた。

そのせいで遙はまたもふたりから驚かすな！とお叱りを受ける。

「ごめんごめん……ってだからそうじゃなくて。」

和、言っておくけど事件なんかなくて俺の愛は変わらないよ。」

「そこも聞いてたの？……はいはい、ありがと。」

「つーめーたーいー！そもそも今日俺が早く来たのも昨日別れ際、和の態度が微妙だったからなのにー！！」

わめく遙に、梓が目を丸くしてそうなの？と訊ねれば

和は慌てて違うちがう、と否定した。

「だってまた懲りもせずこの男は外でキスをしようとするから！

「一步引いてじゃあねつつて玄関のドアを閉めてやったの。」

「遙、言われた傍からなにをやってるのよ……。」

「いや、それもあるけど割りとそのは日常茶飯事だもん。」

「そうじゃなくて、試写会のほう。やっぱりまだ気にしてる？」

少し困ったように微笑みながら首を傾げる遙に

和はああ、と合点がいつてうなずいた。

梓はといえば、日常茶飯事なのか……と胸中でつつこんでいた。

「今はそこまで気にしてないし、嫌だったらちゃんと断るよ。」

観たいってというのは本当だから大丈夫。昌さんに悪くないかなーっただけで。」

「昨日の夜父さんに電話で話したら笑ってたよ。さすが和さん面白すぎるって。」

「ああ、言いそうー……ってそうだよね、考えたらわかったのに。気にしすぎだったよね、ごめん。」

遙がその言葉に首を振ると微笑んで安堵の息を吐く。

「どうやら昨日一日気にかけていたらしい。」

それを思えば和は申し訳ない気持ちになってしまった。

梓がどういうこと？とふたりのやりとりに首を傾げたので

簡単に説明すれば梓は少し前と同じような呆れた、という顔を和に向けた。

「本当にあなたは妥協つてものが出来ない子ね。」

「変なところが生き難いよね私。」

「自分でそう評価してるんなら直そうとしなさいよ。」

「いいのいいの、無理だつてわかってるから。損した分はきっちり

背負っし。」

あははー、と開き直って笑う和に梓はふう、と息を吐いた。

「じゃ、私はそろそろ教室に戻るわね。」

「あれ、託斗が来るまでここにいたら？」

「遠慮しておくわ。誰かさんと違って私はこのクラスメイトに話の種を提供する趣味はないから。」

言って、梓はそのまま席を立ちさっさと教室を出て行ってしまった。あとに残るのは遙と和ふたりきり。

しかしそれももうすぐ登校してくる生徒達によって状況は変わるだろう。

和が腕時計を確認してみればもう間もなく何人かが到着する時間だ。

「ねえ和。」

「んー？」

「手をつなぐのそんなに嫌？」

「え、ああ、なに気になつてたの？」

苦笑する和に遙は口を尖らせて当然だよ、と声をあげた。

一体全体、この男はどこからひとの話聞いていたのか。

和は怒りを通り越して今はただただ目の前の男に呆れるばかりであった。

「嫌というか……さっき聞いてたでしょ？なんていうのかな。

まず人目が気になるし恥ずかしいしちよっと勘弁してくれないかみたいな。」

「それはやっぱり嫌ってことになるんじゃないの？」

「抱きつかれたりだとかキスされたりだとかそうされるよりは全然

いいけど。」

「じゃあ俺が手をつないでも別れたいとか思っわけじゃないんだよね?」

「そのくらいで思っただらとっくに別れてるよ。」

くす、と苦笑いした和の顔に遙が安堵するかのように微笑む。

素早い動きで頬に唇を落とした遙に和は驚いてがたがたと椅子を引いた。

「ちょ、あなたな!」

左の頬を手の平でおさえて顔を赤くする和に遙はひょうひょうと声をあげる。

「唇じゃないからセーフでしょ?」

「なんなのその意味不明な基準は。やめろつつうの。」

「ふたりきりなんだしいいじゃないか。」

「こないつ誰が見てるかわかんないところですからって言うてるの!」

「大丈夫、大丈夫。まだ誰も来てないから。」

「あんたは!昨日の一件まるで反省してないんじゃないの!?」

「だって和への愛があふれて止まらないんだもん。」

楽しそうに和の頭を撫でる遙に、脱力してなにも言う事ができなくなつた和だった。

試写会へは遙と一緒に電車を使って赴く事になった。

香苗と昌は先に現地へと向かっているらしい。

電車内で佐山が仕事で行けない事を悔やんでいた、と遙から聞いたとき

和は心底同情したくなった。

大好きな作家の映像化作品だ。作者から試写会の誘いをもらってそれを断るのは本当に苦渋の選択であったに違いない。

感想を教えてつて和に伝えてつて言つてたよ、と遙に言われたとき和は思わず力強くうなずいてしまった。

「わー、さすがに大きいねえ。」

「和はこの映画館来たことあるの？」

「何回かあるよ。ここやつぱり規模が大きいし音響設備がいいからな。」

画面も地元比べたらやつぱりでかいよねえ、と声をあげる和に

遙はへええ、と目を丸くする。

和と出会ってからこういう面で遙は新しい発見をよくするようになった。

基本的に映画などは恋人といっしょに流行のものを観に行くくらいで和のようにわざわざ都心でしかやっていない単館映画を観に行く事など

いまだかつてしたことがなかった。

内容は最初こそ彼女見たさに隣に座るだけであったが
関係がある程度落ち着いてからはきちんと観る事も増えた。

そうして鑑賞していくうえで段々と面白いものから本当につまらない
ものまで

その幅の広さ自体が興味深い、と遙は思うようになった。

全国区になっているものは変な言い方をすれば当たり障りなく作ら
れたものが多く

つまらないと言われてもそこまでとんでもない作品には出会わない。
しかし和と離れたって観る作品には色々な意味で驚かされるものが
多い。

かといって彼女は、有名作品も気に入れば観に行くので

遙は和の趣味はみていて飽きない、と付き合い始めて毎日のように
感じていた。

和と遙がやってきた映画館は某有名なシネマコンプレックスだ。

とある都市をコンセプトに建物や街並がつくられているため

このシネマコンプレックスに立ち入るたびに、急に景色が変化する
からか

和はレンガ道に足をとられそうになることがしばしばある。

今日は遙が一瞬転びそうになった和を支えてくれたために
そういった事態は免れたわけなのだ。

「なんか今から妙に緊張するな……和泉君はないの？身内として

「父さんの小説が映画化されたのこれで三回目とかだしそんなには

「えー、そういうもんかなあ。でも全国ロードショーって今回初め
てじゃないの？」

「ああ……そう言われればそうなのかな？」

「本当に興味が薄いんだねこういうところは。」

呆れ顔になる和に特に何事かを発するでもなく、微笑んだ遙は和の左手をとった。

一瞬抵抗するかのようにぴくり、と反応した彼女に

遙は転ぶと危ないから、ともっともらしい理由をつけて彼女の手を引いたのだった。

「遙、和ちゃんどうしちゃったの？」

「ああ、大丈夫だよ。良かったね父さん、面白かったって。」

「へえ、これってそうだったときにする反応なの？」

三者三様で和の周りを取り囲んでいる面々にやっと気が付いたのが和が映画館の椅子からずる、と身体が落ちそうになったのを隣に座る遙が慌てて支えた。

大丈夫！？と叫ぶ遙に和が弱弱しくお礼を言っつうなずく。

「昌さん、香苗さん、いらっしやっただんですね……気付きませんでした。」

「そのようだね。」

左隣には遙が、右隣には香苗が座り昌は一列前の通路で座席をたたんだ状態のまま立って和をみつめていた。

出演者や監督の舞台挨拶もとくに終わった状態で関係者以外は皆とつくに退出している。

ずっと呆けていた和を心配した遙が、

関係者に声をかけしばらく退出を待ってもらっていたのだ。

和は今更ながらそれに気がつけば慌てて立ち上がった。

「うわすいません！すぐ出ますからっ」

「まだ大丈夫だよ。スタッフとかうろろしてるから。」

ほら、と指を差す昌の先には、

確かに掃除をしたり受付の後始末をしている人間がみえたがだからといってここにいて良い理由にもならない。

「いえ、さすがにもう出ますよ。片付けの邪魔になりますし。」

和の言葉にそう？とうなずいた一同は連れだって映画館の箱から出る。

受付はずいぶん静かになっていたので

かなり長いことここに居たのかと思えば和は申し訳なさでいっぱいになった。

しかしそんな彼女を特に気にするでもなく

楽しそうな表情をした昌が隣から和へと顔を向けて声をかけてきた。

「和さん、どうだった？」

昌の質問に、和はゆるゆると首を振る。

「一言では……ただ、あの発想はありませんでした。まさか犬の声を一切入れない演出をするなんて思ってもいなくて……それなのにカナタが語り手として成立していたのがすごいです。とにかく全体通しての間が素晴らしくて……役者陣の凄さに鳥肌が立ちました。」

ぶる、と思い出したかのように身体を震わす和に昌が心底面白そうな笑みを浮かべた。

「その感想、今度監督に伝えておかなくちやね。」

「え、いやいやそんな!」

「和さんの素直な感想が聞きたかったんだよ。」

それじゃ香苗、行こうか。」

「ええ。遥、きちんと和ちゃん送ってあげなさいよ!」

「わかってるよ。」

話したい事を一方的に話して、香苗と昌は映画館をあとにした。和はいまだ夢現なのか、多少呆けながらも足取りは一応しっかりしている。

「……和泉君は、どうだった?」

「え?」

「観た感想。」

「……うーん。なんか映像って凄くなって思った。」

小説とはやっぱり違うものなんだね。」

遥の言葉に和はうなづく。

媒体が変われば、見せ方も変わる。

わかっていてもそれを理解するのはとても難しいし

原作が良作であるほどにファンからの風当たりも強い。

しかしこんな素晴らしい映像化ならば、本当にされてよかった、と和は思った。

どうやら佐山にも素直に良かったと伝えられそうだなによりもその事に和は安堵したのだった。

帰りは近くのレストランでご飯を食べ、

少し迷ったものの和は遥のマンションに泊まることにした。

笹森家へ帰るのならばそこまで送ると言われたので

二度手間になってしまふと思ったのだ。

「和泉君、お風呂もうわかしちゃっていいよね？」

「あ、ありがとうございます。」

遥の言葉に了解、と返事をして和はスイッチを入れた。

もうすっかりこの部屋にも慣れてきてしまつて

和は良いのか悪いのか、と内心複雑な思いがした。

高校生の身空でひとり暮らしの彼氏の家へしょっちゅう泊まるのはあまりよくないのではないかとたまに思わないではないのだが

いかんせん双方の両親がまったく難色を示さない、どこるか

応援する勢いであるため、どうにも今まで深く考えずにずるずるときてしまった。

和は改めてソファに腰かける遥をみつめる。

「……和？どうしたの。」
「んー……うーん。」

言ったところで、遙が何もかも否定するのはわかっているし和もこの状況が嫌なわけではない。ただ、いいのだろうか、と過ぎる感情があるのだ。

遙が困ったように微笑めば、和をソファから手招きしてくる。和は一瞬迷いながらも、遙の隣に腰かけた。

「……なんかまた俺にとつては良くない事を考えてたりする？」
「そんなことも……なくはないけど。」
「なくはないんだ。」

ふ、と笑う遙に和も同じような苦笑を返す。

無意識なのか、流れるような動作で遙は和の頭を引き寄せ自身もこつ、ともたれるように身体をあずける。ふたりは寄り添った状態で、遙は和の頭をゆっくりと撫でていた。

「和泉君。」
「うん？」

問いかける遙の声が柔らかくて和はふと泣きそうになる。こついうときの彼は本当に卑怯であると和は思う。

「……私達つてさ、高校生だよな。」
「そうだね。」
「親に養われて生活しているんだよね。」

「そうだね。」

「こんな風に半同棲みたいなことしてていいのかな。」

「今更そこが気になりだしちゃった？」

苦笑しているのが気配でわかって、和は遙から身体を離れた。

肘掛に背中を預ける体勢をとって、遙と向き合いつつ体育座りをする。

「なんか慣れちゃったからそう思ったのかも。」

「……なるほど。」

膝を抱えて視線を下に向ける和を、遙は可愛いなあ、と思いつつ眺めていた。

こういう仕草のひとつひとつが愛しいと思ってしまっただけとなると遙はそんな彼女の一挙手一投足とて見逃したくはないのだ。必然的に二十四時間いっしょにいたいと願う気持ちは強くなる。

2255

「いや、別にここに和泉君が住んでる事が悪いかじゃないんだよ？たださ、生活費とか私が泊まればそのぶん増えるわけですよ。」

光熱費とか水道代とか……そういうのいいのかなあ、ってふと。」

「和、気にしすぎじゃないの？それは。」

そもそもここの生活費は遙がすべて自身の稼いだ賃金で支払っている為

家賃以外のことは気にする必要がない。

しかしそれを遙が言えば、和はきつと今以上に気にしてしまうだろう。

それがわかっているため、遙はそのことについて何も言わなかった。

「……和泉君さ、私のこと負担だったりしないの？」

「はい!？」

「またも自分と思う真逆の事を言いたただされ、遥はすつとんきょうな声をあげる。」

和はそれが面白かったのか、少し噴出した。

「なんで和泉君は、そうやって真っ直ぐ私に好意を向けてくれるんだろう。」

「なんかいつか来るかもしれない別れとか想定するの馬鹿みたいに思えてくるな。」

和の言葉に、遥がぴくり、と眉を上げる。

「なるべく優しい声音を心がけていたが、いまの発言にそれをするのは難しかった。」

自然、低く鋭いそれが遥の喉から搾り出される。

「和、まだそんなこと思ってたの？」

「今が幸せだつて感じればそう考えるのは当然でしょ？」

「環境が変わればひとつだって変わるし。今のままではきつといられないもん。」

「でもそんなことばかり考えてたらキリがないじゃないか。」

「両方幸せボケしたらそれこそ不安だもん。」

「どっちかがリアリストでいるほうがバランス取れていいでしょ？」

和の言葉にしばらく考えて遥はふう、と短く息を吐くと

立ち上がって和が座る目の前まで歩く。

「和は多少嫌な予感がしたものの、反応する前に遥が実行に移してしまった。」

やはり、というのもおかしいが

相変わらず彼は自分を抱き上げるのが好きだな、と腕の中で呆れ顔

を作ってしまった。

「……女の子の憧れお姫様抱っこを彼氏に施されてそんな顔をするのはきつと和くらいだね。」

「あんまり希少価値がないもので。」

「ああ、何回目だろうね、これで。」

くす、と笑う遥の顔を、和はじっとみつめる。

言葉が紡がれる前の少し開いた遥の唇をみていると

今流れている時間軸が自分だけ急に緩慢になってしまったような錯覚に陥った。

しかし次に発せられた声に、和は我に返る。

「誕生日おめでとう。」

「え。」

「もう十二時回ったから、27日になったよ。」

ほら、と視線で促されて、和はDVDプレイヤーのデジタル時計をみつめた。

そんなことをせずとも彼女の腕には腕時計がされているのだが

一瞬呆けていた和はそこまで考えが及ばなかった。

「……そういえば今日誕生日だったんだ。」

「忘れてたの？和らしいなあ。」

くす、と笑って遥が和を抱えたまま移動する。

移動先はわかりきっていたが和は抵抗する気もなんとなく起きずに遥の腕に抱かれたまま成り行きにまかせていた。

寝室へと運ばれた和は、そ、とベッドに下ろされる。

座った状態の和にナイトテーブルの引き出しから遙が何かを取り出した。

「開けてみて。」

「え。」

まさかの誕生日プレゼントをもらってしまい、和は狼狽する。しかしここでまたいるいらないの押し問答するのは野暮だとわかっていたので

和はしばしの葛藤の後、素直にありがとうとお礼を言った。

「……………ええー。」

その声の意味は和が開いた箱の中身であった。

「和、あんまりもらうものが増えると気にするでしょ？」

「ん？うん、まあ。」

「俺は全然かまわないんだけど……………だから俺が喜ぶものをあげてみようかと思って。」

くす、と笑った遙がプレゼントの中身を取って和に身に付けた。

「学校ではこっちにしておね。」

そして質問されたら素直に俺にもらったと言うように。」

「それはちょっと。」

「指輪を嫌がらないならそっちでよかったんだけどね。」

俺のだっていう証をきちんと身に付けてほしいんだ。

……………卒業までの一年間は、せめて悪い虫がつかないように。入ってくる一年生は俺達の間接を知らないわけだし、ね？」

「……………わかった、ありがと。」

苦笑して外したそれを和はケースにそっとしまふ。
プレゼントは、なんと伊達眼鏡だった。

前々から売約済みの証を身につけて欲しい、とたびたび言われてきたが

指輪をつけるなど恥ずかしくて出来ない、と和は都度断ってきた。それに業を煮やした遥が今回のプレゼントを思いついたようだ。果たしてそれが男除けになるのかは疑問だが学校内では有効かもしれないし、

確かに今度入学してくる新一年は学校内の名物カップルの存在を知らない。

遥は少しでも和が男と触れ合うのがどうにも我慢ならないのだ。

「あ、でもメインは一応こっちだから。」

「え、まだあるの？……あっ！？」

驚きの声をあげた和の手に渡されたそれは、本だった。

「い、和泉昌の新作！まだ発売前なのに！！」

「身内のコネで入手してみました。」

「うわああああ……あ、ありがとう、和泉君！！」

きらきらした瞳で本を抱え込む和に、遥はどういたしまして、と苦笑する。

「……喜んでくれるだろうと思って用意したんだけど、やっぱりちよつと嫌だな。」

「え？」

「はいはい、じゃあとりあえずこっちに置こうね。」

和の懐からプレゼントを取り上げると、遙はナイトテーブルに置く。そうして和の横に自身も腰かけた。

「ねえ、和。なるべくいつしよにいて？」

「え？」

「先が不安だと思ったら、そのたびに時間を共有しよう。」

「和泉君。」

「俺は和が負担だと思ったことないし、和が好きだって気持ちも変わらない。」

でも、和が俺を好きでい続けてくれるっていう自信は俺もない。」

ふ、と微笑む遙に、和の瞳が揺れる。

「だからね、さっき和が言ってたけど。」

俺はこうやって和に一直線になってばかりだから

あまり冷静になって振り返る事ができないでしょう？

でも和はそうじゃない。いつだってその都度、こういう言葉をくれる。」

「……単に私は面倒な女ってだけだと思っけど。」

「まーたそういうことを。」

だからさ、俺達はそのたびに確認できるじゃないか、お互いの気持ち。

和が不安だと思っことを言ってくれれば俺も心にひっかかることを自然と口にできる。

そうすればまた、不安は解消されて先に進めるでしょう？」

「……うん、ありがとう、和泉君。」

「遙。」

「え？」

首を傾げる和に、遙が微笑んでとん、と和の身体を押しした。自然、ふたりはベッドに倒れこむ。

「言ったでしょ？この場所で和泉君は禁止だって。」

「……遙。」

くす、と笑って和が名前を呼ぶと遙がするり、と彼女の頬を撫でる。それがくすぐったく、和は少し身動きをした。

「いちばんに言いたかったんだ、おめでとって。」

「……ありがとう。」

「和、来年もこうして俺といっしょにいてね。」

「うーん、確約はできないけど。」

「……言うと思った。」

がく、とうなだれた遙の頭を、和は噴出しながら撫でる。そうしてでも、と言葉を続けた。

「今はそうだね、って言いたい気分ではあるよ。」

「和……。」

「遙、大好き。今日いっしょにいてくれて、ありがとう。」

「……本当、俺を煽る天才なんだから。」

くす、と微笑む遙の顔は、少し赤みを帯びていた。

「和、愛してるよ。」

掠れた声で言われたその言葉は、和の心奥深くに浸透していった。

第二百二十二話「読めない彼、食べない彼女・その1」

「もうすぐ半年だねー。」

「は？なにが。」

「……俺達が付き合いだしてから！」

月曜日である今日は二月の最終日だ。

和と遥はいつものように放課後の図書室へと向かう為並んで廊下を歩いている。

その中で遥が持ち出した話題に和が目を丸くして驚きの声を上げた。

「そんなん数えてたの？」

「……和ってやっぱりそういうの覚えてないの？」

「えーと？……付き合い始めたのって十月だったっけ？」

「九月十七日だよ！」

「え、日付まで覚えてるの？気持ち悪い！」

思わず反射で飛び出てしまった和の言葉に、遥はがく、とうなだれる。

和は落ち込ませた張本人であるにもかかわらず、

笑いながら遥の肩をなぐさめるようにぽんぽん、と二、三回ほど叩いた。

「まあまあ、そういうのあんまり細かく数えてると別れも早いよ。」

「え、なんで？」

「だって時間を気にするって事はさ、それを常に意識するって事だよ？」

時間に縛られるってことじゃん。

曖昧にしている方が時の流れって早くすすむものだよ、和泉君。」
「……言っている意味がよくわかんないんだけど。」

口を尖らせる遙に和がふむ、と顎に手を当てる。
どうにかうまく伝わらないものか、と考えているようだ。

「例えばだけど、カップラーメン作るときの三分で長くない？」

「え、なに、唐突に。」

「だからさっきの話の続きさ。どう？」

「うーん、まあ。お腹減ってる状態なわけだし。」

遙はいまだ納得出来ない表情のまま、一応は和の言葉を肯定する。
和は微笑んで説明を続けた。

「じゃあ、普段の三分間でどう？」

「普段？」

「なんでもいいよ、

朝の支度している三分間、テレビ観ている三分間、お風呂入っている三分間。」

「それは短いつて感じると思う。」

「でしょう？つまりは意識すればその時間は果てしなく途方もない長さに

でも意識しないで経過してゆく時間は恐ろしく早く流れるという事なんだよ。」

「……はあ。」

「だからね、付き合ってやれ半年だ一年だなんてカウントしてたら時間の流れが恐ろしく長く感じるでしょ。」

「まだ半年？まだ一年？まだ一年三ヶ月？」

「そうやってくうちになんてことない日常が険しい山道に思えてくるわけさ。」

最初に発した一言からよもやこんな長々しい説明を受けるとは思ってもおらず、

遥は一通りの言葉を聞き終えた後、呆れの息を吐いた。

「……単に俺の発言が心底つっとおしかっただけでしょう。」

「ええ、まあ。」

あまりにもきつぱり言われてしまい、遥は内心泣きたい思いだった。

「いいよ俺は毎月毎年、密かに心の中でカウントするもん！」

「女子か。」

「生粋の女の子が男にそういうつつこみをしないの！」

遥の更なるつつこみに和が笑い声を上げる。

相変わらず、こういった部分で和は女性性というものが一切感じられない。

恋人からの指輪を欲しくないと頑なに断り

付き合った日はまともに覚えておらず

四六時中いっしょにいたい、と発言することもない。

ここまで言ってしまうと、和が遥をまったく愛していないかのようにも思えるが

最近は遥も彼女の愛情をよく実感するようになった。

変化しているものとしていないものがはっきりわかるようになれば、お互いの気持ちも見えやすくなってくる、と遥は思う。

「そっいえば和。ちゃんと答えた？」

「ん？」

わからないと首を傾げる和に、遙が口角を上げる。

「眼鏡。ごまかしたりしてたのがわかったらお仕置きだよ？」

遙の言葉に一瞬動揺しかけた彼女だが、相変わらずとっさの時にも動じない。

和は遙の顔をみてなんでもないことのようにはいはい、と返事をする。

「訊かれたらちゃんと言うよ。」

「てことはまだ誰からも訊かれてないの？」

「まあね。」

正確には、和は質問されそうになると話題を逸らしたり急に読書をはじめたりとのらりくらりかわしているのであるがそれを言ってしまうとまた不穏な流れになるとわかつているため当然和は口にはしない。

「和に嘘つかれてもわかんないからなあ……。」

「ついてないし。」

「そう？」

「そうだよ。ま、信用してくれないならいいですけどー？」

言って歩き出す和に遙は慌ててそんなことないよ！と声をあげる。和はくつくつと笑いをこらえながら後ろから追いかける遙の顔を想像した。

この日常がなるべく長く続きますように。

そういう感情を自分も抱くことになるとは、と内心驚きながらも和は悪くもない気分であった。

「和ちゃん!」

無邪気な声が響き渡り、目の前の光景に遙と和は固まった。遙が一步進み出て、自然と和を後ろに隠すような動作をする。

「ん?なにしてるの、遙。」

「……それはこっちの台詞だよ、優。」

す、と目を細めて遙が常よりも低い声を上げる。

そんな彼の様子が不思議で仕方がないのか、

優は首を傾げて頭に疑問符を浮かべたような表情を顔いっぱいにたたえた。

その無垢な子どものようにあどけない優の姿は遙に少なからず苛立ちを覚えさせる。

「優君。なんでここにいるの?」

ふたりの空気にはちががあかないと感じたのか、

和はひよっこりと遙の背中から顔を出し、優にとりあえずの疑問を投げかける。

優はぱ、と顔を輝かせて和の傍近くへと歩み寄った。

遙がまたも背中ガードしようとするので和は小突いてやめさせる。

「大丈夫だつてば、檻から抜け出した猛獣がすぐ近くにいるわけじゃないんだから！」

「犬だつて猫だつて、人畜無害だとは限らないよ。」

きつぱりとした遙の物言いに和は呆れる。

とりあえずこのままではろくに話もできないので、半ば強引ではあるが

和は遙の背中から抜け出して優の前へと立った。

「和ちゃん、ちょっとこっちに来てほしいんだ。」

「はあ。」

間の抜けた返事をしつつ、和は優と並んで校門付近まで歩く。

するとそこでぴた、と優が立ち止まった。

警戒する遙は和の隣で手をつないで放さない。

そんな遙にっこりと微笑んだ優は、懐から取り出した何かを遙めかけて吹きかけた。

予想外の行動に遙が身体をよろめかせた瞬間、優が眉尻を下げた。

「ごめんね。」

ぐい、と校門付近までやってきていた驚愕に固まる和の腕を引っ張りなぜかすぐそこに停まっていたタクシーに彼女ごと身体をねじこませた。

「優！……！」

無理矢理乗せられる瞬間、
耳に聞こえてきた遙の叫び声にどれほどの怒りが孕んでいるのか和
は想像するのも怖い。
しかし無情にもタクシーは発進しみるみるうちに校門から遠ざかっ
ていく。

目が開けないまま遙はその場にうずくまり、ぎり、と奥歯を噛み締
めた。

「また同じパターンで芸がないね。……ひっかかった私も馬鹿だけ
ど。」

「ごめんね、怒ってる？」

「……和泉君に何を吹きかけたの？」

「ああ、ただのレモン汁だから大丈夫ー！」

小さな透明の霧吹きを取り出して微笑む優に、和は頭痛を覚える。
つつこみどころは多々あれど、とりあえずそれが自作なのか気が
なつたが

今はそんな事を訊ねる場面ではないだろうと考えた。

眉間に皺が固定されてしまいそうだ、と思えば
なんとかさそうならないように、と中心を親指と人差し指で揉み解し
た。

「とりあえず、和泉君に電話させてもらおうよ。発狂しかねないから。

「ああー…本当に和ちゃんのこと好きみたいだもんね、遙。」

にこにこしながらのたまう優にため息を吐きながら、
和は携帯電話を取り出した。

コール音がするかしないかのうちにもしもし!?と声が聞こえて、
和はさすがに驚いた。

「和泉君、目え大丈夫?それレモン汁なんだって。」

沁みない?と呑気に訊ねれば遙が和!と怒りの声をあげた。

『そんなのどうだっていいよ!それよりどこに向かっているの!?!?』

「ああ、そういえばそうだねー。ね、このタクシーどこ向かってんの?」

「ないしょ。」

語尾にハートマークでもつきそうな勢いで優が首を傾げてのたまう。
さすがにそれに苛立った和は優の胸倉をつかんでぎりぎり絞め上げた。

無表情な分、はたからみたその光景は恐ろしく、
巻き込まれた憐れなタクシーの運転手は思わず短い悲鳴をあげていた。

「和ちゃんてば、大胆〜。でもちよつと苦しい〜。」

「君は私に迫られているとでも?私は今あなたの首を絞めてるんですけど?」

「あはははー、やっぱり大胆ー。」

いいかげん苦しいはずなのに終始笑顔の彼にまた頭が痛くなった和は

諦めて彼の拘束を解くと、電話口の遙にため息混じりで話しかけた。

「和泉君、ごめん。会話が成立しない……。」「

『優相手じゃ仕方ないけどね……。』』

「とにかく着いたら連絡するから。そんなに心配しないで。」「

『あ、待って。かけ直すからそしたらそのまま電話を切らずに』』

「遙、ちょっと邪魔。」「

電話を取り上げた優が電話口の遙にそう一言告げると、

そのまま通話を切って電源を落としてしまった。

「……ちよっと、電話返して。」「

「あとでね。」「

「優君？」「

「だーいじょうぶだよー、襲ったりしないからあ。」「

けらけら笑う優の顔を、和はそのままガラスに叩きつけてやりたくなかったが

さすがにそれは運転手に迷惑がかかる事態に陥るだろうと自重した。

『……そもそも、そんなに騒ぎ立てるほどのことされないか。』』

ある程度冷静になった和は結局、

彼が飽きるまで付き合っでやろうと心の中で結論付けていた。

「ありがとうございました。」「

優が降り立った場所は、Y駅の駅前通りだった。
和も放課後は本屋やCDショップに赴く割りとにぎわった駅だ。学生も多い。

「なんなの、遊びたいの？」

「うーん、ちよっと違う。」

「違う？」

「和ちゃんは、どっか寄りたいたところとかあったりする？」

「今？まあ、なくもないけど。」

「じゃあそこに行こう。」

にこにこ微笑みながら言われて、和は毒気を抜かれながらも
はあ、と力無く返事をすれば先頭を歩き出した。

放課後のこの時間帯は、人も多い。

少しごった返した通りを抜けようとひとの間を縫うように歩いていくが

部活生の集団とすれ違い様、大きな鞆にぶつかって和の身体がよるける。

「大丈夫？」

まったく視界に入っていないかった彼はどこから現れたのか
いっそ撒ければいいと思って早足で歩いていたのに
どうやら割りと近くを歩いていたらしい。

よろけた和の身体を後ろからかばうように両肩を彼の手が支えた。
ひよろひよろして見えて、案外大きいその手に和の心臓が一瞬跳ねる。

同時に反射のようにざわざわとした感覚が身体中を這っていった。

「あ、ごめんね。」

「?.....どうして謝るの、ありがとう。」

慌てた様子で和の身体から手を放した彼に首を傾げながら、和は礼を言う。

そんな彼女をみつめながら、優は叱られて落ち込む子どものように小さくなっていった。

「だって、触っちゃったから.....嫌だったよね。」

「ああ、そんなこと気にしてたの？」

そんなにおおげさなもんでもないから落ち込まなくていいよ。」

あはは、と笑い飛ばして和はまた歩き出した。

そんな彼女に何を思っているのか、優はじつと和の顔をみつめていた。

「へえ、こつゆう本を読むんだ」

「おすすめのアーティストってだあれ？」

「えっ、こんな渋いお店こころへんにあっただんだねえ」

本屋でもCDショップでも気に入りの雑貨屋でも、和の傍をうろつろし、

どんなものが趣味かを探る優を若干うつつとおしく思いつつも
持ち前の集中力で世界に没入していく和はほぼ彼を無視する状態だったのだが

しかし優はそれらをどこか楽しそうにながめていた。

「.....ねえ、そろそろ一時間だよ。帰らない？」

和の言葉に優は少し口を尖らせながらも仕方なさそうにつなずく。それでもまだ別れるのは口惜しいらしく、付け加えるように口を開いた。

「うーん、じゃあ最後にどこかお話できるお店に入ろうよ。」
「いいけど。じゃあ、あそこで。」

和が指差したのは裏通りにある小さな喫茶店だ。

いかにも個人経営な店構えは味があると言ってしまえばきこえはいが、

あてはめるならばさびれている、が妥当な趣であった。

おそらく同年代の人間はこういった類の店をあえて選びはしないだろう。

しかし優は目を輝かせながら一目散にその店まで走っていくと扉を開いて早く、「と和を手招きした。

「……………落ち着きのない子。」

呟いたその言葉は、まるで七歳児にでも話しているような口ぶりだった。

ココアとコーヒーが置かれたテーブルをじ、とみつめて

和はゆっくりとミルクを注ぎ込む。

今日はなにかと疲れたので少しまるみのある味を求めている。

初めての店では和は必ずブラックで飲むが、

和はここに何回か訪れた事があるので別段気にすることなくスプーンでカップの中身をかき混ぜる。

ゆっくりと持ち上げたそれを、和は同じように緩慢な動作でのどに流し込んだ。

口いっばいに広がったその味をかみしめるかのように、和はゆっくりと瞳を閉じる。

そこまでの行動を終えたところで、向かい側からふう、ともれる息があった。

優がため息を吐いたのだと目を開いて彼を視界に留め和は理解する。

「……和ちゃんはきれいだね。」

じ、とみつめる優の視線の意味がわからずに、

和は首を傾げてはあ？と声を上げる。

「本屋で本を選んではるときも、CDをながめてるときも、家具や雑貨をひとつひとつ目で確認しているときも、そう、

和ちゃんの周りの空気がすごくきれいになってるよ。」

「私別に人間空気清浄機ではないけれども。」

和の言葉に、優はふ、と噴出した。

「あははは、和ちゃんてやっぱり面白い。」

「そう、それはよかった。……ねえ、そろそろ携帯返してもらえない？。」

先ほどまで笑っていた優の表情がみるみる真顔になりやがてその瞳が真っ直ぐに和をとらえる。

その雰囲気はどこか既視感を覚えて、和の背筋にぞくり、と寒気が走る。

この顔の意味を、和は知っている。
けれどもその正体を認めたくなくて、和は知らないふりをしていた。
なにを考えているのかみじんもわからない、という風情で
和は同じように彼をみつめる。

「ねえ、和ちゃん。」

「なに？」

「僕ね、和ちゃんがいい。」

「……………はい？」

「うっん、和ちゃんじゃなきゃ、やだ。」

危険信号はとつくに赤くなっているのに

和はそれをいまだ認めたくなくて肩を竦めてみせる。

「私、あなたのおもちやでもなんでもないよ、人間だし。」

「ふふふ、面白いこと言うね。」

和ちゃんが人間のおんなのこじゃなきゃ、僕だってほしがらないよ
?」

「……………意味がわからないんだけど？」

「本当に？」

問われて、またも射抜くような双眸を向けられた和は
金縛りにあったかのように動けなくなっていた。

この瞳をいつか見た。それは、いつであったか。

和は身体こそ動かせない状態でも思考回路ははっきりしていた。

先ほどごまかした答えを今度は探し当てようと、

ぶれそうになる頭の中身をその一点に集中させる。

ああ、この強い瞳。
恐ろしささえ感じる双眸。

「……和は返してもらおうよ、優。」

だん、とテーブルに置かれた千円札を視界に留めて、和は我に返った。

先ほどまでまったく動かせなかった身体は
今はもう何事もなかったかのように正常に機能する。

「……和泉君。」

今度は思考の方がぼやけてしまい、少し虚ろな瞳で目の前の男をみつめる。

それは安心からなのか、一度ふやけた頭を立て直すのに多少の時間を要し、

しかし数秒後には微笑んだ遙に、和もおなじように微笑を返した。

そうして彼女は、気が付いた。

ああ、そうか。

『和が俺のものになってくれるまで、
全力で君を追いかけるから、覚悟をしておいて。』

今はもう恋人という存在になった彼と、
かつての遙とまったく同じ瞳を宿した優が、和の目の前に座っていた。

第二百二十三話「読めない彼、食えない彼女・その2」

「にしても、和泉君。よくわかったねここ。」

「優の行動パターンと和の行動パターン読んだんだよ。」

遥の淡々とした口調に和は目を丸くする。

仏頂面なのは機嫌が悪いからなのだろう。

それでも思った以上には怒っていないようで和はどこか安堵していた。

「多分、優は和が好きなものを知りたいんだろうと思ったんだ。」

「好きなもの？」

「あいつ、気になるとまず相手の行動パターンとか知りたがるんだよ。」

普段どんな生活してるのかとか。」

「え、なんで？」

「そつから波長が合うかとかわかるんだって。」

前にそんな話をしてたから今回もそうなんだろうなと思って、

ここら辺で学生が遊ぶ場所って大概この駅周辺でしょ？

だから本屋とかCDショップとか回って、最後に喫茶店を何軒もあたってたの。」

へえ、と間抜けな声を上げる和は、遥にこつも行動パターンを読まれてしまい

なんとも複雑な思いだった。

和はきつと今回のような事が起こっても彼がどこを訪れるかなどわからない。

なんとなく自分ばかりが手の内を晒しているようで落ち着かない思いがした。

「……という事はある種の試験みたいなものだったのかなあ。」

ぼつ、と和が呟いた言葉に、遙が眉根を寄せる。

先ほど問答無用で喫茶店から和を連れ出した遙は

歩く速度を落とすことなく無言で和を電車に乗せた。

遙が口を開いたのは、しばらく電車に揺られてからのことで
もうそれ程怒っていないだろうと安心していたのだが

和はそれも勘違いであったかもしれない、と内心動揺する。

油断していたとはいえ、今は失言であったかもしれない。

「和は試験に合格したいの？」

「はあ？なんでそうなるわけなの。」

不機嫌な声でそうす答えると、遙が目丸くした後、ふ、と微笑んだ。

「あーあ。なんか、駄目だね俺。」

「ん？」

苦笑する彼に、和が首を傾げれば遙はあーあ、と呟いて和の肩に顔を埋める。

「え、あの、和泉君？電車の中なんですけど……。」

後半は絞り出すような小さな声で、硬直しながら和が遙の背中を叩く。

くす、と笑んだ彼の吐息がくすくすたくたくて、和は身動きをした。

遙がすぐさま身体を離す。

「あっさり和をさらわれちゃって。かつこ悪いなあ。」
「別に本気で焦ってたわけじゃないでしょ。」

淡々とした声音に、遥が身体を強張らせる。

「和？」

「あ、着いた。和泉君、今日もご飯食べていくんでしょ？」

笹森家の最寄り駅に到着したのを確認して、和が微笑めば
遥が少し戸惑いつつもうなずいていっしょに下車する。
言葉の続きが気になっているようだ。

駅から家までの数分間は、どこかぎこちない時間が流れていたが
お互い何を口にするでもなく無言でただ帰路を歩いていた。

「ただいまー。」

「戻りました。」

「あら、和、遥君、お帰りなさい。あと三十分くらいでご飯よー。」
「はい。」

最近、遥は笹森家の敷居を跨ぐ際に「お邪魔します」という言葉を
使わなくなった。

あまりにも当たり前前に依子や高明が「お帰り」と声をかけてくれる
為か

遥自身、お邪魔します、という言葉がすっかりこなくなった。

それだけ、彼と笹森家のある溝が埋まっていつている証拠なの
だろう。

和はその言葉を聞いたたび、どこか心が温かくなるのを感じる。
当の遙がどう思っているにせよ、大切なものが増えるのは単純に嬉
しかった。

「……さて、とりあえず着替えちゃうからちょっと待ってて。」

「別に気にしない」「入ったら二日間接触禁止。」

「……ドアの前で待ってます。」

「よろしい。」

パタン、と和の私室のドアが閉じられれば、遙を一抹の寂しさがお
そった。

こんな事で本当に馬鹿げている、と彼自身思わないではない。

しかし、そう考えた所で彼の想いはなにひとつ変わらないのだから
あまり意味のない行為だ。

たとえどんなに馬鹿で格好悪い男になっても、

彼は和を狂おしいほどに愛してしまう心を偽ることなど出来はしな
い。

彼女が自分の前から消えてしまうことを想像しただけで寒気がする
し、

どんなに泣いて別れを乞われてもきつと手放してやれないと考えて
いる。

片鱗は、いつだって見せてきているけれど

果たして和は遙のそういつた狂気をどれほど理解できているのか。

いつもそれがどこか不安で、

遙はこの想いを心底わかってほしいと思うし、

冗談で言っているのだと笑い飛ばしてほしいとも思う。

相反する心を持って余しては、いつも彼女を振り回す。

「……本当に閉じ込めちゃいたいって言ったら、どんな顔するかな。

くす、と自嘲するように微笑んで、遙は壁に背をあずける。
多少疲れたように目を閉じたところで、ドアノブが回る音がした。
ゆっくりと瞳を開いて、目の前のドアへ視線を向ける。

「和泉君、お待ちせー。」

微笑んで遙を部屋へ招きいれようと声をかけたが

彼の顔がどこか浮かないようで、和は方眉をぴくり、と動かした。

またなにかつまらない思いにとらわれているのだろうか。

内心で呆れつつも、一応はそれを表に出さずに和は身を引いて部屋の奥に進む。

遙は無言で部屋へと入れば扉を閉めた。

「和泉君あのさ」

振り返って遙に声をかけようとしたそのときだ。

和の視界が急に暗くなり一瞬その事態を把握出来ずに狼狽する。

しかし理解してみればなんてことはない。

遙が扉を閉めた途端、和におおいかぶさるように彼女を抱きしめたのだ。

さらに体重を前へかけていたため、

体格差で当然支えきれなかった和は後ろへ倒れこむ。

おとなふたりぶんの負荷が急にかかったベッドのスプリングは、激しくしんだ。

ぎしり、という大きな音が耳に入って、和はやっとすべてを呑み込む。

「ちよつと、和泉君!？」

ベッドは部屋の壁に沿って置かれており、ドアを閉めて右を向いた隅にある。

横向きに置かれたベッドを縦方向からふたりの体がなだれこんだ為、今は上半身だけがベッドに乗った状態だ。

和はとりあえず自由に動く下半身をばたつかせて遥の拘束から抵抗したが

遥は特に和を押さえ込むこともせず、そのままずるとベッドから滑るように地面へ下っていった。

和は拍子抜けしてそれをしばらくみつめていたが、やがて遥の両腕が和の腰に絡みつく。

起き上がってベッドに座った状態の和の太腿に、遥がぼて、と頭を置いて和の腰を抱きしめていた。

なぜか縋りつかれているような格好になり、和は首を傾げた。

「……………和泉君?どうしたの?」

とりあえず、遥の頭をそつと撫でてみる。

すると固まって動かなかつた遥がびく、と身体を揺らした。

「……………和。」

「んー?」

「俺の事捨てたらやだ。」

「……………。」

あまりにも突飛すぎるその言動に声さえもあげることができずに和が固まり無言になった。

それになにを思ったのか、遙がますます抱く腕に力を込める。

和はその力強さに眉を顰め、ふつふつとこみあげる何かを感じれば遙の頭に手刀を垂直に振り下ろした。

いたあ！という情けない叫び声が和の耳に届き、深いため息を吐いた。

「な、和、ひどいよ！」

起き上がって彼女の顔を見上げる遙を、和はあらん限りの迫力でもって睨みつける。

「うるさいな。ひどいのはそっちでしょうが。」

その言葉に、心底わからない、といった風情で遙が目を丸くする。それがますます面白くなって、

和はこみ上げる感情をおさえることなく身体を前に倒した。

遙の頬を両手で挟みこみ、彼の唇を自身のそれでおおう。

驚きに固まる遙などおかまいなしに、和は怒りのまま彼に口付けを施した。

「ん……ん、んんんん！？」

はじめ、和が遙を押し倒すかのような勢いで唇を強引に割り開き行為を迫っていたはずなのに、そこはさすがといふべきなのか、呆れる場面なのか。

段々と調子に乗った遙がぐいぐいと身体を前へ前へとずらしたと思えば、

なぜか手際良くベッドに乗り上げついには両手首を遙の手によって

シーツに縫い止められ、
性急に噛み付くような遙からの口付けに和が翻弄される、という。
そんな状況に、形勢は完全に逆転していた。

「やあ、も、」

荒々しいキスに視界がちかちかしながらも、
和はなんとかやめろ、と抗議の声をあげようとする。
しかし遙はふ、と微笑んでのたまった。

「仕掛けたのは、和でしょう？」

だからってなぜこうなるのだ。

叫びたくても出来ないし、
殴ってやりたくとも蹴ってやりたくともうまく力が入らない。

拒否しきれないのは、今こうされている事に悦びを見出しているからで

和はそれがまた悔しい。

自然と、彼女の瞳からは涙があふれていた。

「……和？」

顔を密着させていたから、それに気が付いたのだろう。
やがて遙が行為を中断し和の表情を確認しようとする距離を取る。
和の目から落ちた雫はシーツにしみを作るほどに広がっており
彼女自身、視界がぼやけて目の前の遙が見えなかった。

泣いている自覚があるにも関わらずそれをとめることもできない。
自分はいつからここまで泣き虫になったのだろう。

少なくとも涙を流す事なんて一年に一回あるかないかくらいのも
だったのに。

それだって、なにかを読んで、観て、感動する涙であったはずで
誰かのせいで泣くなんてことは幼少期を経てほぼないに等しかった。
遥と付き合ってからというものの色々な感情に心が戸惑う。

日々それと向き合ってはいるものの、なかなか追いつけないのもま
た事実だ。

「……和、ごめん、嫌だ、った？」

震える声で紡がれて和はか、と目を見開く。

この男は、この期に及んでまだそんなことを言うのか。
声を出そうとしても、意味のない悲鳴にしかならない。
苦しくて、喘いでも声はなかなか出なかった。

「和、無理に何か話そうとしないで。落ち着いて深呼吸して。」

遥の指先が、わずか和の頬に触れる。

しかしそれ以上触るのを彼はためらっているようだった。

和は彼の手に自身の手を重ねれば、そのまま彼女の頬へと遥の手の
平を導いた。

やっと視界が正常に戻るくらい涙がおさまってくる。

遥をみれば間抜けなほどわからないという表情でこちらをみつめて
いた。

和は右足をふりあげて彼の足を何度も小突いてやる。

「いた、え、ちょ、何！？この不可解な行動の意味はなんなの！？」

「……か。」

「え？」

搾り出すような声に聞き取れなかったのか遙は顔を近づける。
和はぎ、と彼を睨むとめいっばい息を吸い込んだ。

「そんなに私は信用ないのか馬鹿！！！」
「うっ！」

きいん、と耳鳴りがするほどに傍近くで叫ばれて、遙がベッドに倒れこみそうになる。

すんでのところでもなんとかこらえ、遙は身体を起こした。

ベッドに腰かけ、横たわる和を一瞥したのち、頭を抱えてため息を吐いた。

「……………ごめん。」
「別に謝ってほしくないし。」
「和……………」

ごしごしと乱暴に顔をこすりながら身体を起こした和を遙は慌てて止める。

赤くなっちゃうでしょ！と和の両手首をつかんだ。

じ、と和の顔をのぞきこめば、まだ遙をにらみつける彼女が視界に広がる。

遙はふ、と苦笑すれば和の頬をぺろ、と舐めた。
和がわひゃ、とよくわからない悲鳴をあげる。

「俺はね、和が好きなんだよ。」
「そんなのわかってるよ。」

口を尖らせて和が呟けば、遙が首を振る。

「きつとね、和が知っている俺の気持ちは俺の一部でしかない。」

「……一部？」

「俺はね、和が本当に俺なしで生きれなくなったらいいと思ったりしてる。」

「またそういう、」

「和。本当だから。」

「……！」

まっすぐに射抜くような視線を与えられ、和が身体を竦ませる。遙は困ったように微笑めば、和の頬を自身の両手で包み込んだ。

「和が他の誰かを好きになることを俺はきつと許せない。」

だから人一倍臆病になってるんだ。

信じられないのは和の心じゃない。俺自身。」

「和泉君、自身？」

「こんなに情けない男、いつ愛想を尽かされてもおかしくないですよっ？」

ふ、と情けない顔で笑う遙を和はじ、とみつめる。

しばらく視線を右往左往させたかと思うと、やがてまた遙に焦点を当てた。

「もう、情けない姿なんてさんざんみてるのに？」

「……！」

「情けないけど、誰よりも優しいの知ってる。」

私のことをいつも赦してしまうのもわかってる。

実は頼りになることもわかってる。

当たり前みたいに隣に居てくれることもわかってる。」

「和……。」

「遙のこと、ちゃんと好きだよ。」

微笑みながらきつぱりと言え、遙が目を見開いた。そうして脱力したように和の肩へ顔を埋める。

「……電車でのおれってどういう意味？」

「ん？ああ、警戒云々の話？だってそうじゃん。本当に連れ去られたらやばいと思う相手だったら

目が見えてなくなつて執念で和泉君なら追ってきてくれるでしょ？」

「……………」

「でもそうしなかつたってことはある程度優君を信用してんのかなあ、と思つて。」

和の言葉に、遙がば、と肩口から顔を上げた。

「さすがに今日の今日でどうにかされるとは思つてなかつたけど！別に完全に信用してたつてわけじゃないよ？」

「まあ探しに来たとき焦つた様子ではあつたけどさ。」

「和の口調からして、怒つてるのかと思つた。」

それになんか、なんとなく……優のこと嫌ではないみたいだし。」

「あーのねえ……嫌ではないって異性としてではないからね？」

「触られてやつぱり鳥肌は立つんだし。」

「…………それはすごく嬉しいけど。」

むう、と口を尖らせる遙に、今度は和が困つたような顔をする。

「なんだってそんなに焦つてるの？優君相手だとなんか和泉君、変だよ。」

「…………だってあいつ、規格外だし母性本能くすぐる何かがあるらし

いし。」

「あるらしい？」

「歴代の彼女達のお言葉。」

「だとしても、私はそういうの刺激されないと思うけど。」

「俺は。どこかあいつと似ている部分があると思うんだ。」

それでもし……俺みたいな感情をあいつも抱いたらって思うと怖いんだ。」

「和泉君みたいな感情？」

首を傾げる和に、遥はうなずく。

「さっきみたいなことだよ。ああいう狂気じみた感情を抱かれたら一体どんな力技を披露してくるのか。」

「……にしたってないつてば。」

「和が、あいつを好きにならないでいてくれればそれでいい。」

「!」

遥の言葉に和が目を見開くと、遥はくす、と微笑んで唇に触れるだけのキスをした。

「俺と似た所があつて、でももつと突拍子がなくて。」

面白いものが和は好きみたいだから。

興味が恋にかわるかもしれないのが怖いのかなあ。」

「どんだけ自信ないの？」

「渡さない自信はあるよ。」

……和の心をつなぎ止めておけなかったとしてもきつと放せないからね。」

「だからなんなのその前提が！ないつーてるだろ。」

「いつも気持ちは流動的だ、とか言ってるじゃない。」

「言ったじゃん。お互いに慢心することなく、」

今と同じ温度で日々を過ごせれば、私は心移りすることなんかしま・せ・ん！」

ぎゅ、と鼻をつままれて、遙が間抜けな声をあげる。

そうして和がベッドから立ち上がった瞬間、

タイミングよく階下から依子のふた리를呼ぶ声がきこえてきた。

「お、ご飯だ。つつかお腹へってるからこういう暗い思考になるんだよ。」

食はすべての源！さっさと下行こう。」

その言葉に遙は鼻をおさえながらもくす、と笑い声をもらす。まったく彼女らしい答えだ。

和は、よく考える割りに時折ひどくシンプルな結論をください。

それは残酷であり、美しい。

ドアを開こうとしたところで和がくる、と振り返る。

背中を見せていた和が遙と向かい合わせになったので

遙は立ち上がって和？と首を傾げつつも歩み寄った。

「だから、ね。いつもどおりでいて。」

「！」

「いつもの馬鹿で情けなくて優しい遙が好きだから。」

「和……。」

「もういいってくらい気持ちくれる和泉君が隣に立ってくれてれば私はなーんにも怖くなんかじゃないよ。」

微笑んで、そう告げた彼女の頬に遙は唇を落とす。

「……本当に、和にはいつだってかなわない。」

大好きだよ、と言って和の手を握り締める遙に、
苦笑してわかってるよ、と答えながら、和は部屋の扉を開いた。

第二百二十四話「読めない彼、食えない彼女・その3」

「おはよう、和ちゃん。」

「え、優君？」

なにやってるの？と目を丸くする和をよそに、優は目の前ですりりと微笑む。

朝、笹森家の玄関にて身支度を整えて扉を開けた和の眼前に

昨日もめた原因が立っている現実が一瞬信じられなくて、和は目を瞬いた。

「早いだね、いつもこの時間？」

「え、まあ……なんで居るの？」

現在時刻は早朝六時半。

なぜ笹森家の前にこの男が立っているのかいまだ理解できずに和は内心狼狽する。

「チャイム鳴らそうかと思っただら出てきてびっくりしちゃったあ。」

あはは、と笑う優に和はまたも会話が成立しない現状に疲れを覚える。

彼は本当に自分のペースでしか進まないし、周りもそうせざるを得ない。

色々と規格外だという言葉がありありと痛感した和はまだ一日が始まって間もないというのに深く長いため息を吐いた。

「優君。私の疑問に答えてほしいんだけど、いい？」

「うんいいよー。あ、歩きながらにしようか寒いし。」

誰のせいで突っ立っていたかと思ってるんだ、と怒りの声を上げたくなっただが
疲れるだけなので和は思うに留めた。

なぜか優といっしょに登校する道を歩くという奇妙な現象に戸惑いながらも

改めて質問を繰り返した。

「私の家と登校時間をどうして知ってるの？」

「住所は香苗おばさんから聞いたんだ。登校時間は早いつて聞いてたから

このくらいだったら居るかな？と思ってなんとなくだったんだけど。

」

当たってびっくりしたあ、と笑う彼に和も目を見開く。

言葉が本当だとしたらほぼ勘でこの時間に訪問してきたということになる。

「そうだったんだ。……じゃあ、なんの用事でわざわざ？」

「あ、そうそう。昨日返し忘れちゃったから。はい、携帯電話。」

言ってポケットをぐそぐそと探ったかと思うと、優が和に四角い機械を手渡してくる。

それは確かに彼女の携帯電話で、ストラップにはいつか遥からもらったクリスマスプレゼントのそれがぶらさがっていた。

「ありがとう。そういえばそのままになっちゃってたね。」

「あまり携帯電話使わないタイプ？なんか全然気付かなかったみたいだね。」

「うん、けっこう最近まで持ってなかったから。」
「そうなんだ。」

会話をしている間に駅へたどり着く。

お互い進行方向は同じだが学校は別なため最寄り駅は違う。
結局は流れに逆らうこともなく、和はいっしょに電車へと乗り込んだ。

訊きたかったこともすべて質問したので、

和はこれ以上会話をしようという気にもなれない。

彼の言葉がどこまで真実なのかはわからなかったが、とりあえず気を遣うのも変なので

無理に何かを話すこともせずに、

隣に座る彼の存在をないものとして扱うかのように和は意識を遮断した。

しばらくは会話もなく電車が揺れる音だけが辺りに響いていたがやがて優が独り言のようにぼつり、と小さい声で呟く。

「……綺麗な横顔。」

静かな空間でそれは歪に目立った響きを放ち、

同じ車両にいた何人かは驚き目を丸くして優と和をみつめていた。

しかし当の本人たちはそれを意に介することもなく、
むしろ和は何も聞こえていなかったので自身が見られているのを
気付くことなく

ぼんやりと俯いて物思いに耽っていた。

やがて車内の微妙な空気に気が付いたのか、覚醒した和があれ？と
首を傾げて

隣の優を困った表情でうかがう。
その顔に、優は思わず顔をほころばせていた。

「和ちゃんて綺麗なのに可愛い。」

「？え、なに急に……ていうか、なんか……変じゃない？なんかあったの？」

「なんのこと？」

「……いや、別にいいんだけど……。」

うーん？と再度首を傾げながらも和は優から正面に顔を戻した。

その瞬間、何か気が入らないのか優は口を尖らせて

和ちゃん、と隣に座る彼女に声をかける。

「なに？」

「僕が隣に居るのにそんな風にそっばむいちゃいやだよ。」

「え、さっきまでずっとこうだったけど……。」

「今はいやなの！」

「わけがわからないこと言わないですよ。」

声をかけられても正面を向いたまま呆れながらため息を吐く和に、
優が頬をふくらませる。

ぐい、と自分の方へ顔を向かせるように彼女の頬を両手ではさむの
で、

和はひえ、と短い悲鳴を上げた。

「……っ、気持ち悪い。」

「じゅめん。でも和ちゃんが意地悪なんだもん。」

慌てて優の手を払えば、優はしでかしたほうだというのに沈んだ声

をあげる。

和は悪くもないのにどこか胸が痛んで居心地が悪かった。

「ねえ、和ちゃん伊達眼鏡って何種類も持ってるの？」

「ん？や、前のやつとこれだけ。」

あくまでも普通の調子で和は話していたつもりだったのだが何を思ったのか優がす、と目を細めた。

そのとき、最寄り駅に着いた事を車内アナウンスが告げ、和は立ち上がってじゃあ、と言葉を紡ぐ。

てっきりそのまま別れの言葉を告げられるとばかり思っていたが優は和といっしょに立ち上がり出入り口のドア付近に立つ和の隣に ついた。

「優君？」

「これ、遥からもらったんでしょ？」

眼鏡を指差され、和が目を見開く。

突然凶星をさされた事に動揺し、また雰囲気を一変させた目の前の男にも驚いていた。

声も出せずに固まっていると、微笑んだ優が和の伊達眼鏡に手をかける。

「ちょ、」

「和ちゃん、またね。」

とん、と肩を押され、開いた扉から表に出される。

閉じた扉を呆然とみつめて、

我に返った時にはすっかり駅から電車が発進してしまっていた。

「…………なんなの。」

赤くなる頬をおさえながら、和は眉間に皺を寄せた。

「おはよー…………あれ、笹森さん今日はコンタクトなの？
髪型もいつもと違うんだねー！」

今日何人目かわからない質問をされ和は苦笑する。

適当にまあね、と返事をしながら予備を持っていない自分を恨んだ。
いつもの真横で一本結びをしている髪形も、眼鏡なしではどうにも
しっくりこず

和は結局髪をおろす事にしたのだ。

今更校内でこの姿を隠す理由もないし、
絡まれたら絡まれたで対処のしようはいくらでもあると判断した。

それよりも和の心を目下占めているのは

朝から不機嫌な遙と遭遇しそうで今から気が重いということである。
昨日の別れ際は良い形でおわったため、今日の出来事を話せば余計
疲れそうだ。

正直に話すのが無難だとわかっているものの、
隠せるならばそう通してしまいたい、と和はどこか感じていた。

『異様に警戒してるし……下手に刺激するのもなあ。』

ぼんやりと物思いに耽りながら頬杖をつき窓をながめていると、教室の扉付近からけたたましい音がする。

何事かと和が振り向けば、そこには何人かの女子生徒が立っていた。

それに見覚えがあった和は、眉間に皺を寄せつつ低い声をあげる。

「ちょっと、そこにたまつてると邪魔でしょ。さっさと教室戻りなよ。」

「お、怒られたあ!」

「素顔がりりしいー!」

きやあきやあと騒ぎながら女子生徒が去って行く。

自称ファンを名乗る人間達が確かに表立って何をするでもないのだがこうやってちょっとしたときに実感するのがなんとも頭が痛い。

和はもう何を考える気力も持てず、しかし本を読む気にもなれないと思えば

音楽プレーヤーを取り出してその耳に栓をする。

そうして目を閉じれば、現実逃避をするのは和にとってかなり簡単であった。

「…………ぎゃっ!?!」

目を開いて映った視界いっぱい綺麗な顔が広がり

和は驚愕すれば椅子を若干ひいた。
ぎぎー、という不快な音が教室中に広がり、何人かの生徒は無意識に眉を顰める。

和に向かい合い彼女の机に肘をついていた男は
これでもかというくらい不機嫌顔で和をのぞきこんでいる。

「朝から会いに来た彼氏にする反応？それ。」
「い、いきなり至近距離にいたらびっくりするでしょ！」

プレイヤーを操作して音を切れば、和はイヤホンを耳から外す。
遙はむすっとした顔で和の手元にあるそれを持ち上げた。
本のしおりよりも少し小さい青い音楽プレイヤーをながめながら口を尖らせる。

「和を夢中にさせるのは本だけだと思ってたのにおもわぬ伏兵。」

「何を言ってるんだい、君は。」

「アイッ じゃないんだね。」

「こつちのが音が良いからねー。他の機能は充実してるみたいだけど私そこらへんは興味がないし。」

「ふうん？」

「はいはい、もういいでしょ返して。」

言って遙の手元からプレイヤーを取り返し和は懐にしまいこんだ。
目で追って確認したあと、遙は和の顔に視線を戻す。
双眸の奥に見える激しさに、和は肩を揺らしそうになったが
なんとか動揺を押し隠す。

「……………今日、どうしてそんな格好なの？」

やはり訊かれたか、と和はため息を吐いた。

遙がこの問題に触れないわけがないと思っていたが
こつも直球でこられるとどうしたものか。和は思案する。

「朝さ、ちよつと寝坊して急いで出ただけだ。」

途中で気付いたんだよね、眼鏡と髪の毛。」

頬杖をつきながら朝の出来事を思い出すように目線を動かし窓を見る。

少しして遙に視線を戻せば続きを促すように和をみつめていた。

「……で、端的に言うんですね。えーと、ごめんなさい。」

「なにが？」

「電車から降りる時に鞆から眼鏡ケースを取り出しながら降りただけださー……」

乗ってくるひととぶつかっちゃってね？」

「うん。」

「閉まる瞬間に取り出した眼鏡だけ車内に落としちゃったんだよね
……………」

あはははー、と言いながら後頭部に手をあてる和を遙はじつとみつめる。

探るような瞳は、果たして何を考えているのかはわからない。

「あ、の、さすがに、怒ってる……………よね？」

「……………怒ってないよ。」

「でも、和泉君がくれたものなわけだし……………」

「今日なにかやろうとしていることがあって素顔で来たわけでは
ないんですよ？」

「なにかってなに。」

「和はいつだつて突然だから。」

「なんにも企んでませんが。」

「だったら、怒らないよ。……残念ではあるけど。」

ふ、と寂しそうに笑って、和の頬に遙の手が触れる。

和は遙の顔を見て心臓が壊れるのではないかというくらい痛んだ。

彼に不安材料を与えたくなくてついた嘘であつたが

やはり素直に言うべきであつたらうか、と今更ながら思えてくる。

それでも言ってしまったことを訂正する事もできずに

和はいつものように教室内でなにをするか！と遙の手を払いのけた。

冷たい！と言って笑い泣く遙の顔を、和はせつない気持ちでながめていた。

『……予想はしてたけど。』

ふう、とため息を吐いてにらんだ先にあるのは

今日手元に戻ってきたばかりの携帯電話だ。

着信を知らせて揺れるそれを取り出せば、

登録されていない送信先からメールが届けられており嫌な予感があった。

的中してしまえば面倒なことこの上ない。

観念して開いてみれば、和の憂鬱な気分を拍車をかけた。

『眼鏡を返すからデートしよう。』

打たれた一文はそれだけであつたが、誰かなんてわかりきっている。眉間に皺を寄せながら画面をながめていたが、腕時計を見るとあともう少しで始業になる時刻を示していた。

「…………チツ。」

面倒事に不快感を覚えながらも、捨て置いていい問題ではないとわかつていたので
和は放課後までになんとか返事をしようと思つて心の中に留めた。

「和、どうかした？」

「え？なんで？」

「なんだか難しい顔してるよ。」

遙の指摘に内心どきりとしながらも、無表情で眉間に触れた。指でぐりぐりと押しながら眉間の皺を伸ばす。

「…………うーん、眼鏡の行方を考えてたからかな。」

「あはは、そんなに心配してくれたの？なんか嬉しい。」

「当然でしょ。もらったものにそんな不義理な事はしたくないもん。」

「和ってなんだかんだで情に厚いよね。」

「そんなことないと思うけど。」

「ううん。大切にしようと思つてくれたら本当に徹底してる。」

笑う遙の言葉に首を傾げながらも、和はありがとう、と礼を言う。
しかし今日は厄介だ。

眼鏡がないぶん、表情が読まれやすいのかもしれない。
隠し事をしている時に限ってこうなるとはついていない。

しかしそもそも眼鏡を奪われたせいで和は嘘を吐く必要に迫れた
わけであるし

なんだか堂々巡りの怒りである。

昼ごはんを食べてなお暗い心が拭えずに目の前の遙をぼんやりみっ
めていれば

遙はふう、と物憂げなため息を吐いた。

ひよっとして自分の暗い気持ちに移ってしまったろうか、と

和は一瞬瞳を揺らす。

しかし飛び出した言葉は思いがけないもので、

和は思わず、ずっこけそうになった。

「今日一日、何人が和の顔をみつめたんだろう。」

「え？」

「和のこと、三秒以上みつめた男は絶対に見惚れてたよね。」

「は？」

「見つけたそばからとりあえず俺の中のブラックリストに入ってる
んだけど。」

「……………は、い？」

「和、今日はなるべく他のフロアうろろしないでね。」

「いや、なにを言っているのかわからないんですけど…………？」

「可愛い和の素顔をなるべくさらしたくないから言ってるんじゃない
か。」

『おっしやってる意味が本気で理解できません。』

あまりにも突飛なその物言いに和は目を丸くして固まれば
遙がその顔もだめ！と怒りの声をあげた。

「……私、ちよっとトイレ行ってくる。」

「いつてらっしやい。寄り道しちゃだめだよ。」

頭痛を覚えながら席を立ち、ふらふらと教室を出る和の姿を
憐憫の情で持つてみつめる2・7クラスメイトの優しさが彼女には
痛かった。

顔を真っ赤に染め上げながら、和は早足で廊下を歩く。
階段に到達したところでたまらずに全速力で駆け上がった。

「……なんなの本当、あの男！」

屋上につながる階段に腰かけて、和は頭を抱える。
あんな空気の中遙といっしょにいられるはずがない。
数日に一回は思うことではあるが、
とんでいった頭のネジをとっと回収してほしい、と和は心から願
ってしまふ。

「……つとそうじゃない、そうじゃない！」

恐らくあのタイミングで教室を出ればギリギリまで戻らずとも
不審がられることはないだろうと思った和はわざわざここまで足を
運んだのだ。

「結局返信まだできてなかったしな……。」

はあ、とため息を吐きながら和は携帯電話を開く。
とりあえず頭の中であれこれ考えていても仕方がないので
和は簡潔に済ませようと決めた。

『とにかく無断でこちらに接触しようとするのはもうやめてくだ
さい。』

詳しい日程をそちらで指定してくれば私はそこに向かいます。』

色気もそっけもない文章を打ち込んで、和は電話を閉じる。

腕時計を見れば五分ほど経過していた。

和はふ、と息を吐いて立ち上げればゆっくりと階段を下りた。

「和、寄り道しないでって言ったのに。」

教室に戻れば不機嫌な顔をした遙が待ち構えていたので
和はそれに負けないくらいの顔で睨みつけながら席に着く。

「いいかげんその頭に咲いてる花引っこ抜いてよね。万年春か、あ
んたの頭は。」

本気で視力検査をすすめたい気分なんだけど視力というよりも
脳の思い込みでフィルターかかってたらもうそりゃ意味ないよね、
はっはっは。」

「それはつまり恋は盲目だと言いたいのかな。」

頬杖をついて和の顔をのぞきこむ遙を、和は呆れながら見返す。

「わかってんならなんとかしてよ。」

「別に俺が和を可愛いと思うのは勝手でしょう?」

「周りに実害がいくつて言ってるの!」

「その実害を受ける人間は思うところがあるんだからいいんだよ。」
「私は思うところなんかない！」

「和になんの被害があるっていうのさ？」

「公衆の面前であれだけ羞恥心をあおっておいて被害がないとおっしゃる。」

ふ、と皮肉たつぷりの笑みを和がみせれば

遥はそれに痛くも痒くもない、といった風情で微笑み返した。

「言葉にしなければ態度で示すけど。」

それはもつと嫌だと言ったのは和だったでしょう？」

「！……！！！」

あまりの言い様に言葉を失った和は今度こそ頬を真っ赤に染め上げる。

遥はそれにくす、と笑んで艶っぽい声をあげた。

「可愛い。大好きだよ、和。」

「……っ！……！」

こうなってしまうた遥に、悲しいかな和は口では敵わない。

普段はあれだけ彼を翻弄することが出来たとしたって

真っ直ぐな彼の愛の囁きはどうしたって和の羞恥をあおるのだ。

それがまた遥には可愛くて仕方がないようで

彼の心をますます増長させるとわかっていても和には止めようがなかった。

外国人でもあるまいし、ここまで言われて恥ずかしいと思わない日本人が

どれくらい存在するというのか。

どん！と思いきり机を叩き、和は身支度をして立ち上がる。

「空気に耐えられないので帰ります。」

「まだ昼休み終わってないよ。」

「これ以上いつしよにいたらちよつと私バグが発生しそうなんで。」

「和、なんだか日本語がおかしいよ？」

「うるさい、歩く愛の囁きマシーン。」

「和限定だよ。」

「だから最後にその言葉でオチを作るなっつーの！」

ついに教室内から忍び笑いがもれだして、和はますます顔を赤くする。

遥はそんな空気になにを思うはずもなく、

ただただ愛おしそうに恋人の顔を見つめていた。

お互いの愛情を確信している今この瞬間も、

徐々に開いていく隙間の存在に果たしてふたりは気付いているのか。

彼女が彼に嘘を吐いた。

ただその事実だけは、起こってしまったことはもうどう繕おうとも取り消せはしない。

それを彼女が後悔するのはいつのことか。あるいはもうしているのか。

笑顔の裏で、遥が何を思っているのかなど、今の和にはわからなかった。

第二百二十五話「読めない彼、食べない彼女・その4」

眉間に皺を寄せたまま、和は仁王立ちをしつつ腕時計に視線を落とした。

緊迫感なのか、それとも苛立ちなのか、いまいち自分の感情が判然としない。

胸のもやもやの正体がわからないままにここに立っているから、余計に和は全身が強張っていたのかもしれない。

短い通知音に、自身の耳がぴくり、と反応したのがわかれば和はさかさかと四つん這いで移動しつつ机に置いた携帯電話に手を伸ばす。

ぱきり、という折りたたみ式を開くその音が妙に響いて和は自身が発生させた音であるにもかかわらず多少肩を揺らした。無表情の瞳には、メール受信画面が映っている。

『五日の午前十一時にK駅の時計台で前で待ち合わせしよう。』

その一文に和は眉間に皺を寄せた。時計台の下。

案外忘れっぽい自分でも覚えているものなのだ、と苦笑する。

それは、皮肉にも遙と初めてふたりきりで過ごした休日待ち合わせをした場所。

まったく同じとはどういうことなのだろう。

和はしばし逡巡する。

優に限ってないとは思うが、ひょっとして遙から話を聞いていてわざと同じ場所を指定したのではないか。

しかしもしそうしたとて、一体全体それになんの意味があるというのか。

相手の行動を読もう読もうとしているせい何か何もかもに疑いの目を向けてしまう。

優はことさらに読みにくいから、余計だ。

しかし指定した場所に赴くと宣言した以上、和に拒否権はない。

そう言い聞かせれば、一言「了承」の返事をする。

いつかのとき、確か雄大に誘われたときは遙に同行してもらったが今回はどうにも必要性を和は感じない。

彼を同行させたところで何がどうなるものでもない気がしたのだ。

それ以前に彼をだました手前、遙に事情を話すのは難しい。

和は前段階で遙に嘘を吐いてしまっているのだから今更真実を伝える気もない。

けれどもどどんと嘘がうそを呼ぶ。

なんだか多重債務に苦しむ人間のように思えてしまい、

それならば自己破産するのは果たしていつなのだろうか、と和は自嘲した。

遙の不安気に揺れる瞳を思い浮かべながら、和は携帯電話を閉じる。とにかくはつきりさせなければ先には進まない。

会話が不可能だなどと言っている場合でもない。

和は見えない敵を眼前に捉えているかのようになり、しっかりと前を見据えた。

そうしてむかえた五日の午前十一時。

腕時計を見るともう約束の時間を十分ほど過ぎている。

なんとなく時間にいいかげんである印象を受けていたので待たされる事も予想はしていたが、まだまだ寒い三月。

十分でもかなり癩に障る、と苛立ちながら和は腕時計を二、三回叩いた。

そもそも、誘った側が時間に遅れるとはどういう見なのか。

和はこういった常識が無い人間にはもれなく不快感を覚える。

しかし同時に、胸のどこかが鈍く痛んで、なぜだろうと小さく首をかしげた。

「和ちゃん!」

物思いに耽っていると、突然目の前に待ち人の姿があり

和はうわ、と悲鳴を上げて一歩後ろに仰け反った。

優は和の反応にも特に不機嫌になることもなく、にこにこしながら声を上げる。

「和ちゃんそういう格好するんだああ、可愛いねえ。」

「……はあ。」

今日の和は、グレーと紫で細かくボタンが連なった二枚のカットソーを重ね着し、その上に胸元にエンブレムが付いた紺のカーディガンを羽織っていた。

下は黒いチェックのスキニーパンツを合わせて鞆はリュックを背負っている。

正直、あまり男性に可愛いと呼ばれる類の格好ではないと思っていたが

和はちら、と自分を見下ろして再度優に視線を戻した。

彼は特別な格好をしているわけではないが、そのスタイルや雰囲気
が洗練されているのか

なんの変哲も無いセーターも、黒いジャケットも、これまた普通の
ジーンズも

何もかもがモデルのような出で立ちに見える。

遙もそうだが、特別お洒落という感じもしないのにこつも見栄えが
良いのは

やはりきらきら人種特有の何かがあると言って良いのだろう。

「……って久しぶりに使ったな、きらきら人種。」

和はため息を吐いてにこにここと笑い続ける優に冷ややかな視線を向ける。

「で、眼鏡は？」

「えー来たばかりでそれを言うー？デートって言ったじゃない。」

優の言葉に、和はため息を吐く。

「申し訳ないけど、今日一日付き合うつもりはないよ。」

私は優君と話したがしたかっただけだし。昼くらいなら付き合っけど。」

「えー！せめて夕方くらいまで」

「駄目。今日はとにかく色々とはつきりさせたくて来ただけだし。」

ここまで単身やってきたわけだしふたりでお食事をしようってんだから

約束は果たしたも同然でしょ？」

和の言葉に、優はしばらく不機嫌な顔を見せていたが

結局は渋々和の言い分を受け入れた。

駅ビル内のレストラン街にて特に迷う事も無くここでいいでしょ、
と言って

落ち着いた雰囲気洋食店へと足を踏み入れた。

優は和の後ろできよるきよると落ち着かない様子であったので

和はそんな彼をたしなめつつ席へと着く。

メニューを開いて特別迷う事無くそれぞれが店員に注文を告げると
目の前にお冷を和は一口飲み込んだ。

テーブルに視線を数秒やり、やがて決意したように目の前の男を見
やる。

優は、読めない表情で和に対峙していた。

微笑んでいるのか無表情なのかいまいち判断がつかない。

「……あのさ、優君に歪曲な表現しても一切無駄だろうから直球で
訊いてもいい？」

「なーに？」

きよとん、と目を丸くして首を傾げる優に、和は口を開く。

「優君で結局私のこと好きなの？」

「好きだよ。」

即答されてしまい、和は訊いておいて面食らってしまう。

しばらく無表情で固まったが、やがてふう、と息を吐いた。

「……具体的に、私を恋人にしたいとかそういう感覚があるってこと？」

「えー？僕もう言ったよ？」

「なにを？」

和の問いかけに、優の雰囲気が一変する。

それに気がついた和は、呆れて頬杖を付いていた態勢を慌てて正した。

優が、獣のような雰囲気そのままに、にっこりと微笑む。

「和ちゃんが欲しいってというのは、僕といっしょに居てほしいって事だよ？」

「……それはつまり。」

「うん。恋人にしたいってこと。」

きっぱりと言い切られたその言葉に、和は眉間に皺を寄せる。

「その反応傷付くー。僕ハートブレイクー。」

「……私は、遥の恋人なんだけど。」

「わかってるよ？」

「ごめんなさい、あなたとは付き合えません、って断ったら？」

「駄目だよ。」

間髪入れずに言葉を続けられ、和は目を見開く。優が、またいつかのような瞳を和に向けた。

「僕、ほしくなっちゃったんだもん。」

もうね、和ちゃんの嫌な事はしないってわけにいかなくなっちゃったの、ごめんね？」

可愛らしく小首を傾げながらとんでもない爆弾を落とされて和はどうしたものか、と頭を抱える。

「……もういい、わかった。とりあえず眼鏡返してくんない。」

「い・や。」

一音一音を区切って強調したその物言いに、和はひく、と顔を引き攣らせた。

「返す気はないと？」

「今日一日付き合ってくれたら返すよ。」

「そんな確約の無い約束にはのれないね、帰る。」

まだ注文した品はきていなかったが、そんな事はどうでもよかった。和は鞆から財布を取り出す。

お金を出そうとする和の手首を、優が自身の手でつかんで阻止した。和はぎろり、とテーブルを挟んで向かいに座る男をにらみつける。

「放してよ。」

「嫌だ。今放したら帰っちゃうんでしょ？」

「もう用事はないし優君といっしょにいたくない。」

眉間に皺を寄せたまま、低い声で和が呟くと
優は腕の力をゆるめずにしぼし視線をさまよわせ、やがて和に戻した。

「……………今日の事、遥に言っていないんだよね？」

その言葉に、す、と和の身体が冷える。

顔は無表情になり、目の前の男を視界に留めるのも嫌になった。
満身の力を込めて優を振り払い、駆け足で店を出る。

後ろから呼び止める声が聞こえたが、知ったことではない。

優をただの不思議人間だと思い込んでいたのは浅はかであった。

彼はきちんと計算する頭を持っているではないか。

今日の事を材料に、彼は和を脅すつもりだったのだ。

駅の改札をくぐり、電車がまだ来ていない事を確認すれば

和はトイレへ逃げ込もうと早足で移動する。

しかし移動している途中で何者かに腕をつかまれ、それが阻まれて
しまう。

振り向くとそれは先ほど和の手首を痕が付くほど握り締めた彼だった。

走ってきたらしく、多少息を弾ませながら優が和をみつめる。

「……………和ちゃん、これ。」

言って、和の手の平に優が伊達眼鏡を置く。

予想外のその行動に固まっていると、

ふ、と息を吐き出した優は至近距離まで自身の顔を持っていくとそっと和に遙からもらった眼鏡をかけてやる。

行動の真意が理解できずに、いまだ固まる和を優がしばらくみつめると

微笑んで和の頬に自身の唇を付けた。

頬に触れた柔らかい感触にやっと意識を覚醒させた和は
一歩後退りながらぎゃあ、と短い悲鳴を上げる。

「な、なに考えてんの!？」

「だってかわいかったから。」

「……君んとこの血筋はみんな我慢ていうものを知らないの？」

呆れ気味にため息を吐いて額に手を当てれば、優が唇を尖らせる。

「遙といっしょくたは嫌だよ。」

「……………ねえ、優君。」

「なあに?」

面倒になって無視を決め込み強引に次の話に進もうとした和だったがそれよりもあっさり返事をした優に驚いてしまいまとも一瞬固まっ
てしまった。

自分で拗ねるような仕草までしておいて簡単に次の話題に向かうとは内面構造はどのようになっているのだろう、と妙に気になってしま
う。

それでも、和は一瞬でその思考を切り上げ口を開いた。

「今日の事、和泉君には言ってないのかって訊いたよね。」

あれ、どうして訊いたの?」

「うん？気になったからだよ？」
「気になった？」

どうしてそんなことを訊くのだろう、と聞いたげに不思議そうな顔をしつつ優は首を傾げる。
当たり前前の事を話しているようなその声音に、和はまた頭痛を覚えた。

「遙に内緒にしていたのなら、僕は男として見てもらえているのかなって。」

「！！」
「だって恋人に内緒ってうしろめたいからでしょう？」
包み隠さず話せるのなら僕はきつとすごく可能性が低いんだろうなって思ったの。」

優の言葉は予想外で、しかしだからこそ和の胸に響いた。
自身の真ん中に杭を打たれたような、
どこか大事な部分に歪みを生じさせられた思いがする。

「……そんなこと、ないよ。」
「ん？」

「私は、優君を意識してるわけじゃないし
今日だってデートとか思ったわけじゃない。」

「だったら、遙に言ってもよかったですでしょう？」
「わざわざ同行してもらいう意味がわからないんだけど。
別に自分で処理できるもん、これくらい。」

「……ふうん。」

また首を傾げた優が和に本日一番の爆弾を落とした。

「意識してない男からあんなに必死で逃げようとするものかな。」

それからの和は、自分をぼんやりとしか思い出せなかった。

どうやって家まで帰り着いたのかひどくあいまいだ。

優が同行していなかったのだけ覚えているが、最後に言い放たれた言葉だけは

ぐるぐると彼女の中に渦巻いている。

まるで今日の出来事を浮気とでも考えているようではないか。

そういう意味合いで、遥になにも言わなかったわけではないのに、単に嘘を吐いてしまったからだ。

そこまで考えたところで、和はまたびたり、と思考を停止させた。そうして少し前に自身の体内時計を戻してみる。

『眼鏡をとられたことを、言わなかったのは？』

彼が不安そうだったから。

弱気な彼にこれ以上心配をかけたくなかったから。

『本当に？』

和は自身の心を振り返っても、その答えが本当にしっくりくるのかわからなくなりつつあった。

隠した理由が、他にあるとしたらそれはなんだろう。

ふたつの双眸で捉えられたあの瞬間を思い出して、和は身震いする。

『……そういうことじゃない。』

彼の事が、気になっているわけではない。

和は自身の心にどこか言い聞かせているような気分になったがやはりそんなことはない、と再度強く思い直した。

夕方にもなっていない時間帯、昼を抜いたお腹の虫が鳴り響いても気にすることなく

和はベッドにもぐりこむと身体を丸めて、考える事を放棄した。

先に進む事を拒否し、現実を切り離す。

それはなんとも彼女らしからぬ行動であったが、それすらも、まだ彼女は自覚していなかった。

第二百二十六話「読めない彼、食べない彼女・その5」

揺るがないものであると思っていたし、思い続けたかった。清廉潔白でもなければ聖人君子でもない。

それでも、誠実でありたいと願っていたから。

今揺れるこの気持ちの正体はなんなのだろう？

目を逸らし続ければ、これはいつか消えてくれるのだろうか。

君を好きだという気持ちは今も変わることなく在るのに。

「あらあら、和ちゃん。すごい顔ねえ、どうしたの？」

ほわんとした呑気な声でそう言われ、和は無言で依子を一瞥する。

何か反論するのも、それどころか抗議の視線を向けることすらも出
来ずに

そのまま食卓へと着いた。

和の様子に一瞬目を丸くした依子だったがやがて目だけで微笑むと
無言で朝食の準備をする。

毎朝コーヒーを飲む和の前に、
依子はマグカップに温かいココアを注いで出した。
和はそれに指先をぴくり、と動かししたが、
大きい反応を示す事も無くそれを一口飲み込んだ。

和は口を開きかけたが、何を言えば良いものかわからずにもう一口
ココアを飲む。
伏せていた睫毛を揺らしてカップを置けばゆっくりと顔を前に向け
た。

「……たまにはココアも美味しいね。」

和の言葉に、依子はでしよう？と言って微笑んだ。

「いってきます。」

抑揚の無い声で告げて、和は自宅扉を開ける。
背後から依子の元気ないつてらっしやいが聞こえていたが、
和はそれに何かを思うことは特に無かった。

扉を開けると冷たい風が家の中に吹き込んで和は肩をぶるり、と震
わせた。

冷えた早朝の空気は今の彼女になんの感慨も起こさせず、和は淡々と
玄関扉を閉めた。

週末は遙に会う気分にもなれずに、結局優と会っただけで
土曜日も日曜日も家に引きこもったままであった。

和は眉間に皺を寄せながらも、いつも通りの時間に家を出て登校す
る。

休み中に何か結論が出せるかもしれないと思っただけだが結局それはかなわなかった。

そもそも彼女自身が考える事を放棄したので無理も無い。悶々としたまま過ごした休日は、とても休日と呼べる代物ではなかった。

悩みを抱えた人間は睡眠不足に陥りがちであるが、睡眠に逃げた彼女はそれどころか眠りすぎて頭が痛い。

重く鈍い痛みが広がる頭をおさえながら、和は駅までの道を気急げに歩いた。

「和。」

声のするほうへゆっくりと顔を運べば、そこにいたのは遥だった。腕時計を確認するといつのまにか昼休みの時刻になっていて和は無言で眉を顰める。

そうしてそのまま椅子を立ち上がると和は遥の腕を引っ張りどこかへと向かった。

一瞥されて無言で腕をひかれる遥は、困惑した様子を多少見せ和と声をかけたが

特に強い抵抗などをするでもなく彼女の行動に従った。

その胸中を察することが出来るわけではないが、どこか弱っている

彼女の雰囲気

遥は恋人の背中をみつめながら和の心の中を慮った。

初めはどこに向かうのか見当もつかなかったが、一階に下りてようやく

遥はいつもの空き教室にむかっているのだと合点がいった。

しかしますますもって彼女の心がわからずに、目的地にたどりついて彼女が静かに教室扉を閉めた音を聞いても、遥はただその場に立ち和をみつめるのみであった。

「……和泉君。」

「どうしたの？」

ようやく声をかけられた遥は、慌ててそれに反応する。

和はゆっくりと顔をあげて彼女の顔を改めて確認すれば、そこには失くしたと言っていた伊達眼鏡がかけられていた。

ぼんやりと駅に届けられていたのだろうか、と考えていると和が再度名前を呼ぶ。

今度は、和泉君、ではなかった。

「遥。」

和の声に、遥の心臓が変な動きを見せる。

あと二週間弱もすれば、ふたりが恋人になってから半年が経つというのに

いつまでも遥は和に心を奪われつ放した。

この気持ちがいつか薄らぐ事があるのだとしたら

それは世界の終わりに匹敵するほどの衝撃ではないのかと遥には思われた。

ゆっくりと和が遙に歩み寄れば彼女の手の平がゆっくりと彼の頬に触れる。

そのぬくもりを逃がしたくなくて、遙は頬をすり寄せながら和の手の平に自身のそれを重ねた。

「……遙。」

和は再度彼の名前を呼ぶ。

どうしても確かめたいことが、彼女にはあった。

自分の心が今どういった方向にむかっているのか、

それがどうしてもわからずに朝から考え込んでいたのだ。

結局、確かめればいいのだと結論を出して、

ふたりきりになれる空間に彼を呼び出したがきつと遙は困惑しているだろう。

それでも自分の与えたぬくもりをただ受け入れてくれた彼の優しさに震える。

駄目だとわかっているのに、和は自身の瞳から何かが零れるのがわかった。

「和、どうしたの？ なにかあったんでしょ？」

言葉は詰問するようなものでも、しかしいつだって彼の声音は優しくなによりも彼女を大切だという感情がありありと確認できる。

和はそれにまた涙をあふれさせた。

「……遙に触れられると、嬉しい。」

「……………うん？」

「今も、触れてみて、あったかかって思って」

「うん。」

優に触れられるのとは違う。

他の男に触れられるのとは流れる感情がまるで違う。

それなのになぜ、彼の言ったことが頭から離れない？

彼の瞳に心臓が高鳴ったのも、彼に冷たい態度を貫けないのも、すべてが事実としてある。

和は自分自身を軽蔑し、彼に好かれている事実自体も投げ出してしまいたいと思えば

遙に触れられていた手を無理矢理引き剥がした。

突然の出来事に目を見開いた遙が、困惑した様子で和？と声をあげる。

自分は、優しくされる価値がない。

ひよっとすると揺れ動いているかもしれない感情に心底がっかりする。

こんな事態を引き起こすのならば、はじめから彼を受け入れるのではなかった。

和はまたあふれそうになる涙をぐ、とこらえて乱暴に瞳を擦った。それを遙が慌てて防ごうとするが和は遙の手を拒絶する。

「!？」

「あ、違うの！ちょっと今優しくされたくなくて。」

「……どうして？」

遙の言葉に、和は逡巡する。

今ここで心情を吐露してしまえば、自分は楽になるだろうが遙は苦

しただけだ。

それだけはしたくない、と和は思ったが、かといって黙っていても遥が疑念を抱いてやはり苦しい思いをするのもまた事実だった。

たとえばここで彼に別れを切り出したとて、やはり遥が受け入れるとは思えない。

いちばん最良なのはこんな自分に愛想を尽かしてくれることだがそれもやはり彼が傷付く形で行ってしまったえば意味が無い。和は固まって思考をめまぐるしく働かせていた。

そもそもが、客観的に見てしまえば他の男性に言われたことに多少動揺しても

だから別れる、などと思うのは行き過ぎている。

それでも遥の過分なまでの愛情が和を追い詰めていた。

少しでも揺れたという事実があるだけで、和の胸は罪悪感でひどく痛む。

けれど、と考える。

たとえば、優が好きだと和は思えない。付き合いたいとも感じない。ならばこの感情は一体全体なんなのだろう。

正体がわからなくて、なおも混乱する和に、いいかげん痺れを切らしたのだろう。

遥が多少低い声音で和、と彼女に呼びかけた。

「先週からなんかおかしいよ？どうしたの。」

「……やっぱり、おかしいよね、私。」

苦笑する和に、遥は眉を顰める。

涙を流したという事実が、あまり軽視できない何かが起こっているのではないかと

遥のどこかが警鐘を鳴らしていた。

ふう、と息を吐いて和が教卓の横へと腰を下ろす。遥も隣に腰かけた。

「なんかね、ちょっと疲れてるかもしれない。」

「なにに？」

「雄大とか、優君とか、なんで自分を好きだと言ってくれるかわからない。」

「……………」

「和泉君も、そうだけどさ。やっぱり理解できなくて。」

心も身体もひとつだし、だからひとりにはか応えられないわけだし。」

日本は一夫一妻制だし？と悪戯っぽく微笑む和に、遥は眉を顰める。

「全員に応えたいなんて言わないよね？」

「まさか。博愛主義者でもあるまいし。」

……………だから、勝手に失望してくれればいいんだけどね。そうもいかないのかな。」

「和……………」

「ごめんね。ちょっと振り返って悩んじゃったただけだから。ありがとう、いつも優しくしてくれて。」

へへ、とはにかむように微笑んだ彼女があまりにも可愛くて、遥は我慢できずに後頭部へ右手をまわすとそのまま和の唇に口付けた。

唐突でありながら深すぎるそのキスに和は目を見開いて固まるがすぐに真っ赤になって目を閉じた。

食まれている上唇が燃えるように熱くて、少し震えを起こす。

「……これ以上やると止まらなくなりそう。」

「!?!?……ちよ、」

「だから、もうしないってば。そんな警戒しないでよ。」

意地悪く微笑む遙に、和は顔を赤くしながら彼をにらみつける。

その表情に何を思ったのか、遙が一瞬固まると、それからすぐに和の腕を取って懐に引き寄せた。

「い、和泉君？」

「なんでそんな顔でこっち見るの……我慢大会したいわけじゃないんだけど。」

「いや、意味がわかんない」

言葉を、最後まで言わせてはもらえなかった。遙がまたも和の唇に触れて、そうして言った。

「……前言撤回、もうちよっと。」

彼の言葉に呆れながらも、和は特に抵抗するでもなく遙を受け入れていた。

「……ちよつと、優君。なんでまた居るの？」

「え、ここはセーフでしょう？学校でもなければ家の前でもないよ。」

呆れた声をあげながら、目の前に立つ優に顔を顰める。

次の日の朝、

和が利用する最寄り駅に優が待ち伏せていたのだから苛立つのも無理はない。

厄介ことが大嫌いであるはずなのに、なぜこうも呼び込んでばかりなのだ、と

和は最近続く頭痛の原因を見やって額に手を当てた。

「……時間にして数分のためにここまで来るの馬鹿馬鹿しくない？」

「そんなことないよ。毎日顔みたいもの。今日も可愛いねえー。」

「……後学の為に訊きたいんだけど、優君の嫌いな女の子ってどんなタイプ？」

その言葉に、優は首を傾げた後あっさりとした声を上げる。

「刃物で刺す子はちよつと駄目かなあ？」

「……………」

「あ、でも鈍器で殴る子はあるだよ。」

意味がわからない。つつこむのも疲れる。

ひよっとして刺された経験でもあるのだろうか？と一瞬過ぎったが

やはり朝からそんな物騒な会話をする気にはなれない。

結論付けると、和は無言でため息を吐いて改札をくぐるべく定期入
れを取り出した。

うしろから和ちゃん、という声が聞こえる。

こうなれば時間帯をバラバラにして登校するしかない。

無言で心に誓った和であったが、なぜか次の日も、その次の日も、
優は必ず和の前に現れたのだった。

なんとか遙に普通に接しようとするものの、どうしても罪悪感が頭
をもたげる。

朝の逢瀬（と思っているわけではないが）もなんだかんだで続いて
いるのだ。

彼に悪いと思わないほうがおかしい。

和はやはり彼にすべて打ち明けようかと思ったが

結局それは自分が楽になるだけなのだ、と思い直す。

かといってこのまま付き合っていていいのかというのも疑問で
出口は見えないままにぐるぐると同じ所をさまよっていた。

何度断つても、迷惑だとも困るとも言っても、優は謝るばかりで
なによりも譲歩しながらそれでもいっしょにいたいという彼を
和はどうしたって冷たくあしらいきることが難しかった。

辛辣な言葉をかけていても、それはどこか戯れが入っているようにも感じられ

優は楽しそうに笑う。

その笑顔を見ると自然に微笑む自分もまたいて、

和は心の真実の混乱に拍車をかけていた。

そして、どんなに隠すのがうまいといってもさすがにこれでは遙も気付く。

日々よそよそしくなる彼女の態度に遙は段々と焦れてきていた。

和はなにも言わないが、週末に実家へ帰ると優がたびたび顔を出している。

そのときになにかと彼女を話題に出すので、

きつと自分の知らない所で何回か接触をしているだろうと遙は踏んでいた。

今日あたり、彼女にその話題を振ってみようかと考えながら

帰路に着く和の手を取ろうと遙が自身の手で彼女のそれに触れようとする。

そのとき、はつきりとした意志で和が遙の手を拒絶した。

指先が触れた瞬間、和がその手を素早く後ろへ下げてポケットへと突っ込む。

和は常より歩く時にあまり手をポケットへは入れないので

遙に触れられる事を予防する為なのだろうと余計はつきりわかる行動だった。

拒絶されたとわかった瞬間、遙の中で思いつく原因はひとつしかない。

その理由はわからないが、自分を拒絶したということは

最悪な結末が待っているのかもしれない。

過ぎただけでもたまらなくなり、遙は震えそうになる身体をなんとかおさえて

隣に立つ和へと視線を向けた。

「……和。手をつなぎたいんだけど。」

「やだ。」

「どうして?」

「外でそういうことするのあんまり好きじゃないって知ってるでしょ?」

「電車の中とか学校内とかでは嫌がるけど

それ以外では最近駄目だって言われた記憶がないんだけど。」

「……そんなことないよ。」

呆れた顔をしながら馬鹿じゃないの?という心の声が聞こえそうな表情で

遥を一瞥する和は、いつも通りの彼女となんら変わらない態度だった。

「馬鹿な事言っていないで早く行こうよ、寒いし。」

言って先を歩く彼女は、遥のよく知る和だ。

しかし、遥は知っている。

和が、とても上手に隠せる人間であるということ。

遥は少し開いた距離を一気に縮め、大股で和に近付くと

無言でその腕をつかみ強引に遥のほうへと身体の向きを変えさせた。

多少痛みが走ったのか、和が顔を歪ませる。

しかし普段ならばそれをみて心配する心を、今の遥は持ち合わせて

いない。

どこまでも残酷なことまで出来てしまいそうなほど、遥の和に対する想いは狂気の部分がかなり目立って顔を出していた。

「どうして俺に触れられるのを嫌がるの？」

「まだそんなこと言うの？もういいかげんに」

「俺が何も知らないでも思ってる？」

「……え？」

目を丸くした和に、遥は酷薄な笑みを浮かべる。

「優から、全部聞いてるんだよ。」

「っ！！！」

驚きにもみるみる蒼褪める和を、遥は暗澹とした気持ちのままみつめていた。

もちろん、先ほど吐いた言葉はすべてでたらめである。

優は和のことを話題に出すものの、それは可愛いであるとか

和ちゃんは本が好きなのだとか、賑やかだったり物静かだったり忙しいだとか、

和自身に対する興味のような言葉ばかりだった。

具体的に彼女とどこでなにをしたとか、何日にふたりで会ったとか、そういう情報は一切遥の耳に入ってはいない。

それでも確信を持ったから、遥はいつも和にされるようにかまをかけたのだ。

まさかそんなことを遥からされるとは思ってもおらず、

驚きに目を見開いて固まる和を遥は真っ直ぐと見下ろした。

「……今日は俺の部屋に行こう、応じてくれるね？」

静かな声で無表情に告げる遙を視界に留めて、和は震えた。

『別れの言葉を告げられる。』

瞬間、彼女は理解した。

今まで別れると言えなかつたのは遙を慮ってではない。

もうとても、自分からそんな言葉を告げられるような気持ちではないからだ。

何を言われても隣に居たいと思うほど、

彼への気持が強いのだと今更ながらに自覚した。

ならば、優をつっぱねられない自分は本当になんなのだろう。

こんな中途半端な心を抱いていれば嫌われ呆れられても当然だ。

罰なのだ、と受け入れようとする自分と絶対に別れたくないと頑なに拒む自分と

相反する思いに混乱しながら固まる和は遙の心を完全に履き違えていた。

彼にとつて和を失うことは、たとえ天地がひっくりかえってもありえない話だ。

こちらをまったくみていない彼女を視界に入れつつ遙は携帯電話を取り出す。

絶対に逃がすまいと、つかんだ和の手首はやはり震えていた。

第二百二十七話「読めない彼、食えない彼女・その6」

目の前に停まったタクシーに気が付いて和は意識を戻した。震えがおさまり、隣に立つ遙へと問うような視線を向ける。すると遙は冷たい視線を和に寄越したまま、乗って、と短く呟いた。死刑宣告を受けたような気分になりながらも、矜持だけは保とうと抵抗せずに潔く車へと乗り込んだ。それでも発進してしまうと、和は逃げ出してしまうたい衝動に駆られる。

『きつと部屋に入ったら……別れようって言われるんだ。』

どこまでも沈んでいく心に情けなくも泣きそうになりながら、和はぐ、と奥歯を噛み締めてそうならないようにと努めた。

俯いてタクシーを降りた和の身体が浮遊感にとらわれた。え？と思った瞬間には地面が遠のいて、視界が覆われる。

見えなくなったのは、米俵のように担がれたからだとわかった。和の眼前には制服を着た遙の背中しかうつっておらず顔を上げねば景色はわからないが、そうする気にもなれなかった。

降りたとき、一瞬でも逃げてしまおうかと思ったのを悟られたのだ

ろうか。

こんな有無を言わせぬ強硬手段に出るということは、
いよいよもって遙は自分に愛想を尽かしてしまったに違いない。

和は、いつから彼は事実を知っていたのだろう、とそればかりに思
考を働かせた。

その間も遙がマンション内へと足を運び、
エレベーター、部屋の扉、寝室の扉、と移動していたのだが
意識を浮上させることなく気が付いたらもうベッドに放り投げられ
ていた。

かなり乱暴にされて痛み呻く和に、遙は無表情でのしかかってくる。
る。

「……………！？え、」

痛み顔を顰めていたと思うと和の瞳は驚愕に見開かれた。

忙しい表情の理由は、遙の行動によるものだった。

和の両手を頭上で一纏めにしたかと思うと、どこから取り出したのか
タオルをベッドヘッドと和の手首に巻きつけ縛り上げてしまった。
これでは和は身動きが取れない。

和は、遙が何故こんなことを仕出かすのかがまるでわからなかった。
別れを告げる為ならば、こんな形をとる必要などないはずである。
疑問は膨れ上がるばかりで、混乱する思考回路は咀嚼することもなく
和の口から気が付けば漏れてしまっていた。

「別れ話をするために連れて来たんじゃないか……………？」

その言葉に、遙がぴくり、と身体を揺らす。

先ほどから表情をなくしたかのような彼であったが和の言葉に反応すると

みるみる怒気をその雰囲気纏わせる。

はつきりとみてわかるくらい、彼は怒っていた。

「別れる？何のために？」

「え、だって」

「優と付き合う為に？優のことが好きになったんだ？」

遙の言葉は決して凶星ではない。和は優が好きではないのだから。しかしそれでも、今の和が違つと完全に否定するのは憚られた。

無言になる彼女に、それが肯定の意であると遙は考えたのだろう。心底悲しそうな瞳で、遙が和を凝視する。

「……俺の事、ずっと好きでいてくれるって言ったのに。

俺の態度がずっと変わらなければ、ずっとそれに応えてくれるって」
「……………」

今でも、その想いは変わらない。それなのに、優を傷つける事も出来ない。

自分は偽善者でもなかったはずで、

雄大の事があつたときに彼を傷つける覚悟も厭わなかった。

諦めてもらえるならば、なるべく早く彼に時間を返せれば。

託斗のときにも、かつて交際を断つた遙のときにも、

まったく同じ心を貫いたはずであつたのに。

優の瞳に心臓が高鳴つた。優が笑うと嬉しいとも思つた。

遙に抱く感情にも似たそれを、なぜ優にも感じてしまったのだろう。

それなのに触れると凍える体は、一体何を思うのか和にはわからない。

身体は正直だとよくいうが、

それならば優に対して異性的に好きだという感情は無いはずなのだ。

それなのになぜ、和は彼をつっぱねることが出来ないのだろう。

考えても考えても出ない答えに、和はもうどうしたらいいのかわからなかった。

気付けば、卑怯だとわかっていても和は涙をあふれさせていた。

遙に侮蔑の眼差しで見られるのだけは耐えられない。心が今にも悲鳴をあげそうだ。

「……何回、優と会ってたの？ひよつとしてデートとかしたのかな。伊達眼鏡をしてこなかった日も、本当はあいつと何かあった？」

「……全部、知ってるんでしょう？なんでまた確認するの？」

そん、なに、私のこと、許せないの……？」

確かに、和にも非はあるかもしれない。

けれど彼に対して何かを許したこともなければ和自ら彼を誘った事実も無い。

それなのにこうやって尋問めいたことまでされてますます和は悲しくなった。

とどめを刺すのなら、早くすればいい。

縛られてなお、触れる彼の手が愛おしいと感じる自分を殺したくない。つてしまっではないか。

そんな彼女の表情も涙も、今の遙は感情を揺さぶられることはないらしい。

和の言葉に、遙はくつ、と酷薄に笑って目を細める。

「許せない？当たり前前の事を訊くなよ。許せないじゃない、許さないんだ。」

一生、逃がしてやらないと言った。和のすべては、一生俺のものなんだから。」

その言葉に、和は目を見開いて固まればぼろぼろと涙をこぼした。

「ひどい……もう、好きでもなんでもないのに、私を閉じ込めるの？そんなことして、なんの意味があるの。性欲処理にでも……するつもり!？」

遥の心がもう自分にないと思いついでいる和にとっては

彼の言動が不可解なものでしかない。

すれ違い続ける会話は、なおも冷え冷えとした空間を作り上げていく。

「……つそんなに、優が好きなのかよ!」

言った瞬間、遥が和の唇を塞ぐ。

目を見開いて驚く和は足をばたつかせて抵抗したが遥がすぐにおさえこんでしまう。

こんな風にキスをされては、彼の元を離れられなくなってしまふ。

そうなつたら自分は一体遥にとってどんな立ち位置になるのか考えただけでも恐ろしかった。

息をする時間も与えられないくらい激しく口付けされれば

遥はその間乱暴に和の制服へと手をかける。

このまま彼が最後までする気なのだとわかって、和は身を強張らせ

た。

「……俺に触られるのは嫌だ？震えてるね。」

「……………」

「優には、もうキスされたの？それ以上は？」

何故そんなことを訊くのだろう。まるで嫉妬に狂う男のように。

遙は、和にすっかり愛想を尽かしたのではないのだろうか。

彼の言葉に、和の背中に電流が走った。

まさか普段厭う嫉妬を連想する言葉で、こんなに自分が反応してしまうとは思ってもみなかった。

和は、力無く首を振ると、許して、とか細く声をあげた。

「これ以上されたら……離れられなくなっちゃうよ。」

「なればいい。元々離す気なんてないんだ。」

「……そ、んな。」

「好きでもない男に反応するなんて、いつから和はそんなにいやらしくなったの？」

くすくす笑いながら施される愛撫に、和は顔を真っ赤に染め上げる。先ほどから何を言っているのか。気持ちが無いのは彼のほうのはずなのに。

「好きなひとに触られて嬉しくないわけないでしょ！」

「!？」

和の言葉に、ボタンを外していた遙の手が止まる。

首筋をたどっていた顔を持ち上げて、遙が戸惑うように和をのぞきこんだ。

「……どういう意味？」

「は、遙はもう、私のこと好きでもないのに、どうしてこんなことするの？」

「え？」

「ひどいよ……嫌われててもこんな風にされたら勘違いしちゃうの。」

それとも、ずっと私にこういうこととして気持ちを引き縛り続けるの？

自分はどうせ、さっさと違う女のひとを好きになるんでしょう！！
「？」

ついには泣き叫ぶように大声を上げた和に、遙は目を見開いて固まった。

先ほどまでの会話の流れと百八十度変わったような彼女の言に自分の願望かはたまた妄想の世界に逃げ込んでしまったのではないかと思つたほどだ。

空耳でもなく夢でもなく、今の言葉は現実であつてくれ、と情けなくも遙は願つた。

「……な、和、俺と別れたいん、でしょ？」

「？……別れたいのは和泉君でしょ？」

「どうしてこの状況でそう思うんだよ！」

「さ、最後にひどいことするのかと、思つて……違つるの？」

泣きながら呆けたような顔をする和に遙は混乱しながらも我に返れば慌てて彼女の拘束を解こうとベッドの上へ腕をのばした。

縛られた腕が解放された時に吐き出した息に和は自分が恐怖していたのだと

今更ながらに気が付いた。

好きな男といえども、やはりあの状況下は怖かったらしい。

遙が瞳を揺らしながら、起き上がってベッドに腰かける彼女の頬を包み込む。

「……………落ち着いて、いちから話そう。」

触れる手の平のぬくもりが嬉しくて和は目を閉じた。

しかし、遙の言葉を理解すると困ったように眉尻を下げる。

「……………でも、私の話を訊いたら、和泉君は」

「和。今のままじゃお互いに限界だよ。ここずっとぎくしゃくしてたの

自分でだつて気付いてるんでしょ？」

だからこそ、俺に嫌われたなんて勘違いしたんじゃないの？」

遙の言葉に、和はためらいつつもうなづく。

しかし、すべてを話していいのだろうか。

ただ、彼に軽蔑されるというその事実だけが怖かった。

「……………あれ、でも、優君に全部聞いたつて、嘘？」

「そうだよ。普段の和の手法を真似てみた。」

「つ……………だ、だまされた。」

あまりにも簡単にはめられた事に愕然としていたが

遙はシヨックを受ける彼女に噴出してそのまま両手首をそっと持ち上げた。

「……………つ、い、和泉君」

「ごめんね、赤くなっちゃったね。」

手首をゆっくりたどる唇に背筋がぞくぞくとするのを感じながら和はせつない吐息をもらした。

「……和、そんな風に色っぽい声と表情されたら止まらなくなるんだけど。」

「いいよ？止めなくて。」

「……っ！だあめ、いつ覚えたのかな、そんな技。」

悪い子だね、と言いながら遙が優しく和の額を指で弾いた。

柔らかい声も微笑みも、見慣れたいつもの遙だ。それに和は喜びを感じる。

しかし突然剣呑になる雰囲気、和が首を傾げると、遙は低い艶めいた声を上げた。

「別の男に色仕掛けなんてしたら、それこそ未来永劫外に出れないと思ってるね？」

「……！」

「ちなみに俺には二十四時間いつでもしてくれてかまわないよ。むしろ歓迎。」

「い、色仕掛けしたつもりなんてないよ！第一、和泉君ひっかかってもいないじゃん！」

真っ赤になって指差す和に、遙は口端をあげる。

「ふうん、そんなこと言うの？」

「じゃあ後でどれだけ我慢したかじっくり教えてあげるね。さ、おいで。」

「言って遙がまたも和を持ち上げる。」

いいかげん、彼は彼女を担ぐのが趣味なのではないかと思うほどだ。

「……横抱き本当よくするね。」

「和限定だけどね。」

「……………」

「なにかな、その目は。移動しないと押し倒しちゃうからね、リビング行こう。」

「さらっと何を言うの……………」

頬を染めながら遙の首に腕を回す和を、遙は満面の笑顔で抱え込む。こっやって抵抗しない彼女を抱き上げてみると、本当に自分を好いてくれていると実感できて、どうにも遙は癖のように頻繁にこっいつたことを施したくなってしまう。

赤いソファに下ろした時、心底名残惜しそうにする遙の表情をみて和は嫌われているとどうして思い込めたのだろう、と先ほどまでの自分に呆れた。

恋は盲目、とよく言うが、

お互いに冷静さを欠いてしまつては危うい以外の何者でもない。もう少し落ち着いた心を持たなければ、と和は改めて自分を戒める気持ちを強くした。

「……………優と、定期的に会つてたつていう事実はあるんでしょう?」

「!……………急に始めないでよ、びっくりするじゃん。」

「和。」

ぎろ、とにらまれて観念したように和はうなずく。

優に伊達眼鏡を奪われたことも、毎朝彼が訪れることも、結局は隠さず白状した。

「……朝か、優の奴。俺が弱いつて知つててそこ狙ったな。」
「一応、交際は何度も断つてるんだけど……。」
「もっと強く言ったらいいんじゃない？俺からまた釘刺してもいいし。」
「うーん……。」

渋る和に、遥はは眉を顰める。

雄大のときでさえ、けっこうな仕打ちをしたというのに
優に限っては随分と渋る彼女の様子が、はつきりと言ってしまえば
遥は気に入らない。

「……優のこと、好き？」
「好きじゃない。」
「でも、冷たく出来ない？」
「……………」

無言は肯定だ。

遥はここにきてようやく、彼女が何を悩んでいるのかその一部をつかんだ気がした。

「ひょっとして、俺も好きだけど優のことも好きなのかも、とか
そういうこと思って悩んでる？」

遥の言葉に、和はぎく、としたように身体を震わせた。
良くない方向に転びそうで、遥は顔を顰める。
しかし、それに慌てて和が待ったをかけた。

「そうじゃなくて！触られてもやっぱり鳥肌立つし
いっしょにいて好きだとも全然思えないのに！」

冷たくできないのは、やっぱりなにかあるのかなあ、と考えたら
なんか、浮気してるわけでもないのにうしろめたくなっちゃって……
だから、和泉君に嫌われたんだらうなって思ったの。」

しゅん、としぼむ彼女が可愛くて、遥は無意識に頭を撫でる。

和は猫のように目を細めるので、結局遥は可愛い、と口に出して嘖
出していた。

「……うーん、でも、つまり。」

和は俺を好きなようには優を好きじゃないと確信してくれてるのに
なぜかあしらいきれない自分に困惑してたってことだよな?」

遥の言葉に和がうなずく。

遥は撫でる手をそのままに、ふうん、と呟く。

「優といっしょにいるときって、どんな気持ちになるの?」

「え?えーと……。」

視線をさまよわせて思考を働かせる和に、遥は訊いておいて不機嫌
な顔を浮かべれば

和の腕を引つ張り自身の膝の上へと彼女を座らせた。

「なぜ。」

「だって俺の前で他の男の事考えるとかすごいむかつくんだもん。」

「ええええええ……だって質問されたから。」

「わかってるよ。でも気に入らないもんは気に入らない。」

「じ、ごめんね?」

ややこしい事態を招いたのは自分の嘘が始まりなので
和は今ここで遥を怒る気にはなれない。

とりあえずではないが、
今は少し下にある遙の頭を先ほど彼がしてくれたように今度は和が
撫でる。

遙は嬉しそうに顔を綻ばせて、もっと、と言うように頭をぐりぐりと押し付けた。

『い、犬がいる……』

ぶふ、と噴出して和はさらに頭を撫でる。

遙が先ほど和を猫みたいだと思っていたように、
目の前の恋人に尻尾と耳が生えてきそうだと内心で大笑いしていた。

「……和泉君と、優君は、似てる。」

「ん？」

「優君のたまにみせる真剣な瞳とか、笑う顔とか。

……和泉君といるみたいないな気分になる。」

そういうとき、胸が高鳴ったり、喜びを感じたりすることを
和は包み隠さず正直に話した。

するとどうしたことが。目の前の遙がみるみるうちに頬を染め上げ
口元に手の平を当てた。

「……和泉君？」

「いや、ごめん、だって。」

和の言葉に何を思ったのか。遙は顔を真っ赤にしながら和をみつめて
いる。

「……それって、俺を連想するからときどきしたり嬉しかったりするって事でしょ？」

「……………」
「和は、優を通して俺をみるからあいつにもときどきするんじゃないの？」

「……………」

遥の言葉を頭の中で整理すると、
なぜか和は自身の中に

クイズ番組で回答者が正解したときの例のあの音が鳴り響くのがわかった。

おまけに「正解正解だいせいかいー！」という
司会者のお姉さんのような声まで聞こえてくる。

それら一連の音やら声やらが響き終わった後、部屋の静寂が異様に重たくて

和は身体を震わせながらゆっくりと遥の膝から降りると
ゆっくりゆっくりと後退し、ついには走ってトイレへと駆け込んだ。

「え、ちょ、和！！？」

がちゃん、と鍵を閉めてトイレに引きこもった和を
扉の外から遥が和ー！と呼びかけながらどんとどんとドアを叩いてくる。

羞恥心や混乱や受け入れられないあれこれがない交ぜになり
和は膝を抱えて便器に体育座りをしていた。

「……………どんだけ鈍いんだよ私。」

自分の気持ちの大きさをくらい自覚しとけよ！と小さくつつこみながら
外で騒ぐ遥がいかげんうるさいな、と思い始めた和だった。

第二百二十八話「読めない彼、食べない彼女・その7」

およそ一時間程こもって、和はやっとトイレを出た。

切羽詰った遙が慌しく入れ替わりでトイレに入り扉をばたん！と閉める。

『……なんでこういうときでもよおすんだろ。お約束？』

呑気にそんなことを考えながらも

和はこのまま逃亡してしまおうかと心を過ぎった。しかしそのあとの報復も怖い。

それでも、遙がこのまま自分になにもしないまま逃がしてくれるとは思えずに

なによりもいっぱいいっぱいな心持ちである和は遙から数時間でもいいから離れて頭の中を整理したかったのだ。

和は逡巡して寝室に入ると、投げ出されていた自身の鞆を持ち上げる。

「なーにをしてるのかなあ？」

後ろから低い声音が響いて、和の身体がびくりと揺れた。

そうつと振り返ると、出入り口扉を開いて遙が壁に背中をあずけ立っている。

表情は不自然なほどににこやかであるのに、後ろに見える雰囲気が異様で

和は背中に寒気が走るのを感じればつ、と冷たい汗を一筋流した。

「鞆にちよつと用事があったので。」

「ふうん、鞆に用事。じゃあもう用事は済んだよね？」
「うん、済んだからリビングに戻る。」

はははははー、と渴いた笑いをしつつ和は扉へと歩くが
遙が塞いでいて部屋から出ることが出来ない。

「あの、和泉君……。」

「帰ろうとしたでしょ？」

「してな」和。」

言葉を遮って名前を呼ばれ、和の肩が揺れる。

「正直に言ったら許してあげる。」

もういちど訊くよ？帰ろうとしたでしょう、どうして？」

「……………」

問われた理由がなんともくだらなく思えてしまい、

和はどう説明したものかと逡巡する。

遙はそれになにを思ったのか、一步踏み出して和を押す。

和はそれに動揺してじりじりと後退するが、

そうすれば当然のようにベッドに後ろ足がぶつかった。

「時間切れ。」

「な、制限時間とか」

大声をあげようとして、遙が和の唇を塞ぐ。

ふいうちもいとろこだったそのキスを慌てて拒もうとするが、

少し押されただけでいとも簡単に押し倒されてしまったこの状況は
和にとって絶望的であった。

「……ちよつと、だめ、今だめ！」

片言でパニックになる和の耳を食みながら、どうして？と遙が囁く。その声と愛撫に背筋を震わせながら和はなんとか切れ切れに声を発した。

「い、っぱいいっぱいだから、整理が、ついてな、」

「いいよ、ついてなくても、気にしない。」

「……つだめ、今くつつかれたら絶対変になるもん！」

悲鳴のように叫べば、首筋に顔を埋めていた遙が上体を起こして和をみつめる。

視線がかち合ったとたん、和は沸騰したやかんのように顔をみるみる赤く染め上げていった。

それを目撃した遙は、一瞬目を丸くしてそれから艶やかに微笑んだ。急に色気を全開にしたその表情に、和の心臓が大きく鼓動を刻む。

「だったら絶対にやめてあげない。」

「え？」

「いちばんみたいもん。」

「は!？」

真っ赤な顔で叫ぶ和の頬を、遙がつるりと撫でた。

「おかしくなって、俺で。」

それでこわれちゃえばいいのに、と遙が眼前で囁いたところで、和はもう正常な意識を手放していた。

「和、ちゃんと温まらないとだめだよ。」

「ううー。」

「ほら、端っここに行ったらせまいでしょ、こっちおいで。」

「うううー。」

「ちよつと無茶しすぎたかなあ？でも和も悪いからおあいこね？」

「うううう……………」

先ほどからうなり声しかあげない和に、

遙は苦笑しつつもその身体を後ろから包み込むように抱きしめる。

いっしょに風呂に入るのはこれが初めてではないはずだが
いまだ混乱中の彼女はなかなか言語が回復してこない。

このままずっと話せなくともいつころにかまわないが
せめて名前を呼ぶくらいはしてほしい、と遙は思う。

「ちよ、和泉君！」

叫び声と同時に、遙は頭に衝撃を受けた。

のびてきた和の右手が、彼の頭を思い切り叩いたのである。

「あれ、和、戻った？」

「そうじゃなくて！うなじに口をくっつけるな、胸を揉むな！」

言われてはた、と遙は気がついた。

「……無意識にやってた、ごめん。」
「……あんたね。」

疲れた声で和が呟けば、遙は再度謝罪して和の腰に両腕を巻きつけた。

和は落ち着かない様子ではあったが、とりあえず愛撫が止んでほっと息を吐く。

「なーんだ、和もうつっかり普通だね。」

さつきまでうーうーしか言わなくて可愛かったのに。」

「ほんつとう和泉君の可愛い基準はおかしいよ?」

「だって和がおかしいままだったらずっとここでいっしょに暮らせたのに。」

「……危ない発言をさらつとするなっつもの。」

「そんな俺を好きなくせに。」

「あれ、珍しく強気発言だねえ。」

面白そうな口調で言う和に、遙がくすくすと笑う。

「だってあんな発言されたら少しは自信も持てるようになるよ。」

「……無自覚でごめんね。」

「ううん、嬉しいよ。和、俺の事好きになってくれてありがとう。」

「……うん。」

頬を染めた彼女に口付けたくて、遙は多少強引に顎を引き寄せた。

「ええーと……あら？これ篩ったかしら？」

「香苗さん、まだです。まず粉類を全部篩いにかけていきましょう。面倒かもしれませんがこれはやっておかないと絶対失敗しますから。」

「そうなのね。いっつもやってなかったわ。」

「お菓子作りの工程は、レシピを見てこれっているのか？と思う時がけっこうありますけど unnecessary な所は絶対に無いですから。」

料理はけっこう省略しても大丈夫な時がままありますけどね。」

「そうなのよねえー。」

賑やかな声をあげつつ香苗と和が立っているのは和泉家の台所だ。

なぜ今こういった事態になったのか。それは数時間前に遡る。

三連休の頭である今日は、前々から遙が実家へ帰る約束をしていた。しかし金曜日、つまり昨日だが、に起こった出来事が気になったのか遙が和と離れたくないと渋りだした。

断りの電話を入れている最中、和は横にいたのだが残念そうな香苗の声に胸が痛んでなんとか遙を説得しようと口を開

きかけた瞬間、
電話口からなんと元気な香苗の音が響いて和はびくり、と肩を揺らした。

「い、和泉君？」

「……なんか、連休中に和もいつしよに家に泊まらないかって。」

うんざりした口調で遙が放った言葉に、和は目を丸くする。

電話をかわってもらい直接話して迷惑ではないのかと確認するとむしろ嬉しいと即答されたので、和は結局その言葉に従う事にしたのだった。

そうして先ほどのふたりに戻るわけだが、

香苗からの申し出もあって今ふたりは並んでお菓子作りに励んでいる。

「和ちゃん、全部篩ったけれどこれでいいかしら？」

「ああ、もう一回ずつやってください。」

基本的に二回はやっておいたほうがいいですよ。」

「あああ、そうなの？」

ほえほえとした口調で話す香苗に微笑みながら和は続きの作業をうながす。

「終わったらこっちの大きいボウルにまとめてくださいね。」

「はい。」

会話だけだと、どちらが年上なのかわからない。

和は噴出しそうになりながらも、

冷蔵庫から先ほど切っておいたバターを取り出した。

「はい、じゃあここでバターを加えます。

このあとの作業ちよつと力要りますけど、香苗さんやりますか？」

「ええ、せつかくだから作業は全部やるわ！和ちゃんはアドバイザ

ーよ！」

「了解しました。」

ガッツポーズをした香苗にうなずきつつ和は次の工程を隣で話し出した。

「終わったの？」

リビングに戻った和に遙が座った状態で声をかける。

和は首を振った。

「ううん。生地をちよつと寝かしておかないといけないから休憩。」

「そっか、母さんは？」

「ちよつとはしゃぎ気味に昌さんに報告しに行ったみたい。」

「……書斎だから一応、仕事中なんだけどなあ。」

苦笑する遙に、和はまあまあ、と微笑む。

「和、図書室行く？」

「あ、いいの？実は相当楽しみにしてたんだー。」

「だと思ったからさ。寝かせるってどのくらい？」

「んーと、二時間くらいで大丈夫かな。」

「じゃあその頃に声かけるよ。」

「ありがとう……って和泉君暇じゃない？それだと。」

「そんなことないよ。俺もいつしょに行くから。本は読まないけど。」

立ち上がって和の傍らに立ち彼女の頭を撫でる遙は

蕩けるように微笑みながら和をみつめている。

その顔を目の当たりにしてそう、と小さく呟きながら和は若干頬を赤らめた。

『相変わらずあの顔なんかすごい居た堪れなくなる……。』

またつめき声をあげそうになっている和の様子に首を傾げながらも彼女の手を取って遙は歩き出した。

「これ本当に香苗が作ったのかい。」

目の前にあるのは焼きあがったばかりのスコーンと紅茶だ。

リビングにて和泉家の面々と和が並んで座り

先ほど出来上がったばかりのお菓子で午後のティータイムを満喫していた。

驚きに目を見開く昌に、和は苦笑し香苗は口を尖らせる。

ああいう表情を見るとより香苗が幼くみえるが、

昌はどこか嬉しそうにそれをからかっていた。

「香苗さんは基本的に料理と同じ感覚でお菓子作りをするから失敗するんだと思いますよ。」

腕が悪いわけじゃないんです、

慣れてないんだけど玄人っぽくやろうとするから結果だめになっちゃうだけで。」

「和、それほめてるのかけなしてるのかわかんないよ?」

「いやだからさ、数をこなせばああ、これはこうすればいいんだなっつてわかるけど」

香苗さんの場合はけっこうそれを勘でやってしまつところがあるんで。

分量もきつちり量らないとお菓子作りつて大概失敗しますしねー。」

和の言葉にそうなのね、と香苗がうなずいた。

「今回は簡単なスコーンにしましたけどこれだつて失敗しないわけじゃないです。」

でも出来たつて事は香苗さんはきちんとお菓子作りが出来るつてことですよ。」

誰かさんと違って、と呟いた言葉に、遥は苦笑した。

きつと塩澤の事を思い出しているのだろうと容易に想像が出来てしまい、

少し疲れた顔をしつつ隣に座る彼女の頭を労いの意味もこめて撫でてやる。

「……和ちゃんて猫みたいよね。」

「確かに。なんとというか飼い主にやつとなついた黒猫みたいだねえ。」

和と遥の様子をみて呟く香苗と昌に、和はえ、と間抜けな声をあげた。

「それ、和泉君にもよく言われるんですけど。そんな猫っぽいです」

か？」

「ふらりとどこかへ行ってしまうそうだからね。

遙もつかまえておくのが大変だろう？最近は何君がうるさいみたいだし。」

くす、ともらした昌の笑いが妙に艶っぽい。

遙もよくああいった表情をする事があるが、年齢を重ねた分に見み出ている大人の魅力がなんともいえない雰囲気を作り出している。

しかしそれをぼんやりながめていると横から剣呑な空気が流れてくる。

は、と意識を覚醒させた和は慌ててソファから立ち上がれば遙から遠ざかった。

ざざざ、と勢い良く壁際に寄った彼女の行動に、

遙は元々不機嫌だった面を更にこれでもかと眉間に皺を寄せて歪めた。

「……なにかな、その反応は。」

「え、いや、ええーと。」

「さっそく猫っぽく振舞ってみたとか？面白いね、和。」

「和泉君、顔が笑ってないよ。」

目を細めてゆらり、と立ち上がる遙を香苗が口で一応はたしなめるが視界に留めた香苗の顔が妙に楽しそうだったので

これは助けを呼んでも無駄だろう、と和は援軍要請を諦めた。

昌は昌で、心底楽しそうにふたりをみつめている。なんなら噴出し

そつだ。

「毛を逆立てた猫みたいだね、和さん……くつ。」

「いつまで猫ネタひきずるんだ！」

思わず和が声をあげてつつこめば、昌が今度こそ笑い出した。

それに遥が目を見開く。相変わらず父親の笑い声には慣れないらしい。

その隙を突き、和はリビングを飛び出すと

図書室と呼ばれる部屋を目指して廊下を走った。

一呼吸置いて遥が慌てて追いかける。

「……なんで走って逃げるの。」

「外に逃げないだけでしたと思ってください。」

図書室に入り奥の本棚へ隠れようとする前に、出入り口で遥に腕をつかまれる。

予想していたとはいえ若干おびえてしまうのは条件反射だ。

「さつき、父さんに見惚れてたよね。」

「んなわけないじゃん。」

壁に張り付く和を閉じ込めるように、遥は彼女の顔横に両手をつき檻を作る。

毎度こういった状況下でも顔色をまったく変えない彼女に遥は内心拍手を送るが

男女の色事になると別人のように初心になる和は

本当に不思議な女の子である、と遥は思う。

そんな彼女が、日を重ねることに魅力的に感じられてしまい

遥は一体自分の気持ちはどこまで突き抜けてしまうのだろうか、と

心配になる。

受け止めきれなくなったら、和はどこかへ行ってしまつのだらうと、いつもそれだけが不安なのだ。

「……俺が好き？」

「好きだよ。」

首を傾げてあっさりと言葉を紡ぐ彼女に、遥は思わず脱力する。うつむいてため息を吐いた遥を不思議そうにながめながら和が和泉君？と遙に声をかけた。それに反応した彼はゆっくりと顔を前へ戻す。

「………和。」

「ん？」

「見惚れてたよね？」

「……いや、あの、呆けてはいたけど。」

「見惚れてたよね？」

「……あの、純粹にそこにある顔が綺麗だな、と」

「見惚れてたよね？」

同じ言葉を狂った機械のように繰り返す遥におびえながら和はやつと悲鳴のような声で見惚れてました！と声を上げた。

「最初から素直に言えばいいものを。」

「だって怖いんだもの、あなただって怖いんだもの。」

「……なぜ繰り返すの？」

「大事なことだから二回言いました。」

「………。」

おびえつつもおどける彼女に結局なにも反応できなかった遥は

再度ため息を吐いて和を解放した。

ほ、と安堵の息を吐く和をみて、遙が苦笑しつつ頭を撫でる。

「戻ろうか。あのふたりじゃきつと食べきれないだろうし。」

「うん。……ていうか早く戻ろう。ネタを提供する趣味はない。」

「……ここまでふたりで来ちゃった時点でもうだめな気がするけどね。」

「だって目の前でなんかされるよりましだもん！」

和の叫びに、遙がまた謝罪の言葉を口にする。

とりあえず戻ろう、と和が廊下へ出て、遙もそのあとに続いた。

リビングまで戻って昌と香苗に中座したことを詫びようと口を開いたが

結局その言葉を発することはかなわなかった。

目の前に座る人物に、和が完全に固まってしまったからだ。

和より少し遅れて入室してきた遙は、同じように人物を確認すれば彼女とは違う反応を示した。

「優!!！」

「やつほー、遙。和ちゃんも来てたんだー。」

怒りを内包させた声をあげれば、遙が彼をにらみつける。

「……なにしに来たんだよ。」

「ん？別に最近しょちゅう遊びにきてたでしょ。」

まあ、いつかこうやって和ちゃんに会えることは期待してたけど。会えたね、和ちゃん？」

言って可愛らしく首を傾げる優に、和は全身を強張らせた。

第二百二十九話「読めない彼、食えない彼女・その8」

「優、帰れ。」

「えーなんでなんで。来たばっかなのにー。」

遙が低い声を上げながら腕を引つ張れば優は口を尖らせる。

和は慌てて遙に待ったをかけた。

「和泉君、優君は身内なんだしそんな風に追い返さなくても。」

「……それはどういう意味？優といっしょに居たいの？」

眼光鋭く遙が顔だけで和を振り返れば、和は一步退いた。

「遙のやきもちやきー。」

「うるさいー！」

「遙、余裕の無い男は格好悪いわよ。」

「母さん、ややこしくなるから入ってこなくていい！」

息子の言葉に不機嫌になる妻を、昌は微笑んでなだめる。

和はその様子を見て相変わらず仲が良いんだな、と自分が原因でもめるふたりを無視しつつ考えていた。

「和ちゃん、今日は眼鏡してないんだね。」

「……学校以外ではしない、基本的に。」

多少ぎこちなくそれでも優の目を見て会話をする和に、優が微笑む。

遙の不快指数は短い間で順調に上がっているらしく、

こめかみをぴくぴくと引き攣らせながら今にも怒鳴りそうな勢いだ。

しかしそんなことはどこ吹く風で、優は実にマイペースに微笑みながら
長テールに腰かける自身の隣の椅子を引くと、ぼんぼん、と二回
叩いた。

「和ちゃん、突っ立ってないでおいでよ。いつしょにお茶のモー？」
「え、いいよ、私は。」

反射のように首を振って答えてしまった和だが、今の誘いを断るのは少々不自然だ。
遙の手前といはいえ、別に並んで茶を飲むくらいどうということもない。

優は内心動揺する和を知ってか知らずか、ふうん、と小さく呟くと席を立ち上がり出入り口に立つ和の傍らへと歩み寄った。

にこ、と微笑むと、少し屈んで和の耳元へと唇を寄せる。

「僕が怖い？」

囁かれた言葉に和が目を見開いたまま硬直する。

目の前の男はゆっくりと近づけた顔を戻し彼らしからぬ顔で笑む。それは、無邪気な子どもが男に変わる瞬間だった。

和の心臓が、またも変な鼓動を刻む。

「優っ！……！」

怒鳴り声と共に、ついに我慢が限界値を突破したのか
遙が優の首根っこをつかんで後方へと引っ張る。

そのまま受け止めてやることなく引き倒す勢이었다が、
身体能力が優れているのか、呑気な声で笑いながら優が踏ん張って

こらえた。

「遙こわーい。余裕なーい。」

「うるさい!!」

声と同時に遙が長い足を思い切り正面へ振り上げる。

しかし先ほどと同じように優が軽々とそれを避け、楽しそうな声まであげだした。

「久しぶりに番長ごっこー？今日はどっちが舎弟入りかなあー。」

「遊んでるつもりはないんだけ、どっ！」

語尾で遙が右方向へと蹴りを避けた優に更なる追撃をしかける。

先ほど正面を向いていた足がそのまま優の居る右へと流れてきたのでさすがに狼狽した優が、うわ、と短く呟く。

それでもまた間一髪で避けられているのだから遙は苛立ちを募らせていく。

今度は優が攻撃後、片足だけでバランスを取る無防備な遙を狙って右拳を突き出す。

しかし遙もそれは読んでいたのか、

素早く屈んでそれを避けると今度は優に足払いをしかけた。

和はその様子を呆然とながめていたが、

やがてため息を吐くと壁際ぎりぎりを歩いて

昌と香苗が並んで腰かけるテーブルへといつしよに着席した。

こういつた光景に慣れているのか、

遙の両親は特にふたりを止めるでもなくにこにここと微笑むだけだ。

和は先ほど飲みかけにしていた自身のカップに口付けると

紅茶はすっかり冷めきっていた。
しかしコーヒーほど冷めても気にならないのは不思議である、と和は思う。

とりあえず渴いていた喉を潤して昌と香苗へ視線を向ければふたりもそれに気付いて和へ微笑みを向ける。

和は先ほど疑問に思った事を馬鹿馬鹿しいと感じつつも口にした。

「あの一、番長ごっこってなんですか？」

和の言葉に、ああ、と香苗が呟けば懐かしそうに目を細める。

「昔ふたりがよくやっていた遊びよ。まあ、ごっこ遊びというか……今みたいにああして小競り合いをして勝敗を決めるの。」

それで、勝ったほうが番長、負けたほうが舎弟になるのよ。「わりと勝敗は拮抗してたかな。役割が決まるとその日一日はなりきるから」

みていて実に面白かったよ。」

昌と香苗の言葉に和は想像力をかきたてられる。

番長になった遙や舎弟になった優、そのまた逆など頭で浮かべてみるだけでもかなり面白いことになっていた。

「それって、負けた方は使いつ走りみたいになるんですか？」

「ああ、近いかもしれないね。」

「舎弟役の方は親分て言うのよね。」

「そうそう、番長役はひたすらえばれるから負けないうちに必死になつてたな。」

子どもって面白いよね、と笑い含みに発言する昌は

それこそ彼自身が面白いおもちゃをみつけたときの子どものような顔をしていた

和は嘔出しそうになってしまった。

「……にしても、ふたりとも攻撃を避けてばかりでなかなか勝負が決まりませんね。」

ちらり、と和が横目でふたりを見れば、拳や蹴りが空を切る音ばかりが響き、いまだ痛々しい音は聞こえてこない。

血を見るよりはそのほうが断然良いし、多くの女性が思うように暴力なんて、という思考回路も和にはない。

物を壊すなよー、とか、

大きな怪我をされると面倒だからそこはわかつとけよー、とか、なんとも呑気な彼女の頭の中であった。

「そろそろ飽きてきたし止めようかしらねえ。」

「疲れて倒れるまでやっていそいだものなあ。」

昌と香苗にしても割と似たような考えであるのか、特に危ないから止める、という発想はないらしい。

して理由をあげるならば先ほど発言したように「画的に飽きた」からなのだろう。

和も頼杖をついてぼんやりとながめていたが確かに埒が明かないように感じる。

しかし止めるとなるとどうするのだろうか、と和は首を傾げる。

「タオルでも投げます?」

和の発言に香苗がそうねえ、と頬に手を当てる。

「悪くはないけれどタオルがないわねえ、どうしましょ？」

「こんなに大きくなってからこんなことやってるのそういえば初めてだね。」

止めるか、と試してみたが止める術はどうやらないらしい。和は心の中で水でもかければ止まるだろうが掃除が面倒だと却下する。

面倒だし放っておいてもいいのではないかとも思うのだが、そろそろ紅茶セットを片付けてしまいたいのだ。

そうなると出入り口を通らねばならぬのだが、

ふたりが動き回っているため巻き込まれずに通るのが難しい。そうになると、やはりあれを止めねばならない。

試しに、と和は口を開く。

「殴り合いなんて野蛮な事する男、ありえない。」

和の発した一本調子の声はしかしかなり有効であったらしく遙のみ動きを止めさえしてくればいいと思っただが男ふたりは面白いぐらいに反応しびたり、と動きを止めた。

それを認めて目を見開くも、和は固まっている場合ではないと思えば素早く椅子から立ち上がった。

「香苗さん私片付けますね。」

「あら、和ちゃんたら。いいのよ、お客様なんだから。」

「何を言ってるんですか。遠足は帰るまでが遠足です。それと同じで料理もお菓子作りも、後片付けまでが料理だしお菓子作りです。」

和の言葉に、昌と香苗が同時に噴出した。

会話しながらも台車に次々とカップやポットを下げていた和は作業を続けながら首を傾げる。

「私なんか変な事言いましたか？」

「いいえ、素敵なお両親に育てられたのだと思ったわ。」

「それは光栄です。」

笑いながら、和は台車の取っ手をつかむ。

それを押そうと力を入れる前に、和の手に誰かの手が添えられた。

「和、俺運ぶよ。」

和の右隣に遙が陣取り和から台車を引き受けようとする。しかしそれに和は首を振った。

「ん？いや、いいよ。これ運び終わったら続きやっていいし。」

「和ちゃんが嫌がるなら僕はもう拳振り上げたりしないよ！」

次いで左隣には優が立ち、見上げればなんとその瞳は涙で潤んでいる。

ぎよっとして目を見開いた和はいやいやいや！と慌てて声を上げた。

「さっきの冗談だから！台車通すのに出入り口ふさがれて邪魔だったからさ。」

無差別に殴るでもない限り別になんとも思わないって。

だから嫌とか全然ないから泣かなくていいし！」

「……ほんと？」

「うん。」

上目遣いに視線を向けられ、和はうなづく。

優はその言葉をきいて花が咲くような笑顔をみせる。

至近距離でみたその顔はあまりにも綺麗で少々まぶしすぎるくらいだ。

「ってなわけでごゆっくり。香苗さん、私ちゃっちゃと洗いますね
！」

「ありがとう、そのあとの片付けは私がやるわね。」

「了解です。」

言って男ふたりの間をすり抜けると、和は台車を引いて台所へと向かう。

「あ、和。俺も手伝うつてば！」

「えーだったら僕も行く」大勢でついてきたら邪魔だろう！」

「ええー。」

「ええーじゃない！」

口を尖らせる優に苛立った遙は、思わず優の頭に拳を落とす。

遙が自ら第二ラウンドのきっかけを作ってしまった事に後悔したのはすっかり息があがりお互いに身動きが取れなくなるほど疲労してからだった。

「ここに居たんだ。」

言葉に、和の指先が反応する。

開こうとしていた本から視線を外し前を向けば、そこにはいつものように微笑をたたえる優が立っていた。

夕飯後の片付けはいいからゆっくりしていて、という言葉に甘え和は結局味わえなかった図書室へと足を踏み入れていた。

遙は昌と仕事上の話があるらしく、今は書斎へともっている。

無言で優をみつめる和にもういちど微笑みかければ

優はゆっくりとした歩調で近付き、多少距離を取って立ち止まった。

「なにを読んでのの？」

「……読んではるっていうか、昌さんはどんなものを好むんだろうって思ってる。

有名どころからそうでもないものまで。やっぱり雑多な趣味なんだね。」

「和ちゃんはどんなのが好きなの？」

「私も似たようなものだよ。」

でもいくつも読んだ事ない本が並んでてすごく楽しい。」

本当に嬉しそうに微笑む和に、優は思わず顔を綻ばせる。

和はそれに何かを感じ取ったのか、

少し目を開くとこほん、と咳払いをして本を戻した。

無言で優の横を通り過ぎようとすれば、急にがくんと和の身体が揺れる。

驚いてその原因を確認するように視線を動かせば、

優が和の右腕を自身の左腕でしっかりとつかんでいた。

「ちよつと?」

「なんで急に出て行くこうとするの?居ればいいじゃない。」

「別に深い意味はない」嘘。

和の言葉が最後まで終わらないうちに、優が少し強い響きで彼女の音を制した。

それにまたも驚愕し、和は目を見開く。

「僕が怖いくせに。」

「!」

「僕の事、嫌いだってつっぱねられないんでしょう?」

「……それは、」

「僕の事見て、どきどきしたりするでしょう?」

「だからそれは!」

今度は和が優の言葉を遮るように声を張り上げる。

優がつかんでいた腕をぐい、と持ち上げると、

そのまま和の左手にも自身の手をのばし両手首を拘束するように本棚へ押し付けた。

和は常でない彼の行動に息を呑む。

「ちよつと、いいかげんにしてよ。」

「ねえ、今も心臓どきどきしてない?」

「……っしてたとしてもそれは行動に驚いてるからでしょ。」

「あはは、ここでその返しがくるとはなあ。

やっぱり和ちゃんは手強いなあ。でもそういうところが大好き。」

和本棚へ押さえつけている以外は、優はいつもとなんら変わらない様子だ。

にこやかに和をみつめる瞳は優しく、口調も柔らかくのほほんとしている。

それだけに、和は不気味さを覚えれば背筋が寒くなった。

しかし遥といい、罵られて喜ぶとはどういうことか。

一瞬マゾヒストという言葉が頭を過ぎったが、

むしろそれらをはねつけて自身に従わせようというのだから立派なサディストだ。

遥も、普段は優しい物腰と口調に騙されるがどうにもそういう傾向がある。

自分は虐げられたいだとかそういう欲求を持つ自覚はないが、大概のことを許せてしまう今となっては

案外内包しているかもしれないと思えばなんとなく複雑な気分になった。

かといっていじめられて喜ぶ人間ではないと信じたいが。

「なんか全然関係ないこと考えてるでしょ？」

優の言葉に和が意識を覚醒させれば、ごく間近に彼の顔が迫っているのがわかり

和は今更ながら焦りを見せる。

「ちよつと、いいかげん冗談で済ませられないから！」

「冗談で済ませるつもりないよ？」

「可愛らしく首を傾げても駄目！」

呆けている間に、和の両足は優のそれが絡み身

体全体が本棚に押さえつけられたように動かない。

得意の足技を繰り出そうと思っていたのに、これでは何も出来ない。それよりも、彼の次の行動が一体どんなものなのかが気になってし

まい

和はますますわかりやすく焦っていた。

「そんなにうるたえてる姿初めて見た。」

もはや息がかかるくらいに顔が近い。

和は顔をこれでもかと顰めながらそっぽを向く。

「こんなことされて冷静でいられるほど面の皮厚くないですー。」

「そんな風に言える時点で和ちゃんはけっこうなものだと思っけどなあ。

でも、心臓どくどくいつてるね。壊れちゃいそう。」

言って押し付けられたのは彼の胸板だ。

もろに和の身体と優の身体が重なっていて、なんとも不快感が漂う。和は今全身を確認すれば、

ありえなくとも足の裏まで鳥肌が立っているのではないかと至極どうでもいいことに思考を働かせていた。

現実逃避といえなくもない行動に出ようとしていた、そのときだ。

騒々しい足音について、焦るような声が部屋全体に響き渡る。

「和！居る！？」

声で遙だと認識すれば、和は声をあげようと口を開いた。

真横を向いていた顔を遙のほうへ向けようと思わず正面にしたのがよくなかった。

優が謀ったようなタイミングで、和の唇に自身のそれを重ねた。

驚きに目を見開き、抵抗らしい抵抗もできずに

優の舌が和の口腔内へと侵入したそのとき。

急に拘束されていた身体が軽くなれば、力が抜けていたのか
和はがたがた、と物音を立ててその場にへたりこんだ。

ぼんやりとした思考が回復したのは、痛々しい音に耳が反応したか
らだ。

今度こそ遙の拳が優の顔面にヒットし、
優が殴られた反動でよろけつつ倒れこむ。

遙の瞳は冷たく優を見下ろしたまま、第二撃を与えようとしている
のか
握った拳を開閉させるとまた彼の前にかまえて立ちはだかった。

「遙！」

和は本能的なものだったのか、激しく軋んだ胸の痛みに従ったのか
気付けば声を上げ彼の行動を制止していた。

「……和、どうして俺を止めるの？」

「！」

「どうしてそんな悲しい目で俺をみるの。」

「和泉君……」

「和は、俺より優とのキスのが良いの？」

遙の言葉に衝撃を覚えたのか、和が目を見開いて何も言えずに固ま
れば

それになにを思ったのか、遙は唇を？んで踵を返す。

「……もういい。」

悲痛な声で紡ぎだされた言葉は和の心臓を抉った。

取り残されて呆然としたまま涙を流し座り込む和を
なくさめているのがなぜ優であるのか、今の和の思考では理解でき
ずにいた。

第二百二十九話「読めない彼、食えない彼女・その8」 (後書き)

今更ではございますが、
お気に入り登録が1000件を突破しました！ありがとうございます！
す！

活動報告やブログでも書きましたが、
ここでも改めてお礼を書かせていただきました。

そしてこれもブログ内にてすでに説明済みなのですが
このたび感謝の意をこめて開店休業。の番外編を書こうと思ってお
ります。

今までのように内容に沿ったものというよりも
よりお遊びに近いお話にしたいと思っています。
そしてせっかくなので、読者の皆様のご意見をお伺いしたく
只今ブログ内にてアンケートを実施しております。
詳しい説明はブログ内にて行ってまいりますので、
よろしければご参加していただけますと恐縮です。

ひきつづき、本編も頑張りますので
これからも本作をよろしくお願い致します！」

第三百十話「読めない彼、食えない彼女・その9」

傍らにしゃがみ顔をのぞきこもうとする優を和は制す。
手を突き出して拒否の意を示せば涙を流す和から優は一步距離を取る。

和はふらり、と立ち上がれば足に力が入るのを確認して
覚束ない足取りながらなんとか壁際まで歩を進める。そうしてぴた、
と立ち止まった。

『ガッツッ!!!』

破壊音のような思い切りなにかを打ち付けた音が部屋全体に響き渡れば

和は悶絶して頭をおさえた。

自分自身でしたとはいえ、強か壁に頭を打ちつけ先ほどとは違う種類の涙が浮かぶ。

「和ちゃ「優君。」

驚いて固まっていた優が和にどうしたのかと声をかけようとしたが和は彼を呼ぶ声でそれを遮る。

「もう、二度と私に触れないでくれる？」

「!」

「……いいかげんに、遠慮なんてしなきゃ良かったんだよね。

なんでいつも大事なところ勘違いするんだろっ、私。」

「……………」

「もしも和泉君が私に愛想を尽かしたとしても、優君を好きになる

事はないし

優君もそうだってわかってるのに私にちょっとかいかけるのはもうやめて?」

「それは、どういう意味?」

「またまたー、今ので確信したよ。」

和が歪に口角を上げた瞬間、優は背筋に鳥肌が立つのを感じた。しかし次の瞬間、和は口の中に鉄の味が広がるのに気が付いて、眉を顰める。

「……あ、やべ、額割れた。」

「!お、女の子が顔に傷を作っちゃ駄目だよ!!」

「そういう心配はするわけね、底抜けに優しいのも血筋なの? まあいいや。そんなわけでもうあんま不必要に近付かないでね。」

ひょうひょうとした口調で話す彼女があまりにも先ほどの様子と違っていて

優は多少混乱していた。

そんな彼を真っ直ぐと見据えて、和は静かな口調で最後の言葉を落とす。

「もっじゅつぶんでしょ?」

言って部屋を出て行く彼女の後ろ姿を呆然と見送ったあと部屋にひとり取り残された優は、切り替えたように表情を変えればきよとん、とした顔で首を傾げ前方をみつめる。

「……いつからわかってたんだろう。」

落とされた言葉は、答えを訊きたい相手に今は届かなかった。

「……和さん？それは何かのお洒落なのかな。」

その声に反応して上を向いていた頭を正面に戻せば
驚くでもなくかといって無表情でもない昌が和の顔をまじまじとみ
つめていた。

「あ、昌さん。お仕事お疲れ様です。休憩ですか？」

「そうだけれど、いいのかい？放っておいて。」

「見た目ほど傷は深くないんで大丈夫です。……手当てはしたくない気分なので。」

「そう？でも床を汚すと大変だし何かでおさえるくらいはしてもいいんじゃないかな。」

正面を向いた顔からはそう少ない血が流れており

今にも首筋をつたって服を汚しそうだ。そのうち床にこぼれてもおかしくはない。

和はしばし逡巡したが結局ポケットからハンカチを取り出して額をおさえた。

「和さん、ひとりでお茶を飲むのもつまらないから付き合ってくれないかい？」

にっこりと微笑みながらリビングの方向を指差す昌をみつめる。その表情から何かを読み取るうと試みるが、どうしてもそれが出来そうにない。出会ったそのときから、和はどこか彼にはかないそうもないと感じていたが言葉を重ねるたびにその考えは確信に変わった。どころかもはや敵に回したくない人間ナンバーワンという名誉なのか不名誉なのかよくわからない称号を和は心の中で密かに昌に授与していた。

「お邪魔でないでしたら。」

短くそう答えれば昌がリビングの扉を開く。昌のあとに続いて和も部屋へと踏み込んだ。

数回しか訪れていなかったのが気が付かなかったがリビングには長テーブルの奥に小さいキッチンスペースがある。普段は奥の部分がふすまで仕切られているので目に触れない。基本的に家政婦である滝山がいないときにしか使わないと言いながら昌はやかんを火にかけた。

「むこうに行くの面倒だしね、お茶を入れる時とか……小さい冷蔵庫もここにあるから夜中にちよっとお腹すいたときに便利だよ。」

「そうなんですか。」

淡々とした時間が流れる。

この空間に足を踏み入れたのは、昌が和に対して説教めいた事を決して言わないだろうと確信したからだ。

今なにかを諭されるのは辛かったし、素直に聞き入れられない。

落ち着きたかったからというのがきつといちばんの理由だろう。和は昌のこの空気に触れるとどこか遠くへ行けるような感覚があった。

本を開いているときのあの感覚だ。

それは昌が作家だからというのもあるのかもしれないし、

彼があのだと知らずともひよっとしたら感じていたのかもしれない。

生来持つ彼の雰囲気、そういった不思議な気分させるのだ。

ほどなくして昌が火を止め、慣れた手つきでお茶を入れる。

お湯が沸いた時のあの特有の音がしなかったのはどうしてだろうか、と

和は一瞬疑問を抱いたが、

すぐさま緑茶は沸騰したお湯で入れては駄目なのだったということを理解し

漂う匂いやはり昌が準備していたのはそれだったのだな、とひとり納得する。

「はい、どうぞ。血もそろそろ止まったかな？」

ソファに座る和の前に湯呑みを差し出しながら昌が問いかける。

和はその言葉に反応してそろそろ、とハンカチを外してみれば

昌の言つとおり流れ出る血はもうなかった。

「……………いただきます。」

和の言葉に微笑んで、昌も和と同じように湯呑みに口付ける。

食事中に緑茶を飲む機会は多いが、こうして茶だけを楽しむということ

和はあまりしない。

彼女にとって安らぎの供はもっぱらコーヒーだった。

そのせいなのか、優しい味が妙に心に染み入り、不覚にも涙が出そうになる。

すんででこらえれば、和はことん、と湯呑みを置いた。

「遥が好きかい？」

急に放たれた言葉の意味を一瞬理解できずに和は目を丸くする。

正面に座る昌は穏やかに微笑みながら和を見据えていて

やはり何を考えているのかはわからない。

「……好き、です。」

多少詰まりながらも和が答えれば、昌は手にしていた湯呑みを卓に置いた。

「君は随分と愛情が深い。それでは色々大変でしょう？」

「！……昌さん？」

「優を傷つけるのを厭うのは辛いんじゃないかい？」

徹底的に痛めつけてやる、と思ったってかまわないと僕は思うけどなあ。」

昌の言葉に和は息を呑んだ。このひとは一体、どこまでわかっているのか。

「……なんの話ですか？」

「遥が大切に思うすべてのものを大切にするのは大変でしょう？」

君は、遥がどれほど優を大切に思っているのかももう見抜いてしまっている。

だから優をつっぱねられないのでしょ？」

「……………それはどこの聖人君子ですか。もしくはアバズレですか。」

和のうなるような声音に、昌はおかしそくに忍び笑いをもらした。

「だってそうじゃないですか。和泉君が優君好きだつたつたつて私が彼を拒めない理由にはなりませんよ、言い訳ですもん単なる。」

「把握しきれてなかったからでしょ？うまく拒めなかったのは。」

「にしたつて私は優君に色々な事を許してしまったんですよ。和泉君が怒るのは当然です。言い訳する権利すら私にはない。」

あのととき。

あのタイミングで遙を止めたのは、エゴだと和自身感じていた。

遙は口で罵詈雑言を浴びせようともし、本気で優を傷付ける事をしなかった。

ふたりのやりとりを傍らでみていたときも

漂う空気が浩平と同じくらいかそれ以上の気安さを感じて

和は自分が原因で彼の大切なものが欠けるのがどうしたつて嫌だったのだ。

なによりも和を優先してくれる遙であるとかわかっていいるからこそ、その和を気に入ったと高らかに宣言する優を排除できないということとは

自惚れかもしれないがそれこそどれだけ優が好きなのかという明確な判断材料に思えた。

それを完全に自覚できたのは先ほどの図書室だった。

遙が優を殴ろうとした瞬間、あつてはならないと感じれば気付けば遙を止めていた。

冗談で済ませられるならそうしたかった。埋まらない溝を作る原因が自分だなど

そんな馬鹿な事はあってほしくなかったのだ。

けれど、それは自分のエゴだ。

止められた遙がそれによってどれだけ傷付くか、少し考えればわかったのに

そうさせなかったのは和自身で、自分勝手な感情を彼に押し付けた。優を傷付ける決定打を与えられない故に、曖昧な態度をとった自分は最低だ。

そう思えばどんどん自己嫌悪に陥っていく。

しかし和は、思い違いをしていた。

それに気づいたのはやはり図書室で遙の背中を見送ってから。

なんにもかもがあまりにも遅すぎて

なんにも見えていなかった自分が今までどれ程混乱していたのかと自嘲する。

「……優君も、どうやら相当和泉君が好きみたいですな。」

和の言葉に、昌がふふ、と空気を揺らして笑う。

「あのふたりは昔から兄弟同然で育ったところがあるからそうかも
しれないね。」

べったりというわけでもないけれど、

お互いふらりと現れてはああやってじゃれあったりしているから。」

「相思相愛ですか。私が割り込んだんじゃないんですかねえ……。」

「そうか。和さん、もうそこまで気が付いているんだね。」

昌の言葉に、和は緑茶をすすりながら肩を竦める。

まったくもって、恋愛事に慣れていないとはいえこの鈍さは国宝級かもしれない。

無知は罪であるとよく言ったものだ。

和はまさか自分自身にそれを痛感する機会があるとは思ってもよらなかった。

他人にそれを感じることはあっても、

自分はそういった機微にそう鈍感ではないと自負していたのだ。

「和泉君が普段ばやく理由がよくわかります。

彼みたいに定期的に女性から好意を寄せられれば自覚する部分は大きいでしようし

なによりそれを見極める術も心得ているでしょうから。

……こんなんでよく今まで愛想尽かされなかったな、と改めて思っています。」

「遙だつて君にけっこうな事をしているでしょう?。」

「そうですね?付き合う前はまあ、けっこう面倒でしたけど。」

首を傾げる和に、昌は目を丸くしてやがて声を上げて笑い出した。

「全治一ヶ月以上の怪我を負ったのに、それを忘れるなんて……

和さんも随分と遙を溺愛してくれてるんだね」

くつくつと苦しそくに声をもらしながら昌が肘掛に顔を埋める。

どうやらツボにはまって抜け出せなくなってしまったようだ。

和は相変わらずだなあ、と思いつつも彼の言葉にうなずく。

「そんなこともありましたねそういえば。

でもそれだつて和泉君がなんかしたわけじゃないでしょ?。」

「そんなことはない。君と付き合う前の遙は正直、女性に対して誠実ではなかった。」

それは遙の怠慢がもたらした結果で、直接の原因は遙なんだから。未然に防げなかったのも、遙の責任だ。」

「いやいやいや、それは言い過ぎでしょう。捕まったのだから私が悪かったんですし。」

それだけでなくも今回は120%私が悪いですし。」

苦笑する和に、昌は頬杖をついて探るような瞳を向ける。

珍しくわかりやすい顔に、和はおや、と目を丸くした。

きつと昌以上に自分も表情に出ているのだろうか、

和は彼と会話している間はそれを気にしても仕方がないと半ば開き直っている。

「遙に、言わないつもりなんだね？」

「だって言ったら、彼は私を許します。」

「……それは嫌だと？」

「当然です。彼に殴られたって文句言えませんかよ今回の私。

だから、こう言ってしまうと語弊ありますけど……

もっと怒り狂ってとんでもないことしかしてくれたらいいとさえ思っています。

なにかしら心身共に痛めつけられないと気が済まないというか……でもそれも、自分がラクになりたいだけなんですしょうけど。」

どうしたもんですかね、と和が自嘲気味に言えば

昌はうなずいてまた微笑んだ。

「そうなるやっぱり、話すべきなのかもしれないね。」

「え？」

「罪悪感を抱き続けてそのひとの隣に立つのは、何よりも辛いから。」

「……」

「遙があっさり許して、また同じように付き合い続ければ
和さんはきつとずっと心の中で苦しむのでしょうか？」

「とことん自分を痛めつけたいのだとすれば、きつとそれがいちばん
なんじゃないかな。」

昌の言葉に衝撃を受けて固まれば

言った本人はあっけらかんとした様子で残ったお茶を飲み干す。

「さて、僕は仕事の続きをやるのかな。担当さんにも遙にも怒られ
てしまうし。」

微笑んで、昌が立ち上がる。和ははまだ固まったままだ。

「和さん。」

少し低くなった声音に、和はびくん、と肩を揺らす。

顔を上げると、立ち上がった昌はやはり微笑んでいた。

「何を選択するのも、君の自由だ。けれど覚えておきなさい。

遙がなによりも大切にしているのは和さん、あなたなんだよ。

息子は、君をはなしたりは決してしないだろう。」

「……………」

「それだけ肝に銘じて、

ふたりにとって最良の結果が出る事を心から願っているよ。」

そのまま、昌はリビングを出て行く。

和は昌の言葉にどうにか思考を働かせながら色々な事を咀嚼してゆ
く。

「……………別れるっつー選択肢は絶対にないってことね。」

苦笑しながら、自分だってそんな冗談じゃない、と考えたところでとつくに遙に狂っているのだとようやく和は確信した。

この夜、和の中にある遙への感情がはつきりとわかる形で変化したがその原因が優だという事実がいささか和は気に入らなかった。

第三百一十一話「読めない彼、食べない彼女・その10」

本来ならば三連休中ずっと和泉家に滞在するはずであったが少し迷って和は一泊しただけで帰ろうと結論を出した。

腕時計をみれば時刻は午後九時をまわっている。寝るにはまだ早すぎる時間だが

部屋を訪ねたところで遥は出てくれるだろうか。

逡巡して、それでも手遅れよりは早いほうがいいと考えた和は彼の私室へ足を向けた。

少し見せてもらった遥の部屋は、やはり同じようにCDラックがずらりと並んだ部屋で

デスクトップ型のPCが透明のデスクに置かれ、黒いキャスター付きの椅子は

デザインからして椅子よりもチェアと言う方が正しいかもしれない、と

和は視界にうつした瞬間思ったものだ。

室内にある扉がなんなのか気になって開けばそこはクローゼットでこんなに収納するほど身に付けるものがあるというのは和にはどうにも信じられない。

なによりも意外だったのは、全部屋和室だと思っていたのにそうではなかったことだ。

一階スペースは完全に純和風だが

階段をのぼって二階にあがるとそこはふすまではなく前後に開閉する扉で

床もフローリングであった。

当然遥の部屋もで、寝具は布団ではなくベッドだった。

香苗と昌の要望を折衷したのでこういった形に落ち着いたらしいが

一階が某有名な海産物一家の家が広くなったような印象であるのに二階は普通の一般家庭というのはなんだかちぐはぐだ。設計したひとは苦勞しなかつたのだらうか。

つらつらとくだらない事を考えていれば、

和はあつというまに二階にあがつて広い廊下をしばし歩いた後、遙の部屋の前まで来てしまった。

心の準備をする前に足を動かしてしまっていたのでここにきて怖気づく自分をなかなかどうして否定できない。

和はごくり、と唾を飲み込むと、

それでもここまで来てまわれ右をするつもりはないと思えばなんとか自身を叱咤して右手の拳を前へ持つてくる。

ノックをするだけでもこんなに緊張するとは、なんて弱いのだろう。ふ、と息を吐きながら、和は扉を叩く。

『コンコン。』

音が異様に響いて、心臓が一際大きく波打った。

ほどなくして室内から返事をする声が聞こえてくる。

和は入ってもいいかと訊ねようと思つたが締め出されては困る。

結局マナー違反だとわかつていつつもその時点で無言のまま扉を開いた。

パタン、と扉を閉めて和が室内に目をやればそこにいたのはPCに向かう遙だった。

ちよつと背を向ける形で遙は椅子に腰かけている。

「父さん？まだ×切延ばせとか馬鹿げたこと言うつもり？それは絶対にできないって佐倉さくらさんからも言われてるで」
「和泉君。」

背中を向けたまま言葉を発する遙に声をかければ、その背中がぴくり、と動く。

振り返った遙は、目を丸くしてそのまま固まってしまった。

和はどうしたものかと多少焦ったが、突っ立っていてもどうしようもないので

とりあえず部屋の中央へと足を踏み込む。

「……ごめんね、お仕事だった？」

「……ううん、大丈夫。今は父さんの逃亡先ピックアップしてただけだから。」

その言葉に今度は和が目を丸くする。

話を聞けば、定期的に訪れる店を拡大する昌は行動範囲が読み辛く余裕がある時はまだ常連の店へ行くのだが

そうではない場合、遙が知らない場所をみつければ渡り歩くらしい。遙はあらかじめ昌の好みと行動範囲を把握し包囲網を張らねばならないので

データの上書きを毎回余儀なくされるとのことだった。

具体的な仕事内容を詳しく聞いたわけではなかったが

想像したよりもずっと大変らしく、和はお疲れ様、と思わず声をかけてしまった。

「まあ、そんなしよっちゅうじゃないんだよ。そこまできつい仕事量じゃないから……」

佐山さんがもうちょっと父さんに厳しければ俺の仕事も減るんだけ

どね。」

苦笑する遙に、和も同じように笑いを返す。

やがて操作してPCの電源を落とした遙は、改めて和に向き直った。

「……和、さっきのことなら俺は」

「ごめんね。」

「!……和?」

「ごめん、てそれだけとかく言いたかったの。」

今回の私は本当に最低としか言えないし、愛想を尽かされても仕方ないと思う。」

和の言葉を、遙が目を見開きつつ受け取る。

遙はてつきり先ほどの事を責められると思っていた。

だからこそ謝るつもりはない、と宣言するつもりでもあった。

それなのに彼女から先に謝罪の言葉を口にされ、遙はいささか動揺してしまう。

そんな遙の様子を受けて、和は悩む。

昌との会話を反芻してはすべて伝えるべきなのかと考える。

しかしそれではやはり彼は自分を許してしまうだろう。

遙は底抜けに自分に甘い。だからこそどうしたらいいのかわからない。

確かに罪悪感を抱えて隣に居るのは辛いのもかもしれないが

表面的にはお互いの関係が今まで通り丸く収まるとするのならば

それはやはり違う気がした。

罵られてもいい、殴られてもいい。

自己満足だとわかっていても、なんらかの罰を和は与えて欲しかった。

しかしやはりこれも、結局は自分の為だ。
同じ所をぐるぐると回り、和は頭を抱えなくなる。

本来ならば、謝るのもしたくはなかった。

謝るといふ行為は、相手に許しを請う行為に他ならない。

そんな事をする権利もないと思えるほど、優との件で自分は駄目だった。

迷い、悩み、判断力が鈍り、最大級の勘違いをしてしまったのだ。

ふ、と息を吐き、和は自分が出来る最大級の償いを考えていた。

別れたくないという結論を和がくださったのなら、

いずれにせよ最終的に許してもらわないことにはふたりに未来はないからだ。

許されたくないが許されたい。

矛盾していても、それが今の和の正直な心だ。

「和泉君。」

「……なに？」

少し冷えた視線が和に注がれる。

その目を見るのがなによりも怖くて、それでも逸らさずに和は前を見た。

「……私、和泉君の気が済むまでなんでも言うこときく！」

高らかに宣言されたその言葉に、遙はずっこけそうになった。

思わずは？と間拔けな声をあげてしまう。

「ちよちよちよ、待って。……和、自分で何言ってるかわかってる？」

「わかってるよ。」

「……なんでもって、本当になんでも？」

探るような遥の瞳に、和は力強くうなずいた。

彼女が殴ってくれと言っても遥はきつと和を殴らない。

彼女が罵ってくれと言っても遥はきつと和を責めない。

ならば、と考えたとき、情けないがこんなことしか頭に浮かばなかった。

死ぬと言われたらどうしよう、と和は多少考えたが

それで実行してもいいかもしれない、と思ってしまうた和は

本気でどこかのねじが遥同様ふつとんでしまったのかもしれない、とひそかに心の中で落ち込んだ。

「俺の気が済むまで、って……いつまで経っても気が済まなかったらどうするの。」

「期限はあくまで和泉君の心次第だから、どうもしない。」

挑むようなその言葉に、遥は頭を抱えなくなった。

申し出自体はある意味とても魅力的ではあるが、

正直そこまでの事をしてもらうほど傷付いたのかと問われれば遥はわからなかった。

確かに先ほどまでは和に苛立ちばかりを覚えていたし

優を殴らせてくれなかった理不尽さだっ感じていた。

けれど、なんでも言う事を聞く、というのはどうなのだろうか。

遥は、決して和を支配したいわけではない。隷属などもってのほか

だ。

同じ高さで、違う事を感じれば共有したい。

そう願いたいこそすれ、力でねじ伏せようなどと誰が思うだろう。

いや、彼女が離れて行こうとすれば、そうしてしまいかもしれない可能性を

遙は決して否定できないのであるが。

ともかくも、お互いを想い合っている以上、立場は対等だ。

図書室での場面を思い出せば確かに彼女を滅茶苦茶にしたいとは思
う。

けれど彼女が望んで施されたのではない限り、100%彼女に非が
あるとは言い切れない。

不思議な事に、和に許しを請われる立場になると彼女を責める気
はなれないらしい。

遙はこのままそんな事しなくともいいと言ってやりたかったが

彼女の瞳を見れば決して納得しないだろう事も理解できた。

「私、優君にキスされたんだよ？」

「！」

「一回目は触れるだけだったけど、さっきのは舌入れられたし。

朝待ち伏せされて和泉君からもらった眼鏡取られて、

取り返す為とはいえ和泉君に黙って優君と会ったし。

今回曖昧な態度をとったのは優君の言葉を否定しきれなかった自分
のせいだし

きつと隙があつたから優君も私に手を出せ「和。」

つらつらと言ひ募る和の言葉をそれ以上聞きたくなくて、

遙は遮断するように低い声をあげてそれを制止した。

和の瞳がびくり、と反応して揺れる。

「……そんなにおしおきされたいの？」

「語弊は感じれど当たらずとも遠からず。」

鋭い双眸を向けられ全身が総毛立つ。

それでも、挑発に乗ってくれた遙に和はどこかほくそ笑んでいる心を自覚した。

次の瞬間の言葉を聞いて、全く後悔しなかったのかと問われれば和は否定せざるをえなかったが。

そちら方面ももちろん考えていたとはいえ、いきなり来るとは思わなかった。

「脱いで。」

「は。」

遙のきつぱりとした声音に、和は短く声を上げる。

疑問系にもできないほど今の言葉が信じられずに気付けば口から音を発していた。

目の前の遙はこれでもかと満面の笑みで微笑んで更に付け加える。

「もちろん下着もだよ。今、俺がみてる今ここで。」

「……………」

『なんとという鬼畜。』

心の中で唱えたものの、口にするまでは至らなかった。

遙の顔をみればわかる。和は試されているのだ。和がこれに従えないと言えば彼は即座に彼女の言葉を否定するだろう。

それみたことか、と楽しそうに笑い高らかに勝利宣言をする遙が目に浮かぶ。

そうして微笑みながら言うのだ。無理をしないで、そんなことしなくともいい、と。

和は奥歯をぎり、と噛みしめた。

そんなの冗談じゃない。有言実行は和のモットーのひとつなのだ。

「……何か楽しいの？こんなことして。」

その言葉と同時に和がカーディガンのボタンに手をかける。

遙は多少動揺したものの、途中でやめると高を括っていたのだろう。特に目に見えて狼狽することもなく椅子に足を組んで座り直す。

その姿を見た和は心の中に闘志にも似たなにかを灯す。

今日の服装は黒い水玉のカーディガンにロングTシャツとニットを重ね着した

割りとしンプルなものだ。

ボトムスはジーパンだが着ているトップスの裾が長いため下を脱いただけでは下着がみえない。

そう考えたら、和は次に脱ぐのは下のが恥ずかしくないと思えた。結局すべて脱ぐのならばいっしょといえればそれまでなのだが、さすがにまじまじと脱ぐまで下着を見られるのは居心地が悪い。

だからこそ和はジーパンに手をかけたのだが、その時点でさすがに遙はぎよっと目を見開く。

ばさ、と半ばやけくそのようにも見える勢いで和がジーパンを横に放る。

すらりとした白い足が惜しげもなく遙の眼前にあらわれ、遙はさすがに組んでいた足を解いた。

本当は、この時点でもうやめろ、と言いたかったのだろう。しかしそれをすれば自分が負けだとわかっているので遙はなんとか椅子に留まり無表情を貫いて和をみつめる。

和は遙の視線を意識しないように、遮断するくらいのつもりでなおも服に手をかける。

ニットを脱いだらあとはＴシャツ。それも脱げば残すところは下着だけだ。

震えそうになる手を叱咤しつつ、和はニットを脱ぎ捨てる。

次のＴシャツに手をかけた時点でちらり、と遙をみれば無表情で和をじっとみつめている。

和はそれに妙な苛立ちを覚えつつ、ついにＴシャツを首まで引き上げた。

「わかった。」

「……早くない？」

ストップをかけたのはＴシャツを脱ぐ直前で、

遙は目の前で下着姿になろうとする和を見ただけでもうどうしようもなかった。

なんということを見せてるんだと我に返れば和の手に自らの手を重ね勢い良くＴシャツを引き戻した。

和はてつきり下着姿にまでさせられると思っていた。
最悪、裸になったあとさらになにかを命令される覚悟まで出来て
いたというのに
やはり遥は底抜けに自分に甘い。

「和、俺がこの時点で気が済んだって言っても駄目なの？」
「だって済んでないでしょ？心の底では納得いってないよ、怒って
る。」

じ、と和に真っ直ぐみつめられれば、遥は詰まる。
完全に凶星をさされたのだ。

「私、遥が好きだよ。」

「和……。」

「優君に、もうなんにも許したりしない。」

「だったら、もうこれで終わりでいいじゃないか。」

その言葉に和は無言で首を振る。

口で許すと言うのは簡単だが、心はままならないと和にはわかって
いた。

和には、今わかってる事すべてを遥に伝えるつもりはない。

優と遥が遺憾なく終わる為には、現時点で自分が真実を伝えるべき
ではないと

和は思ったのだ。

故に、和のエゴである優を突っぱねられなかった理由も今は言いつ
もりはない。

だがそれでは遥ばかりが苦しむ結果になる。それでは嫌なのだ。

せめて自分が出来る最大限で気持ちを与えられれば
遥の優に対する怒りも少しは氷解するかもしれない。

そうなったときに優が彼に真実を話してくれれば関係は修復される
だろう。

初めから壊れていないのかもしれないがその判断が今は出来ない。

優との関係を修復しつつ、和に罰を与えてもらい、遥の怒りを解く
よくよく考えてみれば思いつきで言ったにしては名案ではないか。
和は心の中で満足しつつ遥に微笑んだ。

「和泉君が、私の気持ちに確信を持てるまでやめてほしくないの。
今はきつと、私のこと信じ切れないはずだから。」

「和……」

「それくらいのこと私しちやっと思ったと思う。」

そういう意味でも気が済むまで私のこと好きにして。」

「……なんつー刺激的な事を言うかなあ。」

苦笑して遥が和の身体を抱きしめる。和はぬくもりに安心して瞳を
閉じた。

「とりあえず、明日からにしよう。和の気持ちはわかったから。」

「……うやむやにする気じゃないよね？」

「明日から遠慮なくなんでも言うよ。後悔したって知らないからね。」

和の顔をのぞきこんで笑う遥に、和は不敵な笑みを浮かべる。

その様子にまた困ったように微笑んだ遥はお風呂に入ると告げると
和にその間に服を着て部屋へ戻るようにとつながした。

遙が出て行った部屋で気が抜けたように長い息を吐き出して和が座り込む。

ずっと緊張状態にあったのか、足に力が入らない。

「……やっぱり言われないと気付かないのかな。」

ぼつり、と呟いた独り言は、聞かれていたとしても他人には何の事かわからない。

彼女の思考の中にはもうすっかりと答えが出ていて

しかしそれを彼が知るのはいつなのだろう、とそんなことを

和は心の中で思っていたのだ。

第三百三十二話「読めない彼、食べない彼女・その11」

「香苗さん、楽しかったです、また遊びに来ますね。」

にっこりと笑った和に、香苗が多少不満そうに口を尖らせる。

もう玄関前で荷物をまとめた和をいまだに引き止める術はないものかと

考えているらしかった。

「和ちゃん、どうしても帰っちゃうの？遙はまだこっちにいるのよ？」

「俺だって和といっしょに帰りたいけどしょうがないでしょ、今父さんから目が離せないんだから。」

「だから、だったらここに泊まればいいじゃないの。どうして帰るのよー！」

遙につかみかかりそうな勢いで怒鳴る香苗を和がまあまあ、と間に入る。

「ちょっと私に用事ができちゃったんです。本当すいません。」

あの、香苗さんがもしよければ春休みにまた泊まりに来てもいいですか？」

和の言葉に不機嫌顔だった香苗の瞳がみるみるうちに輝く。

その表情をみて、和は若干胸の奥が痛んだ。

和とて人間なので、もちろん良心の呵責はある。

「和ちゃん、今の言葉ぜったいぜったい約束よ！？今度は最低でも三泊してね！！？」

「は、はい。」

両手を握り締められて迫力満点の香苗に、和は若干引き攣りつつも笑みを浮かべる。

ちらりと視界にうつした遥の顔には「ごめん」という言葉が浮かんでいるようだった。

和はそれに小さく微笑んでみせる。

風呂からあがった遥を待つて、和は昨夜のうちに今日の朝に帰るといふ話をした。

遥と今の状態で離れるのはあまりいいとも思えなかったが

優がこの家に居る以上、遥がきちんと仕事を全うできないのではないかと懸念した和は

あくまでも遥の最終判断にゆだねる、と添えた上でその言葉を口にした。

最初、和の意見にあまり良い顔をしない遥であったが

確かに和が優と同じ家に留まっている状態は

彼にとって正直精神衛生上あまりよろしくない。

優ははつきりと連休中泊まると遥に宣言していたので、それも気にならなかった。

自分が仕事をしなければならぬ以上、気が散っては問題だ。

結局そう思つて、遥は不承不承和の言い分を受け入れたのだった。

それでも遥は、笹森家へ帰るのではなく遥の部屋へ行くように、と条件を付けた。

和はそれに黙つてうなづく。

今日中に帰るつもりではあるがそれでも何時になるかはわからない。あまりにもあっさり了承する和を目の前に、遥はなんと複雑だった。

「じゃあ、私もう行きますね。」

「和ちゃん、駅まで歩くの？タクシー呼ぶわよ？」

「大丈夫です、そこまでの距離じゃないですから。」

「でも、」

「本当に昨日はありがとうございました。」

にっこりと微笑んで、そのまま和は早足で和泉家をあとにする。

物言いたげだった遙もとりあえず振り切って、自身の足で駅を目指した。

「和ちゃん！」

少し歩いたところで、後ろから名前を呼ばれ振り返る。

声で予想した通り、そこに立っているのは優だった。

「どうして帰るの？居ればいいのに。」

首を傾げてなんの含みもないように無邪気な声をあげる優を見て和は苦笑いを浮かべた。

「和泉君が集中できないみたいだから。邪魔者は退散するよ。」

「じゃあじゃあ、僕も自分の家帰るからいつしよにタクシーで駅まで行こうよ！」

「優君、今日も泊まるんでしょう？和泉君から聞いたよ。」

「和ちゃんがないんじゃつまんないもーん。」

口を尖らせる優に、和が口角をあげて微笑む。

優は、その表情にどきりとした。昨夜みた、あのときの彼女と同じ笑顔だ。

「どつちにしる私は歩いて帰るから。」

きっぱりとした口調で断り、それじゃあ、と言って和が踵を返す。その姿をみた優はあくまでも柔らかい声で囁いた。

「……僕から逃げるの？」

それほど大きくはない音でも閑静な住宅街であればじゅうぶんに響く。

優の声が和の耳には確実に届けられた。優もそれがわかつているのでそのあと言葉を続ける事はしない。ただ、彼女の出方を立ち止まっ
て待つ。

和が、もう一度ゆっくりとした動作で振り向けば

そこにいるのは先ほどよりも、昨夜よりも凶悪な顔で微笑んでる女性だった。

「どうして？あなたを怖がる必要はどこにもないのに。」

和の言葉に、優はぴくり、と反応して僅か眉を動かす。

そのまま表情を隠そうともせず、みるみる不機嫌顔を作っていた。

「僕から逃げたいくせに。」

「勘違いをしていたからね。」

「！」

「優君の心理がわかった今は、私が君に何を言おうと君は傷付かないとわかったからさ。」

和泉君の大切なものを自分が奪うのは嫌だったけど。

そうならないんだってわかったから私はもう好きにさせてもらっしこれ以上悪ふざけを続けるつもりならばつきりとあなたを拒絶するよっ。」

「……どういう意味？」

「今のがわかんないほど馬鹿じゃないでしょ。」

優君、私はあなたの試験に合格したいとも思うけど、できなくてもいいよ。」

和の言葉に、優は目を見開いて固まる。

思った以上に和が彼の思惑を把握していたらしく、二の句が告げない状況らしい。

和は最近の彼女らしからぬ態度もすっかりとなりをひそめ、本来の姿を取り戻しつつあった。まさしく、水を得た魚のようだ。

「嫌がらせし続けたいんならご自由に？ みつともなく彼にすがってもいいくらい

私は遥の事が好きだから、折れるつもりはないよ。」

にや、と不気味な笑顔を見せたが最後、今度こそ和は振り返らずに真っ直ぐと前を見据えて歩いて行った。

「優——」

「……遥、なにしてんの？」

「なにしてんの、じゃないだろ。お前いつまでも戻ってこないし……なんでこんなところで固まってんの？」

優はその言葉に気が付いて、慌ててまばたきをすれば前へ視線をこらす。

先ほどまではすぐそこにあったはずの彼女の背中が今はどこにも見えない。

どうやら和にあの笑顔を向けられてから、ずいぶんと時間が経過していたようだ。

遙は遙で、姿が見えない優に気が付いて和を追ったのではないかと懸念し

慌てて家の外へと出たがそれは単なる杞憂だったようだ。

いや、実行されそうになったがきつと途中で彼女に折られてしまったのだろう。

それがわかって、遙はなんともこらえきれない感情が奥底から沸いてきた。

「ねえ、遙。」

「ん？」

「笹森和つて、何者？」

「……可愛くて、強かで、初心で、可愛い。」

「かわいいを二回言ったけど。」

胡乱な瞳で遙を見やる優に、遙はふ、と息を吐いて微笑んだ。

「俺の最後の恋人だよ。」

「……………」

ぼん、と軽く叩かれた肩を、優はゆっくりとさする。

なぜだか、妙に寂しい気持ちだった。

「……………和？」

控えめな声で恋人の名を呼ぶ彼に、しかし返事をする者はいなかった。

午前零時を過ぎて、やっと自身の部屋へと戻って来れた遥は一応和に連絡は入れていたものの、不安だった。

本当に彼女がここに居てくれるのか、怒ってはいないか。

ひよっとすると帰ってしまったかもしれない。真つ暗な部屋にため息を吐いて

遥は無言で部屋の明かりを灯すスイッチに手をかけた。

ぱちん、という音と共にクリアになった視界に遥は一瞬大声を上げそうになった。

奥に進んで赤いソファへとなんとなくはなしに視線をやれば、そこに遥を待っていたらしい和が座っていたからである。

座っている、といっても肘掛に上半身をあずけたほぼ寝転がっているような状態で

目を瞑り穏やかな寝息を立てている。

遥はその様子を目で確認すれば思わず顔を綻ばせた。

「……………かーわいいなあ。」

ふやけきった顔で和の真正面にしゃがみこみ、彼女の顔をのぞきこむ。

その瞳を開いて自分をうつしてはくれまいかとも思ったが、それよりも愛しさがこみあげて、遙はゆっくりと彼女の頭を二、三度撫でた。

うっん、と小さく身動きする彼女はなんとも可愛らしく、このままでは妙な事を考えかねないと判断した遙は早々に寝室へ運んでしまおうと判断した。

ゆっくりと起こさないように神経を使いながら、和をベッドへと下ろす。

布団をかぶせてやりもう一度穏やかな和の寝顔をみつめて、遙は目を細めれば立ち上がって衣装の仕舞われた部屋へと足を向けた。

シャワーを浴びてそのまま彼女の隣に寝てしまおうと思いきやとタオルを取り出す。

「……いみくん？」

舌つたらずな声で名前を呼ばれ、弾かれたように遙が振り返る。そこには寝惚け顔をこすりながらなんとか立っている和の姿があった。

和が寝起きでぼんやりとしている姿を遙はあまり見れる機会がない。そもそも彼女は寝起きがかなり良いほうであるし、いつも何分経つてもぼけっとしてしまうのは自分ばかりだ。

こんな彼女をみるのは貴重であり、さらには舌つたらずな先ほどの声、そしてさらに加えればぐらぐらしながらもなんとか立っているその姿すべてが

無防備にもほどがあり、完全に自分にすべてを許している証拠とも

とれた。

そんなことに思いを巡らせてしまえば、
なんともいえない部分の感情を遥は激しく揺さぶられた。

そうでなくとも、単純に今の彼女の姿はあまりに愛らしい。

「……………やばい、久々に鼻血噴きそうなほどかわいい。」
「……………んんん？はなぢい……………」

言って眉を顰めながら、それでも半開きにしかひらかなない瞳を
和は懸命にひらこうとする。

遥との少しある距離を縮めようと一歩踏み出すが、ぐらぐらしてな
んとも覚束ない。

「ああ、起こしちゃったんだね、ごめんね。」

「ううん……………大丈夫……………」

「ここで寝ちゃだめだよ和！」

慌てて遥が駆け寄り和の身体を支えれば、和がふやけた笑顔で遥を
見上げる。

「おかーえりい……………」

「うわあああ、もう、なに、このかわいい生き物!!」

真っ赤な顔で小刻みに震えながら、遥は和を力強く抱きしめる。

思いのほか力が強すぎなのか、ほどこされた和がうぐ、とうめき声
をあげた。

そしてその痛みに刺激されたからか、先ほどまで半眼だった和の瞳が
今はもう普通にぱっちりと開かれていた。

「……あ、和泉君おかえり、遅かったんだね。お風呂入るの？」

「え、まさかの覚醒！？もうちょっと味わいたかったのにしまった

！！」

「あー、寝惚けてた？ごめんごめん。……なんで私は抱きしめられてるの？」

「それは、辛抱たまらなかつたというか。」

その言葉に和は不思議そうに首をかしげながらもそう？と一応うなずいてみせた。

「それより、今日ちょっと寒いし疲れ取れないからお風呂入ったほうがいいよ。

洗っておいたからすぐにいれられるし。眠い？」

「ううん、そんなには。」

「じゃあ、湯船につかったほうがいいよ。待っててね、いれてくる。」

「

するり、と遙の腕から消えてしまった彼女に一抹の寂しさを覚えながらも

遙はそのまま和の後姿を追ってリビングへと歩いていく。

操作してお風呂をいれた和に、遙がうしろから声をかけた。

「和、こっち。」

その言葉に反応して、和は素直に遙の手招きに応じる。

ソファに腰かけた遙の隣に、和も腰を下ろした。

「改めて、ただいま。」

「うん、おかえりなさい。」

「ふっふー、いいねえ、和からおかえりなさい言ってもらえるのっ
て。」

「何言ってるの。」

言って上半身を抱きこむ遙に和は苦笑して多少呆れたような声をあげる。

遙はそれには特に何かを答えることもなく、するり、と彼女の頬に手をやった。

「……和、好きだよ。」

「私も、遙のこと好きだよ。」

にっこりと微笑む彼女があまりにも愛しくて、

遙はその唇に吸い込まれるように口付けた。

そう久しぶりの行為でもないはずなのに、和はその感覚がひどく刺激的に思えた。

彼にはつきりと迷い無く好きだと言ったのが久しぶりだからなのだろうか。

そう思ったところで、和はひどく自分が嫌な女に思えた。

優のことはもう完全にどうすべきか道筋が見えて、恐怖も不安もない。

だからこそ曇りない心で彼を受け止められるが、

とするとやはり今までの自分はずっともやがかったのだろうか。

「……和、キスしてるときに俺以外の事考えちゃだめ。」

「！」

「優とのキス、思い出したりしてない？」

遙の言葉に、和はいかにも嫌そうに顔を顰めた。

「え、なにその表情。」

「いや、あの、今の今まで綺麗さっぱり忘れてただけぞ。
和泉君に言われて思い出した、ごめん。」

その言葉に遙が目を見開けば、どうしたのか急に肩を震わせる。

「和泉く「あははははは！！」

急に大笑いした遙に和は固まって、
彼の肩に置こうとしていた手をそのまま思わず引っ込める。

「……………」ごめ、まさかあそこまでされて記憶を抹消するとは。」

くつくつと笑ってそれから遙はまぶしいほどの笑顔で微笑んだ。

「俺とのあれやこれやは、記憶から抹消することなく覚えていてく
れたのにな?」

「え。」

遙の言葉に、和はずいぶんと昔の自身が発した言葉を反芻する。

『ねえ、和泉君。私が、散々色々な事されて、なんにも傷付いてな
いと思っただ?』

言外に、遙は大分以前からもう特別であったのだと言われているよ
うで

和はそれを思えば赤面せずにはいられなかった。

「……なんつでいまさらそんなことを思い出すかな！」
「えー。あ、和、お風呂沸いたからいつしょにはいるうー。」

遥の言葉に、和の身体がびくんと揺れる。

先ほどまでの恥ずかしい気持ちを引きずっているからなのか、昨夜の思い切りが嘘のように彼女の顔は真っ赤なままである。

「いやなら」はいる。」

遥の言葉を遮って立ち上がり、着替えを持ってこようと和が衣裳部屋へと足を運ぶ。

その後姿をながめて、遥は困ったようにため息を吐いた。

遥は、和が無理だと言った時点ですべて終わらせるつもりだった。

しかしそれをわかっていているからか和はなかなかノーと言わない。

あそこまでかたくなであると、遥の中に妙な心が生まれてしまいそうになる。

果たして彼女はどこまで応じてくれるのか。

いつそ試してみたいと邪悪な考えが胸のうちを過ぎつつが、なんとかその衝動をこらえて遥は戻ってきた和を見やる。

今の自分でも、じゅうぶん意地悪い命令をしてやるつもりなのだからこれ以上無理を強いることはしたくない。

遥は自身の心にならずいて、和ににっこりと微笑んだ。

「お風呂からあがったら、服は着なくてもいいよ？」

「え、」

「どうせ脱ぐんだもん。まあ、脱がして欲しいのなら着てもいいけ

る。」

にっこりと微笑んだ遙にむかって、変態！と叫んだ和の言葉は部屋全体に響き渡った。

言う事をきいたとしても、罵られたりはするという事実には奇妙にも遙はどこか安心してしまっていた。

第三百三十三話「読めない彼、食べない彼女・その12」

連休明けの朝、いつものように和は朝早くに登校しようと思っ
たが

遙からの命令、と言っているのかは定かではないが、で
いつもより遅く起きるよう言われていた。

それを守りふたりぶんの朝食を用意し身支度を整え、
遙といっしょに並んで学校最寄り駅までやってきた、のであるが。

「和？いやならいいんだよ？」

「……うるさいな。」

現在、和と遙は手をつなぎ学校までの道程を歩いている。
速度は緩慢で、ともすればわざと見せ付けているようにも思えた。
いつも和が登校する時間であるならばそう目立ちもしないだろうが
現在は駅から学校までを行く生徒が一番多い時間帯であり
和はどう考えても遙がそれを狙っていたとしか思えない。

隣の見目麗しい男をちらと視界に入れば視線に気が付いたのか、
遙がにっこりと微笑んだ。

和はそれに全身がざわつくのを感じたが無表情に前を向くに留める。
遙はぶん、とつながっている自身の左手を振りつれない、と声を
あげた。

その様子にまたも周囲から注目が集まり、和は内心泣きたい気持ち
である。

気のせいではなければ、さりげなく自称和のファンクラブ会員達が
なぜか周りを固めている。

目だけでそれらを確認したが、関わりたくもない和は気付かないふりをしていた。

「ふっふっふー、いつかやりたかったんだよね。」

弾んだ声に和が憂鬱な声でなにが、と返事をする。

遥はにこにこ微笑を崩さないまま多少声を張った。

「生徒が多い時間帯に手をつないで歩きたかったんだよ！

そうすれば和が俺のだってわかるから和を狙う男を一掃できるでしょ？」

「……一掃する男なんているわけないじゃん。あんたじゃあるまいし。」

「何言ってるの、和。本当に無自覚なんだから。」

そんなだから俺が苦労しなきゃいけないんだよ？」

「ごめん？」

「なんで疑問系なの。」

和が多少首を傾げつつ続きを答える。

「だってやっぱり考えすぎだと思っもん。ないって。」

その言葉を受けて、遥がため息を吐く。

和は自身が男性に対して少々無防備であると自覚はしたがそれでも遥が過敏になりすぎているという印象はぬぐえなかった。

「まあ、現時点で和に告白する輩はほぼいないとは思っよ？
でもね、和に近付いただけでも災厄が起こるくらいに認識してくれ
なきゃ

俺は満足できないの。」

「え、それは異性と接触するなつて事？」

目を見開いて質問する和に、遙は苦笑してみせる。

「本当はちよつと言いたいけどね。そんなに縛るつもりなんてないよ。」

ただ、積極的に話したりとかはしてほしくないかなあ。ふたりきりで長時間会話をするとかね。」

「そんなに何を心配してるの？和泉君じゃあるまいし、五分間ほど間近で話したからって惚れられるわけないでしょ。」

「日々の積み重ねはけっこう大きいものだよ。」

毎日ちよつとずつ話していたら好きになってた、なんて

そういう可能性は和の身にだって降りかかってもおかしくないでしょ？」

「……そんな青春漫画みたいなのぴんとこない。」

眉間に皺を寄せながらなおも否定する和に、遙はやはり苦笑するしかない。

これは彼女の長所ともいえるが短所ともいえる。

そもそも優しさを持ち合わせていると言っても彼女は厳しい人間だ。警戒心がまるでない状態の時は無防備にも見えるだろうが

一度排除すべき対象に認定されてしまえば容赦がない。

だからこそ辛辣な和に大半の男性は諦めもするだろうが

そこで折れなかった男はとんでもなく手強くなる。

それがわかつているからこそ、遙はこれから先待っている苦難を考えれば

頭痛を覚えるのも致し方なかった。

『まーた面倒な事考えてんなあ。』

遥の隣が浩平の席であるため、ため息をつく遥をまじまじとながめながらも

言われたとおり素直に浩平は自身の席へと腰かけた。

と、その瞬間、なんとも小気味よい音が教室全体に響き渡る。

遥が腕を伸ばして浩平の頭部をあらんかぎりの力で叩いたのだ。

涙目になりながらしばらく頭を抱えてうずくまる浩平を冷ややかな視線でみつめると

遥はさっさと前を向く。

浩平は慣れたものなのか、復活すれば懲りずに遥を詰問した。

「なんで、なんで遥の膝の上におとなしく座ってるんだよ！

笹森ちゃんだぞ！？笹森ちゃんだぞ！！？」

「うるさい、耳元で大きな声出すな。」

「出さずにいれるか！膝に乗せてるだけじゃない！

遥の両腕、笹森ちゃんの身体に巻きついてるじゃんか！どうなってんの！？」

バカップルみたいだよ、朝からいちゃつく普通のバカップル！」

「だから、うるさい。」

もう一度『スパーン』という音が教室に響いたが

クラスメイトはいつものことのように別段動揺したりはしない。

それよりも、浩平が指摘する言葉のほうに正しいとこの場に居る生徒達は思えた。

笹森和を間近で見ての印象は、常にクールであるというものだった。

恋人に対しての態度も若干どころかなり冷めているといった様子で朝から教室を妙な空気にするような女性ではない。

それなのに朝からこんなものをみせつけられて、登校した生徒達は浩平のように悲鳴を上げそうになった者もいたほどなのだ。

それほどに、今の状態が信じられない。

「……ていうか、笹森ちゃん、さっきからなんで一言も話さないの？」

眉間に皺を寄せて言った浩平に、遙は同じような表情を返す。

「は？何言ってるの、和さっきからずっと喋ってるよ。」

「え？でもきこえないけど……」

首を傾げる浩平に、仕方が無いな、といった表情で遙が手招きをした。

「もうちょい寄ってみればわかるよ。」

和に必要以上に近づくのは恐怖もあるが、お許しが直々に出たので大丈夫だろう。

思い至って浩平は和の傍近くまで身体を寄せてみた。

すると確かに、和がずっと唇を動かしているのがわかる。

何を言っているのだろうと耳を済ませると、

これまた小さな声がやっと浩平にも聞こえてくる。

「私はマネキン、私はマネキン、私はマネキン……。」

繰り返し念仏のように唱える和の言葉に、浩平はぎょっとして目を剥いた。

「ちよ、遙はなしてあげなよ！笹森ちゃん超無理してるよ！マネキンになりきろうとしてるよ！？」

「私は二宮金次郎、私は二宮金次郎……」

「笹森ちゃん！うちの高校には銅像飾られてないよおお！！！」

気を確かに！と和の肩をつかんで揺するが、固まったまま和は動くとはしない。

そんな浩平を遙が鋭い視線でにらみつけた。

「浩平うるさい。俺は和とくっついて幸せを感じてるんだから邪魔するな。」

「……楽しいの？こんな状態の笹森ちゃん抱っこしてて。」

「もちろん。」

迷いなくきっぱりと言い切った遙の顔は、晴れ晴れとした満面の笑みであった。

対する和は無表情で虚空をみつめているような状態だ。

一体全体何がふたりのあいだで起こったのか、浩平には見当もつかない。

しばらく絶句して固まっていた浩平だったが、やがて遙があ、と声を上げた。

「もう予鈴が鳴るね。和、また休み時間にこっちに来るんだよ？」

言って和を解放した遙は満面の笑みで話しかけるが

和は先ほどの無表情を解放すればか、と目を見開いた。

「わかってるよ、この変態！色魔！！隠れサディスト！！もおおお

っ！！！！」

悶絶する和を、これまた浩平が疑問符だらけの顔でながめる。次には蹴りでも入るかと思はれ予想したが、何を思ったのか和が教室後ろのロッカーへと両手を置いた。

しかし次の行動にはいる前に、和、と遥が静かにたしなめるような声で呼びかける。

「言っておくけど頭突き禁止。もちろん他の自分を痛めつける行為一切禁止。」

俺を罵るのと、殴るのは許可するよ、どんどんやって。」

「！！！！……そ、そんな。」

絶望の二文字を浮かべるような顔をして固まる和に浩平はまたも驚き声を上げる。

「え！？てことは、笹森ちゃん今、頭突きしようとしてたの！？」

「和泉君に先読みされるなんて……不覚。」

「あ、ちなみに隠れてやつても無駄だから。監視はついてるからね？破ったら……わかってるよね？もちろん。」

またもにっこりと微笑んだ遥に、和は悔しそうに顔を歪めれば、ぐくと詰まる。

「……………人当たりのいい鬼畜ーっ！！！」

変な捨て台詞を残して、和は2・7教室を弾丸のごとく飛び出して行った。

「……なあ、マジで何があったの？」

恐る恐るといった風情で浩平が問いかけると、遙はうーん、と小さくうなる。

「話さないでもないけど、長いんだよなー。」

「……………じゃあ、やめとく。」

「賢明。」

にっこりと微笑んだ親友の顔に、浩平は鬼畜の二文字をみたのだった。

教室に戻ってきた和は、勢い良く机に顔を突っ伏した。撃沈したように動かなくなる彼女に、クラスメイトは奇異の視線を向ける。

覚悟はしていたが、さすがにこれは辛い。

遙も、和の弱点をよくわかっているからこそこういった事を命令してくるのだろう。

自分へと罰だと思えば甘んじて受け入れようと思ってもするが

それでもバカカップルよろしく人前であるような非常識を演じるのはいささかどころではなくかなりの抵抗があった。

一時間目が終わればまた遙の元を訪れねばならない。

そろそろ自我が失われてもおかしくないのではないか、と和は思う。

「……爆発したい。」

ぼつ、と呟いた言葉は教室全体に微妙な空気を運んだ。

みんな事情が訊きたくとも訊けずに、悶々としていたのだが和の心理状態を鑑みればますますつっこめなくなってしまう。

お人好しの2・3一同は、好奇心を輝かせながらも

どこぞのハイエナのようなゴシップ記者にはとうていなれそうもなかった。

「……やっと一日が終わったー！」

和はその事実喜び、

なによりも終業式まであと三日だということにも狂喜乱舞した。

休み明け、三年生になってからはさすがにこのような状態ではあるまいと信じたい。

「和、今日はまた実家に戻らないといけないんだ。

駅に佐山さんが迎えに来てくれるから、いっしょに来てくれる？夕飯もいっしょに食べよう。」

「和泉家で？じゃあお母さんに連絡してもいい？」

「もうさつきメールしておいたよ。」

「……訊いておいて決定事項とはこれいかに。」

微笑む遙と複雑な表情を浮かべる和の手は、やはりしっかりとつな
がれていた。

「和ちゃん、いよつす。」

「佐山さん、こんにちはー、お疲れ様です。」

「父さんの運転手になるうとか考えてないだろうっね？」

鋭い遙のにらみに、佐山ははは、と渴いた笑いをもらす。

「それより今日はなんか仲良いんだな、おててつないで。」

「いつもは悪いみたいに言わないでくれる？」

「別にそういう意味じゃないだろう。」

ふたりの会話に余計かと思いつつも、短く息を吐いて和がつっこん
だ。

「問題を摩り替えないでくださいよ。和泉君、念書でも書いてもら
つたら？」

「切前に彼を車に乗せる行為はしませんって。」

「なるほど、いいかもしれないね。」

「破ったら松永家の運転手を辞職で。ああ、晴臣さんにも協力して
もらおう。」

「ちよつと、和ちゃん。物騒な事を言うのはやめてもらえないかな。」

「そうですね、現実味があまりないですしね。」

それよりも、もっと身近で本気で困る事をしましょうね。」

にっこりと微笑んだ顔に、佐山は寒気を覚えればあまりに恐ろしくてその内容を具体的に訊ねることはできなかった。

「ちょっと俺、書斎に張り付いてくるけど、携帯は切らないから。

絶対にここから動いちゃ駄目だよ。なにかあったら即連絡。滝山さん、お願い。」

「はいはい、わかっておりますよ、しっかりお仕事なさいまし。」

からからと笑った滝山に苦笑して、それから和をみつめる。

和は安心させるように柔らかく微笑むと、遙はふ、と目だけで笑みをつくれば

多少急ぎ足で和泉家のリビングを退出した。

「にしても優様。あんなにぼっちゃまを警戒させるなんて、和さんになにをなさったんですか。」

前に様はちょっと、と言って以来滝山は和を「和さん」と呼んでいる。

リビングのソファにてお茶を飲みくつろぐ優がそれに気付いたからか目を丸くしてふうん、と声をあげた。

今日も今日とて、彼は和泉家を訪れている。

「滝山さん、僕、コーヒー飲みたあーい。」

「まあ、そんなことおっしゃられて！ふたりきりになる時間稼ぎがしたいのでは？」

「えー、ちよつとくらいはいいじゃん。」

「優様！」

き、とにらみつける滝山を和は慌てて制止した。

「和泉君がちよつと神経質になってるんですよ。」

それだけなので、どうかお仕事してください。大丈夫ですよ万が一なにかあったとしても

叫べば聞こえるでしょうし。」

「……そうですか？優様はちよつと突飛な方ですからねえ。なるべく早く戻りますね。」

言って、不承不承といった雰囲気で滝山はふたりに振舞うお茶をいれるため

リビングをあとにした。

ふたりでそれを見送れば、やがて部屋の雰囲気はがらりと変わった。

「……本当に、もう僕が脅威でもなんでもないんだね。」

「だって優君の言うこと全部嘘だってわかつちやったから。」

「全部？」

「私が優君に惹かれてる錯覚起こしたの、和泉君が原因だってわかってたのに

わざと煽るようなことをした。」

「それは、」

「ふたりきりで会ったのも、突発的にやってきて会話したのも、

ぜーんぶ、優君の大切なひとのためでしょ？」

「……やっぱり、わかってるのかあ。」

ちえ、と口を尖らせる優に、和は笑う。

「私はね、こつ言っちゃうのは偽善ばいし嘘くさいし、やっぱり抵抗ある。」

それでも、優君には言っておくよ。

彼の大切なもの全部、私は同じように守りたい。

遥だけが好きだからって、その他を蹂躪するのはやっぱりできない。

「

「……それが僕を突っぱね切れなかった理由だって言いたい？」

「それだけじゃないよ、もちろん。自分自身でも混乱してたから。」

どうやらそういう方面だけは鈍いらしくてさ。

いや、自分限定で鈍いみたい。他人の恋愛事はそう鈍くもないんだけどねえ。」

苦笑してみせた和をどこか馬鹿にしたように優が嘲笑った。

「そんなの天然と同じくらいたち悪いじゃないか。遥がいらぬ苦勞しそう。」

「あー、それはね、してるよもう。」

「だったら別れようとかは思わないの？」

「思わないよ。」

「なぜ？」

問いかけに、和は不思議そうに首を傾げた。

「好きだから。それ以外に理由がある？」

「……とっても簡単だね。」

「そうだね。」

「……………ねえ、今はもう、ちょっと僕の気持ち信じようとは思っていないの?」

「え?それどういう意味?」

向かい合って座る優の表情を読もうと試みたがどうにもうまくいかない。

和は眉根を寄せて彼の顔をみつめるが、
優はその瞳に複雑な色をのせながらもただただ微笑んでいる。

「和ちゃんが好き。欲しい。やっぱり優としか呼んでほしくない。」

その言葉に、和は盛大なため息を吐いた。

「まあたそういう。さすがにもう無理だつてば。」

私はあなたがこういう行動に出るに至ったきっかけにも見当つけてるんだよ?」

「ええー。そんな風に言われると悲しい。」

「なんでまたここで趣旨がええるかな。それに意味はある?」

「だからさ、本当の本当に本気だつて可能性は考えてくれないの?」

「……………優君てさ、本能のままに生きてて会話成立しないかと思うと
そうでもないよね。」

頭が良いのを普段隠したくて演じてるのかとも思ったけどそれも違う。

なんにも考えてないときと考え尽くして動いてるときの二パターン
あるでしょ?」

落差が激しくて混乱するよ。」

和の言葉にしばらく驚いたのか目を見開いて固まったが
やがて優は心底楽しそうに明るい弾む声で笑った。

「すごいなあ、和ちゃん。やっぱり僕、君は好きだよ。」
「だったら、認めてくれたり。」

「だからそれもさ。和ちゃんは言い張るけど僕そんなことしてるつもりないってば。」

大体、なにをもって合格かなんてわからないじゃない。」

「でも、知りたいんでしょ？心配なんでしょ？」

「だからこそ私は優君の試験受けてる気分だったんだけどなあ。」

「なんかそんな風に断言されちゃうのもね。だってそこまで心配するのって変でしょ？」

「そうかなあ？友達とはまた違うから余計心配するものじゃない？私も親戚と仲が良いからわからなくはないよ、その感覚。」

「それを聞いてちょっと安心した。和ちゃんにそうだと思われたらやだもん。」

「さすがにそういう意味では好きだって思ってないってば。」

笑う和に、優はそう？と肩を竦めた。

「けっこういたんだよー、昔は、疑う子。」

「まあ、わからなくはないけど。優君も和泉君も、お互いがとっても大切みたいだし。」

「またそういう。」
「いやいや。間違ってるんでしょこの表現は。」

手で優の反論を制したあと、和はにっこりと微笑み自身の言葉を続けた。

「だって優君は、和泉君が身内として好きで心配で私を見定めたかったんだもんね。」

「だから、それは」

「私の中ではもう揺らぎようがない事実。あ、和泉君には勝手に言うつもりはないので。」

好きなだけ私を観察してよ。

私を好きだって言い切ったほうがなにかと都合いいもんね？無茶できるし。」

ともすれば別れさせたいくらいには思ってたでしょ？」

うふふー、と愉快そうに発言する和に、優はとうとう観念したのか長い息を吐くと
ソファに背中をあずけた。

「……まったく、君にかなう人間ているのかな。だから余計心配なんだよ。」

なんとも弱弱しい声で首を振る優を、和は珍しいものでも見るかのように

まじまじとみつめる。

「やっぱり、それが本音。」

「……少なからず、和ちゃんを好きだって気持ちはあった。」

これは信じてもらえなくてももうしょうがないかもしれないけどね。」

苦笑する優に和は困ったように笑う。

今までの会話の流れからして優はやはり純粹に遙が心配だったのだろっ。

歩けば女性が寄ってくるような見目麗しい男が初めて本気で恋をした相手。

ずっと幼い頃からそれこそ兄弟のように育ったかもしれない遙が

ともすればとんでもない女性につかまったかもしれない。

和は、その感覚がわからないでもなかった。

それこそ広末がいいように女性に騙されるとも思えないが恋愛を知った今ならば恋は盲目という言葉もある程度受け入れられる。

そのただなかにいれば、周りの忠告を聞く耳だっでどうしても狭くなるし

そうなれば自分が相手を見極めねば、と思うかもしれない。

塩澤のような女の子で本当に良かったとしみじと感じている。

優にとって、遙は兄のような弟のような存在なのだろう。

それに彼の恋愛観はなかなか危うい。

本気ではなかった事にたいして自覚があればよかったが

本人はこれまでのお付き合いをそれぞれ本気だと思っていたふしがあつたのだから。

そついった経験が皆無な和でさえ、これまでの相手が不憫だと感じなくはない。

なによりも自分が見せた一面のせいで彼が遙を心配したのだろうと和にはわかつていた。

「……僕が優ちゃんをやっていたとき。

和ちゃんのやりようがどうしても気になった。」

「男性の機微に対して、ひどく鋭い、ということだよな?」

和の言葉に、優はうなづく。

「的確な指示にけっこう寒気がしたよ。味方なら頼もしいけど……和ちゃんが敵だったら本当に怖いよねえ。」

「あははー、それよく言われるー。」

「……他人にたいしてはひどく敏感なのに、遙に触れられるだけで赤くなるし。」

どこまで本当でどこまで嘘なのかぜんぜんわかんなかった！」

「だから私にちよっかいかけたんだよね。」

「それだけじゃないよ？僕自身も興味があつたのは本当。」

だから最近はおちよつといらいらしすぎちゃったかも。

僕になびいてる風にも思えてさ。誠実なのか遊び慣れてる女の子なのか。

仮面をつけてるんならひつpegがしてやるくらいに思ってたけど

いつしか純粹に君を信じてみたくなっちゃったから。」

「……優君。」

目を見開いた和に、優は静かに微笑む。

「もう、ふたりにちよっかいかけるのやめようと思うんだあ。」

僕はね、遙のことがなかつたら和ちゃんを本気で手に入れたかった。

それくらいには好きだった。

でもね、遙から奪ってやるつもりだと思つほどには好きになれない。」

最後の言葉にすべて集約しているような気がすれば

和はようやく心から安堵の息を吐き出した。

「はああああー……。」

「あははー、ごめんねえ？もう僕も考えすぎて最近疲れちゃってえ。」

でも和ちゃんにした諸々の行為については謝らないでおくね。

それをしちゃうのは卑怯すぎるし、和ちゃんがひどく傷付いてるのもわかつてるから。

……あんなことして、僕あそこまで後悔したの初めてだったよ。」

「んー、まあ、でも、その。……優君の心を混乱させたのも私だし、さ。

確かに許すって気持ちは今のとこ持てないけど。

金輪際私に触らないでくれれば別に気にしないようにするから。」

和の言葉に優は噴出すと、前のめりに態勢をくずして腹を抱える。

「あはははは！和ちゃん、優しいんだか厳しいんだかわからないよ！あー、ほんと、遥ってばいい趣味してる。」

「……それはどうも？」

「まあ、和ちゃんはもう何も心配しないで？」

遥もずいぶんと疑心暗鬼になってると思うし、それを解消できるよ
う頑張るよ。」

「ああ、仲直りするんだね、よかった。」

「ふふふー、すごい自分勝手だけどね。遥、僕の事許さないだろ
うし。」

でもそんなの知ったこっちゃないんだあ。

だって僕は遥を捨てられないんだもん。だから心の通りに行動をす
るだけ。」

『ものすごい開き直りだな。』

優の言葉に内心で冷や汗をかきそうになりながらも、

しかし身内とはえてしてそういうものだ、と和は多少強引でも納得
した。

たとえば彩と修復不可能と思えるほどの何かがあったとしても
ふたりの縁は決して切れることなく、

お互いを大切であるという想いも消えてくれることはないだろう。

憎んだとしても、きつと憎みきれない。それが家族というものなの
だ。

和は、優と遙にはそういう種類の絆がもう出来てしまっているのだらうと考えれば

優のこの言い分もわからないではなかった。

「さあさあ、ご要望のコーヒーですよ！和さんもどうぞ。」

「わー、ありがとうございます！」

「わーい、滝山さんのクッキー！」

コーヒーそっちのけでクッキーにかぶりつく優を、滝山は行儀が悪い！と怒鳴りつける。

和はその様子を見て少しだけ噴出した。

受け取ったコーヒーの香りを鼻いっぱい感じて

和は一口それを飲みこめば、ゆっくりと瞳を閉じる。

『にしても……』

今回はほんつとうに、和泉君ばかり貧乏くじひいちゃったなあ。』

仕事中の遙に届くはずもないが、居た堪れない思いを胸いっぱいに
充満させれば

和は強くごめんという三文字を心の中で念じたのであった。

第三百三十三話「読めない彼、食えない彼女・その12」 (後書き)

すみません、ちょっと思うところあり加筆修正して再度アップしました。

そしてこれにて、今回のシリーズは終了します。

中途半端と思われる方がおりましたら本当に申し訳ありません！

もうシリアスに和と遙が衝突することはありませんが

本格的な仲直りは次回に持ち越しとなります。

タイトルの意味から考えてもここで一区切りするのがいいだろうと判断しました。申し訳ありません。

次回シリーズもよろしく願います！

第三百三十四話「仲直りのやり方（ただし学校公認カップルに限る）・その1」

大変お待たせいたしましたorz

少しでも楽しんでいただけましたら幸いです！

第三百三十四話「仲直りのやり方（ただし学校公認カップルに限る）・その1」

「ねえ、和」

「なに」

すっかりおなじみになった朝の学校名物カップルが手をつなぐ光景はしかし本人である和にとっていまだ慣れるべきものではない。それでも今はこんな方法でしか気持ちを渡す術がないのならばせいっぱいの誠意を見せようと和は思っていた。

「意地張ってない？」

「え？」

「勝負だと思つて俺に接してない？」

つながれた手が妙に冷たいように感じて和は思わず離してしまいそうになる。しかし寸前でそれを押し留めた。

隣に立つ遥を見上げてみれば、彼もその視線に気付き彼女をみつめる。止まった足をお互い動かそうともせず、しばし見つめ合う。口を開いたのは、まだ質問に答えていない和であった。

怒鳴りたいのかそれとも泣きたいのか。わからなかったがあるいは両方の感情がせめぎあっているのかもしれない。しかしそれをはつきりと意識したことでかえって彼女は冷静になる。

「ずっと、そういう風に思ってた？」

哀しげに囁かれたその言葉に、遥は先ほどの言葉が失言であったと感じれば慌てて彼女の手を握りなおした。

「和」

焦り交じりで呼ばれた名前に、和は苦笑する。ゆるゆると首を横に動かした。

「あ、ごめん。責めてるんじゃないよ。難しいなあって思って。和泉君は、いつもも本当にはつきりと与えてくれるのにね？やっぱ向いてないのかなあ……」

落ち込んだようにため息を吐いた和の発言に不穏なものを感じれば遥は辛抱できなかつたのか突然和をその腕に閉じ込めた。閉じ込められた当の本人は硬直して叫ぶ暇もない。

「向いてるとか、向いてないとか、そんなのどうだっていい」

「……和泉君？」

「ごめん、また馬鹿な事言つて。いいから、それでいいから。諦めないですつとそばにいて。離れていかないで……!!」

きつく抱き込まれた腕の隙間をなんとか這い出して、和は遥の背中に自身の両腕をまわせば、なだめるように叩いた。

「またもこんな事を言わせてしまうとは本当に自分は駄目だな、と自嘲する。」

「そんなつもりじゃなかったんだけど……あのね、だからその。どうしたらもつと和泉君みたいに上手に出来るのかなあって。私もちやんと好きなんだけどな。また不安にさせちゃった。本当だめだなあ」

「ごめんね？」と申し訳なさそうに囁く彼女に遥は首を振る。

遥は、自分でも疑問だった。

かつてないほど優しい彼女がいて、かつてないほど示そうとして

くれる彼女がいる。それなのに、遙の心は晴れるどころか靄がかかってばかりだ。

本心からやってきていることなのか、遙には和の内がみえない。そんなものは当たり前であり、彼女がよくよく言うように、お互いに信じるしかない。信じあう事ができなくなれば、そこで終わってしまうのだ。わかってはいるはずなのに、遙はずっと不安だった。

それでもなんとか微笑めば、彼女も微笑を返してくれる。そうしてまた手をつなぎなおして、和と遙は歩き出した。不安を吹っ切るように、もう一度握った和の手は確かに温もりがある。

周囲から見れば睦まじい恋人に見えるはずなのに、ふたりの胸中はそれに反比例するように冷え込んでいた。

ため息を吐く和を、2・3一同は複雑な胸中でながめていた。

ここ数日の遙と和の関係を見る限りとてつもなく不可思議な事が起こっているのは間違いない。それでも、どういった事情でそう接しているのか、訊きたくても訊ける人間はいなかった。

公立高校のこの学校は、三年に上がっても今のクラスが変わることとはない。だからこそ別れを惜しむというような気持ちはまだないが、悶々とした状態のまま2・3を解散するのがどこかクラスメイ卜達は嫌だったのだろう。二年最後の日を迎えて、いまだこの状態であることにいささか狼狽している。

誰ともなくその感情は広がっていき、ずっと傍近くで見ていた和と遙の攻防を、また見たいという思いは日に日に強くなっていった。

うんざりした顔の男が和の目の前に立つ。首を傾げながらぼんやりとその顔をながめていると不機嫌顔を見せる託斗の顔がもはや鬼の形相とも呼べるような顔になっていた。

「……どうかしたの」

和の多少おびえた顔を一瞥すると託斗はひとつ短いため息を吐い

てあごをしゃくった。どうやらつきあえ、というこらしい。和は疑問に思いつつも席を立て彼のうちろをついて歩いた。

どこに向かうのかと思えば、なにかと利用することの多い例の空き教室であった。

「あれ、託斗ここ知ってたんだ。あ、梓さんと来てた？」

にやにやと意地の悪い顔をみせながらのたまう和の頭を、託斗はあくまでも軽くだが叩く。どこか憎しみがこもっているといえなくもない動きだ。彼女にしてみたらなぜそんなことをされるのかわからない。当然、目の前に立つだけだるそうな男をにらみつけた。しかしそんな視線さえも気に入らない、という風情で託斗は呆れの表情を作る。いよいよ持って和は、わけがわからずに厳しい視線を解除すると面白くなさそうに片眉をあげた。

「クラスの連中が、うるさくてかなわん」

「え？」

ため息混じりに言われた言葉の意味を図りかねていると、託斗が苦笑してみせる。

「なぜ和泉とああなっているのか。事情を訊けとせつつかれてな。面倒だとずつと断っていたんだが……まあ俺個人としてもまったく気にならないわけじゃない。だからクラス連中の提案に乗ってみようかと思った」

「……なにもこんな日じゃなくとも」

「こんな日だからこそ、じゃないのか？修了式の日にすつきり終わりたいんだろっ」

「まあ、来年もみんな同じクラスだしね」

相変わらずなクラスだなあ、と呆れる和を、託斗は鋭い視線で見やる。

「そもそもお前も悪いだろう。毎日あんな物憂げな表情をしてれば誰だって気になる。特に我がクラスは野次馬の宝庫なんだ。事情を探られたくないなら隠す努力は厭うな」

「厳しいなあ。ま、確かにその通りなんだけどさあ……案外、かまってほしかったのかもしれないよ」

言って力なく笑う和を視界に止めつつ託斗はその目を丸くする。あまりにも珍しいその表情に和は噴出しかけたが、そんな顔をさせるほどに奇妙なことをのたまってしまったのはそもそも自分だと思えば、和は逆に憂鬱な気持ちになっていった。

「もう自分の力では解決する術がない、と？」

先ほどの言葉が他人にすぎりたい、という意味合いならばそういうことになる。託斗は問うような視線を向けて、和の胸中を探ろうとする。しかし元より彼女は、今この場で隠し立てするつもりもないようだった。肩をすくめて微笑むその顔はずいぶんと素直なものだ。少なくとも、託斗にはそう映って見えた。

「ちょっとまあ、色々あってね、そこらへんの事情は割愛するけどさ。とにかく、私が全面的に悪かったんだ。それで和泉君の信用を取り戻そうと頑張ってるんだけど……なんかうまくいかない。誠意は伝えてるつもりだけど、やり方がまずいのかなあー」

「津田には何も相談してないのか？」

ふと思い出して託斗が口にすれば、和は頬をかく。

「今回はちょっとね……広未に相談しても解決できない気がする。そもそもなんていうか改まって相談てあまりしないんだよ。お互いにふらっと会ってそのときつつく、みたいなところがあるから」

「ああ、お前らはそうだろうな。会わないときは本当会わないみたいだし」

「最後に会ってからそういえばけっこう経ってるかも。……まあ、相談してみてもいいのかもね」

「お前……相当弱ってるな」

そこまで追い詰められても周りに頼らないのか？と呆れ口調で託斗が言えば、今回は事情が事情だ、と和が首を振る。彼女いわく、自身が100%悪いとわかっているからこそ、誰にも頼るつもりはなかったのだという。それこそ自分自身で解決できないのでは、遥に対する想いを蹂躪してしまうことになる時まで考えたようだ。

「それは……そんな不誠実な事をおまえはしてしまったのか？」

「うん」

「即答で断言か。だったら責任とって別れるとか前の和なら言いそうなものだけだな」

悪戯っぽい笑みを向ける託斗の言葉は、しかしどこか真剣さも感じられる。冗談とも本気ともつかないその態度に和はなにかを観念したかのように微笑んだ。それだけで託斗はなにもかもを理解したようだったが、その瞳は先を促している。お互いに言葉数が多くはないぶん、わかってしまうことが和はどこか口惜しかった。

「本当に厳しいなあ、託斗は」

「お前の悪いところは、そこなんじゃないのか」

目を丸くする和を他所に、淡々と彼は言葉を重ねていく。

「肝心なところで伝えるべきものをひっこめる。相手がわかってく
れると驕っているところはないのか」

「……そう、なのかな。私は言葉でも態度でも示したつもりだった
んだけど」

「相手が信じてくれないんじゃないじゃ世話ないな」

「そうだねえ」

「それで？」

再度問いかけるような視線を投げかけた託斗に和は首を傾げる。

「それでって」

「俺はお前達の一部しか知らないが、俺が見る限りは和が和泉に不
誠実だと思ったことはない。更に言えば今もお前はずっと誠実であ
ろうとし続けている。それでも和泉はお前を信用していないのなら
ば、別れるという選択肢しかないんじゃないのか」

静かな彼の言葉に、和は苦笑し答える。

「またまたあ、知ってるくせに。……めろめろなんだよ私は。浮気
と死別以外じゃあ、もう別れるなんて無理」

しばしの沈黙が訪れる。急に気恥ずかしくなったのか、和は多少
頬を赤らめた。

そそくさと教室を出ようと窓際から移動する和を、託斗はぼんや
りとみつめる。

「さ、そろそろ戻らないと遅刻するね、いこっか！」

「それを言ってもやらないでどうする？」

「え」

ぼつ、と呟かれた言葉に、和は振り返った。

「誠意を見せるってというのはあらゆる面のできるものだろう。でもお前達はお互いに好きだと言いつつ仲なんじゃないのか」

「託斗？」

「恋人同士だからこそ、そうでなければ与えてやれないものを与えなければ意味がないんじゃないのか。和泉が不安になっているのはそいつの面が不足していると感じるからなんだろう」

「……………」

「お前が言う誠実さは、対恋人仕様になっているんだらうな？」

託斗の言葉に、和は目を見開いて固まった。

恋人仕様。そんなことを考えたことがなかった。ただ彼に悪かった。どう謝罪してよいかわからない。自分の出来得る限りで気持ちをみせようと、誠意をみせよう、とそればかりで。

好きだと繰り返し言うだけでは足りなかったのだろうか。いや、義務のように言っているのではないかと思われてしまったのは、それこそ意味がない。和は改めて、目の前の男へと視線を向けた。

「…………でもそういうのってどうすりゃ出るもんなの？」

「そういうのはお前の恋人が得意だろう。ご教授願えばどうだ」

「意味ない。激しく意味がない！」

「わからないじゃないか。案外そんなもんで満足するかもしれない」

「えー？」

「まあ、なんでも言葉にしてやるのがいちばんじゃないのか」

「！」

「お前は勤が人一倍働く。だが常人はお前の半分以下の読解力しかないだろう」

「んなことは」

「あるんだよ。というかそのくらい思っておけ。じゃないと必要なことまでお前は言わなくなる。和泉は思った以上に繊細な男みたいだしな」

言い得て妙だ、とうなずく和に、託斗は苦笑しながら彼女の後頭部を小突く。

あいた、と思わず声を上げれば目の前の彼へ涙目で視線を寄越す。どうやら今回の打撃は少々効いたようだ。それでも、目の前の男を睨もうとは和は思わない。彼が今どんな心境であるか、少なくとも理解しているつもりだったからだ。和は多少意地の悪い笑みを浮かべて、友人である男を見やる。

「託斗、キャラじゃないのにずいぶん無理させちゃってごめんね。

今はきつと羞恥心でのたうちまわってるんだよね？ありがとう」

「……っそういうところは本当に和泉に同情するよ」

「はっはっはー。私とお付き合いをしなくて本当によかったね？」

「まったくだ。梓は可愛くて良い」

「あんたそういうところはさらっと言ってくせに。わからんわー、羞恥ポイントわからんわー」

「うるさい、いくぞ」

うながされ教室へ戻る頃には、どこか和の心は穏やかだった。

『なんでも、ねえー……どこからどこまで言えばいいんだろ。というか私、どこまで隠してどこまで言ってたのかなあ。ってここでそんなこと考えるのがそもそも駄目なのか』

ため息を吐いて自嘲する。

素直になっっているつもりだった。全て伝えているつもりだった。

しかしそれでも、肝心な、本当に伝えるべき言葉は伝えられていな

かったのかもしれない。そう考えてみれば、和はこれまでの自身を反芻してはどこか恥ずかしくなる。

遙を安心させるどころか、猜疑心で覆ってしまっただけで意味がないというのに。

「じゃあ、お前らきつちり勉強しろよー。これから受験まっしぐらだからな」

意地悪い担任の声で、和は我に返った。通知表ももらい、すっかり気が抜けきっていたクラスメイト達に辛辣な言葉を吐いた長島は、生徒達からブーイングの嵐を浴びせられている。

「えんちゃん、ひでえ!」「思い出させないでくれよお!」「もう言われなくてもずつと勉強漬けだよ!」

生徒達から悲痛な声があがる。和は推薦で行けるところへ行くつもりなので、受験をするつもりもなく気が楽だ。遙もそのつもりらしく、高校最終学年になるうふたりはそついった面でぴりぴりする事はない。周りの人間はそろそろ志望校も定めて、本格的に緊張感が高まる時期なのだろう。

そんなクラスメイトを相変わらずの傍観者気取りで見ていた和は、ふと視線を前にやれば担任がこちらをじつと見ていることに気がつく。どきりとして和が固まれば、長島は歪に口角をあげて彼女をながめやる。

「笹森ー。お前今日ちょっと話すことあつから残れやあ」

有無を言わせぬ迫力と、けだるそうな態度に和はため息を吐いて短くはい、と返答する。それに満足した長島は終了の号令をかける。とあーめんどくせー、とのたもつた。

『……面倒なら呼び出さなきゃいいのに』

憂鬱な心を隠すこともせず、和は思うままに目の前の担任に胡乱な瞳をむけていた。

第三百二十五話「仲直りのやり方（ただし学校公認カップルに限る）・その2」

またも例の場所に移動するのかと思えば、和は少し前を歩く男の背をにらまずにはいられない。2年の終わりというデリケートなこの時期に生徒指導室に呼び出されるとはどういうことなのか。

和は色々な事に考えを巡らせて見たがいまいちぴんとこない。

最近は授業を抜け出すこともなければ別段目立った動きをみせているつもりもないのに、目の前の担任が何を考えているのか和にはさっぱりわからないでいた。

「おーおー、わかりやすく「腑に落ちません」って顔してんなあ」

目的地に着かないうちに振り返られて、和は仰天する。

すっかり油断して表情をこれでもかと素直に出していた為ばつちり長島に見られてしまった。にやにやと歪に口角を上げつつからかうように笑う男に今更取り繕っても仕方がなからう、と和は改めて双眸に力をこめる。

「一体どういう用件ですか？ここ最近は授業を中抜けしたりしていないはずですが」

和の質問には特になにも回答することはなく、長島はどこか気味悪い笑顔をまた作り、踵を返して歩みを再開した。結局はとにかくついてこい、ということらしい。

無言で開け放たれた生徒指導室の扉は鍵が閉められていたようで長島が入る前に何かを操る動作と開閉音が聴こえてきた。

遙は指導室にいないのだという事実がわかったぶん安心したが、そうなつてくるとますます呼ばれられた理由は見当がつかない。それでも出入り口で往生際悪く突っ立っているわけにもいかず、和

は視線で促す担任を一瞥すると扉を閉め向かい側の席に腰を落ち着かせた。

和が座つたのを確認すると、長島はちらりと和の顔を見てそれから体の力を抜いたようにため息をついて足を組む。これだけみるとチンピラにみえなくもない。おまけにだらしなく背中を椅子の背もたれへとあずければよりいっそうけだるい雰囲気の流れてくる。ついにその態勢のまま、担任教師は教え子へと言葉を投げかけた。

「なあ、笹森。俺なあ、教師ってべつにそう特別な職業じゃねえと思っただよなあ」

「……と申しますと」

はい？と問い返したい思いもあったが、そんな疑問符を放つたところで彼には時間の無駄であろう。結局、話を素直に聞くことがいちばんの近道だ。

和の返事に長島は口角だけで笑んでみせる。

「公務員だけどさ。金もらって仕事してるわけだろ？今こつやつてるのもさ、別に善意とか悪意とかそういうんじゃないただ純粹に職務を全うしてるだけつつうか」

「別にそれでいいのではないのでしょうか」

「だろ？それでも教師か！とか言われるところ、教師って人間じゃないわけ？とかたまに思っただよな。神様かなんかと勘違いしてんじゃないかねえかつてな」

「ああ……まあ、そういう感覚はわからなくはありません。一般企業で働く会社員と同じように扱うというのは感情的に難しいですよ」

「ある程度はさ、仕方ないと思うよ。でも人当たり良い教師だつて心んなかで面倒臭えくらい呟いてるんだって。そこどっかでわかつてるのとわかつてないのとじゃ大分違うだろつ」

教師の愚痴とも思える話が始まってしまい、和は内心で首を傾げる。本当に彼は何がしたいというのだろう。

「……先生。私をここに留めなければいけない理由でもおありなんですか？」

和にとってはまるで思いつかず消去法で導き出した結論であったが、どうやら凶星であつたらしい。みるみるうちに眉間に皺を寄せた長島は小さく首を振った。

「だからお前可愛くねーんだよな」

「いやだって。雑談する意味がわからないでしょう」

「思つても言うなよ。俺だって特別やりたくてやってるわけじゃねえ」

「だつたらやらなきゃいいじゃないですか」

いかげん真意が見えないことに苛立ちを覚えた和は少し険のある声を発する。そのどこか面白いのか彼女には理解出来なかったが、目の前の男は立派な大人だというのに面白そうに顔をにやつかせた。

「俺だつて人並みに自分のクラスには愛着もあるってことだよ」

「はあ？」

素直な和の返答に、長島はついに声を出して笑った。

生徒指導室にて長島が和と不可思議な時間つぶしをしているあいだ、何故か遙は教室にて浩平につかまっていた。終業式というのも

あつて今日は早々に帰る者が多いらしく教室にはもうほとんど生徒の数が無い。遙は不機嫌顔を隠す事もなく、自身の席に頬をくっつけ見上げた瞳で隣に座る親友を睨んでいた。

「綺麗な顔が台無しですよ遙さん」

「……気持ちの悪いことを言うな」

静かなそれでいて低いその声に浩平は呆れたような表情を見せ、やがてひとつため息を吐く。

「お前さあ、ここ数日ただ俺が被害被ったかわかってんの？ いかげん俺をストレス解消の道具にしないでほしいんですけど」
「別にストレス解消の道具になんかしてないよ」

意外な即答に目を丸くした浩平は、目の前の男にともすれば感動すら覚えそうなところであった。しかし次に放たれた言葉を耳にした瞬間、浩平はがくり、と背もたれに体全体をあずけるようになっておれた。

「ストレス解消されないもん、お前どんなに痛めつけても」

衝撃的な発言に全身の力が抜けた浩平は、その態勢のまま視線だけを遥だけにうつす。

「何があつたのかっていう具体的な理由はまあ言いたくないならいいけどさ。なんでこんなことになってんだよ。笹森チャンはどうしてお前の命令に絶対みたいになつてんの？」

「……別に、俺が望んだわけじゃない」

静かに放たれた言葉に浩平がふぬけた全身をやっと持ち上げれば、

椅子にきちんと座りなおして隣に座る親友に身体ごと向き直った。

「だったらやめればいいんじゃないの？」

「和が、気がすまないって言うんだよ。そこは……俺のせいなんだよな、と思う」

「？ 笹森ちゃんが望んで今の状態にあるってこと」

浩平の言葉に、遙もやっと机から頭を離すとしかしけだるそうな雰囲気は持ち直すこともなく椅子にだらしなくもたれては細い息を吐き出した。

「望んだっていうと語弊があるかなあ。和は……俺に対して申し訳ないって気持ちだけで今動いてるんだよ。だから俺は、それがうれしくないんだと思う」

「なにか謝らなきゃいけないような事を笹森ちゃんがしたと」

その言葉に少し考えた様子の遙であったが、やがてゆっくりとうなずいた。

「まあ、そうなるかな」

「ごめんなさい、だけじゃ駄目だったの？」

「口では……それで終わりでもいいじゃないかって言ったんだけど。感情はついていかなかった。和はそれを見抜いたんだよ。だからなんでも俺の言う事をきくっていった。それで自分の気持ちを示したって」

遙の言葉に、浩平は眉を顰める。

和に対しては世界一弱いと言ってもいい遙だ。その彼が口先だけでしか謝罪を受け入れられないような出来事がふたりの間に起こってしまったというのは一体全体どうしたことなのだろう。ともすれ

「これは浩平が思っていたよりもずっと深刻な事態なのかもしれない。」

「ひょっとして、優ちゃん？」

その一言で、遙の温度が一度下がったような感覚になる。びりびりと伝わってくる空気は間違いなく殺気を含んだそれであった。

「まさかっわ」

最後まで言う前に、遙が浩平の顔面をあらん限りの力で叩いた。開いた手の平の破壊力たるや相当のものだったようで、浩平は言葉を発する事もできずに顔をおおって震えている。

「和に限ってそんなことありえるわけないだろ。……ただ、否定しきれなかった様子はあったけどね。それでも、気が付いたら立て直してきつぱり突っぱねてるみたいだったけど」

「だったらいいじゃん。そもそも否定しきれなかったのだって遙の身内だからでしょ？」

まだ涙目のまま真っ赤になった両頬をさすりながら放たれた浩平の言葉に、遙は眉を顰めて返事をする。それを察した浩平が呆れたように肩を落とした。

「お前まさか、気付いてなかったのか？……それじゃ笹森ちゃんがかわいそうだよ」

「なにがだよ」

不機嫌に顔を歪ませている遙の頭頂部を、ついに我慢出来なくなった浩平はお返しといわんばかりにちからいっぱい叩いた。今度は

先ほどの浩平のような状態になった遙をしてやった張本人は涼しい顔で続きを話し始める。

「まーくと遙、超中良さそうだったじゃん。そもそもけっこうな信頼関係がなきゃあんな事件にも巻き込まれなかつたらう？お嬢ちゃん的一件があつて以来わかつてたはずじゃないのか、笹森ちゃんがお前だけじゃなくお前の環境ごと遙の事を大切にしてくるって」

お嬢ちゃん、とは実花のことだ。浩平は時折彼女をそう呼んでは皮肉っぽい顔を浮かべる。たいていこの呼び名を口にする時、彼の中には実花に対しての処理しきれていない悪感情が渦巻いているようだった。

そんな浩平の言葉が耳に入っているのかいないのか、遙は呆然とした様子で前を向いたまま固まっている。しかしきつと、声が届いているからこそこんな反応を示しているのだろう。それがわかつているからこそ、浩平は遙をじっとみつめるだけで次の言葉を発することはしなかった。

やがて言葉にならないうめき声を発しては、遙が机に突っ伏した。ぐう、うあ、など意味を成さない悲鳴のようなものが数回聞こえ、耳にした浩平は苦笑する。

「俺、最低じゃん。……拒否しきれない最大の原因で俺だったってこと？」

「だろうねえ。決定打の理由になりたくなかつたんだらうな。遙が笹森ちゃんのこととだけ好きなのか、笹森ちゃんは多分これでもかかってくらい理解してる。だからこそ自分のせいでお前の大切なものが欠けるなんて我慢できなかったんじゃない？笹森ちゃんが本気で拒絶すれば、遙は本気で優君を排除しなきゃいけないものもねえ」

「……冗談で済ませられるレベルにしてくれてたんだ。和が。……」

あああもっ！」

「でも途中から本気で拒否ってたんだろ？それはなんでなんだろうね」

「多分、それも俺が原因だと思う。」

遥は自己嫌悪に陥りそうになりながら、なんとか思考を巡らせていた。

あるとき遥が深く傷付いたと、彼女は感じたのだろう。そうして彼女の中で優先順位が変わった。拒否しなければ遥自身が蔑ろにされてしまう。その事実が気が付いた和は、優との仲を保つことよりも遥にきっぱりと対応している自分を見せようとしてくれていたのだ。

でも、と遥はそこで眉を顰める。

つまりはそうしななければならないほどに、優の和に対する態度が露骨なものになってきたということなのだろうか。しかし遥の記憶にあった最後のふたりはどこかが変化して、収束にむかっているとさえ感じた。それこそきっぱりと彼女を諦めるというようにもみてとれたのだ。

「優君が傷付くのも、いやだったのかもね？」

浩平の言葉に、遥はえ、と短く声をあげる。

「だからさ、遥が大切にしているまーくんを、自分が傷付けるなんて冗談じゃないって笹森チャンは思ったんじゃないの？だから強く言えなかった。」

「……………」

彼女は、確信を得たのだ。優が、和に恋などしてないという事実を知った。だからきつと、自身の拒絶で彼が傷付かないと思った。

何層にもがんじがらめにしてしまった理由がまさか自分であったという考えにはまるで思い至らなかった遥は、和の胸中を思って愕然とする。

と同時に、目の前の男へと鋭い視線を投げかけた。

「なんでお前、そんなに和の気持ち理解できてんだよ」

「お嬢ちゃんの一件のとき、俺も色々と協力したからねえ。笹森チヤンの考えはそのとき聞いてたし。だから今回もそうなのかって思っただけ」

口角を上げて笑う浩平のその顔がとても憎らしかった。いつかみた松永邸での動画を思い出しては、遥はその考えに徐々に自信を持ち始める。それでも、自惚れではないかという心は抜け切らない。

今回和が用いた方法は、結果的には悪い形であらわれてしまったのだろう。遥は前よりもっと、とすれば和の心が自分に傾いているのかがわからないでいた。こうまでしてくれる彼女を疑うのはひどくせつない。それでも、同情心や責任感でやっているのではないか、という考えが頭をもたげるのだ。

吐いた息にのって表に出された心の翳りは、きつと浩平にもわかったのだろう。片眉をあげて面白くなさそうに遥をながめている。

鬱々とした気分になりそうになっているとどこから響いたのか、遥の耳に音が聴こえてくる。一瞬混乱したが、それが教室に備え付けられたスピーカーから流れたのだとすぐに気が付いた。

施設などで放送がある際にそれを知らせる例の効果音が教室内、ひいては学校全体に響き渡って、残っていた少ない生徒達は皆何事かと音源のスピーカーを凝視した。

『そもそもお前も悪いだろう。毎日あんな物憂げな表情をしてれば誰だって気になる。特に我がクラスは野次馬の宝庫なんだ。事情を探られたくないなら隠す努力は厭うな』

スピーカーから放送された音は、どうやら誰かの声らしかった。男の声だ。ここの生徒だろうか、とぼんやり考えていた遙は、しかしどこか聞き覚えのある声だと内心首を傾げる。

『厳しいなあ。ま、確かにその通りなんだけどさあ……案外、かまっつてほしかったのかもしれないよ』

次いで響いた声に、遙はぎよつと目を剥いた。誰あろう彼が、間違えるはずもない。この男の頭の中は、ただひとりの愛しい恋人でいつだって頭がいっぱいなのだ。

最愛の恋人である笹森和の声がなぜ校内全土に響き渡っているのか、その理由を考えてもまるで見当がつかなかったが、そうしてみると先ほどの声の主がわかった。託斗だ。一体いつ交わした会話なのかはわからないが、どうやら遙にとつて有益な情報がこの先に待っていると思えば、遙は一言一句逃さないようにと全神経を集中させた。

『もう自分の力では解決する術がない、と?』

『ちよつとまあ、色々あってね、そこらへんの事情は割愛するけどさ。とにかく、私が全面的に悪かったんだ。それで和泉君の信用を取り戻そうと頑張ってるんだけど……なんかうまくいかない。誠意は伝えているつもりだけど、やり方がまずいのかなあー』

『広末には何も相談してないのか?』

『今回はちよつとねー……広末に相談しても解決できない気がしてそもそもなんていうか改まって相談てあまりしないんだよ。お互いにふらつと会つてそのときつく、みたいなのがあるから』

『ああ、お前らはそうだろうな。会わないときは本当会わないみたいだし』

『最後に会ってからそういえばけっこう経ってるかも。……まあ、

相談してみてもいいのかもね』

『お前……相当弱ってるな』

託斗の言葉に、遙の胸がずきりと痛む。進んでいく会話は、段々と遙には辛いものになっていった。彼女をこんなにも悩ませてしまっているのは自分だと痛感すれば、遙にとってはこの上なく嫌な話だ。

『俺はお前達の一部しか知らないが、俺が見る限りは和が和泉に不誠実だと思ったことはない。更に言えば今もお前はずっと誠実であろうとし続けている。それでも和泉はお前を信用していないのなら、別れるという選択肢しかないんじゃないのか』

スピーカーから聴こえた言葉に何人かが息を呑む。会話で、もう女生徒は笹森和だとほとんどの生徒は気が付いているだろう。教室に残った生徒達は、ちらちらと遙とスピーカーに視線を動かしている。

遙はきつと学校中の誰よりも託斗の言葉に心臓を跳ね上がらせたことだろう。訊きたくて、けれどもいちばん聞きたくなかったのがこの問いだったのだから。

しかし次の瞬間放たれた言葉に、遙は今度こそ思考を停止させた。

『またまたあ、知ってるくせに。……めろめろなんだよ私は。浮気と死別以外じゃあ、もう別れるなんて無理』

隣に立つ浩平は、自重することもなく口笛を吹く。緊張から一転した空気に他の生徒はついていけない者も多かったが、廊下では何人かの歓声が聞こえた。ひよつとしたら2・3の生徒かもしれない。

「おーおー、言うねえ、笹森」

「……………」

今ならば羞恥心でどうにでもなれる、というくらいの心境で、笹森は顔をおおっていた。しかし隠れていない耳からは、どれだけ彼女の身体が赤く染まっているのかがよくわかる。というかおおっている手間でも赤みがさしているので、きつとおおげさでもなんでもなく和の全身は真っ赤になっているだろう。

さすがに今回は混乱して二の句も告げない和をみつめて、内心かわいいという単語が過ぎってしまったことに軽く後ろめたさを覚えながらも、しかし重ねた年月のおかげで彼はそんな心のうちを微塵も露呈することなく意地悪く笑ってみせた。

「今回、2・3に頼まれごとされたのは鈴木だけじゃねえんだよ。あいつが会話録音したのは確かなんだけどな。放送室を使うには許可がいるだろ？それで担任の俺に泣きついてきたんだよ。2・3全体と和泉と笹森のファンクラブの連中にな」

「……………にしたって、そんな私的な事に使う許可なんておりるはずないでしょ!？」

半ば怒鳴るようにして叫んだ和の顔には、うつすらと涙がたまっていた。それをみてさすがに気の毒だと思った長島は苦笑する。

「もちろん許可なんておりてない。あいつらが勝手にやったんだよ。放送室の鍵を拝借して勝手にお前らの会話を放送室から流したんだ」

「……………その鍵を渡したのは先生でしょう」
「いや？あいつらが鍵を持ってっただのは見えたけど注意するのが面倒だったんでほっといたんだ。まさかこんなことに使うなんて思わなかったし？」

「つまり、先生は担任として生徒をかばうつもりはないけどかといつて処罰をするつもりもないということですよ？口裏合わせて表

立って叱るふりをすることを引き受けた」

ぎろり、とにらんで和が言った言葉に、長島はにや、と笑んだ。

「だってそれがいちばんラクじゃねえか」

「この不良教師！」

思わず本音で怒鳴ってしまった和に、なおも面白そうな顔をしたまま長島は言葉を続ける。

「それより笹森、いいのか？ここにいて。和泉がここに辿り着くの時間の問題だと思うが」

長島に指摘されてようやく気付いた和は、人前でなにをされるのが想像するだけでも怖くなる。慌てて彼女が余裕なく指導室の扉を開いたが、きちんと失礼します、と言葉を添えて退出したことに長島はくつくつと忍び笑いをもらった。

第三十六話「仲直りのやり方（ただし学校公認カップルに限る）・その3」

指導室を飛び出した瞬間、何者かに和は腕をつかまれた。

驚きに声にならない悲鳴をあげ、しかし次の瞬間には想定していた男ではない事に気が付く。

「広未い!？」

思わずあらん限りの声でその名を呼べば、ぺしん、と和の腕をつかんだままに、空いた手で彼が和の頭頂部をはたいた。

そのまま無言で和を引つ張った彼は、どこに連れて行くのかと思えばあるうことか和を男子トイレへと押し込んだ。さすがに一瞬躊躇したがうかがうように広未をみつめれば視線で入れと言っているのがわかって仕方なく和は広未に従った。

「しばらくぶりだな」

口角を上げて笑うその表情が、今一体何を考えているのかわからなければよかったのに、と和は思う。

「……んなに怒らなくてもいいじゃん」

唇を尖らせて言う和に、広未は瞳を眇めて幼馴染を見やる。

「こんなになるまで何も言ってこないとは思わなかった。自己完結してすべて自分で処理しようとするのはお前の悪い癖だ。ま、女性は往々にしてそういうところがあるがな」

「女性でくくるなっつもの。……なーんで、あんたの連絡先まで知ってるのさ2・3の連中は」

「学校に直接やってきた。津田広末さんはいますかと校門で何人も人間が声をかけていた。俺は生まれて初めて深い羞恥心を抱きそうになったな」

その言葉に和が顔を顔で覆う。形容するとあちゃあ、という感じだ。広末の今抱いている怒りの根源は和であるものの、きつとここまでの経緯含みで今彼はここに立っているに違いない。まったく団結力の強いクラスメイトであっばれた、と和は感心するやら呆れるやらであった。

「和」

静かな声で名前を呼ばれ、和は自然と背中を伸ばして姿勢を正した。まっすぐに広末を見つめ返す。

「お前、今何を考えてる？」

「なにして」

「遥君が何を思ってるか。お前がしてしまった行為で彼が何を感じたか。お前はそれをわかっているんだよな？」

広末の言葉に、和は今までの自分を反芻する。色々なものを今まで見落としてきた。結局は手段が目的に取って代わり彼の心を失いかけている。間違いに間違いを重ねて、ひよつとしたら遥は和をうとましく思っているのかもしれないと考えれば、心が凍りそうだった。

「……気持ち伝えたいなら、ただ単にそうするべきだった。方法とか、理由とか、そんなことばっか考えてた。理屈じゃないんだって、彼を好きだと思ったとき私わかったはずだったのに」

孤独と恋をしていた。和はひとりが好きだった。だからこそ他人を受け入れず、流れるままに生きてきた。しかしそれは彼と恋人になる前の話だ。

笹森和は他人を受け入れた。その心に入る事を許可したのだ。そこで発生する今まで彼女が不利益だと感じていたあれこれは、存外悪いものではなかった。どころか、たくさんのものを与えてもらった。だからこそ、本当ならば自身で解決しようとする根性はみせるべきではなかったはずだ。

情けない姿も、格好悪い姿も、彼は嫌というほど見せてくれた。それに応えられずに何が恋人なのか。弱いところも、自分じゃわからない気持ちも、すべて彼に伝えるべきだったのに。

和がぼつりと呟いた言葉で、広末は安心したように微笑んだ。

「なんだそこまでわかってるんじゃないか。なら、逃げる理由はないな？」

「うっ」

広末の指摘に、たまらず和はうめき声をあげる。

今までの条件反射か、和はこのまま遥から逃げようと足を動かしていた。しかし本来ならば何をすべきかなど、彼女自身わかっているはずだ。今すぐ彼に会いに行くべきだという事実を捻じ曲げて、羞恥心を優先しようとした彼女はやはり恋に恋する人間にはなりきれないらしい。

「だってさー、見世物じゃん……」

「結構なことじゃないか。余程のことがない限り、在学中は別れるなんてなかなかできない」

「あんたね、人事だと思って……」

がくり、とうなだれた和を見ておかしそうに笑う広末だったが、

しばらくすると静寂を破る音が室内に響いた。慌てた様子で鞆を探る和を、広未はながめる。どうやら携帯電話の着信音を切っていたらしい。彼女にしてはわかりやすい失態で、やはり相当まいつていたのだな、とその心中を察した。

「……出ないのか？」

取り出した携帯電話をながめて固まる和の手元を広未が覗き込みながら訊ねる。しかし訊いておいて、なぜ出ないのかなど予想がついている。着信名を見るとやはりだった。噂をすればなんとやらだ。広未は呆れにも似たため息をひとつ吐くと、彼女の右手から携帯電話を奪った。和が驚愕に目を見開いた時には、もうすでに彼が受話ボタンを押してしまっていた。和は狼狽すると同時に、どこか観念している自分がいることにも気が付く。

「もしもし遥君？責任もって俺が和を届けるから校舎の外で待っていてくれるかな」

一方的に言っつて、広未は電話を切る。逃げられないように和の腕をつかむことも忘れない。和は眉間に皺を寄せながら、抗議の目で彼を見た。言いたいことはじゅうぶんわかっている。

「だから言っつたろう。どうせならとことん見世物にでもなんでもなれ」

「あーんーたーなあ！」

「校内放送であんな恥ずかしいせりふ流されたんだ。いまさらだろ」

「ちよつと、忘却の彼方に捨ててしまおうと頑張った私の努力を無駄にすんな！」

「卒業するまで蒸し返されるだろうから諦める。むしろ卒業しても

伝説になりそうだな」

くつくつ笑う広末といっしょにトイレを出て、和はぐうの音もないといった風情で押し黙る。確かに彼の指摘通り、卒業してなお語り継がれてもおかしくはない大事件だ。野次馬根性旺盛なのはひよっとするとこの学校の風習なのかもしれないし、自然そういう生徒が集まるのかもしれない、と和は思った。

『公立高校に推薦枠なんて作らなきゃよかったんだよ。そしたら教師が面接で趣味の子を集めることだってなかったはずなのに』

正直、成績に基づいているはずなのでキャラクターで推薦枠を奪取した人間はいないと思うものの、和は無理やりにも悪態をつかねばやっていられないという気分だった。それに、確かに面接という項目がある以上、一定数は似た生徒が合格するという傾向も100%ないとは言い切れない。ここが私立高校ではなかったことが唯一和にとっては救いだっただ。

彼女の勝手な印象でしかないが、私立高校のがどちらかという和学校の色というものが濃いように思う。恐らく校則が厳しいというものひとつの要因であろうが、そうではなく理屈では語れないそういったものを和は感じるのだ。物語の読みすぎなのかもしれないが彼女にとっての私立とはそういうイメージがあった。あくまでも想像の産物でしかないが。

追い詰められると至極くだらない事柄をたらたらと考えるのは彼女の逃避癖だが、広末もそれはよくわかっている。意識を飛ばした彼女の肩を叩いて、覚醒をうながした。

気付けば、眼前に広がる景色はもう昇降口だ。和は小さく首を傾げながら状況を把握し、頭が理解したときには心の準備が出来ていないと狼狽する。

しかし結局は意気込もうが呆けていようが、ここまでの道のりで準備などできるはずもない。最近が目立つのがもつとも嫌いだという自分のプロフィールに疑問を抱き始めてきた。公言もしておいてなんだが、説得力がまるでない。ここ一年のことだとはいえ、彼女は自身が校内で突出してしまった存在だと十二分に理解している。しているからこそ、開き直るしかないとも最近諦め始めていた。

まさに、開店休業を返上しようというわけだ。

そこまでの決意を果たして彼女はできるのか。それはわからなかったが、とりあえずのろのろと靴を履き替えていけば和は広未に後頭部をはたかれた。そう何度も頭を叩かれては大事な何かを忘れそうだ。それでも多少頭をさすっただけで、和は罵詈雑言を発することもなく無言で前を見据える。震えそうになる足に薄ら笑いを浮かべながら、彼女はその一步を踏み出した。

『拒絶されるのが怖いわけ？馬鹿だな……』

くつ、と意地悪い笑みを浮かべた和の横顔を、広未がみつめる。気付けば彼もそっくりな表情を浮かべていて、そのまま昇降口から外に出れば周りからすれば双子と見紛うほどだ。それをふたりが自覚していないのはどこか面白い。お互いに中身は似ていて外見はまるで似ていない、というのが彼らの見解であったが、仕草や表情が似れば結局は外見もそれに追いつくように似かよるものではないのだろうか。

周りの人間がふたりの表情に息を呑んでいるのを自覚することなく、どこか和は雑音が遠ざかっていくのを感じていた。

何度断つても、突っぱねても、拒絶しても彼は向かって来た。それなのに一度でも拒否されるのが怖いと感じる自分はひどく臆病だ。臆病で、なにもかも上手くできずに、不器用がすぎる。

自嘲しながら、大好きなあの曲の歌詞のようだと思いつながら和は自身をとらえる視線に応えた。あのフロントマンのように自分も不

器用なのかもしれないが、まだ若い分そこまで捻くれなくて済むかもしれない。

彼女が苦笑すれば、少し前にいた遥の瞳が不安気に揺れる。それを見た瞬間、和は心が揺れた。

走り出した足はなぜなのか。説明できない。だから感情なのだと、和は痛感する。

半ば突進するように遥の懐へとおさまれば、和は堪えきれない風情で背中に腕を回した。抱きつかれた張本人である彼女の恋人は、目を丸くして固まっている。空中に腕を上げたまま情けなく視線を泳がせる遥をみて、広末が苦笑した。

「押しでも負けたんじゃ勝てる所がゼロになっちゃうじゃん、なさけないの」

いつの間にか広末の隣に立った浩平が、あーあ、と笑って発言すれば、広末は苦笑して首肯する。元々、どちらかといえば遥は負けているのかもしれないが、目の前の光景をみつめると浩平はやはり情けなさをどこか覚えてしまう。しっかりとしろよ、と心の中で親友を叱咤する。広末もきつと、同じように和を胸中で想っているに違いない。

時間が止まったかのように遥には感じられていたが、そんなことはなく針は刻み続けている。和が抱きついたまま恋人の胸に埋めていた顔をゆっくりと持ち上げれば間抜けにもそれでようやく地球が止まっているわけではないのだと遥は理解した。

「赦してほしいわけじゃない。謝ってほしいわけでもない」

大切な恋人の瞳をみつめたまま、和はただそう紡ぐ。

すれ違い、傷つけてしまった。自分の言い分もあれば、遥の言い分もたくさんあるはずだ。けれども和は、今このときそれらすべて

がどうでもいいと思った。とにかく収まりきらない気持ちを、彼に渡したくて仕方がなかったのだ。

「遙が好きだから。もうどうでもいいよ、遙が私を嫌いでもなんでも。だから、ごめんね」

真っ直ぐに伝えたそれを、彼がどう感じたのか。拒絶したければすればいい。今度は自分が追いかければ良い。ただ自分らしく、彼に想いを告げれば良い。そんな簡単なことになぜ今まで気付かなかったのだろう。和はこんなにも遠回りした自分を心底馬鹿だと思えば、苦笑する。

一瞬躊躇して、和は深呼吸する。この言葉を伝えようと思うと、どこか？くさい。それでもせいっぱい彼に聞こえるように、と心中で祈らずにはいられない。目を閉じて、そうしてゆっくりと開けば、見上げた遙はまっすぐと自分をみつめていて、和は思わず極上の微笑を浮かべた。

その顔のままに、彼女はいちばん伝えたかった言葉を音にのせる。「愛してる」

静寂があたりを包んで、しかし次には誰かがごくり、と唾を飲み込む音が聴こえる。それもひとりではない。皆が、次にくる遙の動向に注目しているのだ。それは和も同じだろう。泣きそうな顔をしながら不安気に瞳を揺らす彼女を、彼はどんな心境でみつめているのか。

気まづくなつて、いかげん縋りつくような格好はみつともないだろうか、と和は背中にもわしたそれを外そうと両腕を少しだけひく。しかし瞬間、ものすごい力でそれを阻まれた。

彼女の腕が完全に退避する前に、今度は遙が和の腕ごと彼女を懐に抱え込んだのだ。

驚愕に目を見開いて固まる彼女は、それでも遙から瞳をそらすことなく向き合っている。先ほどとは打って変わって彼の表情に力がかもっているのが和には見てとれた。しかしその意味までは察することができずに、小さく首を傾げる。

それを見守って、遙が小さく空気を揺らしながら微笑んだ。

なにも身構えなかった自分は完全に油断していたとわかっていても、さすがにやりすぎではないのか、と後々言えずにはいられなかった。遙が施したそれは、あまりにも強すぎた。

言葉や表情に、徐々に彼の中にたまった熱は放出の時を今かと待っていた。それなのに愛しい恋人は次から次へと可愛い声を上げ続ける。すべてが浸透して彼の中に解けたときには、とっくにその許容量は限界を超えていたのだ。

「!?!? ……んっ」

思わずあげてしまった声は、小さな悲鳴のような嬌声のようなそれだった。

両腕で抱きしめられていたはずだったのに、気付けば遙の左手は和の後頭部に固定され、特別唇を引き結んでいなかった和はまんまと遙の侵入を受け入れてしまった。

端的に言えば衆人環視のど真ん中で、和は遙に口付けを施されていた。

和とて、自らおさまった居場所だ。そうされるのが嫌なわけではなく、むしろ喜びすら覚える。どこるか、キスくらいはされてもいいという心積もりだったのだ。

しかしそれはあくまでも、可愛らしいものであって、見ている人間がいやらしさまで感じるほどのものなどさすがに受け入れる趣味はない。

どんどん深くなる愛撫に、和は目の前がちかちかする。唇を食まれ、口腔内をあますことなく舌で蹂躪されればそれも当然である。

荒くなる息遣いや響く水音に、忘れていたはずの羞恥心が一気によみがえれば、必死で彼のそれを拒絶しようと唯一自由な右足を浮き上がらせる。入らない力をなんとか呼び起こして遥の左足にそれを振り下ろした。

痛々しい音が響き渡り、遥がやっと覚醒したかのように動きを止めた。しかしあまり痛みを感じていないのか、目だけで笑えばそりりと舌を後退させ、最後にちゅ、と音を立たせて和の唇に吸い付いた。

口角を上げて微笑む彼の真意が見えてこず、和は赤く染まった顔のままに彼をみつめる。

「だめだよ、離れたりしたら。もう逃げないんでしょう？追いかけてきてくれるんでしょう？」

「！ 和泉君」

「遥って呼んでくれないの？ねえ、知ってた？ずっと前から俺はそうなんだよ」

微笑んだ彼の顔に眩暈を覚えて、和は言葉を嚙む。それでも遥の声を逃したくなくて続きを促すように彼をみつめ続けた。そんな彼女が愛おしくて仕方がないのか、遥はますます笑みを深める。

「俺も、愛してる」

遥の言葉を聞いた瞬間、和が瞳を潤ませる。

同時に、周りから歓声が起こった。一瞬、なにかが破裂したのかと間違っほどの爆音で、和は目を見開いた。遥も同じだったのか、いまさらながらのギャラリーの多さに驚いて辺りを見回している。

2・3一同はもちろんだが、遥と和のファンクラブ、校舎内の窓からは教師陣までもが出歯亀していて、騒ぎを起こした張本人としてはこんなことを思う資格はないのかもしれないが、呆れのため息

を吐いてしまった。

しばらく周りの様子をうかがっていた遙であったが、あることに気が付けば和に声をかける。

「あれ。和、ひよつとして腰抜けてる？」

遙の問いに、和が慌てて首を振れば遙から放れる。しかし次の瞬間には、へた、と地面に座り込んでしまった。体重のかりかたがおかしい、と思ひ質問したのだが、どうやら読みは当たっていたらしい。慌てて立ち上がるうとする和がまた非常にかわいらしく、遙は口角を上げた。

しゃがみこんで、和と同じ視線になると彼は頼杖をついて彼女を見やる。

「実花に佐山さん呼んでもらう？どうせすぐ近くにいますと思うよ」「……す、すぐにおさまると思うんだけど、無理ならお願いしたい」

消え入りそうな声でぼそぼそと発した彼女の言葉に、遙は目を丸くする。次いで嬉しさがこみあげれば自然と笑みがこぼれた。ひとりで頑張る癖もどうやらできる限り改善してくれるらしい。

遙はよいしょ、と態勢を動かせば、和の背中と膝裏に腕をすべりこませる。彼がなにをしようとしているのかわかったが、現時点で抵抗しても仕方がないことを和は悟った。

和を横抱きしたまま立ち上がった遙を見て、またも周りから悲鳴があがる。遙は一瞬眉を顰めた。そういえば先ほどは熱に浮かされて気付かなかったが、和の艶っぽい声や姿を見た男が何人もいるのだ。出来ることならば彼らの目玉をくりぬいてやりたい、と遙が不穏なことを考え始める。淀んだ空気を察した和は、和泉君？ときよんとんとした顔のまま彼に声をかけた。慌てて遙はなんでもないと微笑む。

「遙！笹森ちゃんどうしたの？」
「和。……お前、まだ赤いぞ顔」

のぞきこんだ広未にうるさいな、と低い声を出してもまるでしまらない。和はうらめしく思っとうなり声をあげた。遙は腰が抜けちゃったみたい、とふたりに説明した。

「広未君、悪いけど鞆持ってくれるかな」

「あ、遙のは俺が持つよ」

ふたりぶん持とうとした広未に、浩平がそう申し出れば広未がたのむ、とうなずいた。

「とりあえず校舎内戻るから……浩平、上着の右ポケットに携帯入ってるからそれで実花に保健室くるよう連絡してくれる」

「へえへえ。そっぴゃあ、梓と鈴木君は不参加なのかな」

「ああ、そっぴゃえば鈴木もいるんだったな。結局いまだに会えてない」

「多分どっかで見てるんじゃない？広未、託に連絡してみれば。私の携帯鞆に入ってる」

ため息を吐きながら言う和の頭をぼんぼん、と軽く叩いて、一同は校舎内へと歩いていく。その後ろ姿を見守っていたファンクラブとは全く異なる場所に、息を殺している人間がいた。

「中村さん、安田さん、どう！？」

「ばっちりです！」

記録係の中村と安田は、二台のカメラを片手に大きくうなずく。

それを確認した両ファンクラブの会長は満足気に微笑んだ。

今までの伝説ともいえるシーンを、彼らがおさえないはずもない。冷静になった和がそれに気付くのはいつのことなのか。またそれに気付いたとして、この動画を握りつぶすことができるのか。それはまだわからないが、ファンクラブの人間がなかなかどうして手強いのもまた事実だ。

「！……」

「和、どうしたの？」

ぶるり、と震えた彼女を気遣わしげに遙がのぞきこむ。和はゆるゆると首を振った。

「大丈夫。なんか悪寒が走ったんだけど……多分気のせいだよ」

「えー？熱とかじゃないだろうね？」

こつん、とぶつけられた額に、和は狼狽する。広末と浩平は、傍らで見せ付けるバカツプルをどうしてくれようか、と同時にため息を吐いた。

きつと彼女はあらん限りの力で否定するだろうが、もうこうなっては仕方がない。彼らは公認のバカツプルだ。そう認識すれば、親友の成就に複雑な思いを寄せながらもふたりの男は目を合わせて微笑んだ。

第三百三十七話「仲直りの副産物」

「和」

にここにしながら恋人を呼ぶ遙に、呼ばれた当の本人は、なに、と少しぶっきらぼうな返事をする。しかし彼はそれが全く気にならないように、脂下がった顔をさらにへにやり、と崩れさせた。

「好き」

唐突な言葉に、浩平と岡元がずっこけそうになる。

さかのぼること少し前、保健室は閉まっているのではないかと、という和の指摘に遙が職員室へ寄れば絶対に保険医である彼女はいると発言したのだ。和は半信半疑だったが他の教師同様職員室の窓から出歯亀していた岡元を見てなんともいえない気分になった。当然ふたりの担任である長島と長谷川も残っている。遙に抱えられた格好のままであつたので、出入り口で岡元を呼ぶように遙が浩平に頼んではいたが、あろうことか職員室から何人も人間が廊下に顔を出してきた。

教師までゴシップ好きというのはどういうことか、と思いつき罵りたくもなつたが、いかんせん今の彼女にはその力がまるでない。無理だとわかつていてもなるべく気配を殺して顔を俯かせる。

しかしそんな彼女の様子をながめては、まるで憚ることなくかわいいと連発する遙がいたのでは、どうあがいたところで居た堪れない思いをするしかない和であつた。

保健室の長いすにふたり並んで腰かけ、じつと自分をみつめてくる彼に嫌な予感を感じていたが、まさかなんの前触れもなくそんな言葉を発するとは思ってもおらず、まだまだ遙にたいする認識が甘かつたと和は痛感し頭を抱える。それでもありがとう、と小さく返事

をした。

そんな彼女の反応が不満なのかと思えばそうではないらしく、相好をくずしっぱなしの遙はまたも和を抱きしめながら好きだ、と繰り返し声をあげる。

「……あの、宮田君、この、これ、どうすれば」

すっかり弱りきった和は、彼の親友に助けを求めてみる。珍しくも縋るような瞳でみられ、浩平は憐憫の情をもよおしたが、しかしこんな状態の親友をついぞ見た事がない浩平は具体的な打開策をまるで思いつかない。そんなふたりはしばしどうしたものか、とみつめあう。

時間にしておよそ数秒であったはずなのに、突如、隣に座っていた遙が和の両頬をその手で包み込めば無理やり首を自身の方へと動かす。ぐき、という音がするとつい小さなりリップ音が室内にいる人間の耳に届いた。

遙が和に触れるだけの口付けを施したのだ。

「俺以外の男とみつめあうのため」

笑ったままだが、瞳は先ほどとは違い怪しい色を帯びている。和はそれがわかれば固まり、ついで眩暈を覚えて倒れそうになる。真後ろにくらり、と体が傾いたので、岡元が慌てて和の傍近くへと寄れば大丈夫！？と声を上げた。

「……俺、もうこれ以上、暴走した遙は見ないだろうと思ってた」「どうやら完璧に和がどこかのスイッチを押してしまったみたいだな」

もはや苦笑すら浮かべられずに心配顔で彼女を見やるが、異性で

ある自分達が近づくと今の遙では何をしでかすかわからないと判断すれば広未と浩平はそのまま定位置から動くことはしなかった。

岡元に背中を支えられ、大丈夫です、と情けない声をあげたところで、保健室の扉がノックされる。

「和さん！大丈夫！？」

慌てた様子で入室してきたのは実花だった。どうやら運ばれた和を見た後に浩平からの連絡を受けて和の体調が悪くなったのかと心配になったらしい。

その後ろからのんびりした様子で続いてきたのは梓と託斗だ。やはりというべきか、ふたりも和と遙の行く末を危惧していたようで実花同様どこかで学校公認カップルをうかがっていたようだ。

ぴくり、と眉を動かしたのはわかる人間にしかわからないが、驚いている証拠である。広未を認めた託斗が、僅かだが表情を変化させた。

「……なんだ、ずいぶんと過保護じゃないか」

「お前な、久々に会った旧友にたいする言葉か？それ」

口角を上げた託斗に、広未が呆れのため息を吐く。その様子を受けてまた託斗がおかしそうに笑った。彼の隣に並んでいた梓は、念願の彼が目の前にいたことに多少興奮しているらしい。目を丸めて小さくあ、と声をあげる。

「まさか、校門の君！？」

次いで叫ぶような声音で広未を指差した梓に、隣で託斗が片眉をあげた。あまり誉められたものではない行動を彼女がするのは珍しい。

その言葉を受けて広未が苦笑してみせる。

「あまりその名は嬉しくないなあ。はじめまして、津田広未です。あなたが高原梓さん？」

会釈をしながらやつと対面を迎えた事に、広未は恐らく特別な感情を引き起こしているわけではないが梓はにわかに興奮していた。思えばだいぶ前から会いたかった人物にひよんなきっかけであったさり叶ってしまったのだから無理もない。託斗はそんな梓の様子がおかしいのか、瞳だけで微笑んでいる。

その様子を見て和と広未が同じ表情を作りつつ、彼をみつめた。いつの間にやら回復した和に呆れ半分感心半分だった託斗だが、やがて苛立ちが前に出たのかにやついた嫌な笑いを浮かべるふたりをわかりやすくにらみつけた。

梓は、ふたりの完璧に一致した表情にまた妙な感動を覚えている。

「双子か、お前らは。相変わらず腹の立つところまで似ている」

託斗の言葉に、和と広未がちらり、とお互いに目配せした。

「別に双子じゃないけど。血もつながってないし」

「なんなら戸籍謄本でも持ってくるか？」

梓と浩平は、ついにその様子におお、と歓声をあげはじめた。遥はもう慣れたもので、ふたりのつつこみに苦笑するだけだった。

「嫌味の角度が和とそっくりだわ！」

「さすが。表情もさることながら」

拍手までしそうな勢いのふたりに、託斗はため息を吐いてみせる。

「昔はここまでではなかったけどな。ああ、和は俺に惚れていたから多少しおらしかつただけかもしれないが？」

「ちよ、託ー！」

急に口角をあげてそんな発言を شدした託斗に慌てて和が声をあげる。先ほどのやりとりをみていなかったから無理もないが、今の遥にはかなりの禁句だ。

しかしそれを予想しているといわんばかりに、特別動揺するでもなく託斗が続きを話した。

「今、和泉が興奮状態なのはわかってる。このくらいの報復をしなれば割に合わん。俺もピエロを演じさせられたひとりなんだからな」

「……ふたりきりで話をしたの？」

低い声音で和を引き寄せ、自身の腰かけた膝とひざの間に彼女を座らせた遥は、後ろから優しい檻で愛しい恋人を閉じ込めている。普段でさえそうなのに、抑止がきかない今の彼はもはや動く異性すべてが嫉妬の対象になるのではないかと思われた。

そんな様子に戸惑いつつも、先ほど色々な発言をしてしまった以上そう無碍にもできず、さりとして拒絶をまったくしないのも嫌で、和は複雑な葛藤のなか彼の腕の中でやんわりと抵抗を示す。それが気に入らないのか、遥は和を閉じ込める腕に力を込める。

耳元に彼の怒気を含んだけれど艶のある声が落とされた。

「ねえ、俺のいないところで、俺以外の男とふたりきりで話したの？」

「……った、託だよ？そもそも広未となんてしよっちゆう」

「広未君は和にとってそれこそ双子の兄か弟みたいなものでしょう。」

でも鈴木君は違うよね？」

「梓さんがいるのにどうにかなるわけないでしょ？」

「梓の存在がなかったらどうにかなる可能性があるの？」

「なんでそこで揚げ足とるの？」

呆れて深いため息を吐く和をみつっ、遥は唇を尖らせる。さすがに彼とてめちやくちなことを言っている自覚はあるらしくそれ以上なにかを追求することはない。きつと、処理しきれない感情が今は抑制できずに口からこぼれてしまうのだろう。和にもそれはわかつているのか、呆れるものの怒り出して怒鳴るようなことはしなかった。

その様子を見ていた実花は、我慢できなくなったのか遥をにらみつけ声をあげる。この場にいる人間で現時点ふたりに突っ込んでいけるのは恐らく彼女だけであろう。

「ちょっと遥！いいかげん和さんが困ってるじゃないの！人前でそういう態度を取られるの和さんが苦手だってじゅうぶんわかってるでしょー！」

遥から和を奪還しようとするが、ちからいっぱい彼女を抱く男の腕からは女性である実花では到底、対抗できそうもない。

「和は俺とこうするの嫌？」

「人前ではね」

「じゃあふたりきりなら嬉しい？」

あんまりな発言についてどこかの紐が切れてしまったのか、和はあらん限りの力で遥の腕から脱出すると、立ち上がって椅子に座る遥の頭に手刀をお見舞いする。いた、という間の抜けた学園アイドルの声が保健室に響いた。

「あんたは！大事なネジをどこで落としてきたの！今すぐ拾ってこいっ！！」

指差して怒鳴る和に目を丸くした遙が、拗ねたような口調で彼女の言葉に応える。

「俺はいつも通りだよ。和、もう戻っちゃうの？つまんないなあ」
「……なんで満面の笑みでいうの？」

怒鳴られたうえに自分から離れてしまった彼女をみつめ、遙は怒るでも嘆くでもなく嬉しそうにみつめる。その瞬間、和はまたふうと息を吐き出した。こうやって罵ってほしかったのか、と改めて認識すると、自分をまた責めたくなった。どれだけ自分は冷静でなかったのかと、本当に呆れてしまう。

言葉だけをとると遙が変態趣味のようでなんともいえない気分は過ぎだったが、しかしある種そういうきらいがあることを和は完璧には否定できないとも思ってしまう。

真面目に自分を責めていたはずであったのに、結局はしょうもない結論を導き出した事が嬉しかった。もう彼女はシリアスでもなんでもないのだ。

遙も似たような事を思っていたのかもしれない。お互いが同じように微笑んで視線を合わせた。

「……あほらしい。もう俺帰ろう」

ため息混じりに心底呆れたといった様子の浩平に、その場に居る全員が同意する。

腰も回復した和は、結局遙と手をつなぎ電車で揺られて彼のマンションへと赴くことになった。

ずっと離されなかった手を、和はほどきたいとは思わなかった。

常ならば電車の中でそんなことをするな、と怒鳴っていたであろうが距離をなるべく感じたくないどこかで思ってしまったのだろう。

自分の考えた事に羞恥心を覚えながらも、玄関扉を開けてもなかなか自ら手を離すことができない。しかし靴を脱ぐ為には両手を自由にしなければならぬと考え直し、傍らに立つ彼へと顔を向ける。名前を呼ぼうとして、なぜ自身の背中が冷えているのかを理解するまで和は少しの時間を要した。つながれていたはずの手は片手から両手になり、玄関扉のひやりとした感触にぶるり、と震えそうになる。

壁に縫いとめられたことを認識すれば、和は疑問と混乱の入り混じった瞳で彼をみつめる。

遥の瞳は、熱情をもってはつきりと彼女を捕らえており、気圧されてしまいそうな雰囲気思わず目を逸らしたくなる。しかしそうする前に、遥の顔が近付けば彼女の唇を彼のそれが塞いでしまった。

「！ん……」

ふたりきりで、誰にも見られない状況だとはいえ、まさか玄関扉に押し当てられこんなことをされると思っていなかった和は狂喜と理性の狭間で揺れる。やんわりと拒絶しようかとも考えたが、しかし確かな力でもって彼女をおさえこむ恋人に逆らう為にはかなりの抵抗が必要だ。なにより心は喜びが大部分を占めているのである。普段ならば簡単に言えるはずの罵倒する言葉はなかなか出てこない。もっとも、今は遥によって彼女の声は封じられているも同然であるが。

遥の舌に翻弄されながらも、なんとか扉に体重をあずけ今の体勢をとっているが和はまたも腰が抜ける寸前だ。思えばこれほど強い心で求められたのは久しぶりで、となればされている行為ももちろ

んのこと、彼から伝わる心の欠片に自分はあてられているのだと思えば、じんわりと自身の瞳から涙がこみあげてくる。

やがて和の頬を伝った雫が、いつの間にもやら右手を彼女の手から頬へと移動させていた遙のそれに浸透した。少し温かく感じた水分を自身の指先に感じた遙は、気付いて和の口腔内から後退すればそれでも愛おしさからか名残惜しげに何回か軽く食むように彼女の唇の感覚を楽しんだ。

「ごめんね、嫌だった？」

苦笑して和の濡れた頬を両手でぬぐい、眦に口付ける。水分の感触をその唇で感じると、より一層のせつなさが遙の心に流れ込むのがわかった。

和は声をあげようと口を開くが間に合わないと思ったのかゆるゆると首を振る。その仕草に遙が小さく首を傾げた。

「い、やなわけじゃ、ない。……嬉しくて、おかしくなりそうなの」

震える声でゆっくりと紡がれた言葉に、遙は目を見開く。その破壊力たるや遙を数秒固まらせれば、ついで彼の色々なものを簡単に崩してしまった。色々といっても、大きく言ってしまうえば要は理性の一言で片付いてしまうのだが、現在、遙の内心はかなりめまぐるしく複雑であるらしかった。なかなか一言で片付けられない色々なものが、彼の中で全部吹き飛んでしまったということだ。

「……和」

「ん？」

うつむきがちな彼の様子に今の発言はそういえば危険だったであろうか、と今更ながら過ぎた彼女だが、そうだったところでこの

心境では逃げようという発想にもならない。それくらい、和は今彼といつしよにいたいという想いが強いのだ。言い切ってしまうえば、心は軽かった。

まだ少し残る涙を自身の手でぬぐったのは、彼女にしかわからな
いある種の照れ隠しだ。心で呟いたことなので彼に聴こえるわけが
ないはずだが、先ほどの発言とあいまって和の内心は恥ずかしい気
持ちが強くなっていた。逸らすのも変なので一応は遙の瞳をみつめ
るが、顔が赤くないかが心配だ。

「ごめん」

なんとなく予想していた言葉だが、ついで米俵のように担がれた
のは予想外だった。

横抱きにする余裕もないほど、今の遙は切羽詰っているらしい。
和もそうだが、遙も靴を脱がずに土足で自身の寝室へと歩を進める。
掃除が大変だ、と和は思ったが、今主張したところで何がどうな
るわけもない。

多少乱暴な落とされ方をして、つぶっていた目を開き和が前に視
線をやれば遙が無表情でみつめていた。

その瞳にぞくり、と背筋が震えてたのは、恐怖からだ。和を
みつめる遙の双眸は、無表情なはずであるのにそこだけ燃えるよう
な熱情をたぎらせ、真っ直ぐに彼女を射抜いている。次に起こる行
動がなんなのかなど、訊ねなくともわかっているはずなのに、それ
でも和は彼が怖かった。

「和、明日動けないと思う」

「……は、い？」

無表情でそう告げる彼の言葉に思わず間抜けな声をあげれば、和
は引き攣った笑みをみせる。それに合わせてかやっと遙も歪に口角

をあげてみせたが、どう考えてもそれは笑いとは言い難い。ただ唇の形を変えただけだ。

「普段はさ、これでも和を気遣ってるつもりなんだ。だから限界超えてまでずつと抱え込もうなんて思わない。今本当はこんな説明するの億劫なくらい、今すぐほしいんだけどさすがにそれは鬼畜かなと思つて」

「和泉君」

「うん、もうどう呼んでもいいよ。やめないから。俺の熱が落ち着くまで離してあげられない」

「え、それはあの、いかほど」

「愛してるよ、和」

そこでようやくくにつこりと微笑んだ遙は、しかし次の瞬間激しい口付けで彼女の言葉を封じた。

発言の意味を知るには、まだまだ時間を要する。和は働かなくなる思考の片隅で、一生思い知る事なんかなければいいのに、とひとりごちたのだった。

第三百三十八話「副産物のおまけ」

何かの音が耳に届いて、ぼんやりと頭が覚醒しないまま彼女は身体を起こした。なぜかひどく重い身体が気になったが、それよりも彼女の中で重大な問題があったからか、身体に鞭打ちベッドからゆっくりと抜け出す。

引きずるように二本の足を動かして、ゆっくりと寢室をでる。いまだぼんやりとした頭のままりビングへと移動すれば目的のものが視界に確認できた。

「だから帰れって言うてるだろ！和が寝てるんだってば。はあ？お前なあ」

インターホン越しに会話をする遙は、出入り口にいる和にまったく気付いていないらしく訪問者を退けようと奮闘している。どうやら先ほど和が目を覚ましてしまったのは、この家全体に鳴り響いた呼び鈴の音であるらしい。

しかし今の和にはそれを理解できる頭がないようだった。ぼんやりと目を半開きにしたまま、ずるずると遙に近づく。

出入り口のちょうど真横にあるインターホンの画面を見ていた遙は、やっと横目で和の存在に気付き、目を丸くしたかと思うと次の瞬間にはインターホンの電源ボタンを無情にも押した。画面は今や真っ暗だ。

「和、ごめん起こしちゃった？それともお腹すいた？ああ、そんな風に歩いちゃだめだよ、まだ辛いでしょ？今ね、夜の9時ちょっと過ぎ…」

微笑んだり慌てたりと忙しい遙は、和を支えようと両腕を和のほ

うへ向ける。しかし彼が抱きとめる前に和自ら彼の懐へぼすん、とその身をあずけた。

少し珍しいその様子に若干の戸惑いを覚えたものの、和？と優しく声をかけるだけで遥はちゃっかりと彼女の背中へその腕をまわす。うかがうように頭を撫でてやれば、遥の胸に顔を埋めていた和からくぐもった笑い声がもれた。

「もつと」

「え？」

「もつと撫でろ」

「え、あ、はい」

命令口調なのに甘えた声で言われてしまい、どう反応していいかわからずに遥は言われるがまま従った。しかし突然抱きついたのにその理由をはっきりと言わないのは彼女らしからぬ行動だ。そもそも待っているのは説教だろうと思っていた遥は、内心首を傾げるばかりである。

「どこにいたの」

呟かれた和の言葉に、遥がびたり、と彼女を撫でる手を止めた。

「どこ、って。あの、チャイム鳴ったから出てただけだ。和もそれで起きたんじゃないの？」

「言い訳するなあ！」

「え？は、はい！」

「傍にいないと駄目なの！起きたら隣に居てほしいって言ったの遥でしょお」

少し間延びした声色もさることながら、常でない様子に今度こそ

驚愕した遙は、思わず彼女を引き剥がし肩に手を置けばその顔をのぞきこんだ。

「和！どうしたの！？まさか俺が無理させすぎて」

そこまで言葉を発したところで、遙は理解する。いつかの寝惚けていた彼女とその表情がそっくりだ。どうやら自発的に起きないと半覚醒のまま少し甘えた風になるようだ。遙は忘れないようにその情報をしっかりと頭の隅にたたきこむ。そうしてまた彼女を抱きしめると、彼は苦笑を浮かべた。

「和、まだ眠いんでしょう？」

「知らないー……だっていないんだもん」

「俺のこと？」

「隣にいないの、いや。寒い、寂しい。やだ」

「……………俺が隣に居ないのは、寂しくて嫌だった？」

「うん」

即答された遙は、またもいつかのように鼻をおさえる。

「やばいやばい、今度こそ本当に鼻血出そう。気分的にもう出てる」

「ベッド戻ろうよー、いつしよに寝るうー…………」

その言葉に、遙はめまいを覚えた。そんな殺し文句を言われたのでは、隣でおとなしく何もしない自信はない。こんな身体の和に無理強いしたくないと気合を入れた遙は、なんとか彼女の要求に応えようとにっこりと微笑んだ。

「うん、いつしよに寝よう。運んであげようね」

言って恋人を持ち上げた遙は、横抱きし傍近くにある彼女の顔へもう一度とろけるような笑みをやる。それに応えるように、和も心から満足したような顔で微笑んだ。

たまらずに口付ければ、それにも抗議があがることはない。遙は調子に乗って深いキスを与えようと彼女の口腔内に割り入ったが、根元まで舌を絡めた瞬間に後頭部をはたかれた。

遙に攻撃したと同時に和は笑顔をしかめ面に切り替えれば、おとなしく後退した遙をにらんだ。

「苦しいからや。寝る」

「……はい」

寝惚けているとはいえ、今の彼女は間違いなく遙にとって悪魔だ。この可愛さは殺人的ともいえるが、やはり普段の和があつてこそそのかわいさなのだ、と遙は痛感した。

薄れゆく意識の中、隣にいる遙を確認しようとベッドに寝かさされた和は手をさまよわせる。気付いた遙はふ、と笑んで、彼女の手をとった。そのまま頭を撫でてやれば和はふにやり、と顔を綻ばせゆるやかに眠りへと誘われていった。

またも可愛さに悶絶する遙であったが、なんとか欲望を抑えては息を吐き出して彼女の顔をながめやった。幸せそうに眠る恋人を見れば、自然とおだやかな気持ちになる。

「おやすみ」

額に口付けて、そのまま遙も彼女の隣へとおさまった。

何がきっかけであるかわからないが目が覚めてしまい、ぼんやりとした意識をなんとか浮上させようと、彼はベッドに手をさまよわせた。必ず行き当たるはずの温もりがなぜないのか理解できずに、いまだ覚醒することない思考を放棄してはむくりと寢床から起き上がる。

探し物を見つけようと寢室を出れば、聞き慣れた声が耳に届いてくる。彼は半開きの目をそのままに音を頼りに二本の足を動かした。

「だからあ、まだ起きてないんだって。家主に許可取らないとあげるわけにもさあ！いや、起こすのはいいけどほら、寝起き悪いじゃん。いや、不機嫌になるわけじゃないけど」

前日の夜のように、インターホン越しに訪問者と話しているらしい和は、近付いてくる遙にやはり気が付かなかった。和と遙の立場は入れ替わったものの、やっていることが変わらないのはなんとも不可思議な図といえなくもない。

奮闘していた和は、ゆっくりと近付いてくる遙にやっと気が付いた。気付くタイミングまで同じだとはなかなか似たもの夫婦のようである。この場合は恋人とつけるのが正しいが、似たもの恋人とは些か語呂が悪い。

「和泉君。ごめんね、チャイムの音で起きちゃった？まだ朝の7時だから眠いでしょ」

困ったように笑う和に何を思ったのか、遙はむ、とした表情で彼女に近づけば、そのまま和を抱きしめる。朝からいきなりの行為に多少混乱を覚えたものの、ある意味ではいつも通りの行動だ。なによりも遙の寝惚けた姿に和はすっかり慣れている。

「はいはい、ごめんね、隣にいないの嫌だったよね？」

「……和のばかー。自分からいつしよにいろって言ったくせにい」
「そうだったよね、ごめんねー。さっきまでちゃんと隣にいたんだよ?」

はて、そんなことを言ったのだろうか、と和の頭には疑問が過ぎつたが、この状態の遙に逆らうと長くなって面倒なのである。なんとか覚醒をうながそうと和は遙の両頬に自身の手を添えにつこりと微笑んだ。

「……和、まだ寝ようよー」

「でも昨日から何も食べてなくてお腹すかない?」

首を傾げて遙をうかがう和の言葉に、彼の腹がぐう、と元気な音を立てた。それに反応してくすり、と笑った和はほらね、と遙に声をかける。遙は半開きの瞳をそのままに、一言うん、と肯定する。

「じゃあごはんにしましょう。まず顔を洗ってくださいーい」

「むー……」

言葉の意味は一応わかってるので、言われるままに遙は洗面所へと赴く。和はその様子を見て苦笑をこぼした。子ども、というまでの感覚はないものの、なんとなく大きな弟ができた気分はこの時だけはなる。それを遙に言ってしまうば恐ろしい「お仕置き」が待っているのだ、彼女はいつも内心で思うに留めていた。

「あ、ごめんね、今起きる。うん、一応訊いてみるけど。あ、朝ごはん食べた?」

「……さっきから誰と会話してるの」

洗面所から戻った遙は、もうすっかりいつもの彼だ。会話もきち

んと成立するし、きかん坊のようなわけのわからない理屈をこねることもない。ここまでの流れが毎回あるので、最近ではなんとなくその高速ともいえる切り替えの早さをどこか楽しんでいる和がいた。彼の様子に満足したかのようにうなずけば、和は再度微笑む。

「おはよう。ねえ、上げていい？和泉君が起きるまで粘られて困ってたんだけど」

「ん？……お前、なんでまたいるんだよ。まさか一晩中いたんじゃないだろうな！？」

インターホンの映像を見てぎょつとした遙がその相手に怒鳴ってやれば、相手は間延びした笑い声をあげた。

『さすがにそんなことしないよー。ストーカーじゃないしー。で、あがつていい？』

その言葉に呆れつつも肯定の意を示した遙は、オートロックを解除してやる。和はじゃあ三人分か、と呟きながら冷蔵庫をのぞいていた。

「和泉くん。卵溶いてくれない？みつつね。あ、牛乳入れるの忘れないで」

ほい、と冷蔵庫から取り出されたそれを遙が受け取れば、ポウルを取り出した所டன்？と眉間に皺を寄せる。

「ちょっと待って。まさか三人分作るつもり！？」

「そうですよ？だって食べてないっていうんだもん、ちょうどいいじゃん」

なんでもないと口をきかした様子で言葉を紡ぐ和に抗議をしようと口を開きかけた遙であったが、それを遮るように玄関扉から騒々しい音が響いてきた。

「おつはようー！お腹すいたー！」

「おはよう。優君はレタス三人分ちぎってね。その前に手を洗って」

にっこりと微笑んだ和の言葉に、優は元気良く返事をすれば手を洗って和の手からレタスを受け取る。和はここに入れるように、とポウルとざるをさらに手渡した。それを確認してトマトとキュウリを切る彼女にむっとりとした表情のままできた、と溶き卵を遙が乗り越してくる。

「はい、ご苦労様。んじゃあ和泉君は三人分の平皿とスープカップ出してね」

「和、だからなんで」

「ああツナ缶あったか。優君、ツナ大丈夫？」

「むしろ好きー」

「了解。じゃあいれよう」

棚を開けて発見したツナ缶を取り出すと、和はばか、と開けて卵に投入する。その様子を見た遙は結局、抗議するのを諦めたため息を吐いた。そうして振り返ればテーブルの上で一心にレタスをちぎる優を確認してはぎよっとする。

「優、ばかーちぎりすぎ。もういいって」

「え？あー、なんか夢中になってた」

作業途中でちらりとそれを見た和は、ああ、と苦笑する。

「それだとお皿にのらないね。じゃあいいよ。水切りしてボウルにそのままのつけちゃっとけば。キュウリとレタスもいっしょにいれちゃって。それで各自食べたい分だけ取り分けよう」

和の言葉に了承して、優がへらりと笑う。ごめんねえ、と言うが、態度がまるで謝罪する人間のそれではない。食器を出しながら、遥はどこか苛立っていた。

「どつちでもいいけどコーヒー淹れてもらえるかな？飲むよね？」

「あ、俺がやるよ。優、粉、スープカップに入れといて」

それくらいできるよな？とにらまれた優は遥の視線をまったく意に介することもなくはい、と小さい子のような返事をする。脱力した遥は馬鹿馬鹿しいといわんばかりに軽く頭を振った。

和が苦笑して遥を見やると、遥も和の視線に気付いて同じように笑う。こんなときは、小さなことで彼との信頼関係が回復したのだとわかってどこか嬉しくなるのだった。

優は用意されたスープカップに、粉状のインスタントコーンスープを封を切りつつ入れていた。こぼさないように慎重になっているからなのか、すこし口を尖らせている。

その様子がおかしくて和が笑うと遥は声を落として集中するといつもああなんだ、と和に教える。

そんな言葉ひとつで遥と優の歴史がほんの少し見えてくる。やはり壊されることがなくて良かった、と改めて思う。偽善者だとも、自己満足だとも、罵られてかまわない。和はただ、したいことをしただけなのだから。

出来上がったのはツナ入りのオムレツに、なんの変哲もないサラダとトースト、おまけにインスタントスープだが、遥と優はとても幸せそうな顔をしてそれらをほおばるので、和はおかしそうにその様子をみつめる。そうして遥の淹れてくれたコーヒーを一口飲んで

は、朝の始まりを思って小さく息を吐いた。

「和ちゃんて料理上手だねえ」

「いや、これだけで上手下手は判断できないでしょ」

苦笑する和に、優はいやいや、と首を振る。

「卵のふわふわ加減が完璧だと思うー！」

「はは、ありがとう」

勢いに気圧されながらも渴いた笑いをこぼす和を一瞥した遥は、それから優に鋭い双眸をむけた。

「おい優、食つたら帰れよな」

「えーなんで。僕べつにごはんもらいにきたんじゃないよ」

「……ひとつ訊きたいんだけどさ」

「ん？」

オムレツをほおばつたまま優が返事をするので、遥は眉を顰め無言で彼の傍らに置かれたコーヒークップを持ち上げる。飲め、といわんばかりに突き出されたそれを遥の向かいに座る優は受け取れば、咀嚼もそこそこに一気に流し込んだ。和はそれを見て目を丸くしつ、やがてハムスターのように膨れた優の頬を見てくす、と小さく笑みをこぼした。

声に反応して遥が和に視線を向ければ、そのまま隣に座る彼女の頬へと遥は口付ける。ちゅ、というリップ音が生々しく和の耳に響いて、恋人にされたにも関わらずちいさな悲鳴をあげてしまった。

ふいうちというのもあるが、ふたりきりではない状況下でされればそれも当然と言えば当然である。

「俺の前で俺以外の男をみつめる和が悪いんだからね」
「……馬鹿じゃないの」

和は羞恥心を誤魔化すように眉間を寄せながらコーヒーを流し込んだ。しかし顔全体を隠す事もできないので、彼女の顔が耳まで真っ赤なのはこの場に居る全員が目視できる。遥は満足気にそれを確認しては微笑んだ。

「……で、訊きたいことって？」

多少呆れた様子の優に声をかけられ、遥は思い出したかのようにああ、と呟いた。先ほど自分が発言したことであつたはずなのに、すっかり忘れていた。

「お前さ、和の事好きじゃないだろ？」

唐突に放たれたその言葉に、優は固まった。彼だけではない。和も、遥の言葉に思わず身を強張らせてしまっている。それくらい、ふたりにとっては意外なものだったのだろう。

そんな反応をみた遥は、呆れたようにため息を吐いてみせた。

「そこまで周り見えてないようにうつってた？」

「遥、それはさすがにないんじゃない」

「私も同感。冷静さとか皆無だったとしか思えないし」

ふたりに呆れ返しをされてしまった遥は、顔に微笑を張りつければ、そのまま冷気を放つ。

「まあ、恋人が目の前で実の兄弟のような仲だと信じていた従兄弟にキスをされていれば、冷静じゃいられなくなるかもしれないよね

「？」

うまく切り返されてしまったふたりは、ぐうの音も出ない、といった風情で無言になれば、どちらからともなくそろそろと目線をあさつての方向へと逸らしていった。

ふたりの様子に片眉をあげれば、遥はそのまま面白くなさそうに優へと鋭い双眸をよこす。

「だってお前らしくないじゃん、相手のこと振り回しても傷つけるようなやり方はできる人間じゃないし。どっちかという別れさせなかったが正解じゃないの。まあ、目的はわかってても理由は全然わかんないけど」

遥のほぼ満点な回答に、和と優はそろって目を丸くすれば、思わずお互いに目配せしてみせる。無意識に目と目で会話をしているような様子になってしまい、遥はまたも不穏な空気を撒き散らす。

「わあああ、二度は嫌あ！」

和の顎に遥の手がのびてきたところで、和は慌てて恋人の手をぱしり、とはたいた。

「……なんで優とアイコンタクトなんかしてんの？」

不機嫌顔で今やはっきりと和を睨みつける遥に、今度は狼狽する。なぜ優と意思疎通ができたのかといったら、それはもちろん和が諸々の事情を全て知ってしまったからだ。無理に聞き出したわけではなく、あくまでも自ら導き出した結論ではあったが、それでも遥に今まで伏せていたという事実はどこか気まずい。

「和、知ってるんでしょう？優が和の事好きじゃないってことも、そもそも俺達の仲をおかしくしようとした理由もなにもかも！」

「……いや？あくまでもそうじゃないかな、と思ったただけだから。憶測で和泉君に話すのもどうかと思ったから今までなんにも言わなかったけどね」

「またそういう逃げ道を残す！和の馬鹿！」

「へえへえ、ごめんなさいねー」

遙に揺さぶられながらへらへらと笑う和を見て、優は改めて強かな女性だ、と感じる。しかしここまで強烈に愛されることを自然に受け止め、また自身も深い愛情でもって遙を包めるのは、きっと彼女がこういう彼女だからなのだろう。

たとえば、言い方に語弊はあるかもしれないが、たとえば和が、それこそ世間一般の可愛らしい女の子であったなら。

遙の容姿に顔を赤くし、甘い睦言に骨抜きにされ、遙の周りに群がる女性に嫉妬し、遙を束縛したいと願い、かと思えば周りの女性からの報復に耐えられなくなって逃げ出す。

そう、そんな女性ならば、そもそもこうなっていないのだ。前提から間違っていたのだと、今更ながらに気付かされる。

遙がここまで愛を注ぐ女が、そんな可愛らしい女の子であるはずがない。

笹森和はどこまでも強くしなやかで、ひどく美しく、ひどく可愛い。そして、ひどく脆い。だからこそ、お互いがお互いを補い合っているのだろう。ああいう仲間になった時点で、とっくに優の危惧すべき点はすべてなくなっていたというのに。

自身のひとりよがりな考えに、改めて自嘲したくなった。

「んじゃ、私は帰るから」

ほん、と遙の肩を叩いた和に、優も同時に驚愕の声をあげた。

「和！？なんで！！？」
「そっだよ和ちゃん！」

男ふたりの様子におかしそうに笑いながら、和が続きを話す。

「これから積もる話もあるでしょう。私がいたんじゃきつと話し辛いこともあるんじゃないかな？だから邪魔者は退散するよ。優君、ごゆっくり。洗い物、お願いしちゃって大丈夫かな？」

申し訳なさそうに言う和に、遥はそんなのかまわないよ、と慌てて声をあげた。

「でも和、身体大丈夫なの？送っていくよ」

「大丈夫だよ、昨日みたいにくらぶらぶらじゃないし。そう過保護にしないで。家に無事着いたらメールいれるからさ。ね？」

「でも」

「遥」

にっこりと微笑んで名前を呼ばれてしまったのは、敵うものなどない。遥は額半分を手の平でおおえば、くぐもったうなり声をあげて結局はうなずいた。

それに満足して微笑んだ和は、再度メールするね、と言葉を残し、身支度をさっさと整えればあっさり部屋を出て行ってしまった。

「……なんというか、本当大物だよ、和ちゃんて」

「なんもかんも今更なんだよ」

「いやまあ。わかってるけど」

男ふたりだけになった空間がどこか重苦しくのしかかったが、そ

れでもお互いに苦笑し合えば心は軽くなっていた。

子ども時代に戻って、仲直りも悪くはない。

そう心に過ぎったのは一体どちらだったのか。とりあえず表情をうかがった限りでは、優に対して遙は特別な憎悪だとかそういう種類の感情を持ち合わせている様子はなかった。

それに満足した優が微笑めば、遙も仕様のない男だ、という風情で微笑を返す。

ああ、大丈夫だ、と、根拠もなく思ったのは、果たしてどちらだったのか。それを知るのはお互いの心のみだった。

第三百三十八話「副産物のおまけ」（後書き）

これにて一連の喧嘩騒動、すべて落着と相成りました。

ハラハラさせてしまった読者の方には、本当に申し訳ございません！
これで満足していただけたかはわかりませんが、

もしも次もお読みいただけるのでしたら次シリーズもよろしくお願
い致します。

第三百二十九話「ならば愛をこめて・その1」(前書き)

新シリーズやっとならばスタートします。お待たせ致しました！

第三百二十九話「ならば愛をこめて・その1」

「ねえ、和」

「んー？」

「和はさ、もう進路決めてるの？」

遙の言葉に和は目を瞬く。唐突といえはそうなような気がしたが、さりとして時期的にはそんな話題を持ち出されてもおかしくはない。しかし、と和はそこで思考にふける。

そもそもが、今まで彼の口からこのような話題が出なかったこと自体がおかしいのではないか。そう感じれば、和は目を眇めて遙を見やった。

「質問しておいて、大方の事は知ってるんじゃないの？」

「どうして？」

今度は遙が目を丸くする。和はその様子に、この男も段々と嘘がうまくなってきたな、と思えばため息を吐いた。

「だって自惚れじゃなければ、和泉君は私と離れるのすごく嫌なんじゃない？加えてうちの両親とはメールのやりとりしてるし……私 が遠くてもこの家から通える距離の大学にしか行かないって知ってるんでしょ？」

「うーん、俺いつか和に隠し事って出来るのかなあ」

「本気で隠そうと思えば出来るんじゃない？」

首を傾げて言う彼女に、遙は苦笑する。そんなことをしゃあしやあと言つてのけてしまう彼の恋人は、きっと遙のあずかり知らぬ所で何度も小さな優しい嘘をついてきているのだろう。

和はそこで、自身は彼の将来について何も知らないという事実が気が付く。未来永劫いつしよにいられるわけではない。それこそ、遠方の学校へと進学するとなったのなら、物理的にはふたりの距離は開いていくことになる。悲しくないわけではないが、かといって止めたいとも思わないのがまた複雑だ。

しかし和にとって、将来とは自身のもので、どんなに親しくとも自分ではない何者かが口を出す権利などあるはずがないというのが当たり前前の常識だ。だからこそ、無意識のうちに心の準備をしていたのかもしれない。遠く、離れる覚悟の準備を。

「和泉君は？ひょっとして遠方に進学とか考えてるの？」

和の言葉に、遙は片眉をあげて面白くなさそうな顔をする。その様子に、質問した彼女はおや、と不思議そうな表情を作った。

「さすがにそんな大きな隠し事はしないよ。和の予想通り、俺は離れるなんて出来ないんだから」

遙の言葉に、和は苦笑を返す。

「和泉君、本当に行きたい大学があったり、目指したいものがあったらそんな馬鹿な事言っていないでちゃんと行ってよ？私のせいで将来狂うなんて嫌じゃん」

「そんなの、俺にとつたらちっちゃいことだよ？」

「和泉君？」

ぎろり、と凄みをもって遙の顔をにらみつけてやれば、双眸を向けられた彼は悪戯がたしなめられた子どものように肩を竦めた。

「冗談だよ。俺は、まだちょっと迷いもあるけど、父さんみたいな

人間を支える仕事は悪くないなと思ってるんだ。だから、今のバイトを続けながら進学してじっくり考えるつもり」

遙の父親は、著名な小説家だ。中学時代から父親の仕事を支えてきた遙はその世界に魅力を感じているらしい。確かに、面倒見がよく色々と勘も悪くない遙はひとをサポートするのに向いているのかもしれない、と和も思う。

「でも、和泉君が編集者になったら、女性作家の編集はやらないほうがいいかもね」

「それは相手が仕事にならないからってこと？」

「君はなんていうか、言い切るあたりがね。まあナルシストめ、と言えない所がなんともだけど」

「俺みたいなの、苦手だっけと思うひともけっこういるよ？むしろ父さんのがそうだった意味では大変だと思う」

「あー……確かに昌さんは私みたいな本読む畑の女性から好かれそうだけど。作家のひともやっぱそうなんだ？じゃあ佐山さんとかも大変だろうねー」

「……なんでそこで佐山さん？」

一音下がった遙の声音に、和はびっくり、と肩を震わす。

彼女はいつまで経ってもこの種類に関しての失言が減りはしない。恋人が自身を好いている意識はあれど、女としての魅力をまったく自覚していない故か、和は人間として遙が自分を受け入れてくれている、という自信は揺るがないのに、女としての自分を愛してくれている、という自信はいまだあまりないようだった。

過剰なまでの愛の言葉も、それに伴う行為にも、散々され尽くしているそれらにいちいち頬を染める初心さは、きつとそういった要因があるのだろう。だから彼女は、今恋人が不機嫌な理由も察してはいるものの、なかなかどうしてぴんとはこないらしい。

「……ふーん、和ってああいう顔の男性がタイプなんだ？」

遙の目が完全に据わっているのを確認すれば、和はじりじりと後ろに下がりがつつ首を振る。

よりにもよって現在ふたりが居る場所は遙のマンションだ。笹森家ならば無茶も出来ないであろうが、これでは一步間違えば和は遙になにをされるかわからない。

さりげなく部屋の出入り口を背にした遙は、和が玄関から逃げ出せないように閉じ込めている。和が行き着く逃げ場は壁かベランダしかないが、あいにくここは5階だ。落ちれば、ほぼ即死だろう。

和はなんとか遙を平静時に戻そうと両手も付け加えて勢い良く左右に振る。しかしその必死さが逆に遙の怒りを煽っていることに彼女が気付く事はなかった。

「いや、見た目！見た目に限って言えばだよ！？こう、一重の男のひとのが色気を感じるというか」

「……………色気？へえ、会うたび今日もかっこいいなとつつとりしていたと」

第二、第三の失言に顔を青くするばかりの和は追い詰められどんだん壁際に下がっていく。遙は四つんばいになりながら彼女ににじりよっている為か、いつもより一層獲物を捕らえる肉食獣さながらだ。視覚的な効果も手伝って、和も恐怖がたまっていく速度がいつもよりはやく感じられた。

「違っつてば！別につつとりとかしないってば！」

「でも街角で佐山さんみたいな見た目の男性とすれ違ったら視線は奪われるわけでしょう？」

「それはまあ、っていやいやだから近い近い近い！」

背中に感じた冷たさに、和はついに壁まで追い詰められたのだと悟れば両手をつっぱってなんとか抵抗の意を示す。

遙はそんな風に拒絶される事が気に入らないのか不機嫌の一途をたどるばかりだ。眉間に刻まれた皺はどんどん深くなり、鋭さを増すばかりの双眸。どこからどう見ても愉快には見えない。

「世の中から一重の男が消えていなくなればいいのに」

「物騒な事言わないでよ……」

あまりにもな発言に思わず脱力した和は、抵抗をゆるめる。遙に呆れきった口調で言っつてやれば、遙は歪に口角をあげて形だけ微笑んだ。

「わかってないねえ、和。俺はけっこう本気なんだよ？」

「は……」

横向けに倒されたかと思うと、次にはあおむけに寝転がっている状態になった和は、何故か今日の前の男性に馬乗りをされている体勢になっていた。相変わらず女性を組み敷く術に長けていると思えば、和はそれのほうがよく嫉妬をうながす材料になりそうなものだ、と変な部分で冷静に思考をめぐらせている。

しかしそれも束の間で、つるり、と遙が和の頬を撫であげれば、恐ろしいほどに彼女の思考は凍った。

「理不尽だよねえ？こんなことくらいで、こんな風にされるのは」「和泉く」

彼を上の名で呼べば、すかさず遙が和の唇を塞いだ。短いものであったがけして軽くはない。口付けというよりは唇を食べられたと

表現するほうが正しい。

遙は和の上唇を食み、そうして口を離せば無言で彼女を見やった。その視線の意味を推し量れば、和は観念したように口を開く。

「は、遙」

その言葉に、呼ばれた彼はにっこりと微笑む。

「俺ね、和のなんにも他の男にあげたくないんだ。そうじゃなくとも恋人の前で他の異性を誉めるのはちよつとだめなんじゃないかなあ？」

「えーと、そ、そういうものなの？」

「和」

「ごめんなさい」

「はい、じゃあもう一度俺の名前呼んでみて？」

「え、は、遙」

微笑まれてびくびくしつつも、和は恋人の名を呼ぶ。その声に満足したのかますます笑みを深めれば遙はとんでもないことを口にした。

「この家の中で遙って呼ぶのは、ベッドの上限定だったもんね？」

「はい？」

「だからそういうこととしていつてことだよな？」

「いや、そういうことってどういうことでしょうか!？」

「二度とそんな発言しないように戒めの意味もこめて」

「え、ちよ、ま」

「愛してるよ、和」

久しぶりに発せられた彼女の悲鳴は、マンション全域に轟いた。

日本家屋を見ると心が落ち着くのは、どこか懐かしさを感じるからなのか。和は田舎の屋敷を思い出しながらも、目の前に置かれたコーヒーに口付けては息を吐いた。

傍らに控えている滝山に、香苗と共に礼を言えば滝山は威勢の良い笑い声をあげれば家事労働の続きへと戻って行った。

「いつもお元気ですね、滝山さん」

「ええ、もつずいぶん長いのよ。もう第二の母みたいなものかしら」

ふふ、と微笑む香苗に、和はそうですか、と言って同じように微笑んだ。

「和ちゃん、今日は泊まっていくわよね？」

「いいんですか？和泉君もいないのに」

「あらあ、だつてあなたは遙のおまけじゃないもの！またお菓子なにか教えてほしかったのよー」

「ありがとうございます。じゃあ今度はちよつと凝ったものにしますか」

今は春休みが三日過ぎたところで、まだ日程にも余裕がある。特に他に予定もない和は快く香苗の申し出にうなずいた。遙はしばらくアルバイトで忙しいらしく、合鍵を持っている和はいつでも来ていいと遙に言われてはいたが、しおらしく家の中のことをしつつ彼を待っているという気にもあまりなれなかった。正直、まだまだ和にとって第一に落ち着く場所は自分の部屋なのだ。

それだけでなく、やはりひとりの時間を過ごすのはどうしたって好きな彼女は二十四時間いっしょにいたいという感覚を一生わかりそうもないと思っていた。

いつしか思考の海に沈みかけていた和は、目の前で楽しそうな色をした瞳で彼女を見やる香苗に気が付いた。和は少し首を傾げながらどうかしました？と声をかける。

「……ねえ、和ちゃん」

「はい」

「和ちゃんは、将来なにになりたいとか、決まってる？」

「公務員ですかね」

きっぱりとした物言いに、香苗が目丸くした。

「あら、普通の企業じゃなくて公務員が良いの？」

「ですねえ、今の時代は特に。まあ、狭き門だとは思いますが……昔はね、司書とか良いかなと思ってたんですが現状難しいです。

今は正社員として雇う所はほとんどありませんし。となるとアルバイトになってしまっわけで、一生と考えると難しいです。人と対峙するのも得意とは言えませんしね……となると消去法で選んだのが公務員でした」

「普通の会社に就職、ではいけないの？」

「うーん、そうですねえ。いっどうなるかわからないですから。好きな事がしたいんですよ。一生、この趣味と付き合っていきたい。そう考えたとき、いちばん都合が良いのが公務員なんです。昌さんのように表現者になりたいと思った事もないので、私にとってのいちばんわがままで自由な生き方ってつきつめるとそういうことなんですよ」

和の言葉に興味深そうに耳を傾けていた香苗は、やがて納得した

かのようにつなずいた。

「なるほどねえ。でも公務員で安定はしているけど、外からの風評は大変そうよね」

「そうですねえ……まあ、なれるかどうか決まったわけではないですから」

「あら、受ける前からそんなこと言ってるの？」

「狭き門なのは本当ですし。とりあえず勉強しながら、四年間色々模索してみます」

「そうね。今から決め付けるよりはいいかもしれないわね」

ふう、と息を吐いた香苗の様子に、和はどこかひっかかりを覚えた。一連の会話は、和と話しているようでいて何かの答えを探し求めているようにも思える。

「あの、香苗さん……もしかして、和泉君と何かあったんですか？」

「え？どうして？」

和の質問に少し驚いたように目を見開く香苗に、和は喉に渴きを覚えればカップを取り一口コーヒーを流し込んだ。その動作を、香苗が無言で見守っている。

「私と話して、どこか納得したがつているように思えたので。……」

和泉君と、進路の事で揉めたりとかしたんですか？」

口を開きかけた香苗は、少し困ったように微笑んで、やはり和と同じく一口コーヒーを飲む。次に待ち構えている言葉に多少の緊張感を覚えながら、和は香苗から発せられるのを待った。

「……もめた、というほどではないのだけど、ね。ねえ、和さん。」

あの子、どう思う?」

予想していたものとどこか違っていて拍子抜けした一方、和はその言葉の意味を図りかねて首を傾げる。その様子に苦笑いを浮かべた香苗は、ひとつ小さくため息をもらした。

「親の私が言うことじゃないけど……ギフトってあると思うのよね」「ギフト?」

「うーん……遥って、あの通りの容姿をしているじゃない?」

香苗の言葉に、和は一言はい、と添えてうなずく。

「それでいて、昌さんの雰囲気まで受け継いじゃってるのよねえ。……昌さんのあの空気はね、表現者としての才能なのではないか、と思う時があるの。あのひとのそういったものがどうしてか外にもれちゃってるんじゃないかしら、なんて。若いときはほんやり考えたことがあるわ」

「……それは、ちょっとわかる気がします」

昌の纏う空気は、彼の作品そのものであるかのように、と和はよく感じる。どこか浮世離れしているような、けれど声を発すれば普通の男にもなれる。そんな不思議な魅力が、昌にはあるのだ。

「でも昌さんは、なんていうのかしら。そこまでの派手さはないし、なにより作家として生きているからなんとも思わないんだけど。遥は……このままでいいのかしら、と思うときが最近増えてきて」「それは……和泉君の進路が、ですか?」

困った様子で香苗がうなずく。

「あの子は、ただ単に容姿が優れているだけじゃなく、天性のひとを惹きつける何かを持っているわ。それは、なにかを表現できる才能なんじゃないかって昔から思っていたの。でも、あの子は幼い時から騒がしい大人たちをよく煩わしがっていて、せつかく昌という父親がいながらそういう世界に没入する機会もなく今日までできてしまった。唯一、CDコレクションくらいかしらね、遥がそういうものに関わっているのって」

「えーと……端的に言ってしまうと、和泉君がそれこそ芸能人にもなれば良いんじゃないか、と香苗さんは思っているわけですか？」
「極端なことを言ってしまうえばそうね。編集者のお仕事は、昌と長年連れ添ってきたんですもの、もちろん尊いとわかっているわ。でもね……遥が裏方に、縁の下の力持ちにまわるのはどうしてももつたいないんじゃないのか、って思ってしまう自分がいるの」
「……なるほど」

香苗の葛藤は、理不尽だ、とどこか言い切れない。和には、香苗がどれほど遥を大切に想っているかわかっていたし、きっと具体的に何かを反対したわけでもないのだろうと推測していた。確認の為に一応香苗にその旨を訊いてみれば、やはりかえってきたのは予想通り、ただ自分ひとり悶々としているのだという。

和は腕を組み短くうなり声をあげれば、何を言ったらいいのかわからない歯がゆさにしばし頭を抱えた。

「……本人の意思は、やっぱり尊重すべきなのでは、と思いますけど」

「そうよねえ。なんだか、将来をいよいよ決めるってなったら、怖くなってしまうって。あの子はそういうものを毛嫌いしているけれど、やってみないとわからないこともあるじゃない？」

「ううーん、まあ、そうですね」

「和ちゃんと出逢えたから、大丈夫な気がしていたのよね」

「？ どういう意味でしょう」

頬に手を添えてため息を吐いた香苗に、和は疑問符の浮かんだ表情を作る。香苗はそれに応えるように口を開いた。

「多分、一種の人間不信になつていたと思うのよ。それでもあの子は基本的に人当たりが良いから、あまり気にしていなかったけれど……よくよく考えれば、波風を立てないようにいっしょくたに優しく接しているだけだったのよね」

香苗の言葉に、和はどこか思い当たる部分もあるとは思つたが、いまいちぴんとこない。

確かに遥の容姿ならば、彼を装飾品紛いに扱う女性も多く存在したことだろう。そうでなくとも自身が原因で他人がもめれば、相手と距離を置きたくなるに違いない。

それでも、和と出会ったとき彼は浩平という親友がいたのだし、和が原因でなにかが変わったとはあまり思えなかった。和がその点を指摘すれば、香苗は肯定するようにならず。

「浩平君は、遥にとって初めての親友なのよ。その時は確かに安心したけれど……でも、あなたに触れて、集団はそう悪いものでもな……って認識できたのは本当に大きかったの」

「だから、そういうものを怖いと思わなくなつたら、外に何かに向かい始めると思ったんだけど、やっぱりあの子は決めてしまつてみるみたいで……せめて、一度でもその世界に触れてくれれば良いのよね。それで最終的にやっぱり編集者になりたい、と思つたなら、きつとこんな風にはらはらしないんだけど」

遥と将来の話をして、彼が編集者に向いているかもしれないと

思ったのも本当だし、今こうして香苗の言葉を受けてそうかもしれない、と思ったのも本当だ。相反するそれは矛盾しているようにも見えるが、しかし和はそういうことではないとわかっていた。もしも何かから逃げる遙がいるならば向き合ってほしいし、そうでないのならやはり香苗と同じく口出しするつもりもない。

遙が忌引きしていたものの扉を開いたとき、彼の中で何かが変わるのだろうか？

和はほとんどん思考を没入させていったが、考えても答えはなかなか出そうになかった。

第四百十話「ならば愛をこめて・その2」

「和、どうせやるなら合格目指せよ」

「は？」

「公務員試験のことよ。お父さんたら和ちゃんが受かるかはわからないし、なんてぶつぶつ言ってるって知ったらちよつと不機嫌になつてたのよ」

両親と食卓を囲むのは久しぶりだというのは、きつと気のせいではないだろう。最近は遙の部屋に行くことも増えていたので、遙が忙しいのはむしろ喜ばしいことかもしれないとさえ思う和は、やはり若干ものの考えがずれているのだろうか、と危惧していたところだ。

あれこれ考えつつご飯をつついていたからか、間抜けな返事しかできずにぼかん、と口を開いてしまった。

「やる前から負け決めるなんてらしくねえだろ」

「……いやまあ、動機が不純なもので」

「和ちゃんにとって好きなものに囲まれるのが人生なんでしょう？それを謳歌するためにお仕事を選ぶのは悪いことじゃないわよ」

「うん。司書は考えたけど、結局つきつめると接客業なんだよね。」

私は人と接するのはやっぱり得意じゃないし、色んな本を誰かに知ってほしいっていう使命感もないし。そうなるとやっぱり安定した職業に就きたいなあ、と思ったからなただけだ」

和の言葉に、両親そろつてうなずいた。

「お前らしい生き方する為の将来なんだから、気張れよ。動機が不純とかぐだぐだ言ってるな」

「……わかってますよ。受かればいいんでしょ、受かれば」

仏頂面で言う和に、高明と依子は微笑む。親に諭されるような事を言われるのはどこか面映い。和はそれを隠すように湯呑みを手にすれば緑茶を流し込んだ。

後片付けを済ませて部屋に戻った和は、タイミングを計ったかのような着信音にびくり、と身体を揺らす。着信名を見てみれば予想通りの名前がそこにあり、和は机にあるそれを手に取ればベッドに腰掛け通話ボタンを押した。

「もしもし」

淡々とした口調で和が第一声を発すればそれを意に介すことなく電話口の遙は大声で「和!？」と声を上げてくる。弾んだその声音に思わず苦笑をもらしてしまった彼女だが、どうせ相手方に表情まではみえないしな、と思い至った。

「どうかした?」

『またそんなことを言って!用事ないと電話しちゃいけないの?』

「いけなくはないけど……必要性はまあ感じない」

『和つめたい!優しくない!』

「はいはいごめんなさいね!。で、なに?」

『だから声聞きたかったただだよ……もう四日も会ってないんだよ?』

遙の弱弱しい声に、和はそうだったけ?と首を傾げる。毎回の事ではあるが、どうにもこのやりとり慣れない、と和は思う。

たとえば今までも遙の仕事が忙しいせいで何日か会えない日が続く事はあったが、だからといって和が遙に何か連絡を寄越すという

ことはまずない。彼女の場合その間ひとりを満喫してしまうため、遥からは不満の声をあげられることがしょっちゅうだ。もちろん和も一ヶ月や一年会えないとなったら寂しさも過ぎるのだろうが、四日も、という感覚は彼女の中に生まれはしなかった。

「春休み中はずっと忙しいの？」

『何言ってるの！まだ休み一週間はあるんだよ？その間ずっと会えないなんて嫌だよお！』

「え、いや、別にそういう意味で言ったわけでは」

『和、明日は暇？』

「明日？ひとりで映画行こうと思ってた」

和の言葉に相変わらずだね、と遥はため息をこぼす。結局、遥がことあるごとに不安に苛まれてしまうのは彼女のこういった面を垣間見る瞬間なのだろう。彼女はひとりで生きる楽しさを知っていて、遥はいつ自分がその世界から弾かれてしまうのかと思うと怖くてたまらない。それでも、最近は一ひよりは楽しいが平気なわけではない、と言ってくれる事もあるからまだ昔より安心はしている。遥はどうやって彼女と一生寄り添えるかを模索するのにいつだって必死だった。

『明日は俺も午後空くから映画なら行けるかなあ、と思ってたんだ。それって単館でしょ？前に観たいって言ってた』

「うん。だったら駅で待ち合わせする？」

『13時頃だったら大丈夫だと思う』

「そか。じゃあ13時半に待ち合わせしよっか」

『うん、そうしよう。明日は家に泊まってってくれる？』

「実家のほう？マンション？」

『マンションだよー……』

また力をなくした遙が弱弱い声を発するのでどうしたの？と眉根を寄せれば遙は不機嫌な声をあげる。

『和、このまえ実家に泊まったでしょ。それ自体は全然かまわないんだけど……母さんがうるさいんだよー。ひとり占めしないでもつとこつちに寄越せつて。俺の恋人だよ？和は俺のなのに……』

普通の調子でよくもまあそんなことが言えたものだな、と和は呆れ半分、感心半分だ。しかし言われた言葉は見逃せないと思えば片眉をあげて彼の言に異議を唱える。

「あんたのものになった覚えはないんだけど」

『だから俺もぜんぶあげるってば』

「そういう発言はいいから」

『和限定だよ』

「だからそれもいいから」

電話口でからからと楽しそうに笑う遙の声を聞けば、それほどに参ってはいないようだと思堵の息を吐いた。疲れた様子はそんなに見受けられない。それでも、明日は栄養バランスを考えた晩御飯を作ろう、と心の中で思う。和はこういう部分を前ほどは抵抗なく受け止められるようにはなったが、それでもまだ戸惑う面も多い。誰かのためにごはんを作るといふ行為を、前はすすんでやるうなどと思わなかったのだ。

遙が不安になる一方で、和もまた育つ心に不安がないわけではない。離別するという事にいよいよ耐えられそうもないと思えば、彼がなにをしても赦す自分になってしまいうそでどこか怖かった。

別れのあいさつを交わして電話を切った後、小さく吐いたため息はやはり遙に届くことはなかった。

和の今日の装いは、ネイビーのシンプルなワンピースにポンチョを合わせた格好だった。どこか牧草地帯の女性を思わせるような格好に仕上がっている。足元に合わせた革靴も、どこかそういった雰囲気があった。

「和ちゃん、今日は遙君の家にお泊りなのよね？」

「うん、そうなると思う。最近多くてごめんね」

「ちよつと寂しいけれどね。いいのよ、また遙君に家にも来てねって言うておいて？」

「うん。じゃあいつてきます」

「いつてらっしゃい」

微笑んで送り出してくれる母は偉大であると感じながら、和は家をあとにした。

待ち合わせよりも大分早く着いた和は、ひとり昼食をとって雑貨店や家具店などをうろつろつと歩いた。あつというまに時間が経てば待ち合わせの15分前で、和は駅前にて遙を待つことにする。

彼はもう立っているだろうかと思っただが、まだいなかった為、同じように待ち合わせをしている集団へと紛れた。

こういった場で待ち合わせをしていればキャッチのようなものは多いが所謂ナンパのようなものはまずない。和はそれ自体が怖くはなかったが、不機嫌になる遙は怖かったので、正直今日は安心できなかつた。そうそう頻繁に声をかけられることもないが、というかひとりで出歩く時はまったくくないのだが、なぜか遙と待ち合わせをするときに限ってそういったトラブルに見舞われるので和は理不尽さを感じないでもない。

ぼんやりとあれこれ考えていたそのとき、和の周りがにわかになぜわつきたした。ああ、と思つて視線をそちらへと向ければやはりだ。

目立ちたくないという言葉掲げて生きてきた自身と相反するように、何をどう頑張ったところで目立たないわけにはいかない星の元へ生まれた男が走ってくる。こうやって外で待ち合わせをすれば、やはり信じられない、と和はひとりごちる。

どうして全く違う生き方をしてきた人間がこうやってお互いを想い恋人にまで至ったのか。何度考えても難解だと思わずにはいられない。釣り合う合わない以前の問題で、だからこそ和はそういった部分を危惧せずに済んだのかもしれない。容姿的にもちろん釣り合っただけではないが、それ以前からしてふたりはまるで釣り合っているといえないので外で並んで歩いていてもどこか開き直れるのだ。

息を切らして駆け寄る彼の相手もまた、注目されるとわかっている。和はこの瞬間だけは嫌だと毎回思う。それでも彼が長々待っている、という状況よりは幾分かましだ。

そういう状況下になったとき、集団は「こんないい男を待たせている女とはどういう女だ」と思わずにはいられないのか、ことさら注目されるということを和はよくわかっていた。

和を視界に留めた瞬間、輝く笑顔をふりまく遙に、和は盛大なため息を吐いた。

「ごめん、遅れちゃったよね」

「いや、時間ぴったりだから大丈夫」

それよりそのゆるみきつた顔をどうにかしてほしい、と願ったがとろけそうな遥の笑顔はどんどん増すばかりで、指摘するのどこか悪い気が和はした。自惚れでもなんでもなく、自身がさせている表情だとよくわかつているのだ。

「久しぶりにそういう格好みた気がする……ってことはデートをしてないって事だね」

「何自分で発言して落ち込んでんの。別にいいじゃんしょっちゅう会ってるんだから。外に出たいとか特に思わんし」

「……声かけられたりしなかった？」

「しないよ。あんたじゃないっつーに」

「またそついうこと言う！」

口を尖らせる遙にかわいくない、と半眼になって和が発言すれば、遙はひどい！と言いつつもしつかりと手を繋ぐことを忘れない。和がそれにまた仕方がないといった風情で微笑めば、遙ももういちど笑みを返してみせた。

「なんかあのカップルいいね」

「うん、すつごい仲良さそう」

ぼつり、と呟かれた言葉がふたりに届くことはなかったし、周囲の人間が少し羨ましそうな視線をふたりに寄越していることも当の本人達が気付くことは一度もなかった。

「なんかいまいちだったねえ、今回」

「あんなに良いキャスト陣なのにどうしてあんなっちゃったんだろうね」

お互いにぼつりと呟いた意見が一致すれば、苦笑いをしつつ映画館を出る。こんなことも一度や二度ではないが、和は慣れているし、遙も存外気にする事もない。そういうところも手伝って、和は遙と映画に行く事が嫌いではなかった。

「晩ご飯はどうする？」

遙に問われて、和は作るよ、と応える。

「今から帰って地元のスーパーで食材そろえればちょうどいい時間になるでしょ」

「そうだけど……いいの？和、疲れてない？」

「なんで。疲れてるのむしろ和泉君でしょう。いいんだよ、作りたくて作るんだから」

和の発言に目を丸くした遙は、その先を請うような視線を注いでくる。駅までの道を歩いて改札をくぐり、電車をホームにて待っている間、羞恥心から答えをにごしていた和であったが、無言で視線をくれる遙に根負けしてため息を吐いた。

「最近忙しそうだから、少しでも栄養のあるもの口につっこんでやりたいな、と思って。倒れたら大変でしょ？」

言葉がおかしな様相を呈してしまったのは、照れ臭さゆえだ。好きだと言うことに抵抗はないのに、どうにも処理しきれていない思いには素直になりきれなかった。

それでも隠しきるよりは自身の羞恥と向き合えるかもしれない。だから声にしたわけだが、隣に立つ遙がどんな反応を示すのか確認するのはまだ怖かった。和は言ったあと遙と一歩分距離をとり、無言で電車が来る方向へと首を動かしていた。

和は数秒後、この行為に後悔する。せめて遙の動向をうかがっていればよかった、と少し前の自分を責めたい思いだ。

遙が、無言で和を背後から抱きしめれば頬にその唇を落とした。

「ぎゃあっ…」

反射で叫んでしまい、よりいっそう衆目を集める結果になってしまふ。

「俺の体を心配して、俺の為に料理したいと思ってくれたってことだよな！？ちよっと前はそういうことしたくないって言ってたけど、今はすすんでやってあげたいって思ってくれてるってことだよな？ね！？」

あまりの勢いに怒りの感情をそがれた和は、間抜けにはあ、まあ、と曖昧な返事をする。遥はその言葉にますます気を良くすればさらに彼女を抱きこむ。

いいかげんにしろ、と恋人に右足を思い切り踏まれるまで、遥が和を離すことはなかった。

「昨日は、実家帰ってたの？」

「うん、実家から仕事行つたから……あ、なーんか母さんが様子変なんだけど、なんでだか和、知ってる？」

遥の言葉に、和はどうしたものかと逡巡する。沈黙は肯定の意を示しているので、数秒黙ってしまった彼女はつまり隠す必要性をそう感じてはいないのだろう。しかし勝手な判断で香苗の心情を吐露しているものなのかわからない。話し合ったほうがいいだろうとは思うのだが、さてどうしたことだろう、と和は眉間に皺を寄せる。

「とりあえず洗い物しちゃうね」

からになった食器を流しに置いて、和は腕をまくる。遥が慌てて後片付けくらいはと申し出たが、今日はしなくてもいい、と和が首を振った。疲れているであろう彼をあまり働かせたくはなかったの

だ。

それでも遙は落ち着かないのか、結局和が洗った食器を水切りかごから拭いて食器棚にしまい始めてしまった。和は苦笑しつつもそれを止めはしなかった。

手を拭いふたり並んで赤いソファへと腰かければ、和は膝を抱えて体育座りをする。遙は最近気付いたが、彼女がその身の内で何か処理しようとしていたり、心を閉じ込めようとしているときはこのポーズになる。つまり今はあまり話しかけてはいけないときなのだ。察した遙は、黙って恋人の横顔をながめる。相変わらず可愛いな、とわけのわからない事を考えていれば、あつというまに時間は過ぎていった。

「……和泉君さ、香苗さんがどうして様子変なのか思い当たる点はある？」

和の言葉に、遙は一瞬目を開く。彼女の言葉から察するに、恐らく母親は自分のことで悩んでいるのだろうと思えば、心当たりはひとつしかなかった。

「多分だけど。ひょっとして進路のこと？」

「……香苗さん、和泉君になにか言ってたの？」

問いかけに、遙は無言で首を振る。

「何か言いたそうにしてるのは雰囲気でわかるんだけど。いっそ言ってくれればいいんだけどな、とは思ってた。反対されても従うつもりはないけど、理不尽な意見じゃなきゃ聞く姿勢くらい持つ心の広さはあるつもりだよ」

遙の発言に、和は首肯する。体育座りを解放すれば、和はふう、

と息を吐いて背もたれに身体をあずけた。

「和泉君はさ、表舞台に立つ気は微塵もないの？」

今度こそ驚いた遙は、目を見開いてしばし和をみつめた。視線に苦笑した和は、そのままみつめあつた状態で先を続ける。

「もったいないかな、とは私も思わないでもない。ただ、和泉君が選んだなら否定する気はない。……逃げ道として、今進む道を決めたわけではないんだよね？」

「ああ……なるほどね。母さんの言いたいことってそういうことか」
心得たようにうなずいた遙は、苦笑して肘掛にもたれる。頼杖をついて片足を立てれば、うづん、と低くうなつてちらり、と横に座る和に視線をやった。

「俺さ、一回だけモデルみたいなことやったことあるんだ」

「そうなの？」

「中学時代に一回だけね。なんか読者モデル？じゃないけどそんなものだったかなあ。街を歩けばしょっちゅうスカウトはされるし、まあ一回くらいやってみるのも面白いかな、と思って」

「あれ、じゃあ香苗さんや昌さんはそのこと知ってるはずだよな」

「うづん、結局表に出なかつたはずだから」

「え？そうなの？」

「なんていうか街にいる男の子を撮る、みたいなことから、正確にはモデルってほどのものでもないんだけどね。そのときは本格的にやってみないか、とも言われたんだけど。とりあえず今回の雑誌にのせてほしいって言われて」

へえ、と和が声を出せば、でもね、と遙は続ける。

「カメラ向けられた瞬間、気持ち悪くなっちゃって。俺さ、中学時代は今よりもっと自分の顔とか雰囲気とか嫌いだったんだと思う。今は目立つ存在だっていうのも受け入れて生きてるけど、それまでそれなりに葛藤もあってさ。ああやっぱ俺って装飾品みたいなものかな、って思ったら駄目だったんだよ。で、結局写真撮れずじまいで」

「そうだったんだ……なんか、嫌なこと思い出させちゃった？」

和の言葉に、遙はうつん、と首を振る。

「だからね、そういう仕事は向いてないし出来ないなってそのとき思ったんだ。何より俺は目立ちたいとか自分を誇示したいっていう欲求がないから。そもそも今やってる仕事を本格的にやってみたいと思ったの、和がきっかけなんだよ？」

「え？」

思いがけない言葉に和が目を丸くすれば、遙がふ、と優しい色の瞳を和に向ける。

「面白いものを発掘するのって、楽しいんだなって和の世界に触れて思えた。世に出る前の面白いものを、自分の手で捕まえられたらそれこそ凄いことだなあって。だから俺は元々、和に出逢えた事を色々と感謝はしてたけど、前以上に和が大好きになっただけだし大切な事だと思って思うようになった」

「い、和泉君」

「文字とか音楽とか、前より深く触れられるようになったよ。それは和のおかげ。だから逃げたとかじゃなくて、選択したのは俺自身だから。いつかゼロから何か作ってみたいなっていうのもなくはないけど、一生でまだ長いんだし、そう焦らなくてもいいかなって思

ってるよ」

「……そっか。じゃあ、まだ探し途中？」

「うん、そうかな」

「そっか」

ふ、と微笑んで、お互いどちらからともなく唇を合わせた。そのまま遙の口付けが深くなりそうな気配がしたところで、お風呂が沸いた合図の電子音が部屋に鳴り響く。

「……和、俺の疲労回復に協力してくれるんだよね」

「え？まあ、私に出来る範囲でなら……」

和が発した言葉にっこりと微笑めば、遙はそのまま彼女を横抱きにして立ち上がった。

ひえ、という声が恋人からあがっても、彼がそれを気にする素振りはない。

「お風呂いっしょに入ろう。そしたらもう超癒される」

「ええ！？ちよ、待ってよ！着替えもなにも」

「必要ないでしょ。どうせ脱ぐんだから」

「何を言って」

「バスタオルは脱衣所に置いてあるから。諦めてください」

最近頻繁に発せられる恋人の悲鳴を、心底楽しそうに受け止める遙だった。

第四百十一話「ならば愛をこめて・その3」

新学期が始まり、最終学年を迎えれば、そのフロア全体がどこか緊張感を持ち、同時に寂しさを思わせる雰囲気を感じて、和は目を閉じる。

進級して3-3になったクラス一同は相変わらず嗜好きでお人好しで、和は目を開けば物思いに耽る自分が多少恥ずかしくもなった。

「おーい、席着いてるかー」

心底面倒そうな声、仕草で三年三組の担任教師が出入り口の扉を開く。長島は少しざわつく教室内の子どもたちを一応はたしなめつつも、淡々とした様子で出席簿に視線を落とした。

担任もそのまま持ち上がりなのは必然と言ってしまうさうだ。特に何の感慨もなく、相変わらず食えない教壇に立つ男をながめ和は息を吐く。

出欠確認を終えて、長島が持っていた日誌を教卓に置けば、静まっていた教室に響いた音はやけに大きい。それに背筋が伸びたのはどうやら和だけではないようで、クラス全員がどこかたるんでいた空気をぴんと張りつめ、長島に視線を向ける。

いつもはけだるい雰囲気垂れ流してばかりの大人が、今日はどこか違っていた。

「お前らも最終学年になって、いよいよ就職だ、受験だって面倒な時期になった。いいか、子ども達。あつという間に始まってあつという間に終わってくもんだ。せいぜい気合入れて励め」

しん、と沈黙が落ちたクラスを、長島は一瞥すれば次に口角をあげた。

「そのうち、ひとりひとり進路指導あつからな。つたく三年の担任なんて面倒くさいことこの上ねえ」

そのあまりにもな言葉に、教室全体が先ほどが嘘だったかのようになざわつた。教師としてあるまじき姿勢に、当然のように生徒達から不満の声があがる。

それでも教師か、という言葉にひょうひょうと教師だって人間だ、などのたまう彼は、やはりどこか変わっている。和は苦笑しつつも、しかし彼が真の意味でいいかげんではないことはわかってきた。きつとここに座っているクラスメイト達も同様であろう。

その証拠に、長島が目で合図を送れば、教室内はまたも静まり返る。彼が真剣な話をするときはどういった表情になるのか、皆もう正確に把握しているのだ。

「この時期は悩むのが仕事みたいなもんだからな。せいぜい迷え、みつける手助けくらいはしてやれる。やりたい事をみつけるのも良いし、生活していく為にする仕事を選ぶのも良いだろう。」

そこまで言つて長島は生徒ひとりひとりの顔をながめれば、ふ、と強い意思をその瞳に宿した。

「ただお前らにひとつ言つておく。「つまらない大人にはなりたくない」って言葉は、若いうちはけっこう使うもんだが、普通に生きる、普通の大人になるっていうのは、そんなに簡単じゃねえ。毎朝満員電車に乗ってスーツ着たおっさんやらお姉さんやらは皆自分を家族を食わしてく為に働いてる。それは決つてつまらない大人でもない。そのことだけは忘れず頭の片隅にでも叩き込んでおけ。まあ、そのうち両親に感謝できる日もくるだろう」

以上、解散。言つて長島はいつものけだるい雰囲気を背負つて、早々に教室を出て行つた。

教室内の圧力から急に解放された生徒達は思い思いに姿勢を崩す。机に突つ伏したり、はあ、と長い息を吐いたり、皆一様に緊張していたことが見てとれた。

いよいよそういう時期になつたのだ、と実感すれば、和はどこか焦燥感を覚える。進路を決定してもそう感じるのは、きっと大人になること自体への心もとなさゆえなのだろうと、和はよく晴れた空をながめつつ考えていた。

教室の窓からこの光景を彼女が当たり前のようにながめられるのも、あと少しだった。

「和泉先輩！好きです、付き合つてください！」

「ごめんね、俺はもう付き合つてるひとがいるから」

新しく一年生を迎えたこの時期、まるで例年通りとでもいうように遙は事務的に同じ言葉を口にする。

にっこりと微笑んで、きっぱりと断る。告白されることが例年通りというのは、なんとも嫌味な存在だと周囲に思われることだろう。

「あの、どうしても駄目ですか！？私、あきらめきれないんです。彼女さんの、どこか良いんですか！？」

そして、毎年何人かはこうやって食い下がる者も出てくる。友人同伴で来る者もいるので、本当に様々だ。すべてが想定の範囲内であり、遙はこれまたうまいこと言い包めて事なきを得る、はずだったのだ、例年までは。

進級する前とは違っていること。それは彼に溺愛するほどの恋人が出来たという事実だった。

告白してふられ、それでもなお食い下がる一年生は、まさしく禁じられた呪文を唱えてしまった。失恋した上にこれ以上の不幸を上乗せされるのはなんとも不憫でならないが、言ってしまったことの責任は自らとらなければならぬ。

言葉を受けて瞳を輝かせた遙は、興奮気味に声をあげた。

「あのね、きつかけはね、俺が告白してからなんだけど！」

「え？あの」

「俺片想い期間が長くてさあ」

普段惚気る相手がいないからなのか、彼女がいかに素晴らしいのかを語り尽くしたいのか、遙はそれから延々、昼休みいっぱいをつかって笹森和がいかに素晴らしい恋人かというのを前のめり気味に話し続けたのであった。

「ああもう、不憫でならない……その子の幸せを願うよ、誠心誠意」
「和、その反応はどうかと思うんだけど」

悲しい色をした瞳を恋人に向けながら、遙は和の右手を握る。

昼休みが終わるギリギリになってやっと帰ってきた遙に呆れながら和が空き教室を出れば、遙も慌ててそのあとを追ってくる。最近呼び出される事も少くないので昼を別にとろうと言っているのだが、遙はいまだ新一年男子を警戒しているらしく、なかなか了承しようとしていない。

この場合、心配すべきは和のはずであり、和はいつも以上に不可解な恋人の行動に呆れざるをえない。

手を繋ぐな、という和の怒声を笑顔で却下し廊下を歩くその姿を、ほとんどの生徒はほのぼのとした気持ちで見守っていた。

遙と別れて3・3にて自分の席へと着けば、和はひとつ息を吐く。和が今回の事態に気付いたのは、少し前だった。

笹森和非公式ファンクラブの会長である清水が、和へと接触してきた。普段からその存在を忘れるほど距離を取ってくれている為安心してはいるが、時折こうして報告したいことがあると彼女たちはやってくる。和は複雑な思いを寄せながらも、与えられる情報は有益なものが多い事を知っているからそう無碍にも扱えない。

そうしてまたいつものように顔には出さずしかし色々な葛藤を心の中でしつつも耳を傾ければ、どうやら遙が告白された一年生にとんでもない対応をしているという。一年生の中にはそれで遙に失望し諦めるもの、和を逆恨みするもの、とおおまかに言えばその二通りに分かれているという。

和は頭を抱えながらも清水にお礼を言い、なにか協力してほしい事があれば遠慮せずに頼る旨を説明すれば、清水は心得た様子でその場を去って行った。

正確に事態を把握してから早二週間が過ぎようとしている。

きな臭い動きを感じなくもないが、さてどうしたものか、と和は頭をかく。

逆恨み、と自身で思い切れないあたりが彼女の彼女たる所以であろう。たとえ遙が余計な振る舞いをしているせいでそうなったとて和はそれを理不尽だとは思わない。告白した相手が、恋人について惚気てきたらその相手を恨むのは心情的に理解できた。遙に恨みがいかないのはやはり恋心ゆえなのだろう。

中身はさておいて、今更繰り返すのもなんではあるが和泉遙は実に素晴らしい男だ。

さらりと流れる黒髪は絹の如く、二重の瞳はすべてを見透かすような透明度と相反する色気を放ち、すらりとのびた手足は女生と間違うほどの繊細さで、成績は良好。性格は人当たりがよく、穏やかだ。

ここまでの条件をそろえた男が溺愛する恋人。否が応でも期待が高まるというものだ。

しかし蓋を開けてみればなんともはや。和泉遥、学園アイドルが愛してやまないその恋人は、なんとも平凡な女の子だった。

肩までのびた黒髪はいつも真横でひとつにしばられ、かけられた眼鏡はそれなりに洒落たデザインであるものの、黒縁のそれはやはり平凡さに輪をかけているように見える。スタイルは実はそう悪くはないが、何よりもその全く目立たない気配は、遥の隣に居てもその存在を忘れてしまいそうだ。

一年生からは、当然のように疑問と不満の声が上がる。同じ三年生でも、有名な高原梓ならばわかるがなぜ彼女が、と。もつとも、梓は梓で相手の託斗も学校内ではもはや有名な人で、お似合いカップルと囁かれていた。

和に対する反発心を煽ったのは、遥の対応だけではない。その梓の恋人である鈴木託斗と、和泉遥がかつて彼女を取り合ったという事実が露呈したからだだった。更には梓がかつて遥の恋人で、和が遥を略奪したという事実と嘘の入り混じった噂まで飛び交うようになった。

恐らく水面下では何も不満を漏らさなくなったが、今の三年生も二年生も、和が気に入らない人間はまだいるのだろう。彼女たちはこの機会を逃すまいと、和に対して嫌悪を抱くような情報が一年生に流れるように仕向けたのだ。

もちろん、かつて和が在籍していた2・3、いまは三年三組となった一同は、これが心底気に入らない。そうでなくとも反発しているのは一年と一部の二、三年生だけだ。ほとんどは和と遥を名物力ツプルだと歓迎しているのだから。

高校生活もあとわずか。出来る事ならば穏やかな気持ちでその時を過ごしたいものだ、と和はひとりごちた。

「笹森さん、一年生シメないの！？いつものように！」

朝の教室にて、怒りを露にした向井やら田中やらに囲まれて、それは少々語弊があるのではないかと和は苦笑する。

遙にも好きにしていんだからね、と笑顔で言われてしまったが、なんとなく一年生というのがひっかかってしまい、和はなかなか残酷な仕打ちをする気になれない。実質的な被害もまだ受けてはいない状態なのだ。

「うーん、でもさあ、わかんないじゃない。和泉君の相手が私みたいなのだったらそりゃがっかりもするでしょ？何をされたんでもないしなあ。この前まで中学生だった子達だし？なんかなあ」

和の言葉に、不満の声をもらす女生徒一同。彼女達からすれば、もうこの現状がすでに遺憾なのだ。

一年生が思うところもわからないではない。しかし、一年生はふたりの歴史を知らなければ、笹森和がどんな人物であるかも知らないのだ。事実を知ろうともせず、和の上っ面だけを見て噂を流されれば、気に入らないのも当然である。お人好しと繰り返し和に思われている彼らならばなおのことだ。

「被害受けてから行動するんじゃないじゃない。それに喧嘩売ってきたのはむこうだよ！」

「そうだよ！ふたりの愛の歴史とか校内で放送すればおさまるんじゃないの！？」

西川のあまりにもな提案に和が目を剥けば、絶対にやめてくれ、と念押しする。迫力負けして了承した女生徒達は、渋々でも行く末

を黙って見守ると和に約束してくれた。

具体的な策は結局講じないまま、更に一週間が過ぎた。放っておけばそのうちおさまるだろうかと期待していたが、事態は徐々に悪化しつつある。周辺が少し騒がしくなっただけならば別になんとも思わなかったが、和が頻繁に図書室へと寄ることを知った一年生は、あるうことかそこに目を付けたのだ。

笹森和が怒りを露にする瞬間。それは彼女の愛してやまない時間を蹂躪されるときだ。

まさしくその逆鱗に触れようとしていることを知る由もない一年生は、彼女が噂だけでは表立ってひるむ様子もないからか、具体的に嫌がらせをしようという流れになりつつあった。

和をまったくもって平凡な女性徒であると信じて疑わない彼女たちは、自分たちが今まさにどんな恐ろしい行為をしようとしているのかわかってはいない。

和が違和感を覚えたのは、図書室に入った瞬間だった。いつものように昼休みの図書室へと足を向ければ、ずいぶん大勢の人間でにぎわっている。新一年生が混じっているからなのだろうか、と首を傾げつつも、とりあえずは本を選ぼうと本棚へ歩を進めようとしたそのとき。

和の耳に嘲笑めいたものが聞き取れた。

「趣味も読書って本当地味だよな」

「オタクってやつ？こんなのに付き纏われてるってかわいそう」

「何か弱味でも握ってるんじゃないの」

くすくすと囁きあいつつ和を指さす劣悪さをみてとれば、和はそれを一瞥して本棚へと進もうとする。それが気に入らなかったのだらう。ついに一年生は音量を下げることもなく堂々と声を上げだした。

「本当さあ、高原先輩くらい綺麗だったらわかるけどねー」

「ありえない。あれで良いんならなんで他の子じゃだめなわけえ？」

「何言われても平気そうだしさ。自分だってわかってないんじゃないの？」

「笹森せんぱい、きこえてますかぁー？」

あははは、と小馬鹿にしたような言葉の数々に、図書室常連者たちははたたり、と冷や汗が背中につたうのを感じた。それは複数の女子に囲まれた和を心配するものではなく、新一年生の行く末を慮つてのものだ。

和はその言葉を確認すれば、ぴたり、と歩を止め、ひとつの机に座っている四人グループの一年生へと向き直る。一直線に無表情で歩いてくる和に、一年生はさすがに少しひるんだのか顔色を変えた。

「あなたたち、ここがどこだかわかってる？」

和の言葉にはあ？と疑問符の浮かんだ顔をしながら訝るように声をあげた一年生を、和は鋭い眼光でもってとらえる。常でない彼女のその表情に、一年生のひとりが肩を揺らした。

「図書室は基本的に私語厳禁。そうじゃなくとも声を落とすのが礼儀でしょう。それが守れないならばここにいる資格はない。さっさと出て行きなさい」

きっぱりとした口調で言い放たれて、さすがにかつとなつたのか、一年生が顔を赤くしてそれぞれ立ち上がる。

「あんた！」

言ったそばから声を張り上げようと一年に呆れば、和はその口を素早くおさえて睨みつける。

「だから黙れって言ってるでしょう。大体が言いたい事があるんならそんな隅っこで固まってひそひそやってないで堂々と話しかけなさい。一対一じゃ自分の意見も言えないの？」

「……っ離してよ！」

忌々し気に和の手を払えば、一年生は四人とも和に鋭い双眸をむけ睨み返す。和はといえばそれにひるんだ様子はまるでない。それがますます気に入らないのか、苛立ったように口元をおさえられていた女生徒が口を開いた。

「なんであなたが和泉先輩の恋人なの？」

「その質問に答える義務が？もう一度言います。図書室は私語厳禁。出口はあっちだよ、出て行きなさい」

和の言葉にまた怒鳴りそうな勢いになった女生徒の言葉を遮るように、和はさらに声を上げた。

「ガキだからって手加減してやってたんだけど、私の憩いの時間を奪うってんなら考えるよ？つうかあなた彼氏いるでしょう、一年一組の望月さん」

和の言葉に望月と呼ばれた女子がぎくり、と顔を強張らせる。他の三人はその言葉に驚愕した様子で目を見開けば、嘘！本当なの！？とそれぞれが声をあげる。和はその様子に再度呆れてため息を吐いた。

「だから君らうるらいよ。出てけつつてんでしょ。本を愛してない人間がここに居る資格はないよ」

「……ひとの弱味を握って操るわけ？最低」

「さっきから打てば響くような反応だねえ。誉め言葉としてもらっておくよ、ありがとう」

にや、と歪に口角をあげた和の表情をみて、一年生は顔を蒼褪める。本能が告げるのだ。この女性に関わってはいけないと。

予想外だった和の本性に戸惑っていたものの、振り返ればこんな状況にも物怖じすることなくむしろ怒りを露に説教をしてくるなど、平凡な女性のすることではない。

なぜ彼女が和泉遥の隣に立っているのか、その理由を垣間見た気がして、寒気を覚えた一年生達はそのまま逃げるように図書室をあとにした。

思ったよりもひどい事態にはならなくて周りは安心したが、和は何かを考えるように顎に手をやれば、そのままお騒がせしました、と微笑んで図書室をあとにした。

それから一週間後、なぜか沈静化した噂と、改まったような一年生の態度に、3・3一同は戸惑いを隠せなかった。喜ばしいことではあったが、それにしただってどうやったのかを聞くのはあまりにも怖い。

勇気を持って聞いたクラスメイトのひとりに、ただ無言で微笑んだ和のその表情はなんとも表現しがたいもので、運悪くそれを目撃してしまった人間は皆一様に彼女にただただ許しを請いたくなったという。

少なくとも、ファンクラブの人間が一躍買っていることは間違いないが、手加減しなかった彼女が何をどうしたかを具体的に聞き出すとする人間はさすがにもういなかった。

それから更に経ったあと、なぜか増加した笹森和公式ファンク

ラブの会費は、あの冷たい目がたまらない、と囁く者であふれかえ
っていたという。

第一百四十二話「ならば愛をこめて・その4」

刻々と移ろいゆく季節を感じ、和は車窓から桜並木を見やる。登校する電車の中から、葉が混じりはじめた桜を見て、もう少しすれば初夏と言われる季節になるのか、とぼんやり考える。

個人面談を終えて、いよいよ受験という二文字が色濃くなってきた。和自身は教室に漂う圧迫感に少し息苦しさを覚えつつも、既に受験をしないと決めている人間が不平を言えるはずもなく、逆に同じ空間にいて苛立つたりはされないかと危惧するくらいであった。ぼんやりとしている気質の人間ばかりがそろっている3・3だが、さすがに将来を左右するだけあってそうのほほんとした雰囲気のままではられない。

和はひとつ息を吐き、イヤホンから聴こえてくる音楽に耳を傾けた。

「和ー。今日はまっすぐ帰るんだよね？」

相変わらず終業の鐘が鳴り終わって間もなく彼はやってくる。和はそう急がずとも自分は逃げも隠れもしないのだが、いつも思う。実際に一度口に出してみたことがあったが、彼いわくそういうことではなく「早く会いたくて急ぐ」ということらしい。それを真顔で言っている彼に、和は色々複雑な感情を抱いたのだが、それを言葉にすることはなかった。

「うん、今日はそのまま帰るけど……」

世に言うゴールデンウィークが過ぎ去り、金曜日を迎えた今日は本当ならば図書室の解放日だ。しかし休みが明けたばかりで、なおかつすぐ次の日も休日になるため利用者が極端に少なくなる。こう

いった場合図書室は臨時に閉まる事が多く、今回もその例であった。和の言葉に遥がうなずけば、帰ろう、と和の傍へと歩み寄る。うなずいて隣に立つ恋人に彼女は微笑んでみせた。

「あ、笹森さん」

昇降口に下りてきた所で、誰かが和に声をかける。音のほうへと視線をやれば、クラスメイトの青山だった。和は疑問符の浮かぶ顔をしつつ、彼女にどうしたの、と声をかけた。

「いつだったか、見かけた事ある女の子が下駄箱出たところうろろしてるとだよ。あれって笹森さんの知り合いじゃないかなと思って」

「え、本当？ありがとうございます」

会話をしながら靴を履き替えれば、青山にお礼を言って和は出入り口付近へと歩く。視線をさまよわせてみれば、確かに見知った顔がそこにはあった。

「え、塩澤さん？」

名前を呼んだのは、後方から追いついてきた遥だった。少し驚いて反応が遅れたが、我に返った和は同じく名前を呼びつつ彼女の傍らへと走り寄る。

「塩ちゃん！どうしたの？」

「！ 和先輩……」

和の姿を確認したあと、一瞬喜びの浮かぶ顔を見せたが、しかしみるみる表情を変えた塩澤は、へにゃ、と顔全体を歪ませれば今や

泣きそうな様相を呈していた。

「私……どうしたらいいんでしょう」

「？ なにかあったの」

「……………」

首を傾げて先をうながす和を塩澤が目で確認すれば、やがて話し出そうと口を開く。しかし何か彼女にそれをさせないよう、開いては閉じ、を二回ほど繰り返したあとやがて閉口してしまふ。

その姿を見守っていた和は、うなずいて塩澤の頭を優しく撫でてやる。

「塩ちゃん、今日は時間あるんだよね？」

微笑みながら少し屈んで和が塩澤をのぞきこむ。塩澤は身長が平均よりも低めだ。元々女性の平均よりも高い和は、きちんと表情を見ようとすれば自然こうした形になる。

和の質問に、塩澤は無言でうなずく。歯を食いしばっているように見えるので、きつと口を開くと泣いてしまいそうなのだろうと和は察しがついた。

「和。家まで送って今日は帰るよ」

ふたりのやり取りを傍らで見守っていた遙は、和の肩に手を置いて微笑む。和はその言葉に目を見開いた。

「え？そんな、いいよ！私と塩ちゃんのふたりだけで帰れるから。だってまだ昼日中だよ？」

「でもそういう状態のときって変なのに絡まれやすいから心配なんだよ。塩澤さん、良いかな？俺はすぐに帰るから」

和と同じく、遙が塩澤の顔をのぞきこむ。和以上に遙は屈みこまねばならないので大変そうだ。傍らで見ている、和は腰が辛そうだな、と至極どうでもいいことを考えていた。

遙の言葉に、塩澤は勢い良く数回首を縦に動かした。そうしてまた口を開けば、今度こそ彼女の口から音は発せられる。

「あの……もし、良かったらなんですけど。和泉先輩にも……居てもらえたら」

その言葉に、遙が目を丸くする。何かを問おうと口を開いたが、しかし声に出す事なく再度微笑みを浮かべる。

「じゃあ俺のマンション行こう。和、それでいい？」

「そうだね」

「あ、ありがとうございます」

くしゃ、と歪んだまま微笑んだ塩澤は、泣き笑いしているような複雑な顔をしていて、和と遙は相当な事があったのだろうかと眉根を寄せる。そのまま塩澤を真ん中に挟んで、三人は遙のマンションへと向かった。

「塩ちゃん、座ってて」

「あ、すみません」

微笑んで和が冷蔵庫を開ける。グラスをみつつ用意すると遙がそこに氷を入れた。

ふたりの息が合ったやり取りを見ていた塩澤は、羨望の眼差しでそれをながめ、やがてみるみるうちに顔を歪ませた。

「はい、これね、朝に作っておいたアップルティー……って嫌いだった？」

「またも泣きそうな顔をしている塩澤に和がたずねれば、塩澤は首を振る。目の前に置かれたグラスに視線をやると、ついに堪えきれなくなったのか決壊したかのように彼女の瞳から大粒の涙がいくつもこぼれ落ちた。」

「！ 塩ちゃん……」

遥は向かいに、和は塩澤の隣に腰を落ち着かせる。和は無言で彼女が落ち着くまで頭を撫でてやる。遥も、心配気に彼女を見やるが、それでも無理になにかを訊き出そうとはしなかった。

「……おふたりぐらい、素敵なカップルだったら」

ぼつ、と呟かれた言葉に、和と遥は動きを止めればじ、と塩澤の顔をみつめる。とにかく今は彼女の言葉を黙って聞こうと決めたよっだ。

「私と、津田先輩は、なんなんだろう。好きだって、言ってくれたけど、言葉だけなら、誰にだって、い、言えるし」

ひく、としゃくり上げながら紡がれる言葉に、たまらないとでもいうように顔を歪ませたのは遥だ。

広末にとって目の前の女の子がどういう存在なのか、遥は彼とそんな話を改まってせずとも察していた。そのくらい、広末が塩澤に注ぐ視線や態度はわかりやすいのだ。あの読みにくい男がストレートに想いを寄せる人間はきつと彼女しかいない。

遥は塩澤さん、と控えめに呼びかけつつも、それでも多少声が高

くなるのをとめられなかった。

「広未君は、少なくとも君が思っている以上に君が好きだよ。みていてわかる。どれだけ塩澤さんを可愛いと思っているか、周りからすればわかりやすすぎて困るくらいだ」

遥の言葉に、和もうなずく。顔には苦笑を浮かべていた。

「そうだね。元々、広未は読ませない男だけど、塩ちゃんのことだけは違う。ずいぶん素直に表に出していると思うよ。塩ちゃんからしたらピンとこないのかもしれないけど、からかっているようにみえるのも全部あいつの愛情表現なんだから」

和と遥の言葉に、塩澤は涙を止めてじ、とグラスをながめる。温度差のせいかグラスの表面には細かい水滴ができていた。

つう、と流れてはコースターにしみていくそれを目で追っていたが、喉の渴きを覚えればやがて手にとってアイステイーを流し込んだ。一口飲んでその爽やかさに心がほどければ、もう一度口をつけてグラスを置いた。ほう、と少し落ち着いたように息を吐く。

「……私からしたら、そんなわかりにくい愛情表現いりません！もつと、和泉先輩みたいにわかりやすくしてくれればいいのに」

口を尖らせて言う塩澤に、和と遥は同じように苦笑いを浮かべる。

「でも広未だっけ好きだとは言葉にしてるんじゃないの？」

「……それは、でも！からかわれてるんじゃないかって、いつも疑っちゃうんです。津田先輩がいつも私をからかうような態度ばかり取るから」

いまだ納得いかないように塩澤がその言葉を続ければ、それには遙が反応した。ううん、と短く考えるようにうなれば、やがて小さく首を傾げて塩澤に質問を投げかける。

「塩澤さんは、広末君に好きだって言葉を伝えてる？」

「え？」

「広末君が、塩澤さんをかつかうように扱うのは、君のことが好きだっていうのもあるんだろうけど、ひよっとすると不安な心を隠しているからかもしれないよ？」

「……どういう事ですか？」

「自分ばかり好きだと伝えていても、相手の気持ちが見えないと不安でしょう？だから、確認したいんじゃないかなあ。怒ったり笑ったり、自分の言葉で反応する君を見て、安心しているのかもしれない。植えつけたいんだ。塩澤さんのなかに広末君の存在を」

遙の言葉に、塩澤は目を見開いて固まる。しかしやがて不機嫌に顔を顰めると、首を振ってそれを否定した。

「そんなはずありません。私の存在は、あのひとにとってそんなに大切なものじゃないんです。もしも……そこまで私を想ってくれてるのなら、あんな態度、とるわけありません」

「あんな態度？」

塩澤の穏やかではない様子に和が言葉を繰り返す。うなずいた塩澤は、怒りをたぎらせているように虚空をにらみつけている。

「津田先輩……遠くの大学に進学するんです。当然ここからは通えないから、四年間はあっちで一人暮らしをする、って」

「え！そうなんだ。……和、知ってたの？」

「いや。でもそうか……なんとなく予感があったんだ。あいつは研

究家肌だからねえ。行きたい学校がはつきりと決まってるんだろう
なとは思ってたんだよ」

和と広未は、お互い知らないことはないのではないか、というく
らい互いに精通している。しかしそれは多くを語らずとも察する性
質だからであり、自らがみずからの事を語る趣味はあまりない。露
見すればそれとなく言葉は交わすが、今回のように将来のこともは
つきりとお互いがお互いの口から何かを話すことはなかった。

「じゃあ、遠距離恋愛、になっちゃうんだ？」

遙の言葉に塩澤はうなずく。唇をかみながら、両の掌をぐ、と握
りしめたせい、スカートがくしゃり、と歪んだ。

「なんでもないみたいに、言うんです。大学は遠方へ行くから、っ
て。私に一言相談してくれたっていいじゃないですか！せめて悩ん
だフリくらいしてくれたっていいじゃないですか！先輩にとって、
私はなんなんですか？先輩は、私と離れ離れになっても、寂しくな
んかないんです。私が、先輩の大学に近い学校に進学するって言っ
たときも、呆れたみたいで態度で……」

またも目に涙をためた塩澤の背中を、和はさする。

彼女の言葉を受けて、きつと自分ではうまいなくさめはできない
だろうと和は考えた。当然だが、和と広未は似ている。それは表面
上だけのものではなく、考え方や価値観など深いところに至るまで
だ。だからこそ、和には広未の言葉を残酷だとは思えなかった。

もしも自分が遠方の学校へ進学するとなったとして、遙について
いくと言われたら、相手を傷つけてしまおうとわかっていても苦言を
呈するだろうと確信できる。それでも、広未が「なんでもないこと」
と思っていないのだけはわかる。きつと彼は彼なりに悩んで、答え

を出したのだろう。

「塩澤さんは、これからどうするの？その、言いにくいけど……別れる、っていう選択肢もあるわけだよな」

遙の言葉に、塩澤はびくり、と震える。考えないわけではなかったのだろう。しかし彼女自身から、そういった類の言葉はいまのところ出ていない。果たして塩澤の中に、その選択肢はあり得るのだろうか。

「……別れたくは、ありません。でも……遠距離なんて、自信がありません。四年経ったら帰って来るって先輩は言ったけど、それだつて信じられません。向こうでそのまま就職しちゃうかもしれないし、大学に残つて勉強を続けるかもしれないし」

「広末君の言葉が今は信じられない、と」
「……和先輩と和泉先輩みたいなカップルだったら。きっと、離れても相手のことを想えるんでしょうね。でも、私たちは！そんな強い絆もないし、津田先輩は飲み会とか、合コンとか、浮気とか」
「いやいやいや！広末はそういうことに精力的になるタイプじゃないよ！？」

さすがに塩澤の言葉に待ったをかけた。色々と考えすぎて飛躍してしまっているらしい。

「高校の中でも、津田先輩はモテるんです。それだつて毎回不安になつちやうのに……会いたいときに会える距離にいなきゃ愛想を尽かされるに決まっています！それでなくとも、先輩は嘘がすごくうまいんです。自分が単純だつていうのも自覚しています。だからきつと……浮気されても馬鹿な私は気付かないんです」

「でも、別れるのは嫌なんだよね？」

和の言葉に、塩澤がぐ、と顔を歪ませる。思わず言ってしまった言葉に、和は狼狽すれば、その様子を見た遙がため息をついた。

「……まあ、広末君も良くないよね。せめて塩澤さんが信じたいって思えるような旅立ちをしてくれないと、不安になっちゃうのも無理ないよ」

「このままいけば、結局、卒業する頃には別れを選択しちゃうような気がして……」

こんなことを相談してごめんなさい。そう小さく呟かれた言葉と、苦しそうな表情をみて、和と遙は心底目の前の女の子を笑顔にした、と思ったのだった。

第一百四十三話「ならば愛をこめて・その5」

「うーす」

右手を上げて和がまるでどこぞの中高年のような声を出すので、広未はそれに苦笑した。

津田家の二階にある彼の部屋へと和が訪れたのは、塩澤が彼女の目の前で涙を見せた次の日だった。連絡なしに突然の訪問であったが、別段広未は狼狽していない。

「今日か明日にでも来るだろうと思ってた」

「わかってたんならなんであんな態度取るわけなの」

ため息を吐いて部屋に上がり、和はいつものように勉強机の椅子に腰かける。そんな彼女を視界に留めつつ、広未もベッドへと腰かけた。

「……まあ、からかいすぎてる自覚はあるけど、最近はそれでも言葉は与えてた」

「でも塩ちゃん的にはそれもからかいの範疇だと思ってるみたいだけれど？」

「そこだよな。まったく、心外もいいとこだ」

弱りきったような広未の姿を、和は珍しいものをみた、といわんばかりの表情でみつめる。それに気付いたのか、広未は幼馴染のその顔が気に入らないとばかりに片眉をあげて抗議の意を示した。和はそれをわかっていながらあえて無視すると、椅子に座っていた足を組んでは広未の瞳を真っ直ぐとみつめる。

「自業自得といえはそうでしょ。他の人間がそんなに察知能力が高くないっていつか私に説教したのはあんただよ」

和の言葉に広未は無言のため息を吐けば、前髪をくしゃり、と握りつぶした。

「塩澤は確かに単純馬鹿だ。わかりやすく示してやらないと混乱するのはわかってる。それでも、真剣に発した俺の言葉すべてを嘘だと一蹴されるいわれはないぞ」

「まあねえ。私だって現場見てないから断定できないけど……塩ぢやんが真っ赤になって瞳潤ませるくらいことは言ってるだろうしやっつてんだろうし。さすがに今は混乱して全部嘘だって言っちゃってるだけなんじゃないの？」

明け透けな言葉に呆れつつも、広未はベッドに横たわらせた自身の片足を曲げ、そこに頬をつけた。けだるそうなその様子に黙して和はただ彼の次の言葉を待つ。

「……なんで、と訊ねてはいるが、お前だって理由をわかってるだろう」

塩澤に対して、広未が放った言葉と、その態度。和は黙って彼の問いに首肯する。

「自分でも、同じ事してると思う。寂しいと泣かれようが、だめだと罵られようが、やりたい事はつきり決まっっていて、志がそこにあるんだつたら、私はたとえ別れる結果になってもそこへ行くと思う。……我儘は言えないもん。待っててなんていちばん罪な言葉だからね」

「俺は、戻ってくる、とは言ったが。それ以上は言えなかった」

自嘲しているかのように見える広末に、和も同じような笑みで返せば、椅子を立ち上がるとベッドに上半身だけ突っ伏す。遙や塩澤が見れば怒鳴られそうな光景も、しかしふたりの間ではなにひとつ珍しいものではない。

突っ伏した状態から顔だけ動かし、和は下から広末を見上げる。

「……塩ちゃん、広末の近くの大学なり専門学校なり受けるって言ったけど、止めたって？」

「お前ならどうする」

「……まあ、同じだろうね。和泉君がこっちでやりたいことがあるってんなら何も言わないけど、ただ自分についていきたいだけだっけ言うんなら、そんなの意味がないと思っちゃうし」

「……………」

ゆっくりと上半身を起こして、和は広末の傍らへと腰を下ろす。

広末も止めることはなく、ふたりはベッドの上に隣り合って座っていた。

「でもさあ、私、今ならそれがはつきりと100%でもって正しいとは言えない」

「……………そうか」

苦笑する彼の気配を感じ取り、和もそれに応えるように声をあげて笑う。

「和泉君と出会う前はねえ……自分しか大切じゃなかったし、誰かを世界に入れるとか想像できなかったし。でも今はね……離れたら、やっぱり辛いと思う。それでも私はさ、和泉君は浮気はないってほとんど思えるんだよ。ただ塩ちゃんの場合はね……やっぱりそれが

不安みたい」

「信用されていないということだな、俺は」

「ま、私と違って素直な可愛い女の子ですからね」

「和みたいな強靱な精神力でも寂しいなら、なおさらあいつには酷か」

「失礼な。あんただって寂しいだろうし、浮気じゃなくて本気を心配してるんじゃないの？」

みるみる広末の表情が不機嫌に歪められていくのを確認すれば、和はにんまりとほくそ笑んだ。

塩澤は、はつきり言ってしまうえば可愛い。くるくると変わる表情も、今時珍しいまでの素直で騙されやすい性格も、なにかもが男性の加虐心をそそのめるものだ。なによりも、弱っている女性というのは、狙われやすい。塩澤のような性格だと、どんなに突っぱねても強引に迫られてはどうなるかわからない。

むしろ広末の浮気よりも、和は個人的にそちらのが心配だと思っていた。それはきつと、隣に座るこの男も同じなのだろう。

「離れたらだめになるのは、広末かもしれないよね」

「……言ってくれるな」

「あはは」。私もそうかもしれないよ」

「それ以前に、遙君はお前から離れないだろう」

「そうかねえ。……でもさあ、広末。わかんないじゃん、どこに重きを置くかなんて」

「ん？」

和の言葉に、初めてわからないという表情を広末がすれば、和は微笑んで彼の瞳をみつめる。

「確かに、怖いよね。そのひとの将来を、未来を自分が背負っちゃ

うかもしれないなんて。でもさ、塩ちゃんにきちんと聞いてみた？
やりたいことはないのかって」

「……………」
「もしかしたら彼女の描く夢は、広未といっしょになることももしれないじゃん。それなら、塩ちゃんがなにをおいてもあんだといっしょにいたってのは至極当然の結論でしょ？そこまで決心してるのかもしいよ」

「馬鹿をいうな。あいつはまだ高校生だぞ」

広未の言葉に、あんだもでしょ、と和は彼の額を小突く。広未はそれが気に入らないのか、うるさい、と和の手を振り払った。

「もしそうじゃなく、勢いで言った言葉だったんだとしてもだよ。ちゃんと受け止めて話をしてあげなきゃ行っちゃだめでしょ。こうなるってわかって、塩ちゃんを懐に入れたのはあんだの責任なんだから。逃げずに全部言っちゃんなよ、自分がどんなに情けない心境なのかも、塩ちゃんの事思って取った態度だったってことも」
「…………受け入れられなかったら、と思うとな」

ぼつり、と呟いた幼馴染の意外な言葉に、和は目を丸くする。

つまりは、彼は弱った所をみせて彼女にそれを拒絶されるのが怖いのだ。男性な分、そこらへんの虚栄心も和より強いのだろうし、見せ辛いというのもわからなくはない。

「…………男のプライドに付き合わされるのなんてまっぴらごめん」

「！」

「塩ちゃんの心を代弁してあげました。信じてやんなよ、てめえが惚れた女だろう！」

「なんだその台詞があった言葉は」

「素面で言うのは色々とあれじゃん？」

悪戯っぽく笑う和に、広未は阿呆か、とつつこんでは先ほど和がしたように彼女の額をはたいた。

「ねえ、音楽かけていい」

「ああ」

和が了承を得て机の上に置かれたPCへと足を運ぶ。慣れた手つきで電源ボタンを押せば、曲のファイルを探しては再生ボタンを押した。

「広未、コンポ買わないの？」

「まあ、音の良し悪しを考えればそうしたほうがいいんだけどな。どうもそこまでのこだわりは持てん」

「ああ……のわりにはヘッドホンはけっこう高いよね。まあ、外界から遮断されたいときってあるからわかるんだけど」

「理由までわかってるなら質問するなよ」

広未の言葉に、和がまあね、と笑う。PCから流れる音楽を聴いて、和は広未の方へと振り返った。

「ねえ、広未。私、手紙書くよ」

「……『ならば愛を込めて』、か？」

「読み返して感動してくれるでしょ」

「阿呆」

スピーカーから流れる淡々としたボーカルの声は、和と広未には妙に心地よく感じられていた。

「んー……ちよっと広未、今何時」

「ひとに訊く前に時計を見ればいいだろう」
「面倒臭いから訊いてんじゃんよ……」

気が付けばベッドに寝転がりまどろんでいたふたりは、本格的に寝てしまっていたらしい。元々一人用のベッドにいつしよに眠るのはかなり狭く、和と広未は体のあちこちがきしんで痛かった。そのためか、かなり長いこと横になっていたと推察できて、お互いに少し気持ちが急いでいた。

「痛いと思ったら腕時計したままだった……ねえ、10時ってこれ、夜の10時？」

和が寝返りをうつたりなんだりでベルトの痕がついてしまっている腕をながめながら、時計の針をみつめる。そこに示された数字は自身の体内時計とかなりの齟齬があり、和は渴いた笑いを浮かべてしまう。

「……とりあえず夜ではないな。外が明るい」
「うん、まあ、カーテンから明かりもれてるもんね」

わかってたけどきいてみた、と和が付け足して言う。広未は後頭部をかきつつ、ううん、とうなり声をあげた。

「お前が昨日ここに来たのが昼過ぎだったか……晩飯も食べずに爆睡したみたいだな」
「ふたりで寝るとなーんか眠りが深くなるよね。たまにこうなるといつつも12時間とか寝ちやう気がする」

少し寝惚け気味でも意識がはっきりしてきたふたりは、のそのそと起き上がれば首を回したりと体のあちこちを検分する。すると広

未が和をまたごとと身体を浮かせた。

「とりあえずトイレ……」

「ちよつとまった、私も行きたい」

「ここは俺の家だ、俺が先」

「うるさい、客人を立てろ」

「アポなしにふらふらやってくる奴はもはや客とは言わん」

「うっせえなんと言われようと客じゃあ！」

珍しくくだらない押し問答をふたりがしていれば、廊下から騒々しい物音がする。

和と広未がそろって嫌な予感に思考を固まらせたのと、部屋の扉が勢い良く開かれたのはまったく同時であった。

開け放たれた先に居る人物は予想通りのふたりで、和と広未は先ほどの押し問答をしていた状態で固まった。広未がうつぶせになり、和がその上からのしかかっている体勢は、ふたりの常識を知らない人間であるならば恋人同士のじゃれあいと信じて疑わないことだろう。

「「おはよう」」

思考回路が浮上してきたふたりの第一声はこれまたぴったり息が合い、胡散臭い笑顔とあいまって阿吽の呼吸をまさしく体現したかのようだった。

ふたりの状態に目を見開いて口をあんどぐりと開けていたのはもちろん遙と塩澤だ。

元々和は必ず夜には連絡をいれると約束していたので、携帯電話をいくら鳴らしても応答がないことにふたりが訝りここまで様子を見にきたのだろう。

お互いの家はこれが日常茶飯事であるため、それぞれがそれぞれ

の家へ行つて来ると一言告げてしまえば、その日のうちに帰つて来ずとも心配するような両家ではなかった。

だからこそ、玄関口であっけらかんとした口調で広未の母親がいつしよに寝てるんじゃない？と言つたときも、遙は信じられない言葉を聞いたかのように目を見開いた。塩澤もそうだ。

焦つて二階の広未の私室へと踏み込めば案の定。ふたりがあられもない姿でベッドに横たわっているではないか。

「うわっ!？」

鬼の形相ともいえる表情で、遙は和の腕をちからいっぱい握れば、手首をつかんだまま冷ややかな視線を彼女へと向けている。

「……ふたりきりで眠つてたの？同じベッドで？」

「え？まあ、そうなりますけど」

「広未君？さすがにこれはいただけじゃないよ？」

絶対零度の微笑みで遙が広未を見やれば、広未は素直に謝罪の言葉を告げる。しかしその間、口と同時に手足を動かす事も忘れない彼は、つかつかと歩けば廊下で立ち尽くす塩澤の腕をぐい、と引つ張れば部屋へと強引に押し込む。

それに驚いた時には、塩澤はもう広未の腕の中にすっぽりと入り込んでいた。

「本当にごめん。さすがに和が遙君と付き合いだしてからこうなつたことはなかったんだ。今回は色々話し込んで疲れてしまったからか……気付いたら寝てしまつてたらしくて」

広未の言葉に反応した塩澤が、悔しそうに唇を噛みながら呟く。

「……和先輩とふたりで、ここで、寝てたっというんですか」

「ああそうだ」

「……っ嫌い！先輩なんて大嫌い！信じられない！浮気者！！」

「心外だな。あれは女じゃない、和だ。お前には何度もそう言ってきただろう」

「朝までぐっすり寝るなんて、よほど信頼し合っていないと無理でしょ！？先輩は、私とじゃこんな風にならないってわかってるもん！」

塩澤が広未の懐から抜け出そうとしたばたともがくが、広未は逃がさないといわんばかりに彼女の身体を抱きこんでいる。少し余裕があるのか、塩澤の言葉に目を丸くすればさらりと爆弾発言をする。

「当たり前じゃないか。直子が隣に居て、どうして穏やかに寝なきゃならない？」

「……え」

「ベッドで隣合わせになって、睡眠なんかもつたいたいことするわけないだろう。俺は今だって、お前の全部がほしくてたまらないのに」

「！ な、ななななにを」

「真っ赤だな。言っておくが冗談でもからかっているんでもなく本心だぞ？お前、最近特に俺の前で無防備すぎるんだよ。俺がどれだけ理性を総動員させてたかまるでわかってないだろう」

「え、な、なんの話之急にするんですか！嘘ばかり！！やっぱり嫌い！！」

癩癩を起こしたかのように暴れる塩澤を、広未は必死でおさえこむ。和と遙はしばらくぼかん、とながめていたが、やがてちらり、とこちらを見た広未に和がうなずけば、遙の手をひいて静かに部屋を出た。

ぱたん、と閉じた扉の音がやけに響くのは、きつと和の胸中が穏

やかではないせいだろう。

隣から感じる冷えたオーラは、決して気のせいなどではない。

和はおそろおそろる本体へと視線をやった。

「……ひっ！」

あまりにも爽やかなその笑顔に、和は恐ろしさから短い悲鳴をあげる。いまさらながら繋いでしまった手が憎いと感じれば、離そうと力を入れるがびくともしなかった。遙が、和の細い手首をこれでもかという力で握り締めている。

「そんなにおびえなくてもいいじゃない？俺はね、塩澤さんよりは君たちのことを理解してるつもりだよ、ある程度は許容してきたし」

「……あああの、ごごごごめんなさい」

「謝るようなことをしたの？」

遙の言葉に、和は何度も首を横に振る。その反応に、まずは満足そうに遙はうなずいた。

「お仕置きは俺の部屋でだよ。もちろん拒否権はないって、わかってるね？」

「は、はいいい……」

泣きそうな顔をする和の表情に、遙はいつになく加虐心をそそられたのであった。

第四百四十四話「日常が続く幸福」

「寂しい？」

「……和泉君」

ベランダからのぞく月を、和はほんやりとながめていた。けだるさは不思議とあまり感じなく喉の渇きを覚えれば台所へと足を運んだ。

水を一杯飲んだところで、外からもれる月明かりに誘われれば和はふらふらとベランダへと出た。それが先ほどのこと。遙は、隣に彼女が居ないことに気がついてこちらへやってきたらしい。

彼の質問にしばらく考え込む仕草をしてみせた和は、しかしうまく答えをみつけれなかったらしく小さくうなり声をあげた。

「わからないなあ。寂しい、というのはあまりにも直接的すぎて。そんな気もするしー、それでもない気もするしー」

和が頬杖をつきながらまたも明るすぎる月へと視線をやれば、遙が和の横顔を面白くなさそうにながめる。

「ふうん？……なんかやつぱり妬けるな」

ぼつり、と咳かれた言葉に和は目を丸くすれば、次には眉根を寄せて遙の顔を見やる。ふたりはちょうど向き合う形となった。

「質問してきたのは和泉君でしょう」

「答えが想定外だったからね」

「？ 想定外って」

和がますます額に皺を刻んでいくので、遥は苦笑すればそれをのばすように人差し指をあててはこする。

「固定されちゃうでしょ」

「……………」

半眼になり遥を見やる和を、遥はさらに苦笑してしばらく眉根をさすった。

先に観念したのか、和がため息を吐いて表情を険のあるものからやわらげれば、遥は満足したかのように微笑み、次には愛おしそうに恋人の頭をゆっくりと撫でる。

「素直に寂しい、て言われても妬かない自信はあったんだけどね。」

……………まさかそんな言葉が返ってくるとは

「……………だって、自分の半身がちぎられそうになったら和泉君だって戸惑うでしょ」

それと似たようなもんだよ、と和がさらりと言えば、遥はますます面白くない。

「お仕置き続行」

「は？」

「さつきは手加減したけどもうしない。こついつときは嘘でも良いから「和泉君が居るから寂しくない」とか言うものだよ」

「え、だって和泉君と広未はそもそも存在の意味が違う」

「それはそれ、これはこれ。さ、おいで」

ぐい、と腕を引っ張られたときには、遅すぎた赤ランプが和の脳内でこつこつと輝いていた。

遙にお仕置きと称して色々な事をされ、塩澤に謝罪をし、なんとか問題がおさまった頃には、広末と塩澤もどうやら大分落ち着いたようだった。

「寂しさばかり先行させて考えなしについていくって言っちゃいましたけど……私は私なりに自分のできることはなんなのか、きちんと考えます。まだ時間はあるんですし！和先輩、和泉先輩、色々ありがとうございます！」

そう言って晴れやかに笑った塩澤の顔は、ひとつ大人になっていたように思えて、和と遙はその様子に何やら面映い気持ちを抱いたのだった。

残された時間は少なくも多くもない。そう感じれば、和もやはり寂しさはある。なにせ傍らにずっと在るものと信じて疑わなかったのだ。どんなに離れても心が遠くなる心配はまるでしていないが、半身を奪われるような、どこかそんな感覚が和にはあった。広末もきつとどこかでそのような感情を抱いているに違いなく、しかしふたりはその感情を表に出すことはしなかった。

それはひどく照れ臭く、ひどくあらたまってしまうような気がして、そんな他人行儀な仕草をしてみせるのを、お互いに厭うた結果だった。

塩澤と遙も、ふたりに流れる感情をどこか感じ取ったのかもしれない。なかったが、それを責める真似はしない。結局、ふたりで一夜を過ごした事実があったとて、本気で和と広末を詰ることはできない。つまりはふたりはそういう関係なのだ、理性ではじゅうぶんに承知している結果であり、彼らの恋人に対しての最大限の譲歩の形なのである。

和と広末も今回のことはおおいに反省し、二度と同じ過ちは繰り返さない、と肝に銘じたのであった。

移ろいゆく季節にどこか残酷さを覚えるのは、きっと和だけではないのだろう。

日に日に高校生として過ごす時間がなくなるのを肌で感じるのは、どこか辛いものがあると考えたのは昨日であったか、一昨日であったか。最近はそのことばかり考えていると自嘲しては、和は目の前の本へと視線をうつす。

休日にあたる今日、和はひとり図書館へと足を運んでいた。最近また少し忙しそうにしている遙を見てみると、自分ばかりこう休日を謳歌して良いものかと和は思わなくもなかったが、疲れるほどに和を懐に抱え込む彼と会うとそんな申し訳なさもふつとんでしまう。いつそとんとんだ、くらいに考えるようになっていた。

「あの」

ひとつため息を吐いて本に視線を戻そうと下を向いた瞬間、前方から声がきこえる。和は首を傾げつつもなんであろうかと顔を上げれば、そこには和と同じ年頃だと推察される男が立っていた。

「……なにか」

不思議に思いながらも、無視するいわれもないだろうと和は声をあげる。少し硬質なものになってしまったのは警戒心もあるためしかたがない。相手は特に気にしていない様子だったので、ひとまず和は内心で安堵した。

それよりも、対面したときから思いつめているようなその表情が気になって、和は首を傾げる。

質問してみたものの、男はいつこうに次の声を発そうとはしない。公衆の面前では憚れる何かがあるのかと思ったが、さすがにみずか

らその先を提示する優しさは彼女にはなかった。しかたなく、続けて言葉を発する。

「なにもないのなら、読書の続きをしたいのですが」

和の言葉に男は焦ったように目を見開けば、ようやく声をあげた。

「いえ！あの、違うんです。お手間でなければ、場所を移動しても良いでしょうか？」

「……はあ、まあ、別にかまいませんけど」

内心で早くそれを言えばいいのに、と思いつつも、和は席を立つ。もし食堂の方へ移動するのならば本を戻してこようと考え、和は一声かけて本を戻しに歩いた。

てつきり和の座っていた場所で待っていると思っていたが、後ろを振り返ると男はすぐ傍に立っていた。和は一瞬心臓を跳ね上げさせるも、顔には出さずに無言で男の瞳をみつめる。

瞬間、男の頬に朱がさした。

「……あの、初対面でひかれるとは思ってんですけど。僕、いつもここを利用して。たびたびあなたをみかけていたんです」

「………はあ」

意を決したかのように先ほどまで右往左往していた視線は、今は真っ直ぐと和を見据えている。誠実そうなその顔は、嫌悪感を抱くようなものでもない。和は黙って行く末を受け入れることにした。

「本を読むその顔がとても綺麗だと思って……その、ようは、一目惚れじゃないですけど……か、彼氏とか、いらっしやいますか!？」

「……は」

「す、好きなんです。もしよければ、友達からでも良いので……付き合っていただけませんか！」

今や首まで真っ赤にした男は、握りこぶしを作って半ば叫ぶように和に問いかける。

所謂、告白だと気付いたのは、男がすべてを言い終わった瞬間だ。まさか人生三度目の告白を受けるとは思いもよらず、和はめまいを覚えれば額をおさえてうなり声をあげた。

「……すみません、交際してる男性がいるので、その、おつき合いたとかそういうのは出来ません」

「！　そ、そう、ですか」

和の言葉に明らかに消沈した男の様子に、悪くはなくとも和の胸はずきり、と痛む。

「……あの、おつき合いしてる方って、どんなひとですか？」

男の言葉に、一瞬考えた和であったが、やがてゆっくりと口を開けば微笑んだ。

「当たり前のように時間を共有できるひとです」

その言葉を聞いた瞬間、男は諦めたかのように力無く微笑むと、話を聞いてくれてありがとうございました、と一言告げて去って行った。

どこかふわふわとした心持ちで、和はこれ以上読書をする気も起きずに、図書館をあとにする。

見上げた空はいつもと同じはずだが、どこか不思議な色彩をしているように思えて、和は目を細めた。頭に浮かぶのは遙のことで、

しかしそれがなぜなのか自身に問いかけても和にはわからなかった。会いたい、と、強烈に思うのはいつぶりの事であったのか。和は戸惑いを覚えつつも、ふらふらと彼のマンションに足を運ぶ自分を止められない。

気付けば電車に乗り、最寄り駅へと降り立っていた。

「和？」

「！ 和泉君……」

目を丸くする彼に和も同じような表情で返す。

駅を出て遥のマンションを指さそうと思っていたら、目の前に彼がいたからだ。

「どうしたの？ なにか用事だった？」

「え、いや」

ただ会いたかったただけだ、と言えたら楽だが、さすがにそんな言葉がすんなり出ではこなかった。まだ彼女はそこまで自分の感情を処理しきれないのだ。

視線をうろつろとさせながら焦る彼女に、当然ながら遥は訝るように目をやる。

「なんかあった？」

「え？ いや、そういうわけではないんだけど」

とつさにでた言葉に、胸中で「なんでもない」事柄として処理してしまっているのか？ と思ったが、わざわざ告白された、と恋人に言う趣味を和は持ち合わせていなかった。

言われたところで彼が不快感をあらわにするのは目に見えているし、もうすべて済んだことなのだ。このまま何も言わずに終わるの

ならばそれがいちばん良いに決まっている。

そう結論付ければ、和は小さく息を吐いた。

「なんかね、柄じゃないんだけどさ。ちょっと会えるかなあ、とか思ってた」

「……………やっぱりなんかあったんでしょ」

「……………なんかないと私がこういう言動するのはおかしいわけ？」

じろ、と和が遙の顔をにらみつけてやれば、しかし遙はそれに動揺することなく不敵に微笑んでみせた。

「自分の時間を過ごすのが好きな俺の恋人さんは、よほどのことがないかぎり自分から足を運んでくれないからねえ。で？なにがあったの？」

和は遙の笑顔と有無を言わせない迫力に、内心で驚いていた。今までのパターンで、ここで言い負かされるとは思ってもおらず、和は自身のどこかが敗北を告げるのを我慢できなくなっていた。

あとから考えれば、ここで素直に言っしまえば良かったのだ。

「だーからー。別になんもないってば。確かに私は珍しいこととしてるって自覚はあるけどさ！だから今言うのもけっこう恥ずかしかったのに、そういう態度で応戦してくるんだ？いいよだったら帰るし」

怒ったふりをしてこのまま強引に帰れば、あとは有耶無耶にしまえる。そう思えば和は行動を起こそうと改札へ踵を返す。

一、二、三步すすんだところで、和の足が地面に縫いとめられたかのように動かなくなった。

「……………離してくれませんか」

「いやー」

彼女が呆れまじりに言っただけで、後方からはなんとも楽しそうな声が響いてくる。

がちりと背後から和の身体を抱きこむ遙は、甘い檻に閉じ込められ身動きできない彼女を楽しそうにながめている。

じろじろと見られるのもたまったものではない。和は抵抗しようと身体を捻る。

「せつかくここまで来たんだし、部屋にあがっていつてよ。ね？」

「わかったから、離してくれる？別に本気で怒ってるわけでもないし逃げないよ」

結局はため息を吐いて遙の言葉を受け入れるしかなかった和は、もはや敗北宣言をしたようなものだ。最近扱いづらくなったな、と和はひとりごちる。

遙は、和の言葉を信用しきれなかったのかにこにここと笑顔を崩さないままに和の左手を自身の右手でしっかりと握り込んでいた。

開錠の音がして、和は音の大きさに一瞬肩を揺らした。いつものように部屋へ上がれば、和は無言でコーヒーを淹れようと用意する。遙はその様子を目で追いつつ、テーブルに着けば頬杖をついて和をみつめた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

自身のカップにはブラックを、遙にはミルクを添えて渡せば、彼がにっこりと微笑む。相変わらず美味しく、和は胸中とは裏腹に思わず顔を綻ばせた。

そんな彼女の表情を慈しむようにながめ、やがて遙は口を開いた。

「で？なにがあったの？」
「だから、なんもない」

こういう場合、いかにも挙動不審になるとか、妙に真つ直ぐ相手の顔を見るとか、そういう反応をしてくれるならば嘘は嘘だと見抜きやすいだろう。

しかし目の前に対峙している女性は笹森和、そのひとである。態度では、真実か否かを見極めるにはどうしたって無理だ。遥は結局、自身の勘を信じるしかない。

一度ふ、と息を吐くと、遥はにっこりと微笑んだ。

「別に、何もなければそれでいいんだ。でも、それが本当なら、寂しい思いをさせちゃったってことだよな？」

「え？」

次の言葉が予測できないのか、和は眉を寄せて遥の次を探る。遥は、その様子に再度微笑んだ。

「ということ、いまよりもっと頻繁に俺たちは会うべきだよな？
今までは遠慮して言えなかったんでしよう？ごめんね、和。察してあげられなくて。これからは必ず休みの日も和に会いに行くからね」

甘い睦言を囁くように、遥は和の頬を撫でながら先ほどの台詞を紡ぐ。

和には、それが心からの言葉ではないと十二分にわかっており、ここまで追い詰められてなお隠し通す意味もない。

本当に完全敗北だ。和は心の中でぎりぎり悔しさに苛まれていた。

「卑怯だなあ……つうかそんな大したことじゃないんだよ？ほんと」
「だったら言ってもいいじゃないか」

呆れの苦笑をもらす彼女に、不機嫌に口を尖らせる彼。

遙は、和の隠し事もさることながら、相変わらずそこまで自分と休日をびっしり過ごすのは嫌なのか、と多少傷付く思いだった。

和は、今はもう彼をそう拒絶する理由もない。時間を共有できるということは、彼女にとってそういう意味合いなのだ。同じ空間に居て別々のことを自然とできる相手は貴重で、なおかつくっついていても苦にならないという相手がみつかったのは、和にとって奇跡のようなものだった。

そうではなく、もし嫌がらせの延長だとすれば、無理矢理外に出かけようと言われそうでは和は怖かったのだ。部屋で会うのは別にかまわないが、いちいち外に出るとなれば話は別である。和は自他共に認めるインドア派なのだ。

「和泉君が不快になるかと思ったから」

「まさか、また痴漢に遭ったとかじゃないだろうね。それだったら隠す必要なんか全然ないんだよ？俺に会いに来てくれたのも嬉しいし」

「あ、違う違う。それだったら言ってるってば」

焦った遙を和も少し慌てて否定し、それならば、と遙はますます和を怪訝そうにうかがった。

もしも打ち明けるにしても本当はもっとさらっと済ませたかった。和は最後の意地で言い淀むのはやめようと思えば、あっさりとなんでもないことのように事実を切り出す。

「ただ告白されただけ」

「コーヒーを飲みながら、なんでもないのでしょ、と言うように遥をうかがえば、遥は一瞬言葉の意味を理解するのが遅れたのか、数秒後にすっとんきょうな声をあげた。

「はあ！？え、なに、今日どこ行ってたの？」

「図書館」

「てことは、図書館の常連かなにか？」

「ああ、だと思っよ。いつもみかけて、みたいなこと言われたから「はああ！？」

「ちよ、うるさい」

「なんでそれが大した事ないわけ！」

遥の反応は大方予想通りではあるが、大した事ないという意見に反対されると思ってもおらず、和は首を傾げた。

「まあ、私にとってはけっこう衝撃的ではあったけど……和泉君には大した事じゃないでしょ？だって私断ったんだし、浮気するつもりも和泉君以外の恋人になるつもりもないんだから」

和の言葉に遥は一瞬頬を染めたが、しかし次にはそうじゃないよ！と大声をあげる。

「そりゃ、それは嬉しいけど！俺にとっても大した事だよ！」

「なぜ？和泉君は私と付き合いたしてから色々なひとに告白されてるのに」

「俺はいいの！見た目で寄ってくる子ばかりだし、たいがい一回で諦めるんだから！」

「図々しくはあるけど私のも一応、見た目に分類されるんじゃない？会話したこともないひとだったし。それにそのひとと諦めた様子だったよ」

淡々と遙をいなす和をみて、遙は逆にどんどん冷静さを欠いていく。溺愛する恋人がこの馬の骨ともわからない男に愛を囁かれたのだから、当然と言えば当然である。

あまりにも淡泊すぎる和の様子に、遙は自分も片想いなのではないか、と一瞬錯覚しそうになったほどだ。

「……ねえ、なんて言われて告白されたの？」

「え？普通に、付き合ってくれませんか、って……」

「どこをどう好きって言われたの？」

「ん？ええと……あ、そういえば和泉君みたいなこと言ってたなあ」

和の呟きに、遙の眉がぴくり、と上がる。和は気付いてないのか、思い出すように視線を空中にさまよわせていた。

「本を読む顔が……綺麗だって、言ってくれた、んだっけ」

「……なんでちょっと顔赤くしてるの」

「だって自分で言ったらナルシストみたいでかなり恥ずかしくない？」

ああやだやだ、と手をぱたぱたと動かす和をみて、遙は今や鋭い双眸を真っ直ぐに彼女へと向けていた。

「しばらく図書館禁止」

「は！？ちよっと何その横暴な言葉は！」

「そいつ、諦めたと思えない。和の纏う空気を好きになっただってこじやないか。危ない」

「何をわけのわからない」

「だめ！だから嫌なんだ、人前で本を読みますの！学校は俺の存在をこれでもかって強調できるけど、図書館でさすがにそんなことでき

ないし」

「当たり前でしょ!？」

悔しそうに呟く遙に、和はぎよっとして目を見開く。

「俺といっしょに行くなら……行ってもいい」

「そんな、和泉君最近忙しいし、あんまり行けないでしょ。そんな要求呑めない!」

「だめ!せめて二週間!そしたら俺、もうちょっと落ち着くから!和、わかっただいしょう。相手が本気なぶん、俺に群がる子たちより断然たちが悪いんだよ?」

「……まあ、二週間なら良いけど……でも、そんなに警戒しなくたって」

和のしかめっ面に、遙は呆れるようにため息を吐けば、毎度おなじみのお姫様抱っこをほどこして彼女を寝室へと運んだ。相変わらず悲鳴をあげながらも、和はベッドに落とされる。

「自分の魅力に無自覚なのは本当いただけない。俺が本気で軟禁する前に改善してくれないと困るよ」

「……そう言われましても」

首を傾げごめん?と疑問系で謝る彼女に、遙は脱力感に襲われながら今すぐにも押し倒しそうな雰囲気解除した。それを察したのか、和はそつと上半身を起き上がらせる。

遙は、ベッドサイドに座りなおしてため息を吐けば、思い出した疑問を口にした。

「でも、どうして俺に会いに来てくれたの?」

「え?ああ……うん、どうしてかさっきまでわかんなかったんだけ

どね」

少し照れ臭いのか、はにかむようにする和の表情は可愛らしい。遥は胸がしめつけられるような感覚を味わった。

「好意を寄せられてまあ、純粹に嬉しかったのはあったと思う。でも、なんていうか……和泉君に覚える感情とは全然違うんだなあって妙に実感したんだね、きっと。同じ事言われても、相手によってまるで違うんだよなっでいまさらだけどすごく思っで。そしたらなんか、会いたくなっでたの。確かめたくなっでたんだ、そういうとき自分はどう感じてたかなあっで」

それこそなんか柄じゃないね、と笑う和に、遥はもうだめだ、と頬を染めれば、向き直っで和の顎をつかんだ。

「和、ありがとう。大好きだよ」

「……ありがとう？」

「だっで今の、俺が大好きだっで言っでてくれてるよなものじゃない」

「ああ、まあ、そうだね。なんか、ちよっで照れるなあ」

和の言葉に遥もいっしよになっで微笑めば、どちらからともなく唇を寄せた。

こんなに幸せでいいのかな、と呟いた遥に、和はおおげさな、と笑っで、みずから遥の唇を自身のそれでふさいだのだった。

第百四十四話「日常が続く幸福」（後書き）

ここまでお読みくださりありがとうございます。ありがとうございました。
次回、最終回となります。

第四百十五話「いつもそばにいるだけ、だけど愛してるよ。」

午前五時。笹森和は目を覚ます。

彼女がまず目を覚まして向かう場所は日によってトイレか洗面台かまちまちだが、どちらかひとつ。今日はトイレの日であるらしく、まだ静かな笹森家に水が勢い良く流れる音が響いた。

あくびをひとつして、今度は洗面台へと歩く。顔を洗い、髪を少し整えたら、パジャマ代わりのスウェットから制服へと着替える。

着替えが終われば、部屋にある鏡へと視線をやる。鏡は大きくも小さくもない、中くらいの、彼女いわく「ちょうどいい」大きさのものだった。

机に置いてある通学鞆から、眼鏡ケースを取り出すと、そこに括られている黒い、髪を結ぶ専用のゴムを取り出して、くしで髪の毛を右側へと寄せながらひとつに縛る。高さをちょうどいいところで留めるように今日一番最初の集中力を見せ、満足いく髪型が完成した。

ゴムがなくなった眼鏡ケースを開けば、そこには黒縁眼鏡が鎮座している。和はそれをかければ、ふむ、と声を出さずになぜいた。机の上に置いた腕時計を手にとって、左手へとくくる。現在時刻は五時二十分だ。

部屋でいちばん存在感のある本棚の前へ立てば、和は上下左右へ視線をさまよわせる。手に取ったのは外で読んで危うく不審者になりかけた、いつか爆笑した本だ。ドラマ化は原作のイメージを完全に無視していて、映画もぴったりとまではいかないものの、やはり映画で主演を演じた彼のが好きであった、と和はひとりごちる。

今回は笑わずに読みきる、と自身に宣言をし、和は本に月と太陽のカバーをつけてそつと鞆へとしまった。

鞆の中身を検分し、もれはひとつもない、と確認すれば、和はゆつくりと階段を下りる。

母親である依子が朝食を用意してくれている。おはよう、という母親のあいさつに和も笑顔でおはようと返した。

昨夜作っておいたおにぎりと簡単なおかずを取り出し、おかずは電子レンジに放る。台所の引き出しから巾着を取り出して、おにぎりだけ先にそこへおさめた。

いただきます、と手を合わせ、朝ごはんであるトースト、サラダ、ハムエッグ、野菜スープ、コーヒーをそれぞれ食す。和は母親の料理がとても好きだった。

和がごはんを食べているあいだ、電子レンジから温め終わったおかずを巾着袋に入れてくれるのは依子だ。それありがとう、とお礼を言い、和は食べ終われば台所で自身が汚した食器を洗う。

ごちそうさまでした、と声をかけて、洗面台へと歯を磨きに向かった。

和の後ろで、父の高明が眠たそうな顔をして立っている。うがいを済ませておはよう、と声をかければ、高明は言葉になっていないあいさつを返した。

朝のニュースを一通り見終われば、時刻は六時。

和は依子にいつてきます、と声をかけリビングをあとにする。玄関の扉を開いたところで、いつてらっしゃい、と母親の声が聞こえてきた。

駅までは歩いて五分。和はいつも六時十分の電車に乗って学校へと向かう。

電車に揺られ七分。駅から歩いて十五分。六時三十二分には学校の門をくぐる。

教職員がまだちらちらとしか姿を見せない中、おはようございます、と声をかければ教室の鍵をあずかり、まだ開かれてないはずの教室扉を開錠する。

最初はすぐに職員室へ戻していたが、いいかげんな担任にかわつてからは朝のHRが終了したときに鍵を渡せばそれで済むようになった。もっとも、和は再度一階へ下りて職員室を訪れる事をそれほ

ど厭うてはいない。

窓から眼下を眺めては、しばらく思考に耽る。

三年生になつてから、こういつた時間が彼女の日常にもつけられた。

それはつまらない感傷かもしれないし、ていねいにその一日を過ごす為に必要な何かなのかもしれない。

部活をする生徒の元気いっばいな声を心地よく聴き終えて、和は自身の席へと着く。廊下から二番目の列で、前から五番目、後ろから二番目の席が三年になつてからの笹森和にあてられた座席だった。本を開き、真剣な面持ちで最初のページを開く。

静寂が続く教室内は、いつもとは違う色を放っており、和が纏う雰囲気そのものがこの空間を作り上げている。それから二番目の生徒が現れるまで、和は本を読み続けた。

七時半頃になると、早めに登校する生徒が教室を訪れる。あいさつをかわして、なおも和は読書を続ける。

そろそろ八時になるといふところで、教室はにわかに落ち着きがなくなり、どこか浮ついた空気になる。廊下の足音がその理由であり、和以外はその音に耳をそばだてていた。

「和、おはよう」

「！ 和泉君、おはよう」

目を丸くする彼女は、相変わらず本に夢中になるとその存在に気が付かない。遥はいつも、本と和の間に手の平を置いてその存在を主張する。それでもしれないかぎり、なかなか彼女はこちらの世界へ戻ってきてはくれないのだ。

しばらく会話をして、彼は教室に戻る。

担任がいつものようにけだるい様子で教室へ姿を現して、適当に朝のHRを終了させる。和はいつも通り長島へと教室の鍵を返却した。

選択授業などの教室移動をしつつ、お昼までの授業をこなす。
昼休みになれば、和は前もって約束していたので三年七組へと足を運んだ。

「和、あれから図書館行ってないよね？」

「毎日それ質問するのやめてよ」

「だって告白された相手に自分の知らない所で会われるのなんて嫌じゃない！」

お昼のパンにかじりつきながら、遙が顔を赤らめる。和はその様子に呆れながらも、昨日作っておいた出し巻き卵を口の中へ放れば満足そうに口元を綻ばせた。

結局、和の告白事件も、遙がおおげさに事件と言ってはいるが、あれから何がどうなったわけでもない。和は目の前の男に呆れつつ、お昼ご飯を消化していった。

午後一番の授業は眠気と闘いながら、なんとか内容を頭に入れる。その日最後の授業が終わりを告げれば、生徒達は皆旨をなでおろし、帰り支度をする為にざわつき始めていた。

担任がこれまた適当に連絡事項を告げ、和を含む生徒全員が帰ろうと席を立った。

「笹森、ちよっと残れやー」

長島の言葉に、眉を上げながらも大人しく従えば、頼まれたのはなにということもない雑用だった。

「別に用事を言いつけられるのは構いませんのでもうちよっと普通に呼び出してください」

「いつかの古傷がうずいたか？まあ、まだそう古くもねえけどなあ」

楽しそうに笑う担任を半眼でみつめつつ、和はため息を吐く。
急にできた放課後の予定を遙に告げようと携帯電話を取り出した
が、その前に遙が教室へと足を運んできた。

「おお、さすが、早いな」

口調からして、最初から遙も人数に入っていたのだろう。和は少し面白くない心持ちでそれでも口に出す事はなく、クラス分のプリント数枚を人数分に順番にまとめるという役目を黙々とこなした。

「先生、何もやらないの」

「ああ？俺も仕事してるだろうが」

長島の手元には確かに書類らしきものがあり、資料室には和と遙の作業音と長島のノートとシャープペンシルが擦れる音がひたすら響いている。遙はそれが気に入らないのか、思い切り不機嫌顔を作っていた。

長机に順番に並ぶプリントを一枚一枚手に取り、束ねる。和と遙は向かい側にそれぞれ立ち、机の周りを右往左往していた。

ある程度作業が進んだところで、何か気がなったのか、手を止めた長島が、しばらく遙の横顔をみつめていた。

「……和泉は、地元の大学希望してんのか？」

「え、そうだけど」

「笹森もだよな」

「そうですねえ」

ふたりの返答にうなずいた長島は一瞬眉を顰め、やがて息を吐いた。

「まあ、同じ大学はやめておけよ」

遙は、その言葉に口を尖らせてなぜなのか、と訊ねる。

長島はふ、と大人の男の顔をして笑った。

「離れてみないとわからない事もあるからな。結婚するまでに一回はそういう期間を設けたほうがいい。これはな、明確な理由はあるよ
うでないんだ」

ま、社会人になれば一回はすれ違いも起こるものだけだなあ、と
苦い顔を浮かべながら、長島は作業に戻った。遙と和は一瞬顔を見
合わせ、しかし特別それに発言することもなく、作業を続けたのだ
った。

「……なんか、実感こもった言葉だったよね」

「さっきの長島先生の話？ そうだねえ……でもなんか、一回そうい
う期間を設けたほうが、っていうのはなんとなくわかる気がするよ」
「俺も、嫌だけど理屈じゃなくなるとなくそんな気がする」

校舎を出て、駅までの道を少し疲れた様子で歩くふたつの影があ
った。

すっかり時間がかかって、終わったのは夕方にさしかかる時間。
あの担任、お疲れさん、と横柄に声かけただけだったなあ。まった
く、いつか完全に驚愕する表情見たいんだけどな。

情緒のない事ばかりを考えている頭の中を切り替えて、ぼやけて

いた視界をクリアにする。茜色に染まる自身と、風景を見て、そうして前を向いて目を細める。

相変わらず隣に立つ男は手を繋ぐ事を拒むのを許さない。まあ、最近では駅までの道はいいか、と開き直ってるんだけど。

私の日常は、常に穏やかなものだった。もちろん、過去も含めすべての時間がそうだったわけじゃない。それなりに危ない時期もあったし、痛い目にも遭ってきた。

それでも、少し前の自分にこの光景を見せても、鼻で笑うだけだろうというのはよくわかる。

それだけこの瞬間は私にとってありえないものだから。

きっかけを作ったのは彼で、その後もずっと諦めなかったのも彼けれど継続させたいと願ったのは、彼だけではなく私も同じだ。今は、ひよっとしたら彼以上の気持ちでもってそれを望んでいるのかもしれない。

歩く影がひとつからふたつになった。ただそれだけのこと。けれどその難しさを、私自身が知っていたはずだから。

ひとりの時間が好きだった。孤独と恋をし、孤独といっしょに死んでしまっても良かった。

そんな自分に、恋人と呼ばれる種類の人間ができた。これは奇跡だ。

そう、彼に出会ったのはまさに奇跡だろう。

正直、運命だとかいう言葉は信じてない。けれども奇跡という言葉は用いることができる。そのくらいには、私の脳にもくだらないあまつたらしい分泌物が出ているんじゃないかな、と思う。

もしも隣に歩くひとをみつけたら、私はこの生活を一変しなければいけないと信じ込んでいた。それくらい、私は自身が自分勝手であると自覚していたのだから。

開店休業。そう名付けたのは自らのことで、誰が言ったわけでもない。

いつだって私の脳内には、のんびんだらりと寝転がる私がいて。

自由を愛し、協調性と妥協を身につけては、ひとと折り合いをとってきた。

私のような性格の悪い人間に、誰が惹かれることがあるのか。そう信じて疑わなかったし、今も意識的にはあまり変わっていない。

『そのままの君でいい。そのままの君がいい』

安いどこかのJ・POPの歌詞のように、鳥肌を立ててしまいそうな言葉。まるで信じていなかったのに。現状そうなっているのがおかしくて、どこか笑いを誘う。

ぐうたらな私でも良いだなんて、本当に彼は変わり者だ。

今でも私が彼を愛する努力を出来ない人間のままだったなら、彼は愛想を尽かしただろうか？

考えても、遥の心を読むのはとても難しかった。

ふたりの生活がすれ違えば、それこそいつか離れる時がくるかもしれない。お互いがお互いに忘れてはいけない心遣いを忘れてしまつたら、それこそ簡単に色々なものが壊れてしまうのだろうか。

「和？」

思考に耽っている和を不思議そうな面持ちで遥がみつめる。

和は呼ばれた声に気が付けば、落としていた速度を通常に戻して再度歩き出した。

微笑んで、なんでもないよ、と遥に声をかける。

「今日は、そっち行ってもいい？」
「うん。お母さんが最近来ないって寂しがってたよ」
「本当？俺も依子さんとか高明さんに会いたいなあ」
「ありがとね、私の家族好きになってくれて」
「それは和もでしょ？俺こそありがと」

お互いに笑い会って、駅までの道を歩く。
とある歌詞の一節を思い出し、和は笑った。
遥ではなく、まさしく自分が紡ぐにふさわしい言葉だ。

当たり前のようで、奇跡のような毎日。それを忘れなければ、ふたりの日常は当たり前前に続いていく。

開店休業中の笹森和という少し風変わりな女の子は、王子様の登場によって、少し何かの形を変えたようではあるけれど、しかしめでたく本日も開店休業中である。

第四百十五話「いつもそばに居るだけ、だけど愛してるよ。」（後書き）

長い連載にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

あとがき(っばいものです)

8月12日から始まったこの開店休業。は、9ヶ月にも及ぶ連載を経て、完結しました。

まずは、この小説に目を留めてくださったすべての皆様に感謝を込めて、厚く御礼申し上げます。さらに、最初から最後までずっとお付き合いくださった方に至っては途中からはらする展開が続く中、愛想を尽かさず見守ってください、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

終わってしまった。

今の気持ちはまさしくそんな感じですよ(笑)いやあ、随分と長いこと書かせていただいて、初めてこういった場で書かせていただいた文章ということもあり、連載当初のものはもう、読むとかなり恥ずかしいです。今も誤字脱字の多さに辟易してはおりますが、昔はさらにひどいという...(苦笑)

一人称だったはずのものがいつの間にか三人称のものになり。でも中途半端な三人称でそれは今も変わらず...

と、自分の恥はさておいて。

連載当初、この開店休業。は一日の訪問者数も微々たるもので、実にゆるゆると低空飛行を続けている、といった様子でした。

元々が人気のジャンルでもないのだし、自分の力量だって十分把握している。

ファンタジーではないし、現代高校生モノで、たとえば特殊な生徒会の設定だとか、たとえば青春部活モノであるとか、たとえば全寮制の私立であるとか、そんな設定は全くなく、本当にただの公立高校の主人公が日常を過ごすという、文字にしてみると何が良いのか、っていう内容の小説で、本当に好き勝手やっていました。

予想通りというと難ですが(笑)、一日に百人ほどの方は見に来

てくれるし、感想もいただけて、でもそこまでの緊張感もなくゆるゆると書いておりました。

連載して四ヶ月以上経った頃お気に入り登録件数が1000件を突破したときなんて「うわー、すごい」とまるで他人事のように喜んでいました。

数多存在するこのサイト様のなかで下層に位置する著にも棒にもかからない作品。自分の中の認識なんてそんなもので、だからこそ最初のうちは気楽に続けられたのかもしれない。

おや？と思ったのはそれからまた少し経ってからです。

連載から六ヶ月ほど経った頃。一日のアクセス数がなぜか1000を越えてしまい、それからあれよあれよとお気に入り登録までも1000件を突破し、逆お気に入りユーザが1000人を越え、「え？あれ？」という焦りが生まれたのはそんな頃でした。

今でも、正直信じられません。もちろん人気作品と比べたら微々たるものですが、それでも一日にこんな多くの方に見に来ていただけるのがどうしてなのだ、状態であり、途中若干怖くなって書けなくなってしまうたり…なんてこともありました。基本的にものすごく初心者なんです（笑）

でもやっぱりこうして感想をいただけ、評価をいただけるのは嬉しく、夢心地なのは今も変わりません。

今も一番意外に思っているのが、男性読者様に感想をいただけたことです。

こういった溺愛モノは男性で読んでいる方はいないだろう、というのが見解で、何件かいただいた男性読者様の感想は、貴重なご意見であると共に非常に嬉しいものでした。

もちろん、女性読者様の感想も同じように嬉しかったです。なによりご意見がいただけたのは本当に本当に貴重でした。

連載当初はここまでの長編になるとも、ここまでの成長を遂げるとも思っておりませんでした。

そして続きが読みたい、というお言葉も、嬉しい誤算ばかりで本当に感無量です。

個人的には、やるのはナシではないのですが、はっきり宣言はできないというのが今の心境です。

開店休業。は、元々が主人公の成長物語であると共に、既存する物語たちの、例えば和のように他人と距離をとる主人公が、相手役によってひととの距離を縮める、というものに私自身少し疑問を覚えていたのがきっかけでした。

主人公達ってそんなに悪いことをしているかなあ？インドアっていけないこと？本に夢中になって、休み時間に皆とわいわい騒がずに隅っこにいるのってそんなに悪しき習慣だろうか？と。

私自身もそういう青春時代を送ったからだったのかもしれないけれど（笑）、そうやって半ば強制的に明るくなっていく、というのがなんだか納得できずに、そのままの状態でだらだらと生きる主人公が、ひとを愛することを覚えてそのときどうなるのか、っていうのをなんとか描けないものかと考えて笹森和という女の子が出来る上がったんです。

蓋をあけてみればなんだか全然普通の女の子ではなかったんですけど、それでもなるべく日常に沿わない行動はさせたくはありませんでした。

登場人物が実在するものと浮きすぎず、しかしいかに主人公らしいオーラを出せるのか。とにかくこだわったのはその部分で、逆に相手役である遥は女性の夢を詰め込んだものにして、と（笑）

遥は例外だとしても、ずっと思っていたのは、「街ですれ違いそんな登場人物たち」を書きたくて書きたくて、それが成功したのかは私自身にはわかりませんが、読者様が登場人物それぞれを愛して

くださったという結果には本当に嬉しく思っています。

それで、つまりは大人になった彼女達を書くのにはいまだためらいがある、というのが私の中の結論なんです。

大学生になって、社会人になって、結婚して。

そういった彼らを書くのは楽しいかもしれないけれど、どこに軸を置くべきなのか。まだそのへんがちょっとうまく考えられません。短編のような形ならまだ書きたい思いはありますが、成長しきった和や遥を書くのは、なかなか難しそうだなあ、と。高校生って特殊で本当に危うい何かがありますから。それがなくなってしまうと、どうにも現実感がありすぎるものになってくるので…ラブコメとして書ききろうとすると、どんどん現実感が薄れるし、ある意味ファンタジーみたいになりそうだし…でも現実感にこだわると、コメディイーにならなそうだし…そうなると開店休業。じゃないような…と悶々としております。

大人になるってどうしてもこう、難しい部分が増えてまいりますから（苦笑）

そんなわけで、今は開店休業。の続編は今の所考えておりません。可能性としてはスピノフのがやる確率はおそらく高いです。

長くなってしまいましたが、ちょっとここで次回作の話を。

実は元々、開店休業。の連載終了後、すぐにでもスピノフ作品を書こうと思っていたんです。けれども終わりが近づくと、一回彼らと離れたい、という気持ちが強まってしまい、さらに終了直前に新しい物語がぼん、と頭の中に出上がってしまったんです。

で、大変申し訳ないのですが、次回作は開店休業。とは一切関係ない物語になっております、ごめんなさい！

今回は、女子大生が主人公の物語です。雰囲気はどうなるのか…主役ふたりの性格はけっこうがらっと変わります。ああ、でもへたれ度は増すかもしれません、相手の男性は（笑）

ひよつとしたら割りと早く皆様に発表できるかもしれません。次回も、気に入っていただければ良いのですが……。

最後に、この作品を読んでくださり、本当に本当にありがとうございます。ございました。

これからも頑張つて小説を書いています。もしもよろしければ、次回作も読んでいただければ、そして楽しんでいただければ幸いです。ございます。

透風真白より、皆様に感謝を込めて。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その1（前書き）

お久しぶりです。ちょっと路地裏のお月様が滞っているので、息抜きに書き始めました。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その1

「ねえ和、今年も夏休みの前半はいないんだよね？」

カレンダーももうすぐ七月にさしかかる夏休みまで目前ともまだともいえなくなった金曜日。しばらくアルバイトに忙しかった遥を労おうと、和は彼のマンションへと訪れていた。

合鍵も渡されているので、最近はそうそう頻度はないものの、ご飯を作りにと遥がいない間に部屋へあがる事もある。遥が和らしいと感じるのは、いつさいがっさいの世話を焼くのではなく、食生活に特化している点だ。

いつだったか和にその疑問をぶつけてみれば、洗濯も掃除も不潔を厭う人間であればいつしかやるだろうし、生死に直結していないので気にならないのだそうだ。食えることは生きること、が持論である彼女は、バランスのある食事を摂れと遥に言ってはばからない。遥は、そんな彼女がいつも愛しいと感じれば、にやける顔をどうにもおさえられそうもなかった。

現在も、アルバイトから帰ってきた遥は和の作った晩御飯にありつけている。彼女が自身の為になにかをするのは、どうしてこうも遥の心を揺さぶるのか。

思い出したように脂下がる遥の顔を訝りながらも、和は一応、遥の言葉にうなずいてみせた。

「まあ、例年通り田舎に行くけど……なんで？」

「俺も行く」

「はあ!？」

目の前で美味しそうに和の作ったご飯をほおばりながら、満面の笑みで微笑む遥に、和はもちろんすっとんきような声をあげる。そ

んな彼女の反応を予想していたのだろう。遙はそれに特別な反応を示すでもなく話を進めていった。

「ほら前に訪問したとき、知恵さんと多恵さんが言ってくれたでしょ、いつしよに遊びにいらっしやいって」

遙の言葉に和がそのときの事を反芻する。確かに、知恵と多恵がそう発言した場に和も居たが、まさか実行に移そうとするとは思ってもおらず、和は目を丸くする。

「行きたいの？和泉君にとって楽しい事なんかなにもないと思うけど」

「いつしよならどこでもいつでも楽しいから大丈夫。それよりも三週間も離ればなれになるのが耐えられないよ」

「なにどっかの可愛い女子みたいなこと言ってるんだか」

呆れた様子で言う和に、遙は少し拗ねた表情をしてみせた。

「和は俺と三週間も離れても平気なんだ……って待って、言わないで、わかってるから」

「先回りして言葉を封じるくらいならお言いでないよ……」

緑茶を流し込みふう、と息を吐く和は、呆れも通り越してなんだが笑えてきたらしく、少し忍び笑いをもらしながら遙に答える。

「ことん、と湯飲みを置く音が室内に響くと、和はそれから一拍おいて口を開いた。

「まあ、同行したいのなら私は止める理由は特にないから良いけど。

「一応、ちいたあちゃんには前もって連絡しておけばいいし」

「うん、それはもちろん。今年はいつ頃行くの？」

「終業式の次の日にはもう行っちゃおうかなと思ってたんだけど…
…和泉君が予定があるならそれに合わせても大丈夫だよ」

「本当？だったら、週明けの月曜日でもかまわないかな。それまでに父さんの事とか色々と担当さんに引き継いでもらうから」

「わかった」

「楽しみだな、和と旅行」

「いつもふたりきりでしょっちゅう会ってるでしょう」

「そういうのとは違うの！まったく和はわかってないんだから」

その言葉を発しながらまたも拗ねた表情をする遙に、和はどこぞの可愛らしい女の子が憑依したのではないかと一瞬思ったが、すぐさまいつもの事だろう、と思いついた。

笹森和と、和泉遙は、同じ高校の同級生で、恋人同士である。

そう言ってしまうばすべては特別な意味を成さないし、実際問題、彼らが何か特別な事情に悩まされているのかといったらそんなことはない。しかし笹森和と和泉遙は、多少のおかしさを持ち合わせていた。

和は、群集に紛れて行動する事を厭う人間だった。それでも無理にはみでてしまわないよう、合わせる部分は合わせ、踏み込ませない部分は決して見せなかった。そんな彼女の平穏な日常に変化をもたらしたのは、遙だった。

遙は、学校中で知らない人間はいないと断言できるほど目立つ男であり、容姿、成績、運動、人柄すべてにおいてほぼ完璧と言っている人間だった。

そんなある意味悪目立ちする彼が、何を思ったのか目立つのを極端に嫌う彼女に恋をしたのが今から二年ほど前のある日。それから遙が和に想いを告げるまで、約一年の月日を要した。

そこから、笹森和の、当時の彼女から言わせれば、転落人生のはじまりである。

四ヶ月間、彼と彼女に巻き起こった必死の攻防。遙は毎日愛の言

葉を囁き、和は毎日それを拒絶し続けた。

それでもじわりじわりと、ゆっくりと、上手に彼女の中へと浸透していった遥は、両想いになってなお、彼女に愛を注ぐ事を忘れない。和はそんな彼をみて夢なのではないかと時折思うことがある。

恋人ができれば、どうしたって無理しなければならぬ部分はあるだろうと和は思っていた。しかし、遥はそのままの和を好いてくれた。それはある意味奇跡だ。和は、不平不満をまったく言わない遥にただ驚くばかりである。遥は遥で、周りの女性から妬まれても、どんな悪意をむけられてもまるで小さくならない自身の恋人をいつも眩しく感じている。彼女との出会いは夢ではないかと考えているのだから、和だけではない。

結局、現在のふたりは相思相愛で、周りの人間もそれを信じて疑わないくらいには磐石なものとなりつつある。

夕飯を食べ終えて食器を洗おうと立ち上がった和を、遥が制する。毎度の事だが、彼はいつも片付けまで和にさせるのを嫌がる。和はありがたく遥の申し出を受け入れれば、食後のコーヒーを入れようと食器棚へ向かった。

この日々がなるべく長く続いてほしい。それは心からのふたりの願いだ。

「和」

「梓さん、おはよう」

いつものように教室でひとり朝の時間を楽しみながら本を読んでいた和が声をかけられて上を向けば、見知った友人の顔があった。

高原梓は、かつて遥の恋人であった人物だ。それがひょんなことから彼女と彼女は友人同士になったわけだが、周りの人間からは和の性格によるものだとよく言われている。

目の前にある美貌の持ち主に朝の挨拶を交わすと、梓もそれに応える。茶色がかったさらさらな長髪を梓はゆったりと耳にかける。

その仕草ひとつが実に美しい。和は見ればみるほど、なぜ自分を選んだのか、と理解に苦しむ。遙に理由を訊いたところで、彼は嬉々として和の素晴らしさを語りだすので、うんざりするだけの行為をみずからしようとは和は思わなかった。

和は、自身の顔を並であるとわかりやすく位置づけている。遙から言わせれば世界一かわいいらしいが、それを丸ごと信じるほど、彼女は馬鹿にはなれない。

もっとも、自己評価が低いといわれているのも事実で、少なくともある程度は可愛いと評される容姿をしている、というのが彼女の知人の弁だ。そんな和は、今はいつか遙にプレゼントされた黒縁の伊達眼鏡をかけ、黒髪を斜め右に一本結びしている。

ふ、と空気を殺して、その存在を触れさせなくする術を、どうしてか彼女は知っていて、息をするようにそれを実行していた。そんな彼女にひかれたのは、遙のみならず、ここにいる梓も同じだった。そんな梓が小さく首を傾けると、可憐な空気がいつしよに揺れるのが視認できるかのように和は錯覚した。散った花びらが見えるかのようで、そんなメルヘンな思考にとらわれた自身に胸中で苦笑をもらす。

「最近、遙が妙に上機嫌なのよ。あなた、なにかした？」

「和泉君の機嫌の良し悪しの原因を全部私だつて決め付けるのやめない？」

「あら、それじゃあ和は心当たりないのね」

梓の問いにぐ、と詰まれば、和はためらいつつも、あるけど、と小さく声をだした。

「あるんじゃない」

返答にやっぱりね、と微笑みながら梓がうなずけば和はなぜか居

た堪れない、という感情が広がっていく。どうにも、遙とイコールで括られるのは不快なのかはたまた気恥ずかしいのかの判断が出来ない。

不快だと言い切ってしまうのはあまりにも子どもっぽすぎるし、気恥ずかしいと言い切ってしまうのは初心な小娘のようで図々しい。結局は未処理で終わったその感情をどうにか放り投げ、和は小さくため息を吐いた。

「私さ、夏と冬は田舎に行くって話を前にしたじゃん」

「ああ、遊びに誘ったときにそう言われたわね。それがどうしたの？」

「和泉君もいつしよに行くんだよ」

その言葉に、梓が目を丸くする。梓には単に田舎、としか話していなかったもので、和は事情を簡単に説明した。

田舎には親戚筋が大勢集まって、同年代も多いからか修学旅行のような様相を呈するということ。広大なお屋敷であるということ。それらを話せば、梓は得心したようにうなずいた。

「離れるのも嫌だし、自分のあずかり知らぬところで和にちよっかいをかけられるのも防げるしで上機嫌なわけね」
「……………」

和は、一瞬思考を沈ませる。梓の発言にひとりの人物を思い出せば、彼はその後どうなったろうか、と心の中で呟く。

中村雄大。和の親戚のひとりで、現住所も和と雄大はそう離れていない。高校も別々で、普段の交流こそ少ないものの、田舎へと赴けばいちばん話すのが雄大だ。

そんな彼に、なにがどうしてそうなったのか、告白をされてしまったのが今年のはじめ、冬休みの集まりでの事。それから色々とお

り、結局、雄大は和を諦める、と言った。

今回は例年通りならば彼も赴くであろうが、そうになったら普通に接していいものか。もう半年は経つのだしあまり意識するのも自意識過剰だ。和がひとりぐるぐると考え込んでいると、和、と呼びかける声がある。

和がはっとして目を向ければ、不思議そうな表情をして梓がどうしたの？と訊ねてきた。

「ごめん、ちよつと考え事」

「あら、なにか心配事？思い詰めるくらいだったら誰にでもいいから相談くらいしなさいよ」

「うん、ありがとう梓さん」

微笑む和に、梓も同じように笑みを返す。彼女はいつだって、線引きを間違えない。和が必要以上に遠慮してしまうときは怒るが、かといって無理やり詮索するような人間でもない。和は、梓のこういった大人の部分が好きだった。

「朝から珍しいな、梓」

「託斗」

向かい側に座っていた梓が、その声に弾かれたように立ち上がった。みるみるうちに花が咲くようなその笑顔は、まわりの人間を圧倒する。まだまばらだが何人かが梓に見惚れてぼかん、と間抜けに口を開けている。

梓の恋人である鈴木託斗は、それが気に入らないのだろう。わずかに眉根を寄せれば、梓の頭を愛しそうに撫でた。梓は、今度は頬を染めて彼をみつめる。

和はふたりのやりとりを頬杖をついてみつめ、にやにやした顔を湛えながら軽く手をあげた。旧友の意外な面を毎日発見するたびに、

和はどうしても嫌な笑いを浮かべてしまう。

「託、おはよ」

「おはよう。……和、その顔をひっこめろ」

「あらあら、原因はあなたにあるというのに開き直っちゃってかわいくないですこと」

「和」

「こんくらいはいいじゃん、私はいつもうんざりしてんだからさ」

「お前のストレスの元は和泉だろう。俺にあたるんなら奴に釘を刺すんだな」

「簡単に言ってくれるねえ」

ぎろり、と座ったまま和が託斗を睨みあげると、託斗は多少悪いと思っただのか、ゆっくりと目を逸らした。

遙に何かを言ったところで、彼が人前で和にたいする言動や行動を改めることなどありえないと、発言した託斗みずからじゅうぶんすぎるほどわかっていからだろう。

託斗は胸中で、そんな男と目の前に座っている女性をかつて取り合っただと思えば、今更ながらにどこか寒気を覚えた。みつともなくしがみついていたならば、一体今頃どうなっていたのか。託斗は自身をそうやわではないと評価しているものの、それを凌駕する遙の和への執着ぶりにはどうかっこをつけても対峙したくはなかった。

彼のライバルになり得る男はこの先あらわれるのか。託斗は、心のどこかで見てみたいとも考えたが、今は大切な友人である和が苦しむ姿はやはりこの目にしたくはない、と思い直した。

「あれ、梓なにやってんの」

「！ 遙、早いじゃないの」

教室の扉前で目を丸くしているのは、今の今まで話題の中心人物であった遙である。彼が教室内へ入ったとたん、どこか浮き足立った空気が流れる。和はいつものことでありながら、それをまるで気にしない遙を感じしきりでみつめた。

そんな遙は、こちらを真っ直ぐみつめている愛しい彼女に夢中だ。声をかけた梓のことも今はどうでもいいのか、蕩けるような微笑を湛えて和におはよう、と声をかけてきた。その声も、とんでもなく甘い。

和は朝からとてつもなくあまつたるい空気に多少尻込みしながらも、なんとか無表情におはよう、という言葉を返した。

少しにぎわいはじめた教室内の生徒は、そんな和のクールな姿によくもあいつた態度が取れるものだ、とやはり感心する。クラスメイトの女子はほぼ、遙の笑みを目撃しては顔を真っ赤に染め上げている。あれを真正面から受け止めたのでは、腰砕けしてしまうのではないかとさえ思っていた。

「そうだ、和、旅行の前日は俺の家に泊まらない？」

「んー？いや、自分の家から行くよ」

「えー、どうして？」

「どうしてもなにも。どうせそっからしばらくは嫌でもいつしよなんだから別に良いでしょう」

「嫌なの？」

「そこだけ抜粋すんなっつーの、めんどくせえ」

「ひどい！」

愛が足りなーい！と叫びつつ椅子ごと和を抱きしめる遙に、梓と託斗は無言で目を合わせれば苦笑をもらした。やはり、彼に自重しろと言っても無理な話であるう。

そんな遙に朝からうざい、と脳天チョップをかます和は、やはり偉大だ。名物カップルは伊達ではない、と教室内の誰もが思った。

「おやおや、皆さんおそろいで。なにやってんの？」

ほほえましくふたりを見ていたクラスメイトが、最後の人物がそろったことに興奮したのか小さく歓喜の悲鳴をあげた。

廊下からひよい、と教室をのぞいて足を踏み入れたのは、遥の親友である宮田浩平そのひとであった。黒髪でどこか清楚な遥とは違い、着崩した制服に茶色の髪はどこかちゃらちゃらとした印象を感じさせるが、なかなかどうして一本筋が通った人間であることは、遥はじめ親しくしている人間は皆が知っている。

朝から和泉遥、笹森和、宮田浩平、高原梓、鈴木託斗、ということなにかと話題の役者がそろいぶみしたことにわかには興奮しているクラスメイトは、囁きあいながらちらちらと和たちへと視線を寄越している。それをどこかうんざり思いながらも、しかし和は自身も話題の一部になってしまっていることにどこかあきらめを覚えていた。

「宮田君、おはよう」

「浩平も珍しく早いわね」

「おっはよ、笹森ちゃん。たまにはねー」

和と梓にからからと笑いながら、遥のかたわらに立った浩平は、さりげなく和から遥を引き離す。こういった芸当が自然にできるのは、彼をおいて他にはいない。

和が目だけでお礼を告げれば、それに応えるように浩平も瞳だけで笑みでみせる。和はこういった気働きができる人間はなかなかどうして貧乏くじをひきやすいということを知っていた。

「おい、浩平。なに和に色目つかってんだよ」

「は！？そんな恐ろしいことを誰が」

「お前だよ、おまえ」

言ったそばから、浩平の視線を咎める遙が、彼をはがいじめにする。和は立ち上がって止めに入ったが、それも気に入らないのか遙が浩平のすねを一発蹴り上げた。

和泉君！と和が怒鳴ったところで、のらくらとした声が教室全体に響き渡った。

「おーい、チャイム鳴るぞー。子どもたちよそれぞれの巣にもどれー」

その言葉に前を向けば、担任である長島円が全身からけだるいオラを発しながらこちらをながめている。和が腕時計を確認すれば、確かにもう本鈴まで一分もない。

「わ、HR遅刻しちゃうよ！三人とも急いで！」

和の言葉に弾かれたように教室を飛び出した梓と浩平だったが、遙はその前にちらり、と和をながめれば、ゆったりと笑んだ。

「和、愛してるよ」

去っていく後姿を恨めしく思いながら、前を向けば担任教師がにやにやと和を見て笑っていた。

「朝からオアツイこって」

特になんのひねりもないその言葉が、しかし今の和には心底恥ずかしかった。

我が家に帰ってきたがごとく自然な動きで開いた玄関扉がある家の表札は、津田と書かれていた。リビングにて一声自身の訪れを告げた和は、家主である女性の返事を受けて二階へとあがっていく。特にとがめられる様子がないことから、日常的にある光景だというのがわかった。

今度は二階にある一室の前で足を止めれば、またも自室であるがことくの図々しさでその部屋の扉を開く。ノックなしに開いたというのに、中からそれを責めるような声は聞こえてはこなかった。

「ういつす」

「ああ」

和が扉を閉めながら右手をあげれば、部屋の主である津田広末は、何事もなかったかのようにベッドに腰をおろしたまま読書が続いている。

半身である、とお互いを評するのがこのふたりだ。

和と広末は幼い頃から家ぐるみで仲が良く、簡単な言葉をつかってしまえば幼馴染という関係性になる。

しかしこのふたりは昔からそれぞれの思考があまりにも似通っており、まるで呼吸するかのようにお互いがお互いを理解していた。だからこそ、男女という性別でありながら、ふたりはお互いを異性であると感じたことがない。

同じベッドで寝ても、いっしょに風呂に入っても、ふたりの間に男女間の艶っぽい事件が起きることは一生ないと断言できてしまうだろう。

もっとも、お互いに恋人ができた今は、そういった真似をするとはさすがに避けるようになった。

「もうそんな時季か」

「まあね。広末、このシリーズは持ってってもいい？」

「かまわないけど、その隣のはだめだ。発作的に夜に読みたくなる時がある」

「はいはい。うちからもなんかもって来たかったらもってって。新作は大体おいていくし」

「ああ」

和と広末は、思考が似ているばかりか趣味嗜好もほぼ同じであり、和は読書や映画鑑賞が好きである。そんな彼女は、毎年ダンボール一箱に本をめいっぱい詰め込んで、三週間滞在する田舎の屋敷にそれを送り込むのだ。帰りも、同じように宅配便で返す。広末の本もその中に紛らせていくのは、例年通りのことだった。

彼の本棚の前でああでもないこうでもない、と吟味するのをみつけていれば、広末は和、と彼女に声をかけた。

「んー？」

「大丈夫なのか？」

「！ん、まあ。今回は、和泉君もいつしよに行くから」

「……ああ、そうか」

「うん。そのぶんまあ、気まづくもあるけどね」

「それは仕方ないだろ」

「まあね」

大丈夫か、という問いは、雄大の件でのことだ。はっきりと言葉にせずとも、和と広末の間では会話が成立していた。

こういった面で思い出したかのように時折は遙も嫉妬心をのぞかせるが、最近ではそれもめつきりなくなっていた。遙は、自身にも同じように可愛がる異性がいるからか、その点に関してだけは寛大でいてくれるらしい。

なんとかなるだろう、と胸中で呟いたのは、やはり心配事が胸を過ぎるからなのか。

和は心の中で、穏やかに旅行が終わることを小さく願ったのだっ
た。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その2

「彩ちゃん久しぶりー！どう、進君とは仲良くやってる？」

「いやね、和。私がお姉ちゃんなのにせりふをとらないですよ」

「あはは」

終業式を終えた週末、大学へ通っている関係で現在一人暮らしをしている姉が笹森家へ帰ってきた。彩は大学三年生で、和とは三つ違いである。

後藤進というのは、彩の恋人で、彼の長年の姉への片想いは和も良く知るところである。もっと言えば、和もこじらせた一因、といえよう。

質問に答えたくないのか、忘れているのか、彩は久しぶりの妹を味わうべく、玄関先で和をぎゅうぎゅうと抱きしめている。

「おい、そのへんにしてそろそろ入って来い」

「彩ちゃん、和ちゃん、お夕飯できたわよー」

苦笑する父の高明と、優しく微笑む母の依子。リビングから顔を出した両親に姉妹そろって返事をすれば、和と彩はリビングへと歩を進める。

「で、彩。和じゃねえけど進君とはその後どうだ」

「どうって」

「お前んとこ、和と遙君と違ってなっかなか安定しねえからなー」

「親心よ、親心」

からからと笑いながら夕飯のカレーライスを口に運ぶ高明を、彩は口を尖らせて睨みつける。その様子に特別悪びれずに、余裕さえ

感じられる笑みで高明は更に続けた。

「彩は昔から、こと男に対しては素直じゃねーよなあ」

「お父さん！そうやって決め付けるのやめてよ。別にそんなことないわよ」

眉間にしわを寄せて口を尖らせる彩の様子を見て、依子はあらあら、と穏やかな声をあげる。

「高明さんつたら、あんまり娘をからかうものじゃないわ。でもそうねえ、彩ちゃんはやちょっと頑固で暴走気味なところがあるから、進君のお話をなるべくきちんと訊くようにね？」

「……依、俺よりきついと思うぞ」

「あまりにも的を射すぎているからね」

高明と和にたたみかけるように付け足され、彩はぐ、と詰まり撃沈した。その様子に原因である依子はあらあ、とまたも間延びした声をあげて楽しそうに笑っている。

「でも彩ちゃん、本当に私たちと日程同じで大丈夫だったの？進君も？」

少し熱くなつた口の中を癒そうと、和は目の前にあるコップを手にとつて水を流し込む。こくり、と和の喉が鳴つたと同時に、彩がぱたぱたと自身の左手を揺らした。

「いいのよう、私は元々、和といっしょに行きたかったしー。そして進が自分も同じ日に行くって言い出したんだもの」

「進」

高明、依子、和の三人からそろって同じ言葉が紡がれる。

いつの間にやら呼び捨てが普通になったのか、と生温かい視線を三人が送れば、彩は顔を赤くして無言でカレーをほおばりだした。気をつけていつてらっしゃい、という依子の言葉に和と彩はうなずけば、久しぶりの一家団欒を楽しんだのだった。

待ち合わせの駅に到着すれば、微笑みながら遙が立っている。和が声をかける前に、顔を綻ばせた遙が和へと駆け寄ってくる。その様子を見た彩が、和の少し後ろで苦笑をもらした。

「和！」

「和泉君、おはようー。眠れた？」

和の質問に、遙は苦笑して答える。

「遠足前の子どもじゃないんだから」

「あはは」

言葉をいくつかわわしたあと、遙が彩に気がつけばおはようございます、と声をかけた。やっとこちらに目を向けられた彩は、噴き出すように堪えながら挨拶を返す。

遙は、おおげさでもなんでもなく文字通り和しか目に入っていないのだと実感すれば、彩は嬉しい気持ちになる。しかし彩は、自身でその心の変化に気がついていなかった。彼女はずっと、妹を取ってしまった遙を歓迎する一方でどこか疎ましくも思っていた。彩が今、心から彼と和を祝福できる理由。それを、彼女は決して自覚してはいない。

「あ、進さん、ちょっとコンビニ寄って来るって言ってたからもうちょっとしたら来ると思います」

「ああ……ガムが切れたのかしら」

遙の言葉にうなずいて、彩が呟く。その言葉に疑問符を浮かべたふたりは、彩に問いかけるような視線を向けた。彩はそれにふふ、と笑う。

「禁煙してからもうけっこう経つんだけどね。ガムがないと吸いたくなっちゃうっていつも必ず持ち歩いているのよ」

「え！進さんて愛煙家だったんですか？」

「田舎では吸ってないよね」

「空気が美味しいから、あそこでは欲しくなくなる、らしいわ」

目を丸くする和と遙に、彩がそう説明すれば、合点がいったようにうなずく。

そんなやりとりをしていれば、後ろから声が聞こえてきた。

「なんの話をしているのかな？」

「！進。急に声かけないでよ、びっくりするでしょ」

「なに、聞かれたらまずい話でもしてたの？」

「そついうわけじゃないわよ」

目の前で会話するふたりに聞こえないように、遙がこそ、と和のそば近くに寄れば耳打ちした。

「ね、ふたり楽しそうだね」

「うん、思ったよりもなんか落ち着いてるっぽいよね……揉め事は多いみたいなんだけど」

「そうなんだ」

「彩ちゃんがちよいちょいそんな様子を見せてたから……でも心配ないかなこのぶんだと」

「ごそそと和と遙が話していれば、それに気付いた進が彼らに視線を送る。くす、と微笑んで和ちゃんおはよう、と声をかけられれば、和もあいさつを返した。

「相変わらず仲が良いね、おふたりさん」

「いや別に」

「そうでしょ？とつても仲良しですよ。ね、和？」

否定しようとする和の左手をとって、間髪入れずに遙がさえぎって微笑む。握られた手に半ば呆れながら、和は、はいはい、と適当に返事をする。愛が足りない！という遙の声には、和は仲良しなかなよし、と棒読みで応えた。

相変わらずのふたりの様子に彩と進が笑う。一向は、賑やかな雰囲気のままに旅のはじめを楽しんだ。

せつかくなのでふたりきりになりたい、という遙の申し出にうなずいたのは進で、当初、四人で指定席を取ろうとしていたが、渋る彩をなんとか進が説き伏せれば、出発も到着地も同じだというのに、なぜか座席はばらばら、という二組のカップルは、じゃあまたあとで、と声をかけあってそれぞれの席へと歩を進める。

遙が和の分の荷物を荷台に押しやると和がそれに礼を言う。遙はそれに微笑んで応えた。

「和、やっぱり本読むんだよね」

「ん？ああ、和泉君さすがに暇？」

遙の言葉を受けて眉を下げ申し訳なそうに和が言えば、遙は満面の笑みで首を振る。

「いや、むしろそれが目的みたいなものだし」
「……相変わらず不可思議だよ、君のそれは」

それじゃあ遠慮なく、と苦笑して本を開いた和は、もうその数秒後には自身の世界へ旅立っていた。

遥は和の、本の世界に没入する瞬間がとても好きだった。彼女はいつも地味でありたい、通行人Aとして生きたい、と言ってはばからない。そんな彼女は、案外個性の強い女の子で、遥は毎回びっくり箱のような彼女に驚かされてばかりいた。遥は、自身の事を確かに目立つ存在だと自覚しており、和はそうだった意味では目立つ事がないというのも認めていた。

しかし、と遥は思う。

彼女はある種、ひとをひきつける何かがある。無自覚ではあるが、和の周りには自然と彼女が好きだと言って集まる人間が少なくはないのだ。和と交際を始めて一年が過ぎようとしている今、遥は彼女ににある結論を出した。

和は、そのままの自分でありたい、という思いがおそらくひとり強い。しかし彼女はそれがいかにわがままな行為なのかを自覚している。それが、彼女の相反する面を生み出すのだろう、と遥は思うのだ。

目立ちたくないと言いながら、流れに逆らいわが道を突き進もうとする堂々さは、ひととどこかが違う。しかし折り合いをつける優しさを持つ彼女は、子どもでありながら大人であって、目立つ存在であり地味な存在なのだ。

遥は、目の前であればらとページをめくる彼女をみつめれば、頬を染める自身を自覚する。

和が本を読むその瞬間、彼女はそういった人間社会のしがらみや、色々と考え込んでしまう器用貧乏な性格や、それらいっさいから解放され、残るのは純粹な彼女の本質だ。

静寂を愛し、ゆるやかな時の流れに恋をし、ふ、とひとの世界か

ら逸脱する。遙は、そんな彼女が作り出す空間はあまりにも綺麗で、いつも触れてはいけないのではないかと感じる。しかしそれでも、好きだと言ってしまったのは自分で、もう手離せないと言ったのも自分なのだ。

遙は心の中で、好き、という言葉を繰り返しながら、綺麗な彼女に置いていかれないようにと願った。

本を読む彼女がひどく好きで、ひどく寂しい。遙はいつも、ため息を吐きながら、そんな心をはらんだまま熱っぽい視線を彼女に向ける。だからこそ、証がほしくて、もちろん彼女の為にが第一であったにせよ、半分は自身の為にプレゼントしたものだと言っても良い。そのブックカバーをみつめて遙は和の恋人である自分の爪痕にほんの少し安心していた。

「……………っ!？」

一冊読み終わった和は、本を閉じて前を向けば、頬になにかが触れるのを感じる。慌てて右側を向けば、遙が瞳を潤ませながらこちらをのぞいているのがわかった。

和はその様子に目を剥きながらも、久しぶりの衆人の只中での暴走に声を出さずに頬をみるみる染め上げていった。

「和、真っ赤だねー、かぁわいい」

「! なに、なんで」

慌てふためく和をよそに、遙は微笑んで愛しい恋人の頬をつるりと撫でる。和はそんな行為すべてに混乱する。遙のスイッチがいつでもどこで入ったのか、彼女にはまるでわからないのだ。

「うーん、やっぱり、読み終わった次には俺のこと考えてほしいんだなあ」

「……やっぱり退屈だった？」

「そういうことじゃないんだ。現実世界では俺だけをうつしてほし
いっていうわがままかなあ」

「……？」

遙の言葉に疑問符を浮かべながら首をかしげる和に、遙はしかし
ただ微笑んでみつめるばかりで、その理由を口にするとはしな
かった。

「時間的にもちょうど良かったね、もうすぐ着く」

「そうだね」

しばらく綺麗な車窓をながめていると、和が腕時計を見ながら発
した言葉通り、すぐに目的の駅へと着いた。長旅を感じさせない時
間の経過に、またそれほどまでに彼女に夢中であつたという事実
に、いまさらながら遙は多少驚く。

降りる際に和の分まで荷物を持つとする遙に和が待ったをかけ
て揉めるのも、毎度のことだ。相変わらず彼女は、こういった扱い
をされることを厭う。遙に対してだけではなく万事がそうだ。

甘えるのも苦手であるし、甘やかされるのも戸惑う彼女を、遙は
これでもかというくらいだめにさせたい、と時折どころか最近頻
繁に思うようになっていて、和はそんな彼が自身を掌握する術をつ
かみはじめたことにやり辛さを感じていた。言い包めることが出会
った頃はそう難しくもなかったが、遙はのらりくらりとかわそうと
する和を力技で押すことが増えてきた。確かに、真正面から相手に
するとすぐペースを取られてしまう彼女のようなタイプには、そう
なってしまう前に押し切るのが正解であろう。それでも、まだまだ
和を甘やかす日は遠いと感じれば、遙は両手に荷物を持ちながら小
さく息を吐いたのだった。

しかしやはり、そのままいいようにされる和ではなかった。しば

らくそのまま歩いてきた遙だが、後ろから聞こえる彼女の声にぴたり、と歩を止める。

「和泉君っ！親戚に見られるときまりが悪いしここらで荷物かしてっ！」

「……どうして？」

和の言葉に片眉をあげながら、遙が後ろを振りむいた。追いついた和は遙の左手から荷物を奪還しようと手をかける。

「男に荷物持たせるなんて女王様だな、とか嫌味言われるから。めんどくさいんだよ。」

私がそんな風に言われる原因作るのがいやでしょ、と笑顔で言われてしまえば、遙はどんなに不本意であっても従う他ない。彼女もそれをわかっていてこそその発言だ。どんな些細なことでも、和に傷を作られる一因を自身が担うなど、遙にとってあつてはならないことなのだから。

結局は、最終的にかなわないと思いき知らされる。そんな彼女に憤り半分、安心半分で、遙は複雑な笑みを浮かべていた。和は、そんな遙の胸中をどう読み取ったのか、ごめんね、と苦笑して元々は自分のものであつた荷を引き受ける。遙は無言で首を振れば、ぽんと彼女の頭を撫でた。

「……和はズるいなあ」

遙の言葉に目を丸くして、しかし次にはにっこりと微笑んだ和は、常の彼女とは多少違う様子を見せる。

「そんな私が好きなくせに」

固まる遙を認めて和はさらに笑みを深めれば、続けて言葉を発した。

「で、そういう遙が私は好きだよ」

かちん、という擬音が聞こえてしまいそうなほどに固まった遙を一瞥すれば、和はすたすたと改札へ向けて歩き出す。荷物ひとつでくだらない、と言われてしまいそうだが、和にとっては割りと重要な面でもあるのだ。

遙は、和をとことん甘やかす。

恋人というのは、他がどういったものなのかはわからないが、時に怒りをぶつけられたり、時に理不尽さを感じたりもするものなのであろう、と和は考えている。しかし遙の場合、怒りも理不尽さもすべてが和を愛することに起因しているからなのか、結果的に彼女をとことんだめにしようとしているのではないか、とどこか感じてしまう。

大げさかもしれないが、和は、小さな事柄からそういったものは積み重なってしまうのではないかと怖くなる瞬間があるのだ。

たとえば最初は荷物持ち程度であるかもしれないが、それを当然と思うようになれば、次にはきつともっと大きい気遣いを当たり前だと感じるようになるはずだ。そうして段々、自分のできないことが増えていけば、相手にかかる負担はどれほどのものになるのか。和は考えただけで背筋が寒くなった。

『まったく、最近は変化球投げないと簡単に対応しちゃいそうになるからやり辛い』

ため息を吐きながら改札を抜けた和は、もうすでに外へと出ていた彩と進を視界に留めれば、ふたりの立つ場所へと一歩足を踏み出

した。しかしどうしたことか。次の足を出そうとした瞬間、なにかに強く拘束される。和がその原因に思い当たる前に、彼女を後ろから片腕で抱きしめた遙が耳元に唇を寄せて囁いた。

「いつになったら、俺なしじゃ何も出来なくなってくれるの？」

「！ な」

「それを本当に望んでるなんて、和は知らないんだろうね」

耳元で彼が空気を震わせれば、和にもその息遣いが伝わる。笑ったのだとわかった瞬間、彼は今どんな瞳をしているのだろう、と考えれば、和の心臓は大きく揺れた。

先ほどとは立場が逆転し、真つ赤な顔をして固まる和を、遙はかわいい、と言つて笑う。和はそれにどこか悔しさを覚えればなんとか冷静さを取り戻そうと息を吐く。

「実際問題、そんなことになったらいずれ負担になって面倒臭くなつて別れるだけだよきつと」

「そんなこと言うんだ？じゃあ、試してみない？」

「やだよ。捨てられたあと私どうやって生活するわけ」

「和だつたら元々、生活力あるから大丈夫だよ。もつとも、俺は和を一生離したりなんてしないけど」

「ああそう」

疲れてがくり、と肩を落とせば、信じてないでしょー、と口を尖らせながら、遙が和の左手をとる。つないだ手のひらがなにやら妙に照れくさく、和はほどこうと抵抗したが遙がそれを許さない。

結局なかよく手をつないだまま彩と進のもとへと近寄れば、彩がため息を吐いた。

「まったく、本当に相変わらずね」

「彩もああしてほしいならしてあげるけど?」

進がにやにやししながら彩へと視線をやれば、彩は小さく、無理、と呟いた。その言葉に、進は面白くなさそうに片眉をあげる。

「彩はけっこうそうだよな。外だとひとの気配をずいぶん気にする」「それは、その。別に嫌ってわけじゃないけど。長年の積み重なった照れみたいなものだってば」「ふうん?」

さらに笑みを深めた進の胸を、彩は握りこぶしで叩く。無言でそんなことをする彼女は妙にかわいらしい、と和は姉をみつめつつ思う。

そんな彼女を、荷物を地面に置いて両手が自由になった遥がなぜだか抱きしめてくる。

「おい、公衆の面前」

「和がいけないんでしょう? さっきあんなこと言うから。あの場は切り抜けられても、その後俺がどんな行動に出るのか予測しないとだめだよ」

真正面からぎゅっぎゅっと和を抱きしめながら、キスしたいなあ、と呟く遥は、和が思ったよりも暴走しそうに心が乱れているようだ。ここまでになると考えていなかった和は、どうしたものかと狼狽する。

「ねえ、和。さっきのって、本心? それともあの場をおさめるためについた嘘?」

「そんな酷い嘘つくわけないでしょう、本心だよ」

遙の言葉に思わず反応して馬鹿正直に答えてしまった和だが、それにはっとする。

恋人を大切にするのはもちろん素晴らしいことであるが、今の状況でそれを言ってしまうのは和にとって非常にまずい。

ついに辛抱できなくなったのか、瞳を潤ませた遙があるうことが和の顎に手をかけくいと上向かせてくる。

遙の綺麗な瞳に、どきりとすることはあるにはあるが、今の状況では和にとって恐怖の対象だ。ひ、と短く悲鳴をあげれば、なんとか阻止しようと体に入力を入れるがびくともしない。

彩へ助けを求めようとしたが、彼女は彼女で進に手一杯そうだ。どうしよう、と本気で混乱しかけたそのときだった。

「なにをしてるかああああ!!」

耳をつんざくような怒鳴り声に、一行や、通行人が固まる。

声の主を確認すれば、和は頭痛を覚えた。

「……ゆきおじさん」

あちゃあ、と声をあげたのは誰であったのか。あるいは全員のことであったのかもしれない。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その3

乗用車から勢い良く車のドアを開いて降りてきた男は、顔を真っ赤に染め上げて、今にも噴火しそうなほどだった。和は、焦るでもなく、比喩表現でもなんでもなく本当に噴火しそうだな、などと思っていた。

山田幸仁は、和の親戚のひとりだ。年齢差からいって祖父といってしまうても問題は無い。幸仁にしても、和を実の孫のように可愛がっている。

元々は父である高明が昔かなり世話になった人物らしく、そのへんはかいつまんでしか聞いていなかったが、父いわくこの親戚に放り込まれたとき、母である依子も色々と苦労があったらしい。そんな依子を真つ先に気に入ってくれたのもこの幸仁で、笹森家の両親はこの叔父になかなかどうして頭があがらないらしい。

和と幸仁が、それこそ実の祖父、孫のような関係になるまでは、これまた紆余曲折あったが、最終的にはこうなって良かったと和は心底思っている。

「和から離れんか！この青二才が！」

杖を右手に持った幸仁が、遙に向かってそれを振るう。和は巻き添えを食わないように無言で遙から距離を取った。

「あなたからしたら大体の男が青二才なんじゃありませんか？若さに嫉妬しないでくださいよいやだな」

あはははー、と笑いながら遙が発した言葉に、幸仁は更に顔を赤くしてなんだと！？と声を荒げる。

和は、遙の言葉に目を丸くして驚いていた。遙が和の身内に対し

て、そのような悪態をつくのはずいぶんと珍しい。どっちもどっちであるので、和は特に遥の物言いに傷ついたりはしないが、単純に不思議に思っただけで、遥をみつめた。

そんな和の視線に気付いたのだろう。遥が和をちらりとみれば、にっこりと微笑んだ。

「あなたが行った過去を、和が許しているのは知ってますけど、俺はなかなかどうして根に持つタイプなんですよ、山田幸仁さん」

遥の放った言葉に、和のみならずその場にいる彩と進も息を？んだ。

「俺が気に入らないのなら受けて立ちます。けれど、それを笑ってやり過ごすことはしません。不器用なのが駄目だとはいわないけれど、好きならば好きと言う。そんな子どもにもできる簡単なことを出来なかったあなたに、認めてもらえずとも俺は特になんとも思わないんですよ。それだけ覚えておいてくださいね？」

ふふ、と妖艶に笑む遥をみて、和はぞくり、と背筋に寒いものが走った。

今の彼は怒りに満ち満ちている。本当ならば、罵って、親戚連中の真ん中で恥をかかせてやりたいくらいには思っているはずだ。しかし遥はそんなことはしないだろう。今となっては、それをしてみれば和が傷付くとわかっているからだ。

和は、遥のその気持ちにどこか辛抱できなくなった。勢い良く駆け出して、後ろから遥の背中にタックルせんばかりに抱きつく。

その様子に、遥はげほ、と咳き込みながら彼女の名前を呼んだ。声音には多少の困惑がうかがえる。

「……和？どうしたの？」

今度は優しい声音で繰り返して彼女の名を呼ぶ。後ろから回された彼女の手に、自身のそれを重ねた。和は、その瞬間、遙が触れた場所から暖かいなにかがゆっくりと身の内に流れ込むような感覚がした。

あふれてしまいそうな感情を制御しようと思ったが、常とは違う場所のその非日常さがいつもより彼女の感情を解放してしまうのか、和はどうやら止まれそうにない。

ぐす、という鼻をすする声が遙の耳に届いて、遙は慌てて和の腕をいったん自身から離せば振り向いて和の顔をのぞきこんだ。

「……ありがとう」

「え？」

鼻声で発せられた言葉は予想外だったのか、遙が目丸くして和をみつめる。無意識なのだろう。頬に触れた遙の手は優しく彼女の掌をすくっている。

和は、おかしさに笑い声をあげるが、それも少し鼻声で、複雑な表情を遙にみせたまま、頬に寄り添う彼の手に、和はそっと自身の手を重ねた。

「そうやって、私のことばかり優先させて、和泉君はいつも優しいね。優しすぎるくらい」

和の言葉の意味を理解したのだろう。情けなく戸惑っていたその顔がみるみる驚きに変われば、次には苦笑した。くるくるとかわるその表情にまた和が笑えば、遙も同じように声をあげて笑う。

「遙」

和が名前を呼べば、目の前の優しい顔は少し前のように驚いた表情を作って目を見開く。和はそれを確認して、まだ少し潤む瞳をそのままに、はにかむような笑みを浮かべた。

「大好き」

「!!!」

雷に打たれたかのような、という表現があるが、遥はまさしくそのような衝撃を受けたかのごとく固まった。目を見開いたまま硬直する遥に、和は首をかしげては和泉君？と名前を呼ぶ。しかしそれでも遥が覚醒する事はない。少し困った顔でどうしたものか、と遥の顔をのぞきこもつとした瞬間、彩と進がそろって和の両腕をぐいと引っ張った。

右手には彩、左手には進がいて、和はわけもわからず頭に疑問符を浮かべる。

「？ 彩ちゃん」

「馬鹿ね、和。だめよ、今遥君に近づいちゃ」

「え、なんで」

「和ちゃん、わかってないなあ。いいの？真昼から変なところに連れ込まれても」

進の言葉に眉を寄せれば、和がはあ？と声をあげる。

「そんな大げさな。多少、和泉君が暴走するような事は言っちゃった自覚はあるけどまさかそこまで」

和が最後まで言葉を発する前に、何者かが和の両肩に手をおいた。はっとして目の前を見れば、そこにはやっと意識を取り戻した遥が

立っていた。表情を見れば、妙に潤んだ瞳に紅潮した頬。なぜそんなに色香を纏っているのか、と問いただいたいくらいに、今の遥は触れた女性を端から妊娠させてしまいそうな何かを醸していた。

その様子を見て顔を強張らせた和は、もしやふたりの言葉は大きさでもなんでもないのであるか、と少し思い直していた。

そういえば幸仁はどうしたのだろうか、と和は危機がすぐそばまで来ているにもかかわらず、視線を彷徨わせた。こういった場面に遭遇すると、現実逃避をしたがるのは彼女の悪い癖である。

視界に留めた幸仁は、先ほどの遥と全く同じ状態で、目を見開き口をぽかん、とあけ固まっていた。見なかったことにしよう、と和は視線を改めて遥に戻す、が、やはりこちらも見たくはなかった。

「和」

「何？……あのちよ、肩ちよつと痛いよ」

「和」

「いやだからなんなのかって！」

どんどん潤んだ遥の顔が近寄ってくる。和は後ろにのけぞって顔を遠ざけようとしますが、遥の両手が和の肩をこれでもかと強くつかんでいてはがれない。両サイドでは彩と進が必死で遥を止めようと声をあげているが遥は和以外を視界に留められないし、和以外の声を耳に入れないらしいかった。

質問に答えない遥に苛立って声を高くしたものの、和は聞かないままにしておけばよかった、と数秒前の自身の言葉に後悔しはじめる。

「……俺は、愛してるよ」

「え？あ、ああ、ありがとう」

それが言いたかったただけだろうか、と和は一瞬安堵して踏ん張っ

ていた身体の力を抜いたが、それがいけなかった。遙が満身の力をこめて和を彩と進から強奪してしまうと、彼女の頬をつるり、と撫でた。

「俺の今の気持ち、和に全部受け止めてほしいな」

「……はい？」

「言葉だけじゃ足りないんだ。ね、いいでしょ？」

「……良くねえよ、馬鹿！」

可愛らしく微笑むその姿と、発言がまるで一致しない。和は怒鳴りながら抵抗しようと力を入れるがかなわずに、彩と進、覚醒した幸仁が三人がかりで遙の暴走を止めるといふ状態に発展してしまつた。

すべてが終わつて全員が息を切らしてへたりこんだ時には、駅前であつた騒動になつた。あわや警察沙汰か、というところであつたが、なんとかさうはならず済んで、遙以外の四人は心から安堵の息を吐いたのであつた。

「まったく、遙君。いくらなんでも駄目だよ、気持ちは良くわかるけど」

「ちよつと進」

車を運転する進が、遙をたしなめているのかけしかけているのかよくわからない注意を促せば、すいません、と遙が頭を下げる。

「……それより、なんでこの席順なんですか」

遙は、隣に座る男をじとり、とねめつける。幸仁が、同じような視線を返してはふん、と鼻を鳴らした。

「お前みたいな危険極まりない男を和に近付かせるわけがないだろ
う」

「ちよーつと暴走しただけですよ。和があまりにも可愛い事を言っ
てくれたから」

「ふん、和は優しい子だからな。お前に感謝を伝えようと誠意を見
せたにすぎん。たとえ不本意だとしてもな」

「あれえ、好きだって言われた俺にひよつとして嫉妬してますう？」
「っ 貴様！」

運転席に座っているのが進となれば、もちろん助手席に座るのは
彩だ。そうなれば後部座席に三人が並んで座るわけであるが、遥が
和の隣に座ろうとする前に、幸仁が真ん中を陣取ってこでも動こ
うとしない。かなり揉めたが、車の座席でガタガタ言うな、という
和の一喝に遥はしぶしぶうなずいたのだった。

和は言い争いをするふたりをみつめては、実はこいつら仲が良い
んじゃないのか、とひとりため息を吐いた。

「じゃあ、お前たち、荷物を運んだらっ…！ しっかり挨拶にいくんだ
ぞ！」

ぜいぜいと息を上げながら言っつて、幸仁はさっさと奥に下がって
いく。遥との言い争いにすっかり疲れたようだが、怒鳴り合いをし
たもう一方の遥は若さゆえなのか、けろりと澄ました顔をしていた。
屋敷に到着して周りを見渡せば、いつもと変わらない光景が飛び
込んでくる。和は息を吸い込んで、ゆっくりと目を閉じる。

瞬間、唇になにか柔らかいものが触れた。

「！ え、ちよっ」

「これくらいはいいよね」

ぱち、と両目を開けて目の前にあつた遙の顔に、先ほどの意味を理解した和は狼狽して遙から距離をとる。顔を真っ赤にして後退する和をみて、遙はいたずらっぽく微笑んでみせた。

和泉君！と叫んでみたものの、そうそう嫌だとは思えない自身の感情に呆れながら、遙がこの田舎に滞在中、本当にいっしょなのだという事を妙に実感していた。

「和、彩さんと進さん行っちゃったみたいなんだけど……」

「え！？あ、じゃあ私たちも早く行こう！ってそういえば今更なんだけど、和泉君大丈夫なの？私は気心知れてるからいいけどさ、全然知らないひとたちと大部屋でいっしょだよ？ちいたあちゃんに言つて部屋を別にしてもらえるように言おうか？急病人とかは違ふところに寝たりするしさ」

和の言葉に、遙はありがとう、とお礼を言つてから首を振る。

「でも大丈夫だよ。和の昔話とか、色々と訊いてみたい事とかたくさんあるし、他のひとがここでどんな風に過ごしたか感じてみたいんだ。そうすれば、和との時間を本当の意味で共有できるでしょ？」

ね？と微笑む遙に、和は嬉しいような、呆れてしまっているような、複雑な感情をもって彼をみつめる。ほ、と吐いた息は一体どのような意味だったのか、発した和自身にもそれはわからなかった。

冬の時と同じように、和は玄関で自身の靴を持参した袋におさめる。遙にも同じように袋を渡せば、それに入れるよう促した。うなずいた遙は、和にならう。

長い廊下をふたり並んで歩けば、和はまず荷物を置きに行こう、と男子部屋へまわることにした。

「女子部屋はこのもうちょっと先なの。玄関からは男子部屋の近いかな」

「へえー、本当に修学旅行みたいなんだね」

冬の時は急遽であったし、滞在期間も短かった為か、遙は周りをまじまじと見る機会もあまりなかったらしい。今度はしっかりと味わおうと思っっているのか、好奇心旺盛に視線を彷徨わせていた。和はその様子を見て、くすりと小さく笑んだ。

「じゃあ、ここで待ってるから」

「うん」

ふすまから少し離れた所で遙は和と別れる。少し緊張しながらも、男子部屋の入り口を開いた。

「！ あー！ 遙君！？」

開いた瞬間に、ひとりの人物に指をさされて遙は目を見開いた。

「ええと、確か…司さん、でしたよね」

微笑みつつ遙が言えば、憶えててくれたんだ！とはにかみながら司が近付いてくる。ひとが良さそうなその顔は、男女ともに友人が多そうだな、と遙はひとり心の中で思う。

「彼女はお元気ですか？」

「大丈夫だよ、別れてないから！」

きらり、と光った遙の瞳に多少怯えながらも、司は全力でその可能性を否定した。司は元々が和を妹のようにしか思っではないの

で安全圏の人間であるとわかってはいるが、遙はどうしても確認し
たくなってしまう。

「司、『遙君』ってもしかしてさー……」

「ああ、そっか。お前、冬は和ちゃんと入れ違いだったよな。そう
だよ、噂の彼氏君」

「おおー君が！いやあー、一度見たかったんだよ遙君！て呼んでい
い？」

これまた人好きする笑顔を向けられ、遙も同じように微笑み返す。

「はい、ぜひ。ええと？」

「あ、俺は広樹ひろきって呼んで。俺と司は彩ちゃんと同い年なんだ。ち
なみに俺も地元(ひな)に彼女がいるからご心配なく。単なる好奇心だから
さ」

「好奇心、ですか」

広樹の言葉に遙が多少不思議そうな視線を向ければ、広樹と司は
同じようないたずらっぽい表情で微笑んでみせた。肩をすくめて口
を開いたのは司だ。

「正直、遙君もまあ、知ってるんだろうけど。和は外では知らない
けどここでは割とモテるんだよ。とっつきやすいし、口調はきつい
ところもあるけど、最終的には優しいだろ？さばさばしてるところが
むしろ好感持てるって野郎が多くてさ」

「彩ちゃんは割りとオールグラウンドでモテるんだけど和はきっぱ
り二分化されるんだよな。俺らみたいに女として扱う気が起きない
って奴らと可愛いつて言う奴」

「そうそう。んで、男っ気もないもんだから余計にみんな燃えてる
所もあってさ。恋人になったらどんな顔すんだろう、とか言ってた

りして……って遥君、俺じゃないよ!？」

焦ったように司が慌てて付け加えれば、遥はわかってますよ、と背中に冷気を背負いながら微笑む。まあまあ、と広樹が苦笑して続きを引き受けた。

「それでも大半は本気じゃなかったと思うよ。告白した真吾とかはほんとに惚れてただろうけどねえ。ただやっぱ手出しが全然出来なくてみんな玉碎してくだろう? 彩ちゃんのパウチだけじゃなく和自身も鈍さとガードの固さもあいつ。何人あいつを前に散らしていいか」

「無自覚だからなあ、和は。ま、親戚のおっさん連中があんなだったんだししょうがないけど」

「だからさ、遥君。君がどんな男なのか単純に興味あつてさ。二枚壁を見事に突破したんだからね。あとは兄心かな。和のこと、大切にやってよ?」

広樹の言葉に、遥は真剣な表情ではない、とうなずく。それをみて満足気に司と広樹は微笑んだ。

そろそろ話を切り上げて和の元へ向かわねば、と遥は退出のあいさつをする。ふたりにはまたあとで色々話を約束を交わし、ふすまに手をかけた。出て行く直前、訊きたかったことを思い出し、遥は短くあ、と呟いて振り返った。

遥の様子にん?と司と広樹が声をあげれば、遥はあの、とふたりをうかがう。

「……中村君、中村雄大君は、今回もここに来ますか?」

遥の言葉に、司と広樹が目丸くした。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その4（前書き）

大変お待たせをいたしました！

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その4

「お待たせ。ごめんね、ちょっと司さんと広樹さんと話し込んでた」

男子部屋から退出してきた遙を確認して、和は一瞬眉間に皺を寄せる。

彼の様子がおかしい。ふすまを閉め、一瞬俯いた遙の顔がどこか陰りを帯びていたことを和は見逃さなかった。

それは彼女特有の勘だと言っても良い。普通の人間ならばまず見抜けない変化であったろう。しかし、笹森和は本人が思っている以上にあらゆる意味で普通ではなかった。であるからこそ、彼女が次にとった行動は、これまたあまり一般的とは言えなかった。

和は何事もなかったかのようににっこりと遙と同じように笑みを浮かべると、よかった、と言葉を発す。

「和泉君、馴染めなかったら嫌だなと思ってたけど、取り越し苦労だったね」

「だからそんなに俺の保護者みたいにならなくていいってば」
「あはは」

苦笑する遙に、和は声を上げて笑う。

心のどこかにひっかかるものはあるものの、現時点で遙はそれについて何も話そうとはしない。何か心配事や疑問があるかもしれないが、和に相談してこない限りは隠したい、ということなのだろう。こういった場面に出くわした際、和はまず相手の秘密を無理に暴こうとはしない。黙って、向こう方からの反応を待つのみだ。

和は、自身の心に無遠慮で入ってくる他人がとても苦手だ。嫌いだと言い切ってしまうのはどこか身勝手だと感じるので、和はいつも苦手である、と思うに留めたいと考えている。しかしそうやって

思考してしまっている時点で、つまりは彼女はそういった人間が大嫌いなのだろう。

そんな、思慮浅い人間が大の苦手である笹森和嬢は、もちろん自分が同じような行動を取ることを厭う。であるから、知りたくても無理やり訊き出すという行為は、彼女にとって論外だった。

と、ここまでくるとまるでとても心が広い人間に思えてくるが、和はそれでは終わらない。

確かに、本人に無理に訊き出す事はしないが、密に探るという事はあまり罪を覚えずに彼女はやってのける。それもまあ、よほど気になれば、であるが、それでも和の胸中には様子がどんどんおかしくなったらそれを実行しよう、という頭はきつちりと浮かんでいる。そんな彼女の複雑な思考をもちろん遥は知る事もなく、ふたりは長い廊下を微笑み合いつつ歩いていった。

先ほどとは逆に、今度は遥が女子部屋の前で和を待つていれば、一分も経たないうちに和が表へ顔を出してくる。遥はその様子にどうしたのかと小さく首を傾げれば、目が合った和が困ったように笑う。

無言で手招きをする和に、遥は疑問符を浮かべながらも従った。

「……入って大丈夫なの？」

ふすまの前で戸惑った様子になる遥に、和が口を開きかけたとき、勢い良く女子部屋のふすまが開け放たれた。

目を見開いて一步退いた遥に、和はあーあ、と小さく呟いた。同情的色を示すその声音に疑問を持った遥であったが、それは次の瞬間には解消された。

「きゃー！遥君ひさしぶりいいい！」

開いたふすまと同じくらしい勢いで飛び出してきたその人物に驚

愕しながらも、遙は悲鳴をあげることもなくなんとか笑顔を貼り付けた。和はそれを見て感心する。さすがは稀代のスケコマシである。

「お久しぶりです、智子さん」

「いやん、名前もきつちり覚えてくれてたのねー」

「あ、あの、遙さん、お久しぶりです」

はしゃぐ智子の一歩後ろで、おずおずと声を上げた少女は、顔を真っ赤に染め上げている。

遙はその少女を一瞥すれば、ああ、と声を上げて顔を綻ばせた。

「亜紀ちゃんもいたんだ。こんにちは、久しぶりだね」

につこりと微笑んで少し腰を屈める。亜紀は赤い顔をそのままに瞳を潤ませた。

「私も、覚えててくれたんですね……」

「もちろん。和と特に仲良さそうにしていた人たちは皆覚えてるよ。高校生活は楽しい？」

遙の言葉に、亜紀は耳はおろか、首元までが炎のように熱くなつた。

智子と亜紀は、この屋敷で和とよく話す女性で、集団からかばってくれた記憶も多い。そんな話を和から聞いていれば、当然遙は優しくなる。和に優しい人間に、遙は無条件で優しくなるのだ。

智子は彩と同じ年であり、亜紀は和と遙よりも年下で、冬にはまだ中学三年生だった。四月を迎えて高校生になった事実を、遙はまめめめしく記憶していた、というわけだ。

それに感心をとびこえて呆れてしまった和は、はあ、と短いため息を吐いた。智子も同じだったようで、和を見ては苦笑をもらす。

女性ふたりが意味深な目配せをし終えれば、遙は和のほうへと振り返った。

「和、ごあいさつは行かなくてもいいの？」

「ん、そうだね。そろそろ行くところか」

少し困ったように笑いながらうなずく和に、遙はにこにこ笑顔を向ける。亜紀は遙に見惚れているかのようにぼう、と彼の顔を見つめていた。

「じゃあ、ふたりともまたあとで」

「他の女の子にも彼氏同伴だって伝えとくわね」

悪戯っぽく笑いながら言った智子の言葉に和が片眉をあげたが、特別何かを発することはなく、そのままふたりは退出した。

廊下を歩く際、いつものように遙は和に手を繋ぐことをねだる。和はどうかそれを回避したかったが、了承しなければ横抱きにして屋敷内を練り歩いてやると言ってきたきかない。そんな彼をおさえこむ自信が当然ながら和にはなく、今ふたりの手は繋がれた状態であった。

しばらくは無言で屋敷の主の下へと向かっていたが、ちら、と遙の顔を見た和は、すぐに前へと視線を戻して少し長いため息を吐き出した。

「いまのあからさまな非難の目はなにかな」

「えー、別にそんなことないよ」

「和、隠したいわけでもないのにわざとらしくごまかすのやめてくれるかな」

遙の言葉に、和は渴いた笑いをもらす。

自身の恋人が人一倍隠し事が上手であるということ、遙は誰よりも知っている。であるからこそ、今のような発言があったわけだが、和はそれが少々気に入らない。

「察するまではいかないと？あれえ、そこまで馬鹿だったっけ和泉君て」

「……さっきの態度のこと？」

「やっぱわかってるんじゃない？」

「妬きもち!？」

ぱ、と瞳を輝かせた遙をみて、いっそ、そうだと言ってあげようか、と和の心に過ぎる。

一瞬の沈黙の後、和はたとえばね？と声を上げた。

「そうだって言ったら、今みたいな行為を君はやめるのかい」

「えーほ、本当に嫉妬？」

「……質問に答えてくれないかな」

「和こそ答えてよ。嫌だった？さっきみたいに女の子に優しくするの」

「過剰に優しくするのはちょっと感心しないかな」

和の言葉に、遙は先ほどまで浮き立っていた気持ちを消沈する。

「……なんだ、そういうことか」

「亜紀ちゃんみたいなのタイプは色々危ういから。必要以上に近づくのはやめてやって。智ちゃんみたいな冗談で終われるひとはいいけど……亜紀ちゃんはない。いたずらに傷付かせるのは嫌でしょ？」

「それは、俺だってわかってるけど。でも、ここには和の恋人として来てるんだよ？」

「和泉君らしからぬ発言だなあ。自分がどれだけ魅力ある男かって

理解してるはずでしょ？それとも亜紀ちゃんに乗り換えたいの、浮気したいの」

「それ、本気で言ってるの？」

ぎゅ、とこめられた遙の左手の力に和は顔を顰める。

「……だから、冗談じゃ済まなくなる前につてこと。ほら、ここでは皆が非日常を送るでしょ？旅先では色々と普段よりも開放的になったりするし……特に夏っていう季節も手伝って何が起こるかかわからないしさ。和泉君黙ってても女の子が寄って来るんだから。私に黙って浮気しましょくらいは言われると思つとかないと」

「そんなの、意味なんてないよ。俺は、周りに愛想よくして和の立場を良くするのに努める。それで勘違いしたのなら、むこうが馬鹿なんだ」

遙の弁は、和にとつても理解できないものではなかった。確かに恋人である遙の評価は、ひいては和の評価につながる。遙はそれをわかつているからこそ、和を糾弾する女連中を一掃したいと考えていた。いまだ、ちくちくと言われているらしいのを遙は知っているのだ。

こういつてしまうと自信過剰になってしまいが、遙は、自身が老いも若きも魅了する術を身に付けているとはつきり自負していた。

しかし、和はそれをすべて承服できるほど自分本位にはなれない。彼の言に眉を顰めた。

「！ ちょっと、和泉君」

「亜紀ちゃんみたいにな子には、確かに距離を保つよう心がける。……でも、忘れないで。俺にとつて和がすべてなんだ。和に軽蔑されちゃうかもしれないくらい、俺は和以外がほぼどうでもいい。でも、亜紀ちゃんが和にとつて大切な存在だって言うなら、彼女のことは

きちんと考えて行動するから」

「……………」

「そもそも、俺はどんな状況下になっても自分を守れるしそう心配しなくても間違いないなんて起きやしないよ」

「いや、まあ、そこは心配してないんだけどさ。でも、嬉しいけど、その、やりすぎないで、ね？」

「うん」

まばゆいといわんばかりの笑顔で微笑む彼を、うさんくさいと思うのはいけないことであろうか、と和は頬を引き攣らせて考える。しかし結局は、100%止める術はないのだし、遥の裁量を信じるしかない。

和は苦笑して、遥の手を一瞬だけ強く握る。それに応えるかのように遥も握り返せば、繋がった和の右手ごと持ち上げる。リップ音が響いたとき、遥の唇は和の手の甲にぴったりとくっついていた。相変わらずの日本男子らしからぬその行動に繋がれた手を離そうとひいたが、それよりも遥が握りこむ力のほうが強かった。

「離さないからね」

端的に発せられたその言葉の意味はあまりにも多種にわたるもので、色々と巡らせてはらしくないと思いつつも和はわずか頬を赤らめた。確認して満足そうに微笑んだ遥が行こう、と先を促すので、和は無言でそれに従った。

「笹森和です、失礼します」

「和泉遥です、失礼します」

懐かしい慣習に、和と遥は背筋をのばしてぴん、と張りつめた空気のなかに自身を放り込む。この大屋敷の主である知恵と多恵とい

うとても可愛いおばあさんに、ここに到着した人間は誰しもが必ずあいさつに向かう。なぜなのかはわからないが、この部屋の前に来ると、誰しも皆、緊張状態に陥るのだ。それは屋敷の主たる威風の成せるわざなのか。しかしてちよこん、と椅子に鎮座する彼女らは、とてもそんな空気を作り出すようには見えなかった。

ふすまを開いた瞬間にあらわれたまるで双子のような可愛らしい年老いたふたりをみて、和も遙も顔を綻ばせる。

無条件に信じてしまいそうな、そんな不思議な雰囲気がこのふたりからは感じられる。和は、この知恵と多恵が大好きで、彼女らには幾分か素直に自身の好意を伝えることができたし、年相応の、無邪気な振る舞いを見せることもできた。

それは特別無理をしたり、意識をしたりして作られたものではない。きつと、彼女達の前ではすべての者が赤子も同然になってしまうからなのだろう。

「あらあら、元気そうねえ。相変わらず仲良しさん」

「道中は特別なにもなくやってこれたかしら？和ちゃん、遙君」

目を丸くして楽しそうに笑う知恵と多恵に、和は飛びついた。

「久しぶりー！今年の夏もお世話になります！長生きしてね、ちいちゃん、たあちゃん！」

和の言葉に、あらあらあ、と知恵と多恵は声をあげる。

「和ちゃんたら、やっぱりそれを言うのねえ」

「どうしましょ、言葉で私達が誰よりも長生きしちゃったら」

「大丈夫だよ、みんな、結婚して子ども産むんだし！」

「え、和ってば大胆だね。プロポーズ？」

和の言葉に間髪いれずに遙がそうつつこみを入れれば、はつとした和は知恵と多恵から身体を離し、後ろに立つ遙へと視線を向ける。にらまれた遙は楽しそうに笑うばかりだ。

「ふたりの子どもが見られたら素敵ねえ、多恵ちゃん」

「きつと可愛いものねえ、知恵ちゃん」

うふふ、と笑い合うふたりに、和はちいちゃん、たあちゃん！と口を尖らせる。

変なことを言うから！と和が遙を蹴り上げれば、遙がそれを避けて笑う。ちなみに今日の和はパンツスタイルなので遙が叱ることはない。

そんなふたりのやりとりを微笑ましく見守っていた主たちは、しかし次の瞬間に空気を一変させた。

「……それにしても、これも運命なのかしら」

「どうなのかしら。あるいは、決着の時、とも」

「それは、誰にとって？」

「ああ、わかってしまったらそれは人生じゃないのじゃない？」

やり取りを聞いていたわけではないが、少し冷たくなった空気を感じ取ったふたりは振り返って知恵と多恵を見つめる。その次の瞬間。

部屋の外から、数分前の和や遙と同じように緊張した声が響いた。

「中村雄大です、失礼します」

その声と名前に、和は無意識だったが身体を強張らせた。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その5

ふすまを開いた瞬間に見えた、相変わらずの明るい短髪と、くりくりとしたまるい瞳。放たれる言葉は辛辣でありながらも、子犬を思わせる容姿はどこか人々に可愛いという言葉を起こさせる。

しばらく部屋へと入った彼を見つめていたが、和は我に返れば慌てて表情を作る。

「久しぶり。雄大も今日こっちに着いたんだ」

「ああ。しばらくぶりだな、和」

ふ、と微笑まれて、和は驚きに小さく瞳を揺らす。無視までいかずとも、目を合わせてくれなかつたり、よそよそしい態度で接せられる事はある程度覚悟していたのだ。そんな和の心構えをあつさり裏切って雄大はしっかりと和に笑いかけている。和はその様子に戸惑いながらも、微笑を返した。

とりあえずはこちらからぎくしゃくするのは失礼以外のなにものでもないのだし、彼の心が見えない以上はおめでたく諦めたのだ、と安心するつもりも和にはない。そうやって警戒心をまるで失くして相手に触れるのは、時として何よりも残酷だ。和はそういった類の馬鹿な女にはなるまい、と肝に銘じた。

と、そこまでの決意を内心で固めた所で、和と向かい合う雄大の顔が横に逸らされれば、不機嫌さを隠す事もなくその相貌を歪める。和は一瞬、首を傾げそうになったが、すぐに合点がいったのでその仕草を表に出すことはなかった。

「まさかあんたまでここに来てるなんてな」

「久しぶりだね、中村君」

睨み付けるように遙を見る雄大を、余裕があるのかゆったりと微笑んでそれに応える遙は、雄大にしてみればどこまでも嫌味にうつっているだろう。

和は、火花でも散らさん勢いのふたりをそれぞれ視界に留めれば、何事もないかのように呑気な声をあげる。もちろん、彼女はこれを狙ってやっていた。

「雄大、ちいたあちゃんにあいさつするんでしょう？ 私はもう済んだからどうぞ」

「……ああ」

それじゃあまたね、と知恵と多恵に声をかけ、和は部屋を退出しようとするまに手をかける。遙は、いまだ雄大の方を見つめていた。

「和」

ため息を吐きかけたところで名を呼ばれ、和は振り向く。真っ直ぐにこちらを見る雄大の視線は真剣なもので、和は無意識に背筋を伸ばした。

「なに？」

問えば、雄大は瞳をやわらげてふ、と空気を揺らす。微笑んだのだとわかったが、あまりにも優しいそれに和はなぜか泣き出しそうな気持ちになった。

「ありがとな」

「……気にしなくていいよ。いつでもこっさり食べてあげるし」

「……もうやんねえよ、馬鹿」

「あはは。じゃあ、雄大も、またね」

「ああ」

微笑み合って言葉を交わしたふたりを一瞥して仏頂面になる遙を引きずりながら、和は部屋をあとにした。

間髪いれずに繋ごうとしてきた遙の右手を、和は叩き落とす。

遙は、気に入らないのだろう。ますます仏頂面になって和に拗ねた表情を見せるが、向けられた彼女はそれを冷たく一瞥した。

「そんな顔したって嫌なもんはや。今はくつつきたくないの！」

「……さっきの中村君の言葉ってどういう意味？」

遙の質問に、和は半ば呆れたように息を吐く。

「わかつてるんでしょ」

「後半の意味はふたりにしかわからないじゃないか」

「前半の意味がわかればそれでいいでしょうが」

小さいことだが、なんとなく、和は遙にこの小さな秘密の正体を教えるのが嫌だった。それは、雄大との間に確かに芽生えている信頼によるものだ。恋人同士には決してなれないふたりではあるが、遙とはまた違った絆で結ばれている。

先ほどの雄大の言葉は、間違いなくきっぱりと諦める、という意味のものだった。ごまかすように茶化した返答に、申し訳なさそうに応えた彼の反応をみればそれは確信になる。

和は応えられない申し訳なさや、誰を傷付けても隣に立つ彼のそばに居たいのだという事実、いまさらながら誇りのようなものと照れくささが混ざり合い、なんとも居た堪れない気持ちになった。

しかし隣に立つ遙はそんな事を和が感じているなどと考えられるはずもなく、相変わらず気に入らない様子で和へとちよっかいをかけてくる。

拒絶しても和の腰を抱こうとしたり、髪に触れたり、頬を撫でよ
うとする遙に我慢できなくなったのか、和は苛立ちを爆発させるか
のように彼の顎へと頭突きをお見舞いした。

いつものように足に攻撃が来るとばかり思っただけで油断していた遙は、
完全に入った和の頭突きに悶絶し、ぐらり、と傾いた。

「さすがに不謹慎でしょうが。普段もそうだけど、特にこの旅行中
はむやみに触ったりしないですよ？」

「！ 中村君に気を遣って？それこそ失礼じゃないの？」

「わざわざ見せつけるような真似をする事もないでしょ。というよ
り、単純に恥ずかしいだけだよ」

「それって、中村君を理由にしてるようであって実は和にとって都合
がいいだけじゃ」

「とにかくそういうことだから」

一瞥して去って行く和を追いかけたとしても、いまだ痛みを引きず
り涙目の遙はただ見送るしか術はない。何よりも、彼女の感情も理
解できるから遙は目の前の恋人を追おうとは思わなかった。

「……でも旅行中ってのは承服しかねるな」

「なにがだ」

ぼつりと呟いた言葉に返答がある。ひとりであるはずなのに何故
だと疑問に感じ、驚いて後ろを振り返れば、そこには先ほど別れた
ばかりの雄大がいた。

和と同じように、遙も彼についての印象はどこか子犬めいている、
と思う部分があり、くりくりとした瞳をみつめているとなぜだか自
身が悪い人間であるとも思えてきそう。それでも、愛しい恋人
に好意を寄せる男性に優しくできるほど遙は甘くはなれない。

意地の悪い笑みをむければ、遙は鋭い視線で雄大を射抜く。

「こちらの話だよ」

「……和に痛めつけられてるみたいだったけど？」

雄大の言葉に、遥は目を丸くする。

「見たたの？ やらしーなあ、中村君」

「お前らがこんなところでいつまでもくっついてるからだろ！ 言つとくけどなあ、俺は和の為にあいつのこと友達として見ようって決めたけど、お前の事はずーっと気に入らないまんまだからなあ！」

先ほどまでの会話の流れで、どうも彼らしくないなどと遥は思っていたが、今の言葉で思わず気を緩めてしまったのか、遥の顔が嬉しそうに綻んだ。

雄大は、そんな遥の表情が気に入らないのだろう。顔を真っ赤にして何を笑ってるんだ！と怒鳴ってくる。

さすがに失礼であると感じた遥は、一言ごめん、と謝罪の言葉を口にはしたが、それでもおさまりきらないのか、ついには肩を震わせた。どうにもおかしさがこみあげてくる。

「和じゃないけど、そういう愚直さは俺、どうしても嫌いになれないんだなあ」

「……何言ってるんだよ」

「こつちの話。俺は、中村君の事そう嫌いじゃないけど、和にちよつかいかけるんならいつでも潰すって覚えておいてね」

「お前も覚えとけ。泣かせるようなことがあつたら俺はぜってえ遠慮しねえよ」

手負いの獣のようなその双眸も、しかし遥はどこか好感が持てた。怒気をはらんでいたとしても、遥を嫌悪する様子はみられない。そ

れに遙は驚くほど彼はお人好しであると感じずにはいらなかった。

「肝に銘じておくよ」

「……お前のそのいかにも余裕ですって態度が嫌なんだよ」

苦笑しながら去っていく雄大の後姿に、遙は潔い格好よさをみたのだった。

「和、遙君は？」

「んー？男子部屋のほうなんじゃないの。ねえ、今日は皆、ご飯どうするの？」

女子部屋に戻ってきた和は、智子の質問に適当に答えつつ、逆に今夜の話を持ちかける。

この広大な屋敷には、夏と冬の長期にわたる休みに限り、たくさん世帯が寝泊りをする。三が日などは三日三晩宴会がとりおこなわれ、一日三食を決まった時間にとるが、夏の間は滞在期間もそれぞれがバラバラである為、わりと自由になっている。いくつかおおまかな決まりがあり、朝は最低でも9時までには起床すること。屋内で食事をする場合は宴会場でとること。などがある。ちなみに、就寝時間は何時になってもかまわない。

「皆やつぱり親は来てない子が多いからさあ、みんなで適当に作って食べようかって。面倒だから男子と女子いっしょにとるっか？」

「でも親世代もまったくいれないわけじゃないんでしょ？」

「まあねえ。大体が定年迎えたじいさま連中だし……相手するのは面倒なのよね」

「つつたつてみんながいっしょにご飯だつてなつたら自分達のぶんも用意してほしいって思うんじゃないの？」

「彩といっしょにおばさん連中に声かけてきてくんない？」

「……最初からそれが目的だったんでしょ」

じと、と和が睨みつければ、智子はふふ、と笑う。定年を迎えた世代は、なにかといちばん口うるさく、嫌味も二、三はとぶのが常だ。出来ることならば若い世代はみな、必要以上に関わりたくはない。

「そついえば彩ちゃんは？」

「さつきトイレに行って来るって言ってたから、もうそろそろ戻ってくると思つわよ」

そつ智子が告げたとき、ちょうどふすまが開かれた。噂の張本人が都合よくあらわれたことで、智子は上機嫌に頼んだ、と和の背中を叩いた。

「ん？どうしたの」

「お姉ちゃん、いっしょにおばさんたちの女子部屋いこう」

「え？ああ、ご飯のこと？」

「そ。まあ朝と昼はみんなけっこう適当にやってるけどねえ」

「智子はまた来ないわけ？」

「大丈夫、智ちゃんにはそのぶん嫌ってほど働いてもらうから」

不穏な和の言葉と微笑みに、若干の寒気を覚えたものの、結局智子は最後までおば連中に会うことを拒否したので、予定通り和と彩でもうひとつある女子部屋へと向かった。

「あら、彩ちゃん和ちゃん！久しぶりねえ、元気？」

「お久しぶりです。はい、家族みんな健康です」

若い連中が集まる女子部屋その2と比べると、その1であるおば

さん世代が集まっている女子部屋のがやはり人数は少ない。およそ10人ほどしかないので、おじさん世代もそれくらいなのだろう。

「あ、ひょっとして今日のご飯のこと気にしてくれてた？いいわよ、こつちはこつちでやるから。時間ずらしたら台所も好きに使えるでしょう？私達は四時になったらご飯のしたくをしちゃうから、彩ちゃんたち若い子は六時に台所に入ってもらえるかしら？」

頭の中で換算しても、食事にありつけるのはわりと遅い時間になる。特に若い世代が多いので、食事のしたくはけっこうな時間がかかるだろう。

夜更かしをするのに普段ならばみな抵抗はないだろうが、次の日に遅くとも9時起床というきまりがあるため、あまり時間がかかりすぎるのも良くなかろうと和は考えた。

「あの、後片付けはこちらでやりますんで、もしよければなんです。が五時から台所に入っても良いでしょうか？」

「あああ、悪いわね。それじゃお願いできる？」

「はい」

隣の彩をちら見すれば、わざとらしい、と顔が言っている。佐々木家のこのお婆は人当たりが良いとみせかけわりとしたたかだ。恐らく最初から和にその言葉を言わせたかったのだろう。

それでもとりあえず、角が立たずに事を終えられたので、和と彩はほっと息を吐いてその場をあとにしようと思いを下げた。

「ああ、そうそう、和ちゃん」

「はい？」

佐々木と、佐々木の隣に立つ田中のお婆が嫌な笑みでこちらをみ

つめている。和は嫌な予感に背中を慄かせた。

「あなた、お正月に連れてきた男の子をまた連れてきたんですって？」

「……それは、和泉君のことですか？」

和の言葉に、田中がふ、と呆れたように笑った。

「名前はどうでもいいんだけど。なあに、彼氏をここまで連れてくるなんて大胆ね。結婚前に親公認でいつしよに旅行だなんて、笹森家はずいぶんと奔放なのねえ？」

「はあ。確かに常識からは逸脱しているかもしれませんがね。でも別にふたりきりじゃないんだしそこまで問題があります？」

「そうはいつでもねえ」

「お屋敷内で変な事はしないでちょうだいね。知恵さんと多恵さんにも申し訳が立たないし」

佐々木の言葉に、彩は眉間に皺を寄せる。

「そもそも、知恵ちゃんと多恵ちゃんから直々に招待されたから遙君は居るんですよ？屋敷の主の意向におばさま方は反対なんですか？」

彩の発言は意外なものだったのか、おば連中はにわかに狼狽する。

「あ、あら、そうなの？別にふたりがお許しになってるんならまあ、いいとは思っけれど」

「そうね、節度を守ってくればね」

「色々とお心遣い感謝しますよ」

和の言葉はていねいなものであったが、それに反して底冷えしたような瞳に、単なる高校生でありながら親よりも歳がいつている女性ふたりを慄かせた。

退出して部屋に戻る為には廊下を歩いていると、彩は真っ赤になつて足音を響かせていた。

「まったく！あの連中にも困つたもんだわ！いつだつてネタを探してるんだからっ」

「まあまあ。あんなひとたちばかりじゃないんだしさ。そうそう怒りなさんなつて」

「和つてば。自分のことでしょうか？少しは怒りなさい！」

「それなりに態度で示したつもりだけど？それ以上つつこむところからも容赦しませんよ、とは牽制したつもりだし」

「ああ、最後のあのおびえた顔は良かったわね」

思い出し笑いをする彩に、和がそれに、と言ひ募ろうとすれば、少し離れた場所から声がかけられた。

「和！」

存在を確認したとたん、飼い主に忠実な犬のように一目散に和めかけてやってくる存在がある。和は視認して不覚にも顔を綻ばせた。

『それに、今の私には彼が居るから』

心で唱えた瞬間、和の心にはあたたかいなにかが広がっていった。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その6

「フーかまえた」

「……………」

「え、なにその恥ずかしいせりふ、とか思わないでよ冷たいなあ」

満面の笑みで駆け寄ってきた遙は、和を腕の中へと閉じ込める。

その後吐き出されたそのせりふに和が半眼になれば、彼女が心の内で思っていたであろう言葉を口に出された。和はそれが面白くないのか恋人の懐で小さく身動きをする。

「……………遙君てば、だいぶ和の心を読むようになったのね」

困ったような見守るような表情で微笑む彩に、遙は少し得意気な顔をみせた。

「読めないところはとことん読めないんですけどね、これくらいは「和泉君がわかりやすいから私もわかりやすくなっちゃおうの！」

少し頬を染めて遙を睨みつけるその顔がたまらなく愛しくなれば、遙は力を込めて和をきゅう、と抱きしめる。和はこら！と声をあげた。

「ついさつき屋敷内では節度をもてと言われたばっかなんだからね。嫌味言われるのは私なんだし、そうおおっぴらにくつつかないですよ」

和の言葉にぴくり、と反応した遙は甘ったるい雰囲気はどこへいったのか、冷やかな視線を和へと向ける。もちろん本当に睨み付けたい敵は別にいるが、彼女を通してその相手を見ようとしている

のだろう。

「……どこのどいつ？」

低い地を這うような声に、和だけではなく彩もびくり、と肩をすくませる。その様子に多少狼狽した遙は、慌てて取り繕うかのよう
に笑みを浮かべた。

「もちろん、ここに居る間は俺だつてわきまえるつもりだよ？でもその分くつついてないと足りなくなる」

「……足りなくなるって」

「節度をもつてほしいんでしょう？」

満面の笑みに大きくため息を吐いた和は、そのまま遙の言葉を肯定も否定もすることなく、廊下を歩き出した。ぴつたりと隣に立つ男に握られた手を、無理やりほどく事はしなかった。

親世代が夕飯を済ませ宴会場を去ろうとしていた時間帯、和たち子ども世代が賑々しくその場へとやってくる。遙はもちろん和の隣にぴつたりと張り付いて離れようとはしない。無表情に隣には誰もいないかのように振る舞いながら、和は智子や亜紀となごやかに会話をしつつ部屋へと足を踏み入れた。

まだ残っている人間が一斉に子ども達を視認すれば、ほとんどの人間は微笑みながら話しかけてくる。

遠巻きに見ている何人かのおば連中を一瞥しながらも、目の前のおじやおばに和も笑みを返した。

隣であれか、と呟いた遙の声に、和は気付かないふりをする。

幸仁と何人かの人間がこの場にいなかったので、きつともう部屋へ戻っているのだろう、と和は胸中で考えていた。

「和ちゃん、今回も彼氏といっしょなのかい、仲良いなあ」

特に他意はない様子で豪快に笑いつつ話しかけてくるおじさん連中は、もうすでに半分できあがっているようだ。ちら、と確認すれば斉藤一家はいないらしく、和は胸中で安堵していた。

「えーと、仲良いつてほどでもないですけど」

「はいとっても仲良しです」

言葉を遮り、につこりと笑って遙が和の肩を抱けば、おじ連中はなおも機嫌よく笑う。和は狼狽して遙の体を押しつけようとすが、かえってそれが微笑ましくうつり、周りの大人はどこか眩しいものを見るようにみつめている。

「そうかそうか、いいことだな」

「彩ちゃん、和ちゃんのが先に結婚しちゃうかもしれないぞー、そうになったら寂しいだろう」

話をふられて、ふたりの隣に立っていた彩が苦笑する。しかし次には、彩の隣に控えていた進がまったをかけた。

「ご心配なく。僕と彩が先ですから」

その言葉に、宴会場が沸く。それはおじ連中だけの話ではない。後ろから聞こえた悲鳴は、もちろん若い世代のものだ。それもそうだが、彩に恋慕や憧憬の念を抱いているものは少なくない。

進はその声をあげた連中に鋭い視線を投げかける。

遙と同一のものを感じ取ったのか、何人かが顔を青くしてそろそろ、と視線を外し口をつぐんだ。

「！ ちよ、ちよつと後藤君」

慌てる彩に、進が眉を顰めた。

「どうしてそんな他人行儀な呼び方するわけ？いつも通りに呼べばいいんだよ、彩」

「す、進……」

顔を真っ赤にして縮こまる彩に、周りの人間は祝福の言葉を贈る。

「こりやめでたいなあ！進と彩ちゃんか！」

「高明君、寂しいんじゃないのか？こりやあ一気にふたりともお嫁さんだもんなあ！」

笑う声にし少し困りながらも、和は気配を殺して環の中心からするする、と抜け出す。そろそろ準備を始めねばいつまでたっても食事にありつけない。和は何人かに声をかけつつ台所へと向かった。

「ちよつとお、和！教えておいてよっ」

「私も全然知らなかったあ」

和のひとつ上の千早ちはやと、ひとつ下の七美ななみが口を尖らせて彼女を囲う。和はそれにごめん、と苦笑した。

「別に隠しているわけでもないんだらうけど、こっちから言うのも変じゃん。彩ちゃんもあまり言いふらされたくないみたいだし……ま、男連中からしたら早いとこ自分の気持ちに見切りつけたかったらうけどね」

冷蔵庫から食材を取り出しながら話す和に、ふたりはうなづく。

他の女性達も同じようにうなずいていた。

「笹森姉妹は本当、男連中に人気あったからねえ」

「ここではアイドル的存在よね」

野菜類を洗いつつ、お喋りをとめない光景は、女性特有ともいえる男性不可侵の領域だ。きつとこの場に男性がうっかり入ってしまったら、なんとなくとても気まずい気持ちになるだろう。

和はやはりそんな言葉は信じる気に毛頭なれず、野菜の皮を切り出した。

「ま、ここは期間限定の閉鎖的空間だからね。恋心も起こしやすい。修学旅行にカップルが出来やすいのといっしょ。本当のアイドル的存在っていうのはなんたるかを、うちの学校に来れば目の当たりにできるよ」

いたずらっぽく笑う和に、女性陣はにやにやと笑う。

「それって惚気〜?」

「彼氏自慢」

「遙君はかっこいいもんねー」

周りの粘ついた笑いに、まあそう思われても今の流れでは仕方がないか、と和はひとつ納得すれば、別段それに照れることもなく笑い声をあげた。

「まあ、無駄に顔が良いだけなんだけどね。あ、あと無駄に女性に優しい」

和の無駄発言に目を丸くするみんなの手元は、ついに止まってい

る。よほど衝撃だったのだろう。それほどに、遙の長所を無駄の一言で片付けてしまう彼女の言い草は女性陣からすれば驚きだった。あれほど完璧な男に、あんなにも溺愛されているからこそその余裕なのか。女性陣はまじまじと和をみつめてはそんなことを思う。

ここに居る人間は半分以上が冬に遙を見ておらず、今日が初対面だ。そのせいもあって、いまだ遙の性格などを把握していない。

「……ちよつと、なに？」

不穏な空気を感じたのか、和が少したじろぎながら質問すれば、みなは一斉にため息を吐いた。

「なんなの、その余裕。なんか、むかつく」

眼光鋭くなった隣に立つ七美に和はそういうことか、と合点がいけば、にっこりと微笑む。

「ほうほう。じゃあ変わる？」

「え？」

満面の笑みで言われた言葉の意味を七美が咀嚼し終わる前に、和はただし、と付け足すようにさらに口を開いた。

指折り数えながら話す彼女の声は、淡々としている。

「まず、学校でも街でも外にいれば女性の視線はズーっとついてまわるし、なんであなたが隣にいるわけ？みたいなそう、所謂いまみたいな視線は四六時中一心に受けるよ。ちなみに私は数回、学校内で和泉君のファンに囲まれたことがあります」

「はっ！？ちょ、それ結末どうなったの！」

「二度と手出しされなくなりました。で、ふたつめは和泉君はかな

り女性に優しい、一般的に言うところのフェミニストだから、ただでさえモテるのにけっこう女の子に親しげに話したりだとか贅辞を浴びせたりするので、それが気になっちゃう性格の子はまず無理」

なぜ二度と手出しされなくなったのかは、皆詳しくは訊いたりしなかった。ここにいる者は、割と正確に和の内面を理解しているのだ。それよりも、遥が女性に分け隔てなく優しい、ということにみんな目を丸くしている。

「え、和しか見えないって感じなの？」

「それとこれとは別。笑いかけたりとか無意識にやってるところあるから」

「ああ、でも言われてみればそうだよ。私すっかり惚れそうになったもん」

「なったんかい」

なにかの掛け合いのようなやりとりに笑い声がもれるが、すぐ後には不満そうな声があがる。

「えー、なんかやだ」

「みつつめは」

まだあんの！？という悲鳴に和はいたずらっぽく笑う。

「自分はそんな性格のくせに独占欲はかなり強い。男性と話してても不機嫌になるし、少しでも触れれば大変だし、私が誰かに優しくすればやっぱり大変だし」

「……ね、今までされた中ですごいことってなんかあんの？」

好奇心で訊いた千早に、和はうーん、と視線を斜め上にやる。

「あ」

短い呟きに瞳を輝かせてみなが和をみつめるが、内心で和は過ぎた言葉を押し留めては、代替案を採用して口を開いた。

「私が捻挫して歩けなかった時とか、俺なしじゃ動けない和、とか言って恍惚とした表情してたけど」

一瞬場がしん、と静まり返る。

「きもちわるっ」

沈黙を破ったのは誰かの一言で、それにわつと場が沸けば、みんなが面白そうにしつつ、悲鳴をあげつつ叫び声をあげた。

和はその様子に、軟禁されかけたことをぼろっと言いそうになっってしまった事実で冷や汗が浮かんだ。隠し事がうまいその性格が幸いし、なんとか一度は口をつぐんだことを悟られずに済んだのだ。

「和、楽しそうだね」

闖入者の声にきやあきやあと騒いでいた声が止む。

出入り口で腕を組みながら壁に寄りかかる遙を、和は一瞥してすぐに作業へ戻った。

「包丁ろくに扱えない人間がいたって邪魔。あっち行ってなよ」

「冷たいなあ。俺の悪口言っただけで楽しそうに笑ってたくせに」

「たまにはいいじゃん」

「外で夫の愚痴を言う妻みたいなの？」

「ソウデスネ」

「棒読み！」

自然と和の傍らに立ち、後ろから彼女の腰を抱く遙を女性陣は先ほどの発言もあってか若干ひきつつみつめていいる。遙は視線に気付けば、和から一歩離れてにっこりと微笑んだ。

「何か俺に今の時点でお手伝いできることありますか？」

遙のその様子に、場に居た女性全員がぼ、と頬を赤らめる。

「あの、じゃあ、これ……レタスちぎってくださいか」

「あ、待ってその前に。あそこにのってるあれ、取ってもらえませんか？」

「私もこつち手伝ってほしいかも」

「ちよつとずるい！あの、包丁じゃなくてもピーラーなら扱えますよね？」

私も私も、と声をかけられ、しかしそれにうんざりすることなく遙はひとつひとつ対応していく。まさしくこれが、彼が学園アイドルと呼ばれる所以であり、和がいつも無駄を連呼する所以である。

ぼん、と肩を叩かれて振り返れば、そこにはいつの間にか台所に顔を出していた智子がいた。

「相変わらず。苦労するわねえ、和」

「こんなの苦労にはならないよ。浮気はしないって思ってるからこそだけだね」

「でもいつか思い込み激しい女に刺されたりしそうだけど」

「あー、それは否定しない」

智子とふたり笑い合いながら作業の続きをしようと手を動かす。

和は智子を重点的にあごでつかつたが、智子がそれに不満をもらせば働いてもらつて言ったでしょ、と微笑んで返した。

智子は、そう言われてしまつと口をつぐむ他ないので、黙々と作業を続ける。

満足しながらうなづく和に、智子は胸中でサドめ、と呟いたのであつた。

しばらくして、そろそろ男性陣にも働いてもらおうと和は台所をあとにする。和が宴会場へと足を踏み入れれば、どこかから声をかけられた。

「和」

「！ 真吾君」

振り向けば、そこにいたのは和よりも三つ年上の真吾だった。和は、冬の屋敷で起こつた出来事を思い出しては少しどきりとする。

真吾は、和に告白をした男だ。すっぱりと諦めると言っていたので、いまだに警戒するのは自意識過剰だ、と和はひきそつになつた身体を留める。

「真吾君も今日いたんだ、気付かなかつた存在感薄くて」

「お前、相変わらず口悪いな」

和の軽口に安心したかのように短く息を吐いた真吾は、苦笑しながら和の頭をぼんぼん、と軽く叩く。

よかつた間違えていなかった。胸中で安堵して彼の行為を受け入れていた。

「あ、そうだ、そろそろみんなに食器とか色々運んでほしいんだけど。ちよい、頭痛くなるじゃん」

「愛情表現だろ」

「過剰な愛はいらない」

「彼氏にすでもらってるだろう、愛情過多もいいところで」

「だから余計いららない」

「惚気かこの」

ぐりぐりと頭を乱暴に撫でられ、和は真吾の手をつかんで離そうと試みる。しかしそれよりも強い力で、第三者が和の頭から彼の手を遠ざけた。

「和、台所でみんなが呼んでたよ」

にっこりと微笑む遙の顔に、和はひきつった笑みを返す。

「ありがとう。じゃあ、ほら、いっしょにいこう」

「俺はちよつと用事があるから」

「いやでも」

言い募る和の言葉を塞ぐように、遙は和の唇に自身のそれを寄せた。軽く触れる程度ではあったが、彼女を黙らせるにはじゅうぶんだ。

幸い、部屋の隅で起こった出来事に気付く人間はいなかった。目の前の真吾をのぞいては。

驚愕に目を見開く彼に、不敵な笑みをくれて遙が和へと視線を戻せば、耳元で艶っぽく囁く。

「これ以上の事をされなくなかったら、良い子だからひとりに戻っておいで」

「！な」

「和、まだこの場に留まるんなら俺、されていいんだって解釈する

けど」

いいの？と今度は可愛らしく小首を傾げる遙に、相変わらずこちら方面では太刀打ちできない、と悔しくなれば、脛を思い切り蹴り上げて、和は宴会場を走り去った。

ぐえ、と間抜けな声をあげて足をさする遙を、真吾はまだ固まった状態でみつめる。

遙は再度そこに真っ直ぐ立つと、す、と目を細めていかにも腹黒いような笑みをみせた。

「彼女のもつものすべて、他にくれてやるつもりは俺にはありませんよ」

「……」

無言で眉根を寄せる真吾に、遙は笑みも消して今や相手をその双眸で睨みつけていた。

「中途半端な未練なら、つつこむんじゃねえって言うてんだよ」

「！ お前」

「和に手を出したら、後悔しますよ？」

まあ、出させないけどね。そう耳元で遙に囁かれた真吾は、真っ青になつたまま固まっていた。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その7

少し不機嫌な状態のまま、和は台所へと戻れば、しかしやる事は山積みであったのですぐさま怒りを忘れることができた。裏方を担う部分が多かった和は、こういった場合いつも仕切り役を任される。それを彼女は特段苦痛に思うことはなかった。

「和ちゃん」

「へーい」

女性だけではなく男性からも、もちろん声はかけられる。

台所と宴会場を行ったりきたりする和を、話は決着したのか、しばらくしてから戻ってきた遥はそれを確認すれば当然のように和の傍を離れなくなった。

和は最初こそ苛立っていたが、いつしか忙しさに遥を背後霊とも思う気になったのか、特に触れずにあちこちへと歩き回るようになった。

「あら、和ちゃん、ずいぶんと仲がよろしいこと」

いまだ宴会場で何人かの人間は世間話に華を咲かせている。それは和に向かつて話しかけてきたこの佐々木も同じだ。面倒だ、と内心思えば、和は一瞥して適当に返事をする。

「ありがとうございます。智ちゃん、そっち配り終わった？あーっ、司君！それはそこじゃない！」

「ん？ああ、ごめん」

和が司に駆け寄って指図すれば、今度は忙しく違う方向を向く。

「良人、遊ぶな、働け！」

「えーおなかすいた」

「それはみんないっしょだったの。働かなきゃメシ抜き」

「鬼」

「良人」

「へいへい」

女性には確認してうなずき、働かない男性は叱り飛ばす。心なしか何人かはわざとサボって叱られるのを待っているようにみえるのは遙の考えすぎなのか。そちらの方向をしばらく睨んでいれば、目の前にいるおば連中へと遙は意識を戻した。

「改めまして、和泉遙です。ご挨拶が遅れて申し訳ありません」

にっこりと微笑んだ遙のその顔に、頬を赤らめたのはそれを視界に入れた人間すべてであった。

「和ちゃん」

「は、はい？」

「遙君と仲良くやるのよ」

「！ は、はい」

すべての作業が終わり、やっと夕飯にありつける、という段階になったところで、和の元へと佐々木がやってきた。和はまたも嫌な予感に一步退きそうになったが、その前に両手をおばにとられて面喰らう。

固まる彼女をさらにたたみかける佐々木に、目を見開きながらも和はなんとか返事をすれば、一応はそういうことか、と合点がいった。

和は微笑んで退出していったおば連中の背中を見送れば、少し離れた位置に立っていた遙へと視線をやる。

「……さーすが、稀代の色男」

にや、と嫌な笑いをたたえる和に、遙は口を尖らせる。

「別に、なにもしてないよ。ただ話をしてただけ」

「オールグラウンドにモテるなんていやはや、すごいねえ。ホストにでもなったら伝説になれそう」

「嫌だよそんなの」

うんざりした顔をする遙に、和は笑って労いの言葉をかける。感謝の意を伝えれば嬉しそうに微笑む恋人を、和は単純な、と苦笑しながら座るようにうながした。

「じゃあ、若い衆の宴会をはじめましょうー！かんぱーい！」

智子の大きな号令と共に、場は一気に騒々しくなる。和はいつもこれを隅でながめながら、微笑んで様子を見るのが好きだ。今日もそうしようと端っこを陣取って、和は熱い緑茶へと口をつけた。

「和、お疲れ」

ぼん、と肩をたたかかれて横を向く。そこには彩がいた。

「進君、質問攻めでしょ？彩ちゃんも行ったほうがいいんじゃない？」

「なによお、お姉ちゃんが邪魔なのー？」

「んなこたないけど。あ、これ美味しいよ」

屋敷にある漬物を差し出すと、彩はそれを箸でつまむ。むぐむぐと口を動かして呑み込むと、もう、と会話を再開した。

「和こそ、遥君ほつたらかしていいの？また女の子に囲まれちゃってるわよ」

「和泉君はそういう星の下に生まれてきちゃったからしゃーない。本人も折り合いつけて生きているわけだしね」

「和……」

「まあ、あんまりにも辛そうだったら助けるよ」

「そうね、そうしてあげて」

苦笑した彩を、誰かが呼ぶ。それに振り向けば、彩は和の肩をぽん、とたたいてその場をあとにした。

和は、グループ化したそれぞれの塊を一瞥しつつ、最後に女性ほぼ全員に囲まれている遥を見やる。何人かは、やはり進と彩が気になるようでそちらに質問をしてはいるが、ほとんどが遥の傍に座っていた。

恋人である和が特に口喧しく牽制をするわけではないので、みな許されている気分なのか、先ほどの和の発言ではないがホストを囲む客のような様相を呈している。和も、特にそれを見て気分が悪くはならないので捨て置いている。

彼女が変わり者だと言われてしまうのはそうだった面もおおいにあつて、本人も自覚してはいるがだからといって無理に彼を縛ろうとするのもおかしな話だ。肝心なところがつながっていればそれでいいと、いつだって和はそう思っていた。それほどに、遥を深いところで信頼しているし、好きなのだ。

自身の過ぎった想いに少し顔を赤くし、無言でおかずを咀嚼した。こうやって、遥が女性に囲まれる場面を見るのは和にとつてかなり久しい。もちろん、視線はいつだって彼が独り占めしているよう

なものであるが、こんなにおおっぴらには最近では囲まれることがない。学校で公認カッブルになってからというもの、和の前で遙に近づく女性徒はもうほとんど存在しなかった。

和は久しぶりに味わう不思議な気持ちに、頬杖をつきながらぼんやりと彼らをながめる。

「和」

「！ 高良君」
たから

隣いい？そう言つて座つたのは、和よりひとつ年上の男性だ。親戚一同の中で読書好きということもあつて、彼とは割りと会話をするほうである。冬には会えなかつたので、和は久しぶりだね、と顔を綻ばせた。

「しばらく見ないあいだにずいぶんと女っぽくなつたねえ」

「え、なあにその気持ち悪い発言」

「別に変な意味じゃないつて。綺麗になつたつて言うとなんか胡散臭いじゃん」

からからと笑う高良に、和はどっちにしろうさんくさいよ、と返したが、彼はまた笑い声をあげるだけだった。

「また本借りたいと思つてさー。今回はどんな選抜チーム？」

「えーと、あ、前にはなかつた成島美咲の本持つてきた。希うでけっこう熱心なファンになつちやつてさ」

「へー。俺もこの人ちよこちよこ読むけど。希うは恋愛主軸つてあつて敬遠してたな」

「そういつひとも多いんだけどもつたいないから読んでみ？」

「じゃあ後で貸してよ」

「いいよー。高良君は？なにか発見あつたの？」

「俺はね……」

和氣藹々と会話を楽しむふたりを、女性に囲まれながらも遙はしつかりと認識していた。いちはやくその視線の先を追った智子が、楽しそうにああ、と声をあげる。

「高良はね、私のふたつ下よ。だから和や遙君からすればひとつ年上。あのふたりけっこう仲良いわよ」

「！ そうなんですか」

遙と智子の会話に、他の女子も入ってくる。ほとんどの女性達が和と高良に視線をやっている状態になった。

「ああ、和ちゃんと高良君？ 確かにけっこう話してるよね」

「お互いに物静かっていうか。派手に笑いあったりはしてないけど、今みたいにほら。趣味が合うみたい」

「……………」

指をさされた先をみつめれば、遙の眉間にはどんどん皺が寄る。

和が楽しそうに、それでいて静かに微笑むその姿はどうしたって綺麗で、その空気を壊さずに隣に座る高良が遙はうらやましくも妬ましい。

先にその空気を感じ取ったのは高良のほうだった。多くの視線がこちらに集中しているのに気が付けば、その原因である遙に思い至る。双眸の強さに空気を震わせて笑いながら、高良はいたずらっぽい微笑を遙に向ける。

「和ちゃん、彼氏、遙君、だっけ？ すごい目でこっち見てる」

秘密の話をするかのように、くすくすと笑いながら和の方へと手

を置き、耳元に高良は口元を寄せる。和はそれを別段なんとも思わずに、ん？と高良の言葉に疑問の声をあげた。

「すごい目……ってうわ！こわっ！」

声は割りと狼狽していたが、和は表情を崩すことなく遙を一瞬視界に留める。視線に気付いてなにか反応してしまえば、なんとなく嫌な結果がついてきそうな気が和にはしたからだ。

「でもずいぶんと勝手だねえ、彼。あんなに自分は女の子に囲まれているっていうのに、和はひとり男が隣にいただけで気に入らないんだね」

「んー、私が嫌がってもかまわないらしいんだけどね。あと無自覚なのがだめだって」

「無自覚？」

和の言葉を繰り返す高良に、彼女はうなずく。

「和泉君は、自分の魅力じゃないけど、どんな立場でどんな風に女性に見られているかわかっているけど、私は無防備に男性に近付きすぎるってよく言われる。だから隣に男のひとがいるとはらはらするんだって」

「ああ……それはわからなくないかも。和はね、ここでの経験が原因なのはわかってるけど、ちょっと自分の性に無頓着すぎるよ？」

「やっぱり高良君もそう思うの……うーん、でもそういうのってどうすればわかるもの？」

「隣の男性が自分を女性として意識しているのかどうかを見分ける方法？」

「そう」

「和は、そういう感覚は本来なら鋭いはずだよ。まず、自分に女性

としての価値がゼロだって思い込んで安心するのをどうにかしないといけない」

「……よくわかりで」

和の言葉に、高良が苦笑する。

「ここではね、妹や姉のように扱う人間が多いから警戒しろっていうのもきつと難しい。でも、ふたりきりのときはとりあえず相手と距離を置かないと。それは最低限。ふたりじゃなくても男性が近くに居るときはやっぱり間を測るべきだ」

「距離、ねえ」

「そんなだから彼氏の束縛が激しくなるんじゃない？」

「そうかもね」

くすくすと笑いながら和の頭を撫でる高良に、和はため息を吐く。彼女は結局、言われたそばから高良に触れられることを許してしまっている。これでは遙も心配が絶えないだろう。高良は遙にたいして、同情心のようなものを少なからず抱いた。

和と高良のあまりにもな様子を見て、遙の中で何かが切れた。

「……智子さん」

「なに？」

「絶対に誰も来ない場所つてあります？」

「んー……ま、とりあえず病人部屋のほうはあまり人気はないわよ。ここを出てずーっと突き当たるまで左行きなさい。いちばん奥の部屋ならまず誰も来ないでしょ」

「ありがとうございます」

にっこりと微笑んだ遙のあまりのまぶしさに、智子は言うておいと和に小さくエールを送った。もちろん、心の中ではあるが。

勢い良く立ち上がった遙を、亜紀が小さく止めようとする。しかし智子や、遙の様子を察した女性陣がやんわりとそれらをたしなめた。

「和」

話しこんでいた和は遙が真っ直ぐ向かって来るのにまったく気が付かずに、呼ばれて腕を引っ張られた時には状況がまるで把握できなかった。

強制的に立ち上がった和は、そのまま遙の懐へと後ろから抱き込まれる。しかしそれに怒りを覚えるより先に、遙はさらなる行動へ出た。

「彼女と仲良くしてくださいって、ありがとうございます。でも今後、気安く身体に触れるのはやめていただけませんか？」

「和泉君」

「……そうだね、いかげん和はそういうの自覚したほうがいいのかね」

「和泉君」

「話が早くて助かります」

「……っ遙！」

なんの反応も示さない彼にしびれをきらし、和が真っ赤な顔で遙の名を呼べば、遙はなあに、と甘ったるい声で返事をする。その声を無視するかのように、和は彼を睨みつけた。

「おろしてよ！」

「それはだめ。じゃあ、智子さん、後片付けはよろしくお願いします」

はいはい、と手をふる智子に、遙は微笑めば、宴会場を去る。和を横抱き、何度目になるかわからない、いわゆるお姫様抱っこの形をとりながら。

いやああああ、という悲鳴が段々と遠ざかり、固まっていた場の空気もやがて解凍される。

「雄大、あれに勝とうとしてたんだ」

「もうありえないってわかってるよ」

良人の言葉に苦笑する雄大の顔はどこかすつきりしていたが、彼はまた新たな波乱がどこかで起こるのではなかるうか、と仲睦まじいふたりの仲を案じていた。

そんな雄大に呼応してか、智子も、あるひとりの人物に視線をやっては、眉間に皺を寄せながら小さく呟いた。

「よくないわね」

その言葉を拾った者は、この宴会場には誰ひとりとしていなかった。

「ちょっと和泉君！どこ行くの!？」

「どこって、ふたりきりになれるところだよ」

「何を言ってる」

「和がいけないんでしょう?」

遙の言葉はすいぶんとぶつきらぼうで、彼が今制御できない怒りをなんとか抑えようとしているのがその様子から和は察することができた。しかし、それでもこのままおとなしく運ばれるのにも納得ができなく、なによりもそこまで彼が怒りを持つ理由も本当はないはずであると思えば、どうにか現状を打破できないものか、

と考える。

やがて辿り着いたのだろう、遙が和を素早く下ろして立たせれば、逃げないように左手でふすまを開けながら和の肩をつかみながら彼女を部屋へと押しやった。

「……い、和泉君、高良君は別に」

「彼に下心があるとかないとか、今はもうどうだっていいんだ」

遙の言葉に和は目を見開いて固まれば、そのまま彼を凝視する。

遙はそんな彼女を無理やり組み敷けば、その勢いのままに口付けをほどこした。

息が荒くなり、呼吸を求めて和が言葉にならない声をあげれば、それを合図に遙はやっと和の唇を解放する。

「お願いだから自覚して。和の身体に触れて良いのは、家族以外で俺だけだ。例外は一切認めない」

「和泉君」

「遙。和、俺の恋人でいるってことはそういうことだから。俺は、和のぬくもりを誰かにくれてやるつもりなんてないんだ。お願いだから、あんな無防備に触らせないで」

苦しそうな遙の表情に、和は傷つけてしまったのだと自覚すれば、ごめん、と呟いて彼を強く抱きしめる。

微笑んだ遙が今度はゆっくりと寄せてきた唇を認識したときに、冷静になった自分はここで何かをどうするのはまずいとわかったが、遙をどうやって説得すればいいのかそれだけの案がまるで思い浮かばない。

なんとか声をかけようとすれば、和のその考えをわかっているのだろう遙はキスを激しく求めてくる。

触れられる喜びとどうにかしなければという焦りがなймаぜにな

り、しかし結局は翻弄されるままに、和は遙の行為を許してしまっ
た。

「愛してるよ、和」

かすれたその声に心が震えたことが、その真実が、和にはなぜだ
かひどく悔しかった。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その8

「最後までしてないからいいじゃないか」

「そ、そういう問題じゃない！」

遥のあつけらかなとした言葉に和は顔を染め上げて怒鳴った。

結局、一応は自重という意味をわかってくれたのか、それにしたってあれではほぼ行為をしたことと同義なのではなからうか、ともるもろのつつこみは受けそうではあるものの、一応、遥は寸止めで和をその腕から解放した。

本来ならば具合が悪くなったときに使う部屋をあとにして、和と遥は手を繋ぎ宴会場へと戻ろうと廊下を歩いている。

和は、戻ってしまったばかりかわれるに違いない事もよくわかつている。ため息を吐きながらこの手だけは離してはくれないだろうかとぼんやりと考えていた。しかし遥はそんな彼女の考えが透けて見えているようで、いつそう彼女とつなぐ手に力を込めた。

ふたりが宴会場から退出してからおよそ一時間。どんな言葉でかわられるのかは憂鬱で仕方がなかったが、とりあえず和は小さな抵抗をやめて力を抜く。遥は、無言で恋人に微笑んだ。

「あー、帰ってきた！」

「なにやってたのお」

「和ちゃん顔赤くない？」

宴会場に戻れば、案の定からかうような声が後を絶たない。和は眉根を寄せながらも、無言で自身の席に着く。遥は先ほどと同じように離れて座るのかと思いきや、隣に陣取って笑みを絶やさないでいた。

和はその様子にため息を吐きつつ、内心で好きにして、と呟いた。

周りの人間はその様子をにやにやしながらみつめているが、和は全ての回路を切ってしまおうと目の前のご飯に集中した。

「和、お茶飲む？いれてこようか」

「ん？まだ残ってるから大丈夫だよ。ほしかったら自分でいれてくるし」

「そう？」

「うん。それより君はご飯を食べたのかい」

「それなりに？」

「食べる時は食べるくせに、食べないとほったらかしなんだから。」

ほら、今はみんな遠巻きに見てるから食べちゃいな」

和の言葉に素直にうなずいた遙は、嬉しそうにご飯をほおぼる。

その様子を見た人間はすべからく、和を猛獣使い、と名付けたのであった。

宴会もそこそこなれば、後片付けは男性の仕事になる。その間、女性が風呂に入ってしまうというタイムスケジュールだ。この屋敷には旅館にでもついているかのような広大な風呂があり、ほぼ一斉にみんな風呂へと入る。

時間で区切っているのもそうであるが、全員が入ったかきちんと点呼をとるため鉢合わせなどのトラブルはいまだかつて和が知る限り起こった事はない。

机を下げたり、食器を下げたりなどを手伝ったあと、女性陣は皆準備のために部屋へと下がる。和も同じようにその群れに加わった。女性が集団で風呂、となれば、話題は大体がからだのことになる。和は前の集団がダイエットや美容の話を嬉々として話しているのをぼんやりとながめつつ、ふわ、と小さなあくびをひとつ落とす。

「和ちゃん」

「ん？」

ちょうど和が口を閉じたのと同時に、隣から誰かに声をかけられる。視線をずらせばそこにいたのは亜紀であった。和は返事をして相手を確認すれば、先を問うように彼女をながめやった。歩く足は止めてはいないが、若干ふたりの速度はゆっくりなものとなる。

「あの、遙さんって、いつもあんなに優しいの？」

「ん？あー、まあね」

頬を染めて内緒話をするように、亜紀が声を落として訊いてくる。和はそれに内心でおや、と思いつつも、特になにも感じていないようふるまった。

「和ちゃんは、いいなあ。あんな素敵な彼氏がいて……」

「んー……そうね、私にはもったいない、とは言い切れないのがこれいかに」

「それって、遙さんは和ちゃんにとってそれなりな彼氏ってこと？それとも不満ってこと？」

和の言葉がどこか気に入らなかったのか、亜紀は少し眉を顰めて不快そうな表情を露にする。和はそんな彼女の心を知ってか知らずか、この場合はすべて把握しているのだろうが、にっこりと微笑んでくすり、と空気をふるわせた。

「んなこと言っていない。いつだって、対等だよ、私と遙は」

「！」

堂々たるその態度は、遙の隣に居るのは自分である、と暗に言われてしまったようで、亜紀はどこか悔しい思いがした。とても素直

に顔を歪め、唇を噛みながら、一言そう、と呟いて前の集団に加わるうと早足に先へと進んでしまう。

和はそれを見て、どうしたものか、と短いため息を吐く。

「危ないわよね」

「まったくよ」

「！ おお、智ちゃん彩ちゃん、いたの」

ほん、と両肩を叩かれて和が左右を見渡せば、そこに立っていたのはある意味悪友同士とも言える智子と彩だ。

和がここではおとなしいぶん、色々と企んでは実行するのはいつだってこのふたりだった。智子お得意の調子の良さと、彩の愛想でふたりは毎回叱られるのを免れていた。

しかしそれも今は昔。高校生にもなった頃にはずいぶんと落ち着いてきたものだった。智子の場合は、いたいけな男子をからかう方向へと転換してしまったようだが、まあそれも彼女らしいといえはらしいし、本気にしてしまうほどひどく相手を弄ぶようなことは彼女としてしない。

彩は、いつもそんな智子を仕方ないわね、と行って一歩離れたところで苦笑している。和は、そんなふたりの関係がとても好きだった。

「亜紀ねー。……まあ、私もちょっと、うん、思ったんだけど」

「あそこ、思い込み激しいところあるからね。恋したら猪突猛進タイプだと思うわよ」

智子の言葉に、彩も肯定するようにならず。

「そうよねー……純情なぶん、ね」

「和泉君もねえ、まあ、あたりが柔らかいからねえ。……ま、面倒

な事になっただらあいつのせいだけど。亜紀ちゃんが可哀相だな」

むう、と片眉をあげる和に、目を丸くしたのは智子だ。彩は、楽しそうに妹をみつめている。

「……あんだ、これまたえらい自信ね」

「は？」

「遥君が、亜紀に本気になることはまあないと思うけど、一回くらいならってコロっと思ったらどうすんのよ」

「それはない」

「……よっくもまあ、そんな風に断言できるわね」

「あれでそんな移り気な性格だったら神経疑うよ。大体こんな閉じられた空間で誰にもバレずに遂行するなんて無理。和泉君だって馬鹿じゃないからそんなへたな事やんないよ」

「それって結局、信用してんの、してないの？」

「してるよ。まあ、私だって馬鹿な女になりきるつもりはないけど、周りからも言われるしね」

「周りって」

「学校の友達。いいかげん浮気なんて疑ってたら普段の遥が浮かばれない、だってさ」

和のうんざりとした表情と声に、智子は納得したようにうなずいた。きつと、彼女が見ていないところでふたりには色々な歴史が積み重なっていったのだろう。

ふたりの仲に亀裂が走ることはまずなからう、と安心できはしたが、亜紀が暴走してしまえばどうなるかはわからない。

彩も智子もまったく心配していないというわけではなかったが、現時点ではそう案ずることもなからう、とわりと楽天的に考えられていた。

「さて、と。じゃあ、もう全員はいったよね？私、男子にお風呂入るように言ってくる」

和が人数を数えて点呼をとり、確認するようにうなづく。よろしく、と女子部屋へと流れていく人間と、何人かは宴会場へと様子を見に行く、と和といっしょについていくことにした。

その中には彩と智子、亜紀もいて、和は多少苦笑いを浮かべながらも廊下を歩き出した。

「おーい、片付け終わったー？」

宴会場の出入り口で和が声をかければ、何人かが返事をする。

「まだあともうちょっと。女子はもう全員風呂はいった？」

「うん。手伝おうか」

机を片付けていた司に訊ねられて、和がうなづく。

「じゃあ、台所のほうよろしくしていい？」

「了解！。じゃあ終わったひとから入ってきちゃってね」

「ああ。……和ちゃん、あのさ、上着とか着てきたら？」

司の言葉に、和はえ？と首を傾げる。

「なんで？暑いよお風呂上りなのに」

「うん、いや、まあ、そうなんだけど」

「司おまえ、もうちょっとはつきり言ってやれば？」

がた、と机を持ち上げた広樹が呆れた様子でふたりに声をかけてくる。

和はわからないといった表情でふたたりをみつめていたが、広樹が和の頭をぼん、とたたいた。

「台所に遙君いるよ。まー、自分が良いと思うなら止めないけど…
…その姿見た瞬間にどっか連れ込まれても知らないからな」
「はい！？なんで？」

すつとんきような声をあげる和に、司と広樹は苦笑いしかない。
和は疑問に思いながらも、結局は面倒という感情も手伝って風呂からあがった姿のまま台所へと顔を出した。

「おーい、手伝うよー」
「和、風呂あがったのか」

遙よりも早く、和に声をかけてきたのは雄大だった。和は彼に微笑めばお先に、と声をかける。

「大体終わってる？」
「ああ、あとはこのへんの食器拭いてしまっただけ」
「おっけー」

和がうなずいて布きんを手取る。

そこままでして、そういえば遙はどこにいるのだろうか、と辺りに視線をやってみれば、遙の隣にはいつの間にもやってきていたのか亜紀がべつたりと張り付いていた。

和は案外積極的な亜紀に多少面食らいつつも、特に何を咎めるでもなく目の前の洗われた食器を手を取った。

「いいのか？」
「ん？なにが？」

「なんかやたらべたべた触ってるみたいだぞ、さつきから」

「えー、意外。そういうタイプだったっけ？」

「……なんでそう楽しそうに話すんだお前は」

苦笑してばか、と小突かれれば、和は別に楽しんでいない、と雄大の言葉を笑って否定する。その様子を見ていたのか、和の隣に立つて会話に入ってきたのは高良だった。

「相変わらず仲が良いねえ、ふたりとも。彼氏君は放置しちゃっていいの？」

「んー？別に和泉君が輪から浮いてなきやそれでいいよ」

「和、本当そういうところはクールというかドライだねえ」

にこにここと人の良さそうな顔をしながら、高良が言う。和はそれにあはは、と笑いながら拭いた食器を重ねていった。

手を伸ばした拍子に、和の肩にかかっていたバスタオルがぱさりと床に落ちた。それにおっと、と小さく声をあげながら、屈んでタオルを取ろうと手にしていた布きんを台に置く。

「何その格好」

屈もうと落としかけた腰は、ぐい、と引き上げられ、次にはバスタオルが肩にかけられていた。

和の格好は、上はタンクトップに下は短パンという、なんとも無防備な出で立ちで、バスタオルがなくなれば鎖骨やら肩やらは当然露になる。お風呂上りで上気した頬や、濡れ髪はなんとも色香があり、言葉にこそしないものの、綺麗な足と共にちらちらと視界に留めている者は多かった。

そんな様子に、遙が気付かないはずがない。

地を這うような低い声音は、つい数時間前に聞いたはずのもの。

和は確実に怒っているというその事実には、身体が自然強張った。

遙は肩にかかっていただけのバスタオルの端と端をつまみ、そのまま前で縛り付ける。和の肩や腕を完全に隠してしまうようにだ。

和はそんな遙をぼかんとながめつつ、何を怒っているのかわからないという表情を素直にあらわしていた。

「こんなに男の多いところに！そんな無防備な格好で出てくるんじゃない！」

「……へえっ！？」

あまりの事に驚きの声をあげれば、なんとも間抜けなそれに仕上がった。そばに立っている雄大と高良が苦笑しているのも、どこか納得できずに和は視界の隅へと留めていた。

全身から怒りのオーラを漲らせる遙に、和は狼狽して声をかける。

「や、でも、毎年こんなような格好でうろつろしてる」

「はあ！？」

「な、なんでそんなに怒るの！？」

若干涙目になりつつ、さっきの二の舞はごめんだと叫ぶ和に、遙は怒りを通り越して呆れのため息を吐いた。

「男の視線をちよつとは気にしてよ。見るでしょう！肩とか、腕とか、足とか！」

「えっ、だってでも、他の皆も別に同じような格好で」

「そんなん知るか！和が見られなきゃ他はどうだっていい！！」

「ええええええ！？」

あまりにもな乱暴理論に、和はすっかり混乱している。とりあえず露出を控えろ、と遙が言っているのは理解したが、それにしたっ

て自分をそんな風に見る人間はいないだろう、と和は思った。

「……でも、こういうのしか持ってない」

「半袖の上着とかないの？」

「あるけど……」

「じゃあそれ着て」

「えーめんどくさい」

「和。また抱っこされたいの？」

「ただちに着てきます」

和の即答ぶりに周りから忍び笑いがもれる。少し恥ずかしさを覚えながらも台所を出る和に、遙は心配なのか俺も行く、とあとをついていった。

「いやあ、本当に面白いくらいに溺愛なんだね」

「まあな。ああいうの見せつけられれば諦めもつくってもんだろ」

「……雄大は、それだけなの？」

「どつという意味？」

「別に」

ふふ、と笑う高良の表情に、雄大は少し睨みをきかせてみたが、相手に効果があるとは思えなかった。

雄大は食えない目の前の男にため息を吐きつつ、先ほど遙にべったりだった亜紀の姿をちら、と視認する。

「女の子って、時に怖いねえ」

「だから、そういうの笑って言うなよ、高良」

うんざりした顔をしながら小さく呟く雄大と、笑う高良の視線は同じようを向いていた。

鬼の形相。まさにそんな風情で台所の出入り口を睨みつけながら
棒立ちになっていた亜紀は、まるで別人のようだった。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その9

すっかりと夜も更け、屋敷に常の静寂さが戻った暫時。ひとり喉の渴きを覚え台所へと足を運ぶ者がいた。

食器棚からコップを取り出し、水を一杯注ぐとそれを美味しそうに飲み干す。事実、この水は美味である、とコップを空にした深夜の訪問者はうなずいていた。

「高良君」

背後から自身を呼ぶ声に一瞬眉を動かせば、高良の動きが止まった。しかし誰であるかはすぐ察する事が出来たので、高良は慌ててその場を振り返るようなことはしなかった。

「亜紀も喉が渴いたの？」

注ごうか、と顔だけゆっくりと動かして亜紀に声をかければ、背後に立っていた無垢な少女は微笑んで首を振った。

「大丈夫」

その返答にうなずいて自身の使ったコップを洗うと、素早く拭いてもとある食器棚へとおさめた。今度こそ高良は身体ごと亜紀に向かって声をかける。

「……夜中になにか食べると太るぞ」

「！ な、食べないよっ」

高良の言葉は予想外だったのだろう。亜紀は驚きに目を見開けば、

次には頬を膨らませて顔を赤らめる。素直な、とても可愛い女の子の反応だ。高良は、その様子に空気を震わせて笑う。

「じゃあどうした？」

「……………」

目の前で優しく微笑む年上の男に、亜紀は何かを言いかけてうつむく。しかし何かを決意したのか、数秒後には顔を上げて真っ直ぐと高良の目をみつめていた。

「高良君は、和ちゃんの事どう思ってる？」

質問の意味を図りかねるかのように、高良は目を丸くする。頭に疑問符を浮かべているようなその反応に焦れたのか、亜紀は少し声を高くした。

「だからっ！和ちゃんの事好きなの？」

「和の事はもちろん好きだよ。実の妹みたいに思ってる」

「そういうことじゃないよっ！もう、高良君、わかってるんでしょ！？」

笑う高良にますます憤慨したのか、ついに亜紀は時間も弁えずに声を荒げる。高良はそれに小さくため息を吐けば、亜紀の頭を撫でる。

「あーき。俺に何をお願いしたいの？そんな風に画策して人を陥れようとするなんて考えちゃいけないよ？」

「…………ただ、好きなのかなって、訊きたかっただけだもん」

「それで俺が和を好きだって言ったらどうした？」

「それは……………」

俯いた亜紀に、高良は優しく微笑む。

「いいかい、亜紀。俺は別に、恋人の居る人間を好きになるなどは言わないよ。ただ、卑怯な女になるのはやめておきなさい。そんなことを覚えてしまったら、将来とんでもない悪女になっちゃうぞ」

「……好きになっても、いいの？」

「うん、その点は自由でいいんじゃない？あくまでも個人的な意見だけ」

しばらく何事かを考えていた亜紀だったが、やがてそっか、と小さく呟くと、高良に満面の笑みを見せる。

「私、無理に我慢とかしないようにしてみる」

「そっか」

「うん。ありがとう高良君。私もう寝るね。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

微笑んでその場を去っていく亜紀の後姿を、高良は無表情にみつめる。

やがて静まり返ったその空気に押し出されるかのように、高良も台所を後にした。

男子部屋へと向かう為には遠ざかっていく足音を確認したからなのか、高良がその場を去った数秒後、がらり、とふすまを開く音が廊下に響いた。

「……この場合、いちばん腹黒いのは誰なのかつー話になるよねえ」

高良の真意をいまいち量りかねつつ、顎に手をやり呟いた和は、

片眉を上げながら面倒な明日を予見してひとり息を吐いたのだった。

次の日の朝、和はいつも通りの時間に起床すれば、顔を洗おうと廊下を歩く。

結局、深夜の考え事はあまりうまくいかずに、結論が出ないまま朝になってしまった。

『高良君の場合、単に面白くしたくて言っただけというの考えられるしなあ』

深夜に亜紀と高良が交わした会話。あの諭すかのような言葉の数々に、和は並々ならぬ悪意を感じずにはいらなかった。

あの言葉がもたらす結果は、和のみならず彼ならば簡単に予想がつくであろうことがわかっているからだ。

高良が普段何を思い行動しているのか、和にはわからない。理由があつてそれをやったのかもわからない。

ただわかっているのは、彼が狙つてああいう展開に持っていったのであるという事実のみであった。

ぼんやりと考えつつ顔を洗つて来た道を戻れば、途中で頭痛の種類に出会う。和は一瞬顰めそうになった顔をなんとか無表情に保った。

「おはよう。相変わらず早いね」

「おはよう、和もね。朝食のあとに本借りに行くからな」

「わかった」

うなずいてその場を去ろうとした和の左腕を、高良がゆったりとした動作でつかむ。特にそこまで驚くようなものでもなかったが、少なからず和は心臓を跳ね上がらせた。

そんな和の内心を知ってかしらるか、高良は微笑んで言葉を紡ぐ。

「和、あのとき聞いてたんだろ？」

高良の言葉に、和の心象風景では自身の身体が飛び上がっている思いがした。しかももちろん、現実での彼女は眉ひとつ微動だにしない。

ただ、質問の意味がわかりません、とすつとぼけた表情を顔一面に作るだけだ。

「あのときって？」

「俺たちの会話聞いてたの、わかってるんだよ？」

「だから何のこと？私がない間に誰かと聞かれちゃまずい種類の話をしたわけ？」

あくまでも和は眉根を寄せて問いを繰り返す。亜紀にも高良にも、直接は見られていないはずだ。和はその確信があるからこそ、絶対に認めるようなことはしない。

「ふうーん、とぼけるんだ」

「だから、本気で意味がわかんないんだって！なんのこと？教えてよー！」

「……………」

高良は高良で、和の反応はほぼ予想通りのものだ。少しでも彼女からその片鱗をみつけられればと思いつけてみたが、やはり彼女の壁は厚い。

彼にはおそらく目の前の少女に深夜の会話を聞かれていたであろう事がわかってはいたが、こうして対峙してみると本当の本当に聞いていなかったのではないか、という気もしてくる。

しかし高良は、それならばそれでどちらでもいいと思っていた。狐と狸の化かし合いよろしく、そんな攻防を繰り返していれば、

早々に終結させたのは仕掛けた高良のほうであった。

先ほどよりもいつそう笑みを深めれば、高良は和の腕から肩にかけてを下から上へつつ、とゆっくりと撫で上げる。

「!？」

慣れないその出来事に驚いた和は、慌てて高良から距離をとる。後退した彼女に満足したのか、高良は声を上げて笑った。

「上着をはおらないとだめだよ、和。俺みたいな悪い男に触られちゃうからね？」

「……朝だから誰にも会わないと思ったんだよ」

頬を染めながら自身を睨む目の前の女性に満足したのか、高良はくす、と小さく笑んでその場をあとにした。

和は、どこか敗北感を覚えながら、なにかに急くかのように女子部屋へと戻って行ったのだった。

「はい、皆起きてくださーい！そろそろ起床のお時間ですよー」

「そろそろしたくしないと宴会場に遅れちゃうよー」

屋敷滞在中は、起床時間が決まっている。九時までに宴会場へ顔を出さないと、屋敷の主から直々にちよつとした罰則なるものがあるのだ。

それは主に屋敷内の雑用係を一日務めるというものだが、これがなかなか手強い。できれば皆その罰則は避けたいものだった。

きちんと身支度をして宴会場に顔を出さえずれば、その後は朝食を外でとろつが、どこで過ごそうが自由である。

ただ、朝に目を覚ますのは健やかな証だと言う主ふたりの言葉は、ここに滞在する者達にとって決して軽い言葉ではなかった。

相変わらず寝坊気味な智子を苦勞して起こしつつ、一仕事を終えた和が女子部屋を出ると、少し慌てた様子で何人かの人間がなだれこんでくる。

和はその様子にどこか合点がいけば、呆れの息を短く吐き出した。やってきた司と広樹が何か口にする前に、心得たようにうなずけば廊下を小走りで移動する。

ちらり、と腕時計を見やれば現在時刻は八時四十分。急がなければ間に合うかどうか微妙な時間だ。

「ちよつと入るよーごめんよー」

男子部屋への訪問に、何人かは安堵したかのような表情になる。和は開いたふすまを閉めつつ立ち尽くす面々を見渡した。どうやら、持て余しているらしい。

雄大もそのひとりで、和を認めるとうんざりしたような顔でどうにかしてくれ、と指をさした。その隣には進もいる。

「こいつ、叩いても蹴っても起きないぞ。怒鳴ってやっても逆にわけわかんねえこと喚かれるし」

「そうそう。彼はいつもこんなに寝起きが悪いの？」

雄大と進の言葉に和が苦笑して謝罪すれば、いまだひとり眠りこける遙を視界に留めた。

ゆっくりと遙のかたわらに移動する和を、興味津々な視線で全員が注目する。その中には先ほど会話した高良もいた。

それを視界の隅で確認しつつ、和は座り込めば遙の掛け布団をゆっくりとはがす。とんとん、と肩を叩いた。

「遙、朝だよ」

柔らかい声音に、何人かは驚いたかのように目を見開く。いまだかつて聞いた事のないようなその甘い響きに、何人かは赤面しているが、もちろん和はそれに気付かない。

起こされた遥は、んん…と小さくうなり声をあげた。

「遥、起きて。早く起きないと大変だよ？」

今や耳元に唇を寄せて囁くように声をかけるその光景に、居た堪れなくなった何人かは狼狽して視線を逸らした。雄大は、あまりのことにはまだ目を見開き固まっている。

「んん…朝あ？」

「そう、朝。だから、ね、起きて」

言つて、和はゆっくりと遥の背中に腕を滑り込ませると、遥の上半身を起き上がらせる。遥は、いまだ覚醒しないのか、目を瞑ったまま寝ぼけた声をあげる。

「和い、まだ眠い……」

「うーん、でも私もう行かなくちゃ。いっしょに起きないとだめなんじゃなかった？」

「だめ……」

「じゃあ起きなくちゃね」

「うん、起きる……」

両腕を広げた遥に、和は自身の身体をあずける。ぬくもりを感じた遥は、安心したように和をぎゅ、と抱き込んだ。和は遥の背中をあやすようにぽんぽん、と叩く。

「じゃあ、ほら、顔洗いにいこう？ちよっと急がないと時間があり

ませんよー」

「むー……どこだっけ？」

「はいはい、いつしよに行こうね」

「うん……」

ようやく半開きになった目のまま、和の手を握って遙が立ち上がる。和はそんな遙の行動をひとつも否定することなく微笑んで隣に立っていた。

「ほら急いでくださいーい」

「はあい……」

くすくす笑う和に優しく急かされながら、遙は少し速度を上げて和といっしょに男子部屋をあとにした。

ふたりが立ち去ったあとの部屋におとずれた一瞬の気まずい空気は、なんともいえないものである。それを打破するように呟いたのは、司であった。

「和ちゃんて……あんな部分も持ってるんだ」

その言葉に部屋に横たわっていた重たいものが一掃されれば、少し興奮気味にその場にいるものが口を開きだした。

「なんだよあれ、ちょっととよくない？」

「ちよつとどころじゃねえよ！毎朝あんな風に起こされてえんだけどー」

「なんか今日いいことありそうって毎日思えそうー！」

「ていうか、完全にバカップルじゃん！」

遙のこの性癖をすっかり忘れていた和は、半眼になって彼をみつ

めていた。

宴会場へぎりぎりの時間に滑り込んだふたりは、何人かにちくり、と嫌味を言われたものの、事なきをえた。

しかし今の和にとつて、それはたいした問題ではない。朝はまわりに人間がひとりも居ないのだと思ひ込むことでなんとか乗り越えたが、正直これが毎朝続くのは勘弁してほしいところだった。

「もう明日から起こさないからね、自分で起きてよ！」

「えー、いつもの日常風景じゃないか」

「それを他人にどうして見せなきゃいけないの！」

「恥ずかしいの？和はかわいいなあ」

「うるさいっ！あんたも少しはそういった点で羞恥心を持ちなさい！」

ほえる和に遥が笑いつつ、遠巻きで見つめる男性達の瞳がなんだか妙に複雑そうな色をしていて、和はどうにも居た堪れなかった。

「あの、遥さん」

そんなふたりの空気が見えていないのか、はたまた完全なる無視を決め込んでいるだけなのか。

宴会場にて会話するふたりの後ろに立つて、頬を染めた亜紀が遥に声をかけた。

振り返れば、遥は微笑んで返事をする。

「なになかな？」

朝から爽やかな空気を垂れ流す遥に、亜紀はますます顔を赤くしながら、あの、と小さく声を上げる。

「ちょっと、お話があつて。ここではなくて出来ればふたりきりで

亜紀の言葉に、遙は何事かを感じ取つたのだろう。それは和も同じだ。お互いに一瞬目配せしつつ、遙は亜紀へ視線をやつた。

「和、ちょっと行つて来るね」

「はいはい」

落ち着いた様子の和に少し遙は拗ねた様子を見せながら、次には恋人の右頬へと唇を寄せた。

その行動に、亜紀と和が驚きに目を見開く。しでかした張本人は、ただにこにこ笑っているだけだ。

「俺がないあいだに浮気しちゃだめだよ」

「……どれだけ駄目な女なの、私は」

「和にその気がなくても相手がその気になったら俺の和がさらわれちゃうじゃないか」

「あーもう、わかつたからさっさといつてらっしゃい！」

亜紀へのパフォーマンスであるとわかつていつつも、心が痒くなると感じれば和は眉根を寄せて遙の背中を押す。

少し顔を青くした亜紀は、そんなふたりをながめつつも、決意の色を濃くした瞳は揺らぐことがない。

行こうか、と立ち上がった遙に亜紀がうなずいて、ふたりは宴会場を去っていく。

その背中を和は数秒ながめていたが、次には目の前にあるお茶を飲もうと湯飲みを手を取つた。

「和」

「高良君」

遙が立ち去ってまもなく声をかけられ、和は多少探るような視線を高良に寄せす。しかし彼はそれを気に留めることなく、いつもの調子で微笑んだ。

「今、本借りても大丈夫？」

「ん、ああ、いいよ。じゃあ取ってくるから」

「いや、いつしよに行くよ」

「……そう？」

高良の発言につなずいて、ふたりは先ほどの遙と亜紀のように連れ立って宴会場をあとにする。

とりあえず高良の真意を探るのにはいいかもしれない。そう思っ
て、和は広大な屋敷の廊下をゆっくりと進んでいった。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その10（前書き）

大変お待たせいたしました；

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その10

「にしても、ずいぶんあっさりで行かせるんだな」
「んー？」

並んで廊下を歩くふたりにおとずれていた沈黙を、恐らくどちらも気にしてはいなかったが、高良がその口を開いた瞬間、取り巻く空気がどこか変化する。和はそれを肌で感じつつ、適当なあいづちをうつつた。

高良は和の返答がおかしかったのか、少し噴出してから次の言葉を紡ぐ。

「遙君のこと。良かったの？ふたりきりにさせて」
「なんで？なにか止める要素がどこにあった？」

きよとん、と目を丸くしてたずねる和に、高良はこらえきれずに更に噴出してしまふ。

本格的に笑い始めた高良に、和は大丈夫かー、戻ってこーい、などと投げかけつつ歩を進める。高良も、盛大に笑ってはいるが歩みは止めていない。

「そうだな、止める理由なんてないよな、ごめん」

一息ついたところで、ふたりは女子部屋の前まで辿り着いた。和が一応確認の為に部屋へと入り誰もいないことを確認すると、高良も部屋の中へと入る。

「あ、これが」

ダンボールにぎつしりと詰められた本を目にして、高良がそれを覗き込む。相変わらずだな、と微笑む高良に同じようなもんでしょ、と和が同じように笑った。

「言ってた成島深咲ってこれか」

「うん、そう。持ってってーよ」

和の言葉にうなずけば、本を手取る。

「他にはなんかいいの？」

「そうだな……あ、これ、シリーズものだったよね？俺、三作目から読んでないんだよ。ある？」

「ん？どれ？」

高良の隣で和も同じように箱の中身を覗き込む。最大限ふたりの顔が近付いた瞬間、和は自身の肩になにかが触れるのを感じる。

高良の手が後ろから彼女の肩にまわされたことを自覚した時には、彼が和の顔をじっとみつめていた。

和は戸惑いつつも、高良の視線をそのまま受け止めれば、彼の顔をじ、とみつめ返す。

おとずれた沈黙をどうするのか。

高良はそれにある程度興味があったし、和もまた彼の動向はどうかしら気になった。

しばらく腹の探りあいのような視線を交換し合えば、続いて反応を示したのは和のほうだった。

ふ、と警戒した目を柔らかいものにゆるめる。高良の目には、彼女が微笑んでいるようにみえたし、実際、和は微笑んでいたのだろ

「和……」

「和！」

その表情の意味を訊こうと口を開きかけたそのときだ。

とても思い切りよく女子部屋のふすまが開き、和と高良はその音につられ出入り口を見る。

ふたりの視界に入ったのは、綺麗な顔を不快気に歪ませ仁王立ちしている遙であった。もちろん、先ほど和の名前を呼んだのも彼だ。今は眉間に寄せた皺をさらに引き寄せ、視線の先にいる男女をしっかりと見据えれば、その瞳を細めた。

「……何をやってるの」

地を這うかのようなその低い声に、和は理由が思い浮かばずに首を傾げる。

疑問符が浮かんでいるかのような彼女の顔に苛立った遙は、怒りの勢いのままにずんずんとふたりに向かって歩を進めれば、しゃがんでいたふたりの間にその身体を割り込ませた。

今は遙も含め三人が横一列に並んで仲良くしゃがんでいる図になっているが、雰囲気はとも仲良しとは言い難い。

べり、と和の肩から引き剥がされた高良の手に、和はやつと遙が何に怒っているのかを理解すれば、ちらり、と隣に座る遙を見やる。遙は、今は和ではなく高良へと睨みをきかせていた。

「彼女に気安く触るなど言っただけですけど？」

「俺はそれにたいして了承の返事をした覚えはないけれど？」

につこりと微笑んで答えた高良に、遙はますます額に青筋を浮かべる。勢い良く和の方へと振り向けば、和はぎくり、と肩を強張らせた。

「どうしてこんな至近距離を許したの？」

「どうしてって」

「俺言っただよね？無防備に触らせないでって。わかってくれたんじやなかったの？」

遙の言葉に、和は一瞬詰まるも、次にはため息を吐いて彼の手を取った。

力が込められたのを感じて、遙はそれに従い和とほぼ同時に立ち上がった。

手を引いて部屋を出ようと出入り口まで歩いた瞬間、和は思い出したかのように振り返る。

「高良君、今後は私に触らない方向でひとつよろしく」

和の言葉に一瞬目を丸くしたあと、高良は微笑んで答えた。

「そりゃ残念」

「はいはい」

返事に呆れながら、もの言いたげな遙に一瞥をくれてやれば、和は彼を引っ張って歩き出す。

廊下を歩く和に、遙は怒りというよりもどこかふてくされた様子でその顔を向ける。握られていた手を握り返せば、指と指を絡めいわゆる恋人つなぎのような形をとった。

その行為を特に咎めるでもなく、和は屋敷の奥へと歩を進めていく。

無言でいることに堪えかねたのか、遙は低い声音でぼつりと呟いた。

「和、ふたりきりでなにしてたの？」

「なにつて。見てわからなかった？本を貸してたんだよ」

「それはわかるよ。なんでわざわざ至近距離に居たわけ？」

「とりあえず冷静になってくれる？変な事をしてたわけじゃないから。手が痛い」

呆れ半分の声音に、遙は無意識に力を込めていた自身の手をゆるめれば、改めて和の手を握る。そこで離そうとしないあたりがなんと彼らしい。

和は目的地に着いたのか、屋敷の奥にあたる部屋へと入り込む。

中はもちろん空き室だった。

むっつりとした様子の遙に再度ためいきをもらし、和は顔をのぞきこむ。

「触らせたのはごめん。ただ、誤解しないでほしいのは、高良君は私をなんとも思っていないってこと」

「……どういうこと？」

妙に断定的な和の言葉が、当然ながら遙は信じられなかった。

牽制するような物言いや、遙をいたずらっぽくみつめる瞳。すべてが和が特別な存在なのだと伝えているように遙かには思えてならなかったのだ。

そんな風を感じているのが伝わったのか、和は再度ためいきを吐けば先ほどの高良の行動の意味を考えていた。

「高良君は、私とよく似ている部分があると思う。面白いことが好きなの。ただ、私と違うのは、退屈してるって部分。私は本を読んだり映画を観たり音楽聴いたりしてれば満足なんだけど、彼の場合はそうじゃないってことだね」

「……現実世界で面白いことをみつけないって意味？」

遙の問いかけに、和はうなずく。

「さっきの行動と表情で確信持てた。私のことをどうとも思っていないよ、彼は。ただ、私の次の行動がどうなるのかわくわくしてるって感じ。まったく、新しいおもちゃを得たのが子どもじゃないから夕子が悪い」

うんざりとした和の表情につられるかのように、遙も重たいため息を吐いた。

「なるほど、よくわかった。俺も、そういう種類の人間を何人が知ってるから」

「理解が早くて助かる。……ま、そういうことだから。反応を示せば示すほど喜ばれちゃうだけだよ。あと、一応注意喚起。亜紀ちゃん和泉君の仲をとりもとうとするかもしれないから」

ああ、と短く返事をする遙は、おそらく先ほどの亜紀との会話を思い出しているのだろう。心底面倒だといった表情で、和の背中にゆっくりと腕をまわすと、彼女の肩に顔を埋めた。
くぐもった声が、和の耳に浸透する。

「和と俺が恋人なのは大前提として知ってるわけだし、と高を括ったのがいけなかったかな」

「告白されると思ってなかった？」

「……………」

疲れたような遙の声音に、和は素直な気持ちで彼の頭を優しく撫でる。

「ま、冷たくしても優しくしても亜紀ちゃんみたいなタイプは面倒

だしねえ……多分、高良君の助言がなかったら、告白するに至らなかつたらうけど」

「ああ、もうすでに一枚噛んでるんだね……」

和に撫でられながらも声をあげる遙に、和はくす、と小さく笑む。

「振られるのはわかりきってるからいいんです。ただ、私があなたのことを好きだって知っておいてほしいだけです。私、簡単にはあきらめられません、ごめんなさい」

「！」

つらつらと和が言葉を紡いだところで、遙が勢い良く和の肩から顔をあげた。

彼女と重なった視線の先の彼は、驚愕に目を見開いていた。

「和、のぞいてみてたの……!?!」

「んなわけないじゃん。体がふたつないとそんなことできません」

おどけて言う彼女に、遙は片眉をあげる。

「なるほど、のぞいていたのは取引か。高良君に亜紀ちゃんが協力してくれないかって頼んだ場面でもみた？」

「ま、それである程度は予想ついたからね」。大当たりだった？」

「一言一句間違っていないんじゃないかってくらい正確で怖かったよ」

苦笑する遙に、和は同じような表情をかえす。

「ひょっとして、遙さんに和ちゃんはふさわしくありません、とかも言われたんじゃない？」

「！和」

「ちがうか。んー……和ちゃんは本当に遙さんが好きなんですか？
とか」

「……本当に見てたんじゃないんだよね？」

「あはは、これも正解？」

呑気な和の声音に、遙は再度長く深いため息をもらす。

「俺がきっぱり断ったところで、あの子あきらめないって宣言する
しで…本当にどうしてこうなったんだろう」

「ま、今後悔しても仕方がないでしょ。なるようになるって」

「俺はどうともなるつもりないからね？」

「わーかってますよ。和泉君どうしたの？」

どこも不安そうな雰囲気をもたない和に、遙は救われるような気
持ちになる。お互いに心が通い合っていると、わかっているのだ。
わかっているても、すれ違えば多少なりとも隙間はできるもの。

遙は、和を失うのがいつだって怖い。それゆえにこんな時は弱気
になる。しかし大丈夫だと微笑む彼女を見れば、自然笑顔になる。

「いつだって、和にはかなわないよ」

「またそれ？」

微笑む和を抱きしめて呟く遙に和は噴出せば、あやすように背中
へと手をまわす。

ゆっくりと撫でられると心地よく、しばらく目を閉じていた遙だっ
たが、やがて違う感情が彼を支配していく。

その空気を感じ取ったのか、和は一瞬身体を強張らせれば、おそ
るおそる、遙をのぞきこむ。

炎が点ったその瞳を持った遙は、はっきりと和に欲望を向けてい
るのがわかった。

どこでスイッチが入ってしまったのかと狼狽する和であったが、しっかりと回り込んだ腕はそうやすやすと彼女を離すほど甘くはない。

「和、好きだよ」

「！ 遥」

名前で呼ぶ彼女の声は、ひどく艶かしい。

彼女が彼を下の名前で呼ぶとき。それは、行為を許すこととイコールになる。遥には、その意味がわかつているのだ。

だからこそ、他人が聞けばなんでもない声も、遥には極上の甘さを含んだそれになる。

頬に手をすべらせ、求める瞳で和をみつめれば、彼女もまた同じような感情を持っているのだとわかった。

潤んだ瞳を永遠に見ていたいとも過ぎだったが、それができるほど、遥は辛抱強くない。結局は心のままに、彼女の唇へと自身のそれを重ねた。

「ん……」

くぐもった和の声と、短く途切れる息遣いに、遥はますます昂ぶっていく自身を止められそうもなかった。

「覗き見？ずいぶんと良い趣味してるね、亜紀」

「！ 高良君……いきなり声かけないでよ、びっくりするじゃない」

ほんの数秒前。物音につられてふすまをのぞきこんで見えたのは、衝撃的な画だった。亜紀は、つい先ほど想いを伝えた相手のラブシーンを目撃してしまい、震えていたところだ。

そんな彼女を見咎めた高良が後ろから声をかけたのだが、亜紀はそれに心底驚いたらしく、肩をびくりと揺らし、おそろおそろ後ろを振り返った。

視線の先に居たのは高良だったのでよかったが、これがうるさい親戚だったとすればまた面倒だ。

亜紀は和が貶められるのを心のどこかで望んでいるものの、遥が悪く言われるのは居た堪れない。もしふたりが恋人同士の振る舞いをしている場面を見られてもしたら、ひよっとすると立場が悪くなるのは遥かもしれない。なにせ彼は、ここの親戚筋にあたる人間ではないのだから。

そう、ふたりはただの恋人なのだ。結婚もしていないのに、堂々とこんな場所に遥を連れて来るだなんて。きつと、自慢して見せびらかしたかったにちがいない。もしくは、長い間はなれ難かったから多少無理を言って遥を同行させたのだ。

亜紀は、本来ならば和がそんな性分ではないと十二分にわかっていたはずなのに、このときまるで冷静ではいられなかった。

恋は盲目、とは良く言ったものである。

悔しそつに目の前で唇を？む亜紀を見て、高良は呆れ混じりのため息を吐いた。

「わかってたんじゃないのか？こうなることくらい」
「こうなる、って」

高良の言葉に、戸惑いつつも首を傾げる亜紀に、高良は再度短く息を吐いた。

「亜紀が告白して、遥君が何か少しでも心を動かされると思った」
「？」

「！それは」

「あのふたり、相思相愛だったことくらいわかってるだろう？その

くらいじゃブレないよ、彼らは」

きっぱりとした物言いに、亜紀はか、と目を見開いた。

「高良君は誰の味方なの!？」

取り乱したような声に、しかし高良はひょうひょうと答える。

「誰の味方でもないけど」

「……っ高良君の馬鹿!！」

駆け出していった亜紀のうしろ姿を呆れた様子で見る高良を、和と遙はすきまからのぞいていた。

「……っけっこうひどいね」

「高良君は昔からああいう感じだからね」

見合わせた和と遙ふたりの顔には、さてどうしたものか、と困りきった様子がみてとれた。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その11 感情の行く先々（前書き）

今回はちょっと視点を变えてのお話です。退屈に感じたら申し訳ありません。

こんな気持ちは初めてなの。別に、初恋ってわけではないってわかってるけれど。

初めて会ったとき、すごくすごく綺麗なひとだと思って。瞳が見てると吸い込まれちゃいそうだって。本当に、ただそれだけの感情だと、思っていたんだけど。

なぜなんだろう。言葉を交わすたびに心臓が痛くなってくる。わかってる。これは叶わない恋なんだってことくらい。

でも、でもね。

みんな、計算して誰かを好きになるものじゃないでしょう？

「それで、亜紀ちゃん。お話ってなにかな？」

にっこりと微笑む目の前の綺麗な男を、亜紀はうつとりとみつめていた。

本当に、どうやって和は彼を手に入れたのだろう。告白したのは彼からという話だったが、真実なのだろうか？亜紀はいまだにそれが信じられずにいた。

彼に恋をしない女性なんて、この世に存在するのだろうか。

本当にそう思ってしまえるほど、今の彼女は恋に恋する乙女と化していた。

「亜紀ちゃん？」

再度名前を呼ばれて覚醒すれば、目の前に立つ遙が訝しながらこちらを見ている。亜紀は慌ててはい、と返答の意を込めて声をあげたが慌てたせいだろう。すっかり声が裏返ってしまった。間の抜けた自身のそれに羞恥を抱けば、みるみる頬を赤らめる。

その様子を確認した遙が、少し困ったように微笑む。大丈夫？と優しい色の声をあげながら。

亜紀は、それが彼女に向けられた音であると思えば、胸が軋んで痛いくらいであった。

何かを決意した表情と、纏う空気が一変すれば、それは遙にも伝わったのだろう。微苦笑していたその顔から、亜紀のそれを受け止めようとす、と落ち着いた瞳を彼女に向ける。

小さく深呼吸すれば、亜紀は改めて真っ直ぐに遙を見やる。綺麗な顔をした彼が視界に映るたびに、亜紀を夢見心地のようなふふわした感覚が襲った。

どうして彼は、こんなに綺麗なのだろう。こんなに素敵なのだろう。

先ほどから、彼女の中でそんな考えが頭から離れずにいる。

「遙さん。こんなところまで呼び出してしまつてごめんなさい」

「……いいや、かまわないよ」

につこりと微笑む遙に、もはや頬だけでなく顔全体を赤く染めた亜紀は、ごくり、と唾を飲み込めば口を開いた。

「こんなこと、本当は言うべきじゃないってわかってます。困らせるだけだって。でも……もう止められなくて」

震える両手を胸の前で組みながら、亜紀は必死に言葉を紡いでいく。

「遙さんが、和ちゃんの恋人なんだって、わかってます。振られるだけだつていうのも、わかってます。でも……伝えたかったんです。私、あなたが好きです」

伝えた言葉を、その言葉にのった想いを、彼はどれくらいわかってくれるだろうか。震えているのは体なのか、心なのか。

半ば混乱した状態のまま、亜紀は一気に思いの丈を伝えるべく声をあげる。

口の中が、ひどく渴いていた。

「知っておいてほしかったんです。私が遙さんを好きだって」

「……それは、伝えるだけで君は満足だって解釈で良いのかな」

今まで黙って亜紀の言葉を聞いていた遙が、亜紀を見据えて質問する。

声もそうだが、その表情も、すべてが淡々としていて、亜紀はどこか怖かった。

「ねえ、亜紀ちゃん。俺は和が好きだよ。だからどうなったって、君の気持ちには応えられない。そう、君に伝えて、俺は良いのかな」

「……振られる覚悟を、していなかったわけじゃありませんから。かまいません」

半分ならんでいるような顔で亜紀が遙をみつめる。遙はその様子に目を見開けば、次にはふ、と苦笑した。

「そうか。それは、君をみくびりすぎていたかな、ごめん。……じやあ、改めて言うよ。俺は、俺の世界は和だから。亜紀ちゃんとは付き合えないし、亜紀ちゃんを好きになる事は一生ない。だから……ごめんね」

「……っ」

泣き出しそうな亜紀の表情を見て、遙はこれ以上話をする必要はないと判断したのだろう。その場を去ろうと歩を進めれば、彼女の

横を通り過ぎる。

亜紀と遙との距離が段々と離れる前に、なにかの辛抱ができなくなったのか、亜紀は遙のほうへと振り向けば高い声を上げた。

「私、あきらめられないんです！」

「！」

亜紀の声につられるように、遙はぴたり、と足を止めれば、ゆっくりと亜紀のほうへ振り返る。

てつきり泣いていると思っていた亜紀は、驚くことに彼をみつめて微笑んでいた。

「迷惑なだけだってわかっています、ごめんなさい。ただ……簡単にこの気持ちをあきらめられるほど、今の私が持つてる感情は軽くないんです」

「……亜紀ちゃん」

「和ちゃんは、本当に遙さんを好きなんですか？」

亜紀の言葉に、遙の表情筋が多少反応すれば、次には段々と眉に皺が寄る。

「遙さんが、和ちゃんを本当に好きで、大切にしているっていうのはよくわかります。でも、和ちゃんは、遙さんが想っているほど……」

「……遙さんを好きなんですか！？私のほうが、遙さんを」

「亜紀ちゃん」

最後まで、言い切れることは許されなかった。静かな、それでいて低い声が亜紀の耳深くに響き渡り、やがて浸透する。

「君は、なにもわかっていないね」

口角だけをあげ、笑っていない瞳で亜紀をみつめる遙を、亜紀は初めて怖いと感じた。

同時に、失言だとわかっていたのに止められなかった自身を悔やむがもう遅い。なにより、先ほどの言葉はまぎれもない彼女の本音であった。

「誰かと誰かの心の大きさを量ること自体、すごく馬鹿馬鹿しいと思わない？切り取って見えないのに」

「それは」

「君は、ここまでの和と俺の時間をなにひとつ知らないで、彼女の上辺をひろっているだけだよ」

冷静な表情と声音でそう告げられれば、亜紀は逆に頭が沸騰していくかのような錯覚に陥った。

気が付けば声を荒げ、半ば叫ぶように遙に怒りのようなものをぶつける。

「そんなことありません！確かに、私は和ちゃんと遙さんが恋人としてどんな時間を過ごしたかなんてわからない。だけど、和ちゃんのこととはよく知ってる！遙さんよりもずっと昔から、彼女のことは知ってるんだもん！和ちゃんは、そんなに一生懸命に恋をする女の子じゃない！！」

「……そう思っていたいならそれでもいい。ただ、付き合いの長さや深さはイコールじゃないはずだよ」

ふ、とどこか馬鹿にしたような笑みを遙に浮かべられ、亜紀はますます冷静さを欠いていく。

「そんなの！たった数ヶ月で和ちゃんのすべてをわかっているとで

も言いたいんですか!？」

「まさか。他人とすべてを共有できるなんて思っていないよ。ただ、彼女がとても愛情深い人間だっていうのはよくわかってるし、少なくとも俺には伝わってる。別に亜紀ちゃんがそれを理解してくれなくたってかまわない」

「でも」

「それにね、亜紀ちゃん。俺は別にかまわないんだよ」

亜紀の言葉を遮るように紡がれたその意味を、彼女はわからずに疑問符の浮かぶ顔を遙へと向ける。

遙は、そんな彼女に答えを与えるように、微笑んで再度口を開いた。

「和が俺を大切にしていなくたって。俺が和を想うほどに、和が俺を好きでいてくれなくたって。ただ彼女の隣に居られれば、俺はそれでじゅうぶん幸せだよ」

衝撃的な言葉に、亜紀はみるみる顔を蒼褪めていく。その様子をしばらくみつめていた遙であったが、やがてなにかに満足したのか、ゆっくりとその場を立ち去るべく歩き出してしまった。

亜紀は、止めるでもなく、呆然と遙の後ろすがたを見やる。

「……そんなの」

ぼつり、と呟いた言葉は、誰にきかせるでもない。

「いつか、限界がくるに決まってるのに」

いつか見返りがほしくなる。どんなに綺麗事を言ったところで、きつといつかは同じように愛されたいと求めてしまうはずだ。

亜紀は、自分にこそそれが出来るのにと感じれば、悔しさに心を支配された。

なぜあそこまで一心に愛されるのか。確かに笹森和は一風変わった女の子だ。見た目だってそれなりに可愛らしいし、ここでの彼女がどれだけの異性に好かれているかだって、わかっている。

けれど、遥の愛情を独り占めできる価値が彼女にあるのか？と問われれば、亜紀には疑問だった。

条件であるとか、そういった問題ではない。

彼の隣にふさわしいとか、ふさわしくないとか、そういうことではなく。

本当に、和は遥を大切に想っているのだろうか？

それだけが、亜紀にとつての疑問であり、また遥をあきらめきれない最大の理由でもあった。

ここでじつとしていても仕方がない。

しばらく立ち尽くしていた彼女であったが、やがて我に返れば、右足を一歩踏み出した。

遥はまた、和の隣に戻ったのだろうか。

そう考えれば、遥の姿を探したくなった。

「亜紀」

「！ 智子ちゃん」

宴会場へと戻り、辺りを見回していた亜紀をみつけて、智子は声をかけた。

亜紀の目の前に立つ智子の様子から、何を言われるかを察したらしい亜紀は、眉を顰めてその場を去ろうとする。もともと、遥が居ないのならば彼女はここに用がない。

しかし、あっさりと逃してくれるはずもなく、亜紀は智子に左腕をつかまれてしまった。

「待ちなさい。亜紀、逃げるってことは後ろめたいってことよ」
「……別に、そんなんじゃない」

智子の言葉にむ、と更に眉根を寄せれば、亜紀は姉のように慕っている目の前の女性をにらんだ。

にらまれた智子は、亜紀の腕を解放すれば小さくため息を吐く。

「やめときな。万が一にもあなたに可能性なんてないのよ。深みにはまればはまるほど辛くなるだけだって」

「可能性がなくなつていいの。気持ちはそう簡単に消せない」

「すぐ忘れるなんて言っていないわよ。ただね、奪おうとしたり、ふたりを故意に邪魔するのはやめなさいって言ってるの」

「そんなつもりないよ。ただ、好きでいたい。遥さんを見てるだけでも、いけないの？」

「私は、あなたが彼にまわりついてるようにしか見えないけど？」

「そんなことしてない。迷惑だって彼に言われたら、すぐやめる」

「亜紀」

「もう、いいでしょう。智子ちゃんには関係ない！」

智子の言葉を遮り、亜紀は逃げるように宴会場をあとにした。後ろから智子が何かを叫んでいるのが耳に入ったが、亜紀はもうあれ以上彼女と話す気にはなれなかった。

『別に、ふたりの仲を切り裂きたいわけじゃない！』

走りながら、亜紀は思う。

ただ、和の気持ちがどれだけのものなのか、知りたい。

自分が隣に立ちたいなんて、ぜいたくなことは言わないから。ただ、和の遥への愛情が、どれほどのものなのか。

『完全に負けたって思えたら、私は』

屋敷の端のほうまで走ってきたところで、亜紀はやっと足を止める。少し荒くなった呼吸を整えながら、窓の外に目をむけた。

田舎なだけあって、景色はどこまでも空は青い。そんなことを思ってしまった。亜紀の心とは裏腹に、どこまでも空は青い。そんなことを思ってしまった。ええ、亜紀の中はどんどん沈み、暗くなっていく。

ふう、とため息を吐いたところで、女子部屋にでも戻ろうと一歩踏み出した時だった。

「んっ」

切羽詰ったような声が亜紀の耳に届き、思わず歩みを止めた。きよきよきよと辺りを見回しても人影はない。どこか空き部屋から聞こえてきたのだろう、と亜紀は静止して耳を澄ませた。

かたん、と再度聞こえてきた物音に、亜紀はあたりをつけて視線を動かす。少し開いたふすまが目に入り、亜紀はそおつと隙間から部屋の様子をうかがった。

「遙、も、やめ」

「和……かわいい」

視界に入ったのは、先ほど思いの丈をぶつけた相手のラブシーンだった。

衝撃に身体を強張らせた亜紀は、背後から近付く姿にまったく気が付かないでいた。

「覗き見？ずいぶんと良い趣味してるね、亜紀」

「！ 高良君……いきなり声かけないでよ、びっくりするじゃない」

ショックを受けたまま、高良に声をかけられ、亜紀はどんな顔をしているのかわからずにいた。きっと今、ひどく情けない表情をしているのだらう、と自身で察しをつける。

「わかってたんじゃないのか？こうなることくらい」

「こうなる、って」

「亜紀が告白して、遥君が何か少しでも心を動かされると思ってた？」

「！それは」

「あのふたり、相思相愛だったことくらいわかってるだらう？そのくらいじゃブレないよ、彼らは」

高良の言葉に、亜紀は多少の意外性を感じた。

確かに、遥はあの容姿だ。亜紀が告白したところで、異性からの好意などそれこそ山の如く受けてきたに違いないだらう。そんなことは、亜紀にだってわかっている。

しかし、例えば和が少しでも不満をみせれば、揉めることだってあるかもしれない。

そんな淡い期待を抱いてしまっていた自身が心底恥ずかしく、愚かだと思った。

なにより、高良は亜紀よりも和が遥にどういった感情を抱いているのかわかっているかのような口ぶりで、それが意外であり、悔しくもあった。

彼はもともと聡い人間であるものの、感情の機微にはそう鋭くないとばかり亜紀は思っていたのだ。だからこそ、先ほどの諭すような彼の口ぶりに、亜紀は羞恥と激しい怒りを覚えていた。

気付けば、目の前の高良に声を荒げて叫ぶ。

「高良君は誰の味方なの！？」

ずいぶん子どもっぽいやつだと、わかっていた。それでも亜紀は、感情が押し寄せてしまい止められなかったのだ。つい先ほど、失言を反省したばかりだというのに。

そんな亜紀の様子をあざ笑うかのように、高良はなんでもないので口に開いた。

「誰の味方でもないけど」

その言葉に、亜紀は頬を染め上げる。

当然かえってくる答えは予想が付くものであったはずなのに、そんな質問をぶつけてしまった自身が心底恥ずかしい。

亜紀は、悔し紛れに目の前の高良をにらみつけければ、もう一度叫んだ。

「……………高良君の馬鹿！！」

たまらなくなつて走る廊下が、ひどく長く感じられた。

感情があふれすぎて、どうしたら良いのかわからない。ひどくぐちゃぐちゃだ。

今、亜紀は、自身で一体この気持ちをどうしたいのかわからずにいる。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その12

「もうちょっかいかけるのやめるね、ばれちゃったし」

につこりと微笑んで落とされた言葉は、はいそうですか、と済ませられるような軽さではなかった。しかし紡いだ当の本人は、まるであいさつをするかのようにするりと告げて、やがて立ち上がりその場を去ってしまった。

宴会場に並んで座る和と遙は、食べていた夕飯を？む事も忘れて固まっていたが、高良が立ち去っていく姿を見てまず覚醒したのは和だった。

「さすが高良君。切り替えがお早い」

少し笑いながらそう放った和に、遙は困っているのか笑っているのかよくわからない複雑な表情を向けた。

「あれってやつぱり、そういう意味？」

遙の問いに、和は首肯する。

「そうだね。高良君に気持ちがないことを私が見抜いてしまったから、やめるってことだろうと思うよ」

「……そもそもどうして気持ちがないのにそういうことをするのか」「うーん。個人的見解なんだけど、高良君て人間が大嫌い大好きなんだと思うんだよね」

首を傾げて矛盾したことを言う和に、遙は疑問符の浮かぶ顔を向ける。しかし、彼の疑問に答えることはなく、和は食事を再開させ

た。

そんな彼女の態度が気にならないではなかったが、遙はそれ以上高良の話をするのも面白くない気分であったので、まあいいか、と思いついた。基本的に、和にちよっかいをかけられなければ他人のことはほぼどうでもいいのだ。

そんな遙を横目でみつつ、和はおかずを咀嚼しては考えていた。

高良は、和とどこか似通っているところがある。それは読書の趣味であったり、色々なものを多少斜めからみてしまったりとか、そういうことだ。しかし、ふたりには決定的に違っている部分がある。

高良は、他人にたいしてひどく残酷なのだ。

和は、親しくない人間や、自分を害する人間には酷なこともやっでのける。しかし一度存在を認めれば、彼女は基本的に情に厚い人間だ。家族にたいする愛情も深い。しかし高良は、そういう部分が根こそぎないのである。

和は、ひとり昔のことを思い出す。それは、彼女がまだ小学生で、彼が中学生だった頃。

ある日、陰で我慢できなくなりほんの少し涙をこぼした和をみかけた高良が、心底不思議そうに顔を傾げてこう言った。

「どうして泣いているの？」

和は目を丸くして、自分の存在のせいで家族が悪く言われるのが悔しいのだ、と答えれば、高良はますます不思議そうな顔をした。

「へえ……和はそんなことを思うのか。ねえ、和は家族以外に大切なひとはいるの？」

再度された質問に、和はしばらく考えを巡らせれば、来る前に少し心配顔をしていた広未の顔を思い出す。そうしてイエスと答えた

和に、高良は先ほどの和のように目を丸くして声をあげた。

「意外だなあ。ねえ、他人を思いやるってどんな気持ち？」

「！ 高良君には、そういう相手がいないの」

「うん。相手が泣いても笑っても、理由はなんとなくわかるけど、俺の中の感情は動かないかなあ」

「……そうなんだ」

高良の言葉に和はうなずいて、しかし彼の最後の質問に答えるのはひどくむずかしかった。どんな感じかときかれても、ただ相手に健やかでいてほしいと思う気持ちを、端的に言葉で伝えるのには幼い和にはできなかつたし、かといって長ったらしくなにかを語ることも、彼女にはできそうもなかつた。

和は、相手が笑えば嬉しく、相手が泣けば悲しい、という至極無難なことを伝えてみたが、高良はそれにふうん、と小さく答えただけで、ぽん、と頭を数回撫でると、あまり泣いてはいけないうよ、と言ってその場を去ってしまった。

あのときに触れた手は温かく感じたのに、彼自身が無感動であるというのは妙な気分であつたのを覚えている。和はそのときと同じ感情を思い起こして、複雑な気持ちになった。

高良は、人間にとっても興味があるのだ。感情がくるくる動くひとをみて、いつも楽しそうにしている。向ける感情が強ければ強いほど、高良はそれに興味を示す。きっと、自分にはないものを補完したいのだろう。しかしここに集う大人たちをみて、酷く馬鹿らしいと思ったのも事実であろうし、また男女間のどろどろとしたものをつめて辟易したこともあつただろう。

これだけ若い連中が一堂に会するのだ。そして一定の期間を同じ空間で過ごすのだから、それこそなにもないほうがおかしいといえはおかしいのかもしれない。和とて、いくつかの修羅場をここで目撃したことがある。

和は思う。きっと高良は、ああなりたいと願っているし、ああなりたくないと願っているのだろう、と。心動かされる誰かに出会いたいし、出会いたくないのだ。

そんな彼だからこそ、神経を逆撫でするかのような行動に出られなくても、和はなかなかどうして怒りという感情を覚えにくかった。

遥になにかされれば話は違ってくるし、亜紀をいたずらに傷つけられればやはり考えただろう。

しかし今回の高良は、亜紀に少々発破をかけたものの、そこまで許し難い行為をしたわけでもない。彼の心境を考えればこそ、和は多少、高良に同情めいたなにかを感じてしまう。

「和!」

飛んでいた意識を浮上させて、和は名前を呼ばれた事実気付く。隣を向けば、不機嫌顔になった遥が和をみつめていた。

「……なんでそんな顔になってるの?」

「何度呼んでも返事しないんだもん。今、誰のこと考えてた?」

「誰のこと考えてないけど」

堂々とした和の嘘に、遥はますます不機嫌になる。しかし和とて、ゆずれないのだ。正直に他の男のことを考えていたなどと告げれば、その後どうなるのかはわかりきっていた。

「そろそろ片付けないとだね」

「和!」

「なに、手伝ってくれんの」

「手伝うけど!もう、どうしてそうずるいの!」

拗ねた口調で声を上げる遥に、和は食器を下げるべく立ち上がり

ながらからからと笑う。その日の夜は、案外穏やかに過ぎていった。

「亜紀」

「……雄君」

前日と同じような時間帯に目が覚めてしまった亜紀は、今度こそ真つ当な理由で台所に向かっていた。喉に渴きを覚えたので水を飲もうと立ち入れば、今日は高良が雄大にすりかわっている。

雄大は無言でコップを取り出せば、水を汲んで亜紀に差し出すので、亜紀は礼を言っただけを受け取った。

亜紀は、雄大が和に失恋した事実を思い出せば、なんとなく気まぐずくて無言になる。今日の朝はどこか頭に血がのぼっていたが、誰かをけしかけてふたりの仲を引き裂こうなどと、現時点になるともうそんな考えは亜紀の中からすっかり消え失せていた。それでも、彼女の中に燦る心は、和に向けた憎悪がある。この醜い感情をどう処理すればよいのか、亜紀にはわからずにいた。

いまだに和が遙をどれだけ想っているのかわからない以上、この気持ち消すのは難しかった。

「眠れないのか」

雄大の言葉に、亜紀のコップを持っている右手がびくり、と反応する。

少し逡巡して、やがて亜紀は雄大と向き合えばためらいつつも口を開く。

「……雄君は、どうやって和ちゃんをあきらめたの？」

雄大は、一瞬言われた意味がわからずに固まったが、やがてそれを理解すると噴出した。

「またえらくド直球だな」

「え、あ、ごめん」

「いや、いいけどさ」

苦笑する雄大に、やはり申し訳なかったと感じたが、それでも言った言葉を取り消すことはできない。亜紀は開き直って彼の話を聞きたい、と思い直した。

「私、和ちゃんが遙さんを好きだっけどうしても信じられない」

「……まあ、和泉よりはわかり辛いだろうけどな」

「同じくらい想ってないとだめなんてことないけど。わかってるんだけど。でも、納得できなくてぐるぐるしちゃう」

落ち込みつつため息を吐く亜紀に、雄大は苦笑してそうだな、と応える。

「でもさ、お前にとったらそう見えるかもしれないけど、実際問題、和は和泉に負けず劣らずあいつのこと好きだと思っぞ。すっげえ悔しいけどな」

「えっ?」

雄大の言葉に驚いて、思わず声をあげてしまった亜紀に、何かを話そうと雄大は口を開いたが、しかしすんでのところで眉を顰める。

「……これなあ、言っただけいいのかどうか。うーん……すごい簡単に話すけど。あいつさ、和泉のせいだけっけこう苦労してんだよ」

「? どういうこと」

「亜紀の目には和がなんにも嫌ことなんてないようつってるかもしれないけどさ。和泉の相手ってけっけこう大変だぞ。あいつの隣

に並んで立つって、どれだけの覚悟がいるかいまいちピンときてないんじゃないか？」

「そんなの、言われなくてもわかるよ。街を歩いてたって、きつと周りからは比べられるだろうし、告白だってしよっちゅうされるからそのたんびに不安になると思うし。でも、そんなの遙さんの溺愛ぶりみてたら、不安なんて吹き飛んじゃうでしょう？」

む、と少し機嫌の悪い口調で言う亜紀の額を、雄大はびん、と弾いた。いだ、と間の抜けた声が深夜の台所に響く。

「簡単に言うなよ。女のお前のが、女のえげつない部分は色々わかつてるんじゃないのか？」

「……………」

「和泉は、それこそ学園のアイドルで、なにやっても学校の中じゃ目立って仕方ないんだと。目を付けられて囲まれたことだって、そう少なくない」

「でも、和ちゃんなら大丈夫なんじゃないの？ああいう性格だし」

「お前はどつなんだ？あいつの隣に立って笑ってられるのか」

「い、今は和ちゃんの話をしてるの。和ちゃんだったらきつと簡単に危険なんて回避できるはずでしょ？だったらやっぱりたいして好きじゃなくても隣に居れるじゃない」

あくまでもそう言い張る亜紀に、雄大は呆れにも似たため息を吐く。

「全治一ヶ月以上の大怪我してもか？」

「え！？」

雄大の爆弾発言に、亜紀は思わず声をあげる。

少し気まずそうな顔をしている雄大は、本当はこの事実を告げた

くはなかったのだろう。しかし先ほどからの亜紀の態度に多少苛立ったのか、思わず話してしまったようだった。

仕方がない、といった風情で半ば開き直った雄大は、更に口を開く。

「和泉の昔の女に負わされたんだ。亜紀は、そんな目に遭っても傍に居たいと思えるのか」

「それって、一体どういう状況だったの？」

「それは悪いけど詳しくは本人に訊け。俺はこれ以上話せない」

「……………」

「なあ、亜紀。和は多分、他の人間よりも多い苦勞を背負ってきてる。和泉の隣に立つことで」

真剣な瞳で亜紀を真っ直ぐみつめる雄大の顔を、亜紀もまた真剣に受け止める。

「それでも納得ができないんだったら、ここに滞在中のふたりをよくみてな。人間が人間を想い合っつてきつとこういうことなんだ、と思える瞬間がきつとある」

「雄君」

「俺はな、それを目の当たりにしてじゃあもういいか、って思えたんだよ」

そう言っつて、雄大は苦笑しつつ亜紀の頭をぽんぽん、と叩くと、お前も適当なところで戻れよ、と台所を去ってしまった。

部屋に戻つてもなかなか眠れずに、亜紀は翌朝、疲れた体を無理やり起こすはめになった。

雄大の言葉が頭をちらついてなかなかはなれずに、亜紀は何度か質問をぶつけてみようかとも思ったが、なんとなくそれをためらっ

た。それでも、ふたりの動向が気になれば、しらず遥のみならず和をも目で追ってしまふ。

朝食が終わり、それぞれが散っていく中、和と遥もどこかへ移動する。亜紀は、こっそりとふたりのあとを尾けた。

「今日はなんの本を読むの？」

「昨日の続き」

「ああ、あれか」

「暇になったら、声かけていいんだからね？」

「うん、わかってる」

どうやら縁側に座って本を読むようだ。亜紀は曲がり角から会話だけでも聞こうと耳をそばだてていたが、やがて途切れた会話に我慢できなくなり、そり、と体半分をのぞかせる。

飛び込んできた光景に、目を見開いた。

本を読む和のかたわらで、遥がそれをのぞいている。その世界は、完全に他のものには入り込めないもので、なんとも近寄り難い空間だった。

ふたりにとっては、これが日常なのだろうかと思うと、亜紀は悔しい思いがする。しかし一体いつまでこの状態なのだろうか。亜紀がそろそろ立ち去ろうか、と思った瞬間だった。

「和泉君！」

「大丈夫だよ」

「何言ってるの、元々が朝ちょっと弱いでしょう。慣れてない生活で疲れが出たんだよ」

「そんなことないよ」

「あんたね、私には過剰なまでに色々心配するくせに私は心配しちやいけないってそんなのおかしいでしょうが。いいから素直に甘えなさい。少し休んでくる？」

首を傾げる和を見て、亜紀も同じように首を傾げていた。和は気付いたようだが、亜紀には遙の変化がまるでわからなかった。目に見えてふらついていた、というのならばともかく、普通に和の隣に座っているように見えたのだ。それだけ、和もまた遙をみているということなのだろうか。雄大の言葉をまとも思い浮かべて、亜紀は複雑な心境になる。

遙は、少し拗ねた様子で口を尖らせた。

「和と離れるのなんてやだ」

「別に離れるなんて言っていないでしょ。いつしよに居るよ」

「うーん、でも、布団に入るほどじゃないし」

「あんだね。……たく、じゃあほら、枕代わりにしていいからここに頭のつけなさい」

和が自身の股をぼん、と叩いてうながせば、遙はいいの？と目を丸くする。

「私だって、遙が具合悪くなったら心配するし、多少のわがままにだって応える気持ちもあるよ。だからほら、寝なさい」

「和かつこいいな」

「はいはい」

遙、と名前を呼んだ和に、亜紀はぴく、と反応する。

あはは、と声をあげて、遙が座っている和の股に頭をあずけた。

遙の頭を、和が慈しむような仕草で撫でる。

「……気持ち良い」

「本を読み終わったら起こすから。それでもまだ顔色が悪かったら強制的に病人部屋ね。お昼は消化の良いものにするから」

「和、愛してる」

「はいはい、ありがとう。じゃあ私が悲しまないように寝てください
い」

「ふふ、うん」

ふたりの会話をもつそれ以上聞きたくない、と思った亜紀は、そ
と廊下を立ち去る。

「……探偵にはむかないかな」

「和、今何が言った？」

「んや、独り言。おやすみ」

微笑んで、再度遙の眠気を誘うように頭を撫でる。遙は、すう、
と寝息を立てだした。

亜紀の居た場所をみつめて、少し首を傾げた和は、しかし読書を
再開する。

『どうして覗いてたんだろう。昨日も眠れないみたいだったけど…
…また高良君がなんかしたのかな。いや、それはないか。昨日も尾
行しようかとも一瞬思ったけど、さすがになー、泣いてる場面とか
遭遇したらあれだし』

あれこれ頭の中を巡りはしたが、ここであれこれと推察しても仕
方がないだろう、と考え直した和は、開きっぱなしの本に集中しよ
うと視線をそこに固定した。

外では、夏の虫が威勢よく鳴いていたが、都会のそれらよりもど
こか美しく和の耳には聞こえていた。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その13

理不尽な感情がある。しかしそれは決して恥ずべき事ではないはずなのだ。理不尽だからこそ感情であり、人間だからこそ葛藤するのだから。

しかし彼女はそれを認めるにはまだ幼く、醜いものもまた綺麗なのだと考えられるほど大人には当然なれなかった。

「和ちゃん、なにやってたの？」

少し厳しい声音が出てしまったことに後悔してももう遅く、またそれを止められるほど亜紀は理性的にはなれなかった。

自身に嫌悪感を抱きながらも、衝動が彼女を突き動かしてしまう。困った顔になる和に、亜紀は眉根を寄せて更に言葉を続ける。

「夕飯のしたくの時にいないなんて初めてじゃない。遙さんといったの？和ちゃんもしょせん女の子だったんだ」

「……ごめんね」

「あやまれても困るよ。私ひとりが大変だったわけでもないし。和ちゃんは普段やってくれる事が多いから、いないと余計困る。そうやって無責任なことするんなら最初からやらなきゃいいのに」

亜紀の言葉に、そばで聞いていた何人かが眉を顰める。

夕飯の席にも来なかった和を、確かに誰かはちくりと言を発したし、違う誰かからも不満の声は漏れた。しかし、亜紀が言ったように、皆は和が率先して色々なことをやってくれていることをよくわかっていて。今回もなにか理由があるのだろうと思っていたし、基本的に夏の間は合同の宴会があるわけではないので強制力もない。あくまでも、いっしょに食べようか、と自主的に発言して行ってい

る結果でしかないのだ。

案の定、近くで会話を聞いていた雄大がそれを指摘した。

「おい、亜紀。別にいつしよに夕飯食うのは強制じゃないんだから和を責めるいわれはないだろう」

「！ 雄君」

「ちよつと落ち着けよ。頭に血いのぼりすぎ」

呆れたような表情で雄大が亜紀をたしなめれば、亜紀は唇を噛む。雄大はそれを一瞥すれば、で？と和に向き直った。

「和、今までなにしてたんだ」

「ちよつと、和泉君が。体調崩すまではいかないけど寝不足で調子悪そうだね。気になってついてた。ごめん」

「えー！ 遥様だいじょうぶなの！？」

和の言葉に弾かれたように声を発したのは七美だ。彼女はすっかり遥のファンになっているらしく、学校でのファンクラブを和に思い出させる。

雄大は、そんな七美の言動に心底嫌そうな表情をしていた。和はそんなふたりを見て少し噴出しつつ声をあげる。

「うん、大丈夫。ちよつと食べやすいもの作って部屋でふたりで食べてくるよ。みんな、本当にごめんね！」

和の言葉に、周りからは気にするな、という声がとぶ。和は恐縮しつつ、台所へと向かった。

「和、私も」

「はいはい、自重なさい」

七美がいつしよについていこうとしたが、それを首根っこつかんで進が制止する。

「なによう」

ふくれる七美に、進は微笑む。

「未来の弟君にいまから優しくしておこうと思ってね」「す、進」

ウインクした進に、彩は顔を真っ赤に染め上げる。

宴会場に広がった空気にあてられた人々は、そそくさと地元にいる恋人に連絡を取る者、怒る者、呆れる者、などさまざまだった。

中でも、悲痛な声で一人身のやつこのあと酒持ち寄って集合！という声には何人も人間がとても威勢の良い返事をしていて、妙な雰囲気であった。

「雄大君は酒を片手にいかないのかな？」

からかうような口調で雄大に声をかけたのは、高良だった。ここにこと人の良さそうな顔をして、相変わらずこの男は神経を逆撫でするようなことをよく言う。雄大は半眼になりつつも、真面目に返答する。

「いや、俺未成年」

「じゃあ、ジューズ片手にいけばいいじゃない」

「……べつに、いい」

ぼつ、と呟いた雄大の言葉に、高良は笑みを深めた。

「てことは、やーっぱり、今、一人身じゃないんだ？」

「！ なっ」

「へえ、和一筋だった雄大がねえ」

「ちがつ、まだ付き合ってたねえよ！」

真つ赤になつて怒鳴った雄大の声は、宴会場全体に響き渡った。

一瞬、辺りに静けさがおとずれる。

沈黙を破ったのは、なんとも不穏な声であった。

「ゆうーくん？」

「うわ、なんだよ、キモチワルイ声だすなよ、真吾！」

ゆらり、となんだか幽霊がかつた動きですす、と雄大の前まで歩を進めた真吾は、あっという間に雄大の鼻先まで顔をこすりあわせていた。雄大は顔を青くしながらのけぞる。

「失恋同盟を勝手に解散させるなんてどういうことだよ！」

「そんな愉快な同盟に入った覚えねえよ！」

「裏切り者おおお！」

「だから、俺も一人身だつっつうの！」

「口調からして付き合う一歩手前って感じじゃねえか！このヤロウ！
！どんな子だあああ！！」

「うわ、ちょ、やめろ！」

真吾にもみくちやにされながら真つ赤な顔で叫ぶ雄大を、周りには笑いながらみつめている。

そんな状態である宴会場を、一組の男女があとにした。

いつも彼が思うのは、ああいうとき、どんな感情を持つのが正しいのだろうか、ということだった。

たくさんの人間が、笑っている。とても楽しそうに。

高良は、それをながめるたびにどこか線を引かれている気分になる。境界線のこちらとあちら。広がっている世界は、どれだけ違うのだろうか、と。

「……ある意味、これも感情なんだろうけどな」

理解できないことに対する某かの、揺れ。それは怒りなのか、焦りなのか、はたまた哀しみなのか。

それすら判別できない高良の心は、どこか欠陥しているのだろう、と高良自身思う。冷たいひとだ、と謗りを受けた事もある。

それでも、彼は「ああ、そうだな」と客観的に思うのみで、傷付くこともなければ、怒りを覚えることもない。どうすればこの心は動くのか、といつも自分に問うてきたのだ。

「……っひく」

しゃくりあげたかのような声に反応して、高良は耳を頼りにそこからへと首を動かした。

宴会場からすぐの廊下で、肩をまるくしながら誰かが泣いている。月明かりにぼんやりと浮かんだその姿は、なんだかひどく儂い。

高良はゆっくりと背後まで近寄れば、正体がわかりきっていないながらもどこか緊張を覚えた。

「亜紀？」

「！ 高良君。普通、こういうときは話しかけないものだよ」

ひく、と引き攣りながらも言葉を紡ぐ亜紀に、高良は微笑んで「めんね、と首を傾げてみせる。

「俺はそうだった一般的なデリカシーにどうも疎いみたいだね」

「疎いって自覚があるんなら改善してよ」

「でも、かまってるほしくないんだったらこんなわかりやすいところで泣いてちゃだめだと思うなあ」

亜紀の言葉について反射的に返してしまっただが、今の彼女にはあまりにも酷な言い方だったろうか、と高良は言ってしまったから少し後悔した。特別、亜紀が傷付いてもなんとも思わないが、責められるのは面倒だな、とぼんやり考える高良は、確かにひとでなし、と女性に言われてしまうような人間なのかもしれない。

しかし、次の彼女の言動は、まったくの予想外だった。

「……たしかに」

言っただけで神妙にうなずくと、亜紀はその場を去ろうと歩を進める。高良はそんな彼女に驚いたからだろう。彼らしくもなく、ぽかんと口を開いて数秒固まってしまった。

しかし次には小走りで亜紀のもとへと寄れば、彼女の左手をとった。

「待った待った。亜紀」

「ん？」

いまだ涙を大盤振る舞いしながらふりかえる彼女は、はつきりと言ってしまったえばひどい顔であった。しかし、高良は今そんなことをかまっている場合ではない。

「怒らないの？今の俺の物言い、ちょっとひどくなかった？」

「……なんで？私だって、道のと真ん中で泣いてる子にわしたら声かけようかなって気になるよ。だからさっきの私は私が悪い」

あまりの潔さに目を丸くする高良を他所に、亜紀はまだ涙を止める事無くため息を吐く。なんだか、とても器用な表情だ。

「さつきもさ、あんなことと和ちゃんに言いたいわけじゃないのにさ、私最悪。嫉妬ばっかして馬鹿みたい。……和ちゃんが、私が思ってる以上に遥さんを好きなんだろうなってわかったけど、それでもまだ、どうか認めないって思っちゃってるし」

「亜紀」

「いいや。泣いて反省してすっきりしたらまたちよつと考える。じやあね、高良君」

亜紀は、もつと単純に女なのだと、高良は認識していた。

和に吐いた言葉も、特に反省するではなく、かわいそうな自分に酔いしれる、恋に恋する女なのだと。

しかし、そうではなかった。

ある程度の自制心を保っている。けれども衝動に駆り立てられてしまう若さもある。

結局は省みて、自己嫌悪する。しかしあの様子では、浮上するの
もまた、早いのだろう。

亜紀は、高良にとって新人類のようだった。

女の狡さを持っている人間も、男の汚さを持っている人間も、たくさんみてきた。

妙に正義感をふりかざす者も、色々なことを諦めて流れるように生きる者も。和のような狡猾な者も、中にはいた。

しかし、亜紀はそのどれともどこかが違う。

あまりにも危うい存在で、汚いことをするには綺麗すぎるし、綺麗な事だけをするにはあまりにも未熟すぎる。その葛藤が、高良には妙に新鮮にうつってみえた。

「……へえ」

呟く声が知らず弾んでいたことを、彼はまだ知らない。

「え、遥君、風邪なの？」

「風邪……といえはそうかもしれないけど」

目を丸くする彩に、和が首を傾げながらもうなずく。

翌朝のことだった。

和が様子を見ていたかいてもむなしく、遥が熱を出してしまったよ
うだ。

ただ、風邪というよりも疲れからくるものだろう、と和は思っ
ていた。咳や鼻水といった初期症状もなく急に熱を出したからだ。

「とりあえず様子見て、ひどくなったら病院かな」

「そうね」

和の言葉に心配顔でうなずいた彩に、和は大丈夫だよ、肩をたた
く。

今日は一日遥についているという和の言葉に、当然ながら誰も異
議をとねえることはなかった。

病人部屋に寝ている遥のもとへ向かえば、いかにも申し訳ないと
いう空気を醸した遥が床についていた。

「和、ごめんね」

「何を言ってるの。いいかげん謝るのやめなってる」

苦笑する和に、かっこわるいね、と遥は同じような表情をむける。
しかし和は、そんな遥をしばらくみつめれば、やがて嘔出してしま

った。

そんな彼女の様子が不思議だったのか、布団の中で目を丸くする遙に、和はまるでどこぞの悪役のように笑んでみせた。

「だって。かっこわるいところなんてもう腐るほど見てるじゃん」

「ちょ、和ひどい！」

「はいはい、叫ばない怒鳴らない」

「和がそういうこと言うから！」

「だーからー。いまさらじゃんってこと」

言って、頬杖をつきながら、和は呆れたような、それ以上に愛しいものを見るような瞳で、少しだるそうにしている遙をみつめる。

その彼の額をぴん、と弾いた。

遙は、あう、と間抜けな声をあげる。

「私はね、別にかっこわるい遙も好きなんだからなにをかっこつけようとしてんの。つうかアンタ普段ほぼかっこ悪いから心配すんな」

そんな和の言葉に、遙は複雑な表情をみせる。喜べばいいのやら、悲しめばいいのやらよくわからないようだ。しかし最終的にはやはり喜びのが勝るようで、遙は潤んだ瞳でじ、と和をみつめた。

ふ、と瞳を細めた和が、その顔を彼に近づける。

「！和」

「黙って」

ゆっくりと和が遙と唇を寄せれば、遙はむせかえるような和の香りに、もともとたゆたうようにはっきりとしない頭がますますぼんやりしてきた。少しだけ残っていた理性が、風邪ならばうつってしまつと遙に訴えるも、その唇の甘さにすっかり負けてしまふ。滑り

込んできた舌も、拒否することは出来なくて、結局は貪る様に次を求めてしまう。

舌が絡み合う水音が部屋を包み込む。和は応える遥の激しさに、ぞくり、と背筋が粟立つのがわかった。

「……最初は乗り気じゃなかったくせに」

「それこそ。俺の和への欲望なんて、前々からわかってたでしょ」

妖艶に微笑む遥に、和は頬を染めればべし、と遥の頭をはたいた。またも、遥の間抜けな声が響いたが、和はそれにかまうことなく遥の頭に冷却シートを貼った。

「今日は一日中そばにいるから」

「独り占めできるんなら、ずっと熱出しててもいいなあ」

和の言葉にいたずらっぽく呟いた遥に、和はむ、と顔を顰める。

「あんななあ」

「あはは、冗談だよ」

「ならいいけど。弱ってる和泉君をみるのは、良い気分じゃないし」

「なるべく早く、元気になるね」

「別にそんな焦らなくてもいいよ」

「えー、むずかしいなあ」

「普通にしてくれてたらいいの。休んで。お腹がすいたらすいたって言うって」

微笑んでそう言う彼女を、遥は心底愛しいと思う。

毎日、もうこれ以上はないだろうと感じるくらいなのに、少しでも何かが起こるたび、遥は和をますます強い気持ちで好きだと思ってしまう。

この病気は、きつと一生治ることはないのだろう、と遥は確信していた。

「和、好きだよ」

「うん、私も遥が好きだよ」

よどみなくそう応える和を、遥は抱きしめたいと強く思った。

部屋の外でただ、はらはらと涙を流す存在に、今のふたりは気付かない。それだけ、この空間はふたりしか居なかった。

亜紀は、もうこれが決定打なのだ、と心の内で思いながらも、どうしたらこの想いを自身の中からなくしてしまえるのか、ただそれだけがわからずにいた。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その14

それは、完敗だった。決定的にかなわないと感じた瞬間が、ついに亜紀におとずれたのだ。

慈しむように彼をみつめる彼女。みつめかえす彼。入り込めない空間に、ふたりの歴史を垣間見ただけで、ああ無理なのだ、と亜紀は痛感する。

部屋の空気はゆったりと穏やかで、浮かれたようなそれとはどこか違う。それがまた、亜紀の心を深く抉る。それだけ、彼らの共有した時間は長いということなのだから。

簡単な言葉でいえば、彼女はやっと失恋したという自覚が芽生えたわけであるが、それでも本人にとってはそんなもので片付けられはしない。

諦めなければならないと頭では理解できても、彼女の心はそれを拒絶する。そんな想いを持って余したまま、やがて、亜紀は静かに部屋を立ち去った。

「いや、寝てなさいって」

「もう微熱なんだし大丈夫だよ」

「治りかけてるんだからおとなしく寝てなれば」

呆れたような、困ったような顔で起き上がろうとする遙を押し留めるが、和がそうするよりも強い力で遙は布団から出ようとす。和にはその行為の意味がまったくもってわからない。

「少し食器を下げた洗いに行くだけでしょ。片付けもちょっと手伝うってだけで」

「今日はずっとそばに居るって言った！」

「駄々っ子みたいなこと言うなって……」

一時も離れたくない、とのたまう遙に、病人であるし見知らぬ地で心細かるうとはじめの内は優しく諭していた和であったが、同じ会話の繰り返しに段々と疲れが見えてくる。

結局、説得するのを諦めた和は、そのまま立ち上がった部屋を出ることにした。遙は和のうしろを当然のようについて歩きだす。

しばらく廊下を歩いていると、遙が和の腰に腕をまわしてくる。さすがにそれには苛立ったのか、和は抗議の意をこめて隣に並ぶ彼を睨みつけた。

「歩き辛い」

そう声をあげて遙のくつついた腕を引き剥がそうとした和であったが、遙は病人とは思えない力強さで和の身体を包んでいる。そうして捨てられた子犬のようになさけない表情を作れば、じ、と和をみつめた。

遙に直接伝えた事はなかったが、和は遙のこの表情に少し弱い。自身がとてつもなく悪い事をしているような気分になり、なんとも居た堪れなくららしい。

おそらく、遙もそれをどこかわかっているのだろう。そんな風に考えれば、目の前の恋人を忌々しく思ってしまう和がいた。

遙は、これまた情けない声をあげる。

「倒れちゃうかもしれない」

先ほど何度も寝ていると説得したにもかかわらず自主的についてきた身でありながら、そんなことを堂々とのたまう遙に、和は怒ること疲れた様子で大きいため息を吐く。

「……じゃあ寝てなさい」

「やだ」

一応呟いてみた言葉は、やはり予想通りの返答でもってむかえられてしまった。

「……それ、なにやってるの？」

宴会場に着いた瞬間、後片付けをしていた連中がいつせいにふりかえる。

目を丸くした広樹が、何事かと遙を凝視していた。他にも何人が口をぽかん、と開けてふたりをみていた。それもそのはずだ。先ほどまで一応は隣に立っていた遙は、いまやおんぶおぼけのように和の背中にびたりと張り付いていたのだから。

広樹の言葉に呆れた和は、ため息を吐いて力無く声を発する。

「追い払っても離れようとしなから」

後ろから両腕を腰にまわしからだ全体をくっつけて満足そうに微笑む遙と疲れた様子の和をみていれば、彼女を気の毒に思った人間は多かった。

遠巻きに、ふたりの様子を亜紀がみつめる。胸が痛いとは、こういう意味なのか、と亜紀はほんやりと考えていた。

なにかの比喩表現かと思っていたが、まさか実際にこんな痛みが生じると思っていなかった。それほどまでに遙を好きなのかと考えれば、亜紀の内心はとても複雑だ。

「なんて顔してるの」

「！ 智ちゃん……」

ふきんを片手に握り締めたまま、ふたりの様子を見つめていた亜

紀の隣に、いつのまにやら智子が立っていた。なぜかとても優しい瞳で、困ったような笑い顔を亜紀にむけていて、その意味がわからずに亜紀は首を傾げてみせる。

ほん、と智子が亜紀の頭頂部に手の平をのせると、ふ、と小さく息を吐いた。

「亜紀、もうどうしようもないってわかったんでしょ？」

「え」

「今にも泣きそうな顔して、でもうらやましそうな顔して、でも笑ってる。なにかの踏ん切りはついたんだ？」

「……なに、それ。わけわかんない」

「だから、完全に負けたってわかってるけどまだ好きだなあって思ってる顔ってことよ」

直接的な物言いに目を丸くすれば、その次には智子が慈しむように微笑んでくる。まるで、本当の妹を叱る姉のような顔だ。亜紀はもう、涙を止める事ができそうもなかった。

すっぽりと腕の中に抱き込まれ、背中をあやすようにさすられれば、亜紀はなんとか声をおさえる。

そんな様子の彼女に、智子はしょうがないわね、と言って微笑む。

「もうふたりは行っちゃったから、声出して大丈夫だけど？」

智子の言葉に、亜紀は子どものように大声で泣き始めた。

周りの人間は遠巻きに見つつも、どこか智子と同じような表情で亜紀をみつめている。

親戚の中でも、亜紀はみんなの妹のように扱われてる部分が大きかった。彼女自身が一人っ子だということもあり、余計に兄や姉に憧れていた部分があったのかもしれない。亜紀は、泣きながら智子をおねえちゃん、と呼んだ。智子はそれにあら、と声をあげる。

「ずいぶん久しぶりに聞いたわね、その言葉」

「ううー！悔しい！和ちゃんほど、遥さんのこと大切にできる自信なんてないよお！木っ端微塵だよお！」

「ま、好きなだけ泣きなさい。今日は愚痴にも付き合っわよ」

少し落ち着いてきた亜紀を、気付けば何人もの人間が囲んでいる。たくさん人間が彼女をなぐさめ、はげます。難しい言葉ではなく単純明快なそれらが、しかし今の亜紀にはひどく優しく思えた。

そんな中、亜紀は気付いた。輪の中に高良の姿がないことを。

特別、彼になぐさめてほしかったわけではないが、さんざん情けない姿をさらして、ここ最近いちばんのこの醜態を彼が見ていない事実が、亜紀にはどこか不思議だった。

「罪悪感、抱いてたりする？」

「……意地悪なこと訊くね、和は」

いたずらっぽく微笑んだ彼女に、彼は困ったように微笑をかえす。縁側に腰掛け、ぽっかりと浮かぶ月をふたりでみつめていれば、和が遥に、ふいにそんな質問をした。

遥はしばらく沈黙していたが、やがて月から隣の和へと顔を向けた。

「なにも感じてないって言ったら嘘になるけど……そうだなあ、ああ、泣かせちゃった。とは思っているけど」

「おや。女性に優しい和泉君からそんな発言が飛ぶとは」

目を丸くする和に、遥は苦笑する。

「前にも言ったかもしれないけど、俺は、和が泣く事以外、あまり

怖くないんだ。恐ろしく客観的にしか、その事象を見れない気がして。……なんて言ったら、嫌いになっちゃう?」

今度は先ほどの和のような表情で、遙が和をのぞきこむ。

その瞬間、和はにっこりと微笑めば、開いた掌を遙の顔面に思い切り叩き付けた。

「そういう質問するような男は嫌いになっちゃうかもね、いつか」「えっ!?!」

「いつか、ね。俺のこと好き?嫌い?なんてしよっちゅう訊かないでよ?」

ため息混じりにそう紡いだ彼女に、遙はにっこりと微笑む。

言葉の意味を正確に読み取って、やがて遙は和の頬に手をすべられば、ゆっくりと唇を寄せた。

『いまは、好きだよ』

そう心の中に響いた彼女の声が、現実に残せられたようで、遙はとても幸せな気持ちになる。

次の日には、全快した遙にすっかり襲われそうになった和だが、なんとか貞操は守り抜いた彼女であった。

「和ちゃん、あの、ちょっといいかな」

「! 亜紀ちゃん」

朝食が終わり、皆が自由にあちらこちらをうろつろつとしている中、宴会場にて本を読んでいた和に亜紀が声をかけてきた。

遙は現在、台所のほうで片付けをしている。迷惑をかけてしまったので、和の分も働いて来ると宣言した遙の言葉に甘えて、和はゆ

つくりと読書を楽しんでいた。

ゆつくりと告げられた言葉に、和は同じようにゆつくりとした動作で本を閉じれば、無言で立ち上がった。

宴会場から出て行くふたりの姿を、何人かが好奇心と心配の同居した顔を向けていた。和はそれら一切の視線になにかを応えることもなく、亜紀といっしょに廊下へと出た。

しばらく亜紀の後ろを黙ってついてきた和だったが、向かう目的地の見当がつけば、どういいうつもりなのだろうと混乱しはじめた。

やがて足を止めた部屋は、和が予想していた通りの場所であったが、やはりその真意がわからない。和は声をかけようか迷ったが亜紀の背中を見つめ、やがて口をつぐんだ。

「……ふたりきりで話していたら、私は、和ちゃんを傷つけちゃうかもしれない」

「！ 亜紀ちゃん……」

淡々とした声とは裏腹に、亜紀の表情はどこか苦しそうだ。振り返って和を見つめる瞳には、どこか強い決意を宿しているのがわかる。

「かといって、誰かに居てもらうのも嫌だから。ちいちゃんとかあちゃんに見守ってほしいの」

言って、拳を握り締める亜紀に、和はそっと寄り添えば、その手の上に自身のそれを重ねて、微笑んだ。

「？ 和ちゃん」

亜紀がどうしたのか、と不思議そうに首を傾げれば、和は優しさをみせる笑顔から、少し表情をくずした。

「なんでも言つてよ。遠慮して呑み込んだら意味ないじゃん。私、
そうそう簡単に傷付くほど純粹じゃないから大丈夫」

和の不敵な笑みとその言葉に、亜紀はもはや泣きそうな顔になっ
ていた。ありがとう、と呟かれた小さな声に、和はぽん、と一回背
中を叩いた。

ふたりが、静かに名前を名乗り、中へと入る。

座っていた知恵と多恵は、ふたりを確認するにつこりと微笑ん
だ。

「いらっしやい。よくきたわねえ」

「ええ、本当に。和ちゃん、亜紀ちゃん、お座りなさいな」

「あら、多恵ちゃん。その前にお茶を淹れてもらわなくちゃ」

「あらあら、そうだったわあ」

歳を取ると忘れごとが多くていやあね、と言って多恵は笑う。

部屋は、いつもと少し様子が違っていた。知恵と多恵が座る椅子
の前には常にはない小さな円卓が置かれており、その向かい側には
誰も座っていない椅子がふたつ並んで置いてあった。

部屋の隅にある棚には、魔法瓶のポットが置かれている。知恵が
そちらを指差した。どうやらそこからお茶を淹れるということらし
い。

和と亜紀は戸惑いつつもそちらへと足を運ぶ。茶葉などがないこ
とから、恐らく出来上がったものが中に入っているのだろう。少し
首を傾げつつ置いてあった四つのカップに中身を注ぎいれると、甘
い香りが部屋中に広がった。

「……………ココアだ」

「……………だね」

亜紀が並べたカップに和がココアを注いだ瞬間、亜紀が目を丸くして声をあげた。和も同じような表情でそれに相槌を打つ。

ふたりして顔を合わせれば、なぜか何かがこみあげてくすくすと笑ってしまふ。

「ああ、亜紀ちゃん、お砂糖も持ってきてちょうだいな」

「え、これ甘くないの？」

「そうね、うんと甘くしたかったら、たくさん入れてしまっただいよ」

「そうね、苦いものが飲みたければ、砂糖を入れなくていいのよ」

微笑む知恵と多恵の言葉に、亜紀はうなずいて棚から角砂糖の入っている容器を持つてくる。卓の上には、黄色や緑色など変り種のかりんとうがお茶請けに置かれていた。もちろん、馴染み深い茶色のものもある。和と亜紀はものめずらしそうに器の中身をみつめていた。

「さ、おあがりなさいな」

「冷めてしまわないうちに」

知恵と多恵の言葉にうなずいて、和と亜紀はココアに口をつける。

「……苦い」

「そうだね、でもこのままでも美味しい」

「私、砂糖いれるー！」

前者が亜紀で、後者が和だ。亜紀は角砂糖を一気にふたつ足すと、スプーンでかきまぜる。ぐるぐるとまわるカップの中身をみつめながら、やがてひとつたため息を吐いた。

「私、ほんと子どもだよね」

「？ 亜紀ちゃん」

「今回も、周りが全然見えてなかったし、自分の事しか考えてなかった」

「そうかなあ？ただ一生懸命だっただけでしょ」

けるり、とした声で言う和に、亜紀は苦笑する。自分好みに出来上がったココアを飲み込めば、口いっぱい広がる甘さが、彼女の未熟さをいかにも物語っているようで、亜紀はますます落ち込んだ。

「私ね、わかっていなかった。和ちゃんと遥さんのこと、本当に上辺しか見れてなかったと思う。和ちゃんがあんまり遥さんのこと好きじゃないと思ってたんだ。自分のほうが、もっと遥さんを大切に出来るって思い込んでたの」

「いや、今でも、よりどっちののがどっちを好きかとか大切かとかわかんないけどね」

和の言葉に、亜紀は首を振る。

「そういう、目に見えない絆みたいなものが、確固としてふたりにあるんだって、私わかってなかった。そんなことにこだわる事すらふたりには必要ないものだったんだよ。本当に、すごく恥ずかしい」

「亜紀ちゃん」

「それでも、今も好きだって思っちゃう自分がすごくやだ。和ちゃんがいなくなったら私の方を向いてくれるんじゃないかとか、そんなことばかり考えちゃう自分がやだ。あきらめなきゃいけないのに、目で追っちゃうのとか、もうこんな自分いやなのに！」

こらえきれずにぼろぼろと涙を流す亜紀の背中を和がさする。

しかし、失恋した男の恋人になぐさめられるのなどこの上ない屈辱ではなかるうか、と思えば、和はあわててその手をひっこめた。

「ごめん。私がこんなことしたらだめだよ。でも……なんだろう、私は、亜紀ちゃんのこと責める気とかなれない。だってさ、そんなの止めようと思って止められるものじゃないよ」

「でも……」

「亜紀ちゃん」

言い募る亜紀に、知恵がゆっくりとした声で、名前を呼ぶ。

亜紀が、その声にうつむいていた顔をあげた。

「たくさん水分がでちゃったわねえ。喉が渴いたでしょう？ココアをお飲みなさいな」

知恵の言葉に、亜紀は素直にしたがってココアを飲み込む。口いっぱいに広がる甘さに、波立っていた心が少しずつ落ち着きを取り戻した。

そんな亜紀を見た知恵と多恵が、ゆったりと微笑む。

「亜紀ちゃんは甘いものが好き。和ちゃんは苦いものが好き」

「でも、それはあくまでも好きなものよ。亜紀ちゃんが子どもだという証明にはならないわ」

「ちいちゃん、たあちゃん……」

ぐす、と鼻声になりながらふたりをみつめる亜紀と、静かにふたりの言葉に耳を傾ける和、それぞれの顔をみつめながら、知恵と多恵は言葉を紡ぐ。

「遙君は和ちゃんが好きだわ。和ちゃんは遙君が好きだわ。だからいつしよにいます。とっても簡単なこと。亜紀ちゃんは遙君が好き。だからみつめていたくなる。とっても簡単なこと」

「気持ちを押し込まなくても、いいのよ。苦いものを我慢して飲む必要なんてないでしょう？とってもとっても甘くしたって、それを咎めるひとなんていないのよ。だって、それはあなたが飲むココアなのだから」

「気持ちを素直に出しておあげなさい。そうしないと、亜紀ちゃんの恋心がとつてもかわいそうだわ」

「そして待つ。新しいものの訪れを待つ。そうすれば、今よりもっと素敵な亜紀ちゃんになれるわ。ねえ、多恵ちゃん？」

「ええそうねえ、知恵ちゃん」

知恵と多恵の言葉に、いまだ戸惑う亜紀に、和はうなずいた。

「亜紀ちゃんは、もう私に謝ってくれた。それが答えだってわかった。だからもう無理やり自分を悪者にしようとしなくて。ほんとにありがとう」

「和ちゃ……」

大粒の涙をこぼす亜紀をしばらく見つめていたが、やがて知恵と多恵が心得たようにうなずけば、和は静かに席を立った。あとは、ふたりにまかせればいい。和がいては思う存分泣くことも愚痴をこぼすこともできないだろう。退出しようとするまを開いた、そのときだった。

廊下に一步出た和の視界に、予想外の人物が飛び込んできた。

「！？ 高良君」

驚愕に目を見開く和に、どこか含みのあるような微笑をたたえて、

高良は出て行く和と入れ違いに部屋へと吸い込まれていった。

「……まさかの展開」

ぼつりと呟いたその声は、いまだ驚きを隠しきれない和の心をじゆうぶんに染み込ませたような色だった。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その15

「だからあ！なんでついてくるのよう！」
「ついてきたいから」

顔を真っ赤に染めながら叫ぶ亜紀に、楽しそうに高良が返答する。なんともからかいを含んだその言葉に、亜紀は眉根を寄せてはいはい、とため息を吐いた。

「高良君、私からかったってなんにも出てこないんだよ？なにがそんなに楽しいの……」

「んー？いや、次にはどんな事を言うのかなあ、と思って。予想通りかと思えばそうじゃないときもあるからなあ」

「ああそう」

がつくりとうな垂れた亜紀は、疲れた様子で廊下を歩く。どうやら目的地へ向かうのをあきらめて女子部屋に引っ込むらしい。高良も、そこに行けば中まではついてこないからだ。

そんなふたりが通り過ぎていくのを見送って、宴会場で和と遥は顔を見合わせた。

「……なんとという既視感。本当に体験してるけど」

頬杖をつき言う和に、遥は数秒無言になれば、ああ、と小さく呟いた。

「デジャヴユって体験したことないのにあたかもそう感じる事だったよね？」

「和泉君、どう？かつての自分を見る気持ち」

「……客観的に見るとなんともいえないなあ」

にやにやと意地悪く笑う和に、どこか居た堪れなくなった遙はふい、と視線を横に逸らす。

その直後、司と広樹が、ずりずりと四つんばいの格好で背後に近付いてきた。どうやらふたりの会話を聞いていたらしい。

「なにになにに、和と遙君って最初あんな感じだったの？」

ちょうど遙を挟んで横並びになった、和は遙の向かい側に座っている、男三人に、和はそれぞれ視線を超越せば半眼になる。

「そんな話訊いてどうすんの」

「えーふたりの馴れ初めとか超訊きたいじゃん！」

和が司の言葉に呆れたため息を吐くと、しかし特別羞恥を誘うような事でもなかったため、ため息を吐き出したあとも相変わらず呆れてはいたが態度はそのままにやがて口を開いた。

「んー、あれの、三割り増しって感じじゃないかな」

和の言葉に、司と広樹が悲鳴をあげる前に、遙が首を傾げてけり、と言い放つ。

「三割で済む？」

「あなたな、自分で言うなっつーの」

今度こそ悲鳴を上げたふたりと、気付けば増えていたギャラリ―に若干臆しながらも、和は淡々と言葉を紡いでいく。

「亜紀ちゃんと高良君と決定的に違つところは、私と和泉君がろくに話をしたことなかつたつていう事実かな」

「懐かしいね。去年の春に、図書室の前で初めてまともに会話したんだよね」

「あれだつて無理やりにもほどがあつたじゃん」

まったく、と呆れる和に、身を乗り出してきたのは智子だ。

「遥君からの猛アタックだったのよね？ 図書室の前で、まず声をかけたわけ？」

「はいはい、お姉ちゃんも詳しく訊きたい！」

拳手までする彩に、お姉ちゃん……と複雑な表情を見せて呟く和を、遥は笑つた。最初は向かい合つて座っていたが、やがて周りが和と遥を隣に座らせたので、今は和の横に遥が並んでいる状態だ。そこを十人と少し程の若い衆が囲っている。なんとも異様な光景である。

「私が図書室に入ろうとしたところを、急に腕をつかまれた……んだつたよね」

「そこ、記憶あいまいにしないでくれるかな。ふたりが邂逅を果たした記念すべき日じゃないか」

「その言い回しが気持ち悪い」

「恋人に向かつて放つ言葉じゃない！」

遥が嘆きながら和に抱きつこうとするので、和は苛立ちを覚えつつも彼を引き剥がす。そんな様子もすっかり馴染み深くなつた面々は、仲良しだなあ、などと呟きつつ微笑ましいものを見るかのような瞳でふたりを見守る。

空気感に堪えられなくなつてきた和は、思わず席を立ちそうにな

ったが、その空気をいち早く察知した彩が、それで？と先をうながしてくる。

なんだかんだで姉に弱い和は、片眉をあげて彩を見ながらも、続きを口にした。

「それから屋上に連れていかれてなんか変なことたくさん言われた」

「和、ずいぶんとはしよったね」

「間違つてない」

「ないけど」

苦笑する遥が、期待する眼差しに応えるように補足で説明をはじめた。

「まあ、告白をしたんです。俺とずっといっしょにいてほしくて。

和のそばで、和と同じものを見てみたくて。でも、ふられるなんて可愛いものじゃないくらい粉微塵にされましたけど」

「ええー！何を言われたの？」

司の言葉に、和はあの日を反芻していた。

あの日彼に言われた言葉は、実はわりと正確に和は覚えていた。

それだけ、自身の中に与えた衝撃は大きかったということだろう。

好きだ、とも、付き合つてほしい、とも、言われなかった。

先ほどの遥が口にした言葉とほぼ同じことだ。

ずっといっしょにいてほしい。なるべく同じ時を歩みたい。

『君のすべてを、俺にくれませんか』

あの日のあの言葉は、果たして今叶っているのだろうか。やはり、和はすべてを与えることは出来ないと思う。それでも、時間を共有することは出来たのだから。自分という形があり、相手という形が

ある。だからこそ、思いやりも生まれるし、優しくありたいと願うのだ。

まだまだ短い彼との付き合いだが、和は本当に多くのことを学んだとしみじみ思う。

「和、そんな事言ったの!？」

「さすがね、和!それを突破できなきや和の相手を許すわけにはいかないもの!」

「あんたもね、シスコンもほどほどにしなさいよ」

呆れた様子の智子と誇らしげな彩を見て、きつとどういつた言葉で告白まがい、あくまでも和にとってであるが、を、断ったのか訊き出したのだろう。和は、横に座る遥をみつめる。遥は、優しい顔で相変わらずこちらをみつめていた。

和はその瞳に、吸い込まれそうになる。彼の容姿そのものに見惚れたことは、おそらくほとんどない。しかし和は、愛しくてたまらないという目でみつめられるたび、泣きそうになる。なぜか、涙を流して遥にありがとう、と伝えたくなるのだ。

しばし遥をみつめ返して、やがて和はにつこりと微笑んだ。

「……ストーカー化したのはそこからだっ たね」

「ちよ」

「間違っ てない」

「そこは間違っ てると言いたいよ!？」

待ったをかける遥に、和はけらけらと笑い出した。

「亜紀」

「……泣いてないよ」

「ふうん、じゃあそれなんだろうね?」

「汗」

亜紀の言葉に、高良は声をあげて笑い出した。宴会場での会話を、やんわりと高良にやめておけと止められたものの、亜紀は聞かずにはいられなかった。

みずからにとどめを刺さねば、ラクにはなれない気がしたのだ。亜紀は今、瞳から大粒の汗をぼとぼと流していた。

「やー、なんかすつきりした！かなうわけねえやこんちくしょう！
って気分になつたね！ね！？」

「いや、同意を求められても」

真顔でただ水分を放出しながら高良の胸倉をつかむ亜紀は、妙な気配を漂わせてはいるがしかし高良にはそれがひどく嬉しかった。

なにせ、ここまで面白い生き物に出会ったためしなどかつてなかったのだから。

「私もふたりみたいにお互いを大切にできる恋愛しよおつと」

「ふうん」

「……なにその返答。どうせそうそう出来ないって言いたいんでしょ？わかってるよ！でもまだ夢見てたいの！和ちゃんと遥さんみたいにはなれなくなつて、少しでもひとから良いなって言われる恋愛したいんだもん！」

相変わらず彼女の瞳からは彼女の言うところの汗がだばだばと流れているのだが、声や表情が平時と変わらないので高良は興味津々だ。彼女は感情が昂ぶり過ぎるとしばしばこういった現象を引き起こすようだった。

しかし、馬鹿にしたわけでも鼻で笑ったつもりでもない高良は、ゆっくりとしかし大きく首を振ればそんなことはない、と微笑んだ。

「あのふたりになるのは無理でも、それ以上に良い恋愛ができないかなんてまだわからないだろう。亜紀はまだ若いんだから」

高良の言葉に、驚きすぎたのだろう。亜紀の瞳から流れ落ちていたものがぴたり、と止まってしまった。

目を見開いて固まるその様子にもそそられて、高良はまじまじと彼女をみつめる。彼の胸中では面白いという言葉が繰り返し放たれていることであろう。

「びつくりしすぎて涙が止まっちゃったよ？」

首を傾げて言う亜紀に、高良は再度噴出した。

「それ、汗じゃなかったの？」

「え、いやだ信じてたの？高良君、汗は目から出ないんだよ？」

大丈夫？と同情めいた声色をのせて、出来の悪い生徒でも見るかのような表情で亜紀が高良をうかがえば、高良はもうおかしくてたまらなかった。和ならば即座に、というかたいがいの人間がこの皮肉に気付きそうなものであるが、どうやら亜紀は高良が本気で彼女が主張した「汗」という言葉を信じたのだと思ってしまうらしい。

高良はいよいよもって腹筋を思い切り使って笑い声をあげる。まさしく抱腹絶倒というところだ。

「亜紀ってさあ、天然なの？すっかり者なの？よくわかんないなあ……くくっ……」

「さあ？その質問で本人にしてもあまり意味ないんじゃない？だって私のそういう性格って、私は把握出来ない気がする……でも、天

然ってそもそもなんだろう？」

首をかしげながらも大丈夫？と高良の背中をさする亜紀はなんともアンバランスであり、ますます高良の興味をそそった。もはや、これ以上はないだろう、確信した高良は、居ずまいを正すと真つ直ぐに亜紀をみつめた。

急に变化した高良の雰囲気戸惑いを覚えながらさすっていた左手をおろすと、亜紀は高良をみつめかえす。

高良の瞳が、ふわり、と空気を動かすように笑みの形を作った。

「失恋には新しい恋って言うよね？」

「ああ、そうだねえ。私の友だちもね、そういう子いたよ！失恋の愚痴を聞いてもらった男友だちとね、なんか気が付いたらくっついちゃっててね、でも」

「亜紀」

高良は呆れのため息を吐いて彼女の言葉をさえぎった。ここまで対象外扱いされるのはいささか気分が悪いが、仕方がない。高良は今のまままで、亜紀にとって親戚のお兄さんという立ち位置でしかなかったのだ。しかし、それも今、変わるうとしてしている。

彼の意思によって。

「俺にしておきなさい」

「……なにが？」

首をかしげて質問する亜紀に、高良はふう、とまた空気を吐き出すと、そつと自身の顔を亜紀のそれに近づけた。高良の口元が、ぴたり、と亜紀の首筋で止まる。

亜紀はまったくの無警戒で、これだけ至近に高良が寄ってきてても何も驚かなければ、顔を赤くして飛びのくといった行為もしない。

高良はその反応にいやに挑戦的な心を持ってば、そつと亜紀の首筋に唇を寄せた。

口付けをするのはほんのあいさつ、といった具合に、高良はまず小さなリップ音を響かせると、まるで極上の食材をみつけたかのように、ペロリ、と亜紀の首を下から上へと舐め上げた。

さすがにそれには驚いたのだろう。ひい！？という短い悲鳴が高良の耳に届いたと思うと、亜紀はぎざぎざ、と一気に高良から遠のいた。

高良は、その反応にまずまずの手応えを感じれば、企み顔でゆつくりと笑む。

そつだ、それでいい。まずは男として警戒されるところからはじめなければいけないのだから。

なかなかどうして骨が折れそうな道のであるが、高良はどうしてか、浮き立つ自身の心を感じずにはいられなかった。

「俺と恋愛しよう」

「はえ！？」

「亜紀、君は俺の感情を動かした唯一の女の子だ。悪いけど、あきらめて」

「……た、高良君？」

おそろおそろ彼の様子をつかがう亜紀に、高良は笑いかける。

ゆつたりと、これ以上ない笑みは、しかし悪魔と思えるほどにどす黒いなにかが渦巻いていた。

「好きになっちゃった、亜紀のこと」

「はいっ！！？」

「それで、なにがなんでも亜紀のことほしいから、俺のものになつてくれる？」

「いやいやいやいや、高良君、ちょっと意味が」

「亜紀」

半笑いで右手をぶんぶん振る亜紀に、高良は鋭い双眸を向ける。ちよつと、肉食獣が獲物を見定めた表情そのものだ。

「逃げてもいいよ。どこまで逃げて、俺は絶対に逃がしてあげないから」

真つ青になって叫び声を上げた亜紀は、卒倒しないようにするの
でせいっぱいで、声を聞きつけてかけた周りの人間から責め
られる高良をかばうことも出来なかったし、遙に誤解されたくない
と思う余裕もなかった。

失恋したばかりで癒しを求める彼女の心は、一足飛びでその気
のない男から追いかけられる恐怖を味わうことになり、亜紀はもう本
当になにをどうしていいのやらわからなかった。

「和ちゃん！遙さんからどうやって逃げたのか教えてええ！」

泣きべそをかきながら和にすぎる亜紀は、すっかり昔のように妹
分に戻ってなんとも可愛らしい。出来る事ならば、彼女の心労を取
り払ってあげたい、と和として思うのだが。

「亜紀ちゃん、冷静になって」

「ふえ？」

べそべそと泣く涙目の亜紀をみつめていると、和にはどこか塩澤
を思い起こさせる。しかし実際問題、亜紀のが年下であるが彼女の
ほうが基本的な能力は備わっているといわざるをえない。

なにも解決策がないと現実逃避してあさつてのことを考えてしま
うのは和の悪い癖だ。少し遠くを見つめていたが、目から涙をこぼ

しながら首をかしげる彼女を見て、慌てて意識を亜紀に戻した。

あれから数日が経ち、高良から亜紀への求愛行動は増す一方だ。悪いことに和よりも純粋な分、あらゆる罠にもはまりやすい。

なによりも、亜紀は混乱のさなかで気付いていない。和が、解決策を何一つ打ち出せないという事実には。

「あのね、亜紀ちゃん。絶望に突き落とすようでも申し訳ないんだけど。私、結果をみてご存知のとおり、逃げれてないんだよ」

困ったように眉を下げる和に、亜紀は心底わからないといった風情で和をみつめる。和は、小さくうなり声をあげて言い辛そうに頬をかいた。

「いやだからね？私が和泉君から逃げ切れていたら、今ここに和泉君連れてきてないでしょ？もつと言うと、恋人同士になってないでしょう」

「……あ」

いつも冷静な和を見続けてきた亜紀は、彼女がなにかに敗北するということを想像すらできなかった。事実、和は勝負にほぼ勝ち続けていると言ってもいいのかもしれない。

もしかしたら。笹森和が人生において大きな初黒星をあげたのは、これから先も和泉遥にのみなのかもしれない。

和でさえそうなってしまった事実には、亜紀はざ、と青ざめる。

「じゃあ、私……」

「うーん。別に、さ。私も、いやいや和泉君と付き合いだしたわけじゃないんだよ？本当に好きだと思ったから、そう伝えただし」

「でも、和ちゃん。私、地元が高良君と近いわけじゃないよ？だから接点は全然なくなるじゃない？」

亜紀の言葉に、そういえばそうだと和はうなずいた。しかしそれも、ものすごく遠いという距離でもない。電車に揺られて三時間もすれば行き来できる距離だろう。それでも、決して近い距離ではないことに変わりはないが。

「でも、それがどうかしたの？」

「高良君が、笑って言ったの。亜紀は危なっかしいから、目を離すとどうなるかわかんないし、近くで監視する必要があるねって」

「え？それって……いやいやでも、高良君だって大学があるんだし、あっちを離れたりしないでしょう？就職も多分そこですると思うし……」

「うん……それはそうだと思うんだけど。あの、地元がいつしよの子が何人かいるでしょ？」

「ああ、七美ちゃんとかはそうなんだっけ？」

「なんか、最近よくいつしよに話してるのみかけるんだよ……」

それは、いわゆる監視役で間違いはないだろう。七美あたりを任命するあたり、高良はよくわかつている。彼女はこういったネタが大好物なのだ。

弱弱しい亜紀の声に、和は額を叩いた。ついていけないだけ、もしくは自身のそば近くに無理やり置こうとしないだけ、遙よりはまだましなのだろうか。彼が高良の立場であれば、どちらもやりかねない。

「それにね……」

「ま、まだあるの？」

涙目になってまだ話を続ける亜紀に、和は目を見開いて驚く。

「大学、志望してるところが高良君の地元なの。前々からそこに行きたいつて親には話してて、一人暮らしはだめだつて反対されてたんだけど……」

「高良君といっしょに住むならいって条件出された？」

「和ちゃん、どうしよううつうつ」

「でも、亜紀ちゃん高校一年生なのにもう行きたい大学決めてるってことは、そこに行きたいんでしょ？」

「うん……そうなんだけど」

「だったらまあ、行くしかない……というか」

「猛獣の檻にみずから飛び込めつて言ってるのと同じだよー！」

「だったらなんとかあと二年半で説得するしかないじゃん」

「出来る気がしないから困ってるんだよおおおう！」

泣きつく亜紀にどうしたものか、と和はため息を吐く。

和には、高良の渴きが部分的でもわかる気がしていた。和は、孤独を愛してはいたが、人と寄り添うことが嫌いなわけではない。その狭間で生きる傲慢さに、心が痛まなかったことが一度もなかったわけではない。しかし、和以上に高良は辛かったろう。何にも満足できずに、何にも心動かされない日々の、なんとむなしさか。

渴望したものを目の前にぶらさげられて、逃がす彼ではない。腹黒さでも似通ったところがある高良から、果たして逃げ切ることなどできようか。

願わくば、目の前で泣く亜紀が、高良を好きになつてくれればいい、と和は思う。

言葉にするのは、あまりにもはばかれるので、和は亜紀の頭を撫でてゆつくりと顔をあげさせた。

「亜紀ちゃん。どんなにいっしょにいても、だめならだめつて言え
ばいいの」

「！ 和ちゃん」

「でもね。もしも、好きだと思っちゃったら」

「なんないよ！高良君だよ！？」

「いや、だから。もしもの話だよ。もしもそうになったら、素直になつて」

「……………」

「好きになっちゃいけない相手じゃないんだよ。流されているんでもなく、いつか好きだと思ったら、その気持ちは大事にしてあげて」

和と向かい合って座っていた亜紀は、やがてむう、と口を尖らせると、甘えるように「ごろん」と和の膝の上に寝転がった。

自然と膝枕をする格好になったので、和は見上げる亜紀にどうしたの、と微笑む。亜紀は、いまだ拗ねたような顔をしている。

「いつか通った道？」

亜紀の言葉に、和は目を丸くする。

やがて、苦笑した。

「そうだね」

うなずいた和に、亜紀はそっか、と言って起き上がる。

「……………！高良君が来るっ」

「え！？」

「和ちゃんごめん、私トイレかお風呂行って来る！」

慌てた様子で宴会場を出て行った亜紀を和は呆然とみつめていたが、やがて本当に宴会場のぞきに来た高良をみて、和は目を見開いた。動物的本能というやつであろうか。

「……亜紀は？」

「さあ、ここにはいないけど」

「和、かつてのお仲間だからってかばうの？」

「かばう？どうして？」

言葉を切って、和は笑った。

「私が何をどうしたって、あなたたちの未来にはなんの影響も起こらない」

和の言葉に目を丸くした高良は、やがて彼女と同じように笑った。

「和のそついうとこ、俺好きだよ」

言って走り去った高良に、和は笑い声をあげた。

「明日もう帰るんだね」

「どうだった？田舎生活」

「すごく楽しかった。和と四六時中いつしょにいられたから」

「そこ？」

縁側に並んでいつかのように夜空を見上げるふたりに、ふわり、と涼を運ぶ風が流れる。

頬を撫でたその心地よさに一瞬瞳を閉じれば、和の唇に柔らかい何かが触れた。

この男は、と思いなながらも、和はその唇を拒否しようとはしない。ゆったりと流れる時間に身を任せながら、隣にいる遥の存在をありありと肌で感じる。

唇は、あまり深くまで昇りきることなく、離れた。微熱をはらん

だ瞳に、遙はすぐにまた唇を寄せたくなつたが、欲望をおさえても伝えたい言葉があると感じれば、にっこりと微笑んだ。

「……ねえ、和。色んなことあつたね」

「そうだねえ」

「また、いつもの日々だね」

「うん。明日からまたよろしくお願いします」

「なんでお辞儀するの」

くす、と笑んだ遙に、いや、なんとなく、と和が首をかしげる。遙の手の平が和の頬を撫でれば、和はびくり、と身体を揺らす。

「いつしよにいたいな。当たり前じゃないんだけど、当たり前みたいに」

「……そうだね。うん、そんな感じでいよう」

「和、好きだよ」

「うん、私も好きだよ」

くすくす笑い合つて、ふたりはまたお互いに唇を寄せた。

その感情を確かめ合うために。

これからも、ずっといつしよにいよう。

そんな陳腐な言葉を口に出してしまえば、きっとかなわないと思つたから。少しひねくれた彼女のために、彼もそれを口にしない。

それでも、願わくば。君とずっといつしよにいられるように。

安いと思われた言葉が尊く感じれた瞬間、またひとつ、彼女と彼は大人になれた気がしたのだった。

【番外編】旅には魔物が棲んでいる？その15（後書き）

これにて番外編終了です。お付き合いくださりありがとうございました！

【番外編】来し方行く末（前書き）

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。
新年一発目の更新が開店休業の番外編というのもなんだか不思議な
感じでございます。連載の更新、今年はもっとがんばります！

【番外編】来し方行く末

「和泉君、もう大丈夫？」

「んー、うん、大丈夫そう」

「んじゃ、あげてー」

和の言葉に遥が頷くと、流し台に置いたざるに勢い良く鍋の中身を落とした。茹でられたそばが入ったそれを持ち上げ、遥が何度か上下にふる。用意された器に均等に分けようと奮闘する遥がおかしく、和は小さく噴出した。

隣で年越しそばを準備する遥を確認しつつ、和はそのそばにのせる天ぷらを調理している。ぱちぱちとはぜる油をみつめながら、慎重にかつ大胆に鍋へと具材を落としていく。根菜類は火が通るのも案外かかると知っているので、和はじっくりとそれを見極めようと目を凝らした。

「こつちのせてっちゃっていい？」

「うん、おねがい。今やってるのが揚がったらおわりー」

「かき揚げ？」

「そう。これはあれだよ、持ち上げる時ゆっくりやらないとね……」

ばらけないように、となぜか声を低くする和につられて、遥も多少囁くような口調で緊張するね、と返事をする。冷静になればどことなく間の抜けた雰囲気といえなくもないが、行っている当人達は真剣そのものだ。

現在、ふたりは遥の一人暮らしをしているマンションにて、新年を迎える準備をしていた。毎年、家族と過ごすのが当たり前だった年の瀬を、遥とふたりきりで過ごすというのはいまだに不思議だと和は思う。

そもそも、なぜこんな事態になったのか。

きつかけは、和の両親である高明たかあきと依子よりこの言葉であった。

街がクリスマススムード一色になった12月はじめ。仕事の都合上、なかなか年末年始をいっしょに迎えられない高明が、今年はどうやら休みが取れるという。するとそれにはしゃいだ依子が、久しぶりに夫婦水入らずで旅行にいきたい、と言った。高明がそれに了承の返事をすれば、ふたりはすぐさま計画を立てることにした。

しかし、12月の頭とはいえ、年末年始はどこも込んでいて、なかなか気に入る場所がとれない。そうこうしているうちに日は流れ、どうしたものか、と困っているときに、遥の両親である昌あきひと香苗かなえが、別荘にきませんか、と和の両親を誘ってくれたのだ。

遥の父である昌は、有名な小説家で、地方にひとつ別荘を所有している。物語がうまく構築できそうもないときなどは、気晴らしでよくそちらに赴くらしいが、年末もそこで過ごすつもりなのだと話していた香苗に和が自身の両親の話をするれば、香苗が是非に、とふたりを誘ってくれたのだ。

部屋も余っているし、これから長い付き合いになるだろう、和はそれを承知したわけではないが否定すると遥がうるさいとわかつていたので黙っていた、と、両家の両親は4人で旅行を決めてしまったのだ。

そんな経緯があり、今、和と遥はふたりきりの年末を過ごしている。

すべての天ぷらが無事に出来上がり、和と遥はそれぞれ自分のぶんの丼を持ってすぐ傍の続き部屋へとそれを運ぶ。テレビでは年末には定番の歌番組が流れており、こたつ布団をこそごとと上げつつ、和と遥は画面をみつめた。

元々、遥の住むマンションにはこたつというものがなかったのだが、和が日本の冬にこたつがないのはありえない、と勝手に彼の部屋に持ち込んだのだ。一式をわざわざ用意したのだが、突然の宅配に遥は心底驚き、またその費用をすべて和がもつたため、そこでか

なりの悶着があった。基本的に、遙は和に心身以外のものを与えられるのを嫌うのだ。もちろん、節目ふしめの贈り物は素直に嬉しいと感じるのだが、突発的なものであれば話は別になる。しかしこれには矛盾があつて、遙は、自身が和に突発的な贈り物をするのはなら厭うことはなかった。和は和でやはり遙からのそういつた好意には抵抗があるらしく、ある意味似たもの同士といえる。争いごとが基本的に好きではない、という点でも似たふたりは、結局は喧嘩に発展するまえにそれぞれの刃を引っ込め、折半するという形で最終的には落ち着いた。

後日、遙が和にそう高価ではないが安くもない突発的な贈り物をしたときには、それこそ喧嘩に発展しそうな事態にはなつたのであるが、とにかく今のふたりは色々納得してこのこたつを囲んでいる。

「うちいつもチャンネル争いしてたなー」

和がそう呟くと、遙が首を傾げた。

「え、なにと?」

「ほら、笑つちやいけないやつを違う局でやってるでしょ」

「ああ……確かにこれかそっちかだよ、年末って」

「私は特にどっちでもいいんだけど、彩ちゃんがそっちを見たがつてさあ。お母さんはこっちが好きだからって良くりモコン取り合ってた」

「録画してみるものでもないもんね」

「そうそう。生で見るからいいんだよねこういうのは」

頷きつつ、のびちゃうから食べようか、という和の言葉に遙もそうだね、と答える。手を合わせてあいさつを唱え、ふたりで年越しそばを啜りはじめた。

咀嚼し、湯きを覚えた喉を潤そうと和が緑茶を流し込む。ふと先

程から感じていた不思議な思いがまたわきあがって、和は目の前の遙をみつめた。

「家族以外とこんな風に年を越すの、そういえば初めて」

和の言葉に目を丸くすると、遙も口に含んでいたものを飲み込んだ。

「お友達といっしょに、とかなかったの？」

「広未とは年始めに会ったりはしてたけど……こうやって年をまたぐってなかったかな」

「そうだったんだ」

「うん。なんかすごく変な感じ」

そうか、とうなずく遙が、どこか嬉しそうに見えた和は、訝るような視線を向ける。遙はそれに慌てて脂下がった顔をどうにかしようと表情を改めるが、しかし次にはふにやり、と同じように抜けた笑顔へと戻っていった。しかし、彼からすればそれも無理からぬことだ。

笹森ささもり和と和泉遙は、恋人同士だ。しかしその道筋は必ずしもゆるやかなものではなかった。

彼女と彼が邂逅を果たし、彼が彼女に想いを伝えた瞬間、笹森和は和泉遙を完膚なきまでに拒絶した。単に交際の申し込みを断ったと言ってしまうはそれまでだが、話はそう単純でもない。

遙は極端に目立つ男であり、和は極端に目立ちたくない女だった。そんなふたりが出会って、どうやって恋心を芽生えさせようというのか。しかしひょんなことから遙は和を苛烈なまでに求めることとなり、そんな彼から逃れる日々が強制的に和の日常に加わってしまった。

和は、とにかく逃げた。元来の意地汚さも手伝って、あらゆる策

を講じながら、逃げて逃げて逃げて、万策も尽きたというころ、とうとう遙につかまった。

彼は彼女に好きだと言い、彼女は彼に応えた。苦笑しつつ、その想いをとうとう受け入れたのだ。

その期間は実に四ヶ月。案外短いと認識する者も多いかもしれないが、考えてほしい。

告白をされ、毎日追いかけられ、毎日愛を囁かれ、それも他人が羨むような容姿を持った男が、なんの変哲もない女を追い掛け回すのだ。公然と愛を囁きつつ。それが、四ヶ月も続いた。

陥落しないほうが、おかしいのかもしれない。そもそも、そんな彼を拒む女は、今までいなかった。彼を視界にうつして、頬を染めない女性など、今までいなかったのだ。

笹森和は、自身を普通だと評し、しかしその実まったく普通ではなかった。だからこそ和泉遙に愛され、またその愛に驕ることなく日々を過ごしていた。

そんな遙が、和の初めてをもらったことに感激しないはずがない。今なお、彼の愛は彼女いわく底が見えなくて恐怖すら覚えるという。

「なにをにやにやしてんの？気持ち悪い」

「恋人に言うせりふじゃない……」

目を眇めつつ和がすっぱりと言えば、遙ががくり、とうなだれる。首を傾げながら、なにを私に期待しているの、と和が言うので、遙はますます寂しさを覚えつつも食事を再開させる。

なぜだか、遙の今日は不思議な気持ちなのだ。浮かれる心と、どこか寂しい心が同居して、それがとても自身を不安に陥れる。しかし遙は、その原因がわかっていて。いつからか、彼は自身を弱い人間だと感じるようになった。それは、大切な存在ができたからなのだ、と遙は思う。時として、自分よりも大切なのだと思えるなにかは、自分を苦しめるし、ひどく臆病になる。それと引き換えにたく

さんのものをもらえるから、よりいっそう、失うのが怖いのだ。

遙は、心に燻る不安を思えば、目の前に座る恋人へと視線をやる。それに気付いた和は、ちらりと遙を視界に留めれば多少首を傾げつつ、声をかける。

「和泉君、そばのびるよ」

「……………うん」

はつきりしない返事にひとつため息を落とすと、和は再度彼の名を呼んだ。

遙、と。

耳で音を拾い、思考がそれを認識すると、遙は目を見開いて身を強張らせる。和は、ごちそうさまでした、と手を合わせると、呆れたような視線で遙をみつめた。

「わかりやすく目の前で落ち込まないでよっつとおしいな」

「！ 和」

「ほっとしてほしいときはほっとくけど、今は多分かまってほしいんでしょ？」

「……………」

ああ、忘れていた。遙は内心でひとりごちる。

彼の恋人が一風変わっているのは、様々な要因があるが、そのひとつがこの他人の中を覗くのがとても上手であるという点だ。

和が、他の人間よりもひょうひょうとしてるのは、人が自身に向ける感情を敏感に感じ取り、察することができる人間だからだった。そういった気質であればこそ、遙を好きな女生徒からの悪意をいちはやく嗅ぎ取り、女性特有の残酷なやり口の上をいくような狡猾さで危機を回避してきたのだ。そんな和が、一年数ヶ月という短い月日でありながらも濃密な時を同じくした恋人の変化を察す

るのは容易であつた。

そわそわと落ち着かず、笑っていると思えば次の瞬間には物憂げなため息。どこぞの乙女か、と内心で先程から遙に悪態をついていたところである。

すこしけだるそうに頬杖をつきつつ、和はさらに言葉を続ける。

「不安？」

和の質問に、遙は彼女がすべてを察してしまっているのだと思えば、あきらめたように情けない表情で頷いた。和は、それにふうんとてきとうな返事をする。

「まだ卒業までちょっとあるし、別に遠くの大学に行くわけでもないのに」

「……でも、ここは卒業と同時に引き払うから、家の距離が遠くなるよ」

「まあね。和泉君、大学近くに部屋を借りるって言ってたものね。ここから通学で2時間くらいだっけ？私はそのまま実家からだし、物理的には確かに離れるけど」

「大学だって別々だし、家だって遠くなるんだから、今より会えなくなるよ」

「そうかもしれないけど、今より落ち込んでどうすんの？」

和の言葉に、遙はほとんど顔を伏せる。それをみつめる和は、どこか不思議な気持ちだった。

確かに、と和は遙の懸念をどこかで一応は肯定する。しかし。

そう、しかし、と、和は思うのだ。

今よりは頻繁に会えなくなるかもしれない。けれど、それぞれの実家は近いのだから、長期休暇の折には帰ればいいし、そもそも帰省せずとも遙の引越し先と和の住む家とではそこまで距離もないの

だ。毎日行くのは無理だとしても、週末に泊まる程度のことは簡単にできてしまうほどの距離である。面倒な自分が果たしてまめまめしくそれをやるかは疑問ではある、遙が恐らく和のそういった面も織り込んで不安がっているのもわかっている、が、それでもそこまですぐに必要性和は感じなかった。

会えなくなれば、何かが変わるだろうか。共にする時間が減れば、何かが変わるだろうか。

和はしかし、その変化を特別に怖いと思うことがなかった。

一緒に過ごす日々が減るのは、寂しさを覚えるかもしれない。しかし、会えない時間の中で、成長してゆく日々の中で、相手を想う心が変化し、また大きくなっていくことを考えれば、そう悪いものではない、と和は考える。もちろんそれは、お互いの絆であったり、愛情であったり、そういったものがありきの話だ。けれども、時折しか会えずとも、たとえば何年も会えなかったとしても、昨日も会っていたような気安さが、もう和と遙のあいだには、そういったものが構築されているはずだと和は信じていた。

遙がひとり変な盛り上がりを見せ、不安がるのは、言ってしまうと和はどこか不満なのだ。不安になるということは、和ほどには確信をもてないということであり、和にとってそれはとても心外なことであった。

「会えない分、見えるものもあるでしょ」

「そうかもしれないけど」

「女々しいな。うざい、超めんどくさい」

すっぱりと言えば、遙はぐ、と詰まる。それでも不安な想いは拭えないのか、潤んだ瞳で和をみつめる。

「和は大丈夫なの？今より会えなくなっても」

「……頭痛がしてきた」

すっかりのびきってしまった遥のそばをみつめて、和は米神をおさえる。先程から、恐らくではあるが一般的な恋人の会話と男女がまるきり逆な気がしてならない。和は面倒がる男の内情が心底実感できたと思えば、馬鹿馬鹿しい思いがして食器を下げようとこたつから出ると井を持って立ち上がった。

流し台で食器を水につけ、手ぬぐいで手を拭う。

背後で物音が聞こえると、何者かが後ろから和の身体に両腕を絡めて包んだ。

「いーずーみーくーん？」

「うううー、和は相変わらず男前……」

「私、そんなに浮気しそう？」

呆れた声で遙に問いかければ、遥が頭上で慌てて首を振る。顎が頭頂部にあたって少し痛い、と思いつつ、和が彼の続きを待った。

「そんなこと思っていないよ！思っていないけど……だって、和は変に隙があるから。無理やり襲われたりしたらどうしよう……」

「嫌な想像しないでよ。さすがにもうそういうのは学習したから」

「ほんとにほんと？」

「ほんとにほんと。とりあえず、和泉君が浮気しない限り別れないってば」

「するはずないでしょ！」

「そうでしょ？私もそうだよ。お互いに信じられてるんだから、何が不安？」

ため息を吐き遙の腕を叩く。彼の力がゆるんだ隙に振り返って向き合う形になれば、和は遙を真っ直ぐとみつめた。相変わらず情けない顔をしている恋人のことを、いつから愛しいと思うようになった

たのか。和は内心、これを心底面倒だと思つ心とは裏腹に、多少なりともかわいいと感じる自身に激しい抵抗を覚えつつ、しかし心に嘘をついても仕方がないのだと諦める。

「遥、好きだよ」

「！」

微笑んで、遥の背中に手をまわす。抱きしめられた彼もまた、愛しい恋人を抱きこんだ。

「ずっと、努力していこうね。気持ちがすれちがわないように。もしもすれちがっても、手遅れになる前にちゃんと察することができるよう、ちゃんと謝れるように」

「……和」

名を呼ばれ、なあに、と返事をすれば、遥が耳元で囁いた。

「愛してるよ」

「……うん、ありがとう」

遥の腕が、どんどん力強くなる。和は少し様子をうかがいつつも、特に彼を拒むことはしない。そうしていた数瞬後、遥が少し身体を離せば、和をみつめる。その顔は、苦笑を浮かべていた。

「めんどくさくてごめん」

「いまさら」

遥の言葉に、和もふ、と苦笑して返事をする。

「でも、ずっといつしよにいたい」

「わかってるよ」

「俺はぜつたいに、和と結婚するから」

「……まあ先はわからないけどね」

言っと思った。

笑って声をあげた遙には、もう不安気な表情はなかった。

すっかりのびてしまった年越しそばをきちんと完食して、初詣に行くかと問う遙に、人混みだろうからいい、と返事をした和に、遙は和らしい、と笑った。

こうして何気ない日々をずっといつしよに過ごせたらいい。

そう言っって和を抱きしめた遙の腕の中で、和も微笑んでうなずいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1453n/>

開店休業。

2012年1月2日02時38分発行